

vRealize Operations Manager 6.5 のヘルプ

vRealize Operations Manager 6.5

最新の技術ドキュメントは、VMware の Web サイト (<https://docs.vmware.com/jp/>)

VMware, Inc.
3401 Hillview Ave.
Palo Alto, CA 94304
www.vmware.com

ヴィエムウェア株式会社
105-0013 東京都港区浜松町 1-30-5
浜松町スクエア 13F
www.vmware.com/jp

Copyright © 2020 VMware, Inc. All rights reserved. [著作権および商標情報。](#)

目次

VMware vRealize Operations Manager 6.5 のヘルプ 8

1 VMware vRealize Operations Manager について 9

2 計画 10

リファレンス アーキテクチャ 10

vRealize Operations Manager のデプロイに関するベスト プラクティス 10

vRealize Operations Manager のデプロイに関する最初の考慮事項 11

スケーラビリティに関する考慮事項 13

高可用性に関する考慮事項 14

アダプタと管理パックに関する考慮事項 15

分析ノードとリモート コレクタのハードウェア要件 17

vRealize Operations Manager のポート要件 17

vRealize Operations Manager の小規模デプロイ プロファイル 21

vRealize Operations Manager の中規模デプロイ プロファイル 23

vRealize Operations Manager の大規模デプロイ プロファイル 26

vRealize Operations Manager の特大デプロイ プロファイル 29

安全な構成 34

vRealize Operations Manager のセキュリティ状態 34

vRealize Operations Manager のデプロイのセキュリティ保護 34

vRealize Operations Manager の安全な構成 36

ネットワーク セキュリティと安全な通信 65

vRealize Operations Manager システムでの監査とロギング 77

3 インストール 79

インストールについて 79

インストールの概要 79

vRealize Operations Manager インストールのワークフロー 80

クラスタのサイジング 81

環境の複雑さ 83

クラスタ ノード 85

リモート コレクタ ノードについて 85

高可用性について 86

インストールの準備 87

vRealize Operations Manager のプラットフォームの要件 88

要件 90

vRealize Operations Manager のインストール 95

vRealize Operations Manager の展開 95

インストールのタイプ	101
ノードの追加によるクラスタ サイズの変更	107
リモート コレクタ ノードの追加によるデータ収集の増加	108
高可用性の追加	109
クラスタとノードの保守	111
インストール後の考慮事項	114
ログインについて	114
コンソールのセキュリティ保護	115
リモート コンソール セッションへのログイン	115
新規インストールについて	116
更新、移行、およびリストア	117
ソフトウェア アップデート PAK ファイルの入手	118
更新の一部としてのスナップショット作成	118
カスタマイズ コンテンツの保存方法	119
バックアップとリストア	120
ソフトウェアの更新	120
アンインストール	123
Linux からのアンインストール	123

4 構成 126

データ ソースへの接続	127
VMware vSphere ソリューション	127
Endpoint Operations Management ソリューション	135
Log Insight	190
ビジネス管理	192
オプションのソリューションのインストール	194
アラートおよびアクションの構成	202
アラート	202
アラートのタイプ	214
アラートの構成	223
アクションの表示	283
ポリシーの構成	291
ポリシー	291
運用ポリシー	299
ポリシーのタイプ	310
監視ポリシー ワークスペースを使用した、運用ポリシーの作成および変更	322
vRealize Operations Manager ソリューションの監視目標の定義	345
コンプライアンスの構成	346
コンプライアンス標準の定義	346
スーパー メトリックの構成	354
スーパー メトリックの作成	356

スーパー メトリックを拡張する	359
スーパー メトリックのエクスポートとインポート	360
[スーパー メトリック] タブ	361
オブジェクトの構成	367
オブジェクトの検出	367
データ表示の構成	393
ウィジェット	394
ダッシュボード	495
表示	509
レポート	524
管理設定の構成	537
ライセンス キー	537
ライセンス グループ	538
メンテナンス スケジュール	539
メンテナンス スケジュールの管理	540
ユーザーとアクセス コントロールの管理	540
パスワードと証明書	572
グローバル設定の変更	579
ログ	582
サポート バンドルの作成	584
動的しきい値	585
アダプタの再記述	586
アイコンのカスタマイズ	587
追加の仮想メモリの割り当て	589
管理インターフェイスについて	589
クラスタのステータスおよびトラブルシューティング	590
ログ	591
サポート バンドル	592

5 管理環境内のオブジェクトの監視 594

さまざまな状況と対処方法	594
ユーザー シナリオ：問題が発生したユーザーから問い合わせがあった場合	595
ユーザー シナリオ：受信箱にアラートが到着した場合	599
ユーザー シナリオ：オブジェクトの状態を監視しているときに問題を発見	608
アラートの監視およびアラートへの応答	623
アラートの監視	624
問題の監視および問題への応答	628
オブジェクト サマリ情報の評価	629
オブジェクト アラートの調査	641
メトリック情報の評価	647
環境内のリソースの分析	657

問題解決のためのトラブルシューティング ツールの使用	674
オブジェクト詳細の作成と使用	680
環境内の関係の調査	688
ユーザー シナリオ : [トラブルシューティング] タブのオプションを使用して問題の根本原因を調査する	691
vRealize Operations Manager からアクションの実行	695
vRealize Operations Manager のツールバーからのアクションの実行	695
vRealize Operations Manager でのトラブルシューティング アクション	721
最近のタスクのステータスの監視	723
失敗したタスクのトラブルシューティング	727
インベントリの表示	734
[環境概要] ペインの [インベントリ] タブ	735

6 管理対象環境のキャパシティの計画 736

ストレスなしでデマンドに対応して値を得るための正しいサイジング キャパシティ	739
ユーザー シナリオ : ワークロードの増加に対するキャパシティの計画	743
ワークロード キャパシティを増やすサンプル プロジェクトの作成	744
ホストおよび仮想マシンを追加するサンプル プロジェクトの作成	745
キャパシティ プロジェクトの結果の表示	746
ハードウェア プロジェクトの計画	747
ハードウェアの変更を計画するプロジェクトの作成	747
仮想マシン プロジェクトとシナリオの計画	749
取り込みメトリックを使用した仮想マシン プロジェクトの作成	749
新しい仮想マシンのためのサンプル プロジェクトの作成	750
仮想マシンの削除をシミュレーションするサンプル プロジェクトの作成	751
[プロジェクト] タブ	752
プロジェクト名と説明のワークスペース	753
プロジェクト シナリオ ワークスペース	754
カスタム プロファイル	755
カスタム プロファイルの詳細および関連するポリシー	756
カスタム プロファイルのワークスペースの追加と編集	757
カスタム データセンター	757
カスタム データセンターのリスト	758
カスタム データセンターのワークスペースの追加と編集	759

7 メトリック、プロパティ、およびアラートの定義 761

vRealize Operations Manager でのメトリック定義	761
vCenter Server コンポーネントのメトリック	762
算出されたメトリック	819
vRealize Operations Manager の自己監視メトリック	824
Endpoint Operations Management の Operating Systems プラグインと Remote Service Monitoring プラグインのメトリック	851
vRealize Operations Manager でのアラートの定義	869

クラスタ コンピューティング リソースのアラートの定義	870
ホスト システムのアラートの定義	873
vSphere 分散ポート グループ	885
仮想マシンのアラートの定義	886
vSphere Distributed Switch のアラートの定義	895
vCenter Server のアラートの定義	897
データストアのアラートの定義	897
データ センターのアラート定義	903
カスタム データ センターのアラート定義	904
vRealize Operations Manager でのプロパティの定義	905
vCenter Server コンポーネントのプロパティ	906
vRealize Operations Manager の自己監視のプロパティ	920

VMware vRealize Operations Manager6.5 のヘルプ

このドキュメントには、vRealize Operations Manager 管理者、仮想インフラストラクチャ管理者、および環境へのオブジェクトのインストール、構成、管理を行う運用エンジニアに関する情報が含まれています。

データ ソースへの接続、ユーザーおよびオブジェクト グループの設定、アラートへの応答、問題のトラブルシューティング、容量の計画、データの収集および表示方法のカスタマイズなどの通常実行される管理アクティビティに関するガイダンスを確認できます。

VMware の技術ドキュメントの用語集

VMWare の技術ドキュメントには、新しい用語などを集約した用語集があります。当社の技術ドキュメントで使用する用語の定義については、<http://www.vmware.com/support/pubs> をご覧ください。

VMware vRealize Operations Manager について

1

vRealize Operations Manager エンタープライズ ソフトウェアでは、予測分析とスマート アラートで新たな問題をプロアクティブに特定して解決できるため、物理、仮想、およびクラウド インフラストラクチャ全体にわたるシステム リソースの最適なパフォーマンスと可用性を実現します。

vRealize Operations Manager では、サードパーティ製管理パックによってサポートされている拡張可能なオープン プラットフォームにより、アプリケーション、ストレージ、ネットワーク デバイス全体を 1 箇所から完全に監視することができます。また、vRealize Operations Manager では、完全な制御を保持しながら、事前インストールされているカスタマイズ可能なポリシーを使用して主要なプロセスを合理化し、効率性を向上させることができます。

vRealize Operations Manager は、システム リソース（オブジェクト）から収集したデータを使用して、多くの場合、顧客が問題に気付く前に、監視対象のシステム コンポーネントの問題を特定します。vRealize Operations Manager では、すぐに問題を解決するために実施できる是正処置も頻繁に提案します。vRealize Operations Manager では、より困難な問題に対応できるように、豊富な分析ツールを用意しています。これらのツールでは、オブジェクト データを確認および操作して隠れた問題を解明したり、複雑な技術的問題を調査して、傾向を特定できます。また、ドリルダウンして単一オブジェクトの健全性を測定することもできます。

デプロイの推奨事項および vRealize Operations Manager のデプロイのセキュアなベースラインで環境を計画します。

この章には、次のトピックが含まれています。

- リファレンス アーキテクチャ
- 安全な構成

リファレンス アーキテクチャ

環境を計画するときは、デプロイ トポロジ、ハードウェア要件、相互運用性、およびスケーラビリティに関する次の推奨事項を考慮してください。

vRealize Operations Manager のデプロイに関するベスト プラクティス

vRealize Operations Manager の本番インスタンスをデプロイするときは、すべてのベスト プラクティスに従ってください。

分析ノード

分析ノードは、マスター ノード、レプリカ ノード、およびデータ ノードから構成されます。

- 分析ノードを、同じ vSphere クラスタにデプロイします。
- 分析ノードを同じタイプのストレージにデプロイします。
- 分析ノードの規模とパフォーマンスの要件によっては、Storage DRS の非アフィニティ ルールを適用して、ノードが確実に個別のデータストア上に配置されるようにします。
- すべての vRealize Operations Manager 分析ノードで、Storage DRS を手動に設定します。
- 高度に統合された vSphere クラスタに分析ノードをデプロイする場合、最適なパフォーマンスを確保するには、リソース予約を構成します。CPU の準備完了時間と相互停止を検証して、物理 CPU と仮想 CPU の比率が分析ノードのパフォーマンスに悪影響を与えていないことを確認します。
- 各ノードで行われる分析計算のパフォーマンスを確保するために、分析ノードに多数の vCPU を割り当てます。CPU の準備完了時間と相互停止を監視して、分析ノードで CPU キャパシティの奪い合いが発生していないことを確認します。

管理パックとアダプタ

個々の管理パックとアダプタには、固有の構成要件があります。すべての要件を熟知してから、ソリューションのインストールとアダプタ インスタンスの構成を行ってください。

Red Hat Enterprise Linux (RHEL) のインストール

- RHEL のインストールは、ベンダー提供の製品マニュアルを参照してください。
- RHEL アプリケーションに対しては、ファイアウォール保護を必ず有効にしてください。

vRealize Operations Manager のデプロイに関する最初の考慮事項

vRealize Operations Manager の本番インスタンスが最適に機能するには、使用する環境が特定の構成に適合している必要があります。これらの構成を確認し熟知してから、vRealize Operations Manager の本番インスタンスをデプロイします。

サイジング

vRealize Operations Manager は、16 個の分析ノードに広がる最大 120,000 の監視対象リソースをサポートします。

パフォーマンスを確保し、サポートを提供できるようにするため、vRealize Operations Manager インスタンスのサイジングを行います。サイジングの詳細については、ナレッジベース記事 https://kb.vmware.com/selfservice/microsites/search.do?language=en_US&cmd=displayKC&externalId=2093783 を参照してください。

環境

同じ vSphere クラスタに分析ノードをデプロイします。同一のホストとストレージ、または似たホストとストレージを使用します。同じ vSphere クラスタに分析ノードをデプロイできない場合は、分析ノードを同じ地理的場所にデプロイする必要があります。vRealize Operations Manager では、複数の地理的場所への分析ノードのデプロイはサポートされません。

分析ノードは常に相互通信できる必要があります。次の vSphere イベントにより、接続が中断される場合があります。

- vMotion
- Storage vMotion
- HA
- DRS

分析ノード間の高レベルのトラフィックにより、すべての分析ノードはレイヤー 2 隣接でなければなりません。レイヤー 2 隣接とは、各ノードが同じ VLAN および IP サブネット上に配置され、VLAN が複数のデータセンター間に分散されていないことを意味します。分析ノード間の遅延は 5 ミリ秒を超えてはならず、帯域幅は 1 秒あたり 1 GB 以上でなければなりません。推奨される帯域幅は、1 秒あたり 10 GB です。

高度に統合された vSphere クラスタに分析ノードをデプロイする場合は、リソース予約を構成します。完全な分析ノード、たとえば 10,000 リソースを監視する大規模な分析ノードでは、1 個の仮想 CPU が物理 CPU に対応していることが必要です。パフォーマンスの問題が発生した場合は、CPU の準備完了と相互停止を確認して、物理 CPU と仮想 CPU の比率が問題の原因になっているかどうかを判断します。仮想マシンのパフォーマ

ンスをトラブルシューティングする方法と CPU パフォーマンス メトリックを解釈する方法の詳細については、『[Troubleshooting a virtual machine that has stopped responding: VMM and Guest CPU usage comparison \(1017926\)](#)』を参照してください。

ファイアウォールの背後にリモート コレクタをデプロイできます。リモート コレクタと分析ノードの間で NAT は使用できません。

複数のデータセンター

vRealize Operations Manager が別のデータセンター内のリソースを監視する場合は、リモート コレクタをリモート データセンターにデプロイする必要があります。遅延に応じて、リモート コレクタ上に構成されたアダプタが情報を収集する間隔を変更しなければならない場合があります。

サイト間の遅延は 200 ミリ秒未満にすることをお勧めします。遅延が 200 ミリ秒を超える場合は、収集を監視して、5 分以内に収集が完了するかどうかを確認することをお勧めします。収集がこの時間制限内で完了しない場合は、間隔を 10 分に増やします。

証明書

vRealize Operations Manager の本番インスタンスを構成するときは、信頼できる認証局の署名がある有効な証明書（プライベートまたはパブリック）が重要なコンポーネントになります。Endpoint Operations Management エージェントを構成する前に、認証局の署名がある証明書をシステムに構成します。

証明書の Subject Alternative Names フィールドに、すべての分析、リモート コレクタ、およびロード バランサの DNS 名を含める必要があります。

分析ノードおよびリモート コレクタの証明書が変更された場合に、すべてのエージェントを再構成しなければならない状況を回避するために、root 証明書または中間証明書を信頼するように Endpoint Operations Management エージェントを構成できます。root 証明書および中間証明書の詳細については、『[End Point Operations Management エージェントのセットアップ プロパティの指定](#)』を参照してください。

アダプタ

大規模および特大のデプロイ プロファイルについては、分析クラスタと同じデータセンターにあるリモート コントローラにアダプタをデプロイすることをお勧めします。リモート コントローラにアダプタをデプロイすると、分析ノードの負荷が減り、パフォーマンスが向上します。例として、特定の分析ノードのリソース合計がノードのパフォーマンスよりも低下し始めた場合に、アダプタをリモートにデプロイすることを決定する場合を考えます。適切なキャパシティの大規模なリモート コレクタにアダプタをデプロイします。

また、アダプタが監視しているリソースの数が、関連付けられている分析ノードのキャパシティを超えた場合に、リモート コレクタにアダプタをデプロイする必要があります。

認証

vRealize Operations Manager のユーザー認証には、プラットフォーム サービス コントローラを使用できます。高可用性を備えたプラットフォーム サービス コントローラ インスタンスのデプロイの詳細については、『[VMware vCenter Server 6.0 Deployment Guide](#)』を参照してください。

ロード バランサ

ロード バランサの構成の詳細については、vRealize Operations Manager のドキュメントを参照してください。

スケーラビリティに関する考慮事項

予想される使用量に基づいて、vRealize Operations Manager の初期のデプロイを構成します。

分析ノード

分析ノードは、マスター ノード、マスター レプリカ ノード、およびデータ ノードで構成されます。

vRealize Operations Manager のエンタープライズ デプロイでは、使用可能なリソースに応じて、中規模デプロイまたは大規模デプロイとしてすべてのノードをデプロイします。

リソースの追加による垂直方向の拡張

大規模ではない構成に分析ノードをデプロイする場合は、仮想 CPU とメモリを再構成できます。vRealize Operations Manager では、さまざまなノード サイズがサポートされます。

表 2-1. 分析ノードのデプロイ サイズ

ノード サイズ	vCPU	メモリ
極小	2	8 GB
小	4	16 GB
中程度	8	32 GB
大	16	48 GB

ストレージの増加による垂直方向の拡張

仮想 CPU やメモリとは独立にストレージを増やすことができます。

サポートされる構成を維持するには、クラスタにデプロイするデータ ノードは同じノード サイズであることが必要です。

ストレージの増設の詳細については、「[vApp ノードへのデータ ディスク領域の追加](#)」を参照してください。スナップショットがある仮想マシンのディスクを変更することはできません。ディスク サイズを増やす前に、すべてのスナップショットを削除する必要があります。

水平方向の拡張（ノードの追加）

vRealize Operations Manager 6.2 では、クラスタ内で最大 16 個の分析ノードがサポートされます。

サポートされる構成を維持するには、クラスタにデプロイする分析ノードは同じノード サイズであることが必要です。

リモート コレクタ

vRealize Operations Manager では、リモート コレクタで 2 つのサイズ（標準および大）がサポートされます。リソースの最大数は、リモート コレクタのすべてのアダプタについて収集される全リソースに基づきます。大規模な vRealize Operations Manager 監視環境では、UI の応答速度が低下し、低速なメトリックが表示されることがあります。環境内の、遅延が 20 ミリ秒を越えている領域を特定し、それらの領域にリモート コレクタをインストールします。

表 2-2. サポートされるリモート コレクタ サイズ

コレクタ サイズ	リソース	Endpoint Operations Management エージェント
Standard	1,500	250
大	12,000	2,500

高可用性に関する考慮事項

HA により vRealize Operations Manager マスター ノードのレプリカが作成され、分析クラスタをノードの喪失から保護します。

クラスタ管理

クラスタは、マスター ノードとマスター レプリカ ノードで構成されます。

高可用性を有効にすると、情報はマスター ノードとマスター レプリカ ノードに格納されます。

マスター ノードまたはマスター レプリカ ノードが完全に失われた場合は、高可用性を無効にしてから再度有効にして、マスター ロールまたはマスター レプリカ ロールを再割り当てする必要があります。このプロセスは、非表示クラスタの再調整も含まれるため、長時間かかる可能性があります。

分析ノード

分析ノードは、マスター ノード、マスター レプリカ ノード、およびデータ ノードで構成されます。

vRealize Operations Manager で高可用性を有効にしても、ディザスタ リカバリ ソリューションにはなりません。高可用性を有効にすると、システム内のデータが複製され、システムのコンピューティングとキャパシティの要件が 2 倍になります。高可用性を有効にすると、1 つのノードが失われても vRealize Operations Manager でデータ損失が発生しないように保護されます。2 つ以上ノードが失われると、データ損失から復旧できません。

すべての分析ノードを個別のホストにデプロイして、ホストで障害が発生した場合のデータ損失の可能性を減らします。DRS の非アフィニティ ルールを使用すると、仮想マシンが必ず個別のホストに配置されるようになります。

アダプタ

vRealize Operations Manager 6.1 以降では、コレクタ グループを作成できます。コレクタ グループは、ノード（分析ノードとリモート コレクタ）の集まりです。アダプタを単一ノードに割り当ててではなく、コレクタ グループに割り当てることができます。

アダプタを実行しているノードで障害が発生すると、アダプタは自動的にコレクタ グループ内の別のノードに移動されます。

すべての標準アダプタを、個別のノードではなくコレクタ グループに割り当てます。コレクタ グループにハイブリッドのアダプタをデプロイしないでください。アダプタの詳細については、個々のアダプタのドキュメントを参照してください。

アダプタと管理パックに関する考慮事項

アダプタと管理パックには、構成に関する特定の考慮事項があります。

標準アダプタ

標準アダプタには、監視対象のエンドポイントへの 1 方向通信が必要です。コレクタ グループに標準アダプタをデプロイします。このコレクタ グループは、フェイルオーバーに対処するようにサイジングされます。

次に、VMware によって vRealize Operations Manager 用に提供されるアダプタのサンプル リストを示します。追加のアダプタについては、Solutions Exchange を参照してください。

- vSphere アダプタ
- Management Pack for NSX for vSphere
- Management Pack for OpenStack
- Management Pack for Storage Devices
- Management Pack for Log Insight

ハイブリッド アダプタ

ハイブリッド アダプタには、アダプタと監視対象のエンドポイントの間に 2 方向通信が必要です。

専用のリモート コントローラにハイブリッド アダプタをデプロイする必要があります。各リモート コントローラには、ハイブリッド アダプタ タイプを 1 つのみ構成します。コレクタ グループの一部としてハイブリッド アダプタを構成することはできません。たとえば、2 つの vRealize Operations for Published Applications アダプタは同じノードに存在でき、また 2 つの vRealize Operations for Horizon アダプタも同じノードに存在できますが、vRealize Operations for Published Applications アダプタと vRealize Operations for Horizon アダプタは同じノードに存在できません。

vRealize Operations Manager では、いくつかのハイブリッド アダプタを利用できます。

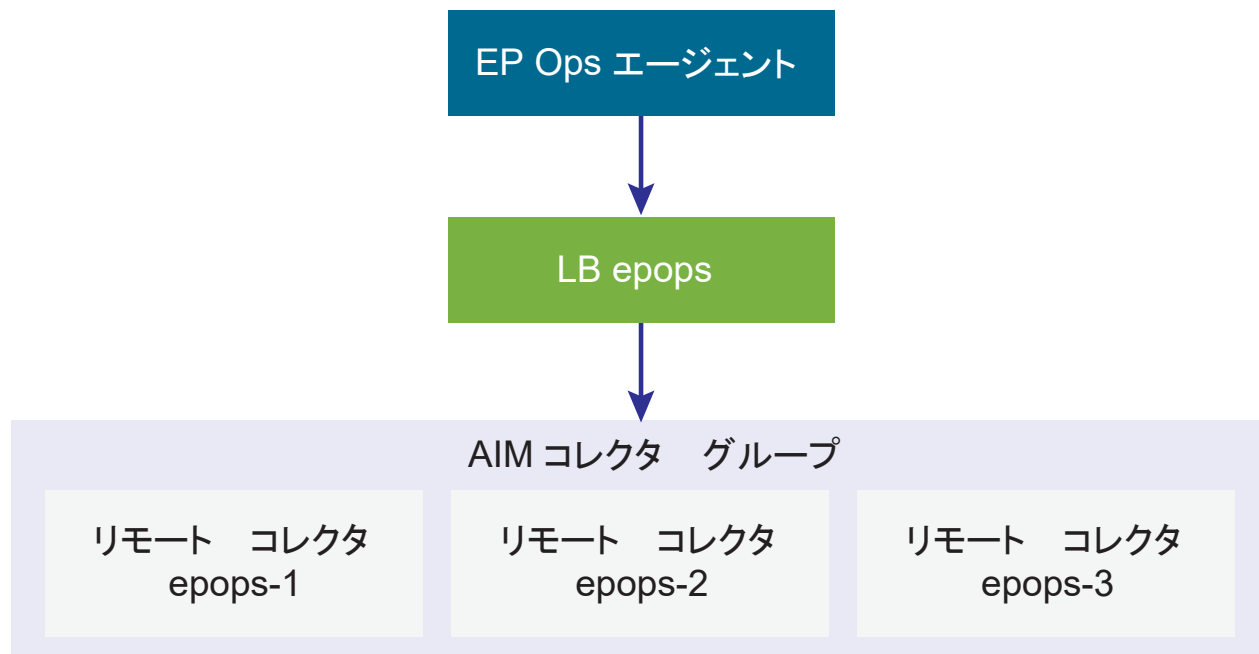
- vRealize Operations for Horizon アダプタ
- vRealize Operations for Published Applications アダプタ
- Management Pack for vRealize Hyperic

Endpoint Operations Management アダプタ

デフォルトでは、Endpoint Operations Management アダプタはすべてのデータ ノードにインストールされています。大規模な分析ノードは 2,500 のエージェントをサポートでき、大規模なリモート コレクタは単一のクラスターで 2,000 から 10,000 のエージェントをサポートできます。クラスターでのインジェクションの負荷を軽減するために、リモート コレクタで Endpoint Operations Management アダプタをポイントできます。専用のリモート コレクタを、それらのみで構成されるコレクタ グループに割り当てる必要があります。これにより Endpoint Operations Management アダプタは、コレクタ グループ内のノードで障害が発生した場合に、Endpoint Operations Management リソースの状態を維持できます。

単一ノードの枠を超えてシステムの規模を変更する予定がある場合は、システム再構成のコストを削減するために、Endpoint Operations Management エージェント固有の DNS エントリに合わせて Endpoint Operations Management エージェントをインストールすることをお勧めします。

Endpoint Operations Management エージェント用のロード バランサ背後のリモート コレクタ



分析ノードとリモート コレクタのハードウェア要件

分析ノードとリモート コレクタには、仮想マシンと物理マシンに関するさまざまなハードウェア要件があります。

次の表は、デプロイ内の各サーバ プロファイルにインストールするコンポーネントと必要なハードウェア仕様を示しています。

表 2-3. システム コンポーネントのハードウェア要件

サーバのロール	仮想 CPU	メモリ	CPU 要件	ストレージ要件
中規模の分析ノード	8 vCPU	32 GB	2.0 GHz 以上、2.4 GHz を推奨	1875 IOPS
大規模な分析ノード	16 vCPU	48 GB	2.0 GHz 以上、2.4 GHz を推奨	3750 IOPS
標準のリモート コレクタ	2 vCPU	4 GB	2.0 GHz 以上、2.4 GHz を推奨	該当なし
大規模なリモート コレクタ	4 vCPU	16 GB	2.0 GHz 以上、2.4 GHz を推奨	該当なし

ストレージ要件は、ノードごとにサポートされる最大リソースに基づきます。

vRealize Operations Manager には、高い CPU 要件があります。一般的に、分析クラスタに割り当てる物理 CPU が増えると、パフォーマンスが向上します。物理 CPU のデュアル ソケットを備えたホストを 8 台以上使用する必要があります。12 台以上を推奨します。

vRealize Operations Manager のポート要件

vRealize Operations Manager では、コンポーネントに特定のポートの要件があります。指定されているすべてのポートは、デフォルトのポートです。

内部通信

次のコンポーネントでは、内部通信が必要です。

表 2-4. マスター ノードとレプリカ ノード間の通信

コンポーネント	プロトコル	ポート
Postgres レプリカ データベース	TCP	5433

XDB ポートは、vRealize Operations Manager 6.1 以降にアップグレードする場合にのみ必要です。また、アップグレード後は必要ありません。

表 2-5. 分析ノード間の通信

コンポーネント	プロトコル	ポート
HTTPS	TCP	443
Gemfire ロケータ	TCP	6061
Gemfire	TCP	10000
Gemfire	TCP	20000:20010

表 2-5. 分析ノード間の通信（続き）

コンポーネント	プロトコル	ポート
Cassandra（ノード間）	TCP	7001
Cassandra クライアント	TCP	9042

表 2-6. リモート コレクタから分析ノードへの通信

コンポーネント	プロトコル	ポート
HTTPS	TCP	443
Gemfire ロケータ	TCP	6061,
Gemfire	TCP	10000

表 2-7. リモート コレクタと分析ノード間の通信

コンポーネント	プロトコル	ポート
HTTPS (Casa)	TCP	443

表 2-8. リモート コレクタとマスタ ノード/データ ノード間の通信

コンポーネント	プロトコル	ポート
HTTP	TCP	80
HTTPS	TCP	443
Gemfire ロケータ	TCP	6061
Gemfire	TCP と UDP	10000:10010
Gemfire	TCP と UDP	20000:20010
NTP	UDP	123

表 2-9. Endpoint Operations Management エージェントから分析ノードへの通信

コンポーネント	プロトコル	ポート
HTTPS	TCP	443

表 2-10. Endpoint Operations Management エージェントからリモート コレクタへの通信

コンポーネント	プロトコル	ポート
HTTPS	TCP	443

外部通信

次のコンポーネントでは、外部通信が必要です。

表 2-11. 分析ノードおよびリモート コレクタから外部リソースへの通信

コンポーネント	プロトコル	ポート
Platform Services Controller	TCP	443
DNS	TCP、UDP	53

表 2-11. 分析ノードおよびリモート コレクタから外部リソースへの通信 (続き)

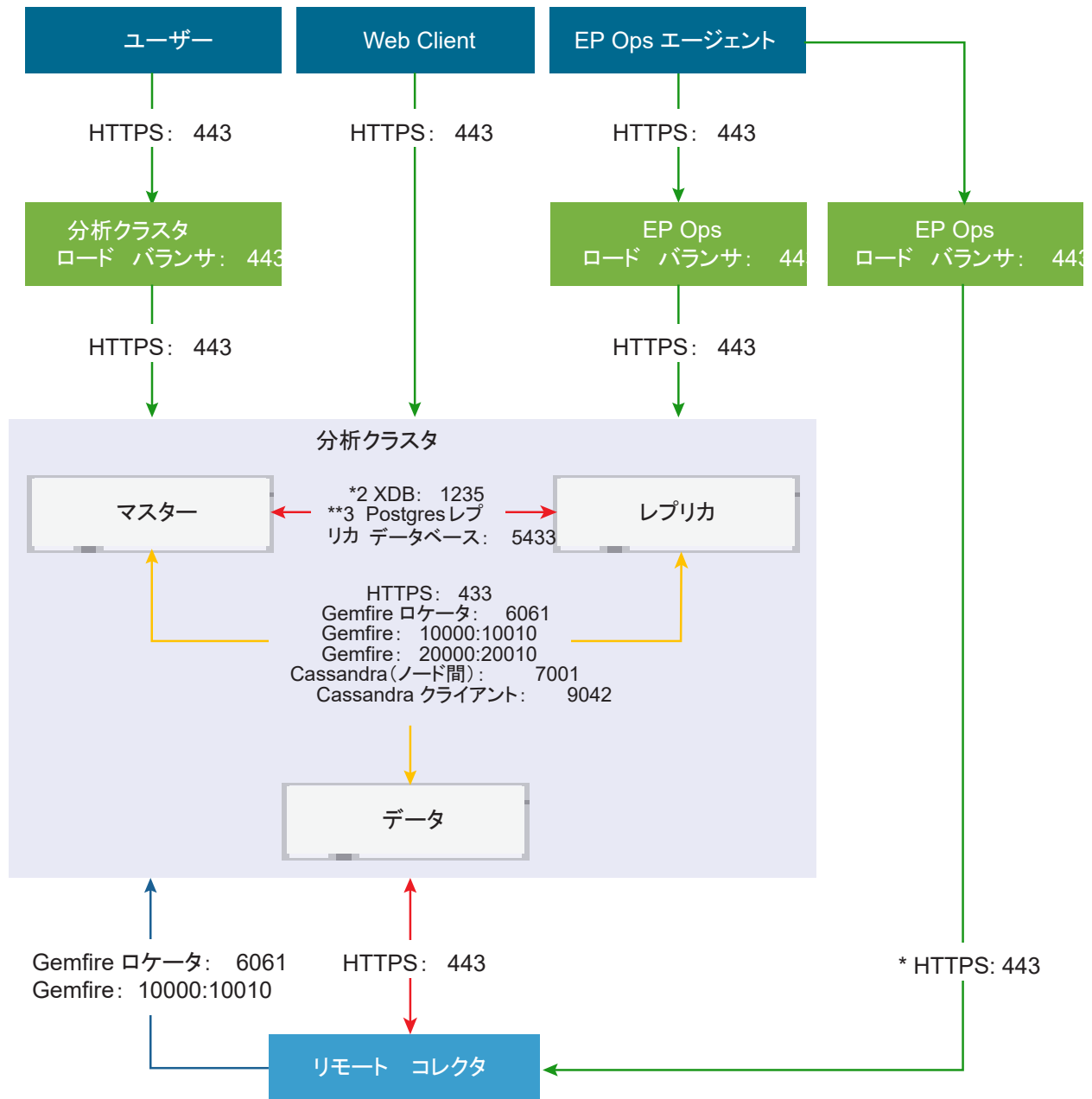
コンポーネント	プロトコル	ポート
LDAP	TCP	389
LDAPS	TCP	636
GC TCP	TCP	3268, 3269
NTP	UDP	123
SMTP	TCP	25
SNMP	UDP	161
アダプタ	TCP	**
SSH	TCP	22

** 外部デバイスと通信するためにアダプタに必要なポートは、デバイスの要件によって異なります。必要なポートについては、アダプタのドキュメントを参照してください。

注： vROPS では、インベントリ タグ情報を取得するときに、ポート 10433 を使用した HTTP 経由の TCP 接続で vSphere 5.x に接続する必要があります。

注： vROPS Operations Manager へのユーザー インターフェイスと管理インターフェイスは、ポート 443 と TCP 接続を使用します。vROPS ポートの詳細については、VMware vRealize Operations Manager 6.3 インフォメーション センターを参照してください。「vRealize Operations Manager でのネットワーク ポートの使用方法」を検索してください。

vRealize Operations Manager のポート要件



プロトコルは図には表記されていません。

* vRealize Operations Manager 6.0 から 6.1 へのアップグレードに必要です。ポートは、アップグレード後に閉じます。

** 高可用性にのみ必要です。

vRealize Operations Manager の小規模デプロイ プロファイル

小規模デプロイ プロファイルは、最大 12,000 リソースを管理するシステムを想定しています。

仮想アプライアンス名

小規模デプロイ プロファイルには、単一の大規模な分析ノード `analytic-1.ra.local` が含まれます。

デプロイ プロファイルのサポート

小規模デプロイ プロファイルでは、次の構成がサポートされています。

- 12,000 のリソース
- 1,000 の Endpoint Operations Management エージェント
- 6 か月間のデータ保存

追加の DNS エントリ

組織の将来の要件に対応するため DNS エントリを追加できます。計画されたデプロイで単一ノードを超えることが想定されない場合は、分析ノードに対して Endpoint Operations Management エージェントを構成できます。

`epops.ra.local -> analytic-1.ra.local`

証明書

証明書には認証局による署名が必要です。サブジェクトの代替名には、次の情報が含まれます。

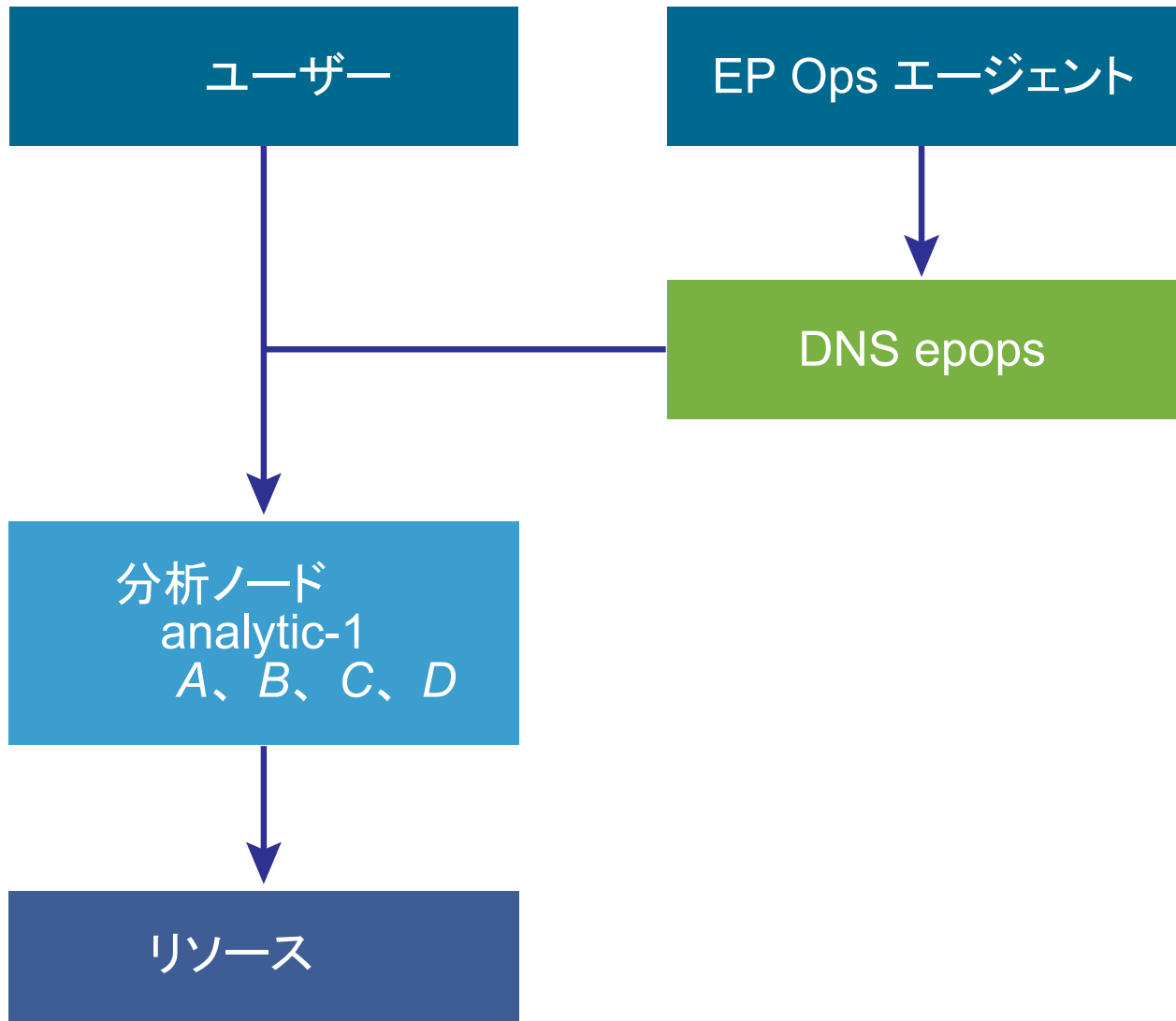
- DNS 名 = `epops.refarch.local`
- DNS 名 = `analytic-1.ra.local`

これは、小規模デプロイ プロファイルの一例です。

表 2-12. アダプタのプロパティ

コレクタ グループ	コレクタ	アダプタ	リソース
デフォルト	analytic-1	A	2,000
デフォルト	analytic-1	B	4,000
デフォルト	analytic-1	C	2,000
デフォルト	analytic-1	D	3,000

vRealize Operations Manager の小規模デプロイ プロファイルのアーキテクチャ



vRealize Operations Manager の中規模デプロイ プロファイル

中規模デプロイ プロファイルは、40,000 リソース（そのうち 20,000 リソースは高可用性に対応）を管理するシステムを想定しています。中規模デプロイ プロファイルでは、アダプタはデフォルトで分析ノードにデプロイされます。データ インジェクションで問題が発生した場合は、これらのアダプタをリモート コントローラに移動します。

仮想アプライアンス名

中規模デプロイ プロファイルには、8 つの中規模の分析ノードが含まれます。

- analytic-1.ra.lcoal
- analytic-2.ra.lcoal
- analytic-3.ra.lcoal
- analytic-4.ra.lcoal
- analytic-5.ra.lcoal
- analytic-6.ra.lcoal
- analytic-7.ra.lcoal
- analytic-8.ra.lcoal

デプロイ プロファイルのサポート

中規模デプロイ プロファイルでは、次の構成がサポートされています。

- 合計 40,000 のリソース、そのうち 20,000 は HA に対応
- 6,000 の Endpoint Operations Management エージェント
- 6 か月間のデータ保存

負荷分散されるアドレス

- analytics.ra.local
- epops.ra.local

証明書

証明書には認証局による署名が必要です。サブジェクトの代替名には、次の情報が含まれます。

- DNS 名 = *epops.refarch.local*
- DNS 名 = *analytic-1.ra.local*

これは、中規模デプロイ プロファイルの一例です。

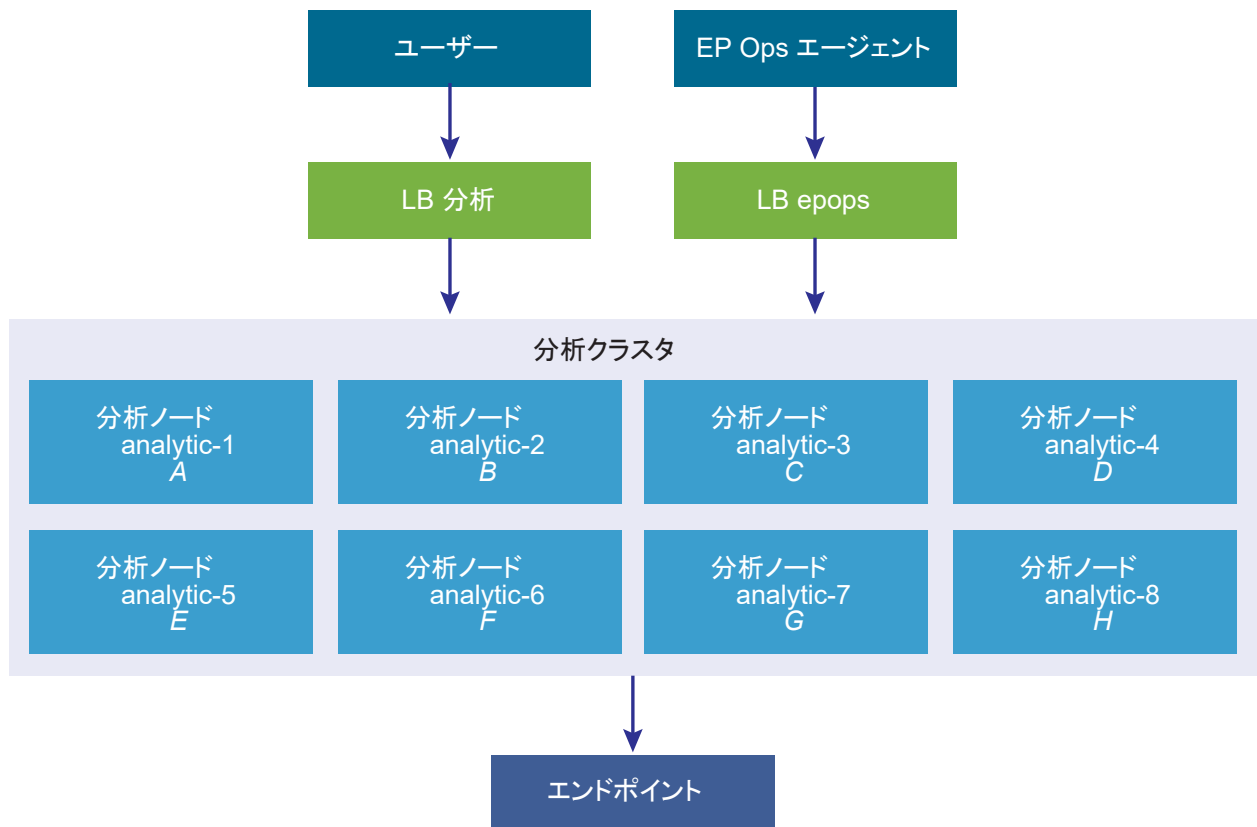
表 2-13. アダプタのプロパティ

コレクタ グループ	コレクタ	アダプタ	リソース
デフォルト	analytic-1	A	2,000
デフォルト	analytic-2	B	4,000

表 2-13. アダプタのプロパティ（続き）

コレクタ グループ	コレクタ	アダプタ	リソース
デフォルト	analytic-3	C	2,000
デフォルト	analytic-4	D	3,000
デフォルト	analytic-5	E	1,000
デフォルト	analytic-6	F	2,000
デフォルト	analytic-7	G	1,500
デフォルト	analytic-8	H	4,500

vRealize Operations Manager の中規模デプロイ プロファイルのアーキテクチャ



vRealize Operations Manager の大規模デプロイ プロファイル

大規模デプロイ プロファイルは、80,000 リソース（そのうち 40,000 リソースは高可用性に対応）を管理するシステムを想定しています。すべてのアダプタは大規模デプロイ プロファイル内のリモート コントローラにデプロイされ、分析クラスタから CPU 使用量をオフロードします。

仮想アプライアンス名

大規模デプロイ プロファイルには、8 個の大規模な分析ノード、アダプタ用の大規模なリモート コレクタ、および Endpoint Operations Management エージェント用の大規模なリモート コレクタが含まれています。

- `analytic-1.ra.lcoal`
- `analytic-2.ra.lcoal`
- `analytic-3.ra.lcoal`
- `analytic-4.ra.lcoal`
- `analytic-5.ra.lcoal`
- `analytic-6.ra.lcoal`
- `analytic-7.ra.lcoal`
- `analytic-8.ra.lcoal`

デプロイ プロファイルのサポート

大規模デプロイ プロファイルでは、次の構成がサポートされています。

- 合計 80,000 のリソース、そのうち 40,000 は HA に対応
- 10,000 の Endpoint Operations Management エージェント
- 6 か月間のデータ保存

負荷分散されるアドレス

- `analytics.ra.local`
- `epops.ra.local`

証明書

証明書には認証局による署名が必要です。サブジェクトの代替名には、次の情報が含まれます。

- DNS 名 = *analytic.refarch.local*
- DNS 名 = *epops.refarch.local*
- DNS 名 = *analytic-1.ra.local* から DNS 名 = *analytic-8.ra.local*
- DNS 名 = *remote-1.ra.local* から DNS 名 = *remote-N.ra.local*
- DNS 名 = *epops-1.ra.lcoal* から DNS 名 = *epops-N.ra.local*

これは、大規模デプロイ プロファイルの一例です。

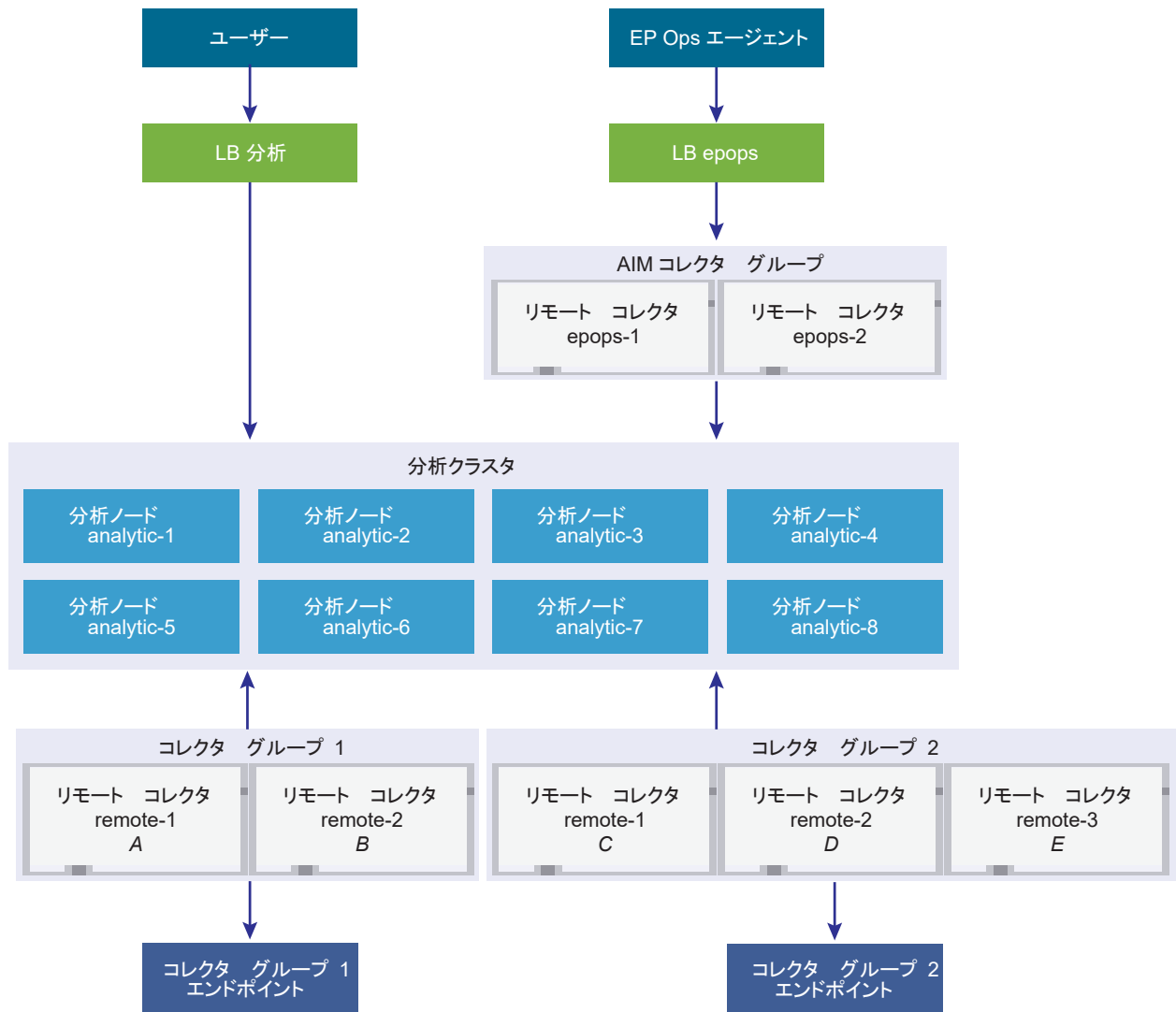
表 2-14. アダプタのプロパティ

コレクタ グループ	リモート コレクタ	アダプタ	リソース	Endpoint Operations Management エージェント
1	remote-1	A	5,000	該当なし
1	remote-2	B	5,000	該当なし
		合計	10,000	該当なし
2	remote-3	C	10,000	該当なし
2	remote-4	D	5,000	該当なし
2	remote-5	E	5,000	該当なし
		合計	20,000	該当なし
AIM	epops-1	epops	4,800	800
	epops-2	epops	4,800	800
		合計	9,600	1,600

これらのコレクタ グループからリモート コレクタが失われた場合、各リモート コレクタのリソースの上限 10,000 に適合させるために、アダプタを手動で再調整しなければならない場合があります。

9,600 リソースという概算値では、Endpoint Operations Management エージェントごとに 6 つのリソースを使用します。

vRealize Operations Manager の大規模デプロイ プロファイルのアーキテクチャ



vRealize Operations Manager の特大デプロイ プロファイル

特大デプロイ プロファイルは、120,000 リソース（そのうち 60,000 リソースは高可用性に対応）を管理するシステムを想定しています。このデプロイは、サポートされている最大の分析クラスター デプロイであり、2 つのデータセンターに分割されます。

仮想アプライアンス名

特大デプロイ プロファイルには、16 個の大規模な分析ノード、アダプタ用の X 個の大規模なリモート コレクタ、および Endpoint Operations Management エージェント用の Y 個の大規模なリモート コレクタが含まれています。

- analytic-1.ra.local
- analytic-2.ra.local
- analytic-3.ra.local
- analytic-4.ra.local
- analytic-5.ra.local
- analytic-6.ra.local
- analytic-7.ra.local
- analytic-8.ra.local
- analytic-9.ra.local
- analytic-10.ra.local
- analytic-11.ra.local
- analytic-12.ra.local
- analytic-13.ra.local
- analytic-14.ra.local
- analytic-15.ra.local
- analytic-16.ra.local

デプロイ プロファイルのサポート

- 合計 120,000 のリソース、そのうち 60,000 は HA に対応
- 10,000 の Endpoint Operations Management エージェント
- 6 か月間のデータ保存

負荷分散されるアドレス

- analytics.ra.local
- epops-a.ra.local

■ epops-b.ra.local

証明書

証明書には認証局による署名が必要です。サブジェクトの代替名には、次の情報が含まれます。

- DNS 名 = *analytic.refarch.local*
- DNS 名 = *epops-a.refarch.local*
- DNS 名 = *epops-b.refarch.local*
- DNS 名 = *analytic-1.ra.local* から *analytic-16.ra.local*
- DNS 名 = *remote-1.ra.local* から *remote-N.ra.local*
- DNS 名 = *epops-1.ra.local* から *epops-N.ra.local*

これは、特大デプロイ プロファイルの一例です。例にあるアダプタは、N-1 の冗長性を提供します。つまり 2 台のアダプタが 20,000 のリソースをサポートする場合、3 台目のアダプタが追加され、単一故障を許容する構成のサポートを実現します。

表 2-15. アダプタのプロパティ

コレクタ グループ	データ センター	リモート コレクタ	アダプタ	リソース	Endpoint Operations Management エージェント
1	A	remote-1	A	5,000	該当なし
1	A	remote-2	B	5,000	該当なし
			合計	10,000	
2	A	remote-3	C	2,000	該当なし
2	A	remote-3	D	2,000	該当なし
2	A	remote-3	E	1,000	該当なし
2	A	remote-4	F	7,000	該当なし
2	A	remote-5	G	8,000	該当なし
2	A	remote-6	H	5,000	該当なし
2	A	remote-7	I	6,000	該当なし
			合計	31,000	
3	B	remote-8	J	10,000	該当なし
3	B	remote-9	K	5,000	該当なし
3	B	remote-10	L	5,000	該当なし
			合計	20,000	
AIM-1	A	epops-1	epops	8,004	1,334
AIM-1	A	epops-2	epops	7,998	1,333
	A	epops-3	epops	7,998	1,333
			合計	24,000	4,000

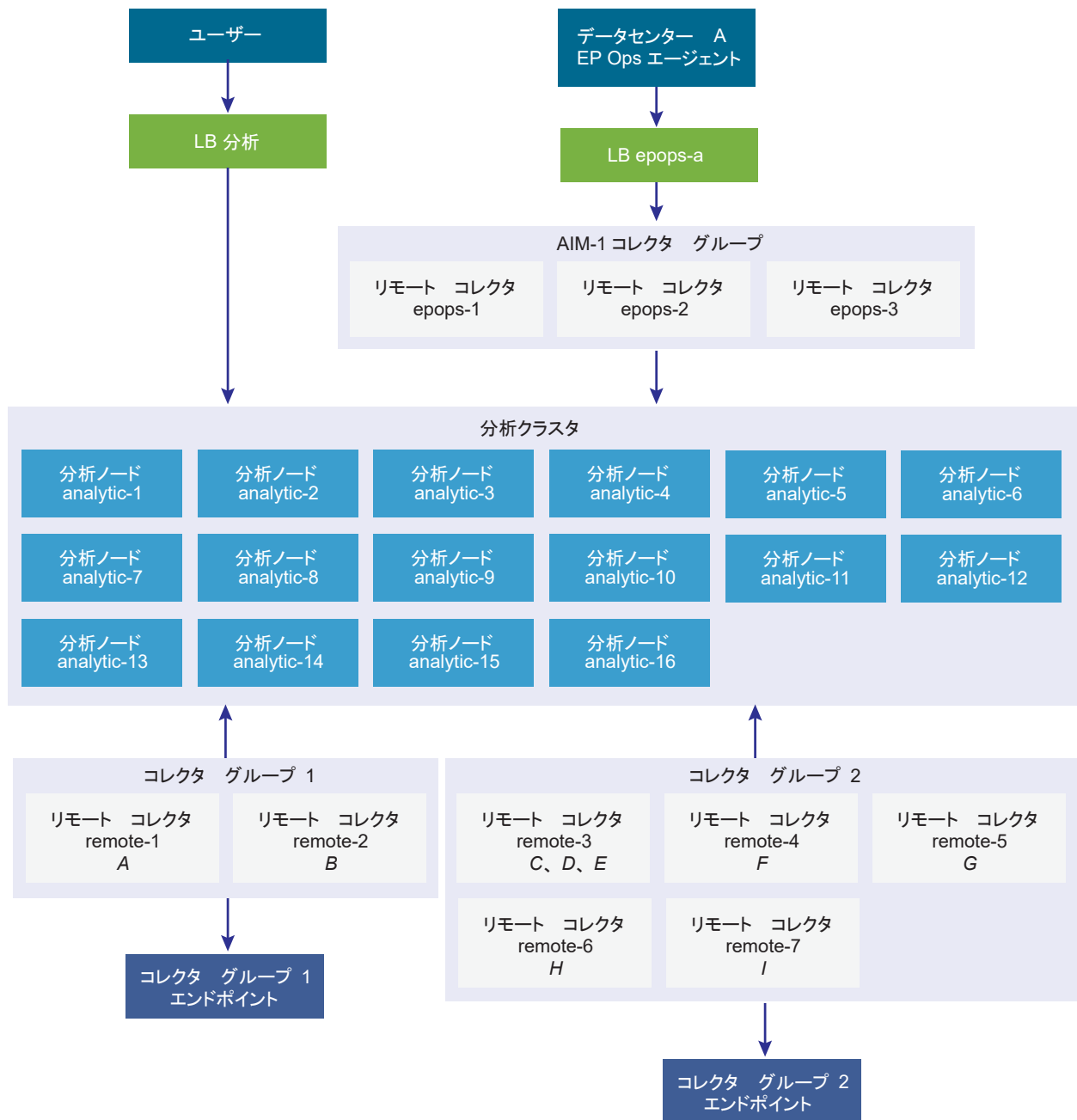
表 2-15. アダプタのプロパティ（続き）

コレクタ グループ	データ センター	リモート コレクタ	アダプタ	リソース	Endpoint Operations Management エージェント
AIM-2	B	epops-4	epops	8,004	1,334
AIM-2	B	epops-5	epops	7,998	1,333
AIM-2	B	epops-6	epops	7,998	1,333
合計				24,000	4,000

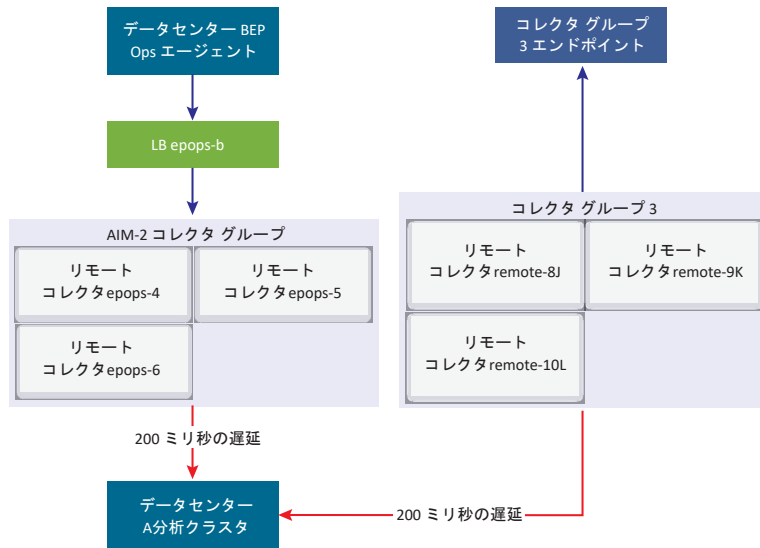
これらのコレクタ グループからリモート コレクタが失われた場合、各リモート コレクタのリソースの上限 10,000 に適合させるために、アダプタを手動で再調整しなければならない場合があります。

AIM-1 コレクタ グループおよび AIM-2 コレクタ グループに対する 24,000 リソースという概算値では、Endpoint Operations Management エージェントごとに 6 つのリソースを使用します。

vRealize Operations Manager の特大デプロイ プロファイルのアーキテクチャ - データセンター A



vRealize Operations Manager の特大デプロイ プロファイルのアーキテクチャ - データセンター B



安全な構成

提供される推奨事項で環境のセキュリティ要件を満たしていることを確認します。

vRealize Operations Manager のセキュリティ状態

vRealize Operations Manager のセキュリティ状態は、システムとネットワークの構成、組織のセキュリティ ポリシー、およびベスト プラクティスに基づいて、完全に安全な環境であることが想定されます。組織のセキュリティ ポリシーおよびベスト プラクティスに従ってセキュリティ強化アクティビティを実行することが重要です。

このドキュメントは、次のセクションで構成されます。

- 安全なデプロイ
- 安全な構成
- ネットワーク セキュリティ
- 通信

このガイドでは、仮想アプリケーションのインストールについて詳細に説明しています。また、次のデプロイ タイプについても説明しています。

- [Linux インストール環境へのデプロイ](#)

システムのセキュリティを適切に強化するため、推奨事項を確認し、組織のセキュリティ ポリシーとリスクへの暴露に関する評価を行います。

vRealize Operations Manager のデプロイのセキュリティ保護

ダウンロードされたファイルが真正であることを確認するために、製品をインストールする前にインストール メディアの整合性を確認する必要があります。

インストール メディアの完全性の確認

メディアをダウンロードした後、MD5/SHA1 サム値を使用してダウンロードの完全性を確認します。ISO、オフライン バンドル、またはパッチをダウンロードした後は、ダウンロードしたファイルの完全性と真正さを確認するために、常に SHA1 ハッシュを確認してください。VMware から取得した物理メディアのセキュリティ シールが破損している場合は、ソフトウェアを VMware に返品し、交換を依頼してください。

手順

- ◆ MD5/SHA1 ハッシュ出力を VMware の Web サイトに掲載されている値と比較します。

SHA1 ハッシュまたは MD5 ハッシュが一致している必要があります。

注： vRealize Operations Manager 6.x-x.pak ファイルは、VMware ソフトウェア発行の証明書によって署名されています。vRealize Operations Manager では、インストールの前に PAK ファイルの署名が検証されます。

デプロイされるソフトウェア インフラストラクチャの強化

強化プロセスの一環として、VMware システムがサポートされるデプロイ済みのソフトウェア インフラストラクチャを強化する必要があります。

VMware システムを強化する前に、サポートするソフトウェア インフラストラクチャにあるセキュリティ欠陥を確認および解決して、完全に強化された安全な環境を作成します。考慮すべきソフトウェア インフラストラクチャ要素には、オペレーティング システムのコンポーネント、サポートするソフトウェア、データベース ソフトウェアが含まれます。製造元の推奨事項や他の関連するセキュリティ プロトコルに従って、これらのコンポーネントや他のコンポーネントにあるセキュリティ上の問題を解決します。

VMware vSphere 環境の強化

vRealize Operations Manager のメリットを最大限に活かし、セキュリティ保護されたインフラストラクチャを実現するには、安全な VMware vSphere 環境が必要です。

VMware vSphere 環境を評価し、適切なレベルの vSphere 強化ガイダンスが実施され、維持されていることを確認します。

強化ガイダンスの詳細については、<http://www.vmware.com/security/hardening-guides.html> を参照してください。

Linux インストール環境の場合の強化

Linux の強化およびセキュリティ上のベスト プラクティスに関する適切なガイドラインで規定されている推奨事項を確認し、Linux ホストが適切に強化されていることを確認します。強化ガイドラインに従っていない場合、Linux リリース上の安全でないコンポーネントによる既知のセキュリティ脆弱性にシステムがさらされることがあります。

vRealize Operations Manager は、Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 6 (バージョン 6.5 以降) へのインストールがサポートされています。

インストールされているサポート対象外のソフトウェアの確認

使用されていないソフトウェアの脆弱性によって、権限のないシステム アクセスや可用性の低下といったリスクが高まる可能性があります。VMware ホスト マシンにインストールされているソフトウェアを確認し、その使用状況を評価します。

システムの安全な運用のために、いずれの vRealize Operations Manager ノード ホストにも、必要でないソフトウェアをインストールしないようにします。使用されていない、または必要でないソフトウェアをアンインストールします。

vRealize Operations Manager などのインフラストラクチャ製品上にサポート対象外のソフトウェア、テストされていないソフトウェア、または未承認のソフトウェアをインストールすることは、インフラストラクチャに対する脅威になります。

インフラストラクチャに対する脅威を最小化するため、VMware 提供のホストでは、VMware によってサポートされていないサードパーティ製ソフトウェアをインストールしたり使用したりしないでください。

サポート対象外のソフトウェアがインストールされていないことを確認するために、vRealize Operations Manager のデプロイとインストールされている製品のインベントリを評価します。

サードパーティ製品のサポート ポリシーの詳細については、VMware サポート (<http://www.vmware.com/security/hardening-guides.html>) を参照してください。

サードパーティ製ソフトウェアの確認

VMware でサポートされていないサードパーティ製ソフトウェアを使用しないでください。すべてのサードパーティ製ソフトウェアがサードパーティ ベンダーのガイダンスに従って安全に構成され、パッチが適用されていることを確認します。

VMware ホスト マシンにインストールされたサードパーティ製ソフトウェアが真正でない、安全ではない、あるいは脆弱性に対するパッチが適用されていない場合、権限のないアクセスや可用性の低下といったリスクがシステムに生じる可能性があります。VMware 以外によって提供されるすべてのソフトウェアは、適切にセキュリティ保護し、パッチを適用する必要があります。

VMware でサポートされていないサードパーティ製ソフトウェアを使用する必要がある場合は、安全な構成およびパッチ適用の要件について該当のベンダーにお問い合わせください。

VMware によるセキュリティ アドバイザリおよびパッチ

時折、VMware は製品のセキュリティ アドバイザリをリリースします。こうしたアドバイザリを把握することで、安全な基盤製品を確保し、製品が既知の脅威に対して脆弱ではないことを確認できます。

vRealize Operations Manager のインストール、パッチ適用、およびアップグレードの履歴を評価し、リリース済みの VMware セキュリティ アドバイザリに従っていることを確認します。

また、常に最新の vRealize Operations Manager リリースを使用し、最新のセキュリティ修正プログラムを適用することをお勧めします。

現在の VMware セキュリティ アドバイザリの詳細については、<http://www.vmware.com/security/advisories/> を参照してください。

vRealize Operations Manager の安全な構成

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、vRealize Operations Manager コンソールをセキュリティ保護し、SSH、管理アカウント、およびコンソール アクセスを管理する必要があります。システムが安全な転送チャネルでデプロイされることを確認してください。

また、Endpoint Operations Management エージェントの実行に関するセキュリティ上のベスト プラクティスに従う必要があります。

vRealize Operations Manager コンソールのセキュリティ保護

vRealize Operations Manager をインストールした後、初回のログイン時にクラスタ内の各ノードのコンソールをセキュリティ保護する必要があります。

前提条件

vRealize Operations Manager をインストールします。

手順

- 1 vCenter でノードのコンソールを見つけます。またはノードのコンソールに直接アクセスします。

vCenter で Alt + F1 キーを押してログイン プロンプトにアクセスします。セキュリティ上の理由から、vRealize Operations Manager のリモート ターミナル セッションは、デフォルトで無効になっています。

2 root としてログインします。

vRealize Operations Manager では、root パスワードを作成するまで、コマンド プロンプトにアクセスできません。

3 パスワードのプロンプトで、[Enter] キーを押します。

4 古いパスワードのプロンプトで、[Enter] キーを押します。

5 新しいパスワードのプロンプトで、使用する root パスワードを入力し、今後のために書き留めておきます。

6 root パスワードを再入力します。

7 コンソールからログアウトします。

root パスワードの変更

コンソールを使用して、vRealize Operations Manager のマスター ノードまたはデータ ノードの root パスワードをいつでも変更できます。

root ユーザーは、etc/pam.d/common-password にある、pam_cracklib モジュールのパスワード複雑性チェックをバイパスします。すべてのセキュリティ強化アプライアンスで、pw_history モジュールの enforce_for_root を有効にします。これは etc/pam.d/common-password ファイルにあります。デフォルトでは、直前の 5 つのパスワードがシステムに記憶されます。各ユーザーの旧パスワードは、/etc/security/opasswd ファイルに格納されます。

前提条件

アプライアンスの root パスワードが、組織で定められているパスワードの複雑性要件を満たしていることを確認します。アカウントのパスワードが \$6\$ で始まる場合は、sha512 ハッシュが使用されます。これは、すべてのセキュリティ強化アプライアンスでの標準ハッシュです。

手順

1 アプライアンスの root シェルで # passwd コマンドを実行します。

2 root パスワードのハッシュを確認するには、root としてログインし、# more /etc/shadow コマンドを実行します。

ハッシュ情報が表示されます。

3 root パスワードに sha512 ハッシュが含まれていない場合は、passwd コマンドを実行して root パスワードを変更します。

パスワード有効期限の管理

組織のセキュリティ ポリシーに従って、すべてのアカウントのパスワード有効期限を構成します。

すべての VMware セキュリティ強化アプライアンスでは、デフォルトで 60 日のパスワード有効期限が使用されます。大半のセキュリティ強化アプライアンスでは、root アカウントに 365 日のパスワード有効期限が設定されています。ベスト プラクティスとして、すべてのアカウントの有効期限がセキュリティと運用の要件を満たしていることを確認します。

root パスワードの有効期限が切れると、それを復元することはできません。管理パスワードおよび root パスワードの有効期限が切れるのを回避するには、サイト固有のポリシーを導入する必要があります。

手順

- 1 root として仮想アプライアンス マシンにログインし、`# more /etc/shadow` コマンドを実行して、すべてのアカウントのパスワード有効期限を確認します。
- 2 root アカウントの有効期限を変更するには、`# passwd -x 365 root` コマンドを実行します。

このコマンドの 365 は、パスワードの有効期限が切れるまでの日数を指定しています。同じコマンドを使用して root の代わりに特定のアカウントを使用し、ユーザーを変更します。さらに、組織の有効期限の基準を満たすように日数を置き換えます。

root パスワードは、デフォルトで 365 日に設定されています。

SSH、管理アカウント、およびコンソール アクセスの管理

リモート接続のために、すべてのセキュリティ強化アプライアンスに Secure Shell (SSH) プロトコルが含まれています。セキュリティ強化アプライアンスでは、デフォルトで SSH が無効化されています。

SSH は、vRealize Operations Manager ノードへのリモート接続をサポートするインタラクティブなコマンドライン環境です。SSH には、権限の高いユーザー アカウント認証情報が必要です。SSH アクティビティは、通常、vRealize Operations Manager ノードのロールベース アクセス制御 (RBAC) と監査制御をバイパスします。

ベスト プラクティスとして、本番環境で SSH を無効にし、他の方法で解決できない問題を診断したりトラブルシューティングしたりする場合にのみ、SSH を有効にします。特定の目的のためや、組織のセキュリティ ポリシーに準拠するために必要な場合に限り、SSH を有効のままにします。SSH を有効にする場合は、SSH が確実に攻撃から保護されるようにし、必要な間だけ SSH を有効にするようにしてください。Open Virtualization Format (OVF) テンプレートをデプロイするときは、vSphere の構成に応じて、SSH を有効または無効にできます。

マシン上で SSH が有効になっているかどうかを判断するための簡単なテストとして、SSH を使用して接続を開いてみます。接続が開き、認証情報が要求されたら、SSH は有効になっており、接続に使用できます。

SSH root ユーザー

VMware アプライアンスには事前構成されたデフォルトのユーザー アカウントがないため、デフォルトで、root アカウントで SSH を使用して直接ログインできます。できるだけ早く root の SSH を無効にしてください。

否認防止のコンプライアンス基準を満たすために、すべてのセキュリティ強化アプライアンスの SSH サーバには、2 番目の wheel グループへの SSH アクセスを制限する AllowGroups wheel エントリが事前に構成されています。作業を分担するには、`/etc/ssh/sshd_config` ファイルで AllowGroups wheel エントリを変更し、sshd などの別のグループを使用します。

wheel グループは、pam_wheel モジュールによってスーパーユーザー アクセスが可能になっているため、wheel グループのメンバーは、root パスワードが必要な `su-root` コマンドを使用できます。グループの分離により、ユーザーはアプライアンスに対して SSH を使用できますが、`su` コマンドを使用して root としてログインすることはできません。アプライアンスを適切に機能させるために、AllowGroups フィールドの他のエントリの削除や変更は行わないでください。変更後に、`# service sshd restart` コマンドを実行して SSH デーモンを再起動します。

vRealize Operations Manager ノードで SSH を有効または無効にする

トラブルシューティング用に、vRealize Operations Manager ノードで Secure Shell (SSH) を有効にすることができます。たとえば、サーバをトラブルシューティングするには、サーバへのコンソール アクセスが必要になるこ

とがあります。これは SSH を通じて行います。通常の運用には、vRealize Operations Manager ノードで SSH を無効にしてください。

手順

- 1 vCenter から、vRealize Operations Manager ノードのコンソールにアクセスします。
- 2 Alt + F1 キーを押してログイン プロンプトにアクセスし、ログインします。
- 3 `#chkconfig` コマンドを実行します。
- 4 `sshd` サービスがオフの場合は、`#chkconfig sshd on` コマンドを実行します。
- 5 `#service sshd start` コマンドを実行して `sshd` サービスを起動します。
- 6 `#service sshd stop` コマンドを実行して `sshd` サービスを停止します。

SSH 用のローカル管理アカウントを作成する

root の SSH アクセスを削除する前に、Secure Shell (SSH) を使用でき、セカンダリ wheel グループのメンバーであるローカル管理アカウントを作成する必要があります。

直接 root アクセスを無効にする前に、権限のある管理者が AllowGroups を使用して SSH にアクセスできること、および wheel グループと `su` コマンドを使用して root としてログインできることをテストしてください。

手順

- 1 root としてログインし、次のコマンドを実行します。

```
# useradd -d /home/vropsuser -g users -G wheel -m
# passwd username
```

wheel は、SSH アクセス用に AllowGroups で指定するグループです。複数のセカンダリ グループを追加するには、`-G wheel,sshd` を使用します

- 2 ユーザーに切り替え、パスワード複雑性チェックを通過できる新しいパスワードを入力します。

```
# su - username
username@hostname:~>passwd
```

パスワード複雑性を満たした場合、パスワードが更新されます。パスワード複雑性を満たさなかった場合、パスワードが元のパスワードに戻されるため、パスワード コマンドを再実行する必要があります。

SSH リモート アクセスを許可するためのログイン アカウントを作成し、`su` コマンドを使用して、wheel アクセスを使用する root としてログインすると、SSH 直接ログインから root アカウントを削除できるようになります。

- 3 SSH への直接ログインを削除するには、`/etc/ssh/sshd_config` ファイルを変更します
(`(#)PermitRootLogin yes` を `PermitRootLogin no` に置き換えます)。

次のステップ

root としての直接ログインを無効にします。強化されたアプライアンスでは、コンソールを通じた root への直接ログインがデフォルトで許可されます。否認防止用の管理アカウントを作成し、wheel アクセス (su-root) 用にテストした後、root として /etc/securetty ファイルを編集し、tty1 エントリを console に置き換えて直接 root ログインを無効にします。

SSH のアクセスの制限

システム セキュリティ強化プロセスの一環として、すべての VMware 仮想アプライアンス ホスト マシン上で tcp_wrappers パッケージを適切に構成することにより SSH アクセスを制限します。また、こうしたアプライアンスで必要な SSH キー ファイルの権限を維持します。

すべての VMware 仮想アプライアンスには、libwrapped デーモンにアクセスできるネットワーク サブネットを tcp-supported デーモンで制御することを可能にするための tcp_wrappers パッケージが含まれます。デフォルトでは /etc/hosts.allow ファイルには、SSH へのすべてのアクセスを許可する汎用エントリ sshd: ALL : ALLOW が含まれます。組織の要件に応じてこのアクセスを制限します。

手順

- 1 テキスト エディタで仮想アプライアンス ホスト マシン上の /etc/hosts.allow ファイルを開きます。
- 2 安全な運用のために、本番環境ではローカル ホスト エントリおよび管理ネットワーク サブネットのみを含めるように汎用エントリを変更します。

```
sshd:127.0.0.1 : ALLOW
sshd: [::1] : ALLOW
sshd: 10.0.0.0 :ALLOW
```

この例では、すべてのローカル ホスト接続、およびクライアントが 10.0.0.0 サブネット上で行う接続が許可されます。

- 3 すべての適切なマシン ID、たとえばホスト名、IP アドレス、完全修飾ドメイン名 (FQDN)、loopbackなどを追加します。
- 4 ファイルを保存して閉じます。

SSH キー ファイルの権限の維持

適切なレベルのセキュリティを維持するために、Secure Shell (SSH) キー ファイルの権限を構成します。

手順

- 1 /etc/ssh/*key.pub にあるパブリック ホスト キー ファイルを確認します。
- 2 これらのファイルの所有者が root であること、グループの所有者が root であること、およびファイルの権限が 0644 に設定されていることを確認します。

この権限は (-rw-r--r--) です。

- 3 すべてのファイルを閉じます。
- 4 /etc/ssh/*key にあるプライベート ホスト キー ファイルを確認します。

- 5 これらのファイルとグループを root が所有していることと、ファイルの権限が 0600 に設定されていることを確認します。

この権限は (-rw-----) です。

- 6 すべてのファイルを閉じます。

SSH サーバ構成のセキュリティ保護

可能な場合、Virtual Application のインストール (OVF) には強化されたデフォルト構成が用意されています。ユーザーは、構成ファイルのグローバル オプション セクションにあるサーバおよびクライアント サービスを調べて、構成が適切に強化されていることを確認できます。

可能な場合は、`/etc/hosts.allow` ファイルで SSH サーバの使用を管理サブネットに限定します。

手順

- 1 サーバ構成ファイル `/etc/ssh/sshd_config` を開き、設定が正しいことを確認します。

設定	ステータス
Server Daemon Protocol	Protocol 2
Ciphers	暗号 aes256-ctr,aes128-ctr
TCP Forwarding	AllowTCPForwarding no
Server Gateway Ports	Gateway Ports no
X11 Forwarding	X11Forwarding no
SSH Service	AllowGroups フィールドを使用して、アクセスが許可されるグループを指定し、サービスの使用が許可されるユーザー用のセカンダリ グループにメンバーを追加します。
GSSAPI Authentication	GSSAPIAuthentication no (未使用の場合)
Kerberos Authentication	KerberosAuthentication no (未使用の場合)
Local Variables (AcceptEnv グローバル オプション)	コメントアウトして <code>disabled</code> に設定するか、 <code>LC_*</code> または <code>LANG</code> 変数のみに対して <code>enabled</code> に設定
Tunnel Configuration	PermitTunnel no
Network Sessions	MaxSessions 1
Strict Mode Checking	Strict Modes yes
Privilege Separation	UsePrivilegeSeparation yes
rhosts RSA Authentication	RhostsRSAAuthentication no
Compression	Compression delayed または Compression no
Message Authentication code	MACs hmac-sha1
User Access Restriction	PermitUserEnvironment no

- 2 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

SSH クライアント構成を強化する

システム強化監視プロセスの一環として、仮想アプライアンス ホスト マシン上の SSH クライアント構成ファイルを調べて VMware ガイドラインに従って構成されていることを確認することにより、SSH クライアントの強化を確認します。

手順

- 1 SSH クライアント構成ファイル `/etc/ssh/ssh_config` を開き、グローバル オプション セクション内の設定が正しいことを確認します。

設定	ステータス
Client Protocol	Protocol 2
Client Gateway Ports	Gateway Ports no
GSSAPI Authentication	GSSAPIAuthentication no
Local Variables (SendEnv グローバル オプション)	LC_* または LANG 変数のみを指定
CBC Ciphers	暗号 aes256-ctr,aes128-ctr
Message Authentication Codes	MACs hmac-sha1 エントリのみで使用

- 2 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

root としての直接ログインを無効にする

強化されたアプライアンスでは、コンソールを使用して root として直接ログインすることがデフォルトで許可されます。セキュリティ上のベスト プラクティスとして、否認防止用の管理アカウントを作成し、`su-root` コマンドを使用して wheel アクセスが可能かどうかをテストした後、直接ログインを無効にすることができます。

前提条件

- [SSH 用のローカル管理アカウントを作成する](#)のトピックの手順を実行します。
- root の直接ログインを無効にする前に、管理者としてのシステム アクセスをテストしたことを確認してください。

手順

- 1 root としてログインし、`/etc/security` ファイルに移動します。

このファイルはコマンド プロンプトからアクセスできます。

- 2 `tty1` エントリを `console` で置き換えます。

管理者ユーザー アカウントの SSH アクセスを無効にする

セキュリティのベスト プラクティスとして、管理者ユーザー アカウントの SSH アクセスを無効にすることができます。vRealize Operations Manager 管理者アカウントと Linux 管理者アカウントは、同じパスワードを共有しています。管理者ユーザーの SSH アクセスを無効にすることで、すべての SSH ユーザーが最初のログインで vRealize Operations Manager 管理者アカウントと異なるパスワードを使用して低い権限のサービス アカウントにログインした上で、管理者や root などの上位の権限に切り替えるようにして、防御を強化できます。

手順

- 1 `/etc/ssh/sshd_config` ファイルを編集します。

このファイルはコマンド プロンプトからアクセスできます。

- 2 ファイル内のいずれかの箇所に `DenyUsers admin` エントリを追加して、ファイルを保存します。
- 3 `sshd` サーバを再起動するため、`service sshd restart` コマンドを実行します。

ブート ローダー認証の設定

適切なレベルのセキュリティを確保するために、VMware 仮想アプライアンスでブート ローダー認証を構成します。システム ブート ローダーで認証を必要としない場合、システムへのコンソール アクセスを持つユーザーがシステムのブート構成を変更できてしまう可能性があります。また、シングル ユーザー モードまたはメンテナンス モードでシステムをブートし、それによってサービス妨害または権限のないシステム アクセスが行われる可能性があります。

デフォルトでは、VMware 仮想アプライアンス上でブート ローダー認証は設定されないで、その構成のために GRUB パスワードを作成する必要があります。

手順

- 1 仮想アプライアンス上の `/boot/grub/menu.lst` ファイルで `password --md5 <password-hash>` 行を検索することにより、ブート パスワードが存在するかどうか確認してください。
- 2 パスワードが存在しない場合は、仮想アプライアンス上で `# /usr/sbin/grub-md5-crypt` コマンドを実行します。
MD5 パスワードが生成され、コマンドによって md5 ハッシュ出力が提示されます。
- 3 `# password --md5 <hash from grub-md5-crypt>` コマンドを実行することにより、`menu.lst` ファイルにパスワードを追加します。

シングルユーザー モードまたはメンテナンス モードの認証

システムがシングルユーザー モードまたはメンテナンス モードで起動する際に有効な root 認証が不要である場合、シングルユーザー モードまたはメンテナンス モードを開始するすべてのユーザーが、システム上のすべてのファイルに対して特権的なアクセスを得ることになります。

手順

- ◆ `/etc/inittab` ファイルで、`ls:S:wait:/etc/init.d/rc S` および `~:S:respawn:/sbin/sulogin` の 2 つの行が含まれることを確認します。

最低限必要なユーザー アカウントの監視

既存のユーザー アカウントを監視して、不要なユーザー アカウントが削除されるようにする必要があります。

手順

- ◆ `host:~ # cat /etc/passwd` コマンドを実行して、最低限必要なユーザー アカウントを確認します。

```
bin:x:1:1:bin:/bin:/bin/bash
daemon:x:2:2:Daemon:/sbin:/bin/bash
```

```

haldaemon:x:101:102:User for haldaemon:/var/run/hald:/bin/false
mail:x:8:12:Mailer daemon:/var/spool/clientmqueue:/bin/false
man:x:13:62:Manual pages viewer:/var/cache/man:/bin/bash
messagebus:x:100:101:User for D-Bus:/var/run/dbus:/bin/false
nobody:x:65534:65533:nobody:/var/lib/nobody:/bin/bash
ntp:x:74:106:NTP daemon:/var/lib/ntp:/bin/false
polkituser:x:103:104:PolicyKit:/var/run/PolicyKit:/bin/false
postfix:x:51:51:Postfix Daemon:/var/spool/postfix:/bin/false
root:x:0:0:root:/root:/bin/bash
sshd:x:71:65:SSH daemon:/var/lib/ssh:/bin/false
suse-ncc:x:104:107:Novell Customer Center User:/var/lib/YaST2/suse-ncc-fakehome:/bin/bash
uidd:x:102:103:User for uidd:/var/run/uidd:/bin/false
wwwrun:x:30:8:WWW daemon apache:/var/lib/wwwrun:/bin/false
nginx:x:105:108:user for nginx:/var/lib/nginx:/bin/false
admin:x:1000:1003:./home/admin:/bin/bash
tcserver:x:1001:1004:tc Server User:/home/tcserver:/bin/bash
postgres:x:1002:100:./var/vmware/vpostgres/9.3:/bin/bash

```

最低限必要なグループの監視

既存のグループとメンバーを監視して、不要なグループやグループ アクセスが削除されるようにする必要があります。

手順

- ◆ <host>:~ # cat /etc/group コマンドを実行して、最低限必要なグループとグループ メンバーシップを確認します。

```

audio:x:17:
bin:x:1:daemon
cdrom:x:20:
console:x:21:
daemon:x:2:
dialout:x:16:u1,tcserver,postgres
disk:x:6:
floppy:x:19:
haldaemon:!:102:
kmem:x:9:
mail:x:12:
man:x:62:
messagebus:!:101:
modem:x:43:
nobody:x:65533:
nogroup:x:65534:nobody
ntp:!:106:
polkituser:!:105:
public:x:32:
root:x:0:admin
shadow:x:15:
sshd:!:65:
suse-ncc:!:107:
sys:x:3:
tape:!:103:
trusted:x:42:

```



```

tty:x:5:
utmp:x:22:
uidd:!:104:
video:x:33:u1,tcserver,postgres
wheel:x:10:root,admin
www:x:8:
xok:x:41:
maildrop:!:1001:
postfix:!:51:
users:x:100:
vami:!:1002:root
nginx:!:108:
admin:!:1003:
vfabric:!:1004:admin,wwwrun

```

vRealize Operations Manager 管理者パスワードのリセット (Linux)

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、vApp または Linux インストールによる Linux クラスタ上の vRealize Operations Manager のパスワードをリセットできます。

手順

- 1 root としてマスター ノードのリモート コンソールにログインします。
- 2 \$VMWARE_PYTHON_BIN \$VCOPS_BASE/../../vmware-vcopssuite/utilities/sliceConfiguration/bin/vcopsSetAdminPassword.py --reset コマンドを入力し、プロンプトの指示に従います。

VMware アプライアンスでの NTP の構成

クリティカルな時刻ソーシングを行う場合は、VMware アプライアンスでホスト時刻同期を無効にし、Network Time Protocol (NTP) を使用します。時間同期用の信頼できるリモート NTP サーバを構成する必要があります。NTP サーバは権限のある時間サーバであるか、または少なくとも権限のある時間サーバと同期していることが必要です。

VMware 仮想アプライアンスの NTP デーモンは、同期されたタイム サービスを提供します。NTP はデフォルトで無効になっているため、手動で構成する必要があります。可能な場合は、本番環境で NTP を使用してユーザー アクションを追跡し、正確な監査とログ保存を通じて悪意のある潜在的な攻撃と侵入を検出します。NTP のセキュリティ告知については、NTP の Web サイトを参照してください。

NTP 構成ファイルは、各アプライアンス上の /etc/ntp.conf ファイルにあります。

手順

- 1 仮想アプライアンスのホスト マシン上の /etc/ntp.conf 構成ファイルに移動します。
- 2 ファイル所有権を **root:root** に設定します。
- 3 権限を **0640** に設定します。

- 4 NTP サービスに対するサービス拒否増幅攻撃のリスクを緩和するには、`/etc/ntp.conf` ファイルを開き、そのファイルに `restrict` 行が存在することを確認します。

```
restrict default kod nomodify notrap nopeer noquery
restrict -6 default kod nomodify notrap nopeer noquery
restrict 127.0.0.1
restrict -6 ::1
```

- 5 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

NTP のセキュリティ告知については、<http://support.ntp.org/bin/view/Main/SecurityNotice> を参照してください。

Linux 上の TCP タイムスタンプ応答を無効にする

TCP タイムスタンプ応答を使用して、リモートホストの稼働時間を見積もり、以後の攻撃に利用します。また、一部のオペレーティングシステムは、その TCP タイムスタンプの動作に基づいてフィンガープリントされることがあります。

手順

- ◆ Linux 上の TCP タイムスタンプ応答を無効にします。
 - a `net.ipv4.tcp_timestamps` の値を 0 に設定するには、`sysctl -w net.ipv4.tcp_timestamps=0` コマンドを実行します。
 - b デフォルトの `sysctl.conf` ファイルで、`ipv4.tcp_timestamps=0` 値を追加します。

FIPS 140-2 モードを有効にする

vRealize Operations Manager 6.3 以上のリリースで提供される OpenSSL バージョンは、FIPS 140-2 認定です。ただし、FIPS モードはデフォルトでは有効にされていません。

FIPS モードが有効な FIPS 認定の暗号アルゴリズムを使用するセキュリティコンプライアンス要件がある場合に、FIPS モードを有効にできます。

手順

- 1 `mod_ssl.so` ファイルを置き換えるため、次のコマンドを実行します。

```
cd /usr/lib64/apache2-prefork/
cp mod_ssl.so mod_ssl.so.old
cp mod_ssl.so.FIPSON.openssl1.0.2 mod_ssl.so
```

- 2 `/etc/apache2/ssl-global.conf` ファイルを編集して Apache2 構成を変更します。
- 3 `<IfModule mod_ssl.c>` の行を見つけて、その下に `SSLFIPS on` ディレクティブを追加します。
- 4 Apache 構成をリセットするため、`service apache2 restart` コマンドを実行します。

転送中のデータの TLS

セキュリティ上のベストプラクティスとして、システムが安全な転送チャネルでデプロイされることを確認してください。

vRealize Operations Manager 用に強力なプロトコルを構成する

SSLv2 や SSLv3 のようなプロトコルは、もはや安全とは見なされていません。さらに、TLS 1.0 を無効にすることをお勧めします。TLS 1.1 および TLS 1.2 のみを有効にしてください。

Apache HTTPD でのプロトコルの正しい使用の確認

vRealize Operations Manager では、SSLv2 と SSLv3 がデフォルトで無効です。システムを本番環境に移行する前に、すべてのロード バランサで脆弱なプロトコルを無効にする必要があります。

手順

- 1 コマンド プロンプトから `grep SSLProtocol /usr/lib/vmware-vcopssuite/utilities/conf/vcops-apache.conf | grep -v '#'` コマンドを実行し、SSLv2 および SSLv3 が無効であることを確認します。

プロトコルが無効である場合、このコマンドは出力 `SSLProtocol All -SSLv2 -SSLv3` を返します。

- 2 また、TLS 1.0 プロトコルを無効にするには、`sed -i '/^[^#]*SSLProtocol/ c\SSLProtocol All -SSLv2 -SSLv3 -TLSv1' /usr/lib/vmware-vcopssuite/utilities/conf/vcops-apache.conf` コマンド プロンプトからコマンドを実行します。
- 3 Apache2 サーバを再起動するには、コマンド プロンプトから `/etc/init.d/apache2 restart` コマンドを実行します。

GemFire TLS ハンドラでのプロトコルの正しい使用の確認

vRealize Operations Manager では、デフォルトで SSLv3 が無効になります。システムを本番環境に移行する前に、すべてのロード バランサで脆弱なプロトコルを無効にする必要があります。

手順

- 1 プロトコルが有効であることを確認します。プロトコルが有効であることを確認するために、各ノードで次のコマンドを実行します。

```
grep cluster-ssl-protocol /usr/lib/vmware-vcops/user/conf/gemfire.properties | grep -v '#'
```

想定される結果は次のとおりです。

```
cluster-ssl-protocols=TLSv1.2 TLSv1.1 TLSv1
grep cluster-ssl-protocol /usr/lib/vmware-vcops/user/conf/gemfire.native.properties | grep -v '#'
```

想定される結果は次のとおりです。

```
cluster-ssl-protocols=TLSv1.2 TLSv1.1 TLSv1
grep cluster-ssl-protocol /usr/lib/vmware-vcops/user/conf/gemfire.locator.properties | grep -v '#'
```

想定される結果は次のとおりです。

```
cluster-ssl-protocols=TLSv1.2 TLSv1.1 TLSv1
```

- 2 TLS 1.0 を無効にします。
 - a `url/admin` の管理者ユーザー インターフェイスに移動します。
 - b [オンラインにする] をクリックします。

- c SSLv3 と TLS 1.0 を無効にするには、次のコマンドを実行します。

```
sed -i "/^[^#]*cluster-ssl-protocol/ c\cluster-ssl-protocols=TLSv1.2
TLSv1.1" /usr/lib/vmware-vcops/user/conf/gemfire.properties
sed -i "/^[^#]*cluster-ssl-protocol/ c\cluster-ssl-protocols=TLSv1.2
TLSv1.1" /usr/lib/vmware-vcops/user/conf/gemfire.native.properties
sed -i "/^[^#]*cluster-ssl-protocol/ c\cluster-ssl-protocols=TLSv1.2
TLSv1.1" /usr/lib/vmware-vcops/user/conf/gemfire.locator.properties
```

各ノードについてこの手順を繰り返します。

- d 管理者ユーザー インターフェイスに移動します。

- e [[オンラインにする]] をクリックします。

3 TLS 1.0 を再度有効にします。

- a 管理者ユーザー インターフェイスに移動し、クラスタをオフラインにします (url/admin)。

- b [オンラインにする] をクリックします。

- c SSLv3 と TLS 1.0 が無効であることを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
sed -i "/^[^#]*cluster-ssl-protocol/ c\cluster-ssl-protocols=TLSv1.2 TLSv1.1
TLSv1" /usr/lib/vmware-vcops/user/conf/gemfire.properties
sed -i "/^[^#]*cluster-ssl-protocol/ c\cluster-ssl-protocols=TLSv1.2 TLSv1.1
TLSv1" /usr/lib/vmware-vcops/user/conf/gemfire.native.properties
sed -i "/^[^#]*cluster-ssl-protocol/ c\cluster-ssl-protocols=TLSv1.2 TLSv1.1
TLSv1" /usr/lib/vmware-vcops/user/conf/gemfire.locator.properties
```

各ノードについてこの手順を繰り返します。

- d 管理者ユーザー インターフェイスに移動し、クラスタをオンラインにします。

- e [[オンラインにする]] をクリックします。

強力な暗号を使用するように vRealize Operations Manager を構成する

セキュリティを最大限に高めるため、強力な暗号を使用するように vRealize Operations Manager コンポーネントを構成する必要があります。強力な暗号のみが選択されるようにするには、脆弱な暗号の使用を無効にします。強力な暗号をサポートし、十分に大きいキー サイズを使用するようにサーバを構成します。また、暗号は適切な順序で構成します。

vRealize Operations Manager では、DHE キー交換を使用する暗号の使用はデフォルトで無効化されています。本番環境でのシステムの運用を開始する前に、すべてのロード バランサで同じ脆弱な暗号を無効にしてください。

強力な暗号の使用

サーバとブラウザの間でネゴシエートされる暗号化暗号により、TLS セッションで使用されるキー交換方法と暗号化強度が決まります。

Apache HTTPD での暗号化スイートの正しい使用の確認

セキュリティを高めるために、Apache httpd で暗号化スイートが正しく使用されていることを確認します。

手順

- 1 Apache httpd で暗号化スイートの正しい使用を確認するには、`grep SSLCipherSuite /usr/lib/vmware-vcopssuite/utilities/conf/vcops-apache.conf | grep -v '#'` コマンド プロンプトからコマンドを実行します。

Apache httpd で正しい暗号化スイートを使用している場合、このコマンドによって次の出力が返されます：
 SSLCipherSuite kECDH+AESGCM:ECDH+AESGCM:RSA+AESGCM:kECDH+AES:ECDH+AES:RSA+AES:!
 aNULL!ADH:!EXP:!MD5:!3DES:!CAMELLIA:!PSK:!SRP:!DH

- 2 暗号化スイートの正しい使用を構成するには、コマンド プロンプトから `sed -i "/^[^#]*SSLCipherSuite/ c\SSLCipherSuite kECDH+AESGCM:ECDH+AESGCM:RSA+AESGCM:kECDH+AES:ECDH+AES:RSA+AES:\!aNULL\!ADH:\!EXP:\!MD5:\!3DES:\!CAMELLIA:\!PSK:\!SRP:\!DH" /usr/lib/vmware-vcopssuite/utilities/conf/vcops-apache.conf` コマンドを実行します。

手順 1 で出力が想定どおりではない場合は、このコマンドを実行します。

このコマンドによって、DH/DHE キー交換法を使用するすべての暗号化スイートが無効になります。

- 3 Apache2 サーバを再起動するために、コマンド プロンプトから `/etc/init.d/apache2 restart` コマンドを実行します。
- 4 DH を再有効化するには、コマンド プロンプトから `sed -i "/^[^#]*SSLCipherSuite/ c\SSLCipherSuite kECDH+AESGCM:ECDH+AESGCM:RSA+AESGCM:kECDH+AES:ECDH+AES:RSA+AES:\!aNULL\!ADH:\!EXP:\!MD5:\!3DES:\!CAMELLIA:\!PSK:\!SRP" /usr/lib/vmware-vcopssuite/utilities/conf/vcops-apache.conf` コマンドを実行することにより、暗号化スイートから !DH を削除します。
- 5 Apache2 サーバを再起動するために、コマンド プロンプトから `/etc/init.d/apache2 restart` コマンドを実行します。

GemFire TLS ハンドラでの暗号化プロトコルの正しい使用の確認

セキュリティを高めるために、GemFire TLS ハンドラで暗号化スイートが正しく使用されていることを確認します。

手順

- 1 暗号化スイートが有効であることを確認するには、各ノードで次のコマンドを実行してプロトコルが有効であるかどうかを調べます：

```
grep cluster-ssl-ciphers /usr/lib/vmware-vcops/user/conf/gemfire.properties |
grep -v '#'

grep cluster-ssl-ciphers /usr/lib/vmware-vcops/user/conf/
gemfire.native.properties | grep -v '#'

grep cluster-ssl-ciphers /usr/lib/vmware-vcops/user/conf/
gemfire.locator.properties | grep -v '#'
```

- 2 正しい暗号化スイートを構成します。
 - a `URL/admin` の管理者ユーザー インターフェイスに移動します。
 - b クラスタをオフラインにするには、[オフラインにする] をクリックします。

- c 正しい暗号化スイートを構成するには、次のコマンドを実行します：

```
sed -i "/^[^#]*cluster-ssl-ciphers/ c\cluster-ssl-ciphers=TLS_ECDHE_RSA_WITH_AES_128_GCM_SHA256" /usr/lib/vmware-vcops/user/conf/gemfire.properties
```

```
sed -i "/^[^#]*cluster-ssl-ciphers/ c\cluster-ssl-ciphers=TLS_ECDHE_RSA_WITH_AES_128_GCM_SHA256" /usr/lib/vmware-vcops/user/conf/gemfire.native.properties
```

```
sed -i "/^[^#]*cluster-ssl-ciphers/ c\cluster-ssl-ciphers=TLS_ECDHE_RSA_WITH_AES_128_GCM_SHA256" /usr/lib/vmware-vcops/user/conf/gemfire.locator.properties
```

各ノードについてこの手順を繰り返します。

- d `URL/admin` の管理者ユーザー インターフェイスに移動します。

- e [[オンラインにする]] をクリックします。

保護する必要のあるアプリケーション リソース

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、アプリケーション リソースが保護されるようにします。

次の手順に従って、アプリケーション リソースが保護されるようにします。

手順

- 1 `Find / -path /proc -prune -o -type f -perm +6000 -ls` コマンドを実行して、正しく定義された SUID および GUID ビット セットがファイルに設定されていることを確認します。

次のリストが表示されます。

354131	24	-rwsr-xr-x	1	polkituser	root	23176	/usr/lib/PolicyKit/polkit-set-default-helper
354126	20	-rwxr-sr-x	1	root	polkituser	19208	/usr/lib/PolicyKit/polkit-grant-helper
354125	20	-rwxr-sr-x	1	root	polkituser	19008	/usr/lib/PolicyKit/polkit-explicit-grant-helper
354130	24	-rwxr-sr-x	1	root	polkituser	23160	/usr/lib/PolicyKit/polkit-revoke-helper
354127	12	-rwsr-x---	1	root	polkituser	10744	/usr/lib/PolicyKit/polkit-grant-helper-pam
354128	16	-rwxr-sr-x	1	root	polkituser	14856	/usr/lib/PolicyKit/polkit-read-auth-helper
73886	84	-rwsr-xr-x	1	root	shadow	77848	/usr/bin/chsh
73888	88	-rwsr-xr-x	1	root	shadow	85952	/usr/bin/gpasswd
73887	20	-rwsr-xr-x	1	root	shadow	19320	/usr/bin/expiry
73890	84	-rwsr-xr-x	1	root	root	81856	/usr/bin/passwd
73799	240	-rwsr-xr-x	1	root	root	238488	/usr/bin/sudo
73889	20	-rwsr-xr-x	1	root	root	19416	/usr/bin/newgrp
73884	92	-rwsr-xr-x	1	root	shadow	86200	/usr/bin/chage
73885	88	-rwsr-xr-x	1	root	shadow	82472	/usr/bin/chfn
73916	40	-rwsr-x---	1	root	trusted	40432	/usr/bin/crontab
296275	28	-rwsr-xr-x	1	root	root	26945	/usr/lib64/pt_chown
353804	816	-r-xr-sr-x	1	root	mail	829672	/usr/sbin/sendmail
278545	36	-rwsr-xr-x	1	root	root	35792	/bin/ping6
278585	40	-rwsr-xr-x	1	root	root	40016	/bin/su
278544	40	-rwsr-xr-x	1	root	root	40048	/bin/ping
278638	72	-rwsr-xr-x	1	root	root	69240	/bin/umount

278637	100	-rwsr-xr-x	1	root	root	94808	/bin/mount
475333	48	-rwsr-x---	1	root	messagebus	47912	/lib64/dbus-1/dbus-daemon-launch-helper
41001	36	-rwsr-xr-x	1	root	shadow	35688	/sbin/unix_chkpwd
41118	12	-rwsr-xr-x	1	root	shadow	10736	/sbin/unix2_chkpwd

- 2 `find / -path */proc -prune -o -nouser -o -nogroup` コマンドを実行して、vApp 内のすべてのファイルに所有者が存在することを確認します。

結果が表示されない場合は、すべてのファイルに所有者が存在します。

- 3 `find / -name ".*" -type f -perm -a+w | xargs ls -ldb` コマンドを実行し、vApp のすべてのファイルの権限を確認して、すべてのファイルが全ユーザーが書き込み可能なファイルではないことを確かめます。

どのファイルにも、権限 `xx2` が含まれてはいけません。

- 4 `find / -path */proc -prune -o ! -user root -o -user admin -print` コマンドを実行して、ファイルが正しいユーザーに所有されていることを確認します。

結果が表示されない場合は、すべてのファイルが `root` または `admin` のどちらかに所有されています。

- 5 `find /usr/lib/vmware-casa/ -type f -perm -o=w` コマンドを実行して、`/usr/lib/vmware-casa/` ディレクトリ内のファイルが、全ユーザーが書き込み可能なファイルではないことを確認します。

このコマンドで結果が表示されないようにします。

- 6 `find /usr/lib/vmware-vcops/ -type f -perm -o=w` コマンドを実行して、`/usr/lib/vmware-vcops/` ディレクトリ内のファイルが、全ユーザーが書き込み可能なファイルではないことを確認します。

このコマンドで結果が表示されないようにします。

- 7 `find /usr/lib/vmware-vcopssuite/ -type f -perm -o=w` コマンドを実行して、`/usr/lib/vmware-vcopssuite/` ディレクトリ内のファイルが、全ユーザーが書き込み可能なファイルではないことを確認します。

このコマンドで結果が表示されないようにします。

PostgreSQL クライアント認証の構成

クライアント認証に関するシステム構成が可能です。ローカル信頼認証を行うようにシステムを構成できます。これによって、データベース スーパー ユーザーを含むすべてのローカル ユーザーがパスワードなしで PostgreSQL ユーザーとして接続できます。強力な保護を必要としており、すべてのローカル ユーザー アカウントに対する信頼性が高くないときは、別の認証方法を使用してください。デフォルトの方法として、`md5` が設定されます。すべてのローカル接続およびホスト接続で `md5` が設定されていることを確認してください。

`/storage/db/vcops/vpostgres/data/pg_hba.conf` で PostgreSQL サービス インスタンスのクライアント認証構成設定を確認できます。すべてのローカル接続およびホスト接続で `md5` が設定されていることを確認してください。

postgres-repl サービス インスタンスのクライアント認証構成設定は、`/storage/db/vcops/vpostgres/repl/pg_hba.conf` で確認できます。すべてのローカル接続およびホスト接続で md5 が設定されていることを確認してください。

注： Postgres ユーザー アカウントのクライアント構成設定は変更しないでください。

Apache の構成

Web ディレクトリの閲覧の無効化

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、ユーザーがディレクトリを閲覧できないようにします。ディレクトリを閲覧すると、ディレクトリ トラバーサル攻撃にさらされるリスクが増える可能性があります。

手順

- ◆ すべてのディレクトリで、Web ディレクトリの閲覧が無効になっていることを確認します。
 - a テキスト エディタで、`/etc/apache2/default-server.conf` ファイルと `/usr/lib/vmware-vcopssuite/utilities/conf/vcops-apache.conf` ファイルを開きます。
 - b それぞれの <Directory> 項目で、Options 行に該当タグの Indexes オプションが含まれていないことを確認します。

Apache2 サーバのサンプル コードの削除

Apache には、2 つのサンプルの共通ゲートウェイ インターフェイス (CGI) スクリプト (`printenv` および `test-cgi`) が含まれます。本番 Web サーバには、運用に必要なコンポーネントのみを含める必要があります。これらのコンポーネントは、攻撃者に対してシステムの重要情報を開示する可能性があります。

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、`cgi-bin` ディレクトリから CGI スクリプトを削除してください。

手順

- ◆ `test-cgi` スクリプトおよび `prinenv` スクリプトを削除するには、`rm /usr/share/doc/packages/apache2/test-cgi` コマンドおよび `rm /usr/share/doc/packages/apache2/printenv` コマンドを実行します。

Apache2 サーバのサーバ トークンの確認

システム セキュリティ強化プロセスの一部として、Apache2 サーバのサーバ トークンを確認します。HTTP 応答の Web サーバ応答ヘッダーには、複数の情報フィールドを含めることができます。情報には、要求された HTML ページ、Web サーバのタイプとバージョン、オペレーティング システムとバージョン、および Web サーバに関連するポートが含まれます。この情報によって、悪意のあるユーザーが広範なツールを使用することなく重要な情報を入手できます。

ディレクティブ `ServerTokens` は、Prod に設定する必要があります。たとえば、`ServerTokens Prod` など。このディレクティブは、クライアントに返されるサーバの応答ヘッダー フィールドに、オペレーティング システムの説明およびコンパイルイン モジュールに関する情報を含めるかどうかを制御します。

手順

- 1 サーバ トークンを確認するには、`cat /etc/apache2/sysconfig.d/global.conf | grep ServerTokens` コマンドを実行します。
- 2 `ServerTokens OS` を `ServerTokens Prod` に変更するには、`sed -i 's/\(ServerTokens\s\+\)OS/\1Prod/g' /etc/apache2/sysconfig.d/global.conf` コマンドを実行します。

Apache2 サーバのトレース方法の無効化

標準的な本番処理では、データの侵害に結びつく診断機能を使用することによって未検出な脆弱性を発見できることがあります。データの悪用を避けるために、HTTP Trace メソッドを無効にします。

手順

- 1 Apache2 サーバの Trace 方法を確認するには、コマンド `grep TraceEnable /usr/lib/vmware-vcopssuite/utilities/conf/vcops-apache.conf` を実行します。
- 2 Apache2 サーバの Trace 方法を無効にするには、コマンド `sed -i "/^[^#]*TraceEnable/ c \TraceEnable off" /usr/lib/vmware-vcopssuite/utilities/conf/vcops-apache.conf` を実行します。

構成モードを無効にする

ベスト プラクティスとして、vRealize Operations Manager をインストール、構成、または保守するときは、インストールのトラブルシューティングおよびデバッグが有効になるように構成または設定を変更できます。

適切にセキュリティ保護されるように、加える変更をそれぞれカタログ化および監査します。構成変更が正しくセキュリティ保護されているかどうかがよくわからない場合は、本番環境に移行しないでください。

非必須ソフトウェア コンポーネントの管理

セキュリティ上のリスクを最小限にするために、vRealize Operations Manager ホスト マシンの非必須ソフトウェアを削除するか構成します。

セキュリティ侵害を引き起こす可能性を最小限にするため、削除しないすべてのソフトウェアについては、メーカーの推奨事項とセキュリティ上のベスト プラクティスに従って構成します。

USB 大容量ストレージ ハンドラのセキュリティ保護

USB 大容量ストレージ ハンドラをセキュリティ保護し、vRealize アプライアンスでこのハンドラがデフォルトでロードされないようにします。また、vRealize アプライアンスでこのハンドラが USB デバイス ハンドラとして使用されないようにします。潜在的な攻撃者がこのハンドラを悪用して悪意のあるソフトウェアをインストールする可能性があります。

手順

- 1 テキスト エディタで `/etc/modprobe.conf.local` ファイルを開きます。
- 2 このファイルに `install usb-storage /bin/true` 行が含まれることを確認します。
- 3 ファイルを保存して閉じます。

Bluetooth プロトコル ハンドラのセキュリティ保護

潜在的な攻撃者による悪用を防止するために、vRealize アプライアンスで Bluetooth プロトコル ハンドラをセキュリティ保護します。

ネットワーク スタックへの Bluetooth プロトコルのバインドは不要であり、バインドするとホストの攻撃対象領域が増加します。vRealize アプライアンスで、Bluetooth プロトコル ハンドラ モジュールがデフォルトでロードされないようにします。

手順

- 1 テキスト エディタで `/etc/modprobe.conf.local` ファイルを開きます。
- 2 このファイルに行 `install bluetooth /bin/true` が含まれることを確認します。
- 3 ファイルを保存して閉じます。

Stream Control Transmission Protocol のセキュリティ保護

vRealize アプライアンスで、Stream Control Transmission Protocol (SCTP) モジュールがデフォルトでロードされないようにします。潜在的な攻撃者がシステムのセキュリティを侵害するためにこのプロトコルを活用する可能性があります。

絶対に必要でなければ、SCTP モジュールをロードしないようにシステムを構成してください。SCTP は、使用されていない IETF 標準化トランスポート レイヤー プロトコルです。このプロトコルをネットワーク スタックにバインドすると、ホストの攻撃対象領域が増加します。権限のないローカル プロセスがこのプロトコルを使用してソケットを開くことにより、カーネルでプロトコル ハンドラが動的にロードされる場合があります。

手順

- 1 テキスト エディタで `/etc/modprobe.conf.local` ファイルを開きます。
- 2 このファイルに次の行が含まれることを確認します。

`install sctp /bin/true`
- 3 ファイルを保存して閉じます。

Datagram Congestion Control Protocol のセキュリティ保護

システム セキュリティ強化アクティビティの一環として、vRealize アプライアンスで Datagram Congestion Control Protocol (DCCP) モジュールがデフォルトでロードされないようにします。潜在的な攻撃者がシステムのセキュリティを侵害するためにこのプロトコルを活用する可能性があります。

絶対に必要でなければ、DCCP モジュールはロードしないようにしてください。DCCP は提案中のトランスポート レイヤー プロトコルであり、使用されません。このプロトコルをネットワーク スタックにバインドすると、ホストの攻撃対象領域が増加します。権限のないローカル プロセスがこのプロトコルを使用してソケットを開くことにより、カーネルでプロトコル ハンドラが動的にロードされる場合があります。

手順

- 1 テキスト エディタで `/etc/modprobe.conf.local` ファイルを開きます。

- 2 このファイルに DCCP 行が含まれることを確認します。

```
install dccp /bin/true
install dccp_ipv4 /bin/true
install dccp_ipv6 /bin/true
```

- 3 ファイルを保存して閉じます。

Reliable Datagram Sockets プロトコルのセキュリティ保護

システム セキュリティ強化アクティビティの一環として、vRealize アプライアンスで Reliable Datagram Sockets (RDS) プロトコルがデフォルトでロードされないようにします。潜在的な攻撃者がシステムのセキュリティを侵害するためにこのプロトコルを活用する可能性があります。

RDS プロトコルをネットワーク スタックにバインドすると、ホストの攻撃対象領域が増加します。権限のないローカル プロセスがこのプロトコルを使用してソケットを開くことにより、カーネルでプロトコル ハンドラが動的にロードされる場合があります。

手順

- 1 テキスト エディタで /etc/modprobe.conf.local ファイルを開きます。
- 2 このファイルに `install rds /bin/true` 行が含まれることを確認します。
- 3 ファイルを保存して閉じます。

Transparent Inter-Process Communication プロトコルのセキュリティ保護

システム セキュリティ強化アクティビティの一環として、仮想アプライアンス ホスト マシンで Transparent Inter-Process Communication (TIPC) プロトコルがデフォルトでロードされないようにします。潜在的な攻撃者がシステムのセキュリティを侵害するためにこのプロトコルを活用する可能性があります。

TIPC プロトコルをネットワーク スタックにバインドすると、ホストの攻撃対象領域が増加します。権限のないローカル プロセスがこのプロトコルを使用してソケットを開くことにより、カーネルでプロトコル ハンドラが動的にロードされる場合があります。

手順

- 1 テキスト エディタで /etc/modprobe.conf.local ファイルを開きます。
- 2 このファイルに `install tipc /bin/true` 行が含まれることを確認します。
- 3 ファイルを保存して閉じます。

Internet Packet Exchange プロトコルのセキュリティ保護

vRealize アプライアンスで、Internetwork Packet Exchange (IPX) プロトコルがデフォルトでロードされないようにします。潜在的な攻撃者がシステムのセキュリティを侵害するためにこのプロトコルを活用する可能性があります。

絶対に必要でなければ、IPX プロトコル モジュールはロードしないようにしてください。IPX プロトコルは、現在ではほとんど使用されることのないネットワーク レイヤー プロトコルです。このプロトコルをネットワーク スタックにバインドすると、ホストの攻撃対象領域が増加します。権限のないローカル プロセスがこのプロトコルを使用してソケットを開くことにより、システムでプロトコル ハンドラが動的にロードされる場合があります。

手順

- 1 テキスト エディタで `/etc/modprobe.conf.local` ファイルを開きます。
- 2 このファイルに行 `install ipx /bin/true` が含まれることを確認します。
- 3 ファイルを保存して閉じます。

Appletalk プロトコルのセキュリティ保護

vRealize アプライアンスで、Appletalk プロトコルがデフォルトでロードされないようにします。潜在的な攻撃者がシステムのセキュリティを侵害するためにこのプロトコルを活用する可能性があります。

絶対に必要でなければ、Appletalk プロトコル モジュールはロードしないようにしてください。このプロトコルをネットワーク スタックにバインドすると、ホストの攻撃対象領域が増加します。権限のないローカル プロセスがこのプロトコルを使用してソケットを開くことにより、システムでプロトコル ハンドラが動的にロードされる場合があります。

手順

- 1 テキスト エディタで `/etc/modprobe.conf.local` ファイルを開きます。
- 2 このファイルに行 `install appletalk /bin/true` が含まれることを確認します。
- 3 ファイルを保存して閉じます。

DECnet プロトコルのセキュリティ保護

DECnet プロトコルがデフォルトでシステムにロードされないようにします。潜在的な攻撃者がシステムのセキュリティを侵害するためにこのプロトコルを活用する可能性があります。

絶対に必要でなければ、DECnet プロトコル モジュールはロードしないようにしてください。このプロトコルをネットワーク スタックにバインドすると、ホストの攻撃対象領域が増加します。権限のないローカル プロセスがこのプロトコルを使用してソケットを開くことにより、システムでプロトコル ハンドラが動的にロードされる場合があります。

手順

- 1 テキスト エディタで DECnet プロトコルの `/etc/modprobe.conf.local` ファイルを開きます。
- 2 このファイルに行 `install decnet /bin/true` が含まれることを確認します。
- 3 ファイルを保存して閉じます。

Firewire モジュールのセキュリティ保護

vRealize アプライアンスで、Firewire モジュールがデフォルトでロードされないようにします。潜在的な攻撃者がシステムのセキュリティを侵害するためにこのプロトコルを活用する可能性があります。

絶対に必要でなければ、Firewire モジュールはロードしないようにしてください。

手順

- 1 テキスト エディタで `/etc/modprobe.conf.local` ファイルを開きます。
- 2 このファイルに行 `install ieee1394 /bin/true` が含まれることを確認します。

3 ファイルを保存して閉じます。

カーネル メッセージのログ

/Etc/sysctl.conf ファイル内の `kernel.printk` は、カーネルのログ出力を指定します。

次の 4 つの値を指定します。

- `console loglevel`. コンソールに出力されるメッセージの最低優先順位。
- `default loglevel`. 固有のログ レベルのないメッセージの最低レベル。
- コンソール ログ レベルの出力可能な最低レベル。
- コンソール ログ レベルのデフォルト値。

値ごとに 8 つのエントリから指定可能です。

- `define KERN_EMERG "<0>" /* system is unusable */`
- `define KERN_ALERT "<1>" /* action must be taken immediately */`
- `define KERN_CRIT "<2>" /* critical conditions */`
- `define KERN_ERR "<3>" /* error conditions */`
- `define KERN_WARNING "<4>" /* warning conditions */`
- `define KERN_NOTICE "<5>" /* normal but significant condition */`
- `define KERN_INFO "<6>" /* informational */`
- `define KERN_DEBUG "<7>" /* debug-level messages */`

`kernel.printk` の値を **3 4 1 7** に設定して、`/etc/sysctl.conf` ファイル内に行 `kernel.printk=3 4 1 7` が存在することを確認します。

Linux インストール環境へのデプロイ

Network Time Protocol (NTP) サービスを有効にし、システムをセキュアな送信チャネルでデプロイできるようにします。

NTP サービスの有効化

時刻のソース設定が重要である場合、ホストの時刻同期を無効にして、Network Time Protocol (NTP) を使用できます。本番環境において NTP は、正確な監査とログの保持により、ユーザー アクションを正確に追跡し、悪意のある攻撃と侵入の可能性に気付くための手段となります。

ntp デーモンはアプライアンスに含まれており、同期された時間サービスを提供するために使用されます。NTP の構成ファイルは、`/etc/ntp.conf` にあります。

転送中のデータの TLS

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、システムが安全な転送チャネルでデプロイされることを確認してください。

vRealize Operations Manager 用の強力なプロトコルの構成

SSLv2、SSLv3 などのプロトコルは、現在は安全だと考えられていません。トランスポート レイヤー保護に関するセキュリティ上のベスト プラクティスとして、TLS プロトコルのみのサポートを提供してください。

本番前に、SSLv2 と SSLv3 が無効になっていることを確認する必要があります。

強力な暗号を使用するように vRealize Operations Manager を構成する

TLS セッションで使用される暗号化強度は、サーバとブラウザの間でネゴシエートされる暗号化暗号により決まります。強力な暗号のみが選択されるようにするには、脆弱な暗号の使用を無効にするようにサーバを変更する必要があります。また、暗号は適切な順序で構成する必要があります。強力な暗号をサポートし、十分に大きいキー サイズを使用するようにサーバを構成する必要があります。

脆弱な暗号を無効にする

NULL 暗号 (NULL や eNULL) など、認証を提供しない暗号を無効にします。認証がない場合、中間者攻撃に対して脆弱になります。

匿名の Diffie-Hellman キー交換 (ADH)、輸出レベルの暗号 (EXP、DES を含んでいる暗号)、ペイロード トラフィックの暗号化に対する 128 ビット未満のキー サイズ、ペイロード トラフィックのハッシュ メカニズムとしての MD5 の使用、IDEA 暗号、RC4 暗号もすべて、攻撃に対して脆弱であるため、無効にする必要があります。

Apache HTTPD ハンドラで脆弱な暗号を無効にする

Apache HTTPD ハンドラで使用される脆弱な暗号を無効にし、強力な暗号を有効にします。中間者攻撃を防止するには、vRealize Operations Manager 上の Apache HTTPD ハンドラの暗号と許容される暗号のリストを比較し、脆弱と見なされるすべての暗号を無効にします。

手順

- 1 テキスト エディタで `/usr/lib/vmware-vcopssuite/utilities/conf/vcops-apache.conf` ファイルを開きます。
- 2 ファイルに行 `SSLCipherSuite HIGH:!aNULL!ADH:!EXP:!MD5:!3DES:!CAMELLIA:!PSK:!SRP:!DH:@STRENGTH` が含まれていることを確認します。
- 3 ファイルを保存して閉じます。

Diffie-Hellman キー交換を有効にする

Diffie-Hellman キー交換には脆弱性があります。DH、DHE、EDH を含んでいるすべての暗号を無効にする必要があります。これらの暗号は、デフォルトで無効にされています。これらは、使用する必要がある場合は有効にすることができます。

手順

- 1 `/usr/lib/vmware-vcopssuite/utilities/conf/vcops-apache.conf` ファイルを開きます。
- 2 行 `SSLCipherSuite HIGH:!aNULL!ADH:!EXP:!MD5:!3DES:!CAMELLIA:!PSK:!SRP:!DH:@STRENGTH` を見つけます。
- 3 `!DH:` を削除して、行が `SSLCipherSuite HIGH:!aNULL!ADH:!EXP:!MD5:!3DES:!CAMELLIA:!PSK:!SRP:@STRENGTH` となるようにします。
- 4 ファイルを保存して閉じます。

構成モードを無効にする

ベスト プラクティスとして、vRealize Operations Manager をインストール、構成、または保守するときは、インストールのトラブルシューティングおよびデバッグが有効になるように構成または設定を変更できます。

適切にセキュリティ保護されるように、加える変更をそれぞれカタログ化および監査します。構成変更が正しくセキュリティ保護されているかどうかがよくわからない場合は、本番環境に移行しないでください。

ホスト サーバの安全な構成の確認

vRealize Operations Manager の安全な運用のために、セキュリティ強化アクティビティのセキュリティ保護と確認を行う必要があります。

詳細については、組織のセキュリティ ポリシーに応じて、Red Hat Enterprise Linux 6 のセキュリティ強化ガイドを参照してください。

Endpoint Operations Management エージェント

Endpoint Operations Management エージェントは、エージェントベースの検出および監視機能を vRealize Operations Manager に追加します。

Endpoint Operations Management エージェントは、ホスト上に直接インストールされるため、信頼性が Endpoint Operations Management サーバと同じレベルとは限りません。したがって、エージェントが安全にインストールされていることを確認する必要があります。

Endpoint Operations Management エージェントを実行するためのセキュリティ上のベスト プラクティス

ユーザー アカウントの使用時には、セキュリティ上のベスト プラクティスに従う必要があります。

- サイレント インストールの場合は、AGENT_HOME/conf/agent.properties ファイルに保存されたすべての認証情報とサーバ証明書のサムプリントを削除します。
- Endpoint Operations Management エージェント登録用に特別に予約された vRealize Operations Manager ユーザー アカウントを使用します。詳細については、vRealize Operations Manager ヘルプのトピック「vRealize Operations Manager でのロールと権限」を参照してください。
- インストールの完了後に、エージェント登録に使用した vRealize Operations Manager ユーザー アカウントを無効にします。エージェント管理アクティビティ用のユーザー アクセスを有効にする必要があります。詳細については、vRealize Operations Manager ヘルプのトピック「vRealize Operations Manager でのユーザーとグループの構成」を参照してください。
- エージェントを実行するシステムがセキュリティ侵害を受けた場合、vRealize Operations Manager ユーザー インターフェイスを使用してエージェント リソースを削除することによって、エージェント証明書を破棄できます。詳細については、セクション「エージェントの破棄」を参照してください。

エージェント機能に最低限必要な権限

サービスをインストールおよび変更するための権限が必要です。実行中のプロセスを検出する場合、エージェントの実行に使用するユーザー アカウントには、プロセスとプログラムにアクセスする権限も必要になります。Windows オペレーティング システムのインストールの場合、サービスをインストールおよび変更する権限が必要です。Linux のインストールでは、RPM インストーラを使用してエージェントをインストールする場合は、エージェントをサービスとしてインストールする権限が必要です。

エージェントを vRealize Operations Manager サーバに登録するために必要な最低限の権限は、システム内のオブジェクトに対する割り当てが一切ない、Agent Manager のロールが付与されているユーザー用の権限です。

Linux ベースのプラットフォームにおけるファイルと権限

Endpoint Operations Management エージェントのインストール後は、エージェントをインストールしたユーザーがエージェントの所有者になります。

Endpoint Operations Management エージェントをインストールするユーザーが TAR ファイルを解凍するか、RPM をインストールするときに、所有者に対するインストール ディレクトリとファイルの権限（600、700 など）が設定されます。

注： ZIP ファイルを展開する場合は、権限が正しく適用されない可能性があります。権限が正しいことを確認してください。

エージェントによって作成および書き込みが行われるすべてのファイルには 700 の権限が割り当てられ、所有者はエージェントを実行するユーザーになります。

表 2-16. Linux のファイルと権限

ディレクトリまたはファイル	権限	グループまたはユーザー	読み取り	書き込み	実行
エージェント ディレクトリ/bin	700	所有者	可	可	可
		グループ	不可	不可	不可
		すべて	不可	不可	不可
エージェント ディレクトリ/conf	700	所有者	可	可	可
		グループ	不可	不可	不可
		すべて	不可	不可	不可
エージェント ディレクトリ/log	700	所有者	可	可	不可
		グループ	不可	不可	不可
		すべて	不可	不可	不可
エージェント ディレクトリ/data	700	所有者	可	可	可
		グループ	不可	不可	不可
		すべて	不可	不可	不可
エージェント ディレクトリ/bin/ep-agent.bat	600	所有者	可	可	不可
		グループ	不可	不可	不可
		すべて	不可	不可	不可
エージェント ディレクトリ/bin/ep-agent.sh	700	所有者	可	可	可
		グループ	不可	不可	不可
		すべて	不可	不可	不可
エージェント ディレクトリ/conf/* (conf ディレクトリ内のすべてのファイル)	600	所有者	可	可	可
		グループ	不可	不可	不可
		すべて	不可	不可	不可
エージェント ディレクトリ/log/* (log ディレクトリ内のすべてのファイル)	600	所有者	可	可	不可
		グループ	不可	不可	不可
		すべて	不可	不可	不可
エージェント ディレクトリ/data/*	600	所有者	可	可	不可

表 2-16. Linux のファイルと権限（続き）

ディレクトリまたはファイル	権限	グループまたはユーザー	読み取り	書き込み	実行
		ザ			
(data ディレクトリ内のすべてのファイル)		グループ	不可	不可	不可
		すべて	不可	不可	不可

Windows ベースのプラットフォームにおけるファイルと権限

Endpoint Operations Management エージェントの Windows ベースのインストールでは、エージェントをインストールするユーザーには、サービスをインストールおよび変更する権限が必要です。

Endpoint Operations Management エージェントをインストールした後、インストール フォルダ（すべてのサブディレクトリおよびファイルを含む）には、SYSTEM、管理者グループ、およびインストール ユーザーのみがアクセス可能になるようにします。ep-agent.bat を使用して Endpoint Operations Management エージェントをインストールする場合、セキュリティ強化プロセスが成功したことを確認します。エージェントをインストールするユーザーには、エラー メッセージのメモを取ることをお勧めします。セキュリティ強化プロセスが失敗した場合、ユーザーはこれらの権限を手動で適用できます。

表 2-17. Windows のファイルと権限

ディレクトリまたはファイル	グループまたはユーザー	フル コントロール	変更	読み取りと実行	読み取り	書き込み
<agent directory>/bin	SYSTEM	可	-	-	-	-
	システム管理者	可	-	-	-	-
	インストール ユーザー	可	-	-	-	-
	ユーザー		-	-	-	-
<agent directory>/conf	SYSTEM	可	-	-	-	-
	システム管理者	可	-	-	-	-
	インストール ユーザー	可	-	-	-	-
	ユーザー		-	-	-	-
<agent directory>/log	SYSTEM	可	-	-	-	-
	システム管理者	可	-	-	-	-
	インストール ユーザー	可	-	-	-	-
	ユーザー		-	-	-	-
<agent directory>/data	SYSTEM	可	-	-	-	-
	システム管理者	可	-	-	-	-
	インストール ユーザー	可	-	-	-	-
	ユーザー		-	-	-	-
<agent directory>/bin/hq-agent.bat	SYSTEM	可	-	-	-	-

表 2-17. Windows のファイルと権限 （続き）

ディレクトリまたはファイル	グループまたはユーザー	フル コントロール	変更	読み取りと実行	読み取り	書き込み
	システム管理者	可	-	-	-	-
	インストール ユーザー	可	-	-	-	-
	ユーザー		-	-	-	-
<agent directory>/bin/hq-agent.sh	SYSTEM	可	-	-	-	-
	システム管理者	可	-	-	-	-
	インストール ユーザー	可	-	-	-	-
	ユーザー		-	-	-	-
<agent directory>/conf/* (conf ディレクトリ内のすべてのファイル)	SYSTEM	可	-	-	-	-
	システム管理者	可	-	-	-	-
	インストール ユーザー	可	-	-	-	-
	ユーザー		-	-	-	-
<agent directory>/log/* (log ディレクトリ内のすべてのファイル)	SYSTEM	可	-	-	-	-
	システム管理者	可	-	-	-	-
	インストール ユーザー	可	-	-	-	-
	ユーザー		-	-	-	-
<agent directory>/data/* (data ディレクトリ内のすべてのファイル)	SYSTEM	可	-	-	-	-
	システム管理者	可	-	-	-	-
	インストール ユーザー	可	-	-	-	-
	ユーザー		-	-	-	-

エージェント ホストで開かれるポート

エージェント プロセスは、構成可能な 2 つのポート 127.0.0.1:2144 および 127.0.0.1:32000 でコマンドをリッスンします。これらのポートは任意に割り当て可能であるため、正確なポート番号は異なることがあります。エージェントは、外部インターフェイス上のポートを開きません。

表 2-18. 最低限必要なポート

ポート	プロトコル	方向	コメント
443	TCP	発信	HTTP、TCP、または ICMP での発信接続のためにエージェントによって使用されます。
2144	TCP	リッスン	内部専用。構成可能。エージェントと、それをロードおよび構成するコマンド ラインの間のプロセス間通信に使用されます。エージェント プロセスはこのポート上でリッスンします。 注： ポート番号は任意に割り当てることができ、異なる場合があります。
32000	TCP	リッスン	内部専用。構成可能。エージェントと、それをロードおよび構成するコマンド ラインの間のプロセス間通信に使用されます。エージェント プロセスはこのポート上でリッスンします。 注： ポート番号は任意に割り当てることができ、異なる場合があります。

エージェントの破棄

エージェントが実行するシステムがセキュリティ侵害を受けた場合など、何らかの理由でエージェントを破棄する必要がある場合は、システムからエージェント リソースを削除できます。以降の要求では、確認に失敗します。

vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイスを使用してエージェント リソースを削除することにより、エージェント証明書を破棄できます。詳細については、[エージェント リソースの削除](#) を参照してください。

システムが再び安全になったら、エージェントを復元できます。詳細については、[エージェント リソースの復元](#) を参照してください。

エージェント リソースの削除

vRealize Operations Manager を使用してエージェント リソースを削除することにより、エージェント証明書を破棄できます。

前提条件

以前に記録されたメトリック データを使用してリソースの継続性を維持するには、リソースの詳細に表示される Endpoint Operations Management エージェント トークンを記録しておきます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager ユーザー インターフェイスのインベントリ エクスプローラに移動します。
- 2 アダプタ タイプ ツリーを開きます。
- 3 EP Ops アダプタ リストを開きます。
- 4 [EP Ops Agent - *HOST_DNS_NAME*] を選択します。
- 5 [Edit Object] をクリックします。
- 6 エージェント トークン文字列であるエージェント ID を記録します。
- 7 [Edit Object] ダイアログ ボックスを閉じます。
- 8 [EP Ops Agent - *HOST_DNS_NAME*] を選択し、[Delete Object] をクリックします。

エージェント リソースの復元

システムの安全な状態がリカバリされた場合、破棄されたエージェントを復元できます。これによってエージェントは、履歴データを損失することなく、引き続き同じリソースについてレポートできます。このためには、エージェン

ト リソースを削除する前に記録されたのと同じトークンを使用して新しい Endpoint Operations Management トークン ファイルを作成する必要があります。「エージェント リソースの削除」のセクションを参照してください。

前提条件

- Endpoint Operations Management トークン文字列が記録されていることを確認します。
- vRealize Operations Manager サーバからエージェント リソースを削除する前に記録されたリソース トークンを使用します。
- エージェントの管理権限を保有していることを確認します。

手順

- 1 エージェントを実行するユーザーでエージェント トークン ファイルを作成します。

例として、123-456-789 トークンを含むトークン ファイルを作成するコマンドを実行します。

- Linux :

```
echo 123-456-789 > /etc/epops/epops-token
```

- Windows :

```
echo 123-456-789 > %PROGRAMDATA%\VMware\Ep Ops Agent\epops-token
```

この例では、トークン ファイルは該当するプラットフォームでのデフォルトのトークンの場所書き込まれます。

- 2 新しいエージェントをインストールし、vRealize Operations Manager サーバに登録します。トークン ファイルに書き込まれたトークンがエージェントによってロードされたことを確認します。

このアクションを実行するには、エージェントの管理権限が必要です。

エージェントの証明書の取消と更新

再発行フローは、`setup` コマンド ライン引数を使用して、エージェントから開始されます。すでに登録されているエージェントが `setup` コマンド ラインの引数 `ep-agent.sh setup` を使用し、必要な認証情報を入力すると、新しい `registerAgent` コマンドがサーバに送信されます。

サーバは、エージェントがすでに登録されていることを検出すると、別のエージェント リソースを作成せずに、そのエージェントに新しいクライアント証明書を送信します。エージェント側では、古い証明書が新しい証明書に置き換えられます。サーバ証明書の変更に `ep-agent.sh setup` コマンドを実行する場合、新しい証明書を信頼するように求めるメッセージが表示されます。この処理をサイレントに実行するには、`agent.properties` ファイルに新しいサーバ証明書のサムプリントを指定してから `ep-agent.sh setup` コマンドを実行します。

前提条件

エージェントの権限を管理して、証明書の取消と更新を行います。

手順

- ◆ Linux ベースのオペレーティング システムでは、エージェントのホストで `ep-agent.sh setup` コマンドを実行します。Windows ベースのオペレーティング システムでは、`ep-agent.bat setup` コマンドを実行します。

サーバの証明書が変更されていることをエージェントが検出すると、メッセージが表示されます。新しい証明書が有効で信頼できるものであれば、新しい証明書を受け入れます。

Endpoint Operations Management エージェントのパッチ適用と更新

必要に応じて、vRealize Operations Manager リリースとは別に、新しい Endpoint Operations Management エージェント バンドルを利用できます。

Endpoint Operations Management エージェントには、パッチやアップデートは提供されません。最新のセキュリティ修正を含むエージェントの最新のバージョンをインストールする必要があります。クリティカルなセキュリティ修正は、VMware のセキュリティに関する注意のガイダンスに従って伝えられます。セキュリティに関する注意のトピックを参照してください。

その他の安全な構成アクティビティ

サーバのユーザー アカウントを確認し、不要なアプリケーションをホスト サーバから削除します。不要なポートをブロックし、不要なホスト サーバ上で実行されているサービスを無効にします。

サーバ ユーザー アカウント設定の確認

ローカル ユーザーおよびドメイン ユーザーのアカウントと設定について、不要なユーザー アカウントが存在していないか確認することをお勧めします。

アプリケーションの実行に関連しないユーザー アカウントは、管理、メンテナンス、トラブルシューティングに必要なアカウントのみに制限します。ドメイン ユーザー アカウントからのリモート アクセスを、サーバの保守に必要な最小限のアクセスのみに制限します。これらのアカウントを厳格に管理および監査してください。

不要なアプリケーションを削除し、無効にする

不要なアプリケーションをホスト サーバから削除します。不要なアプリケーションが増えるほど、不明の脆弱性やパッチが適用されていない脆弱性によるセキュリティ侵害のリスクが高まります。

不要なポートおよびサービスを無効にする

トラフィックを許可するオープン ポートのリストについては、ホスト サーバのファイアウォールを確認してください。

このドキュメントの [ポートおよびプロトコルの構成](#) セクションで vRealize Operations Manager の最小要件としてリストされていないすべてのポート（不要なポート）をブロックします。さらに、ホスト サーバ上で実行されているサービスを監査し、不要なサービスを無効にします。

ネットワーク セキュリティと安全な通信

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、VMware 仮想アプライアンスおよびホスト マシンのネットワーク通信設定を確認および編集します。また、vRealize Operations Manager の受信ポートと発信ポートの構成は最小限にする必要があります。

仮想アプリケーション インストール用のネットワーク設定の構成

VMware 仮想アプライアンスとホスト マシンが安全で不可欠な通信のみを許可するには、ネットワーク 通信設定を確認および編集します。

ネットワーク インターフェイスのユーザー制御の防止

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、権限のあるユーザーにのみネットワーク インターフェイスの設定を変更することを許可してください。ユーザーがネットワーク インターフェイスを操作すると、ネットワーク セキュリティ メカニズムのバイパスまたはサービス妨害につながる可能性があります。ネットワーク インターフェイスのユーザー制御を許可するような構成が行われていないことを確認してください。

手順

- 1 ユーザー制御の設定を確認するには、`#grep -i '^USERCONTROL=' /etc/sysconfig/network/ifcfg*` コマンドを実行します。
- 2 各インターフェイスが NO に設定されていることを確認します。

TCP バックログのキュー サイズの設定

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、VMware アプライアンス ホスト マシン上でデフォルトの TCP バックログのキュー サイズを構成します。TCP サービス拒否攻撃を緩和するために、TCP バックログ キューの適切なデフォルト サイズを設定します。推奨されるデフォルト設定は 1280 です。

手順

- 1 それぞれの VMware アプライアンス ホスト マシン上で `# cat /proc/sys/net/ipv4/tcp_max_syn_backlog` コマンドを実行します。
- 2 TCP バックログのキュー サイズの設定
 - a テキスト エディタで `/etc/sysctl.conf` ファイルを開きます。
 - b ファイルに次のエントリを追加することにより、デフォルトの TCP バックログ キュー サイズを設定します。

`net.ipv4.tcp_max_syn_backlog=1280`
 - c 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

ブロードキャスト アドレスへの ICMPv4 エコーを拒否する

インターネット制御メッセージ プロトコル (ICMP) エコーのブロードキャストに応答すると、増幅攻撃に攻撃経路を知らせ、悪意のあるエージェントがネットワーク マッピングを行いやすくなる可能性があります。ICMPv4 エコーを無視するようにシステムを構成すると、このような攻撃から保護できます。

手順

- 1 `# cat /proc/sys/net/ipv4/icmp_echo_ignore_broadcasts` コマンドを実行して、システムが ICMP ブロードキャスト アドレス エコー要求を送信していないことを確認します。

2 ICMPv4 ブロードキャスト アドレス エコー要求を拒否するようにホスト システムを構成します。

- a テキスト エディタで `/etc/sysctl.conf` ファイルを開きます。
- b このエントリの値が 1 に設定されていない場合は、`net.ipv4.icmp_echo_ignore_broadcasts=1` エントリを追加します。
- c 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

IPv4 プロキシ ARP を無効にするようにホスト システムを構成する

IPv4 プロキシ ARP を使用すると、システムは、あるインターフェイスに接続されているホストの代理として別のインターフェイス上で ARP 要求への応答を送信できます。権限のない情報共有を防止するには、IPv4 プロキシ ARP を無効にする必要があります。接続されているネットワーク セグメント間のアドレス指定情報の漏えいを防止するには、この設定を無効にします。

手順

- 1 `# grep [01] /proc/sys/net/ipv4/conf/*/proxy_arp | egrep "default|all"` コマンドを実行して、プロキシ ARP が無効にされているかどうかを確認します。
- 2 IPv4 プロキシ ARP を無効にするようにホスト システムを構成します。
 - a テキスト エディタで `/etc/sysctl.conf` ファイルを開きます。
 - b 値が 0 に設定されていない場合は、エントリを追加するか、それに合わせて既存のエントリを更新します。値を 0 に設定します。

```
net.ipv4.conf.all.proxy_arp=0
net.ipv4.conf.default.proxy_arp=0
```

- c 行った変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

IPv4 ICMP リダイレクト メッセージを無視するようにホスト システムを構成する

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、ホスト システムで IPv4 インターネット制御メッセージ プロトコル (ICMP) リダイレクト メッセージが無視されることを確認します。悪意のある ICMP リダイレクト メッセージが使用されると、中間者攻撃が発生する可能性があります。ルータは、ICMP リダイレクト メッセージを使用して、特定の転送先へのより直接的なルートが存在することをホストに通知します。これらのメッセージは、ホストのルート テーブルを変更しますが、認証を受けません。

手順

- 1 ホスト システム上で `# grep [01] /proc/sys/net/ipv4/conf/*/accept_redirects | egrep "default|all"` コマンドを実行して、ホスト システムで IPv4 リダイレクト メッセージが無視されるかどうかをチェックします。

2 IPv4 ICMP リダイレクト メッセージを無視するようにホスト システムを構成します。

- a `/etc/sysctl.conf` ファイルを開きます。
- b 値が 0 に設定されていない場合は、次のエントリをファイルに追加するか、それに合わせて既存のエントリを更新します。値を 0 に設定します。

```
net.ipv4.conf.all.accept_redirects=0
net.ipv4.conf.default.accept_redirects=0
```

- c 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

IPv6 ICMP リダイレクト メッセージを無視するようにホスト システムを構成する

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、ホスト システムで IPv6 インターネット制御メッセージ プロトコル (ICMP) リダイレクト メッセージが無視されることを確認します。悪意のある ICMP リダイレクト メッセージが使用されると、中間者攻撃が発生する可能性があります。ルータは、ICMP リダイレクト メッセージを使用して、特定の転送先へのより直接的なルートが存在することをホストに知らせます。これらのメッセージは、ホストのルート テーブルを変更しますが、認証を受けません。

手順

- 1 ホスト システム上で `# grep [01] /proc/sys/net/ipv6/conf/*/accept_redirects | egrep "default|all"` コマンドを実行し、IPv6 リダイレクト メッセージが無視されるかどうかをチェックします。
- 2 IPv6 ICMP リダイレクト メッセージを無視するようにホスト システムを構成します。
 - a `/etc/sysctl.conf` を開いて、IPv6 リダイレクト メッセージを無視するようにホスト システムを構成します。
 - b 値が 0 に設定されていない場合は、次のエントリをファイルに追加するか、それに合わせて既存のエントリを更新します。値を 0 に設定します。

```
net.ipv6.conf.all.accept_redirects=0
net.ipv6.conf.default.accept_redirects=0
```

- c 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

IPv4 ICMP リダイレクトを拒否するようにホスト システムを構成する

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、ホスト システムで IPv4 インターネット制御メッセージ プロトコル (ICMP) リダイレクトが拒否されることを確認します。ルータは、ICMP リダイレクト メッセージを使用して、特定の転送先への直接のルートが存在することをサーバに通知します。このメッセージには、システムのルート テーブルからの情報が含まれており、ネットワーク トポロジの各部分が明らかになる可能性があります。

手順

- 1 ホスト システム上で `# grep [01] /proc/sys/net/ipv4/conf/*/send_redirects | egrep "default|all"` を実行して、IPv4 ICMP リダイレクトが拒否されることを確認します。

2 IPv4 ICMP リダイレクトを拒否するようにホスト システムを構成します。

- a /etc/sysctl.conf ファイルを開いて、ホスト システムを構成します。
- b 値が 0 に設定されていない場合は、次のエントリをファイルに追加するか、それに合わせて既存のエントリを更新します。値を 0 に設定します。

```
net.ipv4.conf.all.send_redirects=0
net.ipv4.conf.default.send_redirects=0
```

- c 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

IPv4 の出所不明パケットをログに記録するためのホスト システムの構成

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、ホスト システムが IPv4 の出所不明パケットをログに記録していることを確認します。出所不明パケットには、無効であると認識されているアドレスが含まれます。メッセージをログに記録するようにホスト システムを構成すると、不適切な構成や進行中の攻撃を特定できます。

手順

- 1 # grep [01] /proc/sys/net/ipv4/conf/*/log_martians|egrep "default|all" コマンドを実行して、ホストが IPv4 の出所不明パケットをログに記録しているかどうかを確認します。
- 2 IPv4 の出所不明パケットをログに記録するようにホスト システムを構成します。
 - a /etc/sysctl.conf ファイルを開いて、ホスト システムを構成します。
 - b 値が 1 に設定されていない場合は、次のエントリをファイルに追加するか、それに合わせて既存のエントリを更新します。値を 1 に設定します。

```
net.ipv4.conf.all.log_martians=1
net.ipv4.conf.default.log_martians=1
```

- c 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

IPv4 リバース パス フィルタリングを使用するようにホスト システムを構成する

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、IPv4 リバース パス フィルタリングを使用するようにホスト マシンを構成します。リバース パス フィルタリングは、ルートがないソース アドレスを持つパケット、またはルートが送信元のインターフェイスの方を指していないパケットをシステムに破棄させることで、偽装されたソース アドレスから保護します。

可能であれば必ず、リバース パス フィルタリングを使用するようにシステムを構成します。システム ロールによっては、リバース パス フィルタリングによって正当なトラフィックが破棄されることがあります。このような場合、より寛容なモードを使用するか、リバース パス フィルタリングを完全に無効にする必要が生じることがあります。

手順

- 1 ホスト システム上で # grep [01] /proc/sys/net/ipv4/conf/*/rp_filter|egrep "default|all" コマンドを実行して、システムで IPv4 リバース パス フィルタリングが使用されているかどうかをチェックします。

2 IPv4 リバース パス フィルタリングを使用するようにホスト システムを構成します。

- a `/etc/sysctl.conf` ファイルを開いて、ホスト システムを構成します。
- b 値が 1 に設定されていない場合は、次のエントリをファイルに追加するか、それに合わせて既存のエントリを更新します。値を 1 に設定します。

```
net.ipv4.conf.all.rp_filter=1
net.ipv4.conf.default.rp_filter=1
```

- c 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

IPv4 転送を拒否するようにホスト システムを構成する

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、ホスト システムで IPv4 転送が拒否されることを確認します。指定されたルータでないシステムが IP 転送を行うように構成されている場合、このシステムを使用して、ネットワーク デバイスでフィルタ処理されない通信のパスを提供することにより、ネットワーク セキュリティがバイパスされることがあります。

手順

- 1 `# cat /proc/sys/net/ipv4/ip_forward` コマンドを実行して、ホストで IPv4 転送が拒否されるかどうかを確認します。
- 2 IPv4 転送を拒否するようにホスト システムを構成します。
 - a `/etc/sysctl.conf` を開いて、ホスト システムを構成します。
 - b 値が 0 に設定されていない場合は、次のエントリをファイルに追加するか、同じように既存のエントリを更新します。値を 0 に設定します。

```
net.ipv4.ip_forward=0
```

- c 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

IPv4 ソース ルーティングされたパケットの転送を拒否するようにホスト システムを構成する

ソース ルーティングされたパケットを使用すると、パケットのソースが、ルータで構成されている内容とは異なるパスに沿ってルータがパケットを転送するように指示できるようになります。これを使用して、ネットワークのセキュリティ対策がバイパスされることがあります。

IPv4 転送が有効になっていて、システムがルータとして機能している場合など、この要件は、ソース ルーティングされたトラフィックの転送にのみ適用されます。

手順

- 1 `# grep [01] /proc/sys/net/ipv4/conf/*/accept_source_route | egrep "default|all"` コマンドを実行して、システムで IPv4 ソース ルーティングされたパケットが使用されないかどうかを確認します。

2 IPv4 ソース ルーティングされたパケットの転送を拒否するようにホスト システムを構成します。

- a テキスト エディタで /etc/sysctl.conf ファイルを開きます。
- b 値が 0 に設定されていない場合は、net.ipv4.conf.all.accept_source_route=0 と et.ipv4.conf.default.accept_source_route=0 が 0 に設定されていることを確認します。
- c ファイルを保存して閉じます。

IPv6 転送を拒否するようにホスト システムを構成する

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、ホスト システムで IPv6 転送が拒否されることを確認します。指定されたルータでないシステムが IP 転送を行うように構成されている場合、このシステムを使用して、ネットワーク デバイスでフィルタ処理されない通信のパスを提供することにより、ネットワーク セキュリティがバイパスされることがあります。

手順

- 1 # grep [01] /proc/sys/net/ipv6/conf/*/forwarding | egrep "default|all" コマンドを実行して、ホストで IPv6 転送が拒否されるかどうかを確認します。
- 2 IPv6 転送を拒否するようにホスト システムを構成します。
 - a /etc/sysctl.conf を開いて、ホスト システムを構成します。
 - b 値が 0 に設定されていない場合は、次のエントリをファイルに追加するか、それに合わせて既存のエントリを更新します。値を 0 に設定します。

```
net.ipv6.conf.all.forwarding=0
net.ipv6.conf.default.forwarding=0
```

- c 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

IPv4 TCP Syncookies を使用するためのホスト システムの構成

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、ホスト システムで IPv4 Transmission Control Protocol (TCP) Syncookies を使用していることを確認します。TCP SYN フラッディング攻撃は、システムの TCP 接続テーブルを SYN_RCVD 状態の接続で満たすことにより、サービス妨害を引き起こす可能性があります。Syncookies は、後続の ACK を受信してイニシエータが有効な接続を試みておりフラッディング ソースではないことが確認されるまで、接続の追跡を行わないようにする手法です。

この手法は、標準準拠の方法では完全には動作しませんが、フラッディング条件の検出時にのみ有効化され、有効な要求の処理を継続しながらシステムを保護できます。

手順

- 1 # cat /proc/sys/net/ipv4/tcp_syncookies コマンドを実行して、ホスト システムで IPv4 TCP Syncookies を使用しているかどうかを確認します。

2 IPv4 TCP syncookies を使用するようにホスト システムを構成します。

- a `/etc/sysctl.conf` を開いて、ホスト システムを構成します。
- b 値が 1 に設定されていない場合は、次のエントリをファイルに追加するか、同じように既存のエントリを更新します。値を 1 に設定します。

```
net.ipv4.tcp_syncookies=1
```

- c 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

IPv6 ルータ通知を拒否するようにホスト システムを構成する

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、ホスト システムで、必要でない限りルータ通知とインターネット制御メッセージ プロトコル (ICMP) リダイレクトの受け入れが拒否されることを確認します。IPv6 を使用すると、システムがネットワークからの情報を自動的に使用してネットワーク デバイスを構成できます。セキュリティ上の観点から、重要な構成情報は認証されていない方法でネットワークから受け入れるよりもむしろ、手動で設定することをお勧めします。

手順

- 1 ホスト システム上で `# grep [01] /proc/sys/net/ipv6/conf/*/accept_ra | egrep "default|all"` を実行して、システムで、必要でない限りルータ通知とインターネット制御メッセージ プロトコル (ICMP) リダイレクトの受け入れが拒否されることを確認します。

2 IPv6 ルータ通知を拒否するようにホスト システムを構成します。

- a `/etc/sysctl.conf` ファイルを開きます。
- b 値が 0 に設定されていない場合は、次のエントリをファイルに追加するか、それに合わせて既存のエントリを更新します。値を 0 に設定します。

```
net.ipv6.conf.all.accept_ra=0
net.ipv6.conf.default.accept_ra=0
```

- c 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

IPv6 ルータ要請を拒否するようにホスト システムを構成する

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、ホスト システムで、必要でない限り IPv6 ルータ要請が拒否されることを確認します。ルータ要請設定では、インターフェイスを構築するとき、近隣要請を何件送信するかを指定します。アドレスが静的に割り当てられる場合、要請を送信する必要はありません。

手順

- 1 `# grep [01] /proc/sys/net/ipv6/conf/*/router_solicitations | egrep "default|all"` コマンドを実行して、必要でない限りホスト システムで IPv6 ルータ要請が拒否されるかどうかを確認します。

2 IPv6 ルータ要請を拒否するようにホスト システムを構成します。

- a `/etc/sysctl.conf` を開きます。
- b 値が 0 に設定されていない場合は、次のエントリをファイルに追加するか、それに合わせて既存のエントリを更新します。値を 0 に設定します。

```
net.ipv6.conf.all.router_solicitations=0
net.ipv6.conf.default.router_solicitations=0
```

- c 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

ルータ要請で IPv6 ルータ プリファレンスを拒否するようにホスト システムを構成する

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、ホスト システムで、必要でない限り IPv6 ルータ要請が拒否されることを確認します。要請設定のルータ プリファレンスにより、ルータ プリファレンスが決まります。アドレスが静的に割り当てられる場合、要請のルータ プリファレンスを受信する必要はありません。

手順

- 1 ホスト システム上で `# grep [01] /proc/sys/net/ipv6/conf/*/accept_ra_rtr_pref|egrep "default|all"` を実行して、ホスト システムで IPv6 ルータ要請が拒否されるかどうかを確認します。
- 2 ルータ要請で IPv6 ルータ プリファレンスを拒否するようにホスト システムを構成します。
 - a `/etc/sysctl.conf` ファイルを開きます。
 - b 値が 0 に設定されていない場合は、次のエントリをファイルに追加するか、それに合わせて既存のエントリを更新します。値を 0 に設定します。

```
net.ipv6.conf.all.accept_ra_rtr_pref=0
net.ipv6.conf.default.accept_ra_rtr_pref=0
```

- c 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

IPv6 ルータ プリフィックスを拒否するようにホスト システムを構成する

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、ホスト システムで、必要でない限り IPv6 ルータ プリフィックス情報が拒否されることを確認します。`accept_ra pinfo` 設定は、システムでルータからのプリフィックス情報を受け入れるかどうかを制御します。アドレスが静的に割り当てられる場合、システムでルータ プリフィックス情報を受信する必要はありません。

手順

- 1 `# grep [01] /proc/sys/net/ipv6/conf/*/accept_ra_pinfo|egrep "default|all"` を実行して、そのシステムで IPv6 ルータ プリフィックス情報が拒否されるかどうかを確認します。

2 IPv6 ルータ プリフィックスを拒否するようにホスト システムを構成します。

- a `/etc/sysctl.conf` ファイルを開きます。
- b 値が 0 に設定されていない場合は、次のエントリをファイルに追加するか、それに合わせて既存のエントリを更新します。値を 0 に設定します。

```
net.ipv6.conf.all.accept_ra_pinfo=0
net.ipv6.conf.default.accept_ra_pinfo=0
```

- c 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

IPv6 ルータ通知のホップ制限設定を拒否するためのホスト システムの構成

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、必要な場合を除き、ホスト システムがルータ通知からの IPv6 ルータ通知のホップ制限設定を拒否していることを確認します。`accept_ra_defrtr` 設定は、システムがルータ通知からのホップ制限設定を受け入れるかどうかを制御します。これを 0 に設定すると、ルータは送信パケットに対するデフォルトの IPv6 ホップ制限を変更できなくなります。

手順

- 1 `# grep [01] /proc/sys/net/ipv6/conf/*/accept_ra_defrtr|egrep "default|all"` コマンドを実行して、ホスト システムが IPv6 ルータのホップ制限設定を拒否することを確認します。
- 2 値が 0 に設定されていない場合は、IPv6 ルータ通知のホップ制限設定を拒否するようにホスト システムを構成します。
 - a `/etc/sysctl.conf` ファイルを開きます。
 - b 値が 0 に設定されていない場合は、次のエントリをファイルに追加するか、それに合わせて既存のエントリを更新します。値を 0 に設定します。

```
net.ipv6.conf.all.accept_ra_defrtr=0
net.ipv6.conf.default.accept_ra_defrtr=0
```

- c 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

IPv6 ルータ通知 autoconf 設定を拒否するようにホスト システムを構成する

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、ホスト システムで IPv6 ルータ通知 autoconf 設定が拒否されることを確認します。autoconf 設定は、ルータ通知によってシステムからインターフェイスにグローバル ユニキャストアドレスを割り当てることができるかどうかを制御します。

手順

- 1 `# grep [01] /proc/sys/net/ipv6/conf/*/autoconf|egrep "default|all"` コマンドを実行して、ホスト システムで IPv6 ルータ通知 autoconf 設定が拒否されるかどうかを確認します。

- 2 値が 0 に設定されていない場合は、IPv6 ルータ通知 autoconf 設定を拒否するようにホスト システムを構成します。

- a /etc/sysctl.conf ファイルを開きます。
- b 値が 0 に設定されていない場合は、次のエントリをファイルに追加するか、それに合わせて既存のエントリを更新します。値を 0 に設定します。

```
net.ipv6.conf.all.autoconf=0
net.ipv6.conf.default.autoconf=0
```

- c 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

IPv6 近隣要請を拒否するようにホスト システムを構成する

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、ホスト システムで、必要でない限り IPv6 近隣要請が拒否されることを確認します。目的のアドレスがネットワーク上で一意となるようにインターフェイスを構築するとき、グローバルおよびリンク ローカルを含むアドレスごとに近隣要請を何件送出するかを `dad_transmits` 設定で指定します。

手順

- 1 # `grep [01] /proc/sys/net/ipv6/conf/*/dad_transmits|egrep "default|all"` コマンドを実行して、ホスト システムで IPv6 近隣要請が拒否されるかどうかを確認します。
- 2 値が 0 に設定されていない場合は、IPv6 近隣要請を拒否するようにホスト システムを構成します。
 - a /etc/sysctl.conf ファイルを開きます。
 - b 値が 0 に設定されていない場合は、次のエントリをファイルに追加するか、それに合わせて既存のエントリを更新します。値を 0 に設定します。

```
net.ipv6.conf.all.dad_transmits=0
net.ipv6.conf.default.dad_transmits=0
```

- c 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

IPv6 の最大アドレス数を制限するためのホスト システムの構成

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、ホストで割り当てることができる IPv6 アドレスの最大数が制限されていることを確認します。この最大アドレス数の設定によって、各インターフェイスに割り当てることができるグローバルユニキャスト IPv6 アドレスの数が決定されます。デフォルトは 16 ですが、静的に構成されるグローバルアドレスとして必要な数を設定する必要があります。

手順

- 1 # `grep [1] /proc/sys/net/ipv6/conf/*/max_addresses|egrep "default|all"` コマンドを実行して、ホスト システムで割り当てることができる IPv6 アドレスの最大数が制限されているかどうかを確認します。

2 これらの値が 1 に設定されていない場合は、割り当てることができる IPv6 アドレスの最大数を制限するようにホスト システムを構成します。

a `/etc/sysctl.conf` ファイルを開きます。

b 次のエントリをファイルに追加するか、またはこれらの既存のエントリを更新します。値を 1 に設定します。

```
net.ipv6.conf.all.max_addresses=1
net.ipv6.conf.default.max_addresses=1
```

c 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

ポートおよびプロトコルの構成

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、不可欠ではないポートおよびプロトコルをすべて無効にします。

重要なシステム コンポーネントが本番環境で動作するために最小限必要な受信および送信ポートを vRealize Operations Manager コンポーネントで構成します。

最低限のデフォルト受信ポート

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、vRealize Operations Manager が本番で稼働するのに必要な受信ポートを構成します。

表 2-19. 最低限必要な受信ポート

ポート	プロトコル	コメント
443	TCP	vRealize Operations Manager ユーザー インターフェイスおよび vRealize Operations Manager 管理者インターフェイスへのアクセスに使用されます。
123	UDP	マスタ ノードへの Network Time Protocol (NTP) 同期のために vRealize Operations Manager によって使用されます。
5433	TCP	高可用性が有効になっているときに、グローバル データベース (vPostgreSQL) を複製するために、マスター ノードおよびレプリカ ノードによって使用されます。
7001	TCP	Cassandra によって、ノード間クラスタ通信をセキュリティ保護するために使用されます。 このポートはインターネットに公開しないでください。このポートをファイアウォールに追加します。
9042	TCP	Cassandra によって、ノード間でのクライアント関連通信をセキュリティ保護するために使用されます。 このポートはインターネットに公開しないでください。このポートをファイアウォールに追加します。
6061	TCP	クライアントが Gemfire ロケータに接続して分散型システムでサーバに対する接続情報を取得するときに使用します。また、クライアント (からの要求) を最も負荷の少ないサーバに送信するためにサーバの負荷を監視する目的にも使用されます。

表 2-19. 最低限必要な受信ポート（続き）

ポート	プロトコル	コメント
10000-10010	TCP と UDP	ユニキャスト UDP メッセージングとピアツーピア分散システムにおける TCP 障害検出に使用される GemFire Server 短期ポート範囲。
20000-20010	TCP と UDP	ユニキャスト UDP メッセージングとピアツーピア分散システムにおける TCP 障害検出に使用される GemFire ロケータ短期ポート範囲。

表 2-20. オプションの受信ポート

ポート	プロトコル	コメント
22	TCP	任意。Secure Shell (SSH)。運用環境では、ポート 22 や他のポート上での SSH サービスのリッスンは無効にし、ポート 22 は閉じる必要があります。
80	TCP	任意。443 にリダイレクトします。
3091-3101	TCP	Horizon View がインストールされている場合に、Horizon View から vRealize Operations Manager のデータにアクセスするために使用されます。

vRealize Operations Manager システムでの監査とロギング

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、vRealize Operations Manager システムでの監査とロギングを設定します。

監査とロギングの詳細な実装は、このドキュメントの対象外です。

中央のログ ホストにリモート ロギングを行うことで、ログを安全に保存できます。ログ ファイルを中央のホストに集めると、環境を単一のツールで簡単に監視できます。集計分析を実行し、インフラストラクチャ内の複数のエンティティに対する組織的攻撃を検索することもできます。安全な統合ログ サーバにロギングすると、ログの改ざんを防止でき、長期的な監査レコードを確保することもできます。

リモート ロギング サーバのセキュリティ保護

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、権限のあるユーザーのみがリモート ロギング サーバを構成でき、リモート ロギング サーバが安全であることを確認します。

ホスト マシンのセキュリティに違反する攻撃者は、自らの足跡を隠し、発見されることなくコントロールを維持するために、ログ ファイルを検索して改ざんを試みることがあります。

公認の NTP サーバの使用

すべてのホスト システムが同じ相対タイム ソースを使用しており、適切な現地オフセットを使用していることを確認します。協定世界時 (UTC) などの合意された時間標準に相対タイム ソースを関連付けることができます。

該当するログ ファイルを確認することで、侵入者のアクションを簡単に追跡し、関連付けることができます。設定時刻が正しくないと、攻撃検出のためにログ ファイルを検査して関連付けることが困難になり、また監査が不正確になる可能性があります。タイム ソースの外部にある 3 つ以上の NTP サーバを使用する方法、または 3 つ以上の外部タイム ソースから時刻を取得する複数のローカル NTP サーバを信頼済みネットワーク上に構成する方法があります。

クライアント ブラウザに関する考慮事項

セキュリティ上のベスト プラクティスとして、信頼できないクライアントやパッチが適用されていないクライアント、あるいはブラウザの拡張機能を使用するクライアントから vRealize Operations Manager を使用しないでください。

インストール

3

VMware vRealize Operations Manager をインストールし、環境のオブジェクト データ ROM を収集して分析する VMware vRealize Operations Manager ノードを 1 つ以上作成して構成します。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [インストールについて](#)
- [インストールの準備](#)
- [vRealize Operations Manager のインストール](#)
- [ノードの追加によるクラスタ サイズの変更](#)
- [vRealize Operations Manager のインストール後の考慮事項](#)
- [更新、移行、およびリストア](#)
- [アンインストール](#)

インストールについて

vRealize Operations Manager をインストールするときに、vRealize Operations Manager の監視対象になったことのない環境に製品をインストールすることができます。また、移行を行い、以前のバージョンの vRealize Operations Manager によって監視されている環境を取得し、vRealize Operations Manager の新しいコピーでその環境を監視できるようにすることも可能です。

移行は、インストール時に行うか、vRealize Operations Manager のコピーが本番環境で使用されるようになるまで延期することができます。言い換えると、vRealize Operations Manager を実行して新しい環境を監視するとともに、いつでも、以前の vRealize Operations Manager によって監視されていた環境を追加することができます。

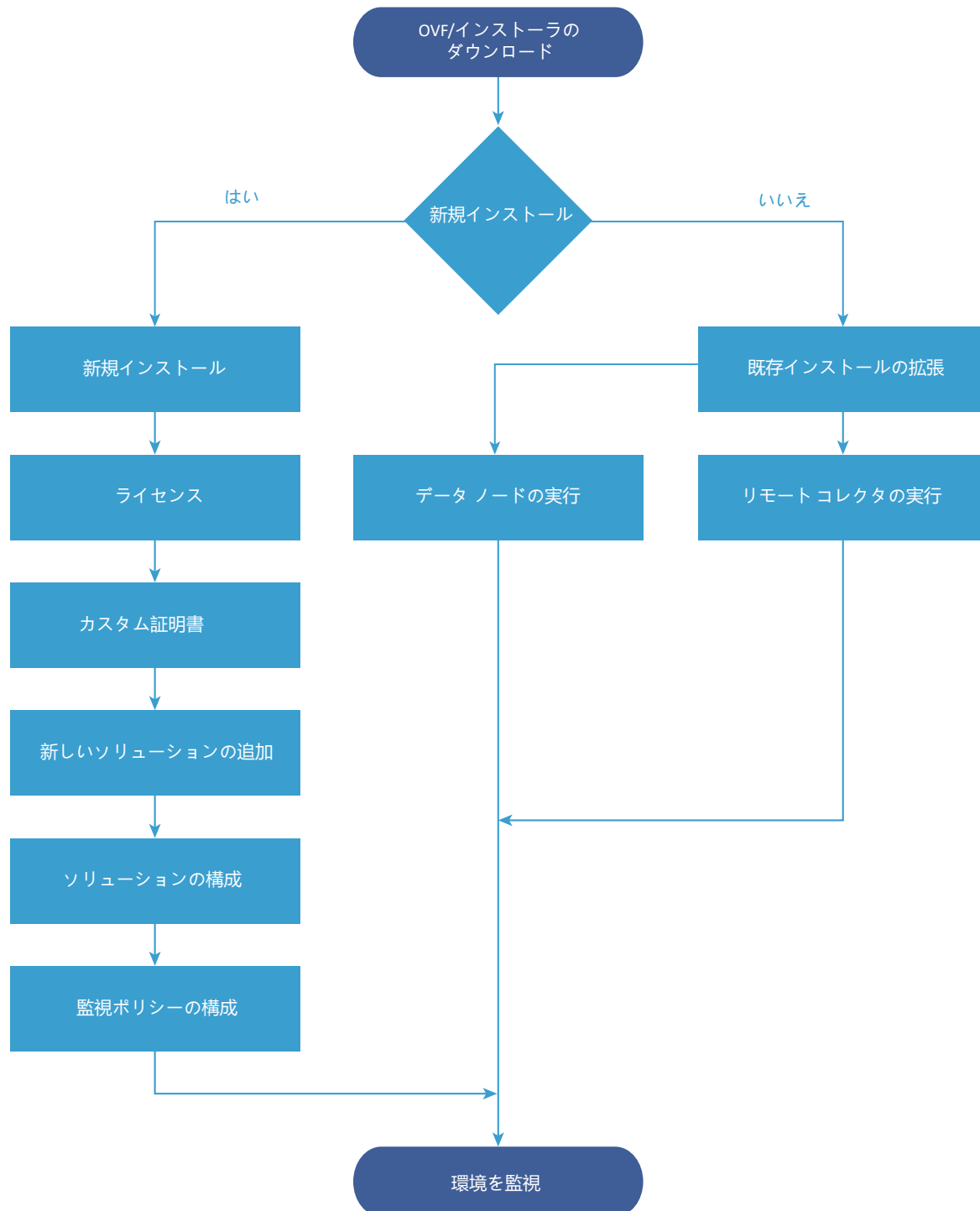
インストールの概要

vRealize Operations Manager のインストールを準備するには、環境を評価して、製品の使用方法に応じて十分な vRealize Operations Manager クラスタを導入できるようにします。

vRealize Operations Manager インストールのワークフロー

vRealize Operations Manager 仮想アプライアンスのインストールを行うには、クラスター ノードごとに 1 回 vRealize Operations Manager OVF またはインストーラをデプロイし、ロールに従って製品にアクセスしてクラスター ノードをセットアップし、ログインしてインストールを構成します。

図 3-1. vRealize Operations Manager のインストール アーキテクチャ



vRealize Operations Manager クラスタのサイジング

vRealize Operations Manager に必要なリソースは、監視と分析する環境の大きさ、収集するメトリックの数、データを保存する必要がある期間などによって変化します。

特定の環境のニーズを満たす CPU 要件、メモリ要件、ディスク要件を概括的に推測するのは困難です。収集されるオブジェクトの数と種類（インストールされているアダプタの数と種類を含む）、HA の存在、データ保持の期間、対象となる特定のデータ ポイント（シンプトム、変更など）の量など、可変要素は多数あります。

VMware は、サイズ計算を調整して複数バージョンの vRealize Operations Manager の使用データおよび変更に対応できるようにするために、vRealize Operations Manager のサイズ情報を予想して、ナレッジ ベース記事を維持発展させていきます。

ナレッジ ベース記事 2093783

ナレッジ ベース記事には、全体的な最大データが示されているほか、監視を予定しているオブジェクトとメトリックの数を入力できる計算シートがリンクされています。数を取得する手段として、vRealize Operations Manager 自体を利用する以下の高度な方法を採用するユーザーもいます。

- 1 このガイドに目を通して vRealize Operations Manager ノードのデプロイと構成の方法を理解する。
- 2 一時的な vRealize Operations Manager ノードをデプロイする。
- 3 1 つ以上のアダプタを構成し、この一時ノードが夜通し収集できるようにする。
- 4 一時ノード上の [クラスタ管理] ページにアクセスする。
- 5 このページの下部にある [アダプタ インスタンス] リストを参考として使用し、[ナレッジ ベース記事 2093783](#) から入手した適切なサイジング用のスプレッドシートにさまざまなアダプタ タイプのオブジェクト合計とメトリック合計を入力します。
- 6 スプレッドシートにあるサイジングについての推奨に基づいて vRealize Operations Manager クラスタをデプロイします。一時ノードにリソースとデータ ノードを追加するか、または初めからやり直すことによって、クラスタを構築できます。

アダプタが多数存在する場合は、必要に応じて、必要な合計になるまで一時ノードで処理をリセットして繰り返します。一時ノードには、通常、大規模エンタープライズからのすべての接続を同時に実行するだけの十分なキャパシティがありません。

別のサイジング方法として、自己監視を利用することもできます。クラスタのデプロイは最善の推測に基づいて行います。ただし、キャパシティがしきい値を下回るときにクラスタにノードまたはディスクを追加する時間が十分に与えられるアラートを作成する必要があります。このほか、しきい値に達した時点で電子メール通知を作成することもできます。

社内テストでは、8,000 台の仮想マシンを監視した、vRealize Operations Manager のシングル ノード vApp デプロイは、1 週間のうちにディスク容量を使い果たしました。

vRealize Operations Manager vApp ノードへのデータ ディスク領域の追加

収集したデータを格納する領域が少なくなった場合には、vRealize Operations Manager vApp ノードにデータ ディスク領域を追加します。

前提条件

- 分析クラスタ ノードのディスク サイズをメモします。ディスクを追加する場合は、分析クラスタ ノードにわたって均一のサイズを維持する必要があります。
- vRealize Operations Manager 管理インターフェイスを使用して、ノードをオフラインにします。
- vSphere クライアントのある vCenter Server システムに接続していること、および vSphere クライアントを使用してそのシステムにログインしていることを確認します。

手順

- 1 ノードの仮想マシンをシャットダウンします。
- 2 仮想マシンのハードウェア設定を編集し、以下のいずれかの作業を行います。
 - [ハード ディスク 2] のサイズを増やします。
仮想マシンにスナップショットがある場合、サイズを増やすことはできません。
 - 別のディスクを追加します。
- 3 ノードの仮想マシンをパワーオンします。

結果

パワーオン プロセスで、仮想マシンにより vRealize Operations Manager のデータ パーティションが拡張されます。

vRealize Operations ManagerLinux ノードへのデータ ディスク容量の追加

収集したデータを格納できる空き容量が少なくなった場合には、vRealize Operations ManagerLinux ノードにデータ ディスク容量を追加します。

次の例は、Linux システムの場合です。

前提条件

分析クラスタ ノードのディスク サイズをメモします。ディスクを追加する場合は、分析クラスタ ノードにわたって均一のサイズを維持する必要があります。

手順

- 1 新しいディスクをシステムに追加し、必要に応じてディスクをパーティション化し、フォーマットします。
- 2 vRealize Operations Manager 管理インターフェイスを使用して、クラスタをオフラインにします。
- 3 `vmware-casa` サービスを停止します。
- 4 `/storage/db` のコンテンツを新しいディスク上のディレクトリに移動します。
- 5 新しいディレクトリから `/storage/db` へのシンボリック リンクを作成します。これにより、`/storage/db` が新しいディスクを参照するようになります。
- 6 `vmware-casa` サービスを開始します。
- 7 クラスタをオンラインにします。

環境の複雑さ

vRealize Operations Manager を展開するときに監視対象のオブジェクトの数と性質が複雑になることがあり、この場合はプロフェッショナル サービス契約を推奨します。

複雑性レベル

システムの観点で見ると、すべての企業には異なるシステムがあり、人員配置の経験レベルも異なります。以下の表に、自身が複雑性の尺度のどこに位置しているかを判断することに役立つ、色分けしたガイドを示します。

■ 緑

インストールに含まれている条件は、ほとんどのユーザーが理解できて、補助なしに作業ができるものだけです。展開を続行してください。

■ 黄色

インストールには、ユーザーの経験レベルによっては、展開の支援が妥当と考えられる条件が含まれます。続行する前に、担当者に相談して、プロフェッショナル サービスの使用を検討してください。

■ 赤

インストールには、プロフェッショナル サービス契約を強く推奨する条件が含まれています。続行する前に、担当者に相談して、プロフェッショナル サービスの使用を検討してください。

これらの色分けされたレベルは、厳格なルールではありません。vRealize Operations Manager の展開時には、製品の経験を考慮する必要がありますが、vRealize Operations Manager を使用するにつれて、またプロフェッショナル サービスと連携することで、製品の経験を積むことができます。

表 3-1. 複雑性に影響する展開条件

複雑性レベル	現在または新規の展開条件	補足事項
緑	1 つの vRealize Operations Manager デプロイのみを実行しています。	通常、1 つだけのインスタンスは vRealize Operations Manager での作成が容易です。
緑	展開には、 VMware Solutions Exchange Web サイトの互換性ガイドでは緑にリストされる管理パックが含まれています。	互換性ガイドには、vRealize Operations Manager のサポート対象の管理パックが、互換性がある 5.x の管理パックか、このリリースのために設計された新しい管理パックかが示されています。場合によっては、両方の管理パックが機能しても結果は異なることがあります。いずれにせよ、関連付けられたデータ、ダッシュボード、アラートなどが期待どおりに表示されるよう、ユーザーには構成を調整するための支援が必要な場合があります。 ソリューション、管理パック、アダプタ、およびプラグインという用語は、ほとんど区別せずに使用されていることに注意してください。
黄色	vRealize Operations Manager の複数のインスタンスを実行しています。	複数のインスタンスは、通常、拡張や演算子の使用パターンに対処するために使用されます。

表 3-1. 複雑性に影響する展開条件（続き）

複雑性レベル	現在または新規の展開条件	補足事項
黄色	展開には、 VMware Solutions Exchange Web サイトの互換性ガイドでは黄色にリストされる管理パックが含まれています。	互換性ガイドには、vRealize Operations Manager のサポート対象の管理パックが、互換性がある 5.x の管理パックか、このリリースのために設計された新しい管理パックかが示されています。場合によっては、両方の管理パックが機能しても結果は異なることがあります。いずれにせよ、関連付けられたデータ、ダッシュボード、アラートなどが期待どおりに表示されるよう、ユーザーには構成を調整するための支援が必要な場合があります。
黄色	vRealize Operations Manager リモート コレクタ ノードを展開しています。	リモート コレクタ ノードはデータを収集しますが、データの保存と処理は分析クラスタに任せます。
黄色	複数ノードの vRealize Operations Manager クラスタを展開しています。	複数ノードは、通常、vRealize Operations Manager の監視機能をスケール アウトするために使用されます。
黄色	新しい vRealize Operations Manager インスタンスには、Linux ベースの展開が含まれます。	Linux の展開は、vApp の展開ほど一般的ではなく、多くの場合、特別な考慮が必要になります。
黄色	vRealize Operations Manager インスタンスは、高可用性 (HA) を使用します。	高可用性とそのノード フェイルオーバー機能は、複数ノードの独特な機能で、理解する際にさらに支援を必要とする場合があります。
黄色	vRealize Operations Manager の新機能や変更された機能および環境内でのそれらの使用法を理解するうえで支援が必要です。	vRealize Operations Manager は、ポリシー、アラート、コンプライアンス、カスタム レポート、バッジなどの領域が vCenter Operations Manager とは異なっています。さらに、vRealize Operations Manager は 1 つの統合されたインターフェイスを使用します。
赤	複数の vRealize Operations Manager インスタンスを実行し、そのうちの少なくとも 1 つには仮想デスクトップ インフラストラクチャ (VDI) が含まれています。	複数のインスタンスは、通常、拡張や演算子の使用パターンに対処するために使用されます。そうでない場合は、個別の VDI（V4V 監視）と非 VDI インスタンスが必要です。
赤	展開には、 VMware Solutions Exchange Web サイトの互換性ガイドでは赤にリストされる管理パックが含まれています。	互換性ガイドには、vRealize Operations Manager のサポート対象の管理パックが、互換性がある 5.x の管理パックか、このリリースのために設計された新しい管理パックかが示されています。場合によっては、両方の管理パックが機能しても結果は異なることがあります。いずれにせよ、関連付けられたデータ、ダッシュボード、アラートなどが期待どおりに表示されるよう、ユーザーには構成を調整するための支援が必要な場合があります。
赤	複数の vRealize Operations Manager クラスタを展開しています。	複数のクラスタは、通常、業務や機能を分離するために使用されます。
赤	現在の vRealize Operations Manager デプロイをインストールするには、プロフェッショナル サービス契約が必要です。	お使いの環境が、以前のバージョンでプロフェッショナル サービス契約を正当化するのに十分複雑だった場合は、同じ条件が引き続き適用され、このバージョンにも同様の契約が保証される可能性があります。
赤	プロフェッショナル サービスによって vRealize Operations Manager デプロイがカスタマイズされました。カスタマイズの例には、特殊な統合、スクリプティング、非標準の構成、複数レベルのアラート、カスタム レポートなどが含まれます。	お使いの環境が、以前のバージョンでプロフェッショナル サービス契約を正当化するのに十分複雑だった場合は、同じ条件が引き続き適用され、このバージョンにも同様の契約が保証される可能性があります。

vRealize Operations Manager クラスタ ノードについて

すべての vRealize Operations Manager クラスタは、マスター ノード、高可用性のためのオプションのレプリカ ノード、オプションのデータ ノード、およびオプションのリモート コレクタ ノードで構成されます。

vRealize Operations Manager をインストールする場合、vRealize Operations Manager vApp デプロイまたは Linux インストーラを使用して、ロールなしのノードを作成します。ノードが作成され、名前と IP アドレスが取得された後、管理インターフェイスを使用して、ロールに従ってそれらを構成できます。

ロールなしのノードは、一度にまとめて作成したり、必要に応じて作成したりできます。一般に、環境が大きくなるにつれてノードを必要に応じて追加し、vRealize Operations Manager をスケール アウトして環境を監視します。

vRealize Operations Manager 分析クラスタは次のノード タイプで構成されます。

マスター ノード

vRealize Operations Manager の必須の初期ノードです。他のノードはすべてマスター ノードにより管理されます。

単一ノード インストールでは、マスター ノードが自身を管理し、自身にアダプタがインストールされ、すべてのデータ収集および分析を行います。

データ ノード

大規模なデプロイでは、追加のデータ ノードにアダプタがインストールされ、収集および分析を行います。

大規模なデプロイでは通常、データ ノードにのみアダプタがあり、マスター ノードおよびレプリカ ノードのソースはクラスタ管理専用になります。

レプリカ ノード

vRealize Operations Manager の高可用性 (HA) を有効にするには、クラスタのデータ ノードをマスター ノードのレプリカに変換する必要があります。

次のノード タイプは vRealize Operations Manager クラスタのメンバーですが、分析クラスタの一部ではありません。

リモート コレクタ ノード

分散展開では、ファイアウォールの操作、リモート データ ソースとのやりとり、データ センター間の帯域幅の低減、または vRealize Operations Manager 分析クラスタ上の負荷の低減を行うことができるリモート コレクタ ノードが必要になる場合があります。 リモート コレクタは、インベントリ用のオブジェクトの収集のみを行います。データを保管したり、分析を実行したりしません。また、リモート コレクタ ノードは、クラスタの残りのノードとは異なるオペレーティング システムにインストールすることもできます。

vRealize Operations Manager リモート コレクタ ノードについて

リモート コレクタ ノードは追加のクラスタ ノードです。これにより、vRealize Operations Manager はインベントリに、より多くのオブジェクトを収集して監視することができます。データ ノードと異なり、リモート コレクタ ノードは vRealize Operations Manager のコレクタ ロールを含むのみであり、データを保管したり、分析機能を実行したりしません。

通常、リモート コレクタ ノードは、ファイアウォールの操作、データセンター間の帯域幅の低減、リモート データソースへの接続、または vRealize Operations Manager 分析クラスタ上の負荷の低減を行うことを目的としてデプロイされます。

リモート コレクタは、ネットワークに問題がある間はデータをバッファしません。リモート コレクタと分析クラスタ間の接続が失われた場合、リモート コレクタはその間に発生したデータ ポイントを格納しません。その後接続が回復すると、vRealize Operations Manager は接続喪失時の関連イベントを監視または分析に遡及的には組み入れません。

リモート コレクタ ノードを追加するには、1 つ以上のマスター ノードが必要です。

vRealize Operations Manager の高可用性について

vRealize Operations Manager では、高可用性 (HA) がサポートされています。HA により vRealize Operations Manager マスター ノードのレプリカが作成され、分析クラスタをノードの喪失から保護します。

HA により、マスター ノードで保管されているデータの 100% がレプリカ ノードで常にバックアップされます。HA を有効にするには、マスター ノードに加えて、少なくとも 1 つのデータ ノードがデプロイされている必要があります。

- HA は、ディザスタ リカバリのメカニズムではありません。HA により、分析クラスタは 1 つのノードのみの喪失から保護され、1 つの喪失のみがサポートされるため、ノードの分離や障害ゾーンの構築の試行に際して複数の vSphere クラスタ間でノードを共有できません。
- HA が有効である場合、何らかの理由でマスターに障害が発生した場合に、レプリカはマスターが提供するすべての機能を引き継ぐことができます。マスターに障害が発生すると、レプリカへのフェイルオーバーが自動的に行われ、操作とデータ収集の再開までに 2 ～3 分の vRealize Operations Manager ダウンタイムのみを要します。

マスター ノードの問題でフェイルオーバーが発生すると、レプリカ ノードがマスター ノードになり、クラスタはデグレード モードで実行します。デグレード モードから脱するには、次のいずれかの手順を実行してください。

- マスター ノードに関わる問題を修正して、HA モードに戻ります。マスター ノードは、HA 有効クラスタから抜けると、手動での介入なしではクラスタに再参加しません。したがって、ダウンしたノードで vRealize Operations 分析プロセスを再起動して、ノードの役割をレプリカに変更し、クラスタに再参加します。
- 1 つのデータ ノードを新しいレプリカ ノードに変換して、障害が発生した古いマスター ノードを削除します。削除されたマスター ノードは、修理して vRealize Operations Manager に再度追加することはできません。
- HA を無効にして非 HA 動作に変更し、障害が発生した古いマスター ノードを削除します。削除されたマスター ノードは、修理して vRealize Operations Manager に再度追加することはできません。
- 管理インターフェイスで、HA レプリカ ノードが引き継がれて新しいマスター ノードになった後、以前のオフラインのマスター ノードをクラスタから削除できません。さらに、以前のノードが引き続きマスター ノードとしてリストされます。表示を更新してノードの削除を有効にするには、ブラウザを更新します。

- HA が有効である場合、1つのデータ ノードが失われても、データを失うことなくクラスタを継続できます。ただし、HA では、どのような場合でも同時に1つのノードの喪失のみが保護されるため、データ ノードとマスター/レプリカ ノードの同時喪失、または2つ以上のデータ ノードの喪失はサポートされません。その代わりに、vRealize Operations Manager の HA では、アプリケーション レベルの可用性を確保するための追加のアプリケーション レベルのデータ保護が提供されます。
- HA が有効である場合、vRealize Operations Manager のキャパシティおよび処理能力は半分に低減されます。これは、HA によりクラスタ全体のデータの冗長コピーが作成され、マスター ノードのレプリカ バックアップも作成されるためです。vRealize Operations Manager クラスタ ノードの数およびサイズを計画する際は、HA を使用する可能性についても考慮してください。 [vRealize Operations Manager クラスタのサイジング](#) を参照してください。
- HA を有効化する場合、分析クラスタ ノードを個別のホスト上で展開し、冗長性と分離を確保してください。ノードを vSphere クラスタ内の特定のホスト上に保持する非アフィニティ ルールを使用する方法があります。

ノードが分離された状態で維持できない場合、HA を有効にするべきではありません。ホストに障害が発生すると、1つ以上のノードが失われます。これはサポートされず、vRealize Operations Manager 全体が使用不可能になります。

逆もまた真です。HA を使用しない場合、複数のノードを同じホスト上で保持でき、この場合も上記と同様です。HA を使用しない場合、1つでもノードが失われると vRealize Operations Manager 全体が使用不可能になります。
- データ ノードをパワーオフして、仮想マシンのネットワーク設定を変更すると、データ ノードの IP アドレスが影響を受けます。その時点で、HA クラスタにアクセスできなくなり、すべてのノードがステータス「Analytics を待機しています」になります。固定 IP アドレスを使用していることを確認してください。
- 1つ以上の vCenter アダプタを持ち、HA 有効クラスタからデータを収集するように構成したノードを削除すると、そのノードに関連した vCenter アダプタは収集を停止します。ノードを削除する前に、別のノードに接続するようにアダプタ構成を変更してください。
- 管理ユーザー インターフェイスに表示されるリソース キャッシュ カウントは、アクティブ オブジェクトのみの合計ですが、インベントリ エクスプローラにはすべてのオブジェクトが表示されます。このため、HA 有効クラスタからノードを削除して、vCenter アダプタでデータ収集と各ノードの再調整をできるようにすると、インベントリ エクスプローラには、管理ユーザー インターフェイスの表示とは異なるオブジェクト数が表示されません。



高可用性用のレプリカ ノードの作成

(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_vrops_create_replica_node_ha)

インストールの準備

インストールの準備では、こうしたベスト プラクティス、プラットフォーム、およびクラスタの要件について確認します。

vRealize Operations Manager のプラットフォームの要件

vRealize Operations Manager を任意のプラットフォームにインストールする場合は、次のハードウェアとソフトウェアが必要です。

vRealize Operations Manager プラットフォーム要件（Linux の場合）

vRealize Operations Manager を Linux 上にインストールする場合は、次のハードウェアとソフトウェアが必要です。

CPU およびメモリの要件

vRealize Operations Manager をインストールするためには、次の CPU とメモリが搭載されている必要があります。

表 3-2. vRealize Operations Manager Linux 仮想 CPU およびメモリの要件

ノード サイズ	仮想 CPU とメモリ
小	4 vCPU
	16GB vRAM
中程度	8 vCPU
	32 GB vRAM
大	16 vCPU
	48 GB vRAM
標準のリモート コレクタ	2 vCPU
	4 GB vRAM
大きなリモート コレクタ	4 vCPU
	16GB vRAM

ディスク要件

vRealize Operations Manager のためのディスク領域は、正常にインストールするためにアプリケーションがどれだけ領域を必要とするかによってのみ決まるわけではありません。他に、データ収集要件や保持要件も考慮する必要があります（これらの要件はサイトによって異なる可能性がある）。

新しいシングルノード クラスターのデフォルトのディスク要件は 250 GB です。このため、ディスク キャパシティ不足を防ぐには、たとえば自分監視に vRealize Operations Manager を使用し、必要に応じてディスクまたはデータ ノードを追加するという方法をとることができます。

ソフトウェア バージョン要件

vRealize Operations Manager をインストールするためには、次の Linux バージョンが使用されている必要があります。

- バージョン 6.5 以降の Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 6

vRealize Operations Manager に必要な Linux パッケージ

vRealize Operations Manager の製品インストーラを実行する前に、特定の Linux パッケージがインストールされている必要があります。また、vRealize Operations Manager によりインストールされる追加パッケージもあります。

必要な Linux パッケージ

vRealize Operations Manager インストーラを実行する前に、次のパッケージが存在している必要があります。さらに、パッケージが Linux のデフォルトである場合、インストール後もそのパッケージを削除しないようにする必要があります。

- bash
- chkconfig
- coreutils
- db4
- expat
- glibc
- initscripts
- libaio
- libselinux
- libstdc++
- libuuid
- mailcap
- openldap
- pcre
- python
- sudo
- redhat-logos
- rpm-libs
- shadow-utils
- zlib

vRealize Operations Manager がインストールするパッケージ

vRealize Operations Manager は次のパッケージの独自コピーをインストールします。

- apr
- apr-util
- apr-util-ldap

- httpd
- httpd-tools
- mod_ssl
- openssl
- python
- VMware-Postgres-lib
- VMware-Postgres-osslibs
- VMware-Postgres-osslibs-server
- VMware-Postgres-server

要件

vRealize Operations Manager でノードを作成する場合、重要な要件について確認する必要があります。

vRealize Operations Manager での IPv6 の使用

vRealize Operations Manager では、将来的に IPv4 から置き換わることになるネットワーク アドレス指定規則である Internet Protocol version 6 (IPv6) をサポートしています。vRealize Operations Manager で IPv6 を使用するには、いくつかの制約を守る必要があります。

IPv6 の使用

- リモート コレクタを含めたすべての vRealize Operations Manager クラスタ ノードが IPv6 アドレスを持つ必要があります。IPv6 と IPv4 の混在はできません。
- リモート コレクタを含めたすべての vRealize Operations Manager クラスタ ノードが vApp または Linux ベースであることが必要です。
- グローバル IPv6 アドレスのみを使用してください。リンクローカル アドレスはサポートされません。
- DHCP を使用しているノードがある場合は、DHCP サーバが IPv6 をサポートするよう構成されていることが必要です。
- DHCP がサポートされるのはデータ ノードとリモート コレクタのみです。マスタ ノードとレプリカ ノードには引き続き固定アドレスが必要です。また、IPv4 についても同様です。
- DNS サーバが IPv6 をサポートするよう構成されていることが必要です。
- ノードをクラスタに追加する場合は、マスタ ノードの IPv6 アドレスを必ず入力してください。
- VMware vCenter インスタンスを vRealize Operations Manager 内で登録する場合、vCenter も IPv6 を使用している場合は、VMware vCenter Server システムの IPv6 アドレスを角括弧で囲ってください。

例：[2015:0db8:85a3:0042:1000:8a2e:0360:7334]

vRealize Operations Manager が IPv6 を使用している場合でも、vCenter Server が引き続き IPv4 アドレスを持っている可能性があることにご注意ください。その場合、vRealize Operations Manager に角括弧は不要です。

- IPv4 と IPv6 をともにサポートする環境へ Endpoint Operations Management エージェントを登録することはできません。登録を試みると、次のメッセージが表示されます。

```
「Connection failed.Server may be down (or wrong IP/port were used).Waiting for 10 seconds before retrying.」
```

クラスタ要件

vRealize Operations Manager を構成するクラスタ ノードを作成する場合、適合する必要がある一般的な要件があります。

一般的な vRealize Operations Manager クラスタ ノードの要件

それぞれの環境でノードを作成する場合、従う必要がある一般的な要件がいくつかあります。

一般的な要件

- vRealize Operations Manager のバージョン。すべてのノードが同じ vRealize Operations Manager バージョンを実行する必要があります。

たとえば、バージョン 6.1 のデータ ノードを vRealize Operations Manager 6.2 ノードのクラスタに追加することはできません。

- 分析クラスタのデプロイ タイプ分析クラスタでは、すべてのノードが同じ種類のデプロイ（vApp または Linux）である必要があります。

同じ分析クラスタ内に vApp、Linux ノードを混在させないようにしてください。

- リモート コレクタのデプロイ タイプリモート コレクタ ノードは、分析クラスタ ノードと同じデプロイ タイプである必要はありません。

デプロイ タイプが異なるリモート コレクタを追加する場合は、次のクラスタがサポートされています。

- vApp 分析クラスタ
- Linux 分析クラスタ

- 分析クラスタ ノードのサイジング分析クラスタでは、CPU、メモリ、およびディスクのサイズがすべてのノードで同一である必要があります。

マスター、レプリカ、およびデータのノードのサイズは均一である必要があります。

- リモート コレクタ ノードのサイジングリモート コレクタ ノードのサイズは、互いに異なっても、分析クラスタ ノードの均一のサイズと異なっても問題ありません。

- 地理的近接分析クラスタ ノードを異なる vSphere クラスタに配置できますが、それらのノードは地理的に同じ場所に置く必要があります。

地理的に異なる場所に置くことはサポートされていません。

- 仮想マシンのメンテナンスノードが仮想マシンである場合は、直接 vRealize Operations Manager ソフトウェアを更新することによってのみ、仮想マシン ソフトウェアを更新できます。

たとえば、vRealize Operations Manager の外から vSphere にアクセスして VMware Tools を更新することはサポートされていません。

- 冗長性と分離 HA を有効にする場合は、分析クラスタ ノードを異なるホスト上に配置します。 [vRealize Operations Manager の高可用性について](#) を参照してください。
- ファイアウォールの背後にリモート コレクタをデプロイできます。リモート コレクタと分析ノードの間で NAT は使用できません。

ソリューションの要件

ソリューションによっては、vRealize Operations Manager 自体の要件以上の要件が適用されることがあります。たとえば、Horizon View 用の vRealize Operations Manager には、リモート コレクタに対する特定のサイジングのガイドラインがあります。

ソリューションのドキュメントを参照して、ソリューションをインストールする前に追加の要件を確認してください。ソリューション、管理バック、アダプタ、およびプラグインという用語は、ほとんど区別せずに使用されていることに注意してください。

vRealize Operations Manager でのネットワーク ポートの使用方法

vRealize Operations Manager は、VMware vCenter Server システムおよび vRealize Operations Manager コンポーネントとの通信にネットワーク ポートを使用します。

Linux の展開では、ポートを手動で確認または構成する必要があります。

重要： vRealize Operations Manager では、サーバ ポートをカスタマイズすることはできません。

ネットワーク ポート

ファイアウォールを構成して、次のポートを双方向トラフィック用に開きます。

表 3-3. vRealize Operations Manager のネットワーク ポート アクセス要件

ポート番号	説明
22 (TCP)	SSH が vRealize Operations Manager クラスタにアクセスするときに使用します。
80 (TCP)	ポート 443 にリダイレクトされます。
123 (UDP)	マスタ ノードへの Network Time Protocol (NTP) 同期のために vRealize Operations Manager によって使用されます。
443 (TCP)	vRealize Operations Manager 製品ユーザー インターフェイスおよび vRealize Operations Manager 管理者インターフェイスへのアクセスに使用されます。
10443 (TCP)	vCenter ServerInventory Service と通信するために vRealize Operations Manager により使用されます。
3091–3094 (TCP)	Horizon View (V4V) がインストールされている場合に、vRealize Operations Manager のデータに V4V からアクセスするときに使用されます。
5433 (TCP)	高可用性が有効の場合に、マスタおよびレプリカ ノードによってグローバル データベースのレプリケートに使用されます。
6061 (TCP)	クライアントが Gemfire ロケータに接続して分散型システムでサーバに対する接続情報を取得するときに使用します。また、クライアント（からの要求）を最も負荷の少ないサーバに送信するためにサーバの負荷を監視する目的にも使用されます。

表 3-3. vRealize Operations Manager のネットワーク ポート アクセス要件 (続き)

ポート番号	説明
7001 (TCP)	Cassandra によって、ノード間クラスタ通信をセキュリティ保護するために使用されます。
9042 (TCP)	Cassandra によって、ノード間のクライアント関連通信をセキュリティ保護するために使用されます。
10000–10010 (TCP および UDP)	ユニキャスト UDP メッセージングとピアツーピア分散システムにおける TCP 障害検出に使用される GemFire Server 短期ポート範囲。
20000–20010 (TCP および UDP)	ユニキャスト UDP メッセージングとピアツーピア分散システムにおける TCP 障害検出に使用される GemFire ロケータ短期ポート範囲。

ローカルホスト ポート

ローカルホストが次のポートにアクセスできるポート構成であることを確認します。サイトのポリシーで何らかの規制がある場合は、これらのポートへのホスト外からのアクセスを制限することを検討してください。

表 3-4. vRealize Operations Manager のローカルホスト ポート アクセス要件

ポート番号	説明
1099	GemFire ロケータ Java Management Extensions (JMX) マネージャ
9004	分析 JMX マネージャ
9008	Cassandra データベース JMX マネージャ
9160	Cassandra Thrift クライアント ポート

vRealize Operations Manager クラスタ ノードのネットワーク要件

vRealize Operations Manager を構成するクラスタ ノードを作成する場合、ノード間通信および正常な動作のために、ネットワーク環境で関連するセットアップを行うことが重要です。

ネットワーク要件

重要： vRealize Operations Manager の分析クラスタ ノード間では、互いに頻繁な通信が必要です。通常は、基礎である vSphere アーキテクチャによって、その通信に影響する一部の vSphere アクションの条件が作成されています。その例として、vMotion、Storage vMotion、HA イベント、および DRS イベントなどがありますが、それらに限定されません。

- マスター ノードとレプリカ ノードでは、固定 IP アドレスを使用するか、または固定 IP アドレスと共に完全修飾ドメイン名 (FQDN) を指定する必要があります。

データ ノードとリモート コレクタ ノードでは、DHCP (Dynamic Host Control Protocol) を使用できません。

- リモート コレクタ ノードを含むすべてのノードに対して、逆引き DNS で FQDN (ノードの現在のホスト名) を取得できます。

OVF によってデプロイされたノードでは、デフォルトで、取得された FQDN がホスト名に設定されます。

- リモート コレクタを含むすべてのノードでは、IP アドレスまたは FQDN で双方向にルーティング可能である必要があります。

- IP アドレスまたは FQDN による双方向の通信を妨げる、NAT（ネットワーク アドレス変換）、ロード バランサ、ファイアウォール、またはプロキシを使用して分析クラスタ ノードを分離することのないようにしてください。
- 分析クラスタ ノードは同じホスト名を持つことはできません。
- 分析クラスタ ノードは、同じデータセンター内に配置し、同じローカル エリア ネットワーク (LAN) に接続する必要があります。
- 分析クラスタ ノードは、同じ レイヤー 2 ネットワーク上およびサブネット上に配置します。
延伸されたレイヤー 2 ネットワークおよびルーティングされたレイヤー 3 ネットワークはサポートされていません。
- ネットワーク パーティションやネットワーク パフォーマンスの低下が発生する可能性があるため、レイヤー 2 ネットワークをサイト間で延長しないでください。
- 分析クラスタ ノード間の片道遅延は 5 ミリ秒以下である必要があります。
- 分析クラスタ ノード間のネットワーク バンド幅は 1 Gbps 以上である必要があります。
- 分析クラスタ ノードは、ワイド エリア ネットワーク (WAN) を介して分散させないでください。
WAN、リモートまたは別のデータセンター、または地理的に異なる場所からデータを収集するにはリモート コレクタを使用します。
- リモート コレクタでは、ルーティングされたネットワークを介した接続はサポートされていますが、NAT を介した接続はサポートされていません。
- いずれのクラスタ ノードもホスト名にアンダースコアを含めないでください。

vRealize Operations Manager クラスタ ノードのベストプラクティス

vRealize Operations Manager を構成するクラスタ ノードを作成する場合、vRealize Operations Manager のパフォーマンスと信頼性を向上させるための追加のベストプラクティスがあります。

ベスト プラクティス

- vRealize Operations Manager 分析クラスタ ノードは単一データセンターの同じ vSphere クラスタに展開し、ノードを一度に 1 つだけクラスタに追加して、これが完了してから別のノードを追加するようにします。
- 高度に統合された vSphere に分析クラスタ ノードをデプロイする場合、最適なパフォーマンスを得るにはリソース予約が必要になることがあります。
CPU の準備時間と相互停止を確認することによって、物理 CPU に対する仮想 CPU の比率がパフォーマンスに影響しているかどうかを判断します。
- 分析クラスタ ノードを同じタイプのストレージ階層にデプロイします。
- 分析クラスタ ノードのサイジング要件とパフォーマンス要件に適合し続けるために、Storage DRS 非アフィニティ ルールを適用して、各ノードが異なるデータストア上に置かれるようにします。
- 意図しないノードの移行を避けるために、Storage DRS を手動に設定します。

- 分析クラスタ ノード間でパフォーマンスのバランスを取るために、同じプロセッサ周波数の ESXi ホストを使用します。周波数および物理コア数が混在していると、分析クラスタのパフォーマンスに影響する可能性があります。
- パフォーマンスの低下を回避するために、大規模で実行する場合、vRealize Operations Manager 分析クラスタ ノードで保証済みリソースが必要です。vRealize Operations Manager ナレッジベースには、オブジェクトの数、監視するメトリック、HA の使用などに基づいてリソースを計算するサイズ設定スプレッドシートが含まれます。サイズを設定するときは、リソースを少なく割り当てるのではなく、多く割り当てることをお勧めします。

詳細については、[ナレッジ ベースの記事 2093783](#) を参照してください。

- ノードからロールが変更される場合があるため、「マスター」、「データ」、「レプリカ」のようなマシン名は使用しないでください。変更されるロールの例には、データ ノードを HA のレプリカに変える場合や、レプリカにマスター ノード ロールを引き継がせる場合があります。
- NUMA の配置は、vRealize Operations Manager 6.3 以降で削除されました。OVA ファイルの NUMA 設定に関する手順は次のとおりです。

表 3-5. NUMA 設定

操作	説明
vRealize Operations Manager クラスタのステータスをオフラインに設定します。	<ol style="list-style-type: none"> 1 vRealize Operations Manager クラスタをシャットダウンします。 2 クラスタを右クリックし、[設定の編集] - [オプション] - [詳細] をクリックします。 3 [構成パラメータ] をクリックします。vSphere Client で、仮想マシンごとにこの手順を繰り返します。
NUMA 設定の削除	<ol style="list-style-type: none"> 1 構成パラメータで、設定 <code>numa.vcpu.preferHT</code> を削除し、[OK] をクリックします。 2 [OK] をクリックします。 3 vRealize Operations クラスタ内のすべての仮想マシンについてこの手順を繰り返します。 4 クラスタをパワーオンします。

注： 適切なリソースの可用性と継続的な製品のパフォーマンスを確保するために、CPU 使用率、CPU 準備状況、および CPU 競合時間を確認して、vRealize Operations のパフォーマンスを監視します。

vRealize Operations Manager のインストール

vRealize Operations Manager ノードは仮想アプライアンス (vApp) および Linux ベースのシステムです。

vRealize Operations Manager の展開

vRealize Operations Manager は、1 つ以上のノードが 1 つのクラスタとして構成されます。このノードを作成するには、それぞれの環境に合わせて vRealize Operations Manager をダウンロードおよびインストールする必要があります。

一般に、vRealize Operations Manager 製品をインストールするには 2 つの方法があります。

OVF ファイル

vRealize Operations Manager は、クラスタ内の 1 つ以上のノードで構成されます。ノードを作成するには、vSphere クライアントを使用して、クラスター ノードごとに 1 回ずつ vRealize Operations Manager 仮想マシンをダウンロードして展開します。

インストーラ

vRealize Operations Manager は、クラスタ内の 1 つ以上のノードで構成されます。ノードを作成するには、Linux 用の vRealize Operations Manager Enterprise インストーラをダウンロードして実行します。

OVF をデプロイすることによるノードの作成

クラスタで、vRealize Operations Manager は 1 つ以上のノードから構成されます。ノードを作成するには、vSphere クライアントを使用して、クラスター ノードごとに 1 回ずつ vRealize Operations Manager 仮想マシンをダウンロードして展開します。

前提条件

- OVF テンプレートをインベントリにデプロイする権限を有することを確認します。
- ESXi ホストがクラスタの一部となっている場合は、クラスタ内で DRS を有効化します。ESXi ホストが非 DRS クラスタに属している場合は、すべてのリソース プール機能が無効化されます。
- このノードがマスタ ノードとなる場合は、仮想マシンの固定 IP アドレスを予約し、関連付けられたドメイン ネーム サーバ、デフォルト ゲートウェイ、ネットワーク マスク値を把握しておきます。

インストール後は IP アドレスの変更が困難なため、IP アドレスをそのまま使用するよう計画してください。

- このノードが後で HA レプリカ ノードになるデータ ノードとなる場合は、仮想マシンの固定 IP アドレスを予約し、関連付けられたドメイン ネーム サーバ、デフォルト ゲートウェイ、ネットワーク マスク値を把握しておきます。

また、HA ノードの配置について「[vRealize Operations Manager の高可用性について](#)」の説明を読んで理解を深めておきます。

- デプロイされた仮想マシンの名前が英字 (a~z) または数字 (0~9) で開始および終了し、英字、数字、またはハイフン (-) だけが含まれるように、ドメインとマシンの命名を事前に計画してください。ホスト名または完全修飾ドメイン名 (FQDN) には、アンダースコア (_) を含めることはできません。

インストール後は名前の変更が困難なため、名前を保持するよう計画してください。

詳細については、Internet Engineering Task Force によるホスト名の仕様を確認してください (www.ietf.org を参照)。

- ノードの配置とネットワークは、「[一般的な vRealize Operations Manager クラスタ ノードの要件](#)」と「[vRealize Operations Manager クラスタ ノードのネットワーク要件](#)」で説明されている要件を満たすようにあらかじめ計画しておきます。
- vRealize Operations Manager クラスタで IPv6 アドレスを使うことになる場合は、「[vRealize Operations Manager での IPv6 の使用](#)」の説明を読んで IPv6 の制約事項を確認します。

- vSphere クライアントにアクセスできる場所に、vRealize Operations Manager .ova ファイルをダウンロードします。
- 仮想マシンをダウンロードし、そのファイル拡張子が .tar の場合は、ファイル拡張子を .ova に変更します。
- vSphere クライアントのある vCenter Server システムに接続していること、および vSphere クライアントを使用してそのシステムにログインしていることを確認します。

vRealize Operations Manager を ESXi ホストから展開しないでください。展開は、vCenter Server からのみ行ってください。

手順

- 1 vSphere の [Deploy OVF Template] オプションを選択します。
- 2 vRealize Operations Manager .ova ファイルへのパスを入力します。
- 3 ノード名の入力を求められるまで画面の指示に従います。
- 4 ノード名を入力します。たとえば、**Ops1**、**Ops2**、**Ops-A**、**Ops-B** などです。
ノード名には、アンダースコア (_) などの非標準の文字を含めないでください。
vRealize Operations Manager ノードごとに別の名前を使用します。
- 5 構成サイズの選択を求められるまで画面の指示に従います。
- 6 必要なサイズ構成を選択します。ここでの選択はディスク サイズに影響しません。

選択したサイズに関係なく、デフォルトのディスク領域が割り当てられます。予想されるデータに対応するために追加の領域が必要な場合は、vApp の展開後にディスクを追加します。

- 7 ディスク フォーマットの選択を求められるまで画面の指示に従います。

オプション	説明
[シック プロビジョニング (Lazy Zeroed)]	仮想ディスクをデフォルトのシック フォーマットで作成します。
[シック プロビジョニング (Eager Zeroed)]	Fault Tolerance などのクラスタリング機能をサポートする、シック仮想ディスクのタイプを作成します。シック プロビジョニング (Eager Zeroed) フォーマットは、基になるストレージ サブシステムに応じてパフォーマンスを改善できます。 可能であればシック プロビジョニング (Eager Zeroed) オプションを選択します。
[Thin Provision]	シン フォーマットのディスクを作成します。このフォーマットを使用してストレージ容量を節約します。

スナップショットは、仮想マシンのパフォーマンスに悪影響を及ぼす可能性があり、通常は vRealize Operations Manager のワークロードが 25～30 % 低下することになります。スナップショットは使用しないでください。

- 8 [Next] をクリックします。
- 9 ドロップダウン メニューで、ターゲット ネットワーク ([ネットワーク 1 = テスト] など) を選択して [次へ] をクリックします。

- 10** [プロパティ] の [アプリケーション] の [タイムゾーンの設定] で、デフォルトの UTC のままにするか、タイムゾーンを選択します。

UTC に統一するのが望ましいアプローチです。または、すべてのノードを同じタイムゾーンに構成します。

- 11** (任意) IPv6 のオプションを選択します。

- 12** [ネットワーク プロパティ] の下のエントリは、DHCP の場合は空欄のままにしておき、それ以外の場合はデフォルト ゲートウェイ、ドメイン ネーム サーバ、固定 IP アドレス、ネットワーク マスク値を入力します。

マスター ノードとレプリカ ノードには固定 IP が必要です。データ ノードまたはリモート コレクタ ノードは、DHCP または固定 IP を使用できます。

- 13** [Next] をクリックします。

- 14** 設定内容を確認して、[終了] をクリックします。

- 15** 複数ノードの vRealize Operations Manager クラスタを作成する場合は、このすべての手順を繰り返して各ノードを展開します。

次のステップ

Web ブラウザ クライアントを使用して、新しく追加したノードを vRealize Operations Manager マスター ノード、データ ノード、高可用性マスター レプリカ ノード、またはリモート コレクタ ノードとして構成します。マスター ノードが最初に必要です。

注意： セキュリティ上の理由で、vRealize Operations Manager には、信頼できないまたはパッチが適用されていないクライアント、あるいはブラウザ拡張を使用するクライアントからアクセスしないでください。

インストーラを使用した vRealize Operations ノードの作成

動作環境のタイプに応じて、vRealize Operations Manager インストーラをインストールすることにより、クラスタ作成用に 1 つ以上のノードを作成できます。

vRealize Operations ManagerLinux インストーラの実行によるノードの作成

クラスタで、vRealize Operations Manager は 1 つ以上のノードから構成されます。ノードを作成するには、Linux 用の vRealize Operations ManagerEnterprise インストーラをダウンロードして実行します。

前提条件

- システムは vRealize Operations Manager ノードとしてのみ使用するよう計画してください。同じマシンで他のアプリケーションをホストしないでください。
- vRealize Operations Manager ポートがファイアウォールで開いていることを確認します。 [vRealize Operations Manager でのネットワーク ポートの使用方法](#) を参照してください。
- 前提条件パッケージがインストールされていることを確認します。 [vRealize Operations Manager に必要な Linux パッケージ](#) を参照してください。
- このノードがマスタ ノードとなる場合は、仮想マシンの固定 IP アドレスを予約し、関連付けられたドメイン ネーム サーバ、デフォルト ゲートウェイ、ネットワーク マスク値を把握しておきます。

インストール後は IP アドレスの変更が困難なため、IP アドレスをそのまま使用するよう計画してください。

- このノードが後で HA レプリカ ノードになるデータ ノードとなる場合は、仮想マシンの固定 IP アドレスを予約し、関連付けられたドメイン ネーム サーバ、デフォルト ゲートウェイ、ネットワーク マスク値を把握しておきます。

インストール後は IP アドレスの変更が困難なため、IP アドレスをそのまま使用するよう計画してください。

また、HA ノードの配置について「[vRealize Operations Manager の高可用性について](#)」の説明を読んで理解を深めておきます。

- Linux マシンの名前が英字 (a～z) または数字 (0～9) で開始および終了し、英字、数字、またはハイフン (-) だけが含まれるように、ドメインとマシンの命名を事前に計画してください。ホスト名または完全修飾ドメイン名 (FQDN) には、アンダースコア (_) を含めることはできません。

インストール後は名前の変更が困難なため、名前を保持するよう計画してください。

詳細については、Internet Engineering Task Force によるホスト名の仕様を確認してください (www.ietf.org を参照)。

- ノードの配置とネットワークは、「[一般的な vRealize Operations Manager クラスタ ノードの要件](#)」と「[vRealize Operations Manager クラスタ ノードのネットワーク要件](#)」で説明されている要件を満たすようにあらかじめ計画しておきます。

- vRealize Operations Manager クラスタで IPv6 アドレスを使うことになる場合は、「[vRealize Operations Manager での IPv6 の使用](#)」の説明を読んで IPv6 の制約事項を確認します。

- httpd がインストールされている場合、vRealize Operations Manager によってアンインストールされることに注意してください。これは、vRealize Operations Manager がそのバージョンの Apache をインストールするためです。

vRealize Operations Manager が httpd をアンインストールする場合、/etc/httpd 構成ディレクトリはバックアップされます。

- PostgreSQL の既存のコピーをすべてアンインストールし、PostgreSQL のディレクトリとデータを削除します。

vRealize Operations Manager 独自の PostgreSQL のコピーをインストールする必要があります。

- ファイル ntp.conf 内のすべてのマシンが解決可能であることを確認します。ntp.conf の内容について確信がない場合は、ファイルのバックアップ コピーを作成し、元のファイルを新しいマシンのインストールからのデフォルト バージョンで上書きします。

- Linux 用 vRealize Operations ManagerEnterprise bin インストーラのコピーを探します。

手順

- 1 root 権限を持つアカウントを使用してログインします。

- 2 ファイアウォールを無効にします。

IPv4 を使用する場合：

```
# su -
# service iptables save
iptables: Saving firewall rules to /etc/sysconfig/iptables:  [ OK ]
# service iptables stop
```

```
iptables: Flushing firewall rules: [ OK ]
iptables: Setting chains to policy ACCEPT: filter [ OK ]
iptables: Unloading modules: [ OK ]
# chkconfig iptables off
# service iptables status
iptables: Firewall is not running.
```

IPv6 を使用する場合 :

```
# su -
# service ip6tables save
ip6tables: Saving firewall rules to /etc/sysconfig/ip6tables: [ OK ]
# service ip6tables stop
ip6tables: Flushing firewall rules: [ OK ]
ip6tables: Setting chains to policy ACCEPT: filter [ OK ]
ip6tables: Unloading modules: [ OK ]
# chkconfig ip6tables off
# service ip6tables status
ip6tables: Firewall is not running.
```

- 3 開いているファイルの制限が、最小必要数を構成することにより適切になっていることを確認します。

```
echo "* - nofile 64000" >> /etc/security/limits.conf
```

- 4 SELinux を許可に設定します。

```
setenforce 0
sed -i "s/SELINUX=[^ ]*/SELINUX=permissive/g" /etc/selinux/config
```

- 5 ノードのホスト名が解決可能であることを確認します。
- 6 vRealize Operations ManagerEnterprise bin インストーラを実行し、画面の指示に従います。

-i console、-i silent、または-i gui を追加し、インストール モードを設定します。デフォルト モードは、セッションタイプ、たとえば、ターミナル接続または X-Windows の GUI に適合しています。

```
cd /tmp
sh ./vRealize_Operations_Manager_Enterprise.bin -i gui
```

- 7 複数のノードの vRealize Operations Manager クラスタを作成する場合、vRealize Operations Manager クラスタでノードとして稼動する各 Linux マシンで、このすべての手順を繰り返します。

次のステップ

Web ブラウザ クライアントを使用して、新規に追加したノードを vRealize Operations Manager マスター ノード、データ ノード、高可用性マスター レプリカ ノード、またはリモート コレクタ ノードとして設定します。マスター ノードが最初に必要なです。

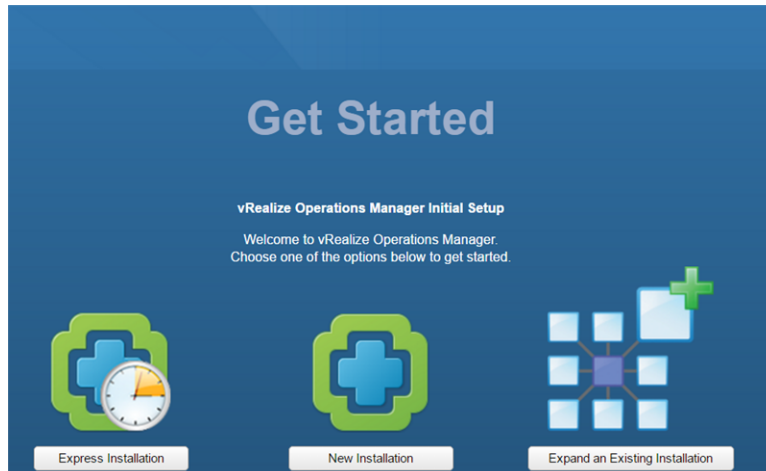
注意： セキュリティ上の理由で、vRealize Operations Manager には、信頼できないまたはパッチが適用されていないクライアント、あるいはブラウザ拡張を使用するクライアントからアクセスしないでください。

インストールのタイプ

vRealize Operations Manager 製品をインストールした後、新規インストールまたは高速インストールを実行するか、既存のインストールを拡張できます。

- 高速インストール
- 新規インストール
- インストールの拡張

図 3-2. 設定の開始



新しいユーザーの vRealize Operations Manager のインストール

OVF またはインストーラを使用して vRealize Operations Manager をインストールした後、メイン製品 UI ページについて通知されます。それぞれの環境に応じて、単一ノードまたは複数ノードを作成できます。

新規インストールの概要

初めてのユーザーとして新規インストールを実行し、管理とデータ処理の両方を処理するための単一ノードを作成できます。

図 3-3. 設定画面からの新規インストール



vRealize Operations Manager 製品 UI での新規インストールの実行

単一ノードを作成し、これをマスター ノードとして構成するか、追加データを処理するためにクラスタ内にマスター ノードを作成できます。すべての vRealize Operations Manager のインストールには、マスター ノードが必要です。シングル ノード クラスタの場合、管理機能とデータ機能は同じマスタ ノードに存在します。マルチ ノードの

vRealize Operations Manager クラスタには、1つのマスタ ノードと、追加データを処理するための1つ以上のノードが存在します。

前提条件

- vRealize Operations ManagervApp をデプロイしてノードを作成します。
- または、Linux 用の vRealize Operations ManagerEnterprise インストーラを実行してノードを作成することもできます。
- デプロイが完了した後、ノードの完全修飾ドメイン名 (FQDN) または IP アドレスを控えます。
- カスタム認証証明書を使用する予定の場合は、証明書ファイルが vRealize Operations Manager の要件を満たしていることを確認します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager のマスタ ノードになるノードの名前または IP アドレスに移動します。

セットアップ ウィザードが表示されます。vRealize Operations Manager にログインする必要はありません。

- 2 [新規インストール] をクリックします。

- 3 [Next] をクリックします。

- 4 admin ユーザー アカウントのパスワードを入力して確認し、[次へ] をクリックします。

パスワードは、1個以上の大文字、1個以上の小文字、1個以上の数字、1個以上の特殊文字を含めて8文字以上で作成する必要があります。

デフォルトのユーザー アカウント名は admin で、変更できません。

- 5 vRealize Operations Manager に含まれている証明書を使用するか独自の証明書をインストールするかを選択します。

a 独自の証明書を使用する場合は、[参照] をクリックして証明書ファイルを探します。[開く] をクリックすると、[証明書情報] テキスト ボックスにファイルが読み込まれます。

b 証明書から得られた情報を参照し、vRealize Operations Manager の要件を満たしていることを確認します。

- 6 [Next] をクリックします。

- 7 マスタ ノードの名前を入力します。

例: **Ops-Master**

- 8 クラスタが同期する NTP (Network Time Protocol) サーバの URL または IP アドレスを入力します。

例: **nist.time.gov**

- 9 [[Add]] をクリックします。

vRealize Operations Manager がすべてのノードをマスタ ノードとレプリカ ノードに同期させることによってそれ自体の同期を管理できるようにするため、NTP をブランクのままにします。

10 [次へ] をクリックし、[終了] をクリックします。

管理インターフェイスが表示されます。vRealize Operations Manager がマスタ ノードの追加を完了するまで若干時間がかかります。

結果

これで、ノードを追加できるマスター ノードを作成しました。

次のステップ

マスター ノードを作成した後、次のオプションがあります。

- データ ノードを作成し、起動されていないクラスタに追加します。
- リモート コレクタ ノードを作成し、起動されていないクラスタに追加します。
- [vRealize Operations Manager の起動] をクリックしてシングルノード クラスタを起動し、ログインして製品の構成を完了します。

クラスタとノードのサイズに応じ、クラスタの起動は 10 ～ 30 分かかる可能性があります。クラスタの起動が進行している間は、クラスタ ノードに対する変更やアクションを避けてください。

vRealize Operations Manager マスター ノードについて

マスター ノードは vRealize Operations Manager クラスタ内で必須の初期ノードです。

マスター ノードはクラスタの管理を実行するものであり、新しいノードを構成する前にオンラインにしておく必要があります。また、他のノードをオンラインにする前にマスターノードをオンラインにしておく必要があります。マスター ノードとレプリカ ノードが同時にオフラインになった場合は、別々にオンラインに戻します。まずマスター ノードを完全にオンラインにしてから、レプリカ ノードをオンラインにします。たとえば、何らかの理由でクラスタ全体がオフラインになった場合、マスター ノードを最初にオンラインにします。



マスター ノードの作成

(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_vrops_create_master_node)

新しいインストールの利点

vRealize Operations Manager の新しいインストールを使用して、最初のインストール時に新しいマスター ノードを作成できます。マスター ノードの設定後、クラスタを作成するためにノードの追加を開始し、組織に対応する環境を定義できます。

単一クラスタ ノードでは、管理とデータは同じマスター ノードに基づきます。複数ノードのクラスタには、1 つのマスター ノードと 1 つ以上のデータ ノードが含まれます。また、リモート コレクタ ノードや、高可用性のために使用される 1 つのレプリカ ノードが存在する場合があります。マスター ノードの作成の詳細については、[vRealize Operations Manager マスター ノードについて](#)を参照してください。

管理者としての vRealize Operations Manager のインストール

管理者として、vRealize Operations Manager ビルドのいくつかのインスタンスを仮想マシン環境にインストールできます。

高速インストールの概要

高速インストールは、マスター ノードの作成、データ ノードの追加、クラスタの作成、接続ステータスのテストを行うための方法の 1 つです。高速インストールを使用することで、新規インストールと比較して時間を節約し、インストール処理を迅速化できます。ユーザーが管理者である場合、この機能を使用しないことをお勧めします。

図 3-4. 設定画面からの高速インストール



vRealize Operations Manager 製品 UI での高速インストールの実行

vRealize Operations Manager クラスタで高速インストールを使用してマスター ノードを作成します。最初のインストール時に高速インストール オプションを選択します。

前提条件

OVF ファイルまたは Linux インストーラのいずれかから固定 IP アドレスが作成されていることを確認してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager のマスタ ノードになるノードの名前または IP アドレスに移動します。

セットアップ ウィザードが表示されます。vRealize Operations Manager にログインする必要はありません。

- 2 [高速インストール] をクリックします。

- 3 [Next] をクリックします。

- 4 admin ユーザー アカウントのパスワードを入力して確認し、[次へ] をクリックします。

パスワードは、1 個以上の大文字、1 個以上の小文字、1 個以上の数字、1 個以上の特殊文字を含めて 8 文字以上で作成する必要があります。

デフォルトのユーザー アカウント名は admin で、変更できません。

- 5 [Next] をクリックします。

- 6 [終了] をクリックします。

結果

これで、ノードを追加できるマスター ノードを作成しました。

高速インストールの利点

新しいマスター ノードを作成する新規インストールと比較した場合、高速インストールは時間の節約になります。高速インストールでは、組織ごとに異なるデフォルトの証明書が使用されます。この機能は主に、開発者または管理者によって使用されます。

vRealize Operations Manager の既存インストールの拡張

このオプションを使用して、既存の vRealize Operations Manager クラスタにノードを追加します。すでにマスター ノードを構成済みであり、クラスタにノードを追加してキャパシティを増やす場合に、このオプションを使用できます。

既存インストールの拡張の概要

追加ノードをデプロイして構成することにより、vRealize Operations Manager で大規模な環境をサポートすることができます。マスター ノードでは、クラスタで環境を監視するために常に追加ノードが必要です。インストールを拡張することで、クラスタに 1 つ以上のノードを追加できます。

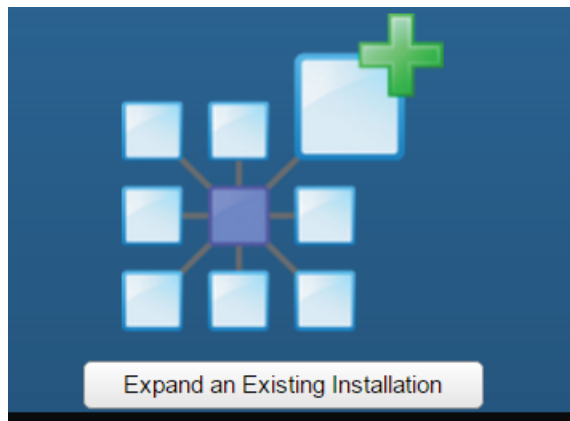
データ ノードの追加

データ ノードは、vRealize Operations Manager をスケール アウトして監視環境を拡大することを可能にする追加のクラスタ ノードです。

データ ノードを追加することで、vRealize Operations Manager クラスタを停止することなく vRealize Operations Manager を動的にスケール アウトできます。クラスタを 25% 以上スケール アウトする場合、vRealize Operations Manager がそのストレージ サイズを更新できるようにクラスタを再起動する必要があります。再起動するまで、パフォーマンスの低下が見られることがあります。メンテナンス期間中に vRealize Operations Manager クラスタの再起動を行うことをお勧めします。

また、再起動なしでクラスタのリバランスを実行できるオプションが製品管理オプションに含まれます。リバランスを実行すると、vRealize Operations Manager のワークロードがクラスタ ノード全体で調整されます。

図 3-5. 設定画面からの既存インストールの拡張



注： オンラインのクラスタを外部から、または vRealize Operations Manager インターフェイス以外からシャットダウンしないでください。外部からノードをシャットダウンする場合は、vRealize Operations Manager インターフェイスでノードをオフラインにしてからにします。



データ ノードの作成

(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_vrops_create_data_node)

データ ノードを追加するための既存インストールの拡張

複数ノードの vRealize Operations Manager クラスタが存在する大規模な環境には、1 つのマスター ノードと、追加データを収集、格納、処理、分析するための 1 つ以上のデータ ノードがあります。

前提条件

- vRealize Operations ManagervApp をデプロイしてノードを作成します。
- または、Linux 用の vRealize Operations ManagerEnterprise インストーラを実行してノードを作成することもできます。
- マスター ノードを作成および構成します。
- マスタ ノードの完全修飾ドメイン名 (FQDN) または IP アドレスを控えます。

手順

- 1 Web ブラウザで、データ ノードにするノードの名前または IP アドレスに移動します。
セットアップ ウィザードが表示されます。vRealize Operations Manager にログインする必要はありません。
- 2 [既存インストールの拡張] をクリックします。
- 3 [Next] をクリックします。
- 4 ノードの名前 (**Data-1** など) を入力します。
- 5 [ノード タイプ] ドロップダウンで、[データ] を選択します。
- 6 マスタ ノードの FQDN または IP アドレスを入力し、[検証] をクリックします。
- 7 [この証明書を受け入れる] を選択し、[次へ] をクリックします。
必要に応じて、マスター ノードで証明書を見つけ、サムプリントを確認します。
- 8 vRealize Operations Manager の管理者のユーザー名が admin であることを確認します。
- 9 vRealize Operations Manager 管理者のパスワードを入力します。
または、パスワードの代わりに、vRealize Operations Manager 管理者から提供されたパスフレーズを入力することもできます。
- 10 [次へ] をクリックし、[終了] をクリックします。
管理インターフェイスが表示されます。vRealize Operations Manager でデータ ノードの追加が完了するには、少し時間がかかります。

次のステップ

データ ノードを作成した後、次のオプションがあります。

- 新しい起動されていないクラスタ :
 - さらにデータ ノードを作成して追加します。

- リモート コレクタ ノードを作成して追加します。
- 高可用性マスター レプリカ ノードを作成します。
- [vRealize Operations Manager の起動] をクリックしてクラスタを起動し、この製品にログインして構成を完了します。

クラスタとノードのサイズに応じ、クラスタの起動は 10 ～ 30 分かかる可能性があります。クラスタの起動が進行している間は、クラスタ ノードに対する変更やアクションを避けてください。

- 確立されている実行中のクラスタ :
 - さらにデータ ノードを作成して追加します。
 - リモート コレクタ ノードを作成して追加します。
 - 高可用性マスター レプリカ ノードを作成します。これには、クラスタの再起動が必要です。

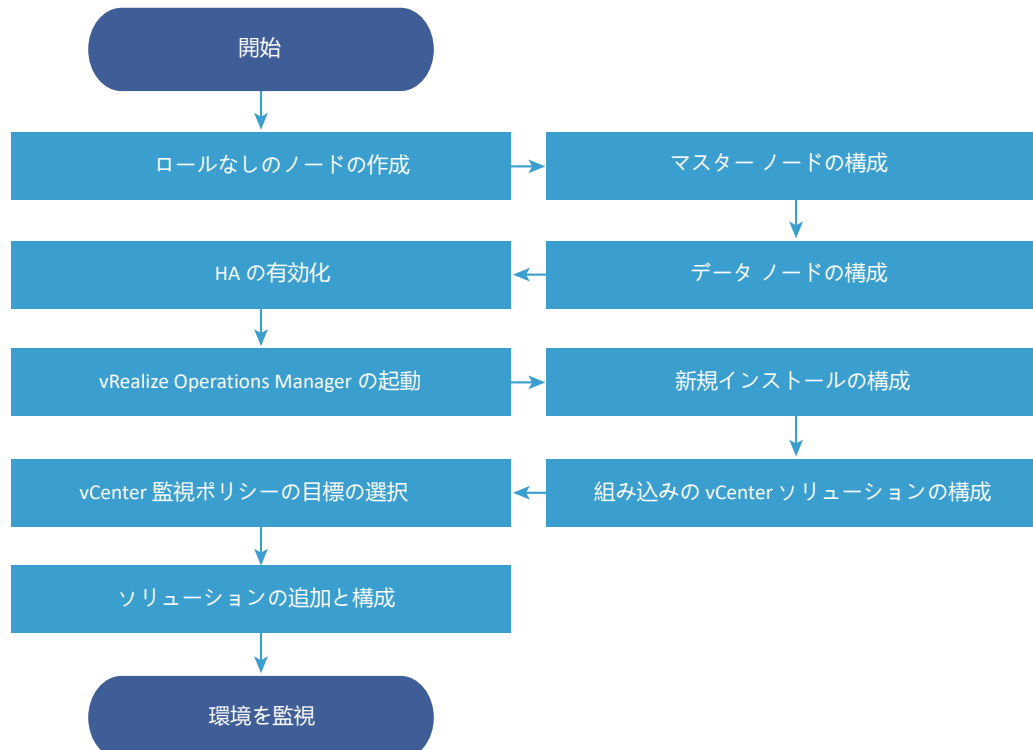
インストールの拡張の利点

データ ノードは、vRealize Operations Manager 分析の実行負荷を分担します。また、データ ノードにアダプタをインストールすることで、環境からのデータを収集して保管することもできます。クラスタを作成するためにデータ ノードを追加する前に、マスター ノードが存在する必要があります。

ノードの追加によるクラスタ サイズの変更

追加ノードをデプロイして構成することにより、vRealize Operations Manager で大規模な環境をサポートすることができます。

図 3-6. ワークフロー - クラスタのサイズの変更



vRealize Operations Manager リモート コレクタ ノードの追加によるデータ収集の増加

リモート コレクタ ノードをデプロイして構成することにより、vRealize Operations Manager では、vRealize Operations Manager 分析での処理負荷を増やすことなく、監視するオブジェクトをインベントリに追加することができます。

リモート コレクタ ノードを作成するためのセットアップ ウィザードの実行

分散 vRealize Operations Manager 環境では、コレクタ ノードは、データ ストレージ、処理、または分析に関して、vRealize Operations Manager での負荷を増やすことなく監視できるオブジェクトのインベントリを増やします。

前提条件

- vRealize Operations ManagervApp をデプロイしてノードを作成します。
vApp のデプロイ時に、リモート コレクタ サイズ オプションを選択します。
- または、Linux 用の vRealize Operations ManagerEnterprise インストーラを実行してノードを作成することもできます。
- すべてのリモート アダプタ インスタンスが適切なリモート コレクタ上で実行していることを確認します。アダプタ インスタンスが1つしかない場合は、デフォルトのコレクタ グループを選択します。
- マスター ノードを作成および構成します。
- マスタ ノードの完全修飾ドメイン名 (FQDN) または IP アドレスを控えます。
- 別のリモート コレクタを追加する前に、リモート コレクタが1つすでに追加されていることを確認します。

注： リモート コレクタを並列に追加した場合、クラスタがクラッシュします。

手順

- 1 Web ブラウザで、リモート コレクタ ノードになるデプロイされた OVF の名前または IP アドレスに移動します。

セットアップ ウィザードが表示されます。vRealize Operations Manager にログインする必要はありません。
- 2 [既存インストールの拡張] をクリックします。
- 3 [Next] をクリックします。
- 4 ノードの名前 (**Remote-1** など) を入力します。
- 5 [ノード タイプ] ドロップダウン メニューから、[リモート コレクタ] を選択します。
- 6 マスタ ノードの FQDN または IP アドレスを入力し、[検証] をクリックします。
- 7 [この証明書を受け入れる] を選択し、[次へ] をクリックします。

必要に応じて、マスター ノードで証明書を見つけ、サムプリントを確認します。
- 8 vRealize Operations Manager 管理者のユーザー名 **admin** を検証します。

9 vRealize Operations Manager 管理者のパスワードを入力します。

または、パスワードの代わりに、vRealize Operations Manager 管理者から提供されたパスフレーズを入力することもできます。

10 [次へ] をクリックし、[終了] をクリックします。

管理インターフェイスが表示されます。vRealize Operations Manager がリモート コレクタ ノードの追加を完了するまで数分かかります。

次のステップ

リモート コレクタ ノードを作成した後、次のオプションがあります。

■ 新しい起動されていないクラスタ :

- データ ノードを作成して追加します。
- さらにリモート コレクタ ノードを作成して追加します。
- 高可用性マスター レプリカ ノードを作成します。
- [vRealize Operations Manager の起動] をクリックしてクラスタを起動し、この製品にログインして構成を完了します。

クラスタとノードのサイズに応じ、クラスタの起動は 10 ~ 30 分かかる可能性があります。クラスタの起動が進行している間は、クラスタ ノードに対する変更やアクションを避けてください。

■ 確立されている実行中のクラスタ :

- データ ノードを作成して追加します。
- さらにリモート コレクタ ノードを作成して追加します。
- 高可用性マスター レプリカ ノードを作成します。これには、クラスタの再起動が必要です。

vRealize Operations Manager への高可用性の追加

1 つの vRealize Operations Manager クラスタ ノードを、vRealize Operations Manager マスター ノードのレプリカ ノードとして専用を使用することができます。

マスター レプリカ ノードを追加するためのセットアップ ウィザードの実行

vRealize Operations Manager データ ノードをマスタ ノードのレプリカに変換できます。この変換により、vRealize Operations Manager に高可用性 (HA) が追加されます。

注： クラスタが稼働している場合は、HA の有効化によってクラスタが再起動されます。

データの収集と分析にすでに使用されているデータ ノードを変換すると、そのデータ ノードを介して提供されたアダプタとデータ接続は他のデータ ノードにフェイルオーバーします。

vRealize Operations Manager クラスタへの HA の追加は、インストール時に行うことも vRealize Operations Manager が稼働し始めてから行うことも可能です。インストール時に HA を追加する方が影響が少なくてすみます。これはクラスタがまだ起動していないためです。

前提条件

- vRealize Operations Manager vApp をデプロイしてノードを作成します。
- または、Linux 用の vRealize Operations Manager Enterprise インストーラを実行してノードを作成することもできます。
- マスター ノードを作成および構成します。
- データ ノードを作成し、このデータ ノードに固定 IP アドレスを構成します。
- マスタ ノードの完全修飾ドメイン名 (FQDN) または IP アドレスを控えます。

手順

- 1 Web ブラウザで、マスタ ノード管理インターフェイスに移動します。

`https://master-node-name-or-ip-address/admin`

- 2 vRealize Operations Manager 管理者のユーザー名として **admin** と入力します。
- 3 vRealize Operations Manager 管理者のパスワードを入力し、[ログイン] をクリックします。
- 4 [高可用性] で、[有効化] をクリックします。
- 5 マスタ ノードのレプリカとして機能するデータ ノードを選択します。
- 6 [このクラスタ用に高可用性を有効化する] オプションを選択し、[OK] をクリックします。

クラスタがオンラインだった場合、vRealize Operations Manager が HA 向けにクラスタの構成、同期、再バランシングを行う間、管理インターフェイスには進捗が表示されます。

- 7 マスター ノードおよびレプリカ ノードがオフラインになっていて、レプリカがオンラインになったときに何らかの理由でマスターがオフラインのままになっている場合、レプリカ ノードはマスター ロールを引き継がず、データ ノードを含むクラスタ全体がオフラインになります。この際、レプリカ ノードのコマンド ライン コンソールにルートとしてログインします。
- 8 テキスト エディタで `$ALIVE_BASE/persistence/persistence.properties` を開きます。
- 9 次のプロパティを見つけて設定します：

```
db.role=MASTER
db.driver=/data/vcops/xdb/vcops.bootstrap
```

- 10 `persistence.properties` を保存して閉じます。
- 11 管理インターフェイスで、レプリカ ノードをオンラインにし、マスター ノードになったことを確認してから、残りのクラスタ ノードをオンラインにします。

次のステップ

マスター レプリカ ノードを作成した後、次のオプションがあります。

- 新しい起動されていないクラスタ：
 - データ ノードを作成して追加します。
 - リモート コレクタ ノードを作成して追加します。

- [vRealize Operations Manager の起動] をクリックしてクラスタを起動し、この製品にログインして構成を完了します。

クラスタとノードのサイズに応じ、クラスタの起動は 10 ～ 30 分かかる可能性があります。クラスタの起動が進行している間は、クラスタ ノードに対する変更やアクションを避けてください。

- 確立されている実行中のクラスタ：
 - データ ノードを作成して追加します。
 - リモート コレクタ ノードを作成して追加します。

vRealize Operations Manager のクラスタとノードの保守

クラスタとノードの保守作業をすることで、vRealize Operations Manager はクラスタやノードの保守がより効率的に行えるようになります。これらの作業には、クラスタや各ノードのオンラインとオフライン状態の変更、高可用性 (HA) の有効化と無効化、インストールされたアダプタに関連する統計情報の表示、パフォーマンス向上のためのワークロードの再調整などがあります。

vRealize Operations Manager のクラスタとノードの保守については、製品のインターフェイスの [クラスタの管理] ページか、管理インターフェイスの [クラスタのステータスおよびトラブルシューティング] ページでほとんどの作業を行います。管理インターフェイスでは、製品のインターフェイスよりも多くのオプションが提供されています。

表 3-6. クラスタとノードの保守手順

手順	インターフェイス	説明
クラスタのステータスの変更	管理/製品	<p>ノードのステータスをオンラインまたはオフラインに変更できます。</p> <p>高可用性 (HA) クラスタでは、マスターまたはレプリカをオフラインにすると、vRealize Operations Manager は残りのノードから実行され、HA ステータスが低下します。</p> <p>クラスタを再起動する手動アクションまたはシステム アクションを実行すると、以前にオフラインにしたノードも含め、すべての vRealize Operations Manager ノードがオンラインになります。</p> <p>複数ノード クラスタの一部であるデータ ノードをオフラインにした後でオンラインに戻した場合、Endpoint Operations Management アダプタが自動的にオンラインになりません。Endpoint Operations Management アダプタをオンラインにするには、インベントリ エクスプローラで Endpoint Operations Management アダプタを選択し、[コレクタを開始] アイコンをクリックします。</p>
高可用性の有効化または無効化	管理	<p>高可用性を有効または無効にするには、すべてのノードをオンラインにした状態、またはすべてのノードをオフラインにした状態で、クラスタに少なくとも 1 つのデータ ノードを配置する必要があります。リモート コレクタ ノードは使用できません。</p> <p>高可用性を無効にすると、レプリカ ノードが削除され、vRealize Operations Manager クラスタが再起動されます。</p> <p>高可用性を無効にすると、レプリカ ノードの vRealize Operations Manager が再びデータ ノードに変換され、クラスタが再起動されます。</p>
パスフレーズの生成	管理	<p>このクラスタにノードを追加するために管理者の認証情報の代わりに使用できるパスフレーズを生成できます。</p> <p>パスフレーズは 1 回の使用にのみ有効です。</p>
ノードの削除	管理	<p>高可用性 (HA) モードで実行していなければ、ノードを削除すると、ノードが収集したデータが失われます。HA により、ノードの削除や損失からデータが保護されます。</p> <p>すでに削除した vRealize Operations Manager に、ノードを再度追加しないでください。使用している環境でさらにノードが必要な場合は、新規ノードを追加してください。</p> <p>保守および移行の手順を実行するときには、ノードを削除せずに、ノードをオフラインにする必要があります。</p>
NTP の設定	製品	<p>vRealize Operations Manager クラスタ内のノードは、マスター ノード時間で標準化するか、外部ネットワーク タイム プロトコル (NTP) ソースと同期することにより相互に同期します。</p>
クラスタのリバランス	製品	<p>vRealize Operations Manager クラスタ ノード間でアダプタ、ディスク、メモリ、ネットワーク負荷をリバランスして、環境の効率を上げることができます。</p>

クラスタ管理

vRealize Operations Manager には、vRealize Operations Manager クラスタのノードおよびそのノードにインストールされているアダプタを監視および管理できる中心のページがあります。

クラスタ管理の仕組み

クラスタ管理により、vRealize Operations Manager クラスタ全体または個別ノードのオンライン状態またはオフライン状態を表示および変更できます。さらに、高可用性 (HA) を有効または無効にし、ノードにインストールされたアダプタに関連した統計情報を表示できます。

クラスタ管理を確認できる場所

左側のペインで、[管理] - [クラスタ管理] を選択します。

クラスタ管理オプション

このオプションには、クラスタレベルの監視機能と管理機能が含まれています。

表 3-7. 初期セットアップ ステータスの詳細

オプション	説明
クラスタのステータス	vRealize Operations Manager クラスタのオンライン、オフラインまたは不明状態が表示されます。
High Availability	HA が有効か、無効か、デグレードしているかを示します。

vRealize Operations Manager は、ノードレベルの情報およびノードをオンラインまたはオフラインにするためのツールバーを提供します。

表 3-8. vRealize Operations Manager クラスタのノード

オプション	説明
ノード名	ノードのマシン名。 ログイン中のノードは、名前の隣にドットが表示されます。
ノード アドレス	ノードのインターネット プロトコル (IP) アドレス。マスタ ノードおよびレプリカ ノードには、静的 IP アドレスが必要です。データ ノードでは、DHCP または静的 IP を使用する場合があります。
クラスタのロール	vRealize Operations Manager ノードのタイプ：マスター、データ、レプリカ、またはリモート コレクタ。
都道府県	実行、実行されていません、オンライン化、オフライン化、アクセス不可、失敗、エラー
ステータス	オンライン、オフライン、不明などのノードの状態。
処理中のオブジェクト	ノードで現在監視している合計環境オブジェクト。
処理中のメトリック	ノードがクラスタに追加されて以来ノードが収集した合計メトリックス。
ビルド	ノードにインストールされている vRealize Operations Manager ソフトウェア ビルド番号。
バージョン	ノードにインストールされた vRealize Operations Manager ソフトウェア バージョン。
デプロイ タイプ	ノードを実行しているマシンのタイプ：vApp または Linux

さらに、選択したノードのアダプタ統計情報を表示します。

表 3-9. サーバ上のアダプタ

オプション	説明
名前	インストールするユーザーがアダプタに付ける名前。
ステータス	アダプタがデータを収集しているかどうかを示します。
収集中のオブジェクト	アダプタで現在監視している合計環境オブジェクト。
収集中のメトリック	アダプタがノードにインストールされて以来収集したアダプタの合計メトリックス。
最後の収集時間	アダプタが一番最近のデータ収集をした日付と時間。
追加日	アダプタがノードにインストールされた日付と時間。

vRealize Operations Manager のインストール後の考慮事項

vRealize Operations Manager のインストール後に注意が必要となるインストール後タスクがあります。

vRealize Operations Manager へのログインについて

vRealize Operations Manager にログインするには、Web ブラウザで vRealize Operations Manager クラスターのノードの完全修飾ドメイン名 (FQDN) または IP アドレスにアクセスする必要があります。

vRealize Operations Manager にログインする際には、留意すべきことがいくつかあります。

- 初期構成後、製品インターフェイスの URL は次のようになります。

`https://node-FQDN-or-IP-address`

- 初期構成前に製品の URL を入力すると、代わりに管理インターフェイスが開きます。

- 初期構成後、管理インターフェイスの URL は次のようになります。

`https://node-FQDN-or-IP-address/admin`

- 管理者アカウント名は admin です。このアカウント名は変更できません。
- 管理者アカウントは、コンソールにログインするために使用するルート アカウントとは異なります。また、同じパスワードにする必要はありません。
- 管理インターフェイスにログインしているときには、ログインしているノードをオフラインにしてシャットダウンすることは避けてください。そうしないと、インターフェイスが閉じてしまいます。
- パフォーマンスが低下しない最大の同時ログイン セッション数は、分析クラスター内のノード数、これらのノードのサイズ、各ユーザー セッションがシステムにかけることが予想される負荷などの要因に依存します。ヘビーユーザーは、大量の管理アクティビティ、複数の同時ダッシュボード、クラスタ管理タスクなどに従事する可能性があります。ライト ユーザーは、より一般的であり、通常は 1 ～ 2 個のダッシュボードのみを必要とします。

使用しているバージョンの vRealize Operations Manager のサイジング用スプレッドシートには、同時ログイン サポートに関する詳細情報が含まれています。詳細については、[ナレッジ ベースの記事 KB 2093783](#) を参照してください。

- vRealize Operations Manager インターフェイスへのログインには、メンテナンス管理アカウントのような、vRealize Operations Manager の内部ユーザー アカウントを使用することはできません。
- リモート コレクタ ノードから製品インターフェイスを開くことはできませんが、管理インターフェイスは開くことができます。
- サポートされている Web ブラウザについては、お使いのバージョンの vRealize Operations Manager リリース ノートを参照してください。

vRealize Operations Manager コンソールのセキュリティ保護

vRealize Operations Manager をインストールしたら、初回のログイン時に、クラスタ内の各ノードのコンソールをセキュリティ保護します。

手順

- 1 vCenter で、または直接アクセスして、ノードのコンソールを検索します。vCenter では、Alt+F1 キーを使用してログイン プロンプトにアクセスします。

セキュリティ上の理由から、vRealize Operations Manager のリモート ターミナル セッションは、デフォルトで無効になっています。

- 2 **root** としてログインします。

vRealize Operations Manager では、root パスワードを作成するまでコマンド プロンプトにはアクセスできません。

- 3 パスワードを求められたら、Enter を押します。
- 4 古いパスワードを求められたら、Enter を押します。
- 5 新しいパスワードを求められたら、使用する root パスワードを入力し、今後の参照のために書き留めておきます。
- 6 root パスワードを再入力します。
- 7 コンソールからログアウトします。

リモート vRealize Operations Manager コンソール セッションへのログイン

vRealize Operations Manager クラスタのノードの管理または維持の一部として、リモート コンソールを通じて vRealize Operations Manager ノードにログインする必要がある場合があります。

セキュリティ上の理由から、vRealize Operations Manager ではデフォルトでリモート ログインが無効になっています。リモート ログインを有効にするには、次の手順を実行します。

手順

- 1 vCenter で、または直接アクセスして、ノードのコンソールを検索します。vCenter では、Alt+F1 キーを使用してログイン プロンプトにアクセスします。

- 2 **root** としてログインします。これが初めてのログインである場合、root パスワードを設定する必要があります。
 - a パスワードを求められたら、Enter を押します。
 - b 古いパスワードを求められたら、Enter を押します。
 - c 新しいパスワードを求められたら、使用する root パスワードを入力し、今後の参照のために書き留めておきます。
 - d root パスワードを再入力します。
- 3 リモート ログインを有効にするには、次のコマンドを入力します。

```
service sshd start
```

vRealize Operations Manager の新規インストールについて

vRealize Operations Manager を新規にインストールするには、ノードをデプロイして構成する必要があります。次に、監視および管理するオブジェクトの種類に応じてソリューションを追加します。

ソリューションを追加した後、製品内でそのソリューションを構成し、必要なデータの種類の収集する監視ポリシーを追加します。



初回のログイン

(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_vrops_first_time_login)

ログインおよび新規インストールの続行

新しい vRealize Operations Manager のインストールを完了するには、ログインし、ワンタイム プロセスを実行して製品のライセンス処理を行い、監視するオブジェクトの種類についてのソリューションを構成します。

前提条件

- vRealize Operations Manager ノードの新しいクラスタを作成します。
- クラスタが環境を監視するのに十分なキャパシティがあることを確認します。 [vRealize Operations Manager クラスタのサイジング](#) を参照してください。

手順

- 1 Web ブラウザで、マスター ノードの IP アドレスまたは完全修飾ドメイン名に移動します。
- 2 ユーザー名 **admin** と、マスター ノードの構成時に設定したパスワードを入力し、[ログイン] をクリックします。
これは初めてのログインなので、管理インターフェイスが表示されます。
- 3 クラスタを起動するには、[vRealize Operations Manager の起動] をクリックします。
- 4 [可] をクリックします。
環境に応じて、クラスタの起動には 10 ～ 30 分かかる可能性があります。クラスタの起動が進行している間は、クラスタ ノードに対する変更やアクションを避けてください。

- 5 クラスタが起動して製品のログイン ページが表示されたら、管理ユーザー名とパスワードを再度入力して、[ログイン] をクリックします。

ワンタイム ライセンス ウィザードが表示されます。

- 6 [Next] をクリックします。

- 7 エンド ユーザー使用許諾契約書に目を通して同意し、[次へ] をクリックします。

- 8 製品キーを入力するか、または vRealize Operations Manager を評価モードで実行するオプションを選択します。

オブジェクトの監視と管理のためにどのソリューションをインストールできるかは、製品ライセンスのレベルによって異なります。

- 標準。vCenter のみ
- Advanced: vCenter とその他のインフラストラクチャ ソリューション
- Enterprise : すべてのソリューション

vRealize Operations Manager では、vSphere と同様に管理対象オブジェクトにはライセンスが供与されないため、製品のライセンス処理を行うときにオブジェクト カウントは表示されません。

注： Standard エディションに移行した場合、Advanced/Enterprise 機能は使用できなくなります。移行後、EULA への準拠のために、他のバージョンで作成したコンテンツを削除し、Advanced/Enterprise 機能をサポートするライセンス キーを確認します。

- 9 製品キーを入力した場合は、[ライセンス キーの検証] をクリックします。

- 10 [Next] をクリックします。

- 11 VMware に使用量の統計を返すかどうかを選択して、[次へ] をクリックします。

- 12 [終了] をクリックします。

ワンタイム ウィザードが完了し、vRealize Operations Manager インターフェイスが表示されます。

次のステップ

- vRealize Operations Manager インターフェイスを使用して、製品に含まれているソリューションを構成します。
- vRealize Operations Manager インターフェイスを使用して、さらにソリューションを追加します。
- vRealize Operations Manager インターフェイスを使用し、監視ポリシーを追加します。

更新、移行、およびリストア

既存の vRealize Operations Manager デプロイを新しくリリースされたバージョンにアップデートできます。

ソフトウェア アップデートを実行するときは、お使いのクラスタに対して適切な PAK ファイルを使用していることを確認する必要があります。ソフトウェアを更新する前に、クラスタのスナップショットを作成しておくことをお勧めします。ただし、更新が完了したら、スナップショットを削除するのを忘れないでください。

アラート、シンプトム、推奨値、ポリシーなど、vRealize Operations Manager によって提供されるコンテンツをカスタマイズして、コンテンツ アップデートをインストールする場合には、更新を実行する前にコンテンツのクローンを作成します。この方法では、ユーザーはソフトウェア アップデートをインストールするときに初期設定のコンテンツをリセットするオプションを選択でき、アップデートはカスタマイズしたコンテンツを上書きすることなく新しいコンテンツを提供できます。

ソフトウェア アップデート PAK ファイルの入手

クラスタの更新のタイプごとに、特定の PAK ファイルが必要です。正しい PAK ファイルを使用していることを確認してください。

正しい PAK ファイルのダウンロード

vRealize Operations Manager 環境を更新するには、アップグレードするクラスタに対して適切な PAK ファイルをダウンロードする必要があります。仮想アプライアンス クラスタのみが OS アップデート PAK ファイルを使用します。各ノードの /etc/hosts のホスト名エントリは、vRealize Operations 6.0.x からバージョン 6.1 へのアップデートのために OS アップデート PAK ファイルの適用時にリセットされることがあります。ホスト ファイルは、ソフトウェア アップデートの完了後に手動で更新できます。

表 3-10. さまざまなクラスタ タイプに対する個別の PAK ファイル

クラスタ タイプ	OS アップデート	製品アップデート
仮想アプライアンス クラスタ。 OS と製品の両方のアップデート PAK ファイルを使用してください。	vRealize_Operations_Manager-VA-OS- xxx.pak	vRealize_Operations_Manager-VA- xxx.pak
RHEL スタンドアロン クラスタ。		vRealize_Operations_Manager-RHEL- xxx.pak

更新の一部としてのスナップショット作成

vRealize Operations Manager クラスタを更新する前に、クラスタ内の各ノードのスナップショットを作成しておくことをお勧めします。更新が完了したら、パフォーマンスの低下を避けるためにスナップショットを削除する必要があります。

スナップショットの詳細については、『vSphere 仮想マシン管理』ドキュメントを参照してください。

手順

- 1 <https://<master-node-FQDN-or-IP-address>/admin> の vRealize Operations Manager 管理者インターフェイスにログインします。
- 2 クラスタのステータスで、[オフラインにする] をクリックします。
- 3 すべてのノードがオフラインになったら、vSphere クライアントを開きます。
- 4 vRealize Operations Manager 仮想マシンを右クリックします。
- 5 [スナップショット] をクリックし、[スナップショットの取得] を意味するメニューをクリックします。
 - a スナップショットに名前を付けます。「アップデート前」のようなわかりやすい名前を使用してください。
 - b [仮想マシン メモリのスナップショット取得] を有効にするチェック ボックスのチェックを外します。

- c [ゲスト ファイル システムの休止 (VMware Tools のインストール要)] を有効にするチェック ボックスのチェックを外します。
- d [OK] をクリックします。

6 これらの手順を、クラスタ内のノードごとに繰り返します。

次のステップ

[ソフトウェアのアップデートのインストール](#)の説明に従って、更新プロセスを開始します。

カスタマイズ コンテンツの保存方法

vRealize Operations Manager をアップグレードするときは、環境内のオブジェクトにアラートを出して監視するためのコンテンツ タイプの現在のバージョンをアップグレードすることが重要です。アップグレードしたアラート定義、シンプトム定義、および推奨事項を使用して、環境内のオブジェクトのさまざまな状態についてアラートを出し、幅広い問題のタイプを特定することができます。アップグレードしたビューでは、ダッシュボードやレポートを作成して、環境の問題を簡単に特定してレポートを作成できます。

vRealize Operations Manager 環境でアラート定義、シンプトム定義、推奨事項、およびビューをアップグレードする前に、いくつかのステップが必要になる場合があります。

- 以前のバージョンの vRealize Operations Manager に付属するアラート定義、シンプトム定義、推奨事項、またはビューのいずれかをカスタマイズしており、これらのカスタマイズしたバージョンを維持したい場合は、この手順のステップを行ってください。
- 以前のバージョンの vRealize Operations Manager に付属するアラート定義、シンプトム定義、推奨事項、またはビューのいずれもカスタマイズしていない場合は、これらを最初にバックアップする必要はありません。その代わりに、アップグレードを開始して、アップグレードの途中で [初期状態のコンテンツのリセット] のチェック ボックスを選択します。

前提条件

以前にカスタマイズしたバージョンのアラート定義、シンプトム定義、推奨事項、またはビューがある。

手順

- 1 vRealize Operations Manager にアップグレードを開始する前に、アラート定義、シンプトム定義、推奨事項、およびビューのクローンを作成して、これらの変更をバックアップします。
- 2 vRealize Operations Manager のアップグレードを開始します。
- 3 アップグレードの途中で、[初期状態のコンテンツのリセット] のチェック ボックスを選択します。

結果

アップグレードが完了すると、カスタマイズしたバージョンのアラート定義、シンプトム定義、推奨事項、およびビューが残され、アップグレードの際にインストールされた現行バージョンも利用できます。

次のステップ

アップグレードされたアラート定義、シンプトム定義、推奨事項、およびビューの変更内容を確認します。その上で、以前に変更したバージョンを残すか、アップグレードしたバージョンを使用するかを決めてください。

バックアップとリストア

vRealize Operations Manager システムのバックアップとリストアを定期的に行うことで、システム障害の場合のダウンタイムとデータ損失を回避してください。システムに障害が発生した場合は、システムを最後の完全バックアップまたは増分バックアップにリストアできます。

vSphere Data Protection またはその他のバックアップ ツールを使用して、vRealize Operations Manager のシングルノード クラスタまたはマルチノード クラスタをリストアできます。完全バックアップ、差分バックアップ、増分バックアップ、および仮想マシンのリストアを実行できます。

vSphere Data Protection と NetBackup を使用して vRealize Suite コンポーネントをバックアップおよびリストアするには、[vRealize Suite 情報センター](#)の「バックアップとリストア」セクションを参照してください。

注： すべてのノードは、同時にバックアップおよびリストアが可能です。ノードを個別にバックアップまたはリストアすることはできません。

vRealize Operations Manager ソフトウェアの更新

vRealize Operations Manager には、製品ソフトウェアの更新を集中管理できるページが含まれています。

ソフトウェアの更新の仕組み

[ソフトウェアの更新] オプションでは、vRealize Operations Manager 製品の更新をインストールできます。

ソフトウェアの更新を確認できる場所

vRealize Operations Manager 管理インターフェイス (<https://master-node-name-or-ip-address/admin>) にログインします。左側の [ソフトウェアの更新] をクリックします。

ソフトウェアの更新オプション

このオプションには、更新 PAK ファイルを検索しインストールを開始するウィザードと、更新のリストおよびそのインストール先となる vRealize Operations Manager クラスタ ノードのリストが含まれます。

表 3-11. ソフトウェアの更新オプション

オプション	説明
ソフトウェアのアップデートのインストール	ウィザードを起動すると、ライセンスを検索して同意し、vRealize Operations Manager ソフトウェア更新のインストールを開始できます。
ノード名	更新がインストールされるノードのマシン名
ノード IP アドレス	更新がインストールされるノードのインターネット プロトコル (IP) アドレス。マスター ノードおよびレプリカ ノードには、静的 IP アドレスが必要です。データ ノードでは、DHCP または静的 IP を使用する場合があります。
更新手順	ソフトウェア更新の進捗状況は、手順 x/y の形式で示されます。
ステータス	ソフトウェア更新の状況 (成功、失敗、処理中、不明)

ソフトウェアのアップデートのインストール

vRealize Operations Manager をすでにインストールしている場合は、新しいバージョンが入手可能になったときにソフトウェアを更新できます。

注： クラスタとノードのサイズやタイプによって、インストールに数分または数時間かかる場合があります。

前提条件

- クラスタ内の各ノードのスナップショットを作成します。詳細については、[更新の一部としてのスナップショット作成](#)を参照してください。
- クラスタの PAK ファイルを入手します。詳細については、[ソフトウェア アップデート PAK ファイルの入手](#)を参照してください。
- PAK ファイルを vRealize Operations Manager インストールするか、インスタンスをアップグレードする前に、カスタマイズしたコンテンツを保存するためにクローンを作成します。カスタマイズしたコンテンツには、アラートの定義、シンプトムの定義、推奨事項、およびビューを含めることができます。そして、ソフトウェアのアップデート時に、[インストール済みの場合でも PAK ファイルをインストールします] オプションおよび [初期状態のコンテンツのリセット] オプションを選択します。
- バージョン 6.2.1 vRealize Operations Manager の更新処理では、ソフトウェアの更新を開始する前に、問題を識別する検証プロセスが行われます。更新前チェックを実行し、検出された問題を解決することをお勧めしますが、環境に制約があるユーザーはこの検証チェックを無効にできます。

更新前の検証チェックを無効にするには、次の手順を実行します：

- `/storage/db/pakRepoLocal/
bypass_prechecks_vRealizeOperationsManagerEnterprise-buildnumberofupdate.json`
に対して更新ファイルを編集します。
- 値を TRUE に変更し、更新を実行します。

注： この検証を無効にした場合、更新自体でブロッキングの障害が発生することがあります。

手順

- 1 クラスタのマスター ノード vRealize Operations Manager 管理者インターフェイスである `https://master-node-FQDN-or-IP-address/admin` にログインします。
- 2 左パネルの [ソフトウェア アップデート] をクリックします。
- 3 メイン パネルの [ソフトウェア アップデートのインストール] をクリックします。
- 4 ウィザードの手順に従って、PAK ファイルを見つけてインストールします。
 - a 仮想アプライアンスのデプロイを更新する場合は、OS アップデートを実行します。
これにより、仮想アプライアンスの OS がアップデートされ、各仮想マシンが再起動されます。
 - b 製品アップデート PAK ファイルをインストールします。
ソフトウェア アップデートが完了するまで待ちます。完了すると、管理者インターフェイスからログアウトされます。

5 マスター ノードの管理者インターフェイスに再ログインします。

メインの [クラスタのステータス] ページが表示され、クラスタが自動的にオンラインになります。ステータス ページには [オンラインにする] ボタンも表示されますが、これはクリックしないでください。

6 ブラウザ キャッシュを消去し、ブラウザ ページが自動で更新されない場合は、ページの表示を更新してください。

クラスタのステータスが [オンライン化] に変わります。クラスタのステータスが [オンライン] に変わったらアップグレードの完了です。

注： PAK ファイル アップデートのインストール プロセス中に、クラスタがダウンしてステータスがオフラインになると、一部のノードが使用不可能になります。この状況を解消するには、管理者インターフェイスにアクセスして、該当クラスタを手動でオフラインにし、[インストールの完了] をクリックしてインストール プロセスを続行します。

7 [ソフトウェア アップデート] をクリックして、更新が完了したことを確認します。

メイン ペインに、更新が正常に完了したことを示すメッセージが表示されます。

次のステップ

ソフトウェア アップデートの前に作成したスナップショットを削除します。

注： 複数のスナップショットがあるとパフォーマンスが低下することがあるため、ソフトウェア アップデートの完了後は、更新前のスナップショットを削除してください。

管理インターフェイスからの vRealize Operations Manager ソフトウェア アップデートのインストール

ライセンスを登録することにより、vRealize Operations Manager 製品またはその追加ソリューションをアクティブ化します。

前提条件

- ソフトウェア アップデート PAK ファイルの名前と場所を確認します。
- PAK ファイルを vRealize Operations Manager インストールするか、インスタンスをアップグレードする前に、カスタマイズしたコンテンツを保存するためにクローンを作成します。カスタマイズしたコンテンツには、アラートの定義、シンプトムの定義、推奨事項、およびビューを含めることができます。そして、ソフトウェアのアップデート時に、[インストール済みの場合でも PAK ファイルをインストールします] オプションおよび [初期状態のコンテンツのリセット] オプションを選択します。

手順

- 1** Web ブラウザで、vRealize Operations Manager 管理インターフェイス (*master-node-name-or-ip-address/admin*) に移動します。
- 2** マスター ノードの管理者のユーザー名とパスワードでログインします。
- 3** 左側の [ソフトウェアの更新] をクリックします。
- 4** [ソフトウェア アップデートのインストール] をクリックします。

- 5 ウィザードの指示に従って、*update-filename.pak* コピーを見つけ、インストールします。

2 ～ 3 分でインストールが完了し、管理者インターフェイスによってログアウトされます。5 分過ぎても自動的にログアウトされない場合、ブラウザ内のページを更新してください。

- 6 マスター ノード管理者インターフェイスに再ログインし、[ソフトウェアの更新] をもう一度クリックします。

- 7 右側にアップデート名が表示されることを確認します。アップデートが表示されない場合は、数分待ち、ブラウザ内のページを更新してください。

このバージョンへの vCenter Operations Manager デプロイの移行

データをインポートすることにより、vRealize Operations Manager の確立されたバージョンや本番バージョンで、vCenter Operations Manager のデプロイの監視を引き継ぐことができます。

vCenter Operations Manager をこのバージョンの vRealize Operations Manager に直接移行することはできません。その代わりに、次の 2 段階を踏みます。

- 1 vCenter Operations Manager 5.8.x を vRealize Operations Manager 6.0.x に移行して読み込みます。手順については、バージョン 6.0.x のドキュメントを参照してください。
- 2 vRealize Operations Manager [ソフトウェア アップデート] オプションを使用して、vRealize Operations Manager 6.0.x をこのバージョンに更新します。

注： vCenter Operations Manager 5.8.x インスタンスと vRealize Operations Manager 6.0.x インスタンスが同じ物理ネットワーク上にあることを確認してください。そうでない場合、データのインポートが機能しないことがあります。ソース (vCenter Operations Manager 5.x) が低速なネットワーク接続 (WAN) によってターゲットの vRealize Operations Manager 6.x 環境から分離されている場合、データのインポート処理は失敗します。LAN 速度よりも低速の接続では、データのインポートはサポートされません。詳細については、ナレッジ ベースの記事 [KB2141964](#) を参照してください。

アンインストール

Linux 環境から vRealize Operations Manager インスタンスをアンインストールできます。

Linux からのアンインストール

このリリースの Linux 用の vRealize Operations Manager には、クリーン アンインストール オプションが含まれていません。製品を削除するには、アンインストール コマンドを実行して、vRealize Operations Manager がインストールした残りのアーティファクトを手動で削除します。

前提条件

vCenter Server において、または直接アクセスで、コンソールにルートとしてログインします。vCenter Server で Alt+F1 を使用してログイン プロンプトにアクセスします。

セキュリティ上の理由から、vRealize Operations Manager のリモート ターミナル セッションは、デフォルトで無効になっています。

手順

- 1 次のコマンドを実行して製品をアンインストールします。

```
/usr/bin/sh /usr/lib/vmware-vcopssuite-installsupport/_vRealize\ Operations\ Manager\
Enterprise_installation/Uninstall\ vRealize\ Operations\ Manager\ Enterprise -i silent
```

あるいは、ベータ版を削除する場合には、次のコマンドを実行します。

```
/usr/bin/sh /usr/lib/vmware-vcopssuite-installsupport/_vCenter\ Operations\ Manager\
Enterprise_installation/Uninstall\ vCenter\ Operations\ Manager\ Enterprise -i silent
```

- 2 次のコマンドを実行して HTTPD サービスを停止します。

```
/sbin/service httpd stop
```

- 3 次のコマンドを実行して RPM を削除します。

```
/bin/rpm -e --nodeps httpd
/bin/rpm -e --nodeps httpd-tools
/bin/rpm -e --nodeps VMware-Postgres
/bin/rpm -e --nodeps VMware-Postgres-libs
/bin/rpm -e --nodeps VMware-Postgres-osslibs
/bin/rpm -e --nodeps VMware-Postgres-osslibs-server
```

- 4 次のコマンドを実行して追加のユーザーおよびグループを削除します。

```
/usr/sbin/userdel -fr admin
/usr/sbin/userdel -fr postgres
/usr/sbin/groupdel admin
```

- 5 次のコマンドを実行して追加のファイルおよびディレクトリを削除します。

```
/bin/rm -rf /usr/lib/openssl/lib/libcrypto.so.10
/bin/rm -rf /usr/lib/openssl/lib/libssl.so.10
/bin/rm -rf /usr/lib/openssl/lib/
/bin/rm -rf /usr/lib/openssl/
/bin/rm -rf /usr/lib/vmware-vcopssuite-installsupport/.buildInfo.<build_number>
/bin/rm -rf /usr/lib/vmware-vcopssuite-installsupport/
/bin/rm -rf /etc/rc.d/*/*vmware-vcops-watchdog
/bin/rm -rf /etc/rc.d/*/*vmware-casa
/bin/rm -rf /etc/rc.d/*/*vmware-vcops
/bin/rm -rf /etc/rc.d/*/*vmware-vcops-web
/bin/rm -rf /etc/rc.d/*/*vmware-vcops-reboot-config
/bin/rm -rf /var/log/firstboot
/bin/rm -rf /var/log/preb2b
/bin/rm -rf /var/log/postb2b
/bin/rm -rf /var/log/firstboot
/bin/rm -rf /var/log/casa_logs
/bin/rm -rf /var/log/tomcat_logs
/bin/rm -rf /var/log/vcops_logs
/bin/rm -rf /var/.com.zerog.registry.xml
/bin/rm -rf /var/log/log
```


- 6** 次のコマンドを実行して sudoers エントリを削除します。インストーラを複数回実行した場合、次のコマンドを複数回実行する必要がある場合があります。

```
/bin/sed -i '/# ----- vCenter Operations Manager Settings for VCOPS_USER/,/# ----- End of  
vCenter Operations Manager Settings for VCOPS_USER/d' /etc/sudoers  
/bin/sed -i '/# ----- vCenter Operations Manager Settings for CaSA/,/# ----- End of vCenter  
Operations Manager Settings for CaSA/d' /etc/sudoers  
/bin/sed -i '/# ----- vCenter Operations Manager Settings for vsutilities/,/# ----- End of  
vCenter Operations Manager Settings for vsutilities/d' /etc/sudoers
```

- 7** sudoers ファイル /etc/sudoers を確認して、vRealize Operations Manager のエントリが確実にないようにします。

オブジェクト、アラート、アクション、ポリシー、ダッシュボード、およびレポートを vRealize Operations Manager で構成し、環境を効率的に監視します。管理設定を使用して環境を管理します。

vRealize Operations Manager でソリューションを構成して、環境内の外部データ ソースからデータを収集して分析します。接続後は、vRealize Operations Manager を使用して、環境内のオブジェクトを監視および管理します。vRealize Operations Manager とともにインストールされるソリューションには、vSphere、Endpoint Operations、Log Insight、および Business Management が含まれます。これらのアダプタを構成して、これらのインスタンスに接続して統合します。

問題が発生した場合に vRealize Operations Manager がアラートをトリガし、問題を解決するための推奨事項が提供されるようにアラート定義を作成します。アラートの構成のプロセスには、アラート、症状、推奨事項の定義が含まれます。

監視対象の環境の問題を解決するアクションを有効にします。このアクションでは、vRealize Operations Manager 環境自身に残ることで、問題を解決できます。

ポリシーを作成し、vRealize Operations Manager が使用するルールを定義します。ポリシーを使用して、環境内のオブジェクトに関する情報を分析して表示できます。

コンプライアンス標準を定義し、オブジェクトのコンプライアンスを決定します。vRealize Operations Manager アラート定義を使用して、オブジェクトが要求される標準を遵守していない場合に通知するコンプライアンス標準を作成することができます。

スーパー メトリックを作成して、環境の全体像を把握できるようにします。スーパー メトリックとは、1 つ以上のメトリックを含む数式です。スーパー メトリックはユーザー自身が設計するカスタム メトリックで、メトリックの組み合わせを単一のオブジェクトまたは複数のオブジェクトから追跡する必要がある場合に便利です。環境の動作に関して把握しておかなければならない内容が 1 つのメトリックで理解できない場合に、スーパー メトリックを定義できます。

ダッシュボードを作成し、環境にすでに存在する問題および生じ得る問題の特性と時間枠を判断します。ウィジェットをダッシュボードに追加して構成することで、ダッシュボードを作成します。

ビューを作成して、アラートを含むさまざまな監視対象のオブジェクトのメトリック、プロパティ、およびポリシーを解釈します。レポートを生成し、現在および予測されるリソースのニーズに関連する詳細情報を取得します。レポートは、ビューとダッシュボードのスケジュール設定されたスナップショットです。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [データ ソースへの vRealize Operations Manager の接続](#)

- [アラートおよびアクションの構成](#)
- [ポリシーの構成](#)
- [コンプライアンスの構成](#)
- [スーパー メトリックの構成](#)
- [オブジェクトの構成](#)
- [データ表示の構成](#)
- [管理設定の構成](#)
- [vRealize Operations Manager の管理インターフェイスについて](#)

データ ソースへの vRealize Operations Manager の接続

vRealize Operations Manager でソリューションを構成して、環境内の外部データ ソースからデータを収集して分析します。接続後は、vRealize Operations Manager を使用して、環境内のオブジェクトを監視および管理します。

データ ソースへの接続だけを提供するソリューションもありますが、定義済みのダッシュボード、ウィジェット、アラート、ビューを含めることもできます。

vRealize Operations Manager には VMware vSphere および Endpoint Operations Management ソリューションが含まれます。これらのソリューションは、vRealize Operations Manager をインストールするとインストールされます。

その他のソリューションは、NSX for vSphere 用 VMware 管理パックなどの管理パックとして vRealize Operations Manager に追加できます。Vmware 管理パックやその他のサードパーティのソリューションをダウンロードするには、[VMware Solution Exchange](#) にアクセスしてください。

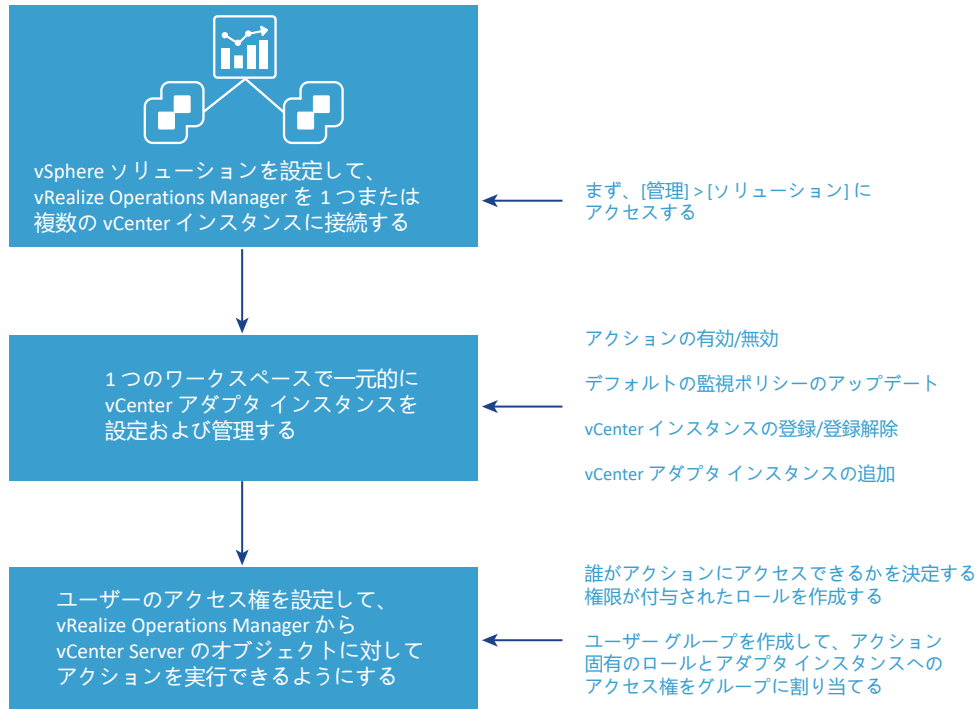
VMware vSphere vRealize Operations Manager のソリューション

VMware vSphere ソリューションは、vRealize Operations Manager を 1 つ以上の vCenter Server インスタンスに接続します。このインスタンスからデータとメトリックを収集し、インスタンスを監視してインスタンスでアクションを実行します。

vRealize Operations Manager は環境内のデータを評価することで、オブジェクト動作のトレンドを特定し、トレンドに基づいてシステム内のオブジェクトについて考えられる問題や将来のキャパシティを計算し、定義された症状がオブジェクトで生じた場合にアラートを発生します。

vSphere ソリューションの構成

vSphere ソリューションは、vRealize Operations Manager とともにインストールされます。ソリューションでは、vRealize Operations Manager を vCenter Server インスタンスに接続するのに設定する必要がある vCenter Server アダプタが提供されます。



アダプタの認証情報の仕組み

vRealize Operations Manager を vCenter Server インスタンスに接続するために使用される vCenter Server 認証情報は、vRealize Operations Manager がどのオブジェクトを監視するかを決定します。これらのアダプタの認証情報とユーザー権限がどのように連携しているかを理解し、アダプタとユーザーが正しく構成され、次の問題が生じないことを確認してください。

- 3 つのホストのいずれかにのみアクセスする権限を持っている認証情報を使用して vCenter Server インスタンスに接続するようにアダプタを構成した場合、vRealize Operations Manager にログインするすべてのユーザーには、1 つのホストのみが表示されます。これは、個別のユーザーが vCenter Server 内の 3 つのホストすべてに対する権限を持っている場合でも同じです。
- 提供した認証情報に vCenter Server 内のオブジェクトに対する限定的なアクセス権限しかない場合には、vRealize Operations Manager 管理ユーザーであっても vCenter Server 認証情報に権限が示されているオブジェクトに対してしかアクションを実行できません。
- 提供した認証情報に vCenter Server 内のすべてのオブジェクトに対するアクセス権限がある場合には、すべての vRealize Operations Manager ユーザーがこのアカウントを使用してアクションを実行できます。

アクションへのユーザー アクセスの制御

vCenter Server アダプタを使用して、vRealize Operations Manager から vCenter Server に対してアクションを実行します。アクションを実行するように選択する場合は、vCenter Server 環境のオブジェクトへのユーザー アクセスを制御する必要があります。管理者は、vRealize Operations Manager でユーザー権限をどのように構成するかに基づいて、ローカル ユーザーのユーザー アクセスを制御します。ユーザーが自分の vCenter Server アカウントを使用してログインする場合は、そのユーザーのアカウントが vCenter Server でどのように構成されているかによってそのユーザーの権限が決まります。

たとえば、vCenter Server における読み取り専用のロールが構成された vCenter Server ユーザーがいるとします。このユーザーに（比較的限定されたロールではなく）vCenter Server における vRealize Operations Manager パワー ユーザー ロールを与えた場合、このユーザーはオブジェクトに対してアクションを実行できます。これは、オブジェクトを変更する権限のある認証情報がアダプタに構成されているためです。このような予期しない結果を防ぐには、ローカル vRealize Operations Manager ユーザーと vCenter Server ユーザーに、環境内で彼らに利用させたい権限を構成します。

vRealize Operations Manager での vCenter アダプタ インスタンスの構成

vCenter Server インスタンスを vRealize Operations Manager で管理するには、vCenter Server インスタンスごとにアダプタ インスタンスを構成する必要があります。アダプタには、ターゲット vCenter Server との通信に使用する認証情報が必要です。

注意： 追加したアダプタの認証情報は、他のアダプタ管理者および vRealize Operations Manager コレクタ ホストと共有されます。他の管理者がこれらの認証情報を使用して、新規のアダプタ インスタンスを構成したり、アダプタ インスタンスを新規ホストに移動する可能性があります。



vSphere ソリューションの構成

(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_config_vsphere_solution)

前提条件

接続およびデータを収集するのに十分な権限を持つ vCenter Server 認証情報を把握していることを確認します。提供された認証情報で vCenter Server のオブジェクトへのアクセスが制限されている場合、ユーザーが持つ vCenter Server 権限にかかわらず、すべてのユーザーに、提供された認証情報でアクセスできるオブジェクトのみが表示されます。ユーザー アカウントには最低でも読み取り権限が必要であり、読み取り権限はデータ センターまたは vCenter Server レベルで割り当てられている必要があります。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックし、[ソリューション] をクリックします。
- 2 [ソリューション] タブで [VMware vSphere] を選択して、ツールバーで [構成] ボタンをクリックします。
- 3 アダプタ インスタンスの表示名と説明を入力します。
- 4 [vCenter Server] テキスト ボックスに、接続先の vCenter Server インスタンスの FQDN または IP アドレスを入力します。

vCenter Server の FQDN または IP アドレスには、vRealize Operations Manager クラスタのすべてのノードからアクセスできる必要があります。

- 5 vCenter Server インスタンスの認証情報を追加するには、[追加] アイコンをクリックし、必要な認証情報を入力します。

- 6 アダプタは、vRealize Operations Manager から vCenter Server 内のオブジェクトのアクションを実行するように構成されます。アクションを実行しない場合は、[無効] を選択します。

vCenter Server インスタンスに対して提供される認証情報もアクションを実行するために使用されます。これらの認証情報を使用しない場合は、[代替のアクション認証情報] を展開し、[追加] アイコンをクリックして代替の認証情報を提供することができます。

- 7 [テスト接続] をクリックして、vCenter Server インスタンスとの接続を検証します。

- 8 [証明書の確認と承諾] ダイアログ ボックスで、証明書情報を確認します。

- ◆ ダイアログ ボックスに表示される証明書がターゲットの vCenter Server の証明書と一致する場合は、[OK] をクリックします。
- ◆ 証明書を有効として認識できない場合、[キャンセル] をクリックします。テストは失敗し、vCenter Server への接続は完了しません。アダプタの構成を完了するには、vCenter Server の有効な URL を指定するか、vCenter Server の証明書が有効であることを確認する必要があります。

- 9 コレクタ、オブジェクトの検出、または変更イベントに関する詳細なオプションを変更するには、[詳細設定] を展開します。

これらの詳細設定については、[ソリューションの管理 - VMware vSphere ソリューション ワークスペースのオプション](#)を参照してください。

- 10 vRealize Operations Manager で環境内のオブジェクトに関する情報を分析および表示するために使用されるデフォルトの監視ポリシーを調整するには、[監視目標の定義] をクリックします。

[監視目標の定義] の設定については、[ソリューションの管理 - VMware vSphere ソリューション ワークスペースのオプション](#)を参照してください。

- 11 vCenter インスタンスの登録を管理するには、[登録の管理] をクリックします。

代替の認証情報を提供するか、[収集認証情報の使用] チェック ボックスをオンにすると、この vCenter Server アダプタ インスタンスを構成するときに指定した認証情報を使用できます。

- 12 [設定の保存] をクリックします。

アダプタ インスタンスがリストに追加されます。

結果

vRealize Operations Manager が vCenter Server インスタンスからデータの収集を開始します。管理オブジェクトの数によっては、最初の収集で 1 回の収集サイクル以上の時間がかかることがあります。標準の収集サイクルは 5 分間隔で開始します。

vCenter Server システムおよび vRealize Operations Manager コンポーネントとの通信で vRealize Operations Manager が使用するネットワーク ポートについては、[vRealize Operations Manager のポート要件](#)を参照してください。

次のステップ

アクションを実行するようにアダプタを構成した場合は、アクション ロールとユーザー グループを作成することによってアクションに対するユーザー アクセスを構成します。

アクションに適したユーザー アクセスの構成

ユーザーが vRealize Operations Manager で確実にアクションを実行できるようにするには、そのアクションに対するユーザーのアクセス権を構成する必要があります。

ロール権限を使用してアクションを実行できるユーザーを管理します。複数のロールを作成できます。各ロールでは、さまざまなアクション サブセットを実行するユーザー権限を付与できます。管理者ロールまたはデフォルトのスーパー ユーザー ロールを持つユーザーには、すでにアクションを実行するに必要な権限があります。

ユーザー グループを作成することで、個別のユーザー権限を構成するのではなく、アクション固有のロールをグループに追加できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] - [アクセス コントロール] をクリックします。
- 2 ロールを作成するには：
 - a [ロール] タブをクリックします。
 - b [追加] アイコンをクリックして、ロールの名前と説明を入力します。
- 3 ロールに権限を適用するには、ロールを選択し、[権限] ペインで [編集] アイコンをクリックします。
 - a [環境] を展開し、[アクション] を展開します。
 - b 1 つ以上のアクションを選択して、[更新] をクリックします。
- 4 ユーザー グループを作成するには：
 - a [ユーザー グループ] タブをクリックし、[追加] アイコンをクリックします。
 - b グループの名前と説明を入力し、[次へ] をクリックします。
 - c グループにユーザーを割り当て、[オブジェクト] タブをクリックします。
 - d アクションを実行する権限を付与して作成されたロールを選択し、[このロールをユーザーに割り当てます] チェック ボックスをオンにします。
 - e アクション実行のためにグループがアクセスを必要とする各アダプタ インスタンスを選択して、オブジェクトの権限を構成します。
 - f [終了] をクリックします。

次のステップ

グループに割り当てたユーザーをテストします。ログアウトし、いずれかのユーザーとして再度ログインします。このユーザーが選択したアダプタ上で想定されるアクションを実行できることを確認してください。

ソリューションの管理 - VMware vSphere ソリューション ワークスペースのオプション

vRealize Operations Manager により環境の監視を開始するには、VMware vSphere ソリューションを構成します。このソリューションには、ターゲット vCenter Server インスタンスからデータを収集する vCenter Server アダプタが含まれます。

ソリューションの管理 - VMware vSphere ワークスペースを確認できる場所

左側のペインで、[管理] - [ソリューション]を選択します。[ソリューション] タブで、[VMware vSphere] を選択し、ツールバーの [構成] をクリックします。

ソリューションの管理 - VMware vSphere ワークスペースのオプション

[ソリューションの管理] ページのオプションに加えて、監視目標を定義し、登録を管理できます。

表 4-1. ソリューションの管理ページのオプション

オプション	説明
アダプタ タイプ リスト	<p>ソリューションに含まれるアダプタのリストを提供します。</p> <p>構成済みのアダプタにより、vRealize Operations Manager が vCenter Server インスタンスまたはアクションインスタンスと通信するために必要な設定および認証情報が提供されます。</p> <p>vRealize Operations Manager のインスタンスを更新し、アラート定義とシンプトムの定義を上書きするオプションを選択した後、既存のコンプライアンスのアラート定義を上書きする必要があります。デフォルトの内容を再設定するには、[ソリューションの構成] ページに移動し、[管理] - [ソリューション]をクリックします。VMware vSphere ソリューションをクリックし、[構成] をクリックして、ソリューションの管理ワークスペースで [デフォルトの内容の再設定] をクリックします。</p> <p>[デフォルトの内容の再設定]オプションで、コンプライアンス標準が vSphere 6.0 および 5.5 オブジェクトに対して最新であることを確認します。アラート定義とシンプトムの定義には現在、vSphere6.0 および 5.5 の両方のコンプライアンス標準が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ vRealize Operations Manager の現在のバージョンをアップグレードする場合、アラート定義とシンプトムの定義を上書きするオプションを選択する必要があります。 ■ このリリースで提供される新しい内容によりアラート定義とシンプトムの定義を上書きしない場合、一部のコンプライアンス ルールには新しいアラート定義とシンプトムの定義が含まれますが、その他のコンプライアンス ルールでは古いアラート定義とシンプトムの定義が引き続き使用されます。
インスタンス名リスト	<p>選択されたアダプタ タイプに基づいた、構成済みのアダプタ インスタンスのリスト。</p> <p>このリストは、少なくとも 1 つのインスタンスを構成するまでは空白になります。</p>
インスタンス設定	<p>ターゲットの vCenter Server インスタンスを識別するために使用される設定。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 表示名。vRealize Operations Manager に表示する vCenter Server インスタンスの名前を入力します。一般的な方法では、インスタンス間で容易に識別や区別ができるように IP アドレスを含めます。 ■ 説明。インスタンスの管理に役立つ追加情報があれば入力します。
基本設定	<p>ターゲットの vCenter Server への接続に使用する最小設定。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ vCenter Server。ターゲットの vCenter Server インスタンスの FQDN または IP アドレスを入力します。この FQDN または IP アドレスは、vRealize Operations Manager クラスタのすべてのノードからアクセスできる必要があります。 ■ 認証情報。プラス記号をクリックして、表示名である認証情報名、この vCenter Server インスタンスへの接続に使用する認証情報のユーザー名、および関連付けられたパスワードを追加します。

表 4-1. ソリューションの管理ページのオプション（続き）

オプション	説明
vCenter アクション	<p>vRealize Operations Manager から vCenter Server 内のオブジェクトに対してアクションを実行するようにアダプタを構成するための設定。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アクションを有効にしますか? vCenter アダプタは、vCenter Server インスタンス内のオブジェクトに対してアクションを実行するようにデフォルトで構成されます。アダプタでアクションを実行しない場合は [無効化] を選択します。オブジェクトに対してアクションを実行する場合は、[有効化] を選択します。 ■ (オプション) 代替のアクション認証情報。アクションを実行するために、vCenter Server への接続用に指定した同じ認証情報を使用できます。また、このオプションをクリックして代替の認証情報を指定することもできます。 ■ テスト接続。クリックして、指定された認証情報がターゲットの vCenter Server に接続でき、証明書を検証できることを確認します。表示された証明書は、vCenter Server インスタンスのリーフ証明書で、完全な証明書チェーンではありません。ダイアログ ボックスに表示された証明書がターゲットの vCenter Server の証明書に一致する場合のみ、[OK] をクリックします。
詳細設定	このアダプタ インスタンスを管理するための特定のコレクタを指定するオプションにより、オブジェクトの検出と変更のイベントを管理します。
コレクタ/グループ	アダプタ プロセスの管理に使用する vRealize Operations Manager コレクタを決定します。アダプタ インスタンスが 1 つしかない場合は、[デフォルトのコレクタ グループ] を選択します。環境に複数のコレクタがあり、ワークロードを分散してパフォーマンスを最適化する場合、このインスタンスのアダプタ プロセスを管理するコレクタを選択します。
自動検出	<p>監視対象システムに追加された新規オブジェクトが検出され、アダプタの初期構成後に vRealize Operations Manager に追加されるかどうかを決定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 値が true の場合、vRealize Operations Manager によって初期構成後に監視対象システムに追加される新規オブジェクトに関する情報が収集されます。たとえば、ホストと仮想マシンを追加する場合、これらのオブジェクトは次の収集サイクルで追加されます。デフォルトの値は、次のとおりです。 ■ 値が false の場合、vRealize Operations Manager によってアダプタ インスタンスの構成時にターゲット システムに存在するオブジェクトのみが監視されます。
プロセス変更イベント	<p>アダプタで、vCenter Server インスタンスで生成されたイベントをイベント コレクタを使用して収集、処理するかどうかを決定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 値が true の場合、イベント コレクタによって vCenter Server のイベントが収集、公開されます。デフォルトの値は、次のとおりです。 ■ 値が false の場合、イベント コレクタによってイベントが収集、公開されません。
vSphere Distributed Switch の収集を有効にする	False に設定すると、関連するカテゴリの収集が省略され、収集されるデータ セットが削減されます
仮想マシンのフォルダの収集を有効にする	
vSphere 分散ポート グループの収集を有効にする	
キャパシティ計算から仮想マシンを除外する	True に設定すると、関連するカテゴリの収集が省略され、収集されるデータ セットが削減されます。

表 4-1. ソリューションの管理ページのオプション（続き）

オプション	説明
収集された仮想マシンの最大数	仮想マシンの収集数を制限して、収集されるデータ セットを削減します。 仮想マシンのデータを完全に省略して、vRealize Operations Manager にホスト データのみを収集させる場合は、この値を 0 に設定します。
データを vSphere Predictive DRS に提供	vSphere Predictive DRS は、プロアクティブに vCenter Server クラスタのロード バランシングを行って、クラスタ ワークロード内の予測可能なパターンに対応できます。 vRealize Operations Manager は、vCenter Server で実行される仮想マシンを監視して長期の履歴データを分析し、リソース使用の予測パターンに関する予測データを Predictive DRS に提供します。これらの予測可能なパターンに基づいて、Predictive DRS が移動し、仮想マシン間のリソース使用量をバランシングします。 Predictive DRS は、vRealize Operations Manager によって監視されている vCenter Server インスタンスで管理される Compute Cluster に対して有効にすることもできます。Compute Cluster 単位で Predictive DRS を有効にする方法の詳細については、『vSphere リソース管理ガイド』を参照してください。 true に設定すると、vRealize Operations Manager が予測可能なデータ プロバイダに指定され、予測可能なデータが vCenter Server に送信されます。アクティブな Predictive DRS データ プロバイダを vCenter Server に一度に 1 つのみ登録できます。

[監視目標の定義] ページには、監視されている環境において vRealize Operations Manager がデータを収集および分析する方法を決定するデフォルト ポリシー オプションがあります。このページのオプションを変更して、新しいデフォルトのポリシーを作成できます。

表 4-2. [監視目標の定義] ページのオプション

オプション	説明
環境でアラートを受ける必要のあるオブジェクトはどれですか？	アラートを受信するオブジェクトのタイプを選択します。仮想マシン以外、仮想マシンのみ、またはすべてのインフラストラクチャ オブジェクトについて、vRealize Operations Manager アラートを設定できます。
有効にするアラートのタイプどれですか？	vRealize Operations Manager では、オブジェクトの健全性、リスク、および効率のアラートのトリガを有効にできます。
メモリ キャパシティの構成基準	監視する環境のタイプに基づくメモリ容量モデルを設定します。たとえば、本番環境を監視する場合、パフォーマンスの確保用に穏やかな設定を使用するために [vSphere のデフォルト] のモデルを選択します。テスト環境および開発環境では、[最も積極的] な設定を使用します。すべての割り当て済みメモリを容量計算に使用する場合は [最も保守的] な設定を使用します。
vSphere セキュリティ強化ガイド アラートを有効にしますか？	継続的かつ安全に vSphere オブジェクトを評価、運用するには、『vSphere セキュリティ強化ガイド』を使用します。このアラートを有効にした場合、vRealize Operations Manager では、『vSphere セキュリティ強化ガイド』のルールに対してオブジェクトを評価します。

『vSphere セキュリティ強化ガイド』については、<http://www.vmware.com/security/hardening-guides.html> を参照してください。

[登録の管理] ページを使用して、vCenter Server の登録を行うか、登録を解除するための認証情報を指定します。

表 4-3. 登録の管理ページのオプション

オプション	説明
ユーザー名とパスワード	認証情報のユーザー名と関連するパスワード。
収集認証情報の使用	このチェック ボックスをオンにすると、この vCenter Server アダプタ インスタンスを構成するための同じ認証情報を使用します。

[設定の保存] をクリックして、ソリューションの構成を完了します。

Endpoint Operations Management vRealize Operations Manager のソリューション

Endpoint Operations Management を構成して、オペレーティング システムのメトリックを収集し、リモート プラットフォームとアプリケーションの可用性を監視します。このソリューションは、vRealize Operations Manager とともにインストールされます。

Endpoint Operations Management エージェントのインストールとデプロイ

次のリンクにある情報を利用して、Endpoint Operations Management エージェントを環境内にインストール、デプロイできます。

Endpoint Operations Management エージェントのインストール準備

Endpoint Operations Management エージェントをインストールする前に、準備作業を行う必要があります。

前提条件

- SSL 通信のために管理しているキーストアを使用するようエージェントを構成するには、ホストでエージェントの JKS フォーマットのキーストアをセットアップし、その SSL 証明書をインポートします。キーストアのフルパスとパスワードをメモします。このデータはエージェントの `agent.properties` ファイルに指定する必要があります。

エージェントのキーストアのパスワードとプライベート キーのパスワードが同じであることを確認します。

- エージェントの `HQ_JAVA_HOME` の場所を定義します。

vRealize Operations Manager のプラットフォーム固有のインストーラには JRE 1.8.x が含まれています。環境と使用するインストーラによっては、JRE の場所を定義して、エージェントが使用する JRE を見つけられるようにする必要があります。 [Endpoint Operations Management コンポーネントの JRE の場所の構成](#) を参照してください。

Endpoint Operations Management エージェントをサポートするオペレーティング システム

以下の表には、Endpoint Operations Management エージェントの展開をサポートするオペレーティング システムを記載しています。

以下の構成は、開発と本番環境の両方でエージェントをサポートします。

表 4-4. Endpoint Operations Management エージェントをサポートするオペレーティング システム

オペレーティング システム	プロセッサ アーキテクチャ	JVM
RedHat Enterprise Linux (RHEL) 5.x, 6.x, 7.x	x86_64, x86_32	Oracle Java SE8
CentOS 5.x, 6.x, 7.x	x86_64, x86_32	Oracle Java SE8
SUSE Enterprise Linux (SLES) 11.x, 12.x	x86_64	Oracle Java SE8
Windows 2008 Server, 2008 Server R2	x86_64, x86_32	Oracle Java SE8
Windows 2012 Server, 2012 Server R2	x86_64	Oracle Java SE8
Solaris 10, 11	x86_64, SPARC	Oracle Java SE7
AIX 6.1, 7.1	Power PC	IBM Java SE7
VMware Photon Linux 1.0	x86_64	Open JDK 1.8.0_72-BLFS
Oracle Linux バージョン 5, 6, 7	x86_64, x86_32	Open JDK Runtime Environment 1.7

エージェント インストーラ パッケージの選択

Endpoint Operations Management エージェントのインストール ファイルは vRealize Operations Manager インストール パッケージに含まれています。

Endpoint Operations Management エージェントは、tar.gz または .zip アーカイブから、あるいは RPM をサポートする Windows または Linux 系システム固有のインストーラからインストールできます。

JRE バージョンでない Endpoint Operations Management エージェントをインストールするときは、古いバージョンの Java に関連するセキュリティのリスクを避けるため、必ず最新の Java バージョンをインストールすることが推奨されます。

- [エージェントを RPM パッケージから Linux プラットフォームにインストールする](#)

Endpoint Operations Management エージェントは RedHat Package Manager (RPM) パッケージからインストールすることができます。noarch パッケージのエージェントには JRE は含まれていません。

- [エージェントをアーカイブから Linux プラットフォームにインストールする](#)

Linux プラットフォームでは、Endpoint Operations Management エージェントを tar.gz アーカイブからインストールすることができます。

- [エージェントをアーカイブから Windows プラットフォームにインストールする](#)

Windows プラットフォームでは、Endpoint Operations Management エージェントを .zip ファイルからインストールすることができます。

- [Windows インストーラを使用してエージェントを Windows プラットフォームにインストールする](#)

Windows プラットフォームでは、Windows インストーラを使って Endpoint Operations Management エージェントをインストールすることができます。

- [Windows マシンへの Endpoint Operations Management エージェントのサイレント インストール](#)

サイレント インストールまたは完全なサイレント インストールを行うことで、Windows マシンに Endpoint Operations Management エージェントをインストールできます。

エージェントを RPM パッケージから Linux プラットフォームにインストールする

Endpoint Operations Management エージェントは RedHat Package Manager (RPM) パッケージからインストールすることができます。noarch パッケージのエージェントには JRE は含まれていません。

エージェントだけが含まれるアーカイブは、オペレーティング システムやアーキテクチャが異なる多数のプラットフォームにエージェントをデプロイする場合に便利です。エージェントのアーカイブは Windows 環境用と UNIX 系環境用があり、それぞれ JRE が含まれるものと含まれないものがあります。

RPM は次のアクションを実行します。

- epops という名前のユーザーおよびグループが存在しない場合は、作成します。このユーザーはロックされたサービス アカウントであり、ログインできません。
- エージェントのファイルを /opt/vmware/epops-agent にインストールします。
- init スクリプトを /etc/init.d/epops-agent にインストールします。
- init スクリプトを chkconfig に追加し、実行レベル 2、3、4、5 に対して on を設定します。

複数のエージェントをインストールする場合は、[複数の Endpoint Operations Management エージェントを同時にインストールする](#)を参照してください。

前提条件

- Endpoint Operations Management エージェントをデプロイするために必要な権限があることを確認します。Endpoint Operations Management エージェントをインストール可能なロールを含む vRealize Operations Manager のユーザー認証情報が必要です。[vRealize Operations Manager でのロールと権限](#)を参照してください。
- ICMP チェックを実行する計画がある場合は、Endpoint Operations Management エージェントを root 権限でインストールする必要があります。
- SSL 通信のために管理しているキーストアを使用するようエージェントを構成するには、ホストでエージェントの JKS フォーマットのキーストアをセットアップし、その SSL 証明書を使用するようにエージェントを構成します。キーストアのフル パスとパスワードをメモします。このデータはエージェントの agent.properties ファイルに指定する必要があります。

エージェントのキーストアのパスワードとプライベート キーのパスワードが同じであることを確認します。

- JRE が含まれないパッケージをインストールする場合は、エージェントの HQ_JAVA_HOME の場所を定義します。

Endpoint Operations Management のプラットフォーム固有のインストーラには JRE 1.8.x が含まれていますが、プラットフォームに依存しないインストーラには JRE が含まれていません。環境と使用するインストーラによっては、JRE の場所を定義して、エージェントが使用する JRE を見つけられるようにする必要があります。[Endpoint Operations Management コンポーネントの JRE の場所の構成](#)を参照してください。

- JRE が含まれないパッケージをインストールする場合は、最新バージョンの Java を使用していることを確認します。古いバージョンの Java を使用するとセキュリティ上のリスクにさらされる可能性があります。
- Endpoint Operations Management エージェントのインストール ディレクトリに vRealize Hyperic エージェントのインストールが含まれていないことを確認します。
- noarch インストールを使用している場合は、プラットフォームに JDK または JRE がインストールされていることを確認します。

- エージェントのインストールパスを指定するときには、ASCII 文字だけを使用していることを確認してください。非 ASCII 文字を使用する場合は、Linux マシンと SSH クライアント アプリケーションのエンコーディングを UTF-8 に設定する必要があります。

手順

- 1 ターゲット マシンに合った RPM バンドルをインストールします。

オペレーティング システム	ダウンロードする RPM バンドル
64 ビット オペレーティング システム	epops-agent-x86-64-linux-version.rpm
32 ビット オペレーティング システム	epops-agent-x86-linux-version.rpm
アーキテクチャなし	epops-agent-noarch-linux-version.rpm

- 2 root の認証情報を使って SSH 接続をオープンします。
- 3 `rpm -i epops-agent-Arch-linux-version.rpm` を実行して、監視対象のプラットフォームにエージェントをインストールします。Arch はアーカイブの名前、version はバージョン番号です。

結果

Endpoint Operations Management エージェントがインストールされ、起動時にサービスを開始するよう構成されます。

次のステップ

サービスを開始する前に、プラグインがアプリケーションを検出および監視するのに必要なすべての権限が epops ユーザー認証情報に含まれていることを確認し、次のプロセスのいずれかを実行します。

- `service epops-agent start` を実行し、epops-agent サービスを起動します。
- Endpoint Operations Management エージェントを SuSE 12.x が実行されているマシンにインストールする場合は、`[EP Ops Home]/bin/ep-agent.sh start` コマンドを実行して Endpoint Operations Management エージェントを起動します。
- Endpoint Operations Management エージェントを開始するときに、エージェントが既に実行されていることを伝えるメッセージが表示される場合があります。エージェントを起動する前に、`./bin/ep-agent.sh stop` を実行します。
- `agent.properties` ファイルでエージェントを構成して、サービスを起動します。[Endpoint Operations Management エージェントから vRealize Operations Manager サーバへのセットアップ プロパティの有効化](#)を参照してください。

エージェントをアーカイブから Linux プラットフォームにインストールする

Linux プラットフォームでは、Endpoint Operations Management エージェントを tar.gz アーカイブからインストールすることができます。

デフォルトでは、インストール中のセットアップ プロセスで構成の値を指定するよう求められます。このプロセスは、エージェントのプロパティ ファイルに値を指定しておくことで自動化できます。インストーラはプロパティ ファイルで値を検出すると、それらの値を適用します。以降のデプロイでも、エージェントのプロパティ ファイルで指定された値が使用されます。

前提条件

- Endpoint Operations Management エージェントをデプロイするために必要な権限があることを確認します。Endpoint Operations Management エージェントをインストール可能なロールを含む vRealize Operations Manager のユーザー認証情報が必要です。 [vRealize Operations Manager でのロールと権限](#) を参照してください。
- ICMP チェックを実行する計画がある場合は、Endpoint Operations Management エージェントを root 権限でインストールする必要があります。
- Endpoint Operations Management エージェントのインストール ディレクトリに vRealize Hyperic エージェントのインストールが含まれていないことを確認します。
- エージェントのインストール パスを指定するときには、ASCII 文字だけを使用していることを確認してください。非 ASCII 文字を使用する場合は、Linux マシンと SSH クライアント アプリケーションのエンコーディングを UTF-8 に設定する必要があります。

手順

- 1 お使いの Linux オペレーティング システムに合った Endpoint Operations Management エージェントのインストール用 tar.gz ファイルをダウンロードし、展開します。

オペレーティング システム	ダウンロードする tar.gz バンドル
64 ビット オペレーティング システム	epops-agent-x86-64-linux-version.tar.gz
32 ビット オペレーティング システム	epops-agent-x86-linux-version.tar.gz
アーキテクチャなし	epops-agent-noJRE-version.tar.gz

- 2 `cd agent name/bin` を実行し、エージェントの bin ディレクトリを開きます。
- 3 `ep-agent.sh start` を実行します。
初めてエージェントをインストールするときに、エージェントのプロパティ ファイルに必要な構成値をすべて指定していないと、セットアップ プロセスが開始されます。
- 4 (オプション) `ep-agent.sh status` を実行し、IP アドレスやポートなど、エージェントの現在のステータスを表示します。

次のステップ

エージェントのクライアント証明書を登録します。 [エージェントのクライアント証明書の生成](#) を参照してください。

エージェントをアーカイブから Windows プラットフォームにインストールする

Windows プラットフォームでは、Endpoint Operations Management エージェントを .zip ファイルからインストールすることができます。

デフォルトでは、インストール中のセットアップ プロセスで構成の値を指定するよう求められます。このプロセスは、エージェントのプロパティ ファイルに値を指定しておくことで自動化できます。インストーラはプロパティ ファイルで値を検出すると、それらの値を適用します。以降のデプロイでも、エージェントのプロパティ ファイルで指定された値が使用されます。

前提条件

- Endpoint Operations Management エージェントをデプロイするために必要な権限があることを確認します。Endpoint Operations Management エージェントをインストール可能なロールを含む vRealize Operations Manager のユーザー認証情報が必要です。 [vRealize Operations Manager でのロールと権限](#) を参照してください。
- Endpoint Operations Management エージェントのインストール ディレクトリに vRealize Hyperic エージェントのインストールが含まれていないことを確認します。
- Windows のエージェント インストーラを実行する前に、Endpoint Operations Management または vRealize Hyperic エージェントが環境にインストールされていないことを確認してください。

手順

- 1 お使いの Windows オペレーティング システムに合った Endpoint Operations Management エージェントのインストール用 .zip ファイルをダウンロードし、展開します。

オペレーティング システム	ダウンロードする ZIP バンドル
64 ビット オペレーティング システム	epops-agent-x86-64-win-version.zip
32 ビット オペレーティング システム	epops-agent-win32-version.zip
アーキテクチャなし	epops-agent-noJRE-version.zip

- 2 `cd agent name\bin` を実行し、エージェントの bin ディレクトリを開きます。
- 3 `ep-agent.bat install` を実行します。
- 4 `ep-agent.bat start` を実行します。

初めてエージェントをインストールするときに、エージェントのプロパティ ファイルで構成値を指定していないと、セットアップ プロセスが開始されます。

次のステップ

エージェントのクライアント証明書を生成します。 [エージェントのクライアント証明書の生成](#) を参照してください。

Windows インストーラを使用してエージェントを Windows プラットフォームにインストールする

Windows プラットフォームでは、Windows インストーラを使って Endpoint Operations Management エージェントをインストールすることができます。

エージェントのサイレント インストールを実行できます。 [Windows マシンへの Endpoint Operations Management エージェントのサイレント インストール](#) を参照してください。

前提条件

- Endpoint Operations Management エージェントをデプロイするために必要な権限があることを確認します。Endpoint Operations Management エージェントをインストール可能なロールを含む vRealize Operations Manager のユーザー認証情報が必要です。 [vRealize Operations Manager でのロールと権限](#) を参照してください。
- Endpoint Operations Management エージェントのインストール ディレクトリに vRealize Hyperic エージェントのインストールが含まれていないことを確認します。

- すでにマシンに Endpoint Operations Management エージェントをインストール済みの場合は、エージェントが実行されていないことを確認します。
- Windows のエージェント インストーラを実行する前に、Endpoint Operations Management または vRealize Hyperic エージェントが環境にインストールされていないことを確認してください。
- vRealize Operations Manager のユーザー名とパスワード、vRealize Operations Manager サーバのアドレス (FQDN)、およびサーバ証明書のサムプリント値を知っている必要があります。この手順で、証明書のサムプリントについての追加情報を確認できます。

手順

- 1 お使いの Windows プラットフォームに合った Windows のインストール用 EXE ファイルをダウンロードします。

オペレーティング システム	ダウンロードする RPM バンドル
64 ビット オペレーティング システム	epops-agent-x86-64-win-version.exe
32 ビット オペレーティング システム	epops-agent-x86-win-version.exe

- 2 ファイルをダブルクリックして、インストール ウィザードを開きます。
- 3 インストール ウィザードの手順を完了します。

ユーザーとシステムのロケールが同じであり、インストール パスにシステム ロケールのコード ページに含まれる文字だけが含まれていることを確認します。ユーザーとシステムのロケールは、地域オプションまたは地域設定のコントロール パネルで設定できます。

サーバ証明書のサムプリントの定義に関連する次の情報に注意してください。

- サーバ証明書のサムプリントは、サイレント インストールを実行するために必要です。
 - サムプリントには SHA1 または SHA256 アルゴリズムを使用できます。
 - デフォルトでは、クラスタ内のすべてのノードの証明書の署名に使用される自己署名 CA 証明書が vRealize Operations Manager サーバによって生成されます。この場合、エージェントがすべてのノードと通信できるようにするには、サムプリントは CA 証明書のサムプリントでなければなりません。
 - vRealize Operations Manager 管理者は、デフォルトの証明書を使用する代わりにカスタム証明書をインポートできます。この場合は、その証明書に対応するサムプリントをこのプロパティの値として指定する必要があります。
 - 証明書のサムプリントの値を確認するには、<https://IP Address/admin> の vRealize Operations Manager 管理インターフェイスにログインし、メニューバーの右側にある [SSL 証明書] アイコンをクリックします。オリジナルの証明書をカスタム証明書で置き換えていない場合は、リスト内の 2 番目のサムプリントが正しいサムプリントです。オリジナルの証明書をカスタム証明書で置き換えた場合は、リスト内の最初のサムプリントが正しいサムプリントです。
- 4 (オプション) ep-agent.bat query を実行し、エージェントがインストールされ、実行中であるかどうかを確認します。

結果

Windows プラットフォーム上でエージェントの実行が開始されます。

注意： インストール ウィザードで一部のパラメータを指定しなかったり、無効な値が指定されていても、エージェントの実行は開始されます。*product installation path/log* ディレクトリにある *wrapper.log* ファイルと *agent.log* ファイルを調べて、インストール エラーがないことを確認してください。

Windows マシンへの Endpoint Operations Management エージェントのサイレント インストール

サイレント インストールまたは完全なサイレント インストールを行うことで、Windows マシンに Endpoint Operations Management エージェントをインストールできます。

サイレント インストールと完全なサイレント インストールは、コマンド ライン インターフェイスからセットアップ インストーラの実行ファイルを使用して行います。

Windows のエージェント インストーラを実行する前に、Endpoint Operations Management または vRealize Hyperic エージェントが環境にインストールされていないことを確認してください。

次のパラメータを使用して、インストール プロセスをセットアップします。これらのパラメータの詳細については、[Endpoint Operations Management エージェントのセットアップ プロパティの指定](#)を参照してください。

注意： Windows インストーラに指定したパラメータは、検証なしにエージェント構成に渡されます。誤った IP アドレスやユーザー認証情報を指定すると、Endpoint Operations Management エージェントは起動できません。

表 4-5. サイレント インストールのコマンド ライン パラメータ

パラメータ	値	必須/オプション	コメント
-serverAddress	FQDN/IP アドレス	必須	vRealize Operations Manager サーバの FQDN または IP アドレス
-username	文字列	必須	
-securePort	数	任意	デフォルトは 443
-password	文字列	必須	
-serverCertificateThumbprint	文字列	必須	vRealize Operations Manager サーバ証明書のサムプリント。証明書のサムプリントは、たとえば -serverCertificateThumbprint "31:32:FA:1F:FD:78:1E:D8:9A:15:32:85:D7:FE:54:49:0A:1D:9F:6D" のように引用符で囲む必要があります。

インストール プロセスの他のさまざまな属性を定義するパラメータが使用できます。

表 4-6. サイレント インストールのその他のコマンド ライン パラメータ

パラメータ	デフォルト値	コメント
/DIR	C:\ep-agent	インストール パスの指定。インストール パスにスペースは使用できません。/DIR コマンドとインストール パスは、たとえば /DIR=C:\ep-agent のように等号でつなぐ必要があります。
/SILENT	なし	サイレント インストールを実行する指定。サイレント インストールでは、進捗ウィンドウだけが表示されます。
/VERYSILENT	なし	完全なサイレント インストールを実行する指定。完全なサイレント インストールでは、進捗ウィンドウは表示されません。ただし、無効にしていなければ、開始プロンプトと同じように、インストールのエラー メッセージは表示されます。

Endpoint Operations Management エージェントでの Java の前提条件

すべての Endpoint Operations Management エージェントで、Java Cryptography Extension (JCE) Unlimited Strength Jurisdiction ポリシー ファイルが Java パッケージに含まれている必要があります。

Java Cryptography Extension (JCE) Unlimited Strength Jurisdiction ポリシー ファイルは、JRE Endpoint Operations Management エージェントのインストール オプションに含まれています。

JRE ファイルが含まれていない Endpoint Operations Management エージェント パッケージをインストールすることも、後で JRE を追加するよう選択することもできます。

JRE が含まれないインストール オプションを選択した場合、Endpoint Operations Management エージェントを登録できるようにするには、Java パッケージに Java Cryptography Extension (JCE) Unlimited Strength Jurisdiction ポリシー ファイルが含まれている必要があります。JRE が含まれないオプションを選択した場合、Java パッケージに Java Cryptography Extension (JCE) Unlimited Strength Jurisdiction ポリシー ファイルが含まれていないと、エラー メッセージ「Server might be down (or wrong IP/port were used) (サーバがダウンしているか、または IP/ポートが誤っている可能性があります)」と「Cannot support TLS_RSA_WITH_AES_256_CBC_SHA with currently installed providers(現在インストールされているプロバイダでは TLS_RSA_WITH_AES_256_CBC_SHA をサポートできません)」が表示されます。

Endpoint Operations Management コンポーネントの JRE の場所の構成

Endpoint Operations Management エージェントは JRE を必要とします。プラットフォーム固有の Endpoint Operations Management エージェント インストーラには JRE が含まれています。プラットフォームに依存しない Endpoint Operations Management エージェント インストーラには JRE が含まれていません。

JRE が含まれないインストール オプションを選択した場合、End Point Operations Management エージェントを登録できるようにするには、Java パッケージに Java Cryptography Extension (JCE) Unlimited Strength Jurisdiction ポリシー ファイルが含まれている必要があります。詳細については、[Endpoint Operations Management エージェントでの Java の前提条件](#) を参照してください。

ユーザーの環境と使用するインストール パッケージによっては、エージェント用に JRE の場所を定義しなければならないことがあります。次の環境では、JRE の場所を構成する必要があります。

- 使用する予定の独自の JRE が含まれているマシン上にプラットフォーム固有のエージェントをインストールする場合

■ プラットフォームに依存しないエージェントをインストールする場合

エージェントが JRE を解決する方法

エージェントはプラットフォームのタイプに基づいて JRE を解決します。

UNIX 系のプラットフォーム

UNIX 系のプラットフォームでは、エージェントは使用する JRE を次の順序で判断します。

- 1 HQ_JAVA_HOME 環境変数
- 2 組み込み JRE
- 3 JAVA_HOME 環境変数

Linux プラットフォーム

Linux プラットフォームでは、`export HQ_JAVA_HOME= path_to_current_java_directory` を使用してシステム変数を定義します。

Windows プラットフォーム

Windows プラットフォームでは、エージェントは使用する JRE を次の順序で解決します。

- 1 HQ_JAVA_HOME 環境変数

変数で定義するパスには、スペースを含めることはできません。チルダ (~) 文字を使って、パスの短縮形を使用することを検討してください。たとえば、`c:\Program Files\Java\jre7` は `c:\Progra~1\Java\jre7` のようにできます。チルダの後の数字は、そのディレクトリ内で名前が `progra` で始まるファイルのアルファベット順に依存します (a = 1、b = 2 など)。

- 2 組み込み JRE

システム変数は、[コンピューター] メニューから定義します。[プロパティ] - [詳細設定] - [環境変数] - [システム環境変数] - [新規] を選択します。

Windows の既知の問題により、Windows Server 2008 R2 および 2012 R2 では、システム変数の値が更新または削除されている場合でも、Windows サービスが古い値を保持することがあります。その結果、HQ_JAVA_HOME システム変数の更新または削除が Endpoint Operations Management エージェント サービスに反映されないことがあります。その場合、Endpoint Operations Management エージェントが HQ_JAVA_HOME の古い値を使用して、誤った JRE バージョンを使用することになります。

Endpoint Operations Management エージェントのシステム前提条件

localhost をループバック アドレスとして定義しない場合、Endpoint Operations Management エージェントは登録せず、次のエラーが表示されます。Connection failed.Server may be down (or wrong IP/port were used).Waiting for 10 seconds before retrying.

回避策として、次の手順を実行します。

手順

- 1 ホスト ファイル /etc/hosts (Linux の場合) または C:\Windows\System32\Drivers\etc\hosts (Windows の場合) を開きます。

- 2 ファイルを編集して、127.0.0.1 localhost を使用し、localhost マッピングを IPv4 127.0.0.1 ループバック アドレスに含めます。
- 3 ファイルを保存します。

Endpoint Operations Management エージェントは IPv6 をサポートしていません。

Endpoint Operations Management エージェントから vRealize Operations Manager サーバへの通信プロパティの構成

エージェントを初めて起動する前に、エージェントが vRealize Operations Manager サーバと通信するためのプロパティやその他のエージェント プロパティをエージェントの `agent.properties` ファイルで定義できます。プロパティ ファイルでエージェントを構成すれば、複数のエージェントのデプロイを合理化できます。

プロパティ ファイルが存在する場合は、構成を変更する前にそのファイルのバックアップを作成します。エージェントにプロパティ ファイルがない場合は、作成します。

エージェントは、`AgentHome/conf` からプロパティ ファイルを参照します。これは `agent.properties` のデフォルトの場所です。

エージェントが vRealize Operations Manager サーバとの通信を確立するのに必要なプロパティをこれらのいずれかの場所で見つけることができない場合、エージェントを初めて起動したときにプロパティ値を入力するように求められます。

構成を完了するまでにいくつかの手順を実行するように求められます。

一部のエージェント プロパティは、初めて起動する前または起動した後のいずれでも定義できます。次の動作を制御するプロパティは、初めて起動する前に構成する必要があります。

- エージェントが、vRealize Operations Manager が生成したキーストアではなく、ユーザーが管理する SSL キーストアを使用する必要があるかどうか。
- エージェントがプロキシ サーバを通じて vRealize Operations Manager サーバに接続する必要があるかどうか。

前提条件

vRealize Operations Manager サーバが実行されていることを確認します。

手順

1 Endpoint Operations Management エージェントから vRealize Operations Manager サーバへのセットアップ プロパティの有効化

`agent.properties` ファイル内にある、Endpoint Operations Management エージェントと vRealize Operations Manager サーバ間の通信に関するプロパティは、デフォルトで無効になっています。これらを有効にする必要があります。

2 Endpoint Operations Management エージェントのセットアップ プロパティの指定

`agent.properties` ファイルには、通信を管理するために構成できるプロパティが含まれています。

3 Endpoint Operations Management エージェント キーストアの構成

エージェントは、内部通信用の自己署名証明書と、エージェント登録プロセス実行時にサーバによって署名されたもう 1 つの証明書を使用します。デフォルトでは、証明書は、`data` フォルダに生成されるキーストアに保存されます。エージェントが使用するための独自のキーストアを構成できます。

4 構成ダイアログを使用した Endpoint Operations Management エージェントの構成

vRealize Operations Manager サーバの場所を指定する構成値が設定されていないエージェントを起動すると、シェルに Endpoint Operations Management エージェントの構成ダイアログが表示されます。このダイアログでは、vRealize Operations Manager サーバのアドレスとポート、およびその他の接続関連データを指定するように求められます。

5 エージェント構成プロパティのオーバーライド

デフォルトのエージェント プロパティがユーザーが定義したカスタム プロパティと異なる場合に vRealize Operations Manager がそのデフォルトのプロパティをオーバーライドすることを指定できます。

6 Endpoint Operations Management エージェント プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントの `agent.properties` ファイルでは、複数のプロパティがサポートされています。サポートされたプロパティのすべてが、デフォルトで `agent.properties` ファイルに含まれるわけではありません。

次のステップ

Endpoint Operations Management エージェントを起動します。

Endpoint Operations Management エージェントから vRealize Operations Manager サーバへのセットアップ プロパティの有効化

`agent.properties` ファイル内にある、Endpoint Operations Management エージェントと vRealize Operations Manager サーバ間の通信に関するプロパティは、デフォルトで無効になっています。これらを有効にする必要があります。

手順

- 1 `agent.properties` ファイルで、次のセクションを見つけます。

```
## Use the following to automate agent setup
## using these properties.
##
## If any properties do not have values specified, the setup
## process prompts for their values.
##
## If the value to use during automatic setup is the default, use the string *default* as the
## value for the option.
```

- 2 各行の先頭のシャープ記号を削除して、プロパティを有効にします。

```
#agent.setup.serverIP=localhost
#agent.setup.serverSSLPort=443
#agent.setup.serverLogin=username
#agent.setup.serverPword=password
```

Endpoint Operations Management エージェントを初めて起動したときに、`agent.setup.serverPword` が無効になっていて、プレーン テキスト値がある場合、エージェントは値を暗号化します。

- 3 (オプション) `#agent.setup.serverCertificateThumbprint=` 行の先頭のシャープ記号を削除して、サムプリント値を提供して、サーバ証明書の事前承認を有効にします。

Endpoint Operations Management エージェントのセットアップ プロパティの指定

`agent.properties` ファイルには、通信を管理するために構成できるプロパティが含まれています。

エージェントとサーバのセットアップには、最低限必要なプロパティのセットがあります。

手順

- 1 エージェントが vRealize Operations Manager サーバと通信するために必要な場所と認証情報を指定します。

プロパティ	プロパティ定義
<code>agent.setup.serverIP</code>	vRealize Operations Manager サーバのアドレスまたはホスト名を指定します。
<code>agent.setup.serverSSLPort</code>	デフォルト値は、標準の SSL の vRealize Operations Manager サーバ リスン ポートです。サーバに別のリスン ポートが構成されている場合は、そのポート番号を指定します。
<code>agent.setup.serverLogin</code>	vRealize Operations Manager サーバに接続するときにエージェントが使用するユーザー名を指定します。username のデフォルト値を変更した場合は、ユーザー アカウントが vRealize Operations Manager サーバで正しく構成されていることを確認してください。
<code>agent.setup.serverPword</code>	vRealize Operations Manager サーバに接続するときに、 <code>agent.setup.camLogin</code> で指定したユーザー名と一緒にエージェントが使用するパスワードを指定します。パスワードが、そのユーザー アカウントに対して vRealize Operations Manager で構成されているものであることを確認してください。

- 2 (オプション) vRealize Operations Manager サーバ証明書のサムプリントを指定します。

プロパティ	プロパティ定義
<code>agent.setup.serverCertificateThumbprint</code>	<p>信頼できるサーバ証明書についての情報を指定します。</p> <p>このパラメータは、サイレント インストールを実行するために必要です。</p> <p>サムプリントには SHA1 または SHA256 アルゴリズムを使用できます。</p> <p>デフォルトでは、クラスタ内のすべてのノードの証明書の署名に使用される自己署名 CA 証明書が vRealize Operations Manager サーバによって生成されます。この場合、エージェントがすべてのノードと通信できるようにするには、サムプリントは CA 証明書のサムプリントでなければなりません。</p> <p>vRealize Operations Manager 管理者は、デフォルトの証明書を使用する代わりにカスタム証明書をインポートできます。この場合は、その証明書に対応するサムプリントをこのプロパティの値として指定する必要があります。</p> <p>証明書のサムプリントの値を確認するには、https://IP Address/admin の vRealize Operations Manager 管理インターフェイスにログインし、メニューバーの右側にある [SSL 証明書] アイコンをクリックします。オリジナルの証明書をカスタム証明書で置き換えていない場合は、リスト内の 2 番目のサムプリントが正しいサムプリントです。オリジナルの証明書をカスタム証明書で置き換えた場合は、リスト内の最初のサムプリントが正しいサムプリントです。</p>

3 (オプション) プラットフォーム トークン ファイルの場所とファイル名を指定します。

このファイルはインストール中にエージェントによって作成され、プラットフォーム オブジェクトの ID トークンが含まれます。

プロパティ	プロパティ定義
Windows : agent.setup.tokenFileWindows	プラットフォーム トークン ファイルの場所と名前の情報を指定します。 この値には、バックスラッシュ (\)、パーセント (%) 記号、環境変数を含めることはできません。
Linux : agent.setup.tokenFileLinux	Windows のパスを指定する際は、スラッシュ (/) を使用してください。

4 (オプション) 該当するコマンドを実行して、他のすべての必須プロパティを指定します。

オペレーティング システム	コマンド
Linux	<code>./bin/ep-agent.sh set-property PropertyKeyPropertyValue</code>
Windows	<code>./bin/ep-agent.bat set-property PropertyKeyPropertyValue</code>

agent.properties ファイルでは、プロパティは暗号化されています。

Endpoint Operations Management エージェント キーストアの構成

エージェントは、内部通信用の自己署名証明書と、エージェント登録プロセス実行時にサーバによって署名されたもう 1 つの証明書を使用します。デフォルトでは、証明書は、data フォルダに生成されるキーストアに保存されます。エージェントが使用するための独自のキーストアを構成できます。

重要： 独自のキーストアを使用するには、最初にエージェントを有効にする前にこのタスクを実行する必要があります。

手順

- 1 agent.properties ファイルで、# agent.keystore.path= プロパティおよび # agent.keystore.password= プロパティを有効にします。

agent.keystore.path でキーストアへのフル パスを定義し、agent.keystore.password でキーストアのパスワードを定義します。

- 2 プロパティ ファイルに [agent.keystore.alias] プロパティを追加し、それをプライマリ証明書のエイリアスに設定するか、キーストアのプライマリ証明書のプライベート キー エントリに設定します。

構成ダイアログを使用した Endpoint Operations Management エージェントの構成

vRealize Operations Manager サーバの場所を指定する構成値が設定されていないエージェントを起動すると、シェルに Endpoint Operations Management エージェントの構成ダイアログが表示されます。このダイアログでは、vRealize Operations Manager サーバのアドレスとポート、およびその他の接続関連データを指定するように求められます。

エージェント構成ダイアログは、次の場合に表示されます。

- agent.properties ファイルに 1 つ以上の関連するプロパティを指定せずに、初めてエージェントを起動した場合。
- 保存したサーバ接続データが破損している、またはサーバ接続データが削除されているエージェントを起動した場合。

エージェント ランチャーを実行して、構成ダイアログを再度実行することもできます。

前提条件

サーバが実行されていることを確認します。

手順

- 1 エージェントがインストールされているプラットフォームでターミナル ウィンドウを開きます。
- 2 AgentHome/bin ディレクトリへ移動します。
- 3 起動またはセットアップ オプションを使用して、エージェント ランチャーを実行します。

プラットフォーム	コマンド
UNIX 系	ep-agent.sh start
Windows	<p>エージェント用の Windows サービスをインストールして、it: ep-agent.bat install ep-agent.bat start コマンドを実行します。</p> <p>Endpoint Operations Management エージェントを Windows サービスとして構成する場合は、サービスが監視対象のテクノロジーに接続するのに必要な認証情報を指定してください。たとえば、Endpoint Operations Management エージェントを Microsoft SQL Server で実行している場合、そのサーバにログインできるのが特定のユーザーだけであれば、Windows サービスのログインにもそのユーザーを使用する必要があります。</p>

- 4 プロンプトに応答し、各手順で次のことを書きとめます。

プロンプト	説明
サーバのホスト名または IP アドレスを入力してください	サーバがエージェントと同じマシン上にある場合は、localhost と入力できます。ファイアウォールがエージェントからサーバへのトラフィックをブロックしている場合は、ファイアウォールのアドレスを指定します。
サーバの SSL ポートを入力してください	エージェントの接続先となる vRealize Operations Manager サーバ上の SSL ポートを指定します。デフォルト ポートは 443 です。
サーバは、信頼性のない証明書を提示しました	サーバは信頼できる証明書によって署名されている、またはサムプリントが含まれるように thumbprint プロパティを更新しているにもかかわらずこの警告が表示された場合、このエージェントは中間者攻撃を受ける可能性があります。表示される証明書サムプリントの詳細を注意深く確認します。
サーバのユーザー名を入力してください	agentManager 権限のある vRealize Operations Manager ユーザーの名前を入力します。
サーバのパスワードを入力してください	指定した vRealize Operations Manager のパスワードを入力します。 agent.properties ファイルにパスワードを保存しないでください。

結果

エージェントは vRealize Operations Manager サーバへの接続を開始し、サーバはこのエージェントが通信するための認証を受けていることを確認します。

サーバはエージェント トークンが含まれたクライアント証明書を生成します。The agent has been successfully registered というメッセージが表示されます。エージェントは、プラットフォームおよびそこで実行されているサポート対象製品の検出を開始します。

エージェント構成プロパティのオーバーライド

デフォルトのエージェント プロパティがユーザーが定義したカスタム プロパティと異なる場合に vRealize Operations Manager がそのデフォルトのプロパティをオーバーライドすることを指定できます。

[オブジェクトの編集] ダイアログの [詳細] セクションで、[Override agent configuration data] を **false** に設定した場合、デフォルトのエージェント構成データが適用されます。[Override agent configuration data] を **true** に設定した場合、別の値を設定した場合はデフォルトのエージェント パラメータ値は無視され、設定した値が適用されます。

クラスタで実行する MSSQL オブジェクト (MSSQL、MSSQL Database、MSSQL Reporting Services、MSSQL Analysis Service、MSSQL Agent) を編集するときに [Override agent configuration data] の値を **true** に設定すると、動作に一貫性を欠く場合があります。

Endpoint Operations Management エージェント プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントの agent.properties ファイルでは、複数のプロパティがサポートされています。サポートされたプロパティのすべてが、デフォルトで agent.properties ファイルに含まれるわけではありません。

デフォルト agent.properties ファイルに含まれていないプロパティを使用したい場合は、それを追加する必要があります。

agent.properties ファイルのプロパティを暗号化し、サイレント インストールを有効化することができます。

Endpoint Operations Management エージェント プロパティ 値の暗号化

Endpoint Operations Management エージェントをインストールした後にそれを使用して、サイレント インストールを有効にするための暗号化した値を agent.properties ファイルに追加できます。

たとえば、ユーザー パスワードを指定するために、./bin/ep-agent.sh set-property

agent.setup.serverPword *serverPasswordValue* を実行して、agent.properties ファイルに次の行を追加できます。

```
agent.setup.serverPword = ENC(4FyUf6m/c5i+RriaNpSEQ1WKGb4y
+Dhp7213XQiyvtwI4tMlbGJfZMBPG23KnsUWu30KrW35gB+Ms20snM4TDg==)
```

値の暗号化に使用されたキーは AgentHome/conf/agent.scu に保存されています。他の値を暗号化する場合は、最初の値の暗号化に使用されたキーが使用されます。

前提条件

Endpoint Operations Management エージェントが AgentHome/conf/agent.scu にアクセスできることを確認します。エージェントからサーバへの接続プロパティを暗号化した後は、エージェントが起動するにはこのファイルにアクセスする必要があります。

手順

- ◆ コマンド プロンプトを開いて、./bin/ep-agent.sh set-property agent.setup.*propertyName**propertyValue* を実行します。

結果

値の暗号化に使用されたキーは AgentHome/conf/agent.scu に保存されています。

次のステップ

エージェントのデプロイ方法として、標準の `agent.properties` ファイルをすべてのエージェントに配布する場合は、`agent.scu` ファイルも配布する必要があります。複数の [Endpoint Operations Management エージェントを同時にインストールする](#) を参照してください。

`agent.properties` ファイルへのプロパティの追加

使用するプロパティのうち、デフォルトの `agent.properties` ファイルに含まれていないものはすべて追加する必要があります。

使用可能なプロパティのリストを次に示します。

- [agent.keystore.alias](#) プロパティ

このプロパティで、vRealize Operations Manager サーバとの単方向通信が構成されたエージェントに対し、エージェントのユーザー管理キーストアの名前を構成します。

- [agent.keystore.password](#) プロパティ

このプロパティで、Endpoint Operations Management エージェントの SSL キーストアのパスワードを構成します。

- [agent.keystore.path](#) プロパティ

このプロパティで、Endpoint Operations Management エージェントの SSL キーストアの場所を構成します。

- [agent.listenPort](#) プロパティ

このプロパティで、Endpoint Operations Management エージェントが vRealize Operations Manager サーバからの通信受信をリスンするポートを指定します。

- [agent.logDir](#) プロパティ

このプロパティを `agent.properties` ファイルに追加して、Endpoint Operations Management エージェントがログ ファイルを記録するディレクトリを指定することができます。完全修飾パスを指定しない場合は、エージェントのインストール ディレクトリへの相対パス `agent.logDir` が入力されます。

- [agent.logFile](#) プロパティ

エージェント ログ ファイルのパスと名前です。

- [agent.logLevel](#) プロパティ

エージェントがログ ファイルに記述するメッセージ詳細のレベルです。

- [agent.logLevel.SystemErr](#) プロパティ

`System.err` を `agent.log` ファイルにリダイレクトします。

- [agent.logLevel.SystemOut](#) プロパティ

`System.out` を `agent.log` ファイルにリダイレクトします。

- [agent.proxyHost](#) プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントが vRealize Operations Manager サーバへの接続を確立する際に最初に接続するプロキシ サーバのホスト名または IP アドレスです。

- [agent.proxyPort プロパティ](#)

Endpoint Operations Management エージェントが vRealize Operations Manager サーバへの接続を確立する際に最初に接続するプロキシ サーバのポート番号です。

- [agent.setup.acceptUnverifiedCertificate プロパティ](#)

このプロパティでは、vRealize Operations Manager サーバが、エージェントの SSL 証明書の署名者と異なる認証機関により自己署名または署名された SSL 証明書で、エージェントのキーストアと異なるものを提示した場合に、Endpoint Operations Management エージェントが警告を発行するかどうかを管理します。

- [agent.setup.camIP プロパティ](#)

このプロパティで、エージェントの vRealize Operations Manager サーバの IP アドレスを定義します。Endpoint Operations Management エージェントは、データ ディレクトリで接続構成を見つけられなかった場合のみ、この値を読み取ります。

- [agent.setup.camLogin プロパティ](#)

インストール後初めて起動する際にはこのプロパティで、エージェントがサーバ登録を行う際に使用する、Endpoint Operations Management エージェント ユーザー名を定義します。

- [agent.setup.camPort プロパティ](#)

インストール後初めて起動する際には、このプロパティで、保護されていないサーバとの通信で使用する、Endpoint Operations Management エージェントのサーバ ポートを定義します。

- [agent.setup.camPword プロパティ](#)

このプロパティで Endpoint Operations Management エージェントが vRealize Operations Manager サーバに接続する際に使用するパスワードを定義し、初回起動時にエージェントがユーザーに対してパスワード入力のプロンプトを表示しないようにします。

- [agent.setup.camSecure](#)

このプロパティは、Endpoint Operations Management を vRealize Operations Manager サーバに登録し、暗号化を利用して通信する際に使用します。

- [agent.setup.camSSLPort プロパティ](#)

インストール後初めて起動する際に、このプロパティで、サーバとの SSL 通信に使用する Endpoint Operations Management エージェントのサーバ ポートを定義します。

- [agent.setup.resetupToken プロパティ](#)

このプロパティで Endpoint Operations Management エージェントを構成し、起動時のサーバ認証で使用する新規トークンを作成します。トークンの削除または破損によってエージェントがサーバに接続できない場合は、トークンの再生成が効果的です。

- [agent.setup.unidirectional プロパティ](#)

Endpoint Operations Management エージェントと vRealize Operations Manager サーバ間の単方向通信を有効化します。

- [agent.startupTimeOut プロパティ](#)

エージェントが正常に起動しなかったと判断するまでに Endpoint Operations Management エージェントの起動スクリプトが待機する秒数です。この秒数の間にエージェントがリクエストをリスンしていないと判明した場合、エラーがログに記録され、起動スクリプトがタイムアウトします。

- [autoinventory.defaultScan.interval.millis](#) プロパティ
Endpoint Operations Management エージェントがデフォルトの autoinventory スキャンを実行する頻度を指定します。
- [autoinventory.runtimeScan.interval.millis](#) プロパティ
Endpoint Operations Management エージェントがランタイム スキャンを実行する頻度を指定します。
- [http.useragent](#) プロパティ
Endpoint Operations Management エージェントにより発行される HTTP 要求内のユーザーエージェント要求ヘッダの値を定義します。
- [log4j](#) プロパティ
Endpoint Operations Management エージェントの log4j プロパティについて説明します。
- [platform.log_track.eventfmt](#) プロパティ
vRealize Operations Manager で Windows イベントをイベントとしてログに出力するときに、Endpoint Operations Management エージェントが格納する Windows イベントの属性の内容と形式を指定します。
- [plugins.exclude](#) プロパティ
起動時に Endpoint Operations Management エージェントがロードしないプラグインを指定します。これはエージェントのメモリ占有量を減らすのに役立ちます。
- [plugins.include](#) プロパティ
起動時に Endpoint Operations Management エージェントがロードするプラグインを指定します。これはエージェントのメモリ占有量を減らすのに役立ちます。
- [postgresql.database.name.format](#) プロパティ
このプロパティでは、自動検出された PostgreSQL Database と vPostgreSQL Database データベース タイプに PostgreSQL プラグインが割り当てる名前の形式を指定します。
- [postgresql.index.name.format](#) プロパティ
このプロパティでは、自動検出された PostgreSQL Index と vPostgreSQL Index インデックス タイプに PostgreSQL プラグインが割り当てる名前の形式を指定します。
- [postgresql.server.name.format](#) プロパティ
このプロパティでは、自動検出された PostgreSQL と vPostgreSQL サーバ タイプに PostgreSQL プラグインが割り当てる名前の形式を指定します。
- [postgresql.table.name.format](#) プロパティ
このプロパティでは、自動検出された PostgreSQL Table と vPostgreSQL Table テーブル タイプに PostgreSQL プラグインが割り当てる名前の形式を指定します。
- [scheduleThread.cancelTimeout](#) プロパティ
このプロパティは、ScheduleThread により、メトリック収集プロセスがその中断を試みる前に動作できる最大時間（ミリ秒単位）を指定します。

■ `scheduleThread.fetchLogTimeout` プロパティ

このプロパティは、長時間実行のメトリック収集プロセスに対して、いつ警告メッセージが発行されるかを制御します。

■ `scheduleThread.poolsize` プロパティ

このプロパティは、プラグインがメトリック収集に複数のスレッドを使用できるようにします。このプロパティは、スレッドセーフであることがわかっているプラグインのメトリック スループットを向上させることができます。

■ `scheduleThread.queueSize` プロパティ

プラグインのメトリック収集キュー サイズ（メトリックの数）を制限するには、このプロパティを使用します。

■ `sigar.mirror.procnet` プロパティ

`mirror /proc/net/tcp`（Linux の場合）。

■ `sigar.pdh.enableTranslation` プロパティ

このプロパティは、検出したオペレーティング システムのロケールに基づいた翻訳を有効化するのに使用します。

■ `snmpTrapReceiver.listenAddress` プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントが SNMP トラップをリスンするポートを指定します。

`agent.keystore.alias` プロパティ

このプロパティで、vRealize Operations Manager サーバとの単方向通信が構成されたエージェントに対し、エージェントのユーザー管理キーストアの名前を構成します。

例：キーストア名の定義

単方向エージェントのユーザー管理キーストアが次のようなものである場合、

```
hq self-signed cert), Jul 27, 2011, trustedCertEntry,
Certificate fingerprint (MD5): 98:FF:B8:3D:25:74:23:68:6A:CB:0B:9C:20:88:74:CE
hq-agent, Jul 27, 2011, PrivateKeyEntry,
Certificate fingerprint (MD5): 03:09:C4:BC:20:9E:9A:32:DC:B2:E8:29:C0:3C:FE:38
```

次のようにキーストア名を定義します

```
agent.keystore.alias=hq-agent
```

このプロパティの値がキーストア名と一致しない場合、エージェントとサーバ間の通信に失敗します。

デフォルト

エージェントのデフォルト動作では、`hq` キーストアを探します。

ユーザー管理キーストアを持つ単方向エージェントの場合は、このプロパティでキーストア名を定義する必要があります。

`agent.keystore.password` プロパティ

このプロパティで、Endpoint Operations Management エージェントの SSL キーストアのパスワードを構成します。

[agent.keystore.path プロパティ](#) プロパティを使用してキーストアの場所を定義します。

デフォルトでは、インストール後に Endpoint Operations Management エージェントを初めて起動したときに、`agent.keystore.password` がコメント解除されていて、プレーン テキスト値がある場合、エージェントは自動的にプロパティ値を暗号化します。エージェントを起動する前に、このプロパティ値を自分で暗号化することもできます。

エージェントのプライベート キーと同じパスワードをエージェント キーストアに指定することをお勧めします。

デフォルト

デフォルトでは、`agent.properties` ファイルにはこのプロパティは含まれません。

`agent.keystore.path` プロパティ

このプロパティで、Endpoint Operations Management エージェントの SSL キーストアの場所を構成します。

キーストアへのフル パスを指定します。`agent.keystore.password` プロパティを使用して、キーストアのパスワードを定義します。[agent.keystore.password プロパティ](#) を参照してください。

Windows でのキーストア パスの指定

Windows プラットフォームでは、次のフォーマットでキーストアのパスを指定します。

```
C:/Documents and Settings/Desktop/keystore
```

デフォルト

`AgentHome/data/keystore.`

`agent.listenPort` プロパティ

このプロパティで、Endpoint Operations Management エージェントが vRealize Operations Manager サーバからの通信受信をリスンするポートを指定します。

単方向通信の場合、このプロパティは不要です。

`agent.logDir` プロパティ

このプロパティを `agent.properties` ファイルに追加して、Endpoint Operations Management エージェントがログ ファイルを記録するディレクトリを指定することができます。完全修飾パスを指定しない場合は、エージェントのインストール ディレクトリへの相対パス `agent.logDir` が入力されます。

エージェント ログ ファイルの場所を変更するには、エージェントのインストール ディレクトリへの相対パス、または完全修飾パスを入力します。

エージェント ログ ファイルの名前は、`agent.logFile` プロパティで構成されています。

デフォルト

デフォルトでは、`agent.properties` ファイルにはこのプロパティは含まれません。

デフォルト動作は `agent.logDir=log` で、`AgentHome/log` ディレクトリにエージェント ログ ファイルが記録されます。

`agent.logFile` プロパティ

エージェント ログ ファイルのパスと名前です。

デフォルト

`agent.properties` ファイルには、`agent.LogFile` プロパティのデフォルト設定が変数と文字列で記述されます。

```
agent.logFile=${agent.logDir}\agent.log
```

条件：

- `agent.logDir` は、同じ名前を持つエージェント プロパティの値を提供する変数です。デフォルトでは `agent.logDir` の値は `log` で、エージェントのインストール ディレクトリへの相対値となります。
- `agent.log` はエージェント ログ ファイルの名前です。

デフォルトでは、エージェント ログ ファイルは `agent.log` という名前が付けられ、`AgentHome/log` ディレクトリに記録されます。

`agent.logLevel` プロパティ

エージェントがログ ファイルに記述するメッセージ詳細のレベルです。

許容された値は、`INFO` および `DEBUG` です。

デフォルト

`INFO`

`agent.logLevel.SystemErr` プロパティ

`System.err` を `agent.log` ファイルにリダイレクトします。

この設定をコメントアウトすると、`System.err` が `agent.log.startup` にダイレクトされるようになります。

デフォルト

`ERROR`

`agent.logLevel.SystemOut` プロパティ

`System.out` を `agent.log` ファイルにリダイレクトします。

この設定をコメントアウトすると、`System.out` が `agent.log.startup` にダイレクトされるようになります。

デフォルト

`INFO`

`agent.proxyHost` プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントが vRealize Operations Manager サーバへの接続を確立する際に最初に接続するプロキシ サーバのホスト名または IP アドレスです。

このプロパティは、単方向通信が構成されたエージェントでサポートされています。

このプロパティは `agent.proxyPort` および `agent.setup.unidirectional` と組み合わせて使用します。

デフォルト

なし

`agent.proxyPort` プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントが vRealize Operations Manager サーバへの接続を確立する際に最初に接続するプロキシ サーバのポート番号です。

このプロパティは、単方向通信が構成されたエージェントでサポートされています。

このプロパティは `agent.proxyPort` および `agent.setup.unidirectional` と組み合わせて使用します。

デフォルト

なし

`agent.setup.acceptUnverifiedCertificate` プロパティ

このプロパティでは、vRealize Operations Manager サーバが、エージェントの SSL 証明書の署名者と異なる認証機関により自己署名または署名された SSL 証明書で、エージェントのキーストアと異なるものを提示した場合に、Endpoint Operations Management エージェントが警告を発行するかどうかを管理します。

デフォルトを使用する場合、エージェントは警告を発行します。

```
The authenticity of host 'localhost' can't be established.
Are you sure you want to continue connecting? [default=no]:
```

yes と応答する場合、エージェントはサーバの証明書をインポートし、それ以降はその証明書を信頼します。

デフォルト

`agent.setup.acceptUnverifiedCertificate=no``agent.setup.camIP` プロパティ

このプロパティで、エージェントの vRealize Operations Manager サーバの IP アドレスを定義します。Endpoint Operations Management エージェントは、データ ディレクトリで接続構成を見つけられなかった場合のみ、この値を読み取ります。

このプロパティやその他の `agent.setup.*` プロパティを指定して、エージェントとサーバの通信を構成するために必要なユーザーの操作を減らすことができます。

値は、IP アドレスまたは完全修飾ドメイン名として指定することができます。サーバと同じホスト上のサーバを特定するには、値を「127.0.0.1」に設定します。

エージェントとサーバの間にファイアウォールがある場合は、ファイアウォールのアドレスを指定し、ポート 7080、SSL を使用している場合はポート 7443 のトラフィックを vRealize Operations Manager サーバへ転送するようにファイアウォールを構成します。

デフォルト

コメントアウトされた `localhost`。`agent.setup.camLogin` プロパティ

インストール後初めて起動する際にはこのプロパティで、エージェントがサーバ登録を行う際に使用する、Endpoint Operations Management エージェント ユーザー名を定義します。

この初期化に際してサーバ上で要求される許可は、プラットフォームに対する `Create` です。

エージェントからサーバへのログインは、エージェントの初期構成時にのみ要求されます。

エージェントは、データ ディレクトリで接続構成を見つけられなかった場合のみ、この値を読み取ります。

このプロパティやその他の `agent.setup.*` プロパティを指定して、エージェントとサーバの通信を構成するために必要なユーザーの操作を減らすことができます。

デフォルト

コメントアウトされた `hqadmin`。`agent.setup.camPort` プロパティ

インストール後初めて起動する際には、このプロパティで、保護されていないサーバとの通信で使用する、Endpoint Operations Management エージェントのサーバ ポートを定義します。

エージェントは、データ ディレクトリで接続構成を見つけられなかった場合のみ、この値を読み取ります。

このプロパティやその他の `agent.setup.*` プロパティを指定して、エージェントとサーバの通信を構成するために必要なユーザーの操作を減らすことができます。

デフォルト

コメント アウトされた 7080。

`agent.setup.camPword` プロパティ

このプロパティで Endpoint Operations Management エージェントが vRealize Operations Manager サーバに接続する際に使用するパスワードを定義し、初回起動時にエージェントがユーザーに対してパスワード入力のプロンプトを表示しないようにします。

ユーザーのパスワードは、`agent.setup.camLogin` で指定されたとおりです。

エージェントは、データ ディレクトリで接続構成を見つけられなかった場合のみ、この値を読み取ります。

このプロパティやその他の `agent.setup.*` プロパティを指定して、エージェントとサーバの通信を構成するために必要なユーザーの操作を減らすことができます。

インストール後に Endpoint Operations Management エージェントを初めて起動したときに、`agent.keystore.password` がコメント解除されていて、プレーン テキスト値がある場合、エージェントは自動的にプロパティ値を暗号化します。エージェントを起動する前に、これらのプロパティ値を暗号化することもできます。

デフォルト

コメント アウトされた `hqadmin`。

`agent.setup.camSecure`

このプロパティは、Endpoint Operations Management を vRealize Operations Manager サーバに登録し、暗号化を利用して通信する際に使用します。

通信の暗号化には、`yes=`、`secure`、`encrypted`、`SSL` から適切なものを使用します。

暗号化されていない通信には、`no=unencrypted` を使用します。

`agent.setup.camSSLPort` プロパティ

インストール後初めて起動する際に、このプロパティで、サーバとの SSL 通信に使用する Endpoint Operations Management エージェントのサーバ ポートを定義します。

エージェントは、データ ディレクトリで接続構成を見つけられなかった場合のみ、この値を読み取ります。

このプロパティやその他の `agent.setup.*` プロパティを指定して、エージェントとサーバの通信を構成するために必要なユーザーの操作を減らすことができます。

デフォルト

コメント アウトされた 7443。

`agent.setup.resetupToken` プロパティ

このプロパティで Endpoint Operations Management エージェントを構成し、起動時のサーバ認証で使用する新規トークンを作成します。トークンの削除または破損によってエージェントがサーバに接続できない場合は、トークンの再生成が効果的です。

エージェントは、データ ディレクトリで接続構成を見つけられなかった場合のみ、この値を読み取ります。

このプロパティの値にかかわらず、インストール後初めて起動したとき、エージェントはトークンを生成します。

デフォルト

コメントアウトされた no。

agent.setup.unidirectional プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントと vRealize Operations Manager サーバ間の単方向通信を有効化します。

エージェントに単方向通信を構成する場合、サーバとのすべての通信はエージェントにより開始されます。

ユーザー管理キーストアを持つ単方向エージェントの場合は、agent.properties ファイルでキーストア名を構成する必要があります。

デフォルト

コメントアウトされた no。

agent.startupTimeout プロパティ

エージェントが正常に起動しなかったと判断するまでに Endpoint Operations Management エージェントの起動スクリプトが待機する秒数です。この秒数の間にエージェントがリクエストをリスンしていないと判明した場合、エラーがログに記録され、起動スクリプトがタイムアウトします。

デフォルト

デフォルトでは、agent.properties ファイルにはこのプロパティは含まれません。

エージェントのデフォルト動作では、300 秒後にタイムアウトします。

autoinventory.defaultScan.interval.millis プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントがデフォルトの autoinventory スキャンを実行する頻度を指定します。

デフォルト スキャンでは、通常はプロセス テーブルまたは Windows レジストリを使用しているサーバおよびプラットフォーム サービス オブジェクトを検出します。デフォルト スキャンは、ランタイム スキャンより少ないリソースを消費します。

デフォルト

エージェントは、起動時およびそれ以降 15 分ごとにデフォルト スキャンを実行します。

86,400,000 ミリ秒 (1 日) をコメントにしました。

autoinventory.runtimeScan.interval.millis プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントがランタイム スキャンを実行する頻度を指定します。

ランタイム スキャンは、サービスを検出するために、デフォルト スキャンよりリソースの消費量が多い方法を使用する可能性があります。たとえば、ランタイム スキャンでは SQL クエリを発行したり、MBean を検索したりすることがあります。

デフォルト

86,400,000 ミリ秒 (1 日)。

http.useragent プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントにより発行される HTTP 要求内のユーザーエージェント要求ヘッダの値を定義します。

http.useragent を使用して、アップグレード間で一貫性があるユーザーエージェント値を定義できます。

デフォルトでは、agent.properties ファイルにはこのプロパティは含まれません。

デフォルト

デフォルトでは、エージェント要求内のユーザーエージェントには Endpoint Operations Management のバージョンが含まれるため、エージェントがアップグレードされると変わります。ターゲット HTTP サーバが不明なユーザーエージェントを含む要求をブロックするように構成されている場合、エージェント要求はエージェントのアップグレード後に失敗します。

Hyperic-HQ-Agent/Version、たとえば Hyperic-HQ-Agent/4.1.2-EE。

log4j プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントの log4j プロパティについて説明します。

```
log4j.rootLogger=${agent.logLevel}, R

log4j.appender.R.File=${agent.logFile}
log4j.appender.R.MaxBackupIndex=1
log4j.appender.R.MaxFileSize=5000KB
log4j.appender.R.layout.ConversionPattern=%d{dd-MM-yyyy HH:mm:ss,SSS z} %-5p [%t] [%c{1}@%L] %m%n
log4j.appender.R.layout=org.apache.log4j.PatternLayout
log4j.appender.R=org.apache.log4j.RollingFileAppender

##
## Disable overly verbose logging
##
log4j.logger.org.apache.http=ERROR
log4j.logger.org.springframework.web.client.RestTemplate=ERROR
log4j.logger.org.hyperic.hq.measurement.agent.server.SenderThread=INFO
log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.server.AgentDListProvider=INFO
log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.server.MeasurementSchedule=INFO
log4j.logger.org.hyperic.util.units=INFO
log4j.logger.org.hyperic.hq.product.pluginxml=INFO

# Only log errors from naming context
log4j.category.org.jnp.interfaces.NamingContext=ERROR
log4j.category.org.apache.axis=ERROR

#Agent Subsystems: Uncomment individual subsystems to see debug messages.
#-----
#log4j.logger.org.hyperic.hq.autoinventory=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.livedata=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.measurement=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.control=DEBUG

#Agent Plugin Implementations
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product=DEBUG

#Server Communication
#log4j.logger.org.hyperic.hq.bizapp.client.AgentCallbackClient=DEBUG
```

```
#Server Realtime commands dispatcher
#log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.server.CommandDispatcher=DEBUG

#Agent Configuration parser
#log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.AgentConfig=DEBUG

#Agent plugins loader
#log4j.logger.org.hyperic.util.PluginLoader=DEBUG

#Agent Metrics Scheduler (Scheduling tasks definitions & executions)
#log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.server.session.AgentSynchronizer.SchedulerThread=DEBUG

#Agent Plugin Managers
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.MeasurementPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.AutoinventoryPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.ConfigTrackPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.LogTrackPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.LiveDataPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.ControlPluginManager=DEBUG
```

platform.log_track.eventfmt プロパティ

vRealize Operations Manager で Windows イベントをイベントとしてログに出力するときに、Endpoint Operations Management エージェントが格納する Windows イベントの属性の内容と形式を指定します。

デフォルトでは、agent.properties ファイルにはこのプロパティは含まれません。

デフォルト

Windows ログの追跡を有効にすると、リソースの [構成プロパティ] ページで指定した基準に一致するイベントについて、エントリが形式 [Timestamp] Log Message (EventLogName):EventLogName:EventAttributes でログに出力されます。

属性	説明
Timestamp	イベントが発生した時刻
Log Message	テキスト文字列
EventLogName	Windows イベント ログのタイプ (System、Security、または Application)
EventAttributes	Windows イベントのソース属性とメッセージ属性で構成されるコロン区切りの文字列

たとえば、ログ エントリ 04/19/2010 06:06 AM Log Message (SYSTEM): SYSTEM: Print: Printer HP LaserJet 6P was paused. は、2010 年 4 月 19 日午前 6:06 に Windows システム イベント ログに書き込まれた Windows イベントを示しています。Windows イベントのソース属性とメッセージ属性は、それぞれ「Print」と「Printer HP LaserJet 6P was paused.」です。

構成

次のパラメータを使用して、エージェントが Windows イベントについて書き込む Windows イベント属性を構成します。各パラメータは同じ名前の Windows イベント属性に対応します。

パラメータ	説明
%user%	イベントが発生したユーザーの名前。
%computer%	イベントが発生したコンピュータの名前。
%source%	Windows イベントをログに出力したソフトウェア。
%event%	特定のイベント タイプを識別する番号。
%message%	イベント メッセージ。
%category%	イベントをグループ化するために使用されるアプリケーション固有の値。

たとえば、プロパティの設定が `platform.log_track.eventfmt=%user%%computer% %source%:%event %:%message%` の場合、Endpoint Operations Management エージェントは Windows イベントをログに出力するときに 04/19/2010 06:06 AM Log Message (SYSTEM): SYSTEM: HP_Administrator@Office Print:7:Printer HP LaserJet 6P was paused. を書き込みます。このエントリは、2010 年 4 月 19 日午前 6:06 に Windows システム イベント ログに書き込まれた Windows イベントを示しています。このイベントに関連するソフトウェアは、ホスト「Office」で「HP_Administrator」として実行されていました。Windows イベントのソース属性、イベント属性、メッセージ属性は、それぞれ「Print」、「7」、「Printer HP LaserJet 6P was paused.」です。

`plugins.exclude` プロパティ

起動時に Endpoint Operations Management エージェントがロードしないプラグインを指定します。これはエージェントのメモリ占有量を減らすのに役立ちます。

使用法

除外するプラグインをカンマで区切って指定します。例：

```
plugins.exclude=jboss,apache,mysql
```

`plugins.include` プロパティ

起動時に Endpoint Operations Management エージェントがロードするプラグインを指定します。これはエージェントのメモリ占有量を減らすのに役立ちます。

使用法

含めるプラグインをカンマで区切って指定します。例：

```
plugins.include=weblogic,apache
```

`postgresql.database.name.format` プロパティ

このプロパティでは、自動検出された PostgreSQL Database と vPostgreSQL Database データベース タイプに PostgreSQL プラグインが割り当てる名前の形式を指定します。

デフォルトでは、PostgreSQL または vPostgreSQL データベースの名前は Database *DatabaseName* です。*DatabaseName* は、自動検出されたデータベースの名前です。

別の命名規則を使用するには、`postgresql.database.name.format` を定義します。使用する変数データは、PostgreSQL プラグインから入手できる必要があります。

次の構文を使用して、プラグインによって割り当てられるデフォルトのテーブル名を指定します。

```
Database ${db}
```

条件：

postgresql.db は、自動検出された PostgreSQL または vPostgreSQL データベースの名前です。

デフォルト

デフォルトでは、agent.properties ファイルにはこのプロパティは含まれません。

postgresql.index.name.format プロパティ

このプロパティでは、自動検出された PostgreSQL Index と vPostgreSQL Index インデックス タイプに PostgreSQL プラグインが割り当てる名前の形式を指定します。

デフォルトでは、PostgreSQL または vPostgreSQL インデックスの名前は Index *DatabaseName.Schema.Index* で、次の変数で構成されます。

変数	説明
DatabaseName	自動検出されたデータベースの名前。
Schema	自動検出されたデータベースのスキーマ。
Index	自動検出されたインデックスの名前。

別の命名規則を使用するには、postgresql.index.name.format を定義します。使用する変数データは、PostgreSQL プラグインから入手できる必要があります。

次の構文を使用して、プラグインによって割り当てられるデフォルトのインデックス名を指定します。

```
Index ${db}.${schema}.${index}
```

条件：

属性	説明
db	PostgreSQL または vPostgreSQL サーバをホストするプラットフォームを識別します。
schema	テーブルに関連付けられているスキーマを識別します。
index	PostgreSQL のインデックス名。

デフォルト

デフォルトでは、agent.properties ファイルにはこのプロパティは含まれません。

postgresql.server.name.format プロパティ

このプロパティでは、自動検出された PostgreSQL と vPostgreSQL サーバ タイプに PostgreSQL プラグインが割り当てる名前の形式を指定します。

デフォルトでは、PostgreSQL または vPostgreSQL サーバの名前は *Host:Port* で、次の変数で構成されます。

変数	説明
Host	サーバをホストするプラットフォームの FQDN。
Port	PostgreSQL リスポート。

別の命名規則を使用するには、`postgresql.server.name.format` を定義します。使用する変数データは、PostgreSQL プラグインから入手できる必要があります。

次の構文を使用して、プラグインによって割り当てられるデフォルトのサーバ名を指定します。

```
${postgresql.host}:${postgresql.port}
```

条件：

属性	説明
<code>postgresql.host</code>	ホストしているプラットフォームの FQDN を識別します。
<code>postgresql.port</code>	データベース リスン ポートを識別します。

デフォルト

デフォルトでは、`agent.properties` ファイルにはこのプロパティは含まれません。

`postgresql.table.name.format` プロパティ

このプロパティでは、自動検出された PostgreSQL Table と vPostgreSQL Table テーブル タイプに PostgreSQL プラグインが割り当てる名前の形式を指定します。

デフォルトでは、PostgreSQL または vPostgreSQL テーブルの名前は Table *DatabaseName.Schema.Table* で、次の変数で構成されます。

変数	説明
<code>DatabaseName</code>	自動検出されたデータベースの名前。
<code>Schema</code>	自動検出されたデータベースのスキーマ。
<code>Table</code>	自動検出されたテーブルの名前。

別の命名規則を使用するには、`postgresql.table.name.format` を定義します。使用する変数データは、PostgreSQL プラグインから入手できる必要があります。

次の構文を使用して、プラグインによって割り当てられるデフォルトのテーブル名を指定します。

```
Table ${db}.${schema}.${table}
```

条件：

属性	説明
<code>db</code>	PostgreSQL または vPostgreSQL サーバをホストするプラットフォームを識別します。
<code>schema</code>	テーブルに関連付けられているスキーマを識別します。
<code>table</code>	PostgreSQL のテーブル名。

デフォルト

デフォルトでは、`agent.properties` ファイルにはこのプロパティは含まれません。

`scheduleThread.cancelTimeout` プロパティ

このプロパティは、ScheduleThread により、メトリック収集プロセスがその中断を試みる前に動作できる最大時間（ミリ秒単位）を指定します。

このタイムアウトを超えると、`wait()`、`sleep()`、または非ブロッキングの `read()` 状態にある場合、メトリックの収集は中断されます。

使用法

```
scheduleThread.cancelTimeout=5000
```

デフォルト

5000 ミリ秒。

`scheduleThread.fetchLogTimeout` プロパティ

このプロパティは、長時間実行のメトリック収集プロセスに対して、いつ警告メッセージが発行されるかを制御します。

メトリック収集プロセスがこのプロパティの値（ミリ秒単位で測定される）を超えると、エージェントは `agent.log` ファイルに警告メッセージを書き込みます。

使用法

```
scheduleThread.fetchLogTimeout=2000
```

デフォルト

2000 ミリ秒。

`scheduleThread.poolsize` プロパティ

このプロパティは、プラグインがメトリック収集に複数のスレッドを使用できるようにします。このプロパティは、スレッドセーフであることがわかっているプラグインのメトリック スループットを向上させることができます。

使用法

プラグインの名前と、メトリック収集に割り当てるスレッド数を指定します。

```
scheduleThread.poolsize.PluginName=2
```

ここで、*PluginName* は、スレッドを割り当てるプラグインの名前です。例：

```
scheduleThread.poolsize.vsphere=2
```

デフォルト

1

`scheduleThread.queueSize` プロパティ

プラグインのメトリック収集キュー サイズ（メトリックの数）を制限するには、このプロパティを使用します。

使用法

プラグインの名前と、メトリック キューの長さの最大値を指定します。

```
scheduleThread.queueSize.PluginName=15000
```

ここで、*PluginName* は、メトリックを制限するプラグインの名前です。

例：

```
scheduleThread.queueSize.vsphere=15000
```

デフォルト

1000

sigar.mirror.procnet プロパティ

mirror /proc/net/tcp (Linux の場合)。

デフォルト

true

sigar.pdh.enableTranslation プロパティ

このプロパティは、検出したオペレーティング システムのロケールに基づいた翻訳を有効化するのに使用します。

snmpTrapReceiver.listenAddress プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントが SNMP トラップをリスンするポートを指定します。

デフォルトでは、`agent.properties` ファイルにはこのプロパティは含まれません。

SNMP は一般に、トラップ メッセージに UDP ポート 162 を使用します。このポートは権限の範囲内なので、このポートでトラップ メッセージをリスンするエージェントは、root として、または Windows の管理ユーザーとして実行される必要があります。

権限のないポートのトラップ メッセージをリスンするようエージェントを構成すれば、非管理ユーザーのコンテキストでエージェントを実行できます。

使用法

IP アドレス（またはプラットフォーム上のすべてのインターフェイスを指定する場合は 0.0.0.0）と UDP 通信のポートを次の形式で指定します。

```
snmpTrapReceiver.listenAddress=udp:IP_address/port
```

Endpoint Operations Management エージェントが権限のないポートの SNMP トラップを受信できるようにするには、ポート 1024 以上を指定します。次の設定では、エージェントがプラットフォームの任意のインターフェイスのトラップを UDP ポート 1620 で受信できるようになります。

```
snmpTrapReceiver.listenAddress=udp:0.0.0.0/1620
```

vRealize Operations Manager サーバでのエージェント登録を管理する

Endpoint Operations Management エージェントは、クライアント証明書を使って自らの識別情報をサーバに渡します。このクライアント証明書はエージェント登録プロセスで生成されます。

クライアント証明書には、一意の識別子として使用されるトークンが含まれます。クライアント証明書の盗難または危殆化が疑われる場合は、証明書を交換する必要があります。

エージェント登録プロセスを実行するには、AgentManager 認証情報が必要です。

データ ディレクトリを削除してエージェントを削除、および再インストールする場合、エージェント トークンが保持され、データの継続性が確保されます。[エージェントのアンインストールと再インストールの影響について](#) を参照してください。

エージェントのクライアント証明書の生成

Endpoint Operations Management エージェントのクライアント証明書が期限切れになったら、交換する必要があります。たとえば、破損または危殆化が疑われる証明証を交換します。

前提条件

Endpoint Operations Management エージェントをデプロイするために必要な権限があることを確認します。Endpoint Operations Management エージェントをインストール可能なロールを含む vRealize Operations Manager のユーザー認証情報が必要です。 [vRealize Operations Manager でのロールと権限](#) を参照してください。

手順

- ◆ 登録プロセスを開始するには、エージェントが実行されているオペレーティング システムに応じた `setup` コマンドを実行します。

オペレーティング システム	実行するコマンド
Linux	<code>ep-agent.sh setup</code>
Windows	<code>ep-agent.bat setup</code>

結果

エージェント インストーラにより、セットアップが実行され、サーバに対して新しい証明書が要求され、新しい証明書がキーストアにインポートされます。

サーバとの通信のセキュリティ

Endpoint Operations Management エージェントから vRealize Operations Manager サーバへの通信は一方ですが、両方が認証される必要があります。通信は、トランスポート レイヤ セキュリティ (TLS) を使用して常にセキュリティ保護されます。

インストール後にエージェントが vRealize Operations Manager サーバに初めて接続したときに、サーバは SSL 証明書をエージェントに提示します。

サーバが提示した証明書をエージェントが信頼すると、エージェントはサーバの証明書をキーストアにインポートします。

エージェントは、サーバの証明書またはその発行者 (CA) のいずれかがエージェントのキーストアにすでに存在する場合、サーバの証明書を信頼します。

デフォルトでは、サーバが提示した証明書をエージェントが信頼しない場合、エージェントは警告を表示します。証明書を信頼するか、構成処理を終了するかを選択できます。警告プロンプトに `yes` と応答しない限り、vRealize Operations Manager サーバとエージェントは、信頼性のない証明書をインポートしません。

vRealize Operations Manager サーバの証明書のサムプリントを指定することで、エージェントが警告なしで特定のサムプリントを受け入れるように構成できます。

デフォルトでは、クラスタ内のすべてのノードの証明書の署名に使用される自己署名 CA 証明書が vRealize Operations Manager サーバによって生成されます。この場合、エージェントがすべてのノードと通信できるようにするには、サムプリントは発行者のサムプリントでなければなりません。

vRealize Operations Manager 管理者は、デフォルトの証明書を使用する代わりにカスタム証明書をインポートできます。この場合は、その証明書に対応するサムプリントをこのプロパティの値として指定する必要があります。

サムプリントには SHA1 または SHA256 アルゴリズムを使用できます。

コマンド ラインからのエージェントの起動

Linux オペレーティング システムと Windows オペレーティング システムの両方でコマンド ラインからエージェントを起動できます。

使用しているオペレーティング システムに適したプロセスを使用してください。

data ディレクトリを削除する場合に、Windows サービスを使用して Endpoint Operations Management エージェントを停止/開始しないようにします。epops-agent.bat stop を使用してエージェントを停止します。

data ディレクトリを削除し、epops-agent.bat start を使用してエージェントを開始します。

Linux コマンド ラインからのエージェント起動ツールの実行

AgentHome/bin ディレクトリ内の epops-agent.sh スクリプトを使用して、エージェント起動ツールおよびエージェント ライフサイクル コマンドを開始できます。

手順

- 1 コマンド シェルまたはターミナル ウィンドウを開きます。
- 2 sh epops-agent.sh *command* の形式を使用して、必要なコマンドを入力します。ここで、command は次のうちのいずれかです。

オプション	説明
start	エージェントをデーモン プロセスとして起動します。
stop	エージェントの JVM プロセスを停止します。
restart	エージェントの JVM プロセスを停止してから起動します。
status	エージェントの JVM プロセスのステータスを問い合わせます。
dump	エージェント プロセスのスレッド ダンプを実行し、その結果を AgentHome/log 内の agent.log ファイルに書き込みます。
ping	エージェント プロセスに対して ping を実行します。
setup	既存のトークンを使用して証明書を再登録します。

Windows コマンド ラインからのエージェント起動ツールの実行

AgentHome/bin ディレクトリ内の epops-agent.bat スクリプトを使用して、エージェント起動ツールおよびエージェント ライフサイクル コマンドを開始できます。

手順

- 1 ターミナル ウィンドウを開きます。
- 2 epops-agent.bat *command* の形式を使用して、必要なコマンドを入力します。ここで、command は次のうちのいずれかです。

オプション	説明
install	エージェント NT サービスをインストールします。install を実行した後に start を実行する必要があります。
start	エージェントを NT サービスとして起動します。
stop	NT サービスとしてのエージェントを停止します。
remove	エージェントのサービスを NT サービス テーブルから削除します。

オプション	説明
query	エージェント NT サービスの現在のステータスを問い合わせます (status)。
dump	エージェント プロセスのスレッド ダンプを実行し、その結果を AgentHome/log 内の agent.log ファイルに書き込みます。
ping	エージェント プロセスに対して ping を実行します。
setup	既存のトークンを使用して証明書を再登録します。

クローン作成した仮想マシンの Endpoint Operations Management エージェントを管理する

データを収集する Endpoint Operations Management エージェントを実行している仮想マシンのクローンを作成した場合、データの継続性を確保するために実行する必要があるプロセスがあります。

元の仮想マシンを削除するために仮想マシンのクローンを作成した場合

仮想マシンのクローンを作成して、元の仮想マシンを削除できるようにする場合は、新しいオペレーティング システムと仮想マシンの関係が作成できるように、元のマシンが vCenter Server および vRealize Operations Manager から削除されていることを確認する必要があります。

元のマシンと独立して実行するために仮想マシンのクローンを作成した場合

2 台のマシンをそれぞれ独立して実行するために仮想マシンのクローンを作成した場合は、1 つのエージェントで監視できるマシンは 1 台だけのため、クローン作成したマシンに新しいエージェントを設定する必要があります。

手順

- ◆ クローン作成されたマシン上で、そのマシンのオペレーティング システムに従って、Endpoint Operations Management トークンと data フォルダを削除します。

オペレーティング システム	プロセス
Linux	Endpoint Operations Management トークンと data フォルダを削除します。
Windows	<ol style="list-style-type: none"> 1 epops-agent remove を実行します。 2 エージェント トークンと data フォルダを削除します。 3 epops-agent install を実行します。 4 epops-agent start を実行します。

vCenter Server インスタンス間での仮想マシンの移動

仮想マシンを別の vCenter Server に移動する場合、vRealize Operations Manager から元のマシンを削除し、作成される仮想マシンとの新しいオペレーティング システム関係を有効にする必要があります。

エージェントのアンインストールと再インストールの影響について

Endpoint Operations Management エージェントをアンインストールまたは再インストールすると、さまざまな要素が影響を受けます。たとえば、エージェントが収集した既存のメトリックや、再インストールされたエージェントがサーバで以前検出されたオブジェクトについてレポートできるようにするための識別トークンなどです。データの継続性を確保するために、エージェントのアンインストールや再インストールの影響を知ることが重要です。

エージェントをアンインストールしたときに保持されるエージェント関連の重要な場所は 2 つあります。エージェントを再インストールする前に、それらのファイルを保持するか削除するかを決める必要があります。

- /data フォルダは、エージェントのインストール中に作成されます。このフォルダには、別の場所を選択しないかぎり、キーストアと、現在インストールされているエージェントに関連するその他のデータが含まれます。
- プラットフォーム トークン ファイル epops-token は、エージェントの登録の前に作成され、以下の場所に保存されます。
 - Linux : /etc/vmware/epops-token
 - Windows : %PROGRAMDATA%/VMware/EP Ops Agent/epops-token

エージェントをアンインストールしたら、/data フォルダを削除する必要があります。これにより、データの継続性に影響が及ぶことはありません。

ただし、データの継続性を有効にするには、epops-token ファイルを削除しないようにすることが重要です。このファイルには、プラットフォーム オブジェクトの識別トークンが含まれています。エージェントの再インストール後、このトークンによって、エージェントはサーバ上で以前検出されたオブジェクトと同期をとることができます。

エージェントを再インストールすると、既存のトークンが見つかったかどうか通知され、その識別子が提供されます。トークンが見つかった場合、そのトークンが使用されます。トークンが見つからなかった場合、新しいトークンが作成されます。エラーが発生した場合は、既存のトークン ファイルまたは新しいトークン ファイルの場所とファイル名を指定するようメッセージが表示されます。

エージェントのアンインストールに使用する方法は、そのエージェントをどのようにインストールしたかによって異なります。

■ [アーカイブからインストールしたエージェントのアンインストール](#)

アーカイブから環境内の仮想マシンにインストールしたエージェントは、この手順でアンインストールできます。

■ [RPM パッケージを使ってインストールしたエージェントのアンインストール](#)

RPM パッケージを使って環境内の仮想マシンにインストールしたエージェントは、この手順でアンインストールできます。

■ [Windows の実行可能ファイルを使ってインストールしたエージェントのアンインストール](#)

Windows の EXE ファイルから環境内の仮想マシンにインストールしたエージェントは、この手順でアンインストールできます。

■ [エージェントの再インストール](#)

vRealize Operations Manager サーバの IP アドレス、ホスト名、またはポート番号を変更した場合、エージェントを一度アンインストールしてから再インストールする必要があります。

アーカイブからインストールしたエージェントのアンインストール

アーカイブから環境内の仮想マシンにインストールしたエージェントは、この手順でアンインストールできます。

前提条件

エージェントが停止していることを確認します。

手順

- 1 (オプション) Windows オペレーティング システムの場合は、`ep-agent.bat remove` を実行してエージェント サービスを削除します。

- 2 状況に合ったアンインストール オプションを選択します。

- エージェントをアンインストールした後に再インストールしない場合は、エージェントのディレクトリを削除します。

デフォルトのディレクトリ名は `epops-agent-version` です。

- エージェントをアンインストールした後に再インストールする場合は、`/data` ディレクトリを削除します。

- 3 (オプション) エージェントをアンインストールした後に再インストールしない場合、またはデータの継続性を維持する必要がない場合は、プラットフォーム トークン ファイル `epops-token` を削除します。

オペレーティング システムに応じて、削除するファイルは以下のいずれかです (プロパティ ファイルで別の定義をしていない場合)。

- Linux : `/etc/epops/epops-token`
- Windows : `%PROGRAMDATA%/VMware/EP Ops Agent/epops-token`

RPM パッケージを使ってインストールしたエージェントのアンインストール

RPM パッケージを使って環境内の仮想マシンにインストールしたエージェントは、この手順でアンインストールできます。

Endpoint Operations Management エージェントをアンインストールする際は、サーバの不必要な負荷を軽減するため、エージェントの動作を停止することをお勧めします。

手順

- ◆ エージェントを削除する仮想マシンで、コマンド ラインを開き、`rpm -e epops-agent` を実行します。

結果

エージェントが仮想マシンからアンインストールされます。

Windows の実行可能ファイルを使ってインストールしたエージェントのアンインストール

Windows の EXE ファイルから環境内の仮想マシンにインストールしたエージェントは、この手順でアンインストールできます。

Endpoint Operations Management エージェントをアンインストールする際は、サーバの不必要な負荷を軽減するため、エージェントの動作を停止することをお勧めします。

手順

- ◆ エージェントのインストール先ディレクトリにある `unins000.exe` をダブルクリックします。

結果

エージェントが仮想マシンからアンインストールされます。

エージェントの再インストール

vRealize Operations Manager サーバの IP アドレス、ホスト名、またはポート番号を変更した場合、エージェントを一度アンインストールしてから再インストールする必要があります。

前提条件

データの継続性を維持するには、エージェントのアンインストール時にプラットフォーム トークン ファイル `epops-token` を保持しておく必要があります。[アーカイブからインストールしたエージェントのアンインストール](#) を参照してください。

仮想マシン上に Endpoint Operations Management エージェントを再インストールした場合、以前に検出されたオブジェクトは監視されなくなります。こうした状況を回避するために、プラグインの同期が完了するまで、Endpoint Operations Management エージェントを再起動しないでください。

手順

- ◆ オペレーティング システムに合ったエージェント インストール手順を実行します。

[エージェント インストーラ パッケージの選択](#) を参照してください。

次のステップ

エージェントを再インストールすると、MSSQL リソースがデータを受信しなくなる場合があります。その場合は、問題のあるリソースを編集し、[OK] をクリックします。

複数の Endpoint Operations Management エージェントを同時にインストールする

一度に複数の Endpoint Operations Management エージェントをインストールする場合は、すべてのエージェントが使用可能な標準の `agent.properties` ファイルを 1 つ作成します。

複数のエージェントのインストールには、いくつかの手順が必要です。リストの順番に従って手順を実行します。

前提条件

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- 1 インストール サーバをセットアップします。

インストール サーバは、ターゲット プラットフォームにアクセス可能な、リモート インストールを実行するサーバです。

このサーバには、各ターゲット プラットフォームにパスワードなしで SSH 接続できる権限を持ったユーザー アカウントを構成する必要があります。

- 2 Endpoint Operations Management エージェントのインストール先の各ターゲット プラットフォームに、次の項目があることを確認します。

- インストール サーバに作成したものと同一ユーザー アカウント。
- 同じ名前のインストール ディレクトリ (`/home/epomagent` など)。
- 信頼できるキーストア (必要に応じて)。

手順

- 1 [標準の Endpoint Operations Management エージェント プロパティ ファイルの作成](#)

複数のエージェントが使用するプロパティ値が含まれた 1 つのプロパティ ファイルを作成できます。

2 複数のエージェントを1つずつデプロイおよび起動する

リモート インストールを実行して、1つの `agent.properties` ファイルを使用する複数のエージェントを1つずつデプロイできます。

3 複数のエージェントを同時にデプロイおよび起動する

リモート インストールを実行して、1つの `agent.properties` ファイルを使用する複数のエージェントを同時にデプロイできます。

標準の Endpoint Operations Management エージェント プロパティ ファイルの作成

複数のエージェントが使用するプロパティ値が含まれた1つのプロパティ ファイルを作成できます。

複数のエージェントをデプロイできるようにするには、エージェントが起動して vRealize Operations Manager サーバと接続するのに必要なエージェント プロパティを定義する `agent.properties` ファイルを作成します。必要な情報をプロパティ ファイルに指定すると、各エージェントは起動時にセットアップ構成の場所を探し、場所を入力するように求められなくなります。エージェント プロパティ ファイルをエージェント インストール ディレクトリまたはインストールされているエージェントが使用可能な場所にコピーできます。

前提条件

[複数の Endpoint Operations Management エージェントを同時にインストールする](#) の前提条件を満たしていることを確認します。

手順

1 ディレクトリに `agent.properties` ファイルを作成します。

このファイルを後で別のマシンにコピーします。

2 必要に応じてプロパティを構成します。

最小限の構成は、IP アドレス、ユーザー名、パスワード、サムプリント、vRealize Operations Manager インストール サーバのポートです。

3 構成を保存します。

結果

エージェントは、初めて起動したときに、`agent.properties` ファイルを読み込んでサーバ接続情報を識別します。エージェントはサーバに接続して、自らを登録します。

次のステップ

リモート エージェント インストールを実行します。[複数のエージェントを1つずつデプロイおよび起動する](#) または [複数のエージェントを同時にデプロイおよび起動する](#) を参照してください。

複数のエージェントを1つずつデプロイおよび起動する

リモート インストールを実行して、1つの `agent.properties` ファイルを使用する複数のエージェントを1つずつデプロイできます。

前提条件

- [複数の Endpoint Operations Management エージェントを同時にインストールする](#) の前提条件を満たしていることを確認します。

- 標準のエージェント プロパティ ファイルを構成し、それをエージェント インストールまたはエージェント インストールが使用可能な場所にコピーしたことを確認します。

手順

- 1 SSH を使用する権限を設定した、インストール サーバのユーザー アカウントにログインします。これにより、パスワードの入力が求められずに各ターゲット プラットフォームに接続することができます。
- 2 SSH を使用してリモート プラットフォームに接続します。
- 3 エージェント アーカイブをエージェント ホストにコピーします。
- 4 エージェント アーカイブを展開します。
- 5 `agent.properties` ファイルをリモート プラットフォームの展開したエージェント アーカイブの `AgentHome/conf` ディレクトリにコピーします。
- 6 新しいエージェントを起動します。

結果

エージェントは vRealize Operations Manager サーバへの登録を行い、自動検出スキャンを実行して、ホスト プラットフォームと、プラットフォームで実行されているサポートと管理の対象となる製品を検出します。

複数のエージェントを同時にデプロイおよび起動する

リモート インストールを実行して、1つの `agent.properties` ファイルを使用する複数のエージェントを同時にデプロイできます。

前提条件

- [複数の Endpoint Operations Management エージェントを同時にインストールする](#) の前提条件を満たしていることを確認します。
- 標準のエージェント プロパティ ファイルを構成し、それをエージェント インストールまたはエージェント インストールが使用可能な場所にコピーしたことを確認します。[標準の Endpoint Operations Management エージェント プロパティ ファイルの作成](#) を参照してください。

手順

- 1 エージェントをインストールする各プラットフォームの IP アドレスにホスト名をマップする `hosts.txt` ファイルをインストール サーバに作成します。
- 2 インストール サーバでコマンドライン シェルを開きます。
- 3 シェルに次のコマンドを入力します。export コマンドには適切なエージェント パッケージ名を指定します。

```
$ export AGENT=epops-agent-x86-64-linux-1.0.0.tar.gz
$ export PATH_TO_AGENT_INSTALL=</path/to/agent/install>
$ for host in `cat hosts.txt`; do scp $AGENT $host:$PATH_TO_AGENT_INSTALL && ssh $host "cd
$PATH_TO_AGENT_INSTALL; tar zxfp $AGENT &&
./epops-agent-1.0.0/ep-agent.sh start"; done
```

- 4 (オプション) ターゲット ホストの名前が連続した名前 (例: host001、host002、host003) の場合は、hosts.txt をスキップして、seq コマンドを使用できます。

```
$ export AGENT=epops-agent-x86-64-linux-1.0.0.tar.gz
$ for i in `seq 1 9`; do scp $AGENT host$i: && ssh host$i "tar xzfp $AGENT &&
./epops-agent-1.0.0/ep-agent.sh start"; done
```

結果

エージェントは vRealize Operations Manager サーバへの登録を行い、自動検出スキャンを実行して、ホスト プラットフォームと、プラットフォームで実行されているサポートと管理の対象となる製品を検出します。

Endpoint Operations Management エージェントのアップグレード

vRealize Operations Manager 管理インタフェースから、6.3 または 6.4 バージョンの Endpoint Operations Management エージェントを 6.5 バージョンにアップグレードできます。

前提条件

- Endpoint Operations ManagementPAK ファイルをダウンロードします。
- PAK ファイルを vRealize Operations Manager インストールするか、インスタンスをアップグレードする前に、カスタマイズしたコンテンツを保存するためにクローンを作成します。カスタマイズしたコンテンツには、アラートの定義、シンプトムの定義、推奨事項、およびビューを含めることができます。そして、ソフトウェアのアップデート時に、[インストール済みの場合でも PAK ファイルをインストールします] オプションおよび [初期状態のコンテンツのリセット] オプションを選択します。

手順

- 1 クラスタの vRealize Operations Manager 管理インターフェイス (<https://IP-address/admin>) にログインします。
- 2 左パネルの [ソフトウェア アップデート] をクリックします。
- 3 メイン パネルの [ソフトウェア アップデートのインストール] をクリックします。
- 4 [ソフトウェア アップデートの追加] ダイアログ ボックスから、[参照] をクリックして、PAK ファイルを選択します。
- 5 [アップロード] をクリックして、ウィザードの手順に従い、PAK ファイルをインストールします。
- 6 インストールの手順 4 を完了したら、Endpoint Operations Management 管理インタフェースの [ソフトウェア アップデート] ページに戻ります。
- 7 メイン ペインに、更新が正常に完了したことを示すメッセージが表示されます。

エージェントが正常にインストールされなかった場合は、アップグレード手順に戻り、[ソフトウェア アップデートの追加 - ソフトウェア アップデートの選択] ページで [PAK ファイルがインストール済みでもインストールします] を選択していることを確認します。

次のステップ

ログ ファイルは、vRealize Operations Manager 管理インタフェース > [サポート] ページから表示できます。

ログ ファイルのアクセスおよび表示

ログ ファイルにアクセスして表示し、エージェント アップグレードの障害をトラブルシューティングできます。アップグレード プロセス中およびアップグレード プロセス後にエージェントのステータスを確認して、エージェントが正常にアップグレードされたかどうかを確認できます。

アップグレード中のエージェントのステータスは、`epops-agent-upgrade-status.txt` ファイルから表示できます。正常にアップグレードされたエージェントの数とアップグレードに失敗したエージェントの数の最終レポートは、`epops-agent-bundle-upgrade-summary.txt` ファイルから表示できます。

手順

- 1 クラスタの vRealize Operations Manager 管理インターフェイス (<https://IP-address/admin>) にログインします。
- 2 左パネルの [サポート] をクリックします。
- 3 右側のペインの [ログ] タブをクリックし、[EPOPS] をダブルクリックします。
- 4 ログ ファイルをダブルクリックして、内容を表示します。

vRealize Operations Manager でのロールと権限

vRealize Operations Manager では、権限をユーザーに割り当てる事前定義済みロールが複数用意されています。独自の役割を作成することもできます。

vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイス内の特定の機能にアクセスするための権限が必要です。ユーザー アカウントに関連付けられたロールによって、アクセスできる機能および実行できるアクションが決まります。

各事前定義済みロールには、ダッシュボード、レポート、管理、容量、ポリシー、問題、症状、アラート、ユーザー アカウント管理、アダプタなどのコンポーネントに対し、ユーザーが作成、読み取り、更新あるいは削除アクションを行うための権限一式が含まれています。

システム管理者

vRealize Operations Manager のすべての機能、オブジェクトおよびアクションに対する権限が含まれています。

PowerUser

ユーザーには、ユーザー管理とクラスタ管理権限を除く、管理者ロールのアクションを実行する権限があります。vRealize Operations Manager は、vCenter Server ユーザーをこのロールにマップします。

PowerUserMinusRemediation

ユーザーには、ユーザー管理、クラスタ管理および修正アクション権限を除く、管理者ロールのアクションを実行する権限があります。

ContentAdmin

ユーザーは、vRealize Operations Manager のすべてのコンテンツ（ビュー、レポート、ダッシュボード、カスタム グループなど）を管理できます。

AgentManager

ユーザーは、Endpoint Operations Management エージェントを展開および構成することができます。

GeneralUser-1 から GeneralUser-4

これらの事前定義済みテンプレート ロールは、最初に ReadOnly ロールと定義されます。vCenter Server 管理者は、これらのロールを構成して、ユーザーに複数タイプの権限を与えるロールの組み合わせを作成することができます。ロールは、登録中に一度 vCenter Server と同期されます。

ReadOnly

ユーザーは、読み取り専用でアクセスし、読み取りアクションを実行できますが、作成、更新または削除といった書き込みアクションは実行できません。

クラスタでのエージェントの登録

クラスタの DNS 名を定義し、メトリックをループで順番に共有するようにクラスタを構成すると、エージェントの登録プロセスを効率化できます。

エージェントは、クラスタ内の各マシンの IP アドレスではなく DNS で登録できます。クラスタ内の各ノードにエージェントを登録した場合、環境のスケールに影響が生じます。

受信したメトリックをループで順番に共有するようクラスタを構成すると、エージェントが DNS サーバに IP アドレスを照会するたびに、クラスタ内のいずれかの仮想マシンのアドレスが返されます。エージェントが次に DNS に照会をかけたときは、クラスタ内の次の仮想マシンの IP アドレスが順番に返されます。クラスタ内のマシンにはループ構成が設定され、それぞれが順番にメトリックを受信して負荷分散されるようにします。

DNS の構成後は、クラスタにマシンを追加したり削除したりしたときに、それに従ってマシンの IP アドレス情報が更新されるよう保守することが重要です。

オペレーティング システム オブジェクトを手動で作成する

エージェントは、監視対象の一部のオブジェクトを自動で検出しますが、ファイル、スクリプト、プロセスなどのその他のオブジェクトを手動で追加し、詳細を指定して、エージェントがそれらを監視するようにできます。

[OS オブジェクトの監視] アクションは、親オブジェクトとして使用できるオブジェクトの [アクション] メニューにのみ表示されます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、作成する OS オブジェクトの親となるエージェント アダプタ オブジェクトを選択します。
- 2 [アクション] - [OS オブジェクトの監視] を選択します。
メニューに、親オブジェクトに応じたオブジェクトのリストが表示されます。
- 3 以下のいずれかのオプションを選択します。
 - リストからオブジェクト タイプをクリックし、このオブジェクト タイプの [OS オブジェクトの監視] ダイアログを開きます。
リストに表示されるのは、よく選択される 3 つのオブジェクト タイプです。

- 選択したいオブジェクト タイプがリストにない場合は、[その他] をクリックして [OS オブジェクトの監視] ダイアログを開き、[オブジェクト タイプ] メニューで選択可能なすべてのオブジェクトのリストからオブジェクトを選択します。

4 OS オブジェクトの表示名を指定します。

5 その他のテキスト ボックスに適切な値を入力します。

メニューのオプションは、選択した OS オブジェクトに従ってフィルタされています。

一部のテキスト ボックスにはデフォルト値が表示されており、必要に応じて上書きできます。デフォルト値に関する次の情報をメモします。

オプション	値
プロセス	<p>次の形式で PTQL クエリを指定します。Class.Attribute.operator=value たとえば、Pid.PidFile.eq=/var/run/sshd.pid など。</p> <p>ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Class は、Proc プリフィックスを除いた SigaR クラス名です。 ■ Attribute は、指定したクラスの属性であり、Map クラスのアレイまたはキーへのインデックスです。 ■ operator は次のいずれかです（文字列値）。 <ul style="list-style-type: none"> ■ eq は、値に等しい ■ ne は、値に等しくない ■ ew は、値で終わる ■ sw は、値で始まる ■ ct は、値を含む（部分文字列） ■ re は、正規表現値が一致 <p>クエリはカンマで区切ります。</p>
Windows サービス	<p>Windows のサービスとして実行されるアプリケーションを監視します。</p> <p>これを構成する場合は、Windows でのサービス名を指定します。</p> <p>サービス名を確認するには、以下を行います。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 Windows の [スタート] メニューから、[ファイル名を指定して実行] を選択します。 2 ファイル名を指定して実行ダイアログで services.msc と入力し、[OK] をクリックします。 3 表示されたサービスのリストから監視するサービスを右クリックして、[プロパティ] を選択します。 4 [全般] タブでサービス名を検索します。
スクリプト	<p>vRealize Operations Manager を構成して、システムまたはアプリケーションのメトリックを収集するスクリプトを定期的に行います。</p>

6 [OK] をクリックします。

入力必須のテキスト ボックスすべてに値を入力するまで、[OK] はクリックできません。

結果

親オブジェクトの下に OS オブジェクトが表示され、監視が始まります。

注意： OS オブジェクトを作成したときに無効な情報を入力した場合、オブジェクトは作成されますが、エージェントはそのオブジェクトを検出できず、メトリックは収集されません。

構成パラメータの指定されていないオブジェクトの管理

vRealize Operations Manager により初めて検出されたオブジェクトでは、必須構成パラメータの一部の値が未設定であることが検出される場合があります。オブジェクトのパラメータを編集して未設定の値を入力できます。

vRealize Operations Manager の [環境の概要] 表示で [カスタム グループ] - [Objects with Missing Configuration (EP Ops)] の順に選択すると、未設定の必須構成パラメータがあるすべてのオブジェクトのリストが表示できます。また、そのような未設定パラメータのあるオブジェクトは、収集ステータス データでエラーを返します。

vRealize Operations Manager ユーザー インターフェイスで未構成パラメータのあるオブジェクトを選択すると、赤い未設定構成状態アイコンがメニュー バーに表示されます。そのアイコンをポイントすると、個々の問題の詳細が表示されます。

未設定パラメータの値を追加するには、[アクション] - [オブジェクトの編集] の順にメニューを選択します。

仮想マシンをオペレーティング システムにマッピングする

仮想マシンをオペレーティング システムにマッピングして、仮想マシンに対してトリガーされたアラートの根本原因を判断するのに役立つ追加情報を提供できます。

vRealize Operations Manager は、ESXi ホストと、そのホスト上の仮想マシンを監視します。Endpoint Operations Management エージェントをデプロイすると、仮想マシンとそこで実行されているオブジェクトが検出されます。Endpoint Operations Management エージェントによって検出された仮想マシンと vRealize Operations Manager によって監視されるオペレーティング システムを関連付けることで、トリガーされたアラートの原因を正確に判断するための詳細情報を取得することができます。

vCenter Adapter に、仮想マシンを管理する vCenter Server が構成されていることを確認します。また、各仮想マシンに vCenter Server と互換性のある VMware Tools がインストールされていることを確認する必要があります。

ユーザー シナリオ

vRealize Operations Manager は稼働していますが、まだ Endpoint Operations Management エージェントを環境にデプロイしていません。CPU の問題が発生したときにアラートを送るよう、vRealize Operations Manager を構成してあります。Linux オペレーティング システムを実行している仮想マシンのいずれかで CPU キャパシティが足りなくなったため、ダッシュボードにアラートが表示されます。仮想 CPU をさらに 2 つデプロイしましたが、アラートは消えません。問題の原因がわからず困っています。

同じ状況で Endpoint Operations Management エージェントをデプロイしていた場合、仮想マシン上のオブジェクトを確認することができ、アプリケーションタイプのオブジェクトが使用可能な CPU キャパシティをすべて使っていることがわかります。CPU キャパシティを追加しても、それも使われてしまいます。そのオブジェクトを無効にすると、CPU の可用性の問題は解消されました。

仮想マシン上のオブジェクトを表示する

仮想マシンに Endpoint Operations Management エージェントをデプロイした後、そのマシンがオペレーティング システムにマップされ、マシン上のオブジェクトが表示されるようになります。

vRealize Operations Manager 環境内の他のオブジェクトに使用可能なすべてのアクションとビューが、新しく検出されたサーバ、サービス、アプリケーション オブジェクト、およびデプロイされたエージェントに対しても使用できるようになります。

[環境] - [vSphere ホストおよびクラスタ] ビューでマシンを選択すると、仮想マシン上のオブジェクトがインベントリに表示されます。オブジェクトとデプロイされたエージェントは、オペレーティング システムの下に表示されます。

オブジェクトを選択すると、ユーザー インターフェイスの中央のペインにそのオブジェクトに関連するデータが表示されます。

Endpoint Operations Management によるオペレーティング システムの監視方法のカスタマイズ

Endpoint Operations Management は、エージェントベースの収集を使用してオペレーティング システムのメトリックを収集します。Endpoint Operations Management の初期構成後に使用可能になる機能に加えて、リモート監視を有効にしたり、追加の監視のためのプラグインを有効または無効にしたり、Endpoint Operations Management ログをカスタマイズしたりできます。

リモート監視の構成

リモート監視では、リモート チェックを構成することによって、オブジェクトの状態を遠隔地から監視できます。

リモート監視は、HTTP、ICMP、TCP の方法を使用して構成できます。

リモートの HTTP、ICMP、または TCP チェックを構成すると、それは、監視しているテスト対象のオブジェクトと監視エージェントの子オブジェクトとして作成されます。

リモートで監視することを選択したオブジェクトにアラートがまだ構成されていない場合は、*Remote check type failed on a object type.* という形式のアラートが自動的に作成されます。そのオブジェクトに既存のアラートがある場合は、それが使用されます。

オブジェクトのリモート監視の構成

この手順を使用して、オブジェクトのリモート監視を構成します。

構成オプションは、[HTTP 構成オプション](#)、[ICMP 構成オプション](#)、および [TCP 構成オプション](#) に定義されています。この手順を実行するときに、これらの情報を参照しなければならないことがあります。

手順

- 1 vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイスで、監視するリモート オブジェクトを選択します。
- 2 オブジェクトの詳細ページで、[アクション] メニューから [このオブジェクトをリモートで監視] を選択します。
- 3 [リモート オブジェクトの監視] ダイアログで、オブジェクトをリモート監視する Endpoint Operations Management エージェントを [監視元] メニューから選択します。
- 4 リモート オブジェクトを監視する方法を、[チェック方法] メニューから選択します。
選択したオブジェクト タイプに該当するパラメータが表示されます。

- 5 すべての構成オプションの値を入力して、[OK] をクリックします。

HTTP 構成オプション

HTTP リソースの構成スキーマ内のオプションを以下に示します。

HTTP リソースに対する `netservices` プラグイン記述子の値は次のとおりです。

- `port: 80`

■ sslport: 443

HTTP 構成オプション

表 4-7. ssl オプション

オプション情報	値
説明	ssl の使用
デフォルト	偽
任意	真
ファイルタイプ	boolean
メモ	該当なし
親スキーマ	ssl

表 4-8. hostname オプション

オプション情報	値
説明	ホスト名
デフォルト	localhost
任意	偽
ファイルタイプ	該当なし
メモ	監視するサービスをホストするシステムのホスト名。例：mysite.com
親スキーマ	sockaddr

表 4-9. port オプション

オプション情報	値
説明	ポート
デフォルト	ポートのデフォルト値は、netsservices プラグイン記述子のプロパティで、ネットワーク サービスの各タイプに対して設定されています。
任意	偽
ファイルタイプ	該当なし
メモ	サービスがリスンするポート。
親スキーマ	sockaddr

表 4-10. sotimeout オプション

オプション情報	値
説明	ソケットのタイムアウト（秒）
デフォルト	10
任意	真
ファイルタイプ	int

表 4-10. sotimeout オプション（続き）

オプション情報	値
メモ	エージェントがリモート サービスへの要求に対する応答を待機する最大時間。
親スキーマ	sockaddr

表 4-11. path オプション

オプション情報	値
説明	パス
デフォルト	/
任意	偽
ファイルタイプ	該当なし
メモ	サイト上の特定のページまたはファイルを監視するための値を入力します。例：/Support.html
親スキーマ	url

表 4-12. method オプション

オプション情報	値
説明	要求方法
デフォルト	HEAD
任意	偽
ファイルタイプ	enum
メモ	<p>可用性をチェックするための方法。</p> <p>使用可能な値：HEAD、GET</p> <p>HEAD はネットワーク トラフィックが少なくなります。</p> <p>要求応答の本文を戻して応答内で突き合わせるためのパターンを指定するには GET を使用します。</p>
親スキーマ	http

表 4-13. hostheader オプション

オプション情報	値
説明	ホスト ヘッダ
デフォルト	なし
任意	真
ファイルタイプ	該当なし
メモ	<p>要求内に Host HTTP ヘッダを設定するにはこのオプションを使用します。これは、名前ベースの仮想ホスティングを使用する場合に有効です。</p> <p>Vhost のホストのホスト名を指定します。例：blog.mypost.com</p>
親スキーマ	http

表 4-14. follow オプション

オプション情報	値
説明	リダイレクトをフォロー
デフォルト	有効
任意	真
ファイルタイプ	boolean
メモ	生成される HTTP 要求がリダイレクトされる場合に有効にします。このリダイレクト構成が設定されていない場合は、HTTP サーバがリダイレクトに対して異なるコードを返し、vRealize Operations Manager は HTTP サービス チェックがリダイレクトである場合はそれが使用不可能であると判断するため、これは重要です。
親スキーマ	http

表 4-15. pattern オプション

オプション情報	値
説明	応答マッチ（サブストリングまたは正規表現）
デフォルト	なし
任意	真
ファイルタイプ	該当なし
メモ	vRealize Operations Manager が HTTP レスポンスの内容との突き合わせを試行するためのパターンまたはサブストリングを指定します。これにより、使用可能であることのチェックに加え、リソースが期待どおりの内容を提供していることのチェックが可能になります。
親スキーマ	http

表 4-16. proxy オプション

オプション情報	値
説明	プロキシ接続
デフォルト	なし
任意	真
ファイルタイプ	該当なし
メモ	HTTP サービスへの接続がプロキシ サーバを経由する場合、プロキシ サーバのホスト名とポートを指定します。例：proxy.myco.com:3128
親スキーマ	http

表 4-17. requestparams オプション

オプション情報	値
説明	要求引数。例： arg0=val0、 arg1=val1 など
デフォルト	該当なし
任意	真

表 4-17. requestparams オプション（続き）

オプション情報	値
ファイルタイプ	文字列
メモ	テスト対象 URL に追加される要求パラメータ。
親スキーマ	http

表 4-18. Credential オプション

オプション情報	値
説明	ユーザー名
デフォルト	該当なし
任意	真
ファイルタイプ	該当なし
メモ	ターゲット サイトがパスワードで保護されている場合、ユーザー名を指定します。
親スキーマ	認証情報

ICMP 構成オプション

ICMP リソース用の構成スキーマを示します。

ICMP 構成は Windows 環境ではサポートされません。Windows プラットフォーム上で実行されているエージェントからリモート監視の ICMP チェックを実行しても、データが返されません。

表 4-19. hostname オプション

オプション情報	値
説明	ホスト名
デフォルト	localhost
任意	該当なし
タイプ	該当なし
メモ	監視するオブジェクトをホストするシステムのホスト名。例： mysite.com
親スキーマ	netsservices プラグイン記述子

表 4-20. sotimeout オプション

オプション情報	値
説明	ソケットのタイムアウト（秒）
デフォルト	10
任意	該当なし
タイプ	整数
メモ	リモート サービスへの要求への応答をエージェントが待つ最大時間。
親スキーマ	netsservices プラグイン記述子

TCP 構成オプション

TCP チェックを有効にする構成スキーマを示します。

表 4-21. port オプション

オプション情報	値
説明	ポート
デフォルト	ポートのデフォルト値は、netservices プラグイン記述子のプロパティで、ネットワーク サービスの各タイプに対して設定されています。
任意	false
タイプ	該当なし
メモ	サービスがリスンするポート。
親スキーマ	sockaddr

表 4-22. hostname オプション

オプション情報	値
説明	ホスト名
デフォルト	localhost
任意	該当なし
タイプ	該当なし
メモ	監視するオブジェクトをホストするシステムのホスト名。例： mysite.com
親スキーマ	netservices プラグイン記述子

リモート チェックを実行するマシンのホスト名でなく、IP アドレスを指定していることを確認してください。

表 4-23. sotimeout オプション

オプション情報	値
説明	ソケットのタイムアウト（秒）
デフォルト	10
任意	該当なし
タイプ	整数
メモ	リモート サービスへの要求への応答をエージェントが待つ最大時間。
親スキーマ	netservices プラグイン記述子

エージェント プラグインの操作

Endpoint Operations Management エージェントには、監視するオブジェクト、監視方法、収集するメトリックなどを決定するプラグインがあります。一部のプラグインは、Endpoint Operations Management エージェントのインストールにデフォルトで含まれていますが、その他のプラグインは、vRealize Operations Manager 監視プロセスを拡張するためにインストールする管理パック ソリューションの一部として追加する必要があります。

コンテンツ ビューの [プラグイン] タブを使用して、ソリューション インストールの一部として環境にデプロイされたエージェント プラグインを無効または有効にすることができます。たとえば、一時的にプラグインを無効にして、監視対象の仮想マシン上でそのプラグインの影響を分析することができます。

すべてのデフォルト プラグインと、1 つまたは複数のソリューションをインストールしたときにデプロイされたプラグインが、タブにアルファベット順に表示されます。

プラグインを有効または無効にするには、プラグインの管理権限が必要です。

プラグインを無効にすると、プラグインが存在するすべてのエージェントからそのプラグインが削除され、エージェントはそのプラグインに関連するメトリックおよびその他のデータを収集しなくなります。プラグインは vRealize Operations Manager サーバ上で無効としてマークされます。

vRealize Operations Manager のインストール時にインストールされたデフォルトのプラグインは無効にできません。

歯車アイコンをクリックして表示されるアクション メニューを使用してプラグインを無効または有効にできます。

新しいバージョンのプラグインをデプロイする前に、シャットダウン方式を実装する必要があります。シャットダウン方式を実装しないと、既存のプラグインがシャットダウンされないで、新しいインスタンスが作成され、静的スレッドなどの割り当てられているリソースがリリースされません。次のプラグインでシャットダウン方式を実装します。

- サードパーティ ライブラリを使用するプラグイン
- ネイティブ ライブラリを使用するプラグイン
- 接続プールを使用するプラグイン
- ファイルをロックするプラグイン (Windows オペレーティング システムで問題の原因となる)

プラグインでは、スレッド、サードパーティ ライブラリ、または静的コレクションを使用しないようにすることをお勧めします。

プラグインのロードの構成

起動時に、Endpoint Operations Management エージェントはすべてのプラグインを `AgentHome/bundles/agent-x.y.z-nnnn/pdk/plugins` ディレクトリ内にロードします。使用するプラグインのみをロードするように `agent.properties` ファイル内のプロパティを構成することにより、エージェントのメモリ フットプリントを削減できます。

プラグインは、ソリューションがインストールされたときにすべてのエージェントにデプロイされます。特定のマシンから 1 つ以上のプラグインを削除する必要がある状況では、ここで説明されているプロパティを使用することが必要になる場合があります。除外するプラグインのリストを指定するか、またはロードするプラグインのリストを構成することができます。

`plugins.exclude`

Endpoint Operations Management エージェントが起動時にロードしてはいけないプラグインを指定するには、このプロパティを使用します。

除外するプラグインをカンマで区切って指定します。たとえば、`plugins.exclude=jboss,apache,mysql` など。

`plugins.include`

Endpoint Operations Management エージェントが起動時にロードする必要があるプラグインを指定するには、このプロパティを使用します。

含めるプラグインをカンマで区切って指定します。たとえば、`plugins.include=weblogic,apache` など。

非同期エージェント グループについて

非同期エージェントは、プラグインに関して vRealize Operations Manager サーバと同期していないエージェントです。このエージェントは、サーバに登録されているが見つからないプラグイン、サーバに登録されていないプラグイン、またはサーバに登録されているのとは異なるバージョンのプラグインなどである可能性があります。

各エージェントは vRealize Operations Manager サーバと同期している必要があります。エージェントがサーバと同期していない期間は、非同期エージェントのリストにそのエージェントが表示されます。そのリストは、vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイスの環境ビューの [グループ] タブにあります。

エージェントが初めて起動されると、ステータス メッセージがサーバに送信されます。サーバは、エージェントが送信したステータスを、サーバ上のステータスと比較します。サーバは、検出した差異での必要に応じて、プラグインを同期、ダウンロード、または削除するためのコマンドをエージェントに送信します。

管理バック ソリューション更新の一部としてプラグインがデプロイ、無効化、または有効化されると、vRealize Operations Manager サーバはその変更を検出し、同期させるための新しいコマンドをエージェントに送信します。

プラグインがデプロイ、無効化、または有効化される場合、通常は同時に複数のエージェントが影響を受けます。すべてのエージェントが均等に更新される必要があり、多数のエージェントすべてが同時に同期される場合に発生する可能性があるサーバの過負荷およびパフォーマンスの低下を避けるために、同期はバッチ処理で 1 分間隔でずらして実行されます。時間が経過すると、非同期エージェントのリストが減っていくことがわかります。

エージェント ログの構成

Endpoint Operations Management エージェント ログの名前、場所、およびログ レベルを構成できます。また、システム メッセージをエージェント ログにリダイレクトしたり、エージェント サブシステムのデバッグ ログ レベルを構成したりすることもできます。

エージェント ログ ファイル

Endpoint Operations Management エージェント ログ ファイルは `AgentHome/log` ディレクトリに格納されています。

エージェント ログ ファイルには次のファイルがあります。

agent.log

agent.operations.log

このログ ファイルは Windows ベースのエージェントのみに適用されます。

これは、エージェントで実行されたコマンドを、そのアクションにエージェントが使用したパラメータと共に記録している監査ログです。

wrapper.log

Java サービス ラッパ ベースのエージェント起動ツールは `wrapper.log` ファイルにメッセージを書き込みます。JRE を使用しないエージェントでは、このファイルは `agentHome/wrapper/sbin` にあります。

`agent.logDir` プロパティで値が変更された場合、このファイルは `agentHome/wrapper/sbin` にも置かれます。

エージェント ログの名前または場所の構成

エージェント ログ ファイルの名前または場所を変更するには、次のプロパティを使用します。

`agent.logDir`

このプロパティを `agent.properties` ファイルに追加すると、Endpoint Operations Management エージェントがログ ファイルを書き込むディレクトリを指定できます。完全修飾パスを指定しない場合、`agent.logDir` は、エージェントのインストール ディレクトリを基準として評価されます。

このプロパティは、明示的に追加しない限り `agent.properties` ファイルには存在しません。デフォルトの動作は `agent.logDir=log` の設定と同じであり、エージェント ログ ファイルが `AgentHome/log` ディレクトリに書き込まれます。

エージェント ログ ファイルの場所を変更するには、`agent.logDir` を `agent.properties` ファイルに追加し、エージェントのインストール ディレクトリを基準としたパスか、または完全修飾パスを入力します。

エージェント ログ ファイルの名前は、`agent.logFile` プロパティを使用して構成されます。

`agent.logFile`

このプロパティは、エージェント ログ ファイルのパスと名前を指定します。

`agent.properties` ファイル内で、`agent.LogFile` プロパティのデフォルト設定は、変数と文字列 `agent.logFile=${agent.logDir}\agent.logDir` で構成されます。

- `agent.logDir` は、同じ名前のエージェント プロパティの値を指定する変数です。デフォルトでは、`agent.logDir` の値は `log` であり、エージェントのインストール ディレクトリを基準として解釈されます。
- `agent.log` は、エージェント ログ ファイルの名前です。

デフォルトでは、エージェント ログ ファイルは `agent.log` という名前であり、`AgentHome/log` ディレクトリに書き込まれます。

ログを別のディレクトリに記録するようにエージェントを構成するには、`agent.logDir` プロパティを `agent.properties` ファイルに明示的に追加する必要があります。

エージェントのログ レベルの構成

Endpoint Operations Management エージェントがエージェント ログ ファイルに書き込むメッセージの重大度レベルを制御するには、このプロパティを使用します。

`agent.logLevel`

このプロパティは、Endpoint Operations Management エージェントがログ ファイルに書き込むメッセージの詳細レベルを指定します。

`agent.logLevel` プロパティ値を `DEBUG` レベルに設定することは推奨されません。すべてのサブシステムにこのログ レベルを設定すると、オーバーヘッドが発生します。また、ログ ファイルが頻繁にロールオーバーされるため、目的のログ メッセージが失われる可能性もあります。デバッグ レベルのログ記録は、サブシステム レベルでのみ構成することを推奨します。

このプロパティに対する変更は、プロパティ ファイルを保存してから約 5 分後に有効になります。変更を反映するためにエージェントを再起動する必要はありません。

エージェント ログへのシステム メッセージのリダイレクト

このプロパティで、システムが生成するメッセージを Endpoint Operations Management エージェント ログ ファイルにリダイレクトすることができます。

agent.logLevel.SystemErr

このプロパティで System.err を agent.log にリダイレクトします。この設定をコメントアウトすると、System.err が agent.log.startup にダイレクトされるようになります。

デフォルト値は ERROR です。

agent.logLevel.SystemOut

このプロパティで System.out を agent.log にリダイレクトします。この設定をコメントアウトすると、System.out が agent.log.startup にダイレクトされるようになります。

デフォルト値は INFO です。

エージェント サブシステムのデバッグ レベルの構成

トラブルシューティング用に、個々のエージェント サブシステムのログ レベルを増やすことができます。

個々のエージェント サブシステムのログ レベルを増やすには、agent.properties ファイルで Agent Subsystems: Uncomment individual subsystems to see debug messages というラベルが付いているセクションの該当する行をコメント解除します。

エージェントの log4j プロパティ

agent.properties ファイルの log4j プロパティを以下に示します。

```
log4j.rootLogger=${agent.logLevel}, R

log4j.appender.R.File=${agent.logFile}
log4j.appender.R.MaxBackupIndex=1
log4j.appender.R.MaxFileSize=5000KB
log4j.appender.R.layout.ConversionPattern=%d{dd-MM-yyyy HH:mm:ss,SSS z} %-5p [%t] [%c{1}:@%L] %m%n
log4j.appender.R.layout=org.apache.log4j.PatternLayout
log4j.appender.R=org.apache.log4j.RollingFileAppender

##
## Disable overly verbose logging
##
log4j.logger.org.apache.http=ERROR
log4j.logger.org.springframework.web.client.RestTemplate=ERROR
log4j.logger.org.hyperic.hq.measurement.agent.server.SenderThread=INFO
log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.server.AgentDListProvider=INFO
log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.server.MeasurementSchedule=INFO
log4j.logger.org.hyperic.util.units=INFO
log4j.logger.org.hyperic.hq.product.pluginxml=INFO

# Only log errors from naming context
log4j.category.org.jnp.interfaces.NamingContext=ERROR
log4j.category.org.apache.axis=ERROR

#Agent Subsystems: Uncomment individual subsystems to see debug messages.
#-----
#log4j.logger.org.hyperic.hq.autoinventory=DEBUG
```

```
#log4j.logger.org.hyperic.hq.livedata=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.measurement=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.control=DEBUG

#Agent Plugin Implementations
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product=DEBUG

#Server Communication
#log4j.logger.org.hyperic.hq.bizapp.client.AgentCallbackClient=DEBUG

#Server Realtime commands dispatcher
#log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.server.CommandDispatcher=DEBUG

#Agent Configuration parser
#log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.AgentConfig=DEBUG

#Agent plugins loader
#log4j.logger.org.hyperic.util.PluginLoader=DEBUG

#Agent Metrics Scheduler (Scheduling tasks definitions & executions)
#log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.server.session.AgentSynchronizer.SchedulerThread=DEBUG

#Agent Plugin Managers
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.MeasurementPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.AutoinventoryPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.ConfigTrackPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.LogTrackPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.LiveDataPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.ControlPluginManager=DEBUG
```

Log Insight

vRealize Operations Manager が Log Insight と統合されている場合、[Log Insight] ページ、[Log Insight] ダッシュボード、および [ログ] タブを表示できます。ログ フィードを収集して分析できます。ログ メッセージをフィルタリングして検索できます。カスタマイズしたクエリに基づいて、ログ メッセージからフィールドを動的に抽出することもできます。

[Log Insight] ページ

vRealize Operations Manager が vRealize Log Insight と統合されている場合、ログ イベントを検索およびフィルタリングできます。[Log Insight] ページの [インタラクティブ分析] タブから、ログ イベントのタイムスタンプ、テキスト、ソース、およびフィールドに基づいてイベントを抽出するクエリを作成できます。vRealize Log Insight では、クエリ結果のチャートが表示されます。

vRealize Operations Manager から [Log Insight] ページにアクセスするには、次のいずれかの操作を実行する必要があります。

- vRealize Operations Manager インターフェイスから vRealize Log Insight アダプタを構成する
- vRealize Operations Manager を vRealize Log Insight に構成する。

構成の詳細については、[vRealize Operations Manager で vRealize Log Insight を構成する](#)を参照してください。

vRealize Log Insight インタラクティブ分析については、[vRealize Log Insight のドキュメント](#)を参照してください。

[ログ] タブ

vRealize Operations Manager が vRealize Log Insight と統合されている場合、選択したオブジェクトのログを [ログ] タブから表示できます。ログの情報とメトリックを相関させて、環境の問題をトラブルシューティングできます。これにより、問題の根本原因を判断できる可能性が最も高くなります。

[ログ] タブの機能

[ログ] タブには、デフォルトで直近 1 時間のさまざまなイベント タイプが表示されます。vSphere オブジェクトの場合は、選択した特定のオブジェクトのイベント タイプが表示されるようにログがフィルタリングされます。フィルタリングおよびクエリの各種機能の詳細については、[vRealize Log Insight のドキュメント](#)を参照してください。

[ログ] タブの場所

左側のペインから、[環境] を選択し、インベントリ オブジェクトを選択します。[ログ] タブをクリックします。[ログ] タブを表示するには、vRealize Operations Manager を vRealize Log Insight に構成する必要があります。詳細については、[vRealize Operations Manager で vRealize Log Insight を構成する](#)を参照してください。

vRealize Operations Manager で vRealize Log Insight を構成する

vRealize Operations Manager で [Log Insight] ページ、[Log Insight] ダッシュボード、および [ログ] タブを使用するには、vRealize Operations Manager で vRealize Log Insight を構成する必要があります。

vRealize Operations Manager で vRealize Log Insight アダプタを構成する

vRealize Operations Manager から [Log Insight] ページと [Log Insight] ダッシュボードにアクセスするには、vRealize Operations Manager で vRealize Log Insight アダプタを構成する必要があります。

vRealize Operations Manager は、構成されている vRealize Log Insight アダプタの最初のインスタンスにアクセスします。

[前提条件]

- vRealize Log Insight および vRealize Operations Manager がインストールされていることを確認します。
- インストールした vRealize Log Insight インスタンスの IP アドレス、ユーザー名、およびパスワードを把握していることを確認します。

[手順]

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックし、[ソリューション] をクリックします。
- 2 [ソリューション] ページから、VMware vRealize Log Insight をクリックします。
- 3 [構成] アイコンをクリックします。[ソリューションの管理 - VMware vRealize Log Insight] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 4 [ソリューションの管理] ダイアログ ボックスで、次の手順を実行します。
 - [表示名] テキスト ボックスに名前を入力します。

- インストール済みで統合する vRealize Log Insight の [Log Insight サーバ] テキスト ボックスに IP アドレスを入力します。
 - [テスト接続] をクリックし、接続が成功していることを確認します。
 - [設定の保存] をクリックします。
 - [閉じる] をクリックします。
- 5 vRealize Operations Manager ホーム ページから、[Log Insight] アイコンをクリックします。ページの下部にステートメントが表示されたら、リンクをクリックして、vRealize Log Insight の証明書例外を承認するか、IT サポートに連絡して詳細を確認してください。
 - 6 vRealize Operations Manager ホーム ページから、[Log Insight] アイコンをクリックし、インストールした vRealize Log Insight インスタンスのユーザー名とパスワードを入力します。

vRealize Log Insight に vRealize Operations Manager を構成する

vRealize Operations Manager は、次のシナリオで vRealize Log Insight に構成します。

- vRealize Operations Manager の [ログ] タブにアクセスする
- vRealize Operations Manager から [Log Insight] ダッシュボードと [Log Insight] ページにアクセスする

[前提条件]

- vRealize Log Insight および vRealize Operations Manager がインストールされていることを確認します。
- 統合する vRealize Operations Manager インスタンスの IP アドレス、ホスト名、およびパスワードを把握していることを確認します。

[手順]

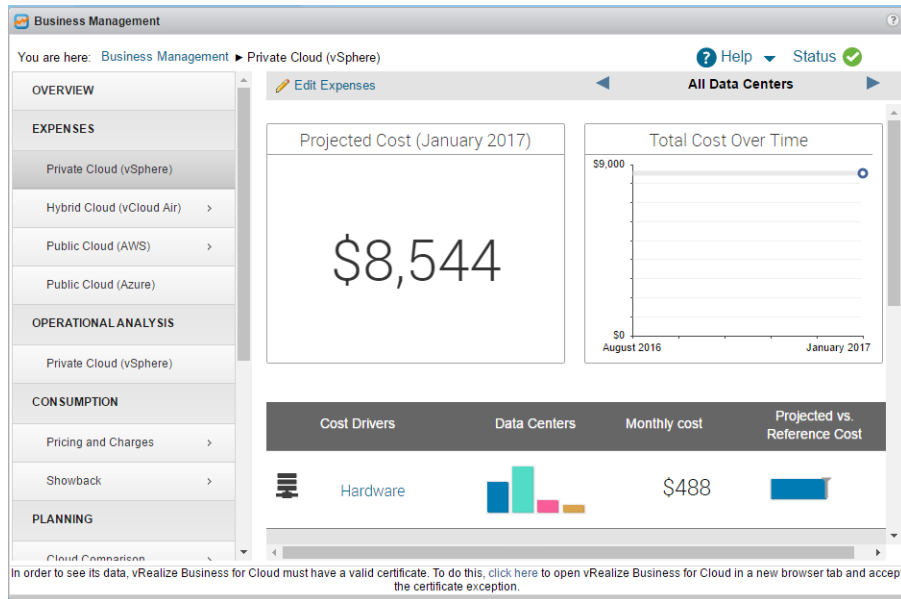
- 1 vRealize Log Insight の [管理] ページの左側のペインから、[vRealize Operations] アイコンをクリックします。[vRealize Operations の統合] ペインが表示されます。
- 2 [ホスト名] および [ユーザー名] テキスト ボックスに、統合する vRealize Operations Manager インスタンスの IP アドレスとホスト名を入力します。
- 3 [パスワード] テキスト ボックスで、[パスワードの更新] を選択し、統合する vRealize Operations Manager インスタンスのパスワードを入力します。
- 4 [コンテキストでの起動を有効にする] オプションを選択します。
- 5 [テスト接続] をクリックし、接続が成功していることを確認します。
- 6 [保存] をクリックします。

これで、vRealize Operations Manager のオブジェクトのログの詳細を表示できます。

ビジネス管理

vRealize Operations Manager が vRealize Business for Cloud と統合されている場合、[ビジネス管理] ページと [ビジネス管理] ダッシュボードにインフラストラクチャ パフォーマンスとコスト情報を表示できます。

インフラストラクチャ パフォーマンスとコスト情報を表示するには、vRealize Business for Cloud アダプタを構成する必要があります。このアダプタの構成については、[vRealize Business for Cloud アダプタの構成](#)を参照してください。



vRealize Business for Cloud アダプタの構成

VMware vRealize Business for Cloud と vRealize Operations Manager を統合し、インフラストラクチャ パフォーマンス、コスト情報、およびトラブルシューティングのヒントを表示します。

vRealize Operations Manager を vRealize Business for Cloud の単一インスタンスに接続できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] - [ソリューション] の順にクリックします。
- 2 [VMware vRealize Business for Cloud] を選択し、[構成] アイコンをクリックします。
- 3 アダプタ インスタンスの名前を入力します。
- 4 [vRealize Business for Cloud Server] フィールドに、接続先の vRealize Business for Cloud サーバの IP アドレスを入力します。
- 5 [テスト接続] をクリックし、接続が成功していることを確認します。
- 6 [詳細設定] をクリックし、[コレクタ/グループ] フィールドに、アダプタ プロセスの管理に使用する vRealize Operations Manager コレクタを指定します。

アダプタ インスタンスが 1 つの場合は、[デフォルトのコレクタ グループ] を選択します。環境に複数のコレクタがあり、ワークロードを分散してパフォーマンスを最適化する場合は、このインスタンスのアダプタ プロセスを管理するコレクタを選択します。

- 7 [設定の保存] をクリックして、アダプタの構成を完了します。

次のステップ

コスト情報を [ビジネス管理ダッシュボード](#) または [ビジネス管理](#) ページに表示します。

vRealize Operations Manager でのオプションのソリューションのインストール

VMware またはサードパーティからのオプションのソリューションをインストールして、vRealize Operations Manager の監視機能を拡張できます。

VMware ソリューションには、ストレージ デバイス、Log Insight、NSX for vSphere、ネットワーク デバイス、VCM 用のアダプタなどがあります。サードパーティの追加ソリューションには、AWS、SCOM、EMC Smartsをはじめ、多数あります。追加ソリューションのソフトウェアおよびドキュメントをダウンロードするには、[VMware Solution Exchange](#) にアクセスしてください。

ソリューションには、ダッシュボード、レポート、アラートおよびその他のコンテンツ、アダプタが含まれる場合があります。アダプタは、vRealize Operations Manager が、通信の管理、およびその他の製品、アプリケーション、機能との統合の管理を行う手段です。管理パックのインストール時およびソリューション アダプタの構成時に、vRealize Operations Manager の分析ツールとアラート ツールを使用して環境内のオブジェクトを管理することができます。

vRealize Operations Manager の以前のバージョンからアップグレードする場合、管理パック ファイルが、日時のフォルダ名の付いたフォルダ内の `/usr/lib/vmware-vcops/user/plugins/.backup` ファイルにコピーされます。新しい vRealize Operations Manager インスタンスにデータを移行する前に、[管理] - [ソリューション] ワークスペースで新しいアダプタを構成する必要があります。アダプタをカスタマイズしている場合、アダプタのカスタマイズ内容は移行に含まれず、再構成する必要があります。

vRealize Operations Manager の管理パックを新しいバージョンに更新し、アダプタをカスタマイズしている場合、アダプタのカスタマイズ内容はアップグレードに含まれず、再構成が必要になります。

vRealize Operations Manager のソリューション

vRealize Operations Manager には、ソリューション（監視および管理対象のデータにユーザーを接続するアダプタを含む）の追加や管理を行うことができるページが含まれています。

ソリューションの仕組み

ソリューションは、コンテンツおよびアダプタを含む管理パックとして配信されます。vRealize Operations Manager はアダプタを使用して、通信の管理、およびその他の製品、アプリケーション、機能との統合の管理を行います。

ソリューションを確認できる場所

左側のペインで、[管理] - [ソリューション]を選択します。

データ収集通知

上部メニュー バーの [データ収集] アイコンを使用して、データ収集に関連するステータスと重要な通知にすばやくアクセスすることができます。このアイコンは、通知が存在するかどうか、およびその中に重要な通知があるかどうかを示します。通知のリストを表示するには、アイコンをクリックします。

リストには、進行中のデータ収集に関する通知が表示され、どれかに重要な問題があるかどうかを示されます。リストの下部に進行中のデータ収集通知が 1 つのエントリとしてグループ化されます。収集に関する詳細を表示するには、通知を展開します。

各通知は最後または現在のデータ収集のステータス、関連付けられているアダプタ インスタンス、収集の完了または問題の識別からの時間を表示します。通知をクリックして、[ソリューション] ページを開き、そこで詳細を表示してアダプタ インスタンスを管理できます。通知リストの下部にある [ソリューション] をクリックして、[ソリューション] ページを開くこともできます。

データ収集で問題が発生した場合は、vRealize Operations Manager によって 5 分間隔の収集サイクル中にそれらの問題が識別されます。

ソリューションのインストールの失敗

ソリューションのインストールに失敗した場合は、ソリューションはインストールされず、[管理] - [ソリューション] ページにはソリューションが表示されませんが、ソリューションに関連付けられているプラグインが、vRealize Operations Manager の [コンテンツ] - [プラグイン] ページに表示されます。ソリューションのインストールに失敗した場合は、ソリューションを再インストールしてください。

ソリューションのオプション

ソリューションのリストには、オプションのツールバーが含まれています。

表 4-24. ソリューション ツールバーのオプション

オプション	説明
追加	ウィザードを開始して、ソリューション管理パックの PAK ファイルを見つけたり、アップロードしたり、ライセンスを受けたり、インストールしたりします。
構成	ウィンドウを開き、ソリューションがデータに接続できるようにするためのネットワーク アドレスまたは認証情報などの設定を制御します。構成はソリューションごとに異なります。
表示	ソリューションのリストをフィルタして、構成済みのソリューション、未構成のソリューション、またはすべてのソリューションを表示します。

ソリューションのデータ グリッドは追加されたソリューションのリストです。ソリューション コンポーネントを構成して、vRealize Operations Manager がデータを収集できるようにする必要があります。

表 4-25. ソリューション データ グリッドのオプション

オプション	説明
名前	ベンダーまたはメーカーがソリューションに付けた名前です。
説明	一般に、ソリューションが監視する対象またはソリューションのアダプタが接続する対象のデータ ソースを示します。
バージョン	ソリューションを識別するバージョンとビルド番号。
提供元	ソリューションを作成したベンダーまたはメーカー。
ライセンス	ソリューションでライセンスが必要かどうかを示します。
収集のステータス	ソリューションのステータスを示します。データの受信は、ソリューションがデータを収集していることを示します。

詳細のエリアには、オプションのツールバーが含まれています。

表 4-26. ソリューションの詳細ツールバーのオプション

オプション	説明
収集の開始	選択されたアダプタを使用したデータ収集を有効にします。
収集の停止	選択されたアダプタを使用したデータ収集が行われません
再ロード	詳細のリストを更新します。

詳細データ グリッドは、選択されたソリューションの追加情報を表示します。

表 4-27. ソリューションの詳細データ グリッドのオプション

オプション	説明
アダプタ タイプ	ベンダーまたはメーカーがアダプタに付けた名前です。
アダプタ インスタンス名	インストール ユーザーが、アダプタの固有のインストールに付けた名前です。
認証情報名	インストール ユーザーが、データ ソースの接続に使用されるログイン認証情報のセットに付けた名前です。
コレクタ	vRealize Operations Manager が、収集されたデータを受け取る場所を示します。一般に、この名前はアダプターと vRealize Operations Manager ノードの名前を組み合わせたものです。
収集状態	アダプターが、データ収集のために有効になっているかどうかを示します。
収集ステータス	アダプターが、何らかのデータを収集しているかどうかを示します。

ソリューションの追加ウィザード

ソリューションは PAK ファイルとして配信されます。ユーザーは、このファイルをアップロードし、ライセンスを受け、インストールします。

追加されるソリューションの動作

ソリューションを追加する場合は、vRealize Operations Manager と、他の製品、アプリケーション、および機能との間の通信および統合を管理するアダプタを構成します。

ソリューションの追加を行う場所

左側で、[管理] - [ソリューション]を選択します。インストールするソリューションを選択し、[追加] アイコンをクリックします。

ソリューションの追加ウィザードのオプション

このウィザードには 3 つのページがあります。ここで、PAK ファイルを特定してアップロードし、EULA を承認してインストールし、インストール環境を確認します。

PAK ファイルを vRealize Operations Manager インストールするか、インスタンスをアップグレードする前に、カスタマイズしたコンテンツを保存するためにクローンを作成します。カスタマイズしたコンテンツには、アラートの定義、シンプトムの定義、推奨事項、およびビューを含めることができます。そして、ソフトウェアのアップデート時に、[インストール済みの場合でも PAK ファイルをインストールします] オプションおよび [初期状態のコンテンツのリセット] オプションを選択します。

表 4-28. ウィザードのオプション

オプション	説明
ページ 1	
ソリューションを参照	管理バックの PAK ファイルのコピーに移動します。
アップロード	インストールの準備をするには、PAK ファイルを vRealize Operations Manager にコピーします。
PAK ファイルがインストール済みでもインストールします	PAK ファイルがすでにアップロードされている場合は、現在のファイルを使用して PAK ファイルを再ロードしますが、ユーザーのカスタマイズはそのままにします。ソリューションのアラート、シンプトム、推奨事項、ポリシーを上書きまたはアップデートしないでください。
初期状態のコンテンツのリセット	PAK ファイルがアップロード済みの場合は、現在のファイルを使用して PAK ファイルを再ロードし、ソリューションのデフォルトのアラート、シンプトム、推奨事項、ポリシーを現在の PAK ファイルで提供されている新しいバージョンで上書きします。 注： リセットすると、カスタマイズされたコンテンツが上書きされます。vRealize Operations Manager をアップグレードしている場合のベスト プラクティスは、アップグレード前にカスタマイズしたコンテンツのクローンを作成することです。詳細については、このインフォメーション センターで、カスタマイズしたコンテンツを保存する方法に関するトピックを参照してください。
PAK ファイルが未署名です	PAK ファイルが VMware の提供するデジタル署名で署名されていないと、警告が表示されます。デジタル署名は開発元または発行元であることを示し、管理バックに信頼性を与えます。PAK ファイルを信頼できない情報源からインストールすることが不安な場合は、インストールを進める前に管理バックのディストリビュータに確認してください。
ページ 2	
使用許諾契約に同意します	エンドユーザー使用許諾契約書を読んで同意します。 注： [次へ] をクリックすると、ソリューションがインストールされます。
ページ 3	
インストールの詳細	アダプタがインストールされた vRealize Operations Manager ノードを含め、インストールの進行を確認します。

ソリューションの管理ワークスペース

ソリューションには、vRealize Operations Manager がターゲット システムからデータを収集したり、ターゲット システムにデータを送信できるようにするために構成する必要のあるアダプタが含まれています。

vRealize Operations Manager に付属するソリューション、追加するソリューションに関連するアダプタを構成できます。アダプタを構成した後、vRealize Operations Manager ではターゲット システムと通信できます。アダプタの構成を変更するために、ソリューションの管理ワークスペースにいつでもアクセスできます。

ソリューションを管理できる場所

左側のペインで、[管理] - [ソリューション]を選択します。[ソリューション] タブで、構成するソリューションを選択し、ツールバーの [構成] をクリックします。

ソリューションの管理オプション

オプションは、構成するアダプタによって異なります。

vSphere ソリューションの管理

vSphere ソリューションの管理ワークスペース オプションの表示については、[ソリューションの管理 - VMware vSphere ソリューション ワークスペースのオプション](#) を参照してください。

ソリューションの認証情報の管理

認証情報とは、1 つまたは複数のソリューションおよび関連付けられたアダプタを有効にし、ターゲット データ ソースとの通信を確立するために vRealize Operations Manager が使用するユーザー アカウントです。認証情報は、各アダプタの構成時に提供します。認証情報オプションを使用して、環境の変化に合わせてアダプタ構成プロセス以外の設定の追加または変更を行います。

パスワード ポリシーに基づいて変更を反映させる場合など、既存の認証情報を変更すると、それらの認証情報で構成されたアダプタは vRealize Operations Manager とターゲット システムの間の通信に対して新しいユーザー名とパスワードを使用し始めます。

認証情報管理のもう 1 つの使用方法は、正しく構成されていない認証情報を削除することです。アダプタによってアクティブに使用されている有効な認証情報を削除すると、2 つのシステム間の通信が無効になります。

環境の変化に合わせて構成済み認証情報を変更する必要がある場合、ターゲット システムに応じて新しいアダプタ インスタンスを構成しなくても、名前、ユーザー名とパスワード、またはパス コードやキー フレーズなどの設定を編集できます。認証情報の設定を編集するには、[管理] をクリックし、[認証情報] をクリックします。

追加した、あらゆるアダプタの認証情報は、他のアダプタ管理者および vRealize Operations Manager コレクタ ホストと共有されます。他の管理者がこれらの認証情報を使用して、新規のアダプタ インスタンスを構成したり、アダプタ インスタンスを新規ホストに移動する可能性があります。

認証情報

認証情報は、外部データ ソースでの接続を認証するためにアダプタが使用する、ユーザー名やパスワードなどの構成設定の集合です。この他に、ドメイン名、パス フレーズ、またはプロキシ認証情報などの認証情報が含まれる場合もあります。変化し続ける環境を管理するために、1 つ以上のソリューションを構成してデータ ソースに関連付けることができます。

認証情報を確認できる場所

左側のペインで、[管理] アイコンをクリックした後、[認証情報] をクリックします。

表 4-29. 認証情報オプション

オプション	説明
ツールバー オプション	<p>選択した認証情報の管理。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 新規認証情報の追加。アダプタ タイプに新しい認証情報を追加します。これは後でアダプタを構成する際に適用できます。 ■ 選択した認証情報の編集。選択した認証情報を変更します。通常はユーザー名とパスワードの変更が必要な場合に行います。変更は現在のアダプタ認証情報に適用され、データ ソースは vRealize Operations Manager と引き続き通信します。 ■ 選択した認証情報の削除。vRealize Operations Manager から選択した認証情報を削除します。これらの認証情報を使用するアダプタがある場合、通信は失敗し、そのアダプタが管理するように構成されていたオブジェクトの監視を停止します。通常は誤って構成された認証情報を削除するために使用されます。
フィルタリング オプション	アダプタまたは認証情報のタイプに基づいて、表示される認証情報を制限します。
認証情報名	認証情報を管理するために提供するユーザー定義の名前の記述。 アカウント ユーザー名ではありません。
アダプタ タイプ	認証情報を構成するアダプタのタイプ。
認証情報タイプ	アダプタに関連付けられた認証情報のタイプ。一部のアダプタでは、複数のタイプの認証情報がサポートされます。たとえば、1つのタイプの認証情報でユーザー名とパスワードを定義し、もう1つの認証情報でパスワードとキー フレーズを定義できます。

認証情報の管理

アダプタ インスタンスの有効化に使用する認証情報を構成または再構成するには、ユーザー名やパスワードなど、ターゲット システムで有効な収集構成設定を行う必要があります。既存の認証情報インスタンスの接続設定を変更することもできます。

[認証情報の管理]を確認できる場所

左側のペインで、[管理] アイコンをクリックした後、[認証情報] をクリックします。 プラス記号をクリックして新しい認証情報を追加するか、鉛筆をクリックして選択した認証情報を編集します。

[認証情報の管理] オプション

[認証情報の管理] ダイアログ ボックスを使用して、新しいアダプタ認証情報を追加したり、既存のアダプタ認証情報を変更したりすることができます。このダイアログ ボックスは、アダプタのタイプや、追加と編集のどちらを行うかによって異なります。次のオプションは基本オプションを示しています。基本オプションを除き、ソリューションに応じてオプションの内容は異なります。

注意： 追加したアダプタの認証情報は、他のアダプタ管理者および vRealize Operations Manager コレクタ ホストと共有されます。他の管理者がこれらの認証情報を使用して、新規のアダプタ インスタンスを構成したり、アダプタ インスタンスを新規ホストに移動する可能性があります。

表 4-30. [認証情報の管理] の追加または編集オプション

オプション	説明
アダプタ タイプ	認証情報を構成するアダプタのタイプ。
認証情報の種類	アダプタに関連付けられた認証情報。アダプタと認証情報のタイプの組み合わせによって、追加の構成オプションが異なります。
認証情報名	認証情報の管理に使用する分かりやすい名前。
ユーザー名	vRealize Operations Manager をターゲット システムに接続するためにアダプタ構成で使用するユーザー アカウント認証情報。
パスワード	指定された認証情報のパスワード。

コレクタ グループの管理

vRealize Operations Manager はコレクタを使用して、オブジェクトからのメトリックの収集などのアダプタ プロセスを管理します。アダプタ インスタンスの構成時には、コレクタまたはコレクタ グループが選択できます。

環境内にリモート コレクタがある場合は、新規コレクタ グループを作成してリモート コレクタをそのグループに追加できます。アダプタをコレクタ グループに割り当てると、そのアダプタはグループ内の任意のコレクタで使用できます。コレクタでネットワーク割り込みが発生したり、コレクタが使用できなくなったりした場合は、コレクタ グループを使用するとアダプタを回復できます。この場合、コレクタがグループの一部であれば、全体の作業負荷がグループ内のすべてのコレクタに再分散され、コレクタごとの作業負荷が軽減されます。

コレクタ グループ ワークスペース

vRealize Operations Manager でコレクタ グループの追加、編集、削除を行うか、アダプタ インスタンスをリバランスできます。

アダプタ インスタンスのリバランス

アダプタ インスタンスのリバランスは、コレクタ グループ内の各コレクタでアダプタ インスタンスを均等に分散するものではありません。リバランス アクションでは、リバランスの配置を決定するために各アダプタ インスタンスが収集するリソース数を考慮します。リバランスがアダプタ インスタンスで発生すると、vRealize Operations Manager インスタンス内で、単一コレクタ上の複数の小さなアダプタ インスタンス、および別のコレクタ上の大きな単一アダプタ インスタンスが得られます。

コレクタ グループのリバランスによって、クラスタ全体のロードが大幅に増加することがあります。あるコレクタから別のコレクタにアダプタ インスタンスを移動すると、vRealize Operations Manager ではソース コレクタのアダプタ インスタンスとそのすべてのリソースを停止した後、ターゲット コレクタ上でそれらを開始することが必要になります。

コレクタが応答しないか、クラスタへの接続が失われた場合、vRealize Operations Manager によってコレクタ グループ内で自動リバランスが開始します。コレクタでの手動による停止や再起動など、コレクタでユーザーが開始したその他の手動操作では自動リバランスは行われません。

いずれかのコレクタが応答しないか、ネットワーク接続を喪失した場合、vRealize Operations Manager では自動リバランスを実行します。自動リバランスでは、コレクタ グループを適切にリバランスするために、コレクタ グループ内のコレクタ上に予備キャパシティが必要です。

コレクタ グループを管理できる場所

コレクタ グループを管理するには、[管理] を選択して、[コレクタ グループ] をクリックします。

表 4-31. グループ概要グリッドの制御

オプション	説明
コレクタ グループ ツールバー	<p>コレクタ グループの管理には、ツールバー アイコンを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 追加。コレクタ グループを追加します。 ■ 編集。リモート コレクタを追加または削除して、コレクタ グループを変更します。 ■ 削除。選択したコレクタ グループを削除します。 ■ コレクタ グループをリバランスします。クラスタに管理権限がある場合、コレクタ グループ内のコレクタおよびリモート コレクタ間でワークロードをリバランスできます。一度に 1 つのコレクタ グループのみをリバランスできます。リバランス アクションでは、コレクタ グループ内の各コレクタのオブジェクト数をリバランスするために、あるコレクタ グループから別のコレクタ グループにオブジェクトを移動します。ディスク リバランスがすでに処理中である場合、コレクタ リバランスは実行しません。
コレクタ グループ名	コレクタ グループの作成時にそのコレクタ グループに付ける名前。
説明	コレクタ グループの作成時にそのコレクタ グループに付ける説明。
すべてのフィルタ	概要グリッド内で、コレクタ グループのリストを、コレクタ グループ名、説明、コレクタ名、または IP アドレス別に表示します。
クイック フィルタ名	コレクタ グループのリストを、入力したコレクタ グループ名でフィルタリングします。

表 4-32. コレクタ グループ詳細グリッド

詳細グリッドのオプション	説明
メンバー	コレクタ グループに割り当てられているリモート コレクタ。
名前	リモート コレクタの作成時にそのコレクタに付けられた名前。
IP アドレス	リモート コレクタの IP アドレス。
ステータス	リモート コレクタのステータス：オンまたはオフ。

コレクタ グループの追加

環境内で利用可能なリモート コレクタからコレクタ グループを作成します。コレクタは、一度に 1 つのグループにしか追加できません。

新規コレクタ グループを追加できる場所

コレクタ グループを追加するには、[管理] - [コレクタ グループ] の順に選択し、コレクタ グループ ツールバーで [追加] アイコンをクリックします。

新規コレクタ グループ ワークスペースの追加

オプション	説明
名前	コレクタ グループの名前。
説明	コレクタ グループの説明。

オプション	説明
メンバー	vRealize Operations Manager 環境内で利用可能なリモート コレクタのリストとそれらの IP アドレスおよびステータスが表示されます。コレクタ グループにすでに追加されているコレクタはこのリストには表示されません。
すべてのフィルタ	次の条件でコレクタのリストが検索できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ コレクタ名 ■ IP アドレス ■ ステータス

コレクタ グループの編集

グループにリモート コレクタを追加したり、グループに必要なないコレクタを削除したりして、コレクタ グループを編集します。

コレクタ グループを編集できる場所

コレクタ グループを編集するには、[管理] - [コレクタ グループ] の順に選択し、コレクタ グループ ツールバーで [編集] アイコンをクリックします。

コレクタ グループ オプションの編集

オプション	説明
名前	コレクタ グループの作成時にそのコレクタ グループに付ける名前。
説明	コレクタ グループの作成時にそのコレクタ グループに付ける説明。
メンバー	vRealize Operations Manager 環境内で利用可能なリモート コレクタのリストとそれらの IP アドレスおよびステータスが表示されます。別のコレクタ グループに追加されているコレクタはこのリストには表示されません。このコレクタ グループに割り当てられているコレクタが表示され、そのコレクタ名の横にあるチェック ボックスがオンになります。
すべてのフィルタ	次の条件でコレクタのリストがフィルタリングできます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ コレクタ名 ■ IP アドレス ■ ステータス

アラートおよびアクションの構成

VMware vRealize Operations Manager では、アラートとアクションがオブジェクトの監視で重要な役割を果たします。

アラート

[アラート] タブには、選択したオブジェクト、グループ、アプリケーションについて、生成されたすべてのアラートの一覧が表示されます。アラート リストを使用して、環境の状態を判断したり、問題の解決を開始したりします。アラートのリストには、vRealize Operations Manager で生成されたすべてのアラートが含まれます。

アラートの機能

管理オブジェクトで生成されたすべてのアラートがリストに表示されます。

ツールバー オプションを使用してリストのアラートを管理できます。アラート名をクリックすると、影響を受けるオブジェクトのアラートの詳細を確認できます。アラートが生成されたオブジェクトの名前をクリックすると、オブジェクトの詳細を確認できます。

以前のバージョンの vRealize Operations Manager からアラートが移行された場合、アラートはキャンセル済みのステータスで表示されますが、アラートの詳細は使用できません。

[アラート] タブの場所

左側のペインで、[環境] アイコンを選択し、インベントリ オブジェクトを選択します。[アラート] タブをクリックします。

アラート リストのオプション

アラート オプションには、ツールバーとデータ グリッドのオプションが含まれます。キャンセル、サスペンド、または所有権の管理を行うには、ツールバー オプションを使用します。[Shift] または [Control] を押しながらクリックすることで、リスト内の複数の行を選択できます。アラートを表示するには、データ グリッドを使用します。アラートの名前をクリックするとアラートの詳細を表示でき、オブジェクトの名前をクリックするとオブジェクトの詳細を表示できます。

表 4-33. アラート リストのツールバーのオプション

オプション	説明
外部アプリケーションを開く	選択したオブジェクトに対して実行できるアクション。 (たとえば、[vSphere Client で仮想マシンを開く] など)。
アラートのキャンセル	選択したアラートをキャンセルします。アクティブなアラートのみを表示するようにアラート リストが構成されている場合、キャンセルされたアラートはリストから除外されます。 対処する必要がないアラートをキャンセルします。アラートをキャンセルしても、そのアラートの生成の基盤となった条件はキャンセルされません。アラートのキャンセルは、トリガーされた障害やイベントの症状によってアラートが生成された場合に有効です。これらの症状は、監視対象オブジェクトでその後の障害またはイベントが発生した場合にのみ再度トリガーされるためです。メトリックまたはプロパティの症状に基づいてアラートが生成される場合、そのアラートは、次の収集および分析サイクルまでしかキャンセルされません。違反値が依然として存在する場合は、アラートが再度生成されます。
サスペンド	指定された分数の間アラートをサスペンドします。 アラートを調査しているとき、作業中にアラートがオブジェクトの健全性、リスク、または効率に影響しないようにアラートをサスペンドします。経過時間後に問題が解決されない場合、アラートが再アクティブ化され、再びオブジェクトの健全性、リスク、または効率に影響を与えます。アラートをサスペンドしたユーザーは所有者として割り当てられます。
所有権の取得	現在のユーザーとして、自分自身をアラートの所有者にします。 アラートの所有権を獲得できるだけで、所有権を割り当てることはできません。

表 4-33. アラート リストのツールバーのオプション (続き)

オプション	説明
所有権の解放	アラートのすべての所有権が解放されます。
フィルタリング オプション	アラートのリストを、作成するフィルタと一致するアラートに限定します。 データ グリッドの列で並べ替えることもできます。

[アラート] データ グリッドには、生成されたアラートのリストが表示されます。これを使用して、環境内の問題を解決します。

表 4-34. アラート データ グリッドのオプション

オプション	説明
重要度	環境内でのアラートの重要度レベルを示します。アラートの重要度は、重要度アイコンの上にマウスを置いたときにツールチップに表示されます。 このレベルは、アラート定義の作成時に割り当てられたレベルに基づきます。割り当てられたレベルが [シムptom ベース] の場合は、症状の最高の重要度に基づきます。 次の値があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 重大 ■ 緊急 ■ 警告 ■ 詳細情報 デフォルトでは、アラートはクリティカル度順にソートされます。アラートのリストをクリティカル度順に事前ソートすると、クリティカルなアラートがリストの上位に表示されます。ソート順を変更すると、ソートがグローバル アラート リスト、健全性、リスク、および効率アラート リストの環境設定とともに保存されます。
アラート	アラートを生成したアラートの定義名。 アラートの名前をクリックするとアラートの詳細タブが表示され、ここでアラートのトラブルシューティングを開始できます。
アラート タイプ	選択したオブジェクトに対して起動したアラートのタイプが表示されます。これにより、アラートを分類し、特定タイプのアラートを特定のシステム管理者に割り当てることができます。たとえば、[アプリケーション]、[仮想化/ハイパーバイザ]、[ハードウェア]、[ストレージ]、[ネットワーク] などが表示されます。
アラート サブタイプ	選択したオブジェクトに対して起動したアラートのタイプについて、その他の情報が表示されます。これにより、アラート タイプよりも詳細にアラートを分類し、特定タイプのアラートを特定のシステム管理者に割り当てることができます。たとえば、[可用性]、[パフォーマンス]、[容量]、[コンプライアンス]、[構成] などが表示されます。
ステータス	アラートの現在の状態。 値には、[有効] または [キャンセル済み] があります。
起動元	アラートが生成されたオブジェクトの名前と、オブジェクト名の上にマウスを置いたときにツールチップに表示されるオブジェクト タイプです。 オブジェクト名をクリックすると、オブジェクトの詳細タブが表示されます。ここで、オブジェクトに他に何か問題がないかどうかについて調査を開始できます。

表 4-34. アラート データ グリッドのオプション（続き）

オプション	説明
制御状態	<p>ユーザーのアラートとの相互作用の状態です。値には、次の種類があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オープン。アラートはアクションに対して使用可能で、ユーザーには割り当てられていません。 ■ 割り当て済み。ログイン ユーザーが [所有権の取得] をクリックしたときに、そのユーザーにアラートが割り当てられています。 ■ サスペンド中。アラートは指定された時間中サスペンドされました。オブジェクトの健全性、リスク、および効率に対して、アラートの影響が一時的に及ばないようにされています。この状態が便利なのは、システム管理者が問題を検討しており、アラートの影響をオブジェクトの健全性のステータスに与えたくないときです。
オブジェクト タイプ	アラートの生成の基となったオブジェクトのタイプ。
影響	アラートの影響を受けたアラート バッジ。影響を受けたバッジ、健全性、リスク、または効率では、特定された問題の緊急度のレベルが示されます。
所有者	アラートを所有するユーザーの名前。
作成日時	アラートが生成された日時。
更新日時	<p>アラートが最後に変更された日時。</p> <p>アラートは、次のいずれかの変更が発生するたびに更新されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アラート定義に含まれる別の症状が発生した場合。 ■ アラートを引き起こす原因となった症状のトリガーがキャンセルされた場合。
キャンセル日時	<p>アラートが次のいずれかの理由でキャンセルされた日時。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アラートを起動した症状がアクティブでなくなった場合。アラートはシステムによってキャンセルされます。 ■ オブジェクトに適用されるポリシーで該当する症状の定義が無効になっているためにアラートを起動した症状がキャンセルされた場合。 ■ 該当する症状の定義が削除されたためにアラートを起動した症状がキャンセルされた場合。 ■ オブジェクトに適用されるポリシーでこのアラートのアラート定義が無効になっている場合。 ■ アラート定義が削除された場合。 ■ ユーザーがアラートをキャンセルした場合。

アラートの詳細 - [概要] タブ

アラートの詳細の概要情報とは、アラートの概要であり、影響を受けるオブジェクトと、環境内のアラートの現在の状態が含まれます。この概要を使用してアラートの状態と所有権を管理し、解決を開始する始点として使用します。

アラートの詳細の概要の機能

アラートのバッジ、重要度、名前、および説明は、トリガーされた症状および関連オブジェクトに伴って表示されます。たとえば、アラートが定義されているベース オブジェクトがホストであり、症状の 1 つ以上が仮想マシンで定義されている場合、概要には影響を受ける仮想マシンと定義された推奨が表示されます。

アラートの詳細の概要を確認できる場所

左側のペインで、[アラート] アイコンをクリックします。[アラート]、[健全性アラート]、[リスク アラート]、または [効率アラート] のいずれかのリストで、データ グリッドのアラート名をクリックします。

表 4-35. アラートの詳細の概要オプション

オプション	説明
アラートのキャンセル	アラートをキャンセルします。 対処する必要がないアラートをキャンセルします。アラートをキャンセルしても、そのアラートの生成の基盤となった条件はキャンセルされません。アラートのキャンセルは、トリガーされた障害やイベントの症状によってアラートが生成された場合に有効です。これらの症状は、監視対象オブジェクトでその後の障害またはイベントが発生した場合にのみ再度トリガーされるためです。メトリックまたはプロパティの症状に基づいてアラートが生成される場合、そのアラートは、次の収集および分析サイクルまでしかキャンセルされません。違反値が依然として存在する場合は、アラートが再度生成されます。
サスペンド	指定された分数の間アラートをサスペンドします。 アラートを調査しているとき、作業中にアラートがオブジェクトの健全性、リスク、または効率に影響しないようにアラートをサスペンドします。経過時間後に問題が解決されない場合、アラートが再アクティブ化され、再びオブジェクトの健全性、リスク、または効率に影響を与えます。
所有権の取得	現在のユーザーとして、自分自身をアラートの所有者にします。 アラートの所有権を獲得できるだけで、所有権を割り当てることはできません。
所有権の解放	アラートのすべての所有権が解放されます。
アラート サマリ	アラートの名前および説明。
推奨	アラートを解決するための指示。 推奨には、[アクション] 列から実行されたアクションが含まれることがあります。[アクション] をクリックすると実行されます。 アクションを使用できない場合は、アラート定義でアクションが構成されていないか、監視対象システムのアクション アダプタが構成されていないかを確認してください。
症状の概要	アラートにトリガーされる症状と影響を受けるオブジェクトのリスト。 この情報列によって症状をトリガーした現在の値が提供されます。 症状の更新時刻の 6 時間前から 1 時間後までの範囲のデータが、スパークラインに表示されます。
アラート情報	アラートの現在の管理状態。

アラートの詳細 - [影響を受けたオブジェクトの症状] タブ

オブジェクトの症状とは、オブジェクトに対してトリガーされたすべての症状です。症状リストを使用して、このアラートおよび他のアラートの生成にいたった、トリガーされた症状、および各症状がトリガーされた時期を評価します。

アラートの詳細の [影響を受けたオブジェクトの症状] の仕組み

このアラートに含まれるトリガーされた症状と、他の生成されたアラートに含まれるトリガーされた症状のすべてがこのリストに表示されます。症状の情報を確認できるほか、症状をトリガーしたオブジェクトをクリックすることで、オブジェクトに関する詳細な分析情報を表示できます。

アラートの詳細の [影響を受けたオブジェクトの症状] を確認できる場所

左側のペインで、[アラート] アイコンをクリックします。[アラート]、[健全性アラート]、[リスク アラート]、または [効率アラート] のいずれかのリストで、データ グリッドのアラート名をクリックし、[症状] タブをクリックします。

表 4-36. アラートの詳細の [影響を受けたオブジェクトの症状] のオプション

オプション	説明
重要度	環境内でのアラートの重要度レベルを示します。アラートの重要度は、重要度アイコンの上にマウスを置いたときにツールチップに表示されます。このレベルは、アラート定義の作成時に割り当てられたレベルに基づきます。割り当てられたレベルが [シムptom ベース] の場合は、症状の最高の重要度に基づきます。
症状	トリガーされた症状の名前。
起動元	症状がトリガーされたオブジェクトの名前 オブジェクト名をクリックすると、オブジェクトの詳細タブが表示されます。ここで、オブジェクトに他に何か問題がないかどうかについて調査を開始できます。
作成日時	症状がトリガーされた日時。
キャンセル日時	症状がトリガーされた日時。
詳細情報	傾向と現在の値を含む、症状のトリガー条件に関する情報。 シムptomの更新時刻の 6 時間前から 1 時間後までの範囲のデータが、スパークラインに表示されます。

アラートの詳細 - [タイムライン] タブ

タイムラインとは、影響を受けたオブジェクトについて、生成されたアラート、トリガーされた症状、および変更イベントを時系列に表示したものです。タイムラインを使用してアラート、症状、およびイベントが発生した時期を確認することにより、症状をトリガーした変更やイベントを特定できます。

アラートの詳細 - [タイムライン] の仕組み

タイムライン ビューには、影響を受けたオブジェクトについて、アラートが生成された 6 時間前からのアラート、症状、およびイベントが含まれます。特定時点のデータを表示するには、タイムライン上の 3 つの階層のうちの 1 つをクリックしてから、マウス ポインタを左または右に移動します。マウスを左に移動すると過去のデータが表示され、マウスを右に移動すると現時点に戻ります。

ビューは、およそ 50 のアラート、症状、およびイベントに限定されます。タイムラインにこれ以上のデータが含まれる場合、ツールバー オプションを使用してタイムラインからデータを削除できます。これにより、調査に役立つと考えられるデータのみを含めることができます。

アラートの詳細 - [タイムライン] を確認できる場所

左側のペインで、[アラート] アイコンをクリックします。[アラート]、[健全性アラート]、[リスク アラート]、または [効率アラート] のいずれかのリストで、データ グリッドのアラート名をクリックし、[タイムライン] タブをクリックします。

表 4-37. タイムライン オプション

オプション	説明
影響	選択した場合、健全性、リスク、および効率のアラートがタイムラインに表示されます。
症状の表示	<p>選択した場合、トリガーされたすべての症状がタイムラインに表示されます。</p> <p>アラートが生成されていないアラートについてトリガーされた症状が表示されることがあります。症状がアラートに含まれていなくても、症状定義で定義された動作をオブジェクトが示すと、この症状が現れます。</p>
イベント タイプの選択	<p>アラートとトリガーされた症状を評価するためにイベントをタイムラインに追加します。アラートをトリガーした症状と同時に発生したイベントを追加することで、環境内でアラートの原因となったものが発生したかどうかを確認できます。</p> <p>次のイベントの 1 つまたは複数をタイムラインに追加します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 動的しきい値違反。動的しきい値とは、時間経過とともに追跡されるメトリックの正常な動作と異常な動作との境界を示す値です。メトリックがしきい値の上限または下限を超えると、vRealize Operations Manager によって異常が生成されます。このオプションを選択する場合、異常がタイムラインに追加されるため、アラートとの関連で異常を評価することができます。 ■ 変更。変更イベントとは、監視対象システムに対する何らかの変更を指します。これには、オブジェクトに対する変更が含まれます。たとえば、オブジェクトの追加、削除、接続、切断や、オブジェクトの開始、停止、再構成です。このオプションを選択する場合、変更がタイムラインに追加されるため、アラートとの関連で変更を評価することができます。取得される変更は、監視対象システムを管理するアダプタによって異なります。 ■ 障害。障害イベントとは、アラートの生成または症状のトリガーを含め、オブジェクトの問題の原因となった可能性がある、監視対象システムから取得されるイベントです。このオプションを選択する場合、障害がタイムラインに追加されるため、アラートとの関連で障害を評価することができます。取得される障害は、監視対象システムを管理するアダプタによって異なります。
ステータスの選択	タイムラインのアラートを、キャンセルされたアラートまたはアクティブなアラートに限定します。
重要度レベルの選択	タイムラインのアラートを、選択した重要度レベルのアラートに限定します。
自己イベントの表示	<p>影響を受けるオブジェクトのアラートおよび症状を表示します。</p> <p>これはデフォルトのタイムライン ビューです。先祖、子孫、およびピアのイベントと組み合わせて自己イベントを使用すると、アラートに寄与する子または親のイベントについてヒントが得られるタイムラインを作成することができます。</p>

表 4-37. タイムライン オプション (続き)

オプション	説明
先祖イベントの表示	<p>影響を受けるオブジェクトの先祖についてのアラートおよび症状を表示します。</p> <p>先祖とは、オブジェクトの両親、祖父母などのことです。たとえば、ホストの先祖は、フォルダ、ストレージ ボット、クラスタ、データ センター、および vCenter Server インスタンスです。</p>
子孫イベントの表示	<p>影響を受けるオブジェクトの子孫についてのアラートおよび症状を表示します。</p> <p>子孫とは、オブジェクトの子および孫です。たとえば、ホストの子孫は、データストア、リソース プール、および仮想マシンです。</p>
ピア イベントの表示	影響を受けるオブジェクト同様、オブジェクトに関するアラートおよび症状を表示します。
日付コントロール	タイムラインのアラートを、選択した時間枠に限定します。
タイムライン	<p>アラートおよび症状を、時間、日、および週の 3 つの階層の経過時間で一連の行として表示します。</p> <p>タイムラインをスクロールするには、3 階層のいずれかをクリックしてビューを左右にドラッグします。</p> <p>症状の詳細を確認するには、症状を表す行をクリックします。関連付けられたアラート、先祖、子孫、またはピアのアラートの詳細に移動するには、アラートを表す行をクリックします。</p>

アラートの詳細 - [関係] タブ

関係ビューは、影響を受けるオブジェクトとその関連オブジェクトのトポロジカル マップです。マップを使用して、環境内で影響を受けるオブジェクトを視覚化し、アラートに関連する問題を示す可能性のある関連オブジェクトのアラートを検索します。

アラート詳細関係マップの仕組み

関係マップは、影響を受けるオブジェクト、関連するオブジェクト、関連するオブジェクトの健全性、リスク、または効率の状態のほか、それぞれに対して生成されたアラートの数を表示します。 オブジェクト アイコンをダブルクリックすると、選択したオブジェクトがマップでフォーカスされ、そのオブジェクトのトポロジが更新されます。

アラート詳細関係を確認できる場所

左側のペインで、[アラート] アイコンをクリックします。[アラートの概要]、[健全性アラート]、[リスク アラート]、または [効率アラート] リストで、データ グリッドのアラート名をクリックし、[関係] タブをクリックします。

表 4-38. アラートの詳細の関係オプション

オプション	説明
バッジ	オブジェクトの健全性、リスク、または効率に関する各アラートを関係マップに表示します。
表示に合わせてズーム	使用可能な領域に合わせてマップをサイズ変更します。
パン	使用中のズームのレベルに関係なくマップ内の特定のオブジェクトを表示できるようにマップをクリックしてドラッグします。

表 4-38. アラートの詳細の関係オプション（続き）

オプション	説明
ポイント時に値を表示する	有効にすると、オブジェクト アイコンにマウスのカーソルを置くことによってオブジェクトの名前、タイプ、および状態が表示されます。
ビューをズーム	マップ内の選択ボックスをクリックしてドラッグし、選択した領域を拡大します。
ズームイン	マップを拡大します。
ズームアウト	マップのサイズを小さくします。
最初のリソースにリセット	アイコンをダブルクリックして別のオブジェクトを調べた場合、元のオブジェクトにマップが戻されます。
リソース詳細	メインのペインのビューをオブジェクトの詳細に変更します。 [概要]、[アラート]、[分析]、および関連するタブを使用すると、問題の詳細なトラブルシューティングを行うことができます。 アラートの詳細に戻すには、左側のナビゲーション ペインの上部にあるアラート名をクリックします。
アラートの表示	マップで選択したオブジェクトに関するアラートを示すウィンドウを開きます。
マップ	オブジェクトと関連するオブジェクトのトポロジカル ビュー。 オブジェクトをダブルクリックすると、そのオブジェクトの関係マップが表示されます。
子のリスト	選択したオブジェクトに子オブジェクトがある場合、オブジェクト タイプごとにリストに表示されます。

アラートの詳細 - メトリック チャート

メトリック チャートとは、影響を受けるオブジェクトで使用可能なメトリックに基づいて作成するチャートおよびグラフです。このチャートを使用して、オブジェクトに対するアラートが生成された問題の根本原因を特定する際に役立つカスタムのトラブルシューティング ツールを作成します。

アラートの詳細メトリック チャートの機能

問題の調査に役立つと思うメトリックに基づいてチャートを作成し、そのチャートをカスタマイズしてデータをより詳細に評価します。

構成したチャートを保存するには、ツールバー オプションを使ってダッシュボードを作成します。

アラートの詳細メトリック チャートを確認できる場所

左側のペインで、[アラート] アイコンをクリックします。[アラートの概要]、[健全性アラート]、[リスク アラート]、[効率アラート] のいずれかのリストで、データ グリッド内のアラート名をクリックし、[メトリック チャート] タブをクリックします。

メトリック チャート オプション

メトリック チャートの作成に使用するオプションは、メトリック セレクタ、チャートペイン内のすべてのチャートの外観を制御するチャート ペインおよびツールバー オプション、各チャートのツールバー オプションです。

表 4-39. メトリック チャートのメトリック セレクタ オプション

オプション	説明
共通メトリックの表示	リストを更新して、影響を受けるオブジェクト タイプに使用可能なメトリックだけを表示します。
メトリック収集の表示	リストを更新して、影響を受けるオブジェクト タイプに対して現在収集されたメトリックだけを表示します。
検索	単語検索を使用して、リストに表示される項目の数を限定します。
メトリック リスト	メトリックをダブルクリックして、メトリック チャートを右側のペインに追加します。

メトリック チャートのツールバー オプションは、ワークスペース内でチャートをどのように表示するかを決定します。

表 4-40. メトリック チャート ツールバー オプション

オプション	説明
分割グラフ	各メトリックを別個のチャートに表示します。
積み重ねグラフ	すべてのチャートを 1 つに統合します。このチャートは、メトリック値の総計または合計が時間の経過とともにどのように変化するかを表示する場合に役に立ちます。積み重ねグラフを表示するには、分割グラフがオフになっていることを確認します。
Y 軸	Y 軸のスケールの表示/非表示を切り替えます。
メトリック チャート	チャートのデータ ポイントをつなぐラインの表示/非表示を切り替えます。
トレンド ライン	メトリックのトレンドを表すラインおよびデータ ポイントの表示/非表示を切り替えます。トレンド ラインは、隣接するデータ ポイントの平均に照らして各データ ポイントをプロットすることにより、タイムラインに沿ってメトリック ノイズを除外します。
動的しきい値	24 時間内で計算された動的しきい値の表示/非表示を切り替えます。
全期間における動的しきい値の表示	グラフの全期間の動的しきい値の表示/非表示を切り替えます。
異常	異常の表示/非表示を切り替えます。メトリックがしきい値を超えている期間が影付きで表示されます。異常は、メトリックが動的しきい値または静的しきい値を上回った場合、または下回った場合に生成されます。
データ ポイント チップの表示	チャート内でデータ ポイントの上にマウスを置いたときに、データ ポイントのツールチップの表示/非表示を切り替えます。
X 軸ズーム	チャートで範囲セレクタを使用してチャートのサブセットを選択する場合に、選択した領域を X 軸で拡大します。[X 軸ズーム]と[Y 軸ズーム]を同時に使用できます。
Y 軸ズーム	チャートで範囲セレクタを使用してチャートのサブセットを選択する場合に、選択した領域を Y 軸で拡大します。[X 軸ズーム]と[Y 軸ズーム]を同時に使用できます。
表示に合わせてズーム	使用可能な領域に合わせてチャートをリセットします。

表 4-40. メトリック チャート ツールバー オプション (続き)

オプション	説明
動的しきい値でズーム	軸の最大値と最小値が対象メトリックに対して計算された動的しきい値の最大値と最小値になるように、チャートの Y 軸のサイズを変更します。
すべてのチャートをズーム	範囲セレクトの使用時にキャプチャされた領域に基づいて、チャート ペインで開いているすべてのチャートのサイズを変更します。 このオプションと [ビューをズーム] の間を切り替えることができます。
ビューをズーム	範囲セレクトの使用時に、現在のチャートのサイズを変更します。
パン	ズーム モードでは、チャートの拡大セクションをドラッグして、メトリックの最大値、最小値、以前の値、新しい値を表示できます。
データ値の表示	ズームまたはパン オプションに切り替えた場合に、データ ポイント ツールチップを有効にします。[データ ポイント チップの表示] を有効にする必要があります。
チャートの更新	現在のデータでチャートを再ロードします。
日付コントロール	日付セレクトを開きます。 日付セレクトを使用して、各チャートに表示されるデータを調査中の期間に限定します。
ダッシュボードの生成	現在のチャートをダッシュボードとして保存します。
すべてを削除する	すべてのチャートをチャート ペインから削除して、一連の新しいチャートの作成を開始できるようにします。

チャートのツールバー オプションは、個々のチャート内でデータをどのように表示するかを決定します。

表 4-41. [メトリック チャート、チャート ツールバー] オプション

オプション	説明
外部アプリケーションで開く	オブジェクトに関する情報を取得するために別のアプリケーションにリンクする機能がアダプタに含まれている場合は、ボタンをクリックして、そのアプリケーションのリンクにアクセスします。
スナップショットの保存	現在のチャートの PNG ファイルを作成します。イメージは、画面に表示されるサイズになります。 このファイルをブラウザのダウンロード フォルダに取得できます。
フル スクリーン スナップショットの保存	現在のグラフ イメージを フルページの PNG ファイルとしてダウンロードし、表示または保存することができます。 このファイルをブラウザのダウンロード フォルダに取得できます。
カンマ区切りデータのダウンロード	現在のチャートのデータを含む CSV ファイルを作成します。 このファイルをブラウザのダウンロード フォルダに取得できます。
下へ移動	チャート位置を 1 単位下げます。
上へ移動	チャート位置を 1 単位上げます。
閉じる	チャートを削除します。

アラートの詳細メモ

ロールに割り当てられた権限がある管理者とユーザーは、オブジェクトに対して発生したアラートを他のユーザーが調査できるようにアラート メモを作成できます。アラート メモによってユーザーは、アラートのステータスを理解したり、アラートによって特定された問題を解決できます。アラート インスタンスで示された問題のトラブルシューティングを行うために実行されたアクションの監査証跡を作成できます。

アラートの詳細メモの仕組み

アラートがサードパーティのトラブルチケット システム内を移動すると、管理者は、アラートに対して行われた外部ステータス変更と、アラートを解決するために行われた進行状況を取得できます。たとえば、管理者は、アラート メモを追加して、アラートが特定の管理者またはオペレータに割り当てられていること、アラートのトリアージ（問題対応の優先順位判定）が行われたこと、または解決策が承認されたことを示します。

アラートがさまざまなオブジェクトに対してトリガされる可能性がある場合でも、アラート メモは特定のアラート インスタンスに関する内容です。アラート メモはアラート定義と関連していません。ロールに割り当てられた権限がユーザーにある場合は、アラート メモを削除することもできます。

アラートの詳細メモを確認できる場所

左側のペインで、[アラート] アイコンをクリックします。 アラート リストで、アラートをクリックし、[メモ] タブをクリックします。

[ホーム] - [アラート] のグローバル アラート概要には、アラート メモは表示されません。

表 4-42. アラート メモのオプション

オプション	説明
テキスト エリア	ステータス、進行状況、または試した解決策を示すアラートのメモを入力します。 テキストをコピーして、アラート メモのテキスト エリアに貼り付けることができます。リンクは維持されますが、書式設定は削除されます。 リンクを追加するには、テキストを選択してリンク アイコンをクリックします。[保存] をクリックします。
リンク	テキストを URL にリンクし、[保存] をクリックします。
保存	アラート メモを保存します。このオプションは、メモ テキスト フィールドにテキストを入力すると表示されます。
キャンセル	アラート メモの作成をキャンセルします。このオプションは、メモ テキスト フィールドにテキストを入力すると表示されます。
並べ替え	アラート メモを新しい順、古い順、作成者順に並べ替えます。
すべてのフィルタ	作成者、作成日、またはメモ テキストに基づいてアラート メモのリストをフィルタします。 特定のテキストを含んだアラート メモのみを表示するには、フィルタ メモ テキスト ボックスにテキストを入力します。 フィルタをクリアするには、赤い X をクリックします。
List of alert notes	ユーザー ID とタイムスタンプが表示されます。 ■ ユーザー ID。アラート メモを作成したユーザーの電子メール。 ■ タイムスタンプ。アラート メモが作成された時刻。
削除	選択したアラート メモを削除します。このオプションは、アラート メモを削除する権限がある場合にのみ表示されます。
ページネーション	メモの数が 50 個を超えると、このオプションによって 1 ページあたりのアラート メモの数が表示されます。デフォルトでは、1 ページに 50 個のメモが表示されます。

アラートのタイプ

さまざまなタイプのアラートが特定のオブジェクトでトリガされます。

アラートは次の 3 つのタイプがあります。

- 健全性アラート
- リスク アラート
- 効率アラート

健全性アラート

健全性アラート リストには、環境の健全性に影響を与え、ただちに注意が必要であるものとして構成された、生成済みのすべてのアラートが表示されます。健全性アラート リストは、問題の評価、優先順位付け、およびその速やかな解決開始に使用します。

健全性アラートの動作

管理対象オブジェクトについて生成されるすべての健全性アラートがリストに表示されます。

ツールバー オプションを使用してリストのアラートを管理できます。アラート名をクリックすると、影響を受けるオブジェクトのアラートの詳細を確認できます。アラートが生成されたオブジェクトの名前をクリックすると、オブジェクトの詳細を確認できます。

健全性アラートを確認できる場所

左側のペインで、[アラート] - [健全性] を選択します。

健全性アラートのオプション

アラート オプションには、ツールバーとデータ グリッドのオプションが含まれます。キャンセル、サスペンド、または所有権の管理を行うには、ツールバー オプションを使用します。[Shift] または [Control] を押しながらクリックすることで、リスト内の複数の行を選択できます。アラートを表示するには、データ グリッドを使用します。アラートの名前をクリックするとアラートの詳細を表示でき、オブジェクトの名前をクリックするとオブジェクトの詳細を表示できます。

表 4-43. 健全性アラートのツールバー オプション

オプション	説明
外部アプリケーションで開く	<p>選択したオブジェクトに対して実行できるアクション。</p> <p>(たとえば、[vSphere Client で仮想マシンを開く] など)。</p>
アラートのキャンセル	<p>選択したアラートをキャンセルします。アクティブなアラートのみを表示するようにアラート リストが構成されている場合、キャンセルされたアラートはリストから除外されます。</p> <p>対処する必要がないアラートをキャンセルします。アラートをキャンセルしても、そのアラートの生成の基盤となった条件はキャンセルされません。アラートのキャンセルは、トリガーされた障害やイベントの症状によってアラートが生成された場合に有効です。これらの症状は、監視対象オブジェクトでその後の障害またはイベントが発生した場合にのみ再度トリガーされるためです。メトリックまたはプロパティの症状に基づいてアラートが生成される場合、そのアラートは、次の収集および分析サイクルまでしかキャンセルされません。違反値が依然として存在する場合は、アラートが再度生成されます。</p>
サスペンド	<p>指定された分数の間アラートをサスペンドします。</p> <p>アラートを調査しているとき、作業中にアラートがオブジェクトの健全性、リスク、または効率に影響しないようにアラートをサスペンドします。経過時間後に問題が解決されない場合、アラートが再アクティブ化され、再びオブジェクトの健全性、リスク、または効率に影響を与えます。アラートをサスペンドしたユーザーは所有者として割り当てられます。</p>
所有権の取得	<p>現在のユーザーとして、自分自身をアラートの所有者にします。</p> <p>アラートの所有権を獲得できるだけで、所有権を割り当てることはできません。</p>
所有権の解放	<p>アラートのすべての所有権が解放されます。</p>
フィルタリング オプション	<p>アラートのリストを、作成するフィルタと一致するアラートに限定します。</p> <p>データ グリッドの列で並べ替えることもできます。</p>

[健全性アラート] データ グリッドには、生成されたアラートのリストが表示されます。これを使用して、環境内の問題を解決します。

表 4-44. 健全性アラート データ グリッドのオプション

オプション	説明
重要度	<p>環境内でのアラートの重要度レベルを示します。アラートの重要度は、重要度アイコンの上にマウスを置いたときにツールチップに表示されます。</p> <p>このレベルは、アラート定義の作成時に割り当てられたレベルに基づきます。割り当てられたレベルが [シムptom ベース] の場合は、症状の最高の重要度に基づきます。</p> <p>次の値があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 重大 ■ 緊急 ■ 警告 ■ 詳細情報 <p>デフォルトでは、アラートはクリティカル度順にソートされます。アラートのリストをクリティカル度順に事前ソートすると、クリティカルなアラートがリストの上位に表示されます。ソート順を変更すると、ソートがグローバル アラート リスト、健全性、リスク、および効率アラート リストの環境設定とともに保存されます。</p>
アラート	<p>アラートを生成したアラートの定義名。</p> <p>アラートの名前をクリックするとアラートの詳細タブが表示され、ここでアラートのトラブルシューティングを開始できます。</p>
アラート タイプ	<p>選択したオブジェクトに対して起動したアラートのタイプが表示されます。これにより、アラートを分類し、特定タイプのアラートを特定のシステム管理者に割り当てることができます。たとえば、[アプリケーション]、[仮想化/ハイパーバイザ]、[ハードウェア]、[ストレージ]、[ネットワーク] などが表示されます。</p>
アラート サブタイプ	<p>選択したオブジェクトに対して起動したアラートのタイプについて、その他の情報が表示されます。これにより、アラート タイプよりも詳細にアラートを分類し、特定タイプのアラートを特定のシステム管理者に割り当てることができます。たとえば、[可用性]、[パフォーマンス]、[容量]、[コンプライアンス]、[構成] などが表示されます。</p>
ステータス	<p>アラートの現在の状態。</p> <p>値には、[有効] または [キャンセル済み] があります。</p>
起動元	<p>アラートが生成されたオブジェクトの名前と、オブジェクト名の上にマウスを置いたときにツールチップに表示されるオブジェクト タイプです。</p> <p>オブジェクト名をクリックすると、オブジェクトの詳細タブが表示されます。ここで、オブジェクトに他に何か問題がないかどうかについて調査を開始できます。</p>
制御状態	<p>ユーザーのアラートとの相互作用の状態です。値には、次の種類があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オープン。アラートはアクションに対して使用可能で、ユーザーには割り当てられていません。 ■ 割り当て済み。ログイン ユーザーが [所有権の取得] をクリックしたときに、そのユーザーにアラートが割り当てられています。 ■ サスペンド中。アラートは指定された時間中サスペンドされました。オブジェクトの健全性、リスク、および効率に対して、アラートの影響が一時的に及ばないようにされています。この状態が便利なのは、システム管理者が問題を検討しており、アラートの影響をオブジェクトの健全性のステータスに与えたくないときです。

表 4-44. 健全性アラート データ グリッドのオプション（続き）

オプション	説明
オブジェクト タイプ	アラートの生成の基となったオブジェクトのタイプ。
所有者	アラートを所有するユーザーの名前。
作成日時	アラートが生成された日時。
更新日時	<p>アラートが最後に変更された日時。</p> <p>アラートは、次のいずれかの変更が発生するたびに更新されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アラート定義に含まれる別の症状が発生した場合。 ■ アラートを引き起こす原因となった症状のトリガーがキャンセルされた場合。
キャンセル日時	<p>アラートが次のいずれかの理由でキャンセルされた日時。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アラートを起動した症状がアクティブでなくなった場合。アラートはシステムによってキャンセルされます。 ■ オブジェクトに適用されるポリシーで該当する症状の定義が無効になっているためにアラートを起動した症状がキャンセルされた場合。 ■ 該当する症状の定義が削除されたためにアラートを起動した症状がキャンセルされた場合。 ■ オブジェクトに適用されるポリシーでこのアラートのアラート定義が無効になっている場合。 ■ アラート定義が削除された場合。 ■ ユーザーがアラートをキャンセルした場合。

リスク アラート

リスク アラート リストには、ご使用の環境におけるリスクを示すために構成されたすべての発生アラートが表示されます。アラート生成のトリガーとなった症状が環境の健全性に悪影響を与える前に、近い将来、リスク アラートに対処します。

リスク アラートの仕組み

管理オブジェクトで生成されたすべてのリスク アラートがリストに表示されます。

ツールバー オプションを使用してリストのアラートを管理できます。アラート名をクリックすると、影響を受けるオブジェクトのアラートの詳細を確認できます。アラートが生成されたオブジェクトの名前をクリックすると、オブジェクトの詳細を確認できます。

リスク アラートが見つかる場所

左側のペインで、[アラート] - [リスク] を選択します。

リスク アラート オプション

アラート オプションには、ツールバーとデータ グリッドのオプションが含まれます。キャンセル、サスペンド、または所有権の管理を行うには、ツールバー オプションを使用します。[Shift] または [Control] を押しながらかlickすることで、リスト内の複数の行を選択できます。アラートを表示するには、データ グリッドを使用します。アラートの名前をクリックするとアラートの詳細を表示でき、オブジェクトの名前をクリックするとオブジェクトの詳細を表示できます。

表 4-45. リスク アラート ツールバー オプション

オプション	説明
外部アプリケーションで開く	<p>選択したオブジェクトに対して実行できるアクション。</p> <p>(たとえば、[vSphere Client で仮想マシンを開く] など)。</p>
アラートのキャンセル	<p>選択したアラートをキャンセルします。アクティブなアラートのみを表示するようにアラート リストが構成されている場合、キャンセルされたアラートはリストから除外されます。</p> <p>対処する必要がないアラートをキャンセルします。アラートをキャンセルしても、そのアラートの生成の基盤となった条件はキャンセルされません。アラートのキャンセルは、トリガーされた障害やイベントの症状によってアラートが生成された場合に有効です。これらの症状は、監視対象オブジェクトでその後の障害またはイベントが発生した場合にのみ再度トリガーされるためです。メトリックまたはプロパティの症状に基づいてアラートが生成される場合、そのアラートは、次の収集および分析サイクルまでしかキャンセルされません。違反値が依然として存在する場合は、アラートが再度生成されます。</p>
サスペンド	<p>指定された分数の間アラートをサスペンドします。</p> <p>アラートを調査しているとき、作業中にアラートがオブジェクトの健全性、リスク、または効率に影響しないようにアラートをサスペンドします。経過時間後に問題が解決されない場合、アラートが再アクティブ化され、再びオブジェクトの健全性、リスク、または効率に影響を与えます。アラートをサスペンドしたユーザーは所有者として割り当てられます。</p>
所有権の取得	<p>現在のユーザーとして、自分自身をアラートの所有者にします。</p> <p>アラートの所有権を獲得できるだけで、所有権を割り当てることはできません。</p>
所有権の解放	アラートのすべての所有権が解放されます。
フィルタリング オプション	<p>アラートのリストを、作成するフィルタと一致するアラートに限定します。</p> <p>データ グリッドの列で並べ替えることもできます。</p>

[リスク アラート] データ グリッドには、生成されたアラートのリストが表示されます。これを使用して、環境内の問題を解決します。

表 4-46. リスク アラート データ グリッドのオプション

オプション	説明
重要度	<p>環境内でのアラートの重要度レベルを示します。アラートの重要度は、重要度アイコンの上にマウスを置いたときにツールチップに表示されます。</p> <p>このレベルは、アラート定義の作成時に割り当てられたレベルに基づきます。割り当てられたレベルが [シンプトム ベース] の場合は、症状の最高の重要度に基づきます。</p> <p>次の値があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 重大 ■ 緊急 ■ 警告 ■ 詳細情報 <p>デフォルトでは、アラートはクリティカル度順にソートされます。アラートのリストをクリティカル度順に事前ソートすると、クリティカルなアラートがリストの上位に表示されます。ソート順を変更すると、ソートがグローバル アラート リスト、健全性、リスク、および効率アラート リストの環境設定とともに保存されます。</p>
アラート	<p>アラートを生成したアラートの定義名。</p> <p>アラートの名前をクリックするとアラートの詳細タブが表示され、ここでアラートのトラブルシューティングを開始できます。</p>
アラート タイプ	<p>選択したオブジェクトに対して起動したアラートのタイプが表示されます。これにより、アラートを分類し、特定タイプのアラートを特定のシステム管理者に割り当てることができます。たとえば、[アプリケーション]、[仮想化/ハイパーバイザ]、[ハードウェア]、[ストレージ]、[ネットワーク] などが表示されます。</p>
アラート サブタイプ	<p>選択したオブジェクトに対して起動したアラートのタイプについて、その他の情報が表示されます。これにより、アラート タイプよりも詳細にアラートを分類し、特定タイプのアラートを特定のシステム管理者に割り当てることができます。たとえば、[可用性]、[パフォーマンス]、[容量]、[コンプライアンス]、[構成] などが表示されます。</p>
ステータス	<p>アラートの現在の状態。</p> <p>値には、[有効] または [キャンセル済み] があります。</p>
起動元	<p>アラートが生成されたオブジェクトの名前と、オブジェクト名の上にマウスを置いたときにツールチップに表示されるオブジェクト タイプです。</p> <p>オブジェクト名をクリックすると、オブジェクトの詳細タブが表示されます。ここで、オブジェクトに他に何か問題がないかどうかについて調査を開始できます。</p>
制御状態	<p>ユーザーのアラートとの相互作用の状態です。値には、次の種類があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オープン。アラートはアクションに対して使用可能で、ユーザーには割り当てられていません。 ■ 割り当て済み。ログイン ユーザーが [所有権の取得] をクリックしたときに、そのユーザーにアラートが割り当てられています。 ■ サスペンド中。アラートは指定された時間中サスペンドされました。オブジェクトの健全性、リスク、および効率に対して、アラートの影響が一時的に及ばないようにされています。この状態が便利なのは、システム管理者が問題を検討しており、アラートの影響をオブジェクトの健全性のステータスに与えたくないときです。

表 4-46. リスク アラート データ グリッドのオプション（続き）

オプション	説明
オブジェクト タイプ	アラートの生成の基となったオブジェクトのタイプ。
所有者	アラートを所有するユーザーの名前。
作成日時	アラートが生成された日時。
更新日時	<p>アラートが最後に変更された日時。</p> <p>アラートは、次のいずれかの変更が発生するたびに更新されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アラート定義に含まれる別の症状が発生した場合。 ■ アラートを引き起こす原因となった症状のトリガーがキャンセルされた場合。
キャンセル日時	<p>アラートが次のいずれかの理由でキャンセルされた日時。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アラートを起動した症状がアクティブでなくなった場合。アラートはシステムによってキャンセルされます。 ■ オブジェクトに適用されるポリシーで該当する症状の定義が無効になっているためにアラートを起動した症状がキャンセルされた場合。 ■ 該当する症状の定義が削除されたためにアラートを起動した症状がキャンセルされた場合。 ■ オブジェクトに適用されるポリシーでこのアラートのアラート定義が無効になっている場合。 ■ アラート定義が削除された場合。 ■ ユーザーがアラートをキャンセルした場合。

効率アラート

効率アラートのリストには、環境内の監視対象オブジェクトの効率的な使用に関する問題を示すように構成されたアラートのうち、生成されたすべてのアラートが表示されます。効率アラートに対処して、環境内の無駄な領域を解放したり、オブジェクトのパフォーマンスを向上したりします。

効率アラートの仕組み

管理オブジェクトで生成されたすべての効率アラートが、リストに表示されます。

ツールバー オプションを使用してリストのアラートを管理できます。アラート名をクリックすると、影響を受けるオブジェクトのアラートの詳細を確認できます。アラートが生成されたオブジェクトの名前をクリックすると、オブジェクトの詳細を確認できます。

効率アラートの場所

左側のペインで、[アラート] - [効率] を選択します。

効率アラートのオプション

アラート オプションには、ツールバーとデータ グリッドのオプションが含まれます。キャンセル、サスペンド、または所有権の管理を行うには、ツールバー オプションを使用します。[Shift] または [Control] を押しながらかlickすることで、リスト内の複数の行を選択できます。アラートを表示するには、データ グリッドを使用します。アラートの名前をクリックするとアラートの詳細を表示でき、オブジェクトの名前をクリックするとオブジェクトの詳細を表示できます。

表 4-47. 効率アラートのツールバー オプション

オプション	説明
外部アプリケーションで開く	<p>選択したオブジェクトに対して実行できるアクション。</p> <p>(たとえば、[vSphere Client で仮想マシンを開く] など)。</p>
アラートのキャンセル	<p>選択したアラートをキャンセルします。アクティブなアラートのみを表示するようにアラート リストが構成されている場合、キャンセルされたアラートはリストから除外されます。</p> <p>対処する必要がないアラートをキャンセルします。アラートをキャンセルしても、そのアラートの生成の基盤となった条件はキャンセルされません。アラートのキャンセルは、トリガーされた障害やイベントの症状によってアラートが生成された場合に有効です。これらの症状は、監視対象オブジェクトでその後の障害またはイベントが発生した場合にのみ再度トリガーされるためです。メトリックまたはプロパティの症状に基づいてアラートが生成される場合、そのアラートは、次の収集および分析サイクルまでしかキャンセルされません。違反値が依然として存在する場合は、アラートが再度生成されます。</p>
サスペンド	<p>指定された分数の間アラートをサスペンドします。</p> <p>アラートを調査しているとき、作業中にアラートがオブジェクトの健全性、リスク、または効率に影響しないようにアラートをサスペンドします。経過時間後に問題が解決されない場合、アラートが再アクティブ化され、再びオブジェクトの健全性、リスク、または効率に影響を与えます。アラートをサスペンドしたユーザーは所有者として割り当てられます。</p>
所有権の取得	<p>現在のユーザーとして、自分自身をアラートの所有者にします。</p> <p>アラートの所有権を獲得できるだけで、所有権を割り当てることはできません。</p>
所有権の解放	アラートのすべての所有権が解放されます。
フィルタリング オプション	<p>アラートのリストを、作成するフィルタと一致するアラートに限定します。</p> <p>データ グリッドの列で並べ替えることもできます。</p>

[効率アラート] データ グリッドには、生成されたアラートのリストが表示されます。これを使用して、環境内の問題を解決します。

表 4-48. 効率アラート データ グリッドのオプション

オプション	説明
重要度	<p>環境内でのアラートの重要度レベルを示します。アラートの重要度は、重要度アイコンの上にマウスを置いたときにツールチップに表示されます。</p> <p>このレベルは、アラート定義の作成時に割り当てられたレベルに基づきます。割り当てられたレベルが [シムptom ベース] の場合は、症状の最高の重要度に基づきます。</p> <p>次の値があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 重大 ■ 緊急 ■ 警告 ■ 詳細情報 <p>デフォルトでは、アラートはクリティカル度順にソートされます。アラートのリストをクリティカル度順に事前ソートすると、クリティカルなアラートがリストの上位に表示されます。ソート順を変更すると、ソートがグローバル アラート リスト、健全性、リスク、および効率アラート リストの環境設定とともに保存されます。</p>
アラート	<p>アラートを生成したアラートの定義名。</p> <p>アラートの名前をクリックするとアラートの詳細タブが表示され、ここでアラートのトラブルシューティングを開始できます。</p>
アラート タイプ	<p>選択したオブジェクトに対して起動したアラートのタイプが表示されます。これにより、アラートを分類し、特定タイプのアラートを特定のシステム管理者に割り当てることができます。たとえば、[アプリケーション]、[仮想化/ハイパーバイザ]、[ハードウェア]、[ストレージ]、[ネットワーク] などが表示されます。</p>
アラート サブタイプ	<p>選択したオブジェクトに対して起動したアラートのタイプについて、その他の情報が表示されます。これにより、アラート タイプよりも詳細にアラートを分類し、特定タイプのアラートを特定のシステム管理者に割り当てることができます。たとえば、[可用性]、[パフォーマンス]、[容量]、[コンプライアンス]、[構成] などが表示されます。</p>
ステータス	<p>アラートの現在の状態。</p> <p>値には、[有効] または [キャンセル済み] があります。</p>
起動元	<p>アラートが生成されたオブジェクトの名前と、オブジェクト名の上にマウスを置いたときにツールチップに表示されるオブジェクト タイプです。</p> <p>オブジェクト名をクリックすると、オブジェクトの詳細タブが表示されます。ここで、オブジェクトに他に何か問題がないかどうかについて調査を開始できます。</p>
制御状態	<p>ユーザーのアラートとの相互作用の状態です。値には、次の種類があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オープン。アラートはアクションに対して使用可能で、ユーザーには割り当てられていません。 ■ 割り当て済み。ログイン ユーザーが [所有権の取得] をクリックしたときに、そのユーザーにアラートが割り当てられています。 ■ サスペンド中。アラートは指定された時間中サスペンドされました。オブジェクトの健全性、リスク、および効率に対して、アラートの影響が一時的に及ばないようにされています。この状態が便利なのは、システム管理者が問題を検討しており、アラートの影響をオブジェクトの健全性のステータスに与えたくないときです。

表 4-48. 効率アラート データ グリッドのオプション（続き）

オプション	説明
オブジェクト タイプ	アラートの生成の基となったオブジェクトのタイプ。
所有者	アラートを所有するユーザーの名前。
作成日時	アラートが生成された日時。
更新日時	<p>アラートが最後に変更された日時。</p> <p>アラートは、次のいずれかの変更が発生するたびに更新されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アラート定義に含まれる別の症状が発生した場合。 ■ アラートを引き起こす原因となった症状のトリガーがキャンセルされた場合。
キャンセル日時	<p>アラートが次のいずれかの理由でキャンセルされた日時。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アラートを起動した症状がアクティブでなくなった場合。アラートはシステムによってキャンセルされます。 ■ オブジェクトに適用されるポリシーで該当する症状の定義が無効になっているためにアラートを起動した症状がキャンセルされた場合。 ■ 該当する症状の定義が削除されたためにアラートを起動した症状がキャンセルされた場合。 ■ オブジェクトに適用されるポリシーでこのアラートのアラート定義が無効になっている場合。 ■ アラート定義が削除された場合。 ■ ユーザーがアラートをキャンセルした場合。

アラートの構成

環境で問題が発生すると常にアラートが生成されます。アラート定義は、生成されたアラートから監視対象環境内の問題が把握できるように作成できます。

vRealize Operations Manager でのアラートの定義

アラート定義は 1 つ以上の症状定義から構成され、問題の解決に役立つ一連の推奨事項とアクションに関連付けられます。アラート定義には、トリガーする症状定義と実行可能な推奨事項が含まれます。アラート定義は、生成されたアラートから監視対象環境内の問題が把握できるように作成します。アラート定義が作成されていると、その推奨事項に示された効果的な解決手段でアラートに対応できます。

vRealize Operations Manager には、構成済みアダプタの一部として、定義済みのアラートが含まれています。アラート定義は、環境のニーズに合わせて追加または変更できます。



vRealize Operations Manager のアラート定義の作成

(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_create_alerts_vrom)

アラート定義内の症状

症状の定義は、条件が true になる場合に症状をトリガーしてアラートを生成する可能性がある環境内の条件を評価したものです。症状の定義は、メトリックまたはスーパー メトリック、プロパティ、メッセージ イベント、障害イベント、またはメトリック イベントに基づいて追加できます。症状の定義は、アラート定義を作成するときに追加することも、適切な症状の定義リスト内の個々のアイテムとして追加することもできます。

アラート定義に症状の定義を追加するときに、その症状の定義は症状セットの一部になります。症状セットは、定義された症状と、症状条件が true になるタイミングを決定する引数の組み合わせです。

症状セットは、Any 条件または All 条件を適用して 1 つ以上の症状の定義を組み合わせたものです。症状セットを使用することで、特定症状の存在または非存在を選択できます。症状セットが「自己」ではなく関連オブジェクトに関係している場合は、ポピュレーション句を適用して、含まれている症状の定義を示す関連オブジェクトの割合または具体的な数を特定できます。

アラート定義は、1 つ以上の症状セットから構成されます。すべての症状セットがトリガーされないとアラートを生成しないアラート定義の場合、症状セットが 1 つしかトリガーされないときにはアラートは生成されません。いくつかの症状セットのうちの 1 つがトリガーされる必要がある症状の定義の場合、他の症状セットがトリガーされなかった場合でもアラートは生成されます。

アラート定義内の推奨事項

推奨事項は、生成されたアラートが示す問題を解決する手段としてユーザーに提供する修正オプションです。

監視対象環境内のオブジェクトに関する問題を示すアラート定義を追加する場合は、関連する推奨事項を追加する必要があります。推奨事項は、ユーザーへの指示、他の情報や指示へのリンク、ターゲット システム上で実行される vRealize Operations Manager アクションなどの形で指定できます。

アラート定義の変更

アラート定義のアラート影響タイプを変更すると、既に生成されているアラートはすべて前の影響レベルになります。新しいアラートは新しい影響レベルになります。すべての生成済みアラートを新しいレベルに設定し直すには、それらの古いアラートをキャンセルします。キャンセル後にそれらを生成すると、新しい影響レベルになります。

アラートの症状の定義

症状は環境内の問題を示す条件です。アラート定義に追加する症状は、監視対象オブジェクトの問題が発生するタイミングがわかるように定義する必要があります。

監視対象オブジェクトからデータが収集されると、そのデータが定義済みの症状条件と比較されます。条件が真の場合、症状がトリガーされます。

症状は、メトリックとスーパー メトリック、プロパティ、メッセージ イベント、障害イベント、およびメトリック イベントに基づいて定義できます。

環境内の定義済み症状は、[症状の定義] で管理されます。アラート定義に追加されている症状がトリガーされると、それらの症状を原因として「生成されたアラート」が生じます。アラート定義に追加されていない症状はこれまでどおり評価され、条件が真と評価される場合には [トラブルシューティング] タブの [アラートの詳細症状] タブに表示されます。

可能性のある重要度と条件をすべて含めた症状の定義

増分的な懸念レベルを説明するには、一続きの症状を使用します。たとえば、容量限度に近いボリュームは重要度の値が [警告] で、容量限度に達したボリュームは重要度レベルが [重大] というケースが考えられます。最初の症状は緊急的な脅威ではありません。2 番目の症状は緊急的な脅威です。

メトリック症状およびスーパー メトリック症状について

メトリック / スーパー メトリック症状は、vRealize Operations Manager が環境のターゲット オブジェクトから収集した運用およびパフォーマンス値に基づいています。この症状は、静的しきい値または動的しきい値を評価するように構成できます。

メトリックに基づく症状を定義しておけば、環境内のオブジェクトのパフォーマンスが悪影響を受ける場合に知らせてくれるアラート定義を作成できます。

固定しきい値

静的しきい値に基づくメトリック症状では、収集された現在のメトリック値を症状の定義に設定された固定値と比較します。

たとえば、仮想マシンの CPU ワークロードが 90 を超えた場合に、重大な症状がトリガーされる静的なメトリック症状を構成できます。

動的しきい値

動的しきい値に基づくメトリック症状では、収集された現在のメトリック値を vRealize Operations Manager によって特定された傾向と比較して、現在値が傾向の範囲を上回っている、下回っている、または全体として傾向の範囲外にあるのいずれに該当するのかを評価します。

たとえば、仮想マシンの CPU ワークロードが傾向の通常値を超えた場合に、重大な症状がトリガーされる動的なメトリック症状を構成できます。

メトリック / スーパー メトリック症状の定義

メトリック / スーパーメトリック症状の定義とは、vRealize Operations Manager 環境に定義されたメトリックベースの症状の一覧です。この一覧の情報を使用して、定義済みメトリックしきい値をトリガーする状態を評価し、症状を追加、編集、またはクローン作成するかどうかを判断します。

メトリック / スーパー メトリック症状を確認できる場所

メトリックとスーパー メトリックに基づく症状を管理するには、左側のペインで [内容] アイコンをクリックして、[症状の定義] - [メトリック / スーパーメトリック症状の定義] を選択します。

アラートの定義のワークスペースでアラートを定義する通りに症状を定義することもできます。

表 4-49. メトリック / スーパー メトリック症状のオプション

オプション	説明
ツールバー オプション	<p>ツールバー オプションを使用して症状を管理します。[Ctrl] または [Shift] を押しながらかlickすることで、複数の症状を選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 追加。症状の定義を追加します。 ■ 編集。選択した症状の定義を変更します。変更は、この症状を含むアラート定義に影響します。バッジを管理している症状を編集することはできません。 ■ 削除。選択した症状の定義を削除します。アラート定義で使用されているアラートを削除することはできません。症状を削除するには、まず、その症状が使用されているアラート定義から症状を削除する必要があります。バッジを管理している症状を削除することはできません。 ■ クローン作成。選択した症状の定義のコピーを作成します。 ■ エクスポートとインポート。1 つの vRealize Operations Manager からファイルを xml としてエクスポートできます。これにより、そのファイルを別のインスタンスにインポートできます。ファイルをインポートするときに競合が発生した場合、既存のファイルをオーバーライドするか、新しいファイルのインポートを中止することができます。
すべてのフィルタ	<p>フィルタと一致する症状にリストを限定します。</p> <p>データ グリッドの列で並べ替えることもできます。</p>
クイック フィルタ (名前)	入力したテキストに基づいてリストを限定します。
症状	症状の分かりやすい名前。
アダプタ タイプ	症状が構成済みアダプタ タイプ。
オブジェクト タイプ	症状が定義される対象の基本オブジェクト タイプ。
メトリック キー	メトリックの参照キーとして使用されるテキスト文字列。メトリック キーを使用して、システム統計がメトリックからどのように生成されるかについての追加情報を見つけることができます。
演算子	現在の値としきい値の比較に使用する演算子であり、症状をトリガーします。
しきい値	症状のトリガーのしきい値。しきい値と演算子の組み合わせにより、症状がトリガーされるポイントが設定されます。
定義条件	症状がユーザーによって作成されたものか、ソリューション アダプタを使用して提供されたものかを示します。

メトリック症状とスーパーメトリック症状の定義ワークスペース

収集された運用値やパフォーマンス値に基づいてメトリックおよびスーパー メトリック症状を定義して、1 つ以上の症状を作成し、vRealize Operations Manager のアラート定義に追加できるようにします。症状がトリガーされると、その症状を使用してアラートの評価やその他の問題のトラブルシューティングを実行します。

メトリックの症状の定義の仕組み

メトリックまたはスーパーメトリック症状は、メトリックが構成済みの静的または動的しきい値と比較され、症状条件が true に評価されるとトリガーされます。静的しきい値を使用している症状では、構成済みの演算子と指定された数値に基づいてメトリックが比較されます。動的しきい値を使用している症状では、現在値と計算済みの傾向値を比較して、現在値が、上回っている、下回っている、または全般的に異常かどうかに基づいてメトリックが比較されます。

メトリックの症状の定義ワークスペースを確認できる場所

メトリックまたはスーパーメトリックに基づいて症状を定義するには、左側のペインで [内容] アイコンをクリックし、[症状の定義] - [メトリック / スーパーメトリックの症状の定義] を選択します。[追加] をクリックし、ワークスペースでメトリックベースの症状を定義します。

アラートの定義のワークスペースでアラートを定義する通りに症状を定義することもできます。

表 4-50. メトリックおよびスーパーメトリックの症状ワークスペース オプション

オプション	説明
Metric Explorer	症状が作成されるメトリックまたはスーパーメトリックの場所の特定に使用するコンポーネント。
基本オブジェクト タイプ	症状が評価される対象のオブジェクト。 指定のオブジェクト タイプに基づき、オブジェクト タイプに該当するメトリックのみが使用可能なメトリックのリストに表示されます。
リソースの選択	共通のメトリックまたはスーパー メトリックのリストにメトリックまたはスーパー メトリックが含まれていない場合は、選択した基本オブジェクト タイプに基づいて、[リソースの選択] を使用し、選択したオブジェクトのメトリックまたはスーパー メトリックを調べます。これにより、症状を作成するために使用する必要があるプロパティを見つけることができます。特定のオブジェクトのメトリックまたはスーパー メトリックを選択した場合でも、環境内でそのメトリックまたはスーパー メトリックを持つすべてのオブジェクトに症状定義を適用できます。
検索	単語検索を使用して、リストに表示される項目の数を限定します。
メトリック リスト	選択した基本オブジェクト タイプのメトリックのリスト。
症状の定義ワークスペース	メトリックを右側のペインをクリックしてドラッグします。 固定または動的しきい値に基づいて症状を定義できます。
しきい値	<p>症状が静的か動的かを決定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 固定しきい値は、症状を true としてトリガーする固定値です。症状ごとに 1 つのしきい値を構成できます。複数のしきい値に対して複数の症状を作成することもできます。 <p>たとえば、CPU 使用量が 90% を超えるという症状と、CPU 使用量が 40% 未満という別の症状を構成します。それぞれ個別の症状であり、個別にアラート定義に追加できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 動的しきい値は、vRealize Operations Manager の傾向データに基づいており、トリガー値は解析によって計算されます。メトリックまたはスーパー メトリックの現在値が傾向の範囲に収まらない場合に症状がトリガーされます。

表 4-50. メトリックおよびスーパーメトリックの症状ワークスペース オプション （続き）

オプション	説明
静的しきい値の構成オプション	<p>静的しきい値を選択した場合は、静的なしきい値タイプのオプションを構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 演算子。症状を評価する際に、[値] テキスト ボックスに指定した値とメトリックまたはスーパー メトリックの現在値を比較する方法を決定します。 ■ 値。しきい値をトリガーしている値。 ■ 重要度レベル。症状がトリガーされるとき症状の重要度。 ■ 症状の名前。症状の名前です。この名前は、アラート定義を構成するときに症状のリストに表示されます。また、アラートが生成されたときや、トリガーされた症状を表示するときにこの名前が表示されます。 ■ 待機サイクル。ここで指定された数の収集サイクルの期間、トリガー条件は true を維持し、この期間が過ぎると症状がトリガーされます。デフォルト値は 1 です。これは、条件が true になったときに、同じ収集サイクルで症状がトリガーされることを意味します。 ■ キャンセル サイクル。ここで指定された数の収集サイクルの期間、トリガー条件は false になり、この期間が過ぎると症状はキャンセルされます。デフォルト値は 1 です。これは、条件が false になったときに、同じサイクルで症状がキャンセルされることを意味します。
動的しきい値の構成オプション	<p>動的しきい値を選択した場合は、動的なしきい値タイプのオプションを構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ しきい値の傾向。次のオプションに基づく、現在の値と傾向の範囲の関係です。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 超過。現在の値が傾向の範囲を超過する場合、症状がトリガーされます。 ■ 未満。現在の値が傾向の範囲未満である場合、症状がトリガーされます。 ■ 異常。現在の値が傾向の範囲を超過しているか、傾向の範囲未満である場合、症状がトリガーされます。 ■ 重要度レベル。症状がトリガーされるとき症状の重要度。 ■ 症状の名前。症状の名前です。この名前は、アラート定義を構成するときに症状のリストに表示されます。また、アラートが生成されたときや、トリガーされた症状を表示するときにこの名前が表示されます。 ■ 待機サイクル。ここで指定された数の収集サイクルの期間、トリガー条件は true を維持し、この期間が過ぎると症状がトリガーされます。デフォルト値は 1 です。これは、条件が true になったときに、同じ収集サイクルで症状がトリガーされることを意味します。 ■ キャンセル サイクル。ここで指定された数の収集サイクルの期間、トリガー条件は false になり、この期間が過ぎると症状はキャンセルされます。デフォルト値は 1 です。これは、条件が false になったときに、同じサイクルで症状がキャンセルされることを意味します。

プロパティ症状

プロパティ症状は、vRealize Operations Manager が環境のターゲット オブジェクトから収集した構成プロパティに基づいています。

プロパティに基づく症状を定義しておけば、監視対象オブジェクトのプロパティの変更によって環境内のオブジェクトの動作が悪影響を受ける場合に知らせてくれるアラート定義を作成できます。

プロパティの症状の定義

[プロパティ症状の定義] は vRealize Operations Manager 環境のプロパティ ベースの症状の一覧です。 この一覧の情報をを使用して、定義済みプロパティをトリガーする状態を評価し、症状を追加、編集、またはクローン作成するかどうかを判断します。

プロパティ症状を確認できる場所

プロパティに基づく症状を管理するには、左側のペインで [内容] をクリックして、[症状の定義] - [プロパティ症状の定義] を選択します。

アラートの定義のワークスペースでアラートを定義する通りに症状を定義することもできます。

表 4-51. プロパティ症状の定義のオプション

オプション	説明
ツールバー オプション	<p>ツールバー オプションを使用して症状を管理します。[Ctrl] または [Shift] を押しながらかlickすることで、複数の症状を選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 追加。症状の定義を追加します。 ■ 編集。選択した症状の定義を変更します。変更は、この症状を含むアラート定義に影響します。バッジを管理している症状を編集することはできません。 ■ 削除。選択した症状の定義を削除します。アラート定義で使用されているアラートを削除することはできません。症状を削除するには、まず、その症状が使用されているアラート定義から症状を削除する必要があります。バッジを管理している症状を削除することはできません。 ■ クローン作成。選択した症状の定義のコピーを作成します。 ■ エクスポートとインポート。1つの vRealize Operations Manager からファイルを xml としてエクスポートできます。これにより、そのファイルを別のインスタンスにインポートできます。ファイルをインポートするときに競合が発生した場合、既存のファイルをオーバーライドするか、新しいファイルのインポートを中止することができます。
すべてのフィルタ	<p>フィルタと一致する症状にリストを限定します。</p> <p>データ グリッドの列で並べ替えることもできます。</p>
クイック フィルタ (名前)	入力したテキストに基づいてリストを限定します。
アダプタ タイプ	症状が構成済みアダプタ タイプ。
オブジェクト タイプ	症状が定義される対象の基本オブジェクト タイプ。
プロパティ	プロパティの参照キーとして使用されるテキスト文字列。プロパティを使用して、プロパティに関する追加情報を検索できます。
演算子	しきい値と現在の値との比較に使用する演算子。
値	比較時に使用されるプロパティ値であるテキスト文字列。
定義条件	症状がユーザーによって作成されたものか、ソリューション アダプタを使用して提供されたものかを示します。

プロパティの症状の定義ワークスペース

収集された構成プロパティに基づくプロパティ症状を定義して、1 つ以上の症状を vRealize Operations Manager のアラート定義に追加できるようにします。トリガーされた症状に基づいて、アラートを解決したり、他の問題をトラブルシューティングしたりできます。

プロパティの症状の定義の仕組み

プロパティ症状は、定義済みのしきい値と現在のプロパティ値を比較した結果、true に評価されると、トリガーされます。

プロパティの症状の定義ワークスペースの場所

メトリックまたはスーパーメトリックに基づいて症状を定義するには、左側のペインで [内容] アイコンをクリックし、[症状の定義] - [プロパティの症状の定義] を選択します。[追加] をクリックし、ワークスペースでプロパティに基づく症状を定義します。

アラートの定義のワークスペースでアラートを定義する通りに症状を定義することもできます。

表 4-52. プロパティの症状のワークスペースのオプション

オプション	説明
プロパティ セレクタ	症状が作成されるプロパティの場所の特定に使用するコンポーネント。
基本オブジェクト タイプ	症状が評価される対象のオブジェクト。 選択したオブジェクト タイプに基づき、オブジェクト タイプに該当するプロパティのみが使用可能なプロパティのリストに表示されます。
リソースの選択	共通プロパティ リストにプロパティが含まれていない場合は、選択した基本オブジェクト タイプに基づいて、[リソースの選択] を使用し、選択したオブジェクトのプロパティを調べます。これにより、症状を作成するために使用する必要があるプロパティを見つけることができます。特定のオブジェクトのプロパティを選択した場合でも、環境内でそのプロパティを持つすべてのオブジェクトに症状定義を適用できます。
検索	単語検索を使用して、リストに表示される項目の数を限定します。
プロパティ リスト	選択した基本オブジェクト タイプのプロパティのリスト。

表 4-52. プロパティの症状のワークスペースのオプション（続き）

オプション	説明
症状の定義ワークスペース	プロパティを右側のペインにドラッグします。
プロパティ	<p>プロパティは、指定した値と比較される構成済みの値です。単一のプロパティ症状を構成することも、複数の症状を追加することもできます。</p> <p>たとえば、特定のプロパティ（メモリのホット アドなど）が要求値から外れたときにアラートを通知する必要がある場合は、症状を構成し、アラート定義に追加できます。</p> <p>オプションを構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 演算子。症状の定義を評価する際に、[値] テキスト ボックスに指定した値とオブジェクトのプロパティの現在値を比較する方法を決定します。 ■ 値。演算子が評価する値。 ■ 重要度レベル。症状がトリガーされるときに症状の重要度。 ■ 症状の名前。症状の名前です。この名前は、アラート定義を構成するときに症状のリストに表示されます。また、アラートが生成されたときや、トリガーされた症状を表示するときにこの名前が表示されます。 ■ 待機サイクル。ここで指定された数の収集サイクルの期間、トリガー条件は true を維持し、この期間が過ぎると症状がトリガーされます。デフォルト値は 1 です。これは、条件が true になったときに、同じ収集サイクルで症状がトリガーされることを意味します。 ■ キャンセル サイクル。ここで指定された数の収集サイクルの期間、トリガー条件は false になり、この期間が過ぎると症状はキャンセルされます。デフォルト値は 1 です。これは、条件が false になったときに、同じサイクルで症状がキャンセルされることを意味します。

メッセージ イベント症状

メッセージ イベント症状は、vRealize Operations Manager のコンポーネントからメッセージとして受信したイベント、または外部の監視対象システムからそのシステムの REST API を介してメッセージとして受信したイベントに基づいています。メッセージ イベントに基づいて症状を定義し、アラート定義に含めると、それらの症状が使用できるようになります。設定した症状条件が true になると、その症状がトリガーされます。

外部の監視対象システムのアダプタと REST API は、外部ソースからイベントを収集するための受信チャネルです。アダプタと REST サーバはどちらも vRealize Operations Manager システム内で実行されます。外部システムがメッセージを送信し、vRealize Operations Manager がそれらのメッセージを収集します。

サポートされているイベント タイプについてのみ、メッセージ イベント症状を作成できます。次に、サポートされているイベント タイプとイベントの例を示します。

- システム パフォーマンスの低下。このメッセージ イベント タイプは、vRealize Operations Manager API SDK の EVENT_CLASS_SYSTEM および EVENT_SUBCLASS_PERFORM_DEGRADATION タイプとサブタイプに対応しています。
- 変更。VMware アダプタは、仮想マシンの CPU 制限が無制限から 2 GHz に変更されると、変更イベントを送信します。症状を作成することにより、このように構成が変化した結果として発生した CPU 競合の問題を検出できます。このメッセージ イベント タイプは、vRealize Operations Manager API SDK の EVENT_CLASS_CHANGE および EVENT_SUBCLASS_CHANGE タイプとサブタイプに対応しています。

- 環境のダウン。vRealize Operations Manager アダプタは、コレクタ コンポーネントが他のコンポーネントと通信していない場合、環境のダウン イベントを送信します。ユーザーは、内部の健全性の監視に使用する症状を作成できます。このメッセージ イベント タイプは、vRealize Operations Manager API SDK の `EVENT_CLASS_ENVIRONMENT` および `EVENT_SUBCLASS_DOWN` タイプとサブタイプに対応しています。
- 通知。このメッセージ イベント タイプは、vRealize Operations Manager API SDK の `EVENT_CLASS_NOTIFICATION` および `EVENT_SUBCLASS_EXTEVENT` タイプとサブタイプに対応しています。

メッセージ イベントのシンプトムの定義

メッセージ イベント症状の定義は、vRealize Operations Manager 環境に定義されたメッセージ イベント ベースの症状の一覧です。この一覧の情報をを使用して、定義済みメッセージ イベントを評価し、症状を追加、編集、またはクローン作成するかどうかを判断します。

メッセージ イベント症状を確認できる場所

メッセージ イベントに基づく症状を管理するには、左側のペインで [内容] をクリックして、[症状の定義] - [メッセージ イベント症状の定義] を選択します。

アラートの定義のワークスペースでアラートを定義する通りに症状を定義することもできます。

表 4-53. メッセージ イベント症状のオプション

オプション	説明
ツールバー オプション	<p>ツールバー オプションを使用して症状を管理します。[Ctrl] または [Shift] を押しながらかlickすることで、複数の症状を選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 追加。症状の定義を追加します。 ■ 編集。選択した症状の定義を変更します。変更は、この症状を含むアラート定義に影響します。バッジを管理している症状を編集することはできません。 ■ 削除。選択した症状の定義を削除します。アラート定義で使用されているアラートを削除することはできません。症状を削除するには、まず、その症状が使用されているアラート定義から症状を削除する必要があります。バッジを管理している症状を削除することはできません。 ■ クローン作成。選択した症状の定義のコピーを作成します。 ■ エクスポートとインポート。1 つの vRealize Operations Manager からファイルを xml としてエクスポートできます。これにより、そのファイルを別のインスタンスにインポートできます。ファイルをインポートするときに競合が発生した場合、既存のファイルをオーバーライドするか、新しいファイルのインポートを中止することができます。
フィルタ オプション	フィルタと一致する症状にリストを限定します。
症状	症状の分かりやすい名前。
アダプタ タイプ	症状が構成済みアダプタ タイプ。
オブジェクト タイプ	症状が定義される対象の基本オブジェクト タイプ。
イベント タイプ	定義済みのイベント分類タイプ。
演算子	受信イベントからのメッセージと、症状に指定されたイベント メッセージとの比較に使用する演算子。

表 4-53. メッセージ イベント症状のオプション（続き）

オプション	説明
イベント メッセージ	指定された演算子を使用して、受信イベントに含まれるメッセージと比較されるテキスト文字列。
定義条件	症状がユーザーによって作成されたものか、ソリューション アダプタを使用して提供されたものかを示します。

メッセージ イベントの症状の定義ワークスペース

メッセージ イベント症状は、vRealize Operations Manager のコンポーネントから受信したメッセージ イベント、または外部の監視対象システムからそのシステムの REST API を介して受信したメッセージ イベントに基づいています。メッセージ イベント システムを定義して、1 つ以上の症状を作成し、アラート定義に追加できるようにします。

メッセージ イベント症状の定義の仕組み

指定された演算子で比較したとき、受信イベントに含まれるメッセージと症状に含まれるテキスト文字列が一致すると、メッセージ イベント症状がトリガーされます。

メッセージ イベント症状の定義ワークスペースの場所

メッセージ イベントに基づいて症状を定義するには、左側のペインで [内容] アイコンをクリックし、[症状の定義] - [メッセージ イベントの症状の定義] を選択します。[追加] をクリックし、ワークスペースでプロパティに基づく症状を定義します。

アラートの定義のワークスペースでアラートを定義する通りに症状を定義することもできます。

表 4-54. メッセージ イベント症状のワークスペースのオプション

オプション	説明
メッセージ イベント セレクタ	症状の作成に使用するコンポーネント。
基本オブジェクト タイプ	症状が評価される対象のオブジェクト。
イベントのタイプの選択	<p>受信したイベントと照合される受信イベントのタイプを選択します。受信イベントには、次に示すタイプとサブタイプの組み合わせが含まれている必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ システム パフォーマンスの低下。 ■ 変更。 ■ 環境のダウン。 ■ 通知。

表 4-54. メッセージ イベント症状のワークスペースのオプション（続き）

オプション	説明
症状の定義ワークスペース	イベント タイプを右側のペインにドラッグします。
メッセージ イベント	<p>メッセージ イベントのテキスト文字列は、指定された演算子を使用して、受信イベントに含まれるメッセージと比較されます。 単一のメッセージ イベント症状を構成することも、複数の症状を追加することもできます。</p> <p>たとえば、VMware アダプタは、仮想マシンの CPU 制限が無制限から 2 GHz に変更されると、変更イベントを送信します。 症状を作成することにより、このように構成が変化した結果として発生した CPU 競合の問題を検出できます。</p> <p>オプションを構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 演算子。症状定義を評価するとき、[イベント メッセージ] テキストボックスに指定した文字列をイベントに含まれるメッセージと比較する方法を決定します。 ■ イベント メッセージ。演算子が評価する文字列。 ■ 重要度レベル。症状がトリガーされるときに症状の重要度。 ■ 症状の名前。症状の名前です。この名前は、アラート定義を構成するときに症状のリストに表示されます。また、アラートが生成されたときや、トリガーされた症状を表示するときにこの名前が表示されます。 ■ 待機サイクル。ここで指定された数の収集サイクルの期間、トリガー条件は true を維持し、この期間が過ぎると症状がトリガーされます。デフォルト値は 1 です。これは、条件が true になったときに、同じ収集サイクルで症状がトリガーされることを意味します。 ■ キャンセル サイクル。ここで指定された数の収集サイクルの期間、トリガー条件は false になり、この期間が過ぎると症状はキャンセルされます。デフォルト値は 1 です。これは、条件が false になったときに、同じサイクルで症状がキャンセルされることを意味します。

障害症状

障害症状は、監視対象のシステムによって公開されたイベントに基づいています。vRealize Operations Manager は、これらのイベントのサブセットの相関関係を作成し、障害として配信します。障害（症状）の目的は、環境内のオブジェクトの可用性を低下させるような監視対象システムのイベントを知らせることです。障害に基づいて症状を定義し、アラート定義に含めると、それらの症状が使用できるようになります。設定した症状条件が true になると、その症状がトリガーされます。

サポートされている公開済み障害について、障害症状を作成できます。オブジェクト タイプによって、複数の障害が定義されておりその中から選択できる場合もあれば、障害がまったく定義されていない場合もあります。

アダプタによって、あるオブジェクト タイプの障害定義が公開されている場合は、症状を定義する際に、その障害の 1 つ以上の障害イベントを選択できます。選択したいずれかのイベントによって障害がアクティブになると、症状がトリガーされます。障害イベントを選択しない場合は、任意の障害イベントによって障害がアクティブになると、症状がトリガーされます。

障害のシンプトムの定義

障害症状の定義は、vRealize Operations Manager 環境に定義された障害ベースの症状の一覧です。この一覧の情報をを使用して、定義済み障害メッセージ イベントを評価し、症状を追加、編集、またはクローン作成するかどうかを判断します。

障害症状を確認できる場所

障害メッセージ イベントに基づく症状を管理するには、左側のペインで [内容] をクリックして、[症状の定義] - [障害の症状の定義] を選択します。

アラートの定義のワークスペースでアラートを定義する通りに症状を定義することもできます。

表 4-55. 障害症状の定義のオプション

オプション	説明
ツールバー オプション	<p>ツールバー オプションを使用して症状を管理します。[Ctrl] または [Shift] を押しながらかlickすることで、複数の症状を選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 追加。症状の定義を追加します。 ■ 編集。選択した症状の定義を変更します。変更は、この症状を含むアラート定義に影響します。バッジを管理している症状を編集することはできません。 ■ 削除。選択した症状の定義を削除します。アラート定義で使用されているアラートを削除することはできません。症状を削除するには、まず、その症状が使用されているアラート定義から症状を削除する必要があります。バッジを管理している症状を削除することはできません。 ■ クローン作成。選択した症状の定義のコピーを作成します。 ■ エクスポートとインポート。1 つの vRealize Operations Manager からファイルを xml としてエクスポートできます。これにより、そのファイルを別のインスタンスにインポートできます。ファイルをインポートするときに競合が発生した場合、既存のファイルをオーバーライドするか、新しいファイルのインポートを中止することができます。
フィルタ オプション	フィルタと一致する症状にリストを限定します。
症状	症状の分かりやすい名前。
アダプタ タイプ	症状が構成済みアダプタ タイプ。
オブジェクト タイプ	症状が定義される対象の基本オブジェクト タイプ。
障害	リソース タイプに基づいて選択された障害。
定義条件	症状がユーザーによって作成されたものか、ソリューション アダプタを使用して提供されたものかを示します。

障害の症状の定義ワークスペース

監視対象システムによって公開されたイベントに基づく障害症状を定義して、1 つ以上の症状をアラート定義に追加できるようにします。トリガーされた症状に基づいて、アラートを解決したり、vRealize Operations Manager の他の問題をトラブルシューティングしたりできます。

障害症状の定義の仕組み

障害症状は、症状定義で選択したいずれかの障害イベントが発生したため障害が基本オブジェクトでアクティブになるとトリガーされます。

障害症状の定義ワークスペースの場所

障害メッセージ イベントに基づいて症状を定義するには、左側のペインで [内容] アイコンをクリックし、[症状の定義] - [障害の症状の定義] を選択します。[追加] をクリックし、ワークスペースでプロパティに基づく症状を定義します。

アラートの定義のワークスペースでアラートを定義する通りに症状を定義することもできます。

表 4-56. 障害の症状ワークスペースのオプション

オプション	説明
障害セレクト	症状の作成に使用するコンポーネント。
基本オブジェクト タイプ	症状が評価される対象のオブジェクト。
障害の定義	<p>選択した基本オブジェクト タイプの障害定義を選択します。</p> <p>オブジェクト タイプによって、障害定義がない場合もあれば、複数の定義がある場合もあります。</p>
症状の定義ワークスペース	障害定義を右側のペインにドラッグします。
障害症状の定義	<p>障害イベントは、監視対象システムからの公開済みイベントです。単一の障害イベント症状を構成することも、複数の症状を追加することもできます。</p> <p>たとえば、基本オブジェクトがホストで、未知のタイプの障害定義としてハードウェア センサー障害をドラッグした場合は、障害を示す 2 つのテキスト文字列のうち 1 つを選択します。</p> <p>オプションを構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 障害イベント。障害を有効化する 1 つ以上の障害イベントを選択します。文字列を選択しない場合は、指定されたいずれかの文字列が評価されます。 ■ 重要度レベル。症状がトリガーされるときに症状の重要度。 ■ 症状の名前。症状の名前です。この名前は、アラート定義を構成するときに症状のリストに表示されます。また、アラートが生成されたときや、トリガーされた症状を表示するときにこの名前が表示されます。 ■ 待機サイクル。ここで指定された数の収集サイクルの期間、トリガー条件は true を維持し、この期間が過ぎると症状がトリガーされます。デフォルト値は 1 です。これは、条件が true になったときに、同じ収集サイクルで症状がトリガーされることを意味します。 ■ キャンセル サイクル。ここで指定された数の収集サイクルの期間、トリガー条件は false になり、この期間が過ぎると症状はキャンセルされます。デフォルト値は 1 です。これは、条件が false になったときに、同じサイクルで症状がキャンセルされることを意味します。

メトリック イベント症状

メトリック イベント症状は、選択したメトリックが指定の方法でしきい値に違反している監視対象システムから伝達されたイベントに基づいています。外部システムは、vRealize Operations Manager ではなく、しきい値を管理します。

メトリック イベント症状は、外部の監視対象システムから選択したメトリックについて報告された条件に基づいています。これは、vRealize Operations Manager がアクティブに監視しているしきい値に基づいているメトリック症状と対照的です。

メトリック イベントしきい値は、受信メトリック イベントに指定されたタイプとサブタイプの組み合わせとして表現されます。このしきい値と、メトリックと監視対象システムに設定されたしきい値を比較したとき、メトリックがしきい値を上回っている、下回っている、両者が等しい、等しくないのいずれに該当するのかが判定されます。

- しきい値を超過。vRealize Operations Manager API SDK に定義されているタイプ / サブタイプ定数 `EVENT_CLASS_HT` と `EVENT_SUBCLASS_ABOVE` に対応します。

- しきい値未満。vRealize Operations Manager API SDK に定義されているタイプ / サブタイプ定数 `EVENT_CLASS_HT` と `EVENT_SUBCLASS_BELOW` に対応します。
- しきい値と等しい。vRealize Operations Manager API SDK に定義されているタイプ / サブタイプ定数 `EVENT_CLASS_HT` と `EVENT_SUBCLASS_EQUAL` に対応します。
- しきい値と等しくない。vRealize Operations Manager API SDK に定義されているタイプ / サブタイプ定数 `EVENT_CLASS_HT` と `EVENT_SUBCLASS_NOT_EQUAL` に対応します。

メトリック イベントのシンプトムの定義

メトリック イベントの症状の定義とは、vRealize Operations Manager 環境に定義されたメトリック イベントベースの症状の一覧です。この一覧の情報を使用して、定義済みしきい値をトリガーするメトリック イベントの状態を評価し、症状を追加、編集、またはクローン作成するかどうかを判断します。

メトリック イベント症状を確認できる場所

メトリック イベントに基づく症状を管理するには、左側のペインで [内容] をクリックして、[症状の定義] - [メトリック イベントの症状の定義] を選択します。

アラートの定義のワークスペースでアラートを定義する通りに症状を定義することもできます。

表 4-57. メトリック イベントの症状の定義のオプション

オプション	説明
ツールバー オプション	<p>ツールバー オプションを使用して症状を管理します。[Ctrl] または [Shift] を押しながらかクリックすることで、複数の症状を選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 追加。症状の定義を追加します。 ■ 編集。選択した症状の定義を変更します。変更は、この症状を含むアラート定義に影響します。バッジを管理している症状を編集することはできません。 ■ 削除。選択した症状の定義を削除します。アラート定義で使用されているアラートを削除することはできません。症状を削除するには、まず、その症状が使用されているアラート定義から症状を削除する必要があります。バッジを管理している症状を削除することはできません。 ■ クローン作成。選択した症状の定義のコピーを作成します。 ■ エクスポートとインポート。1 つの vRealize Operations Manager からファイルを xml としてエクスポートできます。これにより、そのファイルを別のインスタンスにインポートできます。ファイルをインポートするときに競合が発生した場合、既存のファイルをオーバーライドするか、新しいファイルのインポートを中止することができます。
フィルタ オプション	フィルタと一致する症状にリストを限定します。
症状	症状の分かりやすい名前。
アダプタ タイプ	症状が構成済みアダプタ タイプ。
オブジェクト タイプ	症状が定義される対象の基本オブジェクト タイプ。
イベント メトリック	リソース タイプに基づいて選択されたイベント メトリック。

表 4-57. メトリック イベントの症状の定義のオプション（続き）

オプション	説明
イベント タイプ	メトリックが監視対象システムに設定されたしきい値を上回っている、下回っている、両者が等しい、等しくないのいずれに該当するのかを指定します。
定義条件	症状がユーザーによって作成されたものか、ソリューション アダプタを使用して提供されたものかを示します。

メトリック イベントの症状の定義ワークスペース

監視対象システムから報告されたメトリックしきい値違反に基づいてメトリック イベント症状を定義して、1 つ以上の症状を作成し、vRealize Operations Manager のアラート定義に追加できるようにします。

メトリック イベント症状の定義の仕組み

メトリック イベント症状は、vRealize Operations Manager が、症状に定義されたメトリックとイベント タイプを持つメトリック イベントを受信するとトリガーされます。 イベント タイプには、メトリックと監視対象システムに設定されたしきい値を比較したとき、メトリックがしきい値を上回っているのか、下回っているのか、両者が等しいのか、等しくないのかが指定されます。

メトリック イベントの症状の定義ワークスペースの場所

メトリック イベントに基づいて症状を定義するには、左側のペインで [内容] アイコンをクリックし、[症状の定義] - [メトリック イベントの症状の定義]を選択します。 [追加] をクリックし、ワークスペースでプロパティに基づく症状を定義します。

アラートの定義のワークスペースでアラートを定義する通りに症状を定義することもできます。

表 4-58. メトリック イベントの症状ワークスペースのオプション

オプション	説明
Metric Explorer	症状の作成に使用するコンポーネント。
基本オブジェクト タイプ	症状が評価される対象のオブジェクト。 指定のオブジェクト タイプに基づき、オブジェクト タイプに該当するメトリックのみが使用可能なメトリックのリストに表示されます。
リソースの選択	共通プロパティ リストにプロパティが含まれていない場合は、選択した基本オブジェクト タイプに基づいて、[リソースの選択] を使用し、選択したオブジェクトのプロパティを調べます。これにより、症状を作成するために使用する必要があるプロパティを見つけることができます。特定のオブジェクトのプロパティを選択した場合でも、環境内でそのプロパティを持つすべてのオブジェクトに症状定義を適用できます。
検索	単語検索を使用して、リストに表示される項目の数を限定します。
メトリック イベント リスト	選択した基本オブジェクト タイプのメトリック イベントのリスト。

表 4-58. メトリック イベントの症状ワークスペースのオプション（続き）

オプション	説明
症状の定義ワークスペース	メトリックを右側のペインにクリックしてドラッグします。
メトリック イベント	<p>単一のしきい値を構成することも、複数のしきい値を追加することもできます。</p> <p>たとえば、仮想マシンの CPU 使用量が監視対象システムに定義されたしきい値を上回ったとき、メトリック イベントがシステムのしきい値を上回る症状を構成します。</p> <p>オプションを構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ イベント タイプ。メトリックが監視対象システムのしきい値を上回っている、下回っている、両者が等しい、等しくないのいずれかを選択します。 ■ 重要度レベル。症状がトリガーされるときに症状の重要度。 ■ 症状の名前。症状の名前です。この名前は、アラート定義を構成するときに症状のリストに表示されます。また、アラートが生成されたときや、トリガーされた症状を表示するときにこの名前が表示されます。 ■ 待機サイクル。ここで指定された数の収集サイクルの期間、トリガー条件は true を維持し、この期間が過ぎると症状がトリガーされます。デフォルト値は 1 です。これは、条件が true になったときに、同じ収集サイクルで症状がトリガーされることを意味します。 ■ キャンセル サイクル。ここで指定された数の収集サイクルの期間、トリガー条件は false になり、この期間が過ぎると症状はキャンセルされます。デフォルト値は 1 です。これは、条件が false になったときに、同じサイクルで症状がキャンセルされることを意味します。

vRealize Operations Manager アラートのネガティブなシンプトムについて

アラートシンプトムは環境における問題を示す状態です。アラートを定義するときには、環境で発生したときにアラートを生成するシンプトムを含めます。ネガティブなシンプトムは、シンプトムの状態の欠如に基づきます。シンプトムが発覚していない場合に、シンプトムがトリガされます。

アラート定義でシンプトムの欠如を使用するには、シンプトムセットでそのシンプトムを取り消します。

すべての定義済みシンプトムには構成された重要度があります。ただし、アラート定義でシンプトムを取り消している場合、アラートの生成時にシンプトムには関連付けられた重要度がありません。

すべてのシンプトムの定義には構成された重要度があります。条件が真であるためにシンプトムがトリガされる場合、シンプトムの重要度は、構成された重要度と同じになります。ただし、アラート定義でシンプトムを取り消した場合、および取り消しが真の場合、シンプトムに重要度は関連付けられません。

ネガティブなシンプトムがトリガされ、アラートが生成される場合、アラートの重要度に対する影響はアラート定義の構成方法によって異なります。

生成されたアラートに対するネガティブなシンプトムの影響の例を次の表に示します。

表 4-59. 生成されたアラートの重要度に対するネガティブなシンプトムの影響

アラートの定義の重要度	ネガティブなシンプトムの構成された重要度	標準のシンプトムの構成された重要度	トリガされたアラートの重要度
警告	1つのクリティカルなシンプトム	1つの緊急なシンプトム	警告。アラートの重要度は、定義したアラートの重要度に基づきます。
シンプトム・ベース	1つのクリティカルなシンプトム	1つの警告のシンプトム	警告。ネガティブなシンプトムには関連付けられた重要度がなく、生成されたアラートの重要度は標準のシンプトムの重要度によって決定します。
シンプトム・ベース	1つのクリティカルなシンプトム	標準のシンプトムを含まない	情報。アラートには重要度があることが必須である一方で、ネガティブなアラートには関連付けられた重要度がないため、生成されたアラートは最も低い重要度レベルである情報の重要度になります。

アラート定義の推奨事項の定義

推奨事項は、アラートの対処を担当するユーザーに対する指示です。推奨事項を vRealize Operations Manager のアラートに追加することにより、ユーザーは、必要なレベルのパフォーマンスで、使用環境内でオブジェクトを保持することができます。

推奨事項により、ネットワーク エンジニアまたは仮想インフラストラクチャ管理者に対して、アラートを解決するための情報を提供します。

ユーザーの知識レベルに応じて情報量を調整し、以下のオプションを任意に組み合わせて、情報に含めることができます。

- 一行の指示。
- ターゲット オブジェクトでのアラートを解決するための手順。
- Web サイト、ランブック、wiki、またはその他のソースへのハイパーリンク。
- ターゲット オブジェクトでの変更を行うアクション。

アラートを定義するときには、できるだけ多くの関連アクションの推奨事項を含めてください。複数の推奨事項が存在する場合は、優先順位に従って配列し、影響が最小で最大限の効果が得られるソリューションがリストの最初に表示されるようにします。アクション推奨事項が存在しない場合は、テキスト推奨事項を追加します。アラートを修正するために管理者が行うべき事柄について説明する場合は、可能な限り正確なものとしてください。

推奨

推奨は、vRealize Operations Manager で生成されたアラートに対する有望なソリューションです。アラートを解決するための環境の管理者向けの指示、または環境の管理者が実行できるアクションが含まれた推奨のライブラリを作成できます。

推奨を確認できる場所

推奨事項を定義するには、左側のペインで、[内容] - [推奨] を選択します。

アラート定義を作成するときに推奨を定義することもできます。

表 4-60. 推奨の概要オプション

オプション	説明
ツールバー オプション	<p>ツールバー オプションを使用して推奨を管理します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 追加。推奨を追加します。 ■ 編集。選択した推奨を変更します。 ■ 削除。選択した推奨を削除します。 ■ クローン作成。選択した推奨のコピーを作成することで、現在の推奨を使用する新しい推奨を作成できます。 ■ エクスポートとインポート。1 つの vRealize Operations Manager からファイルを XML としてエクスポートできます。これにより、そのファイルを別のインスタンスにインポートできます。ファイルをインポートするときに競合が発生した場合、既存のファイルをオーバーライドするか、新しいファイルのインポートを中止することができます。
フィルタ オプション	フィルタと一致する推奨にリストを制限します。
説明	推奨のテキスト。アラートが生成されたときと、推奨が提示されたときに表示されます。
操作	推奨にアクションの実行が含まれる場合、そのアクションの名前。

推奨事項ワークスペース

vRealize Operations Manager で生成されるアラートに対するソリューションとして、推奨事項を作成します。推奨事項の目的は、ネットワーク運用エンジニアと仮想インフラストラクチャ管理者が、可能な限り迅速かつ的確にアラートに対応できるようにすることです。

推奨事項ワークスペースの仕組み

推奨事項は、ユーザーに対する指示、またはアラートを解決するためにユーザーが実行することのできるアクションです。指示には、有用な Web サイトやローカル ランブックへのリンク、テキスト形式の指示、または vRealize Operations Manager から開始可能なアクションなどがあります。

推奨事項ワークスペースを確認できる場所

推奨事項を定義するには、左側のペインで、[内容] - [推奨] を選択します。[追加] をクリックして推奨事項を作成します。

また、アラートを定義するときに推奨を定義することもできます。

表 4-61. 推奨の定義のオプション

オプション	説明
ハイパーリンクの作成	<p>テキスト ボックスにテキストを入力し、そのテキストを選択し、ボタンをクリックして、Web サイトまたはローカル wiki ページへのハイパーリンクにします。</p> <p>ハイパーリンクを変更することはできません。リンクを変更するには、ハイパーリンクが設定された語を削除して新しいリンクを作成します。</p>
テキストの入力	<p>トリガーされたアラートを解決するために行う必要があることの説明を入力します。</p> <p>説明には、アラートを解決するためにユーザーが行う必要のある手順や、仮想インフラストラクチャの管理者に知らせるための指示を含めることができます。</p> <p>これはテキスト フィールドです。</p>
操作	<p>トリガーされた症状または生成されたアラートを解決するための方法としてアクションを追加することができます。アクションがすでに vRealize Operations Manager で構成されている必要があります。</p> <p>推奨事項を保存できるようにするには、まずアクションについての説明テキストをテキスト ボックスに入力する必要があります。</p>

データストアの使用されていないスナップショットの削除エクスプレス アクションと 仮想マシンの使用されていないスナップショットの削除エクスプレス アクションが表示されますが、これらは最初推奨事項がこのアクションと関連付けられているアラートからユーザー インターフェイスでのみ実行できます。これらのアクションの実行には REST API を使用できます。

パワーオフ可の仮想マシンのメモリの設定、パワーオフ可の仮想マシンの CPU 数の設定、および パワーオフ可の仮想マシンの CPU 数とメモリの設定 の各アクションも表示されませんが、アラートの推奨事項においては表示されます。これらのアクションは、パワーオフ可 フラグが真に設定されているアクションを自動化するために使用します。

アラートの定義

アラートの定義は、環境内の問題がある領域を特定するために作成される症状と推奨の組み合わせで、それらの領域についてのアラートを生成します。ユーザーは、それらの領域に対して、アラートへの対応を行うことができます。アラート定義を使用して、vRealize Operations Manager のアラート ライブラリを管理し、定義の追加や変更を行うことができます。

アラート定義を確認できる場所

アラート定義を管理するには、左側のペインで [内容] をクリックし、[アラート定義] をクリックします。

表 4-62. アラート定義のオプション

オプション	説明
ツールバー オプション	<p>ツールバーのオプションを使用して、アラートの定義を管理します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 追加。アラートの定義を追加します。 ■ 編集。選択した定義を変更します。 ■ 削除。選択した定義を削除します。 ■ クローン作成。選択した定義のコピーを作成し、必要に応じてカスタマイズします。 ■ エクスポートまたはインポート。選択した定義をエクスポートして、別の vRealize Operations Manager インスタンスにインポートすることができるようにします。
フィルタリング オプション	<p>アラートのリストを、作成するフィルタと一致するアラートに限定します。</p> <p>データ グリッドの列で並べ替えることもできます。</p>
名前	アラート定義の名前は、シンプトムがトリガーされた時に表示されるアラートの名前でもあります。
アダプタ タイプ	アダプタは、選択した基本オブジェクト タイプを管理します。
オブジェクト タイプ	アラートが定義される対象の基本オブジェクト タイプ。
アラート タイプ	<p>アラートの生成時にアラートを分類するのに使用されるメタデータ。</p> <p>この値は、ワークスペースの [アラートの影響] ページで定義します。</p>
アラート サブタイプ	<p>アラート タイプのサブカテゴリであり、アラートの生成時に分類に使用されるメタデータ。</p> <p>この値は、ワークスペースの [アラートの影響] ページで定義します。</p>
重要度	<p>アラートがトリガーされた場合の重要度。重要度は、次の値を含みます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ シンプトム。アラートは、シンプトムベースの重要度を表示するように構成されます。 ■ クリティカル ■ 緊急 ■ 警告 ■ 情報
影響	アラートは、健全性、リスク、または効率バッジに影響するように構成されます。
定義基準	アラート定義の追加者を表示します。アラートはアダプタ、ユーザー、または vRealize Operations Manager システムによって追加される可能性があります。

アラートの定義のワークスペース

アラート定義プロセスには、アラートをトリガーする症状およびアラートの解決に役立つ推奨事項の追加が含まれます。このプロセスで作成するアラート定義は vRealize Operations Manager のアラート定義の概要リストに保存され、構成したポリシーに基づいて環境内でアクティブに評価されます。

アラートの定義ワークスペースの動作

このワークスペースを使用して、アラート定義を作成します。定義、名前、説明、基本オブジェクト、およびアラートの影響を作成します。アラート定義の一部として、症状および推奨事項を作成することも、既存の症状および推奨事項を再利用することもできます。新しい症状および推奨事項を作成する場合は、これらを定義に追加します。これらは、将来使用するために症状および推奨事項のコンテンツ ライブラリに追加されます。

アラートの定義を作成する場所

アラート定義の作成または編集を行うには、左側のペインで[内容] - [アラートの定義]を選択します。[アラートの定義] ツールバーで、プラス記号をクリックして定義を追加するか、鉛筆をクリックして選択した定義を編集します。

アラートの定義ワークスペースのオプション

アラートの定義は名前と説明によって識別されます。定義は、そのアラートについて監視されるターゲット オブジェクト タイプ、アラートが影響を与えるバッジ、アラートをトリガーする症状セット、およびアラートを解決する可能性がある推奨事項で構成されます。

■ アラートの定義ワークスペースの名前および説明

アラート定義の名前と説明。これは、アラートがどのような場合に vRealize Operations Manager で生成されるのかを識別する情報です。

■ アラートの定義ワークスペースの基本オブジェクト タイプ

基本オブジェクト タイプは、症状の条件が真と判断された場合に vRealize Operations Manager でアラートが生成されるオブジェクト タイプです。

■ アラートの定義ワークスペースのアラートの影響

アラートの影響は、アラートの緊急度、アラートが影響するバッジ、ご使用の環境の機能に対するクリティカルなアラート、およびユーザーまたはシステムが生成されたアラートを処理する際のアラートの分類方法を指定します。

■ アラートの定義ワークスペースの [シンプトムの定義の追加]

[シンプトムの定義の追加] オプションは、アラート定義に対して既存のシンプトムを追加したり、新規のシンプトムを作成したりするためのメカニズムです。アラートの定義に対して必要なシンプトムが存在しない場合は、このワークスペースで作成することができます。

■ アラートの定義ワークスペースの推奨事項の追加

推奨事項とは、生成されたアラートをユーザーが解決できるように、ユーザーに提供する指示のことです。推奨事項にはアクションを含めることができます。

アラートの定義ワークスペースの名前および説明

アラート定義の名前と説明。これは、アラートがどのような場合に vRealize Operations Manager で生成されるのかを識別する情報です。

名前と説明を定義する場所

アラート定義の作成または編集を行うには、左側のペインで[内容] - [アラートの定義]を選択します。[アラートの定義] ツールバーで、プラス記号をクリックして定義を追加するか、鉛筆をクリックして選択した定義を編集します。ワークスペースの左側で、[名前と説明] をクリックします。

表 4-63. アラートの定義名および説明のオプション

オプション	説明
名前	アラートの生成時に表示されるアラートの名前。
説明	アラートの生成時に表示されるアラートの説明。ユーザーに対してわかりやすい説明を指定します。

アラートの定義ワークスペースの基本オブジェクト タイプ

基本オブジェクト タイプは、症状の条件が真と判断された場合に vRealize Operations Manager でアラートが生成されるオブジェクト タイプです。

基本オブジェクト タイプを定義する場所

アラート定義の作成または編集を行うには、左側のペインで[内容] - [アラートの定義]を選択します。[アラートの定義] ツールバーで、プラス記号をクリックして定義を追加するか、鉛筆をクリックして選択した定義を編集します。ワークスペースの左側で、[基本オブジェクト タイプ] をクリックします。

表 4-64. [基本オブジェクト タイプ] オプション

オプション	説明
基本オブジェクト タイプ	アラート定義の評価とアラート生成の対象となるオブジェクト タイプ。 このドロップダウン メニューには、環境内のすべてのオブジェクト タイプが含まれます。アラート定義は、1つのオブジェクト タイプに基づいて定義することができます。

アラートの定義ワークスペースのアラートの影響

アラートの影響は、アラートの緊急度、アラートが影響するバッジ、ご使用の環境の機能に対するクリティカルなアラート、およびユーザーまたはシステムが生成されたアラートを処理する際のアラートの分類方法を指定します。

アラートの影響を定義する場所

アラート定義の作成または編集を行うには、左側のペインで[内容] - [アラートの定義]を選択します。[アラートの定義] ツールバーで、プラス記号をクリックして定義を追加するか、鉛筆をクリックして選択した定義を編集します。ワークスペースの左側で、[アラートの影響] をクリックします。

表 4-65. アラートの影響のオプション

オプション	説明
影響	<p>アラートが生成された場合に影響を受けるバッジを選択します。</p> <p>アラートの緊急度に基づいてバッジを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 健全性。アラートにはすぐに対処する必要があります。 ■ リスク。アラートにはトリガー後すぐ、数日、または数週間以内に対応する必要があります。 ■ 効率。環境を最適化するために、長期的な視点でアラートに対処する必要があります。
重要度	<p>アラート通知の一部として伝達されるアラートの重大度。</p> <p>次のいずれかの値を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 情報。情報提供のみを目的としています。バッジの色には影響しません。 ■ 警告。最低レベル。黄色で表示される。 ■ 緊急。中レベル。オレンジ色で表示される。 ■ クリティカル。最高レベル。赤色で表示される。 ■ シンptomベース。アラートの重大度に加えて、各シンptomには定義済みの重大度が含まれています。アラートの重大度は、トリガーされたすべてのシンptomのうち、最もクリティカルなものに基づいて決定されます。色は重大度に応じて動的に決まります。シンptomを取り消した場合、無効にされたシンptomは、シンptomベースのアラートの重大度に関与しません。
アラート タイプとアラート サブタイプ	<p>アラートのタイプとサブタイプを選択します。</p> <p>この値は、生成されたアラートの分類に使用されるメタデータです。この情報はアラート（アラート通知を含む）に伝達されます。</p> <p>タイプおよびサブタイプの情報を使用して、アラートを組織内の適切な人員または部門に経路指定することができます。</p>
待機サイクル	<p>アラート定義に含まれるシンptomが、このコレクション サイクルの回数に達するまでトリガーされ続けている場合、アラートが生成されます。</p> <p>1 以上の値を指定する必要があります。</p> <p>この設定により、お使いの環境の感度を調整できます。アラート定義の待機サイクルは、シンptomの定義の待機サイクルに追加されます。多くの定義では、感度をシンptomレベルと同じレベルに構成し、アラート定義の待機サイクルは 1 に構成します。この構成により、目的のシンptomの感度レベルですべてのシンptomがトリガーされると、アラートがただちにトリガーされるようになります。</p>
キャンセル サイクル	<p>この収集サイクル数分の期間のシンptomがキャンセルされた後、アラートがキャンセルされます。</p> <p>1 以上の値を指定する必要があります。</p> <p>この設定により、お使いの環境の感度を調整できます。アラート定義のキャンセル サイクルは、シンptomの定義のキャンセル サイクルに追加されます。多くの定義では、感度をシンptomレベルと同じレベルに構成し、アラート定義の待機サイクルは 1 に構成します。この構成により、目的のシンptomのキャンセル サイクルの後にすべてのシンptomの条件が解消されると、アラートがただちにキャンセルされるようになります。</p>

アラートの定義ワークスペースの [シンプトムの定義の追加]

[シンプトムの定義の追加] オプションは、アラート定義に対して既存のシンプトムを追加したり、新規のシンプトムを作成したりするためのメカニズムです。アラートの定義に対して必要なシンプトムが存在しない場合は、このワークスペースで作成することができます。

[シンプトムの定義の追加] オプションの機能

基本オブジェクト タイプに対して定義されたシンプトムを選択および追加して、関連するオブジェクト タイプにシンプトムを追加することができます。1 つ以上のシンプトムを追加するときには、シンプトム式を作成します。このシンプトム式が真であると評価された場合は、アラートが生成されます。

シンプトムの定義を定義できる場所

アラート定義の作成または編集を行うには、左側のペインで[内容] - [アラートの定義]を選択します。[アラートの定義] ツールバーで、プラス記号をクリックして定義を追加するか、鉛筆をクリックして選択した定義を編集します。ワークスペースの左側で [シンプトムの定義の追加] をクリックします。

[シンプトムの定義の追加] オプション

シンプトムの定義を追加するには、左側のペインを使用して、シンプトムを選択します。右側のワークスペースを使用して、単一または複数のシンプトムが真に設定されるポイントを定義します。このワークスペースを使用して、アラートが生成されるためには、すべて、またはいずれかのシンプトムまたはシンプトムのセットが真でなければならぬかどうかを指定します。

表 4-66. [症状の追加] の選択オプション

オプション	説明
定義対象	<p>症状が評価するオブジェクト。</p> <p>アラートの定義を作成する場合に、オブジェクトの関係階層に基づいて、ベース オブジェクト タイプおよび関連オブジェクト タイプのシンプトムを選択するか、定義することができます。以下の関係は、アラート定義の基本オブジェクト タイプと関連するオブジェクト タイプです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 自己。アラート定義の基本オブジェクト タイプ。例：ホスト システム。 ■ 子孫。基本オブジェクト タイプより任意の下位レベルにあるオブジェクト タイプ（直接または間接の子オブジェクト）。たとえば、仮想マシンはホスト システムの子孫です。 ■ 先祖。基本オブジェクト タイプより 1 つ以上の上位レベルにあるオブジェクト タイプ（直接または間接の親）。たとえば、データセンターおよび vCenter Server はホスト システムの先祖です。 ■ 親。階層内で、基本オブジェクト タイプのすぐ上のレベルにあるオブジェクト タイプ。例：データセンターはホスト システムの親です。 ■ 子。基本オブジェクト タイプより 1 つ下のレベルにあるオブジェクト タイプ。例：仮想マシンはホスト システムの子です。
オブジェクト タイプによるフィルタリング	<p>[自己] 以外の [定義対象] に値を選択した場合に使用可能です。</p> <p>選択された [定義対象] 関係に基づき、シンプトムを、選択したオブジェクト タイプを対象に構成されたものに制限します。</p>

表 4-66. [症状の追加] の選択オプション（続き）

オプション	説明
シンプトムの定義のタイプ	<p>現在の [定義対象] のオブジェクト タイプに追加するシンプトムの定義のタイプを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ メトリック/スーパーメトリック メトリックおよびスーパー メトリックのシンプトムを使用するシンプトムを追加します。これらのメトリックは、vRealize Operations Manager が環境内のターゲット オブジェクトから収集した運用またはパフォーマンスの値に基づいています。 ■ プロパティ。プロパティシンプトムを使用するシンプトムを追加します。これらのシンプトムは、vRealize Operations Manager が環境内のターゲット オブジェクトから収集する構成プロパティに基づいています。 ■ メッセージ イベント。メッセージ イベントシンプトムを使用するシンプトムを追加します。これらのシンプトムは、vRealize Operations Manager のコンポーネントからメッセージとして受信したイベント、または外部の監視対象システムからそのシステムの REST API を介してメッセージとして受信したイベントに基づいています。 ■ 障害イベント。障害シンプトムを使用するシンプトムを追加します。これらのシンプトムは、監視対象のシステムが発行したイベントに基づいています。vRealize Operations Manager は、これらのイベントのサブセットの相関関係を作成し、障害として配信します。障害（症状）の目的は、環境内のオブジェクトの可用性を低下させるような監視対象システムのイベントを知らせることです。 ■ メトリック イベント。メトリック イベントシンプトムを使用するシンプトムを追加します。これらのシンプトムは、選択したメトリックが指定された方法でしきい値に違反している監視対象システムから伝達されたイベントに基づいています。外部システムは、vRealize Operations Manager ではなく、しきい値を管理します。これらのシンプトムは、選択したメトリックについて外部の監視対象システムにより報告された条件に基づいています。これは、vRealize Operations Manager がアクティブに監視しているしきい値に基づいているメトリックシンプトムとは対照的です。 ■ スマート早期警告。オブジェクトにおける異常の数がトレンドしきい値を超えた場合にトリガーされる、定義済みの条件を使用するシンプトムを追加します。このシンプトムは、該当オブジェクトの異常な動作を総合的に表します。vRealize Operations Manager は、そのオブジェクトの通常稼働時の動作を判別する動的しきい値に違反するメトリックの許容可能な数に基づいて異常を分析します。このシンプトムは構成できません。ユーザーはこのシンプトムを使用するかどうかを決定します。
[症状の追加] ボタン	<p>アラートに対して必要なシンプトムが存在しない場合は、シンプトムを作成できます。</p> <p>[症状の定義] ダイアログ ボックスを開きます。</p> <p>スマート早期警告シンプトム（システムによって事前定義されている）には使用できません。</p>
すべてのフィルタ	<p>シンプトムの定義のリストをフィルタリングします。この選択項目を使用できるのは、[定義対象] に [自己] が設定されている場合、または [定義対象] に別の関係が設定されており、[オブジェクト タイプによるフィルタリング] ドロップダウン メニューからオブジェクトを選択した場合です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ シンプトム。シンプトムの定義の名前を検索するためのテキストを入力します。たとえば、名前に efficiency を含むシンプトムの定義をすべて表示するには、Efficiency と入力します。 ■ 定義条件。シンプトムの定義を定義したアダプタの名前を検索するためのテキストを入力します。たとえば、vCenter Adapter で提供されるシンプトムの定義をすべて表示するには、vCenter と入力します。ユーザーが定義したシンプトムの定義のみを表示するには、User という検索語を入力します。 <p>フィルタをクリアするには、二重矢印アイコンと、フィルタ名の隣に表示される赤の [x] をクリックします。</p>
クイック フィルタ（名前）	シンプトム名に基づいてリストを検索します。
[症状] リスト	<p>選択されたオブジェクト タイプの既存のシンプトムのリストです。シンプトムを構成するには、そのシンプトムをワークスペースにドラッグします。</p> <p>階層内の複数のレベルに基づくシンプトムを組み合わせるには、新しいシンプトムを選択してワークスペースにドラッグする前に、新しい [定義対象] レベルおよび [オブジェクト タイプによるフィルタリング] を選択します。</p>

ワークスペースを使用して、シンプトムおよびシンプトムセットの相互作用を構成します。

表 4-67. アラートの定義ワークスペースのシンプトムセット

オプション	説明
アラートの定義のサマリー	アラートの定義に対する現在の構成済み情報。アラート定義の作成時に、この情報を参照として使用します。
症状	<p>シンプトムセットには、アラートがトリガーされる必要があるかどうかを決定するために評価される式が含まれます。</p> <p>シンプトムリストから既存のシンプトムのセットに 1 つ以上のシンプトムを追加するには、該当のシンプトムをリストからシンプトムセットにドラッグします。アラート定義に対する新しいシンプトムセットを作成するには、点線で囲まれたランディング領域にシンプトムをドラッグします。</p>
次のシンプトムセットのうち {operator} と一致	<p>追加したシンプトムセットすべてに対する演算子を選択します。複数のシンプトムセットを追加する場合のみ使用可能です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ すべて。アラートが生成されるには、すべてのシンプトムセットが真と評価される必要があります。ブール演算子 AND として機能します。 ■ 任意。アラートが生成されるには、1 つ以上のシンプトムセットが真と評価される必要があります。ブール演算子 OR として機能します。
症状セット	<p>ワークスペースに 1 つ以上のシンプトムを追加し、シンプトムセットが真に設定されるポイントを定義し、アラートが生成されるために真でなければならないのは、シンプトムセット内のすべてのシンプトムなのか、いずれかのシンプトムなのかを指定します。</p> <p>シンプトムセットには 1 つ以上のシンプトムを含めることができ、アラートの定義には 1 つ以上のシンプトムセットを含めることができます。</p> <p>[定義対象] のオブジェクトが [自己] であるシンプトムセットを作成する場合は、シンプトムセット内の複数のシンプトムに対して演算子を設定することができます。</p> <p>[定義対象] のオブジェクトが [自己] 以外の関係であるシンプトムセットを作成する場合は、演算子を設定し、トリガーのしきい値を変更することができます。症状セットの条件を構成するには、オプションを設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 値演算子。値テキスト ボックスに指定した値が、シンプトムセットを真と評価するために複数の関連オブジェクトに対してどのように比較されるかを指定します。 ■ 値テキスト ボックス。シンプトムセットが真と評価されるために必要な、指定された関係のオブジェクトの数 (値のタイプに基づく)。 ■ 値タイプ。設定可能なタイプは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ カウント。シンプトムセットの条件を満たす関連オブジェクトの正確な数。 ■ 割合。シンプトムセットの条件を満たす、すべての関連オブジェクトの割合。 ■ 任意。1 つ以上の関連オブジェクトがシンプトムセットの条件を満たす。 ■ すべて。すべての関連オブジェクトが症状の条件を満たす。 ■ 症状セット演算子。シンプトムセット内のシンプトム間に適用される演算子。 <ul style="list-style-type: none"> ■ すべて。アラートが生成されるには、すべてのシンプトムが真と評価される必要があります。ブール演算子 AND として機能します。 ■ 任意。アラートが生成されるには、1 つ以上のシンプトムが真と評価される必要があります。ブール演算子 OR として機能します。 <p>シンプトムセットに 1 つのシンプトムを含めた場合、シンプトムセットがトリガーされるためにはこの条件が真になる必要があります。ただし、欠落しているシンプトムという条件がシンプトムをトリガーするシンプトムセットを構成する場合があります。シンプトムの欠落という条件を使用するには、シンプトム名の左側にある [このシンプトムの条件を取り消す] アイコンをクリックします。</p> <p>シンプトムの重要度は構成可能ですが、シンプトムを取り消した場合、生成されたアラートの重要度に影響を与える、関連付けられた重要度は無効になりません。</p>

アラートの定義ワークスペースの推奨事項の追加

推奨事項とは、生成されたアラートをユーザーが解決できるように、ユーザーに提供する指示のことです。推奨事項にはアクションを含めることができます。

推奨事項の追加の機能

推奨事項とは、アラートが生成された場合に問題を解決するためにユーザーに提供される情報です。推奨事項のオプションを使用して、既存の情報の追加やアラートに対するソリューションの作成を行います。アラートの定義に対して必要な推奨事項が存在しない場合は、このワークスペースで作成することができます。

推奨事項の追加オプションを確認できる場所

アラート定義の作成または編集を行うには、左側のペインで[内容] - [アラートの定義]を選択します。[アラートの定義] ツールバーで、プラス記号をクリックして定義を追加するか、鉛筆をクリックして選択した定義を編集します。ワークスペースの左側で [推奨事項の追加] をクリックします。

表 4-68. アラートの定義のワークスペースにおける推奨事項の追加のオプション

オプション	説明
推奨事項の追加	問題の症状を解決するために必要な推奨事項が存在しない場合は、推奨事項を作成することができます。
クイック フィルタ (名前)	入力したテキストに基づいてリストを限定します。
利用可能な推奨事項のリストです。	ワークスペースにドラッグできる既存の推奨事項のリストです。 推奨事項は、アラートがトリガーされたときに解決を支援するための指示 (可能な場合はアクション) です。
推奨事項ワークスペース	1 つまたは複数の推奨事項をワークスペースに追加します。 複数の推奨事項を追加した場合は、テーブル内でそれらの推奨事項をドラッグして、優先順位を変更することができます。

新しいアラート定義の作成

問題の根本原因と問題の修正に使用した解決策に基づき、vRealize Operations Manager がアラートを表示するための新しいアラート定義を作成できます。ホスト システムでアラートが起動されると、vRealize Operations Manager はアラートを表示するとともに、その問題の解決方法についての推奨事項を提示します。

ホスト システムでクリティカルなキャパシティの問題が発生する前にアラートが表示され、vRealize Operations Manager によって前もって問題が通知されるようにするため、アラート定義を作成してシンプトムの定義を追加できます。

手順

1 左側のペインで、[内容 > アラートの定義] をクリックします。

2 検索テキスト ボックスに、**capacity** と入力します。

利用可能なキャパシティ アラート定義のリストを確認します。ホスト システムにキャパシティ アラート定義が存在しない場合は、キャパシティ アラート定義を作成できます。

3 プラス記号をクリックし、ホスト システムの新しいキャパシティ アラート定義を作成します。

- a アラート定義ワークスペースで、[名前と説明] に **Hosts – Alert on Capacity Exceeded** と入力します。
- b [ベース オブジェクト タイプ] で、[vCenter アダプタ > ホスト システム] を選択します。
- c [アラートの影響] で次のオプションを選択します。

オプション	選択内容
影響	[リスク] を選択します。
重要度	[緊急] を選択します。
アラート タイプとアラート サブタイプ	[アプリケーション： 容量] を選択します。
待機サイクル	[1] を選択します。
キャンセル サイクル	[1] を選択します。

- d [シンプトムの定義の追加] で次のオプションを選択します。

オプション	選択内容
定義対象	[自己] を選択します。
シンプトムの定義のタイプ	[メトリック / スーパーメトリック] を選択します。
クイック フィルタ (名前)	capacity と入力します。

- e [シンプトムの定義] リストで、[ホスト システムの残りキャパシティが若干少なくなっています] をクリックし、これを右側のペインにドラッグします。

[シンプトム] ペインで、[基本オブジェクトの表示基準] がデフォルトで [すべて] に設定されていることを確認します。
- f [推奨事項の追加] で、[クイック フィルタ] テキスト ボックスに **virtual machine** と入力します。
- g [リストされたシンプトムを確認し、仮想マシンから推奨される数の vCPU を削除します] をクリックし、これを右側のペインの推奨事項領域にドラッグします。

この推奨事項は優先度 1 に設定されています。

4 [保存] をクリックし、このアラート定義を保存します。

アラート定義のリストに作成した新しいアラートが表示されます。

結果

ホスト システムのキャパシティが不足し始めたときに vRealize Operations Manager にアラートを表示させるアラート定義の追加が完了しました。

アラート定義のベスト プラクティス

環境用にアラート定義を作成するときには、監視対象オブジェクトのアラート動作を最適化するために一貫したベスト プラクティスを適用します。

アラート定義の名前付けと説明

アラート定義名は、次の場所に現れる短い名前です。

- アラートが生成されるときにデータ グリッド内
- 送信アラート通知内（環境内で送信アラートと通知が構成されるときに送信される電子メール通知など）

報告された問題を明瞭に示す具体性のある名前を指定してください。ユーザーは、アラート定義名からアラートを判断できます。

アラート定義の説明は、アラート定義詳細と送信アラートに現れるテキストです。アラートを生成した問題をユーザーが把握するのに役立つような説明を入力してください。

待機サイクルとキャンセル サイクル

待機サイクルの設定により、お使いの環境の感度を調整できます。アラート定義の待機サイクルは、シンプトムの定義の待機サイクルにより「トリガーされたシンプトム」が生じた後で有効になります。ほとんどのアラート定義では、感度はシンプトムレベルに構成し、アラート定義の待機サイクルは 1 に構成します。このように構成することで、その適切なシンプトム感度レベルですべてのシンプトムがトリガーされた後、そのアラートがただちに生成されます。

キャンセル サイクル設定により、お使いの環境の感度を調整できます。アラート定義のキャンセル サイクルは、シンプトムの定義のキャンセル サイクルにより「キャンセルされたシンプトム」が生じた後で有効になります。ほとんどの定義では、感度はシンプトムレベルに構成し、アラート定義のキャンセル サイクルは 1 に構成します。このように構成することで、その適切なシンプトムキャンセル サイクルですべてのシンプトム条件が消滅した後、そのアラートがただちにキャンセルされます。

最少のアラートを生成するアラート定義の作成

アラート リストを制御し、管理しやすいようにサイズを変更できます。アラートが多数のオブジェクトについてトリガーされる可能性がある一般的な問題に関するものである場合は、個々のオブジェクトではなく、階層内の比較的高いレベルのオブジェクト 1 つに関してアラートが生成されるようにその定義を構成します。

アラート定義にシンプトムを追加するときには、1 つのアラート定義に 2 次シンプトムを追加し過ぎないようにしてください。シンプトムの組み合わせは、できるだけシンプルで単刀直入となるようにしてください。

一続きのシンプトムの定義を使用して、増分的な懸念レベルを表現することもできます。たとえば、容量限度に近いボリュームは重要度の値が [警告] で、容量限度に達したボリュームは重要度レベルが [重大] というケースが考えられます。最初のシンプトムは緊急的な脅威ではありませんが、2 つ目の症状は緊急的な脅威です。この場合、Any 条件を使用して警告のシンプトムの定義と重大なシンプトムの定義を単一のアラート定義に含め、アラート重要度を [シンプトムベース] に設定できます。これらの設定を行うと、シンプトムのどちらか一方がトリガーされるときに正しい重要度でアラートが生成されます。

複数アラート間の重複とギャップの回避

重複があると、基になる同一の条件に対して 2 つ以上のアラートが生成されます。ギャップは、重要度が比較的低い未解決のアラートはキャンセルされているが、重要度が比較的高い関連アラートがトリガーできないという場合に発生します。

ギャップは、1 つ目のアラート定義では値が 50% 以下で、2 つ目のアラート定義では値が 75% 以上という場合に発生します。ギャップが発生するのは、使用度の高いボリュームの割合が 50% ～ 75% の場合に最初の問題はアラートをキャンセルするが 2 つ目の問題はアラートを生成しないためです。ギャップに対応するためにアクティブになるアラート定義が 1 つも存在しないため、この条件は問題をはらんでいます。

実行可能な推奨事項

アラート定義で特定されている問題の解決に役立つテキストベースの操作説明をユーザーに提供する場合は、アラートを解決するためにエンジニアや管理者がどのような方法で問題を修正すればよいかを正確に説明してください。

操作説明を提供する手段として、wiki やランダムブックなどの情報源にリンクを追加し、ターゲット システム上の vRealize Operations Manager から実行するアクションを追加できます。

vRealize Operations Manager のアラートの通知の作成および管理

vRealize Operations Manager でアラートが生成されると、アラートは、アラート詳細とオブジェクト詳細に表示されますが、vRealize Operations Manager を構成することで、1 つ以上の送信アラート オプションを使用してアラートをアプリケーションの外部に送信することもできます。

通知オプションを構成し、標準の E メール、REST、SNMP、およびログ ファイル送信アラート プラグイン用などのアラートを送信するかを指定します。他のプラグイン タイプについては、ターゲットの送信アラート プラグインが有効になっている場合、すべてのアラートが送信されます。

最も一般的な送信アラート プラグインは、標準の E メール プラグインです。通知設定で指定した条件に一致するアラートが生成された場合に、1 人以上のユーザーに通知を送信するように標準の E メール プラグインを構成します。

vRealize Operations Manager の送信プラグインのリスト

vRealize Operations Manager では、送信プラグインが提供されます。このリストには、プラグインの名前と、通知設定に基づいて送信データをフィルタリングできるかどうかを示されています。

プラグインで通知ルールの構成がサポートされている場合、メッセージをターゲット システムに送信する前にフィルタリングできます。プラグインで通知がサポートされない場合、すべてのメッセージがターゲット システムに送信されます。そのメッセージをターゲット システムのアプリケーションで処理できます。

他のプラグイン オプションが含まれる他のソリューションをインストールしている場合、それらは 1 つのプラグイン オプションとして他のプラグインとともに表示されます。

メッセージとアラートが送信されるのは、プラグインが有効になっている場合のみです。

表 4-69. 送信プラグインの通知サポート

送信プラグイン	通知ルールの構成
自動アクション プラグイン	不可 自動アクション プラグインはデフォルトで有効になっています。自動アクションが停止した場合は、自動アクション プラグインをチェックして、必要に応じて有効化します。自動アクション プラグインを編集する場合、指定する必要があるのはインスタンス名だけです。
ログ ファイル プラグイン	可 ログ ファイルのアラートをフィルタするには、TextFilter.xml という名前のファイルを構成するか、または通知ルールを構成します。
スマート SAM 通知プラグイン	不可

表 4-69. 送信プラグインの通知サポート（続き）

送信プラグイン	通知ルールの構成
REST 通知プラグイン	可
ネットワーク共有プラグイン	不可
標準の電子メール プラグイン	可
SNMP トラップ プラグイン	可

vRealize Operations Manager での送信通知プラグインの追加

ユーザーにアラートを通知したり、vRealize Operations Manager の外側でアラート データを取得したりできるように、送信プラグイン インスタンスを追加します。

アラート情報を複数のターゲット システムに送信する必要がある場合は、同じプラグイン タイプの 1 つ以上のインスタンスを構成できます。

自動アクション プラグインはデフォルトで有効になっています。自動アクションが停止した場合は、自動アクション プラグインをチェックして、必要に応じて有効化します。自動アクション プラグインを編集する場合、指定する必要があるのはインスタンス名だけです。

■ vRealize Operations Manager 送信アラートの標準の電子メール プラグインの追加

標準の電子メール プラグインを追加すると、簡易メール転送プロトコル (SMTP) を使用して、vRealize Operations Manager のアラート通知を仮想インフラストラクチャの管理者、ネットワーク操作エンジニア、および他の関係者にメールで送信できます。

■ vRealize Operations Manager 送信アラート用の REST プラグインの追加

REST プラグインを追加すると、vRealize Operations Manager のアラートを、そのメッセージを受け入れるための REST Web サービスが構築された別の REST 対応アプリケーションに送信できます。

■ vRealize Operations Manager 送信アラート用のログ ファイル プラグインの追加

各 vRealize Operations Manager ノード上のファイルにアラートのログを出力するように vRealize Operations Manager を構成する場合は、ログ ファイル プラグインを追加します。vRealize Operations Manager を複数ノード クラスタとしてインストールした場合、各ノードは監視しているオブジェクトのアラートを処理し、そのログを記録します。各ノードは、処理しているオブジェクトのアラートのログを記録します。

■ vRealize Operations Manager レポート用ネットワーク共有プラグインの追加

vRealize Operations Manager でレポートが共有の場所へ送られるように構成するには、ネットワーク共有プラグインを追加します。

■ vRealize Operations Manager 送信アラートの SNMP トラップ プラグインの追加

環境内の既存の SNMP トラップ サーバにアラートを記録するように vRealize Operations Manager を構成する場合、SNMP トラップ プラグインを追加します。

■ vRealize Operations Manager 送信アラート用の Smarts Service Assurance Manager 通知プラグインの追加

vRealize Operations Manager を構成してアラート通知を EMC Smarts Server Assurance Manager へ送る場合は、Smarts SAM 通知プラグインを追加します。

vRealize Operations Manager 送信アラートの標準の電子メール プラグインの追加

標準の電子メール プラグインを追加すると、簡易メール転送プロトコル (SMTP) を使用して、vRealize Operations Manager のアラート通知を仮想インフラストラクチャの管理者、ネットワーク操作エンジニア、および他の関係者にメールで送信できます。

前提条件

アラート通知の接続アカウントとして使用できる電子メール ユーザー アカウントがあることを確認します。 認証を要求するには、このアカウントのパスワードも把握しておく必要があります。

手順

1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。

2 [送信設定] をクリックし、プラス記号をクリックしてプラグインを追加します。

3 [プラグイン タイプ] ドロップダウン メニューで、[標準の電子メール プラグイン] を選択します。

ダイアログ ボックスが展開し、SMTP 設定が表示されます。

4 [インスタンス名] を入力します。

これは、このインスタンスを識別する名前です。このインスタンスを、後で通知ルールを構成するときに選択します。

5 環境に合わせて適切な SMTP オプションを構成します。

オプション	説明
セキュリティ保護された接続を使用	SSL/TLS を使用するセキュリティ保護された通信の暗号化を有効にします。このオプションを選択すると、[安全な接続タイプ] ドロップダウン メニューで暗号化方式を選択する必要があります。
認証を要求	この SMTP インスタンスを構成するために使用する電子メール ユーザー アカウントに対して、認証を有効にします。このオプションを選択すると、ユーザー アカウントのパスワードを指定する必要があります。
SMTP ホスト	電子メール ホスト サーバの URL または IP アドレス。
SMTP ポート	サーバと接続するために SMTP で使用されるデフォルト ポート。
安全な接続タイプ	環境で使用する通信の暗号化方式として、ドロップダウン メニューから SSL または TLS のいずれかを選択します。[セキュリティ保護された接続を使用] を選択する場合は、接続タイプを選択する必要があります。
ユーザー名	電子メール サーバに接続するために使用する電子メール ユーザー アカウント。
パスワード	接続ユーザー アカウントのパスワード。[認証を要求] を選択する場合は、パスワードが必要です。
送信者の電子メール アドレス	通知メッセージに表示される電子メール アドレス。
送信者名	送信者の電子メール アドレスの表示名。

6 [保存] をクリックします。

7 このプラグインの送信アラート サービスを開始するには、リスト内のインスタンスを選択し、ツールバーの [有効化] をクリックします。

結果

送信 SMTP アラートに標準の電子メール プラグインのインスタンスが構成され、実行されます。

次のステップ

標準の電子メール プラグインを使用して、注意を要するアラートに関するメッセージをユーザーに送信する通知ルールを作成します。 [ユーザー シナリオ: vRealize Operations Manager の電子メール アラート通知の作成](#) を参照してください。

vRealize Operations Manager 送信アラート用の REST プラグインの追加

REST プラグインを追加すると、vRealize Operations Manager のアラートを、そのメッセージを受け入れるための REST Web サービスが構築された別の REST 対応アプリケーションに送信できます。

REST プラグインは統合の有効化をサポートしますが、統合は提供しません。ターゲットのアプリケーションによっては、REST アラート出力に含まれるアラートおよびオブジェクト識別子をターゲットのアプリケーションの識別子に関連付ける、REST 中継サービスなどのメカニズムが必要になる場合があります。

ターゲット アプリケーションに配信するコンテンツ タイプを特定します。application/json を選択した場合、送信される POST または PUT 呼び出しの本文は次のような形式があります。これにはサンプル データが含まれます。

```
{
  "startDate":1369757346267,
  "criticality":"ALERT_CRITICALITY_LEVEL_WARNING",
  "Risk":4.0,
  "resourceId":"sample-object-uuid",
  "alertId":"sample-alert-uuid",
  "status":"ACTIVE",
  "subType":"ALERT_SUBTYPE_AVAILABILITY_PROBLEM",
  "cancelDate":1369757346267,
  "resourceKind":"sample-object-type",
  "alertName":"Invalid IP Address for connected Leaf Switch",
  "attributeKeyID":5325,
  "Efficiency":1.0,
  "adapterKind":"sample-adapter-type",
  "Health":1.0,
  "type":"ALERT_TYPE_APPLICATION_PROBLEM",
  "resourceName":"sample-object-name",
  "updateDate":1369757346267,
  "info":"sample-info"
}
```

application/xml を選択した場合、送信される POST または PUT 呼び出しの本文は次のような形式があります。

```
<alert>
  <startDate>1369757346267</startDate>
  <criticality>ALERT_CRITICALITY_LEVEL_WARNING</criticality>
```

```

<Risk>4.0</Risk>
<resourceId>sample-object-uuid</resourceId>
<alertId>sample-alert-uuid</alertId>
<status>ACTIVE</status>
<subType>ALERT_SUBTYPE_AVAILABILITY_PROBLEM</subType>
<cancelDate>1369757346267</cancelDate>
<resourceKind>sample-object-type</resourceKind>
<alertName>Invalid IP Address for connected Leaf Switch</alertName>
<attributeKeyId>5325</attributeKeyId>
<Efficiency>1.0</Efficiency>
<adapterKind>sample-adapter-type</adapterKind>
<Health>1.0</Health>
<type>ALERT_TYPE_APPLICATION_PROBLEM</type>
<resourceName>sample-object-name</resourceName>
<updateDate>1369757346267</updateDate>
<info>sample-info</info>
</alert>

```

注： アラートがメトリック以外の違反によってトリガされた場合、attributeKeyID は REST 出力から省略され、送信されません。

JSON または XML の要求が POST として処理された場合、Web サービスは HTTP ステータス コード 201 を返します。これは、アラートがターゲットで正常に作成されたことを示します。要求が PUT として処理された場合は、HTTP ステータス コード 202 が返されます。これは、アラートがターゲットで正常に受け入れられたことを示します。

前提条件

REST プラグインを使用して送信されるアラートが環境内でどのようにして、また環境内のどの場所で使用および処理されるかを理解し、適切な接続情報を使用できることを確認します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。
- 2 [送信設定] をクリックし、プラス記号をクリックしてプラグインを追加します。
- 3 [プラグイン タイプ] ドロップダウン メニューで、[通知プラグインの停止] を選択します。

ダイアログ ボックスが展開して REST 設定が表示されます。

- 4 [インスタンス名] を入力します。

これは、このインスタンスを識別する名前です。このインスタンスを、後で通知ルールを構成するときに選択します。

- 5 環境に適した Rest オプションを構成します。

オプション	説明
URL	アラートの送信先となる URL。この URL は HTTPS をサポートする必要があります。アラートを REST Web サーバに送信するときに、プラグインは /{alertID} を POST または PUT 呼び出しに付加します。
ユーザー名	ターゲットの REST システムのユーザー アカウント。

オプション	説明
パスワード	ユーザー アカウントのパスワード。
コンテンツ タイプ	アラート出力の形式を指定します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ application/json。人間が解読可能なテキストとして、JavaScript Object Notation を使用してアラート データを送信します。 ■ application/xml。人間およびマシンが解読可能なコンテンツである XML を使用してアラート データを送信します。
証明書のサムプリント	HTTP サービス用のパブリック証明書のサムプリント。
接続カウント	ターゲットの REST サーバに同時に送信されるアラートの数を制限します。この数を使用して、REST サーバが要求を処理しきれなくなるのを防ぎます。

6 [保存] をクリックします。

7 このプラグインの送信アラート サービスを開始するには、リスト内のインスタンスを選択し、ツールバーの [有効化] をクリックします。

結果

送信アラート用の REST プラグインのこのインスタンスが構成され、実行中になります。

次のステップ

REST プラグインを使用して環境内の REST 対応アプリケーションまたはサービスにアラートを送信する通知ルールを作成します。[ユーザー シナリオ: vRealize Operations Manager REST アラート通知の作成](#) を参照してください。

vRealize Operations Manager 送信アラート用のログ ファイル プラグインの追加

各 vRealize Operations Manager ノード上のファイルにアラートのログを出力するように vRealize Operations Manager を構成する場合は、ログ ファイル プラグインを追加します。vRealize Operations Manager を複数ノード クラスタとしてインストールした場合、各ノードは監視しているオブジェクトのアラートを処理し、そのログを記録します。各ノードは、処理しているオブジェクトのアラートのログを記録します。

ログ ファイルにすべてのアラートが追加されます。他のアプリケーションを使用してログのフィルタリングや管理を実行できます。

前提条件

ターゲットの vRealize Operations Manager ノードのファイル システム パスに対する書き込みアクセスがあることを確認します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。
- 2 [送信設定] をクリックし、プラス記号をクリックしてプラグインを追加します。
- 3 [プラグイン タイプ] ドロップダウン メニューで、[ログ ファイル] を選択します。
ダイアログ ボックスが拡張され、ログ ファイルに関する設定が行えるようになります。

- 4 [アラート出力フォルダ] テキスト ボックスで、フォルダ名を入力します。

ターゲット場所にフォルダが存在しない場合は、プラグインによってターゲット場所にフォルダが作成されます。デフォルトのターゲット場所は、`/usr/lib/vmware-vcops/common/bin/` です。

- 5 [保存] をクリックします。

- 6 このプラグインの送信アラート サービスを開始するには、リスト内のインスタンスを選択し、ツールバーの [有効化] をクリックします。

結果

ログ ファイル プラグインのインスタンスが構成され、稼働状態になります。

次のステップ

プラグインが開始されると、アラートのログがファイルに記録されます。アラートが生成、更新、またはキャンセルされたときに、ログ ファイルがターゲット ディレクトリに作成されたことを確認します。

vRealize Operations Manager レポート用ネットワーク共有プラグインの追加

vRealize Operations Manager でレポートが共有の場所へ送られるように構成するには、ネットワーク共有プラグインを追加します。

前提条件

ネットワーク共有の場所に対する読み取り、書き込み、削除の権限があることを確認します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。

- 2 [送信設定] をクリックし、プラス記号をクリックしてプラグインを追加します。

- 3 [プラグイン タイプ] ドロップダウン メニューから [ネットワーク共有プラグイン] を選択します。

ダイアログ ボックスが展開し、プラグイン インスタンス設定が表示されます。

- 4 [インスタンス名] を入力します。

これは、このインスタンスを識別する名前です。このインスタンスを、後で通知ルールを構成するときに選択します。

- 5 環境に適したネットワーク共有オプションを構成します。

オプション	説明
ドメイン	共有ネットワーク ドメイン アドレス。
ユーザー名	ネットワークとの接続に使用されるドメイン ユーザー アカウント。

オプション	説明
パスワード	ドメイン ユーザー アカウントのパスワード。
ネットワーク共有ルート	<p>レポートの保存先となるルート フォルダへのパス。発行のスケジュールを構成する際に各レポートのサブフォルダを指定できます。</p> <p>IP アドレスを入力する必要があります。たとえば、<code>\\IP_address\ShareRoot</code> のように指定します。vRealize Operations Manager ホストからアクセスされるときにホスト名が IPv4 に解決される場合は、IP アドレスの代わりにホスト名を使用できます。</p> <p>注： ターゲットとなるルート フォルダが存在していることを確認します。このフォルダがない場合、試行が 5 回失敗するとネットワーク共有プラグインによりログにエラーが記録されます。</p>

- 指定されたパス、認証情報、権限を確認するには、[テスト] をクリックします。

テストには数分かかることがあります。

- [保存] をクリックします。

このプラグインの送信サービスは自動的に開始されます。

- (オプション) 送信サービスを停止するには、インスタンスを選択し、ツールバーの [無効] をクリックします。

結果

ネットワーク共有プラグインのインスタンスが構成され、実行中になります。

次のステップ

レポート スケジュールを作成し、レポートが共有フォルダに送信されるよう構成します。[レポートのスケジュール設定の概要](#) を参照してください。

vRealize Operations Manager 送信アラートの SNMP トラップ プラグインの追加

環境内の既存の SNMP トラップ サーバにアラートを記録するように vRealize Operations Manager を構成する場合、SNMP トラップ プラグインを追加します。

SNMP トラップとして送信されたアラートのすべてのフィルタリングはターゲット ホストで発生する必要があります。

前提条件

SNMP トラップ サーバが環境に構成済みであること、使用する IP アドレスまたはホスト名、ポート番号、およびコミュニティを知っていることを確認します。

手順

- vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。
- [送信設定] をクリックし、プラス記号をクリックしてプラグインを追加します。
- [プラグイン タイプ] ドロップダウン メニューで、[SNMP トラップ] を選択します。
ダイアログ ボックスが展開して SNMP トラップ設定が表示されます。
- [インスタンス名] を入力します。

5 環境に適切な SNMP トラップ設定を構成します。

オプション	説明
ターゲット ホスト	アラートの送信先の SNMP 管理システムの IP アドレスまたは完全修飾ドメイン名。
ポート	SNMP 管理システムへの接続に使用されるポート。デフォルト ポートは 162 です。
コミュニティ	統計情報へのアクセスを許可するテキスト文字列。SNMP コミュニティの文字列は、SNMPv1 と SNMPv2c プロトコルをサポートするデバイスでのみ使用されます。

6 [保存] をクリックします。

結果

SNMP トラップ プラグインのインスタンスが構成され、実行中になります。

次のステップ

プラグインが追加されたら、SNMP トラップを受信するための [通知の構成](#) します。

vRealize Operations Manager 送信アラート用の Smarts Service Assurance Manager 通知プラグインの追加

vRealize Operations Manager を構成してアラート通知を EMC Smarts Server Assurance Manager へ送る場合は、Smarts SAM 通知プラグインを追加します。

この送信アラート オプションは、Server Assurance Manager と vRealize Operations Manager で同一のオブジェクトを管理しており、EMC Smart 管理バックを追加済みで、vRealize Operations Manager でソリューションを構成済みの場合に役立ちます。vRealize Operations Manager では Service Assurance Manager に送信されるアラートをフィルタリングすることはできませんが、アラートを Smarts Open Integration サーバに送信するように Smarts プラグインを構成することは可能です。次に、vRealize Operations Manager からのアラートをフィルタリングするように Open Integration サーバを構成し、フィルタ テストを通過したアラートのみを Smarts Service Assurance Manager サービスに送信します。

前提条件

- EMC Smarts ソリューションを構成したことを確認します。EMC Smarts 統合に関するドキュメントについては、<https://solutionexchange.vmware.com/store> を参照してください。
- EMC Smarts Broker と Server Assurance Manager インスタンスのホスト名または IP アドレス、ユーザー名、およびパスワードがあることを確認します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。
- 2 [送信設定] をクリックし、プラス記号をクリックしてプラグインを追加します。
- 3 [プラグイン タイプ] ドロップダウン メニューから、[Smarts SAM 通知] を選択します。

ダイアログ ボックスが展開し、Smarts 設定が表示されます。

- 4 [インスタンス名] を入力します。

これは、このインスタンスを識別する名前です。このインスタンスを、後で通知ルールを構成するときに選択します。

5 ご使用の環境に合わせて Smarts SAM 通知設定を構成します。

オプション	説明
ブローカー	通知の送信先となる Server Assurance Manager インスタンスのレジストリを管理する EMC Smarts Broker のホスト名または IP アドレスを入力します。
ブローカーのユーザー名	Smarts Broker をセキュア ブローカーとして構成する場合、ブローカーのアカウントのユーザー名を入力します。
ブローカーのパスワード	Smarts Broker をセキュア ブローカーとして構成する場合、ブローカーのユーザー アカウントのパスワードを入力します。
SAM サーバ	通知の送信先となる Server Assurance Manager サーバのホスト名または IP アドレスを入力します。
ユーザー名	Server Assurance Manager サーバ インスタンスのユーザー名を入力します。 SAM サーバで指定されているように、このアカウントは Smarts サーバ上の通知に対する読み取り権限と書き込み権限を所有している必要があります。
パスワード	Server Assurance Manager サーバ アカウントのパスワードを入力します。

6 [保存] をクリックします。

7 スマート SAM プラグイン プロパティ ファイルを修正します。

- a `/usr/lib/vmware-vcops/user/plugins/outbound/vcops-smartsalert-plugin/conf/plugin.properties` のプロパティ ファイルを開きます。
- b プロパティ ファイルに次の文字列を追加します。#
`sendByType=APPLICATION::AVAILABILITY,APPLICATION::PERFORMANCE,APPLICATION::CAPACITY,APPLICATION::COMPLIANCE,VIRTUALIZATION::AVAILABILITY,VIRTUALIZATION::PERFORMANCE,VIRTUALIZATION::CAPACITY,VIRTUALIZATION::COMPLIANCE,HARDWARE::AVAILABILITY,HARDWARE::PERFORMANCE,HARDWARE::CAPACITY,HARDWARE::COMPLIANCE,STORAGE::AVAILABILITY,STORAGE::PERFORMANCE,STORAGE::CAPACITY,STORAGE::COMPLIANCE,NETWORK::AVAILABILITY,NETWORK::PERFORMANCE,NETWORK::CAPACITY,NETWORK::COMPLIANCE`
- c プロパティ ファイルを保存します。

8 このプラグインの送信アラート サービスを開始するには、リスト内のインスタンスを選択し、ツールバーの [有効化] をクリックします。

結果

Smarts SAM 通知プラグイン のインスタンスが構成済みで、実行中です。

次のステップ

Smarts Service Assurance Manager で、vRealize Operations Manager からのアラートをフィルタリングするように通知ログ コンソールを構成します。 Service Assurance Manager のフィルタリングを構成するには、EMC Smarts Service Assurance Manager のドキュメントを参照してください。

TextFilter.xml ファイルによる送信メッセージのログ ファイルのフィルタリング

vRealize Operations Manager のログ ファイル送信プラグインは、アラート データを取得します。ログ ファイル データをフィルタリングするため、TextFilter.xml ファイルを更新して、フィルタ条件に一致するアラートだけを取得することができます。

vRealize Operations Manager 管理者は、アラート タイプとサブタイプに基づいて、送信アラートのログ ファイルをフィルタリングする必要がある場合があります。

フィルタは TextFile.xml ファイルに構成されます。ファイルは次の場所にあります。

- vApp または Linux の場合。/usr/lib/vmware-vcops/user/plugins/outbound/vcops-textfile-plugin/conf

ファイルでは、フィルタ ルールに次の形式を使用します。

```
<FilterRule name="AlertType">
  <AlertTypes>
    <AlertType key="AlertType1:AlertSubType1 " />
    <AlertType key="AlertType2:AlertSubType2 " />
  </AlertTypes>
</FilterRule>
```

たとえば、アプリケーション タイプと可能性サブタイプに基づいてフィルタリングするルールでは、この形式を使用します。

```
<FilterRule name="AlertType">
  <AlertTypes>
    <AlertType key="ALERT_TYPE_APPLICATION_PROBLEM:ALERT_SUBTYPE_AVAILABILITY_PROBLEM " />
  </AlertTypes>
</FilterRule>
```

送信設定

送信設定を使用して、vRealize Operations Manager の外部にあるユーザーまたはアプリケーションに情報を送信できるように通信設定を管理します。

送信設定の動作

送信プラグインの追加または編集、構成済みのプラグインの有効化または無効化など、このページで送信オプションの管理を行います。プラグインを有効にすると、プラグインは、メッセージを電子メール通知としてユーザーに送信するか、メッセージを他のアプリケーションに送信します。

送信設定を確認できる場所

送信設定を管理するには、左側のペインで [管理] を選択し、[送信設定] をクリックします。

表 4-70. 送信設定のオプション

オプション	説明
ツールバー オプション	<p>ツールバー オプションを使用して送信プラグインを管理します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 追加または編集。[Outbound Plug-In] ダイアログ ボックスが開きます。そこで、インスタンスの接続オプションを構成します。 ■ 削除。選択したプラグイン インスタンスを削除します。 ■ 有効化または無効化。プラグイン インスタンスを開始または停止します。 インスタンスを無効にすると、環境から構成を削除することなく、プラグイン用に構成されたメッセージの送信を停止できます。
インスタンス名	プラグイン インスタンスを作成したときに割り当てた名前。
プラグイン タイプ	<p>プラグイン インスタンス用に構成されたプラグインのタイプ。 プラグインのタイプは、環境に追加されたソリューションによって異なります。</p> <p>最も一般的なプラグインのタイプには、標準の電子メール、SNMP トラップ、ログ ファイル、および REST があります。</p>
ステータス	プラグインが現在実行されているかどうかを示します。

送信プラグイン

送信プラグインの設定では、サポートされている外部通知システムのターゲット システムへの接続方法を決定します。1 つ以上のプラグイン タイプの 1 つ以上のインスタンスを構成すると、生成された通知に関するデータを vRealize Operations Manager の外部に送信できます。

送信プラグインの機能

必要な情報を使用して各プラグインを構成します。これには、ターゲットの場所、ホスト、ポート、ユーザー名、パスワード、インスタンス名や、ターゲット システムに通知を送信するために必要なその他の情報が含まれます。ターゲット システムには、電子メール受信者、ログ ファイル、またはその他の管理製品が含まれる場合があります。

一部のプラグインは vRealize Operations Manager に含まれており、その他は管理パックをソリューションとして追加したときに追加される可能性があります。

送信設定の構成場所

送信プラグインを追加または編集するには、左側のペインで [管理] を選択し、[送信設定] をクリックします。ツールバーで、プラス記号をクリックしてプラグイン インスタンスを追加します。または、リストからプラグインを選択して鉛筆をクリックし、既存のプラグインを編集します。

送信プラグインの構成オプション

構成オプションは、[プラグイン タイプ] ドロップダウン メニューからどのプラグインを選択するかによって異なります。

通知の構成

通知とは、通知ルール内のフィルタ基準に一致するアラート通知を指し、この一致した通知が vRealize Operations Manager の外部に送信されます。サポートされる送信アラートの通知ルールを構成すると、選択した外部システムに送信するアラートをフィルタリングできます。

通知リストを使用して、ルールを管理します。次に、通知ルールを使用して、外部システムに送信するアラートを制限します。通知を使用するには、サポートされる送信アラート プラグインが追加され、実行されている必要があります。

通知ルールを使用して、次の外部システムに送信するデータを制限できます。

- 標準の電子メール。1 つ以上の選択フィルタに基づいて、さまざまな E メール受信者に対して複数の通知ルールを作成できます。受信者を追加し、選択フィルタを追加しなかった場合、生成されるすべてのアラートがその受信者に送信されます。
- REST。ターゲットの REST システムに送信するアラートを制限するルールを作成できるため、そのターゲットシステムでフィルタリングを実装する必要はありません。
- SNMP トラップ。環境内の既存の SNMP トラップ サーバのアラートのログを出力するように vRealize Operations Manager を構成できます。
- ログ ファイル。各 vRealize Operations Manager ノードのファイルにアラートのログを出力するように vRealize Operations Manager を構成できます。

ユーザー シナリオ：vRealize Operations Manager の電子メール アラート通知の作成

トランザクション アプリケーションを実行する多くの仮想マシンのホストである mmbhost オブジェクトに対して重大なアラートが生成され、そのアラートの所有権を取得しているユーザーがいない場合、あなたは、仮想インフラストラクチャ管理者として、vRealize Operations Manager を使用し、電子メール通知を上級ネットワーク エンジニアに送信する必要があります。

前提条件

- 通知の送信の対象となるアラート定義が 1 つ以上あることを確認します。アラート定義の例については、[部門のオブジェクトに対するアラート定義の作成](#)を参照してください。
- 標準の電子メール プラグインのインスタンスが 1 つ以上構成され、実行されていることを確認します。[vRealize Operations Manager 送信アラートの標準の電子メール プラグインの追加](#)を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックします。
- 2 [通知] をクリックし、プラス記号をクリックして、通知ルールを追加します。
- 3 [名前] テキスト ボックスに、**Unclaimed Critical Alerts for mmbhost** のような名前を入力します。
- 4 [方法] 領域のドロップダウン メニューから [標準の電子メール プラグイン] を選択し、構成済みの電子メール プラグイン インスタンスを選択します。
- 5 電子メールのオプションを構成します。
 - a [受信者] テキスト ボックスに、上級エンジニアリング チームのメンバーの電子メール アドレスを入力します。各アドレスはセミコロン (;) で区切ります。
 - b 指定した時間が経過してもアラートが以前としてアクティブになっている場合に 2 番目の通知を送信するには、[再度通知する] テキスト ボックスに時間 (分) を入力します。
 - c ユーザーに送信する通知の数を、[最大通知数] テキスト ボックスに入力します。

6 フィルタ基準の範囲を構成します。

- a [スコープ] ドロップダウン メニューから、[オブジェクト] を選択します。
- b [クリックしてオブジェクトを選択] をクリックし、オブジェクトの名前を入力します。

この例では、**mmbhost** と入力します。

- c リスト内でオブジェクトを見つけて選択し、[選択] をクリックします。

7 通知トリガーを構成します。

- a [通知トリガー] ドロップダウン メニューから、[影響] を選択します。
- b 隣にあるドロップダウン メニューから、[健全性] を選択します。

8 [重要度] 領域で、[最重要] をクリックします。**9** [詳細フィルタ] を展開し、[アラート状態] ドロップダウン メニューから、[オープン] を選択します。

[オープン] 状態は、アラートの所有権を取得しているエンジニアまたは管理者がいないことを示します。

10 [保存] をクリックします。**結果**

これで、通知ルールが作成されます。これにより、mmbhost オブジェクトに関する最重要のアラートが生成され、そのアラートがエンジニアによって要求されていない場合、上級ネットワーク エンジニアリング チームのメンバーに電子メール メッセージが送信されます。この電子メールは、アラートを確認し、このアラートの所有権を取得して、トリガーとなった症状を解決するよう上級ネットワーク エンジニアリング チームのメンバーに通知するものです。

次のステップ

電子メール アラート通知への応答 [ユーザー シナリオ：受信箱にアラートが到着した場合](#) を参照してください。

ユーザー シナリオ：vRealize Operations Manager REST アラート通知の作成

仮想インフラストラクチャの管理者として、あなたは vRealize Operations Manager を使用して、JSON または XML 形式のアラートを、そのようなメッセージを受け入れる REST Web サービスを搭載した REST 対応アプリケーションに送信する必要があります。可用性アラート タイプに影響する仮想化アラートのみをこの外部アプリケーションに送ります。その後、そのアプリケーション内で、提供された情報を使用して修正処理を開始し、アラートに示された問題に対処することができます。

送信アラート インスタンスに送信されるアラートは、通知構成によって、通知基準に一致するアラートに限定されます。

前提条件

- 通知の送信の対象となるアラート定義が 1 つ以上あることを確認します。アラート定義の例については、[部門のオブジェクトに対するアラート定義の作成](#)を参照してください。
- REST プラグインのインスタンスが 1 つ以上構成され、実行されていることを確認します。 [vRealize Operations Manager 送信アラート用の REST プラグインの追加](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックします。
- 2 [通知] をクリックし、プラス記号をクリックして、通知ルールを追加します。
- 3 [名前] テキスト ボックスに、**Virtualization Alerts for Availability** のような名前を入力します。
- 4 [方法] 領域のドロップダウン メニューから [REST プラグイン] を選択し、構成済みの電子メール プラグイン インスタンスを選択します。
- 5 通知トリガーを構成します。
 - a [通知トリガー] ドロップダウン メニューで、[アラート タイプ] を選択します。
 - b [クリックしてアラートのタイプとサブタイプを選択] をクリックし、[仮想化アラートまたはハイパーバイザー アラートの可用性] を選択します。
- 6 [重要度] 領域で、[警告] をクリックします。
- 7 [詳細フィルタ] を展開し、[アラート ステータス] ドロップダウン メニューから、[新規] を選択します。
この [新規] ステータスは、アラートがシステムの新しいアラートであり、更新されたものではないことを示します。
- 8 [保存] をクリックします。

結果

これで、ターゲットの REST 対応システムにアラート テキストを送信する通知ルールが作成されました。構成されたアラートの影響が仮想化またはハイパーバイザーの可用性であり、アラートが警告として構成されている場合のみ、アラートは REST プラグインを使用してターゲット インスタンスに送信されます。

通知

[通知] ページを使用して、個々のアラート通知ルールを管理します。ルールは、サポートされるターゲット システムに vRealize Operations Manager のどのアラートを送信するかを決定します。

通知の仕組み

このページから通知ルールの追加、管理、および編集を行います。サポートされたシステムに通知を送信するには、送信アラートの設定を構成して有効にする必要があります。サポートされる送信通知プラグインには、標準の E メール プラグイン、REST プラグイン、SNMP トラップ プラグイン、およびログ ファイル プラグインが含まれます。

通知ルールを作成および管理するには、送信アラートのプラグイン インスタンスを構成する必要があります。

通知を確認できる場所

通知を管理するには、左側のペインで [内容] を選択し、[通知] をクリックします。

表 4-71. 通知オプション

オプション	説明
ツールバー オプション	<p>ツールバー オプションを使用して通知ルールを管理します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 追加または編集。[ルール] ダイアログ ボックスが開きます。そこで、通知ルールのフィルタリング オプションを構成します。 ■ 削除。選択したルールを削除します。
ルール名	通知ルールを作成したときに割り当てた名前。

表 4-71. 通知オプション（続き）

オプション	説明
インスタンス	通知ルールに対して構成した送信アラート インスタンスの名前。 インスタンスは、送信アラートの一部として構成され、アラート通知用の各種電子メール サーバや送信者アドレスを示すことができます。
電子メールアドレス	標準の電子メール通知のルールの場合、アラート受信者の電子メール アドレスの一覧が表示されます。
オブジェクト名	特定のオブジェクトに関する通知をルールで指定している場合、オブジェクト名の一覧が表示されます。
子	特定のオブジェクトおよび選択された子オブジェクトのタイプに関する通知をルールで指定している場合、子オブジェクトのタイプの一覧が表示されます。

通知ルール

通知ルールにより、ターゲット システムに送信されるアラートが決まります。vRealize Operations Manager からシステムまたは受信者に送信するデータを制限するための 1 つ以上の通知ルールを構成します。

通知ルールの仕組み

通知ルールは、サポートおよび構成され、実行している送信アラート プラグインを使用することにより、外部システムに送信されるデータを制限するフィルタです。通知ルールは、サポートおよび構成され、実行中の送信アラート プラグインを使用することにより、外部システムに送信されるデータを制限するフィルタです。たとえば、1 人以上のネットワーク処理エンジニアに仮想マシンの健全性アラートを送信できます。該当オブジェクトの仮想インフラストラクチャ管理者に、選択したホストおよびクラスタの重要なアラートを送信できます。

通知ルールを作成および管理するには、送信アラートのプラグイン インスタンスを構成する必要があります。

vRealize Operations Manager でターゲット外部システムに必要なデータのみが送信されるように、1 つの選択フィルタ、または必要数の選択フィルタを構成できます。

通知ルールを確認できる場所

通知を管理するには、左側のペインで [内容] を選択し、[通知] をクリックします。ツールバーで、プラス記号をクリックしてルールを追加するか、鉛筆をクリックして既存のルールを編集します。

表 4-72. 通知ルール of the構成の選択

選択内容	説明
名前	ルール インスタンスの管理に使用するルールの名前。
方法	<p>プラグイン タイプおよびプラグイン インスタンスが示されます。標準電子メールの通知を構成する場合は、受信者および関連付けられている情報を追加できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ プラグインのタイプ。構成済みの送信アラート プラグインのタイプ（標準の E メール、REST、SNMP トラップ、およびログ ファイル）を 1 つ選択します。 ■ インスタンス。プラグインのタイプに対して構成されたインスタンスを選択します。 ■ 受信者。（標準の E メール プラグインのみ）アラート通知が含まれる E メール メッセージの送信先となる個々の受信者の E メール アドレスを入力します。複数の受信者に送信する場合は、アドレス間にセミコロン (;) を使用します。 ■ 再通知する。（標準の電子メール プラグインのみ）アクティブ アラートの通知メッセージ間の経過時間（分）。テキスト ボックスを空白のままにして、アラートあたりメッセージを 1 つだけ送信します。 ■ 最大通知数。（標準の電子メール プラグインのみ）アクティブ アラートの通知の送信回数。テキスト ボックスを空白のままにして、アラートあたりメッセージを 1 つだけ送信します。 ■ 通知の遅延。（標準の電子メール プラグインのみ）新規アラートの生成時に通知を送信するまでの遅延時間（分）。たとえば、遅延が 10 分の場合に新規アラートが生成されると、通知は 10 分間送信されません。その 10 分の間にアラートがキャンセルされると、通知は送信されません。通知の遅延を設定することで、その時間内にキャンセルされたアラートの通知数が削減されます。 ■ 説明。E メール メッセージに含めるテキストを入力します。たとえば、「ホスト管理チーム宛て」などです。
スコープ	<p>アラート通知をフィルタリングする対象の全般オブジェクト タイプ。</p> <p>タイプを選択した後に特定のインスタンスを選択します。たとえば、[オブジェクト] を選択する場合は、名前で特定のオブジェクトを選択し、子オブジェクトを含めるかどうかを決定します。</p>
通知トリガー	<p>アラートをトリガーするアラート タイプとサブタイプ、影響、または定義。</p> <p>トリガ タイプを選択したら、トリガ タイプに関連付けられている特定の選択を構成します。たとえば、[アラートの定義] を選択する場合は、データをこの定義によるアラートに制限するアラート定義を選択します。</p>
重要度	外部システムに送信されるデータを決定するアラートの定義された重要度。たとえば、[重大] を選択する場合は、外部システムに送信されるデータにも「重大」のラベルを付ける必要があります。
アラート状態	アラートの管理された状態（オープン、割り当て済み、サスペンド中）。
アラート ステータス	アラートの現在の状態（キャンセル済み、更新済み、新規）。
Collector	環境内の構成済みコレクタ。たとえば、複数の vCenter Server インスタンスを管理する環境では、1 つのインスタンスに対して 1 つのコレクタを選択できます。

部門のオブジェクトに対するアラート定義の作成

仮想インフラストラクチャ管理者は、会計部門で使用される仮想マシンとホストについて管理責任があります。アラートを作成して、会計部門のオブジェクトを管理できます。

会計アプリケーションの使用時に発生する遅延についてユーザーからいくつかの苦情を受け取ったとします。

vRealize Operations Manager を使用して、その問題が CPU の割り当てとワークロードに関連することを識別しました。問題を適切に管理するため、症状に関するより厳密なパラメータを使用してアラート定義を作成し、さらに問題が発生する前にアラートを追跡して問題を特定できるようにします。

このシナリオを使用して、会計オブジェクトを監視し、問題が発生したときにすぐ通知を送信する監視システムを作成します。

アラート定義への説明および基本オブジェクトの追加

会計部門の仮想マシンの CPU を監視し、その仮想マシンが動作するホストのホスト メモリを監視するアラートを作成するには、まずそのアラートについて記述することから始めます。

アラート定義に名前を付け、アラートの影響情報を定義するときには、そのアラートに関する情報を vRealize Operations Manager で表示する方法を指定します。基本オブジェクトは、アラート定義の作成のベースになるものです。症状は、基本オブジェクトと関連オブジェクトについて定義できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックします。
- 2 [アラートの定義] をクリックします。
- 3 プラス記号をクリックして定義を追加します。

- 4 名前と説明を入力します。

このシナリオでは、問題の概要が一目で分かるように、アラート名として **Acct VM CPU early warning** と入力します。説明は、詳細な概要になりますので、できるだけ有用な情報を含めてください。アラートが生成されると、この名前と説明がアラート リストと通知に表示されます。

- 5 [基本オブジェクト タイプ] をクリックします。
- 6 ドロップダウン メニューから、[vCenter アダプタ] を展開し、[ホスト システム] を選択します。

会計部門で使用されている仮想マシン上の CPU 過負荷の可能性を早期警告する目的でアラートが必要とされているため、このアラートはホスト システムに基づいています。ホスト システムを基本オブジェクト タイプとして使用することにより、各仮想マシンのアラートに応答するのではなく、バルク アクションによって仮想マシンのアラート症状に応答することができます。

- 7 [アラートの影響] をクリックし、このアラート定義のメタデータを構成します。

- a [影響] ドロップダウン メニューから、[リスク] を選択します。

このアラートは、潜在的な問題を示し、近い将来に注意が必要になります。

- b [重要度] ドロップダウン メニューから、[緊急] を選択します。

将来的な問題であることを示すリスク アラートについては、高い重要度を付与し、適切な処理が施されるようにランク付けできます。早期警告として設計されているため、この構成には組み込みバッファが含まれており、リスク アラートは重大リスクではなく緊急リスクとされます。

- c [アラート タイプとアラート サブタイプ] ドロップダウン メニューから、[仮想化/ハイパーバイザー] を展開し、[パフォーマンス] を選択します。

- d 症状が true になった後の最初の収集サイクル中にアラートが生成されるようにするには、[待機サイクル] を **1** に設定します。
- e 症状がトリガーされなくなったらすぐにアラートが削除されるようにするには、[キャンセル サイクル] を **1** に設定します。

症状が true でなくなると、アラートは次の収集サイクルでキャンセルされます。

これらのアラートの影響オプションにより、生成されるときにアラートを識別して優先順位付けすることができます。

結果

アラートの定義は、名前と説明を入力し、ホスト システムを基本オブジェクト タイプとして選択し、アラートの生成時に表示されるデータを定義することから開始しました。

次のステップ

続いて、ワークスペースでアラート定義に症状を追加します。 [アラート定義への仮想マシンの CPU 使用量症状の追加](#) を参照してください。

アラート定義への仮想マシンの CPU 使用量症状の追加

会計部門の仮想マシンでの CPU 使用量に関連したアラートを生成するには、アラートに関する基本的な説明を入力した後に、症状を vRealize Operations Manager のアラート定義に追加します。追加する最初の症状は、仮想マシンでの CPU 使用量に関連する症状です。後でポリシーおよびグループを使用して、会計部門の仮想マシンにアラートを適用します。

このシナリオには、会計部門の仮想マシンの症状と、仮想マシンが実行されているホストを監視するための症状の、2 つの症状を構成します。

前提条件

アラート定義の構成を開始します。 [アラート定義への説明および基本オブジェクトの追加](#) を参照してください。

手順

- 1 [アラートの定義のワークスペース] ウィンドウで、[名前と説明]、[基本オブジェクト タイプ]、および[アラートの影響] を構成した後、[症状の定義の追加] をクリックして症状を構成します。
- 2 仮想マシンの CPU 使用量に関連する症状設定の構成を開始します。
 - a [定義対象] ドロップダウン メニューで、[子] を選択します。
 - b [オブジェクト タイプによるフィルタリング] ドロップダウン メニューで、[仮想マシン] を選択します。
 - c [症状の定義のタイプ] ドロップダウン メニューで、[メトリック/スーパーメトリック] を選択します。
 - d [追加] ボタンをクリックして、[症状の定義の追加] ワークスペース ウィンドウを開きます。

3 [症状の定義の追加] ワークスペース ウィンドウで、仮想マシンの CPU 使用量の症状を構成します。

- a [基本オブジェクト タイプ] ドロップダウン メニューから、[vCenter アダプタ] を展開し、[仮想マシン] を選択します。

仮想マシンについて収集されたメトリックがリストに表示されます。

- b メトリック名を検索するためのメトリック リストの [検索] テキスト ボックスに、**使用率** と入力します。
- c リストで [CPU] を展開し、[使用率 (%)] を右側のワークスペースにドラッグします。
- d しきい値ドロップダウン メニューで、[動的しきい値] を選択します。

動的しきい値では、vRealize Operations Manager 分析を使用してオブジェクトの傾向メトリック値を識別します。

- e [症状の定義の名前] テキスト ボックスに、**VM CPU Usage above trend** のような名前を入力します。
- f 重要度のドロップダウン メニューで、[警告] を選択します。
- g しきい値ドロップダウン メニューで、[しきい値を超過] を選択します。
- h [待機サイクル] と [キャンセル サイクル] は、デフォルト値 3 のままにします。

[待機サイクル] 設定では、症状がトリガーされるまでに、3 収集サイクルに渡って症状条件が true となる必要があります。この待機により、CPU 使用量が短期間急増した場合には、症状がトリガーされないようにします。

- i [保存] をクリックします。

使用量が追跡済みの傾向を上回ったときを識別する動的な症状が、症状リストに追加されます。

4 [アラートの定義のワークスペース] ウィンドウで、症状定義リストから右側の症状のワークスペースに [VM CPU Usage above trend] をドラッグします。

子 - 仮想マシン症状セットが、症状のワークスペースに追加されます。

5 この症状セットで、このアラート定義が適用されるグループの仮想マシンの半分で症状が true になった場合に症状セットが true になるように、トリガー条件を構成します。

- a [値演算子] ドロップダウン メニューで、[>] を選択します。
- b [値] テキスト ボックスに、**50** と入力します。
- c [値タイプ] ドロップダウン メニューで、[パーセント] を選択します。

結果

アラート定義の最初の症状セットが定義されました。

次のステップ

ホストのメモリ使用量症状をアラート定義に追加します。 [アラート定義へのホスト メモリ使用率症状の追加](#) を参照してください。

アラート定義へのホスト メモリ使用率症状の追加

会計部門の仮想マシンでの CPU 使用量に関連したアラートを生成するには、最初の症状を追加した後に、2 つ目の症状を vRealize Operations Manager のアラート定義に追加します。2 つ目の症状は、会計部門の仮想マシンが実行されているホストのホスト メモリ使用量に関連しています。

前提条件

仮想マシンの CPU 使用量の症状を追加します。 [アラート定義への仮想マシンの CPU 使用量症状の追加](#) を参照してください。

手順

- 1 [アラートの定義のワークスペース] ウィンドウで、[名前と説明]、[基本オブジェクト タイプ]、および [アラートの影響] を構成した後、[症状の定義の追加] をクリックします。
- 2 仮想マシンのホスト システムに関連する症状を構成します。
 - a [定義対象] ドロップダウン メニューで、[自己] を選択します。
 - b [症状の定義のタイプ] ドロップダウン メニューで、[メトリック/スーパーメトリック] を選択します。
 - c [追加] ボタンをクリックして、新しい症状を構成します。
- 3 [症状の定義の追加] ワークスペース ウィンドウで、ホスト システムの症状を構成します。
 - a [基本オブジェクト タイプ] ドロップダウン メニューで、[vCenter アダプタ] を展開して [ホスト システム] を選択します。
 - b メトリック リストで、[メモリ] を展開して、[使用率 (%)] を右側のワークスペースにドラッグします。
 - c しきい値ドロップダウン メニューで、[動的しきい値] を選択します。

動的しきい値では、vRealize Operations Manager 分析を使用してオブジェクトの傾向メトリック値を識別します。

- d [シンプトムの定義の名前] テキスト ボックスに、**Host memory usage above trend** のような名前を入力します。
- e 重要度のドロップダウン メニューで、[警告] を選択します。
- f しきい値ドロップダウン メニューで、[しきい値を超過] を選択します。
- g [待機サイクル] と [キャンセル サイクル] は、デフォルト値 3 のままにします。

[待機サイクル] 設定では、シンプトムがトリガーされるまでに、3 つの収集サイクルに渡ってシンプトム条件が true となる必要があります。この待機により、ホスト メモリ使用量が短期間急増した場合には、シンプトムがトリガーされないようにします。

- h [保存] をクリックします。

動的なシンプトムにより、会計部門の仮想マシンが実行されているホストで、メモリ使用量の追跡済みの傾向を上回ったときを識別します。

動的な症状は症状リストに追加されます。

- 4 [アラートの定義のワークスペース] ウィンドウで、症状リストから右側の症状のワークスペースに [Host memory usage above trend] をドラッグします。

自己 - ホスト システム症状セットが、症状のワークスペースに追加されます。

- 5 自己 - ホスト システムシムptomセットで、[このシムptomセットは、次の場合に true です] の [値タイプ] ドロップダウン メニューから [任意] を選択します。

この構成では、会計仮想マシンが実行されているホストのいずれかでメモリ使用量が分析済みの傾向を上回ると、症状条件が true になります。

- 6 症状セット リストの上部にある [次の症状のうち {operator} と一致] ドロップダウン メニューで、[任意] を選択します。

この構成では、2 つの症状セット（仮想マシンの CPU 使用量またはホスト メモリ）のいずれかがトリガーされると、そのホストについてのアラートが生成されます。

結果

アラート定義の 2 つ目の症状セットが定義され、2 つの症状セットを評価してアラートの生成時期を決定する方法が構成されました。

次のステップ

アラート定義に推奨事項を追加して、自分とエンジニアが、生成されるアラートを解決する方法について知ることができるようにします。 [アラート定義への推奨事項の追加](#) を参照してください。

アラート定義への推奨事項の追加

会計部門の仮想マシンについて生成されたアラートを解決するため、推奨事項を作成して、ユーザー側でパフォーマンス問題が発生する前に自分または他のエンジニアがアラートを解決するために必要な情報を提供します。

アラート定義の一環として、vRealize Operations Manager から実行するアクションや vCenter Server に変更を加える場合の指示など、生成されたアラートを解決するための推奨事項を追加します。

前提条件

アラート定義に症状を追加します。 [アラート定義へのホスト メモリ使用率症状の追加](#) を参照してください。

手順

- 1 [アラートの定義のワークスペース] ウィンドウで、[名前と説明]、[基本オブジェクト タイプ]、[アラートの影響]、および [症状の定義の追加] を構成した後、[推奨事項の追加] をクリックして推奨されるアクションおよび指示を追加します。
- 2 [追加] をクリックし、仮想マシンのアラートを解決するためのアクション推奨事項を選択します。
 - a [新しい推奨事項] テキスト ボックスに、**Add CPUs to virtual machines** のようなアクションの説明を入力します。
 - b [アクション] ドロップダウン メニューから、[仮想マシン用 CPU 数の設定] を選択します。
 - c [保存] をクリックします。

- 3 [追加] をクリックし、この例を参考にして、ホスト メモリの問題を解決するための推奨事項としての指示を追加します。

このホストが DRS クラスタの一部である場合は、DRS を確認して、ロード バランシングの設定が正しく構成されていることを検証します。必要な場合は、仮想マシンの vMotion を手動で行います。

- 4 [追加] をクリックし、ホスト メモリのアラートを解決するための推奨事項としての指示を追加します。
 - a この例のような推奨事項の説明を入力します。
スタンドアロン ホストの場合は、ホストにメモリを追加します。
 - b 指示中の URL をハイパーリンクにするには、URL（例、<https://www.vmware.com/support/pubs/vsphere-esxi-vcenter-server-pubs.html>）をクリップボードにコピーします。
 - c テキスト ボックスでテキストをハイライト表示して、[ハイパーリンクの作成] をクリックします。
 - d [ハイパーリンクの作成] テキスト ボックスに URL を貼り付け、[OK] をクリックします。
 - e [保存] をクリックします。
- 5 [アラートの定義のワークスペース] で、[Add CPUs to virtual machines]、[If this host is part of a DRS cluster]、および [If this is a standalone host] の各推奨事項を、表示されている順序でリストから推奨事項ワークスペースにドラッグします。
- 6 [保存] をクリックします。

結果

これで、生成されるアラートを解決するために推奨されるアクションおよび指示が作成されました。作成した推奨事項のうちの 1 つは仮想マシンの CPU 使用率問題の解決に使用でき、もう一方はホストのメモリ問題の解決に使用できます。

次のステップ

オブジェクトのグループを作成して、会計オブジェクトの管理に使用します。 [カスタム会計部門グループの作成](#) を参照してください。

カスタム会計部門グループの作成

グループとして会計オブジェクトを管理、監視、ポリシーの適用を行うには、カスタム オブジェクト グループを作成します。

前提条件

このシナリオのアラート定義を完了していることを確認します。 [アラート定義への推奨事項の追加](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] アイコンをクリックします。
- 2 [グループ] タブをクリックします。
- 3 [新規グループ] をクリックします。

4 **Accounting VMs and Hosts** のような名前を入力します。

5 [グループ タイプ] ドロップダウン メニューから [部門] を選択します。

6 [ポリシー] ドロップダウン メニューから [デフォルト ポリシー] を選択します。

ポリシーを作成する場合は、新規ポリシーを会計グループに適用します。

7 [メンバーシップ基準の定義] 領域の [以下の基準に適合するオブジェクト タイプを選択する] ドロップダウン メニューで、[vCenter アダプタ] を展開し、[ホスト システム] を選択して、動的グループ基準を構成します。

a [基準] ドロップダウン メニューから [関係] を選択します。

b [関係オプション] ドロップダウン メニューから、[親] を選択します。

c [演算子] ドロップダウン メニューから [含む内容] を選択します。

d [オブジェクト名] テキスト ボックスに、**acct** と入力します。

e ナビゲーション ツリーのドロップダウン リストで、[vSphere ホストおよびクラスタ] を選択します。

仮想マシン名に acct を含む仮想マシンのホストであるホスト オブジェクトが含まれる、動的グループが作成されました。オブジェクト名に acct を含む仮想マシンをホストに追加または移動すると、そのホスト オブジェクトがグループに追加されます。

8 ワークスペースの左下にある [プレビュー] をクリックし、オブジェクト名に acct を含む仮想マシンが実行されているホストが [グループのプレビュー] ウィンドウに表示されることを確認します。

9 [閉じる] をクリックします。

10 [別の基準セットの追加] をクリックします。

2 つの基準セットの間に新しい基準セットが OR 演算子を使用して追加されます。

11 [以下の基準に適合するオブジェクト タイプを選択する] ドロップダウン メニューで、[vCenter アダプタ] を展開し、[仮想マシン] を選択して、動的グループ基準を構成します。

a [基準] ドロップダウン メニューで、[プロパティ] を選択します。

b [プロパティの選択] ドロップダウン メニューで、[構成] を展開し、[名前] をダブルクリックします。

c [演算子] ドロップダウン メニューから [含む内容] を選択します。

d [プロパティ値] テキスト ボックスに、**acct** と入力します。

オブジェクト名に acct を含む仮想マシン オブジェクトが含まれている動的グループが作成されました。このグループは、それらの仮想マシンが存在することに依存します。名前に acct を含む仮想マシンを使用環境に追加すると、その仮想マシンはグループに追加されます。

12 ワークスペースの左下にある [プレビュー] をクリックし、オブジェクト名に acct を含む仮想マシンが、ホスト システムも含まれるリストに追加されていることを確認します。

13 [閉じる] をクリックします。

14 [OK] をクリックします。

Accounting VMs and Hosts グループがグループ リストに追加されます。

結果

名前に acct を含む仮想マシンが使用環境内で追加、削除、および移動されるのに伴って変化する、動的オブジェクト グループが作成されました。

次のステップ

vRealize Operations Manager でアラート定義を使用して使用環境を監視する方法を判別するポリシーを作成します。 [会計アラートのポリシーの作成](#) を参照してください。

会計アラートのポリシーの作成

使用環境内の会計アラート定義を vRealize Operations Manager で評価する方法を構成するには、動作を決定するポリシーを構成して、そのポリシーをオブジェクト グループに適用できるようにします。ポリシーにより、アラート定義の適用を選択したオブジェクト グループのメンバーに限定します。

作成したアラート定義は、デフォルトのポリシーに追加されて有効化されます。これにより、作成するすべてのアラート定義が環境内で確実にアクティブになります。このアラート定義は会計部門のニーズを満たすよう意図されているため、デフォルトのポリシーでは無効にして、監視する会計仮想マシンと関連ホストを含め、環境内でこのアラート定義を評価する方法を決定する新しいポリシーを作成します。

前提条件

- このシナリオのアラート定義を完了していることを確認します。 [アラート定義への推奨事項の追加](#) を参照してください。
- 会計オブジェクトの管理に使用するオブジェクトのグループが作成されていることを確認します。 [カスタム会計部門グループの作成](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。
- 2 [ポリシー] をクリックし、[ポリシー ライブラリ] をクリックします。
- 3 [新規ポリシーの追加] をクリックします。
- 4 **Accounting Objects Alerts Policy** のような名前を入力し、次の例に示すような分かりやすい説明を入力します。

```
This policy is configured to generate alerts when
Accounting VMs and Hosts group objects are above trended
CPU or memory usage.
```

- 5 [基本ポリシーの選択] をクリックし、[以下で始まる] ドロップダウン メニューで [デフォルト ポリシー] を選択します。

- 6 左側で、[アラートの定義および症状の定義のカスタマイズ] をクリックし、新しい Acct VM CPU early warning アラート以外のすべてのアラート定義を無効にします。
 - a [アラートの定義] 領域で、[アクション] をクリックし、[すべて選択] を選択します。
現在のページのアラートが選択されます。
 - b [アクション] をクリックし、[無効化] を選択します。
アラートの [状態] 列に [無効] と表示されます。
 - c アラート リストの各ページでこのプロセスを繰り返します。
 - d リストで、[Acct VM CPU early warning] を選択し、[アクション] をクリックして [有効化] を選択します。
Acct VM CPU early warning が有効になります。
- 7 左側で、[グループへのポリシーの適用] をクリックして、[Accounting VMs and Hosts] を選択します。
- 8 [保存] をクリックします。

結果

会計部門の仮想マシンとホストにのみ適用されるカスタム ポリシー内に会計アラート定義が存在するポリシーが作成されました。

次のステップ

電子メール通知を作成し、vRealize Operations Manager をアクティブに監視していないときでもアラートについて知ることができるようにします。[部門のアラートに関する通知の構成](#) を参照してください。

部門のアラートに関する通知の構成

vRealize Operations Manager で会計部門のオブジェクトを全般的に監視する自分の能力に頼るのではなく、会計部門のアラートが生成されたときに電子メール通知を受け取るようにするには、通知ルールを作成します。

会計アラート発生時の電子メール通知の作成はオプションのプロセスですが、vRealize Operations Manager で現在作業していない場合でもアラートを受け取ることができます。

前提条件

- このシナリオのアラート定義を完了していることを確認します。[アラート定義への推奨事項の追加](#) を参照してください。
- システムで標準の電子メール送信アラートが構成済みであることを確認します。[vRealize Operations Manager 送信アラートの標準の電子メール プラグインの追加](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックします。
- 2 [通知] をクリックし、プラス記号をクリックして、通知ルールを追加します。

3 通信オプションを構成します。

- a [名前] テキスト ボックスに、**Acct Dept VMs or Hosts Alerts** のような名前を入力します。
- b [プラグイン タイプの選択] ドロップダウン メニューで、[StandardEmailPlugin] を選択します。
- c [インスタンスを選択] ドロップダウン メニューで、メッセージを送信するように構成された標準の電子メール インスタンスを選択します。
- d [受信者] テキスト ボックスに、自分の電子メール アドレスと、会計部門のアラートを担当する他の受信者のアドレスを入力します。受信者間はセミコロンで区切ります。
- e [再度通知する] テキスト ボックスは空白のままにします。

値を入力しない場合、電子メール通知は一度だけ送信されます。このアラートはリスク アラートであり、緊急の対応を要求するのではなく、早期警告を発することを意図しています。

送信される際の通知名と、メッセージの送信に使用される方法を構成しました。

4 [フィルター基準] 領域で、会計アラートの通知トリガーを構成します。

- a [通知トリガー] ドロップダウン メニューで、[アラートの定義] を選択します。
- b [クリックしてアラートの定義を選択] をクリックします。
- c [Acct VM CPU early warning] を選択し、[選択] をクリックします。

5 [保存] をクリックします。**結果**

会計部門のアラート定義に従ってアラートが生成されたときに、自分と指名されたエンジニアに電子メール メッセージを送信する通知ルールが作成されました。

次のステップ

アラート関連ウィジェットでダッシュボードを作成して、会計オブジェクト グループのアラートを監視できるようにします。 [部門のオブジェクトを監視するためのダッシュボードの作成](#) を参照してください。

部門のオブジェクトを監視するためのダッシュボードの作成

会計部門のオブジェクト グループに関連するすべてのアラートを監視するには、アラート リストとその他のウィジェットを含むダッシュボードを作成します。関連するすべてのオブジェクトのアラート データをまとめてダッシュボードに表示します。

会計仮想マシンと関連ホストを監視するダッシュボードの作成は任意ですが、これにより会計オブジェクト グループアラートおよびオブジェクトがまとめて表示されます。

前提条件

会計部門の仮想マシンと関連オブジェクトのオブジェクト グループを作成します。 [カスタム会計部門グループの作成](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックして、[ダッシュボード] をクリックします。
- 2 [[Add]] をクリックします。
- 3 [ダッシュボードの構成] 定義領域で、**Accounting VMs and Hosts** のようなタブ名を入力し、レイアウト オプションを構成します。
- 4 [ウィジェット リスト] をクリックし、次のウィジェットをワークスペースにドラッグします。

- [アラート リスト]
- [効率]
- [健全性]
- [リスク]
- [トップ アラート]
- [アラート ボリューム]

空白ウィジェットがワークスペースに追加されます。表示順を変更するには、ワークスペースの別の場所へウィジェットをドラッグします。

- 5 アラート リスト ウィジェットのタイトル バーで、[ウィジェットの編集] をクリックし、設定を構成します。

- a [タイトル] テキスト ボックスで、タイトルを **Acct Dept Alert List** に変更します。
- b [内容の更新] オプションで、[オン] を選択します。
- c [検索] テキスト ボックスに **Accounting** と入力し、[検索] をクリックします。

Accounting という値は、会計部門の仮想マシンと関連ホストのオブジェクト グループ名に対応します。

- d フィルタリングされたリソース リストで、[Accounting VMs and Hosts] グループを選択します。

Accounting VMs and Hosts グループが [選択したリソース] テキスト ボックスで強調表示されます。

- e [OK] をクリックします。

Accounting VMs and Hosts グループ オブジェクトのアラートを表示するように Acct Dept Alert List が構成されます。

- 6 [ウィジェットの相互作用] をクリックし、次の相互作用を構成します。

- a Acct Dept Alert List では、選択したリソースを空白にしておきます。
- b [トップ アラート]、[健全性]、[リスク]、[効率]、および [アラート ボリューム] について、[選択したリソース] ドロップダウン メニューで [Acct Dept Alert List] を選択します。
- c [相互作用の適用] をクリックします。

ウィジェットの相互作用をこのように構成すると、Acct Dept Alert List の選択アラートは、その他のウィジェットにおけるデータのソースになります。このアラート リストでアラートを選択すると、[健全性]、[リスク]、および [効率] ウィジェットには当該オブジェクトのアラートが表示され、[トップ アラート] には当該オブジェクトの健全性に影響する上位の問題が表示され、[アラート ボリューム] にはアラート トレンド チャートが表示されます。

7 [保存] をクリックします。

結果

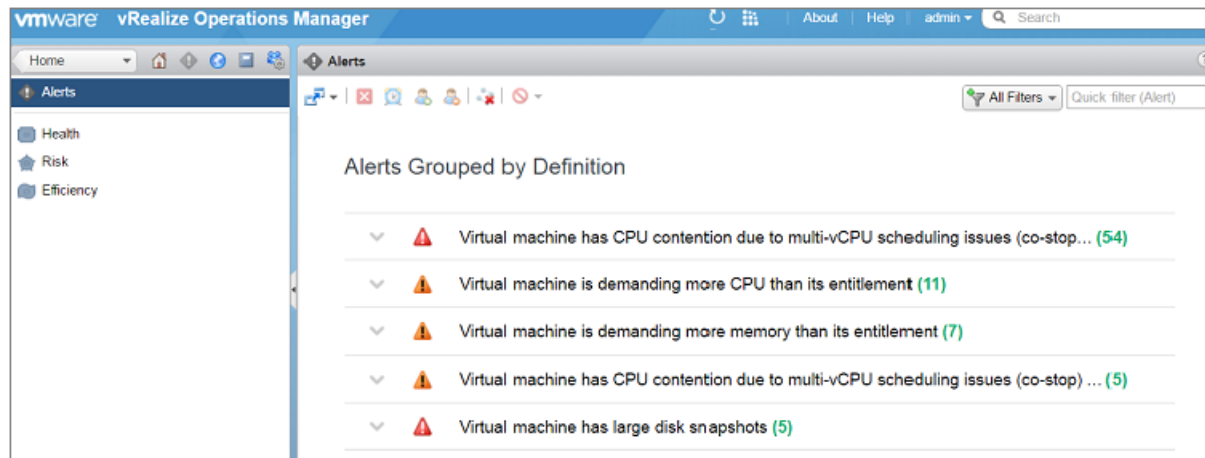
作成したリスク アラートを含む、会計仮想マシンとホスト グループに関連するアラートを表示するダッシュボードが作成されました。

アラート グループ

アラートを簡単かつ効率的に管理するため、必要に応じてグループとして整理することができます。

大規模な環境では、さまざまな種類のアラートを受け取るために問題の特定は複雑になります。アラートを簡単に管理するには、アラートをその定義でグループ化します。

たとえば、システムに 1,000 個のアラートが存在する場合を考えてください。さまざまなタイプのアラートを識別するために、アラートの定義に基づいてアラートをグループ化します。また、グループで最も高い重要度のアラートを容易に確認できます。




アラートをグループ化した場合、同じアラート定義のアラートがトリガした回数を確認できます。アラートをグループ化することによって、次のタスクを素早く簡単に実行できます。

- 最もノイズが多いアラートの確認：トリガした回数が最も多いアラートは、ノイズが多いアラートと呼ばれています。このようなノイズを確認した後、以降のノイズを回避するために無効にできます。

- アラートのフィルタ：アラートの定義の部分文字列に基づいてアラートをフィルタできます。この結果、この部分文字列を含むアラートのグループが表示されます。


注：

- アラート グループをキャンセルまたは無効にすると、アラートは即座にはキャンセルされません。グループが大規模な場合、ある程度時間がかかることがあります。
- 一度に 1 つのグループのみを展開できます。
- グループの横に示された番号は、その特定のグループ内のアラート数です。
- 重要度の記号  は、グループ内で最高レベルのアラートの重要度を示します。

アラートのグループ化

アラートをグループ化するには、次の手順に従います。


手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインの [アラート] をクリックします。
- 2  をクリックして、アラートをグループ化します。

アラートのグループ解除

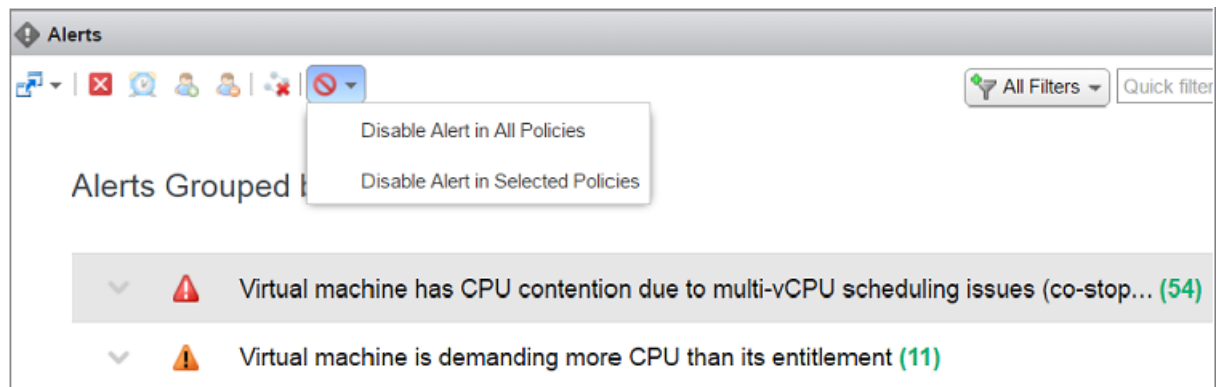
あらあとのぐるうぶかいじよ

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインの [アラート] をクリックします。
- 2  をクリックして、アラートのグループを解除します。

アラートの無効化

アラート グループで、1 回クリックしてアラートを無効にできます。



アラートは次の 2 つの方法で無効にできます。

- すべてのポリシーでアラートを無効化：すべてのポリシーのすべてのオブジェクトでアラートを無効にします。
- 選択したポリシーでアラートを無効化：選択したポリシーが含まれるオブジェクトでアラートを無効にします。
この方法は、アラートを設定したオブジェクトのみで機能することに注意してください。

アクションの構成

アクションを使用すると、監視対象システムのオブジェクトを更新したり、オブジェクトに関するデータを読み取ることができます。アクションは通常、ソリューションの一部として vRealize Operations Manager で提供されています。ソリューションによって追加されたアクションは、オブジェクトの [アクション] メニュー、リストおよび表示メニュー（一部のダッシュボード ウィジェットを含む）で使用できます。また、アラートの定義の推奨に追加することもできます。

アクションには、読み取りアクションと更新アクションがあります。

読み取りアクションは、ターゲット オブジェクトからデータを取得します。

更新アクションは、ターゲット オブジェクトを変更します。たとえば、アラート定義を構成して、仮想マシンでメモリに関する問題が発生したときにその通知を受け取ることができます。仮想マシン用メモリの設定アクションを実行するアクションを推奨に追加します。このアクションによって、メモリが増加し、アラート発生の考えられる原因を解決します。

vCenter Server オブジェクトのアクションを表示または使用するには、監視対象の各 vCenter Server インスタンスについて、vCenter Adapter でアクションを有効にする必要があります。必要な権限がある場合にのみ、アクションを表示およびアクセスできます。

vRealize Operations Manager アクションのリスト

アクションのリストには、アクションの名前、各アクションで変更されるオブジェクト、アクションを実行できるオブジェクト レベルが含まれています。この情報を使用して、アラートの推奨事項に従ってアクションを正しく確実に適用し、アクションが [アクション] メニューに表示されるタイミングを確認します。

アクションと変更されるオブジェクト

vRealize Operations Manager アクションでは、管理対象の vCenter Server インスタンス内のオブジェクトを変更します。

vRealize Operations Manager でユーザーにアクションのアクセス権を与えると、そのユーザーは、vRealize Operations Manager 以外でアクセス可能なオブジェクトだけでなく、vRealize Operations Manager が管理するすべてのオブジェクトへのアクションが許可されます。

アクションのオブジェクト レベル

さまざまなオブジェクト レベルで作業するときにアクションを利用できますが、アクションによって変更されるのは特定のオブジェクトだけです。クラスタ レベルで作業しており、[仮想マシンのパワーオン] を選択すると、アクセス権限を持つクラスタ内のすべての仮想マシンでアクションを実行できます。仮想マシン レベルで作業しているときは、選択した仮想マシンのみを利用できます。

表 4-73. vRealize Operations Manager アクションで影響を受けるオブジェクト

操作	変更されたオブジェクト	オブジェクト レベル
コンテナのリバランス	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ データセンター ■ カスタム データセンター
アイドル状態の仮想マシンの削除	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
DRS 自動化の設定	クラスタ	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ
仮想マシンの移動	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシン
仮想マシンのパワーオフ	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
仮想マシンのゲスト OS のシャットダウン	仮想マシン このアクションを実行するには、VMware Tools がインストールされ、ターゲット仮想マシン上で実行されている必要があります。	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
仮想マシンのパワーオン	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
パワーオフ状態の仮想マシンの削除	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
仮想マシン用メモリの設定 および パワーオフ可の仮想マシンのメモリの設定	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
仮想マシン用メモリ リソースの設定	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
仮想マシン用 CPU 数の設定 および パワーオフ可の仮想マシンの CPU 数の設定	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
仮想マシン用 CPU リソースの設定	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
仮想マシン用 CPU 数およびメモリの設定 および パワーオフ可の仮想マシンの CPU 数とメモリの設定	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン

表 4-73. vRealize Operations Manager アクションで影響を受けるオブジェクト（続き）

操作	変更されたオブジェクト	オブジェクト レベル
仮想マシンの未使用スナップショットの削除	スナップショット	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
データストアの未使用のスナップショットの削除	スナップショット	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ データストア ■ ホスト システム

vRealize Operations Manager のアクションの概要リスト

アクションとは、管理対象オブジェクトに対する構成変更に使用するメソッドのことで、vRealize Operations Manager から起動します。アクション リストのアクションは、アラート推奨に追加できます。

アクションの概要リストの動作

アクションは、さまざまなオブジェクト レベルにあるターゲット オブジェクトに対して実行するように定義します。これにより、さまざまな基本オブジェクトに設定されるアラートの定義の推奨としてアクションを追加できます。アクションの概要は、環境で使用可能なアクションのリストです。

アクションの概要リストを確認できる場所

使用可能なアクションを確認するには、左側のペインで、[内容] - [アクション]を選択します。

表 4-74. アクションの概要のオプション

オプション	説明
フィルタ オプション	リストを、フィルタに一致するアクションに限定します。
アクション名	アクションの名前。名前が重複している場合は、アクション名が複数のアダプタによって提供されているか、アクション名に複数のオブジェクトが関連付けられていることを示します。
アクション タイプ	アクションが実行するアクションのタイプ。読み取りと更新の 2 つのタイプがあります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 更新アクションは、ターゲット オブジェクトを変更します。 ■ 読み取りアクションは、ターゲット オブジェクトからデータを取得します。
アダプタ タイプ	アクションを提供する構成済みアダプタの名前。
リソース アダプタ タイプ	アクションを提供するアダプタ。
関連付けられたオブジェクト タイプ	アクション インスタンスが実行されるオブジェクト レベルを示します。
推奨	アクションが少なくとも 1 つの推奨で使用されているかどうかを示します。

データストアの使用されていないスナップショットの削除エクспレス アクションと 仮想マシンの使用されていないスナップショットの削除エクспレス アクションが表示されますが、これらは最初推奨事項がこのアクションと関連付けられているアラートからユーザー インターフェイスでのみ実行できます。これらのアクションの実行には REST API を使用できます。

パワーオフ可の仮想マシンのメモリの設定、パワーオフ可の仮想マシンの CPU 数の設定、および パワーオフ可の仮想マシンの CPU 数とメモリの設定 の各アクションも表示されませんが、アラートの推奨事項においては表示されます。これらのアクションは、パワーオフ可 フラグが真に設定されているアクションを自動化するために使用します。

自動化に対応するアクション

推奨事項は、アラートによって示された問題を修正する方法を特定できます。これらの推奨事項の一部を、vRealize Operations Manager インスタンスで定義されているアクションに関連付けることができます。推奨事項がそのアラートで優先順位が最も高いものである場合は、アラートに対する複数の修正アクションを自動化できます。

実行可能なアラートはポリシーで有効にします。デフォルトでは、自動化はポリシーで無効化されています。ポリシーで自動化を構成するには、[自動化] - [ポリシー] - [ポリシー ライブラリ] を選択します。次に、ポリシーを編集し、[アラート/シンプトム定義] ワークスペースにアクセスし、[アラートの定義] ペインの [自動化] 設定で [ローカル] を選択します。

アクションが自動化されている場合は、[管理] - [最近のタスク] の [自動化] 列と [アラート] 列を使用して、自動化アクションを特定し、そのアクションの結果を確認できます。

- vRealize Operations Manager は [automationAdmin] ユーザー アカウントを使用して、自動化アクションをトリガします。アラートによってトリガされるこれらの自動化アクションでは、[送信者] 列に [automationAdmin] ユーザーが表示されます。
- [アラート] 列にはそのアクションをトリガしたアラートが表示されます。推奨事項に関連付けられているアラートがトリガされると、ユーザーによる操作なしにアクションがトリガされます。

次のアクションは自動化に対応しています。

- パワーオフ状態の仮想マシンの削除
- アイドル状態の仮想マシンの削除
- 仮想マシンの移動
- 仮想マシンのパワーオフ
- 仮想マシンのパワーオン
- 仮想マシン用 CPU 数およびメモリの設定
- パワーオフ可の仮想マシンの CPU 数とメモリの設定
- 仮想マシン用 CPU 数の設定
- パワーオフ可の仮想マシンの CPU 数の設定
- 仮想マシン用 CPU リソースの設定
- 仮想マシン用メモリの設定
- パワーオフ可の仮想マシンのメモリの設定
- 仮想マシン用メモリ リソースの設定
- 仮想マシンのゲスト OS のシャットダウン



アラートとアクションを使用して自動化する方法

(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_vrealize_alerts_actions_automation)



関連アクションのあるアラートを自動化する方法

(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_vrom_automate_alert_with_action)



シンプトム定義とアクションにより新規アラートを作成して自動化する方法
(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_vrom_create_alert_automate_symptom_definition)

アクションの自動化に必要なロール

アクションを自動化するには、ロールに次の権限が必要です。

- [管理] - [ポリシー管理] でポリシーを作成、編集、インポートします。
- [コンテンツ] - [アラート定義管理] でアラート定義を作成、クローン作成、編集、インポートします。
- [コンテンツ] - [推奨事項管理] で推奨事項定義を作成、編集、インポートします。

重要： アクションをアラートおよび推奨事項定義とは別に実行する場合に使用する権限を設定します。アラート、推奨事項、およびポリシーを変更できるユーザーであれば、アクションを実行する権限がない場合でも、アクションを自動化することもできます。

たとえば、仮想マシンのパワーオフ アクションにアクセスできないが、アラートと推奨事項を作成および変更できる場合は、仮想マシンのパワーオフ アクションを表示し、そのアクションをアラートの推奨事項に割り当てることができます。その後、アクションをポリシーで自動化すると、vRealize Operations Manager で、`automationAdmin` ユーザーを使用してアクションが実行されます。

自動化に対応するアクションの例

「仮想マシンの CPU ワークロードが慢性的に高く、CPU ストレスの原因になっています」という名前のアラート定義では、「仮想マシン用 CPU 数の設定」という名前のアクションを自動化できます。

仮想マシンの CPU ストレスがクリティカル、緊急、または警告のレベルを超えている場合、そのアラートはユーザーによる操作なしに推奨アクションをトリガします。

vRealize Automation とのアクションの統合

vRealize Operations Manager では vRealize Automation が管理するオブジェクトへのアクションが制限され、vRealize Automation で設定された制約にアクションが違反しないようにされています。

環境内のオブジェクトを vRealize Automation で管理する場合は、これらのオブジェクトに対して vRealize Operations Manager でのアクションは使用できません。たとえば、ホストまたは親オブジェクトを vRealize Automation で管理する場合、そのオブジェクトへのアクションは使用できません。

この動作は、[仮想マシンのパワーオフ]、[仮想マシンの移動]、[コンテナのリバランス]など、すべてのアクションに適用されます。

vRealize Automation で管理されるオブジェクトに対するアクションの除外をオン/オフにすることはできません。

アクションによる管理対象オブジェクトの判別

アクションは vRealize Automation で管理されるリソース コンテナのオブジェクトをチェックして、どのオブジェクトが vRealize Automation で管理されているかを判別します。

- コンテナのリバランスなどのアクションは、データセンター コンテナまたはカスタム データセンター コンテナの子オブジェクトをチェックして、オブジェクトが vRealize Automation で管理されているかどうかを判別します。オブジェクトが管理対象であれば、これらのオブジェクトに対してアクションは表示されません。
- 仮想マシンの移動アクションは、移動する仮想マシンが vRealize Automation で管理されているかどうかを判別します。

仮想マシンが管理対象か	仮想マシンの移動アクションの結果
対象の場合	vRealize Operations Manager ユーザー インターフェイスにはその仮想マシンに対して仮想マシンの移動アクションは表示されません。
対象でない場合	仮想マシンの移動アクションにより、仮想マシンが新しいホスト、データストア、または新しいホスト/データストアに移動されます。仮想マシンの移動アクションでは、新しいホスト/データストアが vRealize Automation の管理対象であるかどうかはチェックされません。

- スナップショットの削除アクションは、仮想マシンやデータストアが vRealize Automation で管理されているかどうかを判別します。

vRealize Automation の管理対象でないオブジェクトへのアクション

vRealize Automation で管理されないホストや親オブジェクトについては、vRealize Automation の管理対象でない仮想マシンだけがアクション ダイアログに表示され、vRealize Automation で管理されない仮想マシンにだけアクションを実行できます。すべての子オブジェクトが vRealize Automation で管理されている場合は、ユーザー インターフェイスに「選択したアクションで使用可能なオブジェクトはありません」のメッセージが表示されます。

複数のオブジェクトにアクションを試みた場合

複数のオブジェクトを選択して、仮想マシンのパワーオフなどのアクションを実行しようとする、仮想マシンのパワーオフ アクション ダイアログ ボックスには、vRealize Automation の管理対象にないオブジェクトだけが表示されます（仮想マシンのサブセットが含まれることがあります）。

パワーオフ可を使用するアクションのアクション

vRealize Operations Manager に備わっている一部のアクションを実行するには、ターゲット マシンの構成に応じて仮想マシンをシャットダウンまたはパワーオフする必要があります。その場合は、アクションを実行する前に [パワーオフ可] オプションの影響を理解して、ターゲット仮想マシンに最適な方法を選択する必要があります。

パワーオフとシャットダウン

vCenter Server インスタンス上で実行できるアクションには、仮想マシンをシャットダウンするアクションと仮想マシンをパワーオフするアクションがあります。仮想マシンをパワーオフ状態にしないと実行できないアクションもあります。仮想マシンをシャットダウンするかパワーオフするかは、仮想マシンの構成方法とアクションの実行時に選択するオプションによって決まります。

シャットダウン アクションは、ゲスト OS をシャットダウンしてから仮想マシンをパワーオフします。vRealize Operations Manager から仮想マシンをシャットダウンするには、ターゲット オブジェクト上に VMware Tools がインストールされており、稼働している必要があります。

パワーオフ アクションは、ゲスト OS の状態に関係なく、仮想マシンをオフにします。その際、仮想マシンがアプリケーションを実行していると、データが失われる可能性があります。アクション（たとえば CPU 数の変更）が終了すると、仮想マシンはアクション開始時のパワー状態に戻ります。

パワーオフ可と VMware Tools

一部のオペレーティング システムでは、仮想マシン上にホット プラグが構成されている場合に限り、仮想マシンの CPU 数やメモリ容量を増やすアクションがサポートされています。一方、仮想マシンがパワーオフ状態でなければ構成を変更できないオペレーティングシステムもあります。VMware Tools が稼働していない場合にこうしたニーズに対応するため、CPU 数の設定、メモリの設定、CPU 数およびメモリの設定アクションには [パワーオフ可] オプションが用意されています。

[パワーオフ可] が選択されており、なおかつ仮想マシンが実行中であるとき、上記のアクションは、VMware Tools がインストールされており、稼働しているかどうかを確認します。

- VMware Tools がインストールされており、稼働している場合は、仮想マシンがシャットダウンされた後、アクションが完了します。
- VMware Tools が、稼働していないか、インストールされていない場合、オペレーティング システムの状態に関係なく、仮想マシンがパワーオフ状態です。

[パワーオフ可] を選択しないで、CPU 数またはメモリを減らす場合、または CPU 数またはメモリを増やすためのホットプラグが有効化されていない場合、アクションは実行されず、[最近のタスク] でエラーが報告されます。

CPU 数またはメモリ変更時の [パワーオフ可]

CPU 数とメモリ容量を変更するアクションを実行する場合は、[パワーオフ可] オプションを使用するかどうかを決定するためにさまざまな要因を考慮する必要があります。具体的な要因として、CPU 数またはメモリ容量を増やすのか減らすのか、ターゲット仮想マシンはパワーオン状態かどうか、といった点があります。CPU またはメモリ値を増やす場合は、ホット プラグが有効化されているかどうかによっても、アクション実行時のオプションの適用方法が変わります。

CPU 数またはメモリ容量を減らすときに [パワーオフ可] を使用する方法は、ターゲット仮想マシンのパワー状態によって異なります。

表 4-75. オプションに基づく CPU 数とメモリ量削減の動作

仮想マシンのパワー状態	[パワーオフ可] が選択されている	結果
オン	可	VMware Tools がインストールされ実行されている場合は、アクションによって仮想マシンのシャットダウン、CPU またはメモリの削減、マシンの再パワーオンが実行されます。 VMware Tools がインストールされていない場合は、アクションによって仮想マシンのパワーオフ、CPU またはメモリの削減、マシンの再パワーオンが実行されます。
オン	不可	アクションは仮想マシンで実行されません。
オフ	該当なし。仮想マシンがパワーオフ状態である。	アクションによって値が削減され、仮想マシンはパワーオフ状態のままです。

CPU 数またはメモリ容量を増やすときに [パワーオフ可] を使用する方法は、ターゲット仮想マシンの状態やホットプラグが有効かどうかなど、いくつかの要因によって異なります。次の情報を使用して、ターゲット オブジェクトに適用されるシナリオを決定します。

CPU 数を増やす場合は、[パワーオフ可] を適用するかどうかを決めるときに、仮想マシンのパワー状態、CPU ホットプラグが有効かどうかを検討する必要があります。

表 4-76. CPU 数を増やす動作

仮想マシンのパワー状態	CPU ホット プラグが有効	[パワーオフ可] が選択されている	結果
オン	可	不可	アクションによって CPU 数が指定した数に増加します。
オン	不可	可	VMware Tools がインストールされ実行されている場合は、アクションによって仮想マシンのシャットダウン、CPU 数の増加、マシンの再パワーオンが実行されます。 VMware Tools がインストールされていない場合は、アクションによって仮想マシンのパワーオフ、CPU 数の増加、マシンの再パワーオンが実行されます。
オフ	該当なし。仮想マシンがパワーオフ状態である。	不要。	アクションによって CPU 数が指定した数に増加します。

メモリを増やす場合は、[パワーオフ可] を適用する方法を決定するときに、仮想マシンのパワー状態、メモリ ホットプラグが有効かどうか、ホットメモリの上限が存在するかどうかを検討する必要があります。

表 4-77. メモリ量を増やす動作

仮想マシンのパワー状態	メモリ ホット プラグが有効	ホット メモリの制限	[パワーオフ可] が選択されている	結果
オン	可	新しいメモリ値 ≤ ホット メモリの上限	不可	アクションによって、指定したメモリ量が増加します。
オン	可	新しいメモリ値 > ホット メモリの制限	可	VMware Tools がインストールされ実行されている場合は、アクションによって仮想マシンのシャットダウン、メモリの増加、マシンの再パワーオンが実行されます。 VMware Tools がインストールされていない場合は、アクションによって仮想マシンのパワーオフ、メモリの増加、マシンの再パワーオンが実行されます。
オン	不可	該当なし。ホット プラグは有効化されていない。	可	VMware Tools がインストールされ実行されている場合は、アクションによって仮想マシンのシャットダウン、メモリの増加、マシンの再パワーオンが実行されます。 VMware Tools がインストールされていない場合は、アクションによって仮想マシンのパワーオフ、メモリの増加、マシンの再パワーオンが実行されます。
オフ	該当なし。仮想マシンがパワーオフ状態である。	該当なし。	不要	アクションによって、指定したメモリ量が増加します。

ポリシーの構成

新しいポリシーを作成する場合、既存のポリシーから設定を継承できます。また、適切な権限がある場合は、既存のポリシーの設定を変更できます。新しいポリシーを作成または既存のポリシーを編集したら、1 つ以上のオブジェクトのグループにポリシーを適用できます。

ポリシー

ポリシーは、環境内のオブジェクトに関する情報の分析と表示に使用するために vRealize Operations Manager に定義する一式のルールです。ポリシーを作成、変更、および管理し、vRealize Operations Manager がダッシュボード、ビュー、およびレポートにどのようにデータを表示するかを決定できます。

ポリシーが環境とどのように関連するか

vRealize Operations Manager ポリシーは、IT インフラストラクチャやビジネス ユニットに確立されている運用上の決定事項をサポートします。ポリシーを使用することで、環境内の特定のオブジェクトのために vRealize Operations Manager が収集と報告を行うデータを制御できます。各ポリシーは他のポリシーの設定を引き継ぐことができますが、環境に確立されるサービス レベル アグリーメントやビジネス上の優先事項をサポートする処置として、特定のオブジェクト タイプのさまざまな分析設定、アラート定義、症状の定義をカスタマイズして上書きすることもできます。

ポリシーを管理する際には、ビジネスに使用されている最重要アプリケーションの要件を満たすために、まず環境の運用上の優先事項や、アラートと症状の許容値などを把握する必要があります。その次に、本番およびテスト環境に正しいポリシーとしきい値設定が適用されるように、ポリシーを構成できます。

ポリシーは、環境からデータを収集するときに vRealize Operations Manager がオブジェクトに適用する設定を定義したものです。vRealize Operations Manager は、新たに検出されるオブジェクト（オブジェクト グループ内のオブジェクトなど）にポリシーを適用します。たとえば、現在 VMWare アダプタ インスタンスが存在し、World というグループに特定のポリシーを適用するとします。この vCenter Server インスタンスにユーザーが新しい仮想マシンを追加すると、VMWare アダプタはこの仮想マシン オブジェクトを vRealize Operations Manager に報告します。このオブジェクトは World オブジェクト グループのメンバーであるため、VMWare アダプタはこのオブジェクトに同じポリシーを適用します。

容量ポリシーの設定を実装するには、環境に対する要件と許容値（CPU 使用量など）を理解しておく必要があります。その後で、環境に応じたオブジェクト グループとポリシーを構成できます。

- 本番環境ポリシーに対しては、より高いパフォーマンス設定を構成し、ピーク時間を考慮することをお勧めします。
- テスト環境ポリシーに対しては、より高い使用率の設定を構成することをお勧めします。

vRealize Operations Manager は、[アクティブなポリシー] タブに表示されている優先順位でポリシーを適用します。ポリシーの優先順位を確立すると、vRealize Operations Manager は、ポリシー内の構成済みの設定をポリシー順位に従って適用し、オブジェクトの分析とレポート作成を実行します。ポリシーの優先順位を変更するには、ポリシー行をクリックしてドラッグします。デフォルト ポリシーは常に優先順位リストの一番下に置かれます。残りのアクティブなポリシーのリストは、最高優先順位のポリシーを示す優先順位 1 から始まります。複数のオブジェクト グループのメンバーとなるようにオブジェクトを割り当てて、各オブジェクト グループに異なるポリシーを割り当てた場合、vRealize Operations Manager はそのオブジェクトに最高ランクのポリシーを関連付けます。

表 4-78. ポリシー ルール要素の構成

ポリシー ルール要素	しきい値、設定、定義
ワークロード	メモリ、CPU、およびディスク容量の要求を有効または無効にします。ネットワーク I/O およびデータストア I/O の比率を有効または無効にし、vSphere 構成制限を設定します。[ワークロード] バッジ スコアの症状しきい値を構成します。
アノマリ	[異常] バッジ スコアの症状しきい値を構成します。
障害	[障害] バッジ スコアの症状しきい値を構成します。
残り容量と残り時間	メモリ、CPU、およびディスク容量の要求と割り当てを有効または無効にします。ネットワーク I/O およびデータストア I/O の比率を有効または無効にし、vSphere 構成制限を設定します。ピーク時間とコミット済みプロジェクト（これらは残り時間に影響を与える）に適合させるとともに、プロビジョニング時間バッファを設定します。[残りの容量と時間] バッジ スコアのしきい値を構成します。

表 4-78. ポリシー ルール要素の構成（続き）

ポリシー ルール要素	しきい値、設定、定義
負荷	メモリと CPU の要求を有効または無効にします。ネットワーク I/O およびデータストア I/O の比率を有効または無効にし、vSphere 構成制限を設定します。負荷バッジ スコアの症状しきい値を構成します。
解放可能な容量	推奨される過剰サイズの割合、アイドル時間の割合、およびパワーオフ時間の割合を設定します。[解放可能な容量] バッジ スコアの症状しきい値を構成します。
密度	[密度] バッジ スコアの症状しきい値を構成します。
時刻	オブジェクトの使用を追跡し、メンテナンス スケジュールを選択します。
属性	属性は、収集可能なデータ コンポーネントです。メトリック属性、プロパティ属性、およびスーパー メトリック属性の収集は、有効または無効にすることができます。これらの属性は、主要なパフォーマンス インジケータ (KPI) に設定できます。KPI は、その属性が自己の環境内で重要であることを示すために指定される属性です。vRealize Operations Manager は、他の属性の扱いとは異なる方法で KPI を扱います。KPI のしきい値違反により、KPI 以外の属性の場合とは異なるタイプのアラートが生成されます。 KPI のしきい値違反が検出された場合、vRealize Operations Manager はその違反の前に発生したイベントを調べます。関連する十分な情報が検出された場合、vRealize Operations Manager は違反に先立つ一連のイベントをフィンガープリントとして取得します。将来、類似する一連のイベントが検出された場合は、KPI 違反が発生する可能性があることを警告する予測アラートを発行できます。
アラートの定義	症状と推奨事項の組み合わせを有効または無効にし、問題として分類される条件を特定します。
症状の定義	プロパティ、メトリック、またはイベントのテスト条件を有効または無効にします。

ポリシーの作成、変更、優先付けを行う権限

vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイス内の特定の機能にアクセスするための権限が必要です。ユーザー アカウントに関連付けられたロールによって、アクセスできる機能および実行できるアクションが決まります。

ポリシーの優先順位を設定するには、[アクティブなポリシー] タブで、ポリシー行をクリックし、リスト内の対象の優先順位の位置にドラッグします。デフォルト ポリシーの優先順位には、文字 D が常に指定されています。

ポリシーに及ぶアップグレードの影響

以前のバージョンから vRealize Operations Manager をアップグレードした後、新規のアラートやシンプトムなど、ポリシーのデフォルト設定が新たに追加または更新されます。したがって、現在の環境に応じて最適化するために、この設定を分析および変更する必要があります。以前のバージョンの vRealize Operations Manager で使用されたポリシーを適用すると、手動で変更されたポリシーの設定は未変更のままになります。

ポリシーの決定事項と目的

vRealize Operations Manager でのポリシーの決定事項の実装は、通常、インフラストラクチャ管理者または仮想インフラストラクチャ管理者の責任ですが、権限のあるユーザーもポリシーを作成および変更できます。

IT インフラストラクチャ内のリソースを分析および監視するために設定されているポリシーを認識している必要があります。

- IT インフラストラクチャの管理とトラブルシューティングを行う仮想インフラストラクチャ管理者の場合は、オブジェクトと関連付けられているポリシーが vRealize Operations Manager に表示されるスコアにどのように影響するかを理解しておく必要があります。これにより、企業の決定と要件に基づいて承認済みポリシーを構成できます。

- ネットワーク運用エンジニアは、オブジェクトについて vRealize Operations Manager がレポートするデータに対するポリシーの影響、およびオブジェクト レポートのアラートおよび問題に割り当てられているポリシーを理解している必要があります。
- ポリシーに対して初期設定を推奨する役割を持つユーザーの場合は、通常、vRealize Operations Manager でポリシーを編集および構成します。
- 主に環境で発生する問題の評価を担当していて、ポリシー変更は担当外であっても、オブジェクトに適用されるポリシーが vRealize Operations Manager に表示されるデータにどのように影響するかを理解しておく必要があります。たとえば、特定のアラートに関連付けられたオブジェクトに適用されるポリシーを知っておく必要があります。
- vRealize Operations Manager からレポートを受け取る一般的なアプリケーション ユーザーの場合は、報告されるデータ値を理解できるように、運用ポリシーに関する高度な知識が必要です。

ポリシーの [ポリシー ライブラリ] タブ

[ポリシー ライブラリ] タブには、vRealize Operations Manager に含まれる、基本設定、デフォルト ポリシー、およびその他のベスト プラクティス ポリシーが表示されます。ライブラリ ポリシーを使用して、独自のポリシーを作成できます。ポリシー ライブラリには、ワークロード、異常、障害、容量、残りの容量と時間、負荷、解放可能な容量、密度、使用可能な容量、時間などのポリシー要素の構成可能な設定すべてが含まれます。

ポリシー ライブラリの仕組み

[ポリシー ライブラリ] タブのオプションを使用して、既存のポリシーから独自のポリシーを作成したり、既存のポリシー テンプレートの設定をオーバーライドして、新しい設定をオブジェクトのグループに適用できます。ポリシーのインポートとエクスポートも実行できます。

選択したポリシーの詳細を表示するには、分割バーをクリックしてペインを展開します。ポリシーの [詳細] および [関連アイテム] タブとオプションが下のペインに表示されます。[関連アイテム] タブでは、選択したポリシーをオブジェクト グループに適用することもできます。

ポリシーを追加または編集する場合は、ポリシー ワークスペースにアクセスします。ここで、ベース ポリシーを選択し、分析、メトリック、プロパティ、アラートの定義、症状の定義の設定をオーバーライドします。このワークスペースでは、ポリシーをオブジェクト グループに適用することもできます。オブジェクト グループへのポリシーの関連付けを更新するには、ユーザー アカウントに割り当てられたロールにおいて、関連付けの管理権限をポリシー管理に対して有効にする必要があります。

ポリシー ライブラリを管理する場所

ポリシー ライブラリを管理するには、[管理] をクリックし、[ポリシー] をクリックします。[ポリシー ライブラリ] タブが表示され、環境で使用できるポリシーのリストが表示されます。

表 4-79. [ポリシー ライブラリ] タブのオプション

オプション	説明
ツールバー	<p>ツールバーの選択肢を使用して、ポリシー ライブラリでアクションを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [新規ポリシーの追加]。既存のポリシーから新しいポリシーを作成します。 ■ [選択したポリシーの編集]。vRealize Operations Manager の設定をオーバーライドするためにポリシーをオーバーライドし、関連オブジェクトのデータを分析および報告します。 ■ [デフォルト ポリシーの設定]。任意のポリシーをデフォルト ポリシーとして設定できます。デフォルト ポリシー内の設定は、ポリシーが適用されていないすべてのオブジェクトに適用されます。ポリシーをデフォルト ポリシーとして設定すると、優先順位が D に設定されます。これにより、そのポリシーに最高の優先順位が与えられます。 ■ [ポリシーのインポート] および [ポリシーのエクスポート]。XML 形式でのポリシーのインポートやエクスポートが可能です。ポリシーをインポートまたはエクスポートするには、ユーザー アカウントに割り当てられたロールにおいて、インポート権限またはエクスポート権限をポリシー管理に対して有効にする必要があります。 ■ [選択したポリシーの削除]。リストからポリシーを削除します。
[ポリシー ライブラリ] タブのデータグリッド	<p>vRealize Operations Manager では、ポリシーの高レベル詳細が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 名前。[監視ポリシーの追加 / 編集] ウィザード、およびポリシーをオブジェクトに適用する領域（カスタム グループなど）に表示されるポリシーの名前。 ■ 説明。ポリシーのわかりやすい説明。たとえば、継承されるポリシーや、そのポリシーと 1 つ以上のオブジェクト グループとの関係を理解するためにユーザーが必要とする個別情報。 ■ 最終更新日時。ポリシーが最後に変更された日時。 ■ 更新者。ポリシー設定を最後に更新したユーザー。

表 4-79. [ポリシー ライブラリ] タブのオプション（続き）

オプション	説明
[ポリシー ライブラリ] タブ > [詳細] タブ	<p>[詳細] タブには、設定の継承元であるポリシーの名前と説明、ポリシーの優先順位、ポリシーの最終変更者、ポリシーに関連付けられているオブジェクト グループの数が表示されます。[詳細] タブでは、ローカルで定義されたポリシー内の設定と、設定の完全グループ（カスタマイズされた設定と、ポリシーの作成時に選択されたベース ポリシーから継承された設定を含む）を確認できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ローカルで定義された設定。ローカルで変更されたポリシー要素の設定をポリシー内のオブジェクトタイプごとに表示します。たとえば、[クラスタ コンピューティング オブジェクトの負荷] ポリシー要素の [メモリ需要] 設定を変更した場合、ローカルで定義された設定のリストで、ローカル ポリシーへの更新を確認できます。 継承を含むすべての設定。ローカルで変更された設定および継承された設定を含め、すべてのポリシー要素設定をポリシー内のオブジェクトタイプごとに表示します。有効化および無効化されたアラート定義、症状の定義、および属性の概要が表示され、ポリシー内の変更の数が示されます。ポリシー要素の設定は、バッジ スコアの症状しきい値を含んでおり、ワークロード、異常、障害、残りの容量と時間、負荷、解放可能な容量、密度、使用可能な容量、および時刻の各設定に加えられた変更を示します。たとえば、[クラスタ コンピューティング オブジェクトの使用可能容量] ポリシー要素の設定を変更した場合、設定の完全リストおよび高可用性構成の設定で、ローカル ポリシーへの更新を確認できます。vRealize Configuration Manager アダプタなど、複数の異なるアダプタをインストールしている場合、アダプタ用の特定のポリシー要素も表示されます。たとえば、vRealize Configuration Manager の場合、[コンプライアンス] ポリシー要素の設定およびバッジ スコアの症状しきい値が表示されます。
[関連オブジェクト] タブ	<p>関連するグループとオブジェクトの概要、および選択したオブジェクト グループとオブジェクトの詳細を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> グループ。選択したアクティブなポリシーに関連付けられたオブジェクトのグループを表示し、関連付けを追加または解除するためのオプションを提供します。 <ul style="list-style-type: none"> [関連付けの追加]。[ポリシーをグループに適用します] ダイアログ ボックスが開きます。ここで、選択したポリシーに関連付けるオブジェクト グループを選択します。 関連付けの解除。確認ダイアログ ボックスが開きます。ここで、選択したポリシーに関連付けられたオブジェクト グループの解除を確認します。 データ グリッド。このポリシーに割り当てられたグループ、グループに関連付けられたオブジェクトタイプ、およびグループ内のオブジェクト数を表示します。 選択したオブジェクト グループの詳細。選択したポリシーに関連付けられたオブジェクト グループの名前、タイプ、およびメンバー数と、ポリシーとの関連付けのタイプを表示します。オブジェクト グループは、ポリシーとの直接的な関連付けを持つことができます。また、ローカル ポリシーの作成時に選択したベース ポリシーに基づいて、継承されたポリシー関連付けを持つこともできます。たとえば、継承された関連付けを持つ [基本設定] ポリシーがリストに表示されている場合、そのポリシーの作成時に選択したベース ポリシーに [基本設定] ポリシーが含まれていました。 影響を受けるオブジェクト。環境内のオブジェクトの名前、そのオブジェクトタイプ、および関連付けられたアダプタを表示します。オブジェクトの親グループが存在する場合、その親グループはこのデータ グリッドに表示されます。

ポリシーの [アクティブなポリシー] タブ

[アクティブなポリシー] タブには、オブジェクトのグループと関連付けられているポリシーが表示されます。環境内でオブジェクトのアクティブなポリシーを管理し、vRealize Operations Manager でそのオブジェクトに関する特定のデータを分析し、ダッシュボード、ビュー、レポートに表示できるようにできます。

[アクティブなポリシー] タブの仕組み

ポリシーをオブジェクト グループと関連付けてデフォルト ポリシーを設定するには、[アクティブなポリシー] タブを使用します。ローカルに定義したポリシーの設定を表示したり、[ポリシーの追加] または [ポリシーの編集] ワークスペースで選択したベース ポリシーから継承した設定が含まれる、設定の完全なリストを表示したりできます。どのポリシーもデフォルト ポリシーに割り当てることができます。

vRealize Operations Manager は、[アクティブなポリシー] タブに表示されている優先順位でポリシーを適用します。ポリシーの優先順位を確立すると、vRealize Operations Manager は、ポリシー内の構成済みの設定をポリシー順位に従って適用し、オブジェクトの分析とレポート作成を実行します。ポリシーの優先順位を変更するには、ポリシー行をクリックしてドラッグします。デフォルト ポリシーは常に優先順位リストの一番下に置かれます。残りのアクティブなポリシーのリストは、最高優先順位のポリシーを示す優先順位 1 から始まります。複数のオブジェクト グループのメンバーとなるようにオブジェクトを割り当てて、各オブジェクト グループに異なるポリシーを割り当てた場合、vRealize Operations Manager はそのオブジェクトに最高ランクのポリシーを関連付けます。

選択したポリシーの詳細を表示するには、分割バーをクリックしてペインを展開します。ポリシーの [詳細] および [関連アイテム] タブとオプションが下のペインに表示されます。[関連アイテム] タブでは、選択したポリシーをオブジェクト グループに適用することもできます。

[アクティブなポリシー] タブの右端の列を使用して、ポリシーを新しい位置にドラッグして並べ替えて優先順位を変えることができます。ただし、カスタム ポリシーをデフォルト ポリシーの下にドラッグできるように見えても実際はできません。ビューを更新すると、デフォルト ポリシーが常にリストの最後のポリシーになります。

ポリシーの優先順位を設定する方法

ポリシーの優先順位を設定するには、[アクティブなポリシー] タブで、ポリシー行をクリックし、リスト内の対象の優先順位の位置にドラッグします。デフォルト ポリシーの優先順位には、文字 D が常に指定されています。

アクティブなポリシーを管理できる場所

アクティブなポリシーを管理するには、[管理] をクリックし、[ポリシー] をクリックします。[アクティブなポリシー] タブが表示され、環境内でオブジェクトに対してアクティブになっているポリシーのリストが表示されます。

表 4-80. [アクティブなポリシー] タブのオプション

オプション	説明
ツールバー	<p>ツールバーの選択肢を使用して、アクティブなポリシーでアクションを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [関連付けの追加]。[関連アイテム] タブが開き、ポリシーをグループと関連付けることができます。 ■ [デフォルト ポリシーの設定]。任意のポリシーをデフォルト ポリシーとして設定できます。デフォルト ポリシー内の設定は、ポリシーが適用されていないすべてのオブジェクトに適用されます。ポリシーをデフォルト ポリシーとして設定すると、優先順位が D に設定されます。これにより、そのポリシーに最高の優先順位が与えられます。
[アクティブなポリシー] タブのデータグリッド	<p>vRealize Operations Manager では、アクティブなポリシーの優先順位と高レベルな詳細が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [優先順位]。ポリシーの優先順位のランキング。デフォルト ポリシーには、[デフォルト] 列にチェックマークが付けられます。 ■ 名前。[監視ポリシーの追加 / 編集] ウィザード、およびポリシーをオブジェクトに適用する領域（カスタム グループなど）に表示されるポリシーの名前。 ■ 説明。ポリシーのわかりやすい説明。たとえば、継承されるポリシーや、そのポリシーと 1 つ以上のオブジェクト グループとの関係を理解するためにユーザーが必要とする個別情報。 ■ グループ。ポリシーが割り当てられたオブジェクト グループの数を示します。 ■ 影響を受けるオブジェクト。アクティブなポリシーが割り当てられているオブジェクトの名前、タイプ、およびアダプタと、直接の親グループ（該当する場合）を表示します。 ■ 最終更新日時。ポリシーが最後に変更された日時。 ■ 更新者。ポリシー設定を最後に更新したユーザー。

表 4-80. [アクティブなポリシー] タブのオプション（続き）

オプション	説明
[アクティブなポリシー] タブ > [詳細] タブ	<p>[詳細] タブには、設定の継承元であるポリシーの名前と説明、ポリシーの優先順位、ポリシーの最終変更者、ポリシーに関連付けられているオブジェクト グループの数が表示されます。[詳細] タブでは、ローカルで定義されたポリシー内の設定と、設定の完全グループ（カスタマイズされた設定と、ポリシーの作成時に選択されたベース ポリシーから継承された設定を含む）を確認できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ローカルで定義された設定。ローカルで変更されたポリシー要素の設定をポリシー内のオブジェクトタイプごとに表示します。たとえば、[クラスタ コンピューティング オブジェクトの負荷] ポリシー要素の [メモリ需要] 設定を変更した場合、ローカルで定義された設定のリストで、ローカル ポリシーへの更新を確認できます。 継承を含むすべての設定。ローカルで変更された設定および継承された設定を含め、すべてのポリシー要素設定をポリシー内のオブジェクト タイプごとに表示します。有効化および無効化されたアラート定義、症状の定義、および属性の概要が表示され、ポリシー内の変更の数が示されます。ポリシー要素の設定は、バッジ スコアの症状しきい値を含んでおり、ワークロード、異常、障害、残りの容量と時間、負荷、解放可能な容量、密度、使用可能な容量、および時刻の各設定に加えられた変更を示します。たとえば、[クラスタ コンピューティング オブジェクトの使用可能容量] ポリシー要素の設定を変更した場合、設定の完全リストおよび高可用性構成の設定で、ローカル ポリシーへの更新を確認できます。vRealize Configuration Manager アダプタなど、複数の異なるアダプタをインストールしている場合、アダプタ用の特定のポリシー要素も表示されます。たとえば、vRealize Configuration Manager の場合、[コンプライアンス] ポリシー要素の設定およびバッジ スコアの症状しきい値が表示されます。
[アクティブなポリシー] タブ > [関連オブジェクト] タブ	<p>関連するグループとオブジェクトの概要、および選択したオブジェクト グループとオブジェクトの詳細を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> グループ。選択したアクティブなポリシーに関連付けられたオブジェクトのグループを表示し、関連付けを追加または解除するためのオプションを提供します。 <ul style="list-style-type: none"> [関連付けの追加]。[ポリシーをグループに適用します] ダイアログ ボックスが開きます。ここで、選択したポリシーに関連付けるオブジェクト グループを選択します。 関連付けの解除。確認ダイアログ ボックスが開きます。ここで、選択したポリシーに関連付けられたオブジェクト グループの解除を確認します。 データ グリッド。このポリシーに割り当てられたグループ、グループに関連付けられたオブジェクト タイプ、およびグループ内のオブジェクト数を表示します。 選択したオブジェクト グループの詳細。選択したポリシーに関連付けられたオブジェクト グループの名前、タイプ、およびメンバー数と、ポリシーとの関連付けのタイプを表示します。オブジェクト グループは、ポリシーとの直接的な関連付けを持つことができます。また、ローカル ポリシーの作成時に選択したベース ポリシーに基づいて、継承されたポリシー関連付けを持つこともできます。たとえば、継承された関連付けを持つ [基本設定] ポリシーがリストに表示されている場合、そのポリシーの作成時に選択したベース ポリシーに [基本設定] ポリシーが含まれていました。 影響を受けるオブジェクト。環境内のオブジェクトの名前、そのオブジェクト タイプ、および関連付けられたアダプタを表示します。オブジェクトの親グループが存在する場合、その親グループはこのデータ グリッドに表示されます。

運用ポリシー

vRealize Operations Manager におけるオブジェクトの監視方法と、オブジェクトで発生する問題の通知方法を決定します。

vRealize Operations Manager 管理者は、サービス レベル アグリーメント (SLA) とビジネスの優先順位をサポートするために、オブジェクト グループとアプリケーションにポリシーを割り当てます。オブジェクト グループにポリシーを使用する場合は、ポリシーに定義されたルールが環境内のオブジェクトに対して速やかに適用されるように対策する必要があります。

ポリシーを使用すると、ユーザーは次のことが可能になります。

- アラートの有効化と無効化。
- 環境内のオブジェクトに対してメトリックを持続させることによって、またはメトリックを持続させないことによって、データ収集を制御する。
- 製品の分析としきい値を構成する。
- オブジェクトとアプリケーションをさまざまなサービス レベルで監視する。
- ポリシーの優先順位を決定し、最も重要なルールがデフォルトをオーバーライドするようにする。
- 分析に影響を与えるルールについて把握する。
- どのポリシーがオブジェクト グループに適用されるかを把握する。

vRealize Operations Manager には、使用できるようにすでに定義されている組み込みアクティブ ポリシーのライブラリが含まれています。これらのポリシーは、vRealize Operations Manager によって優先順位に従って適用されます。



運用ポリシーの作成

(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_create_policies_vrom)

オブジェクト グループにポリシーを適用すると、vRealize Operations Manager はそのポリシーで有効化されているしきい値、メトリック、スーパー メトリック、属性、プロパティ、アラート定義、問題定義に基づいてオブジェクト グループ内のオブジェクトからデータを収集します。

次に、一般的な IT 環境に存在する可能性のあるポリシーの例を示します。

- メンテナンス：継続的な監視用に最適化されている。しきい値やアラートは存在しない。
- 本番（重大）：本番環境向けで、重要度の高いアラート生成を伴うパフォーマンス用に最適化されている。
- 本番（重要）：本番環境向けで、中程度のアラート生成を伴うパフォーマンス用に最適化されている。
- バッチ ワークロード：ジョブ処理用に最適化されている。
- テスト、ステージング、および QA：比較的重要度の低い設定。アラートは比較的小さい。
- 開発：比較的重要度の低い設定。アラートは生成されない。
- 低優先順位：リソースが効率良く使用されるようにする。
- デフォルト ポリシー：デフォルトのシステム設定。

ユーザー シナリオ：本番の vCenter Server データストア オブジェクトの運用ポリシーの作成

仮想インフラストラクチャの管理者として、あなたは vRealize Operations Manager に使用されるポリシーを管理して、環境内のオブジェクトを分析し、それらのオブジェクトからデータを収集し、ダッシュボード、ビュー、お

よびレポートにデータを表示させます。IT 担当者が環境に新しいデータストア オブジェクトを追加した場合、あなたにはこの新しいデータストア オブジェクトがテスト環境および本番環境用のインフラストラクチャの VP によって規定されたポリシー要件に準拠していることを確認する責任があります。

このシナリオでは、vRealize Operations Manager に本番のデータストア オブジェクトのディスク領域の使用を監視させるポリシーを作成します。データストア オブジェクトのグループ タイプとカスタム オブジェクト グループを作成し、ポリシーをオブジェクト グループに適用します。ポリシーの設定に従い vRealize Operations Manager により環境内のデータストア オブジェクトのデータが収集されたら、ダッシュボードにおいて収集されたデータと存在する場合は潜在的なアラートを確認して、ディスク領域の使用がデータストア オブジェクトに準拠しているかどうかを確認します。

前提条件

- ポリシーを使用する目的を理解します。 [ポリシー](#) を参照してください。
- vRealize Operations Manager インスタンスが正常に機能することを確認します。
- 1 つまたは複数のカスタム オブジェクト グループおよびグループ タイプが vRealize Operations Manager インスタンスに存在していることを確認します。 [VMware vRealize Operations Manager でのカスタム オブジェクト グループの管理](#) を参照してください。
- vRealize Operations Manager インスタンスにデフォルト ポリシーと 1 つまたは複数の他のポリシーが含まれていることを確認します。 [vRealize Operations Manager におけるデフォルト ポリシー](#) を参照してください。
- デフォルト ポリシーにおける属性、アラート、症状の定義などの各セクションと要素について、またポリシーが選択したベース ポリシーの設定をどのように継承するかについて理解します。 [vRealize Operations Manager のポリシー ワークスペース](#) を参照してください。
- デフォルト ポリシーにおける残り容量、ホストと仮想マシンへのストレスなどの分析設定について、またベースポリシーから継承された設定をオーバーライドするアクションについて理解します。 [分析設定の詳細](#) を参照してください。

手順

1 データストア オブジェクトのグループ タイプの作成

グループ タイプを作成し、データストア オブジェクトを分類できるようにします。

2 データストア オブジェクトのオブジェクト グループの作成

オブジェクト グループを作成し、環境内のデータストア オブジェクトを 1 つのオブジェクト グループとして編成します。

3 ポリシーを作成してベース ポリシーを選択する

ポリシーを作成し、その新しいポリシーの設定をオーバーライドするために使用するベース ポリシーを選択します。

4 データストア オブジェクトの分析設定のオーバーライド

新しいポリシーで監視するデータストア オブジェクトの分析設定を表示してオーバーライドします。

5 データストア オブジェクトのディスク領域属性の有効化

本番データストア オブジェクトのディスク領域を監視する vRealize Operations Manager の属性を有効にします。

6 データストア オブジェクトのアラート定義とシンプトム定義のオーバーライド

データストア オブジェクトのアラート定義とシンプトムの定義をオーバーライドします。

7 データストア オブジェクト グループへのデータストア ポリシーの適用

データストア オブジェクトの新しいグループにポリシーを適用すると、vRealize Operations Manager は、これらのオブジェクトを監視し、そのディスク領域レベルがポリシー設定に準拠しているかどうかを確認します。これは、環境に設定されたサービス レベル アグリーメントとビジネス優先順位をサポートするために行われます。

8 データストア オブジェクトのディスク使用量用のダッシュボードの作成

ダッシュボードを作成して、データストア オブジェクトのディスク使用量を監視し、潜在的な問題が通知されるようにします。

結果

新しい本番のデータストア オブジェクトに適用するポリシーを作成しました。このポリシーでは、vRealize Operations Manager にこれらのオブジェクトを監視させてディスク領域レベルがポリシーの設定に準拠するようにして、サービス内容合意書および環境用に確立されたビジネスの優先順位に対応することが可能になります。vRealize Operations Manager は、新しいポリシーの設定を使用してダッシュボード、ビュー、レポートにデータストア オブジェクトのディスク使用量を表示し、データ収集時のサービス レベルを強化します。

次のステップ

このシナリオが終了したら、vRealize Operations Manager によって環境内のオブジェクトのデータが収集されるまで待機する必要があります。その後で、データストア オブジェクトのディスク使用量を確認します。

データストア オブジェクトのグループ タイプの作成

グループ タイプを作成し、データストア オブジェクトを分類できるようにします。

このステップでは、グループ タイプを作成し、それを vCenter Server データストア オブジェクトを整理するために作成する新しいカスタム オブジェクト グループに適用できるようにします。

前提条件

このシナリオのコンテキストを理解していることを確認します。[ユーザー シナリオ：本番の vCenter Server データストア オブジェクトの運用ポリシーの作成](#) を参照してください。

手順

- 1 ナビゲーション ペインで [内容] をクリックし、[グループ タイプ] をクリックします。
- 2 プラス記号をクリックして新しいグループ タイプを追加し、「**本番データストア**」と入力して、[OK] をクリックします。

グループ タイプのリストに新しいグループ タイプが表示されます。

次のステップ

オブジェクト グループを作成し、環境内のデータストア オブジェクトを 1 つのオブジェクト グループとして編成できるようにします。

データストア オブジェクトのオブジェクト グループの作成

オブジェクト グループを作成し、環境内のデータストア オブジェクトを 1 つのオブジェクト グループとして編成します。

このステップでは、新しいオブジェクト グループを作成してデータストア オブジェクトを整理し、作成したポリシーをそのオブジェクト グループに適用できるようにします。

前提条件

オブジェクト タイプを作成します。[データストア オブジェクトのグループ タイプの作成](#) を参照してください。

手順

- 1 [環境] を選択し、[カスタム グループ] をクリックします。
- 2 [グループ] タブで、プラス記号をクリックして新しいグループを追加し、オブジェクト グループの名前を入力します。
- 3 [グループ タイプ] ドロップダウン メニューから、新しいグループ タイプを選択します。
- 4 [ポリシー] ドロップダウン メニューから、現在のデフォルト ポリシーを選択します。
環境に追加された新しいデータストア オブジェクトを vRealize Operations Manager で識別するには、[グループ メンバーシップを最新に保つ] チェック ボックスを選択し、このグループを動的にして常に最新の状態にします。
- 5 [メンバーシップ条件の定義] ペインのドロップダウン メニューから、[vCenter アダプタ > データストア] オブジェクト タイプを選択します。
- 6 [プロパティの選択] テキスト ボックス内をクリックし、[ディスク領域] - [テンプレート] - [使用済み仮想マシン (GB)] を選択します。
- 7 隣接するテキスト ボックスのドロップダウン矢印をクリックし、[が次より小さい] を選択します。
- 8 [プロパティ値] テキスト ボックスに「**10**」と入力します。
vRealize Operations Manager は、この条件を使用して、このグループ内のデータストア オブジェクトを監視し、データストア オブジェクトの残りのスペースが 10 GB 未満になると通知します。
- 9 [常に含めるオブジェクト] ペインで、データストア オブジェクト用に作成したオブジェクト グループを選択します。次に、[追加] をクリックし、選択したペインにそのグループを移動して、[オブジェクト グループ] チェック ボックスを選択します。
[常に除外するオブジェクト] ペインでは、除外するオブジェクトを選択しません。
- 10 [OK] をクリックして、新しいグループを保存します。

次のステップ

ポリシーを作成し、その新しいポリシーの設定をオーバーライドするために使用するベース ポリシーを選択します。

ポリシーを作成してベース ポリシーを選択する

ポリシーを作成し、その新しいポリシーの設定をオーバーライドするために使用するベース ポリシーを選択します。

このステップでは、データストア オブジェクトの分析と監視を行う vRealize Operations Manager のポリシーを作成し、この新しいポリシーの設定の継承およびオーバーライド元となるポリシーを選択します。

前提条件

データストア オブジェクトのカスタム オブジェクト グループを作成します。[データストア オブジェクトのオブジェクト グループの作成](#) を参照してください。

手順

- 1 ポリシー領域にアクセスして、ポリシーを作成します。
 - a [管理] をクリックして、[ポリシー] をクリックします。
[アクティブなポリシー] タブと [ポリシー ライブラリ] タブが表示されます。
 - b [ポリシー ライブラリ] タブをクリックし、プラス記号をクリックしてポリシーを追加します。
 - c [はじめに] ポリシー ワークスペースでポリシーの名前と説明を入力します。
 - d [次で開始する] 領域で、ベース ポリシーから設定を継承する [デフォルト ポリシー] を選択します。
- 2 新しいポリシーの設定をオーバーライドするために使用するベース ポリシー、オブジェクト、およびポリシーを選択します。
 - a ポリシー ワークスペースで [基本ポリシーの選択] をクリックします。
 - b データストア オブジェクトの現在のポリシー構成を表示するには、[変更を表示] ドロップダウン メニュー、[vCenter アダプタ - データストア]、[オブジェクト タイプの表示] フィルタの順にクリックします。
データストアのポリシー構成が右側のペインに表示されます。

次のステップ

新しいポリシーで監視するデータストア オブジェクトの分析設定を表示してオーバーライドします。

データストア オブジェクトの分析設定のオーバーライド

新しいポリシーで監視するデータストア オブジェクトの分析設定を表示してオーバーライドします。

このステップでは、vRealize Operations Manager がアラートをトリガーして、データストア オブジェクトの容量に関する問題を通知するように、新しいポリシーの残り容量と残り時間をオーバーライドし、容量スコア症状のしきい値をオーバーライドします。

前提条件

ポリシーを作成し、その新しいポリシーの設定を継承およびオーバーライドするためのベース ポリシーを選択します。[ポリシーを作成してベース ポリシーを選択する](#) を参照してください。

手順

- 1 ポリシー ワークスペースで [分析設定] をクリックします。

- 2 [変更を表示] ドロップダウン メニュー、[vCenter Adapter - Datastore (vCenter アダプタ - データストア)]、[オブジェクト タイプの表示] フィルタの順にクリックします。

[オブジェクト タイプ] リストに [vCenter アダプタ - データストア] オブジェクト タイプが表示され、右側のペインにデータストア オブジェクトの分析設定が表示されます。ポリシー要素には、すべての分析機能（ワークロード、負荷、使用可能な容量など）のしきい値と設定が含まれます。

- 3 残り容量および残り時間要素のポリシー要素オーバーライド ボタンをクリックし、このポリシー要素をオンにします。

ボタンがチェック マークに変化した後、ポリシー要素がアクティブになり、設定をオーバーライドできるようになります。

- 4 [容量スコア症状のしきい値] スライダの設定をクリックしてドラッグし、警告（赤色）は 10%、注意（オレンジ色）は 15%、正常（緑色）は 20% にします。

ご使用の環境のデータストア オブジェクトでこれらのしきい値の違反が発生すると、vRealize Operations Manager は、アラートをトリガーして、データストア オブジェクトの容量に関する問題を通知します。

- 5 使用可能な容量要素のポリシー要素オーバーライド ボタンをクリックしてこのポリシー要素をオンにした後、矢印をクリックしてポリシー要素ビューを展開し、[高可用性 (HA) 構成の使用] チェック ボックスを選択します。

高可用性を使用するときは、vRealize Operations Manager が提供するデータストア オブジェクトのリソースが十分で、スループットやデータ消失に対応できることを確認します。

次のステップ

データストア オブジェクトのディスク領域属性を有効にします。

データストア オブジェクトのディスク領域属性の有効化

本番データストア オブジェクトのディスク領域を監視する vRealize Operations Manager の属性を有効にします。

このステップでは、環境内のデータストア オブジェクトのディスク領域プロパティ属性を vRealize Operations Manager で監視および収集できるようにします。

前提条件

データストア オブジェクトの分析設定をオーバーライドします。[データストア オブジェクトの分析設定のオーバーライド](#) を参照してください。

手順

- 1 ポリシー ワークスペースで [属性のオーバーライド] をクリックします。
- 2 [オブジェクト タイプ] ドロップダウン メニューから [vCenter アダプタ] - [データストア] を選択します。
vRealize Operations Manager は、リストをフィルタリングし、データストア オブジェクトに適用される属性のみを表示します。
- 3 [属性タイプ] ドロップダウン メニューをクリックして [プロパティ] を選択し、他の属性を選択解除します。

- 4 検索** テキスト ボックスに [[space]] と入力し、検索ボタンをクリックします。

vRealize Operations Manager は、リストをフィルタリングし、データストア オブジェクトに関連付けられたディスク領域プロパティのみを表示します。

- 5** [Disk Space|Template|Virtual Machine used (GB)] プロパティ属性について、[状態] ドロップダウン メニューをクリックし、[ローカル] をクリックします。

この属性がローカル ポリシーで有効になると、vRealize Operations Manager は、環境内のデータストア オブジェクトからこのディスク領域プロパティ属性を収集します。

次のステップ

データストア オブジェクトのアラート/シンプトムの定義をオーバーライドします。

データストア オブジェクトのアラート定義とシンプトム定義のオーバーライド

データストア オブジェクトのアラート定義とシンプトムの定義をオーバーライドします。

このステップでは、アラート定義とシンプトムの定義をオーバーライドして、データ収集時にデータストア オブジェクトのディスク領域が不足し始めたら vRealize Operations Manager がアラート通知をトリガーするようにします。

前提条件

環境内のデータストア オブジェクトのディスク領域プロパティ属性を vRealize Operations Manager で監視および収集できるようにします。 [データストア オブジェクトのディスク領域属性の有効化](#) を参照してください。

手順

- 1** ポリシー ワークスペースで [アラート/シンプトム定義] をクリックします。
- 2** [アラートの定義] ペインの [オブジェクト タイプ] ドロップダウン メニューから [vCenter アダプタ] - [データストア] を選択します。
- 3 検索** テキスト ボックスに [[space]] と入力し、検索ボタンをクリックします。
- 4** Datastore is running out of disk space という名前のアラート定義について、[状態] ドロップダウン メニューをクリックし、[ローカル] をクリックします。

このアラート定義をローカル ポリシーで有効にすると、vRealize Operations Manager は、データ収集時にデータストア オブジェクトのディスク領域が不足し始めたときに、このアラート定義を使用して、アラート通知をトリガーします。

- 5** [シンプトムの定義] ペインの [オブジェクト タイプ] ドロップダウン メニューから [vCenter アダプタ] - [データストア] を選択します。
- 6 検索** テキスト ボックスに [[space]] と入力し、検索ボタンをクリックします。

- 7 データストア オブジェクトの領域使用に対する重大、緊急、および警告のシンプトムの定義を有効にするには、[アクション] をクリックし、[すべて選択] をクリックした後、しきい値を設定します。

表 4-81. シンプトムの定義のしきい値設定

選択内容	設定
データストア領域使用量がクリティカル上限に到達しています	>90
データストア領域使用量が緊急上限に到達しています	>85
データストア領域使用量が警告上限に到達しています	>80

次のステップ

データストア オブジェクトにポリシーを適用します。

データストア オブジェクト グループへのデータストア ポリシーの適用

データストア オブジェクトの新しいグループにポリシーを適用すると、vRealize Operations Manager は、これらのオブジェクトを監視し、そのディスク領域レベルがポリシー設定に準拠しているかどうかを確認します。これは、環境に設定されたサービス レベル アグリーメントとビジネス優先順位をサポートするために行われます。

このステップでは、本番データストア オブジェクトに新しいポリシーを適用し、vRealize Operations Manager でこれらのオブジェクトを監視し、オブジェクトの適切なディスク領域レベルが確保されるようにします。

前提条件

データストア オブジェクトのアラート定義とシンプトムの定義をオーバーライドします。[データストア オブジェクトのアラート定義とシンプトム定義のオーバーライド](#) を参照してください。

手順

- 1 [ポリシー] ワークスペースで [グループへのポリシーの適用] をクリックし、データストア オブジェクト用に作成した新しいオブジェクト グループを選択します。
- 2 [保存] をクリックし、新しいポリシー設定を保存します。

結果

vRealize Operations Manager は、新しいポリシーの設定を使用して、データストア オブジェクトのディスク使用量をダッシュボード、ビュー、およびレポートに表示し、データ収集時のサービス レベルが維持されるようにします。

次のステップ

データストア オブジェクトのディスク使用量を表示する新しいダッシュボードを作成します。

データストア オブジェクトのディスク使用量用のダッシュボードの作成

ダッシュボードを作成して、データストア オブジェクトのディスク使用量を監視し、潜在的な問題が通知されるようにします。

このステップでは、新しいダッシュボードを作成し、そのダッシュボードにウィジェットを追加し、本番データストア オブジェクトを監視できるようにそのウィジェットを構成します。

前提条件

データストア オブジェクトの新しいグループにポリシーを適用します。[データストア オブジェクト グループへのデータストア ポリシーの適用](#) を参照してください。

手順

- 1 [ホーム] をクリックします。
- 2 [アクション] - [ダッシュボードを作成する] をクリックします。
- 3 新しいダッシュボードを構成します。
 - a [新規ダッシュボード] ワークスペースの [ダッシュボードの構成] ペインで、新規ダッシュボードの名前「**本番データストア**」を入力します。
 - b [デフォルト] では [はい] を選択します。
- 4 新しいダッシュボードにウィジェットを追加します。
 - a ワークスペースで [ウィジェット リスト] をクリックします。
 - b ウィジェットのリストから [オブジェクト リスト] ウィジェットをクリックし、それを右側のペインにドラッグします。
 - c [容量] ウィジェットをクリックし、それを右側のペインにドラッグします。
 - d [残り時間] ウィジェットをクリックし、それを右側のペインにドラッグします。
 - e [アラート リスト] ウィジェットをクリックし、それを右側のペインにドラッグします。
- 5 ウィジェットの相互作用を構成します。
 - a ワークスペースで [ウィジェットの相互作用] をクリックします。
 - b オブジェクト リスト ウィジェットの相互作用で、[選択したオブジェクトおよび選択したアラート] のドロップダウン メニューをクリックし、選択項目をクリアします。
 - c アラート リスト ウィジェットの相互作用で、ドロップダウンをクリックし、[オブジェクト リスト] を選択します。
 - d 容量ウィジェットの相互作用で、ドロップダウンをクリックし、[オブジェクト リスト] を選択します。
 - e 残り時間ウィジェットの相互作用で、ドロップダウンをクリックし、[オブジェクト リスト] を選択します。
 - f [相互作用の適用] をクリックします。
- 6 オブジェクト リスト ウィジェットを構成します。
 - a オブジェクト リスト ウィジェットで鉛筆をクリックします。
 - b [内容の更新] で [オン] を選択します。
 - c [更新間隔] で矢印をクリックし、[30] 秒を選択します。
 - d [モード] で [親] を選択します。

- e [最初の行を自動選択] で [オフ] を選択します。
- f 下側のペインでプラス記号をクリックしてタグのリストを展開し、[本番データストア] を展開します。次に、[本番データストア (n)] を選択し、[OK] をクリックします。

[本番データストア] オブジェクト グループ内のオブジェクトがオブジェクト リスト ウィジェットに表示されます。

7 容量ウィジェットを構成します。

- a 容量ウィジェットで鉛筆をクリックします。
- b [内容の更新] で [オン] を選択します。
- c [更新間隔] で矢印をクリックし、[30] 秒を選択します。
- d [セルフ プロバイダ] で [オン] を選択します。
- e [選択したオブジェクト] の [検索] テキスト ボックスに「**グループ**」と入力し、リストから [本番データストア] グループを選択します。

[選択したオブジェクト] テキスト ボックスに [本番データストア] グループが表示されます。

- f [OK] をクリックします。

容量ウィジェットにスコアとグラフが表示され、残りの計算オブジェクトが総消費容量に対する割合として示されます。

8 残り時間ウィジェットを構成します。

- a 残り時間ウィジェットで鉛筆をクリックします。
オブジェクト リソースが消費されるまでの残り時間が、残り時間ウィジェットに表示されます。
- b [内容の更新] で [オン] を選択します。
オブジェクト リソースが消費されるまでの残り時間が、残り時間ウィジェットに表示されます。
- c [更新間隔] で矢印をクリックし、[30] 秒を選択します。
- d [セルフ プロバイダ] で [オン] を選択します。
- e [選択したオブジェクト] の [検索] テキスト ボックスに「**グループ**」と入力し、リストから [本番データストア] グループを選択します。

[選択したオブジェクト] テキスト ボックスに [本番データストア] グループが表示されます。

- f [OK] をクリックします。

残り時間ウィジェットにスコアとグラフが表示され、オブジェクト リソースが消費されるまでの残り時間が示されます。

9 アラート リスト ウィジェットを構成します。

- a アラート リスト ウィジェットで鉛筆をクリックします。
- b [内容の更新] で [オン] を選択します。
- c [更新間隔] で矢印をクリックし、[30] 秒を選択します。

- d [選択したオブジェクト] の [検索] テキスト ボックスに「**グループ**」と入力し、リストから [本番データストア] グループを選択します。

[選択したオブジェクト] テキスト ボックスに [本番データストア] グループが表示されます。

- e 下側のペインでプラス記号をクリックしてタグのリストを展開し、[本番データストア] を展開します。次に、[本番データストア (n)] を選択し、[OK] をクリックします。

オブジェクトに対して構成されたアラートがアラート リスト ウィジェットに表示されます。本番データストア オブジェクトのディスク領域を監視するダッシュボードを作成しました。[本番データストア] オブジェクト グループ内のオブジェクトのデータを vRealize Operations Manager が分析および収集した後、その結果を新しいダッシュボードに表示できます。

結果

ポリシーを作成して本番データストア オブジェクトに適用し、vRealize Operations Manager がデータを収集するときに、それらのオブジェクトを監視するようにしました。これにより、環境のサービス レベルを監視および維持できるようになりました。vRealize Operations Manager は、新しいポリシーの設定を使用して、データストア オブジェクトの容量、残り時間、および潜在的なアラートについての情報を表示します。新しいポリシーを適用することにより、本番データストア オブジェクトのディスク領域レベルを、本番環境に設定されたポリシーに確実に準拠させることができます。

ポリシーのタイプ

デフォルト ポリシー、カスタム ポリシー、および vRealize Operations Manager で提供されるポリシーの 3 つのタイプのポリシーがあります。

カスタム ポリシー

使用する環境の vRealize Operations Manager に含まれるデフォルト ポリシーおよびベース ポリシーをカスタマイズできます。その後、カスタム ポリシーを、クラスタ内のオブジェクトなどのオブジェクトのグループまたは仮想マシンやホスト、または一意のオブジェクトや特定の基準を含めるために作成したグループに適用できます。

ユーザー インターフェイスに表示されるデータを理解するには、ポリシーについて熟知する必要があります。これは、ポリシーが vRealize Operations Manager のダッシュボード、ビュー、およびレポートに表示される結果を提供するためです。

運用ポリシーをカスタマイズしてそれらをお使いの環境に適用する方法を決定するには、事前に計画が必要です。

例：

- CPU の割り当てを追跡する必要がありますか？ CPU を割り当て超過する場合は、本番オブジェクトとテスト オブジェクトに適用する割合はどれくらいですか？
- メモリまたはストレージを割り当て超過する予定ですか？ 高可用性を使用する場合、どのバッファを使用する必要がありますか？
- 論理的に定義されたワークロード（本番クラスタ、テスト クラスタまたは開発クラスタ、バッチ ワークロードに使用されるクラスタなど）をどのように分類しますか？ または、すべてのクラスタを 1 つのワークロードに含めますか？
- ピーク使用時間やシステム アクティビティの急増をどのようにキャプチャしますか？ 場合によっては、それらが有効になるように、ポリシーの適用時にアラートを減らす必要もあります。

割り当てられたロールによりユーザー アカウントに適用された権限がある場合には、ポリシーを作成および変更して、それらをオブジェクトに適用できます。例：

- 既存のベース ポリシーからポリシーを作成し、ベース ポリシーの設定を継承し、特定の設定をオーバーライドしてオブジェクトを分析および監視します。
- ポリシーを使用して vCenter Server オブジェクトおよび vCenter Server 以外のオブジェクトを分析および監視します。
- すべてのオブジェクト タイプについての分析設定のカスタムしきい値を設定して、vRealize Operations Manager にワークロード、異常、障害、容量、負荷などについて報告させます。
- メトリック、プロパティ、およびスーパー メトリックなどの収集用の特定の属性を有効にします。
- カスタム ポリシーの設定でアラート定義および症状の定義を有効または無効にします。
- カスタム ポリシーをオブジェクト グループに適用します。

既存のポリシーを使用してカスタム ポリシーを作成する場合、ニーズに合うようにポリシー設定をオーバーライドします。割り当てと需要、CPU とメモリのオーバーコミットの比率、容量リスクおよびバッファのしきい値を設定します。環境で実際に使用しているものを割り当ておよび構成するには、割り当てモデルと需要モデルを一緒に使用します。本番環境やテストまたは開発環境などの監視する環境のタイプに応じて、過剰割り当てをすべて行うか、どの程度まで行うかは、ワークロードおよびポリシーを適用する環境により異なります。割り当てのレベルについては、テスト環境ではより保守的になり、本番環境ではあまり保守的にならなくてもよい場合もあります。

vRealize Operations Manager は、[アクティブなポリシー] タブに表示されている優先順位でポリシーを適用します。ポリシーの優先順位を確立すると、vRealize Operations Manager は、ポリシー内の構成済みの設定をポリシー順位に従って適用し、オブジェクトの分析とレポート作成を実行します。ポリシーの優先順位を変更するには、ポリシー行をクリックしてドラッグします。デフォルト ポリシーは常に優先順位リストの一番下に置かれます。残りのアクティブなポリシーのリストは、最高優先順位のポリシーを示す優先順位 1 から始まります。複数のオブジェクト グループのメンバーとなるようにオブジェクトを割り当てて、各オブジェクト グループに異なるポリシーを割り当てた場合、vRealize Operations Manager はそのオブジェクトに最高ランクのポリシーを関連付けます。

ポリシーは環境に固有です。ポリシーは vRealize Operations Manager に環境内のオブジェクトを監視させるので、それらは読み取り専用になり、オブジェクトの状態を変更しません。このため、使用している環境に対して有効な結果や影響を与える結果が vRealize Operations Manager に表示されるまで、ポリシー設定をオーバーライドしてそれらを微調整できます。たとえば、ポリシーの容量バッファ設定を調整し、ダッシュボードに表示されたデータを見て、ポリシー設定の影響を確認できます。

ユーザー シナリオ：vSphere 本番環境のカスタム運用ポリシーの作成

vRealize Operations Manager のシステム管理者には、vSphere 環境のオブジェクトが特定のポリシーを満たすことを確認する責任があります。オブジェクトに十分なメモリおよび CPU が割り当てられ、テスト、開発、本番環境をサポートすることを確認する必要があります。

大規模な IT 環境では、オブジェクト タイプに応じて組織化され、各領域にマイナー ポリシーが適用されている 4 ～ 6 の本番環境が含まれる場合があります。通常、こうした大規模環境には、デフォルト ポリシー、環境全体に適用される単一の本番ポリシー、専用領域用の個別ポリシーが含まれます。

通常、環境のほとんどのオブジェクトにはデフォルト ポリシーを適用します。vRealize Operations Manager でオブジェクトの専用グループを監視および分析するには、オブジェクト グループごとに個別のポリシーを作成し、そのポリシーの設定に少しの変更を加えます。たとえば、vSphere 本番環境のすべてのオブジェクトにデフォルトの運用ポリシーを適用できますが、キャパシティ レベルといった SQL Server インスタンスの健全性とリスクを厳密に追跡する必要もあります。vRealize Operations Manager で仮想 SQL Server インスタンスのみを分析するには、個別の専用ポリシーを作成し、そのポリシーをオブジェクトの該当グループに適用します。仮想 SQL Server インスタンスを監視するために作成したポリシーの設定はメインの本番ポリシーとほとんど変わりはありません。

このシナリオでは、複数のポリシーを使用して特定のオブジェクトを分析および監視し、継続的な運用を確実に実現する方法を示します。このシナリオでは、vSphere 本番環境は本番環境全体の一部です。vSphere 本番環境で仮想 SQL Server オブジェクトを監視するには、カスタム運用ポリシーを作成する必要があります。

前提条件

- ポリシーを使用する目的を理解します。[ポリシー](#) を参照してください。
- vRealize Operations Manager インスタンスが正常に機能することを確認します。
- vRealize Operations Manager インスタンスにデフォルト ポリシーおよび 1 つ以上のその他のポリシーが含まれていることを確認します。[vRealize Operations Manager におけるデフォルト ポリシー](#) を参照してください。
- 属性、アラートおよび症状の定義などのポリシーのセクションと要素、ポリシーが選択した基本ポリシーから設定を継承する仕組みを理解します。[vRealize Operations Manager のポリシー ワークスペース](#) を参照してください。
- ホストおよび仮想マシンの残り容量および負荷などのポリシーの分析設定、基本ポリシーから継承した設定をオーバーライドするために使用する操作を理解します。[分析設定の詳細](#) を参照してください。

手順

1 [vSphere の運用要件を決定します](#)

仮想 SQL Server マシンの容量レベルを継続的に監視し、vRealize Operations Manager でこれらのオブジェクトのパフォーマンスの低下が通知されるようにする必要があります。これらのオブジェクトの容量レベルに関する問題が発生し始める 60 日前に vRealize Operations Manager で通知されるようにします。

2 [vSphere の運用ニーズを満たすポリシーの作成](#)

メイン本番ポリシーと唯一異なる設定を持つ仮想 SQL Server インスタンスの運用ポリシーを作成します。このポリシーでは、特定のオブジェクトのメモリおよび CPU 設定を変更します。次に、仮想 SQL Server でパフォーマンスが低下したときにアラートを送信するように vRealize Operations Manager を構成します。

3 [vSphere オブジェクトの分析とレポート生成を行うためのカスタム ポリシー設定の構成](#)

開発環境、テスト環境、および本番環境で別々のポリシー要件を使用します。これにより、vRealize Operations Manager の特定のポリシー設定を構成し、仮想 SQL Server などのオブジェクトの分析とレポート作成を行うことができます。

4 vSphere オブジェクト グループへのカスタム ポリシーの適用

オブジェクト グループ タイプを作成して仮想 SQL Server マシンを分類します。次に、SQL Server マシンを含むオブジェクト グループを作成し、カスタム ポリシーを SQL Server 仮想マシン オブジェクトのこのグループに適用します。

次のステップ

このシナリオを完了したら、vRealize Operations Manager で環境のオブジェクトからデータが収集されるまで待機する必要があります。ポリシーのしきい値の違反が発生すると、vRealize Operations Manager はアラートを送信して問題を通知します。オブジェクトの状態を継続的に監視する場合、環境のオブジェクトの状態を常に把握しているため、vRealize Operations Manager によるアラートの送信を待機する必要はありません。

カスタム ダッシュボードを作成して、仮想 SQL Server オブジェクトを監視し、発生する問題に対処できるようにします。 [ダッシュボード](#) を参照してください。

vSphere の運用要件を決定します

仮想 SQL Server マシンの容量レベルを継続的に監視し、vRealize Operations Manager でこれらのオブジェクトのパフォーマンスの低下が通知されるようにする必要があります。これらのオブジェクトの容量レベルに関する問題が発生し始める 60 日前に vRealize Operations Manager で通知されるようにします。

インフラストラクチャの VP が本番環境のすべてのオブジェクトに対するデフォルトの運用ポリシーとメインの本番ポリシーを定義し、IT ディレクタがこれらのポリシーを本番環境に適用しました。ほとんどのオブジェクトについての運用監視のニーズはメインの本番ポリシーで対応できますが、マネージャは本番仮想 SQL Server マシンのパフォーマンスが低下したときにユーザーに通知されることを要求しています。仮想 SQL Server の容量レベルを vRealize Operations Manager で継続的に監視し、発生した問題に対処できるようにします。仮想 SQL Server の容量レベルに関する問題が発生し始める 60 日前に vRealize Operations Manager で通知されるようにします。

IT 部門がオブジェクトを専用のグループに分割し、それぞれのグループが開発、テスト、本番の各領域をサポートするようにしました。vRealize Operations Manager を使用して、これらの各領域のオブジェクトの健全性とリスクを継続的に追跡し、評価する必要があります。

このシナリオでは、運用管理ポリシーを作成して、オブジェクトを分析、監視、トラブルシューティングします。その後、その結果をカスタム ダッシュボードで監視します。

ポリシーに必要な分析設定を理解するために、最初に vSphere 運用要件を決定する必要があります。次に、仮想 SQL Server オブジェクトを監視するためのポリシーを作成し、メインの本番ポリシーの軽微な設定の違いが含まれるようにカスタム ポリシーを構成します。

カスタム ポリシーを作成して仮想 SQL Server の分析と監視を行うときは、vRealize Operations Manager が特定のオブジェクトを分析し、その結果をダッシュボードに報告するように分析設定を構成します。次に、そのポリシーを仮想 SQL Server オブジェクトのグループに適用します。

前提条件

以下の条件が満たされていることを確認してください：

- このシナリオのコンテキストを理解している。 [ユーザー シナリオ: vSphere 本番環境のカスタム運用ポリシーの作成](#) を参照してください。

- vSphere の本番環境のすべてのオブジェクトに、デフォルト ポリシーとメインの本番ポリシーが適用されている。

手順

- 1 vSphere 本番環境の運用要件を決定します。

このシナリオでは、環境に以下の要件が適用されます。

- 2 環境内のオブジェクトを分析および監視するための要件を満たすカスタム運用ポリシーを作成することを計画します。

- a 仮想 SQL Server のメモリと CPU 容量が常に充分であることを確認します。
- b 本番仮想 SQL Server でメモリがオーバーコミットされていないことを確認します。
- c SQL Server の CPU のごく一部のみをオーバーコミットします。

このシナリオでは、値を 2 に設定します。本番環境によっては、標準的な値が 4 になることがあります。

- d 仮想 SQL Server の容量が定義済みのしきい値を下回った場合に vRealize Operations Manager が警告を表示することを確認します。
- e 本番仮想 SQL Server の相互停止値を許容レベルに設定し、CPU のスケジュール競合による遅延が SQL Server で発生しないようにします。
- f 特定の比率で計算リソースをオーバーコミットするかどうかを決定します。

結果

カスタム ポリシー要件を計画した後、ポリシーを実装できます。

次のステップ

仮想 SQL Server インスタンスの運用ポリシーを作成します。

vSphere の運用ニーズを満たすポリシーの作成

メイン本番ポリシーと唯一異なる設定を持つ仮想 SQL Server インスタンスの運用ポリシーを作成します。このポリシーでは、特定のオブジェクトのメモリおよび CPU 設定を変更します。次に、仮想 SQL Server でパフォーマンスが低下したときにアラートを送信するように vRealize Operations Manager を構成します。

この手順では、仮想 SQL Server オブジェクトのサブセットに対する専用ポリシーを作成し、仮想 SQL Server インスタンスのメモリおよび CPU のキャパシティの設定を変更します。このシナリオの現段階では、カスタム ポリシーは本番ポリシーとほぼ同じです。

メインの本番ポリシーと仮想 SQL Server ポリシーの違いは、コンピューティング リソースのオーバーコミットにあります。SQL Server ポリシーの場合、コンピューティング リソースのオーバーコミットは行いません。仮想 SQL Server に直接適用するキャパシティ設定を変更する以外は、本番ポリシー全体から設定のほとんどを SQL サーバーに継承させます。

メインの本番ポリシーを本番環境全体に適用した後に、専用ポリシーの作成、メイン ポリシーからの設定の継承、仮想 SQL サーバーのキャパシティ レベルを調整するための専用ポリシーの設定変更を行います。

このポリシーを作成するには、データ センターを含むクラスタおよびこのポリシーを使用する vCenter Server を選択します。クラスタ、データ センター、ホスト システム、リソース プール、仮想マシンのリソース コンテナを含むすべてのオブジェクトにマイナー チェンジを加えます。

前提条件

以下の条件が満たされていることを確認してください:

- vSphere の運用要件を理解します。 [vSphere の運用要件を決定します](#) を参照してください。
- デフォルト ポリシーは、vSphere オブジェクトの本番環境全体に対して有効です。

手順

- 1 vRealize Operations Manager で、[管理] - [ポリシー] を選択します。
[アクティブなポリシー] タブに現在有効なポリシーが表示されます。
- 2 [ポリシー ライブラリ] タブをクリックし、プラス記号をクリックしてカスタム ポリシーを追加します。
- 3 ワークスペース ナビゲーション ペインで、[はじめに] をクリックし、ポリシーの基本情報を定義します。
 - a [名前] テキスト ボックスに、**vSphere Production Virtual SQL Servers** と入力します。
 - b [説明] テキスト ボックスに、**Analyze capacity of virtual SQL Servers** と入力します。
 - c 基本ポリシーから作業を開始するには、[開始] ドロップダウン メニューから [デフォルト ポリシー] を選択します。
- 4 ポリシー構成設定を表示します。
 - a ポリシー ワークスペースで [基本ポリシーの選択] をクリックします。
 - b 仮想マシンのオブジェクトのポリシー構成を表示するには、[変更を表示] ドロップダウン メニュー、[vCenter アダプタ - 仮想マシン]、[オブジェクト タイプの表示] フィルタの順にクリックします。
仮想マシンのポリシー構成が右側のペインに表示されます。
 - c 設定を継承するには、[ポリシーのプレビュー] ペインで [基本ポリシーから継承された構成] をクリックします。
- 5 ワークスペース ナビゲーションで、[分析設定] をクリックします。
- 6 ワークスペース ナビゲーションで、次のオブジェクト タイプをリストに追加して、それらの設定を変更できるようにします。
 - a ドロップダウンの矢印をクリックし、[vCenter アダプタ - クラスタ コンピューティング リソース] をクリックして、フィルタをクリックします。
 - b ドロップダウンの矢印をクリックし、[vCenter アダプタ - データ センター] をクリックして、フィルタをクリックします。
 - c ドロップダウンの矢印をクリックし、[vCenter アダプタ - ホスト システム] をクリックして、フィルタをクリックします。

- d ドロップダウンの矢印をクリックし、[vCenter アダプタ - リソース プール] をクリックして、フィルタをクリックします。
- e ドロップダウンの矢印をクリックし、[vCenter アダプタ - 仮想マシン] をクリックして、フィルタをクリックします。

これらのオブジェクト タイプの分析設定が右側のペインに表示されます。

- 7 [クラスタ コンピューティング リソース] バーで、二重の矢印をクリックして分析設定のリストを展開します。
- 8 [残りキャパシティ、残り時間] を見つけ、ロック ボタンをクリックして変更を有効にします。
- 9 vRealize Operations Manager が SQL Server ポリシー用のこれらのオブジェクトをオーバーコミットしないように、リソース テーブルでメモリ割り当てのオーバーコミット値を **0** に設定します。
- 10 vRealize Operations Manager が各 SQL Server で CPU 割り当てを 2:1 の比率でオーバーコミットするように、リソース テーブルで CPU 割り当てのオーバーコミット率を **2** に設定します。
- 11 右側のペインに追加した各オブジェクト タイプについて [手順 7](#) から [手順 10](#) を繰り返します。
- 12 [保存] をクリックします。

結果

ポリシーを作成し、設定を少し変更して、vRealize Operations Manager が SQL Server オブジェクトを分析し、レポートを作成できるようにしました。

次のステップ

SQL Server ポリシーに関するアラート定義および症状定義を構成します。ポリシーを SQL Server オブジェクトグループに適用します。

vSphere オブジェクトの分析とレポート生成を行うためのカスタム ポリシー設定の構成

開発環境、テスト環境、および本番環境で別々のポリシー要件を使用します。これにより、vRealize Operations Manager の特定のポリシー設定を構成し、仮想 SQL Server などのオブジェクトの分析とレポート作成を行うことができます。

このシナリオで示すいくつかの一般的なケースでは、開発環境、テスト環境、および本番環境のポリシー要件の区別が必要な場合があります。

- 開発環境およびテスト環境の場合、これらの環境のオブジェクトについてネットワーク冗長性が失われても問題ない場合がありますが、オブジェクトに障害が発生した場合は対処する必要があります。障害が発生した場合は、物理 NIC リンク状態のアラート定義を探し、その状態をダブルクリックして無効に設定します。
- テスト環境の場合、仮想マシンが要求するメモリおよび CPU 容量が実際の構成値より大きいても問題ない場合があります。テスト環境ではワークロードが変動する場合があるためです。
- 本番環境で仮想マシンが要求するメモリが構成値より大きいことがあります。この場合、本番環境のパフォーマンスと信頼性に問題が生じる可能性があります。

この手順では、仮想マシンの相互停止パフォーマンスに対するシンプトムの定義のしきい値をオーバーライドします。

前提条件

以下の条件が満たされていることを確認してください:

- 仮想 SQL Server のカスタム ポリシーを作成した。 [vSphere の運用ニーズを満たすポリシーの作成](#) を参照してください。
- 仮想マシンの相互停止 CPU パフォーマンス メトリックを理解している。このメトリックは、仮想マシンの実行準備が整っているが、同等の仮想 CPU とのスケジュール競合が原因で遅延が生じている時間の割合を表します。相互停止は、仮想マシンの複数のパフォーマンス メトリックの 1 つです。仮想マシンのパフォーマンス メトリックには、実行、待機、準備完了も含まれます。
- 仮想マシンという名前のアラート定義に、相互停止によって生じる高い CPU 競合が存在する。
- 仮想マシンの重大レベル、即時レベル、および警告レベルの CPU 相互停止を追跡するシンプトムの定義が存在していること。たとえば、仮想マシン CPU の競合が時間の 15% を超える場合、その重大レベルは、デフォルトで 15% に設定されています。これは、相互停止メトリックによって測定されます。デフォルトのしきい値レベルは、即時の場合は 10%、警告の場合は 5% です。ただし、本番仮想マシンの本番ポリシーでは、3% の重大レベルを管理します。

手順

- 1 [ポリシー ライブラリ] タブで vSphere の本番仮想 SQL Server ポリシーを探し、このポリシーを編集するために鉛筆をクリックします。
[監視ポリシーの編集] ワークスペースが表示されます。
- 2 このワークスペースで [アラート/シンプトム定義のオーバーライド] をクリックします。
- 3 [アラートの定義] ペインで相互停止アラート定義を有効にし、仮想マシン CPU の競合が高い場合に通知されるようにします。
 - a [オブジェクト タイプ] ドロップダウン メニューで [vCenter アダプタ] と [仮想マシン] を選択します。
 - b [検索] テキスト ボックスに **stop (停止)** と入力し、仮想マシンの相互停止パフォーマンス メトリックに関連するアラート定義のみを表示します。
 - c Virtual machine has high CPU contention caused by Co-Stop という名前のアラート定義について、[State (状態)] ドロップダウン メニューをクリックし、[Enabled (有効化)] をクリックします。
- 4 [シンプトムの定義] ペインで仮想マシンの重大相互停止レベルを変更し、このシンプトムに定義されたしきい値レベルに基づいて vRealize Operations Manager がアラートをトリガーするようにします。
 - a [オブジェクト タイプ] ドロップダウン メニューで [vCenter アダプタ] と [仮想マシン] をクリックします。
 - b [検索] テキスト ボックスに **停止** と入力し、仮想マシンの相互停止パフォーマンス メトリックに適用されるシンプトムの定義を表示します。
 - c Virtual Machine CPU Co-stop is at Critical level という名前のシンプトムの定義について、[状態] ドロップダウン メニューをクリックし、[有効化] をクリックします。

- d [条件] ドロップダウン メニューをクリックし、[オーバーライド] をクリックします。

本番ポリシーの場合、一般的な重大しきい値は **>3** です。開発環境またはテスト環境のポリシーの場合、一般的な重大しきい値は **>10** です。

- e [シンプトムしきい値の上書き] ダイアログ ボックスで「>3」と入力してしきい値を変更し、[適用] をクリックします。

5 仮想マシンの即時相互停止レベルを変更します。

- a Virtual Machine CPU Co-stop is at Immediate level という名前のシンプトムの定義について、[状態] ドロップダウン メニューをクリックし、[有効化] をクリックします。

- b [条件] ドロップダウン メニューをクリックし、[オーバーライド] をクリックします。

- c [シンプトムしきい値の上書き] ダイアログ ボックスで「>2」と入力してしきい値を変更し、[適用] をクリックします。

6 仮想マシンの警告相互停止レベルを変更します。

- a Virtual Machine CPU Co-stop is at Warning level という名前のシンプトムの定義について、[状態] ドロップダウン メニューをクリックし、[有効化] をクリックします。

- b [条件] ドロップダウン メニューをクリックし、[オーバーライド] をクリックします。

- c [シンプトムしきい値の上書き] ダイアログ ボックスで「>1」と入力してしきい値を変更し、[適用] をクリックします。

7 [保存] をクリックして、ポリシーを保存します。

結果

仮想マシンの相互停止 CPU パフォーマンス メトリックを変更し、CPU スケジュール競合による SQL Server 仮想マシンの遅延が最小になるようにしました。

次のステップ

仮想 SQL Server グループの分類のために使用するグループ タイプを作成し、仮想 SQL Server を含むオブジェクト グループを作成して、そのオブジェクト グループにポリシーを適用します。

vSphere オブジェクト グループへのカスタム ポリシーの適用

オブジェクト グループ タイプを作成して仮想 SQL Server マシンを分類します。次に、SQL Server マシンを含むオブジェクト グループを作成し、カスタム ポリシーを SQL Server 仮想マシン オブジェクトのこのグループに適用します。

vRealize Operations Manager でカスタム ポリシーのパフォーマンス条件に応じて SQL Server マシンを分析するには、SQL Server オブジェクトのグループにカスタム ポリシーを適用する必要があります。

このシナリオでは、SQL Server 仮想マシンを含む静的オブジェクト グループを作成します。使用している環境によっては、動的オブジェクト グループを作成して、vRealize Operations Manager で分析およびレポート作成できるようにした新しい SQL Server インスタンスを検出しなければならない場合があります。

前提条件

仮想 SQL Server マシンのカスタム ポリシー設定は既に作成しています。 [vSphere オブジェクトの分析とレポート生成を行うためのカスタム ポリシー設定の構成](#) を参照してください。

手順

- 1 仮想 SQL Server のグループ タイプを作成するには、左側のペインで [内容] をクリックし、[グループ タイプ] をクリックします。
- 2 プラス記号をクリックして新しいオブジェクト グループ タイプを追加し、**vSphere Production Virtual Machines** と入力します。

このグループ タイプを使用して、分析する SQL Server 仮想マシンを分類します。

- 3 左側のペインで [環境] をクリックし、[カスタム グループ] をクリックします。
先ほど作成したグループ タイプに対応するフォルダがリストに表示されます。
- 4 [vSphere Production Virtual Machines] という名前のフォルダをクリックし、プラス記号をクリックして新しいオブジェクト グループを追加します。
- 5 [新規グループ] ダイアログ ボックスで、SQL Server 仮想マシンを追加します。
 - a [名前] テキスト ボックスに、**vSphere Production SQL Server Virtual Machines** と入力します。
 - b [グループ タイプ] ドロップダウン メニューから [vSphere Production Virtual Machines] を選択します。
 - c [ポリシー] ドロップダウン メニューから [vSphere Production Virtual SQL Servers] を選択します。
 - d [メンバーシップ基準の定義] ペインの [オブジェクト タイプ] ドロップダウン メニューで、[vCenter アダプタ] を展開し、[仮想マシン] をクリックします。
- 6 [OK] をクリックして、オブジェクト グループを保存します。

vRealize Operations Manager でデータが収集されると、[グループ] タブにオブジェクト グループ内の仮想マシンの健全性、リスク、効率の状態が表示されます。

結果

vRealize Operations Manager で SQL Server 仮想マシンの状態の分析およびレポート作成を行うオブジェクト タイプとオブジェクト グループを作成しました。

次のステップ

カスタム ダッシュボードを作成して、仮想 SQL Server の状態を表示し、発生する問題に対処できるようにします。[ダッシュボード](#) を参照してください。

本番仮想 SQL Server のキャパシティ計画シナリオを含むモデル プロジェクトを構成して、vRealize Operations Manager にこれらのオブジェクトのキャパシティ傾向を監視させ、仮想 SQL Server がキャパシティの問題が発生する 60 日前に通知させます。[6 章 vRealize Operations Manager を使用した管理対象環境のキャパシティの計画](#) を参照してください。

定期的に CPU 使用率およびメモリ使用率に関するレポートを vRealize Operations Manager に作成させ、そのレポートを送信させます。

vRealize Operations Manager におけるデフォルト ポリシー

デフォルト ポリシーは、ユーザーのオブジェクトのほとんどに適用される一式のルールです。

デフォルト ポリシーは、[アクティブなポリシー] タブの [優先順位] 列で文字 D が付けられて示されます。デフォルト ポリシーは、あらゆるオブジェクトに適用できます。

デフォルト ポリシーは、そのポリシーがオブジェクト グループに関連付けられていない場合でもポリシー リストの最後に示されます。オブジェクト グループにポリシーが適用されていない場合、vRealize Operations Manager はデフォルト ポリシーをそのグループに関連付けます。

ポリシーはデフォルト ポリシーの設定を継承でき、それらの設定はいくつかの条件のもとでさまざまなオブジェクトに適用できます。

[デフォルト] に設定されているポリシーは、常に優先度が最も低くなります。2 つのポリシーをデフォルト ポリシーに設定することを試みた場合には、まず [デフォルト] に設定する最初のポリシーが最も低い優先度に設定されます。2 番目のポリシーを [デフォルト] に設定する時点で、そのポリシーが最も低い優先度となり、先に [デフォルト] に設定したポリシーが 2 番目に低い優先度に設定されます。

デフォルト ポリシーをベース ポリシーとして使用し、独自のカスタム ポリシーを作成できます。デフォルト ポリシーの設定を変更し、分析ニーズや監視ニーズを満たすポリシーを作成します。デフォルト ポリシーから開始する場合、新しいポリシーはデフォルトのベース ポリシーの設定をすべて継承します。続いて、新しいポリシーをカスタマイズし、これらの設定をオーバーライドできます。

vRealize Operations Manager でインストールされるデータ アダプタとソリューションは、すべてのオブジェクトに適用される集成的な基本設定グループを提供します。[ポリシー ライブラリ] タブ上のポリシー ナビゲーション ツリーでは、これらの設定は基本設定と呼ばれます。デフォルト ポリシーは、デフォルトですべての基本設定を継承します。

vRealize Operations Manager で提供されるポリシー

vRealize Operations Manager に含まれる一連のポリシーは、環境を監視するために、および独自ポリシー作成の開始点として使用できます。

vRealize Operations Manager で提供されるポリシーをよく理解し、独自の環境で使用したり、作成する新しいポリシーに設定を組み込んだりできるようにします。

vRealize Operations Manager ポリシーで提供されるポリシーを確認できる場所

[管理] をクリックし、[ポリシー] をクリックし、[ポリシー ライブラリ] タブをクリックします。vRealize Operations Manager で提供されるポリシーを表示するには、基本設定ポリシーを展開します。

vRealize Operations Manager に含まれるポリシー

vRealize Operations Manager インスタンスにインストールされているデータ アダプタとソリューションはすべてのオブジェクトに適用される基本設定の集成的グループを提供するので、すべてのポリシーは基本設定の下に存在します。[ポリシー ライブラリ] タブのポリシー ナビゲーション ツリーでは、これらの設定は基本設定と呼ばれます。

基本設定ポリシーは他のすべてのポリシーに対する包括的ポリシーであり、ポリシー ライブラリのポリシー リストの先頭に表示されます。vRealize Operations Manager インスタンスにインストールされているデータ アダプタとソリューションはすべてのオブジェクトに適用される基本設定の集成的グループを提供するので、他のすべてのポリシーは基本設定の下に存在します。

構成ウィザード ベースのポリシー セットには、オブジェクトについてレポートするためにオブジェクトの特定の設定に対して使用する vRealize Operations Manager で提供されるポリシーを含みます。構成ウィザード ベースのポリシー セットには、複数の種類のポリシーが含まれます。

- ネットワーク I/O およびストレージ I/O に対する容量管理ポリシー
- インフラストラクチャ オブジェクトおよび仮想マシンに対する効率アラート ポリシー
- インフラストラクチャ オブジェクトおよび仮想マシンに対する健全性アラート ポリシー
- CPU およびメモリに対するオーバーコミット ポリシー
- インフラストラクチャ オブジェクトおよび仮想マシンに対するリスク アラート ポリシー

デフォルト ポリシーには、大部分のオブジェクトに適用されるルールのセットが含まれます。

VMware 管理ポリシー セットには、テストや開発ではなく本番などの環境の種類に使用するポリシーが含まれます。これらのポリシーには、ピーク期間、バッチおよび対話式ワークロード、需要および割り当てモデルを監視する設定が含まれます。vRealize Operations Manager で提供される VMware 管理ポリシー セットには、次のポリシーが含まれます。

表 4-82. VMware 管理ポリシーの機能

VMware 管理ポリシー	機能
VMware 過剰サイズ分析を除外	過剰サイズの仮想マシンから節約可能なキャパシティを計算しません
VMware 15 分間のピーク時間用に最適化	15 分間急増したワークロードに対して容量アラートを生成するように構成されています。
VMware 30 分間のピーク時間用に最適化	30 分間急増したワークロードに対して容量アラートを生成するように構成されています。
VMware バッチ ワークロード用ポリシー	実行時間が 4 時間未満のバッチ ワークロード用に最適化されています。
VMware 対話式ワークロード用ポリシー	大きいバッファの 15 分ピークに基づいてデスクトップや Web サーバなどの対話式ワークロードに対して敏感のように構成されています。
VMware 本番ポリシー（需要のみ）	ほとんどの容量を取得するために、割り当て制限を使用しないで、本番負荷用に最適化されています。
VMware 本番ポリシー（割り当てあり）	需要および割り当て容量モデルを必要とする本番負荷用に最適化されています。
VMware 本番ポリシー（割り当てなし）	需要容量モデルを必要とする本番負荷用に最適化されており、競合なしで最高のオーバーコミットを提供します。
VMware テストおよび開発ポリシー（割り当てなし）	仮想マシン レベルでの容量計画を含まないので、大きな競合を発生させないで容量を最大化するように開発およびテスト環境用に最適化されています。

監視ポリシー ワークスペースを使用した、運用ポリシーの作成および変更

監視ポリシー ワークスペースでワークフローを使用して、ローカル ポリシーをすばやく作成し、既存のポリシーの設定を更新できます。ローカル ポリシー設定のソースとして使用する基本ポリシーを選択し、環境内のオブジェクトグループのデータの分析および収集に使用するしきい値や設定を変更します。ローカル設定が定義されていないポリシーは、基本ポリシーから設定を継承し、関連付けられたオブジェクト グループに適用します。



運用ポリシーのカスタマイズ

(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_customize_policies_vrom)

前提条件

vRealize Operations Manager がデータを分析および収集するためのオブジェクト グループが存在していることを確認し、存在していない場合は作成します。 [VMware vRealize Operations Manager でのカスタム オブジェクト グループの管理](#) を参照してください。

手順

- 1 [管理] をクリックして、[ポリシー] をクリックします。

- 2 [ポリシー ライブラリ] をクリックし、プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、ポリシーを選択して鉛筆をクリックし既存のポリシーを編集します。

[ポリシー ライブラリ] タブでポリシーを追加および編集し、特定のポリシーを削除できます。自分で作成した他のポリシーの設定に、基本設定ポリシーまたはデフォルト ポリシーをルート ポリシーとして使用できます。どのポリシーもデフォルト ポリシーに設定できます。

- 3 [はじめに] ワークスペースで、名前と説明をポリシーに割り当てます。

すべてのユーザーがポリシーの目的を把握できるように、分かりやすい名前と説明をポリシーに割り当てます。

- 4 [ベース ポリシーの選択] をクリックし、ワークスペースで、ベースラインとして使用するベース ポリシーを 1 つ以上選択し、新しいローカル ポリシー用の設定を定義します。

新しいポリシーを作成する場合、新しいポリシー設定のベースライン ソースとして、vRealize Operations Manager にある任意のポリシーを使用できます。

- 5 [分析設定のオーバーライド] をクリックし、ワークスペースで、オブジェクト タイプをフィルタリングして、このポリシーを関連付けるオブジェクトのポリシーをカスタマイズします。

オブジェクト タイプをフィルタリングして、これらのオブジェクト タイプの設定を変更し、vRealize Operations Manager でダッシュボードやビューで想定されるデータが収集および表示されるようにします。

- 6 [属性のカスタマイズ] をクリックし、ワークスペースで、ポリシーに含めるメトリック、プロパティ、またはスーパー メトリック属性を選択します。

vRealize Operations Manager は、ポリシーに含めるメトリック、またはプロパティ、スーパー メトリック属性に基づいて、環境内のオブジェクトからデータを収集します。

- 7 [アラート/シンプトム定義のオーバーライド] をクリックし、ワークスペースで、ポリシーのアラート定義およびシンプトム定義を有効または無効にします。

vRealize Operations Manager は、問題とみなされる状態が発生すると、環境内のオブジェクトの問題を特定してアラートをトリガーします。

- 8 [グループへのポリシーの適用] をクリックし、ワークスペースで、ポリシーを適用するグループを 1 つ以上選択します。

VMware vRealize Operations Manager は、オブジェクト グループに適用されたポリシーの設定に応じてオブジェクトを監視し、しきい値に違反した場合にアラートをトリガーして、結果をダッシュボード、ビュー、およびレポートで報告します。1 つ以上のオブジェクト グループにポリシーを割り当てない場合、VMware vRealize Operations Manager はそのポリシー内の設定をどのオブジェクトにも割り当てず、ポリシーは有効になりません。割り当てられたポリシーがないオブジェクト グループには、VMware vRealize Operations Manager がオブジェクト グループをデフォルト ポリシーに関連付けます。

- 9 [保存] をクリックして、ローカル ポリシーに定義した設定を保持します。

次のステップ

vRealize Operations Manager が環境内のオブジェクトからデータを分析および収集した後、ダッシュボードおよびビューでデータを確認します。データが期待されたものでない場合、ダッシュボードに必要なデータが表示されるまで、ローカル ポリシーを編集して設定をカスタマイズおよびオーバーライドします。

vRealize Operations Manager のポリシー ワークスペース

ポリシー ワークスペースを使用すると、ポリシーの作成や変更をすばやく行うことができます。新しいポリシーを作成する場合、既存のポリシーから設定を継承できます。また、適切な権限がある場合は、既存のポリシーの設定を変更できます。新しいポリシーの作成または既存ポリシーの編集を行った後、1 つ以上のオブジェクト グループにポリシーを適用できます。

ポリシー ワークスペースの機能

すべてのポリシーは一連のパッケージを含み、これらのパッケージ内の定義された問題、症状、メトリック、およびプロパティを使用して環境内の特定のオブジェクト グループに適用します。ベース ポリシーから継承した設定の詳細を表示したり、特定のオブジェクト タイプのある設定を表示したりできます。他のポリシーの設定をオーバーライドしたり、オブジェクト タイプに適用する追加のポリシー設定を含めることもできます。たとえば、本番（クリティカル）ポリシーには、使用量、使用可能なリソースとその残り時間、ストレスがどの程度かかるのかを特定するオブジェクト グループのリソース要求、および CPU、ディスク I/O、ネットワーク I/O の節約可能なキャパシティをトラッキングする設定を含めます。

新しいポリシーを作成したり既存のポリシーを編集したりするには、[追加] と [編集] オプションを使用します。



運用ポリシーのカスタマイズ

(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_customize_policies_vrom)

ポリシーを作成および変更する場所

ポリシーの作成と変更を行うには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックし、ポリシーを追加する場合はプラス記号を、ポリシーを編集する場合は鉛筆アイコンをクリックします。ポリシー ワークスペースは、ベース ポリシーの選択や、分析、メトリック、プロパティ、アラート定義、シンプトム定義などの設定のカスタマイズとオーバーライドを行う場所です。このワークスペースでは、ポリシーをオブジェクト グループに適用できます。

リストからポリシーを削除するには、ポリシーを選択して赤い X 印をクリックします。

ポリシー ワークスペースのオプション

ポリシー ワークスペースには、ポリシーを作成して編集し、そのポリシーをカスタム オブジェクト グループに適用するための具体的なワークフローが含まれています。

■ 導入の詳細

ポリシーを作成するときは、ポリシーに分かりやすい名前と説明を付けて、そのポリシーの目的が分かるようにする必要があります。

■ ベース ポリシーの選択の詳細

新しいポリシーを作成するとき、vRealize Operations Manager で提供されているポリシーのいずれかを、ポリシー設定のベースライン ソースとして使用できます。ポリシーの内容エリアでは、ベース ポリシーおよび設定をオーバーライドするために選択した追加のポリシーのパッケージと要素を表示し、ポリシー間の設定の違いを強調表示して比較できます。表示する設定とオブジェクト タイプを選択します。

■ 分析設定の詳細

オブジェクト タイプをフィルタリングして設定を変更すると、それらの設定が vRealize Operations Manager で適用されます。これにより、必要なデータがダッシュボードとビューに表示されます。

■ ワークロード自動化の詳細

ポリシーのワークロード自動化オプションを設定して、vRealize Operations Manager が定義に従って環境内のワークロードを調整できるようにします。

■ メトリックとプロパティの詳細の収集

属性タイプを選択してポリシーに含め、vRealize Operations Manager が環境内のオブジェクトからデータを収集可能にすることができます。属性タイプには、メトリック、プロパティ、およびスーパー メトリックが含まれます。各メトリックを有効化または無効化し、ワークスペースで選択したベース ポリシーからメトリックを継承するかどうかを決定します。

■ アラートとシンプトムの定義の詳細

環境内のオブジェクトに関する問題を vRealize Operations Manager で特定し、問題とみなされる条件が満たされた場合にアラートをトリガするため、アラートおよび症状の定義を有効または無効にできます。アラートは自動化できます。

■ カスタム プロファイルの詳細

カスタム プロファイルを使用すると、利用可能なキャパシティやオブジェクト構成に応じて、指定したオブジェクトが環境にあといくつ収まるかがわかります。ポリシーのカスタム プロファイルを有効または無効にできます。

■ ポリシーのグループ詳細への適用

ローカル ポリシーを 1 つまたは複数のオブジェクト グループに割り当て、VMware vRealize Operations Manager がポリシー内の設定に基づいてオブジェクトを分析し、定義されたしきい値レベルに違反した場合にはアラートをトリガして、ダッシュボード、ビュー、およびレポートに結果を表示できるようにします。

導入の詳細

ポリシーを作成するときは、ポリシーに分かりやすい名前と説明を付けて、そのポリシーの目的が分かるようにする必要があります。

ポリシー名と説明を割り当てる場所

ポリシーに名前と説明を追加するには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。次にプラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[はじめに] をクリックします。名前と説明がワークスペースに表示されます。

表 4-83. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースでの名前と説明のオプション

オプション	説明
名前	監視ポリシー ワークスペースの追加または編集ウィザード、およびカスタム グループなどオブジェクトにポリシーを適用する領域に表示されるポリシーの名前。
説明	ポリシーの分かりやすい説明。たとえば、この説明を使用して、継承されるポリシー、およびそのポリシーと 1 つ以上のオブジェクト グループの関係を理解するためにユーザーが必要とする特定の情報を説明します。
次で開始する	開始点として使用する基本ポリシー。基本ポリシーの設定はすべて、新しいポリシーにデフォルト設定として継承されます。この設定をオーバーライドして、新しいポリシーをカスタマイズできます。 新規ポリシーの開始点として設定を継承する基本ポリシーを選択します。

ベース ポリシーの選択の詳細

新しいポリシーを作成するとき、vRealize Operations Manager で提供されているポリシーのいずれかを、ポリシー設定のベースライン ソースとして使用できます。ポリシーの内容エリアでは、ベース ポリシーおよび設定をオーバーライドするために選択した追加のポリシーのパッケージと要素を表示し、ポリシー間の設定の違いを強調表示して比較できます。表示する設定とオブジェクト タイプを選択します。

[ベース ポリシーの選択] ワークスペースの仕組み

ポリシーを作成するには、新しいカスタム ポリシーが設定を継承するベース ポリシーを選択します。お使いの環境のサービス レベル アグリーメント (SLA) の要件に合わせて基本ポリシーの一部の設定をオーバーライドする場合は、個別のポリシーを選択および適用して管理パック ソリューションを作成します。オーバーライド ポリシーには、オーバーライドするオブジェクトのタイプごとに定義された固有の設定が含まれます。オーバーライドは、手動で実行するか、vRealize Operations Manager にアダプタが組み込まれている場合はアダプタによって実行されます。選択した基本ポリシーの設定は、オーバーライド ポリシーの設定によって上書きされます。

ベース ポリシーからポリシーを継承する設定を上書きする場合、左側のペインのポリシーを選択して適用すると、右側のペインの [適用済みポリシー履歴] リストにそのポリシーが表示されます。

右側のペインには、継承されたポリシー構成の各タブ、および作成中のポリシーが表示され、[ポリシーのプレビュー] ペインで [選択したポリシーのプレビュー] タブが表示されます。ポリシー タブの 1 つを選択すると、有効化または無効化されたアラート定義、症状定義、メトリックとプロパティの数、および有効化または無効化された変更の数が表示されます。

右側のペインでは、表示するオブジェクトを選択して、オブジェクト タイプに適用するポリシー要素を確認できます。たとえば、StorageArray オブジェクト タイプを選択し、タブをクリックしてポリシーの構成設定を表示すると、[ポリシーのプレビュー] ペインにポリシーのローカル パッケージ、およびオブジェクト グループ タイプと各グループのポリシー要素数が表示されます。

プレビュー表示の対象として、すべてのオブジェクト タイプのポリシー設定、ローカルで変更された設定を持つオブジェクト タイプのみのポリシー設定、または自分でリストに追加した新規のオブジェクト タイプ（StorageArray ストレージ デバイスなど）のポリシー設定を選択できます。

ベース ポリシー設定を選択およびオーバーライドできる場所

自分で作成するポリシーの開始点として使用するベース ポリシー、および自分のポリシーがベース ポリシーから継承する 1 つ以上の設定をオーバーライドするポリシーを選択するには、[管理] - [ポリシー] - [ポリシーライブラリ] 順にクリックしてから、プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆アイコンをクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、ポリシーの名前を追加し、[ベース ポリシーの選択] をクリックします。 ポリシーの構成、オブジェクト、およびプレビューがワークスペースに表示されます。

表 4-84. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースにおける基本ポリシーとオーバーライドの設定

オプション	説明
次の変更を表示	<p>オブジェクトを選択して変更内容を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ すべてのオブジェクト タイプ。有効化および無効化されたアラート定義、症状定義の数およびメトリックとプロパティ、有効化および無効化された変更の数、オブジェクト タイプ グループおよび各グループのローカルのポリシー要素の数を表示します。 ■ オーバーライドを持つすべてのオブジェクト タイプ。変更が適用されたオブジェクト タイプ、およびオーバーライド対象として選択されたオブジェクト タイプを表示します。ドロップダウン メニューを使用してオブジェクト タイプを選択します。[フィルタ] ボタンをクリックして選択したオブジェクト タイプをリストに追加し、設定をプレビューおよび構成できるようにします。 ■ オブジェクトの新規セットに対して設定を追加。オブジェクト タイプの一覧を表示します。この一覧で、[ストレージ デバイス] - [SAN] などのオブジェクト タイプを選択し、選択したオブジェクトを [オブジェクト タイプ] リストに追加できます。
追加ポリシーからの設定のオーバーライド	1 つ以上のポリシーを選択および適用して、自分のポリシーが基本ポリシーから継承した設定をオーバーライドします。
適用	自分のポリシーにオーバーライド ポリシーを適用し、適用されたポリシー履歴にオーバーライド ポリシーを一覧表示します。
適用済みポリシー履歴	自分のポリシーの設定をオーバーライドするために選択したポリシーを表示します。
基本ポリシーから継承された構成	選択すると、[ポリシーのプレビュー] ペインに、継承されたポリシー構成のプレビューが表示されます。

表 4-84. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースにおける基本ポリシーとオーバーライドの設定（続き）

オプション	説明
このポリシーで定義されている構成設定	選択すると、[ポリシーのプレビュー] ペインに、ポリシー構成のプレビューが表示されます。
ポリシーのプレビュー	<p>ローカル パッケージとオブジェクト グループ タイプに関するサマリ情報を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ パッケージ（ローカル）有効化および無効化されたアラート定義、症状定義、およびメトリックとプロパティの数、各オブジェクト グループのポリシー要素の数を表示します。 ■ オブジェクト タイプ グループ。関連付けられたオブジェクト グループを表示します。 ■ パッケージと設定のドロップダウン矢印。表示されるポリシーのパッケージと設定を表示します。

分析設定の詳細

オブジェクト タイプをフィルタリングして設定を変更すると、それらの設定が vRealize Operations Manager で適用されます。これにより、必要なデータがダッシュボードとビューに表示されます。

[分析設定] ワークスペースの仕組み

ポリシーの分析設定をオンにして構成することにより、vRealize Operations Manager がアラートのトリガやデータの表示に使用するポリシー要素の設定をオーバーライドできます。このタイプの設定には、アラートに基づくバジスコア症状しきい値、残り容量や残り時間を計算するための状況設定（コミットされたプロジェクトなど）、その他の詳細な設定があります。

ポリシー要素設定を展開して、特定のポリシーを取得するための値を構成します。たとえば、容量を解放するには、容量の割合を設定し、リソースが過剰サイズ状態、アイドル状態、またはパワーオフ状態になったときに、vRealize Operations Manager によってその旨が通知されるようにします。

ポリシーの適用対象はオブジェクトとオブジェクト グループです。ローカル ポリシーのポリシー要素設定を構成する場合、オブジェクト タイプ、および予期通りにダッシュボードとビューに表示する結果を考慮する必要があります。設定をまったく変更しないと、ローカル ポリシーは、選択したベース ポリシーから継承した設定をそのまま保持します。

ポリシー分析設定を設定できる場所

ポリシーの分析設定を設定するには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。次にプラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[分析設定] をクリックします。ワークスペースへの表示対象として選択したホスト システム、仮想マシン、その他のオブジェクト タイプの分析設定。

表 4-85. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースでの分析設定

オプション	説明
次の変更を表示	<p>オブジェクトを選択して変更内容を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ すべてのオブジェクト タイプ。有効化および無効化されたアラート定義、症状定義の数およびメトリックとプロパティ、有効化および無効化された変更の数、オブジェクト タイプ グループおよび各グループのローカルのポリシー要素の数を表示します。 ■ オーバーライドを持つすべてのオブジェクト タイプ。変更が適用されたオブジェクト タイプ、およびオーバーライド対象として選択されたオブジェクト タイプを表示します。ドロップダウン メニューを使用してオブジェクト タイプを選択します。[フィルタ] ボタンをクリックして選択したオブジェクト タイプをリストに追加し、設定をプレビューおよび構成できるようにします。 ■ オブジェクトの新規セットに対して設定を追加。オブジェクト タイプの一覧を表示します。この一覧で、[ストレージ デバイス] - [SAN] などのオブジェクト タイプを選択し、選択したオブジェクトを [オブジェクト タイプ] リストに追加できます。
右側のペイン - オブジェクト タイプの分析設定	<p>右側のペインには、左側のペインで選択したオブジェクト タイプの一覧が表示されます。</p> <p>オブジェクト タイプのポリシー要素と設定のビューを展開して、vRealize Operations Manager にオブジェクト タイプを分析させることができます。</p> <p>オブジェクト タイプのビューを展開して、次のポリシー要素のしきい値設定を表示または変更できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ワークロード ■ 異常 ■ 障害 ■ 残りの容量と時間 ■ 負荷 ■ コンプライアンス ■ 解放可能な容量 ■ 密度 ■ 時間の範囲 <p>各要素の右側にあるロック アイコンをクリックして、設定をオーバーライドし、ポリシーのしきい値を変更します。</p>

ポリシーのワークロード要素

ワークロードとは、オブジェクトでのリソースの需要の測定値のことです。ポリシーで、オブジェクト タイプのワークロード要素の設定を有効にして構成できます。その後、設定をオーバーライドして、vRealize Operations Manager で、設定に応じて、CPU 使用量およびメモリ使用量を計算し、選択したオブジェクトのリソース需要を表示できるようになります。

ワークロード要素の仕組み

ワークロード要素により、vRealize Operations Manager で、選択されたオブジェクト グループで使用されるリソースのレポート方法が決定します。オブジェクト グループで使用できるリソースは、構成済みリソース量および使用可能なリソース量によって異なります。

- 特定の物理メモリ量はホスト システムの構成済みリソースで、特定の CPU 数は仮想マシンの構成済みリソースです。
- オブジェクトまたはオブジェクト グループの使用可能なリソースは、構成済みの量のサブセットであり、構成済みの量と等しくなる場合があります。

- リソースの構成済みの量および使用可能な量は、リソースのタイプや必要な仮想化オーバーヘッド量（ESX ホスト マシンでホスト システムを実行するために必要なメモリなど）によって異なる可能性があります。 オーバーヘッドを考慮する場合、仮想マシンまたは高可用性バッファには予約が必要となるため、オーバーヘッドに必要なリソースは使用可能であるとはみなされません。

ポリシーのワークロード要素をオーバーライドする場所

ポリシーのワークロード分析設定を表示してオーバーライドするには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースで、[分析設定] をクリックし、左側ペインで 1 つまたは複数のオブジェクトを選択します。選択したオブジェクト タイプのワークロード設定が、右側のペインに表示されます。

ワークロード ポリシー要素を表示して、ポリシーの設定を構成します。

このポリシー要素を構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

表 4-86. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースのポリシーのワークロード要素の設定

オプション	説明
ロック アイコン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
[ワークロード] ドロップダウン メニュー	展開すると、リソース コンテナのリストが表示されます。ワークロード計算のためのリソース コンテナを有効または無効にすることができます。
バッジ スコア症状のしきい値	環境の基準を満たすようにバッジスコアを更新するレベルに、ポリシー要素の症状しきい値を設定します。vRealize Operations Manager は、症状しきい値を使用して [アラートの概要] と [ダッシュボード] のスコアに表示されるアラートをトリガーします。 [環境] - [オブジェクト] - [分析] - [ワークロード] を選択して、選択されたオブジェクトの負荷ポリシー設定のバッジ スコア症状のしきい値を表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。

表 4-87. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースのポリシーのワークロード要素の設定

オプション	説明
ロック アイコン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
[ワークロード] ドロップダウン メニュー	展開すると、リソース コンテナのリストが表示されます。ワークロード計算のためのリソース コンテナを有効または無効にすることができます。
バッジ スコア症状のしきい値	環境の基準を満たすようにバッジスコアを更新するレベルに、ポリシー要素の症状しきい値を設定します。vRealize Operations Manager は、症状しきい値を使用して [アラートの概要] と [ダッシュボード] のスコアに表示されるアラートをトリガーします。 [環境] - [オブジェクト] - [分析] - [ワークロード] を選択して、選択されたオブジェクトの負荷ポリシー設定のバッジ スコア症状のしきい値を表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。

ポリシーの異常要素

異常とは、オブジェクトに発生する異例または正常ではないイベントのことです。ポリシーのオブジェクト タイプに対する異常要素設定を有効にして構成することにより、設定をオーバーライドし、vRealize Operations Manager で、設定を基にメトリック履歴データに従ってオブジェクトの異常な動作の許容レベルを判断できます。

ポリシーの異常要素をオーバーライドする場所

ポリシーの異常分析設定を表示してオーバーライドするには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースで、[分析設定] をクリックし、左側ペインで 1 つまたは複数のオブジェクトを選択します。選択したオブジェクト タイプの異常設定が、右側のペインに表示されます。

ポリシーの異常要素を表示し、ポリシーの設定を構成します。

このポリシー要素を構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

表 4-88. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースでのポリシーの異常要素設定

オプション	説明
ロック アイコン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
バッジ スコア症状のしきい値	<p>環境の基準を満たすようにバッジスコアを更新するレベルに、ポリシー要素の症状しきい値を設定します。vRealize Operations Manager は、症状しきい値を使用して [アラートの概要] と [ダッシュボード] のスコアに表示されるアラートをトリガーします。</p> <p>[環境] - [オブジェクト] - [分析] - [異常] を選択して、異常ポリシー設定のバッジ スコア症状のしきい値を表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。</p>

ポリシーの障害要素

障害とは、仮想マシンの Guest file system out of space、ホスト システムの Host connectivity などのオブジェクトベースのエラー状態のことです。ポリシーのオブジェクト タイプで障害要素の設定をオンにして構成し、設定をオーバーライドして、選択したオブジェクトで発生する問題の重要度をユーザーの設定に基づいて vRealize Operations Manager が決定して計測できるようにします。

ポリシーの障害要素をオーバーライドする場所

ポリシーの障害分析設定を表示してオーバーライドするには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースで、[分析設定] をクリックし、左側ペインで 1 つまたは複数のオブジェクトを選択します。選択したオブジェクト タイプの障害設定が、右側のペインに表示されます。

障害ポリシー要素を表示し、ポリシーの設定を構成します。

このポリシー要素を構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

表 4-89. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースにおけるポリシーの障害要素の設定

オプション	説明
オーバーライド ボタン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
バッジ スコア症状のしきい値	<p>環境の基準を満たすようにバッジスコアを更新するレベルに、ポリシー要素の症状しきい値を設定します。vRealize Operations Manager は、症状しきい値を使用して [アラートの概要] と [ダッシュボード] のスコアに表示されるアラートをトリガーします。</p> <p>[環境] - [オブジェクト] - [分析] - [障害] を選択して、選択されたオブジェクトの障害ポリシー設定のバッジ スコア症状のしきい値を表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。</p>

ポリシーの残り容量および残り時間要素

容量とは、オブジェクトのためのメモリ量、CPU、およびディスク領域の測定値のことです。残り時間とは、オブジェクトが容量不足となるまでに残された時間の測定値のことです。ポリシーに指定されたオブジェクト タイプの残り容量および残り時間要素をオンにして構成することで、この設定をオーバーライドすることにより、vRealize Operations Manager は、設定に基づいて、リソースが不足するまでの使用可能な残り容量および残り時間について報告ようになります。

残り容量および残り時間要素の仕組み

容量および残り時間要素により、vRealize Operations Manager で、特定のオブジェクト タイプ グループのリソースが不足するまでの使用可能な容量と時間についてどのように報告するかが決まります。

- 残り容量は、環境に新規仮想マシンに対応する余地があるかどうかを示します。vRealize Operations Manager は、選択したオブジェクトにデプロイ可能な仮想マシンの総数と比較した、仮想マシン数の残りの全容量の割合として残り容量を計算します。
- 残り時間は、オブジェクト グループがすべてのリソースを消費するまで残り時間を示します。vRealize Operations Manager は、すべての容量が消費されるまでの残り日数からプロビジョニング バッファに割り当てられている日数を減算することで、残り時間を計算します。
- 使用可能な容量とは、空き容量から、高可用性を使用し、メモリ、CPU、ネットワーク、データストア、およびディスク領域のバッファに設定する容量バッファ量を設定する場合に影響を受ける容量を差し引いたパーセントの測定値です。オーバーコミット値を設定する場合、使用可能な容量の測定値により、使用可能な空き容量にその容量が追加されます。
- 高可用性を使用するように使用可能な容量設定を変更できます。これにより、スループットおよび潜在的なデータ損失に対応できるだけの十分なオブジェクトやリソースが vRealize Operations Manager から提供されるようになります。計算タイプやバッファ ルールを変更することもできます。
- 分析で、リソース コンテナの容量設定を有効または無効にします。メモリ、CPU、およびディスク領域リソース コンテナの場合、需要と割り当てを有効または無効にできます。ネットワーク I/O リソース コンテナの場合、データ転送速度、データ受信速度、および使用速度を有効または無効にできます。データストア I/O リソース コンテナの場合、未処理の I/O 要求数、1 秒あたりの読み込み回数と書き込み回数、および読み込み速度と書き込み速度を有効または無効にできます。vSphere の構成限界も有効または無効にできます。
- ピーク考慮設定により、vRealize Operations Manager で、容量のピーク使用に負荷設定が考慮されます。
- vRealize Operations Manager で、オブジェクトの今後の容量を計画できるようにするために定義した、コミットされたプロジェクトを考慮することができます。コミットされたプロジェクトはオブジェクトの今後の容量を予測するシナリオであるため、コミットされたプロジェクトを考慮することにより、残り時間スコアが影響を受けます。
- プロビジョニング時間バッファとして設定される日数は、環境内でオブジェクトをプロビジョニングするのに必要となる時間（オブジェクトを注文してからデプロイするまでの時間）を基にしています。残り時間スコアがゼロにならないようにするため、オブジェクトには、プロビジョニング時間バッファよりも長い使用可能な容量の日数が必要です。

ポリシーの残り容量および残り時間要素をオーバーライドする場所

ポリシーの残りキャパシティと残り時間の分析設定を表示してオーバーライドするには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースで、[分析設定] をクリックし、左側ペインで 1 つまたは複数のオブジェクトを選択します。ワークスペースで選択したオブジェクト タイプの容量および残り時間設定が右側のペインに表示されます。

残り容量および残り時間ポリシー要素を表示して、ポリシーの設定を構成します。

このポリシー要素を構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

表 4-90. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースのポリシーの残り容量および残り時間要素の設定

オプション	説明
ロック アイコン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
残り時間スコアおよび容量スコアの症状しきい値	<p>環境の基準を満たすようにバジスコアを更新するレベルに、ポリシー要素の症状しきい値を設定します。vRealize Operations Manager は、症状しきい値を使用して [アラートの概要] と [ダッシュボード] のスコアに表示されるアラートをトリガーします。</p> <p>残り容量および残り時間ポリシー設定のバジ スコア症状のしきい値は、選択したオブジェクトの次のタブに表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [環境] - [オブジェクト] - [分析] - [残り容量] ■ [環境] - [オブジェクト] - [分析] - [残り時間]

表 4-90. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースのポリシーの残り容量および残り時間要素の設定（続き）

オプション	説明
リソース コンテナの使用可能な容量設定	<p>分析に含めるように選択したリソース コンテナやリソース、リソース（メモリや CPU など）のオーバーコミット タイプや値、および各リソース コンテナの容量バッファの割合が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 容量バッファ %。仮想マシンでそのすべてのリソースを消費しないように、仮想マシンで予約される容量の割合を定義します。容量バッファは、一部のリソースをフェイルオーバーのために確保するため、クラスター オブジェクトとホスト オブジェクトで定義されます。 ■ オーバーコミット。メモリや CPU などのオーバーコミット タイプが表示されます。 ■ 値。容量リソースのオーバーコミット量が表示されます。 <p>この設定を変更するには、リソース コンテナを選択し、変更する値をダブルクリックします。</p>
残り時間計算と残りキャパシティ計算に影響を与えるその他の設定	<p>利用可能な設定は、選択するオブジェクト タイプにより異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ■ 高可用性。選択すると、vRealize Operations Manager は、オブジェクト タイプ グループの使用可能なキャパシティについて報告します。 <p>vRealize Operations Manager で高可用性 (HA) 設定を考慮することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ピーク時の考慮事項。選択すると、vRealize Operations Manager で、残り容量および残り時間の計算に負荷要素が含まれるようになります。 ■ コミットされたプロジェクト。選択すると、vRealize Operations Manager で、コミットされたプロジェクトが残り容量および残り時間の計算に考慮されるようになります（将来の容量要件を計画するために、1つのオブジェクト タイプで1つ以上のプロジェクトをコミットし、これらのプロジェクトに容量シナリオを追加している場合）。 ■ キャパシティの計算。vRealize Operations Manager が報告の対象とするステータスを示します。容量分析の基準として、現在の値または値の傾向を選択できます。 ■ プロビジョニング時間バッファ。物理リソースまたは仮想リソースをプロビジョニングできる日数を示します。vRealize Operations Manager は、この数値を使用して、リソース タイプの残り容量および残り時間を計算し、残り時間スコアを差し引きます。 <p>適用されるポリシーで定義されたピーク時の考慮事項、コミットされたプロジェクト、およびプロビジョニング バッファの設定は、選択したオブジェクトの次のタブに表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [環境] - [オブジェクト] - [分析] - [残り容量] ■ [環境] - [オブジェクト] - [分析] - [残り時間]

ポリシーの負荷要素

負荷とは、ある一定時間でのオブジェクトに対するワークロードの測定値であり、CPU、メモリ、ネットワーク I/O、およびデータストア I/O が含まれます。ポリシーのオブジェクト タイプの負荷要素設定を有効にし、構成することにより、設定をオーバーライドし、vRealize Operations Manager でオブジェクトまたはオブジェクト タイプの一定期間におけるリソース使用量を分析して、設定に基づくワークロード履歴をレポートすることができます。

負荷要素の仕組み

負荷要素により、一定期間中のリソースおよび使用可能容量に対する需要に関する vRealize Operations Manager のレポート方法を決定します。

- ポリシーに負荷要素を含めると、負荷スコアを使用して、追加リソースを必要とするホストやマシン、および仮想マシンをそれほど必要としないホストを識別して、ご使用の環境におけるパフォーマンス問題を回避することができます。
- 容量および残り時間要素の [ピーク時の考慮事項] を選択した場合、vRealize Operations Manager により負荷要素が使用され、容量使用率のピークが表示されます。

- 負荷とは、負荷が負荷のノイズ ラインを上回る場合の、ある時間にわたる需要のパーセントです。たとえば、負荷ラインを需要の超過に使用される設定に基づき、ある一定時間でのワークロードの 70% に設定できます。vRealize Operations Manager が残り容量と残り時間を計算するとき、これらのスパイクとピークを考慮に入れることが必要となる場合があります。

負荷設定を設定するには、負荷分析設定を使用します。負荷の設定は、インフラストラクチャの監視用ポリシーと仮想マシンの監視用ポリシーとで異なることが必要となる場合があります。たとえば、インフラストラクチャポリシーの場合、負荷設定の推奨レベルは 10（警告）、30（緊急）、および 50（重大）です。仮想マシンの場合、負荷設定は 5（警告）、10（緊急）、および 20（重大）です。テスト用ポリシーと開発用ポリシーの場合、vRealize Operations Manager で、レベルが 10% に達するとアラートがトリガーされることが望ましいことがあります。本番用ポリシーの場合、通常はピーク使用のための十分な容量が存在することを確認する必要があります。

ポリシーの負荷要素をオーバーライドする場所

ポリシーの負荷分析設定を表示してオーバーライドするには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースで、[分析設定] をクリックし、左側ペインで 1 つまたは複数のオブジェクトを選択します。選択したオブジェクト タイプの負荷設定が、右側のペインに表示されます。

ポリシーの負荷要素を表示し、ポリシーの設定を構成します。

このポリシー要素を構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

表 4-91. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースでのポリシーの負荷要素設定

オプション	説明
ロック アイコン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
残り時間スコアおよび容量スコアの症状しきい値	環境の基準を満たすようにバジスコアを更新するレベルに、ポリシー要素の症状しきい値を設定します。vRealize Operations Manager は、症状しきい値を使用して [アラートの概要] と [ダッシュボード] のスコアに表示されるアラートをトリガーします。 [環境] - [オブジェクト] - [分析] - [負荷] を選択して、選択されたオブジェクトの負荷ポリシー設定のバジスコア症状のしきい値を表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。
リソース コンテナの負荷設定	リソース コンテナおよびポリシーの時間要素で定義された時間範囲の需要超過に対する設定を表示します。 [環境] - [オブジェクト] - [分析] - [負荷] を選択して、選択されたオブジェクトの需要超過のパーセントを表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。 ストレスを分析するウィンドウで、vRealize Operations Manager が負荷をチェックする時間を定義します。このチェックは、定義された時間（分）または時間ポリシー要素でデータ範囲に対して定義される全体範囲で行われ、ピーク負荷の時間を監視します。設定を変更するには、リソース コンテナ設定（[ディスク領域] - [使用量] など）を選択し、[ストレスを分析するウィンドウ設定] をダブルクリックして、[任意]、[全範囲] のいずれかを選択します。設定が [任意] の場合、vRealize Operations Manager がオブジェクトを監視し、負荷のピーク時間を通知する間隔（分）の値を [分間のピーク時] で変更できます。

ポリシーのコンプライアンス要素

コンプライアンスとは、環境内のオブジェクトが業界、政府、規制、または社内の標準を確実に満たすようにするための測定です。ポリシーで、オブジェクト タイプのコンプライアンス要素の設定をロック解除して構成できます。基本ポリシー設定をオーバーライドして、vRealize Operations Manager で、仮想マシンとホストの比率、メモリ

デマンド、CPU デマンドなどの仮想マシンと関連オブジェクトのコンプライアンス結果についてレポートできるようにします。

ポリシーのコンプライアンス要素をオーバーライドする場所

ポリシーのコンプライアンス分析設定を表示してオーバーライドするには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースで、[分析設定] をクリックし、左側ペインで1つまたは複数のオブジェクトを選択します。選択したオブジェクト タイプのコンプライアンス設定が、右側のペインに表示されます。

コンプライアンス ポリシー要素を表示して、ポリシーの設定を構成します。

このポリシー要素を構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

表 4-92. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースのポリシーのコンプライアンス要素の設定

オプション	説明
ロック アイコン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
バッジ スコア症状のしきい値	環境の基準を満たすようにバッジスコアを更新するレベルに、ポリシー要素の症状しきい値を設定します。vRealize Operations Manager は、症状しきい値を使用して [アラートの概要] と [ダッシュボード] のスコアに表示されるアラートをトリガーします。 [環境] - [オブジェクト] - [分析] - [コンプライアンス] を選択して、選択されたオブジェクトのコンプライアンス ポリシー設定のバッジ スコア シンボルのしきい値を表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。

ポリシーの解放可能な容量の要素

解放可能な容量とは、オブジェクトのための CPU、メモリ、およびディスク領域のうち、無駄として指定された部分の測定値のことです。ポリシーのオブジェクト タイプで解放可能な容量要素の設定をオンにして構成し、設定をオーバーライドして、vRealize Operations Manager が、未使用または十分に使用されていないオブジェクトから、解放できる容量を分析して、報告できるようにします。その後、設定に基づいて、解放された容量を環境内の別のオブジェクトにプロビジョニングできます。

解放可能な容量の要素の機能

解放可能な容量の要素では、vRealize Operations Manager が環境内の各オブジェクトの CPU、メモリ、ディスク容量などのオブジェクトの解放可能な容量をレポートする方法を決定します。

解放可能な容量の要素をポリシーに含めると、解放可能な容量のスコアを使用して、解放可能であり、他のオブジェクトにプロビジョニング可能なリソース量を特定することができます。

ポリシーの解放可能な容量の要素をオーバーライドする場所

ポリシーの節約可能なキャパシティ分析設定を表示してオーバーライドするには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースで、[分析設定] をクリックし、左側ペインで1つまたは複数のオブジェクトを選択します。選択したオブジェクト タイプの解放可能な容量設定が、右側のペインに表示されます。

解放可能な容量ポリシー要素を表示し、ポリシーの設定を構成します。

このポリシー要素を構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

表 4-93. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースにおけるポリシーの解放可能な容量の要素の設定

オプション	説明
ロック アイコン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
バッジ スコア症状のしきい値	<p>環境の基準を満たすようにバッジスコアを更新するレベルに、ポリシー要素の症状しきい値を設定します。vRealize Operations Manager は、症状しきい値を使用して [アラートの概要] と [ダッシュボード] のスコアに表示されるアラートをトリガーします。</p> <p>[環境] - [オブジェクト] - [分析] - [解放可能な容量] を選択して、選択されたオブジェクトの解放可能な容量ポリシー設定のバッジ スコア症状のしきい値を表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。</p>
リソース コンテナの解放可能な容量の設定	<p>リソースが過剰サイズ、アイドル、またはパワーオフと判定されるときに vRealize Operations Manager がレポートするために使用する構成可能な割合を表示します。</p> <p>[環境] > [オブジェクト] > [分析] > [解放可能な容量] を選択して、選択されたオブジェクトのディスクと CPU のアイドル レベルの設定、およびリソースが過剰サイズ、アイドル、またはパワーオフであるとみなすのに使用されるパーセントを表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。</p> <p>選択されたオブジェクトの過剰サイズ、アイドル、パワーオフ、および未使用の容量設定を設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 推奨される容量が現在の容量の定義されているパーセントを下回ると、オブジェクトは過剰サイズであるとみなされます。たとえば、仮想マシンの過剰サイズ設定が 50% である場合、仮想マシンの容量が現在使用可能な容量の半分になると、その仮想マシンは過剰サイズであるとみなされます。 ■ オブジェクトの動作が、定義された時間の割合でアイドル レベルを下回ると、オブジェクトはアイドル状態であるとみなされます。たとえば、仮想マシンの CPU アイドル レベルが 100MHz に設定され、アイドル レベルのフラグが 90% に設定されている場合、CPU の速度がある時間の 90% で 100 MHz を下回ると、仮想マシンはアイドル状態であるとみなされます。 ■ オブジェクトが、定義された割合の時間パワーダウンされている場合、オブジェクトはパワーオフ状態であるとみなされます。たとえば、パワーオフ フラグが 90% に設定されている場合、仮想マシンが少なくとも 90% の時間パワーダウンされていると、その仮想マシンはパワーオフ状態であるとみなされます。 ■ 定義された日数の間、タイムスタンプ属性が変更されない、つまりオブジェクトがアクセスされない場合、オブジェクトは未使用であるとみなされます。たとえば、仮想マシンのディスク領域の解放可能なスナップショット領域のフラグが 60 日に設定されている場合、仮想マシンまたは仮想マシン上のファイルが 60 日間アクセスされないと、仮想マシンは未使用であるとみなされます。

ポリシーの密度要素

密度とは、需要に対する使用可能な CPU、および需要に対する使用可能メモリを基にした、オブジェクトのサイズ比の測定値です。ポリシーで、オブジェクト タイプの密度要素の設定をロック解除して構成できます。基本ポリシー設定をオーバーライドして、vRealize Operations Manager で、仮想マシンとホストの比率、メモリ デマンド、CPU デマンドなどの仮想マシンと関連オブジェクトの密度結果についてレポートできるようにします。たとえば、ホスト マシンで仮想マシンの密度を軽減するには、一部の仮想マシンを別のホストに移動します。

ポリシーの密度要素をオーバーライドする場所

ポリシーの密度分析設定を表示してオーバーライドするには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースで、[分析設定] をクリックし、左側ペインで 1 つまたは複数のオブジェクトを選択します。選択したオブジェクト タイプの密度設定が、右側のペインに表示されます。

ポリシーの密度要素を表示し、ポリシーの設定を構成します。

このポリシー要素を構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

表 4-94. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースでのポリシーの密度要素設定

オプション	説明
ロック アイコン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
バッジ スコア症状のしきい値	<p>環境の基準を満たすようにバッジスコアを更新するレベルに、ポリシー要素の症状しきい値を設定します。vRealize Operations Manager は、症状しきい値を使用して [アラートの概要] と [ダッシュボード] のスコアに表示されるアラートをトリガーします。</p> <p>[環境] - [オブジェクト] - [分析] - [密度] を選択して、選択されたオブジェクトの密度ポリシー設定のバッジ スコア症状のしきい値を表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。</p>

ポリシーの時間要素

時間とは、オブジェクトのリソースの使用、定期的で繰り返し実施されるメンテナンス向けに選択されたメンテナンス スケジュールを vRealize Operations Manager が監視するスケジュールと日時の範囲のことを示します。ポリシーに含まれるオブジェクト タイプの時間要素の設定をオンにして構成すると、設定をオーバーライドし、指定した時刻に vRealize Operations Manager で、グループについてメトリックのレポートや分析の計算を行うことができます。

時間要素の仕組み

時間要素により、vRealize Operations Manager で特定のオブジェクト タイプのリソースをいつどのように追跡するかが決まります。

ポリシーの時間要素をオーバーライドする場所

ポリシーの時間分析設定を表示してオーバーライドするには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースで、[分析設定] をクリックし、左側ペインで1つまたは複数のオブジェクトを選択します。選択したオブジェクト タイプの時間設定が、右側のペインに表示されます。

ポリシーの時間要素を表示し、ポリシーの設定を構成します。

このポリシー要素を構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

表 4-95. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの [ポリシーの時間要素] 設定

オプション	説明
ロック アイコン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
使用量の追跡	<p>vRealize Operations Manager が、容量分析の計算を実行するタイミングを決定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [常時]。1 日 24 時間、週 7 日、追跡時間を監視します。 ■ [特定の日時]。使用時間を追跡するタイミングを選択します。
データ範囲	使用時間の分析に含める日数を設定します。
メンテナンス スケジュール	メンテナンス タスクを実行する時刻を設定します。メンテナンス時間中、vRealize Operations Manager では分析は計算されません。

ワークロード自動化の詳細

ポリシーのワークロード自動化オプションを設定して、vRealize Operations Manager が定義に従って環境内のワークロードを調整できるようにします。

[ワークロード自動化] ワークスペースの仕組み

ロック アイコンをクリックして、ポリシーに固有のワークロード自動化オプションのロックを解除し、構成します。ロック アイコンをクリックしてオプションのロックを解除すると、ポリシーは親ポリシーの設定を継承します。右側のグラフィックが更新され、変更内容が反映されます。

ポリシーのワークロード自動化を設定できる場所

ポリシーのワークロード自動化を設定するには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。次にプラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[ワークロード自動化] をクリックします。

表 4-96. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースでのワークロード自動化

オプション	説明
ワークロードの調整	vRealize Operations Manager がワークロードを調整する方法を選択します。 ポピュレーションが安定している場合は [積極的] 調整を選択します。競合が最小限に抑えられる一方で、ワークロードの移動が増えて、停止を引き起こすことがあります。 ポピュレーションが動的な場合は [保守的] 調整を選択します。潜在的な競合が表面化しますが、ワークロードの移動が減ります。
ワークロードの統合	vRealize Operations Manager がワークロードを統合する方法を選択します。統合ポリシー設定はクラスタ間の仮想マシンの配置に影響を与えません。 <ul style="list-style-type: none"> ■ デマンドが安定しているポピュレーションの場合、統合の度合いを高くします。この場合、ワークロードは可能な限り少ない数のホストに配置され、ライセンスと電力のコストが軽減されます。ただし、このアプローチでは、キャパシティの応答性が低下する可能性があります。 ■ デマンドが不規則なポピュレーションの場合、統合の度合いを低くします。この場合、すべての使用可能なホストが使用され、デマンドの急増への余地が広がります。ただし、このアプローチでは、ライセンスと電力のコストが増大します。
詳細設定	[詳細設定] をクリックして、ワークロードに対処するために vRealize Operations Manager が最初に移動する仮想マシンのタイプを選択します。

メトリックとプロパティの詳細の収集

属性タイプを選択してポリシーに含め、vRealize Operations Manager が環境内のオブジェクトからデータを収集可能にすることができます。属性タイプには、メトリック、プロパティ、およびスーパー メトリックが含まれます。各メトリックを有効化または無効化し、ワークスペースで選択したベース ポリシーからメトリックを継承するかどうかを決定します。

[メトリックとプロパティの収集] ワークスペースの仕組み

ポリシーを作成またはカスタマイズするときに、基本ポリシー設定をオーバーライドして、vRealize Operations Manager でアラートを生成するために使用するデータを収集したり、ダッシュボード スコアで結果をレポートできるようにします。



ポリシーを使用して vRealize Operations Manager で収集されるメトリックの編集
http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_editing_metrics_with_policy_in_vrom

[内容] - [症状の定義] で、メトリックとスーパーメトリック症状、メトリック イベント症状、プロパティ症状を定義します。

ポリシー属性をオーバーライドする場所

ポリシーのアラートの属性とプロパティ設定をオーバーライドするには、[管理] を選択し、[ポリシー] をクリックして、[ポリシー ライブラリ] タブをクリックし、プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆アイコンをクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[メトリックとプロパティの収集] をクリックします。選択したオブジェクト タイプの属性とプロパティ設定がワークスペースに表示されます。

表 4-97. [メトリックとプロパティの収集] のオプション

オプション	説明
アクション	1 つ以上の属性を選択し、[有効化]、[無効化]、または [継承] を選択してこのポリシーの状態と KPI を変更します。
フィルタ オプション	<p>[属性タイプ]、[状態]、[KPI]、[動的しきい値] ドロップダウン メニューでオプションの選択を解除し、属性のリストを絞り込みます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■  有効化。属性が計算されることを示しています。 ■  有効化（強制）。依存性に帰因する状態の変化を示しています。 ■  無効化。属性が計算されないことを示しています。 ■  継承済み。この属性の状態が基本ポリシーから継承され、計算されることを示しています。 ■  継承済み。この属性の状態が基本ポリシーから継承され、計算されないことを示しています。 <p>[KPI] では、vRealize Operations Manager がダッシュボードに収集されたデータをレポートするときに、メトリック、プロパティ、またはスーパー メトリック属性を主要なパフォーマンス インジケータ (KPI) としてみなすかどうかを指定します。KPI の状態をフィルタリングし、KPI が有効、無効、または継承のいずれであるかに基づいて、ポリシーの属性を表示します。</p>
オブジェクト タイプ	オブジェクト タイプで属性のリストをフィルタします。
ページ サイズ	1 ページあたりに一覧表示する属性の数。
属性データ グリッド	<p>特定のオブジェクト タイプの属性を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 名前。選択したオブジェクト タイプのメトリックまたはプロパティの名前を特定します。 ■ タイプ：メトリック、プロパティ、またはスーパー メトリックのいずれかになる属性のタイプを区別します。 ■ アダプタ タイプ。選択したオブジェクト タイプ（ストレージ デバイスなど）に基づいて使用するアダプタを特定します。 ■ オブジェクト タイプ。環境内のオブジェクトのタイプ（StorageArray など）を特定します。 ■ 状態。メトリック、プロパティ、またはスーパー メトリックが基本ポリシーから継承されているかどうかを示します。 ■ KPI。主要なパフォーマンス インジケータが基本ポリシーから継承されているかどうかを示します。KPI の違反が発生すると、vRealize Operations Manager がアラートを生成します。 ■ 動的しきい値。動的しきい値 (DT) が基本ポリシーから継承されているかどうかを示します。

アラートとシンプトムの定義の詳細

環境内のオブジェクトに関する問題を vRealize Operations Manager で特定し、問題とみなされる条件が満たされた場合にアラートをトリガするため、アラートおよび症状の定義を有効または無効にできます。アラートは自動化できます。

[アラート/シンプトム定義] ワークスペースの仕組み

vRealize Operations Manager では、オブジェクトのデータが収集され、収集されたデータが、そのオブジェクト タイプのアラートの定義および症状の定義と比較されます。アラートの定義には、関連付けられた症状の定義が含まれ、属性、プロパティ、メトリック、イベントに関する条件が特定されます。

選択するベース ポリシーからアラートの定義を継承するローカル ポリシーを構成したり、ローカル ポリシーのアラートの定義と症状の定義をオーバーライドしたりできます。

ポリシーのアラートの定義およびシンプトムの定義を追加またはオーバーライドする前に、使用可能なアラートとシンプトムについて理解しておく必要があります。

- 使用可能なアラートの定義を表示するには、[内容] を選択し、[アラートの定義] をクリックします。
- 使用可能な症状の定義を表示するには、[内容] を選択し、[症状の定義] をクリックします。症状の定義は、メトリック、プロパティ、メッセージ、障害、早期警告スマート アラート、および外部イベントで使用できます。

有効または無効になっている問題とシンプトムの件数の概要、および基本ポリシーと比較したときの問題とシンプトムの変化の違いは、ポリシー ワークスペースの [分析設定] ペインに表示されます。

アラートの定義および症状の定義をオーバーライドする場所

ポリシーのアラートの定義および症状の定義をオーバーライドするには、[管理] を選択し、[ポリシー] をクリックして、[ポリシー ライブラリ] タブをクリックし、プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆アイコンをクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[アラート/シンプトム定義] をクリックします。ワークスペースに定義が表示されます。

ポリシーのアラートの定義および症状の定義

ポリシーごとに、アラートの定義および症状の定義をオーバーライドできます。

■ ポリシーのアラート定義

各ポリシーにはアラート定義が含まれています。各アラートは、症状と推奨の組み合わせを使用して、ある問題を障害や過負荷などに分類するための条件を識別します。ポリシーのアラート定義は有効または無効にできます。また、アラートがトリガされたときのアクションを自動化するように設定できます。

■ ポリシーに含まれる症状の定義

各ポリシーには、症状の定義のパッケージが含まれています。各症状は、プロパティ、メトリック、またはイベントに対する明確なテスト条件を表します。ポリシー内の症状の定義を有効または無効にできます。

ポリシーのアラート定義

各ポリシーにはアラート定義が含まれています。各アラートは、症状と推奨の組み合わせを使用して、ある問題を障害や過負荷などに分類するための条件を識別します。ポリシーのアラート定義は有効または無効にできます。また、アラートがトリガされたときのアクションを自動化するように設定できます。

ポリシー アラート定義の仕組み

vRealize Operations Manager は、問題を使用してアラートを起動します。問題によって、いつオブジェクトに対し一連の症状が現れたのかが明らかになり、その問題への対処が必要になります。アラートは環境内の問題を示します。vRealize Operations Manager は、オブジェクトに関する収集データとそのオブジェクト タイプのアラート定義を比較して、定義済みの症状が当てはまるときにアラートを生成します。アラートが発生すると、vRealize Operations Manager はユーザーがアクションを実行するためのトリガーとなる症状を提示します。

一部のアラート定義には定義済みの症状が含まれます。アラート定義に症状を含めて、アラートを有効にすると、症状が当てはまるときにアラートが生成されます。

[アラートの定義] ペインには、アラートの名前、定義されている症状の数、アダプタ、ホストやクラスタなどのオブジェクト タイプ、アラートが有効かどうか ([ローカル] で示されます)、無効かどうか ([非ローカル] で示されます)、継承されているかどうかが表示されます。デフォルトでは、アラートは有効であることを示す緑色のチェックマーク付きで継承されます。

優先順位の最も高い推奨事項に関連アクションがある場合は、ポリシーのアラート定義を自動化できます。

特定のアラート一式を表示するには、バッジ タイプ、重要度タイプ、およびアラートの状態を選択し、ビューにフィルタを適用します。たとえば、仮想マシンの障害アラートを送信するポリシーを設定します。

ポリシー アラート定義を変更する場所

ポリシーに関連付けるアラートを変更するには、左側のペインで [管理]、[ポリシー] をクリックし、[ポリシー ライブラリ] タブを選択してからプラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[アラート/シムptom定義] をクリックします。選択されたオブジェクト タイプに関するアラートの定義および症状の定義がワークスペースに表示されます。

表 4-98. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースに対するアラート定義

オプション	説明
アクション	1 つ以上のアラート定義を選択し、[有効化]、[無効化]、または [継承] を選択してこのポリシーの状態を変更します。
フィルタ オプション	<p>[ファイルタイプ] および [状態] ドロップダウン メニューでオプションの選択を解除し、シムptom定義のリストを絞り込みます。</p> <p>[影響] は、アラートが適用される健全性、リスク、効率のバッジを示します。</p> <p>[クリティカル度] は、アラート定義が適用される情報、クリティカル、緊急、警告、自動のクリティカル度の各タイプを示します。</p> <p>[自動化] は、アラートがトリガされたときに自動化が有効になっているアクションを示したり、無効なアクションまたは継承されているアクションを示します。自動化が有効になっているアクションは、緑色のチェックマーク付きで継承として表示されることがあります。これは、ポリシーが互いに設定を継承できるからです。たとえば、ベース ポリシーの自動化の設定が緑色のチェックマークの付いた [ローカル] である場合、この設定を継承する他のポリシーにはこの設定が緑色のチェックマーク付きで継承と表示されます。</p>
オブジェクト タイプ	オブジェクト タイプでアラートの定義リストをフィルタします。
ページ サイズ	1 ページあたりに一覧表示するアラート定義の数。

表 4-98. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースに対するアラート定義 (続き)

オプション	説明
フィルタ	アラートの定義リストのデータを特定します。
アラート定義データ グリッド	<p>オブジェクト タイプのアラートの定義に関する情報が表示されます。アラート定義名の上にマウスを置くと、アラート定義のフルネームと重要度アイコンがツールチップに表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 名前。アラート定義のわかりやすい名前。 ■ 症状の定義。アラートに定義されている症状の数。 ■ 実行可能な推奨事項。優先順位が最も高いアクションを含んだ推奨のみ。自動化できるのは、その推奨だけです。 ■ 自動化。アクションが [ローカル] に設定されている場合、そのアクションではアラートがトリガされたときの自動化が有効です。自動化が有効になっているアクションは、緑色のチェックマーク付きで継承として表示されることがあります。これは、ポリシーが互いに設定を継承できるからです。たとえば、ベース ポリシーの自動化の設定が緑色のチェックマークの付いた [ローカル] である場合、この設定を継承する他のポリシーにはこの設定が緑色のチェックマーク付きで継承と表示されます。 ■ アダプタ。アラートが定義されているデータ ソース タイプ。 ■ オブジェクト タイプ。アラートが適用されるオブジェクトのタイプ。 ■ 状態。アラート定義の状態。有効 ([ローカル] によって示されます)、無効 ([非ローカル] によって示されます)、またはベース ポリシーからの継承です。

このパッケージを構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

ポリシーに含まれる症状の定義

各ポリシーには、症状の定義のパッケージが含まれています。各症状は、プロパティ、メトリック、またはイベントに対する明確なテスト条件を表します。ポリシー内の症状の定義を有効または無効にできます。

ポリシーに含まれる症状の定義の仕組み

vRealize Operations Manager では、有効になっている症状を使用してアラートを生成します。アラート定義で使用された症状が当てはまり、アラートが有効になっている場合、アラートが生成されます。

オブジェクトに症状があるときは、問題が存在するため、その問題を解決するための対策を取る必要があります。アラートが発生すると、vRealize Operations Manager にトリガーとなる症状 (これにより環境内のオブジェクトを評価できます)、およびアラートの解決方法に関する推奨が提示されます。

オブジェクトの症状を評価するために、メトリック、スーパー メトリック、プロパティ、メッセージ イベント、および障害について、症状のパッケージをポリシーに含めることができます。ポリシーが適用されるオブジェクトから収集されたデータの評価に使用される基準を決定するための症状を、有効または無効にできます。しきい値、重要度、待機サイクル、およびキャンセル サイクルを上書きすることもできます。

[症状] ペインには、症状の名前、関連付けられた管理パックのアダプタ、オブジェクト タイプ、メトリックまたはプロパティ タイプ、トリガーの定義 (CPU 使用量、症状の状態、トリガー条件など) が表示されます。パッケージ内の特定の症状セットを表示するときは、アダプタ タイプ、オブジェクト タイプ、メトリックまたはプロパティ タイプ、症状の状態を選択できます。

アラートで症状が要求されると、症状の状態は有効になりますが、薄く表示されるため変更できません。要求された症状の状態には、情報アイコンが含まれています。この情報アイコンの上にマウスを置くと、この症状を要求したアラートを特定できます。

ポリシーに含まれる症状の定義を変更できる場所

症状のポリシー パッケージを変更するには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。次にプラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[アラート/シムptom定義] をクリックします。選択されたオブジェクト タイプに関するアラートの定義および症状の定義がワークスペースに表示されます。

表 4-99. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの症状の定義

オプション	説明
アクション	1 つ以上のシムptom定義を選択し、[有効化]、[無効化]、または [継承] を選択してこのポリシーの状態を変更します。
フィルタ オプション	<p>[ファイルタイプ] および [状態] ドロップダウン メニューでオプションの選択を解除し、シムptom定義のリストを絞り込みます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■  有効化。シムptomの定義が含まれることを示しています。 ■  有効化（強制）。依存性に帰因する状態の変化を示しています。 ■  無効化。シムptom定義が含まれないことを示しています。 ■  継承済み。このシムptom定義の状態が基本ポリシーから継承され、含められることを示しています。 ■  継承済み。このシムptom定義の状態が基本ポリシーから継承され、含められないことを示しています。 <p>[ファイルタイプ] では、HT および DT メトリック、プロパティ、メッセージ、障害、およびメトリックなどのイベント、およびスマート早期警告に適用するシムptom定義をリストに表示するかどうかを指定します。</p> <p>[状態] では、有効化、無効化、および継承されたシムptom定義をシムptom定義リストに表示するかどうかを指定します。</p>
オブジェクト タイプ	オブジェクト タイプでシムptom定義リストをフィルタします。
ページ サイズ	1 ページあたりに一覧表示する症状の定義の数。
フィルタ	症状の定義リストのデータを特定します。
症状定義データ グリッド	<p>オブジェクト タイプの症状の定義に関する情報が表示されます。症状の定義名の上にマウスを置くと、症状の定義のフルネームがツールチップに表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 名前。[内容] 領域で症状の定義リストに定義された症状の定義名。 ■ アダプタ。アラートが定義されているデータ ソース タイプ。 ■ オブジェクト タイプ。アラートが適用されるオブジェクトのタイプ。 ■ タイプ：症状の定義を評価する必要があるオブジェクト タイプ。 ■ トリガー。症状の定義の数、選択したオブジェクト タイプおよびメトリック、症状の定義に割り当てられた数値、症状の重要度、症状の定義に適用される待機サイクルおよびキャンセル サイクルの回数に基づく、静的または動的しきい値。 ■ 状態。症状の定義の状態。有効、無効、またはベース ポリシーからの継承です。 ■ 条件。しきい値でのアクションを有効にします。[オーバーライド] に設定すると、しきい値を変更できます。それ以外の場合はデフォルトに設定します。 ■ しきい値。しきい値を変更するには、[状態] を [有効]、[条件] を [オーバーライド] に設定して、[シムptomしきい値の上書き] ダイアログボックスに新しいしきい値を設定する必要があります。

このパッケージを構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。






カスタム プロファイルの詳細

カスタム プロファイルを使用すると、利用可能なキャパシティやオブジェクト構成に応じて、指定したオブジェクトが環境にあといくつ収まるかがわかります。ポリシーのカスタム プロファイルを有効または無効にできます。

ポリシーのカスタム プロファイルを設定できる場所

ポリシーをオブジェクト グループに適用するには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。次にプラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[カスタム プロファイル] をクリックします。

表 4-100. カスタム プロファイルのオプション

オプション	説明
アクション	1 つ以上のプロファイルを選択し、[有効化]、[無効化]、または [継承] を選択してこのポリシーの状態を変更します。
フィルタ オプション	<p>[状態] ドロップダウン メニューでオプションの選択を解除し、属性のリストを絞り込みます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■  有効化。プロファイルが計算されることを示しています。 ■  有効化 (強制)。依存性に帰因する状態の変化を示しています。 ■  無効化。プロファイルが計算されないことを示しています。 ■  継承済み。このプロファイルの状態が基本ポリシーから継承され、計算されることを示しています。 ■  継承済み。このプロファイルの状態が基本ポリシーから継承され、計算されないことを示しています。
オブジェクト タイプ	オブジェクト タイプでプロファイルのリストをフィルタします。

ポリシーのグループ詳細への適用

ローカル ポリシーを 1 つまたは複数のオブジェクト グループに割り当て、VMware vRealize Operations Manager がポリシー内の設定に基づいてオブジェクトを分析し、定義されたしきい値レベルに違反した場合にはアラートをトリガして、ダッシュボード、ビュー、およびレポートに結果を表示できるようにします。

[ポリシーのグループへの適用] ワークスペースの仕組み

ポリシーを作成するとき、または既存のポリシーの設定を変更するときに、ポリシーを 1 つまたは複数のオブジェクト グループに適用します。VMware vRealize Operations Manager はポリシー内の設定を使用し、関連するオブジェクトのデータを分析および収集して、データをダッシュボード、ビュー、およびレポートに表示します。

ポリシーをグループに適用する場所

ポリシーをオブジェクト グループに適用するには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。次にプラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[ポリシーのグループへの適用] をクリックします。

[ポリシーのグループへの適用] のオプション

ポリシーをオブジェクトのグループに適用するには、ワークスペースでオブジェクト グループのチェック ボックスを選択します。

これで、ポリシーに関連付けられた各オブジェクト グループの詳細を表示できます。[ポリシー] - [アクティブ ポリシー] - [関連オブジェクト] - [グループ] を選択し、グループのリスト内のオブジェクト グループをクリックして、[詳細] ペインにサマリを表示します。

vRealize Operations Manager ソリューションの監視目標の定義

vSphere ソリューションのソリューション管理構成では、回答することで vCenter Adapter に関連するデフォルトのポリシー設定を定義するために役立つ一連の質問が提示されます。vRealize Operations Manager に追加する管理パック ソリューションのポリシーを作成できます。

vRealize Operations Manager での監視目標の定義の動作

ソリューションの管理ワークスペースには、ソリューションの監視目標を定義するオプションが含まれます。ここで選択によって、ソリューションに関連するオブジェクトを分析、監視するために vRealize Operations Manager で使用されるデフォルトのポリシー設定が決定します。

たとえば、それぞれに固有のオブジェクト グループが含まれている 4 つの個別の本番領域で構成された本番環境について考えます。各本番領域のオブジェクトを監視するには、各領域の監視要件に応じてデフォルト ポリシー設定を設定する必要があります。vRealize Operations Manager には、インフラストラクチャまたは仮想マシンに基づいてデフォルト設定を設定させたり、個々のオブジェクトまたはオブジェクト グループについて警告させたりすることができます。

ソリューションの監視目標を定義する場所

ソリューションの監視目標を定義し、デフォルトのポリシーで監視目標のデフォルトの設定を指定するには、左側のペインで [管理] を選択し、[ソリューション] をクリックして、ソリューションを選択します。[構成] をクリックし、[監視目標の定義] をクリックします。表示される [監視目標の定義] ダイアログ ボックスで、オブジェクト、アラート、メモリ容量、および vSphere セキュリティ強化ガイドに準拠するコンプライアンスの設定について、質問への回答を選択します。

オプションを選択すると、vRealize Operations Manager によって設定が保存されます。後で [監視目標の定義] ダイアログ ボックスを表示したときにユーザー インターフェイスで選択内容が保持されていないように見える場合でも、選択は依然としてアクティブです。念のために、オプションを再度選択し、[保存] をクリックします。

ポリシーの詳細な設定を変更するには、[管理] をクリックし、[ポリシー] をクリックします。

表 4-101. 監視目標に関する質問の定義

オプション	説明
環境でアラートを受ける必要のあるオブジェクトはどれですか？	アラートを受信するオブジェクトのタイプを選択します。仮想マシン以外、仮想マシンのみ、またはすべてのインフラストラクチャ オブジェクトについて、vRealize Operations Manager アラートを設定できます。
どの種類のアラートを有効にしますか？	vRealize Operations Manager では、オブジェクトの健全性、リスク、および効率のアラートのトリガを有効にできます。
メモリ キャパシティの構成基準	監視する環境のタイプに基づくメモリ容量モデルを設定します。たとえば、本番環境を監視する場合、パフォーマンスの確保用に穏やかな設定を使用するために [vSphere のデフォルト] のモデルを選択します。テスト環境および開発環境では、[最も積極的] な設定を使用します。すべての割り当て済みメモリを容量計算に使用する場合は[最も保守的] な設定を使用します。

表 4-101. 監視目標に関する質問の定義（続き）

オプション	説明
vSphere セキュリティ強化ガイド アラートを有効にしますか？	継続的かつ安全に vSphere オブジェクトを評価、運用するには、vSphere セキュリティ強化ガイドを使用します。このアラートを有効にした場合、vRealize Operations Manager では vSphere セキュリティ強化ガイドのルールに対してオブジェクトを評価します。 vSphere 6.0 オブジェクトは vSphere 6.0 セキュリティ強化ルールに対して評価され、vSphere 5.5 オブジェクトは vSphere 5.5 セキュリティ強化ルールに対して評価されます。
詳しい情報のリンク	監視目標の選択に関する詳細情報を表示するには、[詳しい情報] をクリックします。

vSphere セキュリティ強化ガイドについては、<http://www.vmware.com/security/hardening-guides.html> を参照してください。

コンプライアンスの構成

定義された標準を満たすようにオブジェクトにコンプライアンスを設定し、構成された標準に対するオブジェクトのコンプライアンスを判断できます。

コンプライアンス標準の定義

コンプライアンスは、オブジェクトの設定が定義された標準を満たすように、環境内の vCenter Server インスタンス、ホスト、仮想マシン、分散ポート グループ、分散スイッチを監視するために使用されます。

vRealize Operations Manager には、『VMware vSphere セキュリティ強化ガイド』バージョン 6.0 および 5.5 用のアラートが含まれています。vRealize Operations Manager は、シンプトムが vCenter Server インスタンス、ホスト、仮想マシン、分散ポート グループ、分散スイッチでトリガされると、コンプライアンス アラートを生成します。

仮想マシンでコンプライアンスを適用するために、vRealize Operations Manager には複数のコンプライアンスのリスク プロファイルがあります。環境で高、中、低のどのセキュリティ レベルを適用する必要があるかに応じて、仮想マシンのグループにリスク プロファイルを適用します。

- リスク プロファイル 1 には、シンプトムとして使用できるすべてのコンプライアンス ルールが含まれ、仮想マシンに最高レベルのセキュリティを適用します。このプロファイルはデフォルトで有効です。
- リスク プロファイル 2 は、環境に中レベルのセキュリティを適用し、リスク プロファイル 1 よりもシンプトムが少なくなります。このプロファイルはデフォルトで無効です。
- リスク プロファイル 3 は、低レベルのセキュリティを適用し、リスク プロファイル 2 よりもシンプトムが少なくなります。このプロファイルはデフォルトで無効です。

自分で定義したアラートを含む vRealize Operations Manager のすべてのコンプライアンス標準は、アラート定義をベースにします。生成されたアラートとシンプトムは、選択したオブジェクトの [分析] - [コンプライアンス] タブでコンプライアンス標準への違反として表示されます。

vSphere セキュリティ強化ガイドについては、<http://www.vmware.com/security/hardening-guides.html> を参照してください。

次のビデオは、vCenter Server インスタンス、ESXi ホスト、仮想マシン、分散ポート グループ、分散仮想スイッチなど、VMware vSphere 6.0 および 5.5 オブジェクトのコンプライアンスを確保する方法の一例です。これらのコンプライアンス アラートは、定義とシンプトムを含み、vSphere セキュリティ強化ガイド 6.0 および 5.5 に掲載されているコンプライアンス ルールに基づいています。



vSphere 6.0 オブジェクトの vRealize Operations Manager 6.3 のコンプライアンス
http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_vrom6.3_compliance_vsphere6_objects

vSphere 6.0 オブジェクトの vRealize Operations Manager のコンプライアンス

vSphere 6.0 および 5.5 オブジェクトにコンプライアンスを適用するために、vRealize Operations Manager には、『VMware vSphere セキュリティ強化ガイド』バージョン 6.0 および 5.5 のコンプライアンス アラートが含まれています。この強化ガイドのアラートは、オブジェクト タイプをベースにするようになりました。

『vSphere セキュリティ強化ガイド』のアラートを有効にするようにポリシーをカスタマイズすると、vSphere 6.0 および 5.5 のアラートを次のオブジェクト タイプとバージョンで有効にできます。

- ESXi ホストは、『vSphere セキュリティ強化ガイド』（5.5 および 6.0）に違反しています
- vCenter Server は、『vSphere セキュリティ強化ガイド』（6.0）に違反しています
- 仮想マシンは、『vSphere セキュリティ強化ガイド』（5.5 および 6.0）のリスク プロファイル 1 に違反しています
- 仮想マシンは、『vSphere セキュリティ強化ガイド』（5.5 および 6.0）のリスク プロファイル 2 に違反しています
- 仮想マシンは、『vSphere セキュリティ強化ガイド』（5.5 および 6.0）のリスク プロファイル 3 に違反しています
- vSphere 分散ポート グループは、『vSphere セキュリティ強化ガイド』（6.0）に違反しています
- vSphere 分散仮想スイッチは、『vSphere セキュリティ強化ガイド』（6.0）に違反しています

デフォルトでは、仮想マシンは、リスク プロファイル 1 に違反していますという名前のアラートがリスク プロファイル全体で唯一のアクティブなアラートです。このプロファイルを後で構成して、他のリスク プロファイルのいずれかを選択できます。

『vSphere セキュリティ強化ガイド 6.0 または 5.5』に対してアラートをトリガーするかどうかを決定するには、原因となっているシンプトムを調査する必要があります。たとえば、ESXi ホストが、vSphere セキュリティ強化ガイドに違反していますという名前のアラートでは、アラートの原因となっているシンプトムには次のものがあります。

- ESXi.set-account-lockout - アカウントがロックアウトされる前のログイン試行の失敗回数が最大値を超えています（『vSphere セキュリティ強化ガイド 6.0』）
- DCUI サービスが実行中です（『vSphere セキュリティ強化ガイド 5.5』）

vSphere セキュリティ強化ガイドについては、<http://www.vmware.com/security/hardening-guides.html> を参照してください。

vSphere 6.0 および 5.5 オブジェクトでデフォルトの内容をリセットして現在のコンプライアンス要件を適用する

アラート定義とシンプトム定義には、vSphere 6.0 と 5.5 両方のコンプライアンス標準が含まれるようになりました。vRealize Operations Manager の現在のバージョンにアップグレードするには、オプションを選択して、アラート定義とシンプトム定義を上書きする必要があります。

このリリースで提供される新しい内容によりアラート定義とシンプトムの定義を上書きしない場合、一部のコンプライアンス ルールには新しいアラート定義とシンプトムの定義が含まれますが、その他のコンプライアンス ルールでは古いアラート定義とシンプトムの定義が引き続き使用されます。

ユーザー シナリオ：vSphere 6.0 オブジェクトのコンプライアンスの確認

企業の仮想インフラストラクチャ管理者として、vSphere 6.0 オブジェクトが vSphere セキュリティ強化ガイドのコンプライアンス ルールを遵守していることを確認する必要があります。vRealize Operations Manager でコンプライアンス アラートを使用して、コンプライアンス標準の違反についてオブジェクトを監視します。コンプライアンス アラートが vCenter Server インスタンス、ホスト、仮想マシン、分散ポート グループ、または分散スイッチに対してトリガした場合、コンプライアンスの違反について調査します。また、違反したオブジェクトが業界のセキュリティ標準を引き続き満たすように違反を解決する必要があります。

本番/テスト/開発環境のセキュリティを管理および監視します。オブジェクトは複数の vCenter Server インスタンスから構成され、各インスタンスにはホスト、仮想マシン、分散ポート グループ、分散スイッチが含まれます。

CIO は、本番/テスト環境のすべての vCenter Server インスタンスとホスト マシン上で SSH を実行することを求めています。SSH 要件に遵守していることを確認するためにすべてのホストを監視します。実装されたセキュリティ標準をオブジェクトが遵守していることをマネージャおよびコンプライアンス チームに示すために毎週コンプライアンス レポートを生成します。

vSphere 6.0 オブジェクトのコンプライアンスを強制し、レポートするために、vSphere セキュリティ強化ガイドのコンプライアンス ルールを有効にします。次に、適切なアラートを有効にし、仮想マシンにリスク プロファイルを適用します。vRealize Operations Manager によってオブジェクトからコンプライアンス データを収集した後、発生したルール違反をすべて解決し、マネージャとコンプライアンス チーム向けにコンプライアンス結果のレポートを作成します。

vRealize Operations Manager に付属するアラート定義は、セキュリティ強化ガイドの特定のバージョンではなく、オブジェクト タイプに基づきます。これらのアラートを使用するために、カスタム グループを作成して該当グループにポリシーを適用する必要はなくなりました。

一部のアラートの定義は、vSphere 6.0 オブジェクトと vSphere 5.5 オブジェクトで共通です。vRealize Operations Manager では、vSphere 6.0 オブジェクトに対して 6.0 シンプトムをチェックし、5.5 オブジェクトに対して 5.5 シンプトム、両バージョンのオブジェクトに対して 6.0 シンプトムと 5.5 シンプトムの組み合わせをチェックします。

前提条件

vRealize Operations Manager の現在のバージョンがインストールされ、実行中であることを確認します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager で、コンプライアンス ルールを有効にします。
 - a [管理] をクリックして、[ソリューション] をクリックします。
 - b VMware vSphere ソリューションをクリックし、[構成] をクリックします。
 - c ソリューションの管理ダイアログ ボックスで、[監視目標の定義] をクリックします。
 - d [vSphere セキュリティ強化ガイド アラートを有効にしますか?] で、[はい] をクリックし、[保存] をクリックします。
 - e オブジェクトに対するコンプライアンス データを収集するようにデフォルトのポリシーが構成された旨が vRealize Operations Manager でレポートされたら、[OK] をクリックして、[完了] をクリックします。
- 2 デフォルト ポリシーでコンプライアンス アラート定義を有効にします。
 - a [ポリシー] - [ポリシー ライブラリ] をクリックします。
 - b [デフォルト ポリシー] をクリックし、[選択したポリシーの編集] をクリックします。
 - c [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[アラート/シンプトム定義] をクリックします。
 - d アラート定義ペインのフィルタ テキスト ボックスで、**セキュリティ強化**と入力します。

 オブジェクトにコンプライアンスを適用するためのアラート定義がいくつか表示されます。各アラートには、シンプトムの数と、アラートが適用されるオブジェクト タイプが表示されます。仮想マシン上で高/中/低のセキュリティを確認するために使用するリスク プロファイル 1/2/3 のアラート定義が表示されます。
 - e vCenter が vSphere セキュリティ強化ガイドに違反しています という名前のアラートをクリックします。
 - f [状態] 列で、下向き矢印をクリックし、[ローカル] を選択します。
 - g 仮想マシン、分散ポート グループ、および分散スイッチのコンプライアンス アラートを有効にするには、他のアラート定義を有効にし、[保存] をクリックします。
- 3 ESXi ホストのアラート定義のシンプトム設定を表示します。
 - a [コンテンツ] - [アラートの定義] をクリックします。
 - b フィルタ テキスト ボックスに、**セキュリティ強化**と入力します。
 - c vCenter が vSphere セキュリティ強化ガイドに違反しています という名前のアラートをクリックします。
 - d 下側のペインで、アラートの影響、重要度、およびシンプトムの設定を見つけます。
 - e シンプトムの設定をスクロールし、ホストについてアラートをトリガする可能性があるシンプトムを調査します。
 - f このシンプトム セットの下で、ホストに対してこのアラートをトリガする場合に、問題を修正するための推奨事項を確認してください。
 - g VMware vSphere セキュリティ強化ガイドへのリンクをクリックします。

<http://www.vmware.com/security/hardening-guides.html> で Web ページが開き、VMware vSphere セキュリティ強化ガイドのリストが表示されます。

4 本番 vCenter Server インスタンスのホストに対するアラートにフォーカスを移動します。

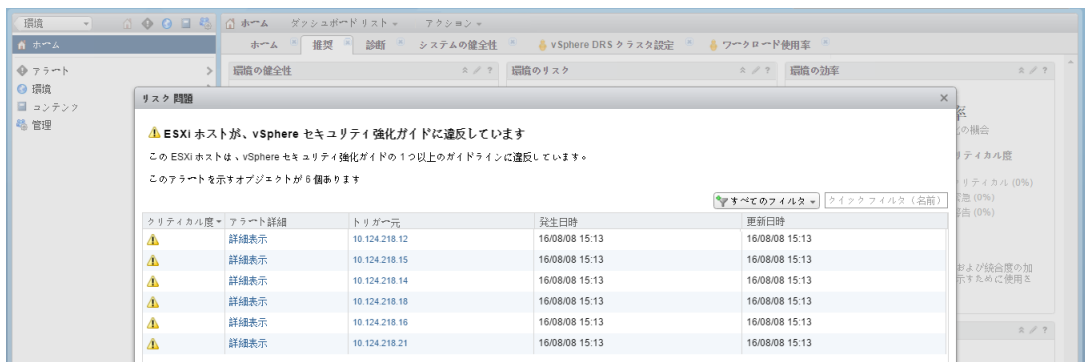
- a ナビゲーション ペインで、[ホーム] をクリックし、[推奨事項] タブをクリックします。



- b [トップリスクアラート (子孫)] ペインで、次のアラートがトリガしたことを確認します。

コンプライアンス アラートのトリガ	アラートを解決する方法
仮想マシンは、vSphere セキュリティ強化ガイドのリスク プロファイル 1 に違反しています	12 台の仮想マシンのアラートを解決するには、vSphere セキュリティ強化ガイドへのリンクをクリックします。
ESXi ホストが、vSphere セキュリティ強化ガイドに違反しています	6 台のホストのアラートを解決するには、vSphere セキュリティ強化ガイドへのリンクをクリックします。

- c ESXi ホストが、vSphere セキュリティ強化ガイドに違反しています という名前のコンプライアンス アラートのリンクをクリックします。
- d [リスクの問題] ダイアログ ボックスで、vSphere セキュリティ強化ガイドのルールに違反したホストを調べます。



- e 表示される最初のホストで、[詳細表示] をクリックし、[サマリ] タブで違反を確認します。
- f SSH 違反を含めて、ホストについて複数のコンプライアンス違反を調べます。SSH ルール違反の説明で、ルールが vSphere 6.0 および 5.5 の両オブジェクトに適用されることを確認します。



- 5 SSH サービスのシンプトムによってコンプライアンス アラートがトリガした時期を決定するために、違反したシンプトムの横にある下向き矢印をクリックします。次に、vSphere セキュリティ強化ガイドを使用してアラートを解決します。

- 6 コンプライアンス チーム向けのレポートを実行します。

- a 左側のナビゲーション ペインで、ホスト オブジェクトをクリックします。
- b [レポート] タブをクリックします。
- c フィルタ テキスト ボックスに、**セキュリティ強化**と入力します。

VMware vSphere セキュリティ強化ガイド - 非コンプライアンス レポートが表示されます。

- d [レポート テンプレート] タブで、[テンプレートの実行]をクリックし、vRealize Operations Manager でレポートが生成されるまで待ちます。
- e [生成されたレポート]をクリックします。

レポートが表示され、ダウンロード用の PDF/CSV バージョンが提示されます。

- f [ダウンロード] 列で、[PDF] アイコンをクリックし、レポートの内容を確認します。

ホストに対するコンプライアンス違反レポートが表示され、レポートを実行した日付と時間が含まれます。また、レポートを実行したユーザーが確認されます。このレポートでは、オブジェクトとその子孫に対して実行した非準拠のルールが示されます。レポートで、アラート、オブジェクト名、およびアラートがトリガしたタイプの重要度とステータスが表示されます。

- g [ダウンロード] 列で、[CSV] アイコンをクリックし、スプレッドシートの内容を確認します。

このスプレッドシートでは、結果のサマリーを簡単に確認でき、別のアプリケーションにデータをインポートすることが可能です。

結果

VMware vSphere コンプライアンス ルールがセキュリティ強化ガイドに従って vCenter Server インスタンス内のオブジェクトに適用されていることを確認しました。

次のステップ

他のオブジェクトのコンプライアンス アラートの定義を確認するために、[コンテンツ] - [アラート定義]をクリックします。

ユーザー シナリオ：カスタム標準のコンプライアンス標準の定義

仮想インフラストラクチャ管理者として、vCenter Server インスタンス、ホスト、仮想マシン、分散ポート グループ、および環境内の分散スイッチの管理を担当しています。vSphere オブジェクトのコンプライアンスを確認するために、アラートの定義に基づいてコンプライアンス標準を作成します。

vRealize Operations Manager では、コンプライアンス標準として使用するようにアラートの定義を構成できます。[コンプライアンス] という名前のサブタイプで構成するアラート定義はすべて、[コンプライアンス] タブに表示されます。[コンプライアンス] タブの詳細については、[\[コンプライアンス\] タブ](#)を参照してください。

コンプライアンス標準としてアラート定義を作成するときに、関連するすべてのシンプトムの定義をアラート定義に追加します。各シンプトムはコンプライアンス標準のルールです。ほとんどのアラートの定義では、あまりにも多くのシンプトムを追加しないように注意する必要があります。

vRealize Operations Manager には、VMware vSphere セキュリティ強化ガイド バージョン 6.0 および 5.5 のアラートが含まれます。

vSphere セキュリティ強化ガイドについては、<http://www.vmware.com/security/hardening-guides.html>を参照してください。

このシナリオでは、SSH がホスト上で実行していない場合にアラートによって通知されます。

手順

1 ホスト コンプライアンス標準の基本情報の構成

コンプライアンス標準にも準拠するアラート定義を作成するには、最初に名前、基本オブジェクト タイプ、アラートの影響を構成します。

2 ホスト コンプライアンス標準へのシンプトムの追加

シンプトムと推奨事項をアラート定義に追加すると、ホスト システムのコンプライアンス アラートが生成されたときに、シンプトムはルールとして [コンプライアンス] タブ上に表示されます。

ホスト コンプライアンス標準の基本情報の構成

コンプライアンス標準にも準拠するアラート定義を作成するには、最初に名前、基本オブジェクト タイプ、アラートの影響を構成します。

アラートの名前は、[コンプライアンス] タブの標準の名前です。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックします。
- 2 [アラートの定義] をクリックし、プラス記号をクリックして定義を追加します。
- 3 名前と説明を入力します。
このシナリオでは、**Organization Host Compliance Standards** と入力します。
- 4 [基本オブジェクト タイプ] をクリックし、ドロップダウン メニューで [vCenter アダプタ] を展開し、[ホスト システム] を選択します。
- 5 [アラートの影響] をクリックし、このアラート定義のメタデータを構成します。
 - a [影響] ドロップダウン メニューから、[リスク] を選択します。
 - b [重要度] ドロップダウン メニューから、[シンプトム・ベース] を選択します。
 - c [アラート タイプとアラート サブタイプ] ドロップダウン メニューから、[仮想化/ハイパーバイザー] を展開し、[コンプライアンス] を選択します。
コンプライアンス サブタイプを使用したすべてのアラートが、コンプライアンス標準として処理されます。
 - d [待機サイクル] と [キャンセル サイクル] に値 **1** を構成します。

次のステップ

コンプライアンス ルールとして機能するシンプトムを追加します。[ホスト コンプライアンス標準へのシンプトムの追加](#) を参照してください。

ホスト コンプライアンス標準へのシンプトムの追加

シンプトムと推奨事項をアラート定義に追加すると、ホスト システムのコンプライアンス アラートが生成されたときに、シンプトムはルールとして [コンプライアンス] タブ上に表示されます。

前提条件

アラートに名前、ホスト オブジェクト タイプ、アラートの影響設定を構成して、アラートがコンプライアンス標準として表示します。[ホスト コンプライアンス標準の基本情報の構成](#) を参照してください。

手順

- 1 [アラートの定義のワークスペース] ウィンドウで、[シンプトムの定義の追加] をクリックして、SSH のシンプトムを追加します。

- a [シンプトムの定義のタイプ] ドロップダウン メニューで、[メトリック/プロパティ] を選択します。

- b [シンプトム] 検索テキスト ボックスで、**SSH** と入力します。

- c [SSH サービスが実行中] という名前のシンプトムを、シンプトムのワークスペースにドラッグします。

独自のシナリオに対して複数のシンプトムを追加し、いずれかのシンプトムの発生時にアラートをトリガする必要がある場合は、[このシンプトム セットは次の場合に真です。]ドロップダウン メニューから [いずれか] を選択します。

- 2 ワークスペース ナビゲーション ペインで、[推奨事項の追加] をクリックして、標準の推奨事項を作成します。

- a プラス記号をクリックして推奨事項を追加します。

- b テキスト ボックスに推奨事項の名前を入力します。

たとえば、**SSH サービスをオンにする** と入力します。ローカル ランブックがある場合、ローカル命令へのリンクを提供できます。

- c [保存] をクリックします。

- d ワークスペースに推奨事項をドラッグします。

独自のシナリオでは、複数の標準の推奨事項を作成できます。

- 3 [保存] をクリックします。

結果

いずれかのシンプトム条件が真になった場合、そのシンプトムがトリガされ、そのオブジェクトに対してコンプライアンス アラートが生成されます。アラート定義には [コンプライアンス] という名前のサブタイプが含まれるため、生成されたアラートはコンプライアンス標準として [コンプライアンス] タブに表示されます。

次のステップ

vCenter Server インスタンス、仮想マシン、分散ポート グループ、分散スイッチを含めて、他のオブジェクトが準拠違反である旨の通知について、標準の [コンプライアンス] タブを確認します。[\[コンプライアンス\] タブ](#) を参照してください。

スーパー メトリックの構成

スーパー メトリックとは、1つ以上のメトリックを含む数式です。スーパー メトリックはユーザー自身が設計するカスタム メトリックで、メトリックの組み合わせを単一のオブジェクトまたは複数のオブジェクトから追跡する場合に便利です。環境の動作に関して把握しておかなければならない内容が1つのメトリックで理解できない場合に、スーパー メトリックを定義できます。

定義したスーパー メトリックを 1 つ以上のオブジェクト タイプに割り当てます。この操作により、そのオブジェクト タイプのオブジェクトのスーパー メトリックが算出されるため、メトリックの表示が簡素化されます。たとえば、すべての仮想マシンの平均 CPU 使用率を計算するスーパー メトリックを定義し、そのスーパー メトリックをクラスタに割り当てると、そのクラスタのすべての仮想マシンの平均 CPU 使用率がクラスタのスーパー メトリックとして報告されます。

ポリシーでスーパー メトリック属性を有効にしている場合は、ポリシーに関連付けられているオブジェクトのグループからスーパー メトリックを収集することもできます。

スーパー メトリックの数式は複雑なため、スーパー メトリックを構築する前に計画してください。予測されるオブジェクト動作についてのアラートを送信するスーパー メトリックを作成するために重要なのは、自身のエンタープライズとデータを把握しておくことです。スーパー メトリックの構成を開始する前に、このチェックリストを使用し、自身の環境の最も重要な側面を特定してください。

表 4-102. スーパー メトリック設計のチェックリスト



追跡する動作に關与するオブ

ジェクトを判別します。

使用するメトリックの定義時に、特定のオブジェクトまたはオブジェクトタイプのいずれかを選択できます。たとえば、特定のオブジェクト VM001 と VM002 を選択することも、オブジェクト タイプ「仮想マシン」を選択することもできます。



スーパー メトリックに含める

メトリックを決定します。

ネットワークを介したパケット転送を追跡する場合は、受信パケットと送信パケットの比が主眼となるため、受信パケットと送信パケットがメトリックとなります。もう 1 つのスーパー メトリックの一般的な利用法では、選択したオブジェクト タイプの平均的 CPU 使用量または平均的メモリ使用量がメトリックとなる場合もあります。



メトリックをどのように組み

合わせるか、あるいは比較するかを決定します。

たとえば、受信パケットと送信パケットの比を把握するには、2 つのメトリックを分割する必要があります。オブジェクト タイプの CPU 使用量を追跡する場合は、平均使用量を特定したい場合もあれば、そのタイプの任意のオブジェクトの使用量の最高値または最低値を特定したい場合もあります。より複雑なシナリオでは、定数や三角関数を使用する数式が必要な場合もあります。



スーパー メトリックをどこに

割り当てるかを決定します。

スーパー メトリックで追跡するオブジェクトを定義し、追跡されるオブジェクトが含まれるオブジェクト タイプにそのスーパー メトリックを割り当てます。グループ内のオブジェクトをすべて監視するには、ポリシーでスーパー メトリックを有効にし、オブジェクト グループにそのポリシーを適用します。

表 4-102. スーパー メトリック設計のチェックリスト (続き)



スーパー メトリックを追加す

るポリシーを決定します。

スーパー メトリックを作成したら、ポリシーに追加します。詳細については、[vRealize Operations Manager のポリシー ワークスペース](#)を参照してください。



操作と機能について十分に理

解します。

演算子と機能については、[スーパー メトリックの関数と演算子](#)を参照してください。

スーパー メトリックで他にできること

- システム監査レポートを生成し、環境内のスーパー メトリックを確認します。詳細については、[vRealize Operations Manager のシステム監査](#)を参照してください。
- スーパー メトリックに基づいてシンプトムを定義し、アラート定義を作成して、環境内のオブジェクトのパフォーマンスを通知します。詳細については、[メトリック症状およびスーパー メトリック症状について](#)を参照してください。
- ポリシーのスーパー メトリックの利用法について理解します。詳細については、[vRealize Operations Manager のポリシー ワークスペース](#)を参照してください。
- OPS CLI コマンドを使用して、スーパー メトリックをインポート、エクスポート、構成および削除します。詳細については、OPS CLI のドキュメントを参照してください。
- メトリックのカスタム セットを作成して、メトリック関連のウィジェットを作成します。構成されたメトリックおよび選択されたオブジェクト タイプに基づいてサポートされたウィジェットが表示されるように、特定のアダプタおよびオブジェクト タイプに対してさまざまなメトリックのセットを定義する 1 つ以上のファイルを構成できます。詳細については、[メトリック構成の管理](#)を参照してください。

スーパー メトリックの作成

環境の健全性を確認したい場合で、分析を実行するために適切なメトリックが見つからないときは、スーパー メトリックを作成します。

手順

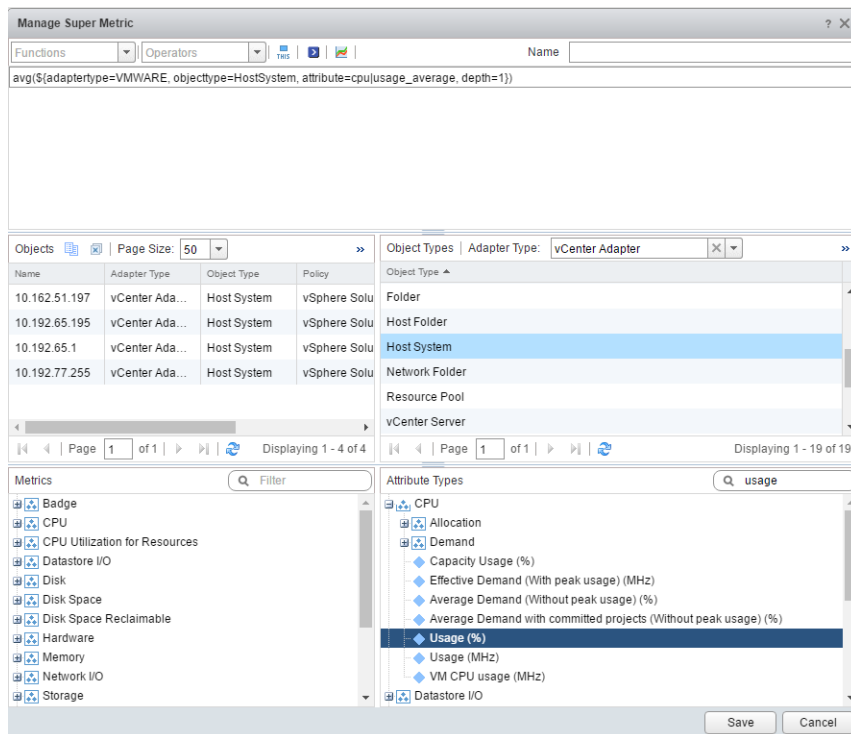
- 1 [内容] - [スーパー メトリック]を選択し、[追加] アイコンをクリックします。
- 2 [名前] テキスト ボックスに、**SM-AvgVMCPUUsage%** のような、意味のあるスーパー メトリックの名前を入力します。

3 スーパー メトリックの数式を定義します。

使用する各関数や演算子を選択し、さらに各関数や演算子で使用するメトリックや属性のタイプを選択します。たとえば、すべての仮想マシンの平均 CPU 使用率を取り込むスーパー メトリックを追加するには、次のタスクを実行します。

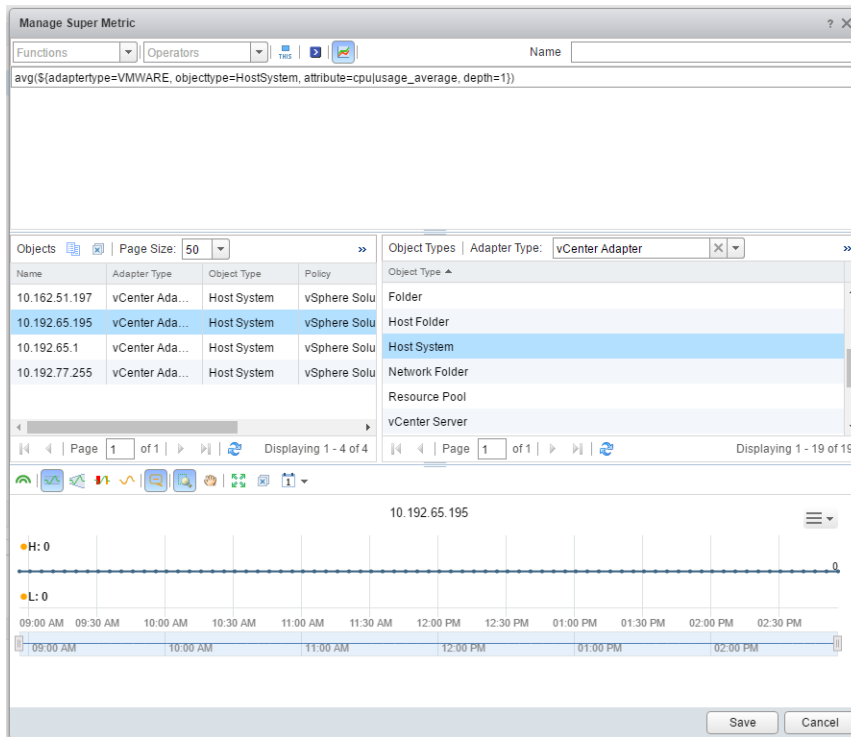
- a 関数については、[avg] を選択します。
 - b [演算子] テキスト ボックスで、左丸かっこを選択してから、右丸かっこを選択します。2 つのかっこの間をクリックして、数式にカーソルを置きます。
 - c [オブジェクト タイプ] ペインの [アダプタ タイプ] テキスト ボックスで、[vCenter アダプタ] を選択します。
 - d [このオブジェクト] アイコンをクリックし、オブジェクト タイプのリストから、[仮想マシン] を選択します。
- [このオブジェクト] アイコンが選択されていない場合、スーパー メトリック関数で長い説明のオブジェクトが表示されます。
- e [属性タイプ] ペインで、CPU カテゴリを展開し、スクロール ダウンして [使用率 (%)] メトリックをダブルクリックします。

数式が数学関数として表示されます。この数式をテキスト形式で表示するには、[数式説明の表示] アイコンをクリックします。数式の構文が誤っている場合は、エラー メッセージが表示されます。この数式の最後は **depth=1** です。depth=1 で、関係チェーンにおいて仮想マシンの 1 つ上のレベルのオブジェクト タイプにスーパー メトリックを割り当て、スーパー メトリックがオブジェクト タイプのメトリックとして表示されるようにします。depth=2 によって、2 レベル上の仮想マシンであるオブジェクト タイプ（たとえばクラスタ）にスーパー メトリックを割り当てます。



- 4 depth=1 のオブジェクト タイプにスーパー メトリックを割り当てるには、1 ではなく 2 を入力して、depth=2 を表示します。
- 5 スーパー メトリックの数式が正しく作成されたことを確認します。
 - a [スーパーメトリックの可視化] アイコンをクリックします。
 - b [オブジェクト] ペインで、リストされたオブジェクトのいずれかをダブルクリックします。

メトリック グラフが表示され、オブジェクトに対して収集されたメトリックの値が示されます。グラフに時間の経過に伴う値が表示されていることを確認します。



- 6 [保存] をクリックします。
- 7 スーパー メトリックをオブジェクト タイプに割り当て、vRealize Operations Manager がターゲット オブジェクトのスーパー メトリックを計算して、そのオブジェクト タイプのメトリックとして表示するようにします。
 - a スーパー メトリック ワークスペースで、スーパー メトリックを選択します。
 - b [オブジェクト タイプ] タブで、[追加] アイコンをクリックします。

- c [オブジェクト タイプの選択] テキスト ボックスで、必要なオブジェクトを選択します。たとえば、[vCenter アダプタ] の下でホスト システムに対するスーパー メトリックを作成した場合は、[vCenter アダプタ] を展開し、[ホスト システム]を選択します。
- d [選択] をクリックします。

1 回の収集サイクルの完了後、指定したオブジェクト タイプの各オブジェクトについてスーパー メトリックが表示されます。たとえば、すべての仮想マシンの平均 CPU 使用率を計算するスーパー メトリックを定義し、このスーパー メトリックをホスト システムのオブジェクト タイプに割り当てた場合などです。1 回の収集サイクルが完了すると、このスーパー メトリックが各ホストのスーパー メトリックとして表示されます。

次のステップ

[ポリシー] - [ポリシーの編集] > [属性] ワークスペースで、ユーザーは各スーパー メトリックを選択して、有効にする必要があります。[カスタム ポリシー](#)を参照してください。スーパー メトリックがデータの収集と処理を開始するために、少なくとも 1 つ収集サイクルの間待機します。次に、[すべてのメトリック] タブでスーパー メトリックを確認します。

スーパー メトリックを拡張する

vRealize Operations Manager では、句やリソース エントリ エイリアスを使用して、スーパー メトリックを拡張することができます。

where 句

where 句は、スーパー メトリックに特定のメトリック値を使用すべきかをチェックします。この句を使用して、**where = "metric_group|my_metric > 0** のように、同じオブジェクトの異なるメトリックを参照できます。

例、

```
count({$adaptype = ExampleAdapter, objecttype = ExampleObject, metric = ExampleGroup|Rating, depth=2, where = "==1"})
```

リソース エントリ エイリアス

リソース エントリは、スーパー メトリックの計算で、vRealize Operations Manager からメトリック データを取得するために使用します。リソース エントリを含む式は、**\$** で始まり、その後に **{..}** ブロックが続きます。スーパー メトリックの計算では、同じリソース エントリが複数回必要になる場合があります。計算の変更が必要な場合は、それぞれすべてのリソース エントリに変更を加える必要があり、エラーが起きる可能性があります。式を書き直すには、リソース エントリ エイリアスを使用してください。

次の例では、リソース エントリを 2 回使用しています。

```
(min({$adapterkind=VMWARE, resourcekind=HostSystem, attribute= cpu|demand|active_longterm_load, depth=5, where=">=0"}) + 0.0001)/(max({$adapterkind=VMWARE, resourcekind=HostSystem, attribute=cpu|demand|active_longterm_load, depth=5, where=">=0"}) + 0.0001)"
```

リソース エントリ エイリアスを使用することで、式は次のように記述できます。ともに式の出力は同じです。

```
(min(${adapterkind=VMWARE, resourcekind=HostSystem, attribute= cpu|demand|
active_longterm_load, depth=5, where=">=0"} as cpuload) + 0.0001)/(max(cpuload) +
0.0001))"
```

リソース エントリ エイリアスを使用するときは、次のガイドラインに従ってください。

- エイリアスを作成するため、リソース エントリに **as** と **alias:name** を続けます。例、`[${...} as alias_name]`
- エイリアスには、`()[]+*/%|&! =<>,?:$` の特殊文字を含めることはできず、数字で始めることはできません。
- エイリアスの名前は、スーパー メトリック式のすべての名前と同じように、大文字と小文字を区別します。
- エイリアス名の使用はオプションです。定義したエイリアスは、式で使わなくてもかまいません。
- 同じエイリアス名を複数指定することはできません。例、
`${resource1,...} as r1 + ${resource2,...} as R1`
- 同じリソース エントリに複数のエイリアスを指定できます。例、`[${...} as a1 as a2]`。

条件式 ? : の 3 項演算子

式で 3 項演算子を使用して、条件式を実行することができます。

例、**expression_condition ? expression_if_true : expression_if_false**

条件式の結果は、数に変換されます。値が 0 以外の場合、条件は true とみなされます。

例：`-0.7 ? 10 : 20` の結果は 10 です。`2 + 2 / 2 - 3 ? 4 + 5 / 6 : 7 + 8` の結果は 15 (7 + 8) です。

条件に応じて、**expression_if_true** または **expression_if_false** が実行されますが、両方は実行されません。このため、次のような式を作成できます。

`${this, metric=cpu|demandmhz} as a != 0 ? 1/a : -13` 項演算子では、他の 3 項演算子を含め、他の演算子をすべての式に含めることができます。

例、`! 1 ? 2 ? 3 : 4 : 5` の結果は 5 です。

スーパー メトリックのエクスポートとインポート

スーパー メトリックを vRealize Operations Manager インスタンスからエクスポートし、別の vRealize Operations Manager インスタンスにインポートすることができます。たとえば、テスト環境でスーパー メトリックを開発した後に、テスト環境からエクスポートし、本番環境でできるようにインポートできます。

インポートするスーパー メトリックにターゲット インスタンスに存在しないオブジェクトへの参照が含まれる場合、インポートが失敗します。vRealize Operations Manager は簡単なエラー メッセージを返し、詳細情報をログ ファイルに書き込みます。

手順

1 スーパー メトリックをエクスポートします。

- a [内容] - [スーパー メトリックス] の順に選択します。
- b エクスポートするスーパー メトリックを選択し、[選択したスーパー メトリックのエクスポート] アクション アイコンをクリックします。

vRealize Operations Manager によって、スーパー メトリック ファイル (SuperMetric.json など) が作成されます。

- c スーパー メトリック ファイルをコンピュータにダウンロードします。

2 スーパー メトリックをインポートします。

- a [内容] - [スーパー メトリック] を選択し、[スーパー メトリックのインポート] アクション アイコンをクリックします。
- b (任意)。インポートするスーパー メトリックと同じ名前を持つスーパー メトリックがターゲット インスタンスに存在する場合は、既存のスーパー メトリックを上書きすることも、またはインポートをスキップすることもできます (インポートのスキップがデフォルト)。

[スーパー メトリック] タブ

スーパー メトリックは、1 つ以上のオブジェクトに関する 1 つ以上のメトリックの組み合わせを含む数式です。スーパー メトリックを使用すると、より少ない数のメトリックを調べるときに情報にすばやくアクセスできます。

スーパー メトリックを構成する場所

それぞれの環境で利用可能なスーパー メトリックを管理するには、[内容] - [スーパー メトリック] を選択します。

表 4-103. スーパー メトリックの構成オプション

オプション	説明
ツールバー	<p>ツールバーの選択肢を使用して、スーパー メトリック オプションを管理します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 新規スーパー メトリックの追加[スーパー メトリックの管理] ワークスペースを開始します。スーパー メトリックの管理ワークスペースを参照してください。 ■ 選択したスーパー メトリックの編集[スーパー メトリックの管理] ワークスペースを開始します。 ■ 選択したスーパー メトリックのクローン作成スーパー メトリックを複製します。クローンを編集するか、それを別のオブジェクト タイプに関連付けます。 ■ 選択したスーパー メトリックの削除 ■ 選択したスーパー メトリックのエクスポート他の vRealize Operations Manager インスタンスで使用するためにスーパー メトリックをエクスポートします。スーパー メトリックのエクスポートとインポートを参照してください。 ■ スーパー メトリックのインポートこの vRealize Operations Manager インスタンスにスーパー メトリックをインポートします。スーパー メトリックのエクスポートとインポートを参照してください。
スーパー メトリック リスト	名前および式の説明により一覧表示された構成済みのスーパー メトリック。
[ポリシー] タブ	スーパー メトリックの属性の収集が有効化されているポリシー。ポリシーで有効な場合、ポリシーに関連付けられたオブジェクトからスーパー メトリックが vRealize Operations Manager によって収集されます。 メトリックとプロパティの詳細の収集 を参照してください。
[オブジェクト タイプ] タブ	スーパー メトリックの表示のオブジェクト タイプ vRealize Operations Manager は、オブジェクト タイプに関連付けられているオブジェクトのスーパー メトリックを計算し、オブジェクト タイプとともに値を表示します。ツールバーの選択肢を使用して、オブジェクト タイプの関連付けを追加または削除します。

スーパー メトリックの管理ワークスペース

スーパー メトリックの管理ワークスペースは、スーパー メトリックの作成または編集に使用します。ツールバーは、選択したオブジェクトやメトリックを使用して数式を作る際に役立ちます。

スーパー メトリックを構成する場所

スーパー メトリックを管理するには、左側のペインで [内容] を選択し、[スーパー メトリック] をクリックします。[スーパー メトリック] ページに、環境で使用可能なスーパー メトリックが一覧表示されます。[追加] アイコンをクリックして、スーパー メトリックを追加するか、編集するスーパー メトリックを選択します。

表 4-104. スーパー メトリック ワークスペースのオプション

オプション	説明
スーパー メトリック	<p>ツールバーの選択を使用して、スーパー メトリックの数式を構築および表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 関数。1つのオブジェクトまたはオブジェクトのグループに対して演算を行う数学関数。スーパー メトリックの関数と演算子を参照してください。 ■ 演算子。関数間を囲むまたは挿入する数学記号。スーパー メトリックを拡張するを参照してください。 ■ このオブジェクト。[オブジェクト] ペインで選択されているオブジェクトにスーパー メトリックを割り当て、オブジェクトに対する長い記述の代わりに数式に こちら を表示します。 ■ 数式説明の表示。数式をテキスト形式で表示します。 ■ スーパー メトリックの可視化。スーパー メトリックをグラフィック形式で表示します。これを使用して、選択したターゲット オブジェクトに対して vRealize Operations Manager がスーパー メトリックを計算していることを確認します。 ■ 名前。スーパー メトリックに付ける名前。
オブジェクト ペイン	<p>メトリックを収集しているオブジェクトのリストを表示します。このリストを使用して、測定するメトリックのあるオブジェクトを選択します。オブジェクト タイプが選択されている場合、選択されたタイプのオブジェクトだけが一覧表示されます。列見出しによりオブジェクトを特定できます。</p>
オブジェクト タイプ ペイン	<p>このリストを使用して、測定するメトリックのあるオブジェクト タイプを選択します。オブジェクト タイプの選択は、表示されたオブジェクト、メトリック、および属性タイプのリストに影響します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アダプタ タイプ。選択されたアダプタのオブジェクト タイプを表示します。 ■ フィルタ。フィルタ ワードを使用してオブジェクト タイプを表示します。
メトリック ペイン	<p>オブジェクトまたはオブジェクト タイプを選択するための、使用可能なメトリックのリストを表示します。このリストを使用して数式に追加するメトリックを選択します。</p>
属性タイプ ペイン	<p>オブジェクトまたはオブジェクト タイプを選択するための属性タイプのリストを表示します。このリストを使用して、数式に追加する属性タイプのメトリックを選択します。</p>

スーパー メトリックの関数と演算子

vRealize Operations Manager には、スーパー メトリック数式で使用できる関数と演算子が用意されています。関数はループ関数またはシングル関数のいずれかです。

ループ関数

ループ関数は、複数の値で動作します。

表 4-105. ループ関数

関数	説明
avg	収集された値の平均値。
combine	単一のメトリック タイムラインに含まれるオブジェクトのメトリックのすべての値を結合します。
count	収集された値の数
max	収集された値の最大値。
分	収集された値の最小値。
sum	収集された値の合計値

注： vRealize Operations Manager5.x には、2 つの合計関数 `sum (expr)` および `sumN (expr, depth)` が含まれます。vRealize Operations Manager6.x には、1 つの合計関数 `sum (expr)` が含まれます。Depth は、デフォルトでは `depth=1` で設定されます。depth の設定については、[スーパー メトリックの作成](#)を参照してください。

ループ関数の引数

ループ関数は、オブジェクトまたはオブジェクト タイプの属性またはメトリック値を返します。属性は、オブジェクトから収集するアダプタのメトリックを記述するメタデータです。メトリックは属性のインスタンスです。引数構文は任意の結果を定義します。

たとえば、CPU 使用率は仮想マシン オブジェクトの属性です。仮想マシンが複数の CPU を備える場合、各 CPU の CPU 使用率がメトリック インスタンスになります。仮想マシンが 1 つの CPU を備えるばあい、属性またはメトリックの関数は同じ結果を返します。

表 4-106. ループ関数の形式

引数構文の例	説明
<code>funct({this, metric =<alb:optional_instance c>})</code>	スーパー メトリックが割り当てられているオブジェクトの特定のメトリックの単一データ ポイントを返します。このスーパー メトリックはオブジェクトの子または親から値を取りません。
<code>funct({this, attribute=<alb:optional_instance c>})</code>	スーパー メトリックが割り当てられているオブジェクトの属性のデータ ポイントのセットを返します。このスーパー メトリックはオブジェクトの子または親から値を取りません。
<code>funct({adapterkind=<adaptkind>, resourcekind=<reskind>, resourcename=<resname>, identifiers={id1=<val1>id2=<val2>,...}, metric=<alb:instance c>})</code>	引数で指定されている <i>resname</i> の特定のメトリックの単一データ ポイントを返します。このスーパー メトリックはオブジェクトの子または親から値を取りません。
<code>funct({adapterkind=<adaptkind>, resourcekind=<reskind>, resourcename=<resname>, identifiers={id1=<val1>, id2=<val2>,...}, attribute=<alb:optional_instance c>})</code>	データ ポイントのセットを返します。この関数は引数で指定されている <i>resname</i> の属性を繰り返し使用します。このスーパー メトリックはオブジェクトの子または親から値を取りません。

表 4-106. ループ関数の形式（続き）

引数構文の例	説明
<code>func(\$ {adapterkind=<adaptkind>, resourcekind=<reskind>, depth=<dep>}, metric=<a b:optional_instance c>})</code>	データ ポイントのセットを返します。この関数は引数で指定されている <i>reskind</i> のメトリックを繰り返し使用します。このスーパー メトリックは、子 (<i>depth</i> > 0) または親 (<i>depth</i> < 0) のオブジェクトから値を取ります。ここで、 <i>depth</i> は関係チェーンにおけるオブジェクトの場所を記述します。 たとえば、典型的な関係チェーンには、データセンター、クラスタ、ホスト、仮想マシンが含まれ、データセンターが最上位になり、仮想マシンが最下位になります。スーパー メトリックがクラスタに割り当てられ、関数の定義に <i>depth</i> = 2 が含まれる場合、スーパー メトリックは仮想マシンから値を取ります。関数の定義に <i>depth</i> = -1 が含まれる場合、スーパー メトリックはデータセンターから値を取ります。
<code>func(\$ {adapterkind=<adaptkind>, resourcekind=<reskind>, depth=<dep>}, attribute=<a b:optional_instance c>})</code>	データ ポイントのセットを返します。この関数は引数で指定されている <i>reskind</i> の属性を繰り返し使用します。このスーパー メトリックはオブジェクトの子 (<i>depth</i> > 0) または親 (<i>depth</i> < 0) から値を取りません。

たとえば、`avg($ {adapterkind=VMWARE, resourcekind=VirtualMachine, attribute=cpu|usage_average, depth=1})` は、vCenter アダプタが検出したタイプ *VirtualMachine* のすべてのオブジェクトについて、`cpulusage_average` 属性を持つすべてのメトリック インスタンスの平均を算出します。vRealize Operations Manager は、スーパー メトリックを割り当てたオブジェクト タイプの 1 レベル下位のオブジェクトを検索します。

シングル関数

シングル関数は、単一の値または単一の値ペアに対してのみ動作します。

表 4-107. シングル関数

関数	フォーマット	説明
<code>abs</code>	<code>abs(x)</code>	x の絶対値。x は任意の浮動小数です。
<code>acos</code>	<code>acos(x)</code>	x の逆余弦。
<code>asin</code>	<code>asin(x)</code>	x の逆正弦。
<code>atan</code>	<code>atan(x)</code>	x の逆正接。
<code>ceil</code>	<code>ceil(x)</code>	x 以上の最小の整数。
<code>cos</code>	<code>cos(x)</code>	x の余弦。
<code>cosh</code>	<code>cosh(x)</code>	x の双曲線余弦。
<code>exp</code>	<code>exp(x)</code>	e の x 乗。
<code>floor</code>	<code>floor(x)</code>	x 以下の最大の整数。
<code>log</code>	<code>log(x)</code>	x の自然対数（基数 x）。
<code>log10</code>	<code>log10(x)</code>	x の常用対数（基数 10）。
<code>pow</code>	<code>pow(x,y)</code>	x の y 乗。
<code>rand</code>	<code>rand()</code>	0.0 以上、1.0 未満の擬似ランダム浮動小数点数を生成します。
<code>sin</code>	<code>sin(x)</code>	x の正弦。
<code>sinh</code>	<code>sinh(x)</code>	x の双曲線正弦。

表 4-107. シングル関数（続き）

関数	フォーマット	説明
sqrt	sqrt(x)	x の平方根。
tan	tan(x)	x の正接。
tanh	tanh(x)	x の双曲線正接。

演算子

演算子は、関数を囲むか、関数の間に挿入する数学記号です。

表 4-108. 演算子

演算子	説明
+	加算
-	減算
*	乗算
/	除算
%	モジュロ
==	等しい
!=	等しくない
<	小さい
<=	小さいか等しい
>	大きい
>=	大きいか等しい
	または
&&	および
!	Not
? :	3 項演算子。If/then/else 例： conditional_expression ? expression_if_condition_is_true : expression_if_condition_is_false 3 項演算子については、 スーパー メトリックを拡張する を参照してください。
()	括弧
[]	配列式で使用
[x, y, z]	x, y, z を含む配列。例、min([x, y, z])

オブジェクトの構成

メトリックやアラートを含む、オブジェクト管理の機能（ダッシュボードとポリシーに事前に組み込まれている機能や、カスタム監視ツールに統合する機能など）を使用すると、稼働し続ける必要があるオブジェクト、アプリケーションおよびシステムに注意することができます。

vRealize Operations Manager は、環境内のオブジェクトを検出して、それらを使用できるようにします。

vRealize Operations Manager が提供する情報から、オブジェクトにすばやくアクセスして構成できます。たとえば、データストアが接続されているか、データを提供しているかどうか、または仮想マシンをパワーオンできるかどうかを確認できます。

オブジェクトの検出

オブジェクトの検出では、システムの環境内のオブジェクトのデータを監視して収集できるため、vRealize Operations Manager は、システムの稼働時間を維持し、仮想マシンからアプリケーション、ストレージまで、物理、仮想およびクラウド インフラストラクチャ全体にわたるすべてのシステム リソースの良好な健全性を継続するための不可欠なツールになります。

監視可能なオブジェクトの例は次のとおりです。

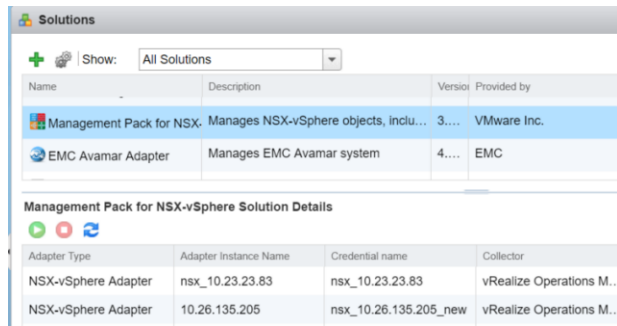
- vCenter Server
- 仮想マシン
- サーバ/ホスト
- コンピューティング リソース
- リソース プール
- データセンター
- ストレージ コンポーネント
- スイッチ
- ポート グループ
- データストア

アダプタ – オブジェクト検出の鍵

vRealize Operations Manager は、管理バックの中心コンポーネントであるアダプタを使用して、オブジェクトからデータとメトリックを収集し、vRealize Operations Manager ソリューションを構成します。たとえば、vSphere Solution を構成する場合は、一意の名前やポート番号など、環境に合わせてカスタマイズしたアダプタ インスタンスを作成します。アダプタ インスタンスは、デプロイ内の vCenter Server ごとに作成する必要があります。

UI で既存のアダプタを特定するには、[[ホーム] > [管理] > [ソリューション]] の順に選択します。

スクリーンショットに示すように、[ソリューション] 画面の上部には、利用可能なソリューションのリストが表示されます。ソリューションを選択すると、利用可能なアダプタが画面の下半分に表示されます。各アダプタに関連する既存のアダプタ インスタンスは 2 番目の列に表示されます。



管理パックとアダプタの構成の詳細については、[データ ソースへの vRealize Operations Manager の接続](#)を参照してください。

新しいアダプタ インスタンスを作成すると、アダプタで指定されたオブジェクトからデータの検出と収集が開始され、それらの間の関係が記録されます。これにより、オブジェクトの管理を開始できます。

オブジェクトについて

オブジェクトとは、ミッション クリティカルな IT アプリケーションの構造的コンポーネントで、オブジェクトの例には、仮想マシン、データストア、仮想スイッチ、ポート グループがあります。

ダウンタイムはコスト（リソースの未使用とビジネス機会の損失）と同等であるため、環境内のオブジェクトを正常に特定、監視および追跡することは極めて重要です。目標は、何かおかしいとユーザーが気付く前でも、問題をプロアクティブに隔離、トラブルシューティングおよび修正することです。

ユーザーが問題を実際に報告した場合は、迅速で総合的な解決策を提供してください。

vRealize Operations Manager で定義されるオブジェクトの完全なリストについては、[オブジェクトの検出](#)を参照してください。

vRealize Operations Manager では、パフォーマンス情報と環境内のポジティブまたはネガティブ イベントを関連付ける単一のインターフェイスにより、物理、仮想およびクラウド インフラストラクチャ全体にわたる、アプリケーション、ストレージ、ネットワークなどのオブジェクトを可視化できます。

オブジェクトの管理

大規模なインフラストラクチャを監視する場合、特にインフラストラクチャのより多くの部分に動的な監視とアラートを拡張するソリューションを追加すると、vRealize Operations Manager ではオブジェクトおよび対応するメトリックの数が急速に増加します。vRealize Operations Manager では、イベントと問題を常時把握するアンパル ツールを提供しています。

オブジェクトの追加およびオブジェクト関係の構成

アダプタ インスタンスを作成すると、vRealize Operations Manager はオブジェクトとオブジェクトの関係を自動的に検出します。vRealize Operations Manager によって記録された接続ではなく、抽象概念を使用し、監視対象のオブジェクトを手動で追加してオブジェクト関係を構成することもできます。vRealize Operations Manager では、オブジェクト間の従来型の親子関係を検出する場合もありますが、通常は関連付けられる可能性のないオブジェクト間の関係を作成できます。たとえば、会社の部門をサポートするすべてのデータストアが関連付けられるように構成することもできます。

オブジェクトが関連付けられると、1つのオブジェクトの問題が関連するオブジェクトでアノマリとして表示されます。そのため、オブジェクトの関係は環境内の問題をすばやく特定することに役立ちます。作成するオブジェクト関係はカスタム グループと呼ばれます。

カスタム グループ

自動化された管理システムを作成するには、すぐに把握できるようにオブジェクトを構成する方法が必要です。カスタム グループを使用すると、高度なレベルの自動化を達成できます。監視戦略をサポートするカスタム グループ属性の複数のオプションがあります。

静的になるように、または指定するメンバーシップ基準で自動的に更新されるようにグループを指定できます。OSの種類が Linux でパワーオン状態のすべての仮想マシンの静的でないグループを考慮します。新しい Linux 仮想マシンをパワーオンすると、自動的にグループに追加され、ポリシーが適用されます。

柔軟性を向上するために、特定のカスタム グループに常に含まれるようにしたり、除外されるように個別のオブジェクトを指定することもできます。または、本番環境とテスト環境で異なるセットのアラートとキャパシティ計算を含めることができます。

アプリケーションの管理

vRealize Operations Manager では、さまざまな構成階層で仮想マシンのグループまたはその他のオブジェクトを含めることができるコンテナまたはオブジェクト作成できます。この新アプリケーションは、単一のオブジェクトとして管理可能で、グループの子オブジェクトから健全性バッジとアラートを集計できます。

たとえば、トレーニング環境の Web、アプリケーションおよびデータベース層を監視するように、オンライン トレーニング システムのシステム管理者から要請された場合は、それぞれの層の関連するトレーニング オブジェクトをグループ化するアプリケーションを構築してください。いずれかのオブジェクトで問題が発生すると、その問題がアプリケーションの表示に強調表示され、問題の原因を調査できます。

オブジェクト管理の機能

メトリックやアラートを含む、オブジェクト管理の機能（ダッシュボードとポリシーに事前に組み込まれている機能や、カスタム監視ツールに統合する機能など）を使用すると、稼働し続ける必要があるオブジェクト、アプリケーションおよびシステムに注意することができます。

環境内のオブジェクトの管理

オブジェクトは、vRealize Operations Manager がルータ、スイッチ、データベース、仮想マシン、ホスト、vCenter Server インスタンスなどのデータを収集する、環境内の個々の管理対象項目です。

vRealize Operations Manager では、各オブジェクトに関する固有の情報が必要です。アダプタ インスタンスの構成時に、vRealize Operations Manager はオブジェクトの検出を実行して、そのアダプタと通信するオブジェクトからデータの収集を開始します。

オブジェクトは、データベースなどの単一のエンティティの場合もあれば、他のオブジェクトを保持するコンテナの場合もあります。たとえば、複数の Web サーバを利用している場合、各 Web サーバについて1つのオブジェクトを定義することもできれば、Web サーバ オブジェクトのすべてを保持する個別のコンテナ オブジェクトを定義することもできます。グループとアプリケーションは、コンテナのタイプです。

後で検索やグループ化、フィルタリングが容易になるように、タグを使用してオブジェクトを分類します。タグのタイプには、複数のタグ値を含めることができます。ユーザーまたは vRealize Operations Manager がオブジェクトをタグ値に割り当てます。タグ値を選択すると、そのタグに関連付けられたオブジェクトが vRealize Operations Manager によって表示されます。たとえば、タグのタイプがライフサイクルで、タグ値が開発、テスト、本番前、本番の場合、環境内の仮想マシン オブジェクト VM1、VM2、または VM3 を、仮想マシンの機能に応じてこれらのタグ値のいずれか（複数可）に割り当てることができます。

環境へのオブジェクトの追加

オブジェクトの情報を vRealize Operations Manager に提供してオブジェクトを追加する場合があります。たとえば、ソリューションの中には、監視対象の可能性のあるすべてのオブジェクトを検出できないものもあります。このようなソリューションには、手動検出を使用するか、手動でオブジェクトを追加する必要があります。

個別オブジェクトを追加するときは、接続に使用するアダプタの種別、接続方法など、当該リソースについての具体的な情報を提供します。たとえば、SNMP アダプタは、監視する SNMP デバイスの場所を認識しません。手動検出を使って IP 範囲内のポートのスキャンを実行することができます。セキュリティ上の理由からポート スキャンがネットワーク上で許可されていない場合は、デバイスを手動で追加する必要があります。

前提条件

追加するオブジェクトのアダプタが存在していることを確認します。を参照してください。 [vRealize Operations Manager でのオプションのソリューションのインストール](#)

手順

- 1 [管理] - [インベントリ エクスプローラ] を選択します。
- 2 ツールバーでプラス記号をクリックします。
- 3 必要な情報を提供します。

オプション	説明
表示名	オブジェクトの名前を入力します。たとえば、 SNMP-Switch1 と入力します。
説明	説明を入力します。たとえば、 SNMP アダプタで監視されているスイッチ と入力します。
アダプタ タイプ	アダプタ タイプを選択します。たとえば、[SNMP アダプタ] を選択します。
アダプタ インスタンス	アダプタ インスタンスを選択します。
オブジェクト タイプ	オブジェクト タイプを選択します。SNMP アダプタには MIB ファイルを選択します。vRealize Operations Manager は MIB ファイルを使用して、スイッチで使用可能なデータを決定します。オブジェクト タイプを選択すると、ダイアログ ボックスの選択項目にユーザーが提供した情報が含まれるようになり、vRealize Operations Manager が選択したオブジェクト タイプを見つけて接続できるようになります。
ホスト IP アドレス	ホスト IP を入力します。たとえば、スイッチの IP アドレスを入力します。
ポート番号	デフォルトのポート番号をそのまま使用するか、新しい値を入力します。SNMP アダプタの場合、このポートは SNMP 管理ポート番号になります。
認証情報	認証情報を選択するか、プラス記号をクリックしてオブジェクトの新しいログイン認証情報を追加します。

オプション	説明
収集間隔	収集間隔を分単位で入力します。たとえば、スイッチが 5 分ごとにパフォーマンス データを生成することが予測される場合は、収集間隔を 5 分に設定します。
動的しきい値。	デフォルトの [はい] を受け入れます。

4 [OK] をクリックしてオブジェクトを追加します。

結果

SNMP-Switch1 が SNMP アダプタ タイプの MIB オブジェクト タイプとしてインベントリ エクスプローラに表示されます。

次のステップ

個別オブジェクトを追加するときは、データ収集をオンにするまで、vRealize Operations Manager がオブジェクトのメトリックを収集し始めることはありません。 [インベントリ エクスプローラ：オブジェクトのリスト](#) を参照してください。

vRealize Operations Manager は、新規オブジェクトごとに、そのコレクタとオブジェクト タイプのためのタグ値を割り当てます。別のタグを割り当てる必要がある場合があります。 [タグの作成および割り当て](#) を参照してください。

オブジェクトの関係の構成

vRealize Operations Manager には、環境内のオブジェクト間の関係が表示されます。ほとんどの関係は、インストール済みのアダプタによりオブジェクトが検出されると自動的に作成されます。また、vRealize Operations Manager を使用して、通常は関連付けられることのないオブジェクト間に関係を作成することもできます。

オブジェクトは、物理的、論理的、または構造的に関連付けられます。

- 物理的关系は、オブジェクトが物理環境でどのように接続されているかを表します。たとえば、ホストで実行されている仮想マシン同士は、物理的に関連付けられています。
- 論理的关系は、ビジネス サイロを表します。たとえば、環境内のすべてのストレージ オブジェクトは、互に関連付けられています。
- 構造的関係は、ビジネス バリューを表します。たとえば、データベースをサポートするすべての仮想マシンは、構造的に関連付けられています。

ソリューションは、物理的关系の変更が vRealize Operations Manager に反映されるように、アダプタを使用して環境内のオブジェクトを監視します。論理的关系または構造的関係を維持するため、vRealize Operations Manager を使用してオブジェクトの関係を定義できます。オブジェクトが関連付けられると、1つのオブジェクトの問題が関連するオブジェクトでアノマリとして表示されます。そのため、オブジェクトの関係は環境内の問題をすばやく特定することに役立ちます。

タグの作成および割り当て

大企業の場合、vRealize Operations Manager 内で何千ものオブジェクトが定義されている場合があります。オブジェクト タグとタグ値を作成すると、vRealize Operations Manager 内のオブジェクトおよびメトリックを見つけやすくなります。オブジェクト タグを使用し、オブジェクトに割り当てられたタグ値を選択して、そのタグ値に関連付けられたオブジェクトのリストを表示します。

タグとは、アダプタ タイプなどの情報のタイプのことです。アダプタ タイプは vRealize Operations Manager で事前定義されているタグです。タグの値は、その情報のタイプの個別のインスタンスです。たとえば、vRealize Operations Manager は vCenter Adapter を使用しているオブジェクトを検出すると、すべてのオブジェクトをアダプタ タイプ タグの下に vCenter Adapter タグ値に割り当てます。

各タグ値に任意の数のオブジェクトを割り当てることができます。また、任意の数のタグのタグ値に単一オブジェクトを割り当てることができます。一般的には、そのアダプタ タイプ、そのオブジェクト タイプ、および考えられるその他のタグの下を確認してオブジェクトを探します。

オブジェクト タグがロックされている場合、そのタグにオブジェクトを追加することはできません。ロックされたオブジェクト タグは、vRealize Operations Manager によって保持されます。

■ 事前定義されたオブジェクト タグ

vRealize Operations Manager には、事前定義されたオブジェクト タグがいくつか含まれます。これらのタグのほとんどに値が作成され、値にオブジェクトが割り当てられます。

■ オブジェクト タグを追加してオブジェクトをタグに割り当てる

オブジェクト タグは、情報タイプであり、タグ値は、その情報タイプの個別インスタンスです。事前定義されたオブジェクト タグが自分のニーズを満たさない場合、オブジェクト タグを独自に作成して、環境内のオブジェクトを分類し管理できます。たとえば、クラウド オブジェクトにタグを追加して、異なるクラウド名にタグ値を追加できます。その後、オブジェクトをクラウド名に割り当てることができます。

■ タグを使用してオブジェクトを検索する

vRealize Operations Manager でオブジェクトを検索する最も迅速な方法は、タグを使用することです。タグを使用すると、オブジェクト リスト全体を検索するよりも効率的です。

事前定義されたオブジェクト タグ

vRealize Operations Manager には、事前定義されたオブジェクト タグがいくつか含まれます。これらのタグのほとんどに値が作成され、値にオブジェクトが割り当てられます。

たとえば、オブジェクトを追加する場合、vRealize Operations Manager は、オブジェクトが使用するコレクタのタグ値とオブジェクトの種類にオブジェクトを割り当てます。タグの値がない場合は作成されます。

事前定義済みのタグに値がない場合、そのタグ タイプのオブジェクトは存在しません。たとえば、vRealize Operations Manager インスタンスでアプリケーションが1つも定義されていない場合、アプリケーション タグにはタグ値がありません。

各タグ値は、そのタグを持つオブジェクトの数とともに表示されます。オブジェクトが1つもないタグ値には値 0 が示されます。事前定義されたタグと vRealize Operations Manager によって作成されるタグ値は削除できません。

表 4-109. 定義済みタグ

タグ	説明
コレクタ（フル セット）	定義済みの各コレクタは、タグの値です。各オブジェクトは、vRealize Operations Manager に追加されるときに、それ自体が使用するコレクタのタグ値に割り当てられます。デフォルト コレクタは vRealize Operations Manager Collector-vRealize です。
アプリケーション（フル セット）	定義済みの各アプリケーションはタグ値です。階層をアプリケーションに追加、またはオブジェクトをアプリケーションの階層に追加すると、階層がタグの値に割り当てられます。
メンテナンス スケジュール（フル セット）	定義された各メンテナンス スケジュールはタグの値であり、オブジェクトを追加や編集してスケジュールを作成すると、オブジェクトが値に割り当てられます。
アダプタ タイプ	各アダプタ タイプはタグ値であり、そのアダプタ タイプを使用する各オブジェクトにはこのタグ値が与えられます。
アダプタ インスタンス	各アダプタ インスタンスはタグ値であり、各オブジェクトにはメトリックが収集されるアダプタ インスタンスのタグ値が割り当てられます。
オブジェクト タイプ	各オブジェクト タイプはタグ値であり、オブジェクトを追加すると、各オブジェクトがそのタイプのタグ値に割り当てられます。
最近追加されたオブジェクト	最終日、7 日、10 日、30 日には、タグの値があります。タグ値がそれらに該当する場合、オブジェクトにこのタグ値があります。
オブジェクトのステータス	データを受け取っていないオブジェクトに割り当てられるタグ値
収集状態	割り当てられるタグ値は、オブジェクトの収集状態（「収集中」や「収集中でない」など）を示します。
健全性の範囲	良好（緑色）、警告（黄色）、緊急（オレンジ色）、クリティカル（赤色）、および不明（青色）の健全性ステータスにはタグ値があります。各オブジェクトには、その現在の健全性ステータスの値が割り当てられます。
エンタープライズ全体	タグ値は、エンタープライズ アプリケーション全体です。このタグ値は各アプリケーションに割り当てられます。
ライセンス	タグ値は、[管理] - [ライセンスにあるライセンス グループです。オブジェクト]は、vRealize Operations Manager のインストール中にライセンス グループに割り当てられます。
タグの解除	タグ割り当てを削除するには、このタグにオブジェクトをドラッグします。

オブジェクト タグを追加してオブジェクトをタグに割り当てる

オブジェクト タグは、情報タイプであり、タグ値は、その情報タイプの個別インスタンスです。事前定義されたオブジェクト タグが自分のニーズを満たさない場合、オブジェクト タグを独自に作成して、環境内のオブジェクトを分類し管理できます。たとえば、クラウド オブジェクトにタグを追加して、異なるクラウド名にタグ値を追加できます。その後、オブジェクトをクラウド名に割り当てることができます。

前提条件

事前定義されたオブジェクト タグについてよく理解してください。

手順

- 1 [管理] - [インベントリ エクスプローラ] を選択します。

- 2 タグのリストの上の [タグの管理] アイコンをクリックします。
- 3 [新規タグの追加] アイコンをクリックして、新しい行を追加し、その行にタグ名を入力します。
たとえば、**Cloud Objects** と入力し、[更新] をクリックします。
- 4 新しいタグを選択し、[新規タグ値の追加] アイコンをクリックして、新しい行を追加し、その行にタグ値の名前を入力します。
たとえば、**Video Cloud** と入力し、[更新] をクリックします。
- 5 [OK] をクリックしてタグを追加します。
- 6 オブジェクトを追加するタグをクリックして、オブジェクト タグ値のリストを表示します。
たとえば、[クラウド オブジェクト] をクリックして、Video Cloud オブジェクト タグ値を表示します。
- 7 インベントリ エクスプローラの右側のペインのリストからオブジェクトをタグ値名にドラッグします。
Ctrl キーを押しながらクリックして複数の個別のオブジェクトを選択するか、Shift キーを押しながらクリックしてオブジェクトの範囲を選択できます。
たとえば、vCenter Adapter を通じて接続されているデータセンターを割り当てする場合、検索フィルタに **vCenter** と入力して追加するデータセンター オブジェクトを選択します。

タグを使用してオブジェクトを検索する

vRealize Operations Manager でオブジェクトを検索する最も迅速な方法は、タグを使用することです。タグを使用すると、オブジェクト リスト全体を検索するよりも効率的です。

また、タグになり得るタグ値は Applications と Object Types です。たとえば、Object Types タグには、環境内のすべての仮想マシンを含む Virtual Machine などの、vRealize Operations Manager にある各オブジェクトの値があります。これらの仮想マシンのそれぞれが、Virtual Machine タグのタグ値でもあります。タグ値のリストを展開して、確認するオブジェクトの値を選択できます。

手順

- 1 [管理] - [インベントリ エクスプローラ] を選択します。
- 2 中央ペインのタグ リストで、割り当てられた値を持つオブジェクトのタグをクリックします。
タグをクリックすると、タグの下に値のリストが表示されます。各値に関連付けられているオブジェクトの数は、タグ値の隣りに表示されます。
タグ値の隣りの「+」記号は、その値もまたタグであり、他のタグ値が含まれることを示します。「+」記号をクリックするとサブ値を表示できます。
- 3 タグ値を選択します。
そのタグ値を持つオブジェクトが、右側のペインに表示されます。複数のタグ値を選択すると、リスト上のオブジェクトは、選択した各値に依存します。

タグ値の選択	表示されるオブジェクト
同一タグに対する複数の値	リストには、どちらかの値をとるオブジェクトが表示されます。たとえば、Object Types タグの 2 つの値 (Datacenter と Host System など) を選択した場合、リストにはいずれかの値を持つオブジェクトが表示されます。
2 つ以上の異なるタグに対する値	リストには、選択した値をすべて持つオブジェクトのみが表示されます。たとえば、Object Types タグの 2 つの値 (Datacenter と Host System など) を選択し、さらに vCenter アダプタ インスタンス タグの vC-1 などのアダプタ インスタンスを選択した場合、vC-1 に関連付けられたデータセンターとホスト システム オブジェクトのみがリストに表示されます。他のアダプタ インスタンスに関連付けられたデータセンターまたはホスト システムのオブジェクト、およびデータセンターまたはホスト システムのオブジェクトではないオブジェクトは、リストに表示されません。

4 リストからオブジェクトを選択します。

オブジェクト タグの管理ワークスペース

大企業の場合、何千ものオブジェクトがある場合があります。オブジェクトをタグに割り当て、そのタグ値を使って表示するオブジェクトを選択すると、インベントリ エクスプローラのリストでそのオブジェクトが見つけやすくなります。

オブジェクト タグの管理を確認できる場所

左側のペインで、[管理] - [インベントリ エクスプローラ] を選択します。タグのリストの上の [タグの管理] アイコンをクリックします。

オブジェクト タグの管理オプション

以前に作成したタグを一覧表示した [オブジェクト タグの管理] 画面が表示されます。左側のペインでタグを追加します。右側のペインでタグ値を追加します。

- [新規タグの追加] をクリックして新しいタグ名を入力するか、タグを選択して削除します。
- 選択したタグに対し、[新規タグ値の追加] をクリックして新しいタグ値名を入力するか、タグ値を選択して削除します。
- GEO の場所タグの場合、タグ値はワールド マップ上の位置で特定されます。タグ値を選択して [場所の管理] をクリックし、[場所の管理] マップが表示されたら、地理的な位置を選択します。そのタグ値に割り当てられたオブジェクトが [インベントリ エクスプローラ: オブジェクトの地理的マップ](#) 上の選択した地理的な位置に表示されます。

オブジェクト タイプのタグの管理ワークスペース

環境内のすべてのオブジェクトには、特定のオブジェクト タイプがあります。オブジェクト タイプのタグの管理を使用して、表示されるオブジェクト タイプのタグを制御します。

オブジェクト タイプのタグの管理の仕組み

インストールされたすべてのアダプタ インスタンスに対し、vRealize Operations Manager は環境内のオブジェクトを検出し、これらのオブジェクトからデータの収集を開始します。

オブジェクト タイプのタグの管理を確認できる場所

左側のペインで、[管理] - [インベントリ エクスプローラ] を選択します。タグのリストの上の [オブジェクト タイプのタグの管理] アイコンをクリックします。

オブジェクト タイプのタグの管理オプション

インストールしたアダプタの数によっては、数百のオブジェクト タイプのタグがある場合があります。オブジェクト タイプのタグの管理オプションを使用して、リスト表示されたタグのオンとオフを切り替えることができます。

- フィルタ ワードを入力して、その用語を持つオブジェクト タイプのタグを表示します。
- 名前はすべてのオブジェクト タイプのタグをリスト表示します。
- オブジェクト タイプのタグの表示を切り替えるには、その行の [タグの表示] 列のチェック ボックスをオンにします。

インベントリ エクスプローラ：オブジェクトのリスト

vRealize Operations Manager は、アダプタ インスタンスごとに環境内のオブジェクトを検出し、それらを一覧表示します。環境内のすべてのオブジェクトの完全なリストから、任意のオブジェクトにすばやくアクセスして構成することができます。たとえば、データストアが接続されているか、データを提供しているかどうか、または仮想マシンをパワーオンできるかどうかを確認できます。

リストの機能

データ グリッドにオブジェクトが表示されます。特定のオブジェクトを見つけるため、グリッドの列を並べ替えたり、フィルタ ワードを検索することができます。並べ替えと検索に加え、オブジェクトをオブジェクト タグに割り当てることで、vRealize Operations Manager 内のオブジェクトとメトリックが見つけやすくなります。

リストを確認できる場所

左側のペインで、[管理] - [インベントリ エクスプローラ] を選択します。vRealize Operations Manager は、環境内のすべてのオブジェクトを一覧表示します。

インベントリ エクスプローラのリストのオプション

中央のペインには、オブジェクト タグのオプションが含まれます。右側のペインには、環境内のすべてのオブジェクトのツールバー オプションが含まれます。

表 4-110. オブジェクト タグ オプション

オプション	説明
すべて折りたたむ	すべてのタグ グループの選択を閉じます。
すべて選択解除	タグは選択解除するまで選択されたままになります。このオプションを使用して、すべてのタグを選択解除します。
タグの管理	タグまたはタグ値を追加します。 オブジェクト タグの管理ワークスペース を参照してください。
オブジェクト タイプのタグを管理する	オブジェクト タイプのタグは、多数ある場合があります。このオプションを使用して、表示するオブジェクト タイプのタグを選択します。 オブジェクト タイプのタグの管理ワークスペース を参照してください。

ツールバー オプションを使用してオブジェクトを管理します。

- フィルタ オプションでフィルタと一致するオブジェクトにリストを限定します。フィルタ オプションには、ID、名前、説明、メンテナンス スケジュール、アダプタ タイプ、オブジェクト タイプ、識別子が含まれます。

- リストから管理するオブジェクトを選択します。オブジェクト タグを選択すると、選択したタグ値のオブジェクトだけが一覧表示されます。列見出しによりオブジェクトを特定できます。[オブジェクト リスト ウィジェット](#)を参照してください。

表 4-111. インベントリ エクスプローラのツールバーのオプション

オプション	説明
操作	選択したオブジェクトに対してアクションを実行します。使用できるアクションは、オブジェクトのタイプによって異なります。たとえば、仮想マシンのパワー オンは、選択した仮想マシンに適用されます。を参照してください。 vRealize Operations Manager アクションのリスト
外部アプリケーションで開く	オブジェクトに関する情報を取得するために別のアプリケーションにリンクする機能がアダプタに含まれている場合は、ボタンをクリックして、そのアプリケーションのリンクにアクセスします。たとえば、[vSphere Client で仮想マシンを開く] や [vRealize Log Insight での VM ログの検索] です。
収集の開始	選択したオブジェクトのデータ収集をオンにします。
収集の停止	選択したオブジェクトのデータを収集しません。データ収集を停止すると、将来、データ収集を開始するのに備えて、vRealize Operations Manager はそのオブジェクトに対するメトリック データを保持します。
マルチ収集の実行	オブジェクトが複数のアダプタ インスタンスを通じてメトリックを収集している場合、アダプタ インスタンスまたはデータ収集のインスタンスを選択します。アダプタ インスタンスを使用しないオブジェクトには適用しないでください。
オブジェクトの編集	選択したオブジェクトを編集します。たとえば、仮想マシンのメンテナンス スケジュールを追加または変更します。同じタイプの複数のオブジェクトを選択した場合、それらのオブジェクト タイプに共通する識別子を編集できます。たとえば、複数のデータストアの VM エントリ名を一度に変更できます。 オブジェクトを管理するワークスペース を参照してください。
オブジェクトの追加	vRealize Operations Manager は、ほとんどのアダプタのオブジェクトを検出します。すべてのオブジェクトの自動検出をサポートしていないアダプタの場合、オブジェクトは手動で追加されます。 オブジェクトを管理するワークスペース を参照してください。
オブジェクトを検出する	IP スキャンを実行して、特定のアダプタに関連付けられたオブジェクトを検出します。 オブジェクトの検出ワークスペース を参照してください。
オブジェクトの削除	リストからオブジェクトを削除します。
メンテナンス開始	メンテナンスのためにオブジェクトをオフラインにします。 オブジェクト ワークスペースのメンテナンス スケジュールの管理 を参照してください。
メンテナンス終了	メンテナンス期間を終了し、選択したオブジェクトをオンラインに戻します。
選択のクリア	すべてのオブジェクトの選択をクリアします。
すべて選択	表示されているすべてのオブジェクトを選択します。

表 4-111. インベントリ エクスプローラのツールバーのオプション（続き）

オプション	説明
詳細の表示	選択したオブジェクトの [サマリ] タブを表示します。 サマリ タブ を参照してください。
ページ単位	1 ページあたりに一覧表示するオブジェクトの数。

オブジェクトを管理するワークスペース

オブジェクトからデータを収集するには、オブジェクトを追加するか、環境内の既存のオブジェクトを編集する必要があります。たとえば、自動検出をサポートしていないアダプタにはオブジェクトを追加するか、既存オブジェクトのメンテナンス スケジュールを変更する必要があります。

[オブジェクトを管理する] を確認できる場所

左側のペインで、[管理] - [インベントリ エクスプローラ] を選択します。プラス記号をクリックして新しいオブジェクトを追加するか、鉛筆をクリックして選択したオブジェクトを編集します。

ウィンドウに表示される項目は、編集するオブジェクトに応じて異なります。すべてのオプションが変更できるわけではありません。

表 4-112. [オブジェクトを管理する] の追加または編集オプション

オプション	説明
表示名	オブジェクトの名前。英数字だけを使用します。英数字以外の文字と空白は使用しないでください。
説明	(オプション) 単に情報提供を目的としています。
アダプタ タイプ	オブジェクトの編集では、アダプタ タイプを変更することはできません。
アダプタ インスタンス	オブジェクトの編集では、アダプタ インスタンスを変更することはできません。
オブジェクト タイプ	オブジェクトの編集では、オブジェクト タイプを変更することはできません。オブジェクト タイプによっては、追加の構成オプションが表示されることがあります。
収集間隔	<p>オブジェクトの収集間隔は、そのオブジェクトの収集ステータスに影響します。アダプタ インスタンスの収集間隔により、データ収集の頻度が決まります。たとえば、アダプタ インスタンスの収集間隔が 5 分に設定されている場合、オブジェクトの収集間隔を 30 分に設定すると、5 回の収集サイクル後 (25 分間) に、オブジェクトの収集ステータスが [データ受信中ではありません] となるのを防ぐことができます。</p> <p>REST API を通じて vRealize Operations Manager にデータをプッシュする vRealizeOpsMgrAPI や HttpPost などのアダプタ インスタンスの場合、データがプッシュされなくなると、アダプタ インスタンスのステータスは 5 回の収集期間後に「ダウン」に変更されます。たとえば、プロセスがデータを 10 分ごとにプッシュして停止した場合、アダプタ インスタンスのステータスは 50 分後にダウンに変更されます。この動作は、これらのアダプタ インスタンス タイプに対して想定されています。</p>
動的しきい値	デフォルトで、動的しきい値と早期警告スマート アラートは有効になっています。を参照してください。 vRealize Operations Manager 動的しきい値

オブジェクトの検出ワークスペース

アダプタ インスタンスの構成後、vRealize Operations Manager でオブジェクトが検出されない場合、手動検出を使用します。オブジェクトの検出は、個別にオブジェクトを追加するよりも効率的です。

注： 検出を使用して、組み込みアダプタのオブジェクトを定義します。vRealize Operations Manager は、外部アダプタを使用するオブジェクトを検出します。

オブジェクトの検出を確認できる場所

左側のペインで、[管理] - [インベントリ エクスプローラ] を選択します。[オブジェクトの検出] をクリックします。

オブジェクトを検出する

アダプタの describe.xml ファイルの Discoveries セクションに、検出情報に関するパラメータが含まれていることがあります。describe.xml ファイルはアダプタの conf サブフォルダ、たとえば xyz_adapter3/conf/describe.xml にあります。

オプション	説明
コレクタ	vRealize Operations Manager がオブジェクトの検出に使用するコレクタ。インストール中に追加されるのは vRealize Operations Manager コレクタのみです。
アダプタ タイプ	検出するオブジェクトのアダプタ タイプ。
アダプタ インスタンス	選択したアダプタ タイプのアダプタ インスタンス。
検出情報	アダプタ タイプに応じた選択。たとえば、vCenter アダプタの場合は、Discovery Info の選択により、特定のオブジェクト タイプのオブジェクトを検出するオプションが追加されます。
新規オブジェクトのみ	デフォルトはオンであり、検出済みのオブジェクトは除外されます。

結果検出リスト

オブジェクトの検出機能を使用して環境内のオブジェクトを手動で検出した場合、vRealize Operations Manager には指定したオブジェクト タイプのオブジェクトのリストが表示されます。監視するオブジェクトを選択できます。

検出結果を確認できる場所

左側のペインで、[管理] > [インベントリ エクスプローラ] を選択します。[オブジェクトの検出] をクリックします。オブジェクトの検出ワークスペースで選択を行ったら、[OK] をクリックします。デフォルト設定の場合、vRealize Operations Manager には新たに検出されたオブジェクトのみ表示されます。[オブジェクトの検出ワークスペース](#) を参照してください。

表 4-113. オブジェクト タイプ

オプション	説明
オブジェクト タイプ	オブジェクトの検出ワークスペースで選択しているオブジェクト タイプの中で、検出されたオブジェクト タイプ。
オブジェクト数	そのオブジェクト タイプのオブジェクト数。
インポート	選択すると、そのオブジェクト タイプがインポートされます。このオプションは、新たに検出されたオブジェクト タイプについてのみアクティブで選択可能になります。

表 4-113. オブジェクト タイプ （続き）

オプション	説明
収集	選択すると、そのオブジェクト タイプがインポートされ、データの収集が開始されます。このオプションは、新たに検出されたオブジェクト タイプについてのみアクティブで選択可能になります。
認証情報	オブジェクトからデータを収集するのにログイン認証情報が必要なオブジェクト タイプの場合、値は [True] です。

オブジェクト タイプをダブルクリックすると、監視するオブジェクトのリストが表示されます。

表 4-114. オブジェクト

オプション	説明
オブジェクト	アダプタの環境に存在する、選択したタイプのオブジェクト。たとえば、vCenter アダプタにより vCenter Server システム内のオブジェクトが検出されます。
インポート	選択すると、オブジェクトがインポートされますが、データの収集は開始されません。このオプションは、新たに検出されたオブジェクトのうち vRealize Operations Manager 環境に存在しないものについてのみアクティブで選択可能になります。
有り	オブジェクトが vRealize Operations Manager 環境に存在することを示します。
収集	選択すると、オブジェクトがインポートされ、データの収集が開始されます。このオプションは、新たに検出されたオブジェクトのうち vRealize Operations Manager 環境に存在しないものについてのみアクティブで選択可能になります。

オブジェクト ワークスペースのメンテナンス スケジュールの管理

メンテナンス モードを使用してオブジェクトをオフラインにします。環境内には多くのオブジェクトが意図的にオフラインにされている場合があります。たとえば、ソフトウェアのアップデートのためにサーバを非アクティブ化することがあります。オブジェクトがオフラインのときに vRealize Operations Manager がメトリックを収集している場合、オブジェクトの健全性のデータに影響する不正なアラートが生成される場合があります。オブジェクトがメンテナンス モードの場合、vRealize Operations Manager は、そのオブジェクトからメトリックを収集せず、アラートも生成しません。

メンテナンス スケジュールの仕組み

オブジェクトが一定間隔でメンテナンスを受ける場合には、メンテナンス スケジュールを作成して、そのスケジュールをオブジェクトに割り当てることができます。たとえば、毎週火曜日の深夜 0 時から午前 3 時までオブジェクトをメンテナンス モードにできます。また、無期限に、または指定期間、手動でオブジェクトをメンテナンス モードにすることもできます。これらの方法は相互に排他的ではありません。メンテナンス スケジュールが割り当てられている場合でも、オブジェクトをメンテナンス モードにしたり、メンテナンス モードを解除したりできます。

メンテナンス スケジュールの管理を確認できる場所

左側のペインで、[管理] - [インベントリ エクスプローラ] を選択します。[メンテナンス開始] をクリックします。

表 4-115. メンテナンス スケジュールの管理オプション

オプション	説明
ここに戻り、メンテナンスを自分で終了する。	[OK] をクリックすると、選択したオブジェクトのメンテナンス モードが始まります。このオブジェクトのメンテナンス モードは手動で終了する必要があります。
以下の分数の後にメンテナンスを終了	オブジェクトがメンテナンス モードにある時間を分数で入力します。
以下の日時にメンテナンスを終了	カレンダー アイコンをクリックしてメンテナンス モードを終了する日付を選択します。

インベントリ エクスプローラ：オブジェクトの地理的マップ

vRealize Operations Manager は、アダプタごとに環境内のオブジェクトを検出します。地理的マップには、GEO の場所タグが割り当てられたオブジェクトが表示されます。このマップを使用すると、世界中のオブジェクトを素早く探すことができます。

地理的マップの機能

GEO の場所タグが付いたオブジェクトがワールド マップに表示されます。

- GEO の場所タグを作成するには、[オブジェクト タグの管理ワークスペース](#)を参照してください。
- タグにオブジェクトを割り当てるには、[タグの作成および割り当て](#)を参照してください。

地理的マップを確認できる場所

左側のペインで、[管理] - [インベントリ エクスプローラ] を選択します。[地理的] タブをクリックします。

地理的マップのオプション

ズームインするには、プラス記号を使用します。ズームアウトするには、マイナス記号を使用します。マップを左または右にパンするには、クリックしてドラッグします。

VMware vRealize Operations Manager でのカスタム オブジェクト グループの管理

カスタム オブジェクト グループは、1 つまたは複数のオブジェクトを含むコンテナです。vRealize Operations Manager では、カスタム グループを使用することでグループ内のオブジェクトからのデータを収集し、そして収集したデータに関するレポートを作成します。

カスタム オブジェクト グループを使用する理由

グループを使用してオブジェクトを分類し、vRealize Operations Manager でオブジェクトのグループからデータを収集し、定義したデータ表示方法に従って結果をダッシュボードとビューに表示します。

静的なオブジェクト グループを作成することも、環境に追加された新しいオブジェクトから vRealize Operations Manager がデータを検出して収集する際にグループ メンバーシップを決定する基準を使用して動的なグループを作成することもできます。

vRealize Operations Manager は、ワールド、環境、およびライセンスなどの一般的に使用されるオブジェクトグループ タイプを備えています。vRealize Operations Manager では、オブジェクト グループ タイプを使用して、オブジェクトのグループを分類します。各グループにグループ タイプを割り当てると、作成したオブジェクトグループを分類して整理することができます。

カスタム オブジェクト グループのタイプ

カスタム グループを作成するときに、オブジェクトの動的メンバーシップをグループに適用するルールを使用することも、オブジェクトを手動でグループに追加することもできます。vRealize Operations Manager にアダプタを追加すると、vRealize Operations Manager でアダプタに関連付けられたグループが使用できるようになります。

- 動的グループ メンバーシップ。グループ内のオブジェクトのメンバーシップを動的に更新するには、グループを作成するときにルールを定義します。vRealize Operations Manager では、定義した条件に基づいてグループにオブジェクトが追加されます。
- 動的および手動を含む混合メンバーシップ。
- 手動グループ メンバーシップ。オブジェクトのインベントリから、メンバーとしてグループに追加するオブジェクトを選択します。
- アダプタに関連付けられたグループ。各アダプタがグループのメンバーシップを管理します。たとえば、vCenter Server アダプタは、vSphere インベントリのコンテナ オブジェクトに、データストア、ホスト、ネットワークなどのグループを追加します。これらのグループを変更するには、このアダプタで操作する必要があります。

vRealize Operations Manager の管理者は、カスタム グループに詳細な権限を設定できます。グループを作成する権限を持つユーザーは、オブジェクトのカスタム グループを作成でき、vRealize Operations Manager で各グループにポリシーを適用して、オブジェクトからのデータ収集とダッシュボードおよびビューでの結果報告が行われます。

カスタム グループを作成し、そのグループにポリシーを割り当てると、vRealize Operations Manager は適用されたポリシーで定義された条件を使用することにより、グループ内のオブジェクトからデータを収集して分析できます。vRealize Operations Manager は、ポリシーの設定に基づいてこれらのオブジェクトのステータス、問題、および推奨事項に関するレポートを作成します。

注： vRealize Operations Manager からエクスポートまたは vRealize Operations Manager にインポートできるのは、ユーザーが明示的に定義したカスタム グループのみです。ユーザーは、複数のカスタム グループをエクスポートまたはインポートできます。インポート機能が実行されたら、ユーザーは、インポートしたグループにポリシーを関連付ける必要があるかどうかをチェックして判断する必要があります。エクスポート/インポート操作は、ユーザー定義（ユーザーが明示的に作成）のカスタム グループのみに使用可能です。

ポリシーが、vRealize Operations Manager のオブジェクト グループに関するレポートに役立つ仕組み

vRealize Operations Manager は、オブジェクト グループ内のオブジェクトを分析し、さまざまな属性の中でも特にオブジェクト グループのワークロード、容量、負荷、異常、および障害に関するレポートを作成します。

オブジェクト グループにポリシーを適用すると、vRealize Operations Manager は、グループ内のオブジェクトからデータを収集するためのポリシーで有効なしきい値設定、メトリック、スーパー メトリック、属性、プロパティ、アラートの定義、および問題の定義を使用して、ダッシュボードとビューに結果を表示します。

新しいオブジェクト グループを作成するときは、そのグループにポリシーを適用するオプションを選択できます。

- カスタム オブジェクト グループにポリシーを関連付けるには、グループ作成ウィザードでポリシーを選択します。

- オブジェクト グループに特定のポリシーを関連付けない場合は、ポリシーの選択をブランクのままにします。カスタム オブジェクト グループは、デフォルト ポリシーに関連付けられます。デフォルト ポリシーを変更した場合、このオブジェクト グループは、新しいデフォルト ポリシーに関連付けられます。

vRealize Operations Manager は、[アクティブなポリシー] タブに表示されている優先順位でポリシーを適用します。ポリシーの優先順位を確立すると、vRealize Operations Manager は、ポリシー内の構成済みの設定をポリシー順位に従って適用し、オブジェクトの分析とレポート作成を実行します。ポリシーの優先順位を変更するには、ポリシー行をクリックしてドラッグします。デフォルト ポリシーは常に優先順位リストの一番下に置かれます。残りのアクティブなポリシーのリストは、最高優先順位のポリシーを示す優先順位 1 から始まります。複数のオブジェクト グループのメンバーとなるようにオブジェクトを割り当て、各オブジェクト グループに異なるポリシーを割り当てた場合、vRealize Operations Manager はそのオブジェクトに最高ランクのポリシーを関連付けます。

ユーザー シナリオ：カスタム オブジェクト グループの作成

システム管理者は、クラスタ、ホスト、および仮想マシンのキャパシティを監視する必要があります。vRealize Operations Manager は、これらのオブジェクトが IT 部門のために確立されているポリシーに準拠していることを異なるサービス レベルで監視し、環境に追加される新しいオブジェクトを検出して監視する必要があります。vRealize Operations Manager で、ポリシーをオブジェクト グループに適用するための設定、およびキャパシティレベルのステータスを分析、監視、およびレポートするための設定を行います。

vRealize Operations Manager で、オブジェクトのキャパシティレベルを監視し、サービス レベルのポリシーに準拠していることを確認するには、確立されたサービス階層に対応できるようにオブジェクトをプラチナ、ゴールド、シルバーのオブジェクト グループに分類します。

グループ タイプを作成し、各サービス レベルの動的オブジェクト グループを作成します。vRealize Operations Manager でオブジェクトのメンバーシップを最新の状態に保つために、各動的オブジェクト グループのメンバーシップ基準を定義します。動的オブジェクト グループごとに、グループ タイプを割り当て、グループ内のオブジェクトのメンバーシップを維持するための基準を追加します。カスタム オブジェクト グループにポリシーを関連付けるには、グループ作成ウィザードでポリシーを選択します。

前提条件

- 環境内のオブジェクトおよびそれがサポートするサービス レベルを把握する。
- オブジェクトの監視に必要なポリシーを理解する。
- vRealize Operations Manager に、オブジェクトのキャパシティを監視するポリシーが含まれていることを確認する。

手順

- 1 サービス レベルの監視を識別するためのグループ タイプを作成するには、[内容] を選択し、[グループ タイプ] をクリックします。
- 2 [グループ タイプ] ツールバーで、プラス記号をクリックし、グループ タイプに **Service Level Capacity** と入力します。
リストにグループ タイプが表示されます。

3 [環境] を選択し、[カスタム グループ] をクリックします。

ナビゲーション ペインのカスタム グループのリストに Service Level Capacity という名前のフォルダが表示され、[環境概要] に [グループ] タブが表示されます。

4 新しいオブジェクト グループを作成するには、[グループ] ツールバーのプラス記号をクリックします。

動的グループのデータおよびメンバーシップ基準を定義する [新規グループ] ワークスペースが表示されます。

- a [名前] テキスト ボックスに分かりやすいオブジェクト グループの名前 (**Platinum_Objects** など) を入力します。

- b [グループ タイプ] ドロップダウン メニューで、[Service Level Capacity] を選択します。

- c (オプション) [ポリシー] ドロップダウン メニューで、オブジェクトのキャパシティを監視するためのしきい値が設定されているサービス レベル ポリシーを選択します。

カスタム オブジェクト グループにポリシーを関連付けるには、グループ作成ウィザードでポリシーを選択します。オブジェクト グループに特定のポリシーを関連付けない場合は、ポリシーの選択をブランクのままにします。カスタム オブジェクト グループは、デフォルト ポリシーに関連付けられます。デフォルト ポリシーを変更した場合、このオブジェクト グループは、新しいデフォルト ポリシーに関連付けられます。

- d vRealize Operations Manager が基準を満たすオブジェクトを検出し、これらのオブジェクトをグループに追加できるように、[グループ メンバーシップを最新に保つ] チェック ボックスを選択します。

5 新しい動的オブジェクト グループの仮想マシンのメンバーシップを、プラチナ オブジェクトとして監視するように定義します。

- a [オブジェクトの選択] ドロップダウン メニューから [vCenter アダプタ] を選択し、[仮想マシン] を選択します。

- b 基準の空のドロップダウン メニューから、[メトリック] を選択します。

- c [メトリックの選択] ドロップダウン メニューから [ディスク領域] を選択し、[現在のサイズ] をダブルクリックします。

- d 条件値のドロップダウン メニューから、[が次より小さい] を選択します。

- e [メトリック値] ドロップダウン メニューで、**10** と入力します。

6 新しい動的オブジェクト グループのホスト システムのメンバーシップを、プラチナ オブジェクトとして監視するように定義します。

- a [別の基準セットの追加] をクリックします。

- b [オブジェクトの選択] ドロップダウン メニューから [vCenter アダプタ] を選択し、[ホスト システム] を選択します。

- c 基準の空のドロップダウン メニューから、[メトリック] を選択します。

- d [メトリックの選択] ドロップダウン メニューから [ディスク領域] を選択し、[現在のサイズ] をダブルクリックします。

- e 条件値のドロップダウン メニューから、[が次より小さい] を選択します。

- f [メトリック値] ドロップダウン メニューで、**100** と入力します。

7 新しい動的オブジェクト グループのクラスタ コンピューティング リソースのメンバーシップを定義します。

- a [別の基準セットの追加] をクリックします。
- b [オブジェクトの選択] ドロップダウン メニューから [vCenter アダプタ] を選択し、[クラスタ コンピューティング リソース] を選択します。
- c 基準の空のドロップダウン メニューから、[メトリック] を選択します。
- d [メトリックの選択] ドロップダウン メニューから [ディスク領域] を選択し、[capacityRemaining] をダブルクリックします。
- e 条件値のドロップダウン メニューから、[が次より小さい] を選択します。
- f [メトリック値] ドロップダウン メニューで、**1000** と入力します。
- g [プレビュー] をクリックして、オブジェクトがすでにこの基準に適合しているかどうかを判断します。

8 [OK] をクリックして、グループを保存します。

新しい動的グループを保存すると、Service Level Capacity フォルダと [グループ] タブのグループのリストにグループが表示されます。

9 vRealize Operations Manager によって環境内のオブジェクトからデータが収集されるまで 5 分間待機します。

結果

vRealize Operations Manager は、グループで定義したメトリック、およびグループに適用されたポリシーで定義されているしきい値に応じて、環境内のクラスタ コンピューティング リソース、ホスト システム、および仮想マシンからデータを収集し、オブジェクトに関する結果をダッシュボードとビューに表示します。

次のステップ

プラチナ オブジェクトのキャパシティレベルを監視するには、ダッシュボードを作成し、ウィジェットをダッシュボードに追加します。 [ダッシュボード](#) を参照してください。

vRealize Operations Manager のオブジェクト グループ タイプ

オブジェクト グループ タイプは、環境内のオブジェクトを分類するために、環境内のオブジェクトの特定のグループに適用する識別子です。vRealize Operations Manager がオブジェクト グループからデータを収集して結果をダッシュボードやビューに表示することができるように、新しいグループ タイプを追加して、それらをオブジェクトのグループに適用できます。

グループ タイプの動作

グループ タイプを使用してオブジェクトを分類し、vRealize Operations Manager でオブジェクトにポリシーを適用して、アラート、ワークロード、障害、リスクなどの特定のステータスを追跡および表示できるようにします。

新しいグループ タイプを作成すると、vRealize Operations Manager で既存のグループ タイプのリストに追加され、環境カスタム グループのリストに、そのグループ タイプの名前の新しいフォルダが作成されます。

新しいオブジェクト グループを作成するときには、そのオブジェクト グループにグループ タイプを1つ割り当てます。インベントリ ツリーのオブジェクトをカスタム グループに追加し、次にダッシュボードを作成して、そのダッシュボードにウィジェットを追加し、グループ内のオブジェクトから収集したデータを表示するようにウィジェットを構成します。このようにすることで、オブジェクトを監視および管理できます。

グループ タイプは、手動で作成したオブジェクト グループ、または変更できないオブジェクト グループ（アダプタによって追加されたものなど）に適用できます。vRealize Operations Manager に追加した各アダプタによって、オブジェクトの1つまたは複数の静的なグループが追加され、アダプタ ソースから受信したデータがグループ化されます。

グループ タイプのリストは、グループ タイプ の [内容] 領域に表示されます。カスタム オブジェクト グループは、カスタム グループ の [環境] 領域に表示されます。

グループ タイプを作成および変更する場所

グループ タイプを作成または変更するには、[内容] をクリックしてから、[グループ タイプ] をクリックします。

グループ タイプのオプション

グループ タイプは、追加、編集、または削除できます。アダプタによって作成されたグループ タイプは編集できません。

[環境概要] ペインの [グループ] タブ

グループは、環境内の任意の数およびタイプのオブジェクトを含めることができるコンテナです。vRealize Operations Manager は、グループ内のオブジェクトからデータを収集し、ダッシュボード内の結果とユーザーが定義したビューを表示します。

グループの仕組み

グループは、vRealize Operations Manager によってインストールされるかアダプタによって作成されます。またはユーザーが作成します。グループ基準に基づいて、グループを使用して環境を編成し、グループ内のすべてのオブジェクトと一緒に監視できます。また、グループにポリシーを割り当てて、グループのメンバーシップを動的にすることもできます。

たとえば、vSphere ホストのセットがあり、ホストがメンテナンス モードになってもアラートを生成しないようにする場合は、それらの vSphere ホストを1つのグループにまとめ、メンテナンスのスケジュール設定が含まれたポリシーを割り当てることができます。メンテナンスの期間、vRealize Operations Manager はそれらのオブジェクトに対するメトリックを無視し、アラートを生成しなくなります。メンテナンス期間が終了すると、vRealize Operations Manager はオブジェクトの監視を再開し、機能停止が発生するとアラートを生成します。

[グループ] を確認できる場所

[グループ] にアクセスするには、ナビゲーション ペインの [環境] をクリックします。

[グループ] のオプション

プラス記号をクリックしてグループを追加します。ユーザーが作成したグループのみを編集、クローン作成、または削除できます。vRealize Operations Manager を使用して、またはアダプタによってインストールされたグループを変更することはできません。

グループ データ グリッドに、各グループの状態の概要が表示されます。

表 4-116. グループ データ グリッドのオプション

オプション	説明
名前	グループ名を選択すると、そのグループの概要が表示されます。 名前の右側を選択して、グループを編集、クローン作成、または削除します。
概要	グループの健全性、リスク、および効率の重要度。 赤色、オレンジ色、または黄色の重要度のグループをクリックすると、グループ内のオブジェクトに関する潜在的な問題についての詳細を取得できます。

[カスタム オブジェクト グループ] ワークスペース

オブジェクトを監視し、問題が発生したときに対処できるようにするために、オブジェクトのカスタム グループを作成および編集して、vRealize Operations Manager がオブジェクトからデータを収集してその結果をダッシュボードおよびビューに表示するように設定できます。

カスタム グループ ワークスペースの機能

新しいオブジェクト グループを作成するときは、分かりやすいグループ名を定義し、グループ タイプを選択します。分析のポリシーにカスタム オブジェクト グループに関連付けるには、グループ作成ウィザードでそのポリシーを選択します。ポリシーをオブジェクト グループに関連付けないようにするには、ポリシーの選択をブランクのままにします。ポリシーの選択がブランクの場合は、デフォルト ポリシーとして指定されたポリシーにカスタム オブジェクト グループが関連付けられます。

オブジェクト タイプを選択し、オブジェクト グループ内のメンバーシップが静的、動的、または静的メンバーシップと動的メンバーシップの組み合わせのいずれであるのかを判別します。

- 静的なオブジェクト グループを作成するには、そのグループにオブジェクトを追加します。 オブジェクト メンバーシップの条件は含めません。
- vRealize Operations Manager によって特定の条件に基づいて更新される動的なオブジェクト グループを作成するには、オブジェクト タイプを選択し、メトリック、関係、およびプロパティに基づいてグループのメンバーシップ基準を定義します。

カスタム オブジェクト グループにオブジェクトを追加すると、左側の [カスタム グループ] ナビゲーション ペインに新しいフォルダが表示され、このフォルダにメンバー オブジェクトが含まれます。

オブジェクト グループを作成および変更する場所

静的または動的なオブジェクト グループ、または静的および動的メンバーシップの組み合わせが含まれるオブジェクト グループを作成または変更するには、[環境] をクリックしてから、[カスタム グループ] をクリックします。[グループ] タブに、vRealize Operations Manager に追加されたアダプタのオブジェクト グループと、カスタム オブジェクト グループのリストが表示されます。

既存のグループを編集するには、グループを選択し、[グループ] タブの鉛筆アイコンをクリックします。

新規グループを作成するための [カスタム オブジェクト グループ] ワークスペース

新しいオブジェクト グループを作成し、グループ タイプ、およびオブジェクトをグループに割り当てることができます。グループを作成するときに、ポリシーを割り当てたり、ポリシーの選択をブランクのままにして、デフォルトポリシーを適用したりできます。vRealize Operations Manager は、グループに関連付けられたポリシー内の設定に基づいて、グループ内のオブジェクトからデータを収集します。結果はダッシュボードとビューに表示されます。

カスタムのグループ タイプ、ポリシー、メンバーシップの割り当てを行う場所

グループ タイプ、ポリシー、メンバーシップを割り当てるには、[環境] をクリックし、[カスタム グループ] をクリックしてから、プラス記号をクリックして新規グループを追加します。新規グループ ワークスペースでは、メンバーシップ基準の定義、包含および除外するオブジェクトの選択を実行できます。

カスタム オブジェクト グループにポリシーを関連付けるには、グループ作成ウィザードでポリシーを選択します。オブジェクト グループに特定のポリシーを関連付けない場合は、ポリシーの選択をブランクのままにします。カスタム オブジェクト グループは、デフォルト ポリシーに関連付けられます。デフォルト ポリシーを変更した場合、このオブジェクト グループは、新しいデフォルト ポリシーに関連付けられます。

表 4-117. 新規グループ ワークスペース

オプション	説明
名前	オブジェクト グループの分かりやすい名前
グループ タイプ	オブジェクト グループの分類新規のカスタム グループは、左側の [カスタム グループ] ナビゲーション ペインにある専用フォルダに表示されます。
ポリシー	ポリシーを 1 つまたは複数のオブジェクト グループに割り当て、vRealize Operations Manager がポリシー内の設定に基づいてオブジェクトを分析し、定義されたしきい値に違反した場合にはアラートをトリガーして、ダッシュボード、ビュー、およびレポートに結果を表示できるようにします。ポリシーは、グループ作成時にグループに割り当てることも、カスタム グループの編集ウィザードまたはポリシー領域から後で割り当てることもできます。
グループ メンバーシップを最新に保つ	動的オブジェクト グループでは、vRealize Operations Manager によって、定義されたルールに従ってグループ メンバーシップの基準と一致するオブジェクトが検出され、検索結果に基づいてグループ メンバーが更新されます。
[メンバーシップ基準の定義] ペイン	<p>動的オブジェクト グループの基準を定義し、vRealize Operations Manager によってグループのオブジェクト メンバーシップが最新の状態に維持されるようにします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [オブジェクト タイプ] ドロップダウン メニュー。仮想マシンなど、グループに追加するオブジェクトのタイプを選択します。 ■ [メトリック]、[関係]、および[プロパティ基準] ドロップダウン メニュー選択したオブジェクトからデータを収集するために、vRealize Operations Manager が適用する基準を定義します。 ■ メトリック。オブジェクト タイプに基づいて変化するデータ タイプ (属性) のインスタンス。メトリックは、オブジェクトからデータを収集するための測定基準として使用されます。たとえば、メトリックとしてシステム属性を選択することができます。属性とは、vRealize Operations Manager がオブジェクトから収集するデータのタイプのことです。 ■ 関係。オブジェクトと他のオブジェクトとの関係を示します。たとえば、仮想マシン オブジェクトに対して、vSphere ホストおよびクラスタのナビゲーション ツリー内に特定の単語を含む子オブジェクトであることを要件として指定できます。 ■ プロパティ。オブジェクトの構成パラメータを識別します。たとえば、仮想マシンに対して、メモリ容量が 100 KB を超えていることを要件として指定できます。 ■ 追加。オブジェクト タイプに別のメトリック、関係、またはプロパティを追加します。 ■ 削除。選択したオブジェクト タイプをメンバーシップ基準から削除します。あるいは、選択したメトリック、関係、またはプロパティ タイプをオブジェクト タイプの基準から削除します。 ■ リセット。オブジェクト タイプの基準を、定義した最初のメトリック、関係、またはプロパティにリセットします。 ■ 別の基準セットを追加します。グループに追加する別のオブジェクト タイプを追加します。たとえば、vCenter Server インスタンスとホスト システムを追跡する単一のオブジェクト グループを作成します。 ■ [プレビュー] ボタン。メンバーシップ基準を定義したら、グループ内のオブジェクトのリストをプレビューして、定義した基準がオブジェクトのグループに適用可能であることを確認します。定義した基準が有効な場合は、適用可能なオブジェクトがプレビューに表示されます。基準が無効な場合は、プレビューにはオブジェクトが 1 つも表示されません。

表 4-117. 新規グループ ワークスペース (続き)

オプション	説明
[常に含めるオブジェクト] ペイン	<p>vRealize Operations Manager がオブジェクトからデータを収集するたびに、メンバーシップ基準に関係なく、グループ内に含めるオブジェクトを決定します。オブジェクトをグループに含めると、そのオブジェクトによって、メンバーシップに定義した基準が上書きされます。以前のバージョンの vRealize Operations Manager では、これらのオブジェクトはホワイト リストと呼ばれていました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [フィルタリングされたオブジェクト] ペイン。使用可能なオブジェクト グループのリストと各グループ内のオブジェクトを表示します。グループ内にオブジェクトを常に含めるには、グループのチェックボックスを選択するか、グループ内の個々のオブジェクトを選択して、[追加] ボタンをクリックします。 ■ [追加] ボタン。オブジェクト グループに永続的に含めるには、選択したオブジェクトを右側のペインに追加します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ [選択したオブジェクトのみ]。選択したオブジェクトのみをオブジェクト グループに永続的に追加します。 ■ [選択したオブジェクトおよび子孫]。選択したオブジェクトとその子孫をオブジェクト グループに永続的に追加します。 ■ [常に含めるオブジェクト (n)] ペイン。包含リストに追加するオブジェクトをリストします。オブジェクトを含めることを確定するには、右側のペインのチェック ボックスを選択します。包含対象として選択されたオブジェクトの数は、このペインのタイトルの (n) 変数に反映されます。 ■ [削除] ボタン。右側のペインで選択したオブジェクトを常に含めるオブジェクトのリストから削除します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ [選択したオブジェクトのみ]。選択したオブジェクトのみを、常に含めるオブジェクトのリストから削除します。 ■ [選択したオブジェクトおよび直接の子]。選択したオブジェクトとその子を、常に含めるオブジェクトのリストから削除します。 ■ [選択したオブジェクトおよびすべての子孫]。選択したオブジェクトとその子孫を、常に含めるオブジェクトのリストから削除します。
[常に除外するオブジェクト] ペイン	<p>vRealize Operations Manager がオブジェクトからデータを収集するたびに、メンバーシップ基準に関係なく、グループから除外するオブジェクトを決定します。オブジェクトをグループに含めると、そのオブジェクトによって、メンバーシップに定義した基準が上書きされます。以前のバージョンの vRealize Operations Manager では、このようなオブジェクトはブラック リストと呼ばれていました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [フィルタリングされたオブジェクト] ペイン。使用可能なオブジェクト グループのリストと各グループ内のオブジェクトを表示します。グループからオブジェクトを常に除外するには、グループのチェックボックスを選択するか、グループ内の個々のオブジェクトを選択して、[追加] ボタンをクリックします。 ■ [追加] ボタン。オブジェクト グループから永続的に削除するには、選択したオブジェクトを右側のペインに追加します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ [選択したオブジェクトのみ]。選択したオブジェクトのみを、オブジェクト グループから永続的に除外するオブジェクトのリストに追加します。 ■ [選択したオブジェクトおよび子孫]。選択したオブジェクトとその子孫を、オブジェクト グループから永続的に除外するオブジェクトのリストに追加します。 ■ [常に除外するオブジェクト (n)] ペイン。除外リストに追加するオブジェクトをリストします。オブジェクトを除外することを確定するには、右側のペインのチェック ボックスを選択します。除外対象として選択されたオブジェクトの数は、このペインのタイトルの (n) 変数に反映されます。 ■ [削除] ボタン。右側のペインで選択したオブジェクトを常に除外するオブジェクトのリストから削除します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ [選択したオブジェクトのみ]。選択したオブジェクトのみを、常に除外するオブジェクトのリストから削除します。 ■ [選択したオブジェクトおよび直接の子]。選択したオブジェクトとその子を、常に除外するオブジェクトのリストから削除します。

表 4-117. 新規グループ ワークスペース (続き)

オプション	説明
	■ [選択したオブジェクトおよびすべての子孫]。選択したオブジェクトとその子孫を、常に除外するオブジェクトのリストから削除します。

アプリケーション グループの管理

アプリケーションとは、ユーザーのビジネスをサポートする具体的な機能を実行する、相互依存する一連のハードウェアおよびソフトウェア コンポーネントを表すコンテナ構造です。vRealize Operations Manager は、アプリケーションに含まれる 1 つまたは複数のコンポーネントに問題が発生したときに環境がどのような影響を受けるのかを判断し、アプリケーションの総合的な健全性とパフォーマンスを監視するためのアプリケーションを構築します。アプリケーション内のオブジェクト メンバーシップは動的ではありません。アプリケーションを変更するには、コンテナ内のオブジェクトを手動で変更します。

アプリケーションを使用する理由

vRealize Operations Manager は、アプリケーション内のコンポーネントからデータを収集し、任意またはすべてのコンポーネントのリアルタイム分析を行い、各アプリケーションのサマリ ダッシュボードに結果を表示します。コンポーネントに問題が発生した場合、アプリケーション内のどこで問題が発生したのかを確認し、その他のオブジェクトに問題がどのように拡散していくのかを判断できます。

[環境概要] ペインの [アプリケーション] タブ

アプリケーションは、環境内の関連オブジェクトをグループ化したもので、業務上のアプリケーションと似ています。サマリを使用して、アプリケーション内のオブジェクトの健全性を追跡し、パフォーマンスに関する問題のトラブルシューティングに役立ちます。

アプリケーションの仕組み

vRealize Operations Manager では、各アプリケーションに 1 つ以上の階層が含まれ、各階層には 1 つ以上のオブジェクトが含まれています。階層は、アプリケーション内で特定のタスクを実行するオブジェクトを編成するのに役立ちます。たとえば、データベース サーバのすべてを 1 つの階層にグループ化することもできます。

階層内のオブジェクトは静的です。階層内のオブジェクト セットが変更されたら、アプリケーションを手動で編集する必要があります。

業務の特定のセグメントが表示されるようにアプリケーションを構築します。このアプリケーションでは、1 つのオブジェクトのパフォーマンスが同じアプリケーション内の他のオブジェクトにどのような影響を及ぼしているのかが示されるため、問題の原因を見つけるのに役立ちます。たとえば、業務用の販売データを処理するすべてのデータベース、Web、およびネットワーク サーバを含むアプリケーションを使用している場合に、そのアプリケーションの健全性が悪化すると、黄色、オレンジ色、または赤色のステータスが表示されます。アプリケーションのサマリ ダッシュボードから、問題の原因になっている、または問題が発生しているサーバを調べることができます。

アプリケーションを確認できる場所

左側のペインで [環境] を選択し、[アプリケーション] タブを選択します。

アップグレード後に、vRealize Operations Manager の前のリリースで定義したアプリケーションが表示されません。

[アプリケーション] のオプション

アプリケーションを選択して編集または削除するか、プラス記号をクリックしてアプリケーションを追加します。

アプリケーション データ グリッドに、各アプリケーションの状態の概要が表示されます。

表 4-118. アプリケーション データ グリッドのオプション

オプション	説明
名前	アプリケーション名を選択すると、そのアプリケーションの概要が表示されます。 名前の右側を選択して、アプリケーションを編集または削除します。
サマリ	アプリケーションの健全性、リスク、および効率の重要度。 赤色、オレンジ色、または黄色の重要度のアプリケーションをクリックすると、アプリケーション内のオブジェクトに関する潜在的な問題についての詳細が表示されます。

ユーザー シナリオ：アプリケーションの追加

オンライン トレーニング システムのシステム管理者は、ご使用の環境の Web 層、アプリケーション層、およびデータベース層のコンポーネントのうち、システムのパフォーマンスに影響を及ぼす可能性のあるものを監視する必要があります。 また、それぞれの層の関連するオブジェクトをグループ化するアプリケーションを構築してください。 いずれかのオブジェクトで問題が発生すると、その問題がアプリケーションの表示に反映されます。 サマリを開くと、問題の原因を詳細に調査できます。

アプリケーションで、トレーニング システムのデータを格納する DB 関連オブジェクトを 1 つの層に追加し、ユーザー インターフェイスを実行する Web 関連オブジェクトを 1 つの層に追加し、トレーニング システムのデータを処理するアプリケーション関連オブジェクトを 1 つの層に追加します。 ネットワーク層は不要な場合があります。 このモデルは、アプリケーションを開発するときに使用します。

手順

- 1 左側のペインで [環境] をクリックします。
- 2 [アプリケーション] タブをクリックし、プラス記号をクリックします。
- 3 [基本的な n 層 Web アプリケーション] をクリックし、[OK] をクリックします。
表示される [アプリケーション管理] ページには、2 つの行があります。 下部の行からオブジェクトを選択し、上部の行の層に追加します。
- 4 [アプリケーション] テキスト ボックスに分かりやすい名前を入力します (**オンライン トレーニング アプリケーション**など)。
- 5 一覧表示された各 Web 層、アプリケーション層、およびデータベース層で [階層のオブジェクト] セクションにオブジェクトを追加します。
 - a 層の名前を選択します。 これは追加する層です。
 - b オブジェクトの行の左側でオブジェクト タグを選択し、そのタグ値を持つオブジェクトを対象にフィルタリングを実行します。 タグ名を 1 回クリックすると、リストからそのタグが選択されます。 タグ名をもう 1 回クリックすると、リストからそのタグが選択解除されます。 複数のタグを選択した場合、表示されるオブジェクトは、選択した値によって異なります。

名前を基準にオブジェクトを検索することもできます。

- c オブジェクトの行の右側で、層に追加するオブジェクトを選択します。
- d オブジェクトを [階層のオブジェクト] セクションにドラッグします。

6 保存 をクリックしてアプリケーションを保存します。

結果

[環境の概要アプリケーション] ページのアプリケーションのリストに新規アプリケーションが表示されます。 いずれかの層のいずれかのコンポーネントで問題が発生した場合は、アプリケーションに黄色または赤色のステータスが表示されます。

次のステップ

問題の原因を調査するには、アプリケーション名をクリックし、[オブジェクト サマリ情報の評価](#)を参照してください。

アプリケーションの追加

環境にアプリケーションを追加する場合、事前定義されたテンプレートのリストから選択するか、独自のカスタム テンプレートを作成し、アプリケーション内でオブジェクトをグループ化して監視します。

[アプリケーションの追加] を確認できる場所

左側のペインの [環境] を選択します。 [アプリケーション] タブで、プラス記号をクリックします。

[アプリケーションの追加] のオプション

事前定義された各テンプレートには、アプリケーション内で特定のタスクを実行する関連オブジェクトをグループ化するのに役立つように作成された推奨階層のリストが用意されています。 オプションを選択したら、[アプリケーション管理] ページで選択内容と階層数を変更できます。

オプション	説明
基本的な n 層 Web アプリケーション	このテンプレートは基本アプリケーションに使用します。
詳細な n 層 Web アプリケーション	このテンプレートは、ネットワーク関連の Management Pack を追加すると vRealize Operations Manager によって検出されるデバイスなど、より物理的なデバイスを監視するアプリケーションに使用します。
レガシー非 Web アプリケーション	このテンプレートは、Web 関連のオブジェクトを使用しないアプリケーションに使用します。
ネットワーク	このテンプレートは、ネットワーク関連のオブジェクトのみを使用するアプリケーションに使用します。
カスタム	このオプションを選択して、独自のアプリケーション トポロジを作成します。

[アプリケーション管理] ダイアログ ボックス

[アプリケーション管理] を使用して、アプリケーションのオブジェクトを選択します。 選択したオブジェクトは階層にグループ化され、アプリケーションの健全性の追跡に役立ちます。

[アプリケーション管理] を確認できる場所

左側のペインの [環境] を選択します。 [アプリケーション] タブで、プラス記号をクリックします。 アプリケーション テンプレートを選択して、OK をクリックします。

[アプリケーション管理] のオプション

画面の上部に新しいアプリケーション名を入力するか、[アプリケーションの追加] ページからデフォルト名を使用します。アプリケーション名は一意である必要があります。

名前の下に、階層の行とオブジェクトの行に分かれたページが表示されます。各行では、左側のペインで選択した内容に従って右側のペインの選択肢が絞り込まれて表示されます。

階層の行では、アプリケーションを監視するためにオブジェクトのデータを取り込む階層を選択します。

表 4-119. 階層の行

オプション	説明
階層ペイン	オブジェクトを置く階層を選択します。適用状況に合わせて階層を追加または削除できます。
[階層のオブジェクト] ペイン	共通機能を提供する監視対象のオブジェクトを追加または削除します。たとえば、アプリケーションのデータベースサーバであるすべての仮想マシンを監視するには、それらをデータベース層に置きます。

オブジェクト行では、階層に追加するオブジェクトを選択します。

表 4-120. オブジェクト行

オプション	説明
[オブジェクト タグ] ペイン	タグを展開表示して、そのタグ値を持つオブジェクトのグループを表示します。[アダプタ タイプ] がオブジェクトタグである場合、タグ値には vCenter アダプタが含まれ、1つのオブジェクトは1つのアダプタ インスタンスです。オブジェクトは表示されません。タグによってオブジェクト ペインがフィルタリングされます。タグ値を選択するには、1回クリックします。タグ値を選択解除するには、2回クリックします。タグ値は、選択解除されるまで選択されたままになります。
オブジェクト ペイン	オブジェクト タグ値を持つオブジェクトをドラッグして、[階層のオブジェクト] ペインに追加します。オブジェクトを見つけるには、名前を検索します。リストされる各オブジェクトには、名前が類似するオブジェクトを見つけるのに役立つ識別子情報が含まれています。[すべてのオブジェクトを親に追加] を使用すると、すべてのオブジェクトが階層に追加されます。

データ表示の構成

ビュー、レポート、ダッシュボード、ウィジェットを使用して、必要な情報に応じて vRealize Operations Manager のコンテンツを構成します。

オブジェクト タイプに基づいてデータを表示するビュー。さまざまなビュー タイプから選択して、異なる観点からデータを確認することができます。ビューは再利用可能なコンポーネントで、レポートやダッシュボードに含めることができます。レポートには、事前定義済みまたはカスタムのビューとダッシュボードを指定した順番で含めることができます。レポートを作成して、環境内のオブジェクトやメトリックを表します。表紙、目次、フッターを追加して、レポートのレイアウトをカスタマイズできます。必要に応じて参照できるよう、レポートを PDF または CSV ファイル形式でエクスポートできます。

ダッシュボードを使用して、仮想インフラストラクチャ内のオブジェクトのパフォーマンスと状態を監視します。ウィジェットは、ダッシュボードの構成要素で、構成済みの属性、リソース、アプリケーション、または環境内の全般的なプロセスに関するデータを表示します。vRealize Operations Manager 表示ウィジェットを使用して、ダッシュボードにビューを組み込むこともできます。

ウィジェット

ウィジェットは、ダッシュボード上のペインです。ダッシュボードにウィジェットを追加して、ダッシュボードを作成します。ウィジェットには、属性、リソース、アプリケーションまたは環境内のプロセス全体に関連する情報が表示されます。

ウィジェットは、特定のニーズを反映するように構成できます。使用可能な構成オプションは、ウィジェットのタイプによって異なります。一部のウィジェットは、データを表示する前に構成する必要があります。多くのウィジェットは、1つ以上のウィジェットにデータを提供したり、そこからデータを取得したりできます。この機能を使用して1つのウィジェットからのデータをフィルタとして設定し、関連する情報を1つのダッシュボードに表示できます。



ウィジェットの構成

(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_configure_widgets_vrom)

ウィジェットの相互作用

ウィジェットの相互作用とは、あるウィジェットから受信側のウィジェットに対して情報が提供される、ダッシュボードのウィジェット間で構成された関係のことです。ダッシュボードでウィジェットを使用する場合、1つのウィジェットでデータを選択し、別のウィジェットでデータの表示を制限すると、小規模なデータのサブセットに焦点を絞ることができます。

相互作用の仕組み

ウィジェット間の相互作用をダッシュボード レベルで構成した場合、提供元のウィジェットで1つ以上のオブジェクトを選択し、受信側のウィジェットで表示されるデータをフィルタリングすることで、オブジェクトに関連するデータに焦点を絞ることができます。

ダッシュボードでウィジェット間の相互作用オプションを使用するには、相互作用をダッシュボード レベルで構成します。相互作用を構成しないと、ウィジェットの一般構成に基づいてデータがウィジェットに表示されます。

ウィジェットの相互作用を構成する場合は、受信側のウィジェットに対して提供元のウィジェットを指定します。一部のウィジェットについては、提供元のウィジェットを2つ定義でき、それぞれを受信側のウィジェットでのデータのフィルタリングに使用できます。

たとえば、オブジェクト リスト ウィジェットをトップ N ウィジェットの提供元のウィジェットとして構成した場合、オブジェクト リスト ウィジェットで1つ以上のオブジェクトを選択して、選択したオブジェクトのデータのみをトップ N ウィジェットに表示できます。

一部のウィジェットについては、提供元のウィジェットを複数定義できます。たとえば、メトリック提供元のウィジェットとオブジェクト提供元のウィジェットからデータを受信するメトリック チャート ウィジェットを構成することができます。この場合、2つの提供元ウィジェットで選択されたすべてのオブジェクトのデータがメトリック チャート ウィジェットに表示されます。

メトリック構成の管理

ウィジェットを表示する一連のカスタム メトリックを作成できます。構成されたメトリックおよび選択されたオブジェクト タイプに基づいてサポートされたウィジェットが表示されるように、特定のアダプタおよびオブジェクト タイプに対してさまざまなメトリックのセットを定義する1つ以上のファイルを構成できます。

メトリック構成の機能

[メトリック構成] ページから、サポートされるウィジェットで一連のメトリックを表示する XML ファイルを作成します。サポートされるウィジェットは、メトリック チャート、プロパティ リスト、ローリング ビュー グラフ、スコアボード、スパークライン グラフ、およびトポロジ グラフです。メトリック構成を使用するには、ウィジェットのセルフ プロバイダを [オフ] に設定し、提供元のウィジェットに対するウィジェットの相互作用を作成する必要があります。

メトリック構成を確認できる場所

メトリック構成を管理するには、左側のペインで [内容] - [メトリック構成の管理] を選択します。

表 4-121. [メトリック構成の管理] のツールバー オプション

オプション	説明
構成の作成	選択したフォルダ内に空の XML ファイルを作成します。
構成の編集	選択した XML ファイルをアクティブ化し、右側のテキスト ボックスで編集できるようにします。
構成の削除	選択した XML ファイルを削除します。
テキスト ボックス	選択した XML ファイルを表示します。XML ファイルを編集するには、XML ファイルを選択し、[編集] をクリックする必要があります。

リソース相互作用 XML ファイルの追加

リソース相互作用ファイルとは、このオプションをサポートするウィジェットに表示するメトリックのカスタム セットのことで、構成されたメトリックおよび選択されたオブジェクト タイプに基づいてサポートされたウィジェットが表示されるように、特定のオブジェクト タイプに対してさまざまなメトリックのセットを定義する 1 つ以上のファイルを構成できます。

次のウィジェットでリソース相互作用モードをサポートしています。

- メトリック チャート
- プロパティ リスト
- ローリング ビュー グラフ
- スコアボード
- スパークライン グラフ
- トポロジ グラフ

XML ファイルで定義したメトリックのセットを表示するメトリック構成を使用するには、ダッシュボードおよびウィジェットの構成が次の基準を満たしている必要があります。

- ダッシュボードの [ウィジェットの相互作用] オプションが、別のウィジェットがターゲット ウィジェットにオブジェクトを提供するように構成されている。たとえば、オブジェクト リスト ウィジェットでは、チャート ウィジェットにオブジェクト相互作用を提供する。
- ウィジェットの [セルフ プロバイダ] オプションが [オフ] に設定されている。

- [メトリック構成] ドロップダウン メニューのカスタムの XML ファイルが `/usr/lib/vmware-vcops/tools/opscli` ディレクトリにあり、インポート コマンドを使用して、グローバル記憶領域にインポートされている。

XML ファイルを追加し、後でそれを修正する場合、変更は有効にならない場合があります。

前提条件

- vRealize Operations Manager に対してインストールされたファイルにアクセスし、ファイルを追加するのに必要な権限があることを確認します。
- 既存の例に基づいて新しいファイルを作成します。例は次の場所にあります。
 - vApp または Linux の場合。XML ファイルは、`/usr/lib/vmware-vcops/tomcat-web-app/webapps/vcops-web-ent/WEB-INF/classes/resources/reskndmetrics` にある。

手順

- 1 メトリックのセットを定義する XML ファイルを作成します。

例：

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" standalone="yes"?>
<AdapterKinds>
  <AdapterKind adapterKindKey="VMWARE">
    <ResourceKind resourceKindKey="HostSystem">
      <Metric attrkey="sys:host/vim/vmvisor/slp|resourceMemOverhead_latest" />
      <Metric attrkey="cpu|capacity_provisioned" />
      <Metric attrkey="mem|host_contention" />
    </ResourceKind>
  </AdapterKind>
</AdapterKinds>
```

この例では、ホスト システムに対して表示されたデータは指定されたメトリックに基づいています。

- 2 vRealize Operations Manager インスタンスのオペレーティング システムに基づいて次のディレクトリのいずれかに XML ファイルを保存します。

オペレーティング システム	ファイルの場所
vApp または Linux	<code>/usr/lib/vmware-vcops/tools/opscli</code>

- 3 インポート コマンドを実行します。

オペレーティング システム	ファイルの場所
vApp または Linux	<code>./ops-cli.py file import reskndmetric YourCustomFilename.xml</code>

ファイルはグローバル記憶領域にインポートされ、サポートされているウィジェットからアクセスできます。

- 4 既存のファイルをアップデートして、ファイルを再インポートする必要がある場合、上記のインポート コマンドに `--force` を追加して実行します。

たとえば、`./vcops-cli.py file import reskndmetric YourCustomFilename.xml --force` など。

次のステップ

XML ファイルがインポートされたことを確認するには、サポートされているウィジェットのいずれかを構成し、その新しいファイルがドロップダウン メニューに表示されることを確認します。

ウィジェット定義リスト

ウィジェットとは、構成済みの属性、リソース、アプリケーション、または環境内の全般的なプロセスに関する情報を含む、ダッシュボード上のペインのことです。ウィジェットは、企業内のすべてのオブジェクトとアプリケーションの健全性の総合的なエンド ツー エンド ビューを提供できます。お使いのユーザー アカウントに必要なアクセス権があれば、ウィジェットをダッシュボードに追加したり、ダッシュボードから削除できます。

表 4-122. ウィジェットの概要

ウィジェット名	説明
アラート リスト	ウィジェットが監視するように構成された、オブジェクトのアラートのリストを表示します。オブジェクトが構成されない場合は、リストには環境内のすべてのアラートが表示されます。
アラート ボリューム	監視用に構成されたオブジェクトに対して生成されたアラートの過去 7 日間のトレンド レポートを表示します。
異常	過去 6 時間の異常数チャートを表示します。
アノマリの内訳	選択したリソースの症状について考えられる根本原因を表示します。
キャパシティ	過去 7 日間の特定のリソースの [容量] 値のチャートを表示します。
キャパシティ使用率	オブジェクトのキャパシティまたはワークロード使用率を表示し、キャパシティやワークロードの問題を特定できるようにします。低使用率、最適使用率、高使用率のオブジェクトを示し、それらが制約されている理由を示します。
コンテナの詳細	選択した単一のコンテナの各階層での健全性およびアラート カウントを表示します。
コンテナ オブジェクト リスト	すべての定義済みリソースとオブジェクト タイプのリストを表示します。
コンテナの概要	1 つまたは複数のコンテナの全体的な健全性および各階層の健全性を表示します。
現在のポリシー	カスタム グループに適用されている優先順位が最高のポリシーを表示します。
データ収集結果	選択されたオブジェクト固有のすべてのサポートされたアクションのリストを表示します。
密度	特定のリソースの過去 7 日間のチャートとして密度の内訳を表示します。
DRS クラスタ設定	利用可能なクラスタおよび関連するホストのワークロードを表示します。
効率	監視用に構成されたオブジェクトの効率に関連するアラートのステータスを表示します。効率は、環境内の生成された効率アラートに基づきます。
環境	オブジェクトごとのリソース数の一覧表示や、オブジェクト タイプによるグループ分けを行います。
環境概要	仮想環境におけるオブジェクトのパフォーマンス ステータスおよびオブジェクトの関係を表示します。オブジェクトをクリックしてその関連オブジェクトを強調表示したり、オブジェクトをダブルクリックしてその [リソース詳細] ページを表示できます。
環境の状態	監視下の環境全体についての統計を表示します。
障害	選択したリソースの使用可能性および構成の問題のリストを表示します。
フォレンジックス	所定の期間でのメトリックにおける特定値の頻発度をすべての値のパーセンテージとして表示します。2 つの期間のパーセンテージを比較することもできます。
GEO	構成で GEO 場所のオブジェクト タグに値が割り当てられている場合は、オブジェクトの場所が世界地図上で示されます。

表 4-122. ウィジェットの概要（続き）

ウィジェット名	説明
健全性	監視用に構成されたオブジェクトの健全性に関連するアラートのステータスを表示します。健全性は、環境内の生成された健全性アラートに基づきます。
健全性チャート	選択したリソースまたは選択したタグを持つすべてのリソースの健全性情報を表示します。
ヒート マップ	選択したリソースのパフォーマンス情報のヒート マップを表示します。
マッシュアップ チャート	リソースに関する断片的な情報を集約します。主要なパフォーマンス インジケータ (KPI) の健全性チャート、異常カウント グラフおよびメトリック グラフを表示します。通常、このウィジェットはコンテナ用に使用します。
メトリック チャート	選択したメトリックに基づいたオブジェクトのワークロードの推移を含むチャートを表示します。
メトリック ピッカー	選択したリソースの使用可能なメトリックのリストを表示します。リソース ID を提供できるウィジェットと共に使用します。
オブジェクト リスト	すべての定義済みリソースのリストを表示します。
オブジェクトの関係	選択されたオブジェクトの階層ツリーを示します。
オブジェクトの関係図（詳細）	選択されたオブジェクトの階層ツリーを示します。詳細構成オプションが提供されます。
プロパティ リスト	選択したオブジェクトのプロパティおよびそれらの値を表示します。
解放可能な容量	コンシューマのある特定のリソースの節約可能なキャパシティの量を示す割合チャートを表示します。
推奨アクション	vCenter Server インスタンスの問題を解決するための推奨事項を表示します。推奨事項に従って、データセンター、クラスタ、ホスト、および仮想マシンに対するアクションを実行できます。
リスク	監視用に構成されたオブジェクトのリスクに関連するアラートのステータスを表示します。リスクは、環境内の生成されたリスク アラートに基づきます。
ローリング ビュー グラフ	定義した間隔で選択したメトリックを介してサイクルし、1 度に 1 つずつのメトリック グラフを表示します。選択したすべてのメトリックについて、展開可能な小さなグラフがウィジェットの下部に表示されます。
スコアボード	選択したメトリックの値（通常 KPI）を定義済みの値範囲を色分けして表示します。
スコアボードの健全性	選択したリソースの色分けされた健全性およびワークロード スコアを表示します。
スパークライン グラフ	オブジェクトのメトリックを含むグラフを表示します。スパークライン グラフ ウィジェット内のすべてのメトリックが、別のウィジェットで提供されるオブジェクトに関するものである場合、そのオブジェクト名がウィジェットの右上に表示されます。
負荷	特定のリソースの過去 6 週間の平均負荷のウェザー マップを表示します。
タグ ピッカー	すべての定義済みリソース タグを一覧表示します。
テキスト表示	Web ページまたはテキスト ファイルからテキストを読み込み、そのテキストをユーザー インターフェイスに表示します。
残り時間	過去 7 日間の特定のリソースの [残り時間] 値のチャートを表示します。
トップ アラート	構成されたアラート タイプおよびオブジェクトに基づいて、環境に悪影響を与える可能性が最も高いアラートを一覧表示します。
トップ N	最高または最低の健全性スコアを示す 5 つのアプリケーションのように、さまざまなカテゴリでの上位または下位 N 個のメトリックまたはリソースを表示します。
トポロジ グラフ	ノード間の複数のリソースのレベルを表示します。
表示	構成されたリソースに応じて、定義されたビューを表示します。

表 4-122. ウィジェットの概要（続き）

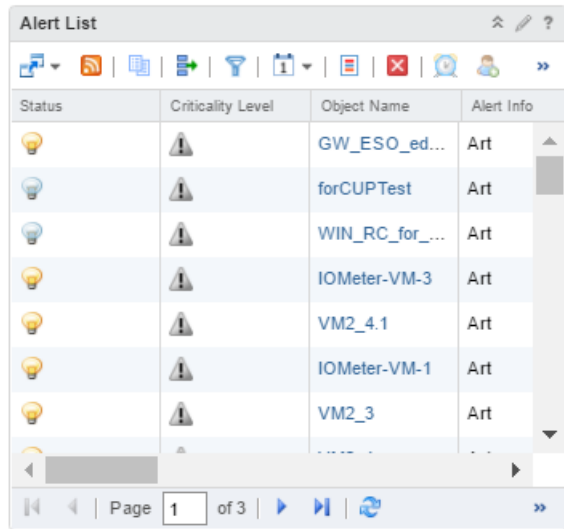
ウィジェット名	説明
ウェザー マップ	複数のリソースについて、選択したメトリックの一定期間の動作を色の变化で表します。
ワークロード	選択したリソースのワークロード情報を表示します。

アラート リスト ウィジェット

アラート リスト ウィジェットは、監視するように構成された、オブジェクトのアラートのリストです。カスタム ダッシュボードに追加するオブジェクトに対して、vRealize Operations Manager 内に 1 つまたは複数のアラート リストを作成できます。このウィジェットでは、環境内のオブジェクトについてのアラートのカスタマイズされたリストが提供されます。

アラート リスト ウィジェットと構成オプションの動作

アラート リスト ウィジェットを 1 つまたは複数のカスタム ダッシュボードに追加し、他のダッシュボード ユーザーにとって重要なデータを表示するように構成できます。ウィジェットには、各ウィジェット インスタンスに構成済みオプションに基づいてデータが表示されます。ダッシュボードにアラート リスト ウィジェットを追加した後、そのアラート リスト ウィジェットを編集します。オプションを変更することで、ダッシュボード ユーザーのニーズに対応するためのカスタム アラート リストを作成します。



アラート リスト ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、左側のペインの [内容] をクリックし、[ダッシュボード] をクリックします。ダッシュボード ツールバーで、プラス記号をクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

アラート リスト ウィジェットと構成オプション

アラート リスト ウィジェットには、ツールバー オプション、データ グリッド オプション、構成オプションが含まれます。

オプション	説明
ダッシュボードのナビゲーション	<p>選択したアラートで実行できるアクション。</p> <p>たとえば、このオプションを使用して vCenter Server、データセンター、仮想マシンを開く、または vSphere Web Client においてアラートが生成されたオブジェクトを直接変更し、問題を修正することができます。</p>
RSS フィード	<p>アラートの RSS フィードを Web ブラウザに送信します。</p> <p>ウィジェット内で構成されたとおり、表示されているアラートのみが含まれます。たとえば、ウィジェットが特定のオブジェクトに関するアラートのみを表示するように設定されている場合は、そのオブジェクトのアラートのみが RSS フィードに含まれます。個々のアラートの詳細なメッセージがフィードのヘッドラインに表示されます。使用している RSS クライアントによっては、アラートに関連するすべての異常の詳細がフィード本文に表示されます。</p>
相互作用のリセット	<p>ウィジェットを最初に構成された状態に戻し、提供ウィジェットで選択された相互作用を取り消します。</p> <p>通常、相互作用は同じダッシュボード内のウィジェット間で発生しますが、別のダッシュボードのウィジェット間で相互作用を構成することもできます。</p>
複数選択の相互作用の実施	<p>ウィジェットが、ダッシュボード上の別のウィジェットへの提供者となっている場合は、複数の行を選択してこのボタンをクリックできます。受け取り側のウィジェットでは、選択した相互作用の項目に関連するデータのみが表示されます。</p> <p>Ctrl キーを押しながらクリック (Windows の場合) するか、Cmd キーを押しながらクリック (Mac OS X の場合) して個別のオブジェクトを複数選択するか、Shift キーを押しながらクリックしてオブジェクトの範囲を選択してからこのアイコンをクリックすると、相互作用が有効になります。</p>
フィルター基準の表示	このウィジェットの基になっているオブジェクト情報が表示されます。
日付範囲の選択	リストに表示されるアラートを、選択した日付範囲に限定します。
アラートの重要度による行の色分け	<p>アラートの重要度に基づいて行全体を色分けします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 赤：重大なアラート。 ■ 黄色：警告アラートまたは中間アラート
アラートのキャンセル	<p>選択したアラートをキャンセルします。アクティブなアラートのみを表示するようにアラート リストが構成されている場合、キャンセルされたアラートはリストから除外されます。</p> <p>対処する必要がないアラートをキャンセルします。アラートをキャンセルしても、そのアラートの生成の基盤となった条件はキャンセルされません。アラートのキャンセルは、トリガーされた障害やイベントの症状によってアラートが生成された場合に有効です。これらの症状は、監視対象オブジェクトでその後の障害またはイベントが発生した場合にのみ再度トリガーされるためです。メトリックまたはプロパティの症状に基づいてアラートが生成される場合、そのアラートは、次の収集および分析サイクルまでしかキャンセルされません。違反値が依然として存在する場合は、アラートが再度生成されます。</p>

オプション	説明
サスペンド	<p>指定された分数の間アラートをサスペンドします。</p> <p>アラートを調査しているとき、作業中にアラートがオブジェクトの健全性、リスク、または効率に影響しないようにアラートをサスペンドします。経過時間後に問題が解決されない場合、アラートが再アクティブ化され、再びオブジェクトの健全性、リスク、または効率に影響を与えます。</p> <p>アラートをサスペンドしたユーザーは所有者として割り当てられます。</p>
所有権の取得	<p>現在のユーザーとして、自分自身をアラートの所有者にします。</p> <p>アラートの所有権を獲得できるだけで、所有権を割り当てることはできません。</p>
所有権の解放	アラートのすべての所有権が解放されます。
フィルタ	ウィジェットのデータを特定します。

データ グリッドでは、並べ替えおよび検索できる情報が提供されます。

表 4-123. アラート リスト ウィジェットのデータ グリッド

オプション	説明
ステータス	<p>アラートの現在の状態。</p> <p>値には、[有効] または [キャンセル済み] があります。</p>
重要度レベル	<p>環境内でのアラートの重要度レベルを示します。アラートの重要度は、重要度アイコンの上にマウスを置いたときにツールチップに表示されます。</p> <p>このレベルは、アラート定義の作成時に割り当てられたレベルに基づきます。割り当てられたレベルが [シムptom ベース] の場合は、症状の最高の重要度に基づきます。</p>
オブジェクト名	アラートが生成されたオブジェクトの名前。
アラート情報	アラートを生成したアラートの定義名。
アラートの影響	<p>アラートが生成されたアラート バッジ。</p> <p>取り得る値は、[健全性]、[リスク]、または [効率] のいずれかです。</p>
オブジェクト タイプ	アラートが生成されたオブジェクトのオブジェクト タイプ。
タイプ	<p>アラート タイプは、アラート定義を作成する際に割り当てられます。これは、アラートを分類し、適切なドメイン管理者に解決のためのルートを指定できます。</p> <p>次の値があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アプリケーション ■ 仮想化またはハイパーバイザー ■ ハードウェア (OSI) ■ ストレージ ■ ネットワーク

表 4-123. アラート リスト ウィジェットのデータ グリッド（続き）

オプション	説明
サブタイプ	<p>アラート サブタイプは、アラート定義を作成する際に割り当てられます。これは、アラートを分類し、適切なドメイン管理者に解決のためのルートを指定できます。</p> <p>次の値があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 可用性 ■ パフォーマンス ■ キャパシティ ■ コンプライアンス ■ 構成
所要時間	アラートの現在の経過時間。
開始時間	アラートが生成された日時。
更新時間	<p>アラートが最後に変更された日時。</p> <p>アラートは、次のいずれかの変更が発生するたびに更新されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アラート定義に含まれる別の症状が発生した場合。 ■ アラートを引き起こす原因となった症状のトリガーがキャンセルされた場合。
キャンセル時間	<p>アラートが次のいずれかの理由でキャンセルされた日時。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アラートを起動した症状がアクティブでなくなった場合。アラートはシステムによってキャンセルされます。 ■ オブジェクトに適用されるポリシーで該当する症状の定義が無効になっているためにアラートを起動した症状がキャンセルされた場合。 ■ 該当する症状の定義が削除されたためにアラートを起動した症状がキャンセルされた場合。 ■ オブジェクトに適用されるポリシーでこのアラートのアラート定義が無効になっている場合。 ■ アラート定義が削除された場合。 ■ ユーザーがアラートをキャンセルした場合。
制御状態	<p>ユーザーのアラートとの相互作用の状態です。</p> <p>値には、次の種類があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オープン。アラートはアクションに使用できます。 ■ 割り当て済み。アラートはアクション用にユーザーに割り当てられます。 ■ サスペンド中。アラートは指定された時間中サスペンドされました。
ユーザー名	アラートを所有するユーザーの名前。

アラート リスト ウィジェットには、構成オプションが含まれます。

表 4-124. アラート リスト ウィジェットの構成オプション

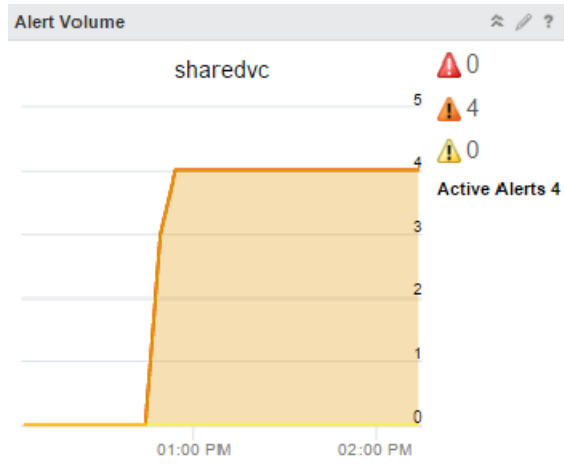
オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト このテキスト ボックスは、オブジェクト リストで選択したオブジェクトによって自動で入力されます。
オブジェクト リスト	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。 リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。
タグ ピッカー	定義されたオブジェクト タグ（デフォルト タグとカスタム タグの両方）のリストから、1 つあるいは複数のオブジェクト タグ値を選択できます。 選択したタグ値が適用されるオブジェクトが、ウィジェット データの基準となります。 同じタグに複数の値を選択すると、それらのタグのどれかが適用されるオブジェクトがウィジェットによって含められます。 タグ ピッカーを使用してデータを特定する場合は、[選択したオブジェクト] テキスト ボックスは空のままになります。
フィルタ基準	このアラート リストに表示されるアラートを、選択した基準を満たすものに限定します。 以下のフィルタを構成できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ タイプ：タイプ リストでサブタイプを選択します。この値は、アラート定義を構成したときに割り当てられたものです。 ■ ステータス：リストに含めるアラート状態を 1 つまたは複数選択します。 ■ ユーザー制御状態：リストに含める制御状態を 1 つまたは複数選択します。 ■ 重要度レベルの範囲：重要度のレベルを 1 つまたは複数選択します。 ■ アラートの影響：リストに含めるアラート バッジを 1 つまたは複数選択します。 ■ 時間の範囲：一般的な日付範囲を選択するか、特定の日付範囲を構成します。

[アラート ポリウム] ウィジェット

[アラート ポリウム] ウィジェットは、vRealize Operations Manager で監視するように構成されたオブジェクトについて生成されたアラートの最近 7 日間のトレンド レポートです。ダッシュボードに追加するオブジェクトの [アラート ポリウム] ウィジェットを 1 つ以上作成できます。[アラート ポリウム] ウィジェットでは、アラート ポリウムでの変更を特定できる、オブジェクトについてのカスタマイズされたトレンド レポートが提供され、環境内の問題が示されます。

アラート ボリューム ウィジェットと構成オプションの動作

[アラート ボリューム] ウィジェットを 1 つ以上のカスタム ダッシュボードに追加し、他のダッシュボード ユーザーにとって重要なデータを表示するように構成できます。ウィジェットには、各ウィジェット インスタンスに構成済みオプションに基づいてデータが表示されます。オプションを変更することで、ダッシュボード ユーザーのニーズに対応するためのカスタム ウィジェットを作成できます。



アラート ボリューム ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、左側のペインの [内容] をクリックし、[ダッシュボード] をクリックします。ダッシュボード ツールバーで、プラス記号をクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

表 4-125.

オプション	説明
傾向チャート	構成されたオブジェクトに対する重大、緊急、警告の症状のボリューム。
重要度別の症状	各重要度レベルでの症状の数。
アクティブ アラート	アクティブ アラートの数。アラートには 1 つまたは複数のトリガされた症状を含めることができます。

表 4-126.

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。

表 4-126. (続き)

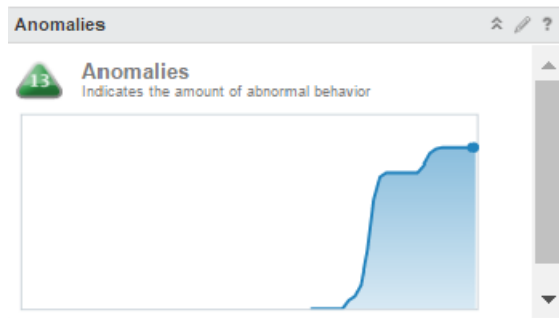
オプション	説明
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	<p>ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
選択したオブジェクト	<p>ウィジェット データの基準となるオブジェクト</p> <p>このテキスト ボックスは、オブジェクト リストで選択したオブジェクトによって自動で入力されます。</p>
オブジェクト リスト	<p>環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。</p> <p>リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。</p>

異常ウィジェット

アノマリ ウィジェットには、設定した時間間隔で過去 6 時間のリソースのアノマリが表示されます。

アノマリ ウィジェットでは、メトリックが構成済みしきい値に違反した期間の表示 / 非表示を切り替えることができます。ウィジェットの色は、違反の重要度を示します。

[アノマリ スコア バッジ] をクリックしてアノマリ分析ビューに移動し、アノマリの詳細を確認します。



アノマリ ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ウィジェットに表示されるデータは、その構成方法によって決まります。ウィジェットを構成するには、タイトル バーの [編集] アイコンをクリックして設定を構成します。


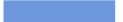
表 4-127.

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	<ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト
オブジェクト リスト	<p>環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。</p> <p>環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。</p> <p>リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。</p>

アノマリの内訳ウィジェット

アノマリの内訳ウィジェットでは、選択したシステムの症状の考えられる根本原因を表示します。

アノマリの内訳ウィジェットと構成オプションの動作

Anomaly Breakdown Test		
		
Anomaly Strength	Object Name	ID
	Container	483b4f20-...

アノマリの内訳ウィジェットを 1 つ以上のカスタムダッシュボードに追加して、ダッシュボードユーザーに重要なデータを表示するように設定できます。

アノマリの内訳ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ウィジェットに表示されるデータは、その構成方法によって決まります。ウィジェットを構成するには、タイトル バーの [編集] アイコンをクリックして設定を構成します。

表 4-128. アノマリの内訳ウィジェットのオプション

オプション	説明
スコア	バッジ アノマリ値
ボリューム	選択されたオブジェクトの指定された時間範囲内の vRealize Operations Manager フルセット メトリック数。
アノマリ メトリック リスト	指定された時間範囲内で選択されたオブジェクトのアラームのリスト。

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーにある[編集]アイコンをクリックします。ダッシュボードの作成および構成の詳細については、[ダッシュボードの作成と構成](#)を参照してください。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
モード	単一または複数のオブジェクトを表示します。
表示	複数モードのときに表示するオブジェクトの数を選択します。
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト このテキスト ボックスは、オブジェクト リストで選択したオブジェクトによって自動で入力されます。
オブジェクト リスト	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。

残りキャパシティ ウィジェット

残りキャパシティ ウィジェットには、総コンシューマ キャパシティに対する残りのコンピューティング リソースの割合を示すスコアが表示されます。

残りキャパシティ ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ウィジェットに表示されるデータは、その構成方法によって決まります。ウィジェットを構成するには、タイトル バーの [編集] アイコンをクリックして設定を構成します。

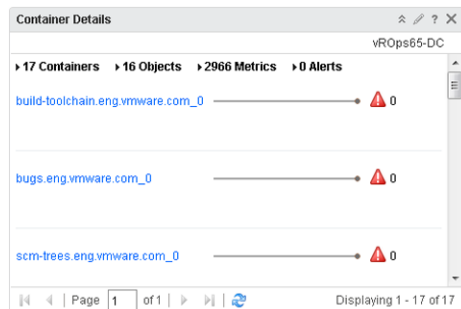
残りキャパシティ ウィジェットの構成オプション

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト
オブジェクト リスト	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。 リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。

コンテナの詳細ウィジェット

コンテナの詳細ウィジェットには、インベントリ内のオブジェクトの子オブジェクト、メトリック、およびアラートの概要を示すグラフが表示されます。



コンテナの詳細ウィジェットと構成オプションの仕組み

コンテナの詳細ウィジェットでは、インベントリのオブジェクトを、コンテナやオブジェクトとして処理します。コンテナは、他のオブジェクトを含むオブジェクトです。ウィジェットにはコンテナが一覧表示され、表示されているオブジェクトのコンテナ、オブジェクト、メトリック、およびアラートの数が表示されます。ウィジェットには、各コンテナのアラートと、その子オブジェクトへのアイコン リンクも表示されます。たとえば、2 台の仮想マシンと 1 つのデータストアなど、3 つのオブジェクトを含んでいるホストをインベントリから選択すると、コンテナの詳細ウィジェットにサマリ情報が表示され、3 つのコンテナ、2 台の仮想マシンの子オブジェクトである 2 つのオブジェクト、ホストに関するアラートの数、およびホストの子オブジェクトに関するメトリックの数が表示されます。また、

ウィジェットには 3 つの各コンテナがオブジェクトごとのアラート数とともに一覧表示されます。グラフ内のオブジェクトをクリックすると、オブジェクトの詳細ページに移動します。オブジェクトの横にあるアイコンをポイントすると、関連するリソース名とその健全性がツールチップに表示されます。たとえば、仮想マシンの横にあるアイコンをポイントすると、関連するデータストアとその健全性がツールチップに表示されます。アイコンをクリックすると関連オブジェクト（この例ではデータストア）のオブジェクト詳細ページに移動します。

コンテナの詳細ウィジェットは、ダッシュボードに追加してから編集します。ウィジェットを構成して、ダッシュボード内の別のウィジェットから情報を取得し、それを分析できます。[セルフ プロバイダ] オプションから [オフ] を選択し、ダッシュボードの編集中に [ウィジェットの相互作用] メニューでソースとレシーバのウィジェットを設定すると、レシーバ ウィジェットにソース ウィジェットから選択したオブジェクトに関する情報が表示されます。たとえば、コンテナの詳細ウィジェットを構成して、同じダッシュボード内のオブジェクト関係ウィジェットから選択したオブジェクトに関する情報を表示できます。

コンテナの詳細ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

コンテナの詳細ウィジェットの構成オプション

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
モード	[縮小] または [拡大] ボタンを使用して、グラフのサイズを変更できます。
オブジェクト ツリー	オブジェクト データ グリッドのオブジェクトのリストをフィルタリングできます。1 つ以上のオブジェクト タイプを選択できます。また、このタイプのすべてのオブジェクトがデータ グリッドに表示されます。たとえば、インベントリ内の仮想マシンおよび vCenter Server に関する情報を確認するには、オブジェクト ツリーから [すべて折りたたむ] をクリックし、[仮想マシン] と [vCenter Server] を選択します。これにより、データ グリッドにインベントリ内の仮想マシンと vCenter Server オブジェクトのみが表示されます。

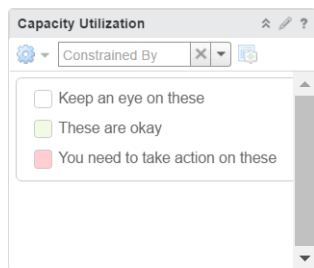
オプション	説明
オブジェクト データ グリッド	<p>環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。</p> <p>リストからオブジェクトを選択すると、選択したオブジェクト ペインにそのオブジェクトが表示されます。</p> <p>注： インベントリから 1 つのオブジェクトのみが表示されるように選択できます。</p>
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト

キャパシティ使用率ウィジェット

キャパシティ使用率ウィジェットには、環境内のオブジェクトで使用されるキャパシティとワークロードのリソースのビジュアル サマリが表示されます。

キャパシティ使用率ウィジェットと構成オプションの動作

キャパシティ使用率ウィジェットを使用して、低使用率、高使用率、最適なキャパシティ レベルで動作中のオブジェクトを識別します。



キャパシティ使用率ウィジェットは、ワークロード使用率という名前のダッシュボード（vRealize Operations Manager に付属します）に、現在のオブジェクト使用率という名前が表示されます。

オブジェクトをポイントすると、vRealize Operations Manager にポップアップ サマリが表示され、オブジェクト名、そのオブジェクトで使用されるキャパシティ、そのオブジェクトでキャパシティ リソースが制約されている理由が表示されます。問題をトラブルシューティングできるように、オブジェクト上のキャパシティに関する分析の詳細を表示するには、[詳細] をクリックします。デフォルトでは、オブジェクトは制約が最も厳しいメトリックによって制約を受けます。

たとえば、ディスク容量の制約があるために、クラスタのキャパシティが 100% を超えている場合、[詳細] をクリックすると、[分析] - [残りキャパシティ] タブが表示され、クラスタの残りキャパシティを分析できます。このタブでは、オブジェクトで消費中のメモリまたはディスク容量が原因で高使用率の問題が発生しているかどうかを判断できます。

複数のオブジェクトが影響を受けている場合、使用率サマリのオブジェクト アイコンにオブジェクトの数が表示されます。オブジェクトの数は使用率レベルの横に表示されます。

たとえば、ホスト オブジェクト アイコンに 12 と表示された場合、環境内の高使用率のホストの数を示します。影響を受けているホストを個別に表示するには、ホスト オブジェクト アイコンをポイントします。ホスト マシンのリストが表示され、個々のホスト名とリンク、各ホストで使用されているキャパシティの割合、キャパシティが制約されている理由などが表示されます。各ホストのキャパシティの詳細をさらに分析するには、ホスト リンクをクリックすると、[分析] - [残りキャパシティ] タブが表示され、問題をトラブルシューティングできます。

多数のオブジェクトが影響を受けている場合、使用率サマリのグラフのオブジェクトの数に反映されます。オブジェクトの数は使用率ラベルの横に表示されます。

キャパシティ使用率ウィジェットを使用して、すべてのオブジェクトが可能な限り最適に近い状態にすることができ、ます。メトリック計算では、オブジェクトが最適な使用量から離れているマージンを示す値が表示されます。この解決は、オブジェクト タイプによって異なります。コンシューマ オブジェクト（仮想マシンなど）の場合は通常、最適になるようにオブジェクトのサイズを適正化することが解決になります。プロバイダ オブジェクト（クラスタなど）の場合は、環境内のストレスを削減するために、キャパシティの追加または既存のワークロードの移動のどちらが必要かを判断できます。

キャパシティ使用率ウィジェットを 1 つ以上のカスタム ダッシュボードに追加し、それをダッシュボード ユーザーにとって重要なデータを表示するように構成することができます。

キャパシティ使用率ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

キャパシティ使用率の構成オプションは、キャパシティ使用率ウィジェットの [編集] をクリックすると表示されます。ワークロード使用率ダッシュボードは vRealize Operations Manager に付属しており、現在のオブジェクト使用率という名前のキャパシティ使用率ウィジェットが表示されます。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、左側のペインの [内容] をクリックし、[ダッシュボード] をクリックします。ダッシュボード ツールバーで、プラス記号をクリックしてダッシュボードを追加するか、鉛筆をクリックして選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの鉛筆をクリックして、構成オプションにアクセスします。

キャパシティ使用率ウィジェットと構成オプション

キャパシティ使用率ウィジェットには、ツールバー オプションと構成オプションがあります。

オプション	説明
操作	<p>特定のオブジェクトに対して使用できるオプションを表示します。たとえば、ホスト オブジェクト アイコンを選択した場合、[アクション] アイコンが有効になり、実行可能なすべてのアクションが表示されます。こうしたオプションには、[仮想マシンのパワーオフ]、[仮想マシンのパワーオン] などがあります。表示されるアクションは、選択したオブジェクトのタイプによって異なります。</p> <p>選択したオブジェクトに対してアクションを使用できない場合、ボタンは淡色表示されます。</p>
制約条件	<p>選択したメトリックに基づいてチャート内のオブジェクトを並べ替えます。たとえば、[CPU デマンド] を選択した場合、CPU デマンドによって制約されるすべてのオブジェクトがチャートに表示されます。</p> <p>[CPU]、[CPU デマンド]、[メモリ]、[使用メモリ]、[vSphere 構成制限] などのオプションに基づいてチャートを並べ替えることができます。</p>
オブジェクトを初期設定に戻す	チャートの元のビューを表示します。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
表示	キャパシティ使用率ウィジェットに、環境内のオブジェクトの残りキャパシティまたはワークロード バランスが表示されるかどうかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 残りキャパシティ。オブジェクトで使用するキャパシティ リソースのビジュアル サマリを表示し、オブジェクトが制約されている理由を示します。 ■ ワークロード バランス。オブジェクトで使用するワークロード リソースのビジュアル サマリを表示し、オブジェクトが制約されている理由を示します。
オブジェクトの選択	ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できる、インベントリ エクスプローラです。
オブジェクト タイプ	チャートに表示する特定のオブジェクト タイプを選択します。複数のオブジェクト タイプを選択するには、Ctrl キーを押しながらクリックします。オブジェクト タイプを選択解除されたままにすると、チャートにはベース オブジェクトの子がすべて表示されます。

コンテナの概要ウィジェット

コンテナの概要ウィジェットには、オブジェクトの健全性、リスク、および効率のグラフと、環境内にあるオブジェクトのリストが表示されます。

Name	Health	Risk	Efficiency
Entire Enterprise Applications	Green	Green	Green
Universe	Green	Green	Green
10.162.51.197	Green	Green	Green
vRealizeOpsMgrAPI (vRealiz...	Green	Green	Green
vRealize Operations Manage...	Green	Green	Green
build-apps.eng.vmware.com_0	Green	Green	Green
vROps65-DC	Green	Green	Green
10.192.65.195	Green	Green	Green
build-storage61.eng.vmware...	Green	Green	Green
bugs.eng.vmware.com_0	Green	Green	Green

Page 1 of 2 | Displaying 1 - 50 of 53

コンテナの概要ウィジェットの仕組み

コンテナの概要ウィジェットには、オブジェクトまたはオブジェクトのリストの、現在および以前の健全性のステータス、リスク、および効率が表示されます。ウィジェットの構成で [オブジェクト] モードを選択して、関心のある 1 つ以上のオブジェクトに関する情報が表示されるようにウィジェットを構成できます。ウィジェットの構成で [オブジェクト タイプ] モードを選択すると、1 つ以上のオブジェクト タイプのすべてのオブジェクトに関する情報がウィジェットに表示されます。オブジェクトをクリックすると、データ グリッド内にある各オブジェクトのオブジェクト詳細ページを開くことができます。

コンテナの概要ウィジェットは、ダッシュボードに追加してから編集します。[オブジェクト] または [オブジェクト タイプ] モードを使用することで、1 つのオブジェクトに関する情報を表示するように、または特定のオブジェクト タイプのすべてのオブジェクトに関する情報を表示するようにウィジェットを構成できます。構成オプションは選択するモードに応じて変わります。

コンテナの概要ウィジェットを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

コンテナの概要ウィジェットのツールバーのオプション

コンテナの概要ウィジェットの上部のツールバーには、他のウィジェットまたはダッシュボードに関する詳細情報の確認に使用できるアイコンが表示されます。

オプション	説明
複数選択の相互作用の実施	<p>ウィジェットが、ダッシュボード上の別のウィジェットへの提供者となっている場合は、複数の行を選択してこのボタンをクリックできます。受け取り側のウィジェットでは、選択した相互作用の項目に関連するデータのみが表示されます。</p> <p>Ctrl キーを押しながらクリック (Windows の場合) するか、Cmd キーを押しながらクリック (Mac OS X の場合) して個別のオブジェクトを複数選択するか、Shift キーを押しながらクリックしてオブジェクトの範囲を選択してからこのアイコンをクリックすると、相互作用が有効になります。</p>
フィルタ	データ グリッド内のオブジェクトをフィルタリングできます。
ダッシュボードのナビゲーション	<p>別のダッシュボードから情報を探索できます。</p> <p>注： このツールバー アイコンは、別のダッシュボードのウィジェットと相互作用するようにウィジェットを構成するときに使用します。ダッシュボードの構成で [ダッシュボードのナビゲーション] メニューを使用して、相互作用するようにウィジェットを構成します。</p> <p>オブジェクト データ グリッドからオブジェクトを選択し、ツールバー アイコンをクリックすると、関連するダッシュボードが表示されます。たとえば、別のダッシュボード (たとえば [ダッシュボード 1]) にあるトポロジ グラフ ウィジェットに情報が送信されるようにウィジェットを構成できます。データ グリッドから仮想マシンを選択し、[複数選択の相互作用の実施] をクリックしてから [ダッシュボードのナビゲーション] をクリックし、[移動] - [ダッシュボード 1] を選択します。これで、[ダッシュボード 1] に移動し、選択した仮想マシンとそれに関連するオブジェクトを表示できます。</p>

データ グリッドに表示される情報は、並べ替えたりフィルタリングできます。

オプション	説明
名前	オブジェクトの名前
健全性	<p>健全性パラメータに関する情報が表示されます。</p> <p>オブジェクトの現在の健全性ステータスのバッジが表示されます。バッジをポイントすると、ツール チップに表示されるステータスを確認できます。</p> <p>[過去 24 時間] には、過去 24 時間の健全性パラメータの統計が表示されます。</p>
リスク	<p>リスク パラメータに関する情報が表示されます。</p> <p>オブジェクトの現在のリスク ステータスのバッジが表示されます。バッジをポイントすると、ツール チップに表示されるステータスを確認できます。</p> <p>[過去 1 週間] には、過去 1 週間の健全性パラメータの統計が表示されます。</p>
効率	<p>効率パラメータに関する情報が表示されます。</p> <p>オブジェクトの現在の効率ステータスのバッジが表示されます。バッジをポイントすると、ツール チップに表示されるステータスを確認できます。</p> <p>[過去 1 週間] には、過去 1 週間の効率パラメータの統計が表示されます。</p>

コンテナの概要ウィジェットの構成オプション

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
モード	<p>環境内の 1 つのオブジェクトを選択して表示するには [オブジェクト] を使用します。</p> <p>表示するオブジェクトのタイプを選択するには [オブジェクト タイプ] を使用します。</p>
内容の更新	<p>このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。</p> <p>無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。</p>
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
オブジェクト ツリー	<p>[モード] オプションから [オブジェクト] を選択すると、オブジェクト ツリーが表示されます。オブジェクト データ グリッドのオブジェクトのリストをフィルタリングできます。1 つ以上のオブジェクト タイプを選択できます。また、そのタイプのすべてのオブジェクトがデータ グリッドに表示されます。たとえば、インベントリ内の仮想マシンおよび vCenter Server に関する情報を表示するには、[すべて折りたたむ] をクリックし、オブジェクト ツリーの [オブジェクト タイプ] を展開して、[仮想マシン] と [vCenter Server] を選択します。これにより、データ グリッドにインベントリ内の仮想マシンと vCenter Server オブジェクトのみが表示されます。[すべて選択解除] をクリックすると、アダプタ タイプを選択解除できます。</p>

オプション	説明
オブジェクト データ グリッド	<p>注： [モード] オプションから [オブジェクト] を選択すると、オブジェクト データ グリッドが表示されます。</p> <p>環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。</p> <p>リストのオブジェクトをクリックすると、[選択したオブジェクト] ペインにそのオブジェクトが表示されます。リスト内のオブジェクトにマークを付け、[複数選択の相互作用の実施] ツールバー アイコンをクリックすると、データ グリッドから複数のオブジェクトを選択できます。1 つまたは複数のオブジェクトを選択解除するには、[選択のクリア] ツールバー アイコンをクリックします。</p>
選択したオブジェクト	<p>モード オプションから [オブジェクト] を選択すると、[選択したオブジェクト] ペインが表示されます。</p> <p>ウィジェット データの基準となるオブジェクト</p> <p>オブジェクト データ グリッドから最初にオブジェクトを選択するときに、オブジェクトを追加できます。オブジェクトを選択するときに、[オブジェクトの削除] ツールバー アイコンをクリックすると、リストからオブジェクトを削除できます。</p>
選択したオブジェクト タイプ	<p>[モード] オプションから [オブジェクト タイプ] を選択すると、[選択したオブジェクト タイプ] が表示されます。このオプションを選択すると、表示するオブジェクトのタイプが表示されます。</p>
オブジェクト タイプ リスト	<p>[モード] オプションから [オブジェクト タイプ] を選択すると、選択したオブジェクト タイプが表示されます。デフォルトで、このリストには環境で使用可能なすべてのオブジェクト タイプが表示されます。リスト内のタイプをクリックして、タイプを選択できます。[アダプタ タイプ] ドロップダウン メニュー、または Filter テキスト ボックスを使用してタイプを選択することで、リストのタイプをフィルタリングできます。ドロップダウン メニューのプラス記号をクリックすると、フィルタを削除できます。</p>

現在のポリシー ウィジェット

現在のポリシー ウィジェットには、オブジェクトまたはオブジェクトのグループに割り当てられたアクティブな運用ポリシーが表示されます。vRealize Operations Manager では、割り当て済みポリシーを使用してオブジェクトを分析し、それらのオブジェクトから収集されたデータを制御し、問題が発生した際にはアラートを生成して、結果をダッシュボードに表示します。

現在のポリシー ウィジェットと構成オプションの動作

どの運用ポリシーがオブジェクトまたはオブジェクトのグループに適用されているかを容易に見ることができるように、ダッシュボードに現在のポリシー ウィジェットを追加します。ウィジェットをダッシュボードに追加するには、ユーザー アカウントに割り当てられたロールに関連付けられているアクセス権限が必要です。ダッシュボードの [オブジェクト リスト] でオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトに関連付けられたポリシーがウィジェットにより表示されます。

現在のポリシー ウィジェットをダッシュボードに追加した後、ウィジェット ツールバーの鉛筆をクリックして、ウィジェットを編集し、ウィジェットに表示する情報を編集します。編集時にウィジェット内のオブジェクトを選択するかどうかにかかわらず、セルフ プロバイダ設定も含め、ウィジェットに変更を加えることで、オブジェクトまたはオブジェクト グループに割り当てられている現在のポリシーを特定するために使用できるダッシュボードでウィジェットのカスタム インスタンスが作成されます。

現在のポリシー ウィジェットと構成オプションが存在する場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

現在のポリシー ウィジェットには、ウィジェットの折りたたみ、編集、ヘルプの取得、および終了のツールバー オプションがあります。現在のポリシー ウィジェットをダッシュボードに追加するには、ダッシュボードを作成または編集し、ウィジェット リストでウィジェットをクリックし、それをダッシュボード ワークスペースにドラッグします。ダッシュボードにウィジェットを追加した後、ウィジェットを構成します。

現在のポリシー ウィジェットが構成された状態で、ダッシュボード上で (オブジェクト リスト ウィジェット内など) オブジェクトを選択した場合、オブジェクトに適用されたポリシーが、ポリシーの詳細への組み込みリンクとともに現在のポリシー ウィジェット内に表示されます。適用されたポリシーの継承された設定およびローカル設定を表示するには、このリンクをクリックします。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

現在のポリシー ウィジェットでは、ウィジェットがセルフ プロバイダになるように設定するか、ウィジェットの相互作用を設定して、ウィジェットがオブジェクトに適用されているポリシーを示すために必要なデータを受け取るようにする必要があります。

- 現在のポリシー ウィジェットをセルフ プロバイダとして設定するには、ウィジェット構成を編集して、[セルフ プロバイダ] を選択します。
- オブジェクト リスト ウィジェットのようなオブジェクトを持つには、ダッシュボードを作成または編集するときに、ダッシュボード上で現在のポリシー ウィザードにデータを提供し、[ウィジェットの相互作用] をクリックし、ワークスペースでオブジェクトを選択して、現在のポリシー ウィザードにデータを提供します。

[ウィジェットの相互作用](#)を参照してください。

現在のポリシー ウィジェットの構成とデータ グリッド オプション

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .

オプション	説明
セルフ プロバイダ	<p>ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。 <p>たとえば、オブジェクト リスト ウィジェットで選択する各オブジェクトに適用されるポリシーを表示するには、セルフ プロバイダで [Off] を選択します。</p>
選択したオブジェクト	<p>ウィジェット データの基準となるオブジェクト</p> <p>このテキスト ボックスは、オブジェクト リストで選択したオブジェクトによって自動で入力されます。</p>
ページあたり	各ページに表示するオブジェクトの数。
検索	ウィジェットのデータを特定します。
ポリシー	オブジェクトまたはオブジェクト グループに適用される運用ポリシー。
名前	オブジェクトまたはオブジェクト グループ名
説明	オブジェクトまたはオブジェクト グループの説明
アダプタ タイプ	オブジェクトが適用されるアダプタ。
オブジェクト タイプ	オブジェクト タイプまたはオブジェクト グループ タイプ。
ポリシー	オブジェクトまたはオブジェクト グループに適用されるポリシーの名前。
作成時間	ポリシーが作成された日時。
メンテナンス スケジュール	ポリシーに定義されている場合、メンテナンス タスクを実行する日時。メンテナンス時間中、vRealize Operations Manager ではメトリックの収集および分析の計算が行われません。
識別子 1 ～ 5	<p>各オブジェクトの一意の識別子。これらの識別子はオブジェクト間の関係を示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 識別子 1。オブジェクト名。これは名前と同じで、フル ドメイン名を含むことができます。 ■ 識別子 2。仮想マシン、データセンター、ホストなどのオブジェクトごとのオブジェクト識別子またはオブジェクト グループ識別子。タイプと数が含まれます。 ■ 識別子 3。特定のオブジェクト識別子、または長い識別子。 ■ 識別子 4。長い識別子。 ■ 識別子 5。オブジェクトの IP アドレス。
オブジェクト フラグ	オブジェクトの状態を示します。例：正常。
収集状態	vRealize Operations Manager のオブジェクトからのデータ収集の状態を示します。
収集ステータス	収集のステータスを示します。

データ収集結果ウィジェット

データ収集結果ウィジェットは、選択されたオブジェクトに固有のサポートされているアクションがすべて示されたリストを表示します。このウィジェットは、選択されたオブジェクト アクションに固有のデータを取得し、アクション フレームワークを使用してデータ収集アクションを実行します。

データ収集結果ウィジェットの動作

データ収集結果ウィジェットは、1 つまたは複数のカスタム ダッシュボードに追加でき、さまざまなダッシュボード ユーザーにとって重要なデータを表示するように構成できます。ウィジェットには、各ウィジェット インスタンスに構成済みオプションに基づいてデータが表示されます。

データ収集結果ウィジェットは、リソース ID またはメトリック ID のレシーバです。このウィジェットは、オブジェクト リストやメトリック ピッカーなどのウィジェットを提供するあらゆるリソース ID またはメトリック ID と対話できます。このウィジェットを使用するには、以下のアイテムが含まれた環境が存在している必要があります。

- vCenter Adapter インスタンス
- vRealize Operations Manager for Horizon View Adapter
- vRealize Operations Manager for Horizon View Connection Server

データ収集結果ウィジェットは、ダッシュボードに追加してから編集します。オプションを変更することで、ダッシュボード ユーザーのニーズに対応するためのカスタム ウィジェットを作成できます。

データ収集結果ウィジェットが存在する場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

データ収集結果ウィジェットの構成オプション

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
結果	選択されたオブジェクトの完了済みアクションと現在実行中のアクションをすべて表示します。
アクションの選択	選択されたオブジェクトに固有のサポートされているアクションがすべて示されたリストを表示します。選択されたオブジェクトはウィジェットの相互作用の結果です。

表 4-129. データ収集結果ウィジェットの構成オプション

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合、ウィジェットはダッシュボードを開いたときのみ更新を行います。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。.
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。

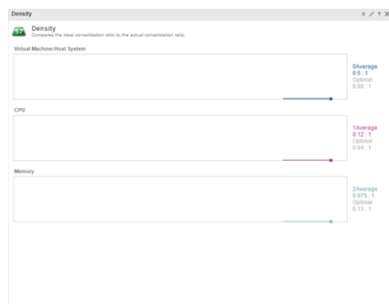
表 4-129. データ収集結果ウィジェットの構成オプション（続き）

オプション	説明
[構成] タブ	セルフ プロバイダとリソース インスタンスの選択を指定します。
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト このテキスト ボックスは、オブジェクト リストで選択したオブジェクトによって自動で入力されます。
相互作用の変更での新しいデータ収集の開始	ソース ウィジェットでオブジェクト選択が変化するとき新しいデータ収集アクションを開始するかどうかを示します。
オブジェクト	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。 リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。 リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。
ページあたり	各ページに表示するオブジェクトの数。
フィルタ	ウィジェットのデータを特定します。
[デフォルト] タブ	オブジェクト タイプごとに選択されるデフォルトのデータ収集アクションを指定します。
オブジェクト タイプ	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。 リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。 リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。
デフォルトのデータ収集アクション	このパネルは、オブジェクト タイプ リストで選択したオブジェクトによって自動で入力されます。 各オブジェクト タイプにはデフォルトのデータ収集アクションを 1 つだけ選択できます。

密度ウィジェット

統合度ウィジェットでは、特定のリソースの過去 7 日間の統合度内訳がチャートで表示されます。

統合度ウィジェットは、特定の状態にあるオブジェクトの集中をパーセンテージで表すグラフを作成します。また、理想的な統合率と実際の統合率を比較します。表示される状態は、不明な状態、クリティカルな状態、緊急状態、警告状態、正常状態です。



密度ウィジェットの構成オプションは、ダッシュボードに追加するウィジェットの各インスタンスをカスタマイズするために使用します。

統合度ウィジェットを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ウィジェットに表示されるデータは、その構成方法によって決まります。ウィジェットを構成するには、タイトル バーの [編集] アイコンをクリックして設定を構成します。

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト
オブジェクト リスト	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。 リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。

DRS クラスタ設定ウィジェット

DRS クラスタ設定ウィジェットでは、利用可能なクラスタおよび関連するホストのワークロードが表示されます。各クラスタについて、分散リソース スケジューラ（DRS）自動化ルールを変更できます。

DRS クラスタ設定ウィジェットと構成オプションの動作

各クラスタについて、CPU ワークロードおよびメモリ ワークロードのパーセンテージを表示できます。データ グリッド内のクラスタを選択することにより、クラスタ内の各ホストについて CPU ワークロードとメモリ ワークロードのパーセンテージを表示できます。下のデータ グリッドには詳細が表示されます。クラスタを選択し、[クラスタ アクション] - [DRS 自動化の設定] をクリックすることにより、DRS 自動化のレベルおよび移行しきい値を設定できます。

Name	Datacenter	vCenter	DRS	Migration	CPU	Memory
ES DC vc			✓	De	3	2
cls vc vc			✓	De	2	5
ES DC vc			✗	De	2	3

DRS クラスタ設定ウィジェットは、ダッシュボードに追加してから編集します。ウィジェットを構成するには、ウィジェット ウィンドウの右上隅にある編集アイコンをクリックします。DRS クラスタ設定ウィジェットを1つ以上のカスタム ダッシュボードに追加し、他のダッシュボード ユーザーにとって重要なデータを表示するように構成できます。ウィジェットには、各ウィジェット インスタンスに構成済みオプションに基づいてデータが表示されます。

DRS クラスタ設定ウィジェットは、vRealize Operations Manager に付属する vSphere DRS クラスタ設定という名前のダッシュボードに表示されます。

DRS クラスタ設定ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

DRS クラスタ設定オプションと構成オプション

DRS クラスタ設定ウィジェットには、ツールバー オプション、データ グリッド オプション、構成オプションが含まれます。

オプション	説明
クラスタ アクション	選択したクラスタに一致するアクションにリストを限定します。
表示	このドロップダウン メニューには、クラスタが存在する親 vCenter Server インスタンスが表示されます。また、個々の親 vCenter Server インスタンスの下にデータセンターが表示されます。親 vCenter Server を選択すると、利用可能なクラスタのワークロードがデータ グリッドに表示されます。 デフォルト設定では、すべての vCenter 全体のクラスタが表示されます。
フィルタ	名前、データセンター、vCenter、DRS の設定、および移行しきい値によってデータ グリッドをフィルタします。

データ グリッドでは、並べ替えおよび検索できる情報が提供されます。

オプション	説明
名前	選択した親 vCenter Server インスタンスのクラスタの名前が表示されます。
Datacenter	各クラスタに属するデータセンターが表示されます。

オプション	説明
vCenter	クラスタが存在する親 vCenter Server インスタンスが表示されます。
DRS 設定	クラスタの DRS 自動化レベルが表示されます。 クラスタの DRS 自動化レベルを変更するには、ツールバーから[クラスタ アクション] - [DRS 自動化の設定]を選択します。[自動化レベル] 列のドロップダウン メニューからオプションを選択することにより、自動化レベルを変更できます。
移行しきい値	仮想マシンの移行レベルに関する推奨値。移行しきい値は DRS の優先順位レベルに基づいており、クラスタのワークロード不均衡メトリックに基づいて計算されます。
CPU ワークロード (%)	クラスタで利用可能な CPU の割合が GHz 単位で表示されます。
メモリ ワークロード (%)	クラスタで利用可能なメモリの割合が GB 単位で表示されます。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .

効率ウィジェット

効率ウィジェットは、オブジェクトの効率に関連するアラートのステータスで、監視用に構成されます。vRealize Operations Manager で表示される効率アラートは、通常、リソースを解放できることを示します。カスタム ダッシュボードに追加するオブジェクトの効率ウィジェットを 1 つまたは複数作成できます。

効率ウィジェットの動作

効率ウィジェットは、1 つまたは複数のカスタム ダッシュボードに追加でき、ダッシュボード ユーザーにとって重要なデータを表示するように構成できます。

バッジの状態は、アラート定義に基づきます。バッジをクリックすると、ウィジェット内に構成されたオブジェクトまたはグループの [サマリ] タブが表示されます。[概要] タブから、現在の状態を引き起こした原因の判定を開始できます。ウィジェットが、子孫を持つオブジェクトに構成されている場合は、子孫の状態も確認する必要があります。子オブジェクト側に親には影響しないアラートがある場合があります。

[バッジ モード] 構成オプションがオフに設定されている場合は、バッジとグラフが表示されます。グラフの種類は、監視対象としてウィジェットに構成されているオブジェクトによって異なります。

- 監視対象オブジェクトがグループの場合、ポピュレーション重要度グラフには、時間が経つにつれて生成される「重大」、「緊急」、および「警告」の各効率アラートとともにグループ メンバーの割合が表示されます。
- オブジェクトがそのリソースを他のオブジェクトに提供しないか、または監視対象オブジェクトのリソースに依存しているオブジェクトが存在しない場合、トレンド ラインには監視対象オブジェクトの徐々に変化する効率ステータスが表示されます。例：監視対象オブジェクトが仮想マシンまたは分散スイッチである場合。

- 円グラフには、他のすべてのオブジェクト タイプの監視対象オブジェクトの子孫である仮想マシンの、解放可能な割合、負荷の割合、および最適な割合が表示されます。このグラフは、リソースを解放できる環境内のオブジェクトを特定するために使用します。このようなオブジェクトとして、たとえばホストやデータストアが考えられます。

[バッジ モード] がオンになっている場合は、バッジのみ表示されます。

ダッシュボードに効率ウィジェットを追加した後、その効率ウィジェットを編集します。オプションに対して行った変更により、個々のオブジェクト、オブジェクトのカスタム グループ、または環境内のすべてのオブジェクトに関する情報を提供するカスタム ウィジェットが作成されます。

効率ウィジェットを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
効率バッジ	このウィジェットのインスタンスに構成されているオブジェクトのステータス。バッジをクリックすると、ウィジェットにデータを提供するオブジェクトの [アラート] タブが開きます。
バッジの傾向	選択済みまたは構成済みのオブジェクトに基づいてチャートを表示します。チャートは、監視対象のオブジェクトが、グループ、子孫オブジェクト、またはリソースをその他のオブジェクトに提供するオブジェクトのいずれであるかによって変わります。チャートは、[バッジ モード] の構成オプションがオフに設定されている場合にのみ表示されます。[バッジ モード] がオンになっている場合は、バッジのみ表示されます。

表 4-130. 効率ウィジェットの構成オプション

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .

表 4-130. 効率ウィジェットの構成オプション（続き）

オプション	説明
セルフ プロバイダ	<p>ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
選択したオブジェクト	<p>ウィジェット データの基準となるオブジェクト</p> <p>このテキスト ボックスは、オブジェクト リストで選択したオブジェクトによって自動で入力されます。</p>
バッジ モード	<p>ウィジェットでバッジのみを表示するのか、バッジと、ウェザー マップまたは傾向チャートを表示するのかを決定します。</p> <p>以下のいずれかのオプションを選択します：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにバッジのみが表示されます。 ■ オフ。ウィジェットに、バッジとチャートが表示されます。チャートにより、オブジェクトの状態に関する追加情報が得られます。
オブジェクト リスト	<p>環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。</p> <p>リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。</p>









環境ウィジェット

環境ウィジェットには、vRealize Operations Manager によってデータが収集されるリソースが表示されます。カスタム ダッシュボードに追加するリソースに対して、vRealize Operations Manager 内に 1 つまたは複数のリストを作成できます。

環境ウィジェットと構成オプションの仕組み

環境ウィジェットは、オブジェクトごとのリソース数の一覧表示や、オブジェクト タイプによるグループ分けを行います。環境ウィジェットは、1 つまたは複数のカスタム ダッシュボードに追加でき、さまざまなダッシュボード ユーザーにとって重要なデータを表示するように構成できます。ウィジェットには、各ウィジェット インスタンスに構成済みオプションに基づいてデータが表示されます。

環境ウィジェットは、ダッシュボードに追加してから編集します。オプションを変更することで、ダッシュボード ユーザーのニーズに対応するためのカスタム ウィジェットを作成できます。

Environment Backup	
 Virtual Machine	1
 Datacenter	1
 vCenter Server	1
 vSphere World	1
 Universe	1
 Entity Status	2
 Licensing	1
 Datastore	7

環境ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

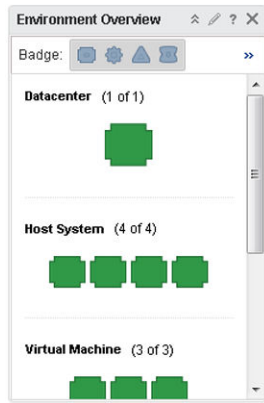
ウェザー マップ ウィジェットには、構成オプションが含まれます。ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。ダッシュボードの作成および構成の詳細については、[ダッシュボードの作成と構成](#)を参照してください。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。

オプション	説明
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト このテキスト ボックスは、オブジェクト リストで選択したオブジェクトによって自動で入力されます。
オブジェクト リスト	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。 リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。

環境概要ウィジェット

環境概要ウィジェットには、管理対象インベントリの特定のオブジェクトのリソースの健全性、リスク、および効率が表示されます。



環境概要ウィジェットの仕組み

環境概要ウィジェットを 1 つ以上のカスタム ダッシュボードに追加できます。

このウィジェットには、1 つまたは複数のタイプのオブジェクトに関するデータが表示されます。ウィジェットに表示されるデータは、ウィジェットを構成したときに選択したオブジェクト タイプとカテゴリによって異なります。

ウィジェット内のオブジェクトは、オブジェクト タイプごとに並べられます。

オブジェクトをポイントすると、そのオブジェクトの健全性、リスク、および効率のパラメータがツール チップに表示されます。

環境概要ウィジェット内のオブジェクトをダブルクリックすると、そのオブジェクトに関する詳細情報が表示されます。

環境概要ウィジェットを使用するには、ダッシュボードに追加して、ウィジェットに表示されるデータを構成する必要があります。少なくとも 1 つのバッジとオブジェクトを選択してください。また、オブジェクト タイプを選択することもできます。

環境概要ウィジェットには、基本と詳細の構成オプションがあります。基本構成オプションはデフォルトで有効になっています。

環境概要ウィジェットのすべての機能を使用するには、ウィジェットのデフォルト構成を変更する必要があります。vRealize Operations Manager マシンにログインし、`web.properties` ファイルで `skittlesCustomMetricAllowed` を `true` に設定します。`web.properties` ファイルは `/usr/lib/vmware-vcops/user/conf/web` フォルダにあります。`service vmware-vcops-web restart` コマンドを使用してユーザー インターフェイスを再始動した後、変更内容が伝搬されます。

[バッジ] タブを使用して、各オブジェクトに対してウィジェットが表示するバッジ パラメータを選択する必要があります。[構成] タブを使用して、オブジェクトまたはオブジェクト タイプを選択します。インベントリの特定のオブジェクトを表示するには、[基本] オプションを使用します。オブジェクトのグループ、または異なるタイプの複数のオブジェクトを表示するには、[詳細] オプションを使用する必要があります。

環境概要ウィジェットを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

環境概要ウィジェットのツールバー オプション

環境概要ウィジェットの最上部にあるツールバーには、バッジの詳細を表示するためのアイコンが含まれています。

オプション	説明
バッジ	ウィジェットに表示するオブジェクトのバッジを選択できます。バッジのツール チップには、バッジの標準名またはカスタム名が表示されます。[バッジ] タブを使用してウィジェットを構成するときに、カスタム名をバッジに追加できます。
ステータス	バッジ ステータスとそれらの状態に基づいて、オブジェクトをフィルタリングできます。
並べ替え	オブジェクトは文字または数字で並べ替えることができます。

環境概要ウィジェットの構成オプション

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト テキスト ボックスにデータを取り込むには、[構成] - [基本] を選択して、リストからオブジェクトを選択します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。

オプション	説明
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。.
バッジ	<p>表示するパラメータを定義します。チェック ボックスを使用して、健全性、リスク、および効率のパラメータを選択または選択解除できます。ウィジェットのデフォルト構成では、すべてのバッジが選択されます。</p> <p>少なくとも 1 つのバッジ パラメータを選択してください。</p> <p>カスタム ラベルには、バッジのカスタム名が表示されます。カスタム ラベルを使用して、バッジの名前を変更できます。バッジの名前を変更するには、バッジをダブルクリックして、テキスト ボックスに名前を入力します。カスタム名を保存するには、[更新] をクリックします。</p> <p>カスタム ラベルは、カスタム メトリックとバッジのカスタマイズが有効な場合にのみ使用できます。</p>

オプション	説明
構成	<p>[基本]</p> <p>環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。</p> <p>リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。</p> <hr/> <p>[詳細]</p> <p>[オブジェクト タイプ] を使用して、健全性、リスク、および効率に関する情報を表示するオブジェクトのタイプを選択できます。オブジェクトタイプをダブルクリックして選択します。</p> <p>[アダプタ タイプ] ドロップダウン メニューを使用して、アダプタに基づいてオブジェクト タイプをフィルタリングします。</p> <p>[vSphere のデフォルト設定を使用] ボタンを使用して、主な vSphere オブジェクト タイプを表示できます。</p> <p>リストからオブジェクト タイプを削除するには、[vSphere のデフォルト設定を使用] の横にある [選択したものを削除] をクリックします。</p> <p>[オブジェクト タイプ カテゴリ] メニューを使用して、表示するオブジェクト タイプのグループを選択できます (複数選択可)。</p> <p>オブジェクト ツリーを使用してオブジェクトを選択し、表示されるオブジェクトをフィルタリングできます。たとえば、仮想マシンのデータストアを表示するには、[オブジェクト タイプ] メニューから [データストア] をダブルクリックして選択します。データストアがオブジェクト タイプのリストにある場合はそのデータストアをクリックし、オブジェクト ツリーで仮想マシンを見つけて選択します。ウィジェットの前の構成に戻るには、オブジェクト タイプ リストから [データストア] をクリックし、オブジェクト ツリー ウィンドウで [すべて選択解除] をクリックします。</p> <p>メトリック ツリーとバッジ データ グリッドは、ウィジェットのデフォルト構成を変更する場合にのみ、構成オプションとして使用できます。これらの構成オプションを使用するには、vRealize Operations Manager マシンにログインし、<code>web.properties</code> ファイルで <code>skittlesCustomMetricAllowed</code> を <code>true</code> に設定します。</p> <p><code>web.properties</code> ファイルは <code>/usr/lib/vmware-vcops/user/conf/web</code> フォルダにあります。</p> <p>バッジ データ グリッドにカスタム バッジが表示され、カスタム メトリックのバッジをカスタマイズできるようになります。メトリック ツリーからメトリックを選択して、バッジの色を設定できます。</p> <p>バッジ列にはバッジ アイコンが含まれています。</p> <p>メトリック列にはカスタム メトリックが含まれており、これはメトリック ツリーから選択できます。</p> <p>ボックス ラベルのテキスト ボックスを使用して、バッジのラベルを定義できます。このバッジを使用する各オブジェクトのツールチップとバッジのツール チップの説明に、このバッジ ラベルが使用されます。</p> <p>測定単位のテキスト ボックスを使用して、各オブジェクトのツール チップ説明に使用される測定単位を定義できます。</p> <p>黄色の境界のテキスト ボックスを使用して、バッジを黄色にする値を定義できます。</p> <p>オレンジ色の境界のテキスト ボックスを使用して、バッジをオレンジ色にする値を定義できます。</p> <p>赤色の境界のテキスト ボックスを使用して、バッジを赤色にする値を定義できます。</p>

オプション

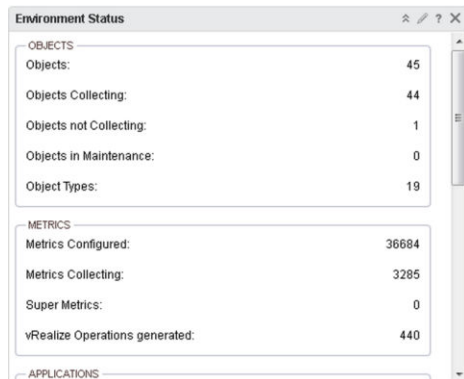
説明

たとえば、仮想マシンの可用性を表示し、健全性バッジを使用する場合、オブジェクト タイプとして仮想マシンを選択し、健全性バッジ アイコンを選択して、メトリック ツリーで可用性を検索して、それをダブルクリックする必要があります。オブジェクトを確認しやすくするため、分かりやすいラベル名と測定単位を定義してください。色ごとに異なる値を指定する必要があります。たとえば、黄色には -1、オレンジ色には 0、赤色には 1 のように指定します。

メトリック ツリーを使用して、オブジェクト タイプごとに特定のメトリックを選択できます。[オブジェクトを選択] をクリックして、オブジェクトに対して特定のメトリックを選択できます。[オブジェクトを選択] を使用すると、オブジェクト リスト データ グリッドが表示されます。オブジェクト リスト データ グリッドには、環境内で使用可能なすべてのオブジェクトと、それらに関する詳細情報が表示されます。

環境の状態ウィジェット

環境の状態ウィジェットには、監視下の環境全体についての統計が表示されます。



環境の状態ウィジェットの仕組み

オブジェクト、メトリック、アプリケーション、アラート、分析、およびユーザーなどのカテゴリを選択して、ウィジェットの出力をカスタマイズします。構成ウィンドウの [フィルタリングするタグの選択] からタグ ツリーを使用して、データをフィルタリングできます。

環境の状態ウィジェットは、ダッシュボードに追加してから編集します。ウィジェットを構成するには、ウィジェット ウィンドウの右隅にある鉛筆をクリックします。ウィジェットの [オブジェクト]、[メトリック]、[アプリケーション]、[アラート]、[分析]、[ユーザー] カテゴリから少なくとも 1 つのタイプの情報を選択して表示する必要があります。デフォルトでは、ウィジェットにはインベントリ内のすべてのオブジェクトに関する統計情報が表示されます。[フィルタリングするタグの選択] オプションを使用して、情報をフィルタリングできます。ウィジェットはダッシュボード内の他のウィジェットと相互作用し、それらからデータを取得して統計を表示できます。たとえば、データのソースとしてオブジェクト リスト ウィジェットを使用し、宛先として環境の状態ウィジェットを使用できます。オブジェクトを選択して、オブジェクト リスト ウィジェットから複数選択の相互作用を実行すると、オブジェクト リストで行った選択に基づいて環境の状態ウィジェットの結果が更新されます。

環境の状態ウィジェットを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

環境の状態ウィジェットの構成オプション

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	<p>このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。</p> <p>無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときのみ、ウィジェットが更新されます。</p> <p>ウィジェットは、相互作用モードである場合にも更新されます。たとえば、プロバイダ ウィジェットでアイテムが選択されると、環境の状態ウィジェットの内容が更新されます。</p>
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	<p>ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
オブジェクト	<p>ウィジェットには環境内のオブジェクトに関する要約が表示されます。 [フィルタリングするタグの選択] からオブジェクトを選択して、セルフ プロバイダ モードで表示される情報をフィルタリングできます。リソースの要約に含める情報の種類を選択できます。たとえば、 [フィルタリングするタグの選択] から [アダプタ タイプ] - [コンテナ] を選択し、 [オブジェクト] と [オブジェクト収集] をクリックすると、ウィジェットにはコンテナの数と収集しているコンテナが表示されます。</p>
メトリック	<p>ウィジェットには使用可能なメトリックの要約が表示されます。 [フィルタリングするタグの選択] からオブジェクトを選択して、セルフ プロバイダ モードで表示される情報をフィルタリングできます。メトリックの要約に含める情報の種類を選択できます。</p>
アプリケーション	<p>ウィジェットには使用可能なアプリケーションの要約が表示されます。 [フィルタリングするタグの選択] からオブジェクトを選択して、セルフ プロバイダ モードで表示される情報をフィルタリングできます。アプリケーションの要約に含める情報の種類を選択できます。</p>
アラート	<p>ウィジェットには環境内のアラートに関する要約が表示されます。 [フィルタリングするタグの選択] からオブジェクトを選択して、セルフ プロバイダ モードで表示される情報をフィルタリングできます。アラートの要約に含める情報の種類を選択できます。</p>
Analytics	<p>ウィジェットには分析プラグインの要約が表示されます。 [フィルタリングするタグの選択] からオブジェクトを選択して、セルフ プロバイダ モードで表示される情報をフィルタリングできます。分析の要約に含める情報の種類を選択できます。</p>
ユーザー	<p>ウィジェットには、vRealize Operations Manager に定義されたユーザーの数が表示されます。 [管理] - [アクセス コントロール] - [ユーザー アカウント] を選択します。</p>
フィルタリングするタグの選択	さまざまなタイプのオブジェクトを選択して表示できます。

オプション	説明
	展開しているすべてのタグおよびタグ値を閉じるには、[すべて折りたたむ] ツールバー オプションを使用します。
	フィルタリングをすべて削除し、ウィジェットにすべてのオブジェクトを表示するには、[すべて選択解除] ツールバー オプションを使用します。

障害ウィジェット

障害ウィジェットには、オブジェクトで発生した障害に関する詳細情報が表示されます。

フォールト スコアは、オブジェクトに見られる問題の程度を示します。NIC または HBA の冗長性の損失、メモリ チェックサム エラー、HA フェイルオーバーの問題、CIM イベントなどのイベントが含まれます。

障害ウィジェットの構成オプションは、ダッシュボードに追加されるウィジェットの各インスタンスをカスタマイズするために使用します。



障害ウィジェットを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ウィジェットに表示されるデータは、その構成方法によって決まります。ウィジェットを構成するには、タイトル バーの [編集] アイコンをクリックして設定を構成します。

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	<p>ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。

オプション	説明
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト このテキスト ボックスは、オブジェクト リストで選択したオブジェクトによって自動で入力されます。
オブジェクト リスト	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。

フォレンジックス ウィジェット

フォレンジックス ウィジェットでは、所定の期間でのメトリックにおける特定値の頻度が、すべての値に占める割合として表示されます。2 つの期間のパーセンテージを比較することもできます。

フォレンジックス ウィジェットの仕組み

フォレンジックス ウィジェットは、1 つまたは複数のカスタム ダッシュボードに追加でき、さまざまなダッシュボード ユーザーにとって重要なデータを表示するように構成できます。ウィジェットには、各ウィジェット インスタンスに構成済みオプションに基づいてデータが表示されます。

フォレンジックス ウィジェットは、ダッシュボードに追加してから編集します。オプションを変更することで、ダッシュボード ユーザーのニーズに対応するためのカスタム ウィジェットを作成できます。

フォレンジックス ウィジェットを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

フォレンジックス ウィジェットの構成オプションを確認できる場所

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーにある[編集]アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
パーセンタイル	特定の値を超えるかまたは特定の値に満たないデータがどれだけあるかを示します。たとえば、垂直線が値 4 で発生する場合、データの 90% が 4 を超えていることを示します。
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
タグ ツリー	オブジェクト リスト内のオブジェクトのリストをフィルタリングします。1 つ以上のオブジェクト タイプを選択でき、このタイプのすべてのオブジェクトがオブジェクト リストに表示されます。

オプション	説明
オブジェクト リスト	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。 オブジェクトは、選択されたタグに基づいて示されます。タグが選択されていない場合には、リストにはシステムのすべてのオブジェクトが表示されます。
メトリック ピッカー	メトリックをダブルクリックし、ウィジェットに表示します。
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト

Geo ウィジェット

構成で、Geo の場所オブジェクト タグに値を割り当てている場合、Geo ウィジェットには、ワールド マップ上のどこにオブジェクトが存在するかが示されます。Geo ウィジェットは、[インベントリ エクスプローラ] ページの [Geo] タブと似ています。

Geo ウィジェットと構成オプションの仕組み

マップ上のコントロールを使用して、マップの移動や拡大、縮小を行うことができます。それぞれの場所のアイコンは、GEO の場所タグの値を持つ各オブジェクトの健全性を示します。Geo ウィジェットは、1 つまたは複数のカスタム ダッシュボードに追加でき、さまざまなダッシュボード ユーザーにとって重要なデータを表示するように構成できます。ウィジェットには、各ウィジェット インスタンスに構成済みオプションに基づいてデータが表示されます。

Geo ウィジェットは、ダッシュボードに追加してから編集します。オプションを変更することで、ダッシュボード ユーザーのニーズに対応するためのカスタム ウィジェットを作成できます。

Geo ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

Geo ウィジェットのツールバーのオプション

オプション	説明
ズームイン	マップを拡大します。
ズームアウト	マップを縮小します。

Geo ウィジェットの構成オプション

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

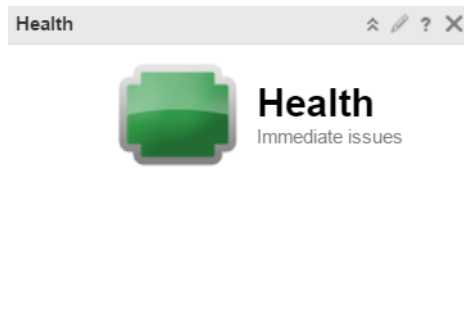
オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
フィルタリングするタグの選択	さまざまなタイプのオブジェクトを選択して表示できます。 展開しているすべてのタグおよびタグ値を開じるには、[すべて折りたたむ] ツールバー オプションをクリックします。 フィルタリングをすべて削除し、ウィジェットにすべてのオブジェクトを表示するには、[すべて選択解除] ツールバー オプションをクリックします。

健全性ウィジェット

健全性ウィジェットは、vRealize Operations Manager で監視用に構成されたオブジェクトの健全性に関するアラートのステータスです。健全性アラートは通常、直ちに対処する必要があります。カスタム ダッシュボードに追加するさまざまなオブジェクトに対して、1 つ以上の健全性ウィジェットを作成できます。

健全性ウィジェットと構成オプションの仕組み

健全性ウィジェットを 1 つ以上のカスタム ダッシュボードに追加し、ダッシュボード ユーザーにとって重要なデータが表示されるように構成できます。表示される情報は、ウィジェットがどのように構成されているかによって異なります。



バッジの状態は、アラート定義に基づきます。バッジをクリックすると、ウィジェット内に構成されたオブジェクトまたはグループの [サマリ] タブが表示されます。[概要] タブから、現在の状態を引き起こした原因の判定を開始できます。ウィジェットが、子孫を持つオブジェクトに構成されている場合は、子孫の状態も確認する必要があります。子オブジェクト側に親には影響しないアラートがある場合があります。

[バッジ モード] 構成オプションがオフに設定されている場合は、バッジとグラフが表示されます。グラフの種類は、監視対象としてウィジェットに構成されているオブジェクトによって異なります。

- オブジェクトがそのリソースを他のどのオブジェクトにも提供しない場合、トレンド ラインには監視対象オブジェクトの健全性ステータスが表示されます。例：監視対象オブジェクトが仮想マシンまたは分散スイッチである場合。
- ウェザー マップには、他のすべてのオブジェクト タイプに対する、監視対象オブジェクトの先祖オブジェクトと子孫オブジェクトの健全性が表示されます。例：仮想マシンに CPU とメモリを提供するホストが監視対象オブジェクトである場合。

[バッジ モード] がオンになっている場合は、バッジのみ表示されます。

健全性ウィジェットは、ダッシュボードに追加した後で編集します。オプションに対して行った変更により、個々のオブジェクト、オブジェクトのカスタム グループ、または環境内のすべてのオブジェクトに関する情報を提供するカスタム ウィジェットが作成されます。

健全性ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーにある[編集]アイコンをクリックします。ダッシュボードの作成および構成の詳細については、[ダッシュボードの作成と構成](#)を参照してください。

オプション	説明
健全性バッジ	<p>このウィジェットのインスタンスに構成されているオブジェクトのステータス。バッジをクリックすると、ウィジェットにデータを提供するオブジェクトの [アラート] タブが開きます。</p> <p>バッジ モードがオンの場合、健全性のウェザー マップまたはトレンド グラフがオブジェクトに対して表示されます。マップまたはグラフが表示されるかどうかは、オブジェクト タイプによって異なります。健全性のウェザー マップには、最大 1000 オブジェクトのツールチップが表示されます。</p>
バッジのチャート	<p>選択済みまたは構成済みのオブジェクトに基づいてチャートを表示します。チャートは、監視対象のオブジェクトが、グループ、子孫オブジェクト、またはリソースをその他のオブジェクトに提供するオブジェクトのいずれであるかによって変わります。チャートは、[バッジ モード] の構成オプションがオフに設定されている場合にのみ表示されます。[バッジ モード] がオンになっている場合は、バッジのみ表示されます。</p>

表 4-131. 健全性ウィジェットの構成オプション

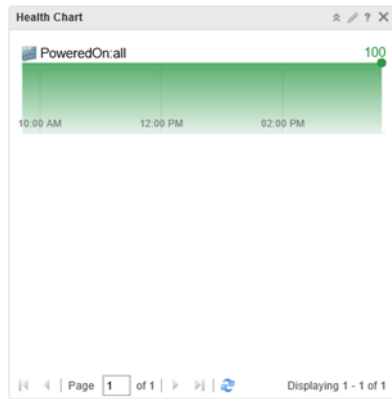
オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト このテキスト ボックスは、オブジェクト リストで選択したオブジェクトによって自動で入力されます。
バッジ モード	ウィジェットでバッジのみを表示するのか、バッジと、ウェザー マップまたは傾向チャートを表示するのかを決定します。 以下のいずれかのオプションを選択します: <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにバッジのみが表示されます。 ■ オフ。ウィジェットに、バッジとチャートが表示されます。チャートにより、オブジェクトの状態に関する追加情報が得られます。
オブジェクト リスト	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。 リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。

健全性チャート ウィジェット

健全性チャート ウィジェットは、選択したオブジェクトの健全性、リスク、効率、またはカスタム メトリック チャートを表示します。ウィジェットを使用して、同じ値に基づいて同様のオブジェクトのステータスを比較します。

健全性チャート ウィジェットの仕組み

健全性チャート ウィジェットを 1 つ以上のカスタム ダッシュボードに追加し、ダッシュボード ユーザーにとって重要なデータが表示されるように構成できます。表示される情報は、ウィジェットがどのように構成されているかによって異なります。



ウィジェットが健全性、リスク、または効率を表示するように構成されている場合、チャートの値は、選択したオブジェクトに選択されたアラート タイプに対して生成されたアラートに基づきます。

ウィジェットがカスタム メトリックを表示するように構成されている場合、チャートの値は構成した期間のメトリック値に基づきます。

ダッシュボードに健全性チャート ウィジェットを追加した後、そのウィジェットを編集します。オプションを変更することで、選択したチャートでカスタム ウィジェットを作成できます。

チャートは、健全性、リスク、効率のいずれかのアラート ステータスをベースにするか、あるいは選択したメトリックをベースにすることができます。単一のオブジェクト、複数のオブジェクト、または選択したタイプのすべてのオブジェクトを含めることができます。

健全性チャート ウィジェットを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

健全性チャート オプション

特定の時間のオブジェクトの値を表示するには、チャートをマウスでポイントします。日付範囲とメトリック値のツールチップが表示されます。

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。

オプション	説明
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。.
セルフ プロバイダ	<p>ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
モード	<p>ウィジェットが、選択したオブジェクト、子オブジェクト、または親オブジェクトのデータを表示するかどうかを確認します。</p> <p>[子] または [親] を選択すると、選択したオブジェクトはウィジェットに表示されません。関連するオブジェクトのみです。</p>
並び順	<p>オブジェクト チャートのウィジェット内での表示方法を決定します。</p> <p>スコアまたは名前に基づいて、昇順または降順で並べることができます。</p>
ページネーションの数	<p>1 ページに表示するチャートの数。</p> <p>チャートをスクロールする場合は、大きな数字を選択します。ページをめくって結果を見る場合は、小さな数字を選択します。</p>
期間の長さ	チャートに表示される時間。
メトリック	<p>データ ソースを決定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 健全性、リスク、または効率。表示されるチャートは、これらのアラート バッジのいずれかに基づきます。 ■ カスタム表示されるチャートは、選択したメトリックに基づいており、アラート シンボルの状態の色または選択したカスタム色のいずれかを使用します。カスタム色を適用する場合は、その色になる最大値と最小値をそれぞれのテキスト ボックスに入力します。 <p>たとえば、[カスタム] を選択して、メトリックを Badge Anomaly として定義し、[黄色の境界] を 1、[オレンジ色の境界] を 10、[赤色の境界] を 20 に設定すると、チャートは各時点でのアノマリ メトリック値に基づいて、黄色からオレンジ色または赤色への変更を示します。</p>
オブジェクト タグ ツリー	<p>チャートを表示するオブジェクトまたはオブジェクト タイプ。</p> <p>複数のオブジェクトを持つタグを選択すると、ウィジェットはそれぞれのオブジェクトのチャートを表示します。複数のタグを選択すると、ウィジェットはすべてのタグのメンバーであるオブジェクトのチャートのみを表示します。</p> <p>2 つのタグを選択し、ウィジェットがどのチャートも表示しない場合は、この 2 つのタグに共通するオブジェクトがなかったことを意味します。</p>

ヒート マップ ウィジェット

ヒート マップ ウィジェット には、選択したタグ値のオブジェクトについて、選択した 2 つの属性の現在の値を示すグラフィカル インジケータが含まれています。ほとんどの場合、健全性やアクティブなアノマリ数など、オブジェクトの一般的な動作を示す内部生成の属性からしか選択できません。単一のオブジェクトを選択した場合は、そのオブジェクトの任意のメトリックを選択できます。

ヒート マップ ウィジェット の仕組み

ヒート マップ ウィジェット は、1 つまたは複数のカスタム ダッシュボード に追加でき、ダッシュボード ユーザーにとって重要なデータを表示するように構成できます。

ヒート マップ ウィジェット には、一般モードとインスタンス モードがあります。一般モードは、選択した各リソースについて色分けされた長方形を表示します。インスタンス モードでは、それぞれの長方形は、あるオブジェクトについて選択したメトリックの単一のインスタンスを表します。

タグのタイプに応じて長方形をグループ化し、使用する色の範囲を選択することができます。デフォルトでは、値の範囲中で、緑色が低い値を示し、赤色が高い値を示します。高低それぞれの値を任意の色に変更し、範囲の中間点に使用する色を設定できます。色の範囲の端に使用する値を自分で設定したり、属性の値の範囲に基づいて vRealize Operations Manager に色を定義したりすることもできます。

あるオブジェクトの長方形をポイントすると、ウィジェット には、そのリソースの名前、グループ化の値、および追跡対象の 2 つの属性の現在の値が表示されます。



ヒート マップ ウィジェット を、メトリック チャート ウィジェット など、他のウィジェット へのプロバイダとして構成する場合は、長方形をダブルクリックしてそのウィジェット のためのオブジェクトを選択できます。ウィジェット がメトリック モードの場合、長方形をダブルクリックすると、そのメトリックに関連付けられたリソースが選択され、そのリソースが受信側のウィジェット に提供されます。

システムの数千あるリソースのうちから関連するデータのみを取得するために、同様の特性を持つあまり重要でないリソースをグループにロールアップできます。このロールアップによって、パフォーマンスが向上し、メモリ使用量が減少します。

ロールアップ ボックスには、平均色とすべてのリソースの合計サイズが含まれます。ロールアップ ボックスでズームすることにより、すべてのリソースを表示できます。

ダッシュボードに追加後にヒート マップ ウィジェットを編集します。オプションに対して行った変更により、個々のオブジェクト、オブジェクトのカスタム グループ、または環境内のすべてのオブジェクトに関する情報を提供するカスタム ウィジェットが作成されます。

ヒート マップ ウィジェットを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ウィジェットに表示されるデータは、その構成方法によって決まります。ウィジェットを構成するには、タイトル バーの [編集] アイコンをクリックして設定を構成します。

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
構成	保存したヒート マップ構成オプションのリスト。新しい構成を作成し、リストに保存できます。右のオプションから、構成の削除、クローン作成、順序の変更もできます。
名前	ウィジェットの名前。
グループ化	ヒート マップにおけるオブジェクトの第 1 レベルのグループ化。
次の基準	ヒート マップ内でのオブジェクトの第 2 レベルのグループ化。
関係のグループ化	[次でグループ化] と [さらに次でグループ分け] のオブジェクトを選択した後で、[関係のグループ化] チェックボックスを選択すると、オブジェクトがグループに整理され、[次でグループ化] テキスト ボックスで選択したオブジェクトと [さらに次でグループ分け] テキスト ボックスのオブジェクトが関連付けられます。
モード	<p>一般モード</p> <p>ウィジェットには、選択したリソースについて色分けされた長方形が表示されます。長方形のサイズは、選択した 1 つの属性の値を示します。長方形の色は、選択した別の属性の値を示します。</p> <p>インスタンス モード</p> <p>それぞれの長方形は、あるリソースについて選択したメトリックの単一のインスタンスを表します。1 つのリソースが、同じメトリックの複数のインスタンスを持つことができます。長方形の大きさはすべて同じです。長方形の色は、インスタンスの値に基づいて変化します。単一のリソース種別を選択した場合にのみ、インスタンス モードを使用できます。</p>
オブジェクト タイプ	ウィジェット データの基準となるオブジェクト

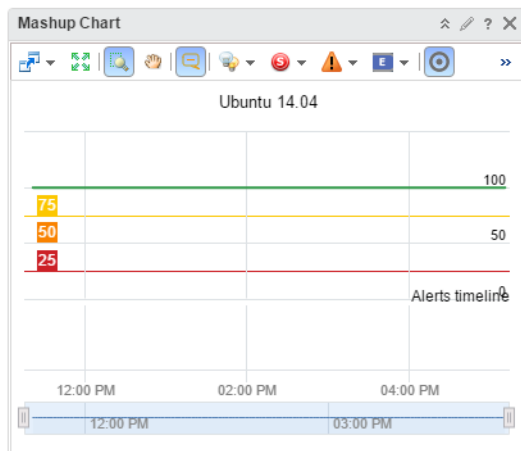
オプション	説明
サイズ分け	各リソースの長方形のサイズを設定する属性。 [サイズ分け] 属性の値が大きいリソースは、ウィジェット画面のより大きな面積を占めることになります。固定サイズの長方形を選択することもできます。ほとんどの場合、属性リストには vRealize Operations Manager が生成するメトリックのみが含まれます。リソース種別を選択する場合、リストには、そのリソース種別について定義された属性がすべて表示されます。
色分け	各リソースの長方形の色を設定する属性。
色	カラー範囲を高、中、低の値で示します。各カラーを設定し、[最小値] および [最大値] テキスト ボックスに最小のカラー値および最大のカラー値を入力できます。 このテキスト ボックスを空白のままにしておくと、vRealize Operations Manager は、[色分け] メトリックの最高値と最低値を端の色にマッピングします。最小値または最大値を指定すると、その値以上のメトリックは端の色で表示されます。
フィルタ	ウィジェットは、フィルタ条件に一致する情報だけを表示します。

マッシュアップチャート ウィジェット

マッシュアップチャート ウィジェットには、リソースのさまざまな情報が表示されます。主要なパフォーマンス インジケータ (KPI) の健全性チャート、異常カウント グラフおよびメトリック グラフを表示します。

マッシュアップチャート ウィジェットの仕組み

マッシュアップチャート ウィジェットには、選択されたリソースの動作のさまざまな側面を示すチャートが含まれます。デフォルトで、チャートには過去 6 時間のデータが表示されます。マッシュアップチャート ウィジェットには、[アラート詳細] ページの [マッシュアップ] タブと同じ情報が表示されます。



マッシュアップチャート ウィジェットには、次のチャートが含まれます。

- オブジェクトの健全性チャート。指定期間の各アラートが含まれる場合があります。アラートをクリックして詳細を表示するか、アラートをダブルクリックして [アラート サマリ] ページを開きます。

- オブジェクトのアノマリ数グラフ。クロスサイロ分析機能が生成するアノマリ グラフに似ています。このグラフは、指定した時間におけるオブジェクトおよびその子のアノマリ数を示します。アプリケーションの場合は、各階層の数も積み重ねグラフで表示されます。赤い線は、オブジェクトのノイズしきい値を示します。異常カウントがこのしきい値よりも上にあれば、問題の確率は 90% であり、早期警告アラートがトリガされます。
- 根本原因オブジェクトとしてリストされるオブジェクトの任意あるいはすべての KPI に関するメトリック グラフ。アプリケーションの場合、このチャートには根本原因を含むアプリケーションおよび階層が表示されます。ウィジェット ツールバーで [チャート コントロール] - [KPI] を選択して、KPI を含めることができます。グラフの共有部分には、その期間中にしきい値違反となった KPI が示されます。共有部分の左上をクリックすると、異常の詳細が表示されます。

アノマリ数グラフ チャートとメトリック グラフには、選択したオブジェクトと 4 つの子レベルを含め、最大で 5 つのレベルのリソースが反映されます。

マッシュアップチャート ウィジェットは、ダッシュボードに追加してから編集します。オプションを変更することで、ダッシュボード ユーザーのニーズに対応するためのカスタム ウィジェットを作成できます。

マッシュアップチャート ウィジェットを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

マッシュアップチャート ウィジェットの最上部にあるツールバーには、ビューの変更に使用できるアイコンが含まれています。

マッシュアップチャート ウィジェットの構成オプション

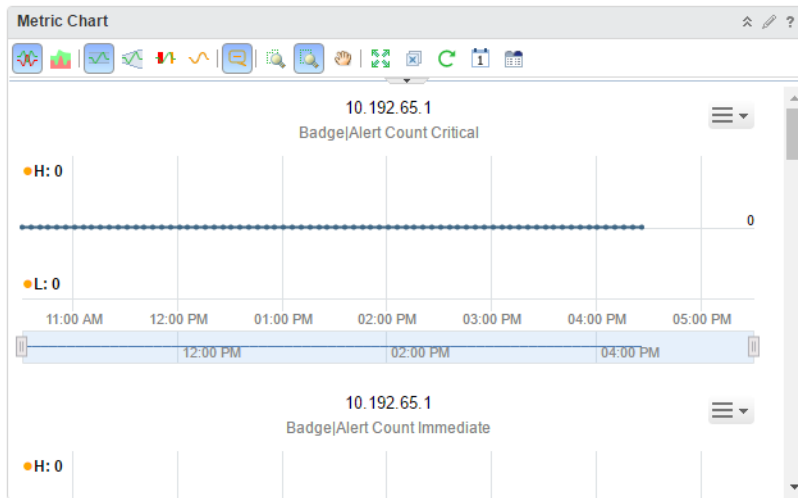
ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックすると、ダッシュボードの作成中、またはダッシュボードが表示されるときにウィジェットに表示されるデータをカスタマイズできます。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	<p>ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。

オプション	説明
タグ ツリー	オブジェクト リスト内のオブジェクトのリストをフィルタリングします。1つ以上のオブジェクト タイプを選択でき、このタイプのすべてのオブジェクトがオブジェクト リストに表示されます。
オブジェクト リスト	<p>環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。</p> <p>リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。</p> <p>オブジェクトは、選択されたタグに基づいて示されます。タグが選択されていない場合には、リストにはシステムのすべてのオブジェクトが表示されます。</p>

メトリック チャート ウィジェット

メトリック チャート ウィジェットを使用して、オブジェクトのワークロードの推移を監視できます。ウィジェットには、選択したメトリックに基づいたデータが表示されます。



メトリック チャート ウィジェットの仕組み

メトリック チャート ウィジェットを1つ以上のカスタム ダッシュボードに追加し、オブジェクトのワークロードを表示するように構成できます。ウィジェットには、各ウィジェット インスタンスに構成済みオプションに基づいてデータが表示されます。

ダッシュボードにメトリック チャート ウィジェットを追加した後、そのウィジェットを編集します。オプションに対して行った変更内容で、選択したメトリックを含むカスタム ウィジェットが作成されます。そのメトリックは、オブジェクトのワークロードが表示されるメトリックです。

メトリックを選択するには、オブジェクト リストからオブジェクトを選択し、メトリックを選択します。または、オブジェクト タグ リストからタグを選択して、オブジェクト リストを制限してから、オブジェクトを選択することもできます。同じオブジェクトに対して複数のチャートを構成することも、異なるオブジェクトに複数のチャートを構成することもできます。

XML ファイルで定義したメトリックのセットを表示するメトリック構成を使用するには、ダッシュボードおよびウィジェットの構成が次の基準を満たしている必要があります。

- ダッシュボードの [ウィジェットの相互作用] オプションが、別のウィジェットがターゲット ウィジェットにオブジェクトを提供するように構成されている。たとえば、オブジェクト リスト ウィジェットでは、チャート ウィジェットにオブジェクト相互作用を提供する。
- ウィジェットの [セルフ プロバイダ] オプションが [オフ] に設定されている。
- [メトリック構成] ドロップダウン メニューのカスタムの XML ファイルが `/usr/lib/vmware-vcops/tools/opscli` ディレクトリにあり、インポート コマンドを使用して、グローバル記憶領域にインポートされている。

メトリック チャート ウィジェットを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

メトリック チャート ウィジェットは、「ワークロード トレンド」の名前の [ワークロード使用率] ダッシュボードにも表示されます。

メトリック チャート ウィジェット ツールバー オプション

メトリック チャート ウィジェットの最上部にあるツールバーには、グラフのビューを変更するのに使用できるアイコンが含まれています。

オプション	説明
分割グラフ	各メトリックを別個のチャートに表示します。
積み重ねグラフ	すべてのチャートを 1 つに統合します。このチャートは、メトリック値の総計または合計が時間の経過とともにどのように変化するかを表示する場合に役に立ちます。積み重ねグラフを表示するには、分割グラフがオフになっていることを確認します。
動的しきい値	24 時間内で計算された動的しきい値の表示/非表示を切り替えます。
全期間における動的しきい値の表示	グラフの全期間の動的しきい値の表示/非表示を切り替えます。
アノマリ	異常の表示/非表示を切り替えます。メトリックがしきい値を超えている期間が影付きで表示されます。異常は、メトリックが動的しきい値または静的しきい値を上回った場合、または下回った場合に生成されます。
トレンド ライン	メトリックのトレンドを表すラインおよびデータ ポイントの表示/非表示を切り替えます。トレンド ラインは、隣接するデータ ポイントの平均に照らして各データ ポイントをプロットすることにより、タイムラインに沿ってメトリック ノイズを除外します。
データ値の表示	ズームまたはパン オプションに切り替えた場合に、データ ポイント ツールチップを有効にします。[データ ポイント チップの表示] を有効にする必要があります。
すべてのチャートをズーム	範囲セレクトの使用時にキャプチャされた領域に基づいて、チャート ペインで開いているすべてのチャートのサイズを変更します。 このオプションと [ビューをズーム] の間を切り替えることができます。
ビューをズーム	範囲セレクトの使用時に、現在のチャートのサイズを変更します。
パン	ズーム モードでは、チャートの拡大セクションをドラッグして、メトリックの最大値、最小値、以前の値、新しい値を表示できます。
表示に合わせてズーム	使用可能な領域に合わせてチャートをリセットします。

オプション	説明
すべてを削除する	すべてのチャートをチャート ペインから削除して、一連の新しいチャートの作成を開始できるようにします。
チャートの更新	現在のデータでチャートを再ロードします。
日付コントロール	日付セレクトを開きます。 日付セレクトを使用して、各チャートに表示されるデータを調査中の期間に限定します。
ダッシュボードの生成	現在のチャートをダッシュボードとして保存します。

グラフ セレクタ オプションで、個々のデータをグラフにどのように表示するかが決定されます。

オプション	説明
閉じる	チャートを削除します。
スナップショットの保存	現在のチャートの PNG ファイルを作成します。イメージは、画面に表示されるサイズになります。 このファイルをブラウザのダウンロード フォルダに取得できます。
フル スクリーン スナップショットの保存	現在のグラフ イメージを フルページの PNG ファイルとしてダウンロードし、表示または保存することができます。 このファイルをブラウザのダウンロード フォルダに取得できます。
カンマ区切りデータのダウンロード	現在のチャートのデータを含む CSV ファイルを作成します。 このファイルをブラウザのダウンロード フォルダに取得できます。
ウィジェット表示の単位の選択	データをドットまたはパーセンテージで表示できます。
下へ移動	チャート位置を 1 単位下げます。
上へ移動	チャート位置を 1 単位上げます。

メトリック チャート グラフでは、次のアクションを実行できます。

オプション	説明
Y 軸	Y 軸のスケールの表示/非表示を切り替えます。
チャート	チャートのデータ ポイントをつなぐラインの表示/非表示を切り替えます。
データ ポイント チップ	チャート内でデータ ポイントの上にマウスを置いたときに、データ ポイントのツールチップの表示/非表示を切り替えます。
X 軸ズーム	チャートで範囲セレクトを使用してチャートのサブセットを選択する場合に、選択した領域を X 軸で拡大します。[X 軸ズーム]と[Y 軸ズーム]を同時に使用できます。
Y 軸ズーム	チャートで範囲セレクトを使用してチャートのサブセットを選択する場合に、選択した領域を Y 軸で拡大します。[X 軸ズーム]と[Y 軸ズーム]を同時に使用できます。
動的しきい値でズーム	軸の最大値と最小値が対象メトリックに対して計算された動的しきい値の最大値と最小値になるように、チャートの Y 軸のサイズを変更します。

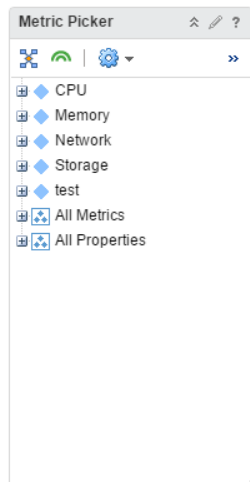
メトリック チャート ウィジェットの構成オプション

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。。
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
メトリック構成	情報が別のウィジェットとの相互作用に基づいている場合、表示する属性を持つリストを指定します。 CLI ディレクトリを通じてリソース相互作用 XML ファイルを追加するには、 リソース相互作用 XML ファイルの追加 を参照してください。ユーザー インターフェイスを通じてリソース相互作用 XML ファイルを追加するには、 メトリック構成の管理 を参照してください。 新規作成された XML ファイルがウィジェットの [メトリック構成] ドロップダウン メニューに表示されます。
オブジェクト タグ ツリー	オブジェクト リスト内のオブジェクトのリストをフィルタリングします。1 つ以上のオブジェクト タイプを選択でき、このタイプのすべてのオブジェクトがオブジェクト リストに表示されます。
オブジェクト リスト	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。 オブジェクトは、選択されたタグに基づいて示されます。タグが選択されていない場合には、リストにはシステムのすべてのオブジェクトが表示されます。
メトリック リスト	メトリックのリストは、オブジェクト リストで選択されたオブジェクトに使用できます。 メトリックをダブルクリックし、ウィジェットに表示します。
選択されたメトリック リスト	ウィジェット内に表示されているオブジェクトとメトリック。 オブジェクトは、このリストに示されている順番でウィジェットに表示されます。このリストの順番を変更すると、表示されているチャートの順番も変更されます。

メトリック ピッカー ウィジェット

メトリック ピッカー ウィジェットには、選択されたオブジェクトの使用可能なメトリックのリストが表示されます。



メトリック ピッカー ウィジェットの仕組み

メトリック ピッカー ウィジェットで、オブジェクトのメトリックのリストを確認できます。オブジェクトを選択して、そのオブジェクトのメトリックを選択するには、データ ソースとなるその他のウィジェット（トポロジ グラフ ウィジェットなど）を使用します。同じダッシュボードにあるソース ウィジェットを設定するには、ダッシュボードの編集時に [ウィジェットの相互作用] メニューを使用します。別のダッシュボードにあるソース ウィジェットを設定するには、ソース ウィジェットを含むダッシュボードを編集するときに [ダッシュボードのナビゲーション] メニューを使用します。

メトリック ピッカー ウィジェットは、ダッシュボードに追加してから編集します。オプションに変更を加えることで、ダッシュボード ユーザーのニーズに応じたカスタム グラフを作成できます。

メトリック ピッカー ウィジェットを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

メトリック ピッカー ウィジェット ツールバー

メトリック ピッカー ウィジェットの最上部にあるツールバーには、グラフのビューを変更するのに使用できるアイコンが含まれています。

オプション	説明
共通メトリックの表示	共通メトリックを基準にしてフィルタリングします。
メトリック収集の表示	収集メトリックを基準にしてフィルタリングします。
メトリックまたはプロパティ	メトリックまたはプロパティ メトリックを基準にしてフィルタリングします。

メトリック ピッカー ウィジェットの構成オプション

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

表 4-132. メトリック ピッカー ウィジェットの構成オプション

オプション	操作
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .

オブジェクト リスト ウィジェット

オブジェクト リスト ウィジェットには、環境内で使用可能なオブジェクトのリストが表示されます。

Name	Adapter Type	Object Type	Policy	Collection State	Collection Status
Container	Container	Container Ad...	vSphere Solu...	🟢	🟢
Entire Enterpr...	Container	Entire Enterpr...	vSphere Solu...	🟢	🟢
EP Ops Agen...	Container	EP Ops Adap...	vSphere Solu...	🟢	🟢
Operating Sy...	Container	EP Ops Adap...	vSphere Solu...	🟢	🟢
Product Licen...	Container	Licensing	vSphere Solu...	🟡	🟢
Remote Servi...	Container	EP Ops Adap...	vSphere Solu...	🟢	🟢

オブジェクト リスト ウィジェットと構成オプションの動作

オブジェクト リスト ウィジェットでは、データ グリッドにインベントリ内のオブジェクトが表示されます。データ グリッドのデフォルト構成が、オブジェクト リスト ウィジェットのオプション セクションに表示されます。デフォルト列を追加または削除することで、構成をカスタマイズできます。ウィジェットを構成するとき、[追加の列] オプションを使用して、メトリックを追加できます。

オブジェクト リスト ウィジェットは、ダッシュボードに追加してから編集します。ウィジェットを構成することで、親および子オブジェクトを表示できます。同一ダッシュボードにある別のオブジェクト リスト ウィジェットやオブジェクト関係ウィジェットなどの、別のウィジェットで選択されたオブジェクトの子オブジェクトを表示するようにウィジェットを構成できます。

オブジェクト リスト ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

オブジェクト リスト ウィジェットのツールバーとデータグリッド オプション

オブジェクト リスト ウィジェットにはツールバー オプションが含まれます。

オプション	説明
操作	各オブジェクトに特有の一連の操作から選択します。使用可能な操作を表示するには、オブジェクトのリストからオブジェクトを選択し、ツールバー アイコンをクリックして、操作を選択します。たとえば、グラフでデータストア オブジェクトを選択すると、[データストアの使用されていないスナップショットの削除] を選択します。
ダッシュボードのナビゲーション	オブジェクトに移動します。たとえば、オブジェクトのリストからデータセンターを選択し、[ダッシュボード ナビゲーション] をクリックすると、vSphere Web Client でそのデータストアを開くことができます。
グリッド ソートのリセット	リソースのリストを元の順番に戻します。

オプション	説明
相互作用のリセット	<p>ウィジェットを最初に構成された状態に戻し、提供ウィジェットで選択された相互作用を取り消します。</p> <p>通常、相互作用は同じダッシュボード内のウィジェット間で発生しますが、別のダッシュボードのウィジェット間で相互作用を構成することもできます。</p>
オブジェクト詳細	オブジェクトを選択し、このアイコンをクリックすると、そのオブジェクトの [オブジェクト詳細] ページが表示されます。
複数選択の相互作用の実施	<p>ウィジェットが、ダッシュボード上の別のウィジェットへの提供者となっている場合は、複数の行を選択してこのボタンをクリックできます。受け取り側のウィジェットでは、選択した相互作用の項目に関連するデータのみが表示されます。</p> <p>Ctrl キーを押しながらクリック (Windows の場合) するか、Cmd キーを押しながらクリック (Mac OS X の場合) して個別のオブジェクトを複数選択するか、Shift キーを押しながらクリックしてオブジェクトの範囲を選択してからこのアイコンをクリックすると、相互作用が有効になります。</p>
フィルター基準の表示	このウィジェットの基になっているオブジェクト情報が表示されます。
フィルタ	ウィジェットのデータを特定します。

データ グリッドには、並べ替えおよび検索できるインベントリ オブジェクトのリストが表示されます。

オプション	説明
ID	インベントリ内の各オブジェクトに指定された一意の ID。vRealize Operations Manager により、ランダムに生成されます。
名前	インベントリ内のオブジェクトの名前。
説明	オブジェクトの作成時に指定された、オブジェクトに関する簡単な説明を表示します。
アダプタ タイプ	各オブジェクトのアダプタ タイプを表示します。
オブジェクト タイプ	インベントリ内のオブジェクトのタイプを表示します。
ポリシー	オブジェクトに適用されるポリシーを表示します。ポリシーの詳細を表示して、ポリシーの構成を作成するには、[管理] - [ポリシー] を選択します。
作成時間	インベントリ内にオブジェクトが作成されたときの日時とタイムゾーンを表示します。
識別子 1	インベントリ オブジェクトのタイプに応じて、インベントリ内のオブジェクトのカスタム名、またはデフォルトの一意の識別子を含めることができます。たとえば、インベントリ内の仮想マシンには My_VM_1、vRealize Operations Manager ノードには 64 ビットの 16 進数値を指定します。
識別子 2	オブジェクトのタイプに応じて、オブジェクト タイプの短縮形と一意の 10 進数値、または親インスタンスを含めることができます。たとえば、仮想マシンには vm-457、vRealize Operations Manager ノードには IP アドレスを指定します。

オプション	説明
識別子 3	アダプタ タイプを識別するための一意の番号を含めることができます。たとえば、vCenter Adapter には 64 ビットの 16 進数値を指定します。
識別子 4	オブジェクトの補足的な一意の識別子。このオプションは、オブジェクトで使用されるアダプタ タイプによって異なります。
識別子 5	オブジェクトの補足的な一意の識別子。このオプションは、オブジェクトで使用されるアダプタ タイプによって異なります。
オブジェクト フラグ	各オブジェクトのバッジ アイコンを表示します。バッジをポイントすると、ステータスが表示されます。
収集状態	各オブジェクトのアダプタ インスタンスの収集状態を表示します。状態アイコンをポイントすると、アダプタ インスタンスの名前およびアダプタ インスタンスの状態をツールチップに表示できます。アダプタ インスタンスを管理して、データの収集を開始および終了するには、[管理] - [インベントリ エクスプローラ] を選択します。
収集ステータス	各オブジェクトのアダプタ インスタンスの収集ステータスを表示します。ステータス アイコンをポイントすると、アダプタ インスタンスの名前およびアダプタ インスタンスのステータスをツールチップに表示できます。アダプタ インスタンスを管理して、データの収集を開始および終了するには、[管理] - [インベントリ エクスプローラ] を選択します。
内部 ID	オブジェクトを内部で識別するために vRealize Operations Manager が使用する一意の番号。たとえば、内部 ID は、トラブルシューティングに使用するログ ファイルに表示されます。

オブジェクト リスト ウィジェットの構成オプション

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .

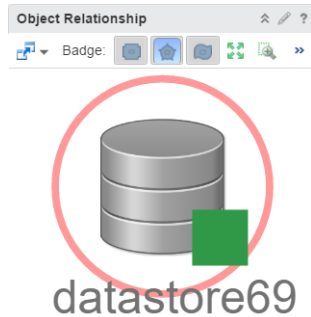
オプション	説明
モード	<p>ダッシュボードで、ウィジェットの [セルフ]、[子]、または [親] モードを選択できます。たとえば、1つのダッシュボードに Object List 1 および Object List 2 という名前の 2つのオブジェクト リスト ウィジェットを追加できます。ダッシュボードを編集する際に [ウィジェットの相互作用] オプションで、Object List 1 を送信側、Object List 2 を受信側として構成できます。Object List 2 がセルフ モードにあるときに Object List 1 でオブジェクトを選択すると、Object List 2 には選択したオブジェクトの情報のみが表示されます。Object List 1 に親モード、Object List 2 に子モードを選択すると、Object List 2 ウィジェットには、Object List 1 で選択するオブジェクトの子オブジェクトのみが表示されます。たとえば、Object List 1 でホスト システムを選択すると、Object List 2 ウィジェットには、そのホスト上のすべての仮想マシンが表示されます。</p>
最初の行を自動選択	データの最初の行から開始するかどうかを決定します。
フィルタリングするタグの選択	<p>表示するオブジェクトを、オブジェクト ツリーから選択します。たとえば、インベントリ内の仮想マシンと vCenter Server に関する情報を表示するには、[すべて折りたたむ] をクリックし、[オブジェクト タイプ] の下にある [仮想マシン] と [vCenter Server] を選択する必要があります。</p>
追加の列	<p>データ グリッドに、各オブジェクトに固有のメトリックが設定された列を追加します。</p> <p>メトリックを追加するには、[メトリックの選択] をクリックして、[オブジェクト タイプがあるメトリックの選択] ダイアログ ボックスに移動します。オブジェクト タイプで使用可能なメトリックを調べてメトリックを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [オブジェクト タイプ] ペイン：オブジェクト タイプのツリーからオブジェクト タイプを選択するのに使用します。メトリック ピッカー ツリーのメトリックは、選択するオブジェクト タイプによって異なります。 ■ [アダプタ タイプ] ペイン：オブジェクトで使用するアダプタを基準にして、リスト内のオブジェクトをフィルタリングするのに使用します。デフォルトでは、すべての使用可能なアダプタ タイプが選択されます。ドロップダウン メニューを使用して、特定のタイプを選択できます。ドロップダウンの隣にある閉じるアイコンを使用して、すべてのアダプタを選択できます。 ■ メトリック ピッカー：表示する 1つまたは複数のメトリックを選択するのに使用します。メトリック リストは、各オブジェクトのタイプとインスタンスに応じて異なります。選択した各メトリックは、[選択されたメトリック] データ グリッドに追加されます。 ■ 複数選択の相互作用の実施：メトリック ツリーから複数のメトリックを選択するのに使用します。 ■ オブジェクトの選択：オブジェクトを選択して、メトリックをピッカーするのに使用します。 ■ 選択されたメトリック：選択されたメトリックの削除、ソート、並べ替え、およびデータ グリッド列の操作を実行するのに使用します。

オブジェクト関係ウィジェット

オブジェクト関係ウィジェットには、選択したオブジェクトの階層ツリーが表示されます。カスタム ダッシュボードに追加する選択したオブジェクトに対して、vRealize Operations Manager 内に 1 つまたは複数の階層ツリーを作成できます。

オブジェクト関係ウィジェットと構成オプションの動作

オブジェクト関係ウィジェットを 1 つまたは複数のカスタムのダッシュボードに追加し、他のダッシュボード ユーザーにとって重要なデータを表示するように構成できます。ウィジェットには、各ウィジェット インスタンスに構成済みオプションに基づいてデータが表示されます。



オブジェクト関係ウィジェットは、ダッシュボードに追加してから編集します。オプションを変更することで、ダッシュボード ユーザーのニーズに対応するためのカスタム ウィジェットを作成できます。

オブジェクト関係ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

オブジェクト関係ウィジェットと構成オプション

オブジェクト関係ウィジェットにはツールバー オプションが含まれます。

オプション	説明
ダッシュボードのナビゲーション	表示中のオブジェクトが移動先のダッシュボードでも使用可能な場合、別のダッシュボードに移動できます。別のダッシュボードに移動できるようにするには、ダッシュボードを作成または編集するときに関連オプションを構成します。
バッジ	オブジェクトの健全性、リスク、または効率に関する各アラートを関係マップに表示します。ウィジェットに表示するオブジェクトのバッジを選択できます。バッジのヒントには、オブジェクト名、オブジェクト タイプ、選択されているバッジの名前、バッジの値が表示されます。一度に選択できるバッジは 1 つのみです。
表示に合わせてズーム	使用可能な領域に合わせてチャートをリセットします。

オプション	説明
パン	このアイコンをクリックし、階層をクリックしてドラッグすると、階層の別の部分が表示されます。
ポイント時に値を表示する	チャート内でデータ ポイントの上にマウスを置いたときに、データ ポイントのツールチップの表示/非表示を切り替えます。
ビューをズーム	このアイコンをクリックし、ドラッグして階層の一部を囲みます。囲まれた部分のみがズームして表示されます。
フィルター基準の表示	ポップアップ ウィンドウにウィジェットのフィルター設定を表示します。
ズームイン	階層を拡大します。
ズームアウト	階層を縮小します。
オブジェクトを初期設定に戻す	初期構成またはウィジェット相互作用の階層を変更する場合、このアイコンをクリックして初期リソースに戻します。このアイコンをクリックすると、最初の表示サイズもリセットされます。
オブジェクト詳細	オブジェクトを選択し、このアイコンをクリックすると、そのオブジェクトの [オブジェクト詳細] ページが表示されます。
アラートの表示	階層内のリソースを選択しこのアイコンをクリックすると、そのリソースのアラートが表示されます。ポップアップ ウィンドウにアラートが表示されます。アラートをダブルクリックすると、その [アラート サマリ] ページが表示されます。

オブジェクト関係ウィジェットには、次の構成オプションがあります。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト このテキスト ボックスは、オブジェクト リストで選択したオブジェクトによって自動で入力されます。
固定ノード サイズに自動ズーム	ウィジェット表示でのオブジェクト アイコンの固定ズーム レベルを構成できます。 ウィジェット表示に多くのオブジェクトが含まれているため常に手動でズームしなければならない場合、この機能は一度だけでズーム レベルを設定できるため便利です。

オプション	説明
ノード サイズ	オブジェクト アイコンが表示される固定ズーム レベルを設定できます。アイコンのサイズをピクセル単位で入力します。 ウィジェットには、構成したピクセル サイズでオブジェクト アイコンが表示されます。
オブジェクト選択	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。
フィルタリングするタグの選択	ウィジェットに表示される親および子オブジェクトをフィルタリングします。タグを選択した場合、選択と一致する親および子オブジェクトだけがウィジェットに表示されます。選択したオブジェクトの親および子オブジェクトをすべて表示するには、タグの値を選択しないでください。

オブジェクト関係（詳細）ウィジェット

オブジェクト関係（詳細）ウィジェットには、選択したオブジェクトの階層ツリーが表示されます。詳細構成オプションが提供されます。カスタム ダッシュボードに追加する選択したオブジェクトに対して、vRealize Operations Manager 内に 1 つまたは複数の階層ツリーを作成できます。

オブジェクト関係（詳細）ウィジェットと構成オプションの動作

オブジェクト関係（詳細）ウィジェットを 1 つまたは複数のカスタムのダッシュボードに追加し、他のダッシュボード ユーザーにとって重要なデータを表示するように構成できます。ウィジェットには、各ウィジェット インスタンスに構成済みオプションに基づいてデータが表示されます。

オブジェクト関係（詳細）ウィジェットは、ダッシュボードに追加してから編集します。オプションを変更することで、ダッシュボード ユーザーのニーズに対応するためのカスタム ウィジェットを作成できます。

オブジェクト関係（詳細）ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

オブジェクト関係（詳細）ウィジェットのツールバーと構成オプション

オブジェクト関係（詳細）ウィジェットにはツールバー オプションが含まれます。

オプション	説明
ダッシュボードのナビゲーション	表示中のオブジェクトが移動先のダッシュボードでも使用可能な場合、別のダッシュボードに移動できます。別のダッシュボードに移動できるようにするには、ダッシュボードを作成または編集するときに関連オプションを構成します。
バッジ	オブジェクトの健全性、リスク、または効率に関する各アラートを関係マップに表示します。ウィジェットに表示するオブジェクトのバッジを選択できます。バッジのヒントには、オブジェクト名、オブジェクト タイプ、選択されているバッジの名前、バッジの値が表示されます。一度に選択できるバッジは 1 つのみです。
表示に合わせてズーム	使用可能な領域に合わせてチャートをリセットします。

オプション	説明
パン	このアイコンをクリックし、階層をクリックしてドラッグすると、階層の別の部分が表示されます。
ポイント時に値を表示する	チャート内でデータ ポイントの上にマウスを置いたときに、データ ポイントのツールチップの表示/非表示を切り替えます。
フィルター基準の表示	ポップアップ ウィンドウにウィジェットのフィルター設定を表示します。
ビューをズーム	このアイコンをクリックし、ドラッグして階層の一部を囲みます。囲まれた部分のみがズームして表示されます。
ズームイン	階層を拡大します。
ズームアウト	階層を縮小します。
オブジェクトを初期設定に戻す	初期構成またはウィジェット相互作用の階層を変更する場合、このアイコンをクリックして初期リソースに戻します。このアイコンをクリックすると、最初の表示サイズもリセットされます。
オブジェクト詳細	オブジェクトを選択し、このアイコンをクリックすると、そのオブジェクトの [オブジェクト詳細] ページが表示されます。
アラートの表示	階層内のリソースを選択しこのアイコンをクリックすると、そのリソースのアラートが表示されます。ポップアップ ウィンドウにアラートが表示されます。アラートをダブルクリックすると、その [アラート サマリ] ページが表示されます。
ページネーション	表示する親オブジェクトまたは子オブジェクトの数を選択できます。デフォルト値は 1 ～ 100 です。

オブジェクト関係（詳細）ウィジェットには次の構成オプションが含まれます。

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト このテキスト ボックスは、オブジェクト リストで選択したオブジェクトによって自動で入力されます。

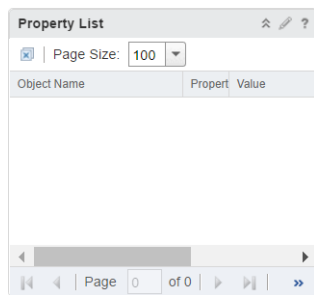
オプション	説明
オブジェクト選択	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。
フィルタリングするタグの選択	ウィジェットに表示される親および子オブジェクトをフィルタリングします。タグを選択した場合、選択と一致する親および子オブジェクトだけがウィジェットに表示されます。選択したオブジェクトの親および子オブジェクトをすべて表示するには、タグの値を選択しないでください。

プロパティ リスト ウィジェット

プロパティ リスト ウィジェットでは、オブジェクトのプロパティとその値を表示できます。

プロパティ リスト ウィジェットと構成オプションの動作

オブジェクトのプロパティをプロパティ リスト ウィジェットで確認するには、ウィジェット自体を構成するときにオブジェクト プロパティ メトリックを選択するか（セルフ プロバイダ モードが有効の場合）、別のウィジェットからオブジェクトまたはオブジェクト プロパティ メトリックを選択します（セルフ プロバイダ モードが無効の場合）。ウィジェット構成ウィンドウの [メトリック構成] ドロップダウン リストから事前構成済み XML ファイルを選択して、一連のデフォルト プロパティやカスタム プロパティを表示することもできます。



プロパティ リスト ウィジェットは、ダッシュボードに追加してから編集します。セルフ プロバイダ モードを [オフ] にして、別のウィジェットからのデータを受信するようにウィジェットを構成できます。セルフ プロバイダ モードではない場合、ウィジェットには、ソース ウィジェットで選択したオブジェクトの一連の事前定義プロパティとその値が表示されます。たとえば、トポロジ ウィジェットでホストを選択し、プロパティ リスト ウィジェットでそのプロパティを確認することができます。プロパティ リストを同じダッシュボードにある受信者ウィジェットとして構成するには、ダッシュボードを編集する際に [ウィジェットの相互作用] メニューを使用します。別のダッシュボードにある受信者ウィジェットを構成するには、ソース ダッシュボードを編集する際に [ダッシュボードのナビゲーション] メニューを使用します。

プロパティ リスト ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

プロパティ リスト ウィジェットと構成オプション

プロパティ リスト ウィジェットには、データ グリッド オプションがあります。

オプション	説明
オブジェクト名	プロパティを確認するオブジェクトの名前。プロパティをオブジェクト名で並べ替えることができます。オブジェクト名をクリックすると、[オブジェクトの詳細] ページが開きます。
プロパティ名	プロパティの名前。プロパティをプロパティ名で並べ替えることができます。
値	プロパティの値。プロパティを値で並べ替えることができます。

プロパティ リスト ウィジェットには、構成オプションが含まれます。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。.
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
メトリック構成	情報が別のウィジェットとの相互作用に基づいている場合、表示する属性を持つリストを指定します。 CLI ディレクトリを通じてリソース相互作用 XML ファイルを追加するには、 リソース相互作用 XML ファイルの追加 を参照してください。ユーザー インターフェイスを通じてリソース相互作用 XML ファイルを追加するには、 メトリック構成の管理 を参照してください。 新規作成された XML ファイルがウィジェットの [メトリック構成] ドロップダウン メニューに表示されます。
オブジェクト	<ul style="list-style-type: none"> ■ オブジェクト ツリー オブジェクト リストのデータ グリッドでオブジェクトのフィルタリングに使用します。たとえば、[オブジェクト タイプ] を展開して [仮想マシン] を選択すると、オブジェクト リストのデータ グリッドでインベントリからの VM のみを確認することができます。 ■ オブジェクト リスト 環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。 リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。

オプション	説明
プロパティ ツリー	オブジェクト リストから選択したオブジェクトのプロパティをダブルクリックすると、ウィジェットでその内容を確認することができます。
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト

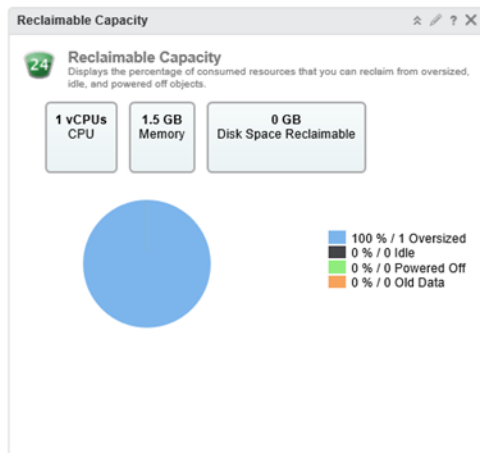
解放可能な容量ウィジェット

節約可能なキャパシティ ウィジェットは、コンシューマがいる特定リソースの節約可能な浪費の量を表す割合チャートを表示します。

節約可能なキャパシティ ウィジェットを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ウィジェットに表示されるデータは、その構成方法によって決まります。ウィジェットを構成するには、タイトル バーの [編集] アイコンをクリックして設定を構成します。



オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。

オプション	説明
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト
オブジェクト リスト	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。 リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。

推奨アクション ウィジェット

推奨アクション ウィジェットには、vCenter Server インスタンスの問題を解決するための推奨事項が表示されます。推奨事項に従って、データセンター、クラスタ、ホスト、および仮想マシンに対するアクションを実行できます。

推奨アクション ウィジェットおよび構成オプションの動作

推奨アクション ウィジェットがホーム ダッシュボードに表示され、vCenter Server インスタンス内のオブジェクトの健全性ステータスが表示されます。クリティカルな状態にあるオブジェクト数、および緊急の対処を必要とするオブジェクト数が一目で分かります。

推奨アクション ウィジェットから、たとえばアラートがトリガしたオブジェクトをクリックし、そして個々のアラートをクリックすることにより、問題にさらにフォーカスを当てることができます。

ホーム ダッシュボード、またはウィジェットを追加する別のダッシュボードで、推奨アクション ウィジェットを編集できます。ウィジェット構成オプションで、ウィジェットに新しい名前を割り当て、更新内容と更新間隔を設定できます。

推奨アクション ウィジェットおよび構成オプションを確認できる場所

推奨アクション ウィジェットは、ホームという名前のダッシュボードが表示されます。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、[ホーム] という名前のダッシュボードをクリックします。

推奨アクション ウィジェットのオプション

推奨アクション ウィジェットには、選択バー、サマリ ペイン、データ グリッドのツールバー、データ グリッドのオブジェクトのアラート情報が含まれます。

表 4-133. 推奨アクションウィジェット選択バーおよびサマリ ペイン

オプション	説明
スコープ	vCenter Server のインスタンス、およびそのインスタンス内のデータセンターを選択できます。
オブジェクトのタブ	オブジェクト タイプと、括弧内に影響を受けるオブジェクトの数が示されます。仮想マシン、ホスト システム、クラスタ、vCenter Server インスタンス、およびデータ ストアのアクションを表示できます。

表 4-133. 推奨アクションウィジェット選択バーおよびサマリ ペイン （続き）

オプション	説明
バッジ	<p>オブジェクトにアラートを表示する健全性、リスク、または効率のバッジを選択します。健全性アラートは、直ちに対処する必要があります。リスク アラートは、緊急の注意を必要とします。無駄な容量の回収、またはオブジェクトのパフォーマンスの向上のために、効率アラートに入力する必要があります。各バッジについて、クリティカル アラート、緊急アラート、および警告アラートを表示できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 健全性ステータス。健全性バッジを選択した状態で、影響を受けるオブジェクトの数、およびオブジェクトに対してトリガしたアラートに基づく健全性のサマリが表示されます。健全性が最悪のオブジェクト、および各オブジェクトでトリガしたアラートの数がリストに表示されます。 ■ リスク ステータス。リスク バッジを選択した状態で、影響を受けるオブジェクトの数、およびオブジェクトに対してトリガしたアラートに基づくリスクのサマリが表示されます。最も高いオブジェクト、および各オブジェクトでトリガしたアラートの数がリストに表示されます。 ■ 効率ステータス。効率バッジを選択した状態で、影響を受けるオブジェクトの数が示されます。オブジェクトに対してトリガしたアラートに基づいて、効率が最小のオブジェクト、および各オブジェクトでトリガしたアラートの数がリストに示されます。
検索フィルタ	<p>表示されるオブジェクトの範囲を絞り込みます。オブジェクトを検索および表示するための文字または数字を入力します。フィルタがアクティブな場合、フィルタの名前が [検索フィルタ] テキスト ボックスの下に表示されます。</p>

推奨アクション ウィジェットには、ツールバーと、トリガしたアラートを表示するデータ グリッドが含まれます。

表 4-134. ツールバーおよびデータ グリッド

オプション	説明
ツールバー	<p>このツールバーでは、アラートに対応し、アラートのリストをフィルタできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アラートのキャンセル。選択したアラートをキャンセルします。 <p>対処する必要がないアラートをキャンセルします。アラートをキャンセルしても、そのアラートの生成の基盤となった条件はキャンセルされません。アラートのキャンセルは、トリガーされた障害やイベントの症状によってアラートが生成された場合に有効です。これらの症状は、監視対象オブジェクトでその後の障害またはイベントが発生した場合にのみ再度トリガーされるためです。メトリックまたはプロパティの症状に基づいてアラートが生成される場合、そのアラートは、次の収集および分析サイクルまでしかキャンセルされません。違反値が依然として存在する場合は、アラートが再度生成されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ サスペンド。指定された分数の間アラートをサスペンドします。 <p>アラートを調査しているとき、作業中にアラートがオブジェクトの健全性、リスク、または効率に影響しないようにアラートをサスペンドします。経過時間後に問題が解決されない場合、アラートが再アクティブ化され、再びオブジェクトの健全性、リスク、または効率に影響を与えます。</p> <p>アラートをサスペンドしたユーザーは所有者として割り当てられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ すべてのフィルタ。利用可能ないずれかのフィルタ タイプに検索を絞り込みます。たとえば、コンプライアンス アラート サブタイプに関連するすべてのアラートを表示できます。 ■ クイック フィルタ (アラート)
データ グリッド	<p>データ グリッドには、オブジェクトに対してトリガしたアラートが表示されます。アラートによって示された問題を解決するために、アラート、およびアラートがトリガしたオブジェクトへのリンクを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 重要度。 <p>環境内でのアラートの重要度レベルを示します。アラートの重要度は、重要度アイコンの上にマウスを置いたときにツールチップに表示されます。</p> <p>このレベルは、アラート定義の作成時に割り当てられたレベルに基づきます。割り当てられたレベルが [シムptom ベース] の場合は、症状の最高の重要度に基づきます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アクション可能。アラートにアクションが関連付けられている場合、アラートを解決するためにオブジェクトに対してそのアクションを実行できます。 ■ 提案された修正。問題解決のための推奨事項について説明します。たとえば、コンプライアンス アラートの推奨事項では、問題解決のために vSphere セキュリティ強化ガイドを使用するように指示されます。 <p>vSphere セキュリティ強化ガイドについては、http://www.vmware.com/security/hardening-guides.html を参照してください。</p> <p>ドロップダウン メニューをクリックすると、問題解決のためのその他の推奨方法および関連する操作があれば、これも表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 名前。 <p>アラートが生成されたオブジェクトの名前と、オブジェクト名の上にマウスを置いたときにツールチップに表示されるオブジェクト タイプです。</p> <p>オブジェクト名をクリックすると、オブジェクトの詳細タブが表示されます。ここで、オブジェクトに他に何か問題がないかどうかについて調査を開始できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アラート。 <p>アラートを生成したアラートの定義名。</p> <p>アラートの名前をクリックするとアラートの詳細タブが表示され、ここでアラートのトラブルシューティングを開始できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アラート タイプ。 <p>選択したオブジェクトに対して起動したアラートのタイプが表示されます。これにより、アラートを分類し、特定タイプのアラートを特定のシステム管理者に割り当てることができます。たとえば、[アプリケーション]、[仮想化/ハイパーバイザ]、[ハードウェア]、[ストレージ]、[ネットワーク] などが表示されます。</p>

表 4-134. ツールバーおよびデータ グリッド (続き)

オプション	説明
	<ul style="list-style-type: none"> ■ アラート サブタイプ。 選択したオブジェクトに対して起動したアラートのタイプについて、その他の情報が表示されます。これにより、アラート タイプよりも詳細にアラートを分類し、特定タイプのアラートを特定のシステム管理者に割り当てることができます。たとえば、[可用性]、[パフォーマンス]、[容量]、[コンプライアンス]、[構成] などが表示されます。 ■ 時間。アラートがトリガした日時。 ■ アラート ID。アラート固有の識別情報。この列は、デフォルトで非表示になっています。 詳細については、アラートを参照してください。

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .

リスク ウィジェット

リスク ウィジェットは、監視するように構成されたオブジェクトのリスク関連アラートのステータスです。通常、vRealize Operations Manager のリスク アラートは、近い将来に問題を調査する必要があることを示します。カスタム ダッシュボードに追加するオブジェクトに対して 1 つ以上のリスク ウィジェットを作成できます。

リスク ウィジェットと構成オプションの仕組み

リスク ウィジェットを 1 つ以上のカスタム ダッシュボードに追加して、ダッシュボード ユーザーにとって重要なデータを表示するように構成できます。

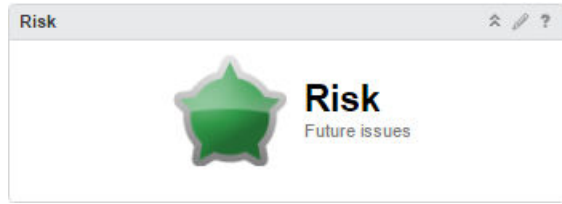
バッジの状態は、アラート定義に基づきます。バッジをクリックすると、ウィジェット内に構成されたオブジェクトまたはグループの [サマリ] タブが表示されます。[概要] タブから、現在の状態を引き起こした原因の判定を開始できます。ウィジェットが、子孫を持つオブジェクトに構成されている場合は、子孫の状態も確認する必要があります。子オブジェクト側に親には影響しないアラートがある場合があります。

バッジ モードの構成オプションがオフに設定されていると、バッジとチャートが表示されます。チャートのタイプは、ウィジェットで監視対象として構成されたオブジェクト タイプによって異なります。

- 監視対象オブジェクトがグループの場合は、一定期間に生成された重大、緊急、警告のリスク アラートが存在するグループ メンバーの割合がポピュレーションの重要度チャートに表示されます。
- 他のすべてのオブジェクト タイプの場合は、監視対象オブジェクトのリスク ステータスがトレンド ラインに表示されます。

[バッジ モード] がオンになっている場合は、バッジのみ表示されます。

リスク ウィジェットを編集するには、リスク ウィジェットをダッシュボードに追加します。オプションに対して行った変更により、個々のオブジェクト、オブジェクトのカスタム グループ、または環境内のすべてのオブジェクトに関する情報を提供するカスタム ウィジェットが作成されます。



リスク ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

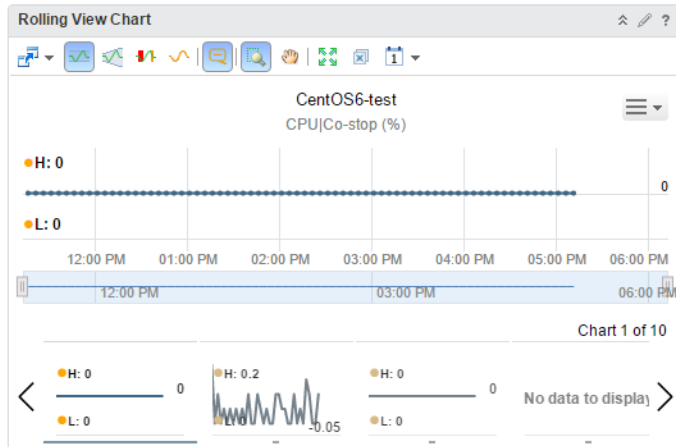
ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

オプション	説明
リスク バッジ	このウィジェットのインスタンスに構成されているオブジェクトのステータス。 バッジをクリックすると、ウィジェットにデータを提供するオブジェクトの [アラート] タブが開きます。
バッジのチャート	選択済みまたは構成済みのオブジェクトに基づいてチャートを表示します。チャートは、監視対象のオブジェクトが、グループ、子孫オブジェクト、またはリソースをその他のオブジェクトに提供するオブジェクトのいずれであるかによって変わります。チャートは、[バッジ モード] の構成オプションがオフに設定されている場合にのみ表示されます。[バッジ モード] がオンになっている場合は、バッジのみ表示されます。
オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト このテキスト ボックスは、オブジェクト リストで選択したオブジェクトによって自動で入力されます。

オプション	説明
バッジ モード	<p>ウィジェットでバッジのみを表示するのか、バッジと、ウェザー マップまたは傾向チャートを表示するのかを決定します。</p> <p>以下のいずれかのオプションを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにバッジのみが表示されます。 ■ オフ。ウィジェットに、バッジとチャートが表示されます。チャートにより、オブジェクトの状態に関する追加情報が得られます。
オブジェクト リスト	<p>環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。</p> <p>リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。</p>

ローリング ビュー グラフ ウィジェット

ローリング ビュー グラフ ウィジェットは、定義した間隔で選択したメトリックを順に切り替え、1 回に 1 つのメトリック グラフを表示します。選択したすべてのメトリックについて、展開可能な小さなグラフがウィジェットの下部に表示されます。



ローリング ビュー グラフ ウィジェットの仕組み

ローリング ビュー グラフ ウィジェットには、一度に選択した 1 つのメトリックの完全なグラフが表示されます。選択した他のメトリックの小さなグラフがウィジェットの下部に表示されます。小さなグラフをクリックすると、そのメトリックの完全なグラフが表示されます。あるいは、指定した間隔で選択してあるすべてのメトリックを順に表示するようウィジェットを設定することができます。グラフ内のカギは、線グラフの最大ポイントと最小ポイントを示します。

ローリング ビュー グラフ ウィジェットを編集するには、ローリング ビュー グラフ ウィジェットをダッシュボードに追加します。オプションに変更を加えることで、ダッシュボード ユーザーのニーズに応じたカスタム グラフを作成できます。

ローリング ビュー グラフ ウィジェットを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ローリング ビュー グラフ ウィジェットのツールバー

ローリング ビュー グラフ ウィジェットの最上部にあるツールバーには、グラフのビューを変更するのに使用できるアイコンが含まれています。

アイコン	説明
[トレンド ライン]	メトリックのトレンドを表すラインおよびデータ ポイントの表示/非表示を切り替えます。トレンド ラインは、隣接するデータ ポイントの平均に照らして各データ ポイントをプロットすることにより、タイムラインに沿ってメトリック ノイズを除外します。
[動的しきい値]	24 時間内で計算された動的しきい値の表示/非表示を切り替えます。
[全期間における動的しきい値の表示]	グラフの全期間の動的しきい値の表示/非表示を切り替えます。
[異常]	異常の表示/非表示を切り替えます。メトリックがしきい値を超えている期間が影付きで表示されます。異常は、メトリックが動的しきい値または静的しきい値を上回った場合、または下回った場合に生成されます。
[表示に合わせてズーム]	すべてのグラフを変更し、期間および値の範囲全体を表示します。
[ビューをズーム]	このアイコンをクリックし、ドラッグして階層の一部を囲みます。囲まれた部分のみがズームして表示されます。
[パン]	このアイコンをクリックし、階層をクリックしてドラッグすると、階層の別の部分が表示されます。
[データ値の表示]	[データ ポイント チップの表示]アイコンをクリックしてデータを取得した後にこのアイコンをクリックしてグラフ化されたデータ ポイントをポイントすると、その時間と正確な値が表示されます。非分割モードでは、凡例のメトリックにマウスでポイントすることで、完全なメトリック名、メトリックが属するリソースにデータを提供するアダプタ インスタンス名（存在する場合）、現在の値、正常範囲を表示できます。メトリックにアラームが発生している場合、凡例の文字色が配色に応じて黄色または赤色に変化します。凡例のメトリックをクリックして、メトリックを強調表示します。メトリックを再びクリックすると、強調表示の状態が切り替わります。
[日付コントロール]	日付セレクトアを使用して、各チャートに表示されるデータを調査中の期間に限定します。

ローリング ビュー グラフ ウィジェットの構成オプション

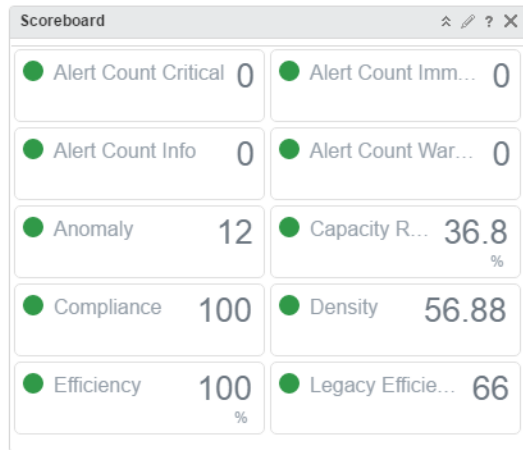
ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。

オプション	説明
メトリック構成	<p>情報が別のウィジェットとの相互作用に基づいている場合、表示する属性を持つリストを指定します。</p> <p>CLI ディレクトリを通じてリソース相互作用 XML ファイルを追加するには、リソース相互作用 XML ファイルの追加を参照してください。ユーザー インターフェイスを通じてリソース相互作用 XML ファイルを追加するには、メトリック構成の管理を参照してください。</p> <p>新規作成された XML ファイルがウィジェットの [メトリック構成] ドロップダウン メニューに表示されます。</p>
自動移行の間隔	ウィジェット内のチャート間を切り替える時間間隔。
チャート ツールバーの表示	ツールバー オプションがウィジェットに表示されるかどうかを決定します。
タグ ツリー	オブジェクト リスト内のオブジェクトのリストをフィルタリングします。1 つ以上のオブジェクト タイプを選択でき、このタイプのすべてのオブジェクトがオブジェクト リストに表示されます。
オブジェクト リスト	<p>環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。</p> <p>オブジェクトは、選択されたタグに基づいて示されます。タグが選択されていない場合には、リストにはシステムのすべてのオブジェクトが表示されます。</p>
メトリック ピッカー	メトリックをダブルクリックし、ウィジェットに表示します。
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト

スコアボード ウィジェット

スコアボード ウィジェットには、選択したオブジェクトの各メトリックの現在の値が表示されます。



スコアボード ウィジェットの仕組み

各メトリックは、別個のボックスに表示されます。メトリックの値により、ボックスの色が決まります。ウィジェットの編集時に、それぞれの色に範囲を定義します。各メトリックの変更のトレンドを表示するため、スパークライングラフを使用するようにウィジェットをカスタマイズできます。ボックスをポイントすると、ソース オブジェクトとメトリック データがウィジェットに表示されます。

スコアボード ウィジェットを編集するには、スコアボード ウィジェットをダッシュボードに追加します。このウィジェットには、ウィジェットの編集時に選択したオブジェクト、または別のウィジェットで選択したオブジェクトのメトリックを表示できます。スコアボード ウィジェットがセルフ プロバイダ モード以外の場合は、メトリック構成で選択した XML 構成ファイルで定義されたメトリックが表示されます。XML ファイルを選択しなかった場合、または選択したオブジェクトのタイプが XML ファイルに定義されていない場合に、事前定義された 10 個のメトリックを表示します。

たとえば、サンプルのスコアボード メトリック構成を使用し、トポロジ グラフ ウィジェットからオブジェクトを取得するようにスコアボード ウィジェットを構成できます。トポロジ グラフ ウィジェットでホストを選択すると、ホストのワークロード、メモリ、CPU 使用量がスコアボード ウィジェットに表示されます。

同じダッシュボードにあるソース ウィジェットを設定するには、ダッシュボードの編集時に [ウィジェットの相互作用] メニューを使用する必要があります。別のダッシュボードにあるソース ウィジェットを設定するには、ソース ダッシュボードの編集時に [ダッシュボードのナビゲーション] メニューを使用する必要があります。

スコアボード ウィジェットを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

スコアボード ウィジェットの構成オプション

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
メトリック構成	情報が別のウィジェットとの相互作用に基づいている場合、表示する属性を持つリストを指定します。 CLI ディレクトリを通じてリソース相互作用 XML ファイルを追加するには、 リソース相互作用 XML ファイルの追加 を参照してください。ユーザー インターフェイスを通じてリソース相互作用 XML ファイルを追加するには、 メトリック構成の管理 を参照してください。 新規作成された XML ファイルがウィジェットの [メトリック構成] ドロップダウン メニューに表示されます。
レイアウト モード	固定サイズまたは固定ビューのレイアウトを選択します。
ボックスの高さ ボックスの列	これらのメニューを使用して、各オブジェクトのボックスのサイズをカスタマイズします。

オプション	説明
ビジュアル テーマ	ウィジェットの各インスタンス用の事前定義されたビジュアル スタイルを選択します。オプションは [オリジナル]、[テーマ 1]、[テーマ 2]、[テーマ 3]、[テーマ 4] です。デフォルト スタイルはテーマ 2 です。
ラベル サイズ 値のサイズ	これらのメニューを使用して、ウィジェットに表示されるスコアの形式をカスタマイズします。
オブジェクト名を表示	オブジェクト名を表示するかどうかを選択します。
メトリック名の表示	ウィジェットでメトリックの名前を表示するかどうかを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ [オン]。選択したメトリックの名前がウィジェットに表示されます。 ■ [オフ]。選択したメトリックの名前はウィジェットに表示されません。
メトリックの単位を表示	ウィジェットでメトリックの単位を表示するかどうかを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ [オン]。選択したメトリックの名前がウィジェットに表示されます。 ■ [オフ]。選択したメトリックの名前はウィジェットに表示されません。
スパークラインを表示	各メトリックのスパークライン チャートを表示するかどうかを選択します。ウィジェットでスパークラインを表示することを選択した場合は、チャートに含まれる [期間の長さ] オプションから時間枠を選択できます。
期間の長さ	スパークライン チャートに表示される統計情報の期間を選択します。
オブジェクト	<p>ウィジェット データの基準となるオブジェクト</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オブジェクト ツリー <p>オブジェクト データ グリッドのオブジェクトのリストをフィルタリングできます。1 つ以上のオブジェクト タイプを選択でき、そのタイプのすべてのオブジェクトがデータ グリッドに表示されます。たとえば、インベントリ内の仮想マシンおよび vCenter Server に関する情報を表示するには、[すべて折りたたむ] をクリックし、オブジェクト ツリーの [オブジェクト タイプ] を展開して、[仮想マシン] と [vCenter Server] を選択します。データ グリッドには、インベントリの仮想マシン オブジェクトと vCenter Server オブジェクトのみが表示されます。アダプタ タイプを選択解除するには、[すべて選択解除] をクリックします。</p> ■ オブジェクト データ グリッド <p>環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、メトリックを選択するオブジェクトを特定できます。</p> <p>リストのオブジェクトをクリックすると、そのメトリックがメトリック ツリーに表示されます。リスト内のオブジェクトにマークを付け、[複数選択の相互作用の実施] ツールバー アイコンをクリックすると、データ グリッドから複数のオブジェクトを選択できます。1 つまたは複数のオブジェクトを選択解除するには、[選択のクリア] ツールバー アイコンをクリックします。</p>

オプション	説明
オブジェクト タイプ	<p>利用可能なオブジェクト タイプのリスト。メトリック ツリーの基準となるオブジェクト タイプを選択する場合に使用します。メトリック ペインで [オブジェクトの選択] ツールバー アイコンをクリックするときに、オブジェクト タイプからオブジェクトを選択し、そのメトリックを選択できます。[オブジェクトの選択] をクリックすると、選択したオブジェクト タイプのオブジェクトのリストに移動します。たとえば、[オブジェクト タイプ] データ グリッドで [データセンター] を選択し、[オブジェクトの選択] をクリックすると、環境内のデータセンターを含むリストに移動します。</p>
メトリック ツリー	<p>データ グリッドで選択したオブジェクトまたはオブジェクト タイプに使用できるメトリックを表示します。メトリック ツリーを使用して、ウィジェットの基準となるメトリックを選択します。[共通メトリックの表示] ツールバー アイコンをクリックすると、いくつかのオブジェクトの共通メトリックをメトリック ツリーに表示できます。複数のメトリックを選択するには、ツリーからメトリックを選択し、[複数選択の相互作用の実施] をクリックします。</p> <p>[オブジェクト タイプ] タブを使用すると、[オブジェクトの選択] ツールバー アイコンが表示されます。</p>
オブジェクト リスト	<p>ウィジェットに表示されるオブジェクトとそのメトリックのリスト。</p> <p>オブジェクト データ グリッドおよびメトリック ツリーで選択したオブジェクトとメトリックは、[オブジェクト] 列と [メトリック] 列に反映されます。</p> <p>[ボックス ラベル] テキスト ボックスを使用すると、ウィジェットの各メトリック ボックスのラベルをカスタマイズできます。</p> <p>[測定単位] テキスト ボックスを使用すると、各メトリックの測定単位を定義できます。</p> <p>[カラー メソッド] オプションを使用すると、色付けの条件を定義できます。メトリック ボックスの色の値を定義するには、テキスト ボックスに値を入力します。色を使用しない場合は、[なし] を選択します。</p> <p>[すべてに適用] ツールバー アイコンを使用すると、1 つのメトリック ボックスをカスタマイズし、同じカスタマイズをすべてのメトリックに適用できます。</p> <p>たとえば、仮想マシンの残りのメモリ容量を確認するには、[仮想マシン] をオブジェクト タイプとして選択し、メトリック ツリーの [メモリ] を展開し、[残り容量 (%)] をダブルクリックします。メトリックを確認しやすくするため、わかりやすいラベル名と測定単位を定義してください。</p> <p>[カラー メソッド] ドロップダウン メニューで [カスタム] を選択し、色ごとに異なる値 (黄色には 50、オレンジには 20、赤には 10 など) を指定できます。選択した他のすべてのメトリックに同じラベルと色の条件を適用するには、[すべてに適用] をクリックします。</p>

スコアボードの健全性ウィジェット

スコアボードの健全性ウィジェットには、選択したオブジェクトの健全性、リスク、効率、カスタム メトリックのスコアが色分けして表示されます。

スコアボードの健全性ウィジェットと構成オプションの仕組み

各オブジェクトのアイコンは色分けされており、オブジェクトの状態を迅速に確認できます。オブジェクトの共通または特定のメトリックのスコアを表示するようにウィジェットを構成できます。症状の状態の色分けを使用したり、イメージに色を付ける条件を定義できます。このメトリックを持たないオブジェクトのメトリックを表示するようにウィジェットを構成すると、これらのオブジェクトは青色のアイコンになります。

オブジェクト アイコンをダブルクリックすると、オブジェクトの [オブジェクト詳細] ページを表示されます。アイコンをポイントすると、オブジェクト名とメトリック名がツール ヒントに表示されます。

スコアボードの健全性ウィジェットを編集するには、スコアボードの健全性ウィジェットをダッシュボードに追加します。ウィジェットを構成するには、ウィジェット ウィンドウの右上隅で鉛筆をクリックします。このウィジェットには、ウィジェットの編集時に選択したオブジェクト、または別のウィジェットで選択したオブジェクトのメトリックを表示できます。たとえば、トポロジ グラフ ウィジェットで選択したオブジェクトの CPU ワークロードを表示するウィジェットを構成できます。同じダッシュボードにあるソース ウィジェットを設定するには、ダッシュボードの編集時に [ウィジェットの相互作用] メニューを使用する必要があります。別のダッシュボードにあるソース ウィジェットを設定するには、ソース ダッシュボードの編集時に [ダッシュボードのナビゲーション] メニューを使用する必要があります。

スコアボードの健全性ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

スコアボードの健全性ウィジェットの構成オプション

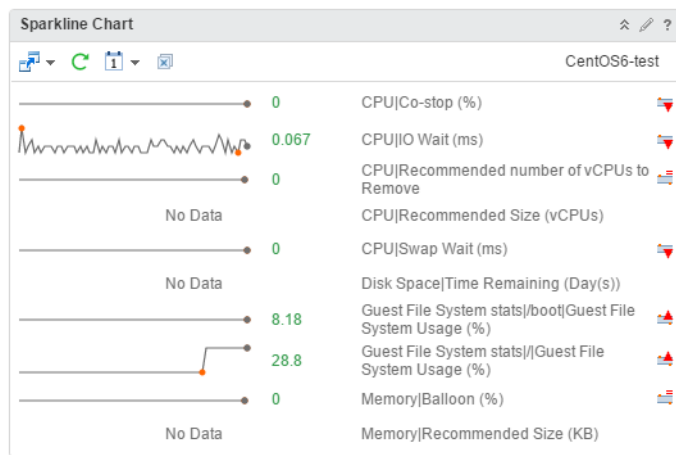
ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
イメージ タイプ	メトリックのイメージ タイプを選択します。

オプション	説明
メトリック	デフォルト メトリックまたはカスタム メトリックを選択します。
メトリックの選択	<p>[メトリック] メニューで [カスタム] を選択した場合にのみアクティブになります。</p> <p>ウィジェットに表示されるオブジェクトにカスタム メトリックを選択する場合に使用します。[メトリックの選択] をクリックし、[オブジェクトタイプ] ペインでオブジェクト タイプを選択します。</p> <p>[メトリック ピッカー] ペインを使用してメトリック ツリーからメトリックを選択し、[オブジェクトの選択] をクリックして、[オブジェクトタイプ] ペインで選択したタイプからオブジェクトを確認します。</p>
症状の状態を使用してチャートに色を付ける	デフォルトの条件を使用してイメージに色を付ける場合に選択します。
カスタムの範囲	カスタム条件を定義してイメージに色を付ける場合に使用します。色ごとに範囲を定義できます。
オブジェクト ツリー	オブジェクト リスト内のオブジェクトをフィルタリングする場合に使用します。たとえば、[オブジェクト タイプ] を展開し、[仮想マシン] を選択すると、環境内の仮想マシンのみを調べることができます。
オブジェクト リスト	<p>環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。</p> <p>リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。</p> <p>[複数選択の相互作用の実施] を使用して、データ グリッドから一度に複数のオブジェクトを選択します。オブジェクトにマークを付け、[複数選択の相互作用の実施] をクリックする必要があります。</p>
選択したオブジェクト	<p>ウィジェット データの基準となるオブジェクト</p> <p>[オブジェクト リスト] オプションから選択したオブジェクトは、[選択したオブジェクト] のリストに反映されます。</p>

スパークライン グラフ ウィジェット

スパークライン グラフ ウィジェットには、vRealize Operations Manager 内のオブジェクトのメトリックを含むグラフが表示されます。vRealize Operations Manager では、カスタム ダッシュボードに追加するオブジェクトのメトリックを含む 1 つ以上のグラフを作成できます。



スパークライン グラフ ウィジェットの仕組み

スパークライン グラフ ウィジェット内のすべてのメトリックが、別のウィジェットで提供されるオブジェクトに関するものである場合、そのオブジェクト名がウィジェットの右上に表示されます。ウィジェット構成の編集時にメトリックを選択すると、ウィジェットではそのメトリックおよび対応するオブジェクトがダッシュボードの相互作用のソースとして使用されます。グラフの線は、指定期間における選択されたメトリックの平均値を示します。グラフの囲み領域は、メトリックの動的しきい値を示します。

スパークライン グラフ ウィジェットのグラフにポインタを置くと、メトリックの値がツール チップの形で表示されます。また、グラフの最大値と最小値を表示することもできます。値はオレンジのドットで表示されます。

スパークライン グラフ ウィジェットを 1 つまたは複数のカスタムのダッシュボードに追加し、他のダッシュボードユーザーにとって重要なデータを表示するように構成できます。ウィジェットには、各ウィジェット インスタンスに構成済みオプションに基づいてデータが表示されます。

スパークライン グラフ ウィジェットを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

スパークライン チャート ウィジェットのツールバー

スパークライン チャート ウィジェットの最上部にあるツールバーには、グラフのビューを変更するのに使用できるアイコンが含まれています。

アイコン	説明
ダッシュボードのナビゲーション	選択したオブジェクトが移動先のダッシュボードでも使用可能な場合、別のダッシュボードに移動できます。別のダッシュボードに移動できるようにするには、ダッシュボードを作成または編集するときに関連オプションを構成します。
更新	ウィジェット データを更新します。
時間の範囲	グラフに表示する時間範囲を選択します。デフォルトの時間範囲リストから期間を選択するか、開始日時と終了日時を選択することができます。
すべてを削除する	すべてのグラフを削除します。

スパークライン グラフ ウィジェットの構成オプション

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。.

オプション	説明
セルフ プロバイダ	<p>ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
オブジェクト名を表示	<p>スパークライン グラフ ウィジェットで、メトリック名の前にオブジェクトの名前を表示できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [オン]。ウィジェットでメトリック名の前にオブジェクトの名前を表示します。 ■ [オフ]。ウィジェットでオブジェクトの名前を表示しません。
メトリック構成	<p>情報が別のウィジェットとの相互作用に基づいている場合、表示する属性を持つリストを指定します。</p> <p>CLI ディレクトリを通じてリソース相互作用 XML ファイルを追加するには、リソース相互作用 XML ファイルの追加を参照してください。ユーザー インターフェイスを通じてリソース相互作用 XML ファイルを追加するには、メトリック構成の管理を参照してください。</p> <p>新規作成された XML ファイルがウィジェットの [メトリック構成] ドロップダウン メニューに表示されます。</p>
コラムのシーケンス	<p>情報の表示順序を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [グラフが先]。メトリック グラフがウィジェット表示の最初の列に表示されます。 ■ [ラベルが先]。メトリック ラベルがウィジェット表示の最初の列に表示されます。
オブジェクト	<p>ウィジェットの構成時に特定のオブジェクトのメトリックを選択できます。</p> <p>1 つまたは複数のタグ値を選択して、オブジェクト リストのペインに表示されるオブジェクトをフィルタリングできます。</p> <p>リストの最上部にあるツールバーのアイコンを使用して、リスト内のすべてのタグの折りたたみおよび選択解除を行うことができます。</p> <p>オブジェクト リストが表示されるペインで、ツールバー オプションを使用して 1 つまたは複数のオブジェクトを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 選択内容をすべてクリアするには、[選択のクリア] アイコンをクリックします。 ■ 複数のオブジェクトを選択するには、[複数選択の相互作用の実施] アイコンをクリックします。 ■ ペインに表示するオブジェクトの数を設定するには、[ページ サイズ] フィールドで値を選択します。 ■ オブジェクトを検索するには、オブジェクト名の全部または一部を [フィルタ] テキスト ボックスに入力します。 <p>選択したオブジェクトに対応するメトリックが、メトリック リストのペインに表示されます。</p>

オプション

説明

メトリックのリストが表示されるペインで、ツールバー オプションを使用して、ウィジェットに表示するメトリックを選択します。

- 複数のメトリックを選択するには、ペインの最上部にあるツールバーで [複数選択の相互作用の実施] アイコンをクリックします。
- 選択した複数のオブジェクトに共通するメトリックを表示するには、ツールバーで [共通メトリックの表示] アイコンをクリックします。
- オブジェクトを表示するには、ツールバーで [オブジェクトの選択] をクリックします。
- 特定のメトリックを検索するには、メトリック名の全部または一部を [フィルタ] テキスト ボックスに入力します。

選択したオブジェクトに対してメトリックを構成できます。選択したメトリックが表示されるペインで、各メトリックに値を設定します。値を入力するには、列の見出しの下にあるテキスト ボックスをポイントし、テキスト ボックス内をダブルクリックして、値を入力します。

- [ボックス ラベル]。メトリックのラベル。
- [測定単位]。メトリック値の後ろに表示される測定単位。
- [カラー メソッド]。メトリック ボックスの色の値を定義するには、テキスト ボックスに値を入力します。色の境界を設定するには、[カスタム] を選択します。色を使用しない場合は、[なし] を選択します。

メトリックが表示されるペインで、メトリックを管理できます。

- リスト内のすべてのメトリックを選択するには、ペインの最上部にあるツールバーで [すべて選択] アイコンをクリックします。
- リストからすべてのメトリックを削除するには、ペインの最上部にあるツールバーで [選択のクリア] アイコンをクリックします。
- 1つのメトリックの設定をリスト内のすべてのメトリックに適用するには、メトリックを選択し、ペインの最上部にあるツールバーで [すべてに適用] アイコンをクリックします。

オブジェクト タイプ

ウィジェットの構成時に特定のオブジェクト タイプのメトリックを選択できます。このオプションは、特定のオブジェクトが現在使用できない場合に便利です。

オブジェクト タイプを選択するには、ツールバーのアイコンを使用します。

- 特定のアダプタを検索するには、アダプタ名を [アダプタ タイプ] テキスト ボックスに入力します。
- オブジェクトを検索するには、オブジェクト タイプ名の全部または一部を [フィルタ] テキスト ボックスに入力します。

オブジェクト タイプのメトリックが、メトリック リストのペインに表示されます。複数のメトリックを選択できます。

オプション	説明
	<p>メトリックのリストが表示されるペインで、ツールバー オプションを使用して、ウィジェットに表示するメトリックを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 複数のメトリックを選択するには、ツールバーで [複数選択の相互作用の実施] アイコンをクリックします。 ■ 選択した複数のオブジェクト タイプに共通するメトリックを表示するには、ツールバーで [共通メトリックの表示] アイコンをクリックします。 ■ オブジェクトに固有の特定のメトリックを選択するには、ツールバーで [オブジェクトの選択] アイコンをクリックします。 ■ 特定のメトリックを検索するには、メトリック名の全部または一部を [フィルタ] テキスト ボックスに入力します。 <p>選択したオブジェクト タイプに対してメトリックを構成できます。選択したメトリックが表示されるペインで、各メトリックに値を設定します。値を入力するには、列の見出しの下にあるテキスト ボックスをポイントし、テキスト ボックスをダブルクリックして、値を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [ボックス ラベル]。メトリックのラベル。 ■ [測定単位]。メトリック値の後ろに表示される測定単位。 ■ [カラー メソッド]。メトリック ボックスの色の値を定義するには、テキスト ボックスに値を入力します。色の境界を設定するには、[カラム] を選択します。色を使用しない場合は、なしを選択します。 <p>メトリックが表示されるペインで、メトリックを管理できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ リスト内のすべてのメトリックを選択するには、ツールバーで [すべて選択] アイコンをクリックします。 ■ リストからすべてのメトリックを削除するには、ツールバーで [選択のクリア] アイコンをクリックします。 ■ 1つのメトリックの設定をリスト内のすべてのメトリックに適用するには、メトリックを選択し、ツールバーで [すべてに適用] アイコンをクリックします。

負荷ウィジェット

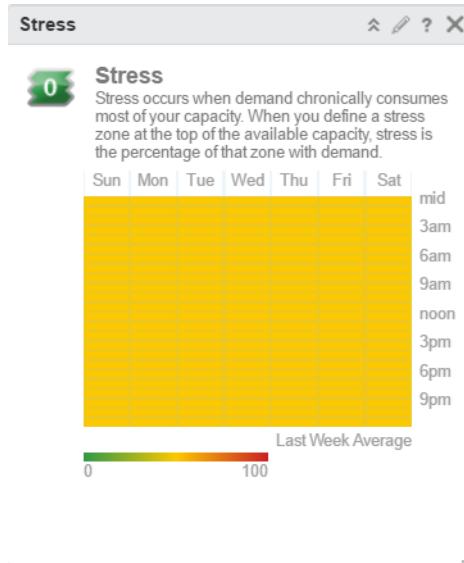
ストレス ウィジェットは、一定の期間における特定のリソースの平均ストレスのウェザー マップを表示します。

負荷状態は、需要によって容量のほとんどが慢性的に消費されている状態として定義されます。負荷ゾーンを使用すると、十分なリソースが割り当てられていないホストや仮想マシンを特定できます。

負荷ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ウィジェットに表示されるデータは、その構成方法によって決まります。ウィジェットを構成するには、タイトル バーの [編集] アイコンをクリックして設定を構成します。



ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーにある[編集]アイコンをクリックします。ダッシュボードの作成および構成の詳細については、[ダッシュボードの作成と構成](#)を参照してください。

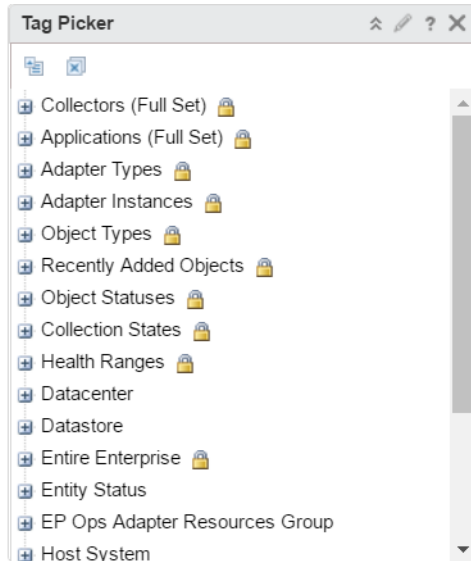
オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
オブジェクト リスト	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。 リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。

タグ ピッカー ウィジェット

タグ ピッカー ウィジェットには、利用可能なすべてのオブジェクト タグが一覧表示されます。

タグ ピッカー ウィジェットと構成オプションの仕組み

タグ ピッカー ウィジェットでは、オブジェクト タグのリストを確認できます。このウィジェットを使用して、別のウィジェットに表示される情報をフィルタリングできます。オブジェクト ツリーから 1 つ以上のタグを選択して、このタグを持つオブジェクトの情報をターゲット ウィジェットに表示できます。たとえば、タグ ピッカー ウィジェットで [オブジェクト タイプ] - [仮想マシン] を選択すると、VM に関する統計情報を環境の状態ウィジェットで確認できます。



タグ ピッカー ウィジェットは、ダッシュボードに追加してから編集します。ウィジェットを構成するには、ウィジェット ウィンドウの右上にある鉛筆をクリックします。タグ ピッカー ウィジェットは、同じダッシュボードまたは他のダッシュボードに存在する別のウィジェットに情報を送信するように構成できます。同じダッシュボードにあるレシーバ ウィジェットを設定するには、ダッシュボードを編集するときに [ウィジェットの相互作用] メニューを使用します。別のダッシュボードにあるレシーバ ウィジェットを設定するには、ソース ダッシュボードを編集するときに [ダッシュボードのナビゲーション] メニューを使用します。2 つのタグ ピッカー ウィジェットが異なるダッシュボードにある場合、それらが相互作用するように構成できます。

タグ ピッカー ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

タグ ピッカー ウィジェットと構成オプション

タグ ピッカー ウィジェットには、ツールバー オプションが含まれています。

オプション	説明
すべて折りたたむ	展開されているタグとタグ値をすべて閉じます。
すべて選択解除	すべてのフィルタリングを削除し、ウィジェットにすべてのオブジェクトを表示します。
タグ ピッカー	ご使用の環境からオブジェクトを選択します。
ダッシュボードのナビゲーション	<p>注： ターゲット ウィジェットが別のダッシュボードにあるときにソースウィジェットに表示されます。</p> <p>別のダッシュボードの情報を検索するときに使用します。</p>

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。ダッシュボードの作成および構成の詳細については、[ダッシュボードの作成と構成](#)を参照してください。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	<p>このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。</p> <p>無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。</p>
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .

テキスト表示ウィジェット

ユーザー インターフェイスにテキストを表示するには、テキスト表示ウィジェットを使用します。テキストは、ダッシュボード上のテキスト表示ウィジェットに表示されます。

テキスト表示ウィジェットでは、Web ページまたはテキスト ファイルからテキストを読み取ることができます。テキスト ウィジェットを構成するときに、Web ページの URL またはテキスト ファイルの名前を指定します。テキスト表示ウィジェットを使用してテキスト ファイルを読み取るには、テキスト ファイルのあるディレクトリへのパスを指定する必要があります。たとえば、vRealize Business for Cloud アダプタを構成すると、関連データが [ビジネス管理] ダッシュボードに表示されます。

テキスト表示ウィジェットは、HTTPS プロトコルを使用する Web サイトを表示できます。HTTP を使用する Web サイトに対するテキスト表示ウィジェットの動作は各 Web サイトの設定によって異なります。

テキスト表示ウィジェットの構成オプションの仕組み

テキスト表示モードを使用するようにウィジェットを構成する場合は、読み取るファイルを含むディレクトリのパスを指定するか、または URL を指定できます。URL のコンテンツはテキストとして表示されます。

コマンド ライン インターフェイス (CLI) コマンドを使用して、ファイルの内容をテキスト表示ウィジェットに追加できます。

- パラメータのリストを表示するには、`file -h|import|export|delete|list txtwidget` コマンドを実行します。

- テキストまたは HTML のコンテンツを表示するには、`import txtwidget input-file [--title title] [--force]` コマンドを実行します。
- コンテンツをファイルにエクスポートするには、`export txtwidget all|title[{,title}] [output-dir]` コマンドを実行します。
- インポートしたコンテンツを削除するには、`delete txtwidget all|title[{,title}]` コマンドを実行します。
- コンテンツのタイトルを表示するには、`list txtwidget` コマンドを実行します。

テキスト表示ウィジェットの構成オプションを確認できる場所

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

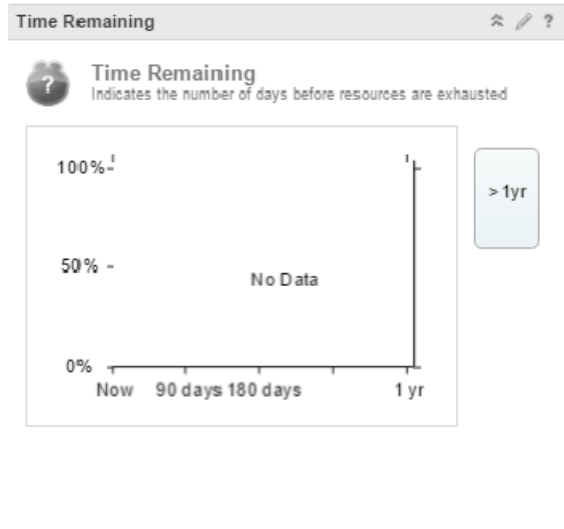
表 4-135. テキスト表示ウィジェットの構成オプション

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
表示モード	テキスト形式または HTML 形式でテキストが表示されます。
URL	URL を入力します。
ファイル	[参照] ボタンをクリックして、ソース テキスト ファイルを含むファイルに移動します。 ソース テキスト ファイルを追加、編集、または削除するには、[メトリック構成の管理] ページで [TxtWidgetContent] ノードに移動します。 vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイスで、[コンテンツ] - [メトリック構成の管理] に移動します。
テスト	入力したテキスト ファイルまたは URL が正しいことを確認します。

残り時間ウィジェット

残り時間ウィジェットは、オブジェクトのリソースが枯渇するまでの残り時間を表示します。

vRealize Operations Manager では、このスコアを、リソース タイプごとの使用パターンの履歴データに基づいて、リソース タイプ別に計算します。残り時間スコアを使用して、オブジェクトに対する物理リソースまたは仮想リソースのプロビジョニングを計画したり、仮想インフラストラクチャ内のワークロードの再バランシングを行ったりできます。



残り時間ウィジェットを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ウィジェットに表示されるデータは、その構成方法によって決まります。ウィジェットを構成するには、タイトル バーの [編集] アイコンをクリックして設定を構成します。

表 4-136.

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト このテキスト ボックスは、オブジェクト リストで選択したオブジェクトによって自動で入力されます。
オブジェクト リスト	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。 リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。

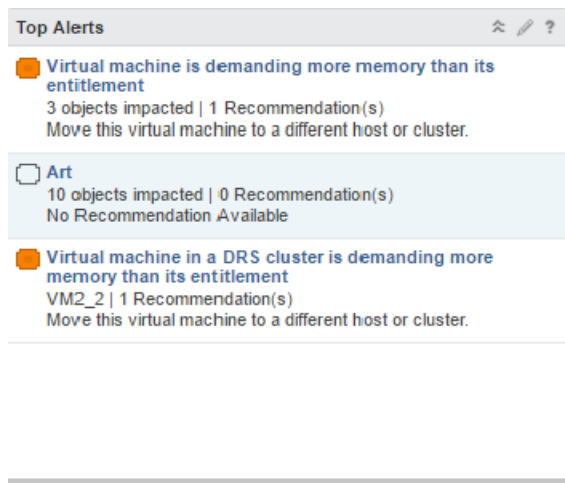
トップ アラート ウィジェット

トップ アラートは、vRealize Operations Manager で監視するように構成された、オブジェクトにとって最も重大なアラートです。トップ アラートは、環境に悪影響を与える可能性が最も高いアラートであるため、評価および対処する必要があります。

トップ アラート ウィジェットと構成オプションの仕組み

トップ アラート ウィジェットを 1 つまたは複数のカスタム ダッシュボードに追加し、他のダッシュボード ユーザーにとって重要なデータを表示するように構成できます。ウィジェットには、各ウィジェット インスタンスに構成済みオプションに基づいてデータが表示されます。

ダッシュボードに追加後にトップ アラート ウィジェットを編集します。オプションを変更することで、ダッシュボード ユーザーのニーズに対応するためのカスタム ウィジェットを作成できます。



トップ アラートと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

トップ アラートのデータと構成オプション

トップ アラートには、ウィジェット用に構成された、アラートに関する短い説明が含まれます。アラート名によって、アラートの詳細にリンクできるセカンダリ ウィンドウが開きます。アラートの詳細では、アラートの解決を開始することができます。

表 4-137. トップ アラート ウィジェットのオプション

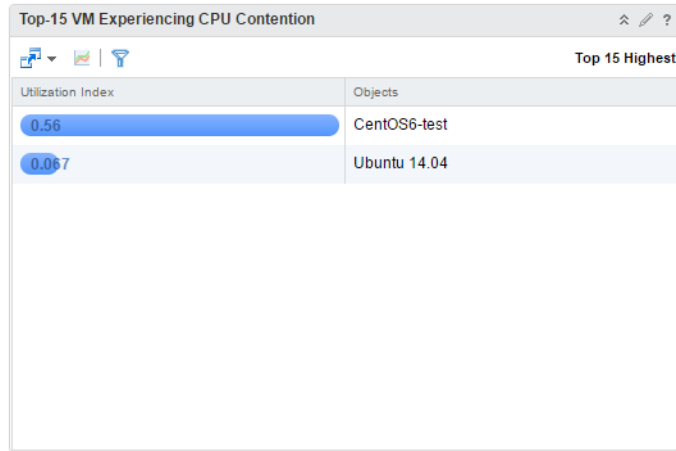
オプション	説明
アラート名	生成されたアラートの名前。名前をクリックすると、アラートの詳細が開きます。
アラートの説明	影響を受けるオブジェクトの数、推奨事項の数、およびアラートを解決するための最良の推奨事項。

表 4-138. トップ アラート 構成オプション

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
アラート表示オン	次のオプションのいずれかを選択し、選択したオブジェクトにウィジェット データを設定するオブジェクトの関係を指定します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 選択したオブジェクト。ウィジェット データは、選択したオブジェクトのみに基きます。 ■ 子孫のみ。ウィジェット データは、選択したオブジェクトではなく、子孫オブジェクトのみに基きます。 ■ 両方。ウィジェット データは、選択したオブジェクトと子孫オブジェクトの両方を含みます。
影響を受けるバッジ	アラートを表示したいバッジを選択します。 アラート定義構成時に、影響を受けるバッジは構成されます。
アラート数。	ウィジェットに表示する最大アラート数を選択します。
オブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト このテキスト ボックスは、オブジェクト リストで選択したオブジェクトによって自動で入力されます。
オブジェクト リスト	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。 リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。

トップ N ウィジェット

トップ N ウィジェットには、選択した 1 つまたは複数のオブジェクトの分析のトップ N 結果が表示されます。



トップ N ウィジェットの機能

トップ N ウィジェットを構成するときにオブジェクトを選択するか、別のウィジェットでオブジェクトを選択できます。このウィジェットでは、ウィジェットを構成するときの選択内容に応じて、アプリケーションの分析、アラート、オブジェクトおよびその子オブジェクトのメトリックを表示できます。ウィジェットでは、現在の値または特定の期間の値の分析を表示できます。ウィジェットでは各オブジェクトに関する詳細情報を受信できます。オブジェクトをダブルクリックすると、[オブジェクトの詳細] ページが表示されます。

セルフ プロバイダを [オフ] にすると、他のウィジェットからデータを受信するようにウィジェットを構成できます。ソース ウィジェットで選択したオブジェクトの分析の結果を表示するようにウィジェットを構成できます。

たとえば、トポロジ ウィジェットでホストを選択し、そのホスト上の仮想マシンのメトリック分析を調べることができます。同じダッシュボードにあるレシーバ ウィジェットを設定するには、ダッシュボードを編集するときに [ウィジェットの相互作用] メニューを使用します。別のダッシュボードにあるレシーバ ウィジェットを設定するには、ソース ダッシュボードを編集するときに [ダッシュボードのナビゲーション] メニューを使用します。

トップ N ウィジェットを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

トップ N ウィジェットのツールバー

トップ N ウィジェットの最上部にあるツールバーには、グラフのビューを変更するのに使用できるアイコンが含まれています。

アイコン	説明
ダッシュボードのナビゲーション	事前定義されたオブジェクトに移動します。たとえば、データ グリッドでデータセンターを選択し、[ダッシュボード ナビゲーション] をクリックすると、vSphere Web Client でそのデータストアを開くことができます。
オブジェクトの詳細	オブジェクトを選択し、このアイコンをクリックすると、そのオブジェクトの [オブジェクト詳細] ページが表示されます。
フィルター基準の表示	ポップアップ ウィンドウにウィジェットのフィルター設定を表示します。

トップ N ウィジェットの構成オプション

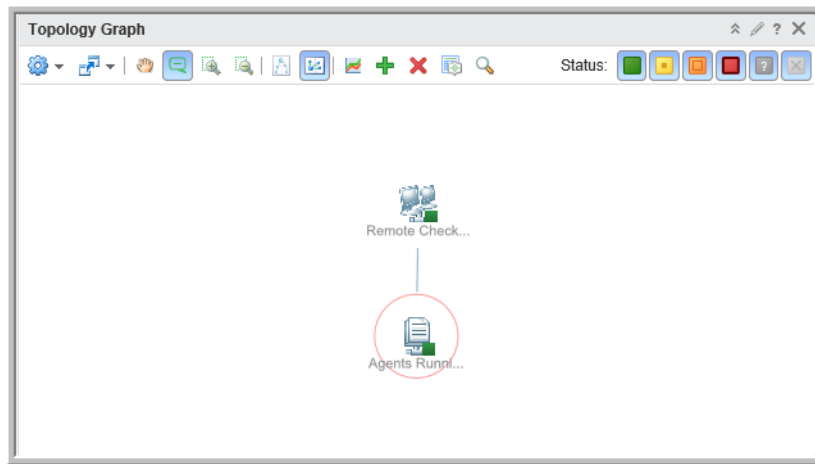
ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーにある[編集]アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
画像の再描画速度	再描画速度を設定します。
期間の長さ	[範囲] メニューを使用して、データを表示する時間範囲を選択します。 [開始日] および [終了日] メニューを使用して、具体的な開始日時と終了日時を選択します。 注： 範囲として [現在の値] を選択した場合、結果は収集された最後のデータに基づきます。それ以外の範囲を選択した場合、結果は集約された値に基づきます。
アプリケーションの健全性とパフォーマンス	[タグ] タブを使用するときに利用できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 最も健全性が低いトップ。オブジェクトの分析による健全性が最下位の n 個の結果 ■ 最も健全性が高いトップ。オブジェクトの分析による健全性が最上位の n 個の結果 ■ 最も違反が多いトップ。時間経過に伴ったいくつかのアラートについて、標準偏差に基づいて並べ替えられた値のリスト。 オブジェクトの分析の条件を選択します。
アラート分析	[タグ] タブを使用するときに利用できます。 アラートの分析の条件を選択します。
メトリック分析	[メトリック] タブを使用するときに利用できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 最も使用率が高いトップ。CPU やメモリの使用率など、使用率メトリック構成について、使用率が最高の類似オブジェクト タイプを示したオブジェクトのリスト。 ■ 最も使用率が低いトップ。CPU やメモリの使用率など、使用率メトリック構成について、使用率が最低の類似オブジェクト タイプを示したオブジェクトのリスト。 ■ 異常状態のトップ。オブジェクトは、選択した期間の選択したメトリックでトリガしたすべてのアラーム期間別に並べ替えられます。 ■ 最も違反率が高いトップ。時間経過に伴った多数のアラートについて、標準偏差に基づいて並べ替えられた値のリスト。 メトリック ツリーで選択したメトリックの分析の条件を選択します。

オプション	説明
バー カウント	トップ結果の数を選択します。
深さ	子オブジェクトの数を選択します。
古いメトリックをフィルタリングする	古いメトリック値を分析に含めるかどうかを選択または選択解除します。
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト [オブジェクト]を展開したときにオブジェクト データ グリッドから選択したオブジェクトがテキスト ボックスに入力されます。
選択したオブジェクト タイプ	[オブジェクト タイプ] データ グリッドで選択したオブジェクト タイプ。[オブジェクト タイプ] ペインの [選択のクリア] ツールバー アイコンをクリックし、テキスト ボックスをクリアします。
タグ	<ul style="list-style-type: none"> ■ オブジェクト 環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。 リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。 ■ ウィジェットタグ ピッカー。オブジェクト タグを使用して、ウィジェットの基準にするオブジェクトを選択します。たとえば、[すべて折りたたむ]をクリックし、[オブジェクト タイプ]を展開してタグ ツリーから [データセンター] および [データストア] を選択して、インベントリのデータセンターおよびデータストアを調べます。
メトリック	<ul style="list-style-type: none"> ■ タグ ツリー: ウィジェットの基準にするオブジェクト タグを選択します。たとえば、[オブジェクト タイプ]を展開し、[ホスト システム]を選択して、環境にあるホストのメトリック分析を調べます。 ■ オブジェクト タイプ データ グリッド: ウィジェットの基準にする1つ以上のオブジェクト タイプを選択します。たとえば、データ グリッドから仮想マシンおよびコンピューティング リソースを選択し、分析するそれら両方のオブジェクト タイプの共通メトリックを選択します。データ グリッドから選択したオブジェクト タイプが [選択したオブジェクト タイプ] テキスト ボックスに入力されます。 ■ メトリック ツリー: ウィジェットが表示する分析の基準にするメトリックを選択します。共通メトリックまたは各オブジェクトに特有のメトリックを選択できます。メトリックを選択するには、最初にデータ グリッドから1つまたは複数のオブジェクト タイプを選択します。たとえば、オブジェクト タイプ リストから [仮想マシン] および [データセンター] を選択し、[共通メトリックを表示] をクリックして、仮想マシンおよびデータセンターの共通メトリックを選択します。[オブジェクトの選択] をクリックして、オブジェクトを選択し、固有のメトリックを選択できます。

トポロジ グラフ ウィジェット

トポロジ グラフ ウィジェットでは、各オブジェクトとそれらの関係がインベントリにグラフィカルに表示されます。ダッシュボード内のこのウィジェットの各インスタンスは、カスタマイズすることができます。



トポロジ グラフ ウィジェットと構成オプションの仕組み

トポロジ グラフ ウィジェットでは、インベントリの 1 つのオブジェクトに接続されているすべてのノードとパスを検索できます。オブジェクト間の接続には、論理接続、物理接続、またはネットワーク接続があります。このウィジェットでは、2 つのオブジェクト間のパスにあるすべてのノードを示すグラフ、またはインベントリ内の 1 つのノードに関連付けられたオブジェクトを示すグラフを表示できます。このウィジェットを構成するときは、調査モードのグラフのタイプを選択します。このウィジェットを編集するときに [関係] チェック ボックスを使用すると、表示されるグラフのノード間の調査レベルを選択できます。デフォルトでは、インベントリ内のすべてのオブジェクトタイプがウィジェットに表示されますが、構成時にオブジェクト ビュー リストを使用することで、表示するオブジェクトタイプを選択できます。グラフでオブジェクトをダブルクリックすると、そのオブジェクトの詳細ページが表示されます。

トポロジ グラフ ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

トポロジ グラフ ウィジェットのツールバーのオプション

オプション	説明
操作	各オブジェクト タイプの事前定義された操作から選択するときに使用します。事前定義された使用可能な操作を表示するには、グラフでオブジェクトを選択し、ツールバーをクリックして操作を選択します。たとえば、グラフでデータストア オブジェクトを選択するときに、[データストアの使用されていないスナップショットの削除] をクリックすると、この操作をオブジェクトに適用できます。
ダッシュボードのナビゲーション	事前定義されたオブジェクトに移動します。たとえば、グラフからデータストアを選択し、[ダッシュボードのナビゲーション] をクリックすると、vSphere Web Client でそのデータストアを開くことができます。
パン	グラフ全体を移動するときに使用します。

オプション	説明
ポイント時に値を表示する	グラフのオブジェクトを指したときにパラメータとともにツール チップを表示します。
ズームイン	グラフをズームインします。
ズームアウト	グラフをズームアウトします。
階層ビュー	階層ビューに切り替えるときに使用します。階層ビューは、ノード調査モードの場合、およびインベントリ ツリーが選択されている場合にのみ使用できます。
グラフ ビュー	グラフ ビューに切り替えるときに使用します。
オブジェクト詳細	オブジェクトを選択し、このアイコンをクリックすると、そのオブジェクトの [オブジェクト詳細] ページが表示されます。
ノードの展開	オブジェクトに関連付けられているオブジェクト タイプのうち、グラフに表示するものを選択します。たとえば、グラフから仮想マシンを選択して [ノードの展開] ツールバー アイコンをクリックし、[ホスト システム] を選択した場合は、仮想マシンが配置されているホストがグラフに追加されます。
ノードの非表示	指定したオブジェクトをグラフから削除するときに使用します
最初のオブジェクトへリセット	最初に表示されたグラフおよび構成されたオブジェクト タイプに戻るときに使用します。
ノードの検索	グラフで選択されたオブジェクトからノードを検索するときに使用します。たとえば、VM、ホスト、データストア間の接続がグラフに表示されている場合、インベントリ内の他のオブジェクトとのホストの接続を確認する必要があるときは、ホストを選択し、[ノードの検索] をクリックします。
ステータス	オブジェクトをそのステータスまたは状態に基づいて選択するときに使用します。

トポロジ グラフ ウィジェットの構成オプション

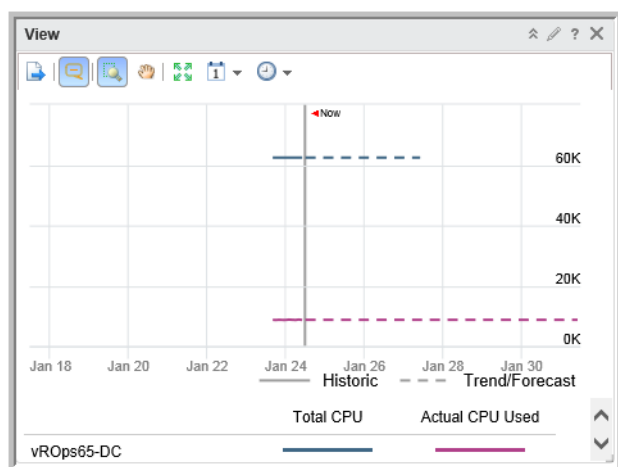
ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
調査モード	<p>[ノード調査モード] は、オブジェクト リストから選択された 1 つのオブジェクトと、それに関連する複数のオブジェクトを観察する際に使用します。たとえば、仮想マシンを選択し、ノード調査モードを選択した場合、ウィジェットには VM が配置されたホストと、VM のファイルを保存するデータストアが表示されます。</p> <p>[バス調査モード] は、2 つのオブジェクト間の関係を観察する際に使用します。これらは、第 1 オブジェクトの選択リストおよび第 2 オブジェクトの選択リストから選択する必要があります。たとえば、VM と vCenter Server 間のバスを調査する選択をした場合、グラフには両方のオブジェクトと、VM とデータストア、データストア クラスタ、およびデータセンターとしてのサーバとの間のバスのすべてのノードが表示されます。</p> <p>重要： バス調査モードで動作を開始するウィジェットでは、オブジェクト ビューの選択が必須となります。</p> <p>[すべてのバスを表示] は、1 つのノードとそのノードに関連する複数のノード間の接続、および複数のノード間の接続を観察する際に使用します。たとえば、ノード調査モードを使用しており、VM およびすべてのオブジェクト タイプを観察する選択をした場合、グラフにはそのデータストアおよびホストに接続された VM と、ホストとデータストア間の接続が表示されます。</p> <p>[検出されたバスのみ] は、関連するノードを直接観察する際に使用します。たとえば、ノード調査モードを使用しており、VM およびすべてのオブジェクト タイプを観察する選択をした場合、グラフにはそのデータストアおよびそのホストに接続された VM が表示されますが、ホストとデータストア間の接続はありません。</p>
内容の更新	<p>このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。</p> <p>無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。</p>
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
構成ファイル	デフォルトの構成には、親と子の関係が含まれます。ドロップダウン オプションはインストールされたソリューションによって異なります。関係の新しいタイプは、[関係] ペインに追加できます。
メトリック構成	<p>情報が別のウィジェットとの相互作用に基づいている場合、表示する属性を持つリストを指定します。</p> <p>CLI ディレクトリを通じてリソース相互作用 XML ファイルを追加するには、リソース相互作用 XML ファイルの追加を参照してください。ユーザー インターフェイスを通じてリソース相互作用 XML ファイルを追加するには、メトリック構成の管理を参照してください。</p> <p>新規作成された XML ファイルがウィジェットの [メトリック構成] ドロップダウン メニューに表示されます。</p>

オプション	説明
セルフ プロバイダ	<p>ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト
分離の度合い	<p>ノード調査モードが選択されている場合のみ使用可能です。ノード調査モードの調査のレベルを定義する場合に使用します。最も低い度合いの構成では、インベントリを詳細に表示する高い度合いではなく、直接関係するノードのみを表示します。</p>
オブジェクト リスト	<p>環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。</p> <p>リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。</p>
オブジェクト ビュー	グラフで観察するオブジェクトのタイプを選択する際に使用します。
関係	<p>それぞれインベントリについての詳細をグラフで観察する、オブジェクト間の関係のタイプを選択します。すべてのオブジェクトに対する共通の関係は親と子ですが、関係のリストは vRealize Operations Manager に追加されたソリューションにより異なる場合があります。</p>
第 1 オブジェクトの選択	パス調査モードの場合のみ使用可能です。オブジェクト リストから第 1 オブジェクトを選択します。
第 2 オブジェクトの選択	パス調査モードの場合のみ使用可能です。オブジェクト リストから第 2 オブジェクトを選択します。

表示ウィジェット

表示ウィジェットにより、ダッシュボードで vRealize Operations Manager ビューを表示することができます。



表示ウィジェットと構成オプションの仕組み

ビューは、収集したオブジェクトに関する情報を、ビュー タイプに応じた方法で表示します。それぞれのビュー タイプを使用することで、プロパティ、メトリック、アラート、ポリシー、およびデータをさまざまな切り口で見ることができます。

表示ウィジェットを1つ以上のカスタム ダッシュボードに追加し、ダッシュボード ユーザーにとって重要なデータが表示されるように構成できます。

表示ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

表示ウィジェット ツールバーは、表示されるビュー タイプに応じて異なります。どのビュー タイプの場合でも、ビューを CSV ファイルとしてエクスポートすることができます。

表示ウィジェットの構成オプション

ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。

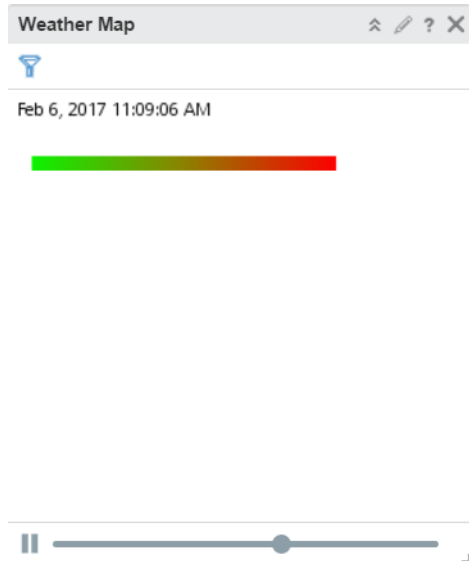
オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
セルフ プロバイダ	<p>ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
オブジェクトの選択	ウィジェット データの基準となるオブジェクト
表示	<p>選択したリソースで使用可能な、定義済みビューのリスト。</p> <p>ビューは、表示ウィジェットの構成オプションから直接に作成、編集、削除、クローン作成、エクスポート、およびインポートできます。</p>

ウェザー マップ ウィジェット

ウェザー マップ ウィジェットは、複数のリソースについての1つのメトリックの値の時間経過による変化をグラフィックで表示します。ウィジェットでは、色分けされたアイコンを使用してメトリックの各値を示します。各アイコンの場所は、特定のリソースのメトリック値を表します。アイコンの色の変化は、メトリックの値の変化を示します。

ウェザー マップ ウィジェットと構成オプションの機能

ウェザー マップ ウィジェットを1つまたは複数のカスタムのダッシュボードに追加し、他のダッシュボード ユーザーにとって重要なデータを表示するように構成できます。ウィジェットには、各ウィジェット インスタンスに構成済みオプションに基づいてデータが表示されます。



マップがどのように変化するかを観察すると、さまざまなリソースに関するメトリックのパフォーマンスが時間経過によってどのように変化するかを理解するのに役立ちます。マップの一番下にある [一時停止] オプションと [再生] オプションを使用して、表示を開始または停止できます。スライダを前後に動かして、マップ内の特定のフレームに移動できます。ウィジェットを表示したまま戻ると、スライダは同じ状態のままになります。

マップには、メトリックのリアルタイムのパフォーマンスは表示されません。期間、マップの更新頻度、および読み取りの間隔を選択します。たとえば、ウィジェットに前日のメトリック値を表示させ、0.5 秒ごとに更新し、5 分刻みのメトリック値の変化が示されるように設定することができます。

アイコンが示すオブジェクトを表示するには、そのオブジェクトをクリックします。

ウェザー マップ ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ダッシュボード ウィジェットに表示されるデータをカスタマイズするには、[コンテンツ] - [ダッシュボード] の順にクリックします。ダッシュボード ツールバーで、[追加] アイコンをクリックしてダッシュボードを追加するか、[編集] アイコンをクリックして、選択したダッシュボードを編集します。ダッシュボード ワークスペースの左側で [ウィジェット リスト] をクリックし、ウィジェットをダッシュボードの右側のペインにドラッグします。選択したウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックして、構成オプションにアクセスします。

ウェザー マップ ウィジェットの最上部にあるツールバーには、グラフを表示するのに使用できるアイコンが含まれています。

表 4-139. メトリック ウェザー マップ ウィジェットのツールバー アイコン

アイコン	説明
[一時停止]と[再生]	表示を開始または停止します。ウィジェットを表示したままにして戻ると、アイコンは同じ状態のままとなります。
[フィルター基準の表示]	現在のメトリックを含め、ウィジェットの現在の設定が表示されます。

ウェザー マップ ウィジェットには、構成オプションが含まれます。ウィジェットを構成するには、ウィジェットのタイトル バーの [編集] アイコンをクリックします。ダッシュボードの作成および構成の詳細については、[ダッシュボードの作成と構成](#)を参照してください。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
画像の再描画速度	キャッシュされたデータが新規に収集されたデータに基づき更新される間隔。 たとえば、メトリック履歴を 過去 6 時間 に、画像の再描画速度を 15 分 に設定し、データが 5 分おきに収集される場合、10 分の間に収集されたデータは 15 分では計算されません。 たとえば、メトリック履歴を 過去 6 時間 に、画像の再描画速度を 15 分 に設定し、データが 5 分おきに収集される場合、10 分の間に収集されたデータは 15 分では計算されません。
メトリック履歴	ウェザー マップの期間を、直近 1 時間から過去 30 日間までで選択します。
メトリック サンプルの差分	メトリック読み取りの間隔を選択します。たとえば、このオプションを 1 分に設定し、[メトリック履歴] を 1 時間に設定した場合、ウィジェットは、各メトリックについて合計 60 の読取値を持つことになります。
グループ化	オブジェクトをグループ化するタグ値を選択します。
並べ替え基準	[オブジェクト名] または [メトリック値] を選択して、オブジェクトを並べ替える方法を設定します。
フレーム移行間隔	それぞれの新しい値を表示するためにアイコンをどれだけ早く変更するかを選択します。フレーム間隔および 1 秒あたりのフレーム数 (fps) を選択できます。
やり直しの遅延	メトリック履歴期間の終わりに達した時、初めからもう一度やり直す前に、最新の読取値がそのまま維持される秒数。
色	カラー範囲を高、中、低の値で示します。各カラーを設定し、[最小値] および [最大値] テキスト ボックスに最小のカラー値および最大のカラー値を入力できます。 このテキスト ボックスを空白のままにしておくと、vRealize Operations Manager は、[色分け] メトリックの最高値と最低値を端の色にマッピングします。 最小値または最大値を指定すると、その値以上のメトリックは端の色で表示されます。 最小値または最大値を指定すると、その値以上のメトリックは端の色で表示されます。
選択したオブジェクト タイプ	ウィジェット データの基準となるオブジェクト このテキスト ボックスは、オブジェクト リストで選択したオブジェクトによって自動で入力されます。

オプション	説明
タグ ツリー	オブジェクト リスト内のオブジェクトのリストをフィルタリングします。1 つ以上のオブジェクト タイプを選択でき、このタイプのすべてのオブジェクトがオブジェクト リストに表示されます。
オブジェクト リスト	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。オブジェクトは、選択されたタグに基づいて示されます。タグが選択されていない場合には、リストにはシステムのすべてのオブジェクトが表示されます。
メトリック ピッカー	メトリックをダブルクリックし、ウィジェットに表示します。

ワークロード ウィジェット

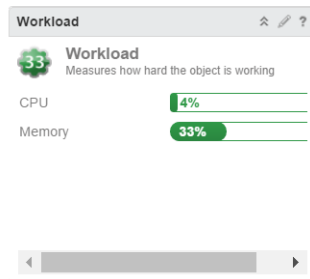
ワークロード ウィジェットには、選択したリソースの負荷を示すデータが表示されます。

ワークロード ウィジェットには、選択したオブジェクトの負荷を示すグラフが表示されます。ワークロード ウィジェットでは、CPU 使用量、メモリ使用量、ディスク I/O、ネットワーク I/O についてのデータが報告されます。

ワークロード ウィジェットと構成オプションを確認できる場所

ウィジェットは、カスタム ダッシュボードのいずれかに含まれている可能性があります。左側のペインで、[ホーム] をクリックし、構成されたダッシュボードを確認します。

ウィジェットに表示されるデータは、その構成方法によって決まります。ウィジェットを構成するには、タイトル バーの [編集] アイコンをクリックして設定を構成します。



仮想 SAN のデータストア メトリックについて

datastore|io|workload は、仮想 SAN データストアではサポートされていません。このメトリックは、仮想 SAN データストア用にサポートされている datastore|demand_io に依存します。

datastore|demand_io という名前のメトリックも、仮想 SAN データストアのその他のメトリックに依存し、その 1 つはサポートされていません。

- devices|numberReadAveraged_average および devices|numberWriteAveraged_average という名前のメトリックはサポートされていません。
- devices|totalLatency_average という名前のメトリックはサポートされていません。

その結果、vRealize Operations Manager は仮想 SAN データストアでは、datastore|io|workload という名前のメトリックを収集しません。

ワークロード ウィジェットには、次の構成オプションがあります。

オプション	説明
タイトル	このウィジェットを同じウィジェット テンプレートに基づく他のインスタンスから識別するカスタムのタイトルを入力します。
内容の更新	このウィジェットのデータの自動更新を有効または無効にします。 無効な場合は、ダッシュボードが開かれたとき、またはダッシュボードのウィジェットの [更新] ボタンをクリックしたときにのみ、ウィジェットが更新されます。
更新間隔	[内容の更新] オプションを有効にする場合は、このウィジェットのデータを更新する頻度を指定します。 .
セルフ プロバイダ	ウィジェットにデータが表示されるオブジェクトが、そのウィジェットで定義されたものか他のウィジェットから提供されたものかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オン。ウィジェットにデータを表示するオブジェクトを定義します。 ■ オフ。ダッシュボードのウィジェットの相互作用オプションを使用して、他のウィジェットがオブジェクトを提供するように構成します。
選択したオブジェクト	ウィジェット データの基準となるオブジェクト
オブジェクト リスト	環境内のオブジェクトのリスト。列を基準に検索またはソートして、ウィジェットに表示されるデータの基になるオブジェクトを特定できます。 リスト内のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトはウィジェットに対して選択されたオブジェクトになります。

ダッシュボード

ダッシュボードには、パフォーマンスに関する視覚的な概要と、仮想インフラストラクチャにおけるオブジェクトの状態が表示されます。ダッシュボードによって、環境にすでに存在する問題および生じ得る問題の特性と時間枠を判断できます。ダッシュボードにウィジェットを追加し、構成することによりダッシュボードを作成します。

vRealize Operations Manager は、企業内の監視対象のソフトウェアおよびハードウェア リソースからパフォーマンス データを収集し、予測分析、および問題に関するリアルタイムの情報を提供します。データと分析は、構成可能なダッシュボード、事前定義済みのページ、およびいくつかの事前定義済みのダッシュボードに、アラートを通じて表示されます。

- vRealize Operations Manager に用意されたいくつかの事前定義のダッシュボードから始めることができます。
- ウィジェット、ビュー、バッジ、フィルタを使用して特定のニーズに合った追加のダッシュボードを作成して情報の焦点を変更することができます。
- 事前定義のダッシュボードに対してクローン作成、編集を行うことも、ゼロから作成することもできます。
- 依存関係を示すデータを表示する場合、ダッシュボードにウィジェットの相互作用を追加することができます。
- ロールベースのアクセスをさまざまなダッシュボードに提供することで、チームの協力が高まります。

表 4-140. vRealize Operations Manager ホーム ページのメニュー

メニュー	説明
ダッシュボード リスト	ホーム ページに表示できるすべてのダッシュボードの一覧を表示します。このメニューを使用してダッシュボード間をすばやく移動できます。
アクション	作成、編集、削除、デフォルト設定など、使用可能なダッシュボード アクション。これらのアクションは、表示されているダッシュボードに直接適用されます。



カスタム ダッシュボードの作成

(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_create_dashboards_vrom)

ダッシュボードのタイプ

事前定義されたダッシュボードを使用するか、または vRealize Operations Manager で独自のカスタム ダッシュボードを作成できます。

事前定義されたダッシュボード

vRealize Operations Manager には事前定義されたダッシュボードが用意されており、仮想マシンのトラブルシューティング、ホスト、クラスタ、データストアのワークロード分布、データセンターのキャパシティ、仮想マシンに関する情報などの主な疑問に対する答えを知ることができます。詳細をログに記録することもできます。

事前定義されたダッシュボードは、ホーム ページからアクセスできます。[ダッシュボード リスト] - [vSphere ダッシュボード ライブラリ] の順にクリックするか、[ダッシュボード リスト] をクリックします。

vRealize Operations Manager で追加されている、事前定義されたダッシュボードは次のとおりです。

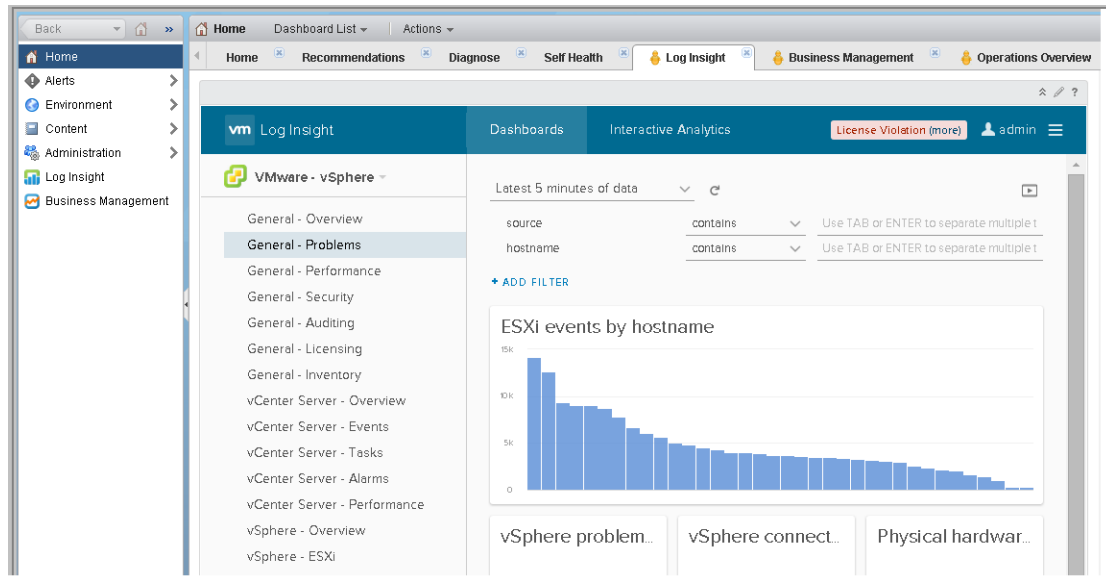
- Log Insight
- ビジネス管理
- はじめに
- Operations 概要
- キャパシティ概要
- 仮想マシンのトラブルシューティング
- 仮想マシン ダッシュボード
 - ヘビー ヒッター仮想マシン
 - 仮想マシン構成
 - 仮想マシン使用量
- インフラストラクチャ ダッシュボード
 - クラスタ構成
 - クラスタ パフォーマンス
 - データストア キャパシティ

- データストア パフォーマンス
- ESXi の設定
- ネットワーク構成

[Log Insight] ダッシュボード

vRealize Operations Manager が vRealize Log Insight と統合されている場合、[Log Insight] ダッシュボードからカスタム ダッシュボードとコンテンツ バック ダッシュボードにアクセスできます。環境内のログ イベントのグラフを表示、またはウィジェットのカスタム セットを作成して、最も重要な情報にアクセスできます。

Log Insight の詳細については、[vRealize Log Insight のドキュメント](#)を参照してください。



vRealize Operations Manager から [Log Insight] ダッシュボードにアクセスするには、次のいずれかの操作を実行する必要があります。

- vRealize Operations Manager インターフェイスから vRealize Log Insight アダプタを構成する
- vRealize Operations Manager を vRealize Log Insight に構成する。

構成の詳細については、[vRealize Operations Manager で vRealize Log Insight を構成する](#)を参照してください。

ビジネス管理ダッシュボード

vRealize Operations Manager が vRealize Business for Cloud に統合されている場合、ビジネス管理ダッシュボードと [ビジネス管理] ページでインフラストラクチャとコスト情報を表示できます。

インフラストラクチャとコストの情報を表示するには、vRealize Business for Cloud アダプタを構成する必要があります。このアダプタの構成については、[vRealize Business for Cloud アダプタの構成](#)を参照してください。

スタート ガイド ダッシュボード

スタート ガイド ダッシュボードには、事前定義されたダッシュボードが 1 ページに表示されます。このダッシュボードを使用して、それぞれのダッシュボードで答えが得られる主な問題点を知ることができます。

新しい定義済みのダッシュボードの使い方が分かったら、[アクション] - [メニューからダッシュボードを削除]をクリックしてダッシュボードを無効にすることができます。

Operations 概要ダッシュボード

Operations 概要ダッシュボードには、担当する各種データセンターの概要が示され、基盤インフラストラクチャでの問題発生を防止するためのアラート対応に役立ちます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [インベントリ サマリ]: 環境のインベントリ全体の要約を表示します。
- [データセンターの選択]: 運用状況を確認したいデータセンターを選択します。フィルタを使用して、複数のパラメータでリストを絞り込みます。表示したいデータセンターを見つけたら選択します。ダッシュボードに関連データが自動的に表示されます。
- [全クラスタのアップタイム]: 選択したデータセンターのクラスタ全般の健全性を表示します。このメトリック値は、1つのホストを HA ホストとして、それぞれの ESXi ホストのアップタイムをもとに計算されます。数値が 100% 未満の場合、その期間にクラスタの少なくとも 2 つのホストが稼働していなかったことを意味します。
- [アラート ボリューム]: 重要度をもとにアラートのトレンドの内訳を表示します。
- [トップ N]: 過去 24 時間に CPU 競合、メモリ使用量、ディスク遅延が最大であった 15 個の仮想マシンのリストも表示できます。特定のデータを取得するため、問題の発生時間に手動で設定ができます。時間を設定するには、ウィジェットのタイトル バーの [ウィジェットの編集] アイコンをクリックして、[期間の長さ] ドロップダウンメニューを編集します。

キャパシティ概要ダッシュボード

キャパシティ概要ダッシュボードには、環境内のデータセンターのキャパシティに関する概要が表示されます。それぞれのデータセンターを参照し、オブジェクトの状況を確認して、データセンター間でリソース キャパシティの再調整が必要かどうかを知ることができます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [環境を選択]: このウィジェットを使ってデータセンターを選択します。フィルタを使用して、複数のパラメータでリストを絞り込みます。表示したいデータセンターを見つけたら選択します。ダッシュボードに関連データが表示されます。
- [キャパシティ合計]: 高可用性 (HA) に割り当てられたキャパシティを含む環境の物理キャパシティ合計を表示します。HA とバッファを考慮すると、実際のキャパシティは表示される合計キャパシティよりも少なくなります。
- [節約可能なキャパシティ]: パワーオフ状態の仮想マシンを削除して解放できるリソース量を確認します。アイドル状態の仮想マシン、アクティブな仮想マシン、実体のない仮想マシン、仮想マシン以外からキャパシティを解放することができます。ただし、このウィジェットでは、パワーオフ状態の仮想マシンから解放できるキャパシティが強調表示されます。パワーオフ状態のマシンとは、監視期間の最小パーセンテージの間、パワーオフ状態にある仮想マシンです。デフォルトの最小パーセンテージは、過去 30 日で 90% です。この設定は、ポリシーで変更可能です。
- [メモリ容量の使用率トレンド]: メモリ容量の全体のトレンドを表示します。このウィジェットには、現在の物理リソースの合計が表示されます。物理リソースには、HA バッファと使用率バッファが含まれます。このウィジェットには、仮想マシンに割り当てられたメモリの合計も表示されます。この数値が物理容量の合計に近い場合は、仮想マシンのメモリ競合が発生することがあります。競合レベルが顧客に提示した条件に収まることを確認してください。チャートには、メモリ容量の実際の使用率も含まれます。実際の使用量は、アクティブなメモリに基づいています。仮想マシンは通常、ある時点で最大量の RAM にアクセスすることはないので、これは低めの値になる傾向があります。

- [CPU キャパシティの使用率トレンド]: CPU キャパシティの全体のトレンドを表示します。このウィジェットには、現在の物理リソースの合計が表示されます。物理リソースには、HA バッファと使用率バッファが含まれ、これには合計キャパシティが反映されます。このウィジェットには、仮想マシンに割り当てられた CPU キャパシティの合計も表示されます。この数が物理キャパシティの合計に近い場合は、仮想マシンの CPU 競合が発生することがあります。競合レベルが顧客に提示した条件に収まることを確認してください。チャートには、CPU の実際の使用率も含まれます。実際の使用率は CPU の需要カウンタに基づいており、これには仮想マシンに代わり I/O の実行に使用される CPU が考慮されます。ESXi ホストは仮想マシンに代わりストレージ I/O とネットワーク I/O を実行し、これは仮想マシンを実行するものと異なるコアで実行されます。このため、CPU 需要には仮想マシンの CPU 使用量がより正確に反映されます。
- [ディスク容量キャパシティの使用率トレンド]: 仮想マシンに割り当てられたディスク容量と実際の使用量を表示します。この情報は、シン プロビジョニングを計画するときに役立ちます。
- [キャパシティの使用率分布 - 超過または過小]: データセンターのオブジェクト使用の超過と過小を表示します。これをもとに、過剰に使用されるオブジェクトに適切なアクションを実行できます。

仮想マシンのトラブルシューティング ダッシュボード

仮想マシンのトラブルシューティング ダッシュボードを使用して、単一の仮想マシンのパフォーマンスの問題を解決します。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [トラブルシューティングする VM を検索する]: 環境内のすべての仮想マシンを表示します。トラブルシューティングを行う仮想マシンを選択できます。名前、フォルダ名、関連するタグ、ホスト、vCenter Server など、フィルタを使用して複数のパラメータでリストを絞り込めます。トラブルシューティングを行う仮想マシンを見つけたら選択します。ダッシュボードに関連データが自動的に表示されます。
- [仮想マシンについて]: 仮想マシンのコンテキストを知ることができます。このウィジェットでは、問題の根本原因の分析や可能な緩和策に関する洞察も得られます。
- [クリティカル アラートが存在するかどうか]: クリティカル アラートを表示します。クリティカル以外のアラートを見るには、仮想マシン オブジェクトをクリックします。
- [関連オブジェクト]: 現在仮想マシンを実行している ESXi ホストを表示します。このホストは、過去に仮想マシンが実行していた ESXi ホストでない場合があります。その他の関連オブジェクトを表示して、問題に関連していないかどうかを確認することができます。
- [仮想マシンのデマンドの急増またはアノマリがあるかどうか]: CPU、メモリ、ネットワークなどのリソースに対する仮想マシン要求のピークを確認します。要求のピークは、仮想マシンの異常な動作や、仮想マシンのサイズが過小であることを示す場合があります。メモリ使用率は、ゲスト OS メトリックをもとにしています。VMware Tools 10.0.0 以降と vSphere 6 Update 1 以降が必要です。これらの製品がない場合、メトリックは空白になります。
- [仮想マシンの競合が発生しているかどうか]: 仮想マシンに競合が発生しているかどうかを確認します。仮想マシンに競合が発生している場合、基盤インフラストラクチャに仮想マシンのニーズに応える十分なリソースがないことが考えられます。
- [親クラスタに競合があるかどうか]: クラスタ内の仮想マシンの最大 CPU 競合のトレンドを表示します。このトレンドは、クラスタ内で絶えず続く競合を示す場合があります。競合がある場合は仮想マシンの問題ではないので、クラスタの問題を解決する必要があります。

- [親データストアに遅延があるかどうか]: データストア レベルの遅延と仮想マシン全体の遅延を相関させることができます。仮想マシンに遅延のスパイクがあり、データストアにピークが見られない場合は、仮想マシンの問題である可能性があります。またデータストアに遅延があれば、トラブルシューティングを行ってデータストアでピークが発生した原因を見つけることができます。
- [親ホスト]/[親クラスタ]: これらのウィジェットで、仮想マシンが存在するホストとクラスタを表示します。

仮想マシン ダッシュボード

仮想マシン ダッシュボードは、仮想マシンの構成と動作に関する洞察を提供する一連のダッシュボードです。

ヘビー ヒッター仮想マシン

ヘビー ヒッター仮想マシン ダッシュボードには、所定のクラスタで先週に最高の IOPS とネットワーク スループットを発生した仮想マシンに関する情報が表示されます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [クラスタを選択]: このウィジェットでクラスタを選択します。フィルタを使用して、複数のパラメータでリストを絞り込みます。表示したいクラスタを見つけたら選択します。ダッシュボードに関連データが自動的に表示されます。
- [クラスタ IOPS] と [クラスタ ネットワーク スループット]: クラスタの IOPS とネットワーク スループットを表示します。
- ダッシュボードの他のウィジェットを使用して、クラスタのどの仮想マシンで最高のネットワーク スループットと IOPS が発生したかを知ることができます。仮想マシンの情報をクラスタの結果と比較して、トレンドの相関を見ることができます。データを表示する期間を手動で設定できます。

仮想マシン構成ダッシュボード

仮想マシン構成ダッシュボードには、アノマリのある構成の仮想マシンのリストが表示されます。削除可能な大きなスナップショットのある仮想マシンを表示できます。環境内で削除可能な実体のない仮想マシンもリストに表示されます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [大きな仮想マシン] ウィジェットには、CPU、RAM、ディスク容量の多い仮想マシンがグラフィカルに表示されます。
- 制限のある仮想マシン、大きなスナップショット、実体のない仮想マシン、NIC が複数ある仮想マシン、非標準のオペレーティング システムの仮想マシンを表示できます。これらの仮想マシンは、割り当てられたリソースをすべて使用していても、環境の他の仮想マシンのパフォーマンスに影響を与えます。

ウィジェットのビューはカスタマイズが可能です。

- 1 ウィジェットのタイトル バーの [ウィジェットの編集] アイコンをクリックします。[ウィジェットの編集] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 2 [ビュー] セクションで [編集ビュー] アイコンをクリックします。[編集ビュー] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 3 左ペインの [プレゼンテーション] オプションをクリックして、変更を加えます。

仮想マシン使用量ダッシュボード

仮想マシン使用量ダッシュボードを仮想マシンの所有者と共有することで、仮想マシンの潜在的な問題を確認するのに役立ちます。これには、仮想マシンの基本データが収集されます。このダッシュボードにはインフラストラクチャ

に関連するデータは表示されないのので、インフラストラクチャ関連のメトリックを共有せずに、他のチームとダッシュボードのデータを共有することができます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [使用量をレポートする仮想マシンを検索]: トラブルシューティングを行う仮想マシンを選択します。フィルタを使用して、複数のパラメータでリストを絞り込みます。表示したい仮想マシンを見つけたら選択します。ダッシュボードに関連データが自動的に表示されます。
- [仮想マシンについて]: 選択した仮想マシンとその詳細を表示します。[使用量をレポートする仮想マシンを検索] で仮想マシンを選択します。
- [仮想マシンの使用率トレンド: CPU、メモリ、IOPS、ネットワーク]: CPU の使用率と割り当てのトレンド、メモリ ワークロード、1 秒あたりのディスク コマンド、ネットワーク使用率に関する情報を確認できます。

インフラストラクチャ ダッシュボード

インフラストラクチャ ダッシュボードは、クラスタ、データストア、ESXi ホストの構成に関する洞察を提供する一連のダッシュボードです。

クラスタ構成ダッシュボード

クラスタ構成ダッシュボードには、環境内のクラスタにおける不一致が表示されます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [vMotion はすべてのホストで設定されていますか]: クラスタ内の vMotion と HA の構成に不一致がないかを判別します。クラスタ内のすべての ESXi ホストは、構成が矛盾してはなりません。クラスタの構成の一貫性を維持することで、運用がしやすくなり、パフォーマンスの予測が可能になります。
- [全クラスタのホスト カウント]: 環境内のすべてのクラスタを表示します。クラスタでホストの数に矛盾がなければ、表示されるボックスは等しい大きさになります。この表示により、クラスタ サイズに大きな偏りがあるか、ホストが 4 つ未満の小さなクラスタが存在するか、または大きなクラスタが存在するかを知ることができます。運用を考慮し、クラスタは一貫して適度なサイズに維持してください。
- [選択したクラスタ内の ESXi ホストの属性]: クラスタ内のホストの構成の詳細を表示します。
- [すべてのクラスタ プロパティ]: ウィジェットのすべてのクラスタのプロパティを表示します。

クラスタ パフォーマンス ダッシュボード

クラスタ パフォーマンス ダッシュボードでは、仮想マシンでメモリ競合や CPU 競合が発生しているクラスタを確認することができます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [クラスタ]: パフォーマンスの詳細を確認するクラスタを選択します。フィルタを使用して、複数のパラメータでリストを絞り込みます。表示したいクラスタを見つけたら選択します。ダッシュボードに関連データが自動的に表示されます。
- [クラスタ (クリティカル アラートで色分け、ホスト数でサイズ調整)]: クリティカル アラートのみを表示します。
- 仮想マシンの最大と平均の CPU、メモリ、ディスク、ディスク遅延を表示します。仮想マシンに競合が発生している場合、基盤インフラストラクチャに仮想マシンのニーズに応える十分なリソースがないことが考えられます。

- CPU、メモリ、ディスク遅延の競合が発生している 10 個の仮想マシンのリストを表示します。これによって、トラブルシューティングを実行して、問題解決のステップに進めます。

データストア キャパシティ ダッシュボード

データストア キャパシティ ダッシュボードの情報をもとに、環境内のデータストアのキャパシティを再調整する必要があるかどうかを知ることができます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [データストアのサイズと使用量分布]：過剰に使用されているデータセンターと過小に使用されているデータセンターを見つけます。また、データストアのサイズが等しいかどうかを確認できます。このウィジェットでデータストアを選択すると、ダッシュボードに関連データが自動で表示されます。
- [選択したデータストア内の仮想マシン]：選択したデータストアをもとに仮想マシンのリストを表示します。仮想マシンがパワーオンであるかどうかや、スナップショットを使用する場合はそのサイズなど、関連する詳細も確認できます。
- [選択したデータストアの使用率トレンド]：選択したデータストアで使用されるキャパシティと利用可能なキャパシティの合計を比べて、トレンドを知ることができます。
- [環境内のすべての共有データストア]：環境内で共有されるデータストアのリストを表示します。このウィジェットに表示される情報は、使用量に基づきデータストアのキャパシティの再調整が必要かどうかを適切に判断するのに役立ちます。

データストアのパフォーマンス ダッシュボード

データストアのパフォーマンス ダッシュボードには、遅延が大きいデータストアとそのトレンド ラインが表示されます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [データストアを選択]：パフォーマンスの詳細を確認したいデータストアを選択します。フィルタを使用して、複数のパラメータでリストを絞り込みます。表示したいデータストアを見つけたら選択します。ダッシュボードに関連データが自動的に表示されます。
- [選択したデータストアの仮想マシンの現在の IOPS と遅延]：選択したデータストアの仮想マシンの現在の IOPS と遅延を表示します。
- [高遅延かつ実行中 IO の多いデータストア]：遅延が多いデータストアと実行中のディスク I/O のトレンドを表示します。データストアには、実行中のディスク I/O がないのが望ましい状態です。
- ダッシュボードのその他のウィジェットを使用して、選択したデータストアのディスク遅延、実行中の I/O、IOPS、スループットのトレンドを確認できます。
- [選択した仮想マシンの IOPS トレンド履歴] ウィジェットと [選択した仮想マシンの遅延トレンド履歴] ウィジェット：選択したデータストアの仮想マシンの IOPS と遅延のトレンド履歴を表示します。[選択したデータストアの仮想マシンの現在の IOPS と遅延] ウィジェットから、トレンド履歴を表示する仮想マシンを選択します。

ESXi 構成ダッシュボード

ESXi 構成ダッシュボードには、環境内の ESXi ホストの構成と分布に関する情報が表示されます。非推奨の設定で構成されたホストがないかも確認できます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- このウィジェットを使用して、環境内のハードウェア モデル、BIOS バージョン、ESXi バージョンの分布が分かります。
- このウィジェットを使用して、ホストの構成に非推奨の設定（切断状態の ESXi ホスト、メンテナンス モードの ESXi ホスト、ネットワーク速度が 10 GB 以下のホストなど）が使用されていないかどうかを確認できます。
- [すべての ESXi 設定]：このウィジェットを使用して、ホスト構成の不一致を識別します。

ネットワーク構成ダッシュボード

ネットワーク構成ダッシュボードは、特定のスイッチと使用する ESXi ホストと仮想マシンを見つけるのに役立ちます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [分散スイッチ]：パフォーマンスの詳細を確認したいスイッチを選択します。フィルタを使用して、複数のパラメータでリストを絞り込みます。表示したいスイッチを見つけたら選択します。ダッシュボードに関連データが自動的に表示されます。
- [スイッチの分散ポート グループ]：スイッチのポート グループ、各スイッチのポート数、使用状況の詳細を表示します。
- [選択したスイッチを使用している ESXi ホスト/仮想マシン]：選択したスイッチを使用する ESXi ホストと仮想マシンを見つけます。選択したスイッチを使用する ESXi ホストと仮想マシンに関する構成情報も表示できます。

カスタム ダッシュボード

vRealize Operations Manager には、事前定義されたダッシュボードがあります。ユーザーの環境のニーズを満たすダッシュボードを作成することもできます。

[ダッシュボード] と vRealize Operations Manager ホーム ページを管理するには、左側のペインの [内容] アイコンをクリックし、[ダッシュボード] をクリックします。

ダッシュボード上のウィジェットの追加、削除、配置、新規ダッシュボードのクローン作成と作成、他のインスタンスからのダッシュボードのインポートおよびエクスポート、ウィジェット構成オプションの編集、ウィジェットの相互作用の構成をアクセス権限に基づいて行うことができます。

表 4-141. ダッシュボードのオプション

オプション	説明	使用法
テンプレートとして保存	ダッシュボード定義内のすべての情報が含まれます。	任意のダッシュボードを使用して、テンプレートを作成できます。
ダッシュボードのエクスポート	ダッシュボードをエクスポートすると、vRealize Operations Manager は JSON 形式でダッシュボード ファイルを作成します。	ダッシュボードを vRealize Operations Manager インスタンスからエクスポートし、別のインスタンスにインポートすることができます。
ダッシュボードのインポート	vRealize Operations Manager からのダッシュボード情報が含まれる JSON ファイル。	別の vRealize Operations Manager インスタンスからエクスポートされたダッシュボードをインポートすることができます。vRealize Operations Manager 5.x インスタンスからは、XML ファイルでダッシュボードをインポートすることができます。

表 4-141. ダッシュボードのオプション（続き）

オプション	説明	使用法
ダッシュボードをホームに追加する	vRealize Operations Manager ホーム ページでダッシュボードが使用可能になります。	任意のダッシュボードを vRealize Operations Manager ホーム ページに追加できます。
ダッシュボードをホームから削除する	vRealize Operations Manager ホーム ページからダッシュボードを削除します。	任意のダッシュボードを vRealize Operations Manager ホーム ページに追加できます。
ダッシュボードの順序変更/自動切り替え	vRealize Operations Manager ホーム ページでのダッシュボード タブの順序を変更します。	あるダッシュボードから別のダッシュボードへ切り替えるよう、vRealize Operations Manager を構成することができます。
サマリー ダッシュボードの管理	選択されたオブジェクト、グループ、またはアプリケーションの状態の概要を提供します。	[サマリ] タブをダッシュボードと切り替え、特定の必要なデータを取得することができます。
タブ グループの管理	フォルダでダッシュボードをグループ化します。	ダッシュボード フォルダを作成し、自分にとってわかりやすいようにダッシュボードをグループ化することができます。
ダッシュボードの共有	他のユーザーまたはユーザー グループがダッシュボードを使用できるようにします。	1 つまたは複数のユーザー グループで 1 つのダッシュボードまたはダッシュボード テンプレートを共有できます。

ダッシュボード リストは、アクセス権限によって異なります。

ダッシュボードの作成と構成

vRealize Operations Manager のすべてのオブジェクトのステータスを表示するには、ウィジェットを追加してダッシュボードを作成します。ダッシュボードを作成して変更し、環境のニーズに合わせて構成できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックして、[ダッシュボード] をクリックします。
- 2 [ダッシュボードの作成] アイコンをクリックしてダッシュボードを作成および構成します。
- 3 左側のペインで手順を完了して、次の操作を実行します。
 - a ダッシュボードの名前を入力します。
[名前と説明の詳細](#)
 - b ウィジェットをダッシュボードに追加します。
[ウィジェット リストの詳細](#)
 - c ウィジェットの相互作用を構成します。
[ウィジェットの相互作用の詳細](#)
 - d ダッシュボードのナビゲーションを作成します。
[ダッシュボード ナビゲーションの詳細](#)
- 4 [保存] をクリックします。

5 [ダッシュボード] パネルから、[ダッシュボードの編集] をクリックして、ダッシュボードを変更します。

名前と説明の詳細

vRealize Operations Manager ホーム ページに表示されるとき、ダッシュボードの名前および表示。

ダッシュボードを構成する場所

ダッシュボードを作成または編集するには、左側のペインで [内容] - [ダッシュボード] を選択します。ダッシュボード ツールバーで、プラス記号をクリックしてダッシュボードを追加するか、鉛筆をクリックして選択したダッシュボードを編集します。ワークスペースの左側にある、[ダッシュボードの構成] をクリックします。

表 4-142. ダッシュボード ワークスペースのダッシュボード構成オプション

オプション	説明
名前	ホーム ページのタブの最上部およびダッシュボードのリストに表示されるとき、ダッシュボードの名前。 名前の入力時にスラッシュを使用すると、スラッシュがグループの区切り記号として扱われ、その名前が存在しない場合にはダッシュボード リストで、指定した名前のフォルダが作成されます。たとえば、ダッシュボードに clusters/hosts という名前を指定した場合、グループ clusters の下でダッシュボードに hosts という名前が付けられます。
説明	ダッシュボードの説明。
デフォルトです	[はい] を選択すると、ログインしたときにホーム ページにダッシュボード名が表示されます。

ウィジェット リストの詳細

vRealize Operations Manager には、使用環境内のオブジェクトの特定のメトリックとプロパティを監視するためにダッシュボードに追加することができるウィジェットのリストが表示されます。

ウィジェットをダッシュボードに追加する場所

ウィジェットをダッシュボードに追加するには、左側のペインで [内容] - [ダッシュボード] を選択します。ダッシュボード ツールバーで、プラス記号をクリックしてダッシュボードを追加するか、鉛筆アイコンをクリックして選択したダッシュボードを編集します。ワークスペースの左側で、[ウィジェット リスト] をクリックします。ダッシュボードを作成する場合は、ワークスペースに関する必要な手順を完了しておきます。

ウィジェットをダッシュボードに追加する方法

ワークスペースの左側に、事前定義されているすべての vRealize Operations Manager ウィジェットのリストが表示されます。ダッシュボードにウィジェットを追加するには、右側のコンテンツ領域にウィジェットをドラッグします。

ウィジェットを見つけるには、[フィルタ] オプションにウィジェットの名前または名前の一部を入力します。たとえば、**キャパシティ**と入力すると、リストにフィルタが適用されて、残りキャパシティ ウィジェット、キャパシティ使用率ウィジェット、節約可能なキャパシティ ウィジェットが表示されます。その後、必要なウィジェットを選択できます。

情報を表示するため、ほとんどのウィジェットを個別に構成する必要があります。各ウィジェットの構成方法の詳細については、[ウィジェット](#)を参照してください。

ダッシュボードでウィジェットを配置する方法

必要に応じてダッシュボードのレイアウトを変更できます。最初に追加するウィジェットは、配置した位置に関係なくデフォルトで自動的に水平方向に配置されます。ウィジェットは、幅に基づいて、ダッシュボードの最上部まで移動されます。

- ウィジェットの位置を変更するには、レイアウト内の目的の場所へウィジェットをドラッグします。他のウィジェットが自動的に再配置されて場所が確保されます。
- ウィジェットのサイズを変更するには、ウィジェットの右下隅をドラッグします。

ウィジェットの相互作用の詳細

ウィジェットどうしを接続し、表示される情報を相互依存させることができます。

ウィジェットの相互作用を作成する場所

ダッシュボードでウィジェットについて、ウィジェットの相互作用を作成するには、左側のペインで [内容] - [ダッシュボード] を選択します。ダッシュボード ツールバーで、プラス記号をクリックしてダッシュボードを追加するか、鉛筆をクリックして選択したダッシュボードを編集します。ワークスペースの左側で、[ウィジェットの相互作用] をクリックします。新しいダッシュボードを作成する場合は、ワークスペースに関する必要な手順を完了させておきます。

ウィジェットの相互作用を作成する方法

使用可能なウィジェットの相互作用のリストは、ダッシュボードにあるウィジェットによって異なります。ウィジェットは、提供、受け取り、および提供と受け取りの両方を実行できます。ウィジェットによっては、複数の提供元が存在するものもあります。

相互作用を作成するには、指定したウィジェットの [選択したオブジェクト] ドロップダウン メニューをクリックし、提供元のウィジェットを選択します。アラート、メトリック、またはタグを提供するウィジェットがあります。[選択したアラート]、[選択したメトリック]、または [選択したタグ] ドロップダウン メニューをクリックして、アラート、メトリック、またはタグに固有の提供元のウィジェットを選択します。すべての相互作用を使用する準備ができれば、[相互作用を適用] をクリックします。相互作用の動作の仕組みの詳細については、[ウィジェットの相互作用](#)を参照してください。

ダッシュボード ナビゲーションの詳細

ダッシュボードのナビゲーションを使用して、あるダッシュボードから別のダッシュボードに移動したり、あるダッシュボードのセクションやコンテキストを別のダッシュボードに適用したりできます。ウィジェットを別のダッシュボードのウィジェットと接続することにより、問題の調査や与えられた情報の効果的な解析が可能です。

ダッシュボードのナビゲーションの追加を行う場所

ダッシュボードにダッシュボードのナビゲーションを作成するには、左側のペインで、[内容] - [ダッシュボード] を選択します。ダッシュボード ツールバーで、プラス記号をクリックしてダッシュボードを追加するか、鉛筆をクリックして選択したダッシュボードを編集します。ワークスペースの左側で、[ダッシュボードのナビゲーション] をクリックします。新しいダッシュボードを作成する場合は、ワークスペースに関する必要な手順を完了させておきます。


ダッシュボードのナビゲーションの動作

ダッシュボードのナビゲーションは、提供元のウィジェット用にのみ作成できます。提供元のウィジェットはターゲット ウィジェットに情報を送信します。ダッシュボードのナビゲーションを作成すると、ターゲット ウィジェットは、受信可能な情報タイプに基づいてフィルタリングされます。

ダッシュボードのナビゲーションをダッシュボードに追加する方法

使用可能なダッシュボードのナビゲーションは、使用可能なダッシュボードと現在のダッシュボード内のウィジェットによって異なります。ナビゲーションを追加するには、指定したウィジェットの [ターゲット ダッシュボード] ドロップダウン メニューをクリックし、移動先のダッシュボードとウィジェットを選択します。適用可能なウィジェットを複数選択できます。[ナビゲーションの適用] をクリックして、接続を適用します。

注： ホーム ページで使用できないダッシュボードには、ダッシュボードのナビゲーションを追加できません。

ダッシュボードのナビゲーションが使用可能な場合、[ダッシュボードのナビゲーション] アイコン () が各ウィジェットの上部メニューに表示されます。複数のオブジェクトを選択し、あるダッシュボードの選択項目またはコンテキストを別のダッシュボードに適用できます。複数のオブジェクトを個々に選択するには、Ctrl キーを押しながらオブジェクトをクリックします。オブジェクトの範囲を選択するには、Shift キーを押しながらオブジェクトをクリックします。

ダッシュボードの管理

ダッシュボードのタブの順序の変更する、vRealize Operations Manager をダッシュボード間で切り替える、フォルダを作成して、ダッシュボードをわかりやすくグループ化する、ダッシュボードまたはダッシュボード テンプレートを 1 つ以上のユーザー グループと共有することができます。

ダッシュボードの順序変更と切り替え

ホーム ページで、ダッシュボード タブの順序を変更できます。あるダッシュボードから別のダッシュボードへ切り替えるよう、vRealize Operations Manager を構成することができます。この機能は、自社のパフォーマンスの様々な側面を表示する複数のダッシュボードがあり、それぞれを交互に表示したいというときに便利です。

ダッシュボードの順序と自動切り替えを構成する場所

ダッシュボードの切り替えの順序変更および構成を行うには、左側のペインで [内容] - [ダッシュボード] を選択し、歯車アイコンをクリックして、[ダッシュボードの順序変更/自動切り替え] を選択します。

ダッシュボードの順序を変更する方法

リストには、ダッシュボードの順序のとおりに表示されます。ダッシュボードを上下にドラッグし、ホーム ページでのダッシュボードの順序を変更します。

ダッシュボードの自動切り替えを構成する方法

- 1 リストから、構成するダッシュボードをダブル クリックします。
- 2 [自動移行] ドロップダウン メニューから、[オン] を選択します。
- 3 切り替え間隔を秒単位で選択します。
- 4 切り替え先のダッシュボードを選択し、[更新] をクリックします。
- 5 [保存] をクリックして、変更を保存します。

指定した間隔を過ぎると、ホーム ページで現在のダッシュボードから定義済みのダッシュボードに切り替わります。

サマリ ダッシュボードの管理

[サマリ] タブには、選択したオブジェクト、グループ、またはアプリケーションの状態の概要が表示されます。[サマリ] タブをダッシュボードと切り替え、特定の必要なデータを取得することができます。

[サマリ] タブ ダッシュボードを構成する場所

サマリ ダッシュボードを管理するには、左側のペインで [内容] - [ダッシュボード] を選択し、歯車アイコンをクリックして、[サマリ ダッシュボードの管理] を選択します。

[サマリ] タブ ダッシュボードを管理する方法

表 4-143. [サマリ ダッシュボードの管理] のオプション

オプション	説明
アダプタ タイプ	サマリ ダッシュボードの構成対象のアダプタ タイプ。
フィルタ	単語検索を使用して、リストに表示されるアダプタ タイプの数を限定します。
名前	使用可能なオブジェクトすべてのリスト。
デフォルトの使用アイコン	vRealize Operations Manager のデフォルトの [サマリ] タブを使用する場合にクリックします。
詳細ページ	選択したオブジェクトの場合に使用する [サマリ] タブの種類を表示します。
[ダッシュボードの割り当て] アイコン	クリックして表示される [ダッシュボード リスト] ダイアログ ボックスに、使用可能なすべてのダッシュボードがリストされます。

オブジェクトの [サマリ] タブを変更するには、左パネルでオブジェクトを選択し、[ダッシュボードの割り当て] アイコンをクリックします。[ダッシュボード リスト] ダイアログ ボックスでダッシュボードを選択し、[OK] をクリックします。[サマリ ダッシュボードの管理] ダイアログ ボックスで、[保存] をクリックします。オブジェクト詳細ページの [サマリ] タブに移動すると、オブジェクト タイプに関連付けたダッシュボードが表示されます。

タブ グループの管理

ダッシュボード フォルダを作成し、自分にとってわかりやすいようにダッシュボードをグループ化することができます。

ダッシュボード グループを構成する場所

ダッシュボード グループを管理するには、左側のペインで [内容] - [ダッシュボード] を選択し、歯車アイコンをクリックして、[タブ グループの管理] を選択します。

[ダッシュボード] タブを管理する方法

表 4-144. [タブ グループの管理] のオプション

オプション	説明
タブ グループ	使用可能なグループ フォルダすべてで構成される階層ツリー。
ダッシュボード タブ	使用可能なダッシュボードすべてのリスト。

新しいダッシュボード グループ フォルダを作成するには、[タブ グループ] フォルダか別のフォルダを右クリックして、[追加] をクリックします。ダッシュボードを追加するには、追加するダッシュボードを [ダッシュボード タブ] リストからフォルダにドラッグします。

ダッシュボードの共有

1 つまたは複数のユーザー グループで 1 つのダッシュボードまたはダッシュボード テンプレートを共有できます。ダッシュボードを共有すると、選択するユーザー グループ内のすべてのユーザーが利用できるようになります。ダッシュボードは、共有するユーザー全員に同じように表示されます。共有ダッシュボードを編集する場合、すべてのユーザーに対してダッシュボードが変更されます。他のユーザーは、共有ダッシュボードを表示することしかできません。変更することはできません。

ダッシュボードを共有するための場所

ダッシュボードを共有するには、左側のペインで [内容] - [ダッシュボード] を選択し、歯車アイコンをクリックして、[ダッシュボードの共有] を選択します。

表 4-145. ダッシュボードの共有のオプション

オプション	説明
アカウント グループ	ダッシュボードの共有相手とすることができるすべてのグループ。
共有ダッシュボード	共有できるすべてのダッシュボードとテンプレート。[ダッシュボード タブ/テンプレートの共有] アイコンをクリックすることで、ダッシュボード タブとダッシュボード テンプレート間を切り替えることができます。

[共有ダッシュボード] タブの管理方法

ダッシュボード タブを共有するには、[共有ダッシュボード] のリストで該当のダッシュボードに移動し、それを左側にある共有相手のグループにドラッグします。

グループとのダッシュボードの共有を停止するには、左パネルで該当のグループをクリックし、右パネルでダッシュボードに移動して、リストの上にある [共有の停止] アイコンをクリックします。

複数のグループとのダッシュボードの共有を停止するには、左パネルで [グループ化されていません] という名前をクリックし、右パネルでダッシュボードに移動して、リストの上にある [共有の停止] アイコンをクリックします。

表示

vRealize Operations Manager には、いくつかのビュー タイプがあります。それぞれのビュー タイプを使用することで、アラート、症状など、さまざまな監視対象オブジェクトのメトリック、プロパティ、ポリシーをさまざまな切り口で見ることができます。vRealize Operations Manager のビューには、使用環境におけるアダプタの情報も表示されます。

vRealize Operations Manager のビューを設定して、変換、予測、トレンド計算を表示することができます。

- 変換タイプによって、値の集約方法が決定されます。
- トレンド オプションによって、値が履歴データ、Raw データに基づきどのように変化するかが示されます。トレンド計算は、変換タイプとロール アップ間隔によって異なります。
- 予測オプションによって、将来の値が履歴データのトレンド計算に基づきどのようになるかが示されます。



ビューの作成

(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_create_views_in_vrom)

vRealize Operations Manager のビューは、vRealize Operations Manager のさまざまな領域において使用できます。

- すべてのビューを管理するには、[内容] - [ビュー]を選択します。
- ビューによって特定のオブジェクト用に提供されるデータを表示するには、[詳細] タブをクリックし、[ビュー]をクリックします。
- ビューによってダッシュボードに提供されるデータを表示するには、ダッシュボードに表示ウィジェットを追加します。詳細については、[表示ウィジェット](#)を参照してください。
- 詳細な分析のセクションでビューにリンクを設定するには、ビューのワークスペースにおける可視性の手順で [詳細な分析] オプションを選択します。

ビューおよびレポートの所有権

事前定義されたすべてのビューおよびテンプレートのデフォルトの所有者は System です。これらが編集された場合、その編集者が所有者になります。事前定義された元のビューまたはテンプレートを保持する場合は、それらのクローンを作成する必要があります。クローン作成すると、そのクローンの所有者になります。

ビュー、テンプレート、またはスケジュールを最後に編集したユーザーがその所有者になります。たとえば、ビューを作成した場合、その所有者としてリストされます。別のユーザーがビューを編集すると、そのユーザーが所有者になって [所有者] 列に表示されます。

ビューまたはテンプレートをインポートしたユーザーがその所有者になります。これは、最初に別の誰かがそのビューを作成している場合も同様です。たとえば、*User 1* がテンプレートを作成してエクスポートします。裏で *User 2* がインポートすると、テンプレートの所有者は *User 2* になります。

誰がテンプレートを所有しているかに関係なく、レポートを生成したユーザーがその所有者になります。レポートがスケジュールから作成されている場合、スケジュールを作成したユーザーが、生成されるレポートの所有者になります。たとえば、*User 1* がテンプレートを作成して *User 2* がこのテンプレートのスケジュールを作成している場合、生成されるレポートの所有者は *User 2* になります。

ビューの概要

ビューは、収集したオブジェクトに関する情報を、ビュー タイプに応じた方法で表示します。それぞれのビュー タイプを使用することで、アラート、症状など、さまざまな監視対象オブジェクトのメトリック、プロパティ、ポリシーをさまざまな切り口で見ることができます。

[ビュー] ページは、左側のペインの [内容] アイコンをクリックして、[ビュー] をクリックすると表示されます。

[ビュー] ページでは、ビューの作成、編集、削除、クローン作成、エクスポート、インポートを実行できます。

一覧表示されたビューは、名前、タイプ、説明、件名、または所有者により並べ替えることができます。

パネルの右上からフィルタを追加すると、ビューのリストを制限できます。

表 4-146. フィルタ グループ

フィルタ グループ	説明
名前	ビュー名によるフィルタリング。たとえば my view と入力すると、名前に「my view」という言葉が含まれるビューがすべてリストされます。
タイプ	ビュー タイプによるフィルタリング。
説明	ビューの説明によるフィルタリング。たとえば my view と入力すると、説明に「my view」という言葉が含まれるビューがすべてリストされます。
件名	サブジェクトによるフィルタリング。

ビューおよびレポートの所有権

ビュー、レポート、テンプレート、またはスケジュールの所有者は変更される可能性があります。

事前定義されたすべてのビューおよびテンプレートのデフォルトの所有者は System です。これらが編集された場合、その編集者が所有者になります。事前定義された元のビューまたはテンプレートを保持する場合は、それらのクローンを作成する必要があります。クローン作成すると、そのクローンの所有者になります。

ビュー、テンプレート、またはスケジュールを最後に編集したユーザーがその所有者になります。たとえば、ビューを作成した場合、その所有者としてリストされます。別のユーザーがビューを編集すると、そのユーザーが所有者になって [所有者] 列に表示されます。

ビューまたはテンプレートをインポートしたユーザーがその所有者になります。これは、最初に別の誰かがそのビューを作成している場合も同様です。たとえば、*User 1* がテンプレートを作成してエクスポートします。裏で *User 2* がインポートすると、テンプレートの所有者は *User 2* になります。

誰がテンプレートを所有しているかに関係なく、レポートを生成したユーザーがその所有者になります。レポートがスケジュールから作成されている場合、スケジュールを作成したユーザーが、生成されるレポートの所有者になります。たとえば、*User 1* がテンプレートを作成して *User 2* がこのテンプレートのスケジュールを作成している場合、生成されるレポートの所有者は *User 2* になります。

ビューの作成と構成

特定のオブジェクトの情報を収集および表示するために、カスタム ビューを作成できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックして、[表示] をクリックします。
- 2 [ビューの作成] アイコンをクリックし、ビューを作成します。
- 3 左側のペインで次の手順を実行します。
 - a ビューの名前と説明を入力します。
[名前と説明の詳細](#)
 - b ビューのプレゼンテーションを変更します。
[プレゼンテーションの詳細](#)

- c ビューのベース オブジェクト タイプを選択します。

サブジェクトの詳細

- d ビューにデータを追加します。

データの詳細

- e ビューの可視性を変更します。

可視性の詳細

- 4 [保存] をクリックします。

- 5 ダッシュボード パネルから、[編集ビュー] をクリックしてビューを変更します。

名前と説明の詳細

[ビュー] ページのビューのリストに表示されるビューの名前と説明です。

名前と説明をビューに追加するには、左側のペインで [内容] - [ビュー] を選択します。[ビュー] ツールバーで、プラス記号をクリックしてビューを追加するか、鉛筆をクリックして選択したビューを編集します。ワークスペースの左側で、[名前と説明] をクリックします。

表 4-147. ビューのワークスペースでの名前と説明のオプション

オプション	説明
名前	[ビュー] ページに表示されるビューの名前。
説明	ビューの説明。

プレゼンテーションの詳細

プレゼンテーションは、オブジェクトについて収集された情報を表示する方法の 1 つです。各ビュー タイプで、メトリックとプロパティをさまざまな観点から解釈することができます。

ビューのプレゼンテーションを変更するには、左側のペインで [内容] - [ビュー] を選択します。[ビュー] ツールバーで、プラス記号をクリックしてビューを追加するか、鉛筆をクリックして選択したビューを編集します。ワークスペースの左側で、[プレゼンテーション] をクリックします。ビューを作成する場合は、前述の必要な手順を実行してください。

表 4-148. ビューのワークスペースでのプレゼンテーションのオプション

ビュー タイプ	説明
リスト	監視対象環境における特定のオブジェクトに関するデータを表形式で表示します。
概要	監視対象環境におけるリソースの使用状況に関するデータを表形式で表示します。
傾向	履歴データを利用して監視対象環境におけるリソースの使用状況と可用性の傾向および予測を生成します。
分布	監視対象環境におけるリソース展開に関する集約データを表示します。

表 4-148. ビューのワークスペースでのプレゼンテーションのオプション（続き）

ビュー タイプ	説明
テキスト	<p>入力されたテキストを挿入します。テキストは、動的なものにすることができ、メトリックとプロパティを含めることができます。</p> <p>テキストに書式を設定して、フォントのサイズや色の変更、テキストの強調表示、テキストの中央/右/左揃えを指定できます。また、選択したテキストを太字や斜体で表示したり、下線を引いたりもできます。</p> <p>デフォルトでは、レポート テンプレートを作成および変更する場合にのみ、テキスト ビューを使用できます。この設定は、ビューのワークスペースの [可視性] 手順で変更できます。</p>
イメージ	<p>静的イメージを挿入します。</p> <p>デフォルトでは、レポート テンプレートを作成および変更する場合にのみ、イメージ ビューを使用できます。この設定は、ビューのワークスペースの [可視性] 手順で変更できます。</p>

ビュー タイプのライブ プレビューは、サブジェクトとデータを選択する場合と、[プレビュー ソースの選択] を選択する場合に表示できます。

ビューのプレゼンテーションの構成方法

いくつかのビューのプレゼンテーションには、特定の構成設定があります。

表 4-149. ビューのワークスペースでのプレゼンテーションの構成オプション

ビュー タイプ	構成の説明
リスト	ページあたりのアイテム数を選択します。各アイテムが 1 行で表示され、そのメトリックとプロパティが列に表示されます。
概要	ページあたりのアイテム数を選択します。それぞれの行は、集約されたメトリックまたはプロパティです。
傾向	<p>プロット線の最大数を入力します。左上ペインのビュー タイプのライブ プレビューに表示されるオブジェクトについて、出力を制限します。表示されるプロット線は、プロット線の最大数として設定された値で決まります。</p> <p>たとえば、履歴データのプロットでプロット線の最大数を 30 に設定すると、30 個のオブジェクトが表示されます。履歴、傾向、予測の線のプロットで最大数を 30 に設定すると、オブジェクト当たり 3 本のプロット線が使用されるので、表示されるオブジェクトは 10 個のみになります。</p>
分布	<p>円グラフまたは棒グラフによる分布情報の表示を選択します。</p> <p>分布タイプを選択し、バケット カウントとサイズを構成します。</p> <p>vRealize Operations Manager の分布タイプについては、ビューの分布タイプを参照してください。</p>

分布タイプ

vRealize Operations Manager ビューの分布タイプでは、監視対象環境におけるリソース分布に関して集約されたデータが表示されます。

動的分布

vRealize Operations Manager がデータをバケットに分布する方法を詳細に指定します。

表 4-150. 動的分布構成オプション

構成オプション	説明
バケット カウント	データ分布で使用するバケット数。
バケット サイズ間隔	バケット サイズは、指定のバケット数で分割された定義済みの間隔によって決まります。
バケット サイズの対数関数バケット	バケット サイズが対数的に増加するサイズに計算されます。これにより、指定されたバケット数で、範囲全体を途切れなくカバーできます。対数によるサイズ計算の底は、所定のデータによって決定されます。
バケット サイズの単純な最小/最大バケット	バケット サイズは測定された最小値と最大値の間で均等に分割されます。これにより、指定されたバケット数で、範囲全体を途切れなくカバーできます。

手動分布

バケット数および各バケットの最小値と最大値を指定します。

離散分布

vRealize Operations Manager がデータを分布するバケットの数を指定します。

ビューの分布タイプ

vRealize Operations Manager ビューの分布タイプでは、監視対象環境におけるリソース分布に関して集約されたデータが表示されます。

動的分布

vRealize Operations Manager がデータをバケットに分布する方法を詳細に指定します。

表 4-151. 動的分布構成オプション

構成オプション	説明
バケット カウント	データ分布で使用するバケット数。
バケット サイズ間隔	バケット サイズは、指定のバケット数で分割された定義済みの間隔によって決まります。
バケット サイズの対数関数バケット	バケット サイズが対数的に増加するサイズに計算されます。これにより、指定されたバケット数で、範囲全体を途切れなくカバーできます。対数によるサイズ計算の底は、所定のデータによって決定されます。
バケット サイズの単純な最小/最大バケット	バケット サイズは測定された最小値と最大値の間で均等に分割されます。これにより、指定されたバケット数で、範囲全体を途切れなくカバーできます。

手動分布

バケット数および各バケットの最小値と最大値を指定します。

離散分布

vRealize Operations Manager がデータを分布するバケットの数を指定します。

バケット数を増やすと、より詳細なデータを確認できます。

サブジェクトの詳細

サブジェクトは、ビューで情報を表示するための基本オブジェクト タイプです。

ビューのサブジェクトを指定するには、左側のペインで [内容] - [ビュー] を選択します。[ビュー] ツールバーで、プラス記号をクリックしてビューを追加するか、鉛筆をクリックして選択したビューを編集します。ワークスペースの左側で [サブジェクト] をクリックします。新しいビューを作成する場合は、前述の必要な手順を実行してください。

指定するサブジェクトによって、ビューを適用できる場所が決まります。複数のサブジェクトを選択すると、ビューをそれぞれのサブジェクトに適用できます。[可視性] 手順の [ブラックリスト] オプションを使用すると、ビューが表示されるレベルを制限できます。

ビューの可用性は、ビュー構成のサブジェクト、インベントリ ビュー、ユーザー権限、およびビューの可視性設定によって異なります。

ビューの適用の可否

リスト ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトの場所とオブジェクト コンテナの場所ですべてのリスト ビューを確認できます。ただし、インベントリ ビューによっては、オブジェクト コンテナの場所にリスト ビューが表示されない場合があります。たとえば、ホスト システムのサブジェクトを持つリスト ビューを作成したとします。[環境] - [vSphere ホストおよびクラスタ] - [vSphere ワールド] に移動し、vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックすると、作成したリスト ビューが表示されます。しかし、[環境] - [vSphere Storage] - [vSphere ワールド] に移動し、同じ vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックしても、作成したリスト ビューは表示されません。vSphere Storage のインベントリ ビューにホスト システム オブジェクトが含まれないため、ホスト システムのサブジェクトを持つリスト ビューはありません。

サマリ ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトの場所とオブジェクト コンテナの場所ですべてのサマリ ビューを確認できます。ただし、インベントリ ビューによっては、オブジェクト コンテナの場所にサマリ ビューが表示されない場合があります。たとえば、データストアのサブジェクトを持つサマリ ビューを作成したとします。[環境] - [vSphere Storage] - [vSphere ワールド] に移動し、vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックすると、作成したリスト ビューが表示されます。しかし、[環境] - [vSphere ネットワーク] - [vSphere ワールド] に移動し、同じ vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックしても、作成したサマリ ビューは表示されません。vSphere ネットワークのインベントリ ビューにデータストア オブジェクトが含まれないため、データストアのサブジェクトを持つリスト ビューはありません。

傾向ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトの場所でのみ傾向ビューを確認できます。たとえば、仮想マシンのサブジェクトを持つ傾向ビューを作成したとします。ナビゲーション ツリーで仮想マシンに移動すると、作成したビューが表示されます。

ディストリビューション ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトのオブジェクト コンテナの場所でのみディストリビューション ビューを確認できます。ただし、インベントリ ビューによっては、オブジェクト コンテナの場所にディストリビューション ビューが表示されない場合があります。たとえば、ホスト システムのサブ

ジェクトを持つディストリビューション ビューを作成したとします。[環境] - [vSphere ホストおよびクラスタ] - [vSphere ワールド] に移動し、vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックすると、作成したディストリビューション ビューが表示されます。しかし、[環境] - [vSphere ネットワーク] - [vSphere ワールド] に移動し、同じ vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックしても、作成したディストリビューション ビューは表示されません。vSphere ネットワークのインベントリ ビューにホスト システム オブジェクトが含まれないため、ホスト システムのサブジェクトを持つディストリビューション ビューはありません。

テキスト ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトの場所でのみテキスト ビューを確認できます。たとえば、vCenter Server のサブジェクトを持つテキスト ビューを作成したとします。ナビゲーション ツリーで vCenter Server に移動すると、作成したビューが表示されます。サブジェクトを指定しなかった場合、作成したビューは環境内のすべてのサブジェクトで表示されます。

イメージ ビュー

イメージ ビューは環境内のすべてのオブジェクトに適用できます。

注： ビューの適用の可否は、ユーザー権限およびビューの可視性構成によっても左右されます。

ビューの適用の可否

ビューは必ずしもユーザーの予想どおりの場所に表示されるとは限りません。ビューの適用の可否は、主にビューのサブジェクトとインベントリ ビューによって決まります。

リスト ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトの場所とオブジェクト コンテナの場所ですべてのリスト ビューを確認できます。ただし、インベントリ ビューによっては、オブジェクト コンテナの場所にリスト ビューが表示されない場合があります。たとえば、ホスト システムのサブジェクトを持つリスト ビューを作成したとします。[環境] - [vSphere ホストおよびクラスタ] - [vSphere ワールド] に移動し、vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックすると、作成したリスト ビューが表示されます。しかし、[環境] - [vSphere Storage] - [vSphere ワールド] に移動し、同じ vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックしても、作成したリスト ビューは表示されません。vSphere Storage のインベントリ ビューにホスト システム オブジェクトが含まれないため、ホスト システムのサブジェクトを持つリスト ビューはありません。

サマリ ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトの場所とオブジェクト コンテナの場所ですべてのサマリ ビューを確認できます。ただし、インベントリ ビューによっては、オブジェクト コンテナの場所にサマリ ビューが表示されない場合があります。たとえば、データストアのサブジェクトを持つサマリ ビューを作成したとします。[環境] - [vSphere Storage] - [vSphere ワールド] に移動し、vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックすると、作成したリスト ビューが表示されます。しかし、[環境] - [vSphere ネットワーク] - [vSphere ワールド] に移動し、同じ vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックしても、作成したサマリ ビューは表示されません。vSphere ネットワークのインベントリ ビューにデータストア オブジェクトが含まれないため、データストアのサブジェクトを持つリスト ビューはありません。

傾向ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトの場所でのみ傾向ビューを確認できます。たとえば、仮想マシンのサブジェクトを持つ傾向ビューを作成したとします。ナビゲーション ツリーで仮想マシンに移動すると、作成したビューが表示されます。

ディストリビューション ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトのオブジェクト コンテナの場所でのみディストリビューション ビューを確認できます。ただし、インベントリ ビューによっては、オブジェクト コンテナの場所にディストリビューション ビューが表示されない場合があります。たとえば、ホスト システムのサブジェクトを持つディストリビューション ビューを作成したとします。[環境] - [vSphere ホストおよびクラスター] - [vSphere ワールド] に移動し、vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックすると、作成したディストリビューション ビューが表示されます。しかし、[環境] - [vSphere ネットワーク] - [vSphere ワールド] に移動し、同じ vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックしても、作成したディストリビューション ビューは表示されません。vSphere ネットワークのインベントリ ビューにホスト システム オブジェクトが含まれないため、ホスト システムのサブジェクトを持つディストリビューション ビューはありません。

テキスト ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトの場所でのみテキスト ビューを確認できます。たとえば、vCenter Server のサブジェクトを持つテキスト ビューを作成したとします。ナビゲーション ツリーで vCenter Server に移動すると、作成したビューが表示されます。サブジェクトを指定しなかった場合、作成したビューは環境内のすべてのサブジェクトで表示されます。

イメージ ビュー

イメージ ビューは環境内のすべてのオブジェクトに適用できます。

注： ビューの適用の可否は、ユーザー権限およびビューの可視性構成によっても左右されます。

データの詳細

データ定義プロセスには、アダプタから提供されるプロパティ、メトリック、ポリシー、データのビューへの追加が含まれます。これらは、vRealize Operations Manager でビューの情報を収集、計算および提供するために使用される項目です。

ビューにデータを追加するには、左側のペインで[内容] - [ビュー]を選択します。[ビュー] ツールバーで、プラス記号をクリックしてビューを追加するか、鉛筆をクリックして選択したビューを編集します。ワークスペースの左側で[データ]をクリックします。新しいビューを作成する場合は、前述の必要な手順を実行してください。

データをビューに追加する方法

複数のサブジェクトを選択している場合は、データを追加するサブジェクトを指定します。左側のパネルのツリーからデータをダブルクリックしてビューに追加します。サブジェクトごとに、追加できるデータが異なる場合があります。

データの変換を構成する方法

データ構成オプションは、ビューおよび選択するデータ タイプによって異なります。ほとんどのオプションがすべてのビューで使用可能です。

表 4-152. データ構成オプション

構成オプション	説明
メトリック名	デフォルトのメトリック名。 すべてのビューで使用可能。
メトリック ラベル	ビューまたはレポートに表示されるカスタマイズ可能なラベル。 すべてのビューで使用可能。
単位	追加されたメトリックまたはプロパティによって異なる。値を表示する単位を選択できます。例：CPU デマンド (MHz) の場合、[単位] ドロップダウン メニューで値を Hz、KHz、または GHz に変更できます。[自動] を選択した場合、スケーリングはわかりやすい単位に設定されます。 すべてのビューで使用可能。
並べ替え順	値を昇順または降順に並べ替えます。 リスト ビューおよび概要ビューで使用可能。
変換	Raw データに適用する計算方法を決定します。変換のタイプを選択できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 最小値。選択した時間範囲のメトリックの最小値。 ■ 最大値。選択した時間範囲のメトリックの最大値。 ■ 平均値。選択した時間範囲のすべてのメトリック値の平均。 ■ 合計。選択した時間範囲のメトリック値の合計。 ■ 最新値。選択した時間範囲内で最も最近に受信したデータ以外のすべてのデータを無視します。 ■ 標準偏差。メトリック値の標準偏差。 ■ メトリック相関。他のメトリックが最小値または最大値のときに、値を表示します。たとえば、cpu.usage が最大値のときに、memory.usage の値を表示します。 ■ 予測。回帰分析を実行し、将来の値を予測します。選択した範囲の最新のメトリック値を表示します。 トレンド以外のすべてのビューで使用可能。
データ系列	トレンド ビューの計算に履歴データ、履歴データのトレンド、および将来の予測を含めるかどうかを選択できます。 トレンド ビューで使用可能。
系列のロール アップ	データがロール アップされる間隔。使用可能なオプションのいずれかを選択します。たとえば、変換として Sum を、ロール アップ間隔として 5 分を選択すると、5 分間隔値が選択されて加算されます。 このオプションは変換構成オプションに適用されます。 すべてのビューで使用可能。
プロジェクト	プロジェクトにはシナリオが含まれています。プロジェクトとは、特定の条件を変更した場合に容量と負荷がどう変化するかを、仮想インフラストラクチャに実際の変更を加えずに行う想定のことです。このプロジェクトを実装する場合、容量要件の内容を事前に確認してください。 すべてのビューで使用可能。選択されたメトリックおよびプロパティによって異なる。

時間設定を構成する方法

時間設定で、データ変換の時間間隔を選択します。これらのオプションは、イメージを除くすべてのビュー タイプで使用可能です。

過去の期間に対する時間範囲を設定したり、あるいは期間の終わりに未来の日付を設定することができます。未来の終了日を選択した際に利用可能なデータが存在しない場合、ビューには予測データが割り当てられます。

表 4-153. 時間設定のオプション

構成オプション	説明
時間範囲モード	基本モードでは、日付範囲を選択することができます。 詳細モードでは、相対または特定の開始日と終了日をあらゆる組み合わせで選択することができます。
相対的な日付範囲	データ変換の相対日付範囲を選択します。 基本モードで使用可能です。
特定の日付範囲	データ変換の特定日付範囲を選択します。 基本モードで使用可能です。
絶対日付範囲	データ表示の日付または時間の範囲を、各月や各週などの単位で選択します。たとえば、毎月 3 日に前月に関するレポートを実行できます。表示されるのは前月の月初から月末までのデータで、前月 3 日から今月 3 日までのデータではありません。 使用可能な期間の単位は [時間]、[日]、[週]、[月]、[年] です。 期間の単位の開始と終了はシステムのロケール設定で決まります。たとえば、欧州諸国の大半で週は月曜始まりなのに対し、米国では日曜始まりです。 基本モードで使用可能です。
相対的な開始日	データ変換の相対開始日を選択します。 詳細モードで使用可能です。
相対的な終了日	データ変換の相対終了日を選択します。 詳細モードで使用可能です。
特定の開始日	データ変換の特定開始日を選択します。 詳細モードで使用可能です。
特定の終了日	データ変換の特定終了日を選択します。 詳細モードで使用可能です。
現在選択されている日付範囲	選択されている日付と時刻の範囲が表示されます。たとえば、2016/5/01 から 2016/5/18 までの日付範囲を選択した場合は、May 1, 2016 12:00:00 AM to May 18, 2016 11:55:00 PM と表示されます。

データを類別する方法

リスト ビューで [次でグループ分け] タブから間隔またはインスタンスの内訳列を追加して、データを類別することができます。

表 4-154. 次でグループ分けオプション

オプション	説明
間隔内訳列の追加（列の設定については、データを参照）	<p>時間間隔で類別されたリソースを選択してデータを確認するには、このオプションを選択します。</p> <p>[データ] タブで [間隔内訳] を選択し、列を構成します。時間範囲のラベルを入力し、間隔内訳を選択することができます。</p>
インスタンス内訳列の追加（列の設定については、データを参照）	<p>選択したリソースの全インスタンスのデータを確認するには、このオプションを選択します。</p> <p>[データ] タブで [インスタンス名] を選択し、列を構成します。ラベルを入力してメトリック グループを選択すると、グループの全インスタンスを類別することができます。[非インスタンス集計メトリックの表示] の選択を解除すると、個別のインスタンスのみを表示することができます。[インスタンス名のみの表示] の選択を解除すると、メトリック グループ名とインスタンスの内訳列のインスタンス名を表示することができます。</p> <p>たとえば、メトリック [CPU:O 使用量] を選択して、CPU 使用量を表示するビューを作成することができます。インスタンスの内訳列を追加すると、[CPU:O 使用量] 列に別の列の CPU インスタンスの使用量がすべて表示されます（0、1 など）。曖昧さを回避するために、[CPU:O 使用量] のメトリック レベルを 使用量 に変更することができます。</p>

フィルタを追加する方法

フィルタ オプションを使用すると、ビューに表示される情報が多すぎるときに基準をさらに追加できます。たとえば、リスト ビューには仮想マシンの健全性に関する情報が表示されます。[フィルタ] タブで、50% より低いリスク メトリックを追加します。この操作の後、ビューには リスクが 50% より低いすべての仮想マシンの健全性が表示されます。

ビューにフィルタを追加するには、左側のペインで[内容] - [ビュー]を選択します。[ビュー] ツールバーで、プラス記号をクリックしてビューを追加するか、鉛筆をクリックして選択したビューを編集します。ワークスペースの左側で[データ] をクリックし、メイン パネルで[フィルタ] タブをクリックします。新しいビューを作成する場合は、前述の必要な手順を実行してください。

各サブジェクトには、別個のフィルタ ボックスがあります。アラート ロールアップ、アラート、症状サブジェクトの場合、すべての適用可能なメトリックがフィルタリング用にサポートされているわけではありません。

表 4-155. フィルタの追加オプション

オプション	説明
追加	基準セットに別の基準を追加します。フィルタによって、指定した条件のすべてを満たす結果が返されます。
別の基準の追加	別の基準セットを追加します。フィルタによって、何らかの基準セットを満たす結果が返されます。

概要行または概要列をビューに追加する方法

概要オプションは、リスト ビューおよび概要ビューでのみ使用可能です。概要ビューでは必須項目となります。複数の概要行または概要列を追加して、異なる集約が表示されるようにそれぞれを構成できます。概要構成パネルで、集約方法、計算に含めるデータまたは除外するデータを選択します。

ビューに概要行または概要列を追加するには、左側のペインで[内容] - [ビュー]を選択します。[ビュー] ツールバーで、プラス記号をクリックしてビューを追加するか、鉛筆をクリックして選択したビューを編集します。ワークスペースの左側で[データ]をクリックし、メイン パネルで[概要] タブをクリックします。新しいビューを作成する場合は、前述の必要な手順を実行してください。

リスト ビューの場合、概要行には指定したサブジェクトによって集約された情報が表示されます。

概要ビューの場合、概要列には[データ] タブの項目によって集約された情報が表示されます。

可視性の詳細

ビューの可視性では、vRealize Operations Manager 内でビューを表示できる場所を定義します。

ビューの可視性を変更するには、左側のペインで[内容] - [ビュー]を選択します。[ビュー] ツールバーで、プラス記号をクリックしてビューを追加するか、鉛筆をクリックして選択したビューを編集します。ワークスペースの左側で[可視性]をクリックします。新しいビューを作成する場合は、前述の必要な手順を実行してください。

表 4-156. ビューのワークスペースの可視性オプション

オプション	説明
可用性	vRealize Operations Manager 内で、このビューを表示する場所を選択します。ダッシュボードにビューを表示する場合は、チェック ボックスを選択し、ビュー ウィジェットを追加して構成します。
詳しい分析	バッジを選択して、[詳しい分析] でビューが使用できるようにします。 [詳しい分析] セクションは、オブジェクトの[分析] タブに表示されます。バッジでビューを表示できるようにすると、そのバッジの[詳しい分析] セクションにビューへのリンクが表示されます。このリンクをクリックすると、提供された情報を分析できます。
ブラックリスト	このビューを表示しないサブジェクト レベルを選択します。 たとえば、サブジェクト仮想マシンにはリスト ビューがあります。このビューは、その任意の親オブジェクトを選択すると表示されます。ここで、データセンターをブラックリストに追加します。すると、データセンター レベルでは、ビューは表示されなくなります。

ビューの編集、クローン作成、および削除

ビューは、編集、クローン作成、および削除することができます。これらのアクションを実行する前に、その結果についてよく理解してください。

ビューを編集すると、そのビューが含まれるレポート テンプレートにすべての変更が適用されます。

ビューのクローンを作成する場合、クローンに対する変更はソース ビューに影響しません。

ビューを削除すると、ビューが含まれるすべてのレポート テンプレートからそのビューが削除されます。

ユーザー シナリオ：仮想マシンを追跡するための vRealize Operations Manager 表示の作成、実行、エクスポートおよびインポート

あなたは、仮想インフラストラクチャの管理者として、vRealize Operations Manager を使用して複数の環境を監視しています。各 vCenter Server インスタンスの仮想マシン数を把握する必要があります。特定の順序で情報を収集する表示を定義し、それをすべての vRealize Operations Manager 環境で使用します。

前提条件

このタスクを実行するのに必要なアクセス権限があることを確認してください。vRealize Operations Manager 管理者が、実行できるアクションについての情報を提供できます。

分布表示を作成し、メイン vRealize Operations Manager 環境で実行します。その表示をエクスポートし、他の vRealize Operations Manager インスタンスにインポートします。

手順

1 仮想マシンを管理するための vRealize Operations Manager のビューの作成

vCenter Server 上の仮想マシンの数についてデータを収集、表示するには、カスタム ビューを作成します。

2 vRealize Operations Manager ビューの実行

ビューを確認して任意のポイントでの情報のスナップショットをキャプチャするには、特定のオブジェクトのビューを実行します。

3 vRealize Operations Manager ビューのエクスポート

別の vRealize Operations Manager でビューを使用する場合、コンテンツ定義の XML ファイルをエクスポートします。

4 vRealize Operations Manager ビューのインポート

他の vRealize Operations Manager 環境からビューを使用する場合、コンテンツ定義の XML ファイルをインポートします。

仮想マシンを管理するための vRealize Operations Manager のビューの作成

vCenter Server 上の仮想マシンの数についてデータを収集、表示するには、カスタム ビューを作成します。

手順

1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックして、[表示] をクリックします。

2 プラス記号をクリックして、新しいビューを作成します。

3 ビューの名前として **仮想マシンの分布** と入力します。

4 ビューのわかりやすい説明を入力します。

例： **仮想マシンのホストごとの分布を示すビュー。**

5 [プレゼンテーション] をクリックして、[分布] ビュー タイプを選択します。

ビュー タイプは情報を表示する方法です。

a [表示] ドロップダウン メニューから [円グラフ] を選択します。

b 分布タイプの設定から、[離散分布] を選択します。.

各 vCenter Server インスタンス上のホスト数を把握していないため、[バケットの最大数] は選択解除のままにします。いくつかのバケットを指定する場合でホストがその数を上回っているとき、[その他] とラベル付けされた詳細不明の情報がスライスの 1 つによって表示されます。

- 6 [サブジェクト] をクリックして、ビューに適用されるオブジェクト タイプを選択します。
 - a ドロップダウン メニューで、[ホスト システム] を選択します。

分布ビューは、ビューの設定時に指定したサブジェクトのオブジェクト コンテナに表示されます。
- 7 [データ] をクリックして、フィルタのテキスト ボックスに **VM の合計数** と入力します。
- 8 [サマリー] - [VM の合計数] を選択して、ダブルクリックしてメトリックを追加します。
- 9 デフォルトのメトリック構成を保持して、[保存] をクリックします。

vRealize Operations Manager ビューの実行

ビューを確認して任意のポイントでの情報のスナップショットをキャプチャするには、特定のオブジェクトのビューを実行します。

前提条件

このタスクを実行するのに必要なアクセス権限があることを確認してください。vRealize Operations Manager 管理者が、実行できるアクションについての情報を提供できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] アイコンをクリックします。
 - 2 vCenter Server インスタンスに移動して、[詳細] タブをクリックします。
- リストされたビューは、すべて vCenter Server インスタンスに適用可能です。
- 3 左側の [すべてのフィルタ] ドロップダウン メニューから、[タイプ] - [分布] を選択します。
- ビューのリストをフィルタリングして分布タイプのビューのみを表示します。
- 4 [仮想マシンの分布] ビューに移動し、クリックします。
- 下部のペインに、この vCenter Server に関する情報を示す分布ビューが表示されます。各スライスはホストを表し、左隅の数は仮想マシンの数を示します。

vRealize Operations Manager ビューのエクスポート

別の vRealize Operations Manager でビューを使用する場合、コンテンツ定義の XML ファイルをエクスポートします。

エクスポートしたビューに独自に作成されたメトリック（what-if、スーパーメトリック、カスタム アダプタ メトリックなど）が含まれる場合は、新しい環境でそれらをもう一度作成する必要があります。

前提条件

このタスクを実行するのに必要なアクセス権限があることを確認してください。vRealize Operations Manager 管理者が、実行できるアクションについての情報を提供できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックして、[表示] をクリックします。

- 2 ビューのリストで、[仮想マシンの分布] ビューに移動し、クリックします。
- 3 [すべてのアクション] - [ビューのエクスポート]を選択します。
- 4 XML ファイルを保存するローカル システム上の場所を選択し、[保存] をクリックします。

vRealize Operations Manager ビューのインポート

他の vRealize Operations Manager 環境からビューを使用する場合、コンテンツ定義の XML ファイルをインポートします。

前提条件

このタスクを実行するのに必要なアクセス権限があることを確認してください。vRealize Operations Manager 管理者が、実行できるアクションについての情報を提供できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックして、[表示] をクリックします。
- 2 [すべてのアクション] - [ビューのインポート]を選択します。
- 3 仮想マシン分布のコンテンツ定義の XML ファイルを参照して選択し、[インポート] をクリックします。

インポートされたビューに独自に作成されたメトリック（what-if、スーパーメトリック、カスタム アダプタ メトリックなど）が含まれる場合は、新しい環境でそれらをもう一度作成する必要があります。

注： インポートされたビューは、同じ名前のビューが存在する場合は上書きします。既存のビューを使用するすべてのレポート テンプレートは、インポートされたビューで更新されます。

レポート

レポートは、ビューとダッシュボードのスケジュール設定されたスナップショットです。レポートを作成して、オブジェクトおよびメトリックを表現することができます。レポートには、目次、表紙、およびフッターが含まれます。

vRealize Operations Manager のレポート機能を使用すると、現在または予測されるリソースのニーズに関する詳細情報をキャプチャするレポートを生成できます。将来またはオフライン時に必要に応じて利用できるよう、レポートを PDF または CSV ファイル形式でダウンロードできます。



レポートの作成

(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_reports_in_vrom)

[レポート テンプレート] タブ

[レポート テンプレート] タブでは、テンプレートの作成、編集、削除、クローン作成、実行、スケジュール設定、エクスポート、およびインポートを行うことができます。

左側のペインの [環境] タブからオブジェクトを選択し、[レポート] - [レポート テンプレート] をクリックすると、[レポート テンプレート] アイコンを使用できます。

[レポート テンプレート] タブには、選択したオブジェクトに適用されるすべてのテンプレートがリストされます。これらは、レポート名、件名、変更日、最終実行、または所有者ごとに並び替えることができます。

パネルの右側からフィルタを追加すると、テンプレート リストをフィルタリングできます。

表 4-157. 事前定義フィルタ グループ

フィルタ グループ	説明
名前	テンプレート名によるフィルタ。たとえば、 my template と入力すると、名前に <i>my template</i> を含むすべてのレポートをリストできます。
件名	別のオブジェクトによるフィルタ。別のタイプのオブジェクトに適用できる複数のビューがレポートに含まれている場合は、そのオブジェクトを基準にフィルタリングできます。

レポートの生成が完了するまで、vSphere ユーザーがログインしている必要があります。 ログアウトしたり、セッションの期限が切れた場合、レポートの生成が失敗します。

注： テンプレートあたりの最大レポート数は 10 です。 生成されるすべての新規レポートで、vRealize Operations Manager は最も古いレポートを削除します。

[生成されたレポート] タブ

選択したオブジェクト用に生成されたすべてのレポートの一覧が [生成されたレポート] タブに表示されます。

[生成されたレポート] タブには、左側のペインの [環境] アイコンからオブジェクトを選択し、[レポート] - [生成されたレポート] をクリックすると表示されます。

レポートは、レポートの作成日時、レポート名、所有者、ステータス順に並べることができます。レポートがスケジュールに基づいて生成された場合は、スケジュールを作成したユーザーが所有者になります。

注： テンプレートあたりの最大レポート数は 10 です。 生成されるすべての新規レポートで、vRealize Operations Manager は最も古いレポートを削除します。

パネルの右側からフィルタを追加すると、レポート リストをフィルタリングできます。

表 4-158. 事前定義フィルタ グループ

フィルタ グループ	説明
レポート名	レポート テンプレート名を基準にフィルタリングします。たとえば、 my template と入力すると、名前に <i>my template</i> を含むすべてのレポートをリストできます。
テンプレート	レポート テンプレートを基準にフィルタリングします。このオブジェクトに適用可能なテンプレートのリストから、テンプレートを選択できます。
完了日時	日付、時間、または時間範囲を基準にフィルタリングします。
ステータス	レポートのステータスを基準にフィルタリングします。
件名	別のオブジェクトによるフィルタ。別のタイプのオブジェクトに適用できる複数のビューがレポートに含まれている場合は、そのオブジェクトを基準にフィルタリングできます。

レポートは、PDF または CSV 形式でダウンロードできます。レポート テンプレートにレポートが生成される際の形式を定義します。

レポート テンプレートの作成と変更

レポートを作成して、ビューとダッシュボードのスケジュール設定されたスナップショットを生成します。現在のリソースを追跡して、環境に対する潜在的リスクを予測できます。自動化されたレポートを定期的にスケジュール設定できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックして、[レポート] をクリックします。
- 2 [レポート テンプレート] タブで、[新規テンプレート] アイコンをクリックして、テンプレートを作成します。
- 3 左側のペインで手順を完了して、次の操作を実行します。
 - a レポート テンプレートの名前と説明を入力します。
[名前と説明の詳細](#)
 - b ビューまたはダッシュボードを追加します。
[ビューとダッシュボードの詳細](#)
 - c レポートの出力を選択します。
[形式の詳細](#)
 - d レイアウト オプションを選択します。
[レイアウト オプションの詳細](#)
- 4 [保存] をクリックします。
- 5 [レポート テンプレート] タブから、[テンプレートの編集] をクリックして、レポート テンプレートを変更します。

名前と説明の詳細

[レポート テンプレート] タブのテンプレート リストに表示されるレポート テンプレート名と説明。

名前と説明を追加する場所

レポート テンプレートを作成または編集するには、左側のペインで [内容] - [レポート] を選択します。レポート テンプレート ツールバーで、プラス記号をクリックしてテンプレートを追加するか、鉛筆アイコンをクリックして選択したテンプレートを編集します。ワークスペースの左側で、[名前と説明] をクリックします。

表 4-159. レポート テンプレートのワークスペースの [名前] オプションと [説明] オプション

オプション	説明
名前	[レポート テンプレート] タブに表示されるテンプレート名。
説明	テンプレートの説明。

ビューとダッシュボードの詳細

レポート テンプレートにはビューとダッシュボードが含まれます。ビューには、収集されたオブジェクトの情報が表示されます。ダッシュボードには、仮想インフラストラクチャ内のオブジェクトのパフォーマンスと状態の概要が視覚的に表示されます。ニーズに合わせてさまざまなビューやダッシュボードを組み合わせたり、表示順を変えたりできます。

ビューとダッシュボードを追加する場所

レポート テンプレートを作成または編集するには、左側のペインで [内容] - [レポート] を選択します。レポート テンプレート ツールバーで、プラス記号をクリックしてテンプレートを追加するか、鉛筆アイコンをクリックして選択したテンプレートを編集します。ワークスペースの左側で、[ビューとダッシュボード] をクリックします。新しいテンプレートを作成する場合は、ワークスペースに関する必要な手順を完了させておきます。

ビューとダッシュボードを追加する方法

レポート テンプレートにビューまたはダッシュボードを追加するには、左側のペインにあるリストからビューまたはダッシュボードを選択してメイン パネルにドラッグします。メイン パネルでビューやダッシュボードをドラッグして、順番を変えることができます。各ビューまたはダッシュボードのタイトルの横にあるドロップダウン メニューを使うと、横向きまたは縦向きを選択できます。

表 4-160. レポート テンプレート ワークスペースのビューおよびダッシュボード オプション

オプション	説明
データ タイプ	[ビュー] または [ダッシュボード] を選択して、テンプレートに追加できるビューまたはダッシュボードのリストを表示します。
ビューの作成	テンプレート ワークスペースから直接ビューを作成します。このオプションは、[データ タイプ] ドロップダウン メニューから [ビュー] を選択したときに表示されます。
ビューの編集	テンプレート ワークスペースから直接ビューを編集します。このオプションは、[データ タイプ] ドロップダウン メニューから [ビュー] を選択したときに表示されます。
ダッシュボードの作成	テンプレート ワークスペースから直接ダッシュボードを作成します。このオプションは、[データ タイプ] ドロップダウン メニューから [ダッシュボード] を選択したときに表示されます。
ダッシュボードの編集	テンプレート ワークスペースから直接ダッシュボードを編集します。このオプションは、[データ タイプ] ドロップダウン メニューから [ダッシュボード] を選択したときに表示されます。
検索	ビューまたはダッシュボードを名前で検索します。すべてのビューまたはダッシュボードのリストを表示するには、検索ボックスの内容を削除して Enter キーを押します。
ビューのリスト	テンプレートに追加可能なビューのリスト。このリストは、[データ タイプ] ドロップダウン メニューから [ビュー] を選択したときに表示されます。

表 4-160. レポート テンプレート ワークスペースのビューおよびダッシュボード オプション （続き）

オプション	説明
ダッシュボードのリスト	テンプレートに追加可能なダッシュボードのリスト。このリストは、[データ タイプ] ドロップダウン メニューから [ダッシュボード] を選択したときに表示されます。
ビューおよびダッシュボードのプレビュー	メイン パネルに、追加するビューおよびダッシュボードのプレビューが表示されます。 環境内からオブジェクトのコンテキストにテンプレートを作成した場合は、ビューおよびダッシュボードのライブ プレビューが表示されます。

形式の詳細

形式は、レポート生成の出力に適用されます。

形式を追加する場所

レポート テンプレートを作成または編集するには、左側のペインで [内容] - [レポート] を選択します。レポート テンプレート ツールバーで、プラス記号をクリックしてテンプレートを追加するか、鉛筆をクリックして選択したテンプレートを編集します。ワークスペースの左側で [形式] をクリックし、レポート テンプレートの形式を選択します。新しいテンプレートを作成する場合は、ワークスペースに関する必要な手順を完了させておきます。

表 4-161. レポート テンプレートのワークスペースの [形式] オプション

オプション	説明
PDF	PDF 形式の場合、オンラインまたはオフラインでレポートを読むことができます。この形式では、印刷物のようにレポートが 1 ページずつ表示されます。
CSV	CSV 形式では、データが構造化された表形式のリストになっています。

レイアウト オプションの詳細

レポート テンプレートには表紙、目次、フッターのようなレイアウト オプションを含めることができます。

レイアウト オプションを追加する場所

レポート テンプレートを作成または編集するには、左側のペインで [内容] - [レポート] を選択します。レポート テンプレート ツールバーで、プラス記号をクリックしてテンプレートを追加するか、鉛筆アイコンをクリックして選択したテンプレートを編集します。ワークスペースの左側で [レイアウト オプション] をクリックします。新しいテンプレートを作成する場合は、テンプレートに関する必要な手順を完了させておきます。

表 4-162. [レポート テンプレート] ワークスペースのレイアウト オプション

オプション	説明
表紙	最大 5 MB のイメージを含めることができます。 デフォルトのレポート サイズは、8.5 x 11 インチです。イメージは、レポートの表紙に合わせてサイズ変更されます。
目次	レポート内の表示順序で整理されたテンプレート部品のリストが提供されます。
フッター	レポートの作成日、レポートが VMware vRealize Operations Manager によって作成されたことを示すメモ、およびページ番号が含まれます。

vRealize Operations Manager レポート用ネットワーク共有プラグインの追加

vRealize Operations Manager でレポートが共有の場所へ送られるように構成するには、ネットワーク共有プラグインを追加します。

前提条件

ネットワーク共有の場所に対する読み取り、書き込み、削除の権限があることを確認します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。
- 2 [送信設定] をクリックし、プラス記号をクリックしてプラグインを追加します。
- 3 [プラグイン タイプ] ドロップダウン メニューから [ネットワーク共有プラグイン] を選択します。
ダイアログ ボックスが展開し、プラグイン インスタンス設定が表示されます。
- 4 [インスタンス名] を入力します。
これは、このインスタンスを識別する名前です。このインスタンスを、後で通知ルールを構成するときに選択します。
- 5 環境に適したネットワーク共有オプションを構成します。

オプション	説明
ドメイン	共有ネットワーク ドメイン アドレス。
ユーザー名	ネットワークとの接続に使用されるドメイン ユーザー アカウント。
パスワード	ドメイン ユーザー アカウントのパスワード。
ネットワーク共有ルート	レポートの保存先となるルート フォルダへのパス。発行のスケジュールを構成する際に各レポートのサブフォルダを指定できます。 IP アドレスを入力する必要があります。たとえば、 <code>\\IP_address\ShareRoot</code> のように指定します。vRealize Operations Manager ホストからアクセスされるときにホスト名が IPv4 に解決される場合は、IP アドレスの代わりにホスト名を使用できます。 注： ターゲットとなるルート フォルダが存在していることを確認します。このフォルダがない場合、試行が 5 回失敗するとネットワーク共有プラグインによりログにエラーが記録されます。

- 6 指定されたパス、認証情報、権限を確認するには、[テスト] をクリックします。

テストには数分かかることがあります。

- 7 [保存] をクリックします。

このプラグインの送信サービスは自動的に開始されます。

- 8 (オプション) 送信サービスを停止するには、インスタンスを選択し、ツールバーの[無効] をクリックします。

結果

ネットワーク共有プラグインのインスタンスが構成され、実行中になります。

次のステップ

レポート スケジュールを作成し、レポートが共有フォルダに送信されるよう構成します。[レポートのスケジュール設定の概要](#) を参照してください。

生成されたレポートの概要

レポートは、ビューとダッシュボードのスケジュール設定されたスナップショットです。ダウンロード可能な形式でデータが表示されます。

[生成されたレポート] タブにアクセスするには、左側のペインで [内容] アイコンをクリックし、[レポート] - [生成されたレポート] を選択します。

リストには生成されたすべてのレポートが含まれます。レポートは、作成日時、レポート名、所有者、またはステータスで整理できます。レポートがスケジュールに基づいて生成された場合は、スケジュールを作成したユーザーが所有者になります。

注： テンプレートあたりの最大レポート数は 10 です。10 個目のレポートが生成された後は、最も古いレポートが vRealize Operations Manager によって削除されます。

レポート リストは、パネルの右上からフィルタを追加することによってフィルタリングできます。

表 4-163. 事前定義フィルタ グループ

フィルタ グループ	説明
レポート名	レポート テンプレート名を基準にフィルタリングします。たとえば my template と入力すると、名前に「my template」という言葉が含まれるレポートがすべてリストされます。
テンプレート	レポート テンプレートを基準にフィルタリングします。このオブジェクトに適用可能なテンプレートのリストから、テンプレートを選択できます。
完了日時	日付、時間、または時間範囲を基準にフィルタリングします。
件名	別のオブジェクトによるフィルタ。別のタイプのオブジェクトに適用できる複数のビューがレポートに含まれている場合、その 2 番目のオブジェクトでフィルタリングできます。
ステータス	レポートのステータスを基準にフィルタリングします。

レポートは、PDF または CSV 形式でダウンロードできます。レポート テンプレートにレポートが生成される際の形式を定義します。

vCenter Server 認証情報で vRealize Operations Manager にログインし、レポートを生成すると、生成されたレポートは常に空白になります。

レポート テンプレートの概要

レポート テンプレートにはビューとダッシュボードが含まれます。ビューには、収集されたオブジェクトの情報が表示されます。ダッシュボードには、仮想インフラストラクチャ内のオブジェクトのパフォーマンスと状態の概要が視覚的に表示されます。ニーズに合わせてさまざまなビューやダッシュボードを組み合わせたり、表示順を変えたりできます。

[レポート テンプレート] タブにアクセスするには、左側のペインで [内容] アイコンをクリックし、[レポート] - [レポート テンプレート] を選択します。

[レポート テンプレート] タブでは、テンプレートの作成、編集、削除、クローン作成、実行、スケジュール設定、エクスポート、およびインポートを行うことができます。

リストには、ユーザーによって定義されたテンプレートと、vRealize Operations Manager によって事前定義されたテンプレートが含まれます。これらは、テンプレート名、件名、変更日、最終実行、または所有者で並び替えることができます。テンプレートごとに、生成されたレポートおよびスケジュールの数を表示できます。

パネルの右側からフィルタを追加すると、テンプレート リストをフィルタリングできます。

表 4-164. 事前定義フィルタ グループ


フィルタ グループ	説明
名前	テンプレート名によるフィルタ。たとえば my template と入力すると、名前に「my template」という言葉が含まれるレポートがすべてリストされます。
件名	別のオブジェクトによるフィルタ。レポートに、別のタイプのオブジェクトに適用できる複数のビューが含まれる場合、他のオブジェクトによってフィルタリングできます。

テンプレートあたりの最大レポート数は 10 です。10 個目のレポートが生成された後は、最も古いレポートが vRealize Operations Manager によって削除されます。

レポートのスケジュール設定の概要

レポートのスケジュールは、レポート生成の時間および繰り返しです。

レポートをスケジュールする場所

レポート生成をスケジュール設定するには、左側のペインの [環境] アイコンをクリックして、件名に移動し、[レポート] タブをクリックします。次に、スケジュール設定するテンプレートを選択し、[すべてのアクション 

レポートをスケジュールする方法

表 4-165. レポートのスケジュールのオプション

オプション	説明
繰り返す	レポートが定期的に自動実行されるようにスケジュールします。
公開	<p>生成されたレポートを、事前定義された電子メール グループまたは FTP サーバに電子メールで送信します。電子メール オプションの設定および構成方法の詳細については、送信設定 を参照してください。</p> <p>生成されたレポートを外部の場所に保存します。外部の場所の構成方法の詳細については、vRealize Operations Manager レポート用ネットワーク共有プラグインの追加 を参照してください。</p> <p>相対パスを追加することによって、ネットワーク共有のルート フォルダの事前定義済みのサブフォルダにレポートをアップロードできます。たとえば、レポートを共有ホスト C:/documents/uploadedReports/SubFolder1 にアップロードする場合は、[相対パス] テキスト ボックスに SubFolder1 と入力します。レポートをネットワーク共有のルート フォルダにアップロードする場合は、[相対パス] テキスト ボックスを空欄のままにします。</p>

注： レポート スケジュールの追加と編集ができるのは、vRealize Operations Manager で作成されたユーザーのみです。

ユーザー シナリオ：仮想マシンを監視するためのレポートの取り扱い

あなたは、仮想インフラストラクチャの管理者として、vRealize Operations Manager を使用して複数の環境を監視しています。サイズ超過および過負荷のすべての仮想マシンおよび現在のメモリ使用量およびその傾向を企業ロゴ付きのレポートとしてチームに提示する必要があります。事前定義されたレポート テンプレートを使用して、特定の順序で情報を収集してフォーマットします。

レポート テンプレートを作成し、ビューとダッシュボードを事前定義します。レポートを生成してテンプレートをテストし、隔週でレポートを生成するスケジュールを作成します。

前提条件

このタスクを実行するのに必要なアクセス権限があることを確認してください。vRealize Operations Manager 管理者が、実行できるアクションについての情報を提供できます。

手順

1 仮想マシンを監視するためのレポート テンプレートの作成

過剰サイズの仮想マシンと負荷のかかった仮想マシン、およびそれらの仮想マシンのメモリ使用量を監視するには、レポート テンプレートを作成します。

2 レポートの生成

レポートを生成するには、過剰サイズの仮想マシンと負荷のかかった仮想マシン、およびそれらの仮想マシンのメモリ使用量についての情報を表示する vCenter Server システムの仮想マシン レポート テンプレートを使用します。

3 レポートのダウンロード

情報が正常に表示されることを確認するには、仮想マシン レポート テンプレートから生成されたレポートをダウンロードします。

4 レポートのスケジュール設定

選択した日付、時刻、繰り返してレポートを生成するには、仮想マシンのレポート テンプレートのスケジュールを作成します。電子メール オプションを設定して、生成されたレポートをチームに送信します。

仮想マシンを監視するためのレポート テンプレートの作成

過剰サイズの仮想マシンと負荷のかかった仮想マシン、およびそれらの仮想マシンのメモリ使用量を監視するには、レポート テンプレートを作成します。

PDF および CSV で出力するレポート テンプレートを作成し、それにビュー、ダッシュボード、レイアウトのオプションを追加します。

前提条件

- vRealize Operations Manager ビューの概念を理解してください。 [表示](#) を参照してください。
- 企業のロゴの場所を把握しておいてください。

手順

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックして、[レポート] をクリックします。
- 2 [レポート テンプレート] タブで、プラス記号をクリックしてテンプレートを作成します。
- 3 テンプレート名として「**仮想マシン レポート**」と入力します。
- 4 テンプレートの分かりやすい説明を入力します。

たとえば、「**過剰サイズの仮想マシンと負荷のかかった仮想マシン、およびそれらの仮想マシンのメモリ使用量のテンプレート**」のように入力します。

- 5 [ビューとダッシュボード] をクリックします。[データ タイプ] ドロップダウン メニューで、[ビュー] を選択したままにします。

現在構成されているビューが、[データ タイプ] ドロップダウン メニューの下の一覧に表示されます。収集されたオブジェクトの情報が、ビュー タイプに応じて特定の 방법으로ビューに表示されます。

- 6 検索ボックスに「**仮想マシン**」と入力します。

名前に「仮想マシン」が含まれるビューのみが一覧に表示されるようになります。

- 7 ビューをダブルクリックしてテンプレートに追加します。

オプション	説明
仮想マシンの CPU、メモリ、ディスク領域の適正値化	過剰サイズの VM を監視します
仮想マシンの推奨 CPU およびメモリ サイズ	負荷のかかった VM を監視します

ビューがワークスペースのメイン パネルにサンプル データのプレビューとともに表示されます。

- 8 検索ボックスに「VM」と入力します。

名前に VM が含まれるビューのみがリストに表示されるようになります。

- 9 仮想マシンのメモリ使用量 (%) の分布 ビューに移動し、このビューをダブルクリックしてテンプレートに追加します。

ビューがワークスペースのメイン パネルにサンプル データのプレビューとともに表示されます。

- 10 (オプション) ワークスペースのメイン パネルで、ビューを上下にドラッグして順序を変更します。

- 11 [データ タイプ] ドロップダウン メニューで、[ダッシュボード] を選択します。

現在構成されているダッシュボードが、[データ タイプ] ドロップダウン メニューの下のリストに表示されます。ダッシュボードには、仮想インフラストラクチャ内のオブジェクトのパフォーマンスと状態の概要が視覚的に表示されます。

- 12 [vSphere 仮想マシン メモリ]、[vSphere 仮想マシン CPU]、[vSphere 仮想マシン ディスクとネットワーク] の各ダッシュボードをダブルクリックしてテンプレートに追加します。

ダッシュボードがワークスペースのメイン パネルに表示されます。

- 13 [形式] をクリックし、[PDF] チェック ボックスと [CSV] チェック ボックスを選択したままにします。

- 14 [レイアウト オプション] をクリックし、[表紙] チェック ボックスと [フッター] チェック ボックスを選択します。

対応するペインがワークスペースのメイン パネルに表示されます。

- 15 [表紙] パネルで [参照] をクリックして、コンピュータ上のイメージに移動します。

デフォルトのレポート サイズは、8.5 x 11 インチです。イメージは、レポートの表紙に合わせてサイズ変更されます。

イメージがデータベースにアップロードされます。このイメージは、このテンプレートからレポートを生成するたびに、表紙に使用されます。

- 16 [保存] をクリックします。

結果

レポート テンプレートが保存され、[内容] 管理タブの [レポート テンプレート] タブに表示されます。

次のステップ

レポートを生成およびダウンロードして、その出力を確認します。を参照してください。 [レポートの生成](#)

レポートの生成

レポートを生成するには、過剰サイズの仮想マシンと負荷のかかった仮想マシン、およびそれらの仮想マシンのメモリ使用量についての情報を表示する vCenter Server システムの仮想マシン レポート テンプレートを使用します。

前提条件

レポート テンプレートを作成します。[仮想マシンを監視するためのレポート テンプレートの作成](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] アイコンをクリックします。
- 2 vCenter Server システムに移動します。
- 3 [レポート] タブをクリックし、[レポート テンプレート] をクリックします。

リストに表示されるレポート テンプレートには、現在のオブジェクトが関連付けられています。

- 4 [仮想マシンレポート] テンプレートに移動し、[テンプレートの実行] アイコンをクリックします。

結果

レポートが生成され、[生成されたレポート] タブに表示されます。

次のステップ

生成されたレポートをダウンロードして、その出力を確認します。[レポートのダウンロード](#) を参照してください。

レポートのダウンロード

情報が正常に表示されることを確認するには、仮想マシン レポート テンプレートから生成されたレポートをダウンロードします。



前提条件

仮想マシン レポート テンプレートからレポートを生成します。[レポートの生成](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] アイコンをクリックします。
- 2 レポートをダウンロードするオブジェクトに移動します。
- 3 [レポート] タブをクリックし、[生成されたレポート] をクリックします。

現在のオブジェクトを一覧表示したレポートが生成されます。

- 4 PDF () アイコンまたは CSV () アイコンをクリックし、適切なファイル形式でレポートを保存します。

結果

vRealize Operations Manager は、選択した場所にレポート ファイルを保存します。

次のステップ

レポート生成をスケジュール設定し、電子メールのオプションを設定して、チームがレポートを受け取るようにします。[レポートのスケジュール設定](#) を参照してください。

レポートのスケジュール設定

選択した日付、時刻、繰り返してレポートを生成するには、仮想マシンのレポート テンプレートのスケジュールを作成します。電子メール オプションを設定して、生成されたレポートをチームに送信します。

生成されたレポートの日付の範囲は、レポートのスケジュール設定を行う時間または vRealize Operations Manager がレポートをキューに入れる時間ではなく、vRealize Operations Manager がレポートを生成する時間に基づきます。

前提条件

- 生成されたレポートをダウンロードして、出力を確認します。
- 電子メール レポートの送信を有効にするには、送信アラート設定を設定している必要があります。[通知](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] アイコンをクリックします。
- 2 オブジェクト vCenter Server に移動します。
- 3 [レポート] タブをクリックし、[レポート テンプレート] をクリックします。
- 4 リストから [仮想マシン レポート] テンプレートを選択します。

- 5 歯車アイコン () をクリックして、[レポートのスケジュール設定] を選択します。

- 6 レポートの生成を開始するタイム ゾーン、日付、時間を選択します。

vRealize Operations Manager は、スケジュール設定されたレポートを順次生成します。レポートの生成には数時間かかることがあります。このプロセスによって、前回のレポート生成の時間が長引いている場合は開始が遅れる場合もあります。

- 7 [繰り返し] ドロップダウン メニューから、[週単位] を選択し、レポートの生成を 2 週間に 1 回月曜日に実行されるよう設定します。

- 8 生成したレポートを電子メールで送信するには、[レポートを電子メールで送信] チェック ボックスを選択します。

a [電子メール アドレス] テキスト ボックスに、レポートを受信する電子メール アドレスを入力します。

b 送信ルールを選択します。

このスケジュールに従って、レポートが生成されるたびに電子メールが送信されます。

- 9 [OK] をクリックします。

次のステップ

レポート テンプレートは、編集、クローン作成、および削除することができます。これらのアクションを実行する前に、その結果についてよく理解してください。

レポート テンプレートを編集して削除すると、元のテンプレートと編集されたテンプレートから生成されたすべてのレポートが削除されます。レポート テンプレートのクローンを作成する場合、クローンに対する変更はソース テンプレートに影響しません。レポート テンプレートを削除すると、生成されたレポートもすべて削除されます。

管理設定の構成

vRealize Operations Manager がインストールおよび構成された後、管理設定を使用して環境を管理できます。vRealize Operations Manager インターフェイスの管理の選択で、最も管理の厳格な設定を確認します。

vRealize Operations Manager のライセンス キー

vRealize Operations Manager の監視をアクティブ化するには、インストール時またはインストール後にライセンスを追加します。vRealize Operations Manager が何を監視するか、ライセンスの有効期限がいつなのかを知るために、ライセンスを追跡します。

ライセンス キーの仕組み

ライセンス キーはソリューションまたは製品をアクティブ化し、さまざまなレベルで使用できます。高レベルでは、通常 vRealize Operations Manager がより多くのオブジェクトを監視できます。

ライセンス キーを確認できる場所

左側のペインで、[管理] - [ライセンス] を選択し、[ライセンス キー] タブをクリックします。

ライセンス キー オプション

これらのオプションには、ツールバーとデータ グリッドのオプションが含まれます。

アイテムを追加、編集、または削除するには、ツールバー オプションを使用します。

表 4-166. ライセンス キーのツールバー オプション

オプション	説明
追加	ソリューションまたは製品を選択し、それに対するライセンス キーを入力および検証します。
削除	ライセンス キーを削除します。
更新	キーのリストを更新します。

アイテムの詳細を表示するには、データ グリッドのオプションを使用します。

表 4-167. ライセンス キーのデータ グリッド オプション

オプション	説明
製品またはソリューション	キーに関連付けられた製品またはソリューションの名前
ライセンス タイプ	ライセンスのレベル

表 4-167. ライセンス キーのデータ グリッド オプション (続き)

オプション	説明
ライセンス数	ライセンスにより製品が監視できるオブジェクトの数
ライセンス使用量	容量に悪影響を及ぼす監視対象オブジェクトの数 容量に制限がない場合には、この数字はゼロ (0) になります。
ステータス	ライセンスが現在有効かどうかを示します
有効期限	ライセンスの有効期限が切れる日付
ライセンス情報 (以下の内容)	選択されたライセンス キーの詳細
概要	ソリューションまたは製品、選択されたライセンス キーの容量、有効期限、タイプ、および使用
関連ライセンス グループ	このキーがメンバーになっているライセンス グループ、およびグループ内のオブジェクトの数

vRealize Operations Manager ライセンス グループ

他の vRealize Operations Manager グループと同様に、データを収集するオブジェクトをまとめるために、オブジェクトのライセンス グループを作成します。この場合、オブジェクトと製品ライセンスを関連付けます。

ライセンス グループの仕組み

ライセンス グループではソリューションまたは製品のアクティブ化ですでに追加した 1 つ以上のキーを選択し、それらのライセンスのカスタム グループにオブジェクトをメンバーとして追加する必要があります。たとえば、特定のレベルのライセンス キーに関連付けられたグループにオブジェクトを追加し、キーのレベルごとに監視または管理して、ライセンス費用を制御できます。

ライセンス グループを確認できる場所

左側のペインで、[管理] - [ライセンス] を選択し、[ライセンス グループ] タブをクリックします。

ライセンス グループのオプション

これらのオプションには、ツールバーとデータ グリッドのオプションが含まれます。

アイテムを追加、編集、または削除するには、ツールバー オプションを使用します。

表 4-168. ライセンス グループのツールバー オプション

オプション	説明
追加	ウィザードを起動してライセンスとオブジェクトを選択し、新しいライセンス グループを選択します。 ライセンス グループを監視ポリシーに関連付けることもできます。
編集	ウィザードを起動してライセンスとオブジェクトを選択し、ライセンス グループを変更します。 ライセンス グループを監視ポリシーに関連付けることもできます。
削除	ライセンス グループを削除します。

アイテムの詳細を表示するには、データ グリッドのオプションを使用します。

表 4-169. ライセンス グループのデータ グリッド オプション

オプション	説明
ライセンス グループ	ライセンス グループの名前
合計メンバー	ライセンス グループ内のオブジェクトの数
ライセンス供与可能な使用量	オブジェクトを監視するために、ライセンスに対してカウントされるグループ内のオブジェクトの数。無制限にオブジェクトを監視できるライセンスを持っている場合、この数値はゼロ（0）になります。
ライセンス グループ情報（以下の内容）	選択したライセンス グループの詳細
概要	選択したライセンス グループに関連付けられたキーの名前、ライセンス シリアル番号、および数。
メンバー	選択したライセンス グループに関連付けられたオブジェクトのリスト

vRealize Operations Manager のメンテナンス スケジュール

メンテナンス スケジュールは、特定の時間にメンテナンス モードになっているオブジェクトを識別します。これにより、メンテナンスのためにオフラインになっている、または通常とは異なるその他の状態になっているオブジェクトに基づいて、vRealize Operations Manager が誤解を招くデータを表示しないようにします。

企業では多くのオブジェクトが意図的にオフラインにされている場合があります。たとえばソフトウェアを更新するため、サーバーが停止される場合があります。オブジェクトがオフラインの時に vRealize Operations Manager がメトリックを収集すると、誤った異常を生成し、オブジェクト属性の動的しきい値を設定するためのデータに影響を与えるアラートが発生する可能性があります。オブジェクトがメンテナンス モードであると判断された場合、vRealize Operations Manager は、オブジェクトからメトリックを収集せず、異常やアラートの生成も行いません。また、vRealize Operations Manager は、オブジェクトのあらゆるアクティブなシンプトムとアラートをキャンセルします。

オブジェクトが一定間隔でメンテナンスを受ける場合には、メンテナンス スケジュールを作成して、そのスケジュールをオブジェクトに割り当てることができます。たとえば、毎週火曜日の深夜 0 時から午前 3 時までオブジェクトをメンテナンス モードにできます。また、無期限に、または指定期間、手動でオブジェクトをメンテナンス モードにすることもできます。これらの方法は相互に排他的ではありません。オブジェクトにメンテナンス スケジュールが割り当てられている場合でも、オブジェクトを手動でメンテナンス モードにしたり、メンテナンス モードを解除したりすることができます。

注： メンテナンス操作を行うときに、Endpoint Operations Management エージェントを停止し、メンテナンスが完了した後で再開することで、システムの不要なオーバーヘッドが避けられます。

メンテナンス スケジュールの仕組み

メンテナンス スケジュールでは、アップデートまたは他のオブジェクトのメンテナンスが発生する日付および時刻を選択する必要があります。メンテナンス スケジュールを作成しただけでは、スケジュールはアクティブになりません。メンテナンス スケジュールを有効にするには、メンテナンス スケジュールをポリシーに含める必要があります。

メンテナンス スケジュールを確認できる場所

左側のペインで [管理] - [メンテナンス スケジュール] を選択します。

アイテムを追加、編集、または削除するには、ツールバー オプションを使用します。

表 4-170. メンテナンス スケジュールのツールバー オプション

オプション	説明
追加	新しいスケジュール用のメンテナンス スケジュール設定を選択するウィンドウを開きます。
編集	既存のスケジュール用のメンテナンス スケジュール設定を変更するウィンドウを開きます。
削除	選択されたメンテナンス スケジュールを削除します。

メンテナンス スケジュールの管理

オブジェクトをオフラインにするメンテナンス スケジュールを追加または編集します。vRealize Operations Manager は、オフラインのオブジェクトからはデータを収集しません。

メンテナンス スケジュールの管理を確認できる場所

左側のペインで [管理] - [メンテナンス スケジュール] を選択します。プラス記号をクリックして新しいメンテナンス スケジュールを追加するか、鉛筆をクリックして選択したオブジェクトを編集します。

表 4-171. メンテナンス スケジュールの管理の追加または編集オプション

オプション	説明
スケジュール名	メンテナンス スケジュールを説明する名前
タイム ゾーン	現在の所在地のタイム ゾーン
日数	メンテナンス期間の日数
繰り返し	選択した期間に実施するメンテナンス スケジュールを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 1 回 ■ 日単位 ■ 週単位 ■ 月単位
次の日の後に期限切れ	スケジュールの実行回数
次の日に期限切れ	スケジュールの実行を停止する日付

vRealize Operations Manager でのユーザーとアクセス コントロールの管理

vRealize Operations Manager インスタンスにおけるオブジェクトのセキュリティ確保のため、システム管理者はユーザー アクセス コントロールをすべての面で管理できます。ユーザー アカウントを作成し、各ユーザーを 1 つ以上のユーザー グループに割り当て、各ユーザーまたはユーザー グループにロールを割り当てて権限を設定できます。

vRealize Operations Manager ユーザー インターフェイスの特定の機能にアクセスするには、権限が必要です。ユーザーとオブジェクトの両方に権限を割り当てて、アクセス コントロールを定義します。1 つ以上のロールをユーザーに割り当てて有効にすることで、同じタイプのオブジェクトに異なる範囲のアクションが実行できます。たとえば、あるユーザーに仮想マシンを削除する権限を割り当てて、さらに同じユーザーに別の仮想マシンの読み取り専用の権限を割り当てることができます。

ユーザー アクセス コントロール

vRealize Operations Manager でユーザー認証を行うには、いくつかの方法があります。

- vRealize Operations Manager にローカル ユーザー アカウントを作成します。
- VMware vCenter Server ユーザーを使用します。vCenter Server が vRealize Operations Manager に登録された後、vRealize Operations Manager グローバル設定の vCenter Server ユーザー オプションを構成し、vCenter Server ユーザーが vRealize Operations Manager にログインできるようにします。vRealize Operations Manager へログインするときに、vCenter Server ユーザーは、vCenter Server で割り当てられた権限に従ってオブジェクトにアクセスします。
- インポートしたユーザーを認証する認証ソースを追加し、別のマシンに存在するユーザー グループ情報を追加します。
 - LDAP を使用して、LDAP サーバからユーザーまたはユーザー グループをインポートします。LDAP ユーザーは、LDAP 認証情報を使用して、vRealize Operations Manager にログインできます。
 - シングル サインオン ソースを作成し、シングル サインオン サーバからユーザーとユーザー グループをインポートします。シングル サインオン ユーザーはシングル サインオン認証情報を使って vRealize Operations Manager および vCenter Server にログインできます。また、シングル サインオンの Active Directory を構成して、シングル サインオン ソースを vRealize Operations Manager に追加すれば、シングル サインオンで Active Directory が使用できます。

ユーザーの環境設定

vRealize Operations Manager の表示オプション（画面や健全性チャートの色、表示するメトリックやグループの数、およびシステム時間をホスト マシンと同期するかどうかなど）を決定するには、一番上のツールバーでユーザーの環境設定を構成します。

vRealize Operations Manager のユーザー

各ユーザーが vRealize Operations Manager にログインする際の認証に使用するアカウントを持っています。

ローカル ユーザーと LDAP ユーザーのアカウントが設定されると、それらのアカウントは vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイスに表示されます。vCenter Server とシングル サインオン ユーザーのアカウントは、ユーザーが初めてログインしたときのみ、ユーザー インターフェイスに表示されます。各ユーザーは 1 つ以上のロールが割り当てられており、1 つ以上のユーザー グループでメンバーとして認証されています。

vRealize Operations Manager でのローカルユーザー

ローカルの vRealize Operations Manager インスタンスにユーザー アカウントを作成すると、vRealize Operations Manager はそのアカウントの認証情報をグローバルなデータベースに格納して、アカウント ユーザーをローカルに認証します。

各ユーザー アカウントは一意的 ID を持つ必要があり、関連付けられたユーザー環境設定を含めることができます。

ローカル ユーザーとして vRealize Operations Manager にログインしようとしていて、パスワードが無効です というメッセージを受信した場合は、次の回避策を試します。[ログイン] ページで、[認証ソース] を [すべての vCenter サーバ] に変更し、[ローカル ユーザー] に戻し、再度ログインします。

vCenter Server ユーザー：vRealize Operations Manager

vRealize Operations Manager は、vCenter Server ユーザーをサポートします。vRealize Operations Manager にログインする場合、vCenter Server ユーザーが vCenter Server で有効になっている必要があります。

ロールと関連付け

vRealize Operations Manager にログインするには、vCenter Server ユーザーは vCenter Server Admin ロールまたはいずれかの vRealize Operations Manager 権限（vCenter Server でルート レベルで割り当てた PowerUser など）を持っている必要があります。vRealize Operations Manager では vCenter 権限（つまり vRealize Operations Manager ロール）のみがルート レベルで使用され、ユーザーがアクセス権を持つすべてのオブジェクトにそれが適用されます。ログイン後、vCenter Server ユーザーは vRealize Operations Manager にあるすべてのオブジェクトを確認できます。これらは vCenter Server ですでに確認できるものです。

vCenter Server インスタンスにログインしてオブジェクトにアクセスする

vCenter Server では、ユーザーは、vRealize Operations Manager へのログイン時に選択した認証ソースに応じて、単一の vCenter Server インスタンスまたは複数の vCenter Server インスタンスにアクセスできます。

- ユーザーが認証ソースとして単一の vCenter Server インスタンスを選択した場合、ユーザーはその vCenter Server インスタンス内のオブジェクトにアクセスする権限を持ちます。ユーザーがログインすると、特定の vCenter Server インスタンスを認証ソースとして、vRealize Operations Manager にアカウントが作成されます。
- ユーザーが認証ソースとして [すべての vCenter Server] を選択し、環境内のすべての vCenter Server に対して同一の認証情報を持つ場合、すべての vCenter Server インスタンスのすべてのオブジェクトが表示されます。環境内のすべての vCenter サーバによって認証されたユーザーのみがログインできます。ユーザーがログインすると、すべての vCenter Server インスタンスを認証ソースとして、vRealize Operations Manager にアカウントが作成されます。

vRealize Operations Manager では、リンクされた vCenter Server インスタンスはサポートされません。代わりに、各 vCenter Server インスタンスの vCenter Server アダプタを構成し、各 vCenter Server インスタンスを vRealize Operations Manager に登録する必要があります。

特定の vCenter Server インスタンスのオブジェクトのみが vRealize Operations Manager に表示されます。vCenter Server インスタンスにその他のリンクされた vCenter Server インスタンスがある場合、データは表示されません。

vCenter Server ロールと権限

vCenter Server では、vRealize Operations Manager のロールや権限を表示または編集できません。vRealize Operations Manager は、vCenter Server のグローバル権限グループの一部として、vCenter Server へ権限としてロールを送信します。vCenter Server 管理者は、vRealize Operations Manager のロールを vCenter Server のユーザーに割り当てる必要があります。

vCenter Server の vRealize Operations Manager 権限では、ロールは名前に付加されます。たとえば、vRealize Operations Manager ContentAdmin ロール、vRealize Operations Manager PowerUser ロールなどです。

読み取り専用プリンシパル

vCenter Server ユーザーは、vRealize Operations Manager 内では読み取り専用プリンシパルです。つまり、vRealize Operations Manager のロールに関連付けられたロール、グループ、またはオブジェクトを変更できません。代わりに、それらを vCenter Server インスタンス内で変更する必要があります。ルート フォルダに適用されたロールは、ユーザーが権限を持つ vCenter Server 内のすべてのオブジェクトに適用されます。vRealize Operations Manager では、オブジェクトの個別のロールは適用されません。たとえば、ユーザーに vCenter Server ルート フォルダにアクセスする PowerUser ロールはあるが、仮想マシンに対しては読み取り専用アクセスしかない場合は、vRealize Operations Manager は、仮想マシンにアクセスするユーザーに対して PowerUser ロールを適用します。

権限の更新

vCenter Server で vCenter Server ユーザーの権限を変更した場合、そのユーザーは vRealize Operations Manager からログアウトし、再度ログインした上で、権限を更新して vRealize Operations Manager で更新結果を確認する必要があります。または、そのユーザーは vRealize Operations Manager が更新されるのを待つこともできます。権限は、\$ALIVE_BASE/user/conf/auth.properties ファイルで定義されたとおり一定間隔で更新されます。デフォルトの更新間隔は 30 分です。必要な場合は、クラスタ内のすべてのノードに対してこの間隔を変更できます。

シングル サインオンと vCenter ユーザー

vCenter Server ユーザーがシングル サインオンで vRealize Operations Manager にログインすると、vRealize Operations Manager ユーザー アカウント ページに登録されます。シングル サインオンで vRealize Operations Manager にログインした vCenter Server ユーザー アカウントを削除するか、シングル サインオン グループからユーザーを削除した場合、ユーザー アカウント ページにはユーザー アカウント エントリが表示されたままになるため、手動で削除する必要があります。

レポートの生成

vCenter Server ユーザーは、vRealize Operations Manager でレポートを作成することや、スケジュールを設定することはできません。

vRealize Operations Manager での vCenter Server ユーザーの下位互換性

vRealize Operations Manager は、以前のバージョンの vRealize Operations Manager のユーザーに対する下位互換性を提供しています。そのため、古いバージョンの vCenter Server の権限を持つ vCenter Server のユーザーが、vRealize Operations Manager にログインすることが可能です。

vRealize Operations Manager を vCenter Server に登録すると、vCenter Server で特定のロールが使用可能になります。

- 以前のバージョンの vRealize Operations Manager の管理者アカウントは PowerUser ロールにマップされます。
- 以前のバージョンの vRealize Operations Manager のオペレータ アカウントは ReadOnly ロールにマップされます。

登録時、vRealize Operations Manager のすべてのロール（vRealize Operations Manager の管理者、メンテナンス、および移行を除く）が、vCenter Server で動的に使用可能になります。vCenter Server の管理者は、登録時にマップされる vRealize Operations Manager のすべてのロールを所有しますが、これらの管理者アカウントは、vCenter Server のルート フォルダの特定のロールが特別に割り当てられている場合に、そのロールのみを受け取ります。

vCenter Server に対する vRealize Operations Manager の登録はオプションです。ユーザーが vCenter Server に vRealize Operations Manager を登録しないことを選択した場合でも、vCenter Server 管理者は、そのユーザー名とパスワードを使用して vRealize Operations Manager にログインできます。ただし、そのユーザーは、vCenter Server のセッション ID を使用してログインすることはできません。この場合、一般的な vCenter Server ユーザーが vRealize Operations Manager にログインするには、1 つ以上の vRealize Operations Manager ロールが必要です。

vCenter Server の複数のインスタンスが vRealize Operations Manager に追加されると、すべての vCenter Server インスタンスに対してユーザー認証情報が有効になります。ユーザーが vRealize Operations Manager にログインするときに、ログイン時のすべての vCenter Server オプションを選択した場合、vRealize Operations Manager は、すべての vCenter Server インスタンスに対してユーザーの認証情報が有効であることを要求します。ユーザー アカウントが 1 つの vCenter Server インスタンスに対してのみ有効な場合、そのユーザーは、ログイン ドロップダウン メニューから vCenter Server インスタンスを選択して、vRealize Operations Manager にログインできます。

vCenter Server ユーザーが vRealize Operations Manager にログインするには、以下に示す vCenter Server のロールが 1 つ以上必要です。

- vRealize Operations コンテンツ管理ロール
- vRealize Operations 一般ユーザー ロール 1
- vRealize Operations 一般ユーザー ロール 2
- vRealize Operations 一般ユーザー ロール 3
- vRealize Operations 一般ユーザー ロール 4
- vRealize Operations PowerUser ロール
- vRealize Operations PowerUser ロール（修正アクションなし）
- vRealize Operations ReadOnly ロール

vCenter Server のユーザー、グループ、およびロールの詳細については、vCenter Server のドキュメントを参照してください。

vRealize Operations Manager での外部ユーザー ソース

外部ソースからユーザー アカウントを取得し、そのアカウントを vRealize Operations Manager インスタンスで使用できます。

外部ユーザー ID ソースには次の 2 つのタイプがあります。

- Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) : 認証ソースとして Active Directory または LDAP サーバを使用する場合は、LDAP ソースを使用します。LDAP ソースは、ドメイン A とドメイン B 間に双方向の信頼がある場合でも、複数のドメインをサポートしません。

- シングル サインオン (SSO) : vRealize Operations Manager などの vCenter シングル サインオン ソースをサポートしているアプリケーションでシングル サインオンを実行するには、シングル サインオン ソースを使用します。たとえば、スタンドアロンの vCenter Platform Services Controller (PSC) をインストールし、それを使用して Active Directory サーバと通信できます。Active Directory の設定が vRealize Operations Manager 内のシンプルな LDAP ソースに対して複雑すぎる場合、または LDAP ソースのパフォーマンスが低い場合、PSC を使用します。

vRealize Operations Manager でのロールと権限

vRealize Operations Manager では、権限をユーザーに割り当てる事前定義済みロールが複数用意されています。独自の役割を作成することもできます。

vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイス内の特定の機能にアクセスするための権限が必要です。ユーザー アカウントに関連付けられたロールによって、アクセスできる機能および実行できるアクションが決まります。

各事前定義済みロールには、ダッシュボード、レポート、管理、容量、ポリシー、問題、症状、アラート、ユーザー アカウント管理、アダプタなどのコンポーネントに対し、ユーザーが作成、読み取り、更新あるいは削除アクションを行うための権限一式が含まれています。

システム管理者

vRealize Operations Manager のすべての機能、オブジェクトおよびアクションに対する権限が含まれています。

PowerUser

ユーザーには、ユーザー管理とクラスタ管理権限を除く、管理者ロールのアクションを実行する権限があります。vRealize Operations Manager は、vCenter Server ユーザーをこのロールにマップします。

PowerUserMinusRemediation

ユーザーには、ユーザー管理、クラスタ管理および修正アクション権限を除く、管理者ロールのアクションを実行する権限があります。

ContentAdmin

ユーザーは、vRealize Operations Manager のすべてのコンテンツ（ビュー、レポート、ダッシュボード、カスタム グループなど）を管理できます。

AgentManager

ユーザーは、Endpoint Operations Management エージェントを展開および構成することができます。

GeneralUser-1 から GeneralUser-4

これらの事前定義済みテンプレート ロールは、最初に ReadOnly ロールと定義されます。vCenter Server 管理者は、これらのロールを構成して、ユーザーに複数タイプの権限を与えるロールの組み合わせを作成することができます。ロールは、登録中に一度 vCenter Server と同期されます。

ReadOnly

ユーザーは、読み取り専用でアクセスし、読み取りアクションを実行できますが、作成、更新または削除といった書き込みアクションは実行できません。

ユーザー シナリオ：ユーザー アクセス コントロールの管理

システム管理者または仮想インフラストラクチャ管理者は、vRealize Operations Manager でユーザー アクセス コントロールを管理することにより、オブジェクトのセキュリティを確保できます。新しい人員を雇用した企業では、新しいユーザーが vRealize Operations Manager の特定のコンテンツおよびオブジェクトにアクセス権を持つように、ユーザー アカウントを作成し、そのアカウントのロールを割り当てる必要があります。

このシナリオでは、ユーザー アカウントとロールを作成し、ビューおよびオブジェクトへのアクセス権限を指定するためにユーザー アカウントにロールを割り当てる方法について説明します。その後、それらのアカウントでの権限の意図した動作の実例を示します。

「Tom User」という新しいユーザー アカウントと、vRealize Operations クラスタ内のオブジェクトへの管理アクセス権限を持つ新しいロールを作成します。新しいロールをユーザー アカウントに適用します。

最後に、別のマシン上にある外部の LDAP ユーザー データベースからユーザー アカウントを vRealize Operations Manager にインポートし、インポートしたユーザー アカウントにロールを割り当てて、ユーザーの権限を構成します。

前提条件

以下の条件が満たされていることを確認してください：

- vRealize Operations Manager がインストール済みで正常に動作しており、クラスタ、ホスト、仮想マシンなどのオブジェクトが含まれている。
- 1 つまたは複数のユーザー グループが定義されている。

次のステップ

新しいロールを作成します。

新しいロールの作成

ロールを使用して、vRealize Operations Manager のユーザー アカウントのアクセス コントロールを管理します。

この手順では、新しいロールを追加して、そのロールに管理権限を割り当てます。

前提条件

このシナリオのコンテキストを理解していることを確認します。[ユーザー シナリオ：ユーザー アクセス コントロールの管理](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで [管理] を選択して、[アクセス コントロール] をクリックします。
- 2 [ロール] タブをクリックします。

- 3 ツールバーの [追加] アイコンをクリックして、新しいロールを作成します。

[ロールの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。

- 4 ロール名に **admin_cluster** と入力し、説明を入力して、[OK] をクリックします。

ロールのリストに、admin_cluster ロールが表示されます。

- 5 [admin_cluster] ロールをクリックします。

- 6 [詳細] グリッドの [権限] ペインで [編集] アイコンをクリックします。

[ロールへの権限の割り当て] ダイアログ ボックスが表示されます。

- 7 [管理アクセス - すべての権限] チェックボックスを選択します。

- 8 [更新] をクリックします。

このアクションにより、このロールには、環境内のすべての機能に対する管理権限が付与されます。

次のステップ

ユーザー アカウントを作成し、そのアカウントにこのロールを割り当てます。

ユーザー アカウントの作成

システム管理者は、一意のユーザー アカウントを各ユーザーに割り当てて、ユーザーが vRealize Operations Manager を使用できるようにします。ユーザー アカウントのセットアップ時に、環境内でそのユーザーが実行できるアクティビティおよび対象オブジェクトを決定する権限を割り当てます。

この手順では、ユーザー アカウントを作成し、そのアカウントに **admin_cluster** ロールを割り当て、そのロールが割り当てられているユーザーがアクセスできるオブジェクトに関連付けます。vRealize Operations クラスタ内のオブジェクトへのアクセス権を割り当てます。その後、そのユーザー アカウントをテストして、指定したオブジェクトのみにユーザーがアクセスできることを確認します。

前提条件

新しいロールを作成します。[新しいロールの作成](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで [管理] を選択して、[アクセス コントロール] をクリックします。
- 2 [ユーザー アカウント] タブをクリックします。
- 3 [追加] アイコンをクリックして新しいユーザー アカウントを作成し、このアカウントに関する情報を入力します。

オプション	説明
ユーザー名	vRealize Operations Manager へのログインに使用するユーザー名を入力します。
パスワード	ユーザーのパスワードを入力します。
パスワードの確認	ユーザーのパスワードを確認するために、もう一度入力します。
名	ユーザーの名前を入力します。このシナリオでは、 Tom と入力します。

オプション	説明
姓	ユーザーの姓を入力します。このシナリオでは、 User と入力します。
電子メールアドレス	(任意)。ユーザーの電子メール アドレスを入力します。
説明	(任意)。このユーザーの説明を入力します。
このユーザーを無効にする	このシナリオではこのユーザーを有効にしておくため、このチェック ボックスは選択しないでください。
次のログイン時にパスワードの変更を要求	このシナリオではユーザー パスワードを変更する必要はないため、このチェック ボックスは選択しないでください。

4 [Next] をクリックします。

ユーザー グループのリストが表示されます。

5 このユーザー アカウントをグループのメンバーとして追加するユーザー グループを選択します。

6 [オブジェクト] タブをクリックします。

7 ドロップダウン メニューから [admin_cluster] を選択します。

8 [このロールをユーザーに割り当てます] チェックボックスを選択します。

9 オブジェクト階層のリストで [vRealize Operations クラスタ] チェック ボックスをオンにします。

10 [終了] をクリックします。

vRealize Operations クラスタのすべてのオブジェクトにアクセスできるユーザー用の新しいユーザー アカウントが作成されました。新しいユーザーが、ユーザー アカウントのリストに表示されています。

11 vRealize Operations Manager からログアウトします。

12 vRealize Operations Manager に「Tom User」としてログインし、そのユーザー アカウントで vRealize Operations クラスタ階層内のすべてのオブジェクトにアクセスでき、環境内の他のオブジェクトにはアクセスできないことを確認します。

13 vRealize Operations Manager からログアウトします。

結果

vRealize Operations クラスタ内のすべてのオブジェクトにアクセスする権限を「Tom User」というユーザー アカウントに割り当てるために、特定のロールを使用しました。

次のステップ

別のマシンにある外部 LDAP ユーザー データベースからユーザー アカウントをインポートし、そのユーザー アカウントに権限を割り当てます。

ユーザー アカウントのインポートと権限の割り当て

別のマシン上にある LDAP データベースやシングル サインオン サーバなど、外部ソースからユーザー アカウントをインポートして、これらのユーザーが vRealize Operations Manager の特定の機能やオブジェクトにアクセスするための権限を付与することができます。

前提条件

- 認証ソースを構成します。 [vRealize Operations Manager の認証ソース](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager からログアウトしてから、システム管理者としてログインします。
- 2 vRealize Operations Manager で、[管理] を選択し、[アクセス コントロール] をクリックします。
- 3 ツールバーで [ユーザーのインポート] アイコンをクリックします。
- 4 認証ソースからユーザー アカウントをインポートするオプションを指定します。
 - a [ユーザーのインポート] ページで、[インポート元] ドロップダウン メニューから認証ソースを選択します。
 - b [ドメイン名] ドロップダウン メニューで、ユーザーをインポートするドメイン名を入力して [検索] をクリックします。
 - c インポートするユーザーを選択して、[次へ] をクリックします。
 - d [グループ] タブで、このユーザー アカウントを追加するユーザー グループを選択します。
 - e [オブジェクト] タブをクリックし、[admin_cluster] ロールを選択して、[このロールをユーザーに割り当てます] チェック ボックスを選択します。
 - f オブジェクト階層のリストで [vRealize Operations クラスタ] チェック ボックスをオンにし、[完了] をクリックします。
- 5 vRealize Operations Manager からログアウトします。
- 6 インポートしたユーザーとして、vRealize Operations Manager にログインします。
- 7 インポートしたユーザー アカウントで vRealize Operations クラスタ内のオブジェクトのみにアクセスできることを確認します。

結果

外部のユーザー データベースやサーバから vRealize Operations Manager へユーザー アカウントをインポートしてロールを割り当て、このロールを持つユーザーがアクセスできるオブジェクトを割り当てました。

これでこのシナリオは終了です。

vRealize Operations Manager でのシングル サインオン ソースの構成

システム管理者または仮想インフラストラクチャ管理者は、シングル サインオンを使用して、SSO ユーザーが vRealize Operations Manager 環境に安全にログインできるようにします。

シングル サインオン ソースが構成されると、ユーザーは認証のために SSO ID ソースにリダイレクトされます。一度ログインすると、ユーザーは再度ログインしなくても、vCenter Server などの他の vSphere コンポーネントにアクセスできます。



シングル サインオン ソースの作成と vRealize Operations Manager のユーザー グループのインポート

(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_create_sso)

前提条件

- シングル サインオン ソースと vRealize Operations Manager のサーバ システム時間が同期されていることを確認します。Network Time Protocol (NTP) を構成する必要がある場合は、[vRealize Operations Manager のクラスタとノードの保守](#)を参照してください。
- vCenter Server によって Platform Services Controller にアクセスできることを確認します。詳細については、VMware vSphere 情報センターを参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager に管理者としてログインします。
- 2 [管理] - [認証ソース] を選択し、ツールバーの [追加] アイコンをクリックします。
- 3 [ユーザーおよびグループのインポートのソースを追加] ダイアログ ボックスで、シングル サインオン ソースの情報を指定します。

オプション	操作
ソースの表示名	インポートのソースの名前を入力します。
ソース タイプ	[SSO SAML] が表示されていることを確認します。
ホスト	シングル サインオン サーバが存在するホスト マシンの IP アドレスまたは FQDN を入力します。ホスト マシンの FQDN を入力した場合は、vRealize Operations Manager クラスタ内のすべての非リモート コレクタ ノードがシングル サインオン ホストの FQDN を解決できることを確認します。
ポート	シングル サインオン サーバのリスン ポートを設定します。デフォルトでは、このポートは 443 に設定されます。
ユーザー名	SSO サーバにログインできるユーザー名を入力します。
パスワード	パスワードを入力します。
今後の構成のために管理者ロールを vRealize Operations Manager に付与しますか？	vRealize Operations Manager のセットアップに変更を加えた場合に SSO ソースが自動的に再登録されるように、[はい] を選択します。[いいえ] を選択していて、vRealize Operations Manager のセットアップが変更された場合、シングル サインオン ソースを手動で再登録するまでシングル サインオン ユーザーはログインできなくなります。
vRealize Operation のシングル サインオン URL に自動的にリダイレクトしますか？	ユーザーが vCenter シングル サインオンのログイン ページにリダイレクトされるように、[はい] を選択します。[いいえ] を選択すると、ユーザーは認証のために SSO にリダイレクトされません。このオプションは vRealize Operations Manager のグローバル設定で変更できます。
現在のソースを追加した後、シングル サインオン ユーザー グループをインポートしますか？	SSO ソースのセットアップ完了時にウィザードが [ユーザー グループのインポート] ページにリダイレクトするように、[はい] を選択します。ユーザー アカウントをインポートする場合、またはユーザー グループを後の段階でインポートする場合は、[いいえ] を選択します。
詳細オプション	環境内でロード バランサーを使用している場合は、ロード バランサーの IP アドレスを入力します。

- 4 [テスト] をクリックしてソースの接続をテストし、[OK] をクリックします。
証明書の詳細が表示されます。
- 5 [この証明書を受け入れる] チェック ボックスをオンにし、[OK] をクリックします。

- 6 [ユーザー グループのインポート] ダイアログ ボックスで、別のマシン上の SSO サーバからユーザー アカウントをインポートします。

オプション	操作
インポート元	シングル サインオン ソースを構成するときに指定した、シングル サインオン サーバを選択します。
ドメイン名	ユーザー グループのインポート元のドメイン名を選択します。PSC で Active Directory が LDAP ソースとして構成されている場合、vCenter Server が同じドメイン内に置かれていれば、ユニバーサル グループとドメイン ローカル グループのみをインポートできます。
結果の最大表示件数	検索の実行時に表示する結果の件数を入力します。
検索プリフィックス	ユーザー グループの検索に使用するプリフィックスを入力します。

- 7 表示されるユーザー グループのリストで、1 つ以上のユーザー グループを選択し、[次へ] をクリックします。
- 8 [ロールおよびオブジェクト] ペインで、[ロールの選択] ドロップダウン メニューからロールを選択し、[このロールをグループに割り当てます] チェック ボックスを選択します。
- 9 グループのユーザーがこのロールを保有している場合にアクセスできるオブジェクトを選択します。
- ユーザーが vRealize Operations Manager のすべてのオブジェクトにアクセスできるように権限を割り当てるには、[システムのすべてのオブジェクトへのアクセスを許可] チェック ボックスをオンにします。
- 10 [OK] をクリックします。
- 11 シングル サインオンについて十分に理解し、シングル サインオン ソースを正しく構成していることを確認します。
- vRealize Operations Manager からログアウトします。
 - シングル サインオン サーバからインポートしたユーザー グループに属するユーザーのいずれかとして、vSphere Web Client にログインします。
 - 新しいブラウザ タブで、vRealize Operations Manager 環境の IP アドレスを入力します。
 - シングル サインオン サーバが正しく構成されていれば、ユーザー認証情報を入力する必要なく vRealize Operations Manager にログインできます。

シングル サインオン ソースの編集

シングル サインオン ソースの管理に使用される管理者認証情報を変更する必要がある場合、またはソースのホストを変更した場合は、シングル サインオン ソースを編集します。

SSO ソースを構成するときは、シングル サインオン サーバが存在するホスト マシンの IP アドレスか FQDN を指定します。新しいホストを構成したい場合、つまり、ソースが設定されたときに構成したホスト マシンとは異なるホスト マシンにシングル サインオン サーバが配置されている場合、vRealize Operations Manager では、現在の SSO ソースが削除され、新しいソースが作成されます。この場合、新しい SSO ソースに関連付けるユーザーを再インポートする必要があります。

vRealize Operations Manager で現在のホストを識別する方法を変更したい場合、たとえば、IP アドレスから FQDN に変更する場合や、その逆を行う場合、または構成済み PSC の IP アドレスが変更されていれば PSC の IP アドレスを更新したい場合、vRealize Operations Manager では、現在の SSO ソースが更新されるため、ユーザーを再インポートする必要はありません。

手順

- 1 vRealize Operations Manager に管理者としてログインします。
- 2 [管理] を選択し、[認証ソース] を選択します。
- 3 シングル サインオン ソースを選択し、[編集] アイコンをクリックします。
- 4 シングル サインオン ソースに変更を行い、[OK] をクリックします。

新しいホストを構成している場合、[新しいシングル サインオン ソースが検出されました] ダイアログ ボックスが表示されます。

- 5 シングル サインオン ソースを設定したときに使用した管理者認証情報を入力し、[OK] をクリックします。
現在の SSO ソースが削除され、新しいソースが作成されます。
- 6 [OK] をクリックして証明書を受け入れます。
- 7 SSO ソースに関連付けるユーザーをインポートします。

vRealize Operations Manager のアクセス コントロール

各ユーザーは、vRealize Operations Manager を使用するとき、ロール ベースのセキュリティを実施するために 1 つ以上のロールを割り当てられた一意のアカウントを持つ必要があります。ユーザー アカウントを作成し、そのアカウントを 1 つ以上のユーザー グループのメンバーに割り当てることにより、ユーザーはユーザー グループに関連付けられたロールおよびオブジェクトを継承できます。

アクセス コントロール オプションを確認できる場所

ユーザー アカウントとそれらに関連付けられているユーザー グループ、ロール、およびパスワードを管理するには、[管理] を選択して [アクセス コントロール] をクリックします。

表 4-172. アクセス コントロールのタブおよびワークスペース

オプション	説明
ユーザー アカウント	LDAP データベースから vRealize Operations Manager ユーザー アカウントを追加、編集、削除、またはインポートし、ユーザー ロール、グループのメンバーシップ、およびユーザーとの関連で割り当てられたオブジェクトを管理します。別のマシン上にある LDAP データベースからユーザー アカウントをインポートします。 vRealize Operations Manager にログインした vCenter Server ユーザー（直接ログインしたユーザーと vSphere Client 経由でログインしたユーザーのいずれも）がユーザー アカウントのリストに表示されます。
ユーザー グループ	ユーザー グループの追加、編集、削除、またはインポートを行い、グループのメンバーおよびメンバーがアクセスできる関連付けられたオブジェクトを更新します。別のマシン上にある LDAP データベースまたはシングル サインオン データベースからユーザー グループをインポートします。 vRealize Operations Manager は LDAP 構成で自動同期オプションが有効になっている場合、インポートされた LDAP ユーザー グループのユーザー メンバーシップを継続的に同期します。

表 4-172. アクセス コントロールのタブおよびワークスペース（続き）

オプション	説明
ロール	vRealize Operations Manager でユーザーがアクションを実行するには、特定のロールが割り当てられている必要があります。ロールベース アクセスでは、ユーザーにロールを割り当てると、そのユーザーがシステム内で実行できるアクションだけでなく、そのロールを保持している間にそれらのアクションを実行できる対象のオブジェクトも決定されます。たとえば、ポリシーをインポートまたはエクスポートするには、ユーザー アカウントに割り当てられたロールにおいて、インポート権限またはエクスポート権限をポリシー管理に対して有効にする必要があります。
パスワード ポリシー	ローカル ユーザー パスワードを管理し、アカウント ロックアウト、パスワードの強度、パスワード変更ポリシー設定に使用する基準を設定します。

アクセス コントロール：[ユーザー アカウント] タブおよびワークスペース

vRealize Operations Manager ユーザー アカウントを追加、編集、削除したり、外部の LDAP データベースからユーザー アカウントをインポートしたりできます。アクセス コントロールでは、ロール、特定のロールが割り当てられている間にユーザーがアクセスできるオブジェクト、およびユーザー グループ内のメンバーシップを管理します。

ユーザー アカウントを管理できる場所

ユーザー アカウントを管理するには、[管理] を選択して、[アクセス コントロール] をクリックします。

表 4-173. アクセス コントロール：ユーザー アカウントの概要グリッド

概要グリッドのオプション	説明
[ユーザー アカウント] のツールバー	<p>ユーザー アカウントを管理するには、ツールバー アイコンを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [追加] アイコン。ユーザー アカウントを追加し、[ユーザー アカウントの追加] ワークスペースでユーザー アカウントの詳細を指定します。 ■ [編集] アイコン。選択したユーザー アカウントを編集し、[ユーザー アカウントの編集] ワークスペースでユーザー グループの詳細を変更します。 ■ [削除] アイコン。ユーザー アカウントを削除します。 ■ [ユーザーのインポート] アイコン。認証ソースからユーザー アカウントをインポートします。
名	ユーザーの名（ユーザー アカウントの作成時に作成される）。
姓	ユーザーの姓（ユーザー アカウントの作成時に作成される）。
ユーザー名	vRealize Operations Manager のログイン ユーザー名（スペースなし）
電子メール	ユーザーの電子メール アドレス（ユーザー アカウントの作成時に作成される）。
説明	ユーザー アカウントの説明（ユーザー アカウントの作成時に指定する）。この情報を使用して、ユーザーのタイプとアクセス権限の概要を特定できます。
ソース タイプ	ユーザー アカウントがローカル ユーザーであるか、または LDAP、SSO、AD、OpenLDAP、vCenter Server からのソースなどの外部認証ソースを使用して統合された外部ユーザーであることを示します。
有効	ユーザー アカウントで vRealize Operations Manager 機能の使用が有効であるかどうかを示します。管理者は、ユーザー アカウントを編集して、ユーザーが vRealize Operations Manager にアクセスできないようにそのアカウントを手動で有効にしたり、無効にしたりできます。

表 4-173. アクセス コントロール：ユーザー アカウントの概要グリッド（続き）

概要グリッドのオプション	説明
ロック済み	vRealize Operations Manager でユーザー アカウントがロックされているかどうかを示します。たとえば、パスワードのロックアウト ポリシーを基にしたり、ユーザーが無効なパスワードを 5 分以内に 3 回入力した場合に、ユーザー アカウントをロックできます。
すべてのオブジェクトへのアクセス	vRealize Operations Manager インスタンスにインポートされたすべてのオブジェクトに、ユーザー アカウントからアクセスできるかどうかを示します。

ユーザー アカウントを追加した後、[詳細] グリッドを使用して、ユーザー グループに割り当てられているユーザー アカウントを表示および編集したり、そのユーザー アカウントに割り当てられている権限を表示したりします。

表 4-174. アクセス コントロール：ユーザー アカウントの詳細グリッド

詳細グリッドのオプション	説明
ユーザー グループ	概要グリッドでユーザーをクリックすると、割り当てられたユーザー グループが表示されます。そこで、ユーザーに関連付けられているユーザー グループを表示および変更できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ グループ名：ユーザー グループを識別します。ユーザー アカウントに関連付けられたユーザー グループを変更するには、[編集] アイコンをクリックします。 ■ メンバー：ユーザー グループに割り当てられているユーザー数を表示します。
権限	サマリ グリッドでユーザーをクリックし、[詳細] グリッドで [権限] タブをクリックすると権限が表示されます。そこで、ユーザーに割り当てられているロールとオブジェクト階層の詳細を表示できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ロール：ユーザーに割り当てられている 1 つまたは複数のロールの名前を示します。 ■ ロールの説明：入力したロールの説明を表示します。 ■ オブジェクト階層：このロールを保持している間、ユーザーに割り当てられているオブジェクト階層の名前を表示します。 ■ オブジェクト：階層に含まれている、ユーザーがアクセス可能なオブジェクトの数を表示します。 ■ 関連付け：ロールおよびオブジェクトが選択されたユーザーに割り当てられているか、またはそのユーザーが属するユーザー グループに割り当てられているかを示します。

ユーザー アカウント、ユーザーの追加または編集のワークスペース：ユーザーの詳細

ユーザー アカウントを追加することにより、ユーザーは vRealize Operations Manager の各機能や、環境内の特定のオブジェクトにアクセスできるようになります。ユーザー アカウントを変更してユーザーの属性を変更する、アカウントを無効化またはロックする、ユーザーにパスワードの変更を要求する、などの操作も可能です。

ユーザー アカウントの追加または編集を行う場所

ユーザー アカウントを追加するには、[管理] - [アクセス コントロール] を選択し、[ユーザー アカウント] ツールバーの [追加] アイコンをクリックします。ユーザー アカウントを編集するには、アカウントを選択して [編集] アイコンをクリックします。

表 4-175. [アクセス コントロール] [ユーザーの追加 / 編集] ワークスペース - [ユーザー詳細] ページ

[ユーザー詳細] オプション	説明
ユーザー名	vRealize Operations Manager のログイン ユーザー名（スペースなし）
パスワード	vRealize Operations Manager インスタンスにアクセスするためのユーザー パスワード。
パスワードの確認	ユーザー パスワードの確認。
名	ユーザーの名（ユーザー アカウントの作成時に作成される）。
姓	ユーザーの姓（ユーザー アカウントの作成時に作成される）。

表 4-175. [アクセス コントロール] [ユーザーの追加 / 編集] ワークスペース - [ユーザー詳細] ページ (続き)

[ユーザー詳細] オプション	説明
電子メールアドレス	ユーザーの電子メール アドレス (ユーザー アカウントの作成時に作成される)。
説明	ユーザー アカウントの説明 (ユーザー アカウントの作成時に指定する)。この情報により、ユーザーのタイプとユーザーのアクセス権の概要を把握できます。
このユーザーを無効にする	ユーザー アカウントを無効にして、ユーザーが vRealize Operations Manager インスタンスにアクセスできないようにします。
アカウントがロックアウトされています	vRealize Operations Manager でユーザー アカウントがロックされていることを示します。
次のログイン時にパスワードの変更を要求	次回 vRealize Operations Manager インスタンスにログインするとき、ユーザーにパスワードを変更するよう要求します。

表 4-176. [アクセス コントロール] [ユーザーの追加] または [ユーザーの編集] ワークスペース - [グループと権限の割り当て] ページ

グループ、ロール、オブジェクトの割り当てオプション	説明
グループ	ユーザー アカウントに関連するグループを選択または選択解除します。すべてのアカウントを選択または選択解除するには、[グループ名] チェック ボックスを選択します。ユーザー アカウントは、LDAP データベースからインポートしたグループに追加できません。
オブジェクト	<p>ロールは、ユーザーがシステム内でどのアクションを実行できるかを決定します。[ロールの選択] ドロップダウン メニューからロールを選択し、[このロールをユーザーに割り当てます] チェックボックスをオンにします。ユーザー アカウントには複数のロールを関連付けることができます。</p> <p>このロールが割り当てられたときにユーザーがアクセスできるオブジェクトを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [オブジェクト階層の選択]: オブジェクトのグループを表示します。このリストでオブジェクトを選択すると、階層内のすべてのオブジェクトが選択されます。 ■ [オブジェクトの選択]: オブジェクト階層内の特定のオブジェクトを選択するには、下矢印をクリックしてオブジェクトのリストを展開します。たとえば、アダプタ インスタンス階層を展開して、1 つまたは複数のアダプタを選択します。 ■ [システムのすべてのオブジェクトへのアクセスを許可]: ユーザー アカウントにシステム内のすべてのオブジェクトへのアクセスを許可するには、このチェック ボックスを選択します。 <p>注:</p> <p>アダプタなどの親オブジェクトにアクションを実行するユーザー権限を割り当てると、そのユーザーは親のすべての子オブジェクトに同じアクションを実行できます。たとえば、vRealize Operations Manager アダプタにアクセスする権限を持つユーザーは、そのアダプタに関連したすべての仮想マシンにアクセスできます。これは、同じユーザーに 1 つの特定の仮想マシンだけに制限アクセスを許可する別の役割がある場合も同様です。</p>

ユーザー アカウント用のユーザー ワークスペースの追加または編集: グループ、ロール、およびオブジェクトの割り当て

1 つ以上のユーザー グループにユーザー アカウントを割り当て、アカウントにロールとオブジェクトを割り当てることで、ユーザーがどのアクションをどのオブジェクトに実行できるかを指定することができます。管理者ロールは、オブジェクトにアクセスして環境全体でアクションを実行する必要がある特定のユーザーのみに割り当てます。

グループ、ロール、オブジェクトをユーザー アカウントに割り当てることができる場所

ユーザー アカウントにグループ、ロール、オブジェクトを割り当てするには、[管理] - [アクセス コントロール] を選択し、[ユーザー アカウント] ツールバーの [追加] アイコンをクリックします。ユーザー アカウントを編集するには、アカウントを選択して [編集] アイコンをクリックします。

表 4-177. [アクセス コントロール] [ユーザーの追加] または [ユーザーの編集] ワークスペース - [グループと権限の割り当て] ページ

グループ、ロール、オブジェクトの割り当てオプション	説明
グループ	ユーザー アカウントに関連するグループを選択または選択解除します。すべてのアカウントを選択または選択解除するには、[グループ名] チェック ボックスを選択します。ユーザー アカウントは、LDAP データベースからインポートしたグループに追加できません。
オブジェクト	<p>ロールは、ユーザーがシステム内でどのアクションを実行できるかを決定します。[ロールの選択] ドロップダウン メニューからロールを選択し、[このロールをユーザーに割り当てます] チェックボックスをオンにします。ユーザー アカウントには複数のロールを関連付けることができます。</p> <p>このロールが割り当てられたときにユーザーがアクセスできるオブジェクトを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [オブジェクト階層の選択]: オブジェクトのグループを表示します。このリストでオブジェクトを選択すると、階層内のすべてのオブジェクトが選択されます。 ■ [オブジェクトの選択]: オブジェクト階層内の特定のオブジェクトを選択するには、下矢印をクリックしてオブジェクトのリストを展開します。たとえば、アダプタ インスタンス階層を展開して、1 つまたは複数のアダプタを選択します。 ■ [システムのすべてのオブジェクトへのアクセスを許可]: ユーザー アカウントにシステム内のすべてのオブジェクトへのアクセスを許可するには、このチェック ボックスを選択します。
注:	
アダプタなどの親オブジェクトにアクションを実行するユーザー権限を割り当てると、そのユーザーは親のすべての子オブジェクトに同じアクションを実行できます。たとえば、vRealize Operations Manager アダプタにアクセスする権限を持つユーザーは、そのアダプタに関連したすべての仮想マシンにアクセスできます。これは、同じユーザーに 1 つの特定の仮想マシンだけに制限アクセスを許可する別の役割がある場合も同様です。	

ユーザー アカウント用のユーザー ワークスペースのインポート: ユーザー アカウントのインポート

ユーザー アカウントをインポートすると、環境内で vRealize Operations Manager 機能およびオブジェクトにユーザーがアクセスできます。

ユーザー アカウントをインポートできる場所

ユーザー アカウントをインポートするには、[管理] - [アクセス コントロール] を選択し、[ユーザー アカウント] ツールバーの [ユーザーのインポート] アイコンをクリックします。

表 4-178. アクセス コントロール: [ユーザーのインポート] ワークスペース - [ユーザーのインポート] ページ

[ユーザー詳細] オプション	説明
インポート元	<p>ユーザー アカウントをインポートするためにソースとして構成された LDAP ホスト マシン。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [追加] アイコン。[ユーザーおよびグループのインポートのソースを追加] ダイアログ ボックスで、LDAP インポート ソースを追加し、LDAP インポート ソースの情報を指定します。 ■ [編集] アイコン。[ユーザーおよびグループのインポートのソースを編集] ダイアログ ボックスで、選択された LDAP インポート ソースを編集し、詳細を変更します。
ユーザー名	[認証情報の変更] をクリックし、vRealize Operations Manager インスタンスにユーザー アカウントをインポートする際に使用する LDAP ソース認証情報のユーザー名を表示します。
パスワード	ユーザー アカウントを vRealize Operations Manager インスタンスにインポートするための、LDAP ソースの認証情報のパスワード。

表 4-178. アクセス コントロール：[ユーザーのインポート] ワークスペース - [ユーザーのインポート] ページ（続き）

[ユーザー詳細] オプション	説明
検索文字列	検索文字列を入力し、[検索] をクリックしてユーザー アカウントの検索を開始します。
ユーザー名の概要グリッド	インポートに使用できるユーザーのリストを示します。インポートするユーザーごとにチェック ボックスを選択するか、[ユーザー名] チェック ボックスを選択してすべてのユーザーをインポートします。ユーザーをこのリストに表示するには、ユーザー構成をデフォルトのドメイン ユーザー グループのプライマリ グループに設定する必要があります。vRealize Operations Manager にインポート済みのユーザー アカウントは、リストに表示されません。

ユーザー アカウント用のユーザー ワークスペースのインポート：グループ、ロール、およびオブジェクトの割り当て

ユーザー アカウントを vRealize Operations Manager にインポートする際は、ユーザー グループにユーザー アカウントを割り当て、ロールを割り当て、各ロールの割り当て時にユーザー アカウントがアクセスできるオブジェクトを指定します。

インポートしたユーザー アカウントにグループ、ロール、オブジェクトを割り当てる場所

インポートしたユーザー アカウントにグループ、ロール、オブジェクトを割り当てるには、[管理] - [アクセス コントロール] を選択し、[ユーザー アカウント] ツールバーの [ユーザーのインポート] アイコンをクリックします。

表 4-179. [アクセス コントロール] [ユーザーのインポート] ワークスペース - [グループと権限の割り当て] ページ

グループ、ロール、オブジェクトの割り当てオプション	説明
グループ	ユーザー アカウントに関連するグループを選択または選択解除します。すべてのアカウントを選択または選択解除するには、[グループ名] チェック ボックスを選択します。LDAP からインポートされたグループには、ユーザー アカウントを追加できません。
オブジェクト	<p>[ロールの選択] ドロップダウン メニューでロールを選択または選択解除します。ロールを選択したら、[このロールをユーザーに割り当てます] チェック ボックスをクリックします。ユーザー アカウントには複数のロールを割り当てることができます。</p> <p>このロールが割り当てられたときにユーザーがアクセスできるオブジェクトを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [オブジェクト階層の選択]: オブジェクトのグループを表示します。このリストでオブジェクトを選択すると、階層内のすべてのオブジェクトが選択されます。 ■ [オブジェクトの選択]: オブジェクト階層内の特定のオブジェクトを選択するには、下矢印をクリックしてオブジェクトのリストを展開します。たとえば、アダプタ インスタンス階層を展開して、1 つまたは複数のアダプタを選択します。 ■ [システムのすべてのオブジェクトへのアクセスを許可]: ユーザー アカウントにシステム内のすべてのオブジェクトへのアクセスを許可するには、このチェック ボックスを選択します。

アクセス コントロール：[ユーザー グループ] タブおよびワークスペース

環境内のユーザーおよびオブジェクトに関連付けられたユーザー グループを管理できます。別のマシン上にある LDAP データベース、またはシングル サインオン サーバからユーザー グループをインポートできます。

ユーザー グループを管理できる場所

ユーザー グループを管理するには、[管理] - [アクセス コントロール] を選択して、[ユーザー グループ] タブをクリックします。

表 4-180. [アクセス コントロール] の [ユーザー グループ] の概要グリッド

オプション	説明
ユーザー グループのツールバー	<p>ユーザー グループを管理するには、ツールバー アイコンを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [追加] アイコン。[ユーザー グループの追加] ワークスペースで、ユーザー グループを追加して、ユーザー グループの詳細情報を入力します。 ■ [編集] アイコン。[ユーザー グループの編集] ワークスペースで、選択したユーザー グループを編集して、ユーザー グループの詳細情報を変更します。 ■ [グループのクローン作成] アイコン。ユーザー グループのクローンを作成し、クローン作成されたユーザー グループの名前と説明を入力します。 ■ [削除] アイコン。ユーザー グループを削除します。 ■ [グループのインポート] アイコン。[ユーザー グループのインポート] ワークスペースで、ユーザー グループをインポートして、ユーザー グループをインポートするための詳細情報を入力します。
グループ名	ユーザー グループの名前。
説明	目的を示した、グループの説明。
メンバー	グループのメンバーの数。
グループ タイプ	グループのタイプ。ローカル ユーザー グループか、LDAP からインポートされたグループ。
識別名	ドメインやユーザーなどの LDAP オブジェクトの名前。
すべてのオブジェクトへのアクセス	vRealize Operations Manager インスタンスにインポートされたすべてのオブジェクトに、ユーザー グループ アカウントからアクセスできるかどうかを示します。

サマリ グリッドでユーザー グループを選択した後に、関連付けられたユーザーに関する詳細が [詳細] ペインに表示されます。

表 4-181. [アクセス コントロール] の [ユーザー グループ] の詳細グリッド

オプション	説明
ユーザー アカウント	<p>選択されたグループにメンバーを追加したり、グループ内の選択または選択解除されたメンバーのみを表示したり、メンバーを検索したりできます。[詳細] ペインでユーザーを選択して、[削除] をクリックしてグループからユーザーを削除できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ユーザー名：選択したグループのメンバーである各ユーザーの名前。 ■ 名：グループ内の各ユーザーの名。 ■ 姓：グループ内の各ユーザーの姓。
権限	<p>ユーザー グループに関連付けられているロールの権限を表示します。ロールを追加または削除するには、選択または選択解除されたロールのみを表示するか、または特定のロールを検索し、[編集] アイコンをクリックします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ロール名：選択したユーザー グループに割り当てられているロールを示します。 ■ ロールの説明：選択したユーザー グループを作成したときに定義した説明。 ■ オブジェクト階層：特定のロールを保持している間、グループに割り当てられているオブジェクト階層の名前。 ■ オブジェクト：選択した階層内でユーザー グループがアクセス可能なオブジェクトの数。

アクセス コントロール：ユーザー グループ、ユーザー グループの追加または編集

ユーザー、ロール、オブジェクトなど、ユーザー グループの詳細を表示および変更できます。

ユーザー グループを追加または編集できる場所

ユーザー グループを追加するには、[管理] - [アクセス コントロール] を選択して、[ユーザー グループ] タブの [追加] アイコンをクリックします。ユーザー グループを選択し、[編集] アイコンをクリックすることにより、ユーザー グループを編集できます。

表 4-182. ユーザー グループの追加または編集 - 名前と説明

オプション	説明
グループ名	手動で作成されたか、シングル サインオン サーバからインポートされたか、または別のマシン上に存在する LDAP データベースからインポートされたユーザー グループの名前。
説明	目的を示した、ユーザー グループの説明。

表 4-183. ユーザー グループの追加または編集 - [メンバーと権限の割り当て] ページ

オプション	説明
メンバー	ユーザー グループに関連付けられているメンバーを選択します。
オブジェクト	<p>ロールは、グループのユーザーがシステムで実行できるアクションを決定します。[ロールの選択] ドロップダウン メニューからロールを選択して、[このロールをユーザーに割り当てます] チェック ボックスを選択します。複数のロールをユーザー グループに関連付けることができます。</p> <p>このロールを割り当てたときにグループのユーザーがアクセスできるオブジェクトを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [オブジェクト階層の選択]: オブジェクトのグループを表示します。このリストでオブジェクトを選択すると、階層内のすべてのオブジェクトが選択されます。 ■ [オブジェクトの選択]: オブジェクト階層内の特定のオブジェクトを選択するには、下矢印をクリックしてオブジェクトのリストを展開します。たとえば、アダプタ インスタンス階層を展開して、1 つまたは複数のアダプタを選択します。 ■ [システムのすべてのオブジェクトへのアクセスを許可]: グループのユーザーがシステム内のすべてのオブジェクトにアクセスできるようにするには、このチェック ボックスを選択します。

アクセス コントロール: ユーザー グループのインポート

シングル サインオン サーバまたは別のマシン上の LDAP データベースからユーザー グループをインポートし、vRealize Operations Manager でそれらのグループを使用できるようにします。If you

ユーザー グループのインポート場所

ユーザー グループをインポートするには、[管理] - [アクセス コントロール] を選択して、[ユーザー グループ] タブの [グループのインポート] アイコンをクリックします。

[ユーザー グループのインポート] ページに表示されるオプションは、選択した認証ソースによって異なります。

シングル サインオン サーバからユーザー グループをインポートする場合は、vRealize Operations Manager からログアウトして再びログインし、シングル サインオン サーバとユーザーおよびユーザー グループ メンバーシップを同期します。

表 4-184. [ユーザー グループのインポート] ワークスペース - [ユーザー グループのインポート] ページ - LDAP ソースのオプション

オプション	説明
インポート元	ユーザー グループをインポートするためのソースとして構成されたホスト マシン。これらのオプションは、LDAP ソースのホスト マシンを選択したときに表示されます。
ユーザー名	vRealize Operations Manager インスタンスにユーザー グループをインポートするためのソース認証情報のユーザー名。

表 4-184. [ユーザー グループのインポート] ワークスペース - [ユーザー グループのインポート] ページ - LDAP ソースのオプション（続き）

オプション	説明
パスワード	vRealize Operations Manager インスタンスにユーザー グループをインポートするためのソース認証情報のパスワード。
検索文字列	ユーザー グループの検索を起動します。
詳細	<p>詳細なインポート設定を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ グループ検索基準。LDAP グループを検索するための検索基準。指定しなかった場合、vRealize Operations Manager はデフォルトの検索パラメータ (<code>(objectClass=group)</code> (<code>objectClass=groupOfNames</code>)) を使用します。 ■ メンバー属性。メンバーのリストを含むグループ オブジェクトの属性の名前。指定しなかった場合、vRealize Operations Manager はデフォルト メンバーを使用します。 ■ ユーザー検索基準。LDAP ユーザーを検索してキャッシュするためにメンバー フィールドを使用する検索基準。key=value ペアのセットを、<code>((key1=value1)(key2=value2))</code> の形式で入力します。指定しなかった場合、vRealize Operations Manager は各ユーザーを個別に検索します。この操作には時間がかかる場合があります。 ■ メンバー一致フィールド。グループ オブジェクトのメンバー エントリと一致するユーザー オブジェクトの属性名。指定しなかった場合、vRealize Operations Manager はメンバー エントリを識別名として扱います。 ■ LDAP コンテキスト属性。vRealize Operations Manager が LDAP コンテキスト環境に適用する属性。key=value ペアのセットをカンマで区切って、<code>java.naming.referral=ignore,java.naming.ldap.deleteRDNfalse</code> のように入力します。
グループ名	見つかったユーザー グループを表示します。インポートするには、各ユーザー グループのチェック ボックスをクリックします。

表 4-185. [ユーザー グループのインポート] ワークスペース - [ユーザー グループのインポート] ページ - シングルサインオン ソースのオプション

オプション	説明
インポート元	ユーザー グループをインポートするためのソースとして構成されたホスト マシン。
ドメイン名	vRealize Operations Manager インスタンスにユーザー グループをインポートするためのソース認証情報のユーザー名。
結果の最大表示件数	表示されるグループの数を決定します。
検索プリフィックス	検索を絞り込むための検索プリフィックスを入力します。
グループ名	ユーザー グループのリストを表示します。[グループ名] チェック ボックスを選択して、表示されているすべてのユーザー グループをインポートするか、またはインポートする各ユーザー グループの横にあるチェック ボックスを選択します。

表 4-186. ユーザー グループのインポート ワークスペース - [ロールおよびオブジェクト] ページ

オプション	説明
ロールの選択	使用可能なロールをドロップダウン メニューに表示します。
グループへのこのロールの割り当て	ロールは、グループのユーザーがシステムで実行できるアクションを決定します。[ロールの選択] ドロップダウン メニューからロールを選択して、[このロールをユーザーに割り当てます] チェック ボックスを選択します。複数のロールをユーザー グループに関連付けることができます。
オブジェクト階層の選択	<p>このロールを割り当てたときにグループのユーザーがアクセスできるオブジェクトを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [オブジェクト階層の選択]: オブジェクトのグループを表示します。このリストでオブジェクトを選択すると、階層内のすべてのオブジェクトが選択されます。 ■ [オブジェクトの選択]: オブジェクト階層内の特定のオブジェクトを選択するには、下矢印をクリックしてオブジェクトのリストを展開します。たとえば、アダプタ インスタンス階層を展開して、1 つまたは複数のアダプタを選択します。 ■ [システムのすべてのオブジェクトへのアクセスを許可]: グループのユーザーがシステム内のすべてのオブジェクトにアクセスできるようにするには、このチェック ボックスを選択します。

アクセス コントロール : [ロール] タブ

vRealize Operations Manager では、アクションを実行し、機能およびオブジェクトを表示するための固有のロールをユーザーに割り当てることができます。ロールベース アクセスにおいて、ユーザーはその権限で許されているアクションのみを実行できます。

ユーザー ロールを管理する場所

ユーザー ロールを管理するには、[管理] - [アクセス コントロール] を選択して、[ロール] タブをクリックします。

サマリ グリッドでロールを選択し、[ロール] ツールバーで [編集] アイコンをクリックすることにより、ロールに関する詳細を表示および編集することができます。

表 4-187. アクセス制御ロールのサマリ グリッド

オプション	説明
ロール ツールバー	<p>ロールを管理するには、ツールバー上のアイコンを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [追加] アイコン。[ロールの作成] ダイアログ ボックスで、ユーザー ロールを追加し、ロールの名前と説明を入力します。 ■ [編集] アイコン。[ロールの編集] ダイアログ ボックスで、選択されているユーザー ロールの編集と、ロールの詳細の変更を行います。 ■ [クローン作成] アイコン。選択したユーザー ロールのクローンを作成します。 ■ [削除] アイコン。ユーザー ロールを削除します。
ロール名	特定レベルのユーザーに適用するロールの名称。たとえば、基本ユーザーに user、管理権限を持ったユーザーに Administratorなどを適用できます。
ロールの説明	目的を示した、ロールの説明。

選択したロールに関連付けられたユーザー アカウントとユーザー グループの詳細を [詳細] ペインに表示できます。

表 4-188. アクセス制御ロールの詳細ペイン

オプション	説明
ユーザー アカウント	<p>選択したロールに割り当てられているユーザー。このペインの情報は、ユーザーの作成時に入力されたデータ、またはユーザーとともにインポートされたデータに基づいています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 名：このロールが割り当てられている各ユーザーの名を示します。 ■ 姓：このロールが割り当てられている各ユーザーの姓を示します。 ■ vRealize Operations Manager のログイン ユーザー名（スペースなし） ■ 電子メール：このロールが割り当てられる各ユーザーの電子メール アドレスを示します。
ユーザー グループ	<p>選択したロールに割り当てられているユーザー グループ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ グループ名：選択したロールに関連付けられている各グループの名前。 ■ メンバー：各グループのメンバー数。
権限	<p>管理、コンテンツ、および環境の 3 つのカテゴリに従って、ロールに割り当てられている権限を表示します。各カテゴリのツリーを展開して、割り当てられているすべての権限を表示します。</p> <p>[編集] アイコンをクリックして、ロールに割り当てられている権限を編集できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [すべて展開] ボタンをクリックして、3 つのすべてのカテゴリのツリーを展開し、チェック ボックスを選択して、選択されたロールの権限を適用します。 ■ 使用可能なすべての権限を選択したロールに割り当てるには、[管理アクセス - すべての権限] チェック ボックスを選択します。

データストアの使用されていないスナップショットの削除エクスプレス アクションと 仮想マシンの使用されていないスナップショットの削除エクスプレス アクションが表示されますが、これらは最初の推奨事項がこのアクションと関連付けられているアラートからユーザー インターフェイスでのみ実行できます。これらのアクションの実行には REST API を使用できます。

パワーオフ可の仮想マシンのメモリの設定、パワーオフ可の仮想マシンの CPU 数の設定、および パワーオフ可の仮想マシンの CPU 数とメモリの設定 の各アクションも表示されませんが、アラートの推奨事項においては表示されます。これらのアクションは、パワーオフ可 フラグが真に設定されているアクションを自動化するために使用します。

アクセス コントロール：[パスワード ポリシー] タブ

vRealize Operations Manager のセキュリティ保護を確実にするには、ユーザーのパスワードを管理する必要があります。アカウント ロックアウト、パスワード強度、パスワード変更ポリシーに使用する基準を決定します。ユーザー セッションが 30 分間非アクティブになると、セッションはタイムアウトとなり、ユーザーは vRealize Operations Manager に再度ログインする必要があります。

パスワード ポリシーを管理するには

ユーザー アクセス コントロールのパスワード ポリシーを管理するには、[管理] - [アクセス コントロール] を選択して、[パスワード ポリシー] タブをクリックします。

アカウント ロックアウト

アカウント ロックアウトが有効化されているかどうかと、アカウントがロックされるまでに許可されるログイン 試行回数を示します。 アカウント ロックアウト ポリシーはデフォルトで有効になっています。

パスワード強度

ユーザーにパスワードの強化を求めるポリシーが有効化されているかどうかと、強力なパスワードに必要な最小文字数を示します。パスワード強度ポリシーはデフォルトで有効になっています。

パスワードの変更

ユーザーにパスワードの変更を求めるポリシーが有効化されているかどうかと、パスワードの期限が切れる頻度、ユーザーに警告が表示されるかどうかを示します。アカウントのパスワード変更ポリシーはデフォルトで有効になっています。

パスワード ポリシーの変更

[編集] をクリックして、パスワード ポリシーを変更できます。

表 4-189. アクセス コントロールのパスワード編集ポリシーの設定

オプション	説明
アカウント ロックアウト	<p>ユーザー アカウントをロックするように設定を変更します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アカウント ロックアウト ポリシーのアクティブ化。ユーザー アカウントをロックするポリシーを有効化します。スーパー管理者ユーザーの場合、アカウント ロックアウト ポリシーはデフォルトで有効化され、無効化できません。スーパー管理者ユーザーのアカウントは、約 1 時間ロックされた後、ロック解除されます。 ■ ロックアウトまでのログイン試行失敗回数。アカウントがロックされるまでに、ユーザーが vRealize Operations Manager へのログインを試行できる回数を示します。デフォルトの試行回数は 7 回、ログインの入力許容時間枠は 45 秒です。
パスワード強度	<p>ユーザーが強力なパスワードを作成するために必要な設定を変更します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ パスワード強度ポリシーのアクティブ化。選択すると、パスワードの強化をユーザーに求めるポリシーが有効になります。 ■ 最小パスワード文字数。ユーザー パスワードに必要な文字数を示します。デフォルトの長さは 8 文字です。 ■ パスワードには数値が含まれている必要があります。文字と数字を組み合わせて入力する必要があります。 ■ パスワードはユーザー名とは異なる必要があります。セキュリティ保護のため、自分のユーザー名をパスワードに使用しないでください。 ■ パスワードには少なくとも大文字を 1 つ、小文字を 1 つ含める必要があります。選択すると、パスワードに 1 つ以上の大文字を含める必要があります。 ■ パスワードには特殊文字を含める必要があります。選択すると、1 つ以上の特殊文字を含める必要があります。次の特殊文字があります： !@#\$%^&*+=
パスワードの変更	<p>ユーザーがパスワードを変更するために必要な設定を変更します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ パスワード変更ポリシーのアクティブ化。特定の間隔でパスワードの変更をユーザーに求めるポリシーを有効化します。 ■ パスワードの有効期限は、90 日ごとに切れます。ユーザーはパスワードの有効期限が切れる 5 日前に通知を受け取ります。 ■ 期限切れになる 5 日前にユーザーに警告します。パスワードが期限切れになることを vRealize Operations Manager がユーザーに通知する時期を示します。デフォルトは、パスワードが期限切れになる 5 日前です。

vRealize Operations Manager の認証ソース

vRealize Operations Manager では、別のマシン上にあるユーザーおよびユーザー グループの情報をインポートおよび認証するために、プラットフォーム非依存プロトコルである Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) とシングル サインオンの 2 つの認証ソースが使用されます。

認証ソースを管理する場所

認証ソースを管理するには、[管理] を選択して [認証ソース] をクリックします。

表 4-190. 認証ソースのツールバーとデータ グリッド

オプション	説明
認証ソースのツールバー	<p>認証ソースを管理するには、ツールバー上のアイコンを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [追加] アイコン：[ユーザーおよびグループのインポートのソースを追加] ダイアログ ボックスで、認証ソースを追加し、ソースの情報を指定します。 ■ [編集] アイコン：[ソースの編集] ダイアログ ボックスで、選択された認証ソースを編集し、詳細を変更します。 ■ [削除] アイコン。認証ソースを削除します。 ■ [ユーザー グループの同期] アイコン。選択した LDAP ユーザー グループ内の LDAP ユーザーを同期させます。
ソースの表示名	認証ソースに割り当てる名前。
ソース タイプ	<p>ユーザー アカウントの認証データベースが存在するソース マシンにアクセスするための、ディレクトリ サービス アクセス テクノロジーの種類を示します。次のオプションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Open LDAP：ユーザー アカウントをインポートするために別のマシン上の LDAP データベースへのアクセスを提供する、プラットフォームに依存しないプロトコル。 ■ その他：Linux や Mac マシン上の LDAP データベースからユーザー アカウントをインポートするために使用されるその他の LDAP ベースのディレクトリ サービス (Novel、OpenDJ など) を指定します。 ■ SSO SAML：Web ブラウザでのシングル サインオンを可能にするオープン標準のデータ形式。
ホスト	ユーザー データベースが存在するホスト マシンの名前または IP アドレス。
ポート	インポートに使用されるポート。
ベース DN	<p>ユーザー検索用のベース識別名。vRealize Operations Manager は、ベース DN の配下のユーザーのみを検索対象とします。ベース DN はインポートされた識別名 (DN) の基本エントリであり、ユーザー名のベース エントリとなります。ベース DN があれば、ユーザー アカウントへのフル パスなどのその他の関連情報を指定したり、関連ドメイン コンポーネントを含めたりする必要はありません。vRealize Operations Manager ではベース DN が自動で入力されますが、管理者はベース DN を確認してから LDAP 設定を保存する必要があります。</p>
自動同期	選択されている場合は、vRealize Operations Manager はインポートされた LDAP ユーザーをユーザー グループにマップできます。
最後の同期	最後に同期が行われた日時。

認証ソース：ユーザーおよびグループのインポート用の認証ソースの追加

別のマシンにあるユーザー アカウント情報をインポートするときは、ソース マシンからユーザー アカウントをインポートするために使用する基準を定義する必要があります。

認証ソースを追加または編集できる場所

[管理] - [認証ソース] を選択し、[追加] アイコンをクリックして、認証ソースを追加または編集できます。[編集] アイコンをクリックして、認証ソースを編集できます。

表 4-191. 認証ソース、ユーザーおよびグループのインポート用のソースの追加

オプション	説明
ソースの表示名	認証ソースに割り当てる名前。
ソース タイプ	<p>ユーザー アカウントのデータベースが存在するソース マシンにアクセスするための、ディレクトリ サービス アクセス テクノロジーの種類を表します。LDAP とシングル サインオンの 2 つのタイプのデータベースがあります。次のオプションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SSO SAML : ユーザーが複数のアプリケーションに対してシングル サインオンを実行できるようにするための、Web ブラウザのシングル サインオン用の XML ベースの標準。 ■ Open LDAP : ユーザー アカウントをインポートするために別のマシン上の LDAP データベースへのアクセスを提供する、プラットフォームに依存しないプロトコル。 ■ その他 : Linux/Mac マシン上の LDAP データベースからユーザー アカウントをインポートするために使用されるその他の LDAP ベースのディレクトリ サービス (Novel、OpenDJ など) を指定します。

表 4-192. 認証ソースの [ユーザーおよびグループのインポートのソースを追加] - [SSO SAML] が選択されている場合に使用可能なオプション

名前	説明
ホスト	シングル サインオンのユーザー サーバが存在するホスト マシンの名前または IP アドレス。
ポート	シングル サインオンのリスン ポート。デフォルトでは、このポートは 443 に設定されます。
ユーザー名	シングル サインオン ホスト マシンにログインできるユーザー アカウントの名前。
パスワード	シングル サインオン ホスト マシンにログインできるユーザー アカウントのパスワード。
今後の構成のために管理者ロールを vRealize Operations Manager に付与しますか？	<p>シングル サインオン ソースを作成すると、シングル サインオン サーバに新しい vRealize Operations Manager ユーザー アカウントが作成されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ vRealize Operations Manager のセットアップが変更された場合に SSO ソースの構成に使用されるように、vRealize Operations Manager に管理ロールを付与するには、[はい] を選択します。 ■ [いいえ] を選択していて、vRealize Operations Manager のセットアップが変更された場合、SSO ソースを再登録するまで SSO ユーザーはログインできなくなります。
vRealize Operation のシングル サインオン URL に自動的にリダイレクトしますか？	<p>シングル サインオン ソースを構成した後は、ユーザーは vCenter SSO サーバにリダイレクトされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [はい] を選択すると、ユーザーは認証のためにシングル サインオン サーバにリダイレクトされます。 ■ [いいえ] を選択すると、ユーザーは vRealize Operations Manager のログイン ページでサインインする必要があります。

表 4-192. 認証ソースの [ユーザーおよびグループのインポートのソースを追加] - [SSO SAML] が選択されている場合に使用可能なオプション （続き）

名前	説明
現在のソースを追加した後、シングル サインオン ユーザー グループをインポートしますか？	<p>シングル サインオン ソースをセットアップしている場合は、シングル サインオン ユーザーが自分のシングル サインオン権限でシステムにアクセスできるように、ユーザーとユーザー グループを vRealize Operations Manager にインポートします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [はい] を選択すると、SSO ソースのセットアップ完了時に、ユーザー グループをインポートできるように、ウィザードが [ユーザー グループのインポート] ページにリダイレクトします。 ■ ユーザー アカウントをインポートする場合、またはユーザー グループを後の段階でインポートする場合は、[いいえ] を選択します。
詳細	システムでロード バランサーを使用している場合は、ロード バランサーの IP アドレスを入力します。
テスト	指定された認証情報を使用してホスト マシンに到達できるかをテストします。

表 4-193. 認証ソースの [ユーザーおよびグループのインポートのソースを追加] - [Open LDAP]、[Active Directory]、または [その他] が選択されている場合に使用可能なオプション

オプション	説明
統合モードの基本設定	<p>LDAP インポート ソースを vRealize Operations Manager のインスタンスと統合するには、基本設定を適用します。</p> <p>基本統合モードを使用して LDAP データベースが存在するホスト マシンを vRealize Operations Manager に検出させ、ユーザーの検索に使用されるベース識別名 (ベース DN) を設定します。vRealize Operations Manager がホストとベース DN の詳細を表示するために使用するドメインの名前とサブドメインを指定するとともに、LDAP ホスト マシンにログインできるユーザーの名前とパスワードを指定します。</p> <p>基本モードでは、vRealize Operations Manager は DNS サーバからホストとポートの取得を試み、SSL/TLS が有効になったサーバに指定されている設定情報とともにドメインのグローバル カタログとドメイン コントローラを取得します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ドメイン / サブドメイン。LDAP ユーザー アカウントのドメイン情報。 ■ SSL/TLS の使用。選択されている場合は、LDAP データベースからユーザーをインポートするときに、vRealize Operations Manager はセキュア ソケット レイヤ/トランスポート レイヤ セキュリティ (SSL/TLS) プロトコルを使用して安全な通信を確立します。SSL/TLS 証明書をインストールする必要はありません。代わりに、vRealize Operations Manager から、サムプリントを表示して確認することと、LDAP サーバ証明書を受け入れることを求められます。証明書を受け入れると、LDAP 通信が開始されます。 ■ ユーザー名。LDAP ホスト マシンにログインできるユーザー アカウントの名前。 ■ パスワードのリセット。LDAP ホスト マシンにログインできるユーザー アカウントのパスワードをリセットします。 ■ 構成されたグループのユーザー メンバーシップを自動的に同期する。選択されている場合は、vRealize Operations Manager はインポートされた LDAP ユーザーをユーザー グループにマップできます。 ■ ホスト。LDAP ユーザー データベースが存在するホスト マシンの名前または IP アドレス。 ■ ポート。インポートに使用されるポート。389 番ポート (SSL/TLS を使用していない場合)、636 番ポート (SSL/TLS を使用している場合)、またはユーザーが選択した別のポート番号を使用します。グローバル カタログ ポートは、非 SSL/TLS の場合 3268、SSL/TLS の場合 3269 です。 ■ ベース DN。ユーザー検索用のベース識別名。vRealize Operations Manager は、ベース DN の配下のユーザーのみを検索対象とします。ベース DN はインポートされた識別名 (DN) の基本エントリであり、ユーザー名のベース エントリとなります。ベース DN があれば、ユーザー アカウントへのフル パスなどのその他の関連情報を指定したり、関連ドメイン コンポーネントを含めたりする必要はありません。vRealize Operations Manager ではベース DN が自動で入力されますが、管理者はベース DN を確認してから LDAP 設定を保存する必要があります。 ■ 共通名。ユーザー名を特定するために使用する LDAP 属性。Active Directory のデフォルトの属性は <i>userPrincipalName</i> です。
統合モードの詳細設定	<p>LDAP インポート ソースを vRealize Operations Manager のインスタンスと統合するには、詳細設定を適用します。</p> <p>ホスト名とベース識別名 (ベース DN) を手動で提供して vRealize Operations Manager にユーザーをインポートさせるには、詳細統合モードを使用します。LDAP ホスト マシンにログインできるユーザーの名前とパスワードを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ホスト。LDAP ユーザー データベースが存在するホスト マシンの名前または IP アドレス。 ■ SSL/TLS の使用。選択されている場合は、LDAP データベースからユーザーをインポートするときに、vRealize Operations Manager はセキュア ソケット レイヤ/トランスポート レイヤ セキュリティ (SSL/TLS) プロトコルを使用して安全な通信を確立します。SSL/TLS 証明書をインストールする必要はありません。代わりに、vRealize Operations Manager から、サムプリントを表示して確認することと、LDAP サーバ証明書を受け入れることを求められます。証明書を受け入れると、LDAP 通信が開始されます。

表 4-193. 認証ソースの [ユーザーおよびグループのインポートのソースを追加] - [Open LDAP]、[Active Directory]、または [その他] が選択されている場合に使用可能なオプション （続き）

オプション	説明
	<ul style="list-style-type: none"> ■ ベース DN。ユーザー検索用のベース識別名。vRealize Operations Manager は、ベース DN の配下のユーザーのみを検索対象とします。ベース DN はインポートされた識別名 (DN) の基本エントリであり、ユーザー名のベース エントリとなります。ベース DN があれば、ユーザー アカウントへのフル パスなどのその他の関連情報を指定したり、関連ドメイン コンポーネントを含めたりする必要はありません。vRealize Operations Manager ではベース DN が自動で入力されますが、管理者はベース DN を確認してから LDAP 設定を保存する必要があります。 ■ ユーザー名：LDAP ホスト マシンにログインできるユーザー アカウントの名前。 ■ パスワードのリセット。LDAP ホスト マシンにログインできるユーザー アカウントのパスワードをリセットします。 ■ 構成されたグループのユーザー メンバーシップを自動的に同期する。選択されている場合は、vRealize Operations Manager はインポートされた LDAP ユーザーをユーザー グループにマップできます。 ■ 共通名。ユーザー名を特定するために使用する LDAP 属性。Active Directory のデフォルトの属性は <code>userPrincipalName</code> です。 ■ ポート。インポートに使用されるポート。389 番ポート (SSL/TLS を使用していない場合)、636 番ポート (SSL/TLS を使用している場合)、またはユーザーが選択した別のポート番号を使用します。グローバル カタログ ポートは、非 SSL/TLS の場合 3268、SSL/TLS の場合 3269 です。
検索基準	<p>検索基準設定を表示します。</p> <p>vRealize Operations Manager は検索基準の一部を自動的に表示しますが、管理者は設定を検証し、LDAP タイプのプロパティどおりに設定値が正しいことを確認する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ グループ検索基準。LDAP グループを検索するための検索基準。指定しなかった場合、vRealize Operations Manager はデフォルトの検索パラメータ (<code>((objectClass=group)(objectClass=groupOfNames))</code>) を使用します。 ■ メンバー属性。メンバーのリストを含むグループ オブジェクトの属性の名前。指定しなかった場合、vRealize Operations Manager はデフォルト メンバーを使用します。 ■ ユーザー検索基準。LDAP ユーザーを検索してキャッシュするためにメンバー フィールドを使用する検索基準。key=value ペアのセットを、<code>((key1=value1)(key2=value2))</code> の形式で入力します。指定しなかった場合、vRealize Operations Manager は各ユーザーを個別に検索します。この操作には時間がかかる場合があります。 ■ メンバー一致フィールド。グループ オブジェクトのメンバー エントリと一致するユーザー オブジェクトの属性名。指定しなかった場合、vRealize Operations Manager はメンバー エントリを識別名として扱います。 ■ LDAP コンテキスト属性。vRealize Operations Manager が LDAP コンテキスト環境に適用する属性。key=value ペアのセットをカンマで区切って、<code>java.naming.referral=ignore,java.naming.ldap.deleteRDNfalse</code> のように入力します。
テスト	<p>指定された認証情報を使用してホスト マシンに到達できるかをテストします。接続テストが正常に完了しても、検索機能を使用するユーザーは LDAP ソースにおける読み取り権限を所有している必要があります。このテストはベース DN または共通名のエントリの正確さを確認するものではありません。</p>

vRealize Operations Manager のユーザーおよび環境の監査

vRealize Operations Manager 環境で発生した一連のアクティビティの証拠として、ドキュメントを提出することが必要になる場合があります。監査では、ユーザー、オブジェクト、および収集された情報を確認できます。保護が必要な機密データを含むビジネス上重要なアプリケーションなどの監査要件を満たすために、ユーザーのアクティビティ、ユーザーに割り当てられたオブジェクト アクセス権限、環境内のオブジェクト数およびアプリケーション数に関するレポートを生成できます。

監査レポートは、環境内のオブジェクトおよびユーザーのトレーサビリティを提供します。

ユーザー アクティビティ監査

このレポートを実行すると、ユーザー アクティビティ（ログイン、クラスタおよびノードのアクション、システム パスワードの変更、証明書のアクティブ化、ログアウトなど）の範囲を把握できます。

ユーザー権限の監査

このレポートを生成すると、ユーザー アカウントとそのロール、アクセス グループ、およびアクセス権限の範囲を把握できます。

システム監査

このレポートを実行すると、環境の規模を把握できます。このレポートには、構成済み/収集オブジェクトの数、アダプタのタイプや数、構成済み/収集メトリック、スーパー メトリック、アプリケーション、および既存の仮想環境オブジェクトが表示されます。このレポートは、環境内のオブジェクト数がサポートされている制限を超えているかどうかを判断するのに役立ちます。

システム コンポーネント監査

このレポートを実行すると、環境内のすべてのコンポーネントのバージョンのリストが表示されます。

環境を監査する理由

vRealize Operations Manager の監査は、次のような状況でデータ センター管理者の役に立ちます。

- 変更を開始した認証済みユーザーまたは変更を実行するジョブをスケジュール設定した認証済みユーザーの、各構成の変更を追跡する必要があります。たとえば、特定のオブジェクト識別子に関連付けられたオブジェクトが特定の時刻にアダプタによって変更されると、データ センター管理者は、この変更を開始した認証済みユーザーのプリンシパル識別子を特定できます。
- 一定期間にデータ センターを変更したユーザーを追跡して、特定の日に誰が何を変更したのかを調べる必要があります。vRealize Operations Manager にログインしてジョブを実行した認証済みユーザーのプリンシパル識別子を特定し、変更を開始したユーザーを確認できます。
- 一定期間に特定のユーザーの影響を受けたオブジェクトを調べる必要があります。
- イベントの関係と原因を視覚化できるように、データ センターで発生したイベントを関連付けて、これらのイベントを重ね合わせて表示する必要があります。イベントには、ログイン試行、システムの起動およびシャットダウン、アプリケーション障害、ウォッチドッグの再起動、アプリケーションの構成の変更、セキュリティ ポリシーの変更、要求、応答、成功のステータスなどが含まれます。
- 環境にインストールされているコンポーネントで最新バージョンが実行されていることを確認する必要があります。

ユーザー アクティビティ監査

ユーザー アクティビティ レポートは、vRealize Operations Manager インスタンスのユーザー アクティビティ（ユーザーがログインしたタイミング、クラスタおよびノードで実行したアクション、システム パスワードに対して行った変更、証明書をアクティブ化したタイミング、ログアウトしたタイミングなど）の範囲を把握するのに役立ちます。

ユーザー アクティビティを監査できる場所

ユーザー アクティビティを監査するには、[管理] を選択して、[監査] をクリックします。環境内でユーザーが実行したアクティビティがページに表示されます。

表 4-194. ユーザー アクティビティ監査アクション

オプション	説明
再ロード	ページに表示されるユーザー アクティビティのリストを更新します。
ダウンロード	ユーザー アクティビティ監査情報を PDF または XLS 形式のレポートにダウンロードします。
構成	<p>セキュリティ監査要件を満たすために、ユーザー アクティビティ ログを外部 syslog サーバに送信するように設定を構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ログを外部 syslog サーバに出力。選択すると、vRealize Operations Manager から個別のサーバマシンにログが送信されます。 ■ IP アドレス/ホスト名。syslog サーバの ID です。 ■ ポート。監査情報を外部サーバに送信するために使用される vRealize Operations Manager のポートです。
日付範囲	選択した時間数、日数、週数、月数、年数、または 2 つの特定の日時間に基づいて、過去に実行されたユーザー アクティビティのリストが表示されます。
検索	レポート内の特定の単語を検索します。

ユーザー権限の監査

ユーザー権限監査レポートには、vRealize Operations Manager インスタンス内のローカル ユーザーとインポートされた LDAP ユーザーの概要、および各ユーザーが属するグループのリストが表示されます。このレポートは、環境内のユーザー アカウントとそのロール、アクセス グループ、アクセス権限の範囲を把握するのに役立ちます。

このレポートには、各ローカル ユーザーとインポートされた LDAP ユーザーに関連付けられたアクセス グループと、各アクセス グループのユーザーに付与されているアクセス権限が表示されます。このレポートには、vCenter Server のユーザー、ロール、権限は含まれません。

ユーザーが特定のユーザー グループのメンバーの場合、関連付けられたアクセス グループによって、構成、ダッシュボード、およびテンプレートへのアクセス権、または、[管理] などのユーザー インターフェイス内の特定のナビゲーション領域へのアクセス権がユーザーに付与される場合があります。アクセス グループに関連付けられたアクセス権には、ダッシュボードの追加、編集、削除や、オブジェクトの表示、構成、管理などの、各アクセス グループに対するアクションが含まれます。

ユーザー権限を監査できる場所

ユーザー権限を監査するには、[管理] を選択し、[監査] をクリックして、[ユーザー権限監査] タブをクリックします。ユーザーに割り当てられている権限と、それに関連付けられているグループおよびアクセス権限が、ページに表示されます。

表 4-195. ユーザー権限監査アクション

オプション	説明
再ロード	ページに表示されるユーザー権限リストを更新します。
ダウンロード	ユーザー権限の監査情報を PDF または XLS 形式でレポートにダウンロードします。

vRealize Operations Manager のシステム監査

システム監査レポートには、vRealize Operations Manager インスタンス内のオブジェクト数、メトリック数、スーパー メトリック数、アプリケーション数、カスタム グループ数の概要が表示されます。このレポートにより、環境の規模を把握できます。

システム監査レポートには、vRealize Operations Manager で管理されるオブジェクトのタイプと数が表示されます。レポートされるオブジェクトとして、構成済みおよび収集データ、オブジェクトのタイプ、アダプタのオブジェクト数、構成済みおよび収集中のメトリック、スーパー メトリック、vRealize Operations Manager によって生成されたメトリック、使用アプリケーション数、カスタム グループ数があります。

このレポートを使用して、環境内のオブジェクトの数がサポートされている上限を超えているかどうかを判定できます。

システムを監査できる場所

環境内のオブジェクト、メトリック、アプリケーション、カスタム グループを監査するには、[管理] を選択し、[監査] をクリックして、[システム監査] タブをクリックします。オブジェクトとオブジェクトに関連付けられた数がレポートに表示されます。

表 4-196. システム監査アクション

オプション	説明
再ロード	ページに表示されているオブジェクトのリストを更新します。
ダウンロード	システム情報を PDF または XLS 形式でレポートにダウンロードします。

システム コンポーネント監査

システム コンポーネント監査レポートには、システムにインストールされているすべてのコンポーネントのバージョンのリストが表示されます。

システム コンポーネントの監査場所

システム コンポーネントを監査するには、[管理] を選択し、[監査] をクリックして、[システム コンポーネント監査] タブをクリックします。環境にインストールされているコンポーネントのリストがページに表示されます。

表 4-197. システム コンポーネント監査アクション

オプション	説明
ダウンロード	新しいブラウザ ウィンドウにバージョン情報が表示されます。

vRealize Operations Manager でのユーザーの環境設定

ユーザーの環境設定を構成して、vRealize Operations Manager の表示オプション（画面や健全性チャートの色、表示するメトリックやグループの数、およびシステム時刻をホスト マシンと同期するかどうかなど）を決定します。

ユーザーの環境設定を構成するには、一番上のツールバーで、[管理] をクリックし、[ユーザーの環境設定] をクリックします。ダイアログ ボックスにユーザーの環境設定が表示されます。

表 4-198. ユーザーの環境設定

オプション	説明
表示	<p>配色、更新、および表示するメトリックや根本原因グループの数を構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 配色。表示を [明るい] または [暗い] に設定します。 ■ 表示する重要なメトリック数。表示するメトリックの数を設定します。 ■ 表示する根本原因グループの数。表示する根本原因グループの数を設定します。 ■ フォントレポート用のフォントを選択します。
時刻	<p>vRealize Operations Manager インスタンスに使用する時刻を同期し、vRealize Operations Manager がホスト マシンと通信するときに、更新された時刻を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ブラウザの時刻。ユーザー インターフェイスに表示されるすべての日付と時刻で、ローカル ブラウザのタイムゾーン設定が使用されます。 ■ ホストの時刻。ユーザー インターフェイスに表示されるすべての日付と時刻で、ホスト マシンのタイムゾーンが使用されます。 ■ アプリケーションのヘッダに更新時刻を表示します。vRealize Operations Manager ユーザー インターフェイスのトップ レベル ヘッダに更新された時刻が表示されます。更新されたタイムスタンプが更新ボタンの左側に表示されます。ダッシュボードなどの他の機能では、更新された時刻を使用して、特定の間隔でデータが表示されます。
アカウント	ユーザー アカウントのパスワードを変更します。

vRealize Operations Manager のパスワードと証明書

vRealize Operations Manager の安全な運用のためには、パスワードや認証証明書の保守が必要になる場合があります。

- パスワードは、ユーザーが製品のユーザー インターフェイスにアクセスするため、またはクラスタ ノードのコンソール セッションにアクセスするためのものです。
- 認証証明書は、vRealize Operations Manager 内で、または vRealize Operations Manager と他のシステムとの間で、マシン間通信を保護するためのものです。

vRealize Operations Manager 管理者パスワードの変更

デプロイのセキュリティ保護または保守の一環として、vRealize Operations Manager 管理者パスワードを変更する必要が生じることがあります。

手順

- 1 Web ブラウザで、vRealize Operations Manager 管理インターフェイス (*master-node-name-or-ip-address/admin*) に移動します。
- 2 マスタ ノードの管理者のユーザー名とパスワードでログインします。
- 3 右上にある [admin] ドロップダウン メニューを選択して、[管理者パスワードの変更] をクリックします。
- 4 現在のパスワードを入力し、新しいパスワードを 2 回入力して正確性を確保します。

注： 管理者のユーザー名 admin は変更できません。

- 5 [OK] をクリックします。

vApp または Linux クラスタ上での vRealize Operations Manager 管理者パスワードのリセット

管理者アカウントのパスワードをなくした場合は、パスワードをリセットする必要があります。

組み込み管理者アカウントの vRealize Operations Manager パスワードをなくしたときは、vApp または Linux クラスタ上で、次の手順に従ってパスワードをリセットします。

前提条件

この手順には root アカウントの認証情報が必要です。

- vRealize Operations Manager vApp 展開では、仮想アプリケーションのコンソールに初めてログインする際に root パスワードの設定が求められます。
- vRealize Operations Manager コンソールの root パスワードには、vRealize Operations Manager マスター ノードの構成時に設定した 管理者アカウントのパスワードと異なるものを設定することができます。

手順

- 1 マスター ノードのコマンド ライン コンソールに root としてログインします。
- 2 次のコマンドを入力し、プロンプトの指示に従います。

```
$VMWARE_PYTHON_BIN $VCOPS_BASE/./vmware-vcopssuite/utilities/sliceConfiguration/bin/
vcopsSetAdminPassword.py --reset
```

vRealize Operations Manager パスフレーズの生成

ユーザーが vRealize Operations Manager クラスタにノードを追加する必要がある場合は、ユーザーにマスター 管理者のログイン認証情報を教える代わりに、一時パスフレーズを生成します。管理者のログイン認証情報を教えるのはセキュリティ保護上問題があるからです。

一時パスフレーズは、1 回限りの使用に適しています。

前提条件

マスター ノードを作成および構成します。

手順

- 1 Web ブラウザで、vRealize Operations Manager 管理インターフェイス (*master-node-name-or-ip-address/admin*) に移動します。
- 2 マスター ノードの管理者のユーザー名とパスワードでログインします。
- 3 クラスタ ノードのリストからマスター ノードを選択します。
- 4 リストの上部のツールバーにあるパスフレーズ生成オプションをクリックします。
- 5 パスフレーズの有効期限を時間数で入力します。
- 6 [生成] をクリックします。

ランダムな英数字文字列が表示されます。この文字列を、ノードを追加する必要があるユーザーに送信します。

次のステップ

ノードの追加時にユーザーにパスフレーズを入力してもらいます。

vRealize Operations Manager のカスタム証明書

デフォルトでは、vRealize Operations Manager には独自の認証証明書が含まれています。デフォルトの証明書を使用した場合、vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイスに接続するとブラウザに警告が表示されます。

サイトのセキュリティ ポリシーによって別の証明書の使用が必要な場合や、デフォルトの証明書で発生する警告を避けたい場合があります。いずれの場合でも、vRealize Operations Manager は独自のカスタム証明書の使用をサポートしています。カスタム証明書のアップロードは、マスタ ノードの初期構成中または後から行うことができます。

vRealize Operations Manager のカスタム証明書の要件

vRealize Operations Manager で使用する証明書は、所定の要件を満たしている必要があります。カスタム証明書の使用は任意であり、vRealize Operations Manager の機能には影響を与えません。

カスタム証明書の要件

vRealize Operations Manager のカスタム証明書は次の要件を満たしている必要があります。

- 証明書ファイルに、ターミナル（リーフ）サーバ証明書、プライベート キー、およびすべての発行証明書（証明書が他の証明書のチェーンにより署名されている場合）が含まれている必要があります。
- ファイル内の証明書の順序については、リーフ証明書が先頭にある必要があります。リーフ証明書の後の順序は任意です。
- ファイル内ではすべての証明書とプライベート キーが PEM 形式である必要があります。vRealize Operations Manager は、PFX、PKCS12、PKCS7 などの形式の証明書をサポートしていません。
- ファイル内ではすべての証明書とプライベート キーが PEM でエンコードされている必要があります。vRealize Operations Manager は、DER でエンコードされた証明書やプライベート キーをサポートしていません。

PEM エンコードは base-64 ASCII で、判読可能な BEGIN および END マーカが含まれているのに対し、DER はバイナリ形式です。また、ファイル拡張子がエンコードと一致していないことがあります。たとえば、一般的な .cer 拡張子が PEM または DER に使用されていることがあります。エンコード形式を確認するには、テキスト エディタを使用して証明書ファイルを確認します。

- ファイル拡張子は .pem である必要があります。
- プライベート キーは RSA または DSA アルゴリズムで生成されている必要があります。
- マスタ ノード構成ウィザードや管理インターフェイスを使用して証明書をアップロードする場合は、プライベート キーがパスフレーズで暗号化されていない必要があります。
- この vRealize Operations Manager リリースの REST API は、パスフレーズで暗号化されたプライベート キーをサポートしています。詳細については、VMware テクニカル サポートにお問い合わせください。

- 全ノードの vRealize Operations Manager Web サーバが同じ証明書ファイルを持つことになるので、全ノードで証明書が有効であることが必要です。証明書が複数のアドレスで有効になるようにする方法の 1 つは、サブジェクトの代替名 (SAN) エントリを複数使用することです。
- SHA1 証明書では、ブラウザの互換性の問題が発生します。そのため、作成されて vRealize Operations Manager にアップロードされているすべての証明書の SHA2 以上を使用して署名する必要があります。
- vRealize Operations Manager は、キーの長さが最大 8192 ビットのカスタム セキュリティ証明書をサポートします。8192 ビットを超える強力なキーの長さで作成したセキュリティ証明書をアップロードしようとすると、エラーが表示されます。

vRealize Operations Manager のカスタム証明書の確認

カスタム証明書ファイルをアップロードすると、そのファイルに含まれているすべての証明書のサマリ情報が vRealize Operations Manager インターフェイスに表示されます。

有効なカスタム証明書ファイルでは、発行者とサブジェクトを対応付けることによって、最終的に発行者とサブジェクトが同じである自己署名証明書までさかのぼることができます。

次の例では、OU=MBU,O=VMware\, Inc.,CN=vc-ops-slice-32 は OU=MBU,O=VMware\, Inc.,CN=vc-ops-intermediate-32 によって発行されており、さらにこれは OU=MBU,O=VMware\, Inc.,CN=vc-ops-cluster-ca_33717ac0-ad81-4a15-ac4e-e1806f0d3f84 によって発行されています。最終的にこれは自身が発行者となっています。

```
Thumbprint: 80:C4:84:B9:11:5B:9F:70:9F:54:99:9E:71:46:69:D3:67:31:2B:9C
Issuer Distinguished Name: OU=MBU,O=VMware\, Inc.,CN=vc-ops-intermediate-32
Subject Distinguished Name: OU=MBU,O=VMware\, Inc.,CN=vc-ops-slice-32
Subject Alternate Name:
PublicKey Algorithm: RSA
Valid From: 2015-05-07T16:25:24.000Z
Valid To: 2020-05-06T16:25:24.000Z

Thumbprint: 72:FE:95:F2:90:7C:86:24:D9:4E:12:EC:FB:10:38:7A:DA:EC:00:3A
Issuer Distinguished Name: OU=MBU,O=VMware\, Inc.,CN=vc-ops-cluster-ca_33717ac0-ad81-4a15-ac4e-e1806f0d3f84
Subject Distinguished Name: OU=MBU,O=VMware\, Inc.,CN=vc-ops-intermediate-32
Subject Alternate Name: localhost,127.0.0.1
PublicKey Algorithm: RSA
Valid From: 2015-05-07T16:25:19.000Z
Valid To: 2020-05-06T16:25:19.000Z

Thumbprint: FA:AD:FD:91:AD:E4:F1:00:EC:4A:D4:73:81:DB:B2:D1:20:35:DB:F2
Issuer Distinguished Name: OU=MBU,O=VMware\, Inc.,CN=vc-ops-cluster-ca_33717ac0-ad81-4a15-ac4e-e1806f0d3f84
Subject Distinguished Name: OU=MBU,O=VMware\, Inc.,CN=vc-ops-cluster-ca_33717ac0-ad81-4a15-ac4e-e1806f0d3f84
Subject Alternate Name: localhost,127.0.0.1
PublicKey Algorithm: RSA
Valid From: 2015-05-07T16:24:45.000Z
Valid To: 2020-05-06T16:24:45.000Z
```

vRealize Operations Manager のカスタム証明書の内容例

トラブルシューティングを目的として、カスタム証明書ファイルをテキスト エディタで開いて内容を精査することができます。

PEM 形式の証明書ファイル

次に、典型的な PEM 形式の証明書ファイルの例を示します。

```
-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIF1DCCBlygAwIBAgIKFYXYUwAAAAAAGTANBgkqhkiG9w0BAQ0FADBhMRMwEQYK
CZImiZPyLQG8GRYDY29tMRUwEwYKZCZImiZPyLQG8GRYFdm13Y3MxGDAWBgoJkiaJ
<snip>
vKStQJNr7z2+pTy92M6FgJz3y+daL+9ddbaMnp9fVXjHBoDLGgaL0vyD+KJ8+xba
aGJfGf9ELXM=
-----END CERTIFICATE-----
-----BEGIN RSA PRIVATE KEY-----
MIIEowIBAAKCAQEA4l5ffX694riI1RmdRLJwL6sOWa+Wf70HRoLtx21kZzbXbUQN
mQhTRiidJ3Ro2gRbj/btSsI+OMUzotz5VRT/yeyoTC5l2uJEapld45RroUDHQwWJ
<snip>
DAN9hQus3832xMkAuVP/jt76dHDYyviyIYbmzxMa1X7LZy1MCQVg4hCH0vLsHtLh
M1rOAsz62Eht/iB61AsVCCiN3gLRX7MKsYdxZcRVruGXSiH33ynA
-----END RSA PRIVATE KEY-----
-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIDnTCCAowGAgAwIBAgIQY+j29InmdYNCs2cK1H4kPzANBgkqhkiG9w0BAQ0FADBh
MRMwEQYKZCZImiZPyLQG8GRYDY29tMRUwEwYKZCZImiZPyLQG8GRYFdm13Y3MxGDAW
<snip>
ukzUuqX7wEhc+QgJWgl41mWZBZ09gfsA9XuXBL0k17IpVHpEgwwrjQz8X68m4I99
dD5Pf1f/nLRJvR9jwXl62yk=
-----END CERTIFICATE-----
```

プライベート キー

プライベート キーの見た目の形式はさまざまですが、明示的に BEGIN マーカと END マーカで囲まれます。

有効な PEM セクションは次のマーカのどれかで開始されます。

```
-----BEGIN RSA PRIVATE KEY-----
-----BEGIN PRIVATE KEY-----
```

暗号化されたプライベート キーは次のマーカで開始されます。

```
-----BEGIN ENCRYPTED PRIVATE KEY-----
```

Bag Attributes

Microsoft の証明書ツールにより、証明書ファイルに Bag Attributes セクションが追加されることがあります。vRealize Operations Manager では BEGIN マーカと END マーカの外側の内容を無視しますが、それには Bag Attributes セクションも含まれます。

```
Bag Attributes
Microsoft Local Key set: <No Values>
localKeyID: 01 00 00 00
Microsoft CSP Name: Microsoft RSA SChannel Cryptographic Provider
friendlyName: le-WebServer-8dea65d4-c331-40f4-aa0b-205c3c323f62
Key Attributes
```

```

X509v3 Key Usage: 10
-----BEGIN PRIVATE KEY-----
MIICdwIBADANBgkqhkiG9w0BAQEFAASCAmEwgGJdAgEAAoGBAKHqyfc+qcQK4yxJ
om3PuB8dYzm34Qlt81GAAnBPYe3B4Q/0ba6PV8GtWG2svIpc1/eflwGHgTU3zJxR
gkKh7I3K5tGESn81ipyKtKbYebh+aBMqPKrNNUEKlr0M9sa3WSc0o3350tCc1ew
5ZkNYZ4BRUVYwM0HogeGh0thRn2fAgMBAAECgYABhPmGN3FSZKPDG6HJlArvTlBH
KAGVnBGHd0M0mMAbghFBnBKXa8LwD1dgGBng1o0akEXTftkIjdB+uWkU5P4aRr07
vGuJUtRyRCU/4fjLBDuxQL/KpQfruAQaof9uWUwh5W9fEeW3g26fzVL8AFZnbXS0
7Z0AL1H3LNCld5rp0QJBANnI7vFu06bFxFV+kq6Z0JFMx7x3K4VGxgg+PfFEBEPS
UJ2LuDH5/Rc63BaxFz/q3B3Jhehvgw61mMyxU7QSSUCQC+VDuW3XEWJjsiU6KD
gEGpCyJ5SBePbLSukljPgidKkDNlKlgbWVytCVkTAmuoAz33kMWfqiNcqQbUgVV
UnpzAkB7d0CP00deSsy8kMdTmKXLF4qSF0x55epYK/5MZhBYuA1ENrR6mmjW8ke
TDNc6IGm9sVvrFBz2n9kKYpWThrJkEAK5R69DtW0cbkLy5MqEzOHQauP36gDi1L
WMXPvUfzSYTQ5aM2rrY2/1FtSSkqUwFYh9sw8eDbqVpIV4rc6dDfcwJBALiiDPT0
tz86wySJNe0iUkQm36iXVF8AckPKT9TrbC3Ho7nC80zL7gElLEta4Zc86Z3wpcGF
BHhEDMHaihyuVgI=
-----END PRIVATE KEY-----
Bag Attributes
localKeyID: 01 00 00 00
1.3.6.1.4.1.311.17.3.92: 00 04 00 00
1.3.6.1.4.1.311.17.3.20: 7F 95 38 07 CB 0C 99 DD 41 23 26 15 8B E8
D8 4B 0A C8 7D 93
friendlyName: cos-oc-vcops
1.3.6.1.4.1.311.17.3.71: 43 00 4F 00 53 00 2D 00 4F 00 43 00 2D 00
56 00 43 00 4D 00 35 00 37 00 31 00 2E 00 76 00 6D 00 77 00 61 00
72 00 65 00 2E 00 63 00 6F 00 6D 00 00 00
1.3.6.1.4.1.311.17.3.87: 00 00 00 00 00 00 00 00 02 00 00 00 20 00
00 00 02 00 00 00 6C 00 64 00 61 00 70 00 3A 00 00 00 7B 00 41 00
45 00 35 00 44 00 44 00 33 00 44 00 30 00 2D 00 36 00 45 00 37 00
30 00 2D 00 34 00 42 00 44 00 42 00 2D 00 39 00 43 00 34 00 31 00
2D 00 31 00 43 00 34 00 41 00 38 00 44 00 43 00 42 00 30 00 38 00
42 00 46 00 7D 00 00 00 70 00 61 00 2D 00 61 00 64 00 63 00 33 00
2E 00 76 00 6D 00 77 00 61 00 72 00 65 00 2E 00 63 00 6F 00 6D 00
5C 00 56 00 4D 00 77 00 61 00 72 00 65 00 20 00 43 00 41 00 00 00
31 00 32 00 33 00 33 00 30 00 00 00
subject=/CN=cos-oc-vcops.eng.vmware.com
issuer=/DC=com/DC=vmware/CN=VMware CA
-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIFWTCCBEGgAwIBAgIKSJGT5gACAAAwKjANBgkqhkiG9w0BAQUFADBMRMwEQYK
CZImiZPyLGBGRYDY29tMRYwFAYKCCZImiZPyLGBGRYGdm13YXJlMRlW EAYDVQQD
EwIWTXdhcmUgQ0EwHhcNMTQwMjA1MTg10TM2WhcNMTYwMjA1MTg10TM2WjAmMSQw

```

vRealize Operations Manager 証明書

vRealize Operations Manager には、認証証明書の内容を確認できるセントラル ページがあります。証明書により vRealize Operations Manager クラスタ ノードを相互に認証させることができます。

証明書ページの仕組み

証明書ページにより、vRealize Operations Manager 外で証明書を開かずに、証明書の内容を確認できます。

証明書を確認できる場所

左側のペインで、[管理] - [証明書] を選択します。

証明書オプション

このオプションには、証明書の内容を確認するためのデータ グリッドが含まれます。

表 4-199. 証明書オプション

オプション	説明
証明書のサムプリント	証明書に関連付けられた一意の英数字文字列
発行元	組織名や場所など、証明書の発行者に関連した内容
発行先	通常、発行者に関連した内容および証明書のオブジェクト ID (OID)
有効期限	その日を過ぎると、証明書を正しく認証できなくなる日付

vRealize Operations Manager へのカスタム証明書の追加

vRealize Operations Manager マスタ ノードの構成時に独自の SSL/TLS 証明書を追加しなかった場合、vRealize Operations Manager のインストール後でも証明書を追加できます。

前提条件

- マスター ノードを作成および構成します。

手順

- 1 Web ブラウザで、vRealize Operations Manager 管理インターフェイス (<https://<node-FQDN-or-ip-address>/admin>) に移動します。
- 2 管理ユーザー名とパスワードを使用してログインします。
- 3 右上の黄色い証明書アイコンをクリックします。
- 4 証明書ウィンドウで、[新規証明書のインストール] をクリックします。
- 5 [証明書の参照] をクリックします。
- 6 証明書 .pem ファイルを指定し、[開く] をクリックすると [証明書情報] テキスト ボックスにファイルが読み込まれます。
- 7 [Install] をクリックします。

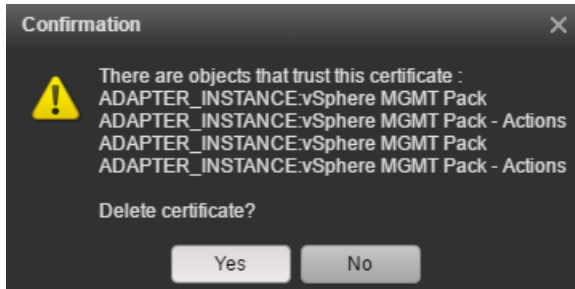
アダプタ証明書を削除する

アダプタに関連した古い証明書や期限切れの証明書を削除するには、次の手順を実行します。


手順

- 1 Web ブラウザで vRealize Operations Manager の管理インターフェイス (<https://node-FQDN-or-ip-address/ui>) を表示します。
- 2 管理者ユーザー名とパスワードを使用してログインします。
- 3 左側のペインで、[管理] をクリックします。
- 4 [証明書] をクリックします。
- 5 証明書ウィンドウで、削除する証明書を選択します。

- 6 [x] をクリックして証明書を削除します。
- 7 証明書がアダプタで使用されている場合は、次のメッセージが現れます。



証明書は、宛先システムが同じであれば、1つまたは複数のアダプタに対して構成が可能です。

- 8 別のアダプタで使用されている証明書を削除すると、アダプタは接続または起動できなくなります。回避策として、次の手順を実行します。
 - a 左側のペインで、[ソリューション] をクリックします。
 - b 特定のアダプタを選択して、ツールバーの構成ボタン  をクリックします。
 - c [テスト接続] をクリックします。
 - d 関連する証明書をインポートするように指示が表示されます。[OK] をクリックします。
 - e [ソリューション] ページでアダプタを再起動します。

グローバル設定の変更

グローバル設定は、vRealize Operations Manager のシステム設定（データ保持やシステム タイムアウトの設定など）を制御します。環境を監視しやすいように、1つ以上の設定値を変更できます。これらの設定は全ユーザーに影響します。

グローバル設定は、メトリック相互作用、カラー インジケータ、またはその他のオブジェクト管理動作には影響を与えません。これらの動作はポリシー内で構成します。

vRealize Operations Manager によるオブジェクト管理に関連する設定は、[管理] - [インベントリ エクスプローラ] ページで確認できます。

各オプションのツールチップは [グローバル設定の編集] ダイアログ ボックスで確認できます。

グローバル設定のベスト プラクティス

設定のほとんどは、収集されたデータと処理されたデータを vRealize Operations Manager がどれだけの間保持するかに関係しています。

デフォルト値は共通の保持期間です。この期間は、必要に応じ、ローカル ポリシーやディスク容量に基づいて調整できます。

グローバル設定のリスト

グローバル設定は、vRealize Operations Manager でデータを保持したり、接続セッションを開いたままにしたりするなどさまざまな設定を決定します。これらは、全ユーザーに影響するシステム設定です。

表 4-200. グローバル設定のデフォルト値と説明

設定	デフォルト値	説明
アクション履歴	30 日	<p>アクションの最近のタスク データを保持する日数。</p> <p>データは、指定された日数が経過した後、システムから削除されます。</p>
削除されたオブジェクト	168 時間	<p>アダプタ データ ソースまたはサーバから削除されたオブジェクトを vRealize Operations Manager から削除する前に保持する時間。</p> <p>アダプタ データ ソースから削除されたオブジェクトは、vRealize Operations Manager によって存在しないオブジェクトと識別されることがあります。この場合、vRealize Operations Manager はそのオブジェクトについてのデータをそれ以上収集できません。削除されたオブジェクトを vRealize Operations Manager が存在しないオブジェクトと識別するかどうかは、アダプタによって異なります。この機能は一部のアダプタには実装されていません。</p> <p>たとえば、保持期間が 360 時間に設定されている状態で vCenter Server インスタンスから仮想マシンが削除された場合、その仮想マシンは vRealize Operations Manager で 15 日間オブジェクトとして留まり、その後削除されます。</p> <p>この設定は、データ ソースまたはサーバから削除されたオブジェクトに適用されます。[インベントリ エクスプローラ] ページの vRealize Operations Manager から削除されたオブジェクトには適用されません。</p> <p>値が -1 の場合、オブジェクトは直ちに削除されます。</p>
削除スケジュールの間隔	24 時間	<p>リソースの削除をスケジュールする頻度を指定します。この設定は、環境内に存在しなくなったオブジェクトを削除するために、[削除されたオブジェクト] 設定とともに機能します。vRealize Operations Manager は、[削除されたオブジェクト] で指定された時間の長さだけ存在しなかったオブジェクトを削除のために透過的にマークします。vRealize Operations Manager はその後、マークされたオブジェクトを [削除スケジュールの間隔] で指定された頻度で削除します。</p>
オブジェクト履歴	300 日	<p>オブジェクト構成データ、関係データ、およびプロパティ データの履歴を保持する日数。</p> <p>構成データは、メトリックのベースとなる監視対象オブジェクトから収集されるデータです。収集されたデータには、オブジェクトの構成に加えられた変更が含まれます。</p> <p>データは、指定された日数が経過した後、システムから削除されます。</p>
セッション タイムアウト	30 分	<p>指定した時間の間 vRealize Operations Manager に対する接続がアイドル状態になると、アプリケーションからログアウトされます。</p> <p>もう一度ログインするには、認証情報を指定する必要があります。</p>
症状/アラート	45 日	<p>キャンセルされたアラートと症状を保持する日数。</p> <p>アラートと症状は、システムまたはユーザーによるキャンセルが可能です。</p>
タイム シリーズ データ	6 か月	<p>監視対象オブジェクトのために収集されて計算されたメトリック データを保持する月数。</p> <p>使用可能なディスク領域が 10% 未満になると、vRealize Operations Manager は古いデータを消去しますが、指定された範囲全体は保持されない可能性があります。</p>

表 4-200. グローバル設定のデフォルト値と説明（続き）

設定	デフォルト値	説明
動的しきい値計算	有効	<p>すべてのオブジェクトについて通常レベルのしきい値違反を計算するかどうかを決定します。</p> <p>この設定を無効にすると、vRealize Operations Manager の次の領域が動作しなくなるか、または表示されなくなります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 異常バッジが計算されない ■ 動的しきい値に基づいたアラート症状の定義が動作しない ■ 正常な動作を表示するメトリック チャートが存在しない <p>この設定は、vRealize Operations Manager システムのリソース制約の管理に利用できるオプションが他にない場合だけ無効にしてください。</p>
容量の計算	有効	<p>すべてのオブジェクトについて、容量メトリックとバッジを計算するかどうかを決定します。</p> <p>設定を無効にすると、次のバッジの値は計算されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 残りキャパシティ ■ 残り時間 ■ 負荷 ■ 解放可能な容量 ■ 密度
vCenter Server ユーザーのログイン許可		<p>vCenter Server のユーザーによる vRealize Operations Manager へのログイン方法を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイスで、vCenter Server のユーザーは個々の vCenter Server インスタンスにログインできます。デフォルトでは無効。 ■ vCenter Server のユーザーは vCenter Server クライアントからログインできます。デフォルトでは有効。 ■ vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイスで、vCenter Server のユーザーはすべての vCenter Server インスタンスにログインできます。デフォルトでは有効。
カスタム エクスペリエンス改善プログラム	有効	<p>カスタム エクスペリエンス改善プログラムに参加するかどうかを指定します。参加すると、vRealize Operations Manager は匿名の使用データを https://vmware.com に送信します。</p>
自動アクション	有効または無効	<p>vRealize Operations Manager によるアクションの自動化を許可するかどうかを指定します。アラートのトリガ時には、アラートから解決策が推奨されます。推奨事項がそのアラートで優先順位が最も高いものである場合は、アクションを自動化できます。実行可能なアラートはポリシーで有効にします。</p>

グローバル設定

vRealize Operations Manager でデータを保持したり接続セッションをオープンしたままにしたりするさまざまな設定を管理する手段として、グローバル設定の値を変更できます。これらのシステム設定はすべてのユーザーに影響します。

グローバル設定を使用すると、オブジェクトを削除するまでの時間の設定、タイムアウトの設定、履歴データの保存、動的しきい値やキャパシティの計算の使用、vCenter Server ユーザーのログイン方法の指定ができます。自動アクションについては、アクションがアラートの推奨事項から自動的にトリガされるのを許可するかどうかを選択できます。

また、カスタマ エクスペリエンス改善プログラムに参加するかどうかを選択できます。

グローバル設定を確認できる場所

左側のペインで、[管理]、[グローバル設定] の順にクリックします。

表 4-201. グローバル設定のオプション

オプション	説明
グローバル設定の編集	ツールバー オプションを使用して設定値を変更します。
設定	設定名。
値	設定の現在の値。 設定値を変更するには、[グローバル設定の編集] をクリックします。
説明	設定についての情報。マウスを設定の上に置くと、その設定の追加情報が表示されます。

カスタマー エクスペリエンス向上プログラム

この製品は、VMware のカスタマー エクスペリエンス向上プログラム (CEIP) に参加しています。CEIP は、VMware が自社の製品とサービスを改善し、問題を解決し、製品の最適なデプロイおよび使用方法についてアドバイスできるようにする情報を VMware に提供するものです。vRealize Operations Manager 用の CEIP への参加と参加取り消しの選択は、いつでも行うことができます。

CEIP を通じて収集されるデータに関する詳細と、VMware によるそのデータの使用目的については、<http://www.vmware.com/trustvmware/ceip.html> の Trust & Assurance Center に記載されています。

vRealize Operations Manager のカスタマ エクスペリエンス改善プログラムへの参加または参加取り消し

vRealize Operations Manager のカスタマ エクスペリエンス改善プログラム (CEIP) への参加または参加取り消しは、いつでも行うことができます。

vRealize Operations Manager を最初にインストールして構成するときに、カスタマ エクスペリエンス改善プログラム (CEIP) に参加する機会が提示されます。インストール後は、次の手順で CEIP への参加または参加取り消しを行うことができます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager で [管理] をクリックします。
- 2 [グローバル設定].を選択します。
- 3 ツールバーから、[編集] アイコンをクリックします。
- 4 [ユーザー エクスペリエンス改善プログラム] オプションをオンまたはオフにします。

オンにすると、このプログラムが有効化され、データが <https://vmware.com> に送信されます。

- 5 [OK] をクリックします。

製品ユーザー インターフェイスの vRealize Operations Manager ログ

製品ユーザー インターフェイスでのトラブルシューティングのため、製品には確認のための参照や読み込みができる vRealize Operations Manager ログ ファイルの展開可能なツリーがあります。

vRealize Operations Manager ログの仕組み




vRealize Operations Manager ログは、クラスター ノードおよびログ タイプによって分類されます。

vRealize Operations Manager ログを確認できる場所

左側のペインで [管理] - [サポート] - [ログ] を選択します。

ログ ビューアのオプション

アイテムのツリーおよびビューアを制御するには、ツールバー オプションを使用します。

Group by: Node   

Starting Line: Number of Lines: ☐ Word Wrap ▼ Hide Advanced Options

Min Log Level: —Select— ☒ Set Timerange 1 ▼

☐ Regular Expression ☐ Case Sensitive

表 4-202. ログ ビューアのツールバー オプション

オプション	説明
グループ化	クラスター ノードまたはログ タイプによりツリーを編成します。
すべて折りたたむ	ツリーのビューを閉じ、上位のフォルダのみを表示します。
プロパティの編集	フォルダに対し、ログ サイズを制限したり、外部 syslog サーバにログを送信したり、ログ レベルを設定したりします。 注意： syslog サーバに転送するログは暗号化されません。syslog オプションを使用する前に、ネットワークが安全であることを確認します。
選択したファイルの削除	ログ ファイルを削除します。
開始行	ファイルの開始行を示します。 0 が先頭行です。-1 または値なしの場合は、ファイルは末尾から表示されます。
行数	検索結果に表示する行数を指定します。 例： 特定のテキスト チャンクの先頭の 10 行を表示する場合、行数を 10 にし、開始行を 0 にします。
最小ログ レベル	最小ログ レベルを指定した場合、そのログ レベル以上のログが表示されます。 例： [警告]を選択すると、同じログ レベル（[警告]）以上のログが表示されます。。

表 4-202. ログ ビューアのツールバー オプション（続き）

オプション	説明
検索する文字列	<p>ログで検索する特定のテキストを入力します。必要に応じて、次のフィルタを追加して検索します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [大文字と小文字を区別する] ■ [正規表現] <p>検索はさまざまなレベルで実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 単一ファイル：1つのログ ファイルを検索します。 ■ エンティティのすべてのログ ファイル：ログ タイプやフォルダなど、エンティティのすべてのログ ファイルを検索します。 ■ ノードのすべてのログ ファイル：ノード以下にグループにされたすべてのログ ファイルを検索します。 <p>ツリーのファイルをマウスでポイントすると、ファイルの最終変更時刻が表示されます。</p>
時間範囲の設定	時間範囲を設定すると、その範囲のログが検索結果に表示されます。
ワードラップ	このオプションを選択した場合、画面に収まらない行の部分が次の行に送られます。このオプションを選択しない場合は、すべての行が表示されるようにスクロール バーが現れます。

vRealize Operations Manager サポート バンドルの作成

vRealize Operations Manager の問題をトラブルシューティングする際、vRealize Operations Manager サポート バンドルを作成して、ログおよび構成ファイルを収集します。

サポート バンドルを作成する場合、便利のよいように vRealize Operations Manager がクラスタ ノードから ZIP ファイルを収集します。

手順

- 1 左側のペインで、[管理] をクリックします。
- 2 [サポート] - [サポート バンドル] を選択します。
- 3 ツールバーからボタンをクリックして、サポート バンドルを追加します。
- 4 ライト サポート バンドルまたはフル サポート バンドルを作成するオプションを選択します。
- 5 サポート用に評価する必要があるクラスタ ノードを選択します。

選択したノードのログのみ、サポート バンドルに含まれます。

- 6 [OK] をクリックし、[OK] をクリックして、サポート バンドルの作成を確認します。

ログのサイズとノードの数によっては、vRealize Operations Manager がサポート バンドルを作成するのに時間がかかる場合があります。

次のステップ

ツールバーを使用して、分析用にサポート バンドルの ZIP ファイルをダウンロードします。 セキュリティのために、サポート バンドルをダウンロードするときに、vRealize Operations Manager から、認証情報の入力を求められます。

ログ ファイルでエラー メッセージを確認するか、トラブルシューティングの支援が必要な場合は、診断データを VMware テクニカル サポートに送ることができます。問題が解決または終了したら、ツールバーを使って、ディスク容量を節約するために古いサポート バンドルを削除してください。

vRealize Operations Manager サポート バンドル

vRealize Operations Manager サポート バンドルには、vRealize Operations Manager の問題を解決する上で役に立つログ ファイルおよび構成ファイルが含まれています。

サポート バンドルの機能

サポート バンドルでは、ノードまたはクラスタ全体、および収集するログ記録のレベルを選択する必要があります。vRealize Operations Manager によってサポート バンドルが作成されたら、ZIP 形式でダウンロードして分析します。

サポート バンドルを確認できる場所

左側のペインで、[管理] - [サポート] - [サポート バンドル] を選択します。

サポート バンドルのオプション

これらのオプションには、ツールバーとデータ グリッドのオプションが含まれます。

ツールバー オプションを使用して、項目の追加、ダウンロードまたは削除を行います。

表 4-203. サポート バンドルのツールバー オプション

オプション	説明
追加	サポート バンドルの作成プロセスをガイドするダイアログ ボックスを開きます。
削除	選択したサポート バンドルを削除します。
ダウンロード	サポート バンドルを ZIP 形式でダウンロードします。
再ロード	サポート バンドルのリストを更新します。

アイテムの詳細を表示するには、データ グリッドのオプションを使用します。

表 4-204. サポート バンドル データ グリッドのオプション

オプション	説明
バンドル	システムが生成するサポート バンドルの識別子
バンドル タイプ	<ul style="list-style-type: none"> ■ ライト 24 時間分のログを含めます ■ フル 利用可能なすべてのログおよび構成ファイルを含めます
作成日時	サポート バンドルの作成開始時間
ステータス	サポート バンドルの作成の進捗状況

vRealize Operations Manager 動的しきい値

しきい値は、メトリックの正常な動作と異常な動作の境界を示します。履歴データと新たに指定されるデータに基づいて計算されるメトリックに対して、vRealize Operations Manager は固定しきい値だけでなく、動的しきい値もサポートします。

動的しきい値の仕組み

デフォルトでは動的しきい値は定期的に更新されますが、最新データを取得する必要がある場合は、スケジュールされた時間以外の時間に動的しきい値を計算し直すことができます。

動的しきい値を確認できる場所

左側のペインで、[管理] - [サポート] - [動的しきい値] を選択します。

動的しきい値のオプション

動的しきい値機能には、計算プロセスを開始または停止するオプションや、関連付けられている値を確認するオプションなどがあります。

表 4-205. 動的しきい値のオプション

オプション	説明
開始	通常のスケジュールとは別に、動的しきい値の計算プロセスをすぐに実行します。
停止	現在進行中の動的しきい値計算を停止します。
計算の進捗状況	現在の動的しきい値計算の完了率
計算時間と合計回数	最後に行われた動的しきい値計算に関連付けられているタイムスタンプおよびメトリック数と、次にスケジュール設定されている計算の時間

vRealize Operations Manager アダプタの再記述

vRealize Operations Manager がアダプタを再記述する場合、vRealize Operations Manager はアダプタ ファイルを検出し、アダプタのアビリティに関する情報を集め、アダプタに関する情報でユーザー インターフェイスを更新します。

アダプタ再記述の仕組み

アダプタをインストールまたは更新した後、vRealize Operations Manager でアダプタを再記述することによってアダプタ情報を収集します。

アダプタの再記述を確認できる場所

左側のペインで、[管理] - [サポート] - [再記述] を選択します。

アダプタの再記述のオプション

この機能には、アダプタの記述プロセスを開始するオプションがあります。

表 4-206. アダプタの再記述のオプション

オプション	説明
再記述	アダプタの記述プロセスを開始します

vRealize Operations Manager は、再記述プロセスからのアダプター固有の詳細情報を提供します。

表 4-207. アダプタの再記述の詳細情報

オプション	説明
名前	再記述プロセスが適用されるアダプタ
ステータス	最後の再記述プロセスに関する成功や失敗などの状態
バージョンの記述	最後の再記述プロセスが実行された describe.xml のバージョン
アダプタのバージョン	最後の再記述プロセスが実行されたアダプタのバージョン
メッセージ	最後の再記述プロセスに関するその他の詳細情報

アイコンのカスタマイズ

環境内のすべてのオブジェクトまたはアダプタにはアイコンが用意されています。アイコンの外観はカスタマイズできます。

vRealize Operations Manager によって、各オブジェクト タイプとアダプタ タイプにデフォルトのアイコンが割り当てられています。環境内で、オブジェクト タイプとアダプタ タイプは集合的にオブジェクトとして認識されます。アイコンは、UI でオブジェクトとして表現され、オブジェクトのタイプの識別に役立ちます。たとえば、ダッシュボードのトポロジ グラフ ウィジェットでは、ラベル付きのアイコンによって、オブジェクト同士の接続方法が表示されます。アイコンを見れば、オブジェクトのタイプを即座に識別できます。

オブジェクトを区別する必要がある場合は、アイコンを変更します。たとえば、仮想マシン アイコンは総称的なアイコンです。vSphere 仮想マシンが提供するデータと Hypervisor 仮想マシンが提供するデータを絵的に区別したければ、それぞれに異なるアイコンを割り当てます。

オブジェクト タイプ アイコンのカスタマイズ

vRealize Operations Manager で使用可能なデフォルトのアイコンを使用するか、オブジェクト タイプに応じて独自の画像ファイルをアップロードできます。アイコンを変更すると、その変更はすべてのユーザーで有効となります。

前提条件

自分独自のアイコンファイルを使用する場合は、それぞれの画像が PNG 形式であることと高さや幅が同じであることを確認してください。最善の結果を得るには、256x256 ピクセルの画像サイズを使用してください。

手順

1 [内容] - [アイコン] - [オブジェクト タイプ アイコン] を選択します。

2 オブジェクト タイプ アイコンを割り当てます。

a アイコンを変更するオブジェクト タイプをリストから選択します。

デフォルトでは、すべてのアダプタ タイプのオブジェクト タイプが一覧表示されます。単一のアダプタ タイプに対して有効なオブジェクト タイプのみが表示されるようにするには、ドロップダウン メニューからアダプタ タイプを選択します。

b [アップロード] アイコンをクリックします。

c 使用するファイルがある場所に移動して、そのファイルを選択し、[完了]をクリックします。

- 3** (オプション) デフォルトのアイコンに戻すには、オブジェクト タイプを選択して、[デフォルト アイコンの割り当て] アイコンをクリックします。

元のデフォルト アイコンが表示されます。

[オブジェクト タイプ アイコン] タブ

vRealize Operations Manager は、さまざまなソースからデータを取得します。データ ソースは、オブジェクトのタイプまたはオブジェクト タイプによって分類されます。vRealize Operations Manager は、オブジェクトのメトリック データが表示される各 UI で、アイコンによってオブジェクト タイプを示します。異なるタイプのオブジェクトを視覚的に識別するには、アイコンをカスタマイズします。

オブジェクト タイプ アイコンをカスタマイズする場所

左側のペインで、[内容] タブをクリックして、[アイコン] - [オブジェクト タイプ アイコン] を選択します。

表 4-208. オブジェクト タイプ アイコンのオプション

オプション	説明
アダプタ タイプ	デフォルトでは、すべてのアダプタのアイコンが表示されます。1つのタイプのアダプタについてのみ有効なオブジェクト タイプのサブセットを表示するには、そのアダプタ タイプを選択します。
ツールバー オプション	<p>選択したアイコンを管理します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [アップロード] を選択すると、オブジェクト タイプを一意に識別するための PNG ファイルがアップロードされます。 ■ [デフォルト アイコンの割り当て] は、選択内容を元のアイコンに戻します。
検索	特定の名前が設定されたオブジェクトを検索して、表示されるオブジェクト タイプの選択範囲を絞り込みます。
オブジェクト タイプ	オブジェクトのタイプの名前。
アイコン	オブジェクトのタイプの絵による表現。

アダプタ タイプ アイコンのカスタマイズ

vRealize Operations Manager で使用可能なデフォルトのアイコンを使用するか、アダプタ タイプに応じて独自の画像ファイルをアップロードできます。アイコンを変更すると、その変更はすべてのユーザーで有効となります。

前提条件

自分独自のアイコンファイルを使用する場合は、それぞれの画像が PNG 形式であることと高さ幅が同じであることを確認してください。最善の結果を得るには、256x256 ピクセルの画像サイズを使用してください。

手順

- 1 [内容] - [アイコン] - [アダプタ タイプ アイコン] を選択します。
- 2 アダプタ タイプ アイコンを割り当てます。
 - a アイコンを変更するアダプタ タイプをリストから選択します。
 - b [アップロード] アイコンをクリックします。
 - c 使用するファイルがある場所に移動して、そのファイルを選択し、[完了]をクリックします。

- 3 (オプション) デフォルトのアイコンに戻すには、アダプタ タイプを選択して、[デフォルト アイコンの割り当て] アイコンをクリックします。

元のデフォルト アイコンが表示されます。

[アダプタ タイプ アイコン] タブ

アダプタは、データを収集して vRealize Operations Manager に提供します。アダプタは、アダプタ タイプまたはアダプタ種別によって分類されます。異なるタイプのアダプタを視覚的に識別するために、アイコンをカスタマイズできます。

アダプタ タイプ アイコンをカスタマイズする場所

左側のペインで、[内容] タブをクリックして、[アイコン] - [アダプタ タイプ アイコン] を選択します。

表 4-209. [アダプタ タイプ アイコン] のオプション

オプション	説明
ツールバー オプション	<p>選択したアイコンを管理します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [アップロード] では、アダプタ タイプを一意に識別する PNG ファイルがアップロードされます。 ■ [デフォルト アイコンの割り当て] は、選択内容を元のアイコンに戻します。
名前	アダプタ タイプの名前。
アイコン	アダプタ タイプの図的記述。

vRealize Operations Manager への追加の仮想メモリの割り当て

vRealize Operations Manager プロセスを実行し続けるために、仮想メモリの追加が必要になることがあります。

vRealize Operations Manager 仮想マシンが要求したメモリの量が、使用可能なメモリの量を超えると、Linux カーネルが vcops-analytics プロセスを強制終了し、製品が応答しなくなることがあります。この状況が発生した場合は、vSphere の予約機能を使用して、vRealize Operations Manager 仮想マシンに保証する最小メモリ割り当て量を指定します。

手順

- 1 vSphere Client のインベントリで vRealize Operations Manager 仮想マシンを右クリックし、[設定の編集] を選択します。
- 2 [リソース] タブをクリックし、[メモリ] を選択します。
- 3 [予約] オプションを使用して、追加のメモリを割り当てます。

vRealize Operations Manager の管理インターフェイスについて

vRealize Operations Manager の管理インターフェイスを使用すると、選択したメンテナンス機能（製品のインターフェイスではサポートされていない）にアクセスすることができます。

以下のような場合には、製品のインターフェイスではなく、vRealize Operations Manager の管理インターフェイスを使用してください。管理インターフェイスのログイン ページには、vRealize Operations Manager 分析クラスタの任意のノードからアクセスすることができます。そのためには、URL をブラウザに入力する際に、ノード IP アドレスまたは FQDN の末尾に **/admin** を付けます。

- 高可用性 (HA) は、有効か無効にする必要があります。
- vRealize Operations Manager ソフトウェア更新 PAK ファイルをアップロードし、インストールする必要があります。
- 製品のインターフェイスにアクセスすることができない場合、ノードをオンラインにするか、ノードまたはクラスタを再起動することによって問題を修正する必要があります。
- vRealize Operations Manager は、いかなる理由の場合も再起動する必要があります。

ログへのアクセス、サポート バンドル、およびクラスタの再起動が含まれない一部のノード メンテナンス作業（たとえば、ノードの追加）などに関して、管理インターフェイスと製品のインターフェイスの間には一部重複があることに注意してください。

vRealize Operations Manager クラスタのステータスおよびトラブルシューティング

vRealize Operations Manager には、vRealize Operations Manager クラスタのノードおよびそのノードにインストールされているアダプタを監視および管理できる中心のページがあります。

クラスタのステータスおよびトラブルシューティングの仕組み

クラスタのステータスおよびトラブルシューティングにより、vRealize Operations Manager クラスタ全体または個別ノードのオンライン状態またはオフライン状態を表示および変更できます。さらに、高可用性 (HA) を有効または無効にし、ノードにインストールされたアダプタに関連した統計情報を表示できます。

クラスタのステータスおよびトラブルシューティングを確認できる場所

vRealize Operations Manager 管理インターフェイス (<https://master-node-name-or-ip-address/admin>) にログインします。

クラスタのステータスおよびトラブルシューティング オプション

このオプションには、クラスタレベルの監視機能と管理機能が含まれています。

表 4-210. 初期セットアップ ステータスの詳細

オプション	説明
クラスタのステータス	vRealize Operations Manager クラスタのオンライン、オフライン、または不明状態を表示し、クラスタをオンラインまたはオフラインにするオプションを提供します。
High Availability	HA が有効か、無効か、デグレードしているかを示し、その設定を変更するオプションを提供します。

vRealize Operations Manager は、ノードレベルの情報およびノードをオンラインまたはオフラインにするためのツールバーを提供します。

表 4-211. vRealize Operations Manager クラスタのノード

オプション	説明
ノード名	ノードのマシン名。 ログイン中のノードは、名前の隣にドットが表示されます。
ノード アドレス	ノードのインターネット プロトコル (IP) アドレス。マスタ ノードおよびレプリカ ノードには、静的 IP アドレスが必要です。データ ノードでは、DHCP または静的 IP を使用する場合があります。
クラスタのロール	vRealize Operations Manager ノードのタイプ：マスター、データ、レプリカ、またはリモート コレクタ。
都道府県	パワーオン、パワーオフ、不明などのノードの状態。
ステータス	オンライン、オフライン、不明などのノードの状態。
オブジェクト	ノードで現在監視している合計環境オブジェクト。
メトリック	ノードがクラスタに追加されて以来ノードが収集した合計メトリックス。
ビルド	ノードにインストールされている vRealize Operations Manager ソフトウェア ビルド番号。
バージョン	ノードにインストールされた vRealize Operations Manager ソフトウェア バージョン。
デプロイ タイプ	ノードを実行しているマシンのタイプ：vApp または Linux。

さらに、選択したノードのアダプタ統計情報を表示します。

表 4-212. サーバ上のアダプタ

オプション	説明
名前	インストールするユーザーがアダプタに付ける名前。
ステータス	アダプタがデータを収集しているかどうかを示します。
オブジェクト	アダプタで現在監視している合計環境オブジェクト。
メトリック	アダプタがノードにインストールされて以来収集したアダプタの合計メトリックス。
最後の収集時間	アダプタが一番最近のデータ収集をした日付と時間。
追加日	アダプタがノードにインストールされた日付と時間。

管理ユーザー インターフェイスの vRealize Operations Manager ログ

管理ユーザー インターフェイスでのトラブルシューティングのため、製品には確認のための参照や読み込みができる vRealize Operations Manager ログ ファイルの展開可能なツリーがあります。

vRealize Operations Manager ログの仕組み

vRealize Operations Manager ログは、クラスタ ノード、機能領域、またはログ タイプによって分類されます。

vRealize Operations Manager ログを確認できる場所

- 1 vRealize Operations Manager 管理インターフェイス (<https://master-node-name-or-ip-address/admin>) にログインします。

2 [サポート] を選択します。

3 [ログ] をクリックします。

ログ ビューアのオプション

アイテムのツリーおよびビューアを制御するには、ツールバー オプションを使用します。

表 4-213. ログ ビューアのツールバー オプション

オプション	説明
開始行	表示するファイルの開始行を指定します。 0 が先頭行です。-1 または値なしの場合は、ファイルは末尾から表示されます。
行数	ファイルの表示行数を指定します。 例： 必要なテキストの先頭の 10 行を表示する場合、行数を 10 にし、開始行を 0 に指定します。
ワードラップ	このオプションを選択した場合、画面に収まらない行の部分が次の行に送られます。このオプションを選択しない場合は、すべての行が表示されるようにスクロール バーが現れます。

vRealize Operations Manager サポート バンドル

vRealize Operations Manager サポート バンドルには、vRealize Operations Manager の問題を解決する上で役に立つログ ファイルおよび構成ファイルが含まれています。

サポート バンドルの機能

サポート バンドルでは、ノードまたはクラスタ全体、および収集するログ記録のレベルを選択する必要があります。vRealize Operations Manager によってサポート バンドルが作成されたら、ZIP 形式でダウンロードして分析します。

サポート バンドルを確認できる場所

vRealize Operations Manager 管理インターフェイス (<https://master-node-name-or-ip-address/admin>) にログインします。[サポート] を選択し、[サポート バンドル] をクリックします。

サポート バンドルのオプション

これらのオプションには、ツールバーとデータ グリッドのオプションが含まれます。

ツールバー オプションを使用して、項目の追加、ダウンロードまたは削除を行います。

表 4-214. サポート バンドルのツールバー オプション

オプション	説明
追加	サポート バンドルの作成プロセスをガイドするダイアログ ボックスを開きます。
削除	選択したサポート バンドルを削除します。

表 4-214. サポート バンドルのツールバー オプション (続き)

オプション	説明
ダウンロード	サポート バンドルを ZIP 形式でダウンロードします。
再ロード	サポート バンドルのリストを更新します。

アイテムの詳細を表示するには、データ グリッドのオプションを使用します。

表 4-215. サポート バンドル データ グリッドのオプション

オプション	説明
バンドル	システムが生成するサポート バンドルの識別子
バンドル タイプ	<ul style="list-style-type: none"> ■ ライト 24 時間分のログを含めます ■ フル 利用可能なすべてのログおよび構成ファイルを含めます
作成日時	サポート バンドルの作成開始時間
ステータス	サポート バンドルの作成の進捗状況

vRealize Operations Manager を使用した管理環境内のオブジェクトの監視

5

vRealize Operations Manager を使用すると、お客様が提起した問題の解決、お客様が問題をレポートする前に問題を特定するアラートへの対処、そして環境の全体的な監視による問題の発見を実現できます。

お客様がパフォーマンスの問題に直面し、その問題を解決するように指示された場合、vRealize Operations Manager により収集および分析されるデータがグラフィック形式で表示されるため、オブジェクトを比較および対比させて、オブジェクト間の関係を理解し、問題の根本原因を判断することができます。

受動的な管理者ではなく、積極的な管理者として環境を管理するには、アラートを監視してアラートに対応します。生成されたアラートにより、環境のオブジェクトに問題が発生していることが通知されます。お客様から通知される前に、アラートに基づいて問題を解決した場合、サービスを中断せずに済みます。

[分析]、[トラブルシューティング]、[詳細]、および[環境] タブを使用して、アラートを生成する問題または問合せに繋がる問題を調査できます。

問題の根本原因を見つけた場合、アクションを実行することで問題を解決できます。アクションは、vRealize Operations Manager からターゲット システム、たとえば、VMware vCenter Server システムのオブジェクトに変更を加えます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [さまざまな状況と対処方法](#)
- [アラートの監視およびアラートへの応答](#)
- [問題の監視および問題への応答](#)
- [vRealize Operations Manager からのアクションの実行](#)
- [インベントリの表示](#)

さまざまな状況と対処方法

仮想インフラストラクチャの管理者、ネットワーク運用センターのエンジニアなどの IT プロフェッショナルとして、vRealize Operations Manager を使用して環境内のオブジェクトを監視し、顧客へのサービスを保証し、発生する問題を解決します。

vRealize Operations Manager 管理者は、複数のホストと仮想マシンを管理する 2 つの vCenter Server インスタンスを管理するよう vRealize Operations Manager を構成しました。環境の管理に vRealize Operations Manager を使用する最初の日です。

■ ユーザー シナリオ：問題が発生したユーザーから問い合わせがあった場合

営業担当の副社長が、仮想マシン VPSALES4632 の動作が遅いとのことでヘルプ デスクに電話で問い合わせてきました。今度の会議のために営業レポートを作成しているところだが、仮想マシンのパフォーマンスが遅いために予定よりも遅れているとのことでした。

■ ユーザー シナリオ：受信箱にアラートが到着した場合

昼食から戻ると、受信箱にアラート通知を見つけました。vRealize Operations Manager を使用して、アラートの調査や解決を行うことができます。

■ ユーザー シナリオ：オブジェクトの状態を監視しているときに問題を発見

このシナリオのコンテキストでオブジェクトを調査する際、vRealize Operations Manager により問題の解決に役立つ詳細が提供されます。環境の状態を分析し、現在の問題を検討し、解決策を調査し、問題解決のための対策を取ります。

ユーザー シナリオ：問題が発生したユーザーから問い合わせがあった場合

営業担当の副社長が、仮想マシン VPSALES4632 の動作が遅いとのことでヘルプ デスクに電話で問い合わせてきました。今度の会議のために営業レポートを作成しているところだが、仮想マシンのパフォーマンスが遅いために予定よりも遅れているとのことでした。

あなたはネットワーク操作エンジニアとして、午前のアラートを確認していましたが、この仮想マシンに関する問題は見つかりませんでした。このため、問題のトラブルシューティングを開始します。

手順

1 特定のオブジェクトの検索

ネットワーク操作エンジニアは、報告された問題のトラブルシューティングを開始できるように、vRealize Operations Manager でユーザーの仮想マシンの場所を特定する必要があります。

2 レポートされた問題に関連するアラートの確認

営業担当副社長から問題があるとして報告された仮想マシンに、問題の原因を示唆するアラートがあるかどうかを確認するには、vRealize Operations Manager で該当オブジェクトのアラートを確認します。

3 [トラブルシューティング] タブのオプションによる報告された問題の調査

VPSALES4632 仮想マシンで発生した問題をトラブルシューティングするために、症状の評価、タイム ライン情報の調査、イベントの検討、メトリック チャートの作成を実施して、問題の根本原因を特定します。

特定のオブジェクトの検索

ネットワーク操作エンジニアは、報告された問題のトラブルシューティングを開始できるように、vRealize Operations Manager でユーザーの仮想マシンの場所を特定する必要があります。

vRealize Operations Manager を使用して、合計で 360 台のホストと 18,000 の仮想マシンで構成された 3 つの vCenter Server インスタンスを監視します。特定の仮想マシンの場所を最も簡単に特定するには、その仮想マシンを検索します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager のタイトル バーにある [検索] テキスト ボックスに、仮想マシンの名前を入力します。

[検索] テキスト ボックスに、テキスト ボックスに入力した文字列を含むすべてのオブジェクトが表示されます。ユーザーが仮想マシン名に SALES が含まれることを知っている場合、その文字列を入力すると、該当する仮想マシンを含むリストが表示されます。

- 2 リストからオブジェクトを選択します。

結果

左側のペインに、オブジェクト名と関連するオブジェクト（ホスト システムと vCenter Server インスタンスを含む）が表示されます。メイン ペインに [サマリ] タブが表示されます。

次のステップ

報告されたオブジェクトの問題に関するアラートを探します。[レポートされた問題に関連するアラートの確認](#) を参照してください。

レポートされた問題に関連するアラートの確認

営業担当副社長から問題があるとして報告された仮想マシンに、問題の原因を示唆するアラートがあるかどうかを確認するには、vRealize Operations Manager で該当オブジェクトのアラートを確認します。

ユーザーから報告されたオブジェクト以外のオブジェクトに関するアラートを確認することで、深い洞察を得ることができます。

前提条件

顧客の仮想マシンを見つけて、関連するアラートを確認できるようにします。[特定のオブジェクトの検索](#) を参照してください。

手順

- 1 問題のあるオブジェクトの [サマリ] タブをクリックします。

[サマリ] タブには、該当オブジェクトのアクティブなアラートと、トップ アラートとして分類された子孫オブジェクトのアラートが表示されます。

- 2 健全性、リスク、および効率のトップ アラートを確認します。

トップ アラートは、アラート バッジの現在の状態をもたらした主な原因と考えられます。遅い応答の問題の原因と思われるトップ アラートがありますか？たとえば、仮想マシンへのメモリの追加が必要であることを示すバルーニング アラートやスワッピング アラートがありますか？ホストへのメモリの追加が必要であることを示す、メモリの競合に関するアラートがありますか？

- 3 報告された問題を説明すると思われる上位の問題が [サマリ] タブに表示されていない場合は、[アラート] タブをクリックします。

[アラート] タブには、現在のオブジェクトに関するすべてのアクティブなアラートが表示されます。

- 4 アラートを参照し、報告された問題と似ているか、その問題の原因となった問題があるかどうかを確認します。
 - a アクティブなアラートとキャンセルされたアラートを表示するには、[ステータス: アクティブ] をクリックし、フィルタをクリアして、アクティブおよび非アクティブなアラートを表示します。
 キャンセルされたアラートが問題に関する情報を提供する場合があります。
 - b [作成日時] 列をクリックしてアラートを並べ替えることで、顧客から問題が報告された時点以前に発生したアラートを見つけることができます。
 - c 仮想マシンのアラートと同じリストに先祖オブジェクトのアラートを表示するには、上矢印をクリックし、[ホスト システム] と [クラスタ コンピューティング リソース] (環境で構成されている場合) を選択します。
 これらのオブジェクト タイプをリストに追加することで、親オブジェクトのアラートが、報告された問題の原因となっているかどうかを確認できます。
- 5 報告された問題を説明すると思われるアラートが見つかったら、アラート リストでそのアラート名をクリックします。
- 6 アラートの詳細の [サマリ] タブで、トリガーされた症状と推奨事項を確認し、報告された問題の根本原因をアラートが示しているかどうかを確認します。

次のステップ

- アラートが問題の原因を示していると思われる場合、推奨事項に従って顧客とともに解決策を確認します。例については、[データストアに対する推奨の実行によるアラートの解決](#)を参照してください。
- 報告された問題の原因をアラートから見つけることができない場合は、より詳細なトラブルシューティングを開始します。[\[トラブルシューティング\] タブのオプションによる報告された問題の調査](#)を参照してください。

[トラブルシューティング] タブのオプションによる報告された問題の調査

VPSALES4632 仮想マシンで発生した問題をトラブルシューティングするために、症状の評価、タイム ライン情報の調査、イベントの検討、メトリック チャートの作成を実施して、問題の根本原因を特定します。

アラートを再確認しても仮想マシンについて報告された問題の原因を特定できない場合は、[トラブルシューティング]、[症状]、[タイムライン]、[イベント]、[すべてのメトリック] の各タブを使用して、同仮想マシンの過去および現在の状態をトラブルシューティングします。

前提条件

- 問題が報告されたオブジェクトの場所を特定します。[特定のオブジェクトの検索](#)を参照してください。
- 仮想マシンのアラートを見直して、問題がすでに特定されており、解決策が推奨されていないか確認します。[レポートされた問題に関連するアラートの確認](#)を参照してください。

手順

- 1 [アラート詳細] タブが表示されている状態で、左側のペインにある [仮想マシン] をクリックして、下部のリストから VPSALES4632 を選択します。

メインのペインが更新され、オブジェクトの [サマリ] タブが表示されます。

- 2 [トラブルシューティング] タブ、[症状] タブの順にクリックして、報告された問題に関連する症状がないか確認します。

アラートの構成方法によっては、一部の症状がトリガーされているが、アラートが生成されるまでにはいたっていない場合もあります。

- a 症状名をチェックして、報告された問題に関連する症状がないか確認します。

[情報] 列に、トリガー条件、傾向、現在値が表示されます。応答時間に悪影響を及ぼすよくある症状、CPU や メモリ使用量に関連する症状がないか確認します。

- b ユーザーが問題を報告した時間枠に注目できるように、[作成日時] で並べ替えます。

- c [ステータス: アクティブ] フィルタ ボタンをクリックしてこのフィルタを無効にし、アクティブおよび非アクティブな症状を確認できるようにします。

症状から判断して、CPU またはメモリ使用量に関連する問題であると推測されます。ただし、仮想マシンに関連する問題なのか、ホストの問題なのかは分かりません。

- 3 [タイムライン] タブをクリックして、アラート、症状、変更イベントを時系列でチェックします。これにより、報告された問題を引き起こしている共通の傾向を特定できることがあります。

- a 他の仮想マシンで、問題が報告されたのと同じ時間に症状がトリガーされたり、アラートが生成されていないか確認するには、[ピア イベントの表示] をクリックします。

他の仮想マシンのアラートがタイム ラインに追加されます。複数の仮想マシンが同じ時間枠に症状をトリガーしているのを確認したら、先祖オブジェクトを調査します。

- b [先祖イベントの表示] をクリックして、[ホスト システム] を選択します。

仮想マシンがデプロイされているホストに関連付けられているアラートと症状がタイム ラインに追加されます。これらの情報を基に、報告された問題とホストのアラートの間に相関関係があるかどうか判定します。

- 4 [イベント] タブをクリックして、問題のある仮想マシンについて収集されたメトリックの変化を表示し、報告された問題の原因の究明を進めます。

- a [日付コントロール] オプションを使用して、ユーザーが問題を報告したのとはほぼ同じ時間のイベントを表示します。

- b [ワークロード]、[容量]、および[負荷] バッジを順にクリックして、問題に関連するイベントがないか確認します。

- c [ビューをズーム] をクリックして、問題が報告された時点またはそれ以前に発生したイベントまたはイベント クラスにズームインします。

- d [データ値の表示] をクリックして、イベントの上にカーソルを移動し、そのイベントの詳細を表示します。
イベント チャートの下のデータ グリッドに、選択した時間に発生したイベントも表示されます。

- e 左側のペインで、[ホスト システム] をクリックし、左下ペインのリストのホスト名をクリックして、再度、[ワークロード]、[容量]、および [負荷] を使用してホストの分析を行います。

仮想マシンとホストに関するイベントを比較し、評価した結果、CPU またはメモリに関する問題が報告された問題の原因であると推定されます。

- 5** 問題が、たとえば、CPU またはメモリの使用量に関連していることが特定できたら、原因が、CPU なのかメモリなのか、または両方なのかを判定できるように、[すべてのメトリック] タブをクリックして独自のメトリックチャートを作成します。

- a ホストにまだフォーカスがあることを確認し、ホスト メトリックを使用して分析を始めます。
- b メトリック リストで、[CPU 使用率 (%)] と [メモリ使用率 (%)] メトリックをダブルクリックして、右側のワークスペースに追加します。
- c マップで、[VPSALES4632] オブジェクトをクリックします。
メトリック リストに、VPSALES4632 仮想マシンのメトリックが表示されます。
- d メトリック リストで、[CPU 使用率 (%)] と [メモリ使用率 (%)] メトリックをダブルクリックして、右側のワークスペースに追加します。
- e ホストと仮想マシンのチャートを見直して、報告された問題の原因を示唆するようなパターンが特定できないか確認します。

このシナリオでは、4 つのチャートを比較した結果、CPU の使用状況はホストおよび仮想マシンの双方で正常であり、メモリの使用量も仮想マシンでは正常であることが判明します。ところが、ホストでのメモリの使用量が、VPSALES4632 仮想マシンで問題が報告される 3 日前から一貫して高い値を示し始めています。

結果

ホストのメモリ使用量は一貫して高く、仮想マシンの応答時間に悪影響を及ぼしています。ホストで実行されている仮想マシンの数は、十分にサポートされている数の範囲内です。考えられる原因として、VPSALES4632 仮想マシン上でのアプリケーションのプロセス数が多過ぎることが挙げられます。一部の仮想マシンを別のホストに移行する、ワークロードを分散する、アイドル状態の仮想マシンをパワーオフする、といった対策が考えられます。

次のステップ

- この例では、vRealize Operations Manager を使用してホスト上の仮想マシンをパワーオフして、稼働中の仮想マシンのパフォーマンスが改善されるようにします。 [vRealize Operations Manager のツールバーからのアクションの実行](#) を参照してください。
- [すべてのメトリック] タブで作成したチャートの組み合わせを今後再利用する可能性がある場合は、[ダッシュボードの生成] をクリックします。
- 問題が解決しない場合は、調査を続行します。

ユーザー シナリオ：受信箱にアラートが到着した場合

昼食から戻ると、受信箱にアラート通知を見つけました。vRealize Operations Manager を使用して、アラートの調査や解決を行うことができます。

ネットワーク運用エンジニアは、複数のホストおよびそれらのホストのデータストアおよび仮想マシンに責任を持ちます。監視対象のオブジェクトに対してアラートが生成されると、ネットワーク運用エンジニアに電子メールが送信されます。アラートは環境内の問題について警告するだけでなく、問題を解決するために実行可能な推奨も提供します。このアラートを調査しながら、データを評価して、1 つ以上の推奨が問題を解決できるかどうかを判断します。

このシナリオは、送信アラートが SMTP を使用して標準の電子メールを送信するように構成されており、通知が標準のメール プラグインを使用して、エンジニアにアラート通知を送信するように構成されていることを前提としています。送信アラートおよび通知が構成されている場合は、アラートが生成されると vRealize Operations Manager によってメッセージが送信されるので、エンジニアは問題への対処を極力早く開始することができます。

前提条件

- 送信アラートが、標準のメール アラートに対して構成されていることを確認します。 [vRealize Operations Manager 送信アラートの標準の電子メール プラグインの追加](#) を参照してください。
- 通知が、アラート定義についてユーザーにメッセージを送信するように設定されていることを確認します。アラート通知を作成する方法の例については、[ユーザー シナリオ : vRealize Operations Manager の電子メールアラート通知の作成](#) を参照してください。

手順

1 E メールのアラートに対する応答

ネットワーク運用エンジニアは、vRealize Operations Manager から、担当するデータストアのいずれかに関する情報を記載した電子メール メッセージを受け取ります。この電子メール通知により、エンジニアが現在 vRealize Operations Manager で作業中ではない場合でも、問題についての通知を受け取ることができます。

2 影響を受けるデータストアに対して他のトリガされたシンプトムの評価

最適な応答を決定する前に、データストアに関する追加の情報が必要かどうかを判断しました。ネットワーク運用エンジニアは、[影響を受けたオブジェクトのシンプトム] タブを確認して、データストアについてトリガーされた他のシンプトムを確認します。

3 データストア アラートに対する応答におけるアラートとイベントの時系列比較

アラートを経時的に評価するには、データストアの現在のアラートおよび症状と他のアラートおよび症状、他のイベント、他のオブジェクトと時系列で比較します。

4 影響を受けるデータストアと他のオブジェクトとの関連性の表示

アラートが生成されたオブジェクトと他のオブジェクトとの関連を表示するには、vRealize Operations Manager の [関係] タブのトポロジ マップを使用して環境を可視化します。

5 データストア アラートの原因を調査するためのメトリック チャートの生成

生成されたアラートに関する容量メトリックを分析するには、vRealize Operations Manager で各種のメトリックを比較するチャートを作成します。このような比較は、環境内で変化が起こった時間や、変化がデータストアに与えた影響を確認するのに役立ちます。

6 データストアに対する推奨の実行によるアラートの解決

ネットワーク運用エンジニアとして、データストアのディスク容量に関するアラートを調査して、提供された推奨、特に未使用のスナップショットを削除する推奨が問題を解決することを判断しました。vRealize Operations Manager を使用して、スナップショットを削除します。

E メールのアラートに対する応答

ネットワーク運用エンジニアは、vRealize Operations Manager から、担当するデータストアのいずれかに関する情報を記載した電子メール メッセージを受け取ります。この電子メール通知により、エンジニアが現在 vRealize Operations Manager で作業中ではない場合でも、問題についての通知を受け取ることができます。

ご使用の電子メール クライアントに、次のメッセージのようなアラートが送信されます。

```
アラートは 7 月 1 日 火曜日 16:34:04 MDT に更新されました:情報:datastore1 データストアの動作が 6 月 30 日 月曜日 10:21:07 MDT
より異常です。最新の更新は 7 月 1 日 火曜日 16:34:04 MDT です。アラート定義名:データストアはディスク領域が不足しています。アラート定義の説明:デ
ータストアはディスク領域が不足しています。オブジェクト名:datastore1 オブジェクト タイプ:データストア アラートの影響:リスク アラートの状態:重大 アラート タ
イプ:ストレージ アラート サブタイプ:容量オブジェクトの健全性の状態:情報 オブジェクトのリスク状態:重大 オブジェクトの効率性の状態:情報 症状:症状セット
- 自己. 症状名 | オブジェクト名 | オブジェクト ID | メトリック | メッセージ情報 データストアの領域の使用量が重大な制限に達しました。
datastore1| b0885859-e0c5-4126-8eba-6a21c895fe1b | 容量 | 使用済みの領域 | HT が 99.20800922575977 を超過 >
95 推奨: - Storage VMotion の一部の仮想マシンを別のデータストアへ - 仮想マシンの未使用のスナップショットの削除 - データストアへの容量の追加
通知ルール名:すべてのアラート --- データストア. 通知ルールの説明:アラート ID:a9d6cf35-a332-4028-90f0-d1876459032b Operations
Manager Server - 192.0.2.0 アラートの詳細
```

前提条件

- 送信アラートが、標準の電子メール アラートに対して構成されていることを確認します。 [vRealize Operations Manager 送信アラートの標準の電子メール プラグインの追加](#) を参照してください。
- 通知が、アラート定義についてユーザーにメッセージを送信するように設定されていることを確認します。アラート通知を作成する方法の例については、[ユーザー シナリオ: vRealize Operations Manager の電子メールアラート通知の作成](#) を参照してください。

手順

- 1 ご使用の電子メール クライアントでメッセージを確認することにより、影響を受けるオブジェクトの状態を理解し、調査をすぐに開始すべきかどうかを決定できます。

重大度の現在のレベルおよび影響を受けるオブジェクトを判別するには、アラート名、アラートの状態を確認します。

- 2 電子メール メッセージで、[アラートの詳細] をクリックします。

vRealize Operations Manager が、生成されたアラートおよび影響を受けるオブジェクトについてのアラートの詳細の [概要] タブで開きます。

- 3 [概要] タブの情報を確認します。

オプション	評価プロセス
アラートの名前と説明	名前と説明を確認し、電子メール メッセージを受け取ったアラートを評価していることを確認します。
推奨	最上位の推奨を確認し、該当する場合は他の推奨も確認して、問題を解決するために実施する必要がある手順を理解します。優先の推奨を実施した場合、問題は解決されるでしょうか？
問題の原因は何か？	どの症状がトリガーされていますか？トリガーされていない症状はどれでしょうか？この評価は調査にどのように影響を与えましたか？この例では、データストアの領域が不足しているというアラートが構成されているため、重大度は症状ベースです。重大なアラートを受け取った場合、症状はすでに警告および緊急より高いクリティカル レベルになっていることが多いです。各症状のスパーク線またはメトリック グラフ チャートを確認して、該当のデータストア オブジェクトで問題が増大した時期を判断します。

次のステップ

- 推奨が問題を解決すると判断した場合は、それらの推奨を実行します。[データストアに対する推奨の実行によるアラートの解決](#) を参照してください。
- 影響を受けるオブジェクトについてさらに情報が必要な場合は、調査を続行します。まず、該当のデータストアに関してトリガーされているその他の症状を確認することから開始します。[影響を受けるデータストアに対して他のトリガされたシンプトムの評価](#) を参照してください。

影響を受けるデータストアに対して他のトリガされたシンプトムの評価

最適な応答を決定する前に、データストアに関する追加の情報が必要かどうかを判断しました。ネットワーク運用エンジニアは、[影響を受けたオブジェクトのシンプトム] タブを確認して、データストアについてトリガーされた他のシンプトムを確認します。

アラートに含まれているシンプトムだけでなく、オブジェクトについて別のシンプトムがトリガーされている場合は、それらのシンプトムを評価して、応答するアラートに対してこれらのシンプトムが与えている可能性がある影響、および推奨が問題を解決できる可能性があるかどうかを判別します。

前提条件

電子メールで受け取ったアラート メッセージのアラートに対応していることを確認します。[E メールのアラートに対する応答](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[アラート] アイコンをクリックします。
- 2 任意のアラート リストで、該当のアラート名をクリックします。
中央のペイン表示が変更され、アラートの詳細タブが表示されます。
- 3 [影響を受けたオブジェクトのシンプトム] タブをクリックして、アクティブなシンプトムを確認します。

オプション	評価プロセス
重要度	オブジェクトに影響を与えている同様の重要度のシンプトムはありますか？
症状	現在のアラートをトリガーしたシンプトムに関連したシンプトムはトリガーされていますか？ ストレージの問題を示す、残り時間、容量、または負荷に関連したシンプトムはありますか？
作成日時	このシンプトムの日付および時刻のスタンプは、調査しているアラートが開始される前にトリガーされており、関連するシンプトムである可能性を示していますか？ シンプトムはアラートの生成後にトリガーされており、アラートシンプトムがこれらの他のシンプトムに関連していることを示していますか？
詳細情報	トリガー メトリック値に基づき、該当のアラートシンプトムと他のシンプトムの間に相関があることが判別できますか？

次のステップ

- シンプトムおよび提供された情報が、推奨が問題を解決することを明らかに示している場合は、1つ以上の推奨を実行してください。いずれかの推奨を事項する例については、[データストアに対する推奨の実行によるアラートの解決](#) を参照してください。

- シンptomsを確認した結果、推奨が問題を解決するかどうか、または根本原因を識別するための十分な情報が提供されているかどうかを確認できなかった場合は、[タイムライン] タブを使用して、調査を続行します。[データストア アラートに対する応答におけるアラートとイベントの時系列比較](#) を参照してください。

データストア アラートに対する応答におけるアラートとイベントの時系列比較

アラートを経時的に評価するには、データストアの現在のアラートおよび症状と他のアラートおよび症状、他のイベント、他のオブジェクトと時系列で比較します。

ネットワーク運用エンジニアは、[タイムライン] タブを使用して、このアラートを環境内の他のアラートおよびイベントと比較します。これにより、1つ以上のアラートの推奨を適用することによって、ディスク領域が不足しているデータストアの問題を解決できるかどうかを判断することができます。

前提条件

電子メールで受け取ったアラート メッセージのアラートに対応していることを確認します。[E メールのアラートに対する応答](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[アラート] アイコンをクリックします。

- 2 アラート名のリンクをクリックします。

中央のペイン表示が変更され、アラートの詳細タブが表示されます。

- 3 [タイムライン] タブをクリックします。

[タイムライン] タブに、影響を受けるオブジェクトに対して生成されたアラートおよびトリガーされた症状が、スクロール可能なタイムライン形式（アラートの生成時点から開始される）で表示されます。

- 4 他のアラートがそのオブジェクトに対して生成されているかどうかを判別するには、他のアラートのボタンをクリックしてください。

この例では、データストアのアラートがリスク アラートを生成しているため、タイムラインに追加される他のアラートは健全性と効率です。最下部にある週のタイムラインをスクロールします。

- 5 アラートの原因である可能性があるイベントを表示するには、[イベント タイプの選択] をクリックして、各イベント タイプのチェック ボックスをクリックします。

オブジェクトに関連したイベントが、タイムラインに追加されます。オブジェクトの現在の状態、および推奨が問題を解決できるかどうかの評価に対してこれらのイベントを追加します。

- 6 [先祖イベントの表示] をクリックして、[ホスト] を選択します。

このアラートはディスク領域に関連しているため、タイムラインにホストを追加すると、このホストに対して生成されているアラートおよび症状を確認できるようになります。タイムラインをスクロールすると、関連アラートのいくつかはいつ開始されていますか？それらがタイムラインに表示されなくなったのはいつですか？データオブジェクトの状態に対する影響はどのようなものですか？

7 [ピア イベントの表示] をクリックします。

他のデータストアで現在調査中のアラートに関連するアラートが発生している場合は、他のデータストアのそれらのアラートがいつ生成されたかを確認すると、環境内で発生しているリソースの問題を判別するのに役立ちます。

8 キャンセルされたアラートをタイムラインから削除するには、[ステータスの選択] をクリックして、[キャンセル済み] チェック ボックスの選択を解除します。

キャンセルされたアラートおよび症状をタイムラインから削除すると、表示が分かりやすくなり、現在のアラートに集中できるようになります。

次のステップ

- タイムライン内のアラートの評価が、アラートを解決するための 1 つ以上の推奨が有効であることを示す十分な情報を提供している場合は、それらの推奨を実施してください。[データストアに対する推奨の実行によるアラートの解決](#) を参照してください。
- 影響を受けるオブジェクトについてさらに情報が必要な場合は、調査を続行します。[影響を受けるデータストアと他のオブジェクトとの関連性の表示](#) を参照してください。

影響を受けるデータストアと他のオブジェクトとの関連性の表示

アラートが生成されたオブジェクトと他のオブジェクトとの関連を表示するには、vRealize Operations Manager の [関係] タブのトポロジ マップを使用して環境を可視化します。

ネットワーク運用エンジニアとして、データストアとマップ内の関連オブジェクトを表示して、問題を詳しく理解し、アラート推奨を実装することにより、アラートで識別される問題を解決できるか判断します。

前提条件

関連オブジェクトと比較して、経時的にアラートを評価します。[データストア アラートに対する応答におけるアラートとイベントの時系列比較](#) を参照してください。

手順

1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[アラート] アイコンをクリックします。

2 アラート名のリンクをクリックします。

中央のペイン表示が変更され、アラートの詳細タブが表示されます。

3 [関係] タブをクリックします。

[関係] タブには、マップ内のデータストアが関連オブジェクトと共に表示されます。デフォルトでは、このアラートが影響するバッジがツールバーでのみ選択され、ツリー内のオブジェクトは色分けされた四角を表示して、バッジの現在の状態を示します。

4 他のバッジのオブジェクトのアラート ステータスを表示するには、[健全性] ボタンをクリックして、次に [効率] ボタンをクリックします。

各バッジ ボタンをクリックするたびに、各オブジェクトの四角にアラートが生成されたかどうかとアラートの重大度が表示されます。

- 5 オブジェクトのアラートを表示するには、オブジェクトを選択して、[アラートの表示] をクリックします。
[アラート リスト] ダイアログ ボックスが表示され、オブジェクトのアラートを検索およびソートできます。
- 6 マップ内のオブジェクトの子オブジェクトのリストを表示するには、そのオブジェクトをクリックします。
オブジェクトタイプ別の子の数のリストが中央ペインの下部に表示されます。
- 7 このオプションを使用して、データストアを評価します。
たとえば、データストアに関連付けられた仮想マシンの数についてマップから何がわかるでしょうか？ 多数の仮想マシンがデータストアに関連付けられている場合、それらを移動させれば、データストアのディスク容量が空く可能性があります。

次のステップ

- マップのレビューにより、アラートを解決する 1 つ以上の推奨が有効であることを示す十分な情報を得た場合は、その推奨を実装します。[データストアに対する推奨の実行によるアラートの解決](#) を参照してください。
- 影響を受けるオブジェクトについてさらに情報が必要な場合は、調査を続行します。[データストア アラートの原因を調査するためのメトリック チャートの生成](#) を参照してください。

データストア アラートの原因を調査するためのメトリック チャートの生成

生成されたアラートに関する容量メトリックを分析するには、vRealize Operations Manager で各種のメトリックを比較するチャートを作成します。このような比較は、環境内で変化が起こった時間や、変化がデータストアに与えた影響を確認するのに役立ちます。

ネットワーク運用エンジニアは、カスタム チャートを作成します。これにより、問題をより詳細に調査し、アラートの推奨を実行することによってアラートにより識別されている問題を解決できるかどうかを判断することができます。

前提条件

データストアのトポロジ マップを表示して、関連するオブジェクトがアラートに関係しているか、またはデータストアが環境内の他の問題に関係していることをトリガーされた症状が示しているかどうかを確認します。[影響を受けるデータストアと他のオブジェクトとの関連性の表示](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[アラート] アイコンをクリックします。
- 2 アラート名のリンクをクリックします。
中央のペイン表示が変更され、アラートの詳細タブが表示されます。
- 3 [メトリック チャート] タブをクリックします。
[メトリック チャート] タブにはチャートは含まれていません。比較を行うには、チャートを追加する必要があります。

4 最初の推奨である「データストア ストレージに容量を追加」を分析するには、関連チャートをワークスペースに追加します。

- a メトリック リストの検索テキスト ボックスに **capacity** と入力します。

リストに、検索語が含まれるメトリックが表示されます。

- b 以下のメトリックをダブルクリックして、以下のチャートをワークスペースに追加します。

- 容量 | 使用領域 (GB)
- ディスク領域 | 容量 (GB)
- 概要 | キャパシティ コンシューマ数

- c これらのチャートを比較します。

たとえば、[容量 | 使用領域 (GB)] チャートが使用領域の増加を示しているが、[ディスク領域 | 容量 (GB)] が増加しておらず、[概要 | キャパシティ コンシューマ数] が減少していない場合、容量の追加は 1 つの解決策ですが、根本原因への対処にはなりません。

5 2 つめの推奨である「vMotion の一部の仮想マシンを別のデータストアへ」を検証するには、ワークスペースに関連するチャートを追加します。

- a メトリック リストの検索テキスト ボックスに **vm** と入力します。

- b [概要 | VM の合計数] メトリックをダブルクリックして、このメトリックをワークスペースに追加します。

- c 4 つのチャートを比較します。

たとえば、[概要 | VM の合計数] チャートが、仮想マシン数がデータストアにネガティブな影響を与えるほど増加していないことを示している場合、一部の仮想マシンの移動は 1 つの解決策ですが、根本原因への対処にはなりません。

6 3 つめの推奨である「仮想マシンの未使用のスナップショットの削除」を分析するには、関連するチャートをワークスペースに追加します。

- a メトリック リストの検索テキスト ボックスに **snapshot** と入力します。

- b 以下のメトリックをダブルクリックして、チャートをワークスペースに追加します。

- ディスク領域 | スナップショット領域 (GB)
- 解放可能なディスク領域 | スナップショット領域 | 無駄な値 (GB)

- c これらのチャートを比較します。

たとえば、[ディスク領域 | スナップショット領域 (GB)] の量が増加しており、[解放可能なディスク領域 | スナップショット領域 | 無駄な値 (GB)] が容量を解放できる領域を示している場合、未使用のスナップショットの削除はデータストア ディスクの容量の問題にポジティブな影響を与え、アラートを解決します。

7 監視を続行する必要がある問題のデータストアである場合は、ダッシュボードを作成することもできます。

- a ワークスペース ツールバーにある [ダッシュボードの作成] ボタンをクリックします。
- b ダッシュボードの名前を入力し、[OK] をクリックします。

この例では、**Datastore disk space** のような名前を使用します。

使用可能なダッシュボードに、このダッシュボードが追加されます。

結果

メトリック チャートを比較して、推奨が有効かどうか、およびどの推奨を最初に実行するかを判断しました。この例では、「仮想マシンの未使用のスナップショットの削除」という推奨がアラートを解決する可能性が最も高いようです。

次のステップ

このアラートの推奨を実行します。[データストアに対する推奨の実行によるアラートの解決](#) を参照してください。

データストアに対する推奨の実行によるアラートの解決

ネットワーク運用エンジニアとして、データストアのディスク容量に関するアラートを調査して、提供された推奨、特に未使用のスナップショットを削除する推奨が問題を解決することを判断しました。vRealize Operations Manager を使用して、スナップショットを削除します。

vCenter Adapter でアクションを有効にしていない場合は、vCenter Server インスタンス上のスナップショットを手動で削除できます。

前提条件

- メトリック チャートを比較して、アラートの根本原因として可能性のあるものを特定します。[データストア アラートに対する応答におけるアラートとイベントの時系列比較](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[アラート] アイコンをクリックします。
- 2 アラート名のリンクをクリックします。
- 3 [サマリ] タブをクリックします。
- 4 [その他の推奨] 矢印をクリックして、リストを拡張します。

他の推奨には、vMotion の一部の仮想マシンを別のデータストアに保存 推奨や 仮想マシンの未使用のスナップショットを削除 推奨などがあります。未使用のスナップショットの削除推奨には、操作ボタンが含まれます。

- 5 [データストアの未使用のスナップショットの削除] をクリックします。
- 6 [経過日数] テキストボックスで、スナップショットを削除するために取得する経過日数を選択または入力して、[OK] をクリックします。

たとえば、30 日以上経過したデータストア上のすべてのスナップショットを取得するには、30 と入力します。

- 7 [データストアの未使用のスナップショットの削除] ダイアログボックスで、スナップショット容量、スナップショット作成時間および VM 名を確認して削除するスナップショットを決め、削除する各スナップショットのチェックボックスをオンにします。

- 8 [OK] をクリックします。

表示されるダイアログボックスは、最近のタスクへのリンクと特定のタスクへのリンクを提供します。

- 9 タスクが正しく実行されたことを確認するには、[最近のタスク] をクリックします。

[最近のタスク] ページが表示されます。[使用されていないスナップショットの削除] アクションには、スナップショットの取得とスナップショットの削除という 2 つのタスクが含まれます。

- 10 一番最近の完了時間の [使用されていないスナップショットの削除] タスクを選択します。

これは削除タスクです。ステータスは、完了済み でなければなりません。

結果

この例では、vCenter Server のデータストアでアクションを実行しました。他の推奨も有効である可能性があります。

次のステップ

- 推奨でアラートが解決されることを確認します。アクションを実行し、アラートがキャンセルされたことを確認した後、いくつか収集サイクルを実行できます。アラートを生成した条件が true でなくなると、アラートはキャンセルされます。
- 他の推奨を実装します。このアラートの他の推奨では、他のアプリケーションを使用する必要があります。vRealize Operations Manager から推奨を実装できません。
- 他のオプションを使用して、根本原因を調査してください。問題の根本原因を調査するための代替例については、『[ユーザー シナリオ：\[トラブルシューティング\] タブのオプションを使用して問題の根本原因を調査する](#)』を参照してください。

ユーザー シナリオ：オブジェクトの状態を監視しているときに問題を発見

このシナリオのコンテキストでオブジェクトを調査する際、vRealize Operations Manager により問題の解決に役立つ詳細が提供されます。環境の状態を分析し、現在の問題を検討し、解決策を調査し、問題解決のための対策を取ります。

仮想インフラストラクチャの管理者として、自分が管理している環境内のオブジェクトの全体的な状態を把握するため、vRealize Operations Manager を様々なレベルで定期的に参照します。ユーザーからの問題報告はなく、新しいアラートも表示されていませんが、管理者には、クラスタのキャパシティが不足している兆候が見え始めています。

このシナリオでは vRealize Operations Manager を 1 つ以上の vCenter Server インスタンスに接続する、VMware vSphere ソリューションに関連するオブジェクトについて言及しています。環境内のオブジェクトには、複数の vCenter Server インスタンス、データ センター、クラスタ（クラスタ コンピューティング リソース）、ホスト システム、リソース プール、および仮想マシンが含まれます。

このシナリオの手順を実行し、トラブルシューティングの段階に進むと、vRealize Operations Manager を使用して問題を解決するのに役立つ方法を学習できます。環境内のオブジェクトの状態を分析し、現在の問題を検討し、解決策を調査し、問題解決のための対策を取るようになります。

このシナリオでは、オブジェクトで発生する問題を評価し、問題を解決するための対策を取る方法を示します。

- [分析] タブでは、オブジェクト リソースの設定を表示し、問題をさらに分析するために用意されたリンクをクリックして、ポリシー設定やしきい値を調べます。
- [トラブルシューティング] タブでは、オブジェクトでトリガされたシンプトムを調べ、シンプトムをトリガーした問題がいつ発生したかを判断し、さらに問題に関連するイベントを特定して関係するメトリック値を調べます。
- [詳細] タブでは、メトリックのアクティビティをグラフ、リスト、または展開チャートとして調査し、ヒートマップを表示してオブジェクトの重要度レベルを調べます。
- [環境] タブでは、さまざまなオブジェクトが全体的なオブジェクト階層に関連するときの、健全性、リスク、および効率を評価します。オブジェクトの関係を表示して、クリティカルな状態のオブジェクトが他のオブジェクトにどのような影響を与えている可能性があるかを判断します。

将来のトラブルシューティングおよび実行中のメンテナンスをサポートするために、新しいアラート定義を作成し、ダッシュボードおよび1つ以上のビューやレポートを作成できます。新しく承認されたプロジェクトの拡張およびアカウントを計画するため、キャパシティ プロジェクトを作成してコミットできます。オブジェクトの監視に使用されるルールを強制するため、運用ポリシーを作成してカスタマイズできます。

前提条件

1 つ以上の vCenter Server インスタンスを監視していることを確認します。

手順

1 環境の状態の分析

[分析] タブは、オブジェクトをさまざまな方法で分析するのに便利です。仮想インフラストラクチャ管理者は、[分析] タブを使用することで、オブジェクトの状態についての詳細を検討し、問題の解決に役立てることができます。

2 ホスト システムの問題のトラブルシューティング

[トラブルシューティング] タブを使用して、アラートの推奨事項や簡単な分析で解決されない問題の根本原因を特定できます。

3 環境の詳細を調べる

クラスタとオブジェクトのリソースで発生しているトレンドやスパイクを特定できるように、ビューとヒートマップでオブジェクトのステータスを調べます。何らかの逸脱が発生しているかどうかを調べるために、クラスタ ディスク領域使用量の内訳など、オブジェクトの全体的なサマリを表示できます。

4 環境の関係を調査する

[環境概要] と [リスト] を使用し、環境階層内のオブジェクトに関連しているバジのステータスを調べ、どのオブジェクトが特定のバジに関してクリティカルな状態にあるかを判断します。オブジェクト間の関係を確認して、クリティカルな問題が発生している先祖オブジェクトがその子孫に問題を引き起こしている可能性があるかどうかを判断するには、環境マップを使用します。

5 問題を修正する

vRealize Operations Manager の分析機能とトラブルシューティング機能を使用し、オブジェクトをクリティカルな状態にしている問題を調べ、解決策を特定します。問題を解決するには、オブジェクト タイプのアクションが存在する場合は、オブジェクトと、そのオブジェクトに固有の実行可能なアクションを選択します。あるいは、vSphere Web Client でそのオブジェクトを開き、オブジェクトの設定を変更することによって問題を解決することもできます。

6 新しいアラート定義の作成

問題の根本原因と問題の修正に使用した解決策に基づき、vRealize Operations Manager がアラートを表示するための新しいアラート定義を作成できます。ホスト システムでアラートが起動されると、vRealize Operations Manager はアラートを表示するとともに、その問題の解決方法についての推奨事項を提示します。

7 ダッシュボードとビューを作成する

クラスタとホスト システムで今後発生する可能性のある問題の調査とトラブルシューティングに役立てるために、ホスト システムの問題の調査と解決に使用したトラブルシューティング用のツールとソリューションを適用するダッシュボードとビューを作成し、それらのツールとソリューションを将来使用できるように設定できます。

環境の状態の分析

[分析] タブは、オブジェクトをさまざまな方法で分析するのに便利です。仮想インフラストラクチャ管理者は、[分析] タブを使用することで、オブジェクトの状態についての詳細を検討し、問題の解決に役立てることができます。

インベントリ ツリー内を見ている間に、USA-Cluster というクラスタの 1 つでキャパシティの問題が発生していることに気づいたとします。[分析] タブを使用して USA-Cluster 上の問題の原因の調査を開始するとともに、ホスト システムの 1 つと他のオブジェクト上でキャパシティの問題と共に報告される問題の確認を開始します。

前提条件

このシナリオのコンテキストを理解していることを確認します。[ユーザー シナリオ: オブジェクトの状態を監視しているときに問題を発見](#) を参照してください。

手順

1 [環境] - [vSphere ホストおよびクラスタ] - [USA-Cluster] の順にクリックします。

2 [[分析]] タブをクリックします。

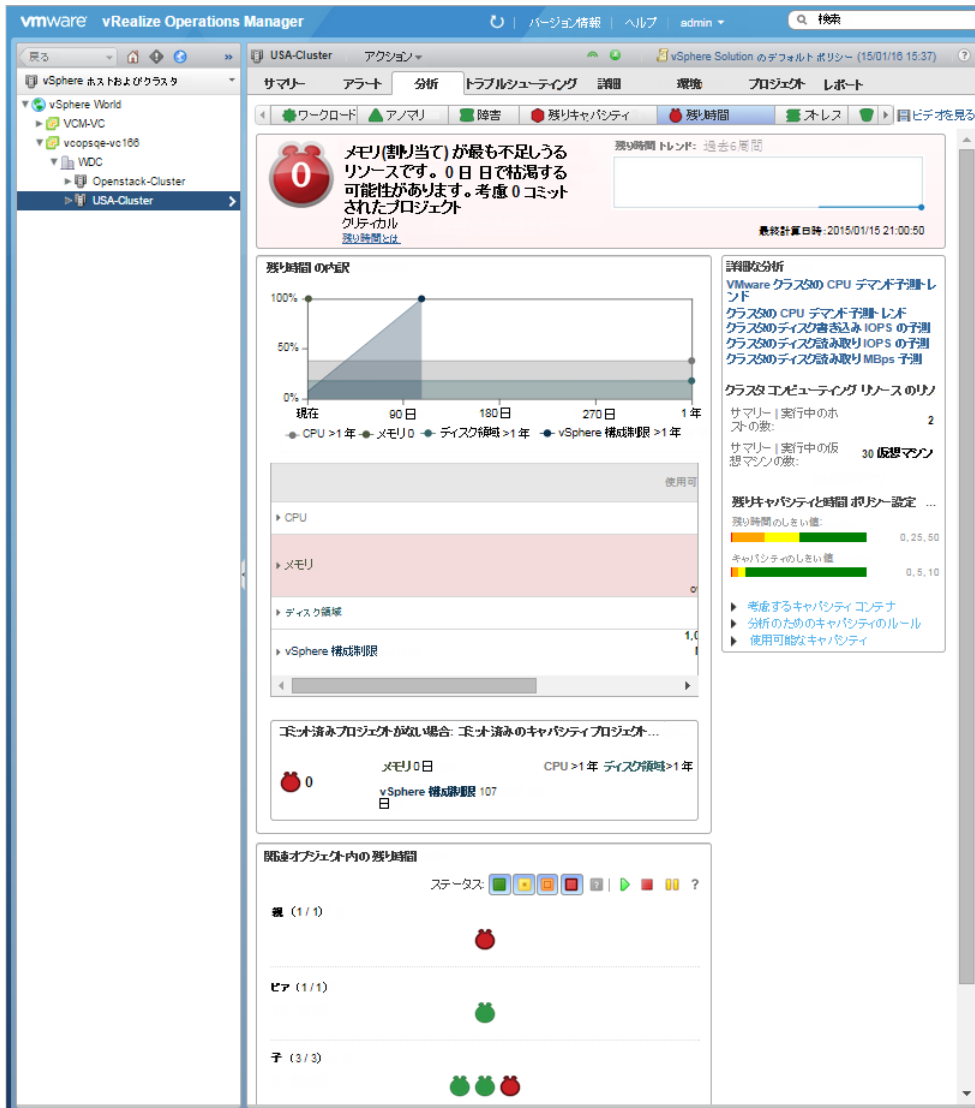
[残り容量] タブと [残り時間] タブに赤いアイコンが表示されます。

3 [残り時間] タブをクリックします。

メモリ割り当てが厳しく制限されていることがわかります。

4 クラスタの残り時間の内訳を確認します。

アイコンから、1日も残っておらず、計画済みのキャパシティ プロジェクトが考慮されていないことがわかりま



す。

5 [関連オブジェクト] ペインに [残り時間] が表示されるまで下方向にスクロールします。

親オブジェクトはデータ センターで、ピアは他のクラスタを表します。子オブジェクトにはリソース プールとホスト システムが含まれます。データ センターと、ホスト システムの1つでは、クリティカルなメモリの問題が発生しています。

6 マウスを赤い親アイコンと子アイコンの上に移動します。

データ センターと、ホスト システムの1つでは、メモリ容量がすでになくなっています。

結果

クラスタ上のメモリ容量の問題は、関連するオブジェクトのメモリ容量に影響を与えています。

次のステップ

[トラブルシューティング] タブを使用し、クラスタとホスト システム上のキャパシティの問題をさらにトラブルシューティングします。

ホスト システムの問題のトラブルシューティング

[トラブルシューティング] タブを使用して、アラートの推奨事項や簡単な分析で解決されない問題の根本原因を特定できます。

クラスタとホスト システムで発生しているキャパシティの問題の症状のトラブルシューティングをさらに進め、それらの問題がいつ発生したかを確認するには、[トラブルシューティング] タブを使用して引き続きメモリの問題を調べます。

前提条件

[分析] タブを使用して環境を分析します。 [環境の状態の分析](#) を参照してください。

手順

1 [環境] - [vSphere ホストおよびクラスタ] - [USA-Cluster] の順にクリックします。

2 [トラブルシューティング] タブをクリックし、症状を確認します。

[症状] タブには、選択したクラスタでトリガーされた症状が表示されます。クリティカルな症状がいくつか存在することに気付きました。

- コミット済みプロジェクトのクラスタ コンピューティング リソースの残り時間が極めて少なくなっています
- クラスタ コンピューティング リソースの残り時間が極めて少なくなっています
- 残りキャパシティが極めて少なくなっています

3 クリティカルな症状を分析します。

- a マウスをそれぞれのクリティカルな症状の上に移動し、使用されているメトリックを特定します。
- b クラスタに影響を与えている症状だけを表示するには、クイック フィルタ テキスト ボックスに **cluster** と入力します。

マウスを Cluster Compute Resource Time Remaining is critically low の上に移動すると、メトリック Badge|Time Remaining with committed projects (%) が表示されます。その値が 0 以下であることがわかります。USA-Cluster でキャパシティについての症状によってアラートがトリガーされ生成されたのはこのためです。

4 [タイムライン] タブをクリックし、USA-Cluster 上で時間とともに発生したトリガーされた症状、アラートおよびイベントを確認し、問題がいつ発生したかを特定します。

- a ツールバーで、[イベント タイプの選択] をクリックします。
- b [日付コントロール] をクリックし、[過去 7 日間] を選択します。
いくつかのイベントが赤色で表示されます。
- c マウスを各イベントの上に移動し、詳細を確認します。

- d クラスターのデータ センターで発生したイベントを表示するには、[先祖イベントの表示] をクリックし、[データセンター] を選択します。

そのデータセンターの警告イベントは黄色で表示されます。

- e マウスを警告イベントの上に移動します。

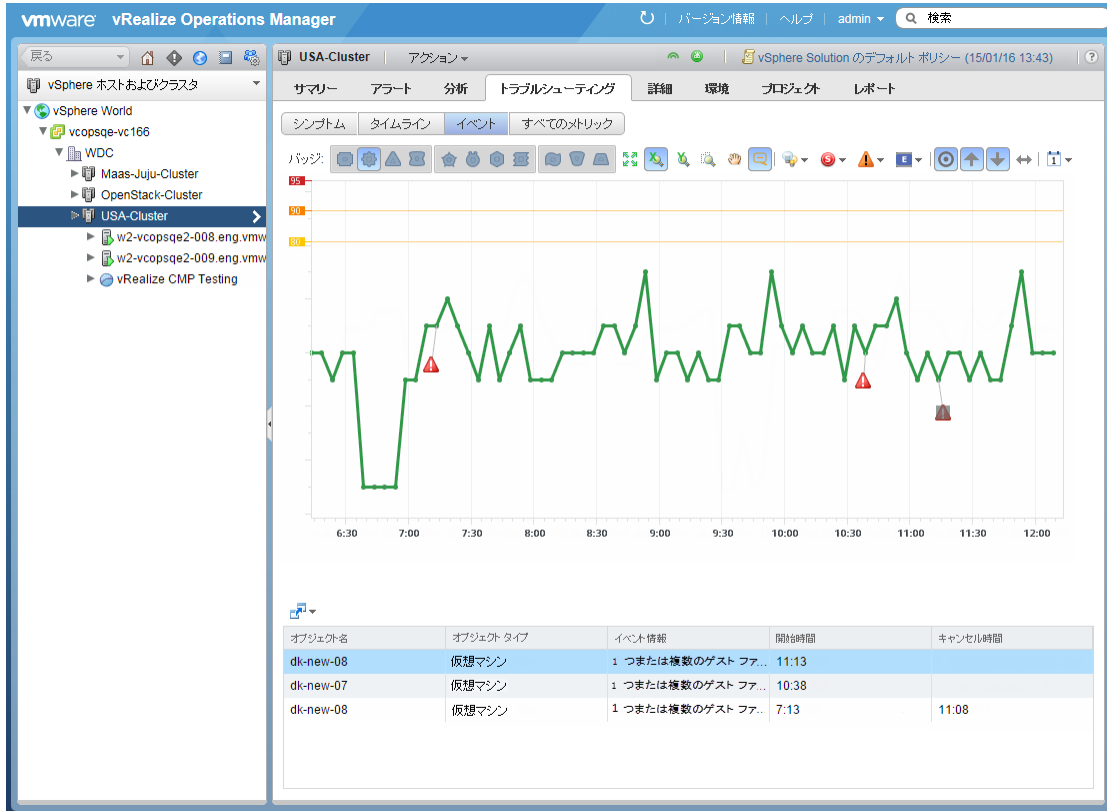
統合度が低くなり始めていることと、夕方遅くにデータ センターでハードしきい値違反が発生したことがわかります。このハードしきい値違反は、Badge|Density メトリック値が受容可能な値である 25 未満であったことと、その違反が値 14.89 でトリガーされたことを示しています。

- f 影響を受ける子オブジェクトを表示するには、[子孫イベントの表示] をクリックし、[ホスト システム] を選択します。

- 5 [イベント] タブをクリックし、USA-Cluster で発生した変更を調べ、そのアラートまたはクラスタでの他の問題の根本原因に関係する変更が発生したかどうかを判断します。

- a ツールバーで各バッジをクリックし、発生したイベントを確認します。

ワークロード バッジは、クラスタで発生したイベントのグラフを表示します。グラフのさまざまな位置に赤い三角形がいくつか表示されます。



- b マウスを赤色の各三角形の上に移動します。

グラフを確認すると、再発しているイベントによってエラーが引き起こされたかどうかを判断できます。各イベントは、ゲスト ファイル システムでディスク領域不足が発生していることを示しています。該当するオブジェクトは、グラフの下のパインに表示されます。

- c 赤色の各三角形をクリックして該当するオブジェクトを確認し、そのオブジェクトを下のパインでハイライト表示します。

- 6 問題の考えられる原因の特定するには、[すべてのメトリック] タブをクリックし、オブジェクトを環境トポロジにおけるそれらのコンテキストで評価します。

- a 最上部のビューで、[USA-Cluster] を選択します。

- b メトリック ペインで、[バッジ] を展開し、[Badge|Capacity Remaining (%)] をダブルクリックします。

Badge|Capacity Remaining (%) 計算が右下のパインに追加されます。

- c メトリック ペインで、[統合度] をダブルクリックします。

- d メトリック ペインで、[ワークロード] をダブルクリックします。
- e ツールバー上で、[日付コントロール] をクリックし、[過去 7 日間] を選択します。

このメトリック チャートは、クラスタのキャパシティは過去 1 週間安定したレベルにあったが、クラスタ統合度は過去数日間でその最高値まで上昇したということを示しています。バッジ|ワークロード (%) 計算は、この統合度の問題に対応するワークロードの両極を表示しています。

結果

以上の操作で、クラスタ上の問題に関連するシンプトム、タイムライン、イベント、およびメトリックを分析し、過去数日間でクラスタ上の負荷の高いワークロードによってクラスタ統合度が下がった（クラスタでキャパシティが不足し始めたことを示す）ことを確認しました。

次のステップ

詳細ビューとヒートマップを調べ、プロパティ、メトリック、およびアラートを判断することにより、オブジェクトのリソースで発生するトレンドとスパイクや、オブジェクト全体にわたるリソース配分やデータ マップなどを確認し、オブジェクト全体におけるさまざまなリソース タイプの使用量を調べます。

環境の詳細を調べる

クラスタとオブジェクトのリソースで発生しているトレンドやスパイクを特定できるように、ビューとヒートマップでオブジェクトのステータスを調べます。何らかの逸脱が発生しているかどうかを調べるために、クラスタ ディスク領域使用量の内訳など、オブジェクトの全体的なサマリを表示できます。

USA-Cluster の問題をさらに調べるには、詳細ビューを使用してクラスタのメトリックと収集されたキャパシティデータを表示します。各ビューには、オブジェクトから収集された具体的なメトリック データが含まれます。たとえば、トレンド ビューは一定期間にわたってオブジェクトから収集されたデータを使用し、メモリ、CPU、ディスク領域などのリソースのトレンドと予測を生成します。

ヒートマップを使用し、クラスタ、ホスト システム、および仮想マシンのキャパシティ レベルを調べます。ブロックのサイズと色は、ヒートマップ構成で選択されているメトリックに基づいています。たとえば、仮想マシンのほとんどの異常ワークロードを表示するヒートマップは、バッジ|ワークロード (%) メトリックによってサイズ調整され、バッジ|アノマリ メトリックによって色づけされます。

前提条件

根本原因を探すには [トラブルシューティング] タブを使用します。[ホスト システムの問題のトラブルシューティング](#) を参照してください。

手順

- 1 [環境] - [vSphere ホストおよびクラスタ] - [USA-Cluster] の順にクリックします。

2 ビューで、USA-Cluster についての詳細情報を調べます。

- a [詳細] タブをクリックし、[ビュー] をクリックします。

ビューには、収集されたさまざまなタイプのデータをトレンド、リスト、分布、サマリ別に調べるための複数の方法が用意されています。

- b 検索テキスト ボックスに、**capacity** と入力します。

このリストには、クラスタなどのオブジェクトのキャパシティ ビューがフィルタリングされて表示されます。

- c [クラスタの容量リスク予測] というビューをクリックし、下側のペインで USA-Cluster の仮想マシンの数を調べます。

USA-Cluster には 2 つのホスト システムと 30 台の仮想マシンが存在しますが、キャパシティがまったくありません。

3 クラスタ内のホスト システムを調べ、子孫仮想マシンからキャパシティを解放します。

- a [分析] タブをクリックし、[残り容量] をクリックします。

- b インベントリ ツリーで、[USA-Cluster] を展開し、各ホスト システムをクリックします。

w2-vcopsqe2-009 というホスト システムはクリティカルな状態にあり、キャパシティが残っていません。

- c 下側のペインで、[メモリ] を展開し、[割り当て] を展開します。

[ストレスなしの値] はゼロで、[使用できるメモリの量] もゼロです。これは、ホスト システムのキャパシティが使い果たされていることを示します。

- d [詳細] タブをクリックし、[ビュー] をクリックし、[仮想マシンの節約可能なキャパシティ] ビューをクリックします。

- e 下側のペインで、[節約可能なメモリ] 列のタイトルをクリックして仮想マシンのリストを並べ替え、節約可能なキャパシティの最大量を先頭に表示するようにします。

- f いくつかの仮想マシンからキャパシティを解放するため、最初の仮想マシン名の右側をクリックし、[Shift] キーを押した状態で、解放するキャパシティがある最後の仮想マシンをクリックします。

節約可能なキャパシティがある仮想マシンは強調表示されます。

- g 歯車アイコンをクリックし、[仮想マシン用 CPU 数およびメモリの設定] を選択します。

- h [現在の CPU] 列のタイトルをクリックし、CPU の最大数に基づいてリストを並べ替えます。

一覧表示されている仮想マシンの実際の使用量に基づき、[新しい CPU] 列には仮想マシンごとに CPU の減少数が提示されます。

- i CPU の減少数が提示された各仮想マシンの横のチェック ボックスをクリックし、[OK] をクリックします。

仮想マシンごとに CPU 数を減らすことで、ホスト システムのキャパシティが解放され、USA-Cluster のキャパシティが増加しワークロードが向上します。

4 USA-Cluster 内のホスト システムおよび仮想マシンのオブジェクトのヒートマップを調べます。

- a インベントリ ツリーで [USA-Cluster] をクリックします。
- b [詳細] をクリックし、[ヒートマップ] をクリックし、一連のヒートマップ ビューを順にクリックします。
- c [どの仮想マシンの CPU デマンドが最も高く、競合が発生しているか?] をクリックします。

ヒートマップには、USA-Cluster 内のオブジェクトに相当するブロックが表示されます。ある仮想マシンのブロックは赤色で表示されます。これは、この仮想マシンにクリティカルな問題があることを示します。

- d 赤いブロックにマウスを移動し、詳細を調べます。

クラスタ、ホスト システム、および仮想マシンの名前が、これらのオブジェクトの詳細へのリンクとともに表示されます。

- e [スパークラインを表示] をクリックし、仮想マシンのアクティビティ トレンドを表示します。
- f 各 [詳細] リンクをクリックし、詳細を表示します。

結果

仮想マシンのメモリを解放したことでホスト システムとクラスタのワークロードが向上したことを確認するため、ここでホスト システムとクラスタのステータスを調べることができます。

ビューとヒートマップを使用してオブジェクトのステータスを評価し、トレンドとスパイクを特定し、ホスト システムと USA-Cluster のキャパシティを解放しました。問題をさらに絞り込むために、他のビューとヒートマップを調べることができます。また、独自のビューとヒートマップを作成することもできます。

次のステップ

環境階層内のオブジェクトのバッジ ステータスを調べてどのオブジェクトがクリティカルな状態にあるかを判断し、オブジェクト関係を調べて 1 つのオブジェクトにおける問題が 1 つ以上の他のオブジェクトに影響を与えているかどうかを判断します。

環境の関係を調査する

[環境概要] と [リスト] を使用し、環境階層内のオブジェクトに関連しているバッジのステータスを調べ、どのオブジェクトが特定のバッジに関してクリティカルな状態にあるかを判断します。オブジェクト間の関係を確認して、クリティカルな問題が発生している先祖オブジェクトがその子孫に問題を引き起こしている可能性があるかどうかを判断するには、環境マップを使用します。

[環境概要] で各バッジをクリックしたときに、いくつかのオブジェクトで健全性、ワークロード、および障害に関連するクリティカルな問題が発生していることがわかりました。リスクがクリティカルなステータスを示しているオブジェクトもあります。多くのオブジェクトは、残り時間と残りキャパシティがクリティカルな状態にあります。

いくつかのオブジェクトではストレスが高くなっています。複数の仮想マシンとホスト システムからキャパシティを解放できますが、環境の全体的な効率ステータスには問題が 1 つも表示されていません。

前提条件

ビューとヒートマップでオブジェクトのステータスを調べます。[環境の詳細を調べる](#) を参照してください。

手順

- 1 [環境] - [vSphere ホストおよびクラスタ] - [USA-Cluster] の順にクリックします。
- 2 USA-Cluster の環境概要を調べ、階層ビュー内のオブジェクトのバッジ状態を評価します。
 - a インベントリ ツリーで、[USA-Cluster] をクリックし、[環境 > 概要] をクリックします。
 - b [バッジ] ツールバーで、バッジを順にクリックし、赤いアイコンを探してクリティカルな問題を特定します。

オプション	評価プロセス
[ステータス] アイコン	オブジェクトがクリティカル ステータスのとき、問題を解決するには何をする必要がありますか。 クリティカルな問題が発生する前に通知を受けるにはどうすればいいですか。
バッジ：健全性、ワークロード、アノマリ、障害	ホスト システムの健全性とワークフローは仮想マシンにどのような影響を与えている可能性がありますか。 ホスト システムと仮想マシンのアノマリと障害は他のオブジェクトに影響を与えていますか。
バッジ：リスク、残り時間、残りキャパシティ、ストレス	クラスタとホスト システムのストレス レベルは仮想マシンの子孫にどのような影響を与えますか。
バッジ：効率、節約可能なキャパシティ、統合度	効率を高めるため、クラスタ、ホスト システム、リソース プール、および仮想マシンからキャパシティを解放し、解放されたキャパシティを環境内の他のオブジェクトに適用するにはどのような方法がとれますか。

バッジを順にクリックしていて、vCenter Server などのトップ レベルのオブジェクトは正常のようでありながら、ホスト システムといくつかの仮想マシンは健全性、ワークロード、障害の面でクリティカルな状態にあることに気付きました。いくつかのオブジェクトは、残り時間と残りキャパシティにもクリティカルな問題があります。

- c マウスをホスト システムの赤いアイコンの上に移動し、IP アドレスを表示します。
 - d 検索テキスト ボックスに IP アドレスを入力し、表示されるリンクをクリックします。

ホスト システムはインベントリ ツリーでハイライト表示されます。続いて、[サマリー] タブでホスト システムに対する推奨事項またはアラートを検索することができます。
- 3 環境リストを調べ、オブジェクトのバッジ ステータスを確認して、どのオブジェクトがクリティカルな状態にあるかを判断します。
 - a [環境 > リスト] をクリックします。
 - b USA-Cluster 内のオブジェクトのバッジ状態を調べます。
 - c [残りキャパシティ] バッジ列名をクリックしてオブジェクト リストを並べ替えて、クリティカルな状態にあるオブジェクトを表示します。

残りキャパシティがリスク状態にあるオブジェクトの多くは、残り時間、リスク、および健全性でもクリティカルな状態が表示されています。複数の仮想マシンとホスト システム (w2-vropsqe2-009) は大きな影響を受けていることに気付きました。ホスト システムでは最もクリティカルな問題が発生しており、他のオブジェクトに影響を与えている可能性があるため、ホスト システムの問題の解決に専念する必要があります。

- d クリティカルな状態にある、[w2-vropsqe2-009] という名前のホスト システムをクリックし、これをインベントリ ツリーに割り当てます。
- e アクションを実行できるようにするため、インベントリ ツリーで [w2-vropsqe2-009] をクリックして [サマリー] タブをクリックし、推奨事項とアラートを検索します。

4 環境マップを調べます。

- a [環境 > マップ] をクリックします。
- b インベントリ ツリーで、[USA-Cluster] をクリックし、関連するオブジェクトのマップを表示します。

関係マップ内では、USA-Cluster に先祖データ センターが 1 つ、子孫リソース プールが 1 つ、子孫ホスト システムが 2 つあることがわかります。

- c [w2-vropsqe2-009] という名前のホスト システムをクリックします。

このホスト システムの子孫オブジェクトのタイプと数が、下にあるリストに表示されます。問題が発生している可能性があるホスト システムに関連するオブジェクトをすべて特定するには、子孫オブジェクト リストを使用します。

次のステップ

ユーザー インターフェイスでアクションを実行し、問題を解決します。

問題を修正する

vRealize Operations Manager の分析機能とトラブルシューティング機能を使用し、オブジェクトをクリティカルな状態にしている問題を調べ、解決策を特定します。問題を解決するには、オブジェクト タイプのアクションが存在する場合は、オブジェクトと、そのオブジェクトに固有の実行可能なアクションを選択します。あるいは、vSphere Web Client でそのオブジェクトを開き、オブジェクトの設定を変更することによって問題を解決することもできます。

ユーザー インターフェイスの [分析]、[トラブルシューティング]、[詳細]、および [環境] 領域を使用して、オブジェクトで発生しているクリティカルな問題を調べました。それらの問題を解決するには、[アクション] メニュー（リストとビューのメニューに表示される）とさまざまなダッシュボード ウィジェットからアクションを選択できます。

選択できるアクションは、オブジェクト タイプ（仮想マシンなど）に固有のものです。アクションの選択はキャパシティと時間に関連するクリティカルな問題が発生しているホスト システムを選択した時点で行うことができますが、1 つを除き、実行できるアクションのすべてが仮想マシンに適用されます。未使用のスナップショットを削除するアクションは、データストアに適用されます。

前提条件

環境の関係を調査する[環境の関係を調査する](#)を参照してください。

手順

- 1 [環境] - [vSphere ホストおよびクラスタ] - [USA-Cluster] の順にクリックします。
- 2 [詳細] ビューからホスト システムを選択し、アクションを実行します。
 - a インベントリ ツリーで、[w2-vropsqe2-009] という名前のホスト システムをクリックします。
 - b [詳細 > ビュー] をクリックし、検索テキスト ボックスに **memory** と入力します。

- c [ホストの CPU、メモリ、ディスク領域の適正値化] というビューをクリックします。

w2-vropsqe2-009 という名前のホスト システムが下側のペインに表示されます。ホスト システムのプロビジョニングされた CPU とメモリがキャパシティを浪費しており、ホスト システム上のキャパシティの問題を解決するための一案として、一部のキャパシティを解放できることがわかります。

プロビジョニング済み	推奨	節約可能
16 個のコア CPU	10 個のコア CPU	35 個のコア CPU
127GB のメモリ	35GB のメモリ	68GB のメモリ
4,011GB のディスク領域	11,158GB のディスク領域	122GB のディスク領域

- d 下側のペインで、[w2-vropsqe2-009] という名前のホスト システムの右側をクリックします。
- e 下側のペインにあるツールバーで、[外部アプリケーションで開く] アイコンをクリックし、[vSphere Client でホストを開く] をクリックします。
- f vSphere Web Client にログインし、ホスト システムのプロビジョニングされた CPU とメモリを変更します。

3 (オプション) [環境] ビューからホスト システムを選択し、アクションを実行します。

- a インベントリ ツリーで [USA-Cluster] をクリックします。
- b [環境 > リスト] をクリックします。
- c w2-vropsqe2-009 ホスト システムの名前の右側をクリックします。
- d 下側のペインで、[w2-vropsqe2-009] という名前のホスト システムの右側をクリックします。
- e 下側のペインにあるツールバーで、[外部アプリケーションで開く] アイコンをクリックし、[vSphere Client でホストを開く] をクリックします。
- f vSphere Web Client にログインし、ホスト システムのプロビジョニングされた CPU とメモリを変更します。

4 (オプション) インベントリ ツリーからホスト システムを選択し、アクションを実行します。

- a インベントリ ツリーで、[w2-vropsqe2-009] をクリックします。
- b 右側のペインにあるツールバーの最上部で、[アクション] をクリックします。
- c [vSphere Client でホストを開く] をクリックします。
- d vSphere Web Client にログインし、ホスト システムのプロビジョニングされた CPU とメモリを変更します。

結果

実行可能なアクションを使用して、クリティカルな問題が発生しているホスト システム上の問題を解決しました。実行可能なアクションは、[内容 > アクション] に表示されます。

次のステップ

他のオブジェクトのパフォーマンスと環境に悪影響を与える前にオブジェクトのクリティカルな問題に気付くようにするには、アラート定義を作成し、必要に応じてアラート定義推奨にアクションを追加します。

新しいアラート定義の作成

問題の根本原因と問題の修正に使用した解決策に基づき、vRealize Operations Manager がアラートを表示するための新しいアラート定義を作成できます。ホスト システムでアラートが起動されると、vRealize Operations Manager はアラートを表示するとともに、その問題の解決方法についての推奨事項を提示します。

ホスト システムでクリティカルなキャパシティの問題が発生する前にアラートが表示され、vRealize Operations Manager によって前もって問題が通知されるようにするため、アラート定義を作成してシンプトムの定義を追加できます。

手順

- 1 左側のペインで、[内容 > アラートの定義] をクリックします。

- 2 検索テキスト ボックスに、**capacity** と入力します。

利用可能なキャパシティ アラート定義のリストを確認します。ホスト システムにキャパシティ アラート定義が存在しない場合は、キャパシティ アラート定義を作成できます。

- 3 プラス記号をクリックし、ホスト システムの新しいキャパシティ アラート定義を作成します。

- a アラート定義ワークスペースで、[名前と説明] に **Hosts – Alert on Capacity Exceeded** と入力します。
- b [ベース オブジェクト タイプ] で、[vCenter アダプタ > ホスト システム] を選択します。
- c [アラートの影響] で次のオプションを選択します。

オプション	選択内容
影響	[リスク] を選択します。
重要度	[緊急] を選択します。
アラート タイプとアラート サブタイプ	[アプリケーション：容量] を選択します。
待機サイクル	[1] を選択します。
キャンセル サイクル	[1] を選択します。

- d [シンプトムの定義の追加] で次のオプションを選択します。

オプション	選択内容
定義対象	[自己] を選択します。
シンプトムの定義のタイプ	[メトリック / スーパーメトリック] を選択します。
クイック フィルタ (名前)	capacity と入力します。

- e [シンプトムの定義] リストで、[ホスト システムの残りキャパシティが若干少なくなっています] をクリックし、これを右側のペインにドラッグします。

[シンプトム] ペインで、[基本オブジェクトの表示基準] がデフォルトで [すべて] に設定されていることを確認します。

- f [推奨事項の追加] で、[クイック フィルタ] テキスト ボックスに **virtual machine** と入力します。
- g [リストされたシンプトムを確認し、仮想マシンから推奨される数の vCPU を削除します] をクリックし、これを右側のペインの推奨事項領域にドラッグします。

この推奨事項は優先度 1 に設定されています。

- 4 [保存] をクリックし、このアラート定義を保存します。

アラート定義のリストに作成した新しいアラートが表示されます。

結果

ホスト システムのキャパシティが不足し始めたときに vRealize Operations Manager にアラートを表示させるアラート定義の追加が完了しました。

ダッシュボードとビューを作成する

クラスタとホスト システムで今後発生する可能性のある問題の調査とトラブルシューティングに役立てるために、ホスト システムの問題の調査と解決に使用したトラブルシューティング用のツールとソリューションを適用するダッシュボードとビューを作成し、それらのツールとソリューションを将来使用できるように設定できます。

CIO がクラスタとホスト システムの健全性について確認するときに、クラスタとホスト システムのステータスを簡単に表示するには、vRealize Operations Manager のホームページにある決定サポート ダッシュボードを使用できます。たとえば次のことができます。

- vSphere クラスタ ダッシュボードを使用し、クラスタの使用率インデックス、CPU デマンド、メモリ使用率などを確認する。このダッシュボードは、ネット使用率とディスク I/O 操作もトラックします。
- [vSphere クラスタ構成の概要] ダッシュボードを使用し、高可用性ステータスなどの構成項目をトラックする。
- [vSphere ホストの概要] を使用し、クラスタ、ホスト システム、および仮想マシンのキャパシティ レベルを調べる。
- [ホスト システムの健全性] ダッシュボードを使用し、ホスト システムのアクティブ アラート リスト、キャパシティ メトリック チャート、およびヒートマップを表示する。

クラスタとホスト システムのステータスをトラックするために独自のダッシュボードを作成する必要があることもあります。

ネットワーク オペレーション センター環境の作業をしていて複数のモニタが存在する場合には、オブジェクトのステータスを視覚的にトラックできるように、vRealize Operations Manager のインスタンスを複数実行し、個々の具体的否ダッシュボードにモニタを 1 台ずつ割り当てることができます。

前提条件

ホスト システムのキャパシティが不足しつつあるときに警告を表示するアラート定義を作成します。[新しいアラート定義の作成](#) を参照してください。

手順

- 1 左側のペインで、[ホーム] をクリックします。
- 2 [ダッシュボード リスト] をクリックして既存のダッシュボードのリストに目を通し、クラスタとホスト システムをトラックする手段としてクラスタとホスト システムのダッシュボードを使用できるかどうかを判断します。

- 3 [ホスト システムの健全性] ダッシュボードをクリックし、このダッシュボードに含まれているウィジェットを確認します。

オブジェクト リスト ウィジェット、アラート リスト ウィジェット、メトリック ピッカー ウィジェット、メトリック チャート ウィジェット、ヒートマップ ウィジェット、およびトップ N ウィジェットの包含により、オブジェクト リスト ウィジェットで選択するホスト システムのステータスの詳細を簡単に調べることができます。このダッシュボードでは、オブジェクト リスト ウィジェットで選択するオブジェクトが、他のウィジェットが表示するデータのオブジェクトであるようにウィジェットの相互作用が構成されています。

- 4 ホスト システムの健全性を監視してアラートを生成するために、ウィジェットが存在する新しいダッシュボードを作成して構成します。
- a ダッシュボード ビュー上で、[アクション] をクリックして [ダッシュボードの作成] を選択します。
 - b [新規ダッシュボード] ワークスペースで、[ダッシュボード名] に **Health of Host Systems** と入力し、他のデフォルト設定はそのままにします。
 - c [ウィジェット リスト] ワークスペースで、オブジェクト リスト ウィジェットを追加し、ホスト システム オブジェクトを表示するようにこのウィジェットを構成します。
 - d ダッシュボードにアラート リスト ウィジェットを追加し、ホスト システムのキャパシティに差し迫ったリスクがあるときにキャパシティ アラートを表示するようにこのウィジェットを構成します。
 - e [ウィジェットの相互作業] ワークスペースで、一覧表示されているウィジェットごとに、他のウィジェットにデータを送るプロバイダとしてオブジェクト リスト ウィジェットを選択し、[相互作用の適用] をクリックします。
 - f [ダッシュボードのナビゲーション] ワークスペースで、選択されているウィジェットからデータを受け取るダッシュボードを選択し、[ナビゲーションの適用] をクリックします。

vRealize Operations Manager がデータを収集した後、ホスト システムのキャパシティに関する問題が発生する場合は、新しいダッシュボードのアラート リスト ウィジェットに、ホスト システム用に構成されているアラートが表示されます。

次のステップ

情報を他と共有する準備をし、拡張や新しいプロジェクトに向けて計画を立て、ポリシーを使用して環境内のすべてのオブジェクトを継続的に監視します。 [レポート](#)、[6 章 vRealize Operations Manager を使用した管理対象環境のキャパシティの計画](#)、および[ポリシー](#) を参照してください。

アラートの監視およびアラートへの応答

アラートは、環境内に問題が発生していることを示します。アラートは、オブジェクトに関する収集データとそのオブジェクト タイプのアラート定義を比較して、定義済みの症状が当てはまるときに生成されます。アラートが生成されると、アラートの原因となっている症状（これにより環境内のオブジェクトを評価できる）、およびアラートの解決方法に関する推奨が提示されます。

アラートは、オブジェクトまたはオブジェクト グループが環境にとって好ましくないシムptomを示しているときに通知されます。アラートを監視し、アラートに応答することで、問題が発生していないか常に気を配り、発生した問題に迅速に対処できます。

アラートが生成されると、最上位バッジである健全性、リスク、効率のステータスが変わります。

アラートに応答するだけでなく、環境内の各オブジェクトのバッジ ステータスに広く応答できます。

アラートを vRealize Operations Manager ユーザーに割り当てることはできません。ユーザー自身でアラートの所有権を取得する必要があります。

vRealize Operations Manager のアラートの監視

vRealize Operations Manager のいくつかの領域で環境を監視し、生成されるアラートを確認できます。アラートはアラート定義内のシンプトムがトリガーされるときに生成されるため、環境内のオブジェクトが、許容と定義されたパラメータの範囲内で動作していない時点で把握できます。

環境内の問題を監視して対応できるように、生成されたアラートは vRealize Operations Manager の多くの領域に表示されます。

アラート

アラートは、健全性、リスク、または効率に分類されます。健全性アラートは、ただちに対処する必要がある問題を示します。リスク アラートは、近いうち、緊急の健全性問題になる前に対応する必要がある問題を示します。効率アラートは、浪費されている領域を節約したり環境内のオブジェクトのパフォーマンスを向上させたりできる領域を示します。

環境についてのアラートは次の場所で監視できます。

- アラート
- 健全性
- リスク
- 効率

選択されたオブジェクトについてのアラートは、次の場所で監視できます。

- [アラート詳細] ([サマリ] タブ、[影響を受けたオブジェクトのシンプトム] タブ、[タイムライン] タブ、[関係] タブ、[メトリック チャート] タブなど)
- [サマリ] タブ
- [アラート] タブ
- [トラブルシューティング] タブ
- カスタム ダッシュボード
- アラートの通知

アラートの操作

アラートは、トリガーする条件がなくなりアラートがキャンセルされるように、解決の必要な問題を示します。提示される解決法は、解決手段によって問題に取り組むことができるように、推奨として示されます。

アラートを監視する際には、アラートの所有権の取得、アラートのサスペンド、またはアラートの手動キャンセルを行うことができます。

アラートをキャンセルすると、そのアラートと、障害タイプ、メッセージ イベント タイプ、またはメトリック イベント タイプのすべてがシンプトムがキャンセルされます。他のタイプのシンプトムは手動でキャンセルすることはできません。アラートが障害シンプトム、メッセージ イベント シンプトム、またはメトリック イベント シンプトムによってトリガーされた場合、そのアラートは事実上キャンセルされます。アラートがメトリック シンプトムまたはプロパティ シンプトムによってトリガーされた場合、直後の数分間で同一の条件に対して新しいアラートが作成される可能性があります。

アラートを削除する正しい方法は、シンプトムをトリガーし、アラートを生成した根本的な条件に対応することです。

移行されたアラート

vRealize Operations Manager の以前のバージョンからアラートを移行した場合、それらのアラートは概要にキャンセル ステータスで表示されますが、アラートの詳細は表示できません。

ユーザー シナリオ： vRealize Operations Manager におけるアラートの監視と処理

環境内のオブジェクトに問題がある場合、vRealize Operations Manager ではアラートによって通知されます。このシナリオでは、担当しているオブジェクトのアラートの監視と処理に利用できる方法の 1 つを示します。

アラートは、アラートのシンプトムの 1 つ以上がトリガーされるときに生成されます。構成方法に応じて、アラートは 1 つのシンプトムがトリガーした場合に発生するか、またはすべてのシンプトムが起動した場合に発生します。

アラートが生成されるときには、環境内のオブジェクトに与える悪影響に基づいてアラートを処理する必要があります。このためには、健全性アラートから開始し、クリティカル度に基づいてそれらを処理します。

仮想インフラストラクチャ管理者として、少なくとも日に 2 回はアラートを確認します。このシナリオでは、評価プロセスの一部として、次のアラートが発生します。

- 仮想マシンに予期しない高い CPU ワークロードがかかっています
- 少数の仮想マシンに起因するメモリの競合が発生しています
- クラスタには、メモリ圧縮、バレーニング、またはスワッピングのためにメモリ競合が発生している仮想マシンが多く存在します

手順

1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[アラート] アイコンをクリックします。

2 左側のペインで、[健全性] アラート リストをクリックします。

健全性アラートは、ただちに対処する必要があるアラートです。

3 [クリティカル度] 列にカーソルを置き、下矢印をクリックし、[降順に並べ替え] を選択します。

このリストは、現在、クリティカル度順に並んでいます（リストの先頭にクリティカル アラートが示され、続いて緊急アラート、警告アラート、情報アラートの順に示されている）。

4 名前、アラートがトリガーされたオブジェクト、オブジェクト タイプ、およびアラートが生成された時刻別にアラートを確認します。

たとえば、自分が管理を担当しているオブジェクトだとわかるものがありますか。今後 1 時間の間に実施する修正によってオブジェクトの健全性ステータスに影響を与えているアラートのどれかが修正されるということを認識していますか。リソース制約のためにアラートの一部は現時点では解決できないことを認識していますか。

- 5 「仮想マシンに予期しない高い CPU ワークロードがかかっています」というアラートの所有権が自分にあることを他の管理者やエンジニアに示すには、Ctrl キーを押したまま選択しているアラートをクリックし、[所有権の取得] をクリックします。

[所有者] 列は自分のユーザー名で更新されます。アラートの所有権を獲得できるだけで、他のユーザーに割り当てることはできません。

- 6 アラートの所有権を取得して、オブジェクトの状態への影響からそのアラートを一時的に除外するには、リスト内の「少数の仮想マシンに起因するメモリの競合が発生しています」というアラートを選択し、[サスペンド] をクリックします。

a このアラートを 1 時間サスペンドするには、**60** を入力します。

b [OK] をクリックします。

アラートが 60 分間サスペンドされ、アラート リストに自分が所有者として示されます。1 時間以内にそのアラートが解決されない場合、そのアラートはアクティブ状態に戻ります。

- 7 「クラスタには、メモリの圧縮によるメモリ競合、パルーニング、またはスワップの問題が発生している仮想マシンが多く存在します」というアラートが含まれる行を選択し、[キャンセル] をクリックして、リストからこのアラートを削除します。

このアラートは、新しいハードウェアが現れるまでは解決できない既知の問題です。

このアラートはアラート リストから削除されますが、原因となっている状態はこのアクションでは解決されません。このアラートにおけるシムptomはメトリックに基づいているため、このアラートは次の収集および分析サイクルで生成されます。このパターンは、原因となっている、ハードウェアおよびワークロード分散の問題を解決するまで継続します。

結果

以上で、クリティカルな健全性アラートの処理と、詳細な解決またはトラブルシューティングを行うアラートの所有権の取得が完了しました。

次のステップ

アラートに応答します。[ユーザー シナリオ：健全性アラート リスト内の vRealize Operations Manager アラートへの対応](#) を参照してください。

ユーザー シナリオ：健全性アラート リスト内の vRealize Operations Manager アラートへの対応

vRealize Operations Manager で生成されたアラートがアラート リストに表示されます。アラート リストは、環境内の問題の調査、解決、およびトラブルシューティングの開始に使用できます。

このシナリオでは、「仮想マシンに予期しない高い CPU ワークロードがかかっています」というアラートを調べて解決します。このアラートは複数の仮想マシンに関して生成される可能性があります。

前提条件

- 自分自身がトラブルシューティングと解決を行うアラートの所有権の処理と取得を行う。[ユーザー シナリオ：vRealize Operations Manager におけるアラートの監視と処理](#) を参照してください。
- アクションの実行時に [パワーオフ可] 設定がどのように機能するかについての情報を確認する。[パワーオフ可を使用するアクションのアクション](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[アラート] アイコンをクリックします。
- 2 左側のペインで、[健全性] アラート リストをクリックします。
- 3 リストを仮想マシン アラートに制限するには、ツールバー上の [すべてのフィルタ] をクリックします。
 - a ドロップダウン メニュー内の [オブジェクト タイプ] を選択します。
 - b テキスト ボックスに **virtual machine** と入力します。
 - c [OK] をクリックします。

アラート リストに、仮想マシンに起因するアラートだけが表示されます。

- 4 名前でアラートを見つけるには、[クイック フィルタ (名前)] テキスト ボックスに **high CPU workload** と入力します。
- 5 リスト内で、[[仮想マシンに予期しない高い CPU ワークロードがかかっています]] というアラート名をクリックします。

生成されたアラートと影響を受けるオブジェクトの [アラートの詳細の概要] タブが表示されます。

- 6 [概要] タブの情報を確認します。

オプション	評価プロセス
アラートの説明	アラートについてよく理解するため、説明を確認します。
推奨	1 つ以上の推奨を実行することによってアラートが解決されると思いますか？
問題の原因は何でしょうか？	トリガーされたシンプトムはこれらの推奨をサポートしますか？ 他のトリガーされたシンプトムがこの推奨と矛盾しており、さらに調査が必要だということを示していますか？ この例では、トリガーされたシンプトムは、仮想マシン CPU デマンドがクリティカル レベルにあるということと、仮想マシンのアノマリが上昇し始めているということを示しています。
トリガーされていないシンプトム	アラートの中には、すべてのシンプトムがトリガーされるときにのみ生成されるものがあります。また、シンプトムのうちのどれか 1 つがトリガーされるときに生成されるように構成されているアラートもあります。トリガーされていないシンプトムが存在する場合は、トリガーされたアラートの状況に応じてそれら进行评估します。 トリガーされていないシンプトムはこれらの推奨をサポートしますか？ トリガーされていないシンプトムはこれらの推奨が有効ではないということと、さらに調査が必要だということを示していますか？

- 7 推奨に基づいてアラートを解決してゲスト アプリケーションをチェックし、高い CPU ワークロードが正常な動作であるかどうかを確認するには、中央のペインのツールバー上の [アクション] メニューをクリックし、[vSphere Client で仮想マシンを開く] を選択します。
 - a 自分の vSphere 認証情報を使用して vCenter Server インスタンスにログインします。
 - b 仮想マシンのコンソールを起動し、どのゲスト アプリケーションが CPU リソースを消費しているかを確認します。

- 8 推奨に基づいてアラートを解決してこの仮想マシンに対する CPU キャパシティを増やすには、[仮想マシン用 CPU 数の設定] をクリックします。

- a [新しい CPU] テキスト ボックスに新しい値を入力します。

表示される値は、計算された推奨サイズです。vRealize Operations Manager が仮想マシンを 6 時間以上監視していた場合、環境によっては値として CPU 推奨サイズのメトリックが表示されることがあります。

- b 次のオプションを選択し、仮想マシンがどのように構成されているかに応じて、パワーオフを許可するかまたはスナップショットを作成します。

オプション	説明
パワーオフ可	<p>値の変更前に仮想マシンをシャットダウンまたはパワーオフします。VMware Tools がインストールされ実行されていると、仮想マシンはシャットダウンされます。VMware Tools がインストールされていないか実行されていない場合は、オペレーティング システムの状態にかかわらず、仮想マシンはパワーオフされます。</p> <p>アクションによって仮想マシンがシャットダウンされるかパワーオフされるかのほかに、オブジェクトがパワーオン状態であるかどうかと、適用される設定を検討する必要があります。</p>
スナップショット	<p>CPU を追加する前に、仮想マシンのスナップショットを作成します。</p> <p>CPU のホット プラグが有効な状態で CPU を変更した場合、仮想マシンの実行中にスナップショットが作成され、より多くのディスク領域が消費されます。</p>

- c [OK] をクリックします。

このアクションによって、推奨されている数の CPU がターゲット仮想マシンに追加されます。

- 9 推奨されている変更を実施した後でいくつかの収集サイクルが実行されるようにし、アラート リストをチェックします。

次のステップ

収集サイクルがいくつか実行された後アラートが再び表示されることがない場合、そのアラートは解決されています。再び表示される場合は、トラブルシューティングをさらに行う必要があります。アラートに対応するその他のトラブルシューティング方法については、[ユーザー シナリオ：受信箱にアラートが到着した場合](#)を参照してください。

問題の監視および問題への応答

vRealize Operations Manager では、環境内のオブジェクトの操作時に、タブとオプションを連携させた組み込みのワークフローを使用できます。

[サマリ]、[アラート]、[分析] などのタブには、選択されているオブジェクトについて詳細のレベルが段階的に表示されます。高レベルの [サマリ] タブと [アラート] タブから始めてタブで作業を進めていくため、オブジェクトの全体的な状態を把握できます。問題を特定した場合には、[分析] タブ内の集約されたメトリックを使用してオブジェクトの状態をより詳細に確認できます。[トラブルシューティング] タブに表示されるデータは、問題の根本原因を調べるときに便利です。[詳細] タブには特定のデータ ビューであり、[環境] タブにはオブジェクト関係が示されます。

環境内のオブジェクトを監視するにつれて、問題を調べるときに必要な情報がどのタブに示されるかがわかってくるはずです。

オブジェクト サマリ情報の評価

他のオブジェクト タブに関連付けられた [サマリ] タブには、選択したオブジェクトの健全性、リスクおよび効率アラート バッジの概要、現在の状態に導いたトップ アラートが表示されます。さらに、選択したオブジェクトの子孫のトップ アラートも現在のナビゲーション階層に表示されます。

このタブをオブジェクト、オブジェクト グループまたはアプリケーションのアラートの概要として使用して、アラートがオブジェクトに及ぼす影響を評価したり、問題のトラブルシューティングを開始できます。

[サマリ] タブのアラート タイプ

健全性、リスクおよび効率バッジの状態は、選択したオブジェクトに対して生成されたアラートの数量および重要度に応じます。

- 健全性アラートは、環境の健全性に影響するため即座の対応を必要とする問題を示し、顧客への影響を防ぎます。
- リスク アラートは、緊急の脅威ではないが、近い将来に対処すべき問題を示します。
- 効率アラートは、パフォーマンスを向上したり、リソースを解放できる箇所を示します。

オブジェクトまたはオブジェクト グループの [サマリ] タブ

単一のオブジェクトで作業する場合、トップ アラートはオブジェクトに対して生成されたアラートで、子孫のアラートは現在選択しているナビゲーション階層における子またはその他の子孫に対して生成されたアラートです。たとえば、vSphere ホストおよびクラスタのホスト オブジェクトで作業をしている場合、子孫には仮想マシンやデータストアが含まれます。

ホストなどの1つのオブジェクト タイプ、またはホスト、仮想マシンおよびデータストアなど複数のオブジェクトタイプを含むことのできるオブジェクト グループで作業をしている場合、グループ メンバー オブジェクトはすべてグループ コンテナの子孫です。メンバー オブジェクトに対して生成される最も重要なアラートは子孫のトップ アラートとして表示されます。

オブジェクト グループの場合、生成される可能性のあるトップ アラートは事前に定義されたグループ ポピュレーション アラートのみです。グループ ポピュレーション アラートではすべてのグループ メンバーの健全性が考慮され、このアラートは平均の健全性が警告、緊急または重大のしきい値を超えるとトリガされます。グループ ポピュレーション アラートが生成されると、バッチのスコアと色がそのアラートによって影響を受けます。グループ ポピュレーション アラートが生成されない場合、バッチの色は緑です。この動作は、オブジェクト グループが他のグループのコンテナであるため発生します。

[サマリ] タブおよび関連階層

[サマリ] タブでオブジェクトに対して表示されるアラートは、左側のペインにある関連階層で現在選択している階層によって異なります。

オブジェクトの [サマリ] タブには、選択した階層に応じて異なるアラートおよび関係が表示されます。現在フォーカスのあるオブジェクトが中央のペインのタイトル バーに表示されますが、子孫のアラートは左上のペインにある関連階層リストで強調表示された階層によって定義される関係に依存します。たとえば、vSphere ホストおよびクラスタ階層の仮想マシンに関連するホスト オブジェクトで作業を行う場合、通常、子孫には仮想マシンおよびデータストア

アが含まれます。その一方で、オブジェクト グループのメンバーとして同一ホストで作業を行う場合、そのグループのメンバーでもある仮想マシンに関するアラートは表示されません。これは、それらのホストおよび仮想マシンはグループの子であり、お互いにピアであると考えられるためです。この例では、[サマリ] タブのフォーカスは、vSphere ホストおよびクラスタではなく、グループのホストです。

[サマリ] タブの評価方法

[サマリ] タブで次の方法の 1 つ以上を使用して、オブジェクトの状態の評価を開始できます。

- オブジェクトまたはオブジェクト グループを選択し、[サマリ] タブでアラートをクリックして、アラートが示す問題を解決します。
- オブジェクトを選択し、他のタブで提供される現在のオブジェクトの情報を調べます。たとえば、まず最初に [サマリ] タブでオブジェクトを選択し、生成されたアラートを [分析] タブのオブジェクトに関する分析情報を比較します。
- オブジェクトを選択し、[サマリ] タブでアラートを確認します。次に他のオブジェクトを選択し、異なるオブジェクトに対して生成されたアラートのボリュームとタイプを比較します。

ユーザー シナリオ: vRealize Operations Manager オブジェクト グループのオブジェクトのアラート バッジを評価する

vRealize Operations Manager では、あるオブジェクト タイプの状態が他のオブジェクト タイプの状態に与える影響を調べるには、グループのアラートを使用して、ホストと仮想マシンの子孫オブジェクトの概要アラート情報を確認します。

あるネットワーク運用センターのエンジニアは、営業部門のホストと仮想マシンのグループの監視を担当しています。毎日のタスクの一部として、このエンジニアは、グループ内のオブジェクトの状態を調べ、生成されているアラートに基づいて、すぐに対処する必要のある問題または発生する可能性のある問題を特定します。そのためには、オブジェクトのグループから始めて（具体的にはグループ内のホスト システム）、[概要] タブの情報を確認します。

この例では、グループには次のオブジェクト アラートが含まれます。

- 「ホストには複数の仮想マシンによるメモリの競合があります」は、健全性アラートです
- 「仮想マシンでは慢性的に高いメモリ ワークロードが発生しています」はリスク アラートです
- 「仮想マシンには構成された制限を超える CPU 負荷がかかっています」は、リスク アラートです
- 「仮想マシンには大きいディスク スナップショットがあります」は、効率アラートです

次に示す [概要] タブでアラートを評価する方法は、vRealize Operations Manager を使用する場合の例であり、絶対的なものではありません。環境に特化したトラブルシューティング スキルや知識により、どの方法が有効か判断してください。

前提条件

- 仮想マシンとそれが実行しているホストを含むグループを作成します。たとえば、Sales Dept VMs and Hosts などとします。同様のグループを作成する方法の例については、「[カスタム会計部門グループの作成](#)」を参照してください。
- オブジェクト グループおよび関連する階層での [概要] タブの動作を確認します。[オブジェクト サマリ情報の評価](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] アイコンをクリックします。
- 2 中央のペインで、[グループ] タブをクリックし、[Sales Dept VMs and Hosts] グループをクリックします。
- 3 ホストおよび関連する子仮想マシンのアラートを確認するには、左側のペインで、[ホスト システム] をクリックし、左下のペインでホスト名をクリックします。

[概要] タブに、健全性、リスク、効率のバッジ、ホストのトップ アラートが表示されます。グループにまだフォーカスがあるので、子仮想マシンのアラートは子孫のトップ アラート ウィジェットに表示されません。
- 4 ホストの [概要] タブを表示して子仮想マシンも処理できるようにするには、左下のペインのホスト名の右側にある右矢印をクリックします。
- 5 左側のペインの上部にある [vSphere ホストおよびクラスタ] を選択します。

子仮想マシンのアラートを処理するには、オブジェクト グループのメンバーとしてのホストではなく、vSphere ホストおよびクラスタ階層でのホストに [概要] タブでフォーカスが設定されている必要があります。
- 6 [トップ健全性アラート] ペインでアラートの詳細を表示するには、[ホストには複数の仮想マシンによるメモリの競合があります] アラート名をクリックします。

複数のオブジェクトが影響を受けている状態で、アラート リンクをクリックして詳細を表示すると、[健全性の問題] ダイアログ ボックスが表示されます。影響を受けるオブジェクトが 1 つだけの場合は、オブジェクトの [アラートの詳細 - 概要] タブが表示されます。
- 7 [アラートの詳細 - 概要] タブで、推奨事項およびトリガーされた症状の評価を始めます。

この生成されたアラートの推奨事項は、メモリ ワークロードの高い一部の仮想マシンをこのホストから使用可能なメモリの多いホストに移動することです。
- 8 オブジェクトの [概要] タブに戻って子孫仮想マシンのアラートを確認するには、左側のペインのツールバー アイコンの左にある戻るボタンをクリックします。

ホストが再びオブジェクトの [概要] タブのフォーカスになります。子仮想マシンに対して生成されたアラートが、1 つまたは複数の子孫のトップ アラート ペインに表示されます。
- 9 各仮想マシン アラートをクリックし、[アラートの詳細 - 概要] タブの情報を評価します。

仮想マシン アラート	評価
仮想マシンでは慢性的に高いメモリ ワークロードが発生しています	<p>推奨事項は、この仮想マシンにメモリを追加することです。</p> <p>1 つ以上の仮想マシンで高いワークロードが発生している場合、おそらくこの状況がホスト メモリ競合アラートをもたらしています。これらの仮想マシンは、使用可能なメモリの多いホストへの移動の候補です。仮想マシンを移動すると、ホスト メモリ競合アラートおよび仮想マシン アラートが解決する可能性があります。</p>
仮想マシンには構成された制限を超える CPU 負荷がかかっています	<p>推奨事項には、この仮想マシンでの CPU 制限を増やすこと、または除去することが含まれます。</p> <p>1 つ以上の仮想マシンが構成されているものより多くの CPU を要求していて、ホストでメモリの競合が発生している場合、ホストにかかる負荷を増やすことなく仮想マシンに CPU リソースを追加することはできません。これらの仮想マシンは、使用可能なメモリの多いホストへの移動の候補です。仮想マシンを移動すると、CPU 数を増やして仮想マシン アラートを解決でき、ホスト メモリ競合アラートが解決する可能性があります。</p>

- 10 評価に基づき、子仮想マシンの推奨事項に従ってアクションを実行します。

結果

アクションを実行した後、仮想マシンとホストのアラートが解決されたかどうかを判断できるまでには、数収集サイクルかかります。

次のステップ

数収集サイクルの後、Sales VMs and Hosts グループを見て、アラートがキャンセルされ、オブジェクトの [概要] タブに表示されなくなったかどうかを確認します。アラートがまだ表示されている場合は、トラブルシューティング ワークフローの例として「[ユーザー シナリオ : \[トラブルシューティング\] タブのオプションを使用して問題の根本原因を調査する](#)」を参照してください。

サマリ タブ

[サマリ] タブには、選択したオブジェクト、グループ、またはアプリケーションの状態の概要が表示されます。このタブを使用して、アラートがオブジェクトに与えている影響を評価し、情報を使用して問題のトラブルシューティングを開始します。

[サマリ] タブの機能

選択したオブジェクトに基づいて、次のサマリ タブが表示されます。

- [\[仮想マシンのサマリ\] タブ](#) タブ
- [\[データストアのサマリ\] タブ](#) タブ
- [\[ホストのサマリ\] タブ](#) タブ
- [\[クラスタのサマリ\] タブ](#) タブ
- [\[カスタム グループとコンテナのサマリ\] タブ](#)

[サマリ] タブについて

左側ペインで、[環境] アイコンをクリックし、グループ、アプリケーション、またはインベントリ オブジェクトを選択します。[サマリ] タブをクリックします。

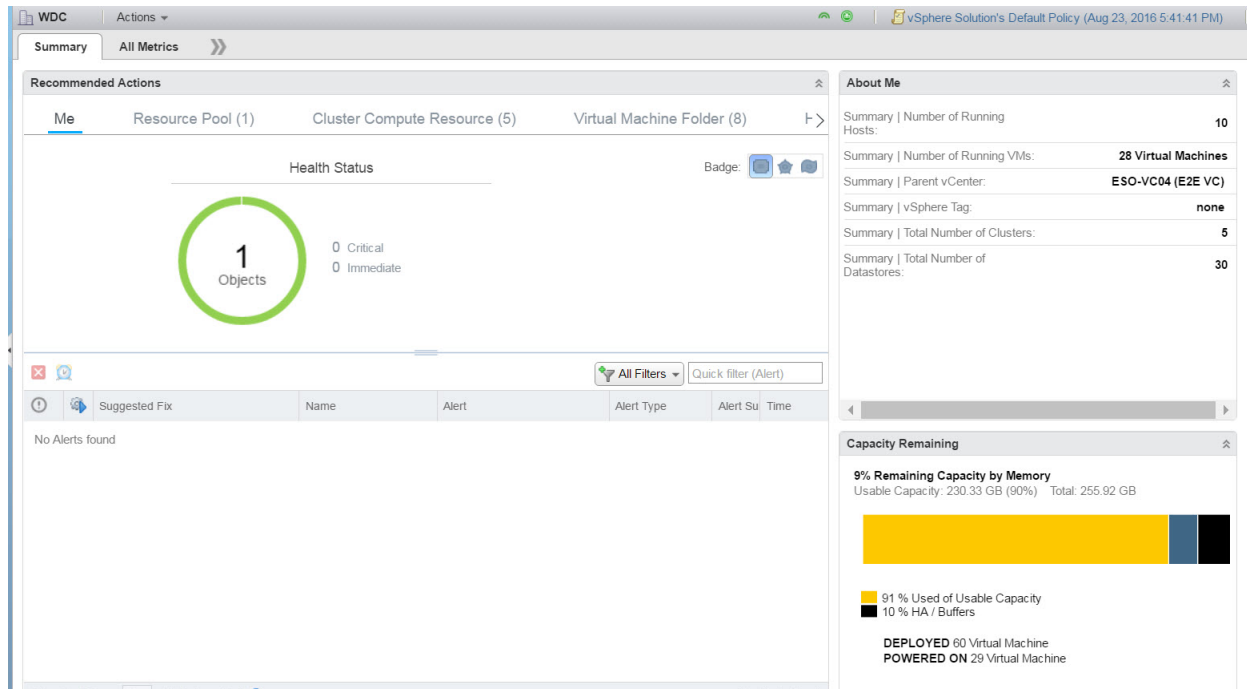


表 5-1. [サマリ] タブのオプション

オプション	説明
推奨アクション	<p>このウィジェットには、選択したオブジェクトとその子孫の健全性ステータスが表示されます。インスタンスにある問題を解決するための推奨事項も表示されます。</p> <p>バッジは、次のアラート タイプのアラート ステータスの視覚的なインジケータとなります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 健全性アラート（通常直ちに対処が必要） ■ リスクアラート（近い将来なんらかの問題を調査すべきことを示す） ■ 効率アラート（リソースの節約が可能であることを示す） <p>オブジェクトのアラートを表示するには、バッジをクリックします。</p>
アバウト ミー	このウィジェットには、確認用に選択したオブジェクトのメトリックとプロパティのサマリが表示されます。
残りキャパシティ	このウィジェットには、最も制約されたリソースについて、総コンシューマ キャパシティに対する残りの計算リソースの割合を示すスコアが表示されます。

[データストアのサマリ] タブ

[データストアのサマリ] タブには、選択したデータストアの状態の概要が表示されます。選択されたオブジェクトについて、[データストアのサマリ] タブには、そのオブジェクトが健全性、リスク、または効率に影響を与えたときのアラートとメトリックが表示されます。このタブを使用して、アラートがデータストアに与えている影響を評価し、情報を使用して問題のトラブルシューティングを開始します。

[データストアのサマリ] タブについて

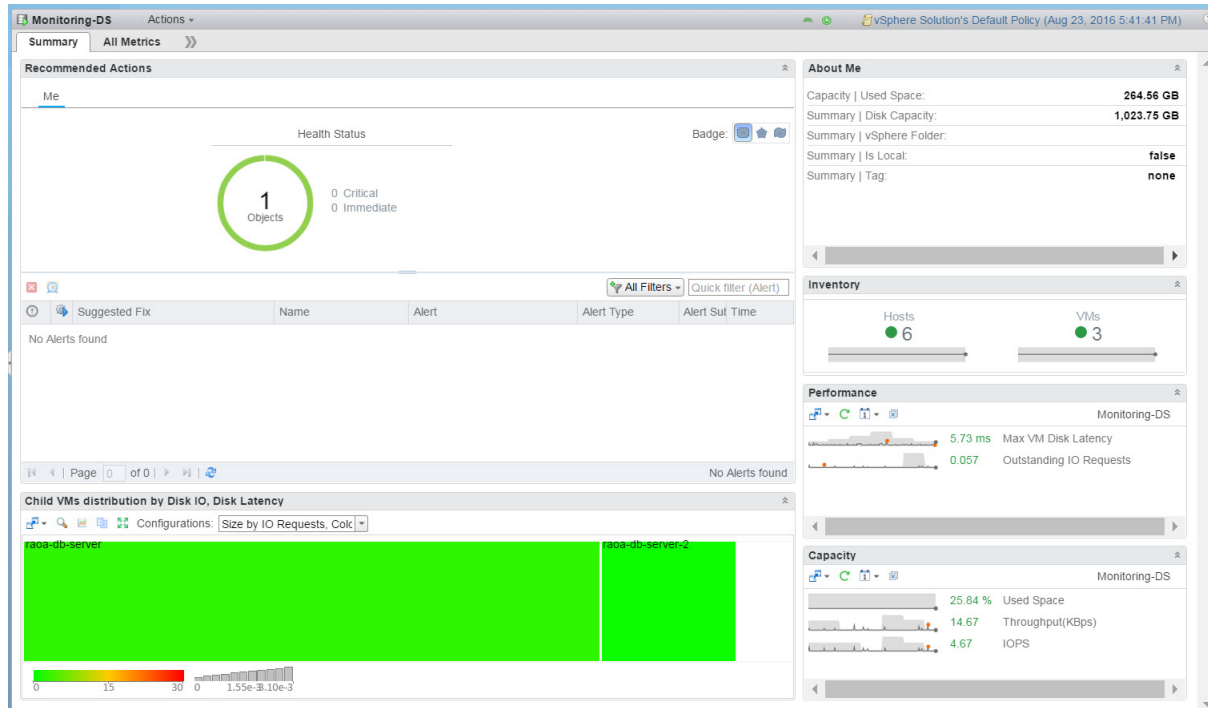


表 5-2. [データストアのサマリ] タブのオプション

オプション	説明
推奨アクション	<p>このウィジェットには、選択したオブジェクトとその子孫の健全性ステータスが表示されます。インスタンスにある問題を解決するための推奨事項も表示されます。</p> <p>バッジは、次のアラート タイプのアラート ステータスの視覚的なインジケータとなります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 健全性アラート（通常直ちに対処が必要） ■ リスクアラート（近い将来なんらかの問題を調査すべきことを示す） ■ 効率アラート（リソースの節約が可能であることを示す） <p>オブジェクトのアラートを表示するには、バッジをクリックします。</p>
アバウト ミー	<p>このウィジェットには、選択したオブジェクトの主なメトリックとプロパティが表示されます。</p>
インベントリ	<p>このウィジェットには、データストアに関連付けられているホストと仮想マシンの数が表示されます。</p>
キャパシティ	<p>このウィジェットには、環境内のオブジェクトで使用されるキャパシティとワークロードのリソースのビジュアル サマリが表示されます。メトリックに関連付けられているシンプトムに基づいて、その健全性を示す色で、さまざまな主要なインジケータの最新の値とトレンド ラインが表示されます。各メトリックをダブルクリックして、展開されたチャートを表示します。</p>

表 5-2. [データストアのサマリ] タブのオプション（続き）

オプション	説明
パフォーマンス	このウィジェットには、オブジェクト全体のパフォーマンスに関する、サマリのメトリックが表示されます。メトリックに関連付けられているシナリオに基づいて、その健全性を示す色で、さまざまな主要なパフォーマンス インジケータの最新の値とトレンド ラインが表示されます。各メトリックをダブルクリックして、展開されたチャートを表示します。
ディスク IO、ディスク遅延別の子仮想マシンの分布	リストから選択する構成に従って、このウィジェットには、[ディスク IO] および [ディスク遅延] メトリックに基づいた子仮想マシンの分布を表示するヒート マップが表示されます。同じデータストアを使用しているすべての仮想マシンのステータスをすばやく評価するのに役立ちます。仮想マシンのグループが問題のソースの場合、すべての仮想マシンに影響する問題が存在するかどうかを確認するのに役立ちます。

[ホストのサマリ] タブ

[ホストのサマリ] タブには、選択したホストの状態の概要が表示されます。選択されたオブジェクトについて、[ホストのサマリ] タブには、そのオブジェクトが健全性、リスク、または効率に影響を与えたときのアラートとメトリックが表示されます。このタブを使用して、アラートがホストに与えている影響を評価し、情報を使用して問題のトラブルシューティングを開始します。

[ホストのサマリ] タブについて

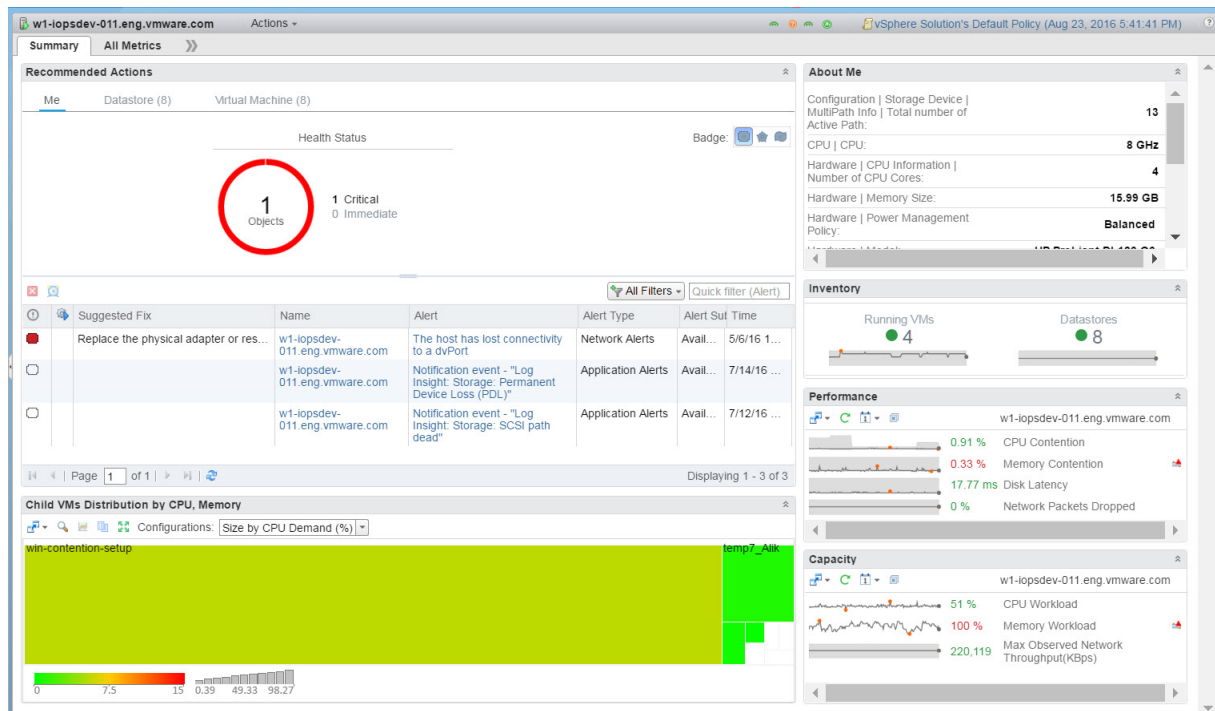


表 5-3. [ホストのサマリ] タブのオプション

オプション	説明
推奨アクション	<p>このウィジェットには、選択したオブジェクトとその子孫の健全性ステータスが表示されます。インスタンスにある問題を解決するための推奨事項も表示されます。</p> <p>バッジは、次のアラート タイプのアラート ステータスの視覚的なインジケータとなります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 健全性アラート（通常直ちに処置が必要） ■ リスクアラート（すぐになんらかの問題を調査すべきことを示す） ■ 効率アラート（リソースの節約が可能であることを示す） <p>オブジェクトのアラートを表示するには、バッジをクリックします。</p>
アバウト ミー	このウィジェットには、選択したオブジェクトの主なメトリックとプロパティが表示されます。
インベントリ	このウィジェットには、選択したホストに関連付けられている実行中のホストとデータストアの数が表示されます。
キャパシティ	<p>このウィジェットには、環境内のオブジェクトで使用するキャパシティとワークロードのリソースのビジュアル サマリが表示されます。メトリックに関連付けられているシンプトムに基づいて、その健全性を示す色で、さまざまな主要なインジケータの最新の値とトレンド ラインが表示されます。各メトリックをダブルクリックして、詳細なチャートを表示します。</p>
パフォーマンス	このウィジェットには、オブジェクト全体のパフォーマンスに関する、サマリのメトリックが表示されます。メトリックに関連付けられているシンプトムに基づいて、その健全性を示す色で、さまざまな主要なパフォーマンス インジケータの最新の値とトレンド ラインが表示されます。各メトリックをダブルクリックして、展開されたチャートを表示します。
CPU、メモリ別の子仮想マシンの分布	リストから選択する構成に従って、このウィジェットには、[CPU] および [メモリ] メトリックに基づいた子仮想マシンの分布を示すヒートマップが表示されます。ホスト内の帯域負荷の高い仮想マシンを特定するのに役立ちます。

[仮想マシンのサマリ] タブ

[仮想マシンのサマリ] タブには、選択した仮想マシンの状態の概要が表示されます。選択されたオブジェクトについて、[仮想マシンのサマリ] タブには、そのオブジェクトが健全性、リスク、または効率に影響を与えたときのアラートとメトリックが表示されます。このタブを使用して、アラートが仮想マシンに与えている影響を評価し、情報を使用して問題のトラブルシューティングを開始します。

[仮想マシンのサマリ] タブについて

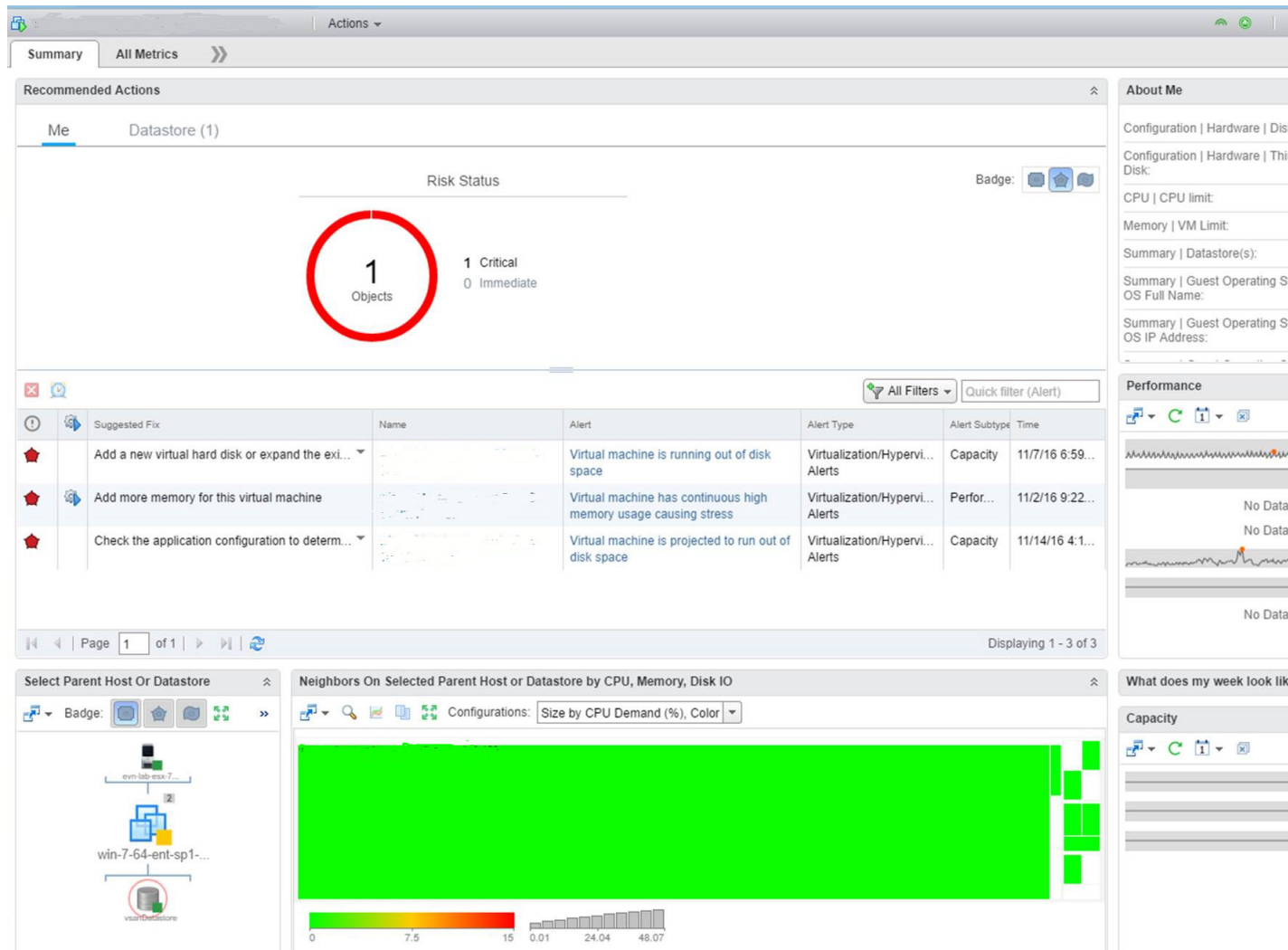


表 5-4. [仮想マシンのサマリ] タブのオプション

オプション

説明

推奨アクション

このウィジェットには、選択したオブジェクトとその子孫の健全性ステータスが表示されます。インスタンスにある問題を解決するための推奨事項も表示されます。

バッジは、次のアラート タイプのアラート ステータスの視覚的なインジケータとなります。

- 健全性アラート（通常直ちに対処が必要）
- リスクアラート（近い将来なんらかの問題を調査すべきことを示す）
- 効率アラート（リソースの節約が可能であることを示す）

オブジェクトのアラートを表示するには、バッジをクリックします。

アバウト ミー

このウィジェットには、選択したオブジェクトの主なメトリックとプロパティが表示されます。

表 5-4. [仮想マシンのサマリ] タブのオプション （続き）

オプション	説明
キャパシティ	このウィジェットには、環境内のオブジェクトで使用されるキャパシティとワークロードのリソースのビジュアル サマリが表示されます。メトリックに関連付けられているシンプトムに基づいて、その健全性を示す色で、さまざまな主要なインジケータの最新の値とトレンド ラインが表示されます。各メトリックをダブルクリックして、展開されたチャートを表示します。
パフォーマンス	このウィジェットには、オブジェクト全体のパフォーマンスに関する、サマリのメトリックが表示されます。メトリックに関連付けられているシンプトムに基づいて、その健全性を示す色で、さまざまな主要なパフォーマンス インジケータの最新の値とトレンド ラインが表示されます。各メトリックをダブルクリックして、展開されたチャートを表示します。
週の状況	このウィジェットでは、過去 1 週間、仮想マシンが経験したストレスの 1 日あたりの量を簡単に把握できます。その週の仮想マシンの負荷パターンを特定するのにも役立ちます。
親ホストまたはデータストアの選択	このウィジェットには、選択した仮想マシンの親ホストまたはデータストアのステータスが表示されます。この入力内容により、ヒート マップに表示されるデータが制御されます。
CPU、メモリ、ディスク IO 別の選択した親ホストまたはデータストア上のネイバー	リストから選択する構成に従って、このウィジェットには、CPU、メモリ、ディスク IO 別の選択した親ホストまたはデータストア上のネイバーの分布を示すヒート マップが表示されます。これは、同じインフラストラクチャを使用している帯域負荷の高いネイバーを特定するのに役立ちます。

[クラスタのサマリ] タブ

[クラスタのサマリ] タブには、選択したクラスタの状態の概要が表示されます。選択されたオブジェクトについて、[クラスタのサマリ] タブには、そのオブジェクトが健全性、リスク、または効率に影響を与えたときのアラートとメトリックが表示されます。このタブを使用して、アラートがクラスタに与えている影響を評価し、情報を使用して問題のトラブルシューティングを開始します。

[クラスタのサマリ] タブについて

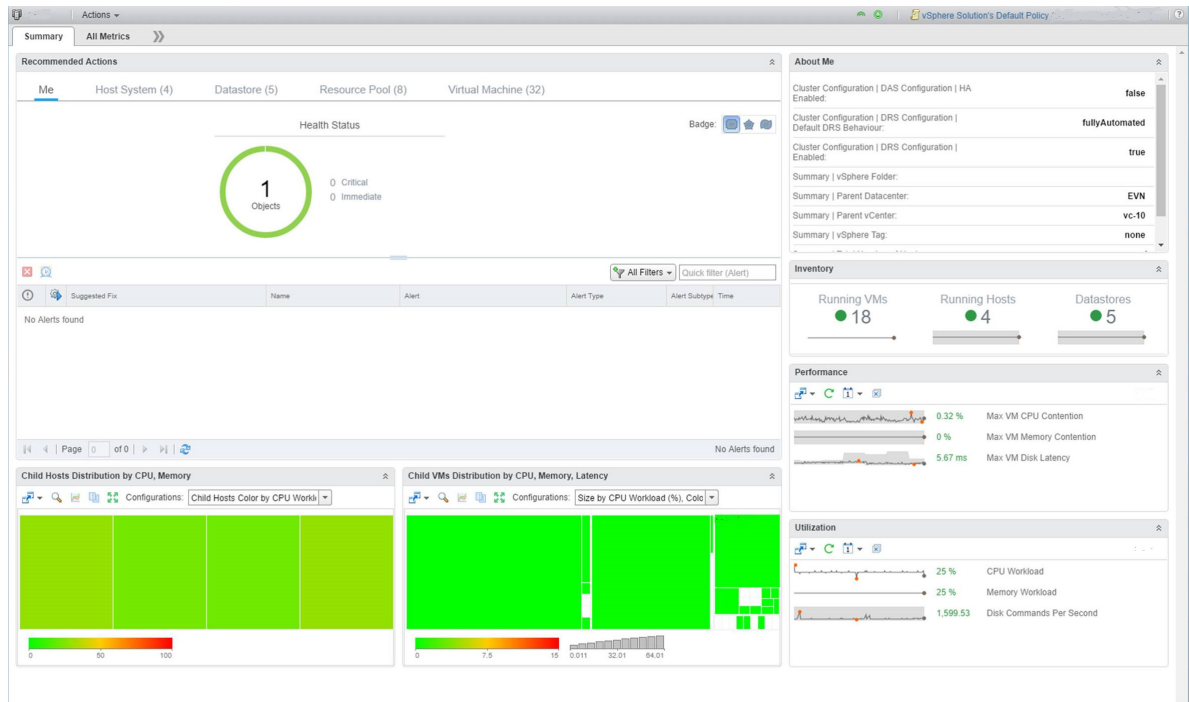


表 5-5. [クラスタのサマリ] タブのオプション

オプション	説明
推奨アクション	<p>このウィジェットには、選択したオブジェクトとその子孫の健全性ステータスが表示されます。インスタンスにある問題を解決するための推奨事項も表示されます。</p> <p>バッジは、次のアラート タイプのアラート ステータスの視覚的なインジケータとなります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 健全性アラート（通常直ちに対処が必要） ■ リスクアラート（近い将来なんらかの問題を調査すべきことを示す） ■ 効率アラート（リソースの節約が可能であることを示す） <p>オブジェクトのアラートを表示するには、バッジをクリックします。</p>
アバウト ミー	このウィジェットには、選択したオブジェクトの主なメトリックとプロパティが表示されます。
インベントリ	このウィジェットには、クラスタに関連付けられている実行中のホスト、実行中の仮想マシン、データストアの数が表示されます。
使用率	このウィジェットには、クラスタの使用率のサマリが CPU/メモリおよび IO ごとに表示されます。このメトリックに関連付けられているシンプトムに基づいて、その健全性に関連付けられている色で、過去 24 時間のトレンドラインと最新の値が表示されます。
パフォーマンス	このウィジェットには、過去 24 時間の、クラスタ上で実行されているあらゆる仮想マシンの最大 KPI 値のトレンドラインが表示されます。また、このメトリックに関連付けられているシンプトムに基づいて、その健全性を表す色で、最新の値も表示されます。各メトリックをクリックして、チャートの詳細なビューを表示します。

表 5-5. [クラスタのサマリ] タブのオプション（続き）

オプション	説明
CPU、メモリ別の子ホストの分布	リストから選択する構成に従って、ヒートマップに、CPU とメモリに基づいた子ホストの分布が表示されます。デマンドが高い仮想マシンや遅延の問題がある仮想マシンをすばやく特定するのに役立ちます。
CPU、メモリ、遅延別の子仮想マシンの分布	リストから選択する構成に従って、ヒートマップに、CPU、メモリ、遅延に基づいた子仮想マシンの分布が表示されます。このヒートマップは、ワークロードが高いホストを特定するのに役立ちます。

[カスタム グループとコンテナのサマリ] タブ

[カスタム グループとコンテナのサマリ] タブには、選択したグループまたはコンテナの状態の概要が表示されます。選択されたオブジェクトについて、[カスタム グループとコンテナのサマリ] タブには、そのオブジェクトが健全性、リスク、または効率に影響を与えたときのアラートとメトリックが表示されます。このタブを使用して、アラートがグループまたはコンテナに与えている影響を評価し、情報を使用して問題をトラブルシューティングします。

[カスタム グループとコンテナのサマリ] タブについて

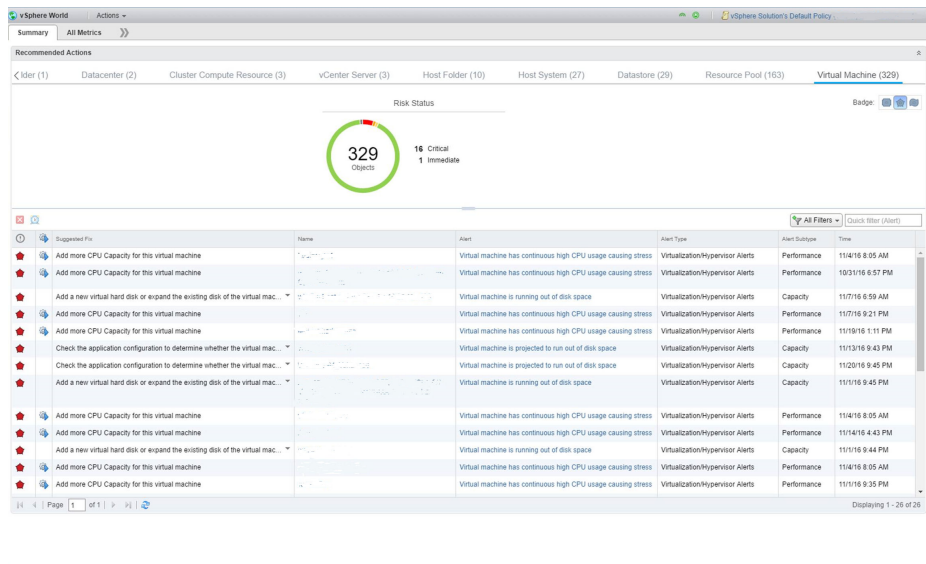


表 5-6. [カスタム グループとコンテナのサマリ] タブのオプション

オプション	説明
推奨アクション	<p>このウィジェットには、選択したオブジェクトとその子孫の健全性ステータスが表示されます。インスタンスにある問題を解決するための推奨事項も表示されます。</p> <p>バッジは、次のアラート タイプのアラート ステータスの視覚的なインジケータとなります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 健全性アラート（通常直ちに対処が必要） ■ リスクアラート（近い将来なんらかの問題を調査すべきことを示す） ■ 効率アラート（リソースの節約が可能であることを示す） <p>オブジェクトのアラートを表示するには、バッジをクリックします。</p>

オブジェクト アラートの調査

[アラート] タブには、現在選択されているオブジェクトに関して生成されたアラートのリストが表示されます。オブジェクトを操作している場合、[アラート] タブで生成されたアラートをレビューして、応答することにより、ご利用の環境の問題を管理できます。

アラートは、ご利用のシステムで問題が発生すると、設定されたアラート定義に基づいて通知します。オブジェクトアラートは便利な調査ツールで、2 つの方法で使用できます。オブジェクト アラートは、ユーザーが電話をかけてきて苦情を訴える前に、ご利用の環境の問題に関するプロアクティブな通知を提供し、一般的な問題および報告された問題を解決するときに使用できるオブジェクトに関する情報を提供します。

[アラート] タブをレビューするときに、先祖と子孫を追加して、アラートの表示を拡張できます。現在のオブジェクトのアラートが他のオブジェクトに影響するか、または現在のオブジェクトが他のオブジェクトのアラートで示された問題の影響をどの程度受けるかを知ることができます。

インフラストラクチャ運用チームのベスト プラクティスとワークフローに応じて、オブジェクトの [アラート] タブを使用して、個々のオブジェクトで生成されたアラートを管理できます。

- アラートの所有権を取得すれば、自分が問題の解決に取り組んでいることをチームに知らせることができます。
- アラートを一時停止して、問題を解決する間、一時的にオブジェクトの健全性、リスク、効率状態に影響を与えないようにすることができます。
- 交換のためにホストからネットワーク カードが取り外された場合などの意図的な操作や、リソースの制約のために現在解決できない既知の問題であるなどの意図的な操作の結果であることが分かっているアラートを取り消します。エラー、メッセージ イベント、またはメトリック イベント症状により生成されたアラートを取り消すと、そのアラートは永久に取り消されます。メトリック、スーパーメトリック、またはプロパティ症状により生成されたアラートを取り消すと、元のメトリックまたはプロパティ条件が true のままの場合、アラートが再生成される場合があります。エラー、メッセージ イベント、またはメトリック イベント症状により生成されたアラートの取り消しにのみ有効です。

アラートの調査と解決は、考えられる最高の環境を顧客に提供するために役立ちます。

ユーザー シナリオ：問題のある仮想マシンの [アラート] タブのアラートへの応答

オブジェクトのアラートに応答することにより、影響を受けるオブジェクトの構成またはパフォーマンスを、必要なレベルに戻すことができます。アラートの情報に基づき、vRealize Operations Manager に表示されるその他の情報を使用して、アラートを評価し、最も可能性のある解決策を特定して問題を解決します。

仮想インフラストラクチャの管理者またはオペレーション マネージャが、オブジェクトの問題をトラブルシューティングします。オブジェクトに対して生成されたアラートの確認および応答は、トラブルシューティング プロセスの一部です。この例では、仮想マシンのワークロードに関する問題を解決します。そのプロセスの一環として [アラート] タブを確認し、識別された問題を示すアラート、または識別された問題の一因であるアラートを特定します。

問題の仮想マシンは、データベース サーバとして使用する db-01-kyoto です。

[アラート] タブのアラートに対する次の応答方法は、vRealize Operations Manager を使用する一例であり、これに限定されるわけではありません。環境に特化したトラブルシューティング スキルや知識により、どの方法が有効か判断してください。

前提条件

- 各 vCenter Server インスタンスのアクション用に vCenter アダプタが構成済みであることを確認します。
- CPU 数の設定、メモリの設定、CPU 数およびメモリの設定アクションを実行する場合は、パワーオフ可オプションの使用方法を理解していることを確認します。[パワーオフ可を使用するアクションのアクション](#) を参照してください。

手順

- 1 [検索] テキスト ボックスにオブジェクトの名前 **db-01-kyoto** を入力し、リストから仮想マシンを選択します。

オブジェクトの [サマリ] タブが表示されます。[トップ アラート] ペインに、オブジェクトの重要でアクティブなアラートが表示されます。

- 2 [[分析]] タブをクリックします。

最初のタブは [ワークロード] タブです。このバッジは、ワークロードが CPU で最も高く、メモリも構成された制限を超えていることを示します。

- 3 [アラート] タブをクリックします。

この例のアラート リストには、調査中の問題に関係している可能性がある次のアラートが含まれます。

- 仮想マシンに予期しない高い CPU ワークロードがかかっています。
- 仮想マシンに予期しない高いメモリ ワークロードがあります。

- 4 左上のペインで、[vSphere ホストおよびクラスタ] 関連階層を選択し、リストに追加する先祖アラートまたは子孫アラートを選択します。

選択した階層のコンテキストで、先祖オブジェクトまたは子孫オブジェクトに関係している可能性があるアラートを確認してください。

- a ツールバーで、[先祖アラートの表示] をクリックし、[ホスト システム] および [リソース プール] チェックボックスを選択します。

この仮想マシンに関連するホスト システムまたはリソース プールのアラートが、リストに追加されます。

- b [子孫アラートの表示] をクリックし、[データストア] を選択します。

データストアのアラートが、リストに追加されます。

この例では、ホスト、リソース プール、データストアに他のアラートが存在しないため、仮想マシンのアラートの対処を開始します。

- 5 [仮想マシンに予期しない高い CPU ワークロードがかかっています] というアラート名をクリックします。

[アラートの詳細の概要] タブが表示されます。

- 6 推奨事項を確認し、提案された 1 つ以上の方法で問題を修正できるかどうかを判断します。

この例には、次の一般的な推奨事項が含まれます。

- ゲスト アプリケーションを確認し、高い CPU ワークロードが予期された動作であるかどうかを判断します。
- この仮想マシンの CPU キャパシティを追加します。

- 7** Check the guest applications to determine whether high CPU workload is expected behavior の推奨事項に従うには、タイトル バーで [アクション] をクリックし、[vSphere Client で仮想マシンを開く] を選択します。

vSphere Web Client の [サマリ] タブが表示され、コンソールで仮想マシンを開いて、報告された高い CPU ワークロードの原因となっているアプリケーションを確認できます。

- 8** Add more CPU Capacity for this virtual machine の推奨事項に従うには、[仮想マシン用 CPU 数の設定] をクリックします。
- a [新しい CPU] テキスト ボックスに値を入力します。
値を入力する前に表示されるデフォルト値は、分析に基づいた推奨値です。
 - b CPU のホット アドが有効になっていない場合、アクションの実行前に仮想マシンをパワーオフすることを許可するには、[パワーオフ可] チェック ボックスを選択します。
 - c 仮想マシンの CPU 構成を変更する前にスナップショットを作成するには、[スナップショット] チェック ボックスを選択します。
 - d [OK] をクリックします。
 - e [タスク ID] リンクをクリックし、タスクが正常に実行したことを確認します。

指定された個数の CPU が仮想マシンに追加されます。

次のステップ

数回の収集サイクルの後、オブジェクトの [アラート] タブに戻ります。アラートが表示されなくなれば、以上の対処でアラートが解決されたことを示します。問題が解決されない場合は、トラブルシューティングのワークフロー例について [ユーザー シナリオ: \[トラブルシューティング\] タブのオプションを使用して問題の根本原因を調査する](#) を参照してください。

[アラート] タブ

[アラート] タブには、選択したオブジェクト、グループ、アプリケーションについて、生成されたすべてのアラートの一覧が表示されます。このアラートの一覧を使用して、特定のオブジェクトについて生成されたアラートの数を評価し、アラートの解決に着手できるようにします。

[アラート] タブの機能

選択したオブジェクトのすべてのアクティブなアラートが一覧表示されます。非アクティブなアラートを表示する場合は、フィルタを変更します。

ツールバー オプションを使用してリストのアラートを管理できます。アラート名をクリックすると、影響を受けるオブジェクトのアラートの詳細を確認できます。アラートが生成されたオブジェクトの名前をクリックすると、オブジェクトの詳細を確認できます。

[アラート] タブの場所

左側のペインで、[環境] アイコンを選択し、インベントリ オブジェクトを選択します。[アラート] タブをクリックします。

[アラート] タブのオプション

アラート オプションには、ツールバーとデータ グリッドのオプションが含まれます。キャンセル、サスペンド、または所有権の管理を行うには、ツールバー オプションを使用します。[Shift] または [Control] を押しながらクリックすることで、リスト内の複数の行を選択できます。アラートを表示するには、データ グリッドを使用します。アラートの名前をクリックするとアラートの詳細を表示でき、オブジェクトの名前をクリックするとオブジェクトの詳細を表示できます。

表 5-7. [アラート] タブのツールバー オプション

オプション	説明
外部アプリケーションで開く	選択したオブジェクトに対して実行できるアクション。 (たとえば、[vSphere Client で仮想マシンを開く] など)。
アラートのキャンセル	選択したアラートをキャンセルします。アクティブなアラートのみを表示するようにアラート リストが構成されている場合、キャンセルされたアラートはリストから除外されます。 対処する必要がないアラートをキャンセルします。アラートをキャンセルしても、そのアラートの生成の基盤となった条件はキャンセルされません。アラートのキャンセルは、トリガーされた障害やイベントの症状によってアラートが生成された場合に有効です。これらの症状は、監視対象オブジェクトでその後の障害またはイベントが発生した場合にのみ再度トリガーされるためです。メトリックまたはプロパティの症状に基づいてアラートが生成される場合、そのアラートは、次の収集および分析サイクルまでしかキャンセルされません。違反値が依然として存在する場合は、アラートが再度生成されます。
サスペンド	指定された分数の間アラートをサスペンドします。 アラートを調査しているとき、作業中にアラートがオブジェクトの健全性、リスク、または効率に影響しないようにアラートをサスペンドします。経過時間後に問題が解決されない場合、アラートが再アクティブ化され、再びオブジェクトの健全性、リスク、または効率に影響を与えます。アラートをサスペンドしたユーザーは所有者として割り当てられます。
所有権の取得	現在のユーザーとして、自分自身をアラートの所有者にします。 アラートの所有権を獲得できるだけで、所有権を割り当てることはできません。
所有権の解放	アラートのすべての所有権が解放されます。
先祖アラートの表示	選択したオブジェクトの先祖についてのアラートを表示します。 先祖とは、オブジェクトの両親、祖父母などのことです。たとえば、ホストの先祖は、フォルダ、ストレージ ボット、クラスタ、データ センター、および vCenter Server インスタンスです。
子孫アラートの表示	選択したオブジェクトの子孫についてのアラートを表示します。 子孫とは、オブジェクトの子および孫です。たとえば、ホストの子孫は、データストア、リソース プール、および仮想マシンです。
フィルタリング オプション	アラートのリストを、作成するフィルタと一致するアラートに限定します。 データ グリッドの列で並べ替えることもできます。

表 5-8. [アラート] タブのデータ グリッドのオプション

オプション	説明
重要度	環境内でのアラートの重要度レベルを示します。アラートの重要度は、重要度アイコンの上にマウスを置いたときにツールチップに表示されます。 このレベルは、アラート定義の作成時に割り当てられたレベルに基づきます。割り当てられたレベルが [シムptom ベース] の場合は、症状の最高の重要度に基づきます。
アラート	アラートを生成したアラートの定義名。 アラートの名前をクリックするとアラートの詳細タブが表示され、ここでアラートのトラブルシューティングを開始できます。
アラート タイプ	選択したオブジェクトに対して起動したアラートのタイプが表示されます。これにより、アラートを分類し、特定タイプのアラートを特定のシステム管理者に割り当てることができます。たとえば、[アプリケーション]、[仮想化/ハイパーバイザ]、[ハードウェア]、[ストレージ]、[ネットワーク] などが表示されます。
アラート サブタイプ	選択したオブジェクトに対して起動したアラートのタイプについて、その他の情報が表示されます。これにより、アラート タイプよりも詳細にアラートを分類し、特定タイプのアラートを特定のシステム管理者に割り当てることができます。たとえば、[可用性]、[パフォーマンス]、[容量]、[コンプライアンス]、[構成] などが表示されます。
ステータス	アラートの現在の状態。 値には、[有効] または [キャンセル済み] があります。
起動元	アラートが生成されたオブジェクトの名前と、オブジェクト名の上にマウスを置いたときにツールチップに表示されるオブジェクト タイプです。 オブジェクト名をクリックすると、オブジェクトの詳細タブが表示されます。ここで、オブジェクトに他に何か問題がないかどうかについて調査を開始できます。
制御状態	ユーザーのアラートとの相互作用の状態です。値には、次の種類があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オープン。アラートはアクションに対して使用可能で、ユーザーには割り当てられていません。 ■ 割り当て済み。ログイン ユーザーが [所有権の取得] をクリックしたときに、そのユーザーにアラートが割り当てられています。 ■ サスペンド中。アラートは指定された時間中サスペンドされました。オブジェクトの健全性、リスク、および効率に対して、アラートの影響が一時的に及ばないようにされています。この状態が便利なのは、システム管理者が問題を検討しており、アラートの影響をオブジェクトの健全性のステータスに与えたくないときです。
影響	アラートの影響を受けるバッジ。
所有者	アラートを所有するユーザーの名前。
作成日時	アラートが生成された日時。

表 5-8. [アラート] タブのデータ グリッドのオプション (続き)

オプション	説明
更新日時	<p>アラートが最後に変更された日時。</p> <p>アラートは、次のいずれかの変更が発生するたびに更新されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アラート定義に含まれる別の症状が発生した場合。 ■ アラートを引き起こす原因となった症状のトリガーがキャンセルされた場合。
キャンセル日時	<p>アラートが次のいずれかの理由でキャンセルされた日時。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アラートを起動した症状がアクティブでなくなった場合。アラートはシステムによってキャンセルされます。 ■ オブジェクトに適用されるポリシーで該当する症状の定義が無効になっているためにアラートを起動した症状がキャンセルされた場合。 ■ 該当する症状の定義が削除されたためにアラートを起動した症状がキャンセルされた場合。 ■ オブジェクトに適用されるポリシーでこのアラートのアラート定義が無効になっている場合。 ■ アラート定義が削除された場合。 ■ ユーザーがアラートをキャンセルした場合。

ユーザー シナリオ: カスタム ダッシュボードでアラートに応答する

アラートに関連するウィジェットを含むカスタム ダッシュボードを使用して、環境内にアラートが存在するかどうかを監視できます。カスタム ダッシュボードが提供する単一のインターフェイスを使用して、オブジェクトおよびオブジェクト グループの一般的なアラート ステータスを監視し、アラートを解決する処理を開始できます。

ある仮想インフラストラクチャ管理者は、会計部門によって使用される仮想マシンとホストについて管理責任があります。この管理者は、会計部門のオブジェクトを管理するためのアラートを作成した後、主要なウィジェットで会計オブジェクト グループのオブジェクトを表示するダッシュボードを作成しました。現在は、ダッシュボードを使用してこのグループのアラートを管理することを考えています。

前提条件

- 会計部門オブジェクトを管理するためのアラートを作成します。 [部門のオブジェクトに対するアラート定義の作成](#) を参照してください。
- アラート リスト、トップ アラート、アラートの各ウィジェットを追加するカスタム ダッシュボードを作成します。環境内のオブジェクトを監視するようにウィジェットを構成します。 [部門のオブジェクトを監視するためのダッシュボードの作成](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[ホーム] アイコンをクリックします。
- 2 ダッシュボードのタイトル バーで [ダッシュボード] をクリックし、[Accounting VMs and Hosts] を選択します。
- 3 [Acct Dept Alert List] で、[ステータス] 列ヘッダーをクリックして、アクティブなアラートがリストの先頭に表示されるように並べ替えます。

- 4** アラート リスト ツールバーで、[アラートの重要度別に行を色分け] をクリックします。

アラートが色で強調表示されて、重要度の高いものから対応できるようになります。

- 5** アラートの重要度が最も高いオブジェクトの行をクリックして、最初に対応します。

構成されているウィジェットの相互作用のため、健全性、リスク、効率、アラート ボリューム、トップ アラートの各ウィジェットに選択したオブジェクトのデータが表示されます。

- a 健全性、リスク、効率ウィジェットを調べて、オブジェクトの一般的なアラート ステータスを理解します。
- b トップ アラート ウィジェットを調べて、オブジェクトのアラートの数を確認します。
- c ウィジェットのアラート名をクリックします。

たとえば、[Acct VM CPU early warning Risk] アラートをクリックします。[アラートの詳細 - 概要] タブが表示されます。

- d 推奨事項に基づいてアラートを解決します。

たとえば、「これがスタンドアロン ホストである場合は、さらにメモリをホストに追加する」という推奨事項を使用するには、ホストにメモリを追加するための指示に対するリンクをクリックします。

- 6** [Accounting VMs and Hosts] ダッシュボードに戻ってさらにアラートを処理するには、左側のペインのツールバーにある戻るボタンをクリックします。

- 7** アラート リストで次のアラートを選択して、アラートの処理を続けます。

次のステップ

数収集サイクルの後、アラートを再び見て、アラートがキャンセルされてダッシュボードに表示されなくなっているかどうかを確認します。アラートがまだ表示されている場合は、トラブルシューティング ワークフローの例として「[ユーザー シナリオ：\[トラブルシューティング\] タブのオプションを使用して問題の根本原因を調査する](#)」を参照してください。

メトリック情報の評価

[すべてのメトリック] タブには、関係マップおよびユーザー定義のメトリック チャートがあります。トポロジ マップは、オブジェクトを環境トポロジ内での位置に照らして評価するのに役立ちます。メトリック チャートは、環境内の問題の考えられる原因を特定するのに役立つと考えられる選択オブジェクトのメトリックに基づいています。

たとえば、ホスト システムなどの 1 つのオブジェクトの問題を調査しているかもしれませんが、関係マップを使用すると、親オブジェクトおよび子オブジェクトのコンテキストでホストを確認できます。また、階層ナビゲーション システムとしても機能します。マップ内でオブジェクトをダブルクリックすると、そのオブジェクトがマップでフォーカスされ、そのオブジェクトの使用可能なメトリックが左下のペインでアクティブになります。

独自のメトリック チャートのセットを作成することもできます。オブジェクトおよびメトリックを選択して、1 つのオブジェクトまたは関連する複数のオブジェクト用のさまざまなメトリックへの変更のより詳細なビューを経時的に得られるようにします。

可能であれば、タブには事前定義されたメトリック セットが表示され、オブジェクトの特定の側面について検討するのに役立ちます。メトリックは、選択したオブジェクトに最も関連のあるグループに編成され、最も適切なメトリックが表示されます。たとえばホストの場合、メトリックは CPU、メモリ、ネットワーク、ストレージごとに表示されます。

仮想マシンの問題をトラブルシューティングする際、メトリック チャートを作成する

仮想マシンの問題をトラブルシューティングする際、さまざまなメトリックを比較できるように、メトリック チャートのカスタム グループを作成します。vRealize Operations Manager の [すべてのメトリック] タブを使用して作成できる詳細のレベルは、問題の根本原因を見つける場合に非常に役立ちます。

レポートされた仮想マシンのパフォーマンス問題を調査している仮想インフラストラクチャ管理者として、次のレポートされたシムptomについての詳細なチャートを見る必要があると判断しました。

- ゲスト ファイル システムの全体的なディスク使用量がクリティカル限界に到達しています
- ゲスト パーティション ディスクの使用量

[すべてのメトリック] タブを使用して問題を評価する次の方法は、vRealize Operations Manager を使用するための例として示されるものであり、確定的なものではありません。環境に特化したトラブルシューティング スキルや知識により、どの方法が有効か判断してください。

手順

- 1 メイン タイトル バーにある [検索] テキスト ボックスに仮想マシンの名前を入力します。
この例では、仮想マシンの名前は **sales-10-dk** です。
- 2 [すべてのメトリック] タブをクリックします。
- 3 関係トポロジ マップで、仮想マシン [dk-new-10] をクリックします。
中央ペインの左下にあるメトリック リストに、仮想マシン メトリックが表示されます。
- 4 チャート ツールバーで [日付コントロール] をクリックし、シムptomがトリガされた時間またはそれ以前の時間を選択します。
- 5 仮想マシンの表示領域にメトリック チャートを追加します。
 - a メトリック リストで [ゲスト ファイル システム統計] - [ゲスト ファイル システムの空き容量 (GB) の合計] を選択し、メトリック名をダブルクリックします。
 - b たとえば C:\ などのゲスト パーティションを追加するには、[ゲスト ファイル システム統計] - [C:\] - [ゲスト ファイル システムの空き容量 (GB)] を選択して、メトリック名をダブルクリックします。
 - c 比較用のディスク容量を追加するには、[ディスク容量] - [残り容量 (%)] を選択して、メトリック名をダブルクリックします。
- 6 これらのチャートを比較します。

チャートの比較では、ファイル システムの空き容量内で同様の減少が見られ、仮想マシンのディスク容量の残りキャパシティが一定の速度で減少していることが示されます。仮想マシンにディスク容量を追加する必要があると判断しても、データストアで仮想マシンへの変更をサポートできるかどうか分かりません。

7 チャートにデータストアのキャパシティ チャートを追加します。

a トポロジ マップで、ホストをダブルクリックします。

トポロジ マップがフォーカス オブジェクトとしてホストで更新されます。

b データストアをクリックします。

c データストア メトリックを表示するように更新されるメトリック リストで、[容量] - [使用可能な領域 (GB)] を選択して、メトリック名をダブルクリックします。

8 データストアのキャパシティ チャートを確認して、仮想マシンのディスク容量の増加をサポートするために十分なキャパシティがデータストアで使用可能であるかどうかを判断します。

結果

仮想マシン上の仮想ディスクのサイズを増やす必要があることが分かります。

次のステップ

仮想マシン上の仮想ディスクを拡張し、ストレスのかかったパーティションにそれを割り当てます。オブジェクト タイトル バーの [アクション] をクリックし、vSphere Web Client の仮想マシンを開きます。

[すべてのメトリック] タブでのトラブルシューティング

[すべてのメトリック] タブは、関係マップとメトリック チャートを提供します。トポロジ マップは、オブジェクトを環境トポロジ内での位置に照らして評価するのに役立ちます。メトリック チャートは、環境内の問題の考えられる原因を特定するのに役立つと考えられるアクティブ マップ オブジェクトのメトリックに基づいています。

[すべてのメトリック] の動作

関係マップは、選択したオブジェクト、関連するオブジェクト、およびそれぞれに生成されたアラートの数を表示します。オブジェクト アイコンをダブルクリックすると、選択したオブジェクトがマップのフォーカスになり、選択したオブジェクトにあわせてトポロジが更新され、メトリック リストには選択したオブジェクトのメトリックのみが表示されます。

メトリック リストを使用して、問題を調査したり、チャートをカスタマイズしてデータをより詳細に評価するのに役立つと考えられるメトリックに基づいてチャートを作成します。構成したチャートを保存するには、ツールバー オプションを使ってダッシュボードを作成します。

可能であれば、選択したオブジェクトに最も関連するメトリックを含む定義済みのメトリック グループも表示されます。これらのグループを編集したり、独自のグループを作成できます。

[すべてのメトリック] を確認できる場所

左ペインで、[環境] を選択し、グループ、アプリケーション、またはインベントリ オブジェクトを選択して、[すべてのメトリック] タブをクリックします。

[すべてのメトリック] オプション

オプションには、マップ ツールバー、メトリック セレクタ オプション、メトリック チャート ツールバー、および各チャートのツールバーが含まれます。

表 5-9. [関係マップ] オプション

オプション	説明
バッジ	選択したバッジの状態をマップ内の各オブジェクト上に表示します。
表示に合わせてズーム	使用可能な領域に合わせてマップをサイズ変更します。
パン	使用中のズームのレベルに関係なくマップ内の特定のオブジェクトを表示できるようにマップをクリックしてドラッグします。
ポイント時に値を表示する	有効にすると、オブジェクト アイコンにマウスのカーソルを置くことによってオブジェクトの名前、タイプ、および状態が表示されます。
ビューをズーム	マップ内の選択ボックスをクリックしてドラッグし、選択した領域を拡大します。
ズームイン	マップを拡大します。
ズームアウト	マップのサイズを小さくします。
最初のリソースにリセット	アイコンをダブルクリックして別のオブジェクトを調べた場合、元のオブジェクトにマップが戻されます。
リソース詳細	メインのペインのビューをオブジェクトの詳細に変更します。 [概要]、[アラート]、[分析]、および関連するタブを使用すると、問題の詳細なトラブルシューティングを行うことができます。
アラートの表示	マップで選択したオブジェクトに関するアラートを示すウィンドウを開きます。
マップ	オブジェクトと関連するオブジェクトのトポロジカル ビュー。 オブジェクトをダブルクリックすると、そのオブジェクトの関係マップが表示されます。 メトリック チャート セレクタ リストは、マップのフォーカスであるオブジェクトに基づきます。

チャートのオプションは、メトリック リストを制限するために使用します。

表 5-10. [メトリック チャート セレクタ] オプション

オプション	説明
共通メトリックの表示	リストを更新して、そのオブジェクト タイプで使用可能なメトリックのみが表示されるようにします。
メトリック収集の表示	リストを更新して、オブジェクト タイプの現在収集されたメトリックのみが表示されるようにします。
構成 メトリック グループを構成するには、PowerUser または管理者ロールを保持していることを確認します。	<p>[構成] アイコンをクリックして、次のいずれかのオプションを表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [グループの追加]。メトリックをグループに追加するには、任意のメトリック グループを展開して、1 つ以上のメトリックをグループにドラッグします。 ■ [グループの削除]。1 つ以上のグループを削除します。 ■ [グループ名の変更]。グループの新しい名前を入力します。 ■ [グループからのメトリックの削除]。1 つ以上のメトリックを 1 つ以上のグループから一度に削除するには、Ctrl キーを押しながら、削除するメトリックを選択します。

表 5-10. [メトリック チャート セレクタ] オプション（続き）

オプション	説明
検索	単語検索を使用して、リストに表示される項目の数を限定します。
メトリック リスト	メトリックをダブルクリックして、チャート ウィンドウに取り込みます。 メトリック グループをダブルクリックして、グループ内のメトリックごとに分かれたチャートをチャート ウィンドウに取り込みます。

オプションをさまざまに組み合わせて選択することにより、一定期間にわたって特定のメトリック データを視覚化し、各メトリックの結果を相互に比較することができるようになります。

表 5-11. [メトリック チャート ツールバー] オプション

オプション	説明
分割グラフ	各メトリックを別個のチャートに表示します。
積み重ねグラフ	すべてのチャートを 1 つに統合します。このチャートは、メトリック値の総計または合計が時間の経過とともにどのように変化するかを表示する場合に役に立ちます。積み重ねグラフを表示するには、分割グラフがオフになっていることを確認します。
Y 軸	Y 軸のスケールの表示/非表示を切り替えます。
メトリック チャート	チャートのデータ ポイントをつなぐラインの表示/非表示を切り替えます。
トレンド ライン	メトリックのトレンドを表すラインおよびデータ ポイントの表示/非表示を切り替えます。トレンド ラインは、隣接するデータ ポイントの平均に照らして各データ ポイントをプロットすることにより、タイムラインに沿ってメトリック ノイズを除外します。
動的しきい値	24 時間内で計算された動的しきい値の表示/非表示を切り替えます。
全期間における動的しきい値の表示	グラフの全期間の動的しきい値の表示/非表示を切り替えます。
アノマリ	異常の表示/非表示を切り替えます。メトリックがしきい値を超えている期間が影付きで表示されます。異常は、メトリックが動的しきい値または静的しきい値を上回った場合、または下回った場合に生成されます。
データ ポイント チップの表示	チャート内でデータ ポイントの上にマウスを置いたときに、データ ポイントのツールチップの表示/非表示を切り替えます。
X 軸ズーム	チャートで範囲セレクタを使用してチャートのサブセットを選択する場合に、選択した領域を X 軸で拡大します。[X 軸ズーム]と[Y 軸ズーム]を同時に使用できます。
Y 軸ズーム	チャートで範囲セレクタを使用してチャートのサブセットを選択する場合に、選択した領域を Y 軸で拡大します。[X 軸ズーム]と[Y 軸ズーム]を同時に使用できます。
表示に合わせてズーム	使用可能な領域に合わせてチャートをリセットします。
動的しきい値でズーム	軸の最大値と最小値が対象メトリックに対して計算された動的しきい値の最大値と最小値になるように、チャートの Y 軸のサイズを変更します。

表 5-11. [メトリック チャート ツールバー] オプション（続き）

オプション	説明
すべてのチャートをズーム	範囲セレクトの使用時にキャプチャされた領域に基づいて、チャート ペインで開いているすべてのチャートのサイズを変更します。 このオプションと [ビューをズーム] の間を切り替えることができます。
ビューをズーム	範囲セレクトの使用時に、現在のチャートのサイズを変更します。
パン	ズーム モードでは、チャートの拡大セクションをドラッグして、メトリックの最大値、最小値、以前の値、新しい値を表示できます。
データ値の表示	ズームまたはパン オプションに切り替えた場合に、データ ポイント ツールチップを有効にします。[データ ポイント チップの表示] を有効にする必要があります。
チャートの更新	現在のデータでチャートを再ロードします。
日付コントロール	日付セレクトを開きます。 日付セレクトを使用して、各チャートに表示されるデータを調査中の期間に限定します。
ダッシュボードの生成	現在のチャートをダッシュボードとして保存します。
すべてを削除する	すべてのチャートをチャート ペインから削除して、一連の新しいチャートの作成を開始できるようにします。

ツールバーのオプションで個々のチャートを管理します。

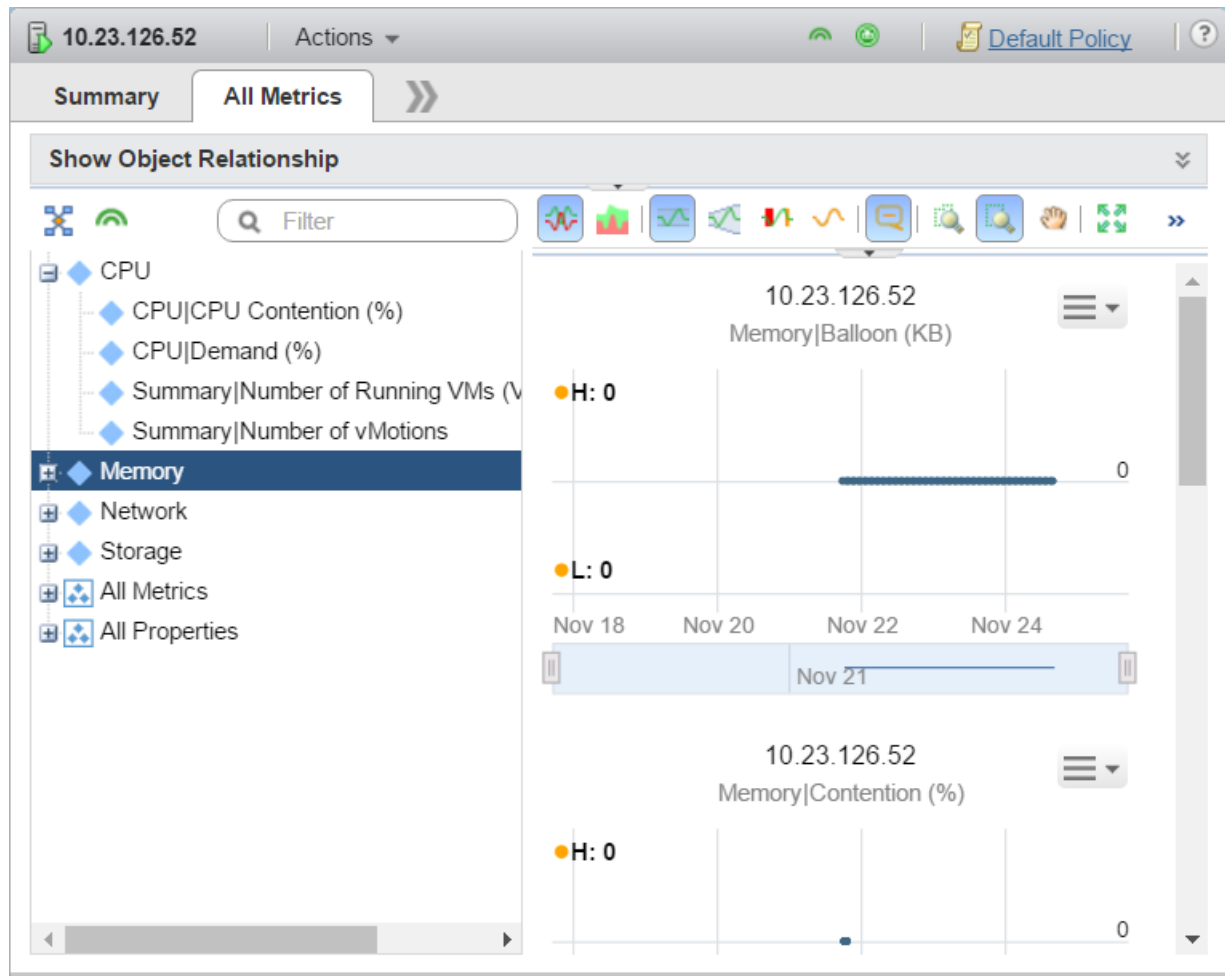
表 5-12. [メトリック チャート、チャート ツールバー] オプション

オプション	説明
ナビゲーション	オブジェクトに関する情報を取得するために別のアプリケーションにリンクする機能がアダプタに含まれている場合は、ボタンをクリックして、そのアプリケーションのリンクにアクセスします。
スナップショットの保存	現在のチャートの PNG ファイルを作成します。イメージは、画面に表示されるサイズになります。 このファイルをブラウザのダウンロード フォルダに取得できます。
フル スクリーン スナップショットの保存	現在のグラフ イメージを フルページの PNG ファイルとしてダウンロードし、表示または保存することができます。 このファイルをブラウザのダウンロード フォルダに取得できます。
カンマ区切りデータのダウンロード	現在のチャートのデータを含む CSV ファイルを作成します。 このファイルをブラウザのダウンロード フォルダに取得できます。
下へ移動	チャート位置を 1 単位下げます。
上へ移動	チャート位置を 1 単位上げます。
閉じる	チャートを削除します。

ホスト関連のメトリック

vRealize Operations Manager は、選択したホストのメトリックのグループを提供します。各グループにはホストの最も適切なメトリックが表示され、環境を監視することを支援します。

メトリック グループを表示するには、[環境概要] でホストを選択し、[すべてのメトリック] を選択します。



グループ内のメトリックを表示するには、グループの横のプラス記号をクリックします。グループをダブルクリックして、チャート ウィンドウに、グループ内のメトリックごとに分かれたチャートを取り込むことができます。上のスクリーンショットでは、チャート ウィンドウにメモリ グループのメトリックが取り込まれています。

表 5-13. CPU メトリック グループ

メトリック	説明
CPU CPU の競合 (%)	<p>このメトリックは、物理 CPU に対するアクセスが競合していることにより、ESX i ホスト内で仮想マシンを実行できない時間の割合を示します。示される数値は、すべての仮想マシンの平均の数値です。この数値は、CPU の競合の影響を最も大きく受ける仮想マシンで発生する最高の数値よりも低くなります。</p> <p>このメトリックを使用して、ホストがそのすべての仮想マシンに対応できるかどうかを確認します。競合が低いことは、仮想マシンがスムーズに動作するために要求するすべてのものにアクセスできることを意味します。これは、インフラストラクチャがアプリケーション チームに良いサービスを提供していることを意味します。</p> <p>このメトリックを使用するときは、数値が期待の範囲内にあることを確認してください。相対値と絶対値の両方を確認してください。相対値は、値の大幅な変化を意味します。これは、ESXi が仮想マシンに対応できないことを意味します。絶対値は、実際の値それ自体が高いことを意味します。数値が高い原因を調査してください。このメトリックに影響を与える 1 つの要因は CPU 電源管理です。CPU 電源管理により、CPU 速度が 3 GHz から 2 GHz にクロックダウンされると、仮想マシンがフルスピードで動作していないことを示しているため、速度の減少が説明されます。</p> <p>このメトリックは、次の方法で計算されます：</p> $\text{cpu capacity_contention} / (200 * \text{summary number_running_vcpus})$
CPU デマンド (%)	<p>このメトリックは、CPU の競合や CPU の制限がない場合に仮想マシンが使用する CPU リソース量を示します。このメトリックは、過去 5 分間のアクティブな CPU の負荷の平均を表します。</p> <p>電源管理を最大に設定する場合は、この数値を 100% 未満に保ってください。</p> <p>このメトリックは、次の方法で計算されます：</p> $(\text{cpu.demandmhz} / \text{cpu.capacity_provisioned}) * 100$

表 5-13. CPU メトリック グループ (続き)

メトリック	説明
サマリ 実行中の仮想マシンの数	<p>このメトリックは、特定の時点での実行中の仮想マシンの数を示します。データは 5 分ごとにサンプリングされます。</p> <p>実行中の仮想マシンの数が多いことは、ホストでより多くのリソースが使用されるため、CPU またはメモリの急増の原因になることがあります。実行中の仮想マシンの数により、ESXi ホストがこなす要求の数がよくわかります。パワーオフされた仮想マシンは、ESXi のパフォーマンスに影響しないため、含まれません。実行中の仮想マシンの数が変わることは、パフォーマンスの問題に関与することがあります。ホストで実行中の仮想マシンの数が多いことは、ESXi がクラッシュした場合にすべての仮想マシンがダウンするため、集中リスクが高いことも意味します。</p> <p>このメトリックを使用して、実行中の仮想マシンの急増と、CPU 競合、メモリ競合など他のメトリックの急増の間の相関を探します。</p>
サマリ vMotion 数	<p>このメトリックは、仮想マシンのダウンタイムもサービスの中断もないライブ移行 (vMotion) が過去 (x) 分間にホストで発生した回数を示します。</p> <p>vMotion の数により、安定性がよくわかります。健全な環境では、この数は安定し、比較的低くなります。</p> <p>このメトリックを使用するときは、vMotion と、CPU 競合、メモリ競合など他のメトリックの急増の間の相関を探します。vMotion が急増を生むわけではありませんが、メモリ使用の競合、CPU デマンド、CPU 競合の急増が発生する可能性が高くなります。</p>

表 5-14. メモリ メトリック グループ

メトリック	説明
メモリ バルーン (KB)	<p>このメトリックは、仮想マシンのメモリ制御に現在使用されている総メモリ容量を示します。</p> <p>このメトリックを使用して、ESXi がメモリ バルーンングを通じて解放した仮想マシンのメモリの量を監視します。</p> <p>バルーンングの存在は、ESXi がメモリのひっ迫した条件にあったことを示します。ESXi は、その使用メモリが特定のしきい値に達したときにバルーンングを有効化します。たとえば、vRealize Operations Manager 6.0 では、しきい値が 98% を超えています。</p> <p>このメトリックを使用するときは、バルーンングのサイズが増加していることを確認してください。バルーンングの増加は、メモリの不足が 1 回限りの出来事ではないこと、およびメモリの不足が悪化していることを示します。バルーンアウトしたページを仮想マシンが必要としたことを示す、メモリの変動を探します。バルーンアウトしたページを仮想マシンが要求した場合、ページをディスクから戻す必要があるため、これは、仮想マシンのメモリのパフォーマンスの問題に変換されます。</p> <p>バルーンのターゲット値が、メトリックによって示されている値よりも大きい場合、これは、解放できる使用可能なメモリがさらにあることを意味します。</p>
メモリ 競合 (%)	<p>このメトリックは、スワップされたメモリにアクセスするために仮想マシンが待機している時間の割合を示します。</p> <p>このメトリックを使用して、ESXi のメモリ スワッピングを監視します。高い値は、ESXi のメモリが少なくなっていて、大量のメモリがスワップされていることを示します。</p>
メモリ 使用率 (%)	<p>このメトリックには、アクティブで使用されている物理メモリの量を示します。メモリ使用率は、構成済みまたは使用可能な総メモリ量に対する割合として表示されます。このメトリックは、vCenter 内の消費カウンタにマッピングされます。</p> <p>このメトリックに高い値が表示された場合、ESXi が使用可能なメモリの大きな割合を使用していることを示します。他のメモリ関連メトリックを調べて、ESXi がメモリをさらに必要としているかどうかを確認してください。</p>

表 5-15. ネットワーク メトリック グループ

メトリック	説明
ネットワーク I/O すべてのインスタンスの集計 ドロップされたパケット (%)	<p>このメトリックは、収集間隔中にドロップされた送受信パケットの割合を示します。</p> <p>このメトリックを使用して、ESXi ネットワークの信頼性とパフォーマンスを監視します。高い値は、ネットワークの信頼性が低く、パフォーマンスが低下していることを示します。</p>
ネットワーク I/O すべてのインスタンスの集計 1 秒あたりの受信パケット数	<p>このメトリックは、収集間隔中に受信したパケットの数を示します。</p> <p>このメトリックを使用して、ESXi のネットワーク使用量を監視します。</p>
ネットワーク I/O すべてのインスタンスの集計 1 秒あたりの送信パケット数	<p>このメトリックは、収集間隔中に送信したパケットの数を示します。</p> <p>このメトリックを使用して、ESXi のネットワーク使用量を監視します。</p>

表 5-16. ストレージ メトリック グループ

メトリック	説明
データストア I/O 仮想マシン ワークロード、ディスク I/O の観測平均	
ストレージ アダプタ すべてのインスタンスの集計読み取り遅延 (ms)	<p>このメトリックは、すべてのストレージ アダプタによる読み取り処理で必要となった時間の平均を示します。</p> <p>このメトリックを使用して、ストレージ アダプタの読み取り処理を監視します。高い値は、ESXi でストレージ読み取り処理が低速になっていることを示します。</p> <p>遅延合計は、カーネル待ち時間とデバイス待ち時間の合計です。</p>
ストレージ アダプタ すべてのインスタンスの集計書き込み遅延 (ms)	<p>このメトリックは、すべてのストレージ アダプタによる書き込み処理で必要となった時間の平均を示します。</p> <p>このメトリックを使用して、ストレージ アダプタの書き込み処理のパフォーマンスを監視します。高い値は、ESXi でストレージ書き込み処理が低速になっていることを示します。</p> <p>遅延合計は、カーネル待ち時間とデバイス待ち時間の合計です。</p>

環境内のリソースの分析

vRealize Operations Manager は、監視に加えて、仮想環境のリソースとパフォーマンスを解析するための強力なツールを提供します。

[分析] タブを使用して、仮想環境の現在の状態を分析できます。

バッジ定義の分析

vRealize Operations Manager では、バッジを使用してメトリックを可視化し、仮想環境のパフォーマンスや状態の高水準の表示が得られます。

分析バッジのスコアは、vCenter Server アダプタによって計算され、その他のバッジのスコアは、vRealize Operations Manager 分析アルゴリズムによって計算されます。

表 5-17. vRealize Operations Manager バッジ

名前	アイコン	説明
ワークロード		ワークロード バッジは、オブジェクトにおけるリソースのデマンドを単一の値で表すメトリックを組み合わせます。これらのメトリックには、CPU 使用率、メモリ使用率などが含まれます。
異常		選択したオブジェクトおよびその子オブジェクトのすべてのメトリックのしきい値違反の総数を使用して、アノマリ スコアが計算されます。アノマリ スコアが低ければ、確立された履歴パラメータに準じてオブジェクトが動作していることを表しています。
障害		障害スコアは、vCenter Server から公開されたイベントに基づいて計算されます。スコアの算出は、根本的な問題の重要度に基づいて行われます。リソース上に障害に関連した問題が複数ある場合は、その中で重要度が最も大きい問題に基づいて、障害スコアが算出されます。

表 5-17. vRealize Operations Manager バッジ（続き）

名前	アイコン	説明
容量		容量バッジは、仮想環境に新規仮想マシンに対応する余地があるかどうかを表します。vRealize Operations Manager は、選択したオブジェクトにデプロイ可能な仮想マシンの総数と比較した、残り仮想マシン カウントのパーセンテージとしてキャパシティ スコアを計算します。
残り時間		残り時間スコアは、オブジェクトのリソースが枯渇するまでの残り時間を表します。残り時間スコアを使用すると、選択したオブジェクトに対する物理リソースまたは仮想リソースのプロビジョニングを計画したり、仮想環境内のワークロードを整理し直すことができます。
負荷		負荷スコアは、選択したオブジェクトの履歴ワークロードを示します。負荷スコアは、一定期間におけるリソースの需要と使用可能な容量の比率として計算されます。
解放可能な容量		解放可能な無駄スコアは、仮想インフラストラクチャまたは特定のオブジェクトへのオーバー プロビジョニングを表します。解放可能で、環境内の他のオブジェクトにプロビジョニング可能なリソース量を特定します。
密度		統合度スコアは、ホストごとの仮想マシン、物理 CPU ごとの仮想 CPU、物理メモリごとの仮想メモリなどの統合率を表します。密度スコアを使用すると、統合率の向上とコスト削減を実現できます。
コンプライアンス		コンプライアンス バッジの値は、vRealize Operations Manager、データセンター、クラスタ、ホスト システム、および vRealize Operations Manager や、このアダプタがインストールされている場合はさらに vRealize Configuration Manager によって管理されている仮想マシン オブジェクトから収集されたデータに対して vRealize Operations Manager で実行する 1 つまたは複数のコンプライアンス テンプレートに基づいたスコアです。スコアは、構成済みの vRealize Configuration Manager 設定に基づいて算出されます。

バッジ スコア

バッジ スコアの範囲は 0 から 100 までとなります。残り時間、キャパシティ、効率、統合度のバッジでは、スコア 100 は良好な状態であることを示します。ワークロード、アノマリ、障害、ストレス、節約可能なキャパシティのバッジでは、100 は悪い状態を示します。バッジの色は、vRealize Operations Manager 管理者が設定したバッジ スコアしきい値に基づきます。各バッジにはデフォルトのしきい値があります。バッジ スコアのしきい値の構成に関する詳細については、[ポリシー](#) を参照してください。

バッジには、vSphere に関連するリソースのパワー状態は示されません。たとえば、vSphere でホストが切断されている場合、ワークロード バッジには、[オフライン] 状態ではなく、[不明] 状態が示されます。

バッジの色	アイコン	説明
緑色のバッジ		設定したしきい値に基づき、オブジェクトは正常な状態にあります。たとえば、デフォルトでは、緑のインフラストラクチャ ワークロード バッジは、スコアが 76 以上であることを示します。
黄色のバッジ		オブジェクトに一定レベルの問題が発生しています。たとえば、デフォルトでは、インフラストラクチャの黄のワークロード バッジは、スコアが 80 ~ 89 であることを示します。
オレンジ色のバッジ		オブジェクトに重大な問題が発生している可能性があるか、キャパシティが上限に達しつつあります。たとえば、デフォルトでは、インフラストラクチャのオレンジの障害バッジは、スコアが 50 ~ 74 であることを示します。
赤色のバッジ		オブジェクトが正常に動作していないか、まもなく動作を停止します。ほとんどのメトリックがしきい値を超過しています。たとえば、デフォルトでは、インフラストラクチャの赤のリスク バッジは、スコアが 100 であることを示します。
灰色のバッジ		このオブジェクトのデータが使用不可であるか、またはオブジェクトがオフラインです。たとえば、オブジェクトの残りキャパシティのためのデータがないことを示します。

[ワークロード] タブ

vRealize Operations Manager のワークロードは、オブジェクトがアクセスできる実際のキャパシティに対する必要なリソース デマンドのことです。ワークロード バッジの値は、リソースに関してあるオブジェクトがどれだけ動作するのに基づいたスコアです。ワークロード値は、キャパシティの制約を調査する際や、環境内のオブジェクトの全体的な状態を評価する際の、調査ツールとして使用します。

ワークロード バッジ

vRealize Operations Manager のワークロード分析バッジは、リソースに関してあるオブジェクトがどれだけの動作を求められるかを示します。vRealize Operations Manager は、定義済みのバッジ スコアしきい値を基にした色付きアイコンでワークロードを表します。

ワークロード スコアの範囲は 0 (良好) から 100 超 (不良) までとなります。バッジ スコアしきい値は vRealize Operations Manager 管理者が変更できます。

ワークロード バッジ スコアのシムptomしきい値を構成するには、[ポリシー](#) を参照してください。

表 5-18. オブジェクト ワークロードの状態






バッジ アイコン	説明	ユーザー アクション
	オブジェクトのワークロードは過剰ではありません。	注意は必要ありません。
	オブジェクトに何らかの高リソース ワークロードが発生しています。	詳細を確認して、適切な処置を行います。
	オブジェクトのワークロードが少なくとも 1 つの領域で容量に接近しています。	詳細を確認して、なるべく早急に適切な処置を行います。

表 5-18. オブジェクト ワークロードの状態（続き）

バッジ アイコン	説明	ユーザー アクション
	オブジェクトのワークロードが少なくとも 1 つの領域で容量以上となっています。	速やかに対処して、問題を回避または修正してください。
	オブジェクトがオフラインであるか、または使用可能なデータがありません。	

ワークロードバッジを確認できる場所

ワークロード バッジを表示するには、左側のペインの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[分析] タブ、[ワークロード] タブの順にクリックします。

表 5-19. 選択されたインベントリ オブジェクトに基づくワークロード

アイテム	説明
バッジ ステータス	ワークロード ポリシーに基づいたオブジェクトのワークロード ステータス。
ワークロード トレンド	時間の経過に伴うオブジェクトのバッジ値の推移。 この傾向のビューを使用すると、一定期間の動作を確認して、オブジェクトの変化を示すバッジ値の変化がいつ起きたかを識別できます。 傾向データの時間値は、オブジェクトに関連付けられたポリシーの [時刻] 分析設定で定義される [データ範囲] 設定に基づきます。
ワークロードの内訳	現在のワークロードの内訳。 表示される情報は、オブジェクト タイプにより異なります。
関連オブジェクトのワークロード	関連オブジェクトのワークロード ステータス。 関連オブジェクトを使用して、問題が影響を与えているのは現在のオブジェクトのみか、または関連オブジェクトでも問題が発生しているのかを判定します。
詳しい分析	選択した分析バッジに関連するワークロードの問題をトラブルシューティングするための、詳しい分析オプションを一覧表示します。 詳しい分析では、過去 24 時間のデータを使用します。
オブジェクト リソース	オブジェクトのために構成されたリソース。
ワークロード ポリシー設定	ポリシー設定では、ワークロードに使用する内容が表示されます。

[異常] タブ

[アノマリ] タブに示された情報は、メトリック値がその正常範囲の外になった場合に報告されるアノマリです。アノマリ スコアは、すべてのメトリックのうち、異常な動作をしているメトリックのパーセンテージです。異常動作を調査する、または環境内のオブジェクトの全体的な状態を評価する際に、アノマリ値を調査ツールとして使用します。

vRealize Operations Manager はオブジェクトに対して収集された各メトリック値の動的しきい値を計算します。また、vRealize Operations Manager は動的しきい値に違反しているメトリックの数を分析して、しきい値違反の傾向と正常レベルを決定します。これらの傾向に基づき、選択したオブジェクトおよびその子オブジェクトのすべてのメトリックのしきい値違反の総数を使用して、アノマリ分析スコアが計算されます。

異常バッジ

vRealize Operations Manager アノマリ バッジ スコアは、履歴メトリック データに基づいて、オブジェクトの動作の問題の程度を表します。vRealize Operations Manager は、定義済みのバッジ スコアしきい値を基にした色付きアイコンを使用して、アノマリを示します。

バッジ スコアを評価する際、アノマリの数が多ければ、潜在的な問題がある可能性があります。異常スコアが低ければ、確立された履歴パラメータに準じてオブジェクトが動作していることを表しています。オブジェクトのほとんどまたはすべてのメトリック、特にオブジェクトの KPI はそのしきい値内にあります。動作に変化がある場合は問題が深刻化していることが多いため、オブジェクトのメトリックが計算済みしきい値から外れると、オブジェクトのアノマリ スコアが高くなります。しきい値違反のメトリックが増えると、異常も増加し続けます。

KPI メトリックによる違反は、非 KPI メトリックによる違反の場合よりも、異常スコアの増分が多くなります。アノマリ の数が非常に多ければ、通常は障害があるか、少なくとも注意が必要な状況であることを表しています。

アノマリには、予想される動作傾向の範囲外となった統計情報の数が含まれ、ワークロードには、リソースのオブジェクトがどれだけの動作をしているのかの絶対的な測定値が含まれます。アノマリ、ワークロードのどちらも、パフォーマンスの問題に考えられる原因の検索およびトラブルシューティングに役立ちます。

異常スコアの範囲は 0 (良好) から 100 (不良) までとなります。バッジ スコアしきい値は vRealize Operations Manager 管理者が変更できます。

アノマリ バッジ スコアのシムptomしきい値を構成するには、[ポリシー](#) を参照してください。

表 5-20. オブジェクトの異常の状態

バッジアイコン	説明	ユーザー アクション
	異常スコアは正常です。	注意は必要ありません。
	異常スコアが正常範囲外にあります。	詳細を確認して、適切な処置を行います。
	異常スコアが非常に高くなっています。	詳細を確認して、なるべく早急に適切な処置を行います。
	ほとんどのメトリックがしきい値を超過しています。このオブジェクトは正常に動作していないか、まもなく動作を停止します。	速やかに対処して、問題を回避または修正してください。
	オブジェクトがオフラインであるか、または使用可能なデータがありません。	

アノマリ バッジを確認できる場所

アノマリ バッジを表示するには、左側のペインの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[分析] タブ、[アノマリ] タブの順にクリックします。

表 5-21. 選択されたインベントリ オブジェクトに基づくアノマリ

アイテム	説明
バッジ ステータス	アノマリ ポリシーに基づいたオブジェクトのアノマリ ステータス。
アノマリの傾向	<p>時間の経過に伴うオブジェクトのバッジ値の推移。</p> <p>この傾向のビューを使用すると、一定期間の動作を確認して、オブジェクトの変化を示すバッジ値の変化がいつ起きたかを識別できます。</p> <p>傾向データの時間値は、オブジェクトに関連付けられたポリシーの [時刻] 分析設定で定義される [データ範囲] 設定に基づきます。</p>
アノマリの内訳	<p>コンプライアンス標準のアラートごとの内訳。</p> <p>標準違反を表示するには、標準テーブル内の行をクリックします。標準リストを制限するには、次のボタンを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 標準違反。少なくともシムptomがトリガーされた標準アラートだけを表示します。 ■ 全基準。すべての標準アラートを表示します。
関連オブジェクトのアノマリ	<p>関連オブジェクトのアノマリ。</p> <p>関連オブジェクトを使用して、問題が影響を与えているのは現在のオブジェクトのみか、または関連オブジェクトでも問題が発生しているのかを判定します。</p>
オブジェクト リソース	オブジェクトのために構成されたリソース。

[障害] タブ

[障害] タブに表示される情報は、選択したオブジェクトの可用性と、それに関連する構成の問題を組み合わせたものです。各障害には重大度レベルがあります。障害スコアは、ワーストのオープン障害の重大度レベルであり、vCenter Server が発行するイベントに基づいて計算されます。障害スコアが高くなると、そのオブジェクトの健全性は低くなります。

障害バッジ

障害スコアの計算には、NIC または HBA の冗長性の損失、メモリ チェックサム エラー、HA フェイルオーバーの問題、Common Information Model (CIM) イベントなど、イベントが含まれます。障害は直ちに解決する必要があります。一方、リスク スコアを構成する項目は直ちに対処する必要はありませんが、引き続き注意を要します。

vRealize Operations Manager の各オブジェクトには、0（障害なし）から 100（重大な障害）までの間の障害スコアが付いています。スコアの算出は、根本的な問題の重要度に基づいて行われます。リソース上に障害に関連した問題が複数ある場合、障害スコアは、その中で重大度が最も大きい問題に基づいたものです。

vRealize Operations Manager の他のバッジとは異なり、障害バッジのしきい値スコアからのアラートは生成されません。代わりに、問題ごとに障害アラートが生成されます。問題を解決すると、アラートはクリアまたはキャンセルされ、バッジのスコアが下がります。

障害スコアの範囲は 0（良好）から 100（不良）までとなります。バッジ スコアしきい値は vRealize Operations Manager 管理者が変更できます。

アノマリ バッジ スコアのシムptomしきい値を構成するには、[ポリシー](#) を参照してください。

表 5-22. オブジェクトの障害の状態

バッジ アイコン	説明	ユーザー アクション
	選択したオブジェクトには障害が登録されていません。	注意は必要ありません。
	選択したオブジェクトに重要度の低い障害が登録されています。	詳細を確認して、適切な処置を行います。
	選択したオブジェクトに重要度の高い障害が登録されています。	詳細を確認して、なるべく早急に適切な処置を行います。
	選択したオブジェクトに重大な障害が登録されています。	速やかに対処して、問題を回避または修正してください。
	オブジェクトがオフラインであるか、または使用可能なデータがありません。	

障害バッジを確認できる場所

障害バッジを表示するには、左側のペインの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[分析] タブ、[障害] タブの順にクリックします。

表 5-23. 選択されたインベントリ オブジェクトに基づく障害

アイテム	説明
バッジ ステータス	オブジェクトの可用性と構成の問題の組み合わせに基づいたオブジェクトの障害ステータス。
障害の傾向	時間の経過に伴うオブジェクトのバッジ値の推移。 この傾向のビューを使用すると、一定期間の動作を確認して、オブジェクトの変化を示すバッジ値の変化がいつ起きたかを識別できます。 傾向データの時間値は、オブジェクトに関連付けられたポリシーの [時刻] 分析設定で定義される [データ範囲] 設定に基づきます。
障害の内訳	グループ オブジェクトに影響する現在の障害の内訳。
関連オブジェクトの障害	関連オブジェクトの障害ステータス。 関連オブジェクトを使用して、問題が影響を与えているのは現在のオブジェクトのみか、または関連オブジェクトでも問題が発生しているのかを判定します。

[残り容量] タブ

[残りキャパシティ] タブには、新しい仮想マシンを格納するための仮想環境の未使用キャパシティが表示されます。vRealize Operations Manager は、選択したオブジェクトにデプロイ可能なキャパシティの合計量と比較した、残りキャパシティ カウントのパーセンテージとして残りキャパシティ スコアを計算します。

スコアは、未使用リソースの現在の量と、過去 n 週間における平均的な仮想マシン プロファイルを基に計算されます。残り仮想マシン カウントは、CPU、メモリ、ディスク I/O、ネットワーク I/O、ディスク領域といった、残り時間スコアを計算するのに使用されるのと同じコンピューティング リソースに応じて算出されます。

注： アクティブな子仮想マシンがないオブジェクトの小型、中型、平均、大型の仮想マシン プロファイルは算出できません。子仮想マシンがパワーオフ状態の場合は、数値ではなく "?" が表示される場合があります。

残り容量バッジ

残り容量スコアの範囲は 0 (不良) から 100 (良好) までとなります。

バッジ スコアしきい値は vRealize Operations Manager 管理者が変更できます。

残りキャパシティ バッジ スコアのシムプトムしきい値を構成するには、[ポリシー](#) を参照してください。

表 5-24. オブジェクトの容量の状態

アイコン	説明	ユーザー アクション
	オブジェクトの残り容量は通常レベルです。	注意は必要ありません。
	オブジェクトの残り容量は通常レベル未満です。	詳細を確認して、適切な処置を行います。
	オブジェクトの残り容量は著しく少ないレベルです。	詳細を確認して、なるべく早急に適切な処置を行います。
	オブジェクトの容量は間もなく不足するか、またはすでに不足しています。	速やかに対処して、問題を回避または修正してください。
	オブジェクトがオフラインであるか、またはその期間のどのメトリックでもデータが提供されていません。	

残りキャパシティ バッジを確認できる場所

残りキャパシティ バッジを表示するには、左側のペインの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[分析] タブ、[残りキャパシティ] タブの順にクリックします。

表 5-25. 選択されたインベントリ オブジェクトに基づく残りキャパシティ

アイテム	説明
バッジ ステータス	オブジェクトの残りキャパシティ ステータス。
残りキャパシティの傾向	時間の経過に伴うオブジェクトのバッジ値の推移。 この傾向のビューを使用すると、一定期間の動作を確認して、オブジェクトの変化を示すバッジ値の変化がいつ起きたかを識別できます。 傾向データの時間値は、オブジェクトに関連付けられたポリシーの [時刻] 分析設定で定義される [データ範囲] 設定に基づきます。
残りキャパシティの内訳	オブジェクトの残りキャパシティの内訳。 リソース コンテナの残りキャパシティを計算する際に検討されるデータ範囲は、オブジェクトに関連付けられたポリシーの [時刻] 分析設定で定義される [データ範囲] 設定に基づきます。
関連オブジェクトの残りキャパシティ	関連オブジェクトの残りキャパシティ ステータス。 関連オブジェクトを使用して、問題が影響を与えているのは現在のオブジェクトのみか、または関連オブジェクトでも問題が発生しているのかを判定します。

[残り時間] タブ

[残り時間] タブには、選択されたオブジェクトのリソースが枯渇するまでの残り時間が表示されます。残り時間スコアは、現在の消費トレンドに基づいて、最大キャパシティからプロビジョニング時間バッファを差し引いたキャパシ

ティに到達するまでの日数です。残り時間スコアでは、選択されたオブジェクトの物理リソースまたは仮想リソースのプロビジョニングを計画するか、ワークロードを変更して仮想環境のリソースのニーズを調整できます。

残り時間スコアは、オブジェクトのリソース タイプごとに計算されます。たとえば、CPU 使用量またはディスク I/O はオブジェクト タイプの履歴データに基づきます。vRealize Operations Manager は、[構成] ダイアログ ボックスで設定したプロビジョニング バッファと比較した各コンピューティング リソースの残り時間のパーセンテージとして残り時間スコアを計算します。デフォルトでは、残り時間スコアのプロビジョニング バッファは 30 日です。いずれかのコンピューティング リソースの容量がプロビジョニングされたバッファを下回る場合は、残り時間スコアは 0 となります。

たとえば、プロビジョニング バッファが 30 日に設定されており、選択したオブジェクトの CPU リソースが 81 日、メモリ リソースが 5 日、ディスク I/O リソースが 200 日、ネットワーク I/O リソースが 1 年以上の場合、リソースの 1 つの容量が 30 日を下回っているため、残り時間スコアは 0 となります。

残り時間バッジ

残り時間スコアの範囲は 0 (不良) から 100 (良好) までとなります。バッジ スコアしきい値は vRealize Operations Manager 管理者が変更できます。

残り時間バッジ スコアのシムptomしきい値を構成するには、[ポリシー](#) を参照してください。

表 5-26. 残り時間の状態

バッジ アイコン	説明	ユーザー アクション
	残り日数は、指定したスコア プロビジョニング バッファを大きく上回っています。	注意は必要ありません。
	残り日数は、指定したスコア プロビジョニング バッファを上回っていますが、指定したバッファの 2 倍未満となっています。	詳細を確認して、適切な処置を行います。
	残り日数は、指定したスコア プロビジョニング バッファを上回っていますが、指定したバッファに近づきつつあります。	詳細を確認して、なるべく早急に適切な処置を行います。
	残っている日数が、指定したスコア プロビジョニング バッファを下回っています。選択したオブジェクトですでに一部のリソースが枯渇しているか、間もなく枯渇すると考えられます。	速やかに対処して、問題を回避または修正してください。
	オブジェクトがオフラインであるか、または残り時間スコアのデータが提供されていません。	

残り時間スコアを確認できる場所

残り時間バッジを表示するには、左側のペインの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[分析] タブ、[残り時間] タブの順にクリックします。

表 5-27. 選択されたインベントリ オブジェクトに基づく残り時間

アイテム	説明
バッジ ステータス	オブジェクトの残り時間ステータス。
残り時間の傾向	時間の経過に伴うオブジェクトのバッジ値の推移。 この傾向のビューを使用すると、一定期間の動作を確認して、オブジェクトの変化を示すバッジ値の変化がいつ起きたかを識別できます。 傾向データの時間値は、オブジェクトに関連付けられたポリシーの [時刻] 分析設定で定義される [データ範囲] 設定に基づきます。
残り時間の内訳	オブジェクトの残り時間の内訳。
関連オブジェクトでの残り時間	関連オブジェクトの残り時間のステータス。 関連オブジェクトを使用して、問題が影響を与えているのは現在のオブジェクトのみか、または関連オブジェクトでも問題が発生しているのかを判定します。

[負荷] タブ

[ストレス] タブには、vRealize Operations Manager で計算されたオブジェクトのデマンドの推移が示されます。この分析では、オブジェクトのワークロードとそのキャパシティを比較します。負荷スコアを使用すると、十分なりソースが割り当てられていないホストや仮想マシン、または実行している仮想マシンの数が多過ぎるホストを特定できます。

指定したストレス ラインをワークロードが超えると、ストレスが累積されます。ストレス スコアは、選択した時間サンプル内におけるストレスが蓄積したストレス ゾーン エリアのパーセンテージです。負荷スコアの高さは、現在のパフォーマンスの問題を示すのではなく、将来的なパフォーマンスの問題の可能性を浮き彫りにするものです。

負荷バッジ

負荷スコアの範囲は 0 (良好) から 100 (不良) までとなります。バッジ スコアしきい値は vRealize Operations Manager 管理者が変更できます。

ストレス バッジ スコアのシムptomしきい値を構成するには、[ポリシー](#) を参照してください。

表 5-28. 負荷の状態

バッジアイコン	説明	ユーザー アクション
	負荷スコアは正常です。	注意は必要ありません。
	一部のオブジェクト リソースが十分に需要を満たしていません。	詳細を確認して、適切な処置を行います。
	オブジェクトのリソースが常に不足しています。	詳細を確認して、なるべく早急に適切な処置を行います。
	オブジェクト上のほとんどのリソースが常に不足しています。オブジェクトが正常に機能しなくなるおそれがあります。	速やかに対処して、問題を回避または修正してください。
	オブジェクトがオフラインであるか、またはストレス スコアのデータが提供されていません。	

ストレス スコアを確認できる場所

ストレス バッジを表示するには、左側ペインの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[分析] タブ、[ストレス] タブの順にクリックします。

表 5-29. 選択されたインベントリ オブジェクトに基づくストレス

アイテム	説明
バッジ ステータス	オブジェクトのストレス ステータス。
ストレスの傾向	時間の経過に伴うオブジェクトのバッジ値の推移。 この傾向のビューを使用すると、一定期間の動作を確認して、オブジェクトの変化を示すバッジ値の変化がいつ起きたかを識別できます。 傾向データの時間値は、オブジェクトに関連付けられたポリシーの [時刻] 分析設定で定義される [データ範囲] 設定に基づきます。
ストレスの内訳	ストレスの内訳。 リソース コンテナのストレスを計算する際に検討されるデータ範囲は、オブジェクトに関連付けられたポリシーの [時刻] 分析設定で定義される [データ範囲] 設定に基づきます。
関連オブジェクトのストレス	関連オブジェクトのストレス ステータス。 関連オブジェクトを使用して、問題が影響を与えているのは現在のオブジェクトのみか、または関連オブジェクトでも問題が発生しているのかを判定します。

[解放可能な容量] タブ

[節約可能なキャパシティ] タブには、ストレスやパフォーマンスの低下を発生させることなく、キャパシティを解放して環境内の他のオブジェクトにプロビジョニングできる、プロビジョニング対象キャパシティの量が表示されます。節約可能なキャパシティは、環境内の各オブジェクトのリソース タイプ（CPU、メモリ、ディスクなど）ごとに計算されます。

グループの場合、解放可能なキャパシティというのは、パワーオフ状態およびアイドル状態のポリシー設定に基づき浪費とみなされていた、グループの仮想マシンから解放できるディスク領域の量のことです。仮想マシンがアイドルの場合は、そのすべてのリソースが解放可能と見なされます。グループに仮想マシンがまったく含まれておらず、データストアのみが含まれている場合、[パワーオフ状態およびアイドル状態の仮想マシン] 設定に基づき無駄なリソースとなっている仮想マシンがデータストアに含まれているときでも、節約可能なキャパシティの値は 0 になります。

ポリシー設定に関連する解放可能なキャパシティの詳細については、[ポリシーの解放可能な容量の要素](#)を参照してください。

解放可能な容量バッジ

[節約可能なキャパシティ] 分析バッジ値は、総キャパシティに占める再利用可能な割合に基づいたスコアです。

節約可能なキャパシティ スコアの範囲は 0（良好）から 100（不良）までとなります。バッジ スコアしきい値は vRealize Operations Manager 管理者が変更できます。

節約可能なキャパシティ バッジ スコアのシンプトムしきい値を構成するには、[ポリシー](#) を参照してください。

表 5-30. 解放可能な無駄の状態

バッジ アイコン	説明	ユーザー アクション
	選択したオブジェクトではリソースの無駄はありません。	注意は必要ありません。
	一部のリソースの使用方法を改善できます。	詳細を確認して、適切な処置を行います。
	多数のリソースが低負荷の状態です。	詳細を確認して、なるべく早急に適切な処置を行います。
	選択したオブジェクトのほとんどのリソースが浪費されています。	速やかに対処して、問題を回避または修正してください。
	オブジェクトがオフラインであるか、またはその期間のどのメトリックでもデータが提供されていません。	

節約可能なキャパシティを確認できる場所

節約可能なキャパシティ バッジを表示するには、左側のペインで [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[分析] タブをクリックし、[節約可能なキャパシティ] タブをクリックします。

表 5-31. 選択されたインベントリ オブジェクトに基づく節約可能なキャパシティ

アイテム	説明
バッジ ステータス	オブジェクトの [節約可能なキャパシティ] ステータス
節約可能なキャパシティの傾向	<p>時間の経過に伴うオブジェクトのバッジ値の推移。</p> <p>この傾向のビューを使用すると、一定期間の動作を確認して、オブジェクトの変化を示すバッジ値の変化がいつ起きたかを識別できます。</p> <p>傾向データの時間値は、オブジェクトに関連付けられたポリシーの [時刻] 分析設定で定義される [データ範囲] 設定に基づきます。</p>
節約可能なキャパシティの内訳	<p>節約可能なキャパシティのオブジェクト別の内訳。</p> <p>リソース コンテナの節約可能なキャパシティを計算する際に検討されるデータ範囲は、オブジェクトに関連付けられたポリシーの [時刻] 分析設定で定義される [データ範囲] 設定に基づきます。</p>
関連オブジェクト内の節約可能なキャパシティ	<p>関連オブジェクトの [節約可能なキャパシティ] ステータス。</p> <p>関連オブジェクトを使用して、問題が影響を与えているのは現在のオブジェクトのみか、または関連オブジェクトでも問題が発生しているのかを判定します。</p>

[密度] タブ

[密度] タブは、1 ホストあたりの仮想マシン、1 物理 CPU あたりの仮想 CPU、1 物理メモリあたりの仮想メモリなど、統合率を表します。密度スコアを使用すると、統合率の向上とコスト削減を実現できます。

仮想マシンやアプリケーションの動作およびパフォーマンスを理解すると、パフォーマンスやサービス レベル アグリーメントに影響を与えることなく、仮想環境の統合率を最大化できます。密度分析は、親と子の最適な統合率を求めます。

密度バッジ

統合度バッジの値は、最適な統合率に対する実際の統合率のアライメントの割合に基づくスコアです。

密度スコアの範囲は 0 (不良) から 100 (良好) までとなります。バッジ スコアしきい値は vRealize Operations Manager 管理者が変更できます。

統合度バッジ スコアのシンプトムしきい値を構成するには、[ポリシー](#) を参照してください。

表 5-32. オブジェクトの密度の状態

バッジ アイコン	説明	ユーザー アクション
	リソースの統合は良好です。	注意は必要ありません。
	一部のリソースが十分に統合されていません。	詳細を確認して、適切な処置を行います。
	多くのリソースで統合率が低くなっています。	詳細を確認して、なるべく早急に適切な処置を行います。
	リソースの統合率が非常に低くなっています。	速やかに対処して、問題を回避または修正してください。
	オブジェクトがオフラインであるか、またはその期間のどのメトリックでもデータが提供されていません。	

統合度情報を確認できる場所

統合度バッジを表示するには、左側ペインの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[分析] タブ、[統合度] タブの順にクリックします。

表 5-33. 選択されたインベントリ オブジェクトに基づく密度

アイテム	説明
バッジ ステータス	最もクリティカルな標準違反に基づいた、オブジェクトの統合度ステータス。
統合度の傾向	時間の経過に伴うオブジェクトのバッジ値の推移。 この傾向のビューを使用すると、一定期間の動作を確認して、オブジェクトの変化を示すバッジ値の変化がいつ起きたかを識別できます。 傾向データの時間値は、オブジェクトに関連付けられたポリシーの [時刻] 分析設定で定義される [データ範囲] 設定に基づきます。
統合度の内訳	最適な統合率に対する実際の統合率の割合に基づく統合度の内訳の割合。 リソース コンテナの統合度を計算する際に検討されるデータ範囲は、オブジェクトに関連付けられたポリシーの [時刻] 分析設定で定義される [データ範囲] 設定に基づきます。
関連オブジェクトの統合度	関連オブジェクトの統合度ステータス。 関連オブジェクトを使用して、問題が影響を与えているのは現在のオブジェクトのみか、または関連オブジェクトでも問題が発生しているのかを判定します。

[コンプライアンス] タブ

[コンプライアンス] タブは、コンプライアンスのアラート サブタイプで構成された vRealize Operations Manager のアラートに基づいて分析を提供します。環境内のオブジェクトの状態を評価する場合、または問題の根本原因を調査する場合に、調査ツールとしてこのコンプライアンス値を使用します。

vCenter Server インスタンス、ホスト、仮想マシン、分散ポート グループ、および分散スイッチのコンプライアンスを徹底するために、vRealize Operations Manager で提供されるアラートベースのコンプライアンスを使用できます。また、環境で vRealize Configuration Manager を使用する場合、vRealize Operations Manager に vRealize Configuration Manager アダプタを追加できます。vRealize Configuration Manager アダプタは、アラートベースのコンプライアンスの代わりに、vRealize Configuration Manager コンプライアンス情報を提供します。

[コンプライアンス] という名前のサブタイプがあるコンプライアンス アラートには、コンプライアンス ルールを表す 1 つ以上のシンプトムが含まれます。[コンプライアンス] タブに、トリガしたコンプライアンス アラートが標準に対する違反として表示され、トリガしたシンプトムが違反ルールとして表示されます。ルールはアラートのシンプトムであり、シンプトムの構成によって正しい値または構成が識別されます。ルールのシンプトムが標準のいずれかのアラートに対してトリガした場合、トリガしたルールは標準に違反しており、[コンプライアンス] タブに表示されるバッジ スコアに影響します。

コンプライアンス バッジ

コンプライアンス バッジ スコアを計算するために、vRealize Operations Manager ではコンプライアンスのパーセンテージ、シンプトムの合計数、およびトリガしたシンプトム数を使用します。

コンプライアンスのパーセンテージの計算は次のとおりです。

$$100 - ((\text{トリガしたシンプトム数 (TR)} / \text{シンプトム合計数 (TS)}) * 100)$$

この計算では、次の記述が当てはまります。

- シンプトムの合計数には、すべてのアクティブなコンプライアンス アラート内のすべてのシンプトムが含まれます。
- トリガしたシンプトム数には、すべてのアクティブなコンプライアンス アラート内のすべてのトリガしたシンプトムが含まれます。

これらのしきい値によって、次のコンプライアンス スコアが決定します。

- 100 は良好なスコアです
- 51～99 は警告的なスコアです
- 26～50 は緊急のスコアです
- 0～25 はクリティカルなスコアです

アラートベースのコンプライアンスを有効にするには、ポリシーをカスタマイズする必要があります。コンプライアンス アラートが有効ではない場合、コンプライアンス バッジ値は 100 および緑で、違反標準のリストに違反は存在しません。たとえば、VMware vSphere ソリューションは、vSphere Hardening Guide の ESXi ホストと仮想マシンのセクションにアラートを提供します。

ポリシーをカスタマイズしてアラートベースのコンプライアンスを有効にする方法については、[ポリシーをカスタマイズして、vSphere ハードニング ガイド アラートを有効にする](#)を参照してください。

vRealize Operations Manager アラートに基づくコンプライアンスを確認できる場所

コンプライアンス バッジを表示するには、左側のペインの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[分析] タブ、[コンプライアンス] タブの順にクリックします。

表 5-34. vRealize Operations Manager アラート オプションに基づくコンプライアンス

アイテム	説明
バッジのステータスとスコア	<p>最もクリティカルな標準違反に基づいた、オブジェクトのコンプライアンス ステータスとスコア。</p> <p>バッジは、次のいずれかの値を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 100 は、良好なスコアを示し、コンプライアンス アラート内でトリガしたシンプトムはありません。バッジの色は緑です。 ■ 51~99 は、コンプライアンス アラートでいくつかのシンプトムがトリガした旨の警告を示します。バッジの色は黄です。 ■ 26~50 は、コンプライアンス アラートで多数のシンプトムがトリガしたために、緊急のスコアを示します。アクションを迅速に実行する必要があります。バッジの色はオレンジです。 ■ 0~25 はクリティカルなスコアです。アクションを迅速に実行する必要があります。バッジの色は赤です。
コンプライアンスの傾向	<p>時間の経過に伴うオブジェクトのバッジ値の変化を示します。</p> <p>この傾向は、時間の経過に伴う動作を示し、バッジ値の変化がオブジェクトの変化を示す時期を特定します。</p> <p>傾向データの時間値は、オブジェクトに関連付けられたポリシーの [時刻] 分析設定で定義される [データ範囲] 設定に基づきます。</p>
コンプライアンスの内訳	<p>コンプライアンス標準のアラートごとの内訳を示します。</p> <p>標準違反を表示するには、標準テーブル内の行をクリックします。標準リストの表示にフォーカスを移動するには、次のボタンをクリックします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 標準違反。少なくとも 1 つのシンプトムがトリガした標準のアラートのみを表示します。 ■ 全基準。標準のすべてのアラートを表示します。
違反したルールの一覧	<p>違反したルールは、コンプライアンス アラートで定義されたシンプトムです。</p> <p>標準をクリックすると、その標準のルールが表示されます。シンプトムがトリガした場合、ルールに違反が生じたものとみなされます。ルール リストにフォーカスを移動するには、次のボタンを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 違反したルール。トリガーされたシンプトムのみを表示します。 ■ すべてのルール。トリガーされたシンプトムとトリガーされていないシンプトムを表示します。
関連オブジェクトのコンプライアンス	<p>関連するオブジェクトのコンプライアンス ステータスを表示します。</p> <p>関連するオブジェクトを使用して、問題が影響を与えているのは現在のオブジェクトのみか、または関連するオブジェクトでも問題が発生しているかを判定します。</p>
オブジェクト リソース	オブジェクトの構成されたリソースを表示します。

vSphere セキュリティ強化ガイドについては、<http://www.vmware.com/security/hardening-guides.html> を参照してください。

ポリシーをカスタマイズして、vSphere ハードニング ガイド アラートを有効にする

VMware vSphere セキュリティ強化ガイドのアラートは、vCenter Server のインスタンス、ホスト、仮想マシン、分散ポート グループ、および分散スイッチの設定またはプロパティがガイドを遵守して構成されていない場合にその旨を通知します。コンプライアンス アラートに対して vRealize Operations Manager でオブジェクトを評価するには、[ローカル] という名前の設定が各アラートに対して有効になるように、ポリシーの状態を上書きする必要があります。

VMware vSphere セキュリティ強化ガイドのアラートを有効にした後、アラートベースのコンプライアンスが動作します。VMware vSphere セキュリティ強化ガイドでは、収集されたデータを確認し、オブジェクトが安全に動作するように設定が正しく構成されているかどうかを判定します。

前提条件

vRealize Operations Manager のインスタンスには、デフォルトのポリシーと、1つ以上のその他のポリシーが含まれることを確認します。 [vRealize Operations Manager におけるデフォルト ポリシー](#)を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。
- 2 [ポリシー] をクリックし、[ポリシー ライブラリ] タブをクリックします。
- 3 [基本設定] を展開して、カスタマイズするポリシーをクリックし、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。
- 4 [監視ポリシーの編集] ワークスペースで [アラート/シムptom定義] をクリックします。
- 5 [アラート定義] ペインを選択して、コンプライアンス アラートを確認し、テキストボックスに **hardening** と入力します。

表 5-35. コンプライアンス アラート

コンプライアンス アラート	vSphere セキュリティ強化ガイド バージョンのサポート
ESXi ホストが、vSphere セキュリティ強化ガイド	5.5 および 6.0 に違反しています
vCenter Server が vSphere セキュリティ強化ガイドに違反しています	6.0
仮想マシンは、vSphere セキュリティ強化ガイドのリスク プロファイル 1 に違反しています	5.5 および 6.0 に違反しています
仮想マシンは、vSphere セキュリティ強化ガイドのリスク プロファイル 2 に違反しています	5.5 および 6.0 に違反しています
仮想マシンは、vSphere セキュリティ強化ガイドのリスク プロファイル 3 に違反しています	5.5 および 6.0 に違反しています
vSphere 分散ポート グループは、vSphere セキュリティ強化ガイドに違反しています	6.0
vSphere 分散仮想スイッチは、vSphere セキュリティ強化ガイドに違反しています	6.0

- 6 各コンプライアンス アラートについて、[状態] ドロップダウン メニューをクリックして、[ローカル] をクリックします。
- 7 ポリシーに更新内容を保存するには、[保存] をクリックします。

結果

アラートおよび関連するシムptom定義を有効にしました。構成されたポリシーがオブジェクトに適用されると、アクティブになります。構成されたシムptom定義が vCenter Server のインスタンス、ホスト、仮想マシン、分散ポート グループ、および分散スイッチに対して true になると、vRealize Operations Manager によって VMware vSphere セキュリティ強化ガイドのアラートが生成されます。

次のステップ

[コンプライアンス] タブで、オブジェクトがコンプライアンスに従っているかどうかを確認します。例については、[ユーザー シナリオ：ホスト オブジェクトがアラートベースのコンプライアンス ルールを遵守しているかどうかを確認する](#)を参照してください。

vSphere セキュリティ強化ガイドについては、<http://www.vmware.com/security/hardening-guides.html>を参照してください。

ユーザー シナリオ：ホスト オブジェクトがアラートベースのコンプライアンス ルールを遵守しているかどうかを確認する

仮想インフラストラクチャ管理者として、vRealize Operations Manager を使用して、vCenter Server インスタンスおよび仮想マシンを実行する VMware ESXi ホストを含む、環境内のオブジェクトを監視します。ホストの [コンプライアンス] タブで、いずれかのホストが VMware vSphere セキュリティ強化ガイドの標準に違反していないかどうかを確認します。問題を識別し、修正する必要があります。

vRealize Operations Manager には、VMware vSphere セキュリティ強化ガイドのアラートベースのコンプライアンスが含まれます。

このシナリオでは、ホスト上で違反のあったルール、および仮想マシンで違反のあった別のルールを解決します。独自のシナリオでは、他に違反のあったルールについて、この手順を繰り返します。

vRealize Operations Manager では、6.0 ルールに対して vSphere 6.0 オブジェクトを評価し、5.5 ルールに対して vSphere 5.5 オブジェクトを評価します。

前提条件

- vRealize Operations Manager にアクセスするために使用しているマシンで .XLSX ファイルが開けることを確認します。
- vSphere セキュリティ強化ガイドのアラートを有効にして、アラート ベースのコンプライアンスが環境内でアクティブになるようにします。 [vRealize Operations Manager ソリューションの監視目標の定義](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] アイコンをクリックします。
- 2 ホスト オブジェクトを参照します。
ホストを管理するオブジェクト グループを作成している場合は、そのグループ内のホストを選択します。
- 3 ホストが選択された状態で、[分析] タブ、[コンプライアンス] タブの順にクリックします。
コンプライアンス バッジでは、100 または緑以外の値が表示されます。
- 4 [ESXi ホストが、vSphere セキュリティ強化ガイドに違反しています] という名前の違反のあった標準をクリックします。
[コンプライアンスの内訳] 領域が拡張され、vSphere 6.0 オブジェクトおよび 5.5 オブジェクトの違反を含めて、違反のあったすべてのルールが表示されます。

- 5 ページを確認して、このホストと環境内に対し、標準への非準拠のクリティカル度とその範囲を判断します。

オプション	評価
コンプライアンスの内訳	ホストの違反したルールのはいくつでクリティカル度はどうなっているか。そのうち、クリティカルで対処が必要な違反したルールはいくつか。
関連オブジェクトのコンプライアンス	他のホストも同様のコンプライアンス状態か準拠違反の子オブジェクトはあるか。
ホスト システム リソース	ホストは期待どおりに構成されているか。

このページでは、ESXi ホストが、vSphere セキュリティ強化ガイドに違反しています という名前の違反したルールの解決が必要であることが示されています。

- 6 [アラート] タブをクリックします。

コンプライアンス標準はアラートに基づき、推奨を含めることができます。たとえば、ESXi ホストが、vSphere セキュリティ強化ガイドに違反しています という名前のアラートには、VMware vSphere セキュリティ強化ガイドにリンクする推奨が含まれます。

- 7 [アラート] タブで、[ESXi ホストが、vSphere セキュリティ強化ガイドに違反しています] という名前のアラートをクリックします。

[[アラートの詳細 - 概要]] タブには、違反したルールがシンプトムとして表示され、アラートを解決するための推奨が含まれます。

- 8 [推奨] 領域で、vSphere セキュリティ強化ガイド (<http://www.vmware.com/security/hardening-guides.html>) へのリンクをクリックし、必要なバージョンへのリンクをクリックします。

vSphere セキュリティ強化ガイドは、vRealize Operations Manager へのアクセスに使用しているマシンに Excel スプレッドシートとしてダウンロードされます。

- 9 vRealize Operations Manager によっていずれかの仮想マシンが DCUI ルールに違反していることが識別されたので、コンプライアンス ルールと修正方法を特定します。
- vSphere 6.0 オブジェクトでは、vSphere セキュリティ強化ガイドの 6.0 バージョンで、信頼できるユーザーがロックダウン モードを上書きできるように DCUI.Access を設定する という名前のルールを見つけます。
 - vSphere 5.5 オブジェクトでは、vSphere セキュリティ強化ガイドの 5.5 バージョンで、[ESXi] タブをクリックし、ローカルの管理操作を防止するため DCUI を無効にする という名前のルールを見つけます。

- 10 vSphere セキュリティ強化ガイドのルールに関する情報を確認し、修正方法を実装します。

結果

これで、ホストおよび仮想マシン上でトリガした違反コンプライアンス ルールを識別し、解決しました。vSphere セキュリティ強化ガイドの記載に従って、違反したルールを修正した後、vRealize Operations Manager で数回の収集サイクルが実行されるまで待ちます。数回の収集サイクルの後、違反したルールは、違反した標準のリストに表示されなくなります。

問題解決のためのトラブルシューティング ツールの使用

[シンプトム] タブ、[タイムライン] タブ、[イベント] タブ、および [すべてのメトリック] タブに表示されるデータは、アラートの推奨事項や単純な分析で解決されない問題の根本原因を特定するのに役立ちます。

環境内のオブジェクトの問題をトラブルシューティングする際、[トラブルシューティング] タブを個別に使用する
か、ワークフローの一部として使用できます。各タブには、収集されたデータが異なる方法で表示されます。問題を
トラブルシューティングしている際に、[分析] タブから[すべてのメトリック] タブに直接移動することがあります。
他の状況では、[タイムライン] タブに必要な情報がある場合もあります。

[シンプトム] タブの概要

選択したオブジェクトのトリガーされたシンプトムのリストを表示できます。シンプトムは、オブジェクトの問題の
トラブルシューティングの際に使用します。

[シンプトム] タブには、現在選択されているオブジェクトについての、すべてのトリガーされたシンプトムが表示さ
れます。トリガーされたシンプトムのレビューでは、現在選択されているオブジェクトで発生している問題のリスト
が示されます。どのシンプトムが現在生成されているアラートに関連しているのかを詳しく知る必要がある場合に
は、オブジェクトの [アラート] タブに移動します。

トリガーされたシンプトムを評価する際には、それらが作成された時と構成情報、該当する場合にはトレンド チャー
トも考慮します。

[症状] タブのトラブルシューティング

症状のトラブルシューティングは、現在のオブジェクトに関連付けられた、すべてのトリガーされた症状です。症状
リストを使用してオブジェクトに関する問題を特定し、オブジェクトに対して生成されるアラートを解決できるよ
うにします。

症状のトラブルシューティングの機能

このリストは、オブジェクトのトリガーされたアクティブな症状で、生成されたアラートの一部か、またはアラート
に含まれていないトリガーされた症状のどちらかです。これは完全な症状リストであり、オブジェクトで発生するも
のの現在のアラート定義に含まれていない問題を識別するのに役立ちます。

非アクティブな症状を表示する場合は、フィルタを変更してください。

症状のトラブルシューティングを確認できる場所

左側のペインで、[環境] を選択して、グループ、アプリケーション、またはインベントリ オブジェクトを選択しま
す。[トラブルシューティング] タブをクリックし、[症状] タブをクリックします。

表 5-36. 症状のトラブルシューティングのオプション

オプション	説明
フィルタリング オプション	症状のリストを、作成するフィルタと一致する症状に限定します。
重要度	重要度は、環境における症状の重要性のレベルです。 このレベルは、症状が作成されたときに割り当てられるレベルに基づきま す。 次の値があります。 ■ 重大 ■ 緊急 ■ 警告 ■ 詳細情報
症状の定義	トリガーされた症状の名前。
ステータス	症状の現在の状態。 値には、[有効] または [キャンセル済み] があります。

表 5-36. 症状のトラブルシューティングのオプション（続き）

オプション	説明
起動元	<p>症状が生成されたオブジェクトの名前。</p> <p>オブジェクト名をクリックすると、オブジェクトの詳細タブが表示されます。ここで、オブジェクトに他に何か問題がないかどうかについて調査を開始できます。</p>
作成日時	アラートが生成された日時。
更新日時	アラートが最後に変更された日時。
キャンセル日時	症状がキャンセルされた日時。
詳細情報	<p>傾向と現在の値を含む、症状のトリガー条件に関する情報。</p> <p>シンプトムの更新時刻の 6 時間前から 1 時間後までの範囲のデータが、スパークラインに表示されます。</p>

[タイムライン] タブの概要

タイムラインには、一定期間にわたるオブジェクトについてのトリガーされたシンプトム、生成されたアラート、およびイベントのビューが表示されます。タイムラインを使用して、環境内オブジェクトの現在の状態に寄与している、一定期間の一般傾向を識別できます。

タイムラインでは、3 階層のスクロール メカニズムを使用して、特定の期間に注目した場合、時間間隔を長くして素早く移動したり、数時間をゆっくりと分刻みで移動したりすることができます。必要なデータが確実にあるようにするには、[日付コントロール] を構成して、調査している問題を含めます。

個別のオブジェクトのみを確認してそのオブジェクトの問題を調査することは、必ずしも効率的であるとは限りません。より広い環境のコンテキストでオブジェクトを調査するには、先祖、子孫、およびピアのオプションを使用します。このコンテキストでは、問題についての予測していなかった影響や結果が明らかになることがよくあります。

タイムラインは、パターンをグラフィック表示するツールです。シンプトムが、一定時間にわたりさまざまな間隔でシステムによりトリガーおよびキャンセルされた場合、イベントをオブジェクトまたは関連オブジェクトへの他の変更と比較できます。これらの変更が、問題の根本原因になる場合があります。

[タイムライン] タブのトラブルシューティング

現在のオブジェクトで一定期間に生成されたアラート、トリガーされた症状、および発生した変更イベントは、[タイムライン] タブに表示されます。タイムラインを使用して、環境内オブジェクトの現在の状態に寄与している、一定期間の一般傾向を識別できます。

トラブルシューティング タイムラインの仕組み

タイムライン表示には、選択したオブジェクトの過去 6 時間におけるアラート、症状、およびイベントが表示されます。特定時点のデータを表示するには、タイムライン上の 3 つの階層のうちの 1 つをクリックしてから、マウス ポインタを左または右に移動します。マウスを左に移動すると過去のデータが表示され、マウスを右に移動すると現時点に戻ります。

ビューは、およそ 50 のアラート、症状、およびイベントに限定されます。タイムラインにこれ以上のデータが含まれる場合、ツールバー オプションを使用してタイムラインからデータを削除できます。これにより、調査に役立つと考えられるデータのみを含めることができます。

トラブルシューティング タイムラインを確認できる場所

左側のペインで、[環境] をクリックして、グループ、アプリケーション、またはインベントリ オブジェクトを選択します。[トラブルシューティング] タブをクリックして、[タイムライン] タブをクリックします。

表 5-37. タイムライン オプション

オプション	説明
影響	選択した場合、健全性、リスク、および効率のアラートがタイムラインに表示されます。
症状の表示	<p>選択した場合、トリガーされたすべての症状がタイムラインに表示されます。</p> <p>アラートが生成されていないアラートについてトリガーされた症状が表示されることがあります。症状がアラートに含まれていなくても、症状定義で定義された動作をオブジェクトが示すと、この症状が現れます。</p>
イベント タイプの選択	<p>アラートとトリガーされた症状を評価するためにイベントをタイムラインに追加します。アラートをトリガーした症状と同時に発生したイベントを追加することで、環境内でアラートの原因となったものが発生したかどうかを確認できます。</p> <p>次のイベントの 1 つまたは複数を選択してタイムラインに追加します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 動的しきい値違反。動的しきい値とは、時間経過とともに追跡されるメトリックの正常な動作と異常な動作との境界を示す値です。メトリックがしきい値の上限または下限を超えると、vRealize Operations Manager によって異常が生成されます。このオプションを選択する場合、異常がタイムラインに追加されるため、アラートとの関連で異常を評価することができます。 ■ 変更。変更イベントとは、監視対象システムに対する何らかの変更を指します。これには、オブジェクトに対する変更が含まれます。たとえば、オブジェクトの追加、削除、接続、切断や、オブジェクトの開始、停止、再構成です。このオプションを選択する場合、変更がタイムラインに追加されるため、アラートとの関連で変更を評価することができます。取得される変更は、監視対象システムを管理するアダプタによって異なります。 ■ 障害。障害イベントとは、アラートの生成または症状のトリガーを含め、オブジェクトの問題の原因となった可能性がある、監視対象システムから取得されるイベントです。このオプションを選択する場合、障害がタイムラインに追加されるため、アラートとの関連で障害を評価することができます。取得される障害は、監視対象システムを管理するアダプタによって異なります。
ステータスの選択	タイムラインのアラートを、キャンセルされたアラートまたはアクティブなアラートに限定します。
重要度レベルの選択	タイムラインのアラートを、選択した重要度レベルのアラートに限定します。
自己イベントの表示	<p>影響を受けるオブジェクトのアラートおよび症状を表示します。</p> <p>これはデフォルトのタイムライン ビューです。先祖、子孫、およびピアのイベントと組み合わせて自己イベントを使用すると、アラートに寄与する子または親のイベントについてヒントが得られるタイムラインを作成することができます。</p>

表 5-37. タイムライン オプション (続き)

オプション	説明
先祖イベントの表示	<p>影響を受けるオブジェクトの先祖についてのアラートおよび症状を表示します。</p> <p>先祖とは、オブジェクトの両親、祖父母などのことです。たとえば、ホストの先祖は、フォルダ、ストレージ ボット、クラスタ、データ センター、および vCenter Server インスタンスです。</p>
子孫イベントの表示	<p>影響を受けるオブジェクトの子孫についてのアラートおよび症状を表示します。</p> <p>子孫とは、オブジェクトの子および孫です。たとえば、ホストの子孫は、データストア、リソース プール、および仮想マシンです。</p>
ピア イベントの表示	影響を受けるオブジェクト同様、オブジェクトに関するアラートおよび症状を表示します。
日付コントロール	タイムラインのアラートを、選択した時間枠に限定します。
タイムライン	<p>アラートおよび症状を、時間、日、および週の 3 つの階層の経過時間で一連の行として表示します。</p> <p>タイムラインをスクロールするには、3 階層のいずれかをクリックしてビューを左右にドラッグします。</p> <p>症状の詳細を確認するには、症状を表す行をクリックします。関連付けられたアラート、先祖、子孫、またはピアのアラートの詳細に移動するには、アラートを表す行をクリックします。</p>

[イベント] タブの概要

イベントとは、ユーザー アクション、システム アクション、トリガーされたシンプトム、またはオブジェクトで生成されたアラートが原因で、管理対象オブジェクトで発生した変更を反映する vRealize Operations Manager メトリックの変更です。[イベント] タブを使用して、管理対象のオブジェクトの変更がアラートまたはその他のオブジェクトに関する問題の根本原因になったかどうかを確認するためにイベントの発生と生成されたアラートを比較します。

イベントは、リストされたものだけではなく、どのオブジェクトでも発生する可能性があります。

次の vCenter Server アクティビティは、vRealize Operations Manager イベントを生成するアクティビティの一部です。

- 仮想マシンのパワーオンまたはパワーオフ
- 仮想マシンの作成
- 仮想マシンのゲスト OS への VMware Tools のインストール
- vCenter Server システムへの新たに構成された ESX/ESXi システムの追加

アラートの定義に応じて、これらのイベントがアラートを生成する場合があります。

vRealize Operations Manager に情報を提供する他のアプリケーションを持つ同じ仮想マシンを監視する場合で、これらのアプリケーションのアダプタが変更イベントを提供するように構成されている場合、[イベント] タブには監視対象のオブジェクトで発生する特定の変更イベントが含まれます。これらの変更イベントにより、調査している問題の原因をより詳しく考察できます。

[イベント] タブのトラブルシューティング

イベントとは、オブジェクトに対する vRealize Operations Manager メトリックでの変更によって特定されるオブジェクトへの変更のことです。オブジェクトへの変更を症状や他のデータと比較して、発生したアラートの考えられる原因を特定できます。

イベントのトラブルシューティングの機能

チャートをさまざまなデータの組み合わせを表示するように構成し、調査しているアラートの原因となるイベントを特定できます。

イベントのトラブルシューティングを確認できる場所

左側のペインで、[環境] を選択して、グループ、アプリケーション、またはインベントリ オブジェクトを選択します。[トラブルシューティング] タブをクリックし、[イベント] タブをクリックします。

表 5-38. [イベント] オプションのトラブルシューティング

オプション	説明
バッジ	選択したバッジをその状態に対応する色で表示します。
表示に合わせてズーム	使用可能な領域に合わせてチャートをリセットします。
X 軸ズーム	チャートで範囲セレクトを使用してチャートのサブセットを選択する場合に、選択した領域を X 軸で拡大します。[X 軸ズーム]と[Y 軸ズーム]を同時に使用できます。
Y 軸ズーム	チャートで範囲セレクトを使用してチャートのサブセットを選択する場合に、選択した領域を Y 軸で拡大します。[X 軸ズーム]と[Y 軸ズーム]を同時に使用できます。
ビューをズーム	範囲セレクトの使用時に、現在のチャートのサイズを変更します。
パン	ズーム モードでは、チャートの拡大セクションをドラッグして、メトリックの最大値、最小値、以前の値、新しい値を表示できます。
データ値の表示	ズームまたはパン オプションに切り替えた場合に、データ ポイント ツールチップを有効にします。 データ ポイントをクリックすると、イベント データ グリッド内でイベントが強調表示されます。
アラート ステータスの選択	チャートのアラートをキャンセルされたアラートまたはアクティブなアラートに制限します。ステータスを選択しないと、すべてのアラートが表示されます。 このオプションはアラートのみに適用されます。障害イベントや変更イベントには適用されません。変更イベントおよびアクティブな障害は常にチャートに表示されます。
アラート タイプの選択	1 つまたは複数のアラート タイプを選択します。タイプはアラートが定義される際に割り当てられます。タイプを選択しないと、すべてのアラートが表示されます。
重要度レベルの選択	選択された重要度レベルに一致するアラートを制限します。重要度を選択しないと、すべてのアラートが表示されます。
変更イベントの表示	変更イベントを表示または非表示にします。変更イベントはオブジェクトに対する変更で、アラートが発生することも発生しないこともあります。
自己イベントの表示	現在のオブジェクトのイベントを表示または非表示にします。

表 5-38. [イベント] オプションのトラブルシューティング（続き）

オプション	説明
親イベントの表示	現在のオブジェクトの親オブジェクトのイベントを表示または非表示にします。
子イベントの表示	影響を受けたオブジェクトの子孫のイベントを表示または非表示にします。
ピア イベントの表示	影響を受けたオブジェクト同様のオブジェクトのイベントを表示または非表示にします。
日付コントロール	チャート内のデータを選択された時間枠に制限します。
イベント チャート	重要度別の一定期間のイベントおよびアラートと、ツールバーで選択した他のデータ オプションを表示します。
イベント データ グリッド	次の表示オプションの少なくとも 1 つを選択している場合に、イベントとアラートのリストを表示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 自己イベントの表示 ■ 親イベントの表示 ■ 子イベントの表示 ■ ピア イベントの表示
外部アプリケーションで開く	選択したオブジェクトに対して実行できるアクション。 (たとえば、[vSphere Client で仮想マシンを開く] など)。

オブジェクト詳細の作成と使用

ビューとヒート マップの詳細には、オブジェクトの固有データが表示されます。この情報を使用して問題を詳細に評価できます。現在のビューまたはヒート マップに必要な情報が表示されない場合は、ビューまたはヒート マップを作成し、特定の問題を調査するときのツールとして使用できます。

詳細表示タブ

左側のペインの [環境] アイコンでオブジェクトを選択して、[詳細] タブをクリックすると、[表示] タブを利用できるようになります。

[表示] タブは 2 つのパネルに分かれています。下部のパネルは、上部のパネルで選択した内容に応じて更新されます。

上部のパネルでは、ビューの作成、編集、削除、クローン作成、エクスポート、インポートを実行できます。ビューのリストは、環境で選択したオブジェクトに応じて変わります。各ビューには 1 つのオブジェクトが関連付けられています。たとえば、ホストを選択すると、事前定義された [仮想マシン インベントリ - メモリ] リスト ビューが表示されます。

パネルの右側からフィルタを追加すると、ビューのリストを制限できます。指定された各フィルタ グループは入力した語句でリストを限定します。たとえば [説明] を選択し、**my view** と入力すると、選択したオブジェクトに該当し、説明に *my view* が含まれるすべてのビューがリストに表示されます。

表 5-39. ビューのリストのテーブル列

列	説明
名前	ビューの名前。
タイプ	ビューのタイプ。ビューのタイプは、収集されたオブジェクトに関する情報が表示される方法です。
説明	ビューが作成されたときに定義されたビューの説明です。
件名	ビューが関連付けられるオブジェクト タイプです。
所有者	ビューの所有者は、ビューを作成したか、ビューを最後に編集したユーザーです。

[表示] タブの下部のパネルには、上部のパネルで選択されたビューに基づいて計算されたオブジェクトのデータが表示されます。たとえば選択したオブジェクトがホストである場合、[仮想マシンの構成サマリ リスト ビュー] を選択すると、表示結果として、そのホスト上のすべての仮想マシンのリストと、ビューに基づいて計算されたデータが表示されます。

トレンド ビューの場合は、親オブジェクトを選択すると、関連する子オブジェクトに関するデータとメトリックが [表示] タブの下部のパネルに表示されます。

ヒート マップの操作

vRealize Operations Manager のヒート マップ機能を使用すると、仮想インフラストラクチャ内のオブジェクトのメトリック値に基づいて、トラブルの領域を見つけることができます。vRealize Operations Manager が使用する分析アルゴリズムにより、ユーザーはヒート マップを使用して、オブジェクトのパフォーマンスを仮想インフラストラクチャの全体にわたってリアルタイムで比較できます。

事前定義されたヒート マップを利用するか、独自のヒート マップを作成して、仮想環境内のオブジェクトのメトリック値を比較できます。vRealize Operations Manager の [詳細] タブには事前定義されたヒート マップがあり、一般的に使用されるメトリックを比較するのに使用できます。このデータを使用して、仮想インフラストラクチャでの浪費の削減および容量の増加を計画できます。

ヒート マップに表示される内容

ヒート マップには異なるサイズと色の長方形が含まれており、それぞれの長方形が仮想環境のオブジェクトを表します。長方形の色は、1つのメトリックの値を示し、長方形の大きさは別のメトリックの値を示します。たとえば、あるヒート マップは各仮想マシンの総メモリとメモリ使用率を示します。大きな長方形は総メモリ量の多い仮想マシンを示し、緑色はメモリ使用率が低く、赤色は使用率が高いことを示します。

vRealize Operations Manager は、各オブジェクトとメトリックに新しい値が収集されるとリアルタイムでヒート マップを更新します。ヒート マップの下の色付きのバーは凡例です。凡例は、色の範囲の端および中間点が示す値を示します。

ヒート マップ オブジェクトは親ごとにグループ化されます。たとえば、仮想マシンのパフォーマンスを示すヒート マップでは、仮想マシンが実行される ESX ホストごとにグループ分けされます。

カスタム ヒート マップの作成

必要とするメトリックを厳密に分析する場合はカスタム ヒート マップを無制限な数だけ定義できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] をクリックします。
- 2 インベントリ ツリーから調べるオブジェクトを選択します。
- 3 [詳細] タブの下での[ヒート マップ] タブをクリックします。
- 4 [グループ化] ドロップダウン メニューから、オブジェクトの最初のレベルのグループ化に使用するタグを選択します。

選択したオブジェクトにこのタグの値がない場合は、[その他] というグループに表示されます。

- 5 [次の基準] ドロップダウン メニューから、オブジェクトをサブグループに分割するために使用するタグを選択します。

選択したオブジェクトにこのタグの値がない場合は、[その他] というサブグループに表示されます。

- 6 [モード] オプションを選択します。

オプション	説明
インスタンス	メトリックごとに別々の長方形で、オブジェクトのメトリックのすべてのインスタンスを追跡します。
全般	オブジェクトごとにメトリックの特定のインスタンスを選択し、そのメトリックのみを追跡します。

- 7 [一般] モードを選択した場合は、[サイズ分け] リストで各リソースの長方形のサイズを設定するために使用する属性と、[色分け] リストで各オブジェクトの長方形の色を決定するために使用する属性を選択します。

[サイズ分け] 属性の値が大きいオブジェクトは、ヒート マップ画面でより大きく表示されます。固定サイズの長方形を選択することもできます。色は、[色分け] 属性の値に基づいて、ユーザーが設定した色の間で変化します。

ほとんどの場合、属性リストには vRealize Operations Manager が生成するメトリックのみが含まれます。オブジェクト タイプを選択すると、そのオブジェクト タイプに定義されているすべての属性がリストに表示されます。

- a 特定の種類のオブジェクトに関するメトリックのみを追跡するには、[オブジェクト タイプ] ドロップダウンメニューから目的のオブジェクト タイプを選択します。

- 8 [インスタンス] モードを選択した場合は、[属性種別] リストから属性種別を選択します。

属性種別により、各オブジェクトの長方形の色が決まります。

- 9 ヒート マップの色を構成します。

- a カラー バーの下のそれぞれの小さなブロックをクリックし、低、中、高のそれぞれの値の色を設定します。バーは、中間の値の色の範囲を示します。色の範囲の高い方の端と低い方の端に一致する値も設定できます。

- b (オプション) [最小値] および [最大値] の各テキスト ボックスに最小および最大の色の値を入力します。テキスト ボックスを空白のままにしておくと、vRealize Operations Manager は [色分け] メトリックの最高値と最低値を端の色にマッピングします。最小値または最大値を指定すると、その値以上のメトリックは端の色で表示されます。

10 [保存] をクリックして構成を保存します。

ユーザーが作成したカスタム ヒート マップは、[ヒート マップ] タブのヒート マップのリストに表示されます。

メトリックに対する最善または最悪動作オブジェクトを探す

ヒート マップを使用して、特定のメトリックの最高値または最低値を持つオブジェクトを検出できます。

前提条件

比較するメトリックの組み合わせが定義済みのヒート マップのリストにない場合は、最初にカスタムのヒート マップを定義する必要があります。[カスタム ヒート マップの作成](#) を参照してください。

手順

1 左側のペインで、[環境] をクリックし、インベントリ ツリーからオブジェクトを選択します。

2 [詳細] タブの下の[ヒート マップ] タブをクリックします。

選択したリソースに関連するすべてのメトリック ヒート マップが、事前に定義したヒート マップのリストに表示されます。

3 ヒート マップのリストで、表示するマップをクリックします。

ヒート マップに表示された各オブジェクトの名称とメトリック値が、ヒート マップの下のリストに表示されます。

4 関心のあるメトリックの列見出しをクリックして順番を並べ替えると、パフォーマンスが最高または最低のオブジェクトが列の最上部に表示されます。

インフラストラクチャ全体にわたりロード バランスかとられるように使用可能リソース間で比較する

ヒート マップは、仮想インフラストラクチャの全体にわたって選択したメトリックのパフォーマンスを比較するために使用できます。この情報を使用して、ESX ホスト間および仮想マシン間でロード バランスを取ることができます。

前提条件

比較するメトリックの組み合わせが定義済みのヒート マップのリストにない場合は、最初にカスタムのヒート マップを定義する必要があります。[カスタム ヒート マップの作成](#) を参照してください。

手順

1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] をクリックします。

2 インベントリ ツリーから調べるオブジェクトを選択します。

3 [詳細] タブの下の[ヒート マップ] タブをクリックします。

4 ヒート マップのリストで、表示するいずれかのマップをクリックします。

選択したメトリックのヒート マップが表示され、選択に応じてサイズ変更され、グループ化されます。

- ヒート マップを使用してオブジェクトを比較し、仮想環境内のすべてのオブジェクトに対して、リソースとメトリック値をクリックします。

ヒート マップ上に表示されていたすべてのオブジェクトの名前とメトリック値のリストが、ヒート マップの下
のリスト内に表示されます。列見出しをクリックすると、列ごとにリストをソートできます。メトリック列でリ
ストをソートすると、そのメトリックの最大値または最小値が最上部に表示されます。

- (オプション) ヒート マップ内のオブジェクトに関する詳細を表示するには、そのオブジェクトを表す四角形を
クリックするか、詳細のポップアップ ウィンドウをクリックします。

次のステップ

比較結果に基づいて、ESX ホスト間、クラスタ間、またはデータストア間でロード バランスがとられるようにオブ
ジェクトを仮想環境内で再編成できます。

[ヒート マップ] タブ

vRealize Operations Manager のヒート マップ機能を使用すると、仮想インフラストラクチャ内のオブジェクト
のメトリック値に基づいて、トラブルの領域を見つけることができます。vCenter Operations Manager が使用
する分析アルゴリズムにより、ユーザーはヒート マップを使用して、オブジェクトのパフォーマンスを仮想インフラ
ストラクチャの全体にわたってリアルタイムで比較できます。

ヒート マップの仕組み

事前定義されたヒート マップを利用するか、独自のヒート マップを作成して、仮想環境内のオブジェクトのメトリ
ック値を比較できます。vCenter Operations Manager の [詳細] タブには事前定義されたヒート マップがあ
り、一般的に使用されるメトリックを比較するのに使用できます。

ヒート マップを確認できる場所

左側のペインの [環境] アイコンでインベントリ ツリー オブジェクトを選択して、[詳細] タブをクリックすると、[ヒ
ート マップ] タブを利用できるようになります。[ヒート マップ] タブは 2 つのパネルに分割され、ヒート マップが
パネルの間に表示されます。上部のパネルでは、ヒート マップの作成、編集、削除、またはクローン作成ができま
す。ヒート マップの表示は、環境から選択するオブジェクトおよび選択するヒート マップによって異なります。

表 5-40. ヒート マップ リスト テーブルの列

列	説明
名前	ヒート マップの名前。
グループ化	ヒート マップにおけるオブジェクトの第 1 レベルのグループ化。
色による表示	各オブジェクトの長方形の色を決定します。
サイズ分け	各オブジェクトの長方形のサイズを設定する属性。
オブジェクト タイプ	オブジェクトのタイプ。

下部のパネルは、上部のパネルで選択した内容に応じて更新されます。[ヒート マップ] タブの下部のパネルには、上
部のパネルで選択されたビューに基づいて計算されたオブジェクトのデータが表示されます。たとえば、選択したオ
ブジェクトがホストの場合、結果はそのホストのすべてのオブジェクトのリストになります。

ヒート マップの表示

ヒート マップには異なるサイズと色の長方形が表示され、それぞれの長方形が仮想環境のオブジェクトを表します。
長方形の色は、1 つのメトリックの値を示し、長方形の大きさは別のメトリックの値を示します。

vRealize Operations Manager は、各オブジェクトとメトリックに新しい値が収集されるとリアルタイムでヒートマップを更新します。ヒートマップの下の色付きのバーは凡例です。凡例は、色の範囲の端および中間点が示す値を示します。

ポップアップ ウィンドウでオブジェクトのリンクをクリックして詳細を表示します。

ヒートマップの構成オプションのワークスペース

あらかじめ定義されたヒートマップが必要な情報を示していない場合には、カスタム ヒート マップを定義できます。追跡するオブジェクトとメトリック、使用する色、および値範囲のエンドポイントを選択できます。

ヒートマップの構成ワークスペースを確認できる場所

左側のペインで、[環境] を選択し、インベントリ ツリーからオブジェクトを選択します。[詳細] タブで、[ヒートマップ] を選択します。[ヒートマップ] タブで、プラス記号をクリックしてカスタム ヒート マップを作成します。

表 5-41. ヒートマップの構成オプション

オプション	説明	
構成	<ul style="list-style-type: none"> ■ 新しい構成を追加します。 ■ カスタム構成を編集します。 ■ 選択した構成を削除します。 ■ 選択した構成のクローンを作成します。 	
説明	ヒートマップのわかりやすい説明。	
グループ化	ヒートマップにおけるオブジェクトの第1レベルのグループ化。	
次の基準	ヒートマップ内にある第1のレベルのオブジェクト グループのサブグループ。	
モード	一般モード	ヒートマップには、選択したオブジェクトごとに色分けされた長方形が表示されます。長方形のサイズは、選択した1つの属性の値を示します。長方形の色は、選択した別の属性の値を示します。
	インスタンス モード	それぞれの長方形は、あるオブジェクトについて選択したメトリックの単一のインスタンスを表します。1つのリソースが、同じメトリックの複数のインスタンスを持つことができます。長方形の大きさはすべて同じです。長方形の色は、インスタンスの値に基づいて変化します。単一のオブジェクトタイプを選択した場合にのみ、インスタンス モードを使用できます。
サイズ分け	各オブジェクトの長方形のサイズを設定する属性。[サイズ分け] 属性の値が大きいオブジェクトは、ヒートマップ画面でより大きく表示されます。固定サイズの長方形を選択することもできます。ほとんどの場合、属性リストには vRealize Operations Manager が生成するメトリックのみが含まれます。オブジェクトの種類を選択すると、そのオブジェクトタイプに定義されているすべての属性がリストに表示されます。	
色分け	各オブジェクトの長方形の色を決定します。	
色	<p>高、中、 および低の各値に対する色範囲を示します。各カラーを設定し、[最小値] および [最大値] テキスト ボックスに最小のカラー値および最大のカラー値を入力できます。</p> <p>テキスト ボックスを空白のままにしておくと、vRealize Operations Manager は [色分け] メトリックの最高値と最低値を端の色にマッピングします。最小値または最大値を指定すると、その値以上のメトリックは端の色で表示されます。</p>	

ヒート マップを使用したキャパシティ リスクのデータ分析

キャパシティ リスクに関する計画には、どれだけのキャパシティが使用できるか、およびインフラストラクチャを効率的に使用しているかを判断するためのデータの分析が含まれます。

仮想マシンのための十分な領域のあるクラスタを特定する

次の仮想マシン セット用の十分な領域を持つデータセンター内のクラスタを特定します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] をクリックします。
- 2 [vSphere ワールド] を選択します。
- 3 [詳細] タブの下に[ヒート マップ] タブをクリックします。
- 4 [どのクラスタが空き容量が最も多く、負荷が最も小さいか。] ヒート マップを選択します。
- 5 ヒート マップで、各クラスタの領域をポイントし、残り容量のパーセンテージを表示します。
緑色以外の色は、潜在的な問題を示します。
- 6 ポップアップ ウィンドウの [詳細] をクリックし、クラスタまたはデータセンターのリソースを調べます。

次のステップ

仮想マシンを格納する容量が最も大きな緑色のクラスタを特定します。

ホストの健全性における異常の調査

ホストで発生するパフォーマンスの問題のソースを特定するには、ワークロードの調査が必要になります。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] をクリックします。
- 2 [vSphere ワールド] を選択します。
- 3 [詳細] タブの下に[ヒート マップ] タブをクリックします。
- 4 [どのホストの異常ワークロードが最も高いか。] ヒート マップを選択します。
- 5 ヒート マップで、クラスタの領域をポイントし、残り容量のパーセンテージを表示します。
緑色以外の色は、潜在的な問題を示します。
- 6 ポップアップ ウィンドウの ESX ホストの [詳細] をクリックし、ホストのリソースを調査します。

次のステップ

必要に応じてワークロードを調整し、リソースのバランスを取ります。

仮想マシンのための十分な領域のあるデータストアを特定する

次の仮想マシン セット用の領域を最も多く持つデータストアを特定します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] をクリックします。
- 2 [vSphere ワールド] を選択します。
- 3 [詳細] タブの下に[ヒート マップ] タブをクリックします。

- 4 [どのデータストアのディスク容量オーバーコミットが最も高く、残り時間が最も少ないか。] ヒート マップを選択します。
- 5 ヒート マップで、各データセンターの領域をポイントし、領域の統計を表示します。
- 6 緑色以外の色で潜在的問題が示されている場合は、ポップアップ ウィンドウの [詳細] をクリックし、ディスク領域およびディスク I/O のリソースを調べます。

次のステップ

仮想マシンに利用可能な領域が最も大きいデータストアを特定します。

無駄な領域のあるデータストアを特定する

仮想マシンの効率を改善するため、解放できる無駄な領域を最も多く持つデータストアを特定します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] をクリックします。
- 2 [vSphere ワールド] を選択します。
- 3 [詳細] タブの下に[ヒート マップ] タブをクリックします。
- 4 [どのデータストアが無駄な容量および総容量使用量が最も多いか。] ヒート マップを選択します。
- 5 ヒート マップで、各データセンターの領域をポイントし、無駄の統計を表示します。
- 6 緑色以外の色で潜在的問題が示されている場合は、ポップアップ ウィンドウの [詳細] をクリックし、ディスク領域およびディスク I/O のリソースを調べます。

次のステップ

無駄な領域の量が最も大きい、赤色、オレンジ色、または黄色のデータストアを特定します。

データストア間でリソースの無駄がある仮想マシンを特定する

アイドル状態、過剰サイズまたはパワーオフ状態の仮想マシン、あるいはスナップショットを検討して、リソースを無駄にしている仮想マシンを特定します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] をクリックします。
- 2 [vSphere ワールド] を選択します。
- 3 [詳細] タブの下に[ヒート マップ] タブをクリックします。
- 4 [各データストアについて、どの仮想マシンが無駄なディスク容量が多いか。] ヒート マップを選択します。
- 5 ヒート マップで、各仮想マシンをポイントし、無駄の統計を表示します。
- 6 緑色以外の色で潜在的問題が示されている場合は、ポップアップ ウィンドウの仮想マシンの [詳細] をクリックし、ディスク領域および I/O のリソースを調べます。

次のステップ

無駄な領域の量が最も大きい、赤色、オレンジ色、または黄色の仮想マシンを特定します。

環境内の関係の調査

環境内のほとんどのオブジェクトは、その環境内の他のオブジェクトに関連付けられています。[環境] タブでは、環境内のオブジェクトの関係性が表示されます。調査するために最初に選択するオブジェクトに関する問題ではない問題のトラブルシューティングを行うためにこの表示を使用します。たとえば、ホストでの問題のアラートは、ホストに関連付けられた仮想マシンの容量不足が原因かもしれません。

[環境] タブの選択

環境のインベントリからオブジェクトを選択する際に、関連するオブジェクトを概要、リスト、またはマップに表示できます。

- 概要には、環境内のすべてのオブジェクトがそれぞれのオブジェクトのステータス バッジとともに表示されます。バッジをクリックすると、関連付けられているオブジェクトを確認できます。
- リストには、選択したオブジェクトに関連付けられているオブジェクトだけが表示されます。開始できるアクションまたは起動できる外部アプリケーションは、選択したオブジェクトによって異なります。
- マップには、オブジェクトがアイコンとして階層表示されます。アイコンを選択すると、関連するオブジェクトの数が表示されます。

概要を使用して、健全性、リスク、または効率性の問題がある環境内のオブジェクトを特定します。オブジェクト タイプによっては、リスト ビューからオブジェクトに対してアクションを実行できる場合があります。

問題検出のために環境概要を使用

環境内のパフォーマンス低下の原因を調査しようとしているシステム管理者は、ホスト システムなどのキー オブジェクトを選択して、仮想マシンなどの関連するオブジェクトが問題を示しているかどうかを確認できます。

手順

- 1 [環境] - [vSphere ホストおよびクラスタ] を選択し、[vSphere ワールド] オブジェクトを選択します。
- 2 [環境] タブを選択します。

vRealize Operations Manager には、vSphere ワールド内のすべてのオブジェクトの健全性バッジが表示されます。

- 3 各ホスト システムのバッジをクリックします。

そのホストに属している仮想マシンの健全性バッジがハイライト表示されます。ホストの健全性バッジが良好な状態を示していても、警告ステータスを示している仮想マシンが含まれている場合があります。

次のステップ

問題の原因を調査します。たとえば、問題が慢性的なものなのか一時的なものなのかを判断したら、その対処法を決定することができます。[問題解決のためのトラブルシューティング ツールの使用](#) を参照してください。

環境オブジェクトの [概要] タブ

vRealize Operations Manager は、環境内のすべてのオブジェクトのデータを収集します。オブジェクトのステータスとすべての関連するオブジェクトのステータスを比較して、環境内の問題の考えられる原因を特定することができます。

環境オブジェクトの概要の仕組み

インベントリ内でオブジェクトを選択すると、vRealize Operations Manager はそのオブジェクトのバッジと関連するすべてのオブジェクトをハイライト表示します。バッジをポイントして、オブジェクトの現在のキー条件を表示します。[環境内のリソースの分析](#)を参照してください。

環境オブジェクトの概要を確認できる場所

左側のペインで、[環境] を選択して、グループ、アプリケーション、またはインベントリ オブジェクトを選択します。[環境] タブをクリックし、[概要] タブをクリックします。

表 5-42. 環境オブジェクトの概要オプション

オプション	説明
バッジ	選択したバッジをその状態に対応する色で表示します。
ステータス	すべてのステータスがデフォルトで表示されます。ステータスを選択して、バッジの表示をオフに切り替えます。
電源状態のオプション	オンに切り替えて、オン、オフ、スタンバイ、または不明な電源状態にあるオブジェクトのバッジを表示します。選択は付加的です。たとえば、オンの状態およびオフの状態の両方のオブジェクトを表示できます。アクションはオブジェクトの電源状態によって異なります。表示を使用して、オブジェクトのアクションが使用できない可能性がある理由を特定するのに役立ちます。 vRealize Operations Manager アクションのリスト を参照してください。
並べ替え	オブジェクトが一覧表示される順番を変更します。オブジェクト名をアルファベット順に並べ替えます。

環境オブジェクトの [リスト] タブ

インベントリ内のオブジェクトを選択してリスト ビューを選択すると、選択に関連するすべてのオブジェクトのリストが vRealize Operations Manager によって一覧表示されます。このリストから、アクションを実行するオブジェクトや別のアプリケーションにリンクするオブジェクトを選択して、そのオブジェクトに関する情報を得ることができます。

環境オブジェクトのリストを確認できる場所

左側のペインで、[環境] を選択して、グループ、アプリケーション、またはインベントリ オブジェクトを選択します。[環境] タブをクリックし、[リスト] タブをクリックします。

関連する各オブジェクトが、オブジェクトの現在のキー条件のステータスを示すバッジとともに一覧表示されます。[環境内のリソースの分析](#)を参照してください。

バッジをポイントしてクリックし、そのオブジェクトの長期間にわたる条件のスパークライン グラフを表示します。グラフは定性的です。グラフが矛盾した条件を示している場合は、そのオブジェクトに発生しているイベントを調査する必要があることがあります。[\[イベント\] タブのトラブルシューティング](#)を参照してください。

表 5-43. 環境オブジェクトのリスト オプション

オプション	説明
操作	選択したオブジェクトに対してアクションを実行します。使用できるアクションは、オブジェクトのタイプによって異なります。たとえば、仮想マシンのパワー オンは、選択した仮想マシンに適用されます。を参照してください。 vRealize Operations Manager アクションのリスト
外部アプリケーションで開く	オブジェクトに関する情報を取得するために別のアプリケーションにリンクする機能がアダプタに含まれている場合は、ボタンをクリックして、そのアプリケーションのリンクにアクセスします。たとえば、[vSphere Client で仮想マシンを開く] や [vRealize Log Insight での VM ログの検索] です。

環境オブジェクトの [マップ] タブ

インベントリ内のオブジェクトを選択してマップ ビューを選択すると、選択に関連するすべてのオブジェクトのアイコンが vRealize Operations Manager によって階層で表示されます。マップを使用して、オブジェクトの関係性を表示し、表示されている任意のオブジェクトに関する詳細を取得します。

環境オブジェクトのマップを確認できる場所

左側のペインで、[環境] を選択して、グループ、アプリケーション、またはインベントリ オブジェクトを選択します。[環境] タブをクリックし、[マップ] タブをクリックします。

任意のオブジェクト アイコンをクリックして、関連するオブジェクト タイプとそれぞれの数量を表示します。ご使用の環境によっては、マップの表示が非常に大きくなる場合があります。マップ オプションを使用して、階層の表示をコントロールします。

表 5-44. 環境オブジェクトのマップ オプション

オプション	説明
表示に合わせてズーム	使用可能な領域に合わせてマップの表示をリセットします。
パン	クリックし、表示をドラッグしてマップの別の部分を表示します。
ポイント時に値を表示する	マップ内のオブジェクト アイコンをポイントして、オブジェクト名または IP アドレス、およびオブジェクト タイプを表示します。マップ内のオブジェクトの子オブジェクト アイコンを表示するには、表示されるポップアップ メニューで、[詳細] をクリックします。マップ内のオブジェクトに関連するオブジェクトのタイプとその数を表示するには、マップ内のオブジェクト アイコンをクリックします。
ビューをズーム	クリックし、ドラッグして拡大するマップの一部を囲みます。
ズームイン	マップを拡大します。
ズームアウト	マップを縮小します。
オブジェクトを初期設定に戻す	表示を変更してズーム、パン、または別のオブジェクトを選択した場合、このオプションをクリックして、オブジェクトの初期設定の表示に戻します。
オブジェクト詳細	選択した場合、関連するオブジェクト タイプとそれぞれの数量の表示は、選択したオブジェクトよりも下の階層のオブジェクト タイプに制限されます。

ユーザー シナリオ:[トラブルシューティング] タブのオプションを使用して問題の根本原因を調査する

お客様の 1 人が、自分の仮想マシンの処理の遅さや障害などを含めたパフォーマンスの低さを報告しています。このシナリオでは、[トラブルシューティング] タブで利用できる情報に基づいて、vRealize Operations Manager を使用してこの問題を調査できる 1 つの方法を示します。

仮想インフラストラクチャ管理者として、お客様の 1 人が自分の仮想マシン sales-10-dk の問題をレポートしたヘルプ チケットに対応します。レポートされた状態は、ロード時間が遅い、起動が遅いなどのアプリケーションのパフォーマンスが低いことで、プログラムの一部のロードにかかる時間が長くなってきており、ファイルの保存にも時間がかかります。今日、プログラムに障害が発生し、アップデートのインストールに失敗しました。

この仮想マシンの [アラート] タブを確認すると、メモリのストレスにつながる慢性的な高メモリ ワークロードのアラートがあり、トリガされたシンプトムではメモリのストレスが示され、メモリを追加することが推奨されています。

過去の経験から、このアラートは根本原因を示しているとは確信できないため、[分析] タブを再確認します。[残り容量] でメモリとディスク容量の問題が示され、[残り時間] でメモリおよびディスク容量の残りが 0 日となっている以外、関連バッジはすべて緑色になっています。

この最初の確認から、メモリ アラートのほかに問題があることがわかるため、[トラブルシューティング] タブを使用してさらに詳しい調査を行います。

仮想マシンの問題をトラブルシューティングする際、トリガーされたシンプトムを確認する

仮想インフラストラクチャ管理者は、顧客の苦情およびアラートに対応し、環境内のオブジェクトで発生した問題を特定します。[シンプトム] タブの情報を参考にして、トリガしたシンプトムが、レポートまたは特定された問題に寄与する条件を示すかどうかを判定します。

顧客からレポートされた仮想マシンのパフォーマンス低下の問題について調査する必要があります。仮想マシンの [アラート] タブで表示されるアラートは、仮想マシンは、vSphere セキュリティ強化ガイドのリスク プロファイル 1 に違反していますのみです。

仮想マシンの [分析] タブでは、メモリとディスク領域で問題が発生していることを特定しました。ここでは、仮想マシンでトリガしたシンプトムに注目します。

[シンプトム] タブを使用して問題を評価する次の方法は、vRealize Operations Manager を使用するための例として示されるものであり、確定的なものではありません。環境の特定の側面に関するトラブルシューティング スキルや知識により、どの方法が有効か判断してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager のメイン タイトル バーで、[検索] テキスト ボックスに仮想マシンの名前を入力します。

この例では、仮想マシンの名前は **sales-10-dk** です。

- 2 仮想マシンを選択した状態で、[トラブルシューティング] タブをクリックし、[シンプトム] タブをクリックします。

3 トリガしたシンプトムを確認し、評価します。

オプション 評価プロセス

症状	トリガーされたシンプトムのいずれかが、メモリまたはディスク領域で確認したクリティカルな状態に関連しているか。
ステータス	シンプトムはアクティブであるか、非アクティブであるか。非アクティブのシンプトムであっても、オブジェクトの過去の状態についての情報を得られます。非アクティブのシンプトムを追加するには、ツールバーの [ステータス：アクティブ] をクリックしてフィルタを削除します。
作成日時	シンプトムがトリガしたのはいつか。トリガしたシンプトムの時期は、他のシンプトムとどのように比較できるか。
詳細情報	トリガーされたシンプトムと残り時間および残りキャパシティ バッジの状態との間の相関を特定できるか。

結果

確認作業によって、トリガしたシンプトムが vSphere セキュリティ強化ガイドに定義された仮想マシンのコンプライアンス アラートに関連するかどうかを特定します。vRealize Operations Manager に付属するコンプライアンス リスク プロファイルの 1 つである vSphere セキュリティ強化ガイドというアラートに対して、違反シンプトムがトリガしました。

仮想マシンは、vSphere セキュリティ強化ガイドのリスク プロファイル 1 に違反していますというコンプライアンス アラートで次のシンプトムがトリガしました：

- 独立型の読み取り専用ディスクが使用されています
- 自動ログオン機能が有効です
- コピー/貼り付け操作が有効です
- 権限がないユーザーとプロセスが、デバイスの削除、接続、および変更を実行できます
- ゲストはホスト情報を受信できます

メモリおよび残り時間に関連する他のシンプトムもトリガしました。

- ゲスト ファイル システムの全体的なディスク領域使用量がクリティカル限界に到達しています
- 仮想マシンのディスク領域の残り時間が少なくなっています
- 仮想マシンの CPU の残り時間が少なくなっています
- ゲスト パーティションのディスク領域の使用量
- 仮想マシンのメモリの残り時間が少なくなっています

次のステップ

タイムライン上のオブジェクトのシンプトムを確認します。[仮想マシンの問題をトラブルシューティングする際、タイムラインのシンプトムを比較する](#) を参照してください。

vSphere セキュリティ強化ガイドについては、<http://www.vmware.com/security/hardening-guides.html> を参照してください。

仮想マシンの問題をトラブルシューティングする際、タイムラインのシンプトムを比較する

オブジェクトに対してトリガーされたシンプトムを経時的に見ると、環境内のオブジェクトの問題をトラブルシューティングする際に、トリガーされたシンプトム、アラート、およびイベントを比較できます。vRealize Operations

Manager の [タイムライン] タブには、環境内の問題の調査に使用できる、トリガーされたシンプトムを見るための視覚的なチャートがあります。

sales-10-dk 仮想マシン上でレポートされたパフォーマンス問題の根本的原因の指標と考えられる、以下のシンプトムを特定した後、それらを互いに経時的に比較し、関心のあるパターンまたは共通のパターンを探します。

- ゲスト ファイル システムの全体的なディスク領域使用量がクリティカル限界に到達している
- 仮想マシンのディスク領域の残り時間が少なくなっている
- 仮想マシンの CPU の残り時間が少なくなっている
- ゲスト パーティション ディスク領域を使用する
- 仮想マシンのメモリの残り時間が少なくなっている

[タイムライン] タブを使用して問題を評価する次の方法は、vRealize Operations Manager を使用するための例として示されものであり、確定的なものではありません。環境に特化したトラブルシューティング スキルや知識により、どの方法が有効か判断してください。

前提条件

トリガーされたオブジェクトのシンプトムを確認します。仮想マシンの問題をトラブルシューティングする際、トリガーされたシンプトムを確認するを参照してください。

手順

- 1 メイン タイトル バーにある [検索] テキスト ボックスに仮想マシンの名前を入力します。
この例では、仮想マシンの名前は **sales-10-dk** です。
- 2 [トラブルシューティング] タブをクリックして、[タイムライン] タブをクリックします。
- 3 タイムライン ツールバーで [日付コントロール] をクリックし、参照のシンプトムがトリガーされた時間以前の時間を選択します。

デフォルトの時間範囲は直近の 6 時間です。仮想マシンを経時的に広範囲に見るには、トリガーされたシンプトムおよび生成されたアラートを含む範囲を構成します。
- 4 シンプトムがトリガーされたポイントを表示し、どの行がどのシンプトムを表しているかを特定するには、タイムラインの週、日付、または時間のセクションをページ全体で左と右にドラッグします。
- 5 [イベント タイプの選択] をクリックして、すべてのイベント タイプを選択します。

イベントがトリガーされたシンプトムまたは生成されたアラートに対応するかを検討します。
- 6 左上のペインの関連する階層リストで、[vSphere ホストおよびクラスタ] をクリックします。

使用可能な先祖および子孫オブジェクトは、選択された階層によって異なります。
- 7 原因となる問題がホストに発生しているかどうかを確認するには、[先祖イベントの表示] をクリックします。

ホストに、メモリまたはディスク領域の問題について詳細な情報を提供するシンプトム、アラート、またはイベントがあるかどうかを調べます。

結果

仮想マシンのシンプトムとホストのシンプトムを比較し、経時的にシンプトムをみることで、次の傾向が示されます。

- ホストのリソース使用量、ホストのディスク使用量、およびホストの CPU 使用量のシンプトムがおおよそ 4 時間ごとに約 10 分間トリガーされる。
- 仮想マシンのゲスト ファイル システムの領域不足シンプトムがトリガーされ、時間の経過とともにキャンセルされる。このシンプトムは 1 時間アクティブになりキャンセルされることがある。このシンプトムが 2 時間アクティブのこともある。ただし、キャンセルとそのシンプトムの次のトリガー間は 30 分以下になる。

次のステップ

分析バッジおよびアラートのコンテキストでイベントを確認します。 [仮想マシンの問題をトラブルシューティングする際、影響のあるイベントを特定する](#) を参照してください。

仮想マシンの問題をトラブルシューティングする際、影響のあるイベントを特定する

イベントとは、メトリック、プロパティ、またはオブジェクトについての情報への変更に基づいた、環境内のオブジェクトへの変更です。分析バッジおよびアラートのコンテキストで問題のある仮想マシンのイベントを調べると、問題の根本原因に対する視覚的な手がかりが得られる場合があります。

レポートされた仮想マシンのパフォーマンス問題を調査している仮想インフラストラクチャ管理者として、タイムライン上のシンプトムを比較し、ゲスト ファイル システム周辺に変わった動作を特定しました。これを他のバッジ メトリックのコンテキストで調べて、問題の根本原因を見つけることができるかどうかを判断します。

[イベント] タブを使用して問題を評価する次の方法は、vRealize Operations Manager を使用するための例として示されるものであり、確定的なものではありません。環境に特化したトラブルシューティング スキルや知識により、どの方法が有効か判断してください。

前提条件

トリガされたシンプトム、アラート、およびイベントを経時的に調べます。を参照してください。 [仮想マシンの問題をトラブルシューティングする際、タイムラインのシンプトムを比較する](#)

手順

- 1 メイン タイトル バーにある [検索] テキスト ボックスに仮想マシンの名前を入力します。
この例では、仮想マシンの名前は sales-10-dk です。
- 2 [トラブルシューティング] タブをクリックし、[イベント] タブをクリックします。
- 3 イベント ツールバーで [日付コントロール] をクリックし、シンプトムがトリガされた時間以前の時間を選択します。
- 4 [イベント タイプの選択] をクリックして、すべてのイベント タイプを選択します。
変更が他のイベントに対応するかどうかを検討します。
- 5 [親イベントの表示] をクリックし、ツールバーのバッジをすべてクリックしてイベントを確認します。
チャートの下にデータ グリッドに一覧表示されたイベントのいずれかが、レポートされた問題の一因となる可能性のあるホストの問題に相当するかどうかを検討します。

6 [子イベントの表示] をクリックし、ツールバーのバッジをすべてクリックしてイベントを確認します。

イベントのいずれかでデータストアの問題があるかを検討します。

結果

評価では、ワークロードまたはアノマリと、ゲスト ファイル システムの容量不足のシンプトムがトリガされた各時間との間に、特定の相関は見られません。

vRealize Operations Manager からのアクションの実行

vRealize Operations Manager で、vRealize Operations Manager のアクションを使用して、vCenter Server で選択されているオブジェクトの状態または構成を変更できます。たとえば、疑わしいリソース問題に取り組んだり、リソースを再配分して仮想インフラストラクチャを最適化したりする目的で、オブジェクト構成を変更する必要があることがあります。

アクションの使用目的として最も多いのは、問題の解決です。アクションをトラブルシューティング手順の一部として実行することも、アラートに対応するための推奨される解決策としてアクションを追加することもできます。

vRealize Operations Manager でユーザーにアクションのアクセス権を与えると、そのユーザーは、vRealize Operations Manager 以外でアクセス可能なオブジェクトだけでなく、vRealize Operations Manager が管理するすべてのオブジェクトへのアクションが許可されます。



「vRealize Operations Manager でのアクションの使用」

(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_actions_vrom)

問題のトラブルシューティングを行うときには、中央ペインの [アクション] メニュー、またはサポートされているオブジェクトが含まれている、リスト ビューのツールバーからアクションを実行できます。

アラートが起動されて、問題の解決には推奨されているアクションが最適と判断した場合には、1 つ以上のオブジェクトに対してそのアクションを実行できます。

vRealize Operations Manager のツールバーからのアクションの実行

vRealize Operations Manager でアクションを実行する場合は、vRealize Operations Manager から vCenter Server オブジェクトの状態を変更します。オブジェクトの構成や状態が環境に悪影響を与えている場合、ユーザーが1 つ以上のアクションを実行します。これらのアクションにより、無駄な領域の解放、メモリの調整、またはリソースの節約が実行できます。

このアクション実行手順は、vRealize Operations Manager [アクション] メニューに基づいて、通常は問題のトラブルシューティングに使用されます。利用可能なアクションは、使用しているオブジェクトのタイプによって異なります。アクションをアラートの推奨事項として実行することもできます。

前提条件

- 各 vCenter Server インスタンスのアクションの実行用に vCenter アダプタが構成済みであることを確認します。を参照してください。 [vRealize Operations Manager での vCenter アダプタ インスタンスの構成](#)

- CPU 数の設定、メモリの設定、CPU 数およびメモリの設定アクションを実行する場合は、パワーオフ可オプションの使用方法を理解していることを確認します。[パワーオフ可を使用するアクションのアクション](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager で、環境インベントリ内のオブジェクトを選択するか、リスト ビューに表示されている 1 つ以上のオブジェクトを選択します。
- 2 メイン ツールバーまたは組み込みのビューで [アクション] をクリックします。
- 3 アクションを 1 つ選択します。

仮想マシンを操作対象にしている場合は、ダイアログ ボックスに仮想マシンだけが表示されます。クラスタ、ホスト、データストアを操作対象にしている場合は、ダイアログ ボックスにすべてのオブジェクトが表示されます。

- 4 アクションの実行対象となるオブジェクトのチェック ボックスを選択して、[OK] をクリックします。
アクションが実行され、タスク ID を表示したダイアログ ボックスが開きます。
- 5 ジョブのステータスを表示し、ジョブが終了したことを確認するには、[最近のタスク] をクリックするか、[OK] をクリックしてダイアログ ボックスを閉じます。

[最近のタスク] リストが表示され、そこに開始したタスクが含まれています。

次のステップ

ジョブが完了していることを確認するには、左側のペインで [管理] をクリックし、[最近のタスク] をクリックします。リストから目的のタスク名またはタスク ID を見つけ、ステータスが終了したことを確認します。[最近のタスクのステータスの監視](#) を参照してください。

コンテナのリバランス アクション

環境内のワークロードが不均衡になっている場合、オブジェクト間でワークロードを移動して、全体的なワークロードをリバランスすることができます。リバランス アクション用のコンテナは、データ センターまたはカスタム データ センターであり、移動されるオブジェクトは、アクションで提供される推奨リスト内の仮想マシンです。

クラスタで DRS を有効にする必要がある場合

[アクション] ドロップダウン メニューに [コンテナのリバランス] アクションが表示されるには、vCenter Server インスタンスに、DRS 対応チェックに合格しているクラスタが存在する必要があります。

カスタム データ センターまたはデータ センターからコンテナのリバランス アクションと、それに関連するアラートを取得するには、以下が必要になります。

- 各 vCenter Server インスタンスで有効になっているアクションを使用して構成された vCenter アダプタ
- DRS 対応であるクラスタを少なくとも 1 つ含む vCenter Server インスタンス

クラスタで DRS が全自動化されていない場合、コンテナのリバランス アクションを実行すると、選択されたコンテナの下にあるクラスタの 1 つ以上で、DRS が全自動に設定されていないことが通知されます。

環境で [コンテナのリバランス] アクションを使用可能にするには、DRS を追加する必要があります。その後、1 回の収集サイクルの後に [コンテナのリバランス] アクションが表示されます。

コンテナ内のすべてのオブジェクトにアクセスできる必要がある

クラスタ、データセンター、カスタム データセンター内のすべてのオブジェクトにアクセスできる場合は、[コンテナのリバランス] アクションを実行して、仮想マシンを他のクラスタに移動できます。コンテナ内のすべてのオブジェクトにアクセスできるわけではない場合、[コンテナのリバランス] アクションは利用できません。

[コンテナのリバランス] アクションの仕組み

環境内のあるデータ センターのワークロードが高く、同じ環境内の別のデータ センターのワークロードが低い場合は、[コンテナのリバランス] アクションを使用して、それらのオブジェクトにわたってワークロードのバランスを調整できます。たとえば、あるデータ センターのホストの CPU デマンドがその使用可能な CPU キャパシティを超えている場合、そのホストでクリティカルなストレスが発生します。ストレスの原因を特定するには、CPU デマンドを監視します。各ホストで CPU デマンドが高い仮想マシンと低い仮想マシンがある可能性があります。

[コンテナのリバランス] アクションを使用すると、アクションで提供される推奨リスト内の影響を受けるすべてのオブジェクトが移動されて、ワークロードのバランスが調整されます。ワークロードまたはストレスの問題を解決するために、オブジェクトのセット全体に対してアクションを実行したくない場合は、仮想マシンの移動アクションを使用して個々のオブジェクトを移動できます。

重要: vApp のメンバーである仮想マシンを移動しないでください。vApp が機能しなくなることがあります。仮想マシンにアフィニティ ルールを追加してグループ化し、仮想マシンの移動およびコンテナのリバランス アクションからその仮想マシンが除外されるようにします。

ワークロードが不均衡になっている場合、データ センターやカスタム データ センターで次のアラートがトリガされる可能性があります。これらのアラートは、ポリシーにおいてデフォルトで無効になっています。

- カスタム データセンターのワークロードが不均衡になっています
- データセンターのワークロードが不均衡になっています

データ センターまたはカスタム データ センターのホストのワークロードが大幅に異なる場合は、[ホーム] - [アラート] をクリックし、アラートがトリガされたかどうかを確認します。たとえば、カスタム データ センターでアラートがトリガされたかどうかを確認するには、カスタム データ センターのワークロードが不均衡になっています という名前のアラートをチェックします。そのアラートをクリックしてアラートの原因を確認でき、[サマリ] タブで不均衡の問題のソースを特定できます。

ワークロードをリバランスできるように、移動するオブジェクトに関する推奨事項を表示するには、[サマリ] タブの [コンテナのリバランス] アクションをクリックします。その推奨では、1 つまたは複数の仮想マシンを別のホストに移動するように示されます。[OK] をクリックすると、[最近のタスク] 内のアクションのステータスを追跡するためのリンクがポップアップ メッセージに表示されます。

アクションを実行すると、推奨事項で特定された仮想マシンが、ワークロードまたはストレスが低いホスト マシンに移動されます。[管理] - [最近のタスク] のリストでアクションのステータスを確認できます。vSphere Web Client を使用して、アクションのステータスおよびホストのパフォーマンスを確認することもできます。

アクションが実行され、vRealize Operations Manager で収集サイクルが複数回実行された後に、データ センターまたはカスタム データ センター上のワークロードを表示して、ワークロードがリバランスされていて、アラートがトリガされなくなっていることを確認できます。

1 つ以上のホストでワークロードがどのように変化したかを確認するには、ナビゲーション ツリーでホストをクリックします。[分析] - [ストレス] をクリックすると、ストレス スコア、内訳、ホスト上のワークロードが表示されます。[分析] - [残りキャパシティ] をクリックすると、ホストに残っているキャパシティを確認できます。

このアクションを実行する場所

データ センターまたはカスタム データ センターで [アクション] メニューから [コンテナのリバランス] アクションを実行したり、アラートでそのアクションを推奨アクションとして表示できます。

サポートされるオブジェクトおよびオブジェクト レベルに対し、このアクションは vRealize Operations Manager の次の場所で使用可能です。

- 一番上のツールバーの [アクション] メニューで、[ホーム] をクリックする。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[詳細] タブをクリックし、[ビュー] をクリックして、タイプ リストのビューを選択する。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[環境] タブをクリックして、リスト ビューのオブジェクトを選択する。
- インベントリ エクスプローラ リストの [管理] をクリックし、[インベントリ エクスプローラ] をクリックして、[リスト] タブをクリックし、リストのオブジェクトを選択する。
- 構成済みのアラートの推奨から。
- ダッシュボード ウィジェットのオブジェクト リストおよびトポロジ グラフから。

アクションの推奨事項

ホストおよび仮想マシンに関する次の情報を確認して、正しいオブジェクトに対してアクションを実行していることを確認してください。

オプション	説明
仮想マシン	ワークロードが過剰になっているホスト上の仮想マシンの名前。
ソース クラスタ	仮想マシンが実行されているクラスタの名前
データストア	仮想マシンに関連付けられているデータストア。
移動先クラスタ	仮想マシンの移動先クラスタ。DRS はホストを自動的に選択します。
要因	実行されるアクションおよび移動が推奨される理由を説明しています。たとえば、推奨事項は、クラスタ上のワークロードの一部を別のクラスタに移動して、CPU デマンドの不均衡を軽減することです。
親 vCenter	影響を受けるクラスタに関連付けられている vCenter vCenter Server アダプタを特定します。

[OK] をクリックすると、次のダイアログ ボックスで、タスク ID と、タスク リストへのリンクが提供されます。

表 5-45. [タスク ID] ダイアログ ボックス

オプション	説明
最近のタスク	ジョブのステータスを表示し、ジョブが終了したことを確認するには、[最近のタスク] をクリックします。
OK	追加のアクションを実行せずにダイアログ ボックスを閉じるには、[OK] をクリックします。

アイドル状態の仮想マシンの削除アクション

vRealize Operations Manager のアイドル状態の仮想マシンの削除アクションは、選択したアイドル状態の仮想マシンを vCenter Server インスタンスから削除します。冗長なリソースを解放するにはこのアクションを使用します。

アクションの動作

アイドル状態の仮想マシンの削除アクションは、電源がオンになっているアイドル状態の仮想マシンを vCenter Server インスタンスから削除します。

このアクションを実行する場所

サポートされるオブジェクトおよびオブジェクト レベルに対し、このアクションは vRealize Operations Manager の次の場所で使用可能です。

- 一番上のツールバーの [アクション] メニューで、[ホーム] をクリックする。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[詳細] タブをクリックし、[ビュー] をクリックして、タイプ リストのビューを選択する。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[環境] タブをクリックして、リスト ビューのオブジェクトを選択する。
- インベントリ エクスプローラ リストの [管理] をクリックし、[インベントリ エクスプローラ] をクリックして、[リスト] タブをクリックし、リストのオブジェクトを選択する。
- 構成済みのアラートの推奨から。
- ダッシュボード ウィジェットのオブジェクト リストおよびトポロジ グラフから。

[アクション] メニューの項目

仮想マシンに関する次の情報を確認して、正しいオブジェクトに対してアクションを実行していることを確認してください。

メニュー項目	説明
名前	環境のインベントリに表示される仮想マシンの名前。
ホスト	仮想マシンが実行されているホストの名前。
親 vCenter	仮想マシンがある親 vCenter Server インスタンス。

[アクションの開始] をクリックすると、次のダイアログ ボックスで、タスク ID と、タスク リストへのリンクが提供されます。

表 5-46. [タスク ID] ダイアログ ボックス

オプション	説明
最近のタスク	ジョブのステータスを表示し、ジョブが終了したことを確認するには、[最近のタスク] をクリックします。
OK	追加のアクションを実行せずにダイアログ ボックスを閉じるには、[OK] をクリックします。

DRS 自動化アクションの設定

vSphere Distributed Resource Scheduler (DRS) の自動化ルールは vRealize Operations Manager から構成および監視できます。DRS は環境内のリソースの監視と割り当てを行い、ホストと仮想マシン全体で計算キャパシティのバランスを調整します。

アクションの動作

DRS 自動化の設定アクションは、DRS の自動化ルールを監視および構成します。DRS 自動化の設定アクションを使用すると、DRS を有効または無効にできます。

vRealize Automation が環境内のいずれかの仮想マシンを管理する場合、そのオブジェクトに対して DRS 自動化の設定アクションは使用できません。

このアクションを実行する場所

サポートされるオブジェクトおよびオブジェクト レベルに対し、このアクションは vRealize Operations Manager の次の場所で使用可能です。

- 一番上のツールバーの [アクション] メニューで、[ホーム] をクリックする。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[詳細] タブをクリックし、[ビュー] をクリックして、タイプ リストのビューを選択する。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[環境] タブをクリックして、リスト ビューのオブジェクトを選択する。
- インベントリ エクスプローラ リストの [管理] をクリックし、[インベントリ エクスプローラ] をクリックして、[リスト] タブをクリックし、リストのオブジェクトを選択する。
- 構成済みのアラートの推奨から。
- ダッシュボード ウィジェットのオブジェクト リストおよびトポロジ グラフから。

[アクション] メニューの項目

正しいオブジェクトに対して正しいアクションを実行していることを確認するため、クラスタに関する次の情報を確認してください。

メニュー項目	説明
名前	vCenter Server インスタンス内のクラスタの名前。
自動化レベル	DRS 自動化のレベル。選択されたクラスタで DRS が完全に自動化されていると、DRS 自動化の設定アクションを実行できます。
移行しきい値	仮想マシンの移行レベルに関する推奨値。移行しきい値は DRS の優先順位レベルに基づいており、クラスタのワークロード不均衡メトリックに基づいて計算されます。
親 vCenter	クラスタが存在する親 vCenter Server インスタンス。

[アクションの開始] をクリックすると、次のダイアログ ボックスで、タスク ID と、タスク リストへのリンクが提供されます。

表 5-47. [タスク ID] ダイアログ ボックス

オプション	説明
最近のタスク	ジョブのステータスを表示し、ジョブが終了したことを確認するには、[最近のタスク] をクリックします。
OK	追加のアクションを実行せずにダイアログ ボックスを閉じるには、[OK] をクリックします。

仮想マシンの移動アクション

仮想マシンの移動アクションを使用して、仮想マシンを別のホストとデータストアに移動し、環境内のワークロードのバランスを調整できます。

アクションの動作

このアクションを開始すると、[仮想マシンの移動] ウィザードが開き、可能な移動先が調べられます。可能な移動先のリストから、移動先のホストとデータストアを選択します。

すべての移動先を表示するには、次のオブジェクト タイプの表示アクセス権が必要です:

- vCenter Server データ センター、カスタム データ センター、またはクラスタが含まれているスコープ オブジェクト
- スコープ オブジェクト内のホスト
- ホスト内のデータストア

移動先には、移動するオブジェクトの組み合わせ（特定のホストとデータストア、など）、または同じデータストアを持つ異なるホストが含まれます。使用可能な組み合わせのいずれかを選択します。環境に多数の移動先オブジェクト（多数のホストやデータストアなど）がある場合は、フィルタ テキスト ボックスに文字列を入力して、特定の移動先オブジェクトを検索します。

vRealize Operations Manager では、vCenter Server で定義している vSphere DRS ルールが使用され、移動アクションで仮想マシンの適切な配置を決定するのに役立ちます。アフィニティ ルール列には、仮想マシンの移動アクションでそれらのルールに違反するかどうかが表示されます。

重要: vApp のメンバーである仮想マシンを移動しないでください。vApp が機能しなくなることがあります。仮想マシンにアフィニティ ルールを追加してグループ化し、仮想マシンの移動およびコンテナのリバランス アクションからその仮想マシンが除外されるようにします。

アクションを開始するには [アクションの開始] ボタンをクリックします。

ウィザードを完了すると、アクションが開始されたことを示すダイアログ ボックスが vRealize Operations Manager に表示されます。アクションのステータスを追跡するには、ダイアログ ボックスに表示されているリンクをクリックし、[管理] - [最近のタスク] でアクションの状態を確認します。

データセンター間での仮想マシンの移動は許可されません

[仮想マシンの移動] アクションを使用してデータセンター間で仮想マシンを移動する場合、vRealize Operations Manager が、宛先データセンターの一致するネットワーク オブジェクトとストレージ オブジェクトを識別できる必要があります。ネットワーク オブジェクトには、VMware 仮想スイッチおよび分散仮想スイッチが含まれます。ストレージ オブジェクトには、データストアおよびデータストア クラスタが含まれます。

データセンター間で仮想マシンを移動するには、vRealize Operations Manager で仮想マシン ファイルを移動し、仮想マシンのネットワーク構成を変更する必要があります。vRealize Operations Manager は現在、仮想マシン ファイルのデータストア間での移動も、仮想マシンのネットワーク構成の変更も行いません。結果として、vRealize Operations Manager では、データセンター間での仮想マシンの移動は許可されません。

[仮想マシンの移動] アクションを使用するときには、次の動作に注意してください。

- 単一の仮想マシンを選択した場合、vRealize Operations Manager は、仮想マシンが置かれているデータセンターを表示します。
- ただし、複数の仮想マシンを選択しても、それらの仮想マシンが共通のデータセンターに置かれていない場合、[仮想マシンの移動] アクションでは、データセンターが表示されず、[仮想マシンの移動] アクションはアクション メニューに表示されません。

このアクションを実行する場所

サポートされるオブジェクトおよびオブジェクト レベルに対し、このアクションは vRealize Operations Manager の次の場所で使用可能です。

- 一番上のツールバーの [アクション] メニューで、[ホーム] をクリックする。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[詳細] タブをクリックし、[ビュー] をクリックして、タイプ リストのビューを選択する。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[環境] タブをクリックして、リスト ビューのオブジェクトを選択する。
- インベントリ エクスプローラ リストの [管理] をクリックし、[インベントリ エクスプローラ] をクリックして、[リスト] タブをクリックし、リストのオブジェクトを選択する。
- 構成済みのアラートの推奨から。
- ダッシュボード ウィジェットのオブジェクト リストおよびトポロジ グラフから。

アクションのオプション

仮想マシンに関する次の情報を確認して、正しいオブジェクトに対してアクションを実行していることを確認してください。

オプション	説明
優先順位	提示される移動先の優先順位を表します。アクションが自動化されている場合は、優先順位が 1 で提示される移動先が自動的に選択されます。
ターゲット ホスト	仮想マシンの移動先のホストの名前。
現在の CPU ワークロード	そのホストで使用可能な CPU 量 (GHz)
現在のメモリ ワークロード	そのホストで使用可能なメモリ量 (GB)

オプション	説明
移動先データストア	仮想マシンのストレージの移動先のデータストア。
現在のディスク領域のワークロード	データストアで使用可能なディスク領域の容量。
収まる？	選択した移動先に仮想マシンが収まるどうかを計算した予測。
仮想マシンのパワーオフ要	いいえ に設定されている場合、このアクションでは移動前に仮想マシンがパワーオフされません。はい に設定されている場合、このアクションでは移動の実行前に仮想マシンがパワーオフされ、移動の完了後に仮想マシンがパワーオンされます。VMware Tools がインストールされている場合は、ゲスト OS のシャットダウンを使用して仮想マシンがパワーオフされます。
アフィニティ ルール	vCenter Server で定義されている vSphere DRS ルールが存在するかどうかを表します。たとえば、仮想マシンをまとめるためのルールが存在し、仮想マシンを分離するための別のルールが存在する可能性があります。 この列には次のステータスが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 空。vSphere DRS ルールは定義されていません。 ■ 緑色のチェックマーク。仮想マシンの移動はアフィニティ ルールに違反しません。 ■ 縦棒付きの赤色の円。仮想マシンの移動はアフィニティ ルールに違反します。アフィニティ ルールに違反することを選択した場合は、すべての問題を手動で解決する必要があります。
アフィニティ ルールの詳細	仮想マシン、およびその仮想マシンを移動した場合に違反となる vCenter Server DRS ルール名 (vSphere で定義) を特定します。

[OK] をクリックすると、次のダイアログ ボックスで、タスク ID と、タスク リストへのリンクが提供されます。

表 5-48. [タスク ID] ダイアログ ボックス

オプション	説明
最近のタスク	ジョブのステータスを表示し、ジョブが終了したことを確認するには、[最近のタスク] をクリックします。
OK	追加のアクションを実行せずにダイアログ ボックスを閉じるには、[OK] をクリックします。

仮想マシンのパワーオフ アクション

vRealize Operations Manager の仮想マシンのパワーオフ アクションによって、選択した 1 つ以上のパワーオン状態の仮想マシンが停止します。仮想マシンは、リソースを管理しているときおよび無駄な領域を解放しているときにパワーオフします。

アクションの動作

仮想マシンのパワーオフ アクションは、仮想マシンをオフにします。VMware Tools がインストールされており、稼働している場合は、最初にゲスト OS がシャットダウンされ、その後、仮想マシンがパワーオフされます。VMware Tools がインストールされておらず、稼働していない場合は、ゲスト OS の状態にかかわらず、仮想マシンがパワーオフされます。この場合は、ゲスト OS を停止してもインストールされているアプリケーションに悪影響が及ばない仮想マシンをパワーオフする場合のみ、このアクションを使用できます。

対象の仮想マシンがすでにパワーオフされている場合は、仮想マシンの状態に変更がなかった場合でも、そのマシンの最近のタスク ステータスでは成功と報告されます。

このアクションを実行する場所

サポートされるオブジェクトおよびオブジェクト レベルに対し、このアクションは vRealize Operations Manager の次の場所で使用可能です。

- 一番上のツールバーの [アクション] メニューで、[ホーム] をクリックする。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[詳細] タブをクリックし、[ビュー] をクリックして、タイプ リストのビューを選択する。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[環境] タブをクリックして、リスト ビューのオブジェクトを選択する。
- インベントリ エクスプローラ リストの [管理] をクリックし、[インベントリ エクスプローラ] をクリックして、[リスト] タブをクリックし、リストのオブジェクトを選択する。
- 構成済みのアラートの推奨から。
- ダッシュボード ウィジェットのオブジェクト リストおよびトポロジ グラフから。

アクションのオプション

仮想マシンに関する次の情報を確認して、正しいオブジェクトに対してアクションを実行していることを確認してください。

オプション	説明
選択したオブジェクト	チェック ボックスは、アクションがオブジェクトに適用されるかどうかを示します。1 つ以上のオブジェクトに対してアクションを実行しない場合は、関連するチェック ボックスをオフにします。このオプションは、2 つ以上のオブジェクトが選択されている場合に利用可能になります。
名前	環境のインベントリに表示される仮想マシンの名前。
パワー状態	仮想マシンがパワーオンされているか、パワーオフされているかを示します。
アイドルの仮想マシン	構成済みのアイドル仮想マシンのメトリックに基づいて、仮想マシンがアイドル状態であると見なされるかどうかを示します。 値には、次の種類があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ false. 仮想マシンはアクティブです。 ■ true. 仮想マシンはアイドルです。 ■ 不明. アイドルのメトリックを計算するために必要なデータが vRealize Operations Manager にありません。
アイドルの仮想マシンのパーセンテージ	構成済みの解放可能な無駄な容量のポリシーに基づいて計算された、アイドル仮想マシンのパーセンテージのしきい値。
CPU 使用率	メトリック <code>cpu usage_average</code> に基づいて計算された、仮想マシンの CPU 使用率のしきい値。
ホスト	仮想マシンが実行されているホストの名前。
アダプタ インスタンス	vRealize Operations Manager で構成されている VMware アダプタの名前。このアダプタは、vCenter Server インスタンスとの通信を管理します。

[OK] をクリックすると、次のダイアログ ボックスで、タスク ID と、タスク リストへのリンクが提供されます。

表 5-49. [タスク ID] ダイアログ ボックス

オプション	説明
最近のタスク	ジョブのステータスを表示し、ジョブが終了したことを確認するには、[最近のタスク] をクリックします。
OK	追加のアクションを実行せずにダイアログ ボックスを閉じるには、[OK] をクリックします。

仮想マシンのゲスト OS のシャットダウン アクション

仮想マシンのゲスト OS のシャットダウン アクションでは、ゲスト OS をシャットダウンして、仮想マシンをパワーオフします。 リソースを管理するときと無駄な領域を解放するとき、仮想マシンをシャットダウンします。

アクションの動作

仮想マシンのゲスト OS のシャットダウン アクションでは、必要な VMware Tools がターゲット仮想マシンにインストールされていることを確認してから、ゲスト OS のシャットダウンと仮想マシンのパワーオフを実行します。 VMware Tools がインストールされていないか、インストールされていても実行されていない場合、アクションは実行されず、ジョブが [最近のタスク] に失敗と表示されます。

対象の仮想マシンがすでにパワーオフされている場合は、仮想マシンの状態に変更がなかった場合でも、そのマシンの最近のタスク ステータスでは成功と報告されます。

このアクションを実行する場所

サポートされるオブジェクトおよびオブジェクト レベルに対し、このアクションは vRealize Operations Manager の次の場所で使用可能です。

- 一番上のツールバーの [アクション] メニューで、[ホーム] をクリックする。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[詳細] タブをクリックし、[ビュー] をクリックして、タイプ リストのビューを選択する。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[環境] タブをクリックして、リスト ビューのオブジェクトを選択する。
- インベントリ エクスプローラ リストの [管理] をクリックし、[インベントリ エクスプローラ] をクリックして、[リスト] タブをクリックし、リストのオブジェクトを選択する。
- 構成済みのアラートの推奨から。
- ダッシュボード ウィジェットのオブジェクト リストおよびトポロジ グラフから。

アクションのオプション

仮想マシンに関する次の情報を確認して、正しいオブジェクトに対してアクションを実行していることを確認してください。

オプション	説明
選択したオブジェクト	チェック ボックスは、アクションがオブジェクトに適用されるかどうかを示します。1 つ以上のオブジェクトに対してアクションを実行しない場合は、関連するチェック ボックスをオフにします。このオプションは、2 つ以上のオブジェクトが選択されている場合に利用可能になります。
名前	環境のインベントリに表示される仮想マシンの名前。
パワー状態	仮想マシンがパワーオンされているか、パワーオフされているかを示します。
アイドルの仮想マシン	構成済みのアイドル仮想マシンのメトリックに基づいて、仮想マシンがアイドル状態であると思なされるかどうかを示します。値には、次の種類があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ false。仮想マシンはアクティブです。 ■ true。仮想マシンはアイドルです。 ■ 不明。 アイドルのメトリックを計算するために必要なデータが vRealize Operations Manager にありません。
アイドルの仮想マシンのパーセンテージ	構成済みの解放可能な無駄な容量のポリシーに基づいて計算された、アイドル仮想マシンのパーセンテージのしきい値。
ホスト	仮想マシンが実行されているホストの名前。
アダプタ インスタンス	vRealize Operations Manager で構成されている VMware アダプタの名前。このアダプタは、vCenter Server インスタンスとの通信を管理します。

[OK] をクリックすると、次のダイアログ ボックスで、タスク ID と、タスク リストへのリンクが提供されます。

表 5-50. [タスク ID] ダイアログ ボックス

オプション	説明
最近のタスク	ジョブのステータスを表示し、ジョブが終了したことを確認するには、[最近のタスク] をクリックします。
OK	追加のアクションを実行せずにダイアログ ボックスを閉じるには、[OK] をクリックします。

仮想マシンのパワーオン アクション

パワーオフ状態の仮想マシンを開始するには、vRealize Operations Manager の仮想マシンのパワーオン アクションを使用します。仮想マシンをパワーオンすると、リソースを切り替えることができます。たとえば、マシンをパワーオンすると、マシンを使用して、アプリケーションを実行することや、既にパワーオフ状態になっているマシンで実行されたアクションがパフォーマンスの向上に関与するかどうかを確認することができます。

アクションの動作

仮想マシンのパワーオン アクションによって、パワーオフ状態の仮想マシンがパワーオンされます。現在パワーオン状態の仮想マシンは、このアクションの影響は受けません。

ターゲット仮想マシンが既にパワーオン状態になっている場合は、仮想マシンの状態に変更がなかった場合でも、そのマシンのタスク ステータスでは成功と報告されます。

このアクションを実行する場所

サポートされるオブジェクトおよびオブジェクト レベルに対し、このアクションは vRealize Operations Manager の次の場所で使用可能です。

- 一番上のツールバーの [アクション] メニューで、[ホーム] をクリックする。

- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[詳細] タブをクリックし、[ビュー] をクリックして、タイプ リストのビューを選択する。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[環境] タブをクリックして、リスト ビューのオブジェクトを選択する。
- インベントリ エクスプローラ リストの [管理] をクリックし、[インベントリ エクスプローラ] をクリックして、[リスト] タブをクリックし、リストのオブジェクトを選択する。
- 構成済みのアラートの推奨から。
- ダッシュボード ウィジェットのオブジェクト リストおよびトポロジ グラフから。

アクションのオプション

仮想マシンに関する次の情報を確認して、正しいオブジェクトに対してアクションを実行していることを確認してください。

オプション	説明
選択したオブジェクト	チェック ボックスは、アクションがオブジェクトに適用されるかどうかを示します。1 つ以上のオブジェクトに対してアクションを実行しない場合は、関連するチェック ボックスをオフにします。このオプションは、2 つ以上のオブジェクトが選択されている場合に利用可能になります。
名前	環境のインベントリに表示される仮想マシンの名前。
パワー状態	仮想マシンがパワーオンされているか、パワーオフされているかを示します。
ホスト	仮想マシンが実行されているホストの名前。
アダプタ インスタンス	vRealize Operations Manager で構成されている VMware アダプタの名前。このアダプタは、vCenter Server インスタンスとの通信を管理します。

[OK] をクリックすると、次のダイアログ ボックスで、タスク ID と、タスク リストへのリンクが提供されます。

表 5-51. [タスク ID] ダイアログ ボックス

オプション	説明
最近のタスク	ジョブのステータスを表示し、ジョブが終了したことを確認するには、[最近のタスク] をクリックします。
OK	追加のアクションを実行せずにダイアログ ボックスを閉じるには、[OK] をクリックします。

パワーオフされた仮想マシンの削除アクション

vRealize Operations Manager のパワーオフされた仮想マシンの削除アクションでは、選択したパワーオフ状態の仮想マシンを vCenter Server インスタンスから削除します。冗長なリソースを解放するにはこのアクションを使用します。

アクションの動作

パワーオフされた仮想マシンの削除アクションでは、vCenter Server インスタンスから仮想マシンを削除します。仮想マシンがパワーオンされている場合、仮想マシンは削除されません。

このアクションを実行する場所

サポートされるオブジェクトおよびオブジェクト レベルに対し、このアクションは vRealize Operations Manager の次の場所で使用可能です。

- 一番上のツールバーの [アクション] メニューで、[ホーム] をクリックする。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[詳細] タブをクリックし、[ビュー] をクリックして、タイプ リストのビューを選択する。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[環境] タブをクリックして、リスト ビューのオブジェクトを選択する。
- インベントリ エクスプローラ リストの [管理] をクリックし、[インベントリ エクスプローラ] をクリックして、[リスト] タブをクリックし、リストのオブジェクトを選択する。
- 構成済みのアラートの推奨から。
- ダッシュボード ウィジェットのオブジェクト リストおよびトポロジ グラフから。

アクションのオプション

仮想マシンに関する次の情報を確認して、正しいオブジェクトに対してアクションを実行していることを確認してください。

オプション	説明
選択したオブジェクト	チェック ボックスは、アクションがオブジェクトに適用されるかどうかを示します。1 つ以上のオブジェクトに対してアクションを実行しない場合は、関連するチェック ボックスをオフにします。このオプションは、2 つ以上のオブジェクトが選択されている場合に利用可能になります。
名前	環境のインベントリに表示される仮想マシンの名前。
パワー状態	仮想マシンがパワーオンされているか、パワーオフされているかを示します。
ディスク領域	仮想マシンによって現在消費されているディスク領域の量。
スナップショット領域	仮想マシンのスナップショットによって現在消費されているディスク領域の量。
メモリ (MB)	仮想マシンに割り当てられているメモリの量。
CPU 個数	仮想マシンに現在構成済み CPU の数。
ホスト	仮想マシンが実行されているホストの名前。
アダプタ インスタンス	vRealize Operations Manager で構成されている VMware アダプタの名前。このアダプタは、vCenter Server インスタンスとの通信を管理します。

[OK] をクリックすると、次のダイアログ ボックスで、タスク ID と、タスク リストへのリンクが提供されます。

表 5-52. [タスク ID] ダイアログ ボックス

オプション	説明
最近のタスク	ジョブのステータスを表示し、ジョブが終了したことを確認するには、[最近のタスク] をクリックします。
OK	追加のアクションを実行せずにダイアログ ボックスを閉じるには、[OK] をクリックします。

仮想マシンのメモリ設定アクション

vRealize Operations Manager での仮想マシン用メモリの設定アクションは、仮想マシンのメモリの追加または削除に使用されます。 パフォーマンス問題に対処するにはメモリを増やし、リソースを開放するにはメモリを減らします。

アクションの動作

仮想マシン用メモリの設定アクションでは、ターゲット仮想マシンの電源状態の判断、必要に応じたスナップショットの作成、必要な場合や要求された場合のマシンのパワーオフ、新しい値へのメモリの変更を行います。また仮想マシンを元の電源状態に戻すこともできます。

仮想マシンのメモリ設定アクションには、自動化に使用できる別の形態があります。このアクションは、仮想マシンがパワーオンでもオフでも実行できます。

このバージョンのアクションは、自動アクションに仮想マシンをパワーオフする権限があり、仮想マシンでメモリのホット アドが有効ではない場合に使用します。ホット アドが有効の場合、メモリの追加はできますが、削除はできません。

このバージョンのアクションが必要となるのは、仮想マシンがパワーオンの状態であり、メモリ容量を減らさなければならない場合です。

このバージョンのアクションでは、パワーオフ可フラグが真に設定されています。このパワーオフ可バージョンのアクションは、アラートを作成または編集し、そのアラートを推奨事項と関連付けると選択できます。このアクションのパワーオフ可バージョンが自動化されている場合は、このバージョンのアクションは選択しません。

仮想マシンでホット プラグが有効になっている場合は、パワーオフは必要ありません。パワーオフが必要になり、VMware Tools がインストールされている場合は、仮想マシンはシャットダウン後にパワーオフされます。

このアクションを実行する場所

サポートされるオブジェクトおよびオブジェクト レベルに対し、このアクションは vRealize Operations Manager の次の場所で使用可能です。

- 一番上のツールバーの [アクション] メニューで、[ホーム] をクリックする。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[詳細] タブをクリックし、[ビュー] をクリックして、タイプ リストのビューを選択する。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[環境] タブをクリックして、リスト ビューのオブジェクトを選択する。
- インベントリ エクスプローラ リストの [管理] をクリックし、[インベントリ エクスプローラ] をクリックして、[リスト] タブをクリックし、リストのオブジェクトを選択する。
- 構成済みのアラートの推奨から。
- ダッシュボード ウィジェットのオブジェクト リストおよびトポロジ グラフから。

アクションのオプション

仮想マシンに関する次の情報を確認して、正しいオブジェクトに対してアクションを実行していることを確認してください。

オプション	説明
選択したオブジェクト	<p>チェック ボックスは、アクションがオブジェクトに適用されるかどうかを示します。1 つ以上のオブジェクトに対してアクションを実行しない場合は、関連するチェック ボックスをオフにします。このオプションは、2 つ以上のオブジェクトが選択されている場合に利用可能になります。</p> <p>値を変更する場合、チェック ボックスをオンにします。[OK] ボタンを有効にするには、チェック ボックスをオンにする必要があります。</p>
名前	環境のインベントリに表示される仮想マシンの名前。
新規 (MB)	<p>要求されるメモリ量 (メガバイト)。値は 4 以上の 4 の倍数である必要があります。値が 4 より小さいか、4 の倍数でないと、メモリ量は変更されず、[最近のタスク] にはアクションの失敗が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンの電源状態が PoweredOn のときは、仮想マシンのメモリ ホット プラグ構成の制限が強制され、要求とは異なるメモリ構成になる場合があります。 ■ メモリ ホット プラグが有効でない場合は、[パワーオフ可] も選択しないと、要求が失敗します。 ■ メモリ ホット プラグが有効の場合は、構成メモリ量は仮想マシン ホット プラグ メモリ増分の倍数に調整され、少なくとも現在の仮想マシン メモリ構成よりも多い増分量になります。また、調整されたメモリ構成は、ホット プラグ メモリの制限内とされます。 <p>仮想マシンのメモリ ホット プラグの制限を満たさない場合は、メモリ量は変更されず、[最近のタスク] にはアクションの失敗が表示されます ([パワーオフ可] も選択されていない場合)。[パワーオフ可] が選択されている場合、アクションはまず、仮想マシンをパワーオフせずにメモリ再構成の要求を満たすを試み、メモリの再構成が必要なときだけ仮想マシンをパワーオフします。</p>
現在 (MB)	現在仮想マシンに設定されているメモリ容量 (メガバイト)。
パワー状態	仮想マシンがパワーオンされているか、パワーオフされているかを示します。
パワーオフ可	<p>選択されている場合は、値の変更前に、アクションによって仮想マシンがシャットダウンまたはパワーオフされます。VMware Tools がインストールされ実行されていると、仮想マシンはシャットダウンされます。VMware Tools がインストールされていないか実行されていない場合は、オペレーティング システムの状態にかかわらず、仮想マシンはパワーオフされます。</p> <p>アクションによって仮想マシンがシャットダウンされるかパワーオフされるかのほかに、オブジェクトがパワーオン状態であるかどうかと、適用される設定を検討する必要があります。</p> <p>パワーオフ可を使用するアクションのアクションを参照してください。</p>
スナップショット	<p>メモリを変更する前に、仮想マシンのスナップショットを作成します。アクションにより期待した結果が得られなかった場合に、仮想マシンを戻すスナップショットが必要になったときにこのオプションを使用します。</p> <p>スナップショット名は、アクションの [最近のタスク] メッセージに表示されます。</p> <p>メモリ ホット プラグが有効な状態でメモリが変更されると、仮想マシンの稼働中にスナップショットが作成されるため、より多くのディスク領域が消費されます。</p>
ホスト	仮想マシンが実行されているホストの名前。
アダプタ インスタンス	vRealize Operations Manager で構成されている VMware アダプタの名前。このアダプタは、vCenter Server インスタンスとの通信を管理します。

[OK] をクリックすると、次のダイアログ ボックスで、タスク ID と、タスク リストへのリンクが提供されます。

表 5-53. [タスク ID] ダイアログ ボックス

オプション	説明
最近のタスク	ジョブのステータスを表示し、ジョブが終了したことを確認するには、[最近のタスク] をクリックします。
OK	追加のアクションを実行せずにダイアログ ボックスを閉じるには、[OK] をクリックします。

仮想マシンのメモリ リソース設定アクション

仮想マシンのメモリ リソース設定アクションを使用して、仮想マシンでのメモリの予約量と制限量を変更します。メモリの予約量と制限量を変更して環境内のリソースを管理し、使用されていないリソースを再要求するか、または仮想マシンが効率よく動作するために必要なリソースを確保します。

アクションの動作

仮想マシンのメモリ リソース設定アクションにより、メモリ リソースを仮想マシンにどのように割り当てるかを決定します。予約値は、仮想マシンに割り当てられるメモリの最低保証量です。制限は、仮想マシンで使用できるメモリの最大量です。

vCenter Server での予約値と制限値は、メガバイト単位で設定します。vRealize Operations Manager は、メモリをキロバイト単位で計算して報告します。このアクションを実行すると、値はキロバイト単位で表示されるため、vRealize Operations Manager からの推奨値を実装できます。

アクションを実行するには、アクションを実行するオブジェクトのダイアログ ボックスで、すべてのオプションを構成する必要があります。1つのオプションを新しい値に変更しても、別のオプションについては変更しない場合は、変更しないオプションが現在値で構成されていることを確認してください。

このアクションを実行する場所

サポートされるオブジェクトおよびオブジェクト レベルに対し、このアクションは vRealize Operations Manager の次の場所で使用可能です。

- 一番上のツールバーの [アクション] メニューで、[ホーム] をクリックする。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[詳細] タブをクリックし、[ビュー] をクリックして、タイプ リストのビューを選択する。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[環境] タブをクリックして、リスト ビューのオブジェクトを選択する。
- インベントリ エクスプローラ リストの [管理] をクリックし、[インベントリ エクスプローラ] をクリックして、[リスト] タブをクリックし、リストのオブジェクトを選択する。
- 構成済みのアラートの推奨から。
- ダッシュボード ウィジェットのオブジェクト リストおよびトポロジ グラフから。

アクションのオプション

仮想マシンに関する次の情報を確認して、正しいオブジェクトに対してアクションを実行していることを確認してください。

オプション	説明
選択したオブジェクト	<p>チェック ボックスは、アクションがオブジェクトに適用されるかどうかを示します。1つ以上のオブジェクトに対してアクションを実行しない場合は、関連するチェック ボックスをオフにします。このオプションは、2 つ以上のオブジェクトが選択されている場合に利用可能になります。</p> <p>値を変更する場合、チェック ボックスをオンにします。[OK] ボタンを有効にするには、チェック ボックスをオンにする必要があります。</p>
名前	環境のインベントリに表示される仮想マシンの名前。

オプション	説明
新規予約 (KB)	アクションの終了時に仮想マシン用に予約されるキロバイト単位のメモリ量。新規予約値は、新規制限が制限なし (-1) でない限り、新規制限値以下にする必要があります。 予約では、次の値がサポートされます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 値を 0 に設定すると、仮想マシンには、現在構成されている量の RAM のみが割り当てられます。 ■ 予約済みのメモリを追加または削除する場合は、1024 で割り切れる値にする必要があります。
現在の予約 (KB)	仮想マシンの保証メモリ量として現在構成されているキロバイト単位のメモリ量。
新規制限 (KB)	アクションの完了時に仮想マシンで使用できるようになるキロバイト単位のメモリ量。 この制限では、次の値がサポートされます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 値を 0 に設定すると、最大メモリ使用量は割り当てられた予約量以下になります。 ■ 値を -1 に設定すると、仮想マシンのメモリ使用量は無制限になります。 ■ 制限値を増やすまたは減らす場合は、1024 で割り切れる値にする必要があります。
現在の制限 (KB)	仮想マシンで使用することを現在許可されているメモリの最大量。
ホスト	仮想マシンが実行されているホストの名前。
アダプタ インスタンス	vRealize Operations Manager で構成されている VMware アダプタの名前。このアダプタは、vCenter Server インスタンスとの通信を管理します。

[OK] をクリックすると、次のダイアログ ボックスで、タスク ID と、タスク リストへのリンクが提供されます。

表 5-54. [タスク ID] ダイアログ ボックス

オプション	説明
最近のタスク	ジョブのステータスを表示し、ジョブが終了したことを確認するには、[最近のタスク] をクリックします。
OK	追加のアクションを実行せずにダイアログ ボックスを閉じるには、[OK] をクリックします。

仮想マシンの CPU 数設定アクション

vRealize Operations Manager での CPU 設定アクションにより、仮想マシン上の vCPU の数を変更します。パフォーマンス上の問題に対処するには CPU の数を増やし、リソースを解放するには CPU の数を減らします。

アクションの動作

CPU 数設定アクションは、ターゲット仮想マシンをシャットダウンまたはパワーオフします。これは CPU 数を減らす場合に必要となります。このアクションは、リクエストに応じてスナップショットを作成し、指定された新規 CPU 数に基づいて vCPU 数を変更して、仮想マシンを当初の電源状態に戻します。

仮想マシンの CPU 数設定アクションには、自動化に使用できる別の形態があります。このアクションは、仮想マシンがパワーオンでもオフでも実行できます。

このバージョンのアクションは、自動アクションに仮想マシンをパワーオフする権限があり、仮想マシンでメモリのホット アドが有効ではない場合に使用します。ホット アドが有効の場合、CPU の追加はできますが、削除はできません。

このバージョンのアクションが必要となるのは、仮想マシンがパワーオンの状態であり、CPU 数を減らさなければならない場合です。

このバージョンのアクションでは、パワーオフ可フラグが真に設定されています。このパワーオフ可バージョンのアクションは、アラートを作成または編集し、そのアラートを推奨事項と関連付けると選択できます。このアクションのパワーオフ可バージョンが自動化されている場合は、このバージョンのアクションは選択しません。

仮想マシンでホット プラグが有効になっている場合は、パワーオフは必要ありません。パワーオフが必要になり、VMware Tools がインストールされている場合は、仮想マシンはシャットダウン後にパワーオフされます。



仮想マシンの CPU 数設定

(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_set_cpu_count_for_vm)

このアクションを実行する場所

サポートされるオブジェクトおよびオブジェクト レベルに対し、このアクションは vRealize Operations Manager の次の場所で使用可能です。

- 一番上のツールバーの [アクション] メニューで、[ホーム] をクリックする。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[詳細] タブをクリックし、[ビュー] をクリックして、タイプ リストのビューを選択する。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[環境] タブをクリックして、リスト ビューのオブジェクトを選択する。
- インベントリ エクスプローラ リストの [管理] をクリックし、[インベントリ エクスプローラ] をクリックして、[リスト] タブをクリックし、リストのオブジェクトを選択する。
- 構成済みのアラートの推奨から。
- ダッシュボード ウィジェットのオブジェクト リストおよびトポロジ グラフから。

アクションのオプション

仮想マシンに関する次の情報を確認して、正しいオブジェクトに対してアクションを実行していることを確認してください。

オプション	説明
選択したオブジェクト	<p>チェック ボックスは、アクションがオブジェクトに適用されるかどうかを示します。1 つ以上のオブジェクトに対してアクションを実行しない場合は、関連するチェック ボックスをオフにします。このオプションは、2 つ以上のオブジェクトが選択されている場合に利用可能になります。</p> <p>値を変更する場合、チェック ボックスをオンにします。[OK] ボタンを有効にするには、チェック ボックスをオンにする必要があります。</p>
名前	環境のインベントリに表示される仮想マシンの名前。
新しい CPU	<p>アクションが完了したときの CPU 数。値が 1 より小さいか、vCenter Server の仮想マシンでサポートされていない値であり、仮想マシンがパワーオン状態で、ホット アドが有効でない場合、CPU 数は変更されず、[最近のタスク] にアクションが失敗したことが表示されます。サポートされていない値を送信したときに仮想マシンがパワーオフ状態の場合、タスクでは成功と報告されますが、パワーオン アクションを実行すると仮想マシンでエラーが発生します。</p> <p>表示される値は、計算された推奨サイズです。対象の仮想マシンが新しいかオフラインの場合、この値は、現在の CPU 数を示します。vRealize Operations Manager が仮想マシンを 6 時間以上監視していた場合、環境によっては、表示される値が、推奨 CPU サイズのメトリックになります。</p>
現在の CPU	構成済み CPU の数。
パワー状態	仮想マシンがパワーオンされているか、パワーオフされているかを示します。

オプション	説明
パワーオフ可	<p>選択されている場合は、値の変更前に、アクションによって仮想マシンがシャットダウンまたはパワーオフされます。VMware Tools がインストールされ実行されていると、仮想マシンはシャットダウンされます。VMware Tools がインストールされていないか実行されていない場合は、オペレーティング システムの状態にかかわらず、仮想マシンはパワーオフされます。</p> <p>アクションによって仮想マシンがシャットダウンされるかパワーオフされるかのほかに、オブジェクトがパワーオン状態であるかどうかと、適用される設定を検討する必要があります。</p> <p>パワーオフ可を使用するアクションのアクションを参照してください。</p>
スナップショット	<p>CPU 数を変更する前にスナップショットを作成します。アクションにより期待した結果が得られなかった場合に、仮想マシンを戻すスナップショットが必要になったときにこのオプションを使用します。</p> <p>スナップショット名は、アクションの [最近のタスク] メッセージに表示されます。</p> <p>CPU のホット プラグが有効な状態で CPU を変更した場合、仮想マシンの実行中にスナップショットが作成され、より多くのディスク領域が消費されます。</p>
ホスト	仮想マシンが実行されているホストの名前。
アダプタ インスタンス	vRealize Operations Manager で構成されている VMware アダプタの名前。このアダプタは、vCenter Server インスタンスとの通信を管理します。

[OK] をクリックすると、次のダイアログ ボックスで、タスク ID と、タスク リストへのリンクが提供されます。

表 5-55. [タスク ID] ダイアログ ボックス

オプション	説明
最近のタスク	ジョブのステータスを表示し、ジョブが終了したことを確認するには、[最近のタスク] をクリックします。
OK	追加のアクションを実行せずにダイアログ ボックスを閉じるには、[OK] をクリックします。

仮想マシンの CPU リソース設定アクション

仮想マシンの CPU リソース設定アクションを使用して、仮想マシンでの CPU の予約量と制限量を変更します。CPU の予約量と制限量を変更して、環境でのワークロード需要を管理します。

アクションの動作

仮想マシンの CPU リソース設定アクションにより、CPU リソースを各仮想マシンにどのように割り当てるかを決定します。予約制限は、仮想マシンに割り当てられる CPU リソースの最低保証量です。制限は、仮想マシンで利用できる CPU リソースの最大量です。

アクションを実行するには、値を構成するすべてのオプションに、変更するオブジェクトの値を含める必要があります。1 つのオプションを新しい値に変更し、別のオプションを変更しない場合は、変更しないオプションが現在の値で構成されていることを確認します。

このアクションを実行する場所

サポートされるオブジェクトおよびオブジェクト レベルに対し、このアクションは vRealize Operations Manager の次の場所で使用可能です。

- 一番上のツールバーの [アクション] メニューで、[ホーム] をクリックする。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[詳細] タブをクリックし、[ビュー] をクリックして、タイプ リストのビューを選択する。

- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[環境] タブをクリックして、リスト ビューのオブジェクトを選択する。
- インベントリ エクスプローラ リストの [管理] をクリックし、[インベントリ エクスプローラ] をクリックして、[リスト] タブをクリックし、リストのオブジェクトを選択する。
- 構成済みのアラートの推奨から。
- ダッシュボード ウィジェットのオブジェクト リストおよびトポロジ グラフから。

アクションのオプション

仮想マシンに関する次の情報を確認して、正しいオブジェクトに対してアクションを実行していることを確認してください。

オプション	説明
選択したオブジェクト	<p>チェック ボックスは、アクションがオブジェクトに適用されるかどうかを示します。1 つ以上のオブジェクトに対してアクションを実行しない場合は、関連するチェック ボックスをオフにします。このオプションは、2 つ以上のオブジェクトが選択されている場合に利用可能になります。</p> <p>値を変更する場合、チェック ボックスをオンにします。[OK] ボタンを有効にするには、チェック ボックスをオンにする必要があります。</p>
名前	環境のインベントリに表示される仮想マシンの名前。
新規予約 (MHz)	<p>アクションの終了時に仮想マシン用に予約されるメガヘルツ単位の CPU リソースの量。新規予約値は、新規制限が制限なし (-1) でない限り、新規制限値以下にする必要があります。</p> <p>予約では、次の値がサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 値を 0 に設定すると、仮想マシンには、現在構成されている CPU 使用レベルのみが割り当てられます。 ■ 予約された CPU 使用量を追加または削除する場合は、値を 0 に設定する場合を除いて、正の整数を指定します。
現在の予約 (MHz)	仮想マシンの保証 CPU リソースとして現在構成されている CPU リソースの量。
新規制限 (MHz)	<p>アクションの完了時に仮想マシンで使用できるようになるメガヘルツ単位の最大 CPU 使用量。</p> <p>この制限では、次の値がサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 値を 0 に設定すると、最大 CPU 使用量は割り当てられた予約量以下になります。 ■ 値を -1 に設定すると、仮想マシンの CPU 使用量は無制限になります。 ■ CPU 使用量の制限を追加または削除する場合は、値を 0 または -1 に設定する場合を除いて、正の整数を指定します。
現在の制限 (MHz)	仮想マシンで使用できる CPU の最大量。
ホスト	仮想マシンが実行されているホストの名前。
アダプタ インスタンス	vRealize Operations Manager で構成されている VMware アダプタの名前。このアダプタは、vCenter Server インスタンスとの通信を管理します。

[OK] をクリックすると、次のダイアログ ボックスで、タスク ID と、タスク リストへのリンクが提供されます。

表 5-56. [タスク ID] ダイアログ ボックス

オプション	説明
最近のタスク	ジョブのステータスを表示し、ジョブが終了したことを確認するには、[最近のタスク] をクリックします。
OK	追加のアクションを実行せずにダイアログ ボックスを閉じるには、[OK] をクリックします。

仮想マシンの CPU 数およびメモリ設定アクション

仮想マシンの CPU 数およびメモリ設定アクションを使用し、複数仮想マシンの 1 回のみのパワー ダウンで組み合わせアクションを実行して、仮想マシン上の CPU やメモリの追加または削除ができます。CPU およびメモリを変更して、パフォーマンスの問題に対応したりリソースを再要求したりすることができます。

アクションの動作

CPU 数およびメモリ設定アクションは、ターゲット仮想マシンをパワー オフし、スナップショットを作成し（必要な場合）、指定された新規 CPU 数およびメモリ値に基づいて vCPU 数とメモリを変更して、仮想マシンを当初の電源状態に戻します。

仮想マシンの CPU 数およびメモリ設定アクションには、自動化に使用できる別の形態があります。このバージョンのアクションではパワーオフ可フラグが真に設定されていることから、このアクションは自動化に使用でき、仮想マシンがパワーオン状態の場合に実行できます。このアクションのパワーオフ可バージョンは、アラートを作成または編集し、そのアラートを推奨事項と関連付けると選択できます。このアクションのパワーオフ可バージョンが自動化されている場合は、このバージョンのアクションは選択しません。

仮想マシンでホット プラグが有効になっている場合は、パワーオフは必要ありません。パワーオフが必要になり、VMware Tools がインストールされている場合は、仮想マシンはシャットダウン後にパワーオフされます。

アクションを実行するには、値を構成するすべてのオプションに、変更するオブジェクトの値を含める必要があります。1 つのオプションを新しい値に変更し、別のオプションを変更しない場合は、変更しないオプションが現在の値で構成されていることを確認します。

このアクションを実行する場所

サポートされるオブジェクトおよびオブジェクト レベルに対し、このアクションは vRealize Operations Manager の次の場所で使用可能です。

- 一番上のツールバーの [アクション] メニューで、[ホーム] をクリックする。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[詳細] タブをクリックし、[ビュー] をクリックして、タイプ リストのビューを選択する。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[環境] タブをクリックして、リスト ビューのオブジェクトを選択する。
- インベントリ エクスプローラ リストの [管理] をクリックし、[インベントリ エクスプローラ] をクリックして、[リスト] タブをクリックし、リストのオブジェクトを選択する。
- 構成済みのアラートの推奨から。
- ダッシュボード ウィジェットのオブジェクト リストおよびトポロジ グラフから。

アクションのオプション

仮想マシンに関する次の情報を確認して、正しいオブジェクトに対してアクションを実行していることを確認してください。

オプション	説明
選択したオブジェクト	<p>チェック ボックスは、アクションがオブジェクトに適用されるかどうかを示します。1 つ以上のオブジェクトに対してアクションを実行しない場合は、関連するチェック ボックスをオフにします。このオプションは、2 つ以上のオブジェクトが選択されている場合に利用可能になります。</p> <p>値を変更する場合、チェック ボックスをオンにします。[OK] ボタンを有効にするには、チェック ボックスをオンにする必要があります。</p>
名前	環境のインベントリに表示される仮想マシンの名前。
新しい CPU	<p>アクションが完了したときの CPU 数。値が 1 より小さいか、vCenter Server の仮想マシンでサポートされていない値であり、仮想マシンがパワーオン状態で、ホット アドが有効でない場合、CPU 数は変更されず、[最近のタスク] にアクションが失敗したことが表示されます。サポートされていない値を送信したときに仮想マシンがパワーオフ状態の場合、タスクでは成功と報告されますが、パワーオン アクションを実行すると仮想マシンでエラーが発生します。</p> <p>表示される値は、計算された推奨サイズです。対象の仮想マシンが新しいかオフラインの場合、この値は、現在の CPU 数を示します。vRealize Operations Manager が仮想マシンを 6 時間以上監視していた場合、環境によっては、表示される値が、推奨 CPU サイズのメトリックになります。</p>
現在の CPU	現在構成済み CPU 数。
新規 (MB)	<p>アクションが完了した時の、MB 単位のメモリの量。値は 4 以上の 4 の倍数である必要があります。値が 4 より小さいか 4 の倍数ではなく、仮想マシンがパワーオン状態で、ホット アドが有効でない場合、メモリ量は変更されず、[最近のタスク] にアクションが失敗したことが表示されます。サポートされていない値を送信したときに仮想マシンがパワーオフ状態の場合、タスクでは成功と報告されますが、パワーオン アクションを実行すると仮想マシンでエラーが発生します。</p> <p>表示される値は、計算された推奨サイズです。対象の仮想マシンが新しいかオフラインの場合、この値は、現在構成されているメモリを示します。vRealize Operations Manager が仮想マシンを 6 時間以上監視していた場合、環境によっては、表示される値が、推奨メモリ サイズのメトリックになります。</p>
現在 (MB)	現在仮想マシンに設定されているメモリ容量 (メガバイト)。
パワー状態	仮想マシンがパワーオンされているか、パワーオフされているかを示します。
パワーオフ可	<p>選択されている場合は、値の変更前に、アクションによって仮想マシンがシャットダウンまたはパワーオフされます。VMware Tools がインストールされ実行されていると、仮想マシンはシャットダウンされます。VMware Tools がインストールされていないか実行されていない場合は、オペレーティング システムの状態にかかわらず、仮想マシンはパワーオフされます。</p> <p>アクションによって仮想マシンがシャットダウンされるかパワーオフされるかのほかに、オブジェクトがパワーオン状態であるかどうかと、適用される設定を検討する必要があります。</p> <p>パワーオフ可を使用するアクションのアクションを参照してください。</p>
スナップショット	<p>このオプションを選択すると、アクションによって、CPU 数とメモリが変更される前に、仮想マシンのスナップショットが作成されます。</p> <p>アクションにより期待した結果が得られなかった場合に、仮想マシンを戻すスナップショットが必要になったときにこのオプションを使用します。</p>
ホスト	仮想マシンが実行されているホストの名前。
アダプタ	vRealize Operations Manager で構成されている VMware アダプタの名前。このアダプタは、vCenter Server インスタンスとの通信を管理します。

[OK] をクリックすると、次のダイアログ ボックスで、タスク ID と、タスク リストへのリンクが提供されます。

表 5-57. [タスク ID] ダイアログ ボックス

オプション	説明
最近のタスク	ジョブのステータスを表示し、ジョブが終了したことを確認するには、[最近のタスク] をクリックします。
OK	追加のアクションを実行せずにダイアログ ボックスを閉じるには、[OK] をクリックします。

[仮想マシンの使用されていないスナップショットの削除] アクション

vRealize Operations Manager の [仮想マシンの使用されていないスナップショットの削除] アクションは、保持期間が指定した日数を超えているスナップショットをデータストアから削除します。未使用スナップショットを削除すると、環境内の無駄な領域が解放されます。

アクションの動作

[仮想マシンの使用されていないスナップショットの削除] アクションは、2 つのダイアログ ボックスから構成されます。1 つ目のダイアログ ボックスでは、スナップショットの保持期間に関する条件を選択します。これは、1 日を超えている必要があります。2 つ目の手順では、削除するスナップショットを選択し、[仮想マシンの使用されていないスナップショットの削除] アクションを実行します。

各仮想マシンに指定する日数は、作成日を起点とするスナップショットの経過日数です。[仮想マシンの使用されていないスナップショットの削除] アクションでは、スナップショットが取得され、その名前、使用容量、場所に関する詳細が表示されるため、削除する前にスナップショットを評価できます。

[アクションの開始] をクリックすると、アクションが開始されたことを示すダイアログ ボックスが vRealize Operations Manager に表示されます。アクションのステータスを追跡するには、ダイアログ ボックスに表示されているリンクをクリックし、[管理] - [最近のタスク] でアクションの状態を確認します。

このアクションを実行する場所

サポートされるオブジェクトおよびオブジェクト レベルに対し、このアクションは vRealize Operations Manager の次の場所で使用可能です。

- 一番上のツールバーの [アクション] メニューで、[ホーム] をクリックする。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[詳細] タブをクリックし、[ビュー] をクリックして、タイプ リストのビューを選択する。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[環境] タブをクリックして、リスト ビューのオブジェクトを選択する。
- インベントリ エクスプローラ リストの [管理] をクリックし、[インベントリ エクスプローラ] をクリックして、[リスト] タブをクリックし、リストのオブジェクトを選択する。
- 構成済みのアラートの推奨から。
- ダッシュボード ウィジェットのオブジェクト リストおよびトポロジ グラフから。

アクションのオプション

仮想マシンに関する次の情報を確認して、正しいオブジェクトに対してアクションを実行していることを確認してください。

まず古さに基づいてスナップショットを取得してから、削除するスナップショットを選択します。

表 5-58. スナップショットの取得

オプション	説明
名前	[仮想マシンの使用されていないスナップショットの削除] アクションを実行している仮想マシンの名前です。
日前	削除するスナップショットの保持期間。作成時点から 1 日以上経過している仮想マシンのスナップショットが取得されます。

表 5-58. スナップショットの取得（続き）

オプション	説明
ホスト	仮想マシンが関連付けられているホストの名前。
親 vCenter	vRealize Operations Manager で構成されている VMware アダプタの名前。このアダプタは、vCenter Server インスタンスとの通信を管理します。

削除するスナップショットを選択します。

表 5-59. スナップショットの削除

オプション	説明
選択したオブジェクト	チェック ボックスは、アクションがオブジェクトに適用されるかどうかを示します。1 つ以上のオブジェクトに対してアクションを実行しない場合は、関連するチェック ボックスをオフにします。このオプションは、2 つ以上のオブジェクトが選択されている場合に利用可能になります。
仮想マシン名	スナップショットの作成された仮想マシンの名前です。
スナップショット名	データストアのスナップショットの名前です。
スナップショット領域 (MB)	スナップショットによって使用されているバイト数です。
スナップショット作成時刻	スナップショットが作成された日時です。
スナップショットの保持期間	スナップショットの保持期間 (日数) です。
データセンター名	データストアの関連付けられたデータセンターの名前です。
データストア名	スナップショットの管理されているデータストアの名前です。
ホスト名	データストアの関連付けられたホストの名前です。

[OK] をクリックすると、次のダイアログ ボックスで、タスク ID と、タスク リストへのリンクが提供されます。

表 5-60. [タスク ID] ダイアログ ボックス

オプション	説明
最近のタスク	ジョブのステータスを表示し、ジョブが終了したことを確認するには、[最近のタスク] をクリックします。
OK	追加のアクションを実行せずにダイアログ ボックスを閉じるには、[OK] をクリックします。

未使用スナップショットの削除アクションにより、スナップショットの取得アクション用のジョブと、スナップショットの削除アクション用のジョブが作成されます。

データストアの使用されていないスナップショットの削除アクション

vRealize Operations Manager のデータストアの未使用のスナップショットの削除アクションでは、作成後の経過日数が指定した日数を超えているスナップショットをデータストアから削除します。未使用スナップショットを削除すると、環境内の無駄な領域が解放されます。

アクションの動作

[データストアの使用されていないスナップショットの削除] アクションは、2 つのダイアログ ボックスから構成されます。1 つ目のダイアログ ボックスでは、スナップショットの保持期間に関する条件を選択します。これは、1 日を超えている必要があります。2 つ目の手順では、削除するスナップショットを選択し、[データストアの使用されていないスナップショットの削除] アクションを実行します。

各データストアに指定する日数は、作成日に基づいたスナップショットの古さです。[使用されていないスナップショットの削除] ダイアログ ボックスでは、スナップショット名、使用領域、場所に関する詳細が提供され、削除する前にスナップショットを評価することができます。

[アクションの開始] をクリックすると、アクションが開始されたことを示すダイアログ ボックスが vRealize Operations Manager に表示されます。アクションのステータスを追跡するには、ダイアログ ボックスに表示されているリンクをクリックし、[管理] - [最近のタスク] でアクションの状態を確認します。

このアクションを実行する場所

サポートされるオブジェクトおよびオブジェクト レベルに対し、このアクションは vRealize Operations Manager の次の場所で使用可能です。

- 一番上のツールバーの [アクション] メニューで、[ホーム] をクリックする。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[詳細] タブをクリックし、[ビュー] をクリックして、タイプ リストのビューを選択する。
- ツールバーの [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[環境] タブをクリックして、リスト ビューのオブジェクトを選択する。
- インベントリ エクスプローラ リストの [管理] をクリックし、[インベントリ エクスプローラ] をクリックして、[リスト] タブをクリックし、リストのオブジェクトを選択する。
- 構成済みのアラートの推奨から。
- ダッシュボード ウィジェットのオブジェクト リストおよびトポロジ グラフから。

アクションのオプション

データストアに関する次の情報を確認して、正しいオブジェクトに対してアクションを実行していることを確認してください。

まず古さに基づいてスナップショットを取得してから、削除するスナップショットを選択します。

表 5-61. スナップショットの取得

オプション	説明
名前	スナップショットの削除アクションを実行しているデータストアの名前です。
日前	削除するスナップショットの保持期間。作成時点から 1 日以上経過しているデータストアのスナップショットが取得されます。
ホスト	データストアの関連付けられたホストの名前です。
親 vCenter	vRealize Operations Manager で構成されている VMware アダプタの名前。このアダプタは、vCenter Server インスタンスとの通信を管理します。

削除するスナップショットを選択します。

表 5-62. スナップショットの削除

オプション	説明
選択したオブジェクト	チェック ボックスは、アクションがオブジェクトに適用されるかどうかを示します。1 つ以上のオブジェクトに対してアクションを実行しない場合は、関連するチェック ボックスをオフにします。このオプションは、2 つ以上のオブジェクトが選択されている場合に利用可能になります。
データストア名	スナップショットの管理されているデータストアの名前です。
スナップショット名	データストアのスナップショットの名前です。
スナップショット領域 (MB)	スナップショットによって使用されているバイト数です。
スナップショット作成時刻	スナップショットが作成された日時です。
スナップショットの保持期間	スナップショットの保持期間 (日数) です。
データセンター名	データストアの関連付けられたデータセンターの名前です。
ホスト名	データストアの関連付けられたホストの名前です。
仮想マシン名	スナップショットの作成された仮想マシンの名前です。

[OK] をクリックすると、次のダイアログ ボックスで、タスク ID と、タスク リストへのリンクが提供されます。

表 5-63. [タスク ID] ダイアログ ボックス

オプション	説明
最近のタスク	ジョブのステータスを表示し、ジョブが終了したことを確認するには、[最近のタスク] をクリックします。
OK	追加のアクションを実行せずにダイアログ ボックスを閉じるには、[OK] をクリックします。

未使用スナップショットの削除アクションにより、スナップショットの取得アクション用のジョブと、スナップショットの削除アクション用のジョブが作成されます。

vRealize Operations Manager でのトラブルシューティング アクション

データが見つからないか、vRealize Operations Manager からアクションを実行できない場合は、トラブルシューティング オプションを確認します。

vCenter アダプタが、正しい vCenter Server インスタンスに接続するように構成済みであること、およびアクションを実行するように構成済みであることを確認する。 [vRealize Operations Manager での vCenter アダプタ インスタンスの構成](#) を参照してください。

■ オブジェクトのアクションが表示されない

ホストや仮想マシンなどのオブジェクトが vRealize Automation で管理されていると、オブジェクトにアクションが表示されないことがあります。

■ [アクション] ダイアログ ボックスで見つからない列データがある

[アクション] ダイアログ ボックスで 1 つ以上のオブジェクトのデータが不足しており、そのアクションを実行するかどうかを判断するのが難しい。

■ 仮想マシンのメモリ設定ダイアログ ボックスで見つからない列データがある

読み取り専用のデータ列に現在値が表示されないため、新規のメモリ値を正しく指定するのが難しくなります。

■ [アクション] ダイアログ ボックスにホスト名が表示されない

仮想マシンでアクションを実行するときに、[アクション] ダイアログ ボックスでホスト名が空白になる。

オブジェクトのアクションが表示されない

ホストや仮想マシンなどのオブジェクトが vRealize Automation で管理されていると、オブジェクトにアクションが表示されないことがあります。

問題

データセンターのアクションを表示したときに、コンテナのリバランスなどのアクションがドロップダウン メニューに表示されない場合があります。

- データセンターが vRealize Automation で管理されている場合、アクションは表示されません。
- データセンターが vRealize Automation で管理されていなければ、vRealize Automation の管理対象でない仮想マシンにアクションを実行できます。

原因

vRealize Automation でデータセンターやカスタム データセンター コンテナの子オブジェクトを管理している場合は、アクション フレームワークにより vRealize Automation の管理対象オブジェクトへのアクションが除外されるので、これらオブジェクトで通常使用できるアクションは表示されません。vRealize Automation で管理されるオブジェクトに対するアクションの除外をオン/オフにすることはできません。これは通常の動作です。

vRealize Automation アダプタ インスタンスを削除した場合に、[関連するオブジェクトを削除します] のチェック ボックスを選択しないと、アクションは無効のままとなります。

データセンターやカスタム データセンターのオブジェクトにアクションを実行できるようにするには、vRealize Automation でオブジェクトを管理していないことを確認するか、この手順のステップを行って vRealize Automation アダプタ インスタンスを削除します。

解決方法

- 1 オブジェクトにアクションを実行できるようにするため、vRealize Automation のインスタンスに移動します。
- 2 vRealize Automation で、仮想マシンを移動するなどの変更をします。

[アクション] ダイアログ ボックスで見つからない列データがある

[アクション] ダイアログ ボックスで 1 つ以上のオブジェクトのデータが不足しており、そのアクションを実行するかどうかを判断するのが難しい。

問題

1 つ以上のオブジェクトでアクションを実行するときに、一部のフィールドが空になる。

原因

VMware vSphere アダプタが、オブジェクトを管理する vCenter Server インスタンスからデータを収集していないか、現在の vRealize Operations Manager ユーザーに収集されたそのオブジェクトのデータを表示する権限がありません。

解決方法

- 1 データを収集するように vRealize Operations Manager が構成されていることを確認します。
- 2 データを表示するために必要な権限がユーザーに付与されていることを確認します。

仮想マシンのメモリ設定ダイアログ ボックスに見つからない列データがある

読み取り専用のデータ列に現在値が表示されないため、新規のメモリ値を正しく指定するのが難しくなります。

問題

[現在 (MB)] 列と [電源状態] 列に、管理対象オブジェクトについて収集された現在値が表示されない。

原因

ターゲット仮想マシンが実行されている vCenter Server からデータを収集するアダプタが収集サイクルを実行しておらず、データが収集されていません。この問題は、最近、ターゲット vCenter Server の VMware アダプタ インスタンスを作成してアクションを開始した場合に発生する可能性があります。VMware vSphere アダプタのデータ収集サイクルは 5 分です。

解決方法

- 1 VMware アダプタ インスタンスを作成した後は、それからさらに 5 分間待機してください。
- 2 [仮想マシン用メモリの設定] アクションを再実行します。

現在のメモリ値と現在の電源状態がダイアログ ボックスに表示されます。

[アクション] ダイアログ ボックスにホスト名が表示されない

仮想マシンでアクションを実行するときに、[アクション] ダイアログ ボックスでホスト名が空白になる。

問題

アクションを実行する仮想マシンを選択して [アクション] ボタンをクリックすると、ダイアログ ボックスは表示されるが [ホスト] 列が空になっている。

原因

現在のユーザー ロールは仮想マシンでアクションを実行できるように構成されていますが、ホストへのアクセスを提供できるユーザー ロールがありません。仮想マシンが表示され、それらの仮想マシン上でアクションを実行できますが、それらの仮想マシンのホスト データを表示することはできません。vRealize Operations Manager は、ユーザーにアクセス権限のないデータを取得できません。

解決方法

アクションを実行できますが、ホスト名は [アクション] ダイアログ ボックスに表示されません。

最近のタスクのステータスの監視

[最近のタスク] ステータスは、vRealize Operations Manager から開始されたすべてのタスクを含みます。このタスク ステータス情報は、タスクが正常に完了しているかを確認したり、タスクの現在の状態を判断したりする目的で使用します。

アクションを実行するときに開始されるタスクのステータスを監視し、タスクが正常に終了したかどうかを調べることができます。

前提条件

アラート対応の推奨事項の一環として示されるアクション、またはツールバー上のアクションを 1 つ以上実行します。 [vRealize Operations Manager のツールバーからのアクションの実行](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。
- 2 [最近のタスク] をクリックします。
- 3 終了していないタスクが存在しないかを確認するため、[ステータス] 列をクリックし、結果をソートします。

オプション	説明
処理中	実行中のタスクを示します。
完了	完了したタスクを示します。
失敗	複数のオブジェクトに対してタスクを開始した場合に 1 つ以上のオブジェクトに関してタスクが完了していないことを示します。
最長時間に到達しました	タイムアウトしたタスクを示します。

- 4 タスク プロセスを評価するには、リストでタスクを選択し、[選択したタスクの詳細] ペインで情報を確認します。

詳細は [メッセージ] ペインに表示されます。 情報メッセージに **アクションが実行されていません** が含まれる場合、オブジェクトがすでに要求された状態であったためにタスクが終了したことを示します。

- 5 タスクにいくつかのオブジェクトが含まれる場合にオブジェクトのメッセージを表示するには、[関連オブジェクト] リストでオブジェクトを選択します。

オブジェクトの設定をクリアしてすべてのメッセージを表示できるようにするには、スペース バーを押します。

次のステップ

タスクが正常に実行されなかった原因を調べるには、ステータスが **最長時間に到達しました** または **失敗** のタスクのトラブルシューティングを行います。 [失敗したタスクのトラブルシューティング](#) を参照してください。

vRealize Operations Manager での最近のタスク

[最近のタスク] リストには、vRealize Operations Manager から最近開始されたタスクのステータスが表示されます。タスクが終了したか、まだ進行中であるか、失敗したかを判断できます。

[最近のタスク] の機能

[最近のタスク] ページには、ログに記録されているタスク イベントが報告されます。メッセージ領域に表示されるログ エントリを使用し、失敗したタスクのトラブルシューティングを行うことができます。

最近のタスクを確認できる場所

タスクを確認するには、[管理] をクリックし、[最近のタスク] をクリックします。

[最近のタスク] オプション

タスク リストの情報を確認し、タスクが完了したか、それとも失敗したタスクのトラブルシューティングを行う必要があるかを判断します。タスクについての詳細を確認するには、リスト内のタスクを選択し、関連するオブジェクトとタスク メッセージを確認します。

表 5-64. タスク リスト

オプション	説明
エクスポート	<p>選択したタスクを XML ファイルにエクスポートします。</p> <p>エクスポートされる情報にはメッセージが含まれており、問題のトラブルシューティングを行う場合に役立ちます。</p>
プロパティの編集	<p>最近のタスクのデータをシステム内で保持する期間の長さを決定します。</p> <p>vRealize Operations Manager でデータを保持する日数を設定します。その日数が経過すると、データはシステムから消去されます。デフォルト値は 90 日です。</p>
[ステータス] ドロップダウン メニュー	ステータス値に基づいてリストをフィルタリングします。
すべてのフィルタ	選択した列と指定した値に基づいてリストをフィルタリングします。
フィルタ (オブジェクト名)	<p>リスト内のタスクを、入力した文字列と一致するものに限定します。</p> <p>検索は部分一致で実行されます。たとえば、vm と入力すると、vm001 や acctvm_east などのオブジェクトが含まれます。</p>
タスク	<p>タスクの名前。</p> <p>たとえば、「仮想マシン用 CPU 数の設定」。</p>
ステータス	<p>タスクの現在の状態。</p> <p>状態を示す値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 完了しました。ターゲット オブジェクトに対してタスクが正常に完了しました。 ■ 処理中。ターゲット オブジェクトに対してタスクが実行されています。 ■ 失敗しました。ターゲット オブジェクトに対するタスクの実行が失敗しました。タスクが開始された場合は、障害の原因として、スクリプトに誤りがある、スクリプトがタイムアウトした、アクションが行われていない、などが考えられます。タスクが開始せず、直ちに失敗と報告される場合は、その理由として、タスクを開始できなかった、スクリプトを見つけることができなかった、などが考えられます。タスクがターゲット オブジェクト上で開始されなかった場合は、障害の原因として通信や認証のエラーが考えられます。 ■ 最長時間に到達しました。デフォルトの時間または構成した時間を過ぎてタスクが実行されています。現在のステータスを判断するには、開始されたアクションのトラブルシューティングを行う必要があります。 ■ 未ディスパッチ。アクション アダプタが見つかりませんでした。 ■ 開始しました。タスクがオブジェクトで開始されています。 ■ 不明。アクションの実行中にエラーが発生しましたが、そのエラーはタスク ログに取り込まれませんでした。このステータスをさらに調査するには、[管理] 領域に置かれている vRealize Operations Manager のサポート ログで vCenter アダプタが存在するかどうかを確認し、ターゲット システムを調べてください。
開始時刻	タスクが開始された日時。

表 5-64. タスク リスト （続き）

オプション	説明
完了時刻	<p>タスクが完了した日時。</p> <p>タスクが失敗したか、最大タイムアウトに達している場合、完了日は表示されません。</p>
自動	タスク リストのアクションが自動化されているかどうかを、はいまたはいいえ で示します。
オブジェクト名	タスクが開始されたオブジェクト。
オブジェクト タイプ	タスクが開始されたオブジェクトのタイプ。
アラート	<p>アクションを自動的にトリガするアラート。推奨事項に関連付けられているアラートがトリガされると、ユーザーによる操作なしにアクションがトリガされます。</p> <p>関連アクションのあるアラート推奨事項は自動化できます。自動化はデフォルトでは無効になっています。自動化は、ポリシーを [管理 > ポリシー] で作成または編集する際に、ポリシーの [アラート/シムptom定義のオーバーライド] 領域で構成します。</p> <p>[自動化] ロールを持つ管理者には、ポリシー ワークスペースの [アラート/シムptom定義のオーバーライド] 領域でアクションを自動化する権限があります。</p>
ソース タイプ	タスクを開始したユーザーが vRealize Operations Manager へのアクセス時に使用した認証ソース。
送信者	タスクを開始したユーザーの名前。この列には、アラートによってトリガされる自動アクション用の automationAdmin ユーザー アカウントが表示されます。
タスク ID	<p>1 つまたは複数のアクションが含まれるタスクが開始されたときに生成された ID。</p> <p>タスク ID は、各アダプタのタスクに一意のものとなります。1 つのタスクに、2 つのアダプタを使用して実行された複数のタスクが含まれる場合、2 つのタスク ID が表示されます。</p> <p>タスクがスナップショットの削除アクションの場合は、タスク ID が 2 つ生成されます。一方の ID は日付タスクに基づくスナップショットの取得用、もう一方は選択したスナップショットの削除タスク用です。</p>

関連オブジェクトは、選択したタスクが実行されたオブジェクトです。

表 5-65. 選択されたタスクに関連付けられたオブジェクトの詳細

オプション	説明
オブジェクト名	<p>タスク リストで選択されているタスクに含まれているオブジェクトの詳細リスト。</p> <p>タスクが 1 つのオブジェクトのみに実行された場合、このリストには 1 つのオブジェクトが含まれます。タスクが複数のオブジェクトに対して実行された場合、各オブジェクトが個別の行に示されます。</p>
オブジェクト タイプ	各オブジェクト名のオブジェクトのタイプ。
ステータス	タスクの現在の状態。

メッセージは、タスクが実行されたときのタスクのログです。タスクが正常に終了しない場合、ログを使用して問題を特定します。

表 5-66. 選択されたタスクのメッセージの詳細

[重要度] ドロップダウン メニュー	重要度値に基づいてメッセージを制限します。
フィルタ (メッセージ)	リスト内のメッセージを、入力した文字列と一致するものに限定します。 検索は部分一致で実行されます。たとえば、 id と入力すると、 Task ID や did not complete という語句を含むメッセージが含まれます。
重大度	ログにおけるメッセージ レベル。 重要度を示す値には次のものが含まれます。 ■ 情報。タスクが処理されるときにログに追加されるメッセージ。 ■ エラー。タスクが失敗するときに生成されるメッセージ。
時刻	ログに追加されたエントリの日時。
メッセージ	ログ エントリのテキスト。 メッセージに含まれる情報に基づいて、タスクが失敗した原因を判断し、障害のトラブルシューティングと解決を開始します。 列を並べ替えてない場合、メッセージはリストの上から最新エントリの順に表示されます。

失敗したタスクのトラブルシューティング

vRealize Operations Manager でタスクの実行が失敗した場合、[最近のタスク] ページを確認し、タスクをトラブルシューティングして失敗した原因を判断します。

この情報は、[最近のタスク] の情報を使用してタスクで特定された問題のトラブルシューティングを行うための一般的な手順です。

■ 最近のタスクが失敗したかどうかの判断

[最近のタスク] には、vRealize Operations Manager から開始されたアクション タスクのステータスが表示されます。期待した結果が表示されない場合は、そのタスクを調べ、失敗したかどうか確認してください。

■ タスク ステータス [最長時間に到達しました] のトラブルシューティング

アクション タスクのステータスが 最長時間に到達しました になっていますが、タスクの現在の状態が不明です。

■ 失敗した CPU 設定タスクまたはメモリ設定タスクのトラブルシューティング

パワー オフが許可されていないため、[最近のタスク] リストで、仮想マシン用 CPU 数およびメモリ設定のアクション タスクが失敗ステータスになります。

■ パワーオフ可状態での CPU 数の設定またはメモリの設定のトラブルシューティング

CPU 数の設定、メモリの設定、または CPU 数およびメモリの設定アクションで、アクションに失敗したことが [最近のタスク] に表示されます。

■ 値がサポートされていない場合の CPU 数およびメモリ設定のトラブルシューティング

サポートされていない値を使用して仮想マシンで CPU 数設定アクションまたはメモリ設定アクションを実行すると、仮想マシンが使用できない状態のままとなり、vCenter Server で問題を解決する必要があることがあります。

- **値がサポートされていない場合の CPU リソースの設定またはメモリ リソースの設定のトラブルシューティング**
仮想マシンでサポートされていない値を使用して [CPU リソースの設定] アクションを実行すると、そのタスクに失敗し、[最近のタスク] のメッセージにエラーが表示されます。
- **値が高すぎる場合の CPU リソースの設定またはメモリ リソースの設定のトラブルシューティング**
vCenter Server インスタンスでサポートされる値より大きい値を使用して [CPU リソースの設定] または [メモリ リソースの設定] アクションを実行すると、そのタスクに失敗し、[最近のタスク] のメッセージにエラーが表示されます。
- **値を 1024 で割り切れない場合のメモリ リソースの設定のトラブルシューティング**
キロバイトからメガバイトに変換できない値を使用して [メモリ リソースの設定] アクションを実行すると、そのタスクに失敗し、[最近のタスク] のメッセージにエラーが表示されます。
- **仮想マシンのシャットダウン アクションの失敗ステータスのトラブルシューティング**
[最近のタスク] リストで、[仮想マシンのシャットダウン] アクション タスクのステータスが **失敗** と表示されます。
- **仮想マシンのシャットダウン アクションのために実行されていない VMware Tools のトラブルシューティング**
[最近のタスク] リストで [仮想マシンのシャットダウン] アクション タスクが失敗ステータスになり、[メッセージ] に VMware Tools が必要であると示されます。
- **未使用スナップショットの削除アクションの失敗ステータスのトラブルシューティング**
[最近のタスク] リストで、[使用されていないスナップショットの削除] アクション タスクのステータスが **失敗** と表示されます。

最近のタスクが失敗したかどうかの判断

[最近のタスク] には、vRealize Operations Manager から開始されたアクション タスクのステータスが表示されます。期待した結果が表示されない場合は、そのタスクを調べ、失敗したかどうか確認してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。
- 2 [最近のタスク] をクリックします。
- 3 タスク リストで失敗したタスクを選択します。
- 4 [メッセージ] リストから、Script Return Result: Failure を見つけて、このメッセージと <-- Executing:[script name] on {object type} の間にある情報を確認します。

Script Return Result は、アクション実行の終了で、<-- Executing は、開始を示します。表示される情報には、渡されるパラメータ、ターゲット オブジェクトおよび予期せぬ例外が含まれており、問題の識別に使用できます。

タスク ステータス [最長時間に到達しました] のトラブルシューティング

アクション タスクのステータスが **最長時間に到達しました** になっていますが、タスクの現在の状態が不明です。

問題

[最近のタスク] リストに、タスクが **最長時間に到達しました** ステータスになったことが示されている。

タスクの実行時間がデフォルト値または構成値を超えている。現在のステータスを判断するには、開始されたアクションのトラブルシューティングを行う必要があります。

原因

タスクの実行時間が、次のいずれかの理由でデフォルト値または構成値を超えている。

- アクションの実行時間が例外的に長く、しきい値タイムアウトに到達する前にアクションが完了しなかった。
- アクション アダプタが、タイムアウトに到達する前にターゲット システムから応答を受信しなかった。アクションは正常に終了したようだが、vRealize Operations Manager に完了ステータスが返されなかった。
- アクションが正しく開始されなかった。
- アクション アダプタでエラーが発生したため、ステータスを報告できない。

解決方法

ターゲット オブジェクトの状態をチェックして、アクションが正常に完了したかどうかを確認します。正常に完了していなかった場合は、根本原因の調査を続けます。

失敗した CPU 設定タスクまたはメモリ設定タスクのトラブルシューティング

パワー オフが許可されていないため、[最近のタスク] リストで、仮想マシン用 CPU 数およびメモリ設定のアクション タスクが失敗ステータスになります。

問題

[最近のタスク] リストで、CPU 数の設定、メモリの設定、CPU 数およびメモリの設定タスクが失敗ステータスになります。選択したタスクの [メッセージ] リストを調べると、次のメッセージがあります。

```
Unable to perform action. Virtual Machine found powered on, power off not allowed
```

メモリまたは CPU 数を増加すると、次のメッセージが表示されます。

```
Virtual Machine found powered on, power off not allowed, if hot add is enabled the hotPlugLimit is exceeded
```

原因

[パワーオフ可] オプションを選択せずに、CPU またはメモリの値を増やすまたは減らすアクションを送信しました。ターゲット オブジェクトが現在パワーオンされており、vCenter Server でターゲット オブジェクトの [メモリ ホット プラグ] が有効になっていないアクションを実行した場合は、そのアクションに失敗します。

解決方法

- 1 vCenter Server でターゲット仮想マシンの [メモリ ホット プラグ] を有効にするか、CPU 数の設定、メモリの設定、CPU 数およびメモリの設定アクションを実行するときに [パワー オフ可] を選択してください。
- 2 vCenter Server で、ホット プラグの制限を確認してください。

パワーオフ可状態での CPU 数の設定またはメモリの設定のトラブルシューティング

CPU 数の設定、メモリの設定、または CPU 数およびメモリの設定アクションで、アクションに失敗したことが [最近のタスク] に表示されます。

問題

CPU 数またはメモリ、またはその両方を変更するアクションを実行する場合、[パワー オフ可] が選択されており、仮想マシンが稼働中で、VMware Tools がインストールされ実行中であっても、アクションは失敗します。

原因

仮想マシンでは、ゲスト OS が仮想マシンをパワーオフして要求された変更を行う前に、そのゲスト OS をシャットダウンする必要があります。シャットダウン プロセスは、ターゲット仮想マシンからの応答を 120 秒待ち、仮想マシンに対する変更を実行することなく失敗します。

解決方法

- 1 vCenter Server のターゲット仮想マシンを確認し、アクションの実行を遅らせるようなジョブが仮想マシンで実行されていないか判断します。
- 2 vRealize Operations Manager からアクションを再試行します。

値がサポートされていない場合の CPU 数およびメモリ設定のトラブルシューティング

サポートされていない値を使用して仮想マシンで CPU 数設定アクションまたはメモリ設定アクションを実行すると、仮想マシンが使用できない状態のままとなり、vCenter Server で問題を解決する必要があることがあります。

問題

CPU 数設定アクションまたはメモリ設定アクションを正常に実行した後に、仮想マシンをパワーオンできない。失敗した仮想マシンのパワーオン アクションについて [最近のタスク] でメッセージを確認すると、ホストが新しい CPU 数または新しいメモリ値をサポートしていないというメッセージが表示される。

原因

vCenter Server が CPU とメモリの値に対する変更の検証のしかたの特性から、仮想マシンがパワーオフされた状態でアクションを実行する場合、vRealize Operations Manager のアクションを使用して、サポートされていない容量に値を変更することができます。

オブジェクトがパワーオンされていた場合は、タスクは失敗しますが、任意の値の変更がロールバックされ、マシンが再びパワーオンされます。オブジェクトがパワーオフされていた場合は、タスクは成功し、vCenter Server で値が変更されますが、ターゲットのオブジェクトは、CPU またはメモリをサポートされている値に手動で変更しない限り、アクションを使用してあるいは vCenter Server でパワーオンできない状態のままとなります。

解決方法

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。
- 2 [最近のタスク] をクリックします。
- 3 タスク リストで、失敗した仮想マシンのパワーオン アクションを探し、タスクに関連付けられたメッセージを確認します。

4 タスクが失敗した理由を示すメッセージを検索します。

たとえば、パワーオフ状態の仮想マシンで CPU 数設定アクションを実行して CPU 数を 2 から 4 に増設したが、ホストで 4 個の CPU がサポートされていないとします。この CPU 設定タスクは、[最近のタスク] で正常に完了したと報告されます。しかし、仮想マシンをパワーオンしようとしても、タスクが失敗します。この例では、メッセージは「仮想マシンを稼動するには 4 個の CPU が必要ですが、ホスト ハードウェアには 2 個しかありません」となります。

5 [最近のタスク] リストでオブジェクト名をクリックします。

メインのペインが更新され、選択したオブジェクトのオブジェクト詳細が表示されます。

6 ツールバーで [アクション] メニューをクリックして、[vSphere Client で仮想マシンを開く] をクリックします。

vSphere Web Client が開き、仮想マシンが現在のオブジェクトになります。

7 vSphere Web Client で、[管理] タブをクリックして、[仮想マシンのハードウェア] をクリックします。

8 [編集] をクリックします。

9 [設定の編集] ダイアログ ボックスで、CPU 数またはメモリをサポートされている値に変更して、[OK] をクリックします。

これで、Web Client または vRealize Operations Manager から仮想マシンをパワーオンできるようになります。

値がサポートされていない場合の CPU リソースの設定またはメモリ リソースの設定のトラブルシューティング

仮想マシンでサポートされていない値を使用して [CPU リソースの設定] アクションを実行すると、そのタスクに失敗し、[最近のタスク] のメッセージにエラーが表示されます。

問題

[最近のタスク] リストに、[CPU リソースの設定] または [メモリ リソースの設定] アクションの状態が **失敗** として表示される。選択したタスクの [メッセージ] リストを調べると、次の例のようなメッセージが表示される。

```
RuntimeFault exception, message:[A specified parameter was not correct.
spec.cpuAllocation.reservation]
```

```
RuntimeFault exception, message:[A specified parameter was not correct. spec.cpuAllocation.limits]
```

原因

サポートされていない値を指定して、CPU またはメモリの予約値または限界値を増やすまたは減らすアクションを送信しました。たとえば、-1 以外の負の整数を指定した場合は、値が「制限なし」に設定され、vCenter Server で変更を加えることができなかったため、アクションに失敗しました。

解決方法

- ◆ サポートされている値でアクションを実行してください。

予約でサポートされている値には、0 以上の値が含まれます。制限でサポートされている値には、-1 または 0 以上の値が含まれます。

値が高すぎる場合の CPU リソースの設定またはメモリ リソースの設定のトラブルシューティング

vCenter Server インスタンスでサポートされる値より大きい値を使用して [CPU リソースの設定] または [メモリ リソースの設定] アクションを実行すると、そのタスクに失敗し、[最近のタスク] のメッセージにエラーが表示されます。

問題

[最近のタスク] リストに、[CPU リソースの設定] または [メモリ リソースの設定] アクションの状態が **失敗** として表示される。選択したタスクの [メッセージ] リストを調べると、次の例のようなメッセージが表示される。

[CPU リソースの設定] アクションを実行している場合は、次の例のような情報メッセージが表示される (1000000000 は、指定されている予約値)。

```
Reconfiguring the Virtual Machine Reservation to:[1000000000] Mhz
```

このアクションのエラー メッセージは、この例のようになる。

```
RuntimeFault exception, message:[A specified parameter was not correct. reservation]
```

[メモリ リソースの設定] アクションを実行している場合は、次の例のような情報メッセージが表示される (1000000000 は、指定されている予約値)。

```
Reconfiguring the Virtual Machine Reservation to:[1000000000] (MB)
```

このアクションのエラー メッセージは、この例のようになる。

```
RuntimeFault exception, message:[A specified parameter was not correct.
spec.memoryAllocation.reservation]
```

原因

CPU または メモリの予約値または制限値を、vCenter Server でサポートされている値より大きな値に変更するアクションを送信したか、または送信した予約値が制限値より大きくなっています。

解決方法

- ◆ 低い値を使用してアクションを実行してください。

値を 1024 で割り切れない場合のメモリ リソースの設定のトラブルシューティング

キロバイトからメガバイトに変換できない値を使用して [メモリ リソースの設定] アクションを実行すると、そのタスクに失敗し、[最近のタスク] のメッセージにエラーが表示されます。

問題

[最近のタスク] リストに、[メモリ リソースの設定] アクションの状態が **失敗** として表示される。選択したタスクの [メッセージ] リストを調べると、次の例のようなメッセージが表示される。

```
Parameter validation;[newLimitKB] failed conversion to (MB, (KB)[2000] not evenly divisible by 1024
```

原因

vCenter Server がメガバイト単位で予約と制限の値を管理するのに対し、vRealize Operations Manager はキロバイト単位でメモリを計算して報告するため、メガバイトに直接変換可能なキロバイト単位で値を指定する必要があります。それには、1024 で割り切れる値にする必要があります。

解決方法

- ◆ 予約値と制限値がサポートされる値を使用して構成されているアクションを実行します。

予約でサポートされている値には、1024 で割り切れる 0 以上の値が含まれます。制限でサポートされている値には、-1 や、1024 で割り切れる 0 以上の値が含まれます。

仮想マシンのシャットダウン アクションの失敗ステータスのトラブルシューティング

[最近のタスク] リストで、[仮想マシンのシャットダウン] アクション タスクのステータスが **失敗** と表示されます。

問題

[仮想マシンのシャットダウン] アクションが正常に実行されない。

[最近のタスク] リストで、[仮想マシンのシャットダウン] アクションのタスク ステータスが **失敗** と表示される。選択したジョブの [メッセージ] リストを評価すると、**失敗:シャットダウンの確認がタイムアウトしました** というメッセージが表示される。

原因

シャットダウン プロセスに、ゲスト OS のシャットダウンと仮想マシンのパワーオフが含まれています。ゲスト OS のシャットダウンの待機時間は 120 秒です。ゲスト OS がこの時間内にシャットダウンしない場合、シャットダウン アクションが確認されないためアクションが失敗します。

解決方法

- ◆ vCenter Server のゲスト OS のステータスを確認し、割り当てられた時間内にシャットダウンしなかった理由を調べます。

仮想マシンのシャットダウン アクションのために実行されていない VMware Tools のトラブルシューティング

[最近のタスク] リストで [仮想マシンのシャットダウン] アクション タスクが失敗ステータスになり、[メッセージ] に VMware Tools が必要であると示されます。

問題

[仮想マシンのシャットダウン] アクションが正常に実行されませんでした。

[最近のタスク] リストで、[仮想マシンのシャットダウン] アクションのタスクが失敗ステータスになります。選択したジョブの [メッセージ] リストを調べると、VMware Tools:実行していません(インストールされていません) というメッセージがあります。

原因

[仮想マシンのシャットダウン] アクションでは、VMware Tools がインストール済みであり、ターゲット仮想マシンで実行されている必要があります。複数のオブジェクトでアクションを実行した場合は、少なくとも 1 つの仮想マシンで、VMware Tools がインストールされていないか、インストールされていても実行されていません。

解決方法

- ◆ アクションの実行に失敗した仮想マシンを管理する vCenter Server インスタンスで、影響を受ける仮想マシンに VMware Tools をインストールして起動します。

未使用スナップショットの削除アクションの失敗ステータスのトラブルシューティング

[最近のタスク] リストで、[使用されていないスナップショットの削除] アクション タスクのステータスが 失敗 と表示されます。

問題

[使用されていないスナップショットの削除] アクションの実行に失敗した。

[最近のタスク] リストで、[使用されていないスナップショットの削除] アクションのタスク ステータスが 失敗 と表示される。選択したジョブのメッセージ リストを評価すると、次のメッセージが表示される。

```
Remove snapshot failed, response wait expired after:[120] seconds, unable to confirm removal
```

原因

スナップショット削除プロセスでは、データストアのアクセス待ち時間が発生します。データストアにアクセスしてスナップショットを削除する場合の待ち時間は 600 秒です。この時間内に削除要求がデータストアに渡されないと、スナップショット削除アクションは完了しません。

解決方法

- 1 vCenter Server でスナップショットのステータスをチェックして、スナップショットが削除されたかどうかを確認します。
- 2 削除されていない場合は、時間をずらしてスナップショット削除要求を送信します。

インベントリの表示

vRealize Operations Manager は、環境内のすべてのオブジェクトからデータを収集し、各オブジェクトについての健全性、リスク、および効率のステータスを表示します。

インベントリ全体を調査してオブジェクトの状態を簡単に把握するか、オブジェクト名をクリックして詳細な情報を調べます。[オブジェクト サマリ情報の評価](#) を参照してください。

[環境概要] ペインの [インベントリ] タブ

[インベントリ] タブには、環境内の各オブジェクトの状態が表示されます。オブジェクトは、ユーザーが定義するグループおよびアプリケーションのメンバーです。

インベントリを確認できる場所

左側のペインで [環境] を選択し、[インベントリ] タブを選択します。

ツールバー オプションを使用してオブジェクトを管理します。

表 5-67. インベントリのツールバーのオプション

オプション	説明
操作	選択したオブジェクトに対してアクションを実行します。使用できるアクションは、オブジェクトのタイプによって異なります。たとえば、仮想マシンのパワー オンは、選択した仮想マシンに適用されます。 vRealize Operations Manager アクションのリスト を参照してください。
外部アプリケーションで開く	オブジェクトに関する情報を取得するために別のアプリケーションにリンクする機能がアダプタに含まれている場合は、ボタンをクリックして、そのアプリケーションのリンクにアクセスします。たとえば、[vSphere Client で仮想マシンを開く] や [vRealize Log Insight での VM ログの検索] です。
フィルタ	フィルタと一致するオブジェクトにリストを制限します。

表 5-68. インベントリ データ グリッドのオプション

オプション	説明
オブジェクト名	オブジェクト名を選択すると、そのオブジェクトの概要が表示されます。
概要	オブジェクトの健全性、リスク、および効率の重要度。赤色、オレンジ色、または黄色の重要度のオブジェクトをクリックすると、オブジェクトに関する潜在的な問題についての詳細を取得できます。

vRealize Operations Manager を使用した管理対象環境のキャパシティの計画

6

vRealize Operations Manager のプロジェクト機能を使用して、仮想環境のキャパシティ割り当てやアップグレードを計画したり、既存のリソースを最適化できます。今後のキャパシティ ニーズを計画するには、オブジェクトのキャパシティに影響する来たるべき変更を予測するプロジェクトを作成します。

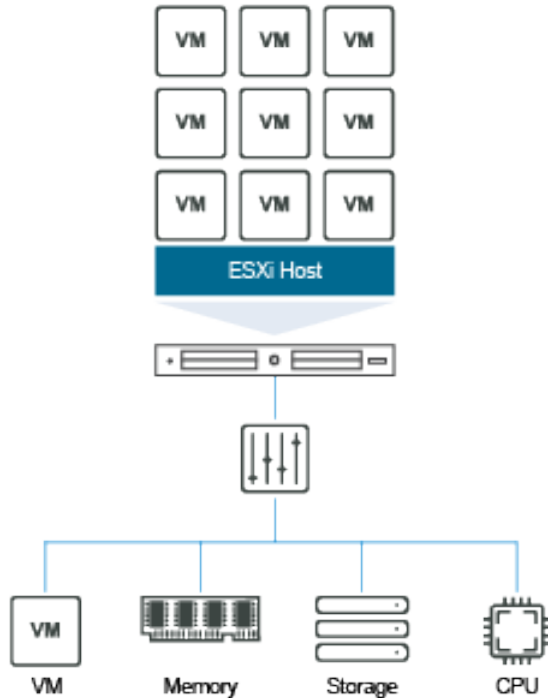
ハードウェアの変更や仮想インフラストラクチャの変更を計画するプロジェクトの作成に加えて、キャパシティのニーズの予測に役立つカスタム プロファイルやカスタム データセンターを作成できます。カスタム プロファイルを使用すると、利用可能なキャパシティや構成に応じた、環境に合うオブジェクトのインスタンスの個数が分かります。カスタム データセンターを使用すると、カスタム データセンターに含まれているオブジェクトに基づいて、キャパシティ分析とバッジ計算を確認できます。

プロジェクトの機能

プロジェクトとは、今後の変更に基づいて環境内で使用可能にする必要があるキャパシティを詳細に見積もるものです。プロジェクトを定義して、vCenter Server インスタンス、クラスタ、データセンター、ホスト、仮想マシン、データストアのようなオブジェクトから、リソースを追加または削除できます。

プロジェクトで、キャパシティの変更を計画し、起こり得る結果を検証します。オブジェクト上のキャパシティのデマンドの増減について、計画を立てることができます。

たとえば、翌月の追加スタッフの雇用を計画する場合は、それらのスタッフが使用するオブジェクトのキャパシティを増やす必要があります。この今後のデマンドを計画するために、プロジェクトを作成できます。プロジェクトでは、データセンターにホストを追加し、ホストにメモリと CPU を追加して、仮想マシンのキャパシティを増加させます。



プロジェクトを作成するときは、将来のニーズを決定するプロジェクトに1つ以上のキャパシティ シナリオを追加します。プロジェクト シナリオは、将来の時刻および日にオブジェクトに影響するキャパシティやデマンドへの変更を予測するものです。各プロジェクトを保存したら、キャパシティ予測のチャートを作成するプロジェクトを可視化ペインにドラッグします。プロジェクト シナリオで定義した値に基づいて予測されたキャパシティ ニーズをチャートで確認できます。視覚的な表示には、計画されたキャパシティ ニーズと、それらのオブジェクトに現在あるリソースとの比較方法が表示されます。

オブジェクトに計画されたキャパシティが必要であることがわかっている場合は、vRealize Operations Manager でそれらのオブジェクト上のキャパシティを予約するプロジェクトをコミットできます。

プロジェクトは、仮想インフラストラクチャ環境内の条件を変えたときに、オブジェクトでキャパシティと負荷がどのように変わるかという仮定です。プロジェクトが表す変更を実装する必要はありません。プロジェクトを作成することで、実際の変更を実装する前にキャパシティ要件を決定できます。

プロジェクト リスト

定義されたプロジェクトは、表示チャートの下のリストに表示されます。vRealize Operations Manager では、ユーザーがインベントリ ツリーで選択したオブジェクトに従って、リストがフィルタリングされます。ツールバーを使用して、プロジェクトを作成、編集、または削除します。リスト内の列でソートするには、列見出しをクリックします。可視化ペインにプロジェクトを追加するには、プラス (+) アイコンをクリックするか、プロジェクトをリストとチャートの間のペインにドラッグします。

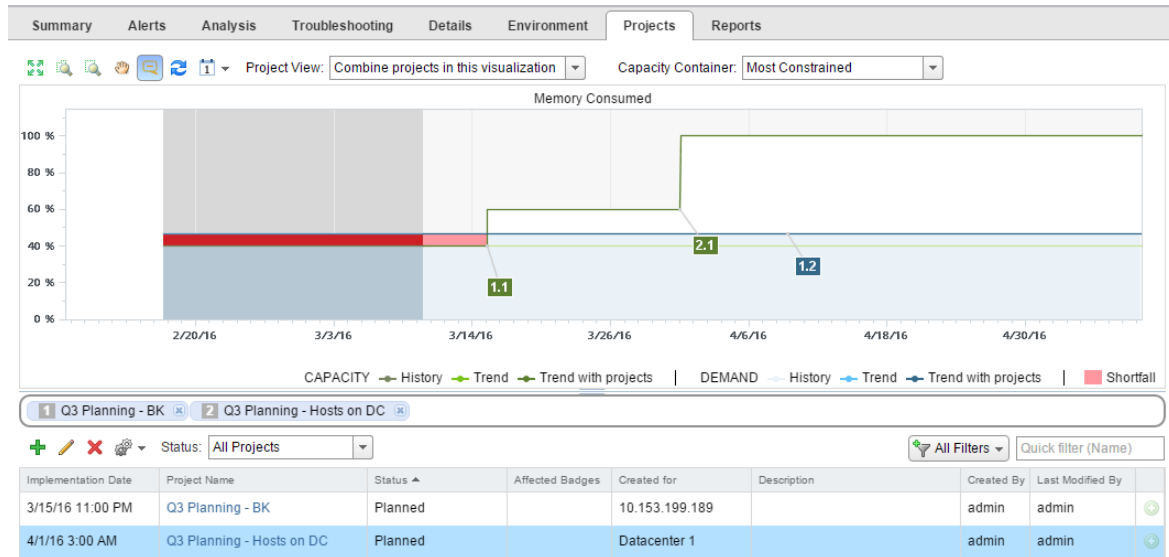
表示チャート

1つ以上のプロジェクトを可視化ペインにドラッグすると、プロジェクトで定義した各シナリオが表示チャートに表示されます。

チャートには、プロジェクトに追加した各シナリオの数値が表示されます。たとえば、ホスト マシンのプロジェクトでは、キャパシティの追加： パーセンテージ という名前のシナリオに 1.1 という番号が付けられ、デマンドの追加： パーセンテージ という名前のシナリオが 1.2 となります。

データセンターに別のホストを用意する計画の場合、キャパシティの追加： ホスト システムを追加 という名前のシナリオを含む 2 つ目のプロジェクトが必要です。2 つ目のプロジェクトのシナリオは、2.1 となります。

両方のプロジェクトを表示すると、チャートには、各シナリオが有効になった時点を示す 1.1、1.2、2.1 が表示されます。



シナリオの詳細を表示するには、ポイントをチャート内の番号に移動します。

プロジェクトとシナリオは、これらの削除やビューの更新を行うまでチャートに表示され続けます。

プロジェクト シナリオでリソースに対する変更がモデリングされる

次のプロジェクト シナリオを使用して、キャパシティを予測できます。

表 6-1. 選択したオブジェクトのプロジェクト シナリオ

選択したオブジェクト	プロジェクト シナリオ
vCenter Server	キャパシティ <ul style="list-style-type: none"> ■ ホスト システム、データストア、キャパシティの割合 (%) を追加または削除します。 ■ キャパシティの絶対値を変更します。
	デマンド <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンまたは需要パーセンテージを追加または削除します。 ■ 需要の絶対値を変更します。
クラスタ	■ ホストを追加、削除、または更新します。
	■ データストアを追加、削除、または更新します。
	■ 仮想マシンを追加または削除します。

表 6-1. 選択したオブジェクトのプロジェクト シナリオ（続き）

選択したオブジェクト	プロジェクト シナリオ
ホスト	キャパシティ <ul style="list-style-type: none"> ■ データストアまたはキャパシティの割合 (%) を追加または削除します。 ■ キャパシティの絶対値を変更します。 デマンド <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンまたは需要パーセンテージを追加または削除します。 ■ 需要の絶対値を変更します。
データストア	キャパシティ <ul style="list-style-type: none"> ■ キャパシティの割合 (%) を追加または削除します。 ■ キャパシティの絶対値を変更します。 デマンド <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンまたは需要パーセンテージを追加または削除します。 ■ 需要の絶対値を変更します。
仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ キャパシティを追加、変更、または削除します。 ■ 需要を追加、変更、または削除します。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [ストレスなしでデマンドに対応して値を得るための正しいサイジング キャパシティ](#)
- [ユーザー シナリオ：ワークロードの増加に対するキャパシティの計画](#)
- [vRealize Operations Manager でのハードウェア プロジェクトの計画](#)
- [仮想マシン プロジェクトとシナリオの計画](#)
- [vRealize Operations Manager の \[プロジェクト\] タブ](#)
- [VMware vRealize Operations Manager のカスタム プロファイル](#)
- [VMware vRealize Operations Manager のカスタム データセンター](#)

ストレスなしでデマンドに対応して値を得るための正しいサイジング キャパシティ

パフォーマンス管理とキャパシティ プランニングは、組織や環境によって異なります。キャパシティのデマンドは環境ごとに異なるので、多くの場合に、優先順位が上位の競合要素で、効率が高いこと、そしてパフォーマンス悪化のリスクが低いことが比較検討されます。キャパシティ ニーズのプランニングと管理を行い、リソースのキャパシティを合理的に計算するために、vRealize Operations Manager は高度なモデルを使用します。

vRealize Operations Manager のキャパシティ計算により、さまざまな高度なモデルを使用して、目標の測定メトリックと、許容可能なパフォーマンス/効率の主観的な目標の間で実用的な相関関係を作成できます。

vRealize Operations Manager では、ストレスは利用できるキャパシティに対してどれだけ大きく長いデマンドが続くかどうかに関連し、vRealize Operations Manager はこの値を使用して、パフォーマンスの問題の可能性を測定します。ストレス スコアが大きくなると、オブジェクトのパフォーマンスが低下する可能性が高くなります。ストレスのポリシー分析設定の構成に応じて、緑のスコアは、0 ～ 24% のストレスを示します。赤のスコアは、50% 以上のストレスを示します。5 分間のデータ収集と合理的なストレス計算で、vRealize Operations Manager は、パフォーマンスが低下している期間を簡単に特定できます。

デマンドはストレスを高めます。vRealize Operations Manager は、過去のデマンドに基づいて、正しいサイジング キャパシティの計算を実行します。正しいサイジングの目的は、緑のストレス バッジで示される、緑のレベルのストレスを生成することです。

使用可能なキャパシティは、利用可能なキャパシティの合計から、管理者またはユーザーが定義したバッファを減算した値です。使用可能なキャパシティの正しいサイジング量を測定するために、キャパシティ計算では「ストレスなしの値」を使用します。デマンド、ストレス、ストレスなしの値を使用して、vRealize Operations Manager は正しいサイズを計算します。

キャパシティ分析は、競合がない状態に基づいてリソースの実効デマンドを決定します。計算では、キャパシティが無限にあり、リソースの競合がなく、その結果利用できるキャパシティにストレスがないことを前提とします。この結果は、ストレスなしのデマンドまたはストレスなしの値と呼ばれています。

ストレスなしのデマンドとストレスなしの値を確認する場所

vRealize Operations Manager では、キャパシティをユーザー インターフェイスの各領域によって「ストレスなしのデマンド」または「ストレスなしの値」として示しています。どちらの用語も、オブジェクトの計算されたキャパシティが、ストレス スコアのポリシーで定義されている競合やストレスが許容不可能なレベルではないことを意味します。

[ストレスなしのデマンド] は、[トラブルシューティング] - [すべてのメトリック]、ビュー、レポートに表示されます。

- [トラブルシューティング] - [すべてのメトリック] では、「ストレスなしのデマンド」メトリックを使用して、オブジェクトの CPU のデマンド、ディスク容量の割り当てとデマンド、使用メモリ、vSphere 構成の制限を検証できます。このメトリックをこれらのリソースに適用すると、メトリック グラフを構築して、オブジェクトのストレスなしのデマンドを表示できます。グラフには、一定期間のストレスなしのキャパシティの高低値が表示されます。
- [コンテンツ] - [表示] では、ビューを追加または編集するときに、ワークスペースの [データ] 領域および [構成] 領域で、「ストレスなしのデマンド」メトリックを使用できます。このメトリックを使用して、CPU デマンド、ディスク容量の割り当てとデマンド、使用メモリ、vSphere 構成制限のビューを構築できます。
- [コンテンツ] - [レポート] では、「ストレスなしのデマンド」メトリックを含むビューを使用してレポートを生成できます。レポートのテーブルには、「ストレスなしのデマンド」がラベルとして表示されます。たとえばこのメトリックは、「クラスタの CPU デマンド (%) トレンド ビュー」レポートに表示されます。

ストレスなしの値は、[オブジェクト] - [分析] - [残り時間] タブと、[オブジェクト] - [分析] - [ストレス] タブに表示されます。

- [オブジェクト] - [分析] - [残り時間] タブでは、CPU デマンド、使用メモリ、ディスク容量のデマンドと割り当ての残り時間と vSphere 構成制限を確認できます。このビューでは、テーブルの列名は「ストレスなしの値」です。

- [オブジェクト] - [分析] - [ストレス] タブでは、テーブルの列名は「ストレスなしの値」です。このテーブルには、ストレスなしの値が CPU デマンド、使用メモリ、vSphere 構成制限の計算値として表示されます。

ストレス スコアのしきい値の設定

オブジェクトに適用するポリシーの分析設定によって、ストレス スコアのしきい値を定義します。ポリシーには、ストレス スコアのデフォルト設定（緑、黄、オレンジ、赤）があります。設定が環境に対して厳しすぎるかまたは緩すぎる場合は、変更できます。

ストレス スコアのしきい値を変更するには、オブジェクトに適用されるポリシーを編集し、[分析設定] をクリックします。オブジェクトのタイプを選択し、フィルタ アイコンをクリックして、ポリシー分析設定を表示します。[ストレス] 領域で、[ストレス] を展開し、ストレスのしきい値を変更します。

ストレス分析の設定では、vRealize Operations Manager はメモリ デマンド、CPU デマンド、vSphere 構成制限などの選択したリソースを使用して、ストレス スコアを計算します。

ストレスしきい値は、独自の値に設定したり、オフにすることができます。ストレス スコアのしきい値を変更するには、アイコンをクリックし、スライダに沿ってドラッグします。オレンジで特定される 35 ~ 49 のデフォルトの範囲などのスコア付けの範囲を削除するには、アイコンをダブルクリックして範囲を無効にします。

監視ポリシーの編集

1. はじめに
2. ベース ポリシーの選択
3. 分析設定

次の変更を表示
データセンター
すべてのオブジェクトタイプ
オーバーライドを持つすべてのオブジェクトタイプ
オブジェクトタイプ
vCenter アダプター - データセンター

オブジェクトの新規セットに対して設定を:

▼ ストレス スコアとは

ストレス スコアのしきい値: 0-100

チェックが付いている項目がストレスの計算に含まれます

リソース	デマンドが以下を超過した場合: ストレスを分析するウィ:
<input checked="" type="checkbox"/> メモリ デマンド	キャパシティの 70... 次の時間内で最も... 60 分間のピーク時
<input checked="" type="checkbox"/> メモリ 消費	キャパシティの 70... 次の時間内で最も... 60 分間のピーク時
<input checked="" type="checkbox"/> CPU デマンド	キャパシティの 70... 次の時間内で最も... 60 分間のピーク時
<input type="checkbox"/> ネットワーク IO データ転送速度	キャパシティの 70... 次の時間内で最も... 60 分間のピーク時
<input type="checkbox"/> ネットワーク IO データ受信速度	キャパシティの 70... 次の時間内で最も... 60 分間のピーク時
<input type="checkbox"/> ネットワーク IO 使用率	キャパシティの 70... 次の時間内で最も... 60 分間のピーク時
<input type="checkbox"/> データストア IO 実行中 IO 要求	キャパシティの 70... 次の時間内で最も... 60 分間のピーク時
<input type="checkbox"/> データストア IO 1 秒あたりの...	キャパシティの 70... 次の時間内で最も... 60 分間のピーク時
<input type="checkbox"/> データストア IO 読み取り速度	キャパシティの 70... 次の時間内で最も... 60 分間のピーク時
<input type="checkbox"/> データストア IO 書き込み速度	キャパシティの 70... 次の時間内で最も... 60 分間のピーク時
<input checked="" type="checkbox"/> vSphere 構成制限	キャパシティの 70... 次の時間内で最も... 60 分間のピーク時

任意の N 時間ピーク

分析期間が短いほど、ストレス スコアがすばやく変化します。推奨される対象:

- 対話式ワークロード: 1 時間ピーク
- サーバ負荷: 4 時間ピーク
- 夜間のバッチ ジョブ: 8 時間ピーク

全範囲

分析期間が長いほど、ストレス スコアの平均値の精度が高くなります。推奨される対象:

- データセンター以上
- 大規模なクラスター

[デマンドが以下を超過した場合] は、キャパシティのパーセンテージです。また、キャパシティは、プロビジョニング済みのキャパシティとも呼ばれます。リソースのストレスしきい値を変更するには、[デマンドが以下を超過した場合] のパーセンテージをダブルクリックし、目的の値を入力します。この値は、vRealize Operations Manager によってデマンドのパーセンテージがストレスであると判断されるポイントを定義します。たとえば、[メモリ デマンド] のストレスのしきい値を変更するには、[キャパシティの 70.0 %] などの現在のパーセンテージをダブルクリックし、超過したら vRealize Operations Manager によってストレスと判断される新しいデマンドのパーセンテージを入力します。

リソースごとに、分析ウィンドウの値をスライドさせて範囲全体が含まれるようにし、vRealize Operations Manager でストレス スコアを獲得する必要に応じて、ピーク値を別の時間に設定できます。

ストレス スコアのさらに詳しい説明

vRealize Operations Manager では、自分のストレス ゾーンとストレス スコアを計算します。次の説明は、デマンドがキャパシティを超えていない場合の典型的なシナリオに対応するものです。

特定の期間のオブジェクトに対するストレスを決定するには、デマンド カーブを調査して、デマンドが占有したストレス ゾーンの量を確認します。通常、デマンドが合計キャパシティの 70% を超えたところにある領域がストレス ゾーンです。たとえば、ストレスは、CPU デマンド、メモリ デマンド、または使用メモリがキャパシティの 70% を超えた場合に発生します。

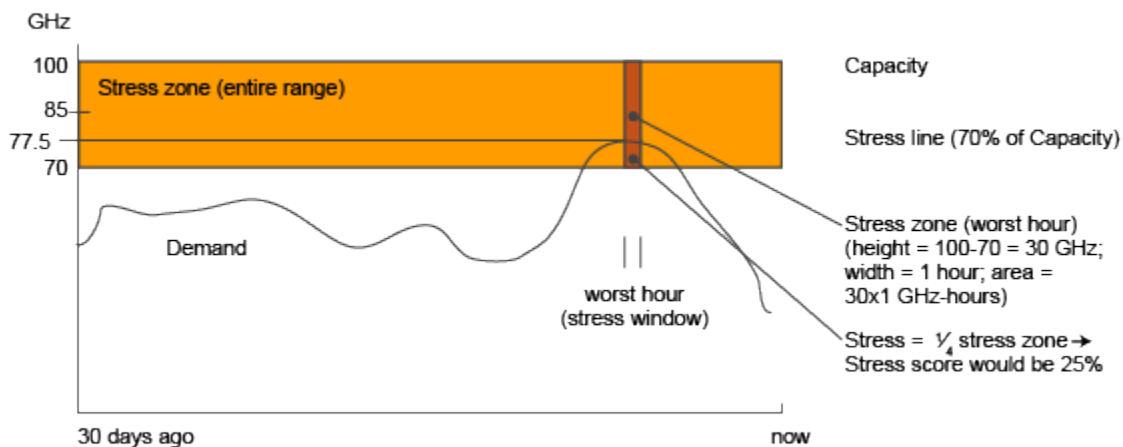
60 分のピーク時間に、vRealize Operations Manager は次の変数に基づいて、ストレス スコアを計算します。

- ストレスのしきい値。デマンドが以下を超過した場合 の設定
- ストレス スコアのしきい値。ストレス バッジの色を決定する
- 30 日間の分析などの期間
- ピーク検出ウィンドウ。ゼロ以外の分数または範囲全体に調整できる 60 分のピーク設定。

デマンドが 70% を超えると、時間内のデータ ポイントがストレス ゾーンになります。

ポリシー ストレス分析設定でストレスの計算に使用するサンプル グラフを確認するには、[ストレスとは] をクリックします。

ここでは、CPU ストレスで使用する計算を説明する別の例が示されます。



ピーク検出ウィンドウ サイズが 60 分で、vRealize Operations Manager は CPU ストレス スコアを計算します。合計のキャパシティ カーブによってカバーされる領域のパーセンテージとして、デマンド カーブの下側、ストレスのしきい値線の上側の領域を使用します。

$t1$ から $t2$ の時刻のスタンプを使用して過去 30 日の 60 分のウィンドウを特定するために、ストレス スコアは一定期間のデマンド、ストレスのしきい値、合計キャパシティを使用します。

最大((デマンド - ストレスのしきい値) ÷ (合計キャパシティ - ストレスのしきい値))

この式は、メモリ デマンド、使用メモリ、CPU デマンドなどの各リソースのストレス計算に適用されます。

キャパシティ合計が対象の期間内に変化する場合、ストレスのしきい値も変化可能であることが必要です。これは、(ストレスのしきい値) = (ストレスのしきい値 %) × (合計キャパシティ) であるためです。

(合計キャパシティ) は、 t によって特定されるため、時間ごとに値が変わる可能性があるため、“ストレスのしきい値” (t) = “ストレスのしきい値 %” × “合計キャパシティ” (t) です。

結果として、ストレス スコアは、過去 30 日の連続した 60 分間隔のキャパシティ集計パーセンテージとして、キャパシティの 70% を超えた最も高いデマンドの集計です。このスコアの数式は次のようになります。

最大((デマンド($t1$, $t2$) - “ストレスのしきい値”($t1$, $t2$)) ÷ (“合計キャパシティ”($t1$, $t2$) - “ストレスのしきい値”($t1$, $t2$)))

ここで、

- $t1$ と $t2$ は、過去 30 日内の連続時間のタイム スタンプです。
- $t1 < t2$
- $t2 - t1 = 60$ 分
- デマンド($t1$, $t2$) は、時間 $t1$ と $t2$ の間のデマンド カーブです。
- “ストレスのしきい値”($t1$, $t2$) は、時間 $t1$ と $t2$ 間のストレスのしきい値カーブ（絶対値）です。
- “キャパシティ合計”($t1$, $t2$) は、時間 $t1$ と $t2$ 間のキャパシティのしきい値カーブです。

vRealize Operations Manager は、過去 30 日間の連続した 60 分間隔の集計を計算します。ストレス スコアは、同じ連続した 60 分間隔のキャパシティの集計パーセンテージです。許容可能なスコアでは、緑のストレス バッジになります。

オブジェクトのストレス ゾーンを表示するには、[オブジェクト] - [分析] - [ストレス] をクリックします。次に、CPU とメモリのストレス内訳領域、テーブルの [ストレス ゾーン] 列、実際のデマンドのグラフを調べます。

ストレス スコアを計算することで、vRealize Operations Manager はオブジェクトの一定期間のキャパシティのピークと変動を評価する合理的な方法を提供します。

ユーザー シナリオ：ワークロードの増加に対するキャパシティの計画

あなたは、財務データセンターのうちの 1 つの IT 管理者です。あなたは、翌月以後のクラスタとデータセンターのワークロードの増加を計画するために、仮想インフラストラクチャのキャパシティ要件を予測する必要があるとします。あなたは、オブジェクト上のキャパシティに対するデマンドと供給を評価し、現在のキャパシティのリスクを予測するために、vRealize Operations Manager でプロジェクトとシナリオを作成します。

データセンターは「Fina_RDDC-01」という名前であり、「Fina_RDCL-01」という名前のクラスタが含まれます。あなたは、このデータセンターのクラスタ上の全体的なワークロードを翌月に 50% 増やすことを計画します。さらに、あなたは、仮想マシンと 1 つ以上のホストをこのクラスタに追加することも計画する必要があるとします。

この例では、将来のキャパシティ ニーズによるクラスタ オブジェクトに対する影響を判断するシナリオを含むプロジェクトを作成します。次に、追加のキャパシティ ニーズを計画する 2 つ目のプロジェクトを作成します。最後に、これらのプロジェクトによる将来のキャパシティ ニーズに対する影響を理解できるように、これらのプロジェクトを現在のキャパシティのコンテキストで検証します。

前提条件

vRealize Operations Manager が過去数週間分のデータを収集していることを確認します。[データ ソースへの vRealize Operations Manager の接続](#) を参照してください。

手順**1 ワークロード キャパシティを増やすサンプル プロジェクトの作成**

あなたは、会社の「Fina_RDDC-01」という名前の財務データセンターの IT 管理者です。あなたは、「Fina_RDCL-01」という名前のクラスタ上のワークロードを翌月に 50% 増やすことを計画するプロジェクトを作成します。プロジェクトでは、キャパシティ ニーズがデータセンター内のホスト、仮想マシン、およびクラスタに与える影響を予測するシナリオを作成します。

2 ホストおよび仮想マシンを追加するサンプル プロジェクトの作成

会社の財務データセンターの IT 管理者である場合を考えます。「Fina_RDDC-01」という名前のデータセンター内の「Fina_RDCL-01」という名前のクラスタのキャパシティ ニーズを計画するために、別のプロジェクトを作成します。プロジェクトで、仮想マシンとホストをクラスタに追加します。

3 キャパシティ プロジェクトの結果の表示

あなたは、「Fina_RDDC-01」という名前のデータセンターを担当する IT 管理者です。あなたは、作成したプロジェクトおよびシナリオがデータセンター内のクラスタの全体的なキャパシティに与える効果を表示します。

ワークロード キャパシティを増やすサンプル プロジェクトの作成

あなたは、会社の「Fina_RDDC-01」という名前の財務データセンターの IT 管理者です。あなたは、「Fina_RDCL-01」という名前のクラスタ上のワークロードを翌月に 50% 増やすことを計画するプロジェクトを作成します。プロジェクトでは、キャパシティ ニーズがデータセンター内のホスト、仮想マシン、およびクラスタに与える影響を予測するシナリオを作成します。

あなたは、新しいプロジェクトとシナリオを使用して、デマンドの増加を計画するときに環境内のオブジェクトのキャパシティに対してどのようなことが発生するかを判断します。

前提条件

- このサンプル ワークフローの範囲を理解します。[ユーザー シナリオ：ワークロードの増加に対するキャパシティの計画](#) を参照してください。
- 「Fina_RDDC-01」という名前のデータセンター内の「Fina_RDCL-01」という名前のクラスタに複数のホストと仮想マシンが含まれることを確認します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager インベントリ ツリーで、「Fina_RDDC-01」という名前のデータセンターを選択します。次に、「Fina_RDCL-01」という名前のクラスタを選択します。
- 2 [プロジェクト] タブをクリックします。
- 3 プロジェクト リスト ペインの上のツールバーで、[追加] をクリックします。

- 4 [プロジェクト] ワークスペースで、プロジェクトの名前と説明を入力します。
たとえば、Fina RDCL Q1 Planning と入力します。
- 5 [ステータス] として、[計画済み - バッジへの影響なし] を選択します。
- 6 ワークスペースで、[シナリオ] をクリックします。
- 7 [デマンドの追加] の下で、[デマンドのパーセンテージの追加] という名前のシナリオを [シナリオ] ペインにドラッグします。
シナリオに 1.1 という番号が付けられます。
- 8 [構成] ペインで、デマンドを構成します。
 - a [実施日] カレンダー アイコンをクリックし、今日から 1 か月後の日付を選択します。
 - b [グローバル値の使用] テキスト ボックスに、**50** と入力します。
- 9 プロジェクトにシナリオを追加するには、[保存] をクリックし、[閉じる] をクリックします。

結果

vRealize Operations Manager により、シナリオがプロジェクトに保存されます。

次のステップ

「Fina_RDCL-01」という名前のクラスタに仮想マシンとホストを追加するには、別のプロジェクトとシナリオを作成します。 [ホストおよび仮想マシンを追加するサンプル プロジェクトの作成](#) を参照してください。

ホストおよび仮想マシンを追加するサンプル プロジェクトの作成

会社の財務データセンターの IT 管理者である場合を考えます。「Fina_RDDC-01」という名前のデータセンター内の「Fina_RDCL-01」という名前のクラスタのキャパシティ ニーズを計画するために、別のプロジェクトを作成します。プロジェクトで、仮想マシンとホストをクラスタに追加します。

ホストおよび仮想マシンを「Fina_RDCL-01」という名前のクラスタに追加する別のプロジェクトを作成して、クラスタのキャパシティに対する影響を確認できるようにします。クラスタには、「Fina_RDH-01」および「Fina_RDH-02」という名前の複数のホストがすでに含まれます。

前提条件

「Fina_RDCL-01」という名前のクラスタ上のワークロードを翌月に 50% 増やすことを計画するプロジェクトを作成します。 [ワークロード キャパシティを増やすサンプル プロジェクトの作成](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager インベントリ ツリーで、「Fina_RDDC-01」という名前のデータセンターと「Fina_RDCL-01」という名前のクラスタを選択します。
- 2 [プロジェクト] タブをクリックします。
- 3 プロジェクト リスト ペインの上のツールバーで、[追加] をクリックします。

- 4 [プロジェクト] ワークスペースで、プロジェクトの名前と説明を入力します。

たとえば、Fina RDCL-01 Hosts_VMs Q1 Planning と入力します。

- 5 [ステータス] として、[計画済み - バッジへの影響なし] を選択します。

- 6 ワークスペースで、[シナリオ] をクリックします。

- 7 [デマンドの追加] の下で、[仮想マシンの追加] という名前のシナリオを [シナリオ] ペインにドラッグします。

シナリオに 1.1 という番号が付けられます。

- 8 [構成] ペインで、キャパシティ要件を構成します。

- a [変更] の下で、仮想マシンの数として **10** と入力します。

- b [メトリック] の下で、[メモリ (消費)] に **4 GB** と入力します。

- c [vCPU] の [CPU - 割り当てモデル] に、**2** と入力します。

- 9 [キャパシティの追加] の下で、[ホスト システムを追加] という名前のシナリオを [シナリオ] ペインにドラッグします。

シナリオに 1.2 という番号が付けられます。

- 10 [構成] ペインで、ホストを構成します。

- a [変更] の下で、ホストの数として **2** と入力します。

- b [メトリック] の下で、[メモリ デマンド] に **8 GB** と入力します。

- c [CPU - 割り当てモデル] に、vCPU の数として **4** と入力します。

- 11 プロジェクトにシナリオを追加するには、[保存] をクリックし、[閉じる] をクリックします。

結果

vRealize Operations Manager により、シナリオがプロジェクトに保存されます。

次のステップ

表示チャートで、キャパシティ プランニング プロジェクトの効果を可視化します。 [キャパシティ プロジェクトの結果の表示](#) を参照してください。

キャパシティ プロジェクトの結果の表示

あなたは、「Fina_RDDC-01」という名前のデータセンターを担当する IT 管理者です。あなたは、作成したプロジェクトおよびシナリオがデータセンター内のクラスタの全体的なキャパシティに与える効果を表示します。

両方のプロジェクトを表示し、予想される要件を同時に視覚化できるようにします。結果を使用して、「Fina_RDDC-01」という名前のデータセンター内で「Fina_RDCL-01」という名前のクラスタの全体的なキャパシティ ニーズを計画します。

前提条件

ホストおよび仮想マシンを「Fina_RDCL-01」という名前のクラスタに追加することを計画できるプロジェクトを作成します。 [ホストおよび仮想マシンを追加するサンプル プロジェクトの作成](#) を参照してください。

手順

- 1 「Fina_RDCL-01」という名前のクラスタを選択し、[プロジェクト] タブをクリックします。
- 2 プロジェクト リストで「Fina RDCL Q1 Planning」という名前のプロジェクトを選択し、プロジェクト リストの上のペインにドラッグします。
- 3 「Fina RDCL-01 Hosts_VMs Q1 Planning」という名前のプロジェクトを選択し、プロジェクト リストの上のペインにドラッグします。
- 4 表示チャートに両方のプロジェクトを表示するために、チャートの上の [プロジェクト ビュー] ドロップダウンメニューで [この画面上でプロジェクトを組み合わせる] を選択します。

結果

表示チャートに、プロジェクトの組み合わせられた値が表示されます。

次のステップ

データセンター内のオブジェクト上のキャパシティを予約できるようにプロジェクトをコミットするかどうかを判断します。

vRealize Operations Manager でのハードウェア プロジェクトの計画

インフラストラクチャ内のハードウェアのキャパシティ プロジェクトの計画には、ホスト ハードウェアおよびデータストア ハードウェアの変更が関係します。新しいハードウェアを購入する必要があるかどうかを判断するために、プロジェクトを作成できます。

ハードウェア オブジェクトを変更する前に、変更の結果を判断するハードウェア プロジェクトを作成し、実施できます。環境内のハードウェアを変更する前に、ハードウェア プロジェクトで、オブジェクトのキャパシティ要件を決定できます。

さまざまな状況下で、ハードウェアの変更を計画することが必要な場合があります。

- 新しいアプリケーションを実装する場合は、それらのアプリケーションのデプロイ後に必要なディスク領域をサポートするのに十分なリソースがオブジェクトにあることを確認する必要があります。
- 既存のクラスタにホストを追加する場合は、そのクラスタが、その年の翌四半期に使用されるキャパシティの増加に対応できることを確認する必要があります。
- オブジェクト上のメモリや CPU のデマンドに対する構成変更を行う場合は、既存のオブジェクトのキャパシティ要件とワークロードを把握しておく必要があります。

ハードウェアの変更を計画するプロジェクトの作成

環境内のオブジェクトのキャパシティ要件の増加にサポートするために、新しいハードウェアの購入が必要かどうかを判断するプロジェクトを作成できます。

ハードウェア キャパシティを追加、更新、または削除した場合のオブジェクトのキャパシティ要件を予測するには、プロジェクトを作成し、そのプロジェクトにシナリオを追加してください。次の手順では、クラスタ内のホストへの変更を予測するハードウェア プロジェクトを作成します。

前提条件

vRealize Operations Manager は、過去数週間のデータを収集しています。[データ ソースへの vRealize Operations Manager の接続](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager インベントリ ツリーで、ホストを選択します。
- 2 [プロジェクト] タブをクリックします。
- 3 可視化領域の上のツールバーの [キャパシティ コンテナ] ドロップダウン メニューで、[最も制約が大きいもの] をクリックします。
- 4 可視化領域の下ツールバーで、[追加] をクリックします。
- 5 [プロジェクト] ワークスペースで、プロジェクトの名前と説明を入力します。
- 6 [ステータス] として、[計画済み - バッジへの影響なし] を選択します。
- 7 ワークスペースで、[シナリオ] をクリックします。
- 8 [キャパシティの追加] の下で、[データストアの追加] に類する名前のシナリオを [シナリオ] 領域にドラッグします。
- 9 [構成] 領域で、プロジェクト シナリオ用の一般パラメータを入力します。

オプション	説明
実施日	プロジェクト シナリオを実施する日時を設定します。
変更	追加するデータストアの数を設定します。
メトリックの取り込み元	ディスク領域の使用量と割り当てのメトリックを既存のデータストアからコピーし、既存のデータストアを選択します。
メトリック	ディスク領域の使用量と割り当てを設定します。

- 10 表示チャートに選択内容の影響を表示するには、[プロジェクトを保存して編集を続行する] をクリックします。
 キャパシティ コンテナを [最も制約が大きいもの] に設定している場合、プロジェクト シナリオを実装するとき、表示チャートに CPU の不足が表示されることがあります。この不足が発生するのは、CPU の割り当てが使用可能なキャパシティよりも大きいことがあるためです。この場合は、プロジェクト シナリオを実施する前に、CPU キャパシティを追加する必要があります。
- 11 設定に基づいたキャパシティ予測に問題がなければ、[保存] をクリックしてシナリオをプロジェクトに追加します。
- 12 [プロジェクト] タブで、リスト内のプロジェクトをクリックし、プロジェクト リストの真上の領域にドラッグします。

結果

vRealize Operations Manager により、プロジェクトとシナリオが表示チャートに適用されます。プロジェクトで予測されるキャパシティが、チャートに灰色のラインとして表示されます。

次のステップ

[デマンドの追加: デマンドのパーセンテージの追加] という名前のシナリオをプロジェクトに追加し、[キャパシティ コンテナ] を [ディスク領域割り当てモデル] に設定します。プロジェクト シナリオを実施すると、表示チャートに ディスク領域の不足があることが表示される場合があります。この場合は、プロジェクト シナリオを実施する前に、ディスク領域のキャパシティを追加する必要があります。

表示チャートで、現在使用可能なキャパシティと、プロジェクトで定義した環境の変更を行った場合に必要な実際のキャパシティを評価します。ハードウェアの変更に必要なキャパシティを予約するためにプロジェクトをコミットするかどうかを判断します。

仮想マシン プロジェクトとシナリオの計画

仮想マシン プロジェクトを使用すると、仮想環境に変更を適用しないで仮想マシンのリソースの変更による影響を評価できます。変更を仮想環境に適用する前に、サンプル仮想マシン プロジェクトを作成して、ホストまたはクラスタに対する仮想マシンの追加または削除をモデリングすることができます。

■ 取り込みメトリックを使用した仮想マシン プロジェクトの作成

既存の仮想マシン プロファイルモデルとして使用するプロジェクト シナリオを作成できます。プロジェクト シナリオは、1 台以上の仮想マシンをホストまたはクラスタに追加する場合のリソース要件をシミュレートします。

■ 新しい仮想マシンのためのサンプル プロジェクトの作成

仮想マシン プロジェクトは、仮想環境に実際の変更を適用しないで新規仮想マシンをクラスタまたはホストに追加することの影響を評価します。

■ 仮想マシンの削除をシミュレーションするサンプル プロジェクトの作成

ホストまたはクラスタから 1 台以上の仮想マシンを削除する作業をシミュレートするプロジェクトを作成できます。仮想マシンは、不要になったときや移動する必要がある場合に削除することがあります。

取り込みメトリックを使用した仮想マシン プロジェクトの作成

既存の仮想マシン プロファイルモデルとして使用するプロジェクト シナリオを作成できます。プロジェクト シナリオは、1 台以上の仮想マシンをホストまたはクラスタに追加する場合のリソース要件をシミュレートします。

プロジェクト シナリオの設定を構成して仮想マシンを追加する場合は、既存のプロファイルから計画された仮想マシンのリソースの値を生成できます。または、既存の仮想マシンから値をコピーできます。

仮想マシンのキャパシティ メトリックの値を計算するために、vRealize Operations Manager は、ユーザーが選択したプロファイルに従って、CPU、メモリ、ディスク ディメンションのキャパシティをパーティション化します。

CPU およびメモリの最大数については、VMware vSphere のドキュメントを参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager ナビゲーション ツリーで、計画された仮想マシンを含むホストまたはクラスタをクリックし、[プロジェクト] をクリックします。
- 2 [Add New Project] をクリックします。

- 3 [プロジェクト] ワークスペースで、プロジェクトの名前と説明を入力します。
- 4 [ステータス] として、[計画済み - バッジへの影響なし] を選択します。
- 5 ワークスペースで、[シナリオ] をクリックします。
- 6 [デマンドの追加] の下で、[仮想マシンの追加] という名前のシナリオを [シナリオ] 領域にドラッグします。
- 7 [構成] 領域で、プロジェクト シナリオ用の一般パラメータを入力します。
 - a プロジェクト シナリオを実施する日時を選択します。
 - b [メトリックの取り込み元] をクリックし、既存のプロファイルまたは既存の仮想マシンを選択し、[OK] をクリックします。

オプション	操作
定義済みプロファイルからメトリック値をコピーします。	プロファイルのドロップダウン メニューから、計画した仮想マシンのメトリック値を取り込む既存のプロファイルを選択します。
既存のオブジェクトからメトリック値をコピーします。	既存の仮想マシンのドロップダウン メニューから、計画した仮想マシンのメトリック値を取り込む仮想マシンを選択します。選択したオブジェクトに存在する仮想マシンが表示されます。

- c (オプション) 仮想マシンを複製するには、仮想マシン数を増やします。
 - d 計画された仮想マシンの影響を表示チャートで確認するには、[プロジェクトを保存して編集を続行する] をクリックします。

[キャパシティ コンテナ] を [最も制約が大きいもの] に設定すると、仮想化チャートは、プロジェクト シナリオを実装したときに CPU 不足を示すことがあります。不足は、CPU の割り当てが使用できるキャパシティよりも大きいために発生することがあります。この場合は、プロジェクト シナリオを実施する前に、CPU キャパシティを追加する必要があります。
- 8 設定に基づいたキャパシティ予測に問題がなければ、[保存] をクリックしてシナリオをプロジェクトに追加します。
- 9 [プロジェクト] タブで、リスト内のプロジェクトをクリックし、プロジェクト リストの真上の領域にドラッグします。

結果

vRealize Operations Manager により、プロジェクトとシナリオが表示チャートに適用されます。プロジェクトで予測されるキャパシティが、チャートに灰色のラインとして表示されます。

次のステップ

表示チャートで、現在使用可能なキャパシティと、プロジェクトで定義した環境の変更を行った場合に必要な実際のキャパシティを評価します。仮想マシンに必要なキャパシティを予約するためにプロジェクトをコミットするかどうかを判断します。

新しい仮想マシンのためのサンプル プロジェクトの作成

仮想マシン プロジェクトは、仮想環境に実際の変更を適用しないで新規仮想マシンをクラスタまたはホストに追加することの影響を評価します。

適切な CPU およびメモリの最大数については、VMware vSphere のドキュメントを参照してください。

手順

- 1 [インベントリ] ペインで移動先オブジェクトを選択します。

シナリオを実装する場合、宛先オブジェクトは、新しい仮想マシンを配置するクラスタまたはホストです。

- 2 [プロジェクト] タブをクリックし、[新規プロジェクトの追加] アイコンをクリックします。

- 3 [プロジェクト] ワークスペースから、プロジェクトの名前と説明を入力します。

- 4 [計画済み] ステータスを選択します。

- 5 このプロジェクトにシナリオを追加するには、[シナリオ] をクリックします。

- 6 [仮想マシンの追加] シナリオを選択し、[シナリオ] 領域にドラッグします。

- 7 仮想マシン数と、仮想マシンの設定を設定します。

vRealize Operations Manager では、新しい仮想マシンのディスク I/O とネットワーク I/O の使用量を設定する必要はありません。vRealize Operations Manager は、ホストまたはクラスタ内の仮想マシンのディスク I/O とネットワーク I/O の平均使用量を、新しい仮想マシンの使用量の予測として使用します。

- 8 構成の選択が終了したときに表示チャートでの影響を確認するには、[プロジェクトを保存して編集を続行する] をクリックします。

- 9 プロジェクトにシナリオを追加するには、[保存] をクリックします。

- 10 プロジェクト ワークスペースを閉じるには、[閉じる] をクリックします。

[閉じる] をクリックすると、すべての変更が破棄されます。[プロジェクトを保存して編集を続行する] をクリックすると、以前に保存されていないすべての変更が保持されます。

結果

選択したオブジェクトに vRealize Operations Manager によってプロジェクトが適用されます。プロジェクトでは、現在のキャパシティと、仮想マシンをターゲット オブジェクトに追加したときの予想されるキャパシティの比較が表示されます。

仮想マシンの削除をシミュレーションするサンプル プロジェクトの作成

ホストまたはクラスタから 1 台以上の仮想マシンを削除する作業をシミュレートするプロジェクトを作成できます。仮想マシンは、不要になったときや移動する必要がある場合に削除することがあります。

手順

- 1 vRealize Operations Manager インベントリ ツリーで、ホストまたはクラスタを選択します。

- 2 [プロジェクト] タブをクリックします。

- 3 可視化領域の下ツールバーで、[追加] をクリックします。

- 4 [プロジェクト] ワークスペースで、プロジェクトの名前と説明を入力します。

- 5 [ステータス] として、[計画済み - バッジへの影響なし] を選択します。

- 6 ワークスペースで、[シナリオ] をクリックします。
- 7 [デマンドの削除] の下で、[選択したオブジェクトの削除] という名前のシナリオを [シナリオ] 領域にドラッグします。
- 8 [構成] 領域の [変更] の下で、[削除するオブジェクトを 1 つ以上選択] をクリックします。
- 9 オブジェクトのリストから、[仮想マシン] のチェック ボックスをクリックし、[OK] をクリックします。
- 10 プロジェクトにシナリオを追加するには、[保存] をクリックします。
- 11 [プロジェクト] タブで、リスト内のプロジェクトをクリックし、プロジェクト リストの真上の領域にドラッグします。

結果

vRealize Operations Manager により、プロジェクトとシナリオが表示チャートに適用されます。プロジェクトで予測されるキャパシティが、チャートに灰色のラインとして表示されます。現在のキャパシティと、このプロジェクトをコミットし、選択したオブジェクトから 1 台以上の仮想マシンを削除した場合の予測キャパシティを比較します。

次のステップ

他のプロジェクトを作成し、表示チャートで結果を組み合わせたり、比較したりすることができます。

vRealize Operations Manager の [プロジェクト] タブ

[プロジェクト] タブには、選択したオブジェクト、グループ、アプリケーションについて生成されたすべてのプロジェクトのリストが表示されます。プロジェクトを作成し、既存のプロジェクトにアクセスできます。また、プロジェクト表示チャートに履歴データのキャパシティ トレンドを表示することもできます。

[プロジェクト] タブの機能

[プロジェクト] タブで、プロジェクトを作成し、そのプロジェクトにシナリオを追加して、オブジェクトのキャパシティを予測できるようにします。オブジェクトには、vCenter Server インスタンス、クラスタ、ホスト、データストア、および仮想マシンを含めることができます。可視化領域でプロジェクトを追加または削除すると、vRealize Operations Manager により、そのプロジェクトがインベントリ ツリーで選択されているオブジェクトに与える累積的な影響が表示されます。

[プロジェクト] タブの場所

プロジェクトを作成および変更するには、左側のペインで [環境] アイコンをクリックし、ナビゲーション ツリーでオブジェクトをクリックし、[プロジェクト] タブをクリックします。

表 6-2. [プロジェクト] タブ

オプション	説明
プロジェクト可視化領域とツールバー	<p>[プロジェクト ビュー] ドロップダウン メニューで、vRealize Operations Manager によるプロジェクトの表示方法を選択します。表示チャートでは、プロジェクト ビューにより、プロジェクトおよびシナリオに 1.1、1.2、2.1 のような名前が割り当てられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [この画面上でプロジェクトを組み合わせる]。1 つのグラフにプロジェクトを組み合わせます。 ■ [この画面上でプロジェクトを比較する]。各プロジェクトは、別個の小さなグラフに表示されます。 <p>[キャパシティ コンテナ] ドロップダウン メニューで、このプロジェクトのコンテナを選択します。コンテナ オプションは、選択するオブジェクトに応じて変わります。たとえば、クラスタの場合、最も制約が大きいもの、メモリまたは CPU デマンド、vSphere 構成制限、ディスク領域割り当て、またはディスク領域デマンドに従ってキャパシティを予測できます。</p> <p>表示チャートには、ストレスなしのデマンドおよび使用可能なキャパシティが表示されますが、変更したメトリックに加えて他のメトリックも含まれます。そのため、入力に比例したキャパシティの変化の大きさが得られない場合があります。</p> <p>可視化領域のツールバー オプションを使用して、さまざまな方法によるビューのズームおよびパン、データ値の表示、チャートの更新、データの範囲の表示を行うことができます。</p>
[プロジェクト] リストのツールバー	<p>[プロジェクト] ペインでは、ツールバーの選択を通じてプロジェクトを管理します。プロジェクトの追加、既存のプロジェクトの構成の編集、リストからのプロジェクトの削除を行うことができます。</p> <p>選択したプロジェクトのステータスを変更するには、歯車をクリックします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [Change status to Planned]。作成したプロジェクトを計画済み状態に設定し、what-if 分析を実行して、オブジェクトのキャパシティへの予測された影響を可視化します。 ■ [Change status to Committed]。選択したキャパシティ コンテナでプロジェクトをコミットまたは予約します。プロジェクトをデプロイしたかのように、すべてのビュー、レポート、およびダッシュボードにプロジェクト キャパシティが反映されます。 <p>プロジェクト リストをフィルタリングするには、[ステータス] ドロップダウン メニューをクリックします。</p> <p>プロジェクトのリストをフィルタリングし、データ グリッドの列をソートできます。</p>
[プロジェクト] リスト	<p>インベントリ ツリーで選択するオブジェクトにより、プロジェクト リストに取り込まれるプロジェクトが決定されます。表示されるすべてのプロジェクトは、選択されているオブジェクトまたはその子に直接関連付けられています。</p> <p>可視化領域にプロジェクトを追加するには、プロジェクト リストの上の領域にプロジェクトをドラッグするか、プロジェクト行のプラス (+) アイコンをクリックします。</p>

プロジェクト名と説明のワークスペース

[プロジェクト] ワークスペースを使用して、プロジェクトを作成します。プロジェクトは、オブジェクトのキャパシティに影響する今後の環境変更を表します。プロジェクトの名前を定義し、説明を追加して、ステータスを選択します。実装を予定するキャパシティの変更を予測する 1 つ以上のシナリオをプロジェクトに追加します。

プロジェクトを定義する場所

プロジェクトを作成、編集、表示、および予測するには、左側のペインで [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[プロジェクト] タブをクリックします。[プロジェクト] ツールバーで、プラス記号をクリックして、プロジェクトを追加します。選択したプロジェクトを編集するには、鉛筆をクリックします。

オプション	説明
名前	プロジェクトの名前。この名前が [プロジェクト] タブに表示されます。
説明	プロジェクトのわかりやすい説明。
ステータス	<ul style="list-style-type: none"> ■ [Planned - no badges affected]。作成したプロジェクトを計画済み状態に設定し、what-if 分析を実行して、オブジェクトのキャパシティへの予測された影響を可視化します。 ■ [Committed - badges affected]。選択したキャパシティ コンテナでプロジェクトをコミットまたは予約します。プロジェクトをデプロイしたかのように、すべてのビュー、レポート、およびダッシュボードにプロジェクト キャパシティが反映されます。このプロジェクト用に予約されるリソースが残りの時間に影響を与えるか、残りの時間とキャパシティの両方に影響を与えるかを判断するには、[詳細] をクリックし、いずれかのメニュー項目を選択します。[コミット済み - バッジへの影響あり] を選択すると、選択した詳細設定を基にしてキャパシティが予約されます。詳細設定で、[このプロジェクトは、残り時間のバッジに影響を与えます] を選択すると、vRealize Operations Manager によって、プロジェクトに設定された実施日にキャパシティが予約されます。[このプロジェクトは、残り時間のバッジに影響を与えます] を選択すると、vRealize Operations Manager によってキャパシティが直ちに予約されます。

プロジェクト シナリオ ワークスペース

プロジェクト シナリオは、今後のキャパシティを予測するための条件を仮想インフラストラクチャに変更したときにキャパシティがどのように変化するかについてシミュレーションするものです。プロジェクト シナリオは、環境内のオブジェクトに対して実際に変更を加えるわけではありません。しかし、このシナリオを実装すると、環境の変更が必要になる前にキャパシティ要件を判断できます。

シナリオを追加する場所

シナリオをプロジェクトに追加する、または既存のプロジェクトにあるシナリオを更新するには、左側のペインで [環境] をクリックしてオブジェクトを選択し、[プロジェクト] タブをクリックします。[プロジェクト] ツールバーで、プラス記号をクリックしてプロジェクトを追加します。または、既存のプロジェクトをクリックし、鉛筆をクリックしてプロジェクトを編集します。[プロジェクト] ワークスペースで、[シナリオ] をクリックします。

オプション	説明
オブジェクト	ドロップダウン メニューで、オブジェクトをダブルクリックして選択するか、フィルタを使用してオブジェクトを見つけます。選択したオブジェクトにより、プロジェクト シナリオ リストの内容が決定されます。
シナリオのリスト	<p>プロジェクトにシナリオを追加するには、シナリオを [シナリオ] 領域にドラッグします。</p> <p>プロジェクト シナリオを追加、編集または削除した場合に、変更内容を表示チャートに表示するには、[プロジェクトを保存して編集を続行する] をクリックします。</p>
容量コンテナ	<p>ドロップダウン メニューで、このシナリオのコンテナを選択します。</p> <p>[キャパシティ コンテナ] ドロップダウン メニューで、このプロジェクトのコンテナを選択します。コンテナ オプションは、選択するオブジェクトに応じて変わります。たとえば、クラスタの場合、最も制約が大きいもの、メモリまたは CPU デマンド、vSphere 構成制限、ディスク領域割り当て、またはディスク領域デマンドに従ってキャパシティを予測できます。</p>

オプション	説明
表示チャート	<p>表示チャートには、ストレスなしのデマンドおよび使用可能なキャパシティが表示されますが、変更したメトリックに加えて他のメトリックも含まれます。そのため、入力に比例したキャパシティの変化の大きさが得られない場合があります。</p> <p>what-if 表示チャートは 1 時間ごとの平均データを使用します。プロジェクト構成の [現在の値] 設定は、最新の 5 分のデータ ポイントを反映します。たとえば、[現在の値] 設定は、「キャパシティの絶対値の変更」および「デマンドの絶対値の変更」という名前のシナリオに表示されます。</p> <p>メトリックの場合、1 時間ごとの平均データと最新のデータ ポイントの間に大きな差異が発生する可能性があります。最新のデータ ポイントに従って値を変更すると、1 時間ごとの平均に従って表示チャートに変更が表示されます。</p> <p>たとえば、メモリ デマンドの 1 時間の平均が 35 GB でも、プロジェクト構成の [現在の値] の最新のデータ ポイントが 3.5 GB に低下している場合、デマンドを 2 倍にすることを意図すると、「絶対値による変更」シナリオを使用して、デマンドを 7 GB に変更できます。この場合、表示チャートでは、この変更はその平均の 35 GB からのデマンドの低下として表示されることに注意してください。</p>
構成	<p>次の情報を構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ シナリオ名 ■ シナリオの説明。シナリオのわかりやすい説明。 ■ 実装日。シナリオを実施する日時。 ■ 構成領域。シナリオに応じて、グローバル値を構成するか、メトリックとメトリック値をカスタマイズします。[変更] 領域は、構成するシナリオに応じて異なります。仮想マシンやホストのようなオブジェクトにシナリオを追加する場合は、メトリックを既存のオブジェクトまたはカスタム プロファイルから取り込むことができます。 <p>たとえば、デマンドの追加: 仮想マシンの追加シナリオにキャパシティの計算を適用するには、[メトリックの取り込み元] をクリックします。事前に定義されたプロファイルまたは既存のオブジェクトからメトリック値をコピーします。既存のオブジェクトからメトリック値をコピーするときは、別の仮想マシンからの最新のメトリック値またはデマンド履歴のパターンを使用できます。</p>

VMware vRealize Operations Manager のカスタム プロファイル

カスタム プロファイルは、特定のオブジェクト タイプに対するキャパシティ割り当てとデマンドのユーザー定義のインスタンスです。カスタム プロファイルは、環境のキャパシティ ニーズを予測するために役立ちます。

環境に合うオブジェクトのインスタンス数を決定するには、プロジェクトとシナリオでカスタム プロファイルを使用します。環境で使用できるキャパシティに合わせて、カスタム プロファイルのキャパシティ要件が表すオブジェクトのインスタンスを 1 つ以上追加できます。

仮想マシンなどのオブジェクト タイプのカスタム プロファイルを作成する場合は、プロジェクトを作成して仮想マシン シナリオを追加します。プロジェクト シナリオでは、カスタム プロファイルを選択して、プロジェクト シナリオにオブジェクト タイプのメトリックとキャパシティを生成します。カスタム プロファイルのキャパシティ サイジングを使用して、仮想マシンの親オブジェクトのキャパシティ ニーズを予測します。

親オブジェクトに含めることができるカスタム プロファイル オブジェクトのインスタンス数を決定するには、[分析] をクリックし、[残りキャパシティ] をクリックします。カスタム プロファイルは、[残りキャパシティの内訳] 領域の [プロファイル別残りキャパシティ] セクションに表示され、環境に合うオブジェクトのインスタンス数が示されます。

カスタム プロファイルの詳細および関連するポリシー

カスタム プロファイルは、オブジェクト インスタンスの特定の構成を定義します。プロファイルを使用すると、利用可能なキャパシティやオブジェクト インスタンスの構成に応じた、環境に合うオブジェクトのインスタンスの個数がわかります。

カスタム プロファイルの機能

デフォルト プロファイルと同じように、カスタム プロファイルは、オブジェクトのメトリック構成を定義します。カスタム プロファイルは、1つのオブジェクト タイプに必要な数だけ作成できます。たとえば、2 GB のメモリ デマンド モデルを使用する仮想マシンの1つのカスタム プロファイルを作成できます。4 GB のメモリ デマンド モデルを使用する別のカスタム プロファイルを作成できます。

vRealize Operations Manager は、仮想マシンのカスタム プロファイルを使用して、環境に合う仮想マシンの数を計算します。仮想マシンの数は、プロファイルで定義されたキャパシティの割り当てとデマンドが基になっています。キャパシティの計算を調べるには、ホスト、クラスタなどの親オブジェクトを選択します。[分析] - [残りキャパシティ] をクリックし、[残りキャパシティの内訳] 領域の [プロファイル別残りキャパシティ] を表示します。

また、カスタム プロファイルを使用すると、プロジェクト シナリオの作成時にメトリックを取り込むことができます。プロジェクト シナリオでカスタム プロファイルを使用するには、ホスト、クラスタなどのオブジェクトを選択します。[プロジェクト] をクリックし、[追加] をクリックしてプロジェクトを作成します。たとえば仮想マシンの追加など、プロジェクトにシナリオを追加するには、[メトリックの取り込み元] をクリックします。カスタム プロファイルを選択して、カスタム プロファイルで定義したキャパシティ設定をプロジェクト シナリオに含めます。

カスタム プロファイルを確認できる場所

カスタム プロファイルを管理するには、左側のペインの [コンテンツ] をクリックし、[カスタム プロファイル] をクリックします。

表 6-3. カスタム プロファイルのオプション

オプション	説明
ツールバー オプション	<p>ツールバー オプションは、カスタム プロファイルの管理に使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [新しいプロファイルの追加]。特定のオブジェクト タイプのカスタム プロファイルを追加します。 ■ [選択したプロファイルの編集]。選択したプロファイルを変更します。 ■ [選択したプロファイルの削除]。選択したプロファイルを削除します。 ■ [選択したプロファイルのクローン作成]。選択したプロファイルのコピーを作成し、必要に応じてカスタマイズします。
フィルタリング オプション	リストをフィルタリングして、作成したフィルタに一致するプロファイルを表示します。名前、説明、オブジェクト タイプ、またはアダプタ タイプでソートすることができます。または、[クイック フィルタ] テキスト ボックスにフィルタのテキストを入力します。
[詳細] タブ	カスタム プロファイルに適用されている名前、説明、アダプタ、オブジェクト タイプ、およびメトリックが表示されます。
[関連するポリシー] タブ	選択したカスタム プロファイルに関連付けられているすべてのポリシーが表示されます。カスタム プロファイルに関連付けられているポリシーを変更するには、プロファイルを編集します。[すべてのポリシーに対して次のプロファイルを有効にする] がオンになっている場合は、オフにして、[x] をクリックし、カスタム プロファイルに関連付けられないようにポリシーを削除します。

カスタム プロファイルのワークスペースの追加と編集

オブジェクト タイプのカスタム プロファイルを追加すると、環境に合う特定のオブジェクトのインスタンスの個数がわかります。カスタム プロファイル ワークスペースでは、オブジェクトのカスタム プロファイルを作成し、そのキャパシティ構成を定義します。

カスタム プロファイルを作成または編集する場所

カスタム プロファイルを作成するには、左側のペインで [コンテンツ] - [カスタム プロファイル] を選択します。カスタム プロファイルを作成するには、プラス記号をクリックします。選択したプロファイル編集するには、鉛筆をクリックします。既存のプロファイルをテンプレートとして使用するには、[選択したプロファイルのクローン作成] をクリックします。

表 6-4. カスタム プロファイルの構成オプション

オプション	説明
プロファイル名	カスタム プロファイルのわかりやすい名前。
プロファイルの説明	カスタム プロファイルのわかりやすい説明。このプロファイルについてユーザーが知る必要がある具体的な情報を提供します。
オブジェクト タイプ	仮想マシンなどのプロファイルの基本的なオブジェクト。
すべてのポリシーに対して次のプロファイルを有効にする	他のすべてのポリシーの設定を上書きするために使用します。使用可能なポリシーのリストを表示して、リストから個別のポリシーを選択するには、このオプションをオフにします。
詳細	<p>ポリシーおよびブラックリスト メニュー項目が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ポリシーに対して有効にするカスタム プロファイルで使用可能なポリシーのリストを表示します。リストからポリシーを削除したり、カスタム プロファイルで使用するポリシーのみを選択したりすることができます。 ■ プロファイルの非表示対象カスタム プロファイルが適用されないオブジェクトが表示されます。カスタム プロファイルを非表示にする複数のオブジェクト タイプを追加するには、[ブラックリスト オブジェクト タイプの追加] をクリックし、リストからオブジェクト タイプを選択します。
メトリック	指定したメトリックを基にしたオブジェクト インスタンスのキャパシティ要件。既存のオブジェクトまたはプロファイルを使用して、キャパシティ メトリックを入力することができます。
フィルタ (モデル)	割り当てまたはデマンドを条件としてキャパシティ メトリックをフィルタリングし、オブジェクトで使用可能なまたは必要なキャパシティを確認できます。たとえば、CPU とメモリ割り当てのみ、デマンドのみ、またはその両方を表示できます。デフォルトのモデルは割り当てです。

VMware vRealize Operations Manager のカスタム データセンター

カスタム データセンターは、クラスタ、ホスト、仮想マシンなどのオブジェクトのグループを格納するためのユーザー定義のコンテナです。含まれているオブジェクトに基づく容量バッジの計算とキャパシティ分析を行います。カスタム データセンターを使用して、環境の容量ニーズを予測および分析することができます。

カスタム データセンターを作成するときには、複数の vCenter Server インスタンスにわたる複数のクラスタ オブジェクトを含めることができます。たとえば、複数のクラスタにわたる本番環境があり、本番環境全体のパフォーマンスとキャパシティを監視および管理しなければならない場合があります。

カスタム データセンターを作成した後で、カスタム データセンターのリストからそれを選択し、健全性、リスク、および効率のサマリを表示することができます。このビューには、データセンターのトップ アラートが表示されます。カスタム データセンターに残るキャパシティを調べるには、[分析] タブをクリックし、[残りキャパシティ] をクリックします。

カスタム データセンター オブジェクトを使用して、環境内のクラスタ間のワークロードのバランスを調整できます。[ホーム] をクリックし、[ダッシュボード リスト] をクリックして、[ワークロード分布] という名前のダッシュボードをクリックし、ダッシュボードでカスタム データセンターの使用状況を表示します。



データセンターのアイコンをクリックして、ワークロードのトレンド、CPU とメモリのワークロード測定値、および vSphere の構成制限を表示します。

カスタム データセンターのリスト

環境内に存在するカスタム データセンターのリストと、その健全性、リスク、効率のサマリ ビューを表示できます。このビューでは、カスタム データセンターをクリックして、カスタム データセンターがトリガーしたオブジェクトのトップ アラートを表示できます。

カスタム データセンターの機能

vSphere では、データセンターは、vCenter Server インスタンスが管理するオブジェクトのコンテナとして機能します。vRealize Operations Manager では、カスタム データセンターは、vRealize Operations Manager が監視する複数の vCenter Server インスタンスのオブジェクトを含むことができるコンテナです。

カスタム データセンターには、vCenter Server インスタンス、データセンター、クラスタ、ホスト、仮想マシン、データストアを含めることができます。カスタム データセンターには特定の vSphere オブジェクト タイプを追加できます。

オブジェクトを追加すると、オブジェクトの階層の子もカスタム データセンターの一部になります。オブジェクトは複数のカスタム データ センターに属することができます。

カスタム データセンターを作成すると、vRealize Operations Manager は、オブジェクトが複数の vCenter Server インスタンスにまたがる場合でも、カスタム データセンターのオブジェクトでキャパシティ分析を実行します。たとえば、複数のクラスタにまたがるキャパシティ分析データと、これらのクラスタを管理する複数の vCenter Server インスタンスを調査する必要があるとします。1 回に 1 つのクラスタや 1 つの vCenter Server インスタンスを調査する必要はありません。カスタム データセンターを作成し、すべてのクラスタを追加し、1 つの場所でキャパシティ分析を確認できます。

カスタム データセンターを確認できる場所

左側のペインで [環境] を選択し、[カスタム データセンター] タブをクリックします。

表 6-5. カスタム データセンター ツールバーとグリッド オプション

オプション	説明
ツールバー オプション	<p>ツールバーのオプションは、カスタム データセンターの管理に使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [新しいカスタム データセンターの追加]。カスタム データセンターを追加します。 ■ [カスタム データセンターの編集]。選択したカスタム データセンターを変更します。 ■ [カスタム データセンターの削除]。選択したカスタム データセンターを削除します。 ■ [カスタム データセンターのクローン作成]。必要に合わせて、選択したカスタム データセンターのコピーを作成してカスタマイズします。
フィルタ	<p>カスタム データセンターのリストを、[フィルタ] テキストボックスに入力したテキストと一致するデータセンターに制限します。</p>
データ グリッド	<p>環境内のカスタム データセンターの一覧を作成し、それぞれの健全性、リスク、効率を表示します。</p> <p>カスタム データセンターの健全性、リスク、効率のサマリを [サマリ] タブに表示するには、カスタム データセンター名をクリックします。カスタム データセンターを編集、削除、クローン作成するには、カスタム データセンター名の右側をクリックします。次に、ツールバー オプションをクリックします。</p>

カスタム データセンターのワークスペースの追加と編集

カスタム データセンターは vRealize Operations Manager 固有のオブジェクト タイプで、含まれているオブジェクトに基づいてキャパシティ分析や容量バッジの計算などを行います。カスタム データセンター オブジェクトを作成して、そこにインベントリ オブジェクトを追加できます。

カスタム データセンターを作成または編集する場所

カスタム データセンターを作成するには、左側のペインで [環境] をクリックし、[カスタム データセンター] タブをクリックし、プラス記号をクリックします。

選択したカスタム データセンターを編集するには、カスタム データセンター名の右側をクリックし、鉛筆をクリックします。既存のカスタム データセンターをテンプレートとして使用するには、カスタム データセンター名の右側をクリックし、クローン作成アイコンをクリックします。

表 6-6. カスタム データセンター構成の追加と編集のオプション

オプション	説明
名前	カスタム データセンターのわかりやすい名前。
説明	カスタム データセンターのわかりやすい説明。他のユーザーがカスタム データセンターについて知る必要がある具体的な情報を入力します。
オブジェクト	<p>環境内のすべてのオブジェクトを一覧表示します。各オブジェクトのチェックボックスを選択して、カスタム データセンターに追加します。</p> <p>vCenter Server インスタンス、vSphere データセンター、vSphere クラスタ、ESXi ホストを追加できます。オブジェクトを追加すると、オブジェクトの階層の子もカスタム データセンターの一部になります。オブジェクトは複数のカスタム データ センターに属することができます。</p>

メトリック、プロパティ、およびアラートの定義

7

vRealize Operations Manager では、環境内のオブジェクトに定義されるメトリック、プロパティ、およびアラートを定義できます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [vRealize Operations Manager でのメトリック定義](#)
- [vRealize Operations Manager でのアラートの定義](#)
- [vRealize Operations Manager でのプロパティの定義](#)

vRealize Operations Manager でのメトリック定義

メトリック定義により、メトリック値の計算または導出方法の概要が示されます。メトリックを理解すれば、vRealize Operations Manager の調整を向上でき、環境管理に役立つ結果を表示することができます。

vRealize Operations Manager は、環境内のオブジェクトからデータを収集します。収集されたデータの各要素をメトリック観測値またはメトリック値と呼びます。vRealize Operations Manager は VMware vCenter アダプタを使用して生メトリックを収集します。vRealize Operations Manager は vRealize Operations Manager アダプタを使用して自己監視メトリックを収集します。vRealize Operations Manager は、収集するメトリックに加え、容量メトリック、バジ メトリック、およびシステムの健全性を監視するメトリックの計算も行います。

すべてのメトリック定義が提供されます。システムでのレポート対象となるメトリックは、環境内のオブジェクトによって異なります。メトリックを使用すると、問題のトラブルシューティングに役立てることが可能です。[\[すべてのメトリック\] タブでのトラブルシューティング](#) を参照してください。

使用可能なメトリックの変更

推奨される CPU デマンド (%) のメトリックは、vRealize Operations Manager バージョン 6.x では使用できなくなりました。このメトリックの近似値を得るために、次の計算を使用してスーパー メトリックを作成し、必要に応じてビューおよびレポートに追加します。

$$\left((\text{CPU}|\text{Stress Free Demand (MHz)}) \times (\text{CPU}|\text{Current Size in Unit(s)}) \right) \div \left((\text{CPU}|\text{Recommended Size (vCPUs)}) \times (\text{CPU}|\text{Current Size (MHz)}) \right)$$

スーパー メトリックの詳細については、[スーパー メトリックの構成](#) を参照してください。

vCenter Server コンポーネントのメトリック

vRealize Operations Manager は vCenter アダプタ経由で VMware vCenter Server® インスタンスに接続して vCenter Server コンポーネントのメトリックを収集し、これらのメトリックから数式を用いて統計情報を導出します。メトリックを使用すると、環境内の問題のトラブルシューティングが可能です。

vCenter Server コンポーネントは、vCenter アダプタの describe.xml ファイルにリスト表示されます。以下の例は、describe.xml ファイル内のホスト システムのセンサー メトリックを示しています。

```
<ResourceGroup instanced="false" key="Sensor" nameKey="1350" validation="">
  <ResourceGroup instanced="false" key="fan" nameKey="1351" validation="">
    <ResourceAttribute key="currentValue" nameKey="1360" dashboardOrder="1" dataType="float"
defaultMonitored="false" isDiscrete="false" isRate="false" maxVal="" minVal="" unit="percent"/>
    <ResourceAttribute key="healthState" nameKey="1361" dashboardOrder="1" dataType="float"
defaultMonitored="false" isDiscrete="false" isRate="false" maxVal="" minVal="" />
  </ResourceGroup>
  <ResourceGroup instanced="false" key="temperature" nameKey="1352" validation="">
    <ResourceAttribute key="currentValue" nameKey="1362" dashboardOrder="1" dataType="float"
defaultMonitored="false" isDiscrete="false" isRate="false" maxVal="" minVal="" />
    <ResourceAttribute key="healthState" nameKey="1363" dashboardOrder="1" dataType="float"
defaultMonitored="false" isDiscrete="false" isRate="false" maxVal="" minVal="" />
  </ResourceGroup>
</ResourceGroup>
```

各 ResourceAttribute 要素には UI に表示されるメトリックの名前が含まれており、これらの要素はメトリックキーとして文書化されます。

表 7-1. ホスト システムの冷却のセンサー メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
Sensor fan currentValue	速度	ファン速度。
Sensor fan healthState	健全性の状態	ファンの健全性の状態。
Sensor temperature currentValue	温度	ホスト システムの温度。
Sensor temperature healthState	健全性の状態	ホストシステムの健全性の状態。

vSphere メトリック

vRealize Operations Manager では、vSphere ワールド内のオブジェクトの CPU 使用量、ディスク、メモリ、ネットワーク、およびサマリ メトリックが収集されます。

キャパシティ メトリックは、vSphere ワールドのオブジェクトに対して計算できます。[キャパシティとプロジェクトベースのメトリック](#) を参照してください。

CPU 使用量のメトリック

CPU 使用量メトリックは、CPU 使用についての情報を提供します。

表 7-2. CPU 使用量のメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
cpu capacity_usagepct_average	キャパシティ使用量	間隔中の CPU 使用率 (%)。
cpu capacity_contentionPct	CPU の競合	物理 CPU に対するアクセスが競合していることにより仮想マシンを実行できない時間の割合。
cpu demandPct	需要 (%)	CPU デマンドに対する CPU リソース資格の比率 (%)。
cpu demandmhz	需要 (MHz)	CPU の競合や CPU の制限がない場合に仮想マシンが使用する CPU リソース量。
cpu demand_average	デマンド	CPU 需要 (メガヘルツ)。
cpu iowait	IO 待ち時間	IO 待ち時間 (ミリ秒)。
cpu numpackages	CPU ソケット数	CPU ソケット数。
cpu capacity_contention	CPU 全体の競合	CPU 全体の競合 (ミリ秒)。
cpu capacity_provisioned	プロビジョニング済みのキャパシティ (MHz)	物理 CPU コアのキャパシティ (MHz 単位)。
cpu corecount_provisioned	プロビジョニング済み vCPU 数	プロビジョニングされた CPU コアの数。
cpu reservedCapacity_average	予約済みのキャパシティ (MHz)	仮想マシンによって予約された CPU の総キャパシティ。
cpu usagemhz_average	使用状況 (MHz)	間隔中の CPU 使用率 (MHz 単位)。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシン - アクティブに使用された仮想 CPU の合計。これは、CPU 使用量に関するホストのビューで、ゲスト OS のビューではありません。 ■ ホスト - ホストでパワーオン状態になっているすべての仮想マシンで、アクティブに使用された CPU の合計。可能な最大値は、2 つのプロセッサの周波数にプロセッサ数をかけた値です。たとえば、2 GHz の CPU 4 つを搭載するホストで 4,000 MHz を使用する仮想マシンを実行している場合は、$400 / (4 \times 2000) = 0.50$ となり、ホストは 2 つの CPU を完全に使用していることになります。
cpu wait	待機	待機状態で費やされる合計 CPU 時間。合計時間には、CPU アイドル、CPU スワップ待機、CPU I/O 待機の状態で費やされた時間が含まれます。
cpu workload	ワークロード (%)	ワークロードの割合。

メモリ メトリック

メモリ メトリックでは、メモリの使用と割り当てに関する情報が提供されます。

表 7-3. メモリ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
mem host_contentionPct	競合	ホスト メモリ競合 (割合)。
mem host_demand	マシン需要 (KB)	ホスト メモリ需要 (キロバイト)。
mem host_provisioned	プロビジョニング済みのメモリ	プロビジョニング済みのホスト メモリ (キロバイト)。
mem reservedCapacity_average	予約済みの容量 (KB)	ホストのパワーオン状態の仮想マシンおよび vSphere サービスで使用するメモリ予約の総容量。

表 7-3. メモリ メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
mem host_usable	使用可能メモリ (KB)	使用可能なホスト メモリ (キロバイト)
mem host_usage	ホスト使用量 (KB)	ホストのメモリ使用量 (キロバイト)。
mem host_usagePct	使用量 / 使用可能 (%)	設定済みまたは使用可能な総メモリに対するパーセンテージで表されたメモリ使用率。
mem workload	ワークロード (%)	ワークロードの割合。

ネットワーク メトリック

ネットワーク メトリックでは、ネットワーク パフォーマンスに関する情報が提供されます。

表 7-4. ネットワーク メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
net droppedPct	ドロップされたパケット (%)	ドロップされたネットワーク パケット (割合)。
net usage_average	使用率 (KBps)	ホストまたは仮想マシンのすべての NIC インスタンスで送受信されたデータの合計。
net workload	ワークロード (%)	ワークロードの割合。

ディスク メトリック

ディスク メトリックでは、ディスクの使用に関する情報が提供されます。

表 7-5. ディスク メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
disk commandsAveraged_average	1 秒あたりのコマンド数	収集サイクル中の 1 秒あたりの平均発行コマンド数。
disk usage_average	使用率 (KBps)	ホストまたは仮想マシンのすべてのディスク インスタンス間で読み書きされた合計データの平均。
disk workload	ワークロード (%)	ワークロードの割合。

サマリのメトリック

サマリ メトリックでは、全体的なパフォーマンスに関する情報が提供されます。

表 7-6. サマリのメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
summary number_running_hosts	実行中のホストの数	実行中のホストの数。
summary number_running_vms	実行中の仮想マシンの数	実行中の仮想マシンの数。
summary total_number_clusters	クラスタの総数	クラスタの総数。
summary total_number_datastores	データストアの総数	データストアの総数。
summary total_number_hosts	ホストの総数	ホストの総数。
summary total_number_vms	仮想マシンの総数	仮想マシンの総数。

表 7-6. サマリのメトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
summary total_number_datacenters	データセンターの総数	データセンターの総数。
summary number_running_vcpus	パワーオン状態の仮想マシン用の VCPU 数	パワーオン状態の仮想マシンの仮想 CPU 数。
summary avg_vm_density	実行中のホスト 1 台あたりの実行中の仮想マシンの平均数	実行中のホスト 1 台あたりの実行中の仮想マシンの平均数。

vCenter Server のメトリック

vRealize Operations Manager は、vCenter Server システム オブジェクトの CPU 使用量、ディスク、メモリ、ネットワーク、およびサマリのメトリックを収集します。

vCenter Server のメトリックには、容量メトリックとバッジ メトリックが含まれます。定義は以下を参照してください。

- [キャパシティとプロジェクト ベースのメトリック](#)
- [バッジのメトリック](#)

CPU 使用量のメトリック

CPU 使用量メトリックは、CPU 使用についての情報を提供します。

表 7-7. CPU 使用量のメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
cpu capacity_usagepct_average	容量使用状況 (%)	使用されている容量 (割合)。
cpu capacity_contentionPct	CPU の競合 (%)	CPU の競合の割合。
cpu demandPct	需要 (%)	需要率。
cpu demandmhz	需要 (MHz)	需要 (メガヘルツ)。
cpu demand_average	需要	CPU デマンド。
cpu iowait	IO 待ち時間 (ミリ秒)	IO 待ち時間 (ミリ秒)。
cpu numpackages	CPU ソケット数	CPU ソケット数。
cpu capacity_contention	CPU 全体の競合 (ミリ秒)	CPU 全体の競合 (ミリ秒)。
cpu capacity_provisioned	プロビジョニング済みの容量 (MHz)	プロビジョニング済みの容量 (メガヘルツ)。
cpu corecount_provisioned	プロビジョニング済み vCPU	プロビジョニング済みの仮想 CPU コアの数。
cpu reservedCapacity_average	予約済みの容量 (MHz)	ホストのルート リソース プールの直接の子の、予約済みプロパティの合計。
cpu usagemhz_average	使用状況 (MHz)	CPU 平均使用量 (メガヘルツ)。
cpu wait	待ち時間 (ミリ秒)	アイドル状態に費やされる CPU 時間。
cpu overhead_average	オーバーヘッド	オーバーヘッドに使用されている CPU 量。
cpu demand_without_overhead	オーバーヘッドを含まないデマンド	オーバーヘッドを除いたデマンドの値。
cpu vm_capacity_provisioned	プロビジョニング済みキャパシティ	プロビジョニング済みキャパシティ (MHz)。

データストアのメトリック

データストアのメトリックは、データストアについての情報を提供します。

表 7-8. データストアのメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
datastore maxObserved_NumberRead	1 秒あたりに観察された読み取りの最大数	収集間隔中に観察された 1 秒あたりの最大発行読み取り平均コマンド数。
datastore maxObserved_Read	観察された読み取り最高速度	観察されたデータストアからのデータ読み取りの最高速度。
datastore maxObserved_NumberWrite	1 秒あたりに観察された書き込みの最大数	収集間隔中に観察された 1 秒あたりの最大発行書き込み平均コマンド数。
datastore maxObserved_Write	観察された書き込み最高速度	データストアからのデータ書き込みの観測最大速度。
datastore maxObserved_OIO	観察された未処理の IO 処理の最大数	観察された未処理の IO 処理の最大数。
datastore demand_oio	未処理の IO 要求	データストアの OIO。
datastore numberReadAveraged_average	1 秒あたりの読み取り数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均読み取りコマンド数。
datastore numberWriteAveraged_average	1 秒あたりの書き込み数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均書き込みコマンド数。
datastore read_average	読み取り速度	パフォーマンス間隔中に読み取られたデータ量。
datastore write_average	書き込み速度	パフォーマンス間隔中にディスクに書き込まれたデータ量。

ディスク メトリック

ディスク メトリックでは、ディスクの使用に関する情報が提供されます。

表 7-9. ディスク メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
disk commandsAveraged_average	1 秒あたりのコマンド数	収集サイクル中の 1 秒あたりの平均発行コマンド数。
disk totalLatency_average	ディスク コマンドの待ち時間 (ミリ秒)	ゲスト OS 側から見た平均コマンド時間。このメトリックは、カーネル デバイス コマンド待ち時間および物理デバイス コマンド待ち時間メトリックの合計です。
disk usage_average	使用速度 (KBps)	ホストまたは仮想マシンのすべてのディスク インスタンス間で読み書きされた合計データの平均。
disk sum_queued_oio	待機中の未処理の合計処理数	待機中の処理および未処理の合計数。
disk max_observed	観察された最大 OIO	1 つのディスクに対する観察された最大 IO。

ディスク領域のメトリック

ディスク領域メトリックでは、ディスク領域使用に関する情報が提供されます。

表 7-10. ディスク領域のメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
diskspace total_usage	使用済みの総ディスク領域 (KB)	このオブジェクトで認識できる、すべてのデータストアで使用済みの総ディスク領域。
diskspace total_capacity	総ディスク領域 (KB)	このオブジェクトで認識できる、すべてのデータストア上の総ディスク領域。
diskspace total_provisioned	プロビジョニング済み総ディスク領域 (KB)	このオブジェクトで認識できる、すべてのデータストア上のプロビジョニング済み総ディスク領域。

メモリ メトリック

メモリ メトリックでは、メモリの使用と割り当てに関する情報が提供されます。

表 7-11. メモリ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
mem host_contentionPct	競合 (%)	ホスト メモリ競合 (割合)。
mem host_demand	マシン需要 (KB)	ホスト メモリ需要 (キロバイト)。
mem host_systemUsage	ESX システム使用量	VMkernel および ESX ユーザー レベル サービスによるメモリ使用量。
mem host_provisioned	プロビジョニング済みの容量 (KB)	プロビジョニング済みのホスト メモリ (キロバイト)。
mem reservedCapacity_average	予約済みの容量 (KB)	ホストのルート リソース プールの子の、予約済みプロパティの合計。
mem host_usable	使用可能メモリ (KB)	使用可能なホスト メモリ (キロバイト)
mem host_usage	ホスト使用量 (KB)	ホストのメモリ使用量 (キロバイト)。
mem host_usagePct	使用量 / 使用可能 (%)	使用されているホスト メモリ (割合)。
mem host_contention	競合 (KB)	ホスト競合 (キロバイト)。
mem overhead_average	VM オーバーヘッド (KB)	ホストによって報告されたメモリ オーバーヘッド。

ネットワーク メトリック

ネットワーク メトリックでは、ネットワーク パフォーマンスに関する情報が提供されます。

表 7-12. ネットワーク メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
net droppedPct	ドロップされたパケット (%)	ドロップされたネットワーク パケット (割合)。
net usage_average	使用速度 (KBps)	ホストまたは仮想マシンのすべての NIC インスタンスで送信されたデータの合計。
net packetsRx_summation	パケット受信数	パフォーマンス間隔中に受信されたパケット数。
net packetsTx_summation	パケット転送数	パフォーマンス間隔中に転送されたパケット数。
net droppedRx_summation	ドロップされた受信パケット数	パフォーマンス間隔中にドロップされた受信パケット数。
net droppedTx_summation	ドロップされた転送パケット数	パフォーマンス間隔中にドロップされた転送パケット数。
net maxObserved_KBps	観測された最高スループット (KBps)	観測されたネットワーク スループット最高速度。

表 7-12. ネットワーク メトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
net maxObserved_Tx_KBps	観察された転送最高スループット (KBps)	観測されたネットワーク スループット転送最高速度。
net maxObserved_Rx_KBps	観察された受信最高スループット (KBps)	観測されたネットワーク スループット受信最高速度。
net transmitted_average	データ転送速度 (KBps)	1 秒あたりの転送データ量の平均。
net received_average	データ受信速度 (KBps)	1 秒あたりの受信データ量の平均。

サマリのメトリック

サマリ メトリックでは、全体的なパフォーマンスに関する情報が提供されます。

表 7-13. サマリのメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
summary number_running_hosts	実行中のホストの数	オンになっているホスト数。
summary number_running_vms	実行中の仮想マシンの数	オンになっている仮想マシンの数。
summary total_number_clusters	クラスタの総数	クラスタの総数。
summary total_number_datastores	データストアの総数	データストアの総数。
summary total_number_hosts	ホストの総数	ホストの総数。
summary total_number_vms	仮想マシンの総数	仮想マシンの総数。
summary max_number_vms	仮想マシンの最大数	仮想マシンの最大数。
summary workload_indicator	ワークロード インジケータ (%)	ワークロード インジケータの割合。
summary total_number_datacenters	データセンターの総数	データセンターの総数。
summary number_powered_on_cores	パワーオン状態のホスト用のコア数	パワーオン状態のホスト用のコア数。
summary number_running_vcpus	パワーオン状態の仮想マシン用の VCPU 数	パワーオン状態の仮想マシンの仮想 CPU 数。
summary avg_vm_density	実行中のホスト 1 台あたりの実行中の仮想マシンの平均数	実行中のホスト 1 台あたりの実行中の仮想マシンの平均数。
summary vc_query_time	VC クエリ時間 (ミリ秒)	vCenter Server クエリ時間 (ミリ秒)。
summary derived_metrics_comp_time	派生メトリックの計算時間 (ミリ秒)	派生メトリックの計算時間 (ミリ秒)。
summary number_objs	オブジェクト数	オブジェクト数。
summary number_vc_events	VC イベント数	vCenter Server イベント数。
summary number_sms_metrics	SMS メトリック数	SMS メトリック数。
summary collector_mem_usage	Collector のメモリ使用量 (MB)	Collector のメモリ使用量 (メガバイト)。

仮想マシンのメトリック

vRealize Operations Manager では、仮想マシンの構成、CPU 使用、メモリ、データストア、ディスク、仮想ディスク、ゲスト ファイル システム、ネットワーク、電源、ディスク領域、ストレージ、サマリの各メトリックが収集されます。

キャパシティ メトリックは、仮想マシンのオブジェクトに対して計算できます。[キャパシティとプロジェクト ベースのメトリック](#) を参照してください。

仮想マシンの構成メトリック

構成メトリックは、仮想マシン構成についての情報を提供します。

表 7-14. 仮想マシンの構成メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
config hardware thin_Enabled	シン プロビジョニング ディスク	シン プロビジョニング ディスク。
config hardware num_Cpu	CPU の数	仮想マシン用の CPU 数。
config hardware disk_Space	ディスク領域	ディスク領域メトリック。

仮想マシンの CPU 使用量メトリック

CPU 使用量メトリックは、CPU 使用についての情報を提供します。

表 7-15. 仮想マシンの CPU 使用量メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
cpu iowait	IO 待ち時間 (ミリ秒)	IO 待ちで費やされた CPU 時間。
cpu wait	待ち時間 (ミリ秒)	待ち時間 (ミリ秒)。
cpu capacity_contention	CPU 全体の競合 (ミリ秒)	競合のために CPU が動作できない合計時間。
cpu reservation_used	使用済みの予約	使用済み CPU 予約。
cpu effective_limit	実効リミット	CPU の実効リミット。
cpu estimated_entitlement	資格概算値	CPU 資格概算値。
cpu idlePct	アイドル (%)	CPU がアイドル状態の時間の割合。
cpu iowaitPct	IO 待ち時間 (%)	IO 待ち時間の割合。
cpu swapwaitPct	スワップの待ち時間 (%)	CPU のスワップ待ち時間の割合。
cpu waitPct	待機 (%)	待機状態で消費した合計 CPU 時間の割合。
cpu systemSummationPct	システム (%)	システム プロセスに費やされた CPU 時間の割合。
cpu demandOverLimit	制限を超えるデマンド (MHz)	構成された CPU リミットを超えた CPU デマンドの量。
cpu demandOverCapacity	キャパシティを超えるデマンド (MHz)	構成された CPU キャパシティを超えた CPU デマンドの量。
cpu sizePctReduction	推奨されるサイズ削減 (%)	推奨される CPU サイズ削減のパーセンテージ。

表 7-15. 仮想マシンの CPU 使用量メトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
cpu perCpuCoStopPct	相互停止	すべての vCPU で正規化された相互停止時間のパーセンテージ。
cpu numberToAdd	追加する vCPU の推奨数	仮想マシンに追加する vCPU の推奨数。
cpu numberToRemove	削除する vCPU の推奨数	仮想マシンから削除する vCPU の推奨数。
cpu capacity_entitlement	容量の付与資格 (MHz)	制限を考慮した後の仮想マシン用の CPU 資格。
cpu corecount_provisioned	プロビジョニングされた CPU コア	プロビジョニングされた CPU コアの数。
cpu capacity_demandEntitlementPct	キャパシティ デマンドの資格 (%)	キャパシティ デマンドの要資格の割合。
cpu capacity_contentionPct	CPU の競合 (%)	20 秒の収集期間中の CPU 競合 (パーセント単位)。
cpu capacity_provisioned	プロビジョニング済みの容量 (MHz)	プロビジョニング済みの CPU 容量 (メガヘルツ)。
cpu demandmhz	デマンド (MHz)	CPU デマンド (メガヘルツ)。
cpu host_demand_for_aggregation	集約のためのホスト デマンド	集約のためのホスト デマンド。
cpu demand_average	デマンド (ms)	競合がなかった場合に仮想マシンが使用する合計 CPU 時間。
cpu demandPct	デマンド (%)	プロビジョニング済みキャパシティの CPU デマンド (パーセント単位)。
cpu dynamic_entitlement	動的資格値	CPU 動的資格値。
cpu usage_average	使用率 (%)	20 秒の収集期間中の CPU 使用 (パーセント単位)。
cpu usagemhz_average	使用状況 (MHz)	CPU 使用量 (メガヘルツ)。
cpu system_summation	システム (ミリ秒)	システム プロセスに費やされる CPU 時間。
cpu wait_summation	待ち時間 (ミリ秒)	仮想 CPU が動作できない合計時間。アイドル (停止) になるか、I/O などの外部イベントを待機できます。
cpu ready_summation	準備完了 (ミリ秒)	準備完了状態で費やされる CPU 時間。
cpu readyPct	CPU Ready (%)	収集間隔の間に準備完了状態で費やされる CPU 時間 (パーセント単位)。
cpu used_summation	使用済み (ミリ秒)	使用される CPU 時間。
cpu extra_summation	余剰 (ミリ秒)	余剰 CPU 時間 (ミリ秒)。
cpu guaranteed_latest	確保 (ミリ秒)	仮想マシンに対して確保されている CPU 時間。
cpu swapwait_summation	スワップの待ち時間 (ミリ秒)	スワップの待ち時間 (ミリ秒)。
cpu costop_summation	Co-Stop (ミリ秒)	仮想マシンを実行する準備ができていても、相互スケジューリングの制約のため実行することができない時間。

表 7-15. 仮想マシンの CPU 使用量メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
cpu costopPct	Co-Stop (%)	仮想マシンを実行する準備ができていても、相互スケジューリングの制約のため実行できない時間の割合。
cpu idle_summation	アイドル (ミリ秒)	アイドル状態の CPU 時間。
cpu latency_average	待ち時間	物理 CPU に対するアクセスが競合していることにより仮想マシンを実行できない時間の割合。
cpu maxlimited_summation	最大限度	仮想マシンを実行する準備ができていても、CPU リミット設定値の上限に達しているため実行できない時間。
cpu overlap_summation	オーバーラップ	仮想マシンでのシステム サービスの実行が、自身や他の仮想マシンのために中断された時間。
cpu run_summation	実行	仮想マシンを実行するようにスケジュール設定された時間。
cpu entitlement_latest	最新の資格値	最新の資格値。

仮想マシンのリソース メトリックに対する CPU 使用率

リソースに対する CPU 使用率のメトリックでは、リソース CPU 使用に関する情報が提供されます。

表 7-16. 仮想マシンのリソース メトリックに対する CPU 使用率

メトリック キー	メトリック名	説明
rescpu actav1_latest rescpu actav5_latest rescpu actav15_latest rescpu actpk1_latest rescpu actpk5_latest rescpu actpk15_latest	アクティブ CPU (%) (<i>interval</i>)	さまざまな間隔の間の、CPU の平均アクティブ時間 (actav) またはピーク アクティブ時間 (actpk)。
rescpu runav1_latest rescpu runav5_latest rescpu runav15_latest rescpu runpk1_latest rescpu runpk5_latest rescpu runpk15_latest	CPU 稼働 (%) (<i>interval</i>)	さまざまな間隔の間の、CPU の平均ランタイム (runav) またはピーク ランタイム (runpk)。
rescpu maxLimited1_latest rescpu maxLimited5_latest rescpu maxLimited15_latest	スロットル CPU (%) (<i>interval</i>)	制限を越えたために拒否された CPU リソース量 (さまざまな間隔の平均)。
rescpu sampleCount_latest	グループ CPU のサンプル回数	サンプル CPU 回数。
rescpu samplePeriod_latest	グループ CPU のサンプル期間 (ミリ秒)	サンプル期間。

仮想マシンのメモリ メトリック

メモリ メトリックでは、メモリの使用と割り当てに関する情報が提供されます。

表 7-17. 仮想マシンのメモリ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
mem host_active	アクティブなホスト (KB)	ホストのアクティブなメモリ使用量 (キロバイト)。
mem host_usage	使用量 (KB)	メモリ使用量 (キロバイト)。
mem host_contention	競合 (KB)	メモリの競合 (キロバイト)。
mem host_contentionPct	競合 (%)	メモリの競合の割合。
mem guest_provisioned	構成済みゲスト メモリ (KB)	構成済みゲスト OS メモリ (キロバイト)。
mem guest_dynamic_entitlement	ゲスト動的資格値 (KB)	ゲスト メモリ動的資格値。
mem guest_activePct	アクティブなゲスト メモリ (%)	ゲスト OS のアクティブなメモリの割合。
mem guest_nonpageable_estimate	ページ可能でないゲスト メモリ (KB)	ページ可能でないゲスト OS メモリ (キロバイト)。
mem reservation_used	使用済みの予約	使用済みメモリ予約。
mem effective_limit	実効リミット	メモリ実効リミット。
mem estimated_entitlement	資格概算値	メモリ資格概算値。
mem host_demand_for_aggregation	集約のデマンド	集約のためのホスト デマンド。
mem numa.remote_latest	最後の NUMA リモート	Non-uniform memory access リモート (Kb)。
mem numa.local_latest	最後の NUMA ローカル	Non-uniform memory access ローカル (Kb)。
mem numa.migrations_latest	最後の NUMA 移行	Non-uniform memory access 移行 (数)。
mem numa.locality_average	NUMA 局所性平均	Non-uniform memory access 局所性 (%)。
mem demandOverLimit	制限を超えるデマンド	構成されたメモリ制限を超えるメモリ デマンドの量。
mem demandOverCapacity	キャパシティを超えるデマンド	構成されたメモリ キャパシティを超えるメモリ デマンドの量。
mem sizePctReduction	推奨されるサイズ削減 (%)	推奨されるメモリ サイズ削減のパーセンテージ。
mem balloonPct	バルーン (%)	バルーニングを介して解放された合計メモリのパーセンテージ。
mem guest_usage	ゲスト使用量 (KB)	ゲスト OS の使用量 (キロバイト)。
mem guest_demand	ゲスト デマンド (KB)	ゲスト OS のデマンド (キロバイト)。
mem host_nonpageable_estimate	ページ可能でないゲスト メモリ (KB)	ページ可能でないゲスト OS メモリ (キロバイト)。
mem host_demand	ホスト デマンド (KB)	メモリ デマンド (キロバイト)。
mem host_demand_reservation	予約があるデマンド (KB)	予約があるメモリ デマンド (KB)。
mem guest_workload	ゲストのワークロード	ゲストのワークロード (%)。
mem host_workload	ホストのワークロード	ホスト ワークロード (%)。

表 7-17. 仮想マシンのメモリ メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
mem vmmemctl_average	バルーン (%)	仮想マシンのメモリ制御に現在使用されているメモリ容量。
mem active_average	アクティブなゲスト (%)	有効に使用されているメモリ容量。
mem granted_average	付与 (KB)	使用できるメモリ容量。
mem shared_average	共有 (KB)	共有メモリ量 (キロバイト単位)。
mem zero_average	ゼロ (KB)	すべて 0 のメモリ容量。
mem swapped_average	スワップ済み (KB)	予約されていないメモリ量 (KB)。
mem swaptarget_average	スワップ ターゲット (KB)	スワップ可能なメモリ量 (KB)。
mem swapin_average	スワップ イン (KB)	スワップイン メモリ (キロバイト)。
mem swapout_average	スワップ アウト (KB)	スワップ アウト メモリ量 (キロバイト)。
mem usage_average	使用率 (%)	使用可能な総メモリ量との割合での現在使用中のメモリ。
mem vmmemctltarget_average	バルーン ターゲット (KB)	仮想マシンのメモリ制御に使用できるメモリ量。
mem consumed_average	消費 (KB)	ゲスト メモリ用として仮想マシンによって消費されるホスト メモリ量 (KB)。
mem overhead_average	オーバーヘッド (KB)	メモリ オーバーヘッド (キロバイト)。
mem host_dynamic_entitlement	ホストの動的資格値	メモリ マシン動的資格値。
mem swapinRate_average	スワップ イン速度 (KBps)	間隔中にメモリがディスクからアクティブなメモリにスワップされる速度。
mem swapoutRate_average	スワップ アウト速度 (KBps)	直近の計測間隔中にメモリがアクティブ メモリからディスクにスワップ アウト中の速度。
mem activewrite_average	アクティブな書き込み (KB)	アクティブな書き込み (キロバイト)。
mem compressed_average	圧縮済み (KB)	圧縮済みメモリ (キロバイト)。
mem commpressionRate_average	圧縮率 (KBps)	1 秒あたりの圧縮率 (キロバイト)。
mem decompressionRate_average	圧縮解除率 (KBps)	1 秒あたりの圧縮解除率 (キロバイト)。
mem overheadMax_average	最大オーバーヘッド (KB)	最大オーバーヘッド (キロバイト)。
mem zipSaved_latest	保存済み zip (KB)	圧縮保存済みメモリ (キロバイト)。
mem zipped_latest	zip 圧縮済み (KB)	圧縮済みメモリ (キロバイト)。
mem entitlement_average	資格	ESX スケジュールによって決まる仮想マシンに資格を付与しているホストの物理メモリの容量。
mem latency_average	待ち時間	スワップされたメモリや圧縮されたメモリに仮想マシンがアクセスするために発生する待ち時間の割合。
mem capacity.contention_average	キャパシティ競合	キャパシティ競合。
mem lISwapInRate_average	ホスト キャッシュからのスワップ イン速度	メモリがホスト キャッシュからアクティブなメモリにスワップされる速度。
mem lISwapOutRate_average	ホスト キャッシュへのスワップ アウト速度	アクティブ メモリからホスト キャッシュにスワップアウト中の速度。

表 7-17. 仮想マシンのメモリ メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
mem lISwapUsed_average	ホスト キャッシュで使用されるスワップ領域	スワップされたページをキャッシュするために使用するホスト キャッシュの領域。
mem overheadTouched_average	タッチ済みオーバーヘッド	仮想マシンの仮想化オーバーヘッドとして使用するために予約された、アクティブなタッチ済みオーバーヘッド メモリ (KB)。

仮想マシンのデータストアのメトリック

データストアのメトリックでは、データストア使用に関する情報が提供されます。

表 7-18. 仮想マシンのデータストアのメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
datastore commandsAveraged_average	1 秒あたりのコマンド数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均発行コマンド数。
datastore demand_oio	未処理の IO 要求	データストアの OIO。
datastore oio	未処理の IO 処理数	未処理の IO 処理数。
datastore demand	デマンド	データストアのデマンド。
datastore totalLatency_average	ディスク コマンドの待ち時間 (ミリ秒)	ゲスト OS 側からの平均コマンド時間。これは、カーネル コマンド待ち時間および物理デバイス コマンド待ち時間の合計です。
datastore usage_average	平均使用状況 (KBps)	平均使用状況 (KBps)。
datastore used	使用領域 (MB)	使用領域 (メガバイト)。
datastore notshared	未共有 (GB)	共有されていない仮想マシンによって使用されている領域 (ギガバイト)。
datastore numberReadAveraged_average	1 秒あたりの読み取り数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均読み取りコマンド数。
datastore numberWriteAveraged_average	1 秒あたりの書き込み数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均書き込みコマンド数。
datastore read_average	読み取り速度 (KBps)	データストアからのデータ読み取り速度 (キロバイト毎秒単位)。
datastore totalReadLatency_average	読み取り待ち時間 (ミリ秒)	データストアからの読み取り処理の平均時間。遅延合計 = カーネル遅延 + デバイス遅延。
datastore totalWriteLatency_average	書き込み待ち時間 (ミリ秒)	データストアへの書き込み処理の平均時間。遅延合計 = カーネル遅延 + デバイス遅延。
datastore write_average	書き込み速度	データストアへのデータ書き込み速度
datastore maxTotalLatency_latest	最大待ち時間	最大遅延。
datastore totalLatency_max	最大待ち時間合計	最大遅延合計 (ミリ秒)。
datastore maxObserved_NumberRead	1 秒あたりに観察された読み取りの最大数	収集間隔中に観察された 1 秒あたりの最大発行読み取り平均コマンド数。
datastore maxObserved_Read	観察された読み取り最高速度	観察されたデータストアからのデータ読み取りの最高速度。

表 7-18. 仮想マシンのデータストアのメトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
datastore maxObserved_NumberWrite	1 秒あたりに観察された書き込みの最大数	収集間隔中に観察された 1 秒あたりの最大発行書き込み平均コマンド数。
datastore maxObserved_Write	観察された書き込み最高速度	データストアからのデータ書き込みの観測最大速度。
datastore maxObserved_OIO	観察された未処理の IO 処理の最大数	観測された未処理 IO 処理の最大数。

仮想マシンのディスク メトリック

ディスク メトリックでは、ディスクの使用に関する情報が提供されます。

表 7-19. 仮想マシンのディスク メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
disk numberReadAveraged_average	1 秒あたりの読み取り数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均読み取りコマンド数。
disk numberWriteAveraged_average	1 秒あたりの書き込み数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均書き込みコマンド数。
disk commandsAveraged_average	1 秒あたりのコマンド数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均発行コマンド数。
disk usage_average	使用速度 (KBps)	1 秒あたりの使用速度 (キロバイト)。
disk usage_capacity	I/O 使用量キャパシティ	I/O 使用量キャパシティ。
disk diskioio	未処理の IO 処理数	未処理の IO 処理数。
disk diskqueued	待機中の処理	待機中の処理。
disk diskdemand	デマンド (%)	デマンド率。
disk sum_queued_oio	キューに入っている実行中 IO の合計	キューに入っている処理および実行中 IO 処理の合計数。
disk max_observed	観察された最大 OIO	単一ディスクに対する観察最大実行中 IO 数
disk read_average	読み取り速度 (KBps)	パフォーマンス間隔中に読み取られたデータ量。
disk write_average	書き込み速度 (KBps)	パフォーマンス間隔中にディスクに書き込まれたデータ量。
disk numberRead_summation	読み取り要求	定義された間隔中にディスクからデータが読み取られた回数。
disk numberWrite_summation	書き込み要求	定義された間隔中にディスクにデータが書き込まれた回数。
disk busResets_summation	バス リセット	パフォーマンス間隔中のバスのリセット数。
disk commands_summation	発行コマンド	パフォーマンス間隔中に発行されたディスク コマンド数。
disk commandsAborted_summation	中止されたコマンド数	パフォーマンス間隔中に中止されたディスク コマンド数。
disk maxTotalLatency_latest	最大待ち時間	最大待ち時間。
disk scsiReservationConflicts_summation	SCSI Reservation 競合数	SCSI Reservation 競合数。

表 7-19. 仮想マシンのディスク メトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
disk totalReadLatency_average	ディスク読込待ち時間	ゲスト OS 側からの平均読み取り時間。これは、カーネル読み取り待ち時間および物理デバイス読み取り待ち時間の合計です。
disk totalWriteLatency_average	ディスク書込待ち時間	ゲスト OS 側からの平均書き込み時間。これは、カーネル書き込み待ち時間および物理デバイス書き込み待ち時間の合計です。
disk totalLatency_average	ディスク コマンドの待ち時間（ミリ秒）	ゲスト OS 側からの平均コマンド時間。これは、カーネル コマンド待ち時間および物理デバイス コマンド待ち時間の合計です。

仮想マシンの仮想ディスクメトリック

仮想ディスク メトリックでは、仮想ディスク使用に関する情報が提供されます。

表 7-20. 仮想マシンの仮想ディスクメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
virtualDisk usage	使用量	平均 CPU 使用量のパーセンテージ。
virtualDisk totalLatency	合計待ち時間	合計待ち時間。
virtualDisk commandsAveraged_average	1 秒あたりのコマンド数	1 秒あたりの平均コマンド数。
virtualDisk numberReadAveraged_average	読み取り要求	収集間隔中に仮想ディスクに発行された 1 秒あたりの平均読み取りコマンド数。
virtualDisk numberWriteAveraged_average	書き込み要求	収集間隔中に仮想ディスクに発行された 1 秒あたりの平均書き込みコマンド数。
virtualDisk read_average	読み取り速度（KBps）	仮想ディスクからのデータ読み取り速度（キロバイト毎秒単位）。
virtualDisk totalReadLatency_average	読み取り待ち時間（ミリ秒）	仮想ディスクからの読み取り処理の平均時間。遅延合計 = カーネル待ち時間 + デバイス待ち時間。
virtualDisk totalWriteLatency_average	書き込み待ち時間（ミリ秒）	仮想ディスクへの書き込み処理の平均時間。遅延合計 = カーネル待ち時間 + デバイス待ち時間。
virtualDisk write_average	書き込み速度（KBps）	仮想ディスクからのデータ書き込み速度（キロバイト毎秒単位）。
virtualDisk busResets_summation	バス リセット	パフォーマンス間隔中のバスのリセット数。
virtualDisk commandsAborted_summation	中止されたコマンド数	パフォーマンス間隔中に中止されたディスク コマンド数。
virtualDisk readLoadMetric_latest	読み取りロード	Storage DRS 仮想ディスク メトリック読み取りロード。
virtualDisk readOIO_latest	読み取り要求の残数	仮想ディスクへの平均実行中読み取り要求数。
virtualDisk writeLoadMetric_latest	書き込みロード	Storage DRS 仮想ディスク書き込みロード。
virtualDisk writeOIO_latest	書き込み要求の残数	仮想ディスクへの平均書き込み要求の残数。
virtualDisk smallSeeks_latest	小さいシークの数	小さいシークの数。
virtualDisk mediumSeeks_latest	中程度のシークの数	中程度のシークの数。

表 7-20. 仮想マシンの仮想ディスクメトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
virtualDisk largeSeeks_latest	大きなシークの数	大きなシークの数。
virtualDisk readLatencyUS_latest	読み取り待ち時間（マイクロ秒）	読み取り待ち時間（マイクロ秒）。
virtualDisk writeLatencyUS_latest	書き込み待ち時間（マイクロ秒）	書き込み待ち時間（マイクロ秒）。
virtualDisk readIOSize_latest	平均読み取り要求サイズ	読み取り IO サイズ。
virtualDisk writeIOSize_latest	平均書き込み要求サイズ	書き込み IO サイズ。

仮想マシンのゲスト ファイル システム メトリック

ゲスト ファイル システム メトリックでは、ゲスト ファイル システムの容量と空き領域に関する情報が提供されます。

表 7-21. 仮想マシンのゲスト ファイル システム メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
guestfilesystem capacity	ゲスト ファイル システムの容量 (MB)	ゲスト ファイル システム上の合計キャパシティ (MB)。
guestfilesystem freespace	ゲスト ファイル システムの空き領域 (MB)	ゲスト ファイル システム上の合計空き領域 (MB)。
guestfilesystem percentage	ゲスト ファイル システムの使用量 (%)	ゲスト ファイル システムの割合。
guestfilesystem usage	ゲスト ファイル システムの使用量	ゲスト ファイル システムの合計使用量。
guestfilesystem freespace_total	ゲスト ファイル システムの合計空き領域 (GB)	ゲスト ファイル システム上の合計空き領域。
guestfilesystem capacity_total	ゲスト ファイル システムの合計キャパシティ (GB)	ゲスト ファイル システム上の合計キャパシティ。
guestfilesystem percentage_total	ゲスト ファイル システムの合計使用率 (%)	ゲスト ファイル システムの領域使用率。
guestfilesystem usage_total	ゲスト ファイル システムの合計使用量	ゲスト ファイル システムの合計使用量。

仮想マシンのネットワーク メトリック

ネットワーク メトリックでは、ネットワーク パフォーマンスに関する情報が提供されます。

表 7-22. 仮想マシンのネットワーク メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
net demand	デマンド (%)	デマンド率。
net usage_average	使用速度 (KBps)	ホストまたは仮想マシンのすべての NIC インスタンスで送受信されたデータの合計。
net packetsRxPerSec	1 秒あたりの受信パケット数	パフォーマンス間隔中に受信されたパケット数。
net packetsTxPerSec	1 秒あたりの送信パケット数	パフォーマンス間隔中に転送されたパケット数。
net transmitted_average	データ転送速度 (KBps)	1 秒あたりに転送されるデータ量（キロバイト）の平均。
net received_average	データ受信速度 (KBps)	1 秒あたりの受信データ量の平均。
net PacketsPerSec	1 秒あたりのパケット数	1 秒あたりの送受信パケット数。

表 7-22. 仮想マシンのネットワーク メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
net usage_capacity	I/O 使用容量	IO 使用容量。
net maxObserved_KBps	観測された最高スループット (KBps)	1 秒あたりの観測された最高スループット (キロバイト)。
net maxObserved_Tx_KBps	観測最大転送スループット	観測されたネットワーク スループット転送最高速度。
net maxObserved_Rx_KBps	観測最大受信スループット	観測されたネットワーク スループット受信最高速度。
net packetsRx_summation	パケット受信数	パフォーマンス間隔中に受信されたパケット数。
net packetsTx_summation	パケット転送数	パフォーマンス間隔中に転送されたパケット数。
net droppedRx_summation	ドロップされた受信パケット数	パフォーマンス間隔中にドロップされた受信パケット数。
net dropppedTx_summation	ドロップされた転送パケット数	パフォーマンス間隔中にドロップされた転送パケット数。
net droppedPct	ドロップされたパケット (%)	ドロップされたパケットのパーセンテージ。
net dropped	ドロップされたパケット数	パフォーマンス間隔中にドロップされたパケット数。
net broadcastTx_summation	送信されたブロードキャスト パケット数	サンプリング間隔中に転送されたブロードキャスト パケットの数。
net broadcastRx_summation	受信されたブロードキャスト パケット数	サンプリング間隔中に受信されたブロードキャスト パケットの数。
net bytesRx_average	Rx バイト (KBps)	1 秒あたりの受信データ量の平均。
net bytesTx_average	Tx バイト (KBps)	1 秒あたりの転送データ量の平均。
net multicastRx_summation	受信されたマルチキャスト パケット数	受信されたマルチキャスト パケット数。
net multicastTx_summation	送信されたマルチキャスト パケット数	送信されたマルチキャスト パケット数。
net host_transmitted_average	仮想マシンからホストへのデータ転送速度	仮想マシンとホスト間の 1 秒あたりの転送データ量の平均。
net host_received_average	仮想マシンからホストへのデータ受信速度	仮想マシンとホスト間の 1 秒あたりの受信データ量の平均。
net host_usage_average	仮想マシンからホストへの使用量	仮想マシンとホスト間のすべての NIC インスタンスに対して送受信されるデータの合計。
net host_maxObserved_Tx_KBps	仮想マシンとホスト間の観測最大転送スループット	仮想マシンとホスト間の観測されたネットワーク スループット転送最高速度。
net host_maxObserved_Rx_KBps	仮想マシンとホスト間の観測最大受信スループット	仮想マシンとホスト間の観測されたネットワーク スループット受信最高速度。
net host_maxObserved_KBps	仮想マシンとホスト間の観測最大スループット	仮想マシンとホスト間の観測されたネットワーク スループット最高速度。
net transmit_demand_average	データ転送デマンド速度	データ転送デマンド速度。
net receive_demand_average	データ受信デマンド速度	データ受信デマンド速度。

仮想マシンのシステム メトリック

仮想マシンのシステム メトリックでは、仮想マシンに関する一般的な情報（そのビルド番号や実行状態など）提供されます。

表 7-23. 仮想マシンのシステム メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
sys poweredOn	パワーオン	仮想マシンのパワー状態。パワーオン状態の場合は 1、パワーオフ状態の場合は 0、不明の場合は -1
sys uptime_latest	アップタイム (秒)	システムの起動時以降の秒数。
sys heartbeat_summation	ハートビート	定義された間隔中の仮想マシンからのハートビート数。
sys vmotionEnabled	vMotion の有効化	vMotion が有効な場合は 1、vMotion が無効な場合は 0 です。
sys productString	製品文字列	VMWare 製品文字列。
sys build	ビルド番号	VMWare ビルド番号。
sys osUptime_latest	OS アップタイム	最後のオペレーティング システム起動からの総経過時間 (秒)。

仮想マシンの電力メトリック

電力メトリックでは、電力使用に関する情報が提供されます。

表 7-24. 仮想マシンの電力メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
power energy_summation	エネルギー (ジュール)	エネルギー使用量 (ジュール)。
power power_average	電力 (ワット)	平均電力使用量 (ワット)。

仮想マシンのディスク領域メトリック

ディスク領域メトリックでは、ディスク領域使用に関する情報が提供されます。

表 7-25. 仮想マシンのディスク領域メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
diskspace notshared	未共有 (GB)	共有されていない領域 (キロバイト)。
diskspace numvmdisk	仮想ディスク数	仮想ディスク数。
diskspace provisioned	プロビジョニング済み容量 (GB)	プロビジョニング済み領域 (ギガバイト)。
diskspace provisionedSpace	仮想マシンのプロビジョニング済み領域	仮想マシンのプロビジョニング済み領域。
diskspace shared	使用済みの共有 (GB)	共有されている使用領域 (ギガバイト)。
diskspace snapshot	スナップショット容量 (GB)	スナップショットによって使用されている領域。
diskspace diskused	使用済み仮想ディスク (GB)	仮想ディスクによって使用されているディスク領域 (ギガバイト)。
diskspace used	使用済み仮想マシン (GB)	仮想マシン ファイルによって使用されている領域 (ギガバイト)。

表 7-25. 仮想マシンのディスク領域メトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
diskspace total_usage	使用済みの総ディスク領域	このオブジェクトで認識できる、すべてのデータストアで使用済みの総ディスク領域。
diskspace total_capacity	総ディスク領域	このオブジェクトで認識できる、すべてのデータストア上の総ディスク領域。
diskspace total_provisioned	プロビジョニング済み総ディスク領域	このオブジェクトで認識できる、すべてのデータストア上のプロビジョニング済み総ディスク領域。
diskspace activeNotShared	共有されていないアクティブ	スナップショットを除く、仮想マシンが使用中の未共有ディスク領域。

仮想マシンのストレージ メトリック

ストレージ メトリックでは、ストレージ使用に関する情報が提供されます。

表 7-26. 仮想マシンのストレージ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
storage commandsAveraged_average	1 秒あたりのコマンド数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均発行コマンド数。
storage contention	競合パーセンテージ	競合の割合。
storage demandKBps	デマンド (KBps)	1 秒あたりのデマンド (キロバイト)。
storage totalReadLatency_average	読み取り待ち時間 (ミリ秒)	読み取り処理の平均時間。
storage read_average	読み取り速度 (KBps)	読み取りスループット (キロバイト毎秒単位)。
storage numberReadAveraged_average	1 秒あたりの読み取り数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均読み取りコマンド数。
storage totalLatency_average	合計待ち時間 (ms)	合計待ち時間 (ミリ秒)。
storage usage_average	合計使用量 (KBps)	合計スループット速度 (キロバイト毎秒単位)。
storage totalWriteLatency_average	書き込み待ち時間 (ミリ秒)	書き込み処理の平均時間。
storage write_average	書き込み速度 (KBps)	書き込みスループット速度 (キロバイト毎秒単位)。
storage numberWriteAveraged_average	1 秒あたりの書き込み数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均書き込みコマンド数。

仮想マシンのサマリ メトリック

サマリ メトリックでは、全体的なパフォーマンスに関する情報が提供されます。

表 7-27. 仮想マシンのサマリ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
summary workload_indicator	ワークロード インジケータ (%)	ワークロード インジケータの割合。
summary cpu_shares	CPU 共有	CPU 共有。
summary mem_shares	メモリ シェア	メモリ シェア。
summary number_datastore	データストアの数	データストアの数。
summary number_network	ネットワーク数	ネットワーク数。

表 7-27. 仮想マシンのサマリ メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
summary running	実行中	実行中の仮想マシンの数。
summary desktop_status	デスクトップ ステータス	Horizon View デスクトップ ステータス。

ホスト システムのメトリック

vRealize Operations Manager は、ホスト システム オブジェクトの CPU 使用量、データストア、ディスク、メモリ、ネットワーク、ストレージ、およびサマリのメトリックを含む、ホスト システムの多数のメトリックを収集します。

キャパシティ メトリックは、ホスト システム オブジェクトに対して計算できます。[キャパシティとプロジェクト ベースのメトリック](#) を参照してください。

ホスト システムの vFlash モジュール メトリック

vFlash モジュール メトリックは、ホスト システムのフラッシュ デバイスに関する情報を提供します。

表 7-28. ホスト システムの vFlash モジュール メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
vflashModule numActiveVMDKs_latest	アクティブな仮想マシン ディスクの最新の数	アクティブな仮想マシン ディスクの最新の数。

ホスト システムの構成メトリック

構成メトリックは、ホスト システムの構成に関する情報を提供します。

表 7-29. ホスト システムの構成メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
configuration dasConfig admissionControlPolicy failoverHost	フェイルオーバー ホスト	フェイルオーバー ホスト。

ホスト システムのハードウェア メトリック

ハードウェア メトリックは、ホスト システムのハードウェアに関する情報を提供します。

表 7-30. ホスト システムのハードウェア メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
hardware cpuinfo num_CpuCores	CPU の数	ホスト用の CPU 数。

ホスト システムの CPU 使用量メトリック

CPU 使用量メトリックは、CPU 使用についての情報を提供します。

表 7-31. ホスト システムの CPU メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
cpu capacity_usagepct_average	キャパシティ使用量 (%)	使用中の CPU キャパシティの割合。
cpu usage_average	使用率 (%)	平均 CPU 使用量のパーセンテージ。
cpu capacity_contentionPct	CPU の競合 (%)	物理 CPU に対するアクセスが競合していることにより仮想マシンを実行できない時間の割合。
cpu demandPct	需要 (%)	CPU の競合や CPU の制限がない場合に仮想マシンが使用する CPU リソース量。
cpu demandmhz	需要 (MHz)	CPU 需要 (メガヘルツ)。
cpu iowait	IO 待ち時間 (ミリ秒)	IO 待ち時間 (ミリ秒)。
cpu numpackages	CPU ソケット数	CPU ソケット数。
cpu capacity_contention	CPU 全体の競合 (ミリ秒)	CPU 全体の競合 (ミリ秒)。
cpu capacity_provisioned	プロビジョニング済みのキャパシティ (MHz)	物理 CPU コアのキャパシティ (MHz 単位)。
cpu corecount_provisioned	プロビジョニングされた仮想 CPU	プロビジョニングされた仮想 CPU。
cpu wait	合計待ち時間	アイドル状態であった CPU 時間。
cpu demand_average	デマンド	CPU デマンド。
cpu used_summation	使用済み (msec)	仮想マシンの使用時間。この仮想マシンのためにシステム サービスが実行される場合、(cpu.system で表される) 該当サービスの使用時間を負担するのはこの仮想マシンとなります。それ以外の場合、(cpu.overlap で表される) 使用時間はこの仮想マシンの負担とすることはできません。
cpu usagemhz_average	使用状況 (MHz)	CPU 使用量 (メガヘルツ)。
cpu reservedCapacity_average	予約済みのキャパシティ (MHz)	ホストのルート リソース プールの直接の子の予約済みプロパティ合計。
cpu totalCapacity_average	合計キャパシティ (MHz)	CPU キャパシティの合計 (メガヘルツ単位)。
cpu idle_summation	アイドル (ミリ秒)	CPU のアイドル時間 (ミリ秒単位)。
cpu overhead_average	オーバーヘッド (KB)	CPU オーバーヘッドの量。
cpu demand_without_overhead	オーバーヘッドを含まないデマンド	オーバーヘッドを除いたデマンドの値。
cpu coreUtilization_average	コア使用率 (%)	コアの使用率。
cpu utilization_average	使用率 (%)	CPU の使用率。
cpu coreUtilization_average	コア使用率 (%)	コア使用率。
cpu utilization_average	使用率 (%)	使用率。
cpu costop_summation	Co-Stop (ミリ秒)	仮想マシンを実行する準備ができていても、相互スケジューリングの制約のため実行することができない時間。
cpu latency_average	遅延 (%)	物理 CPU に対するアクセスが競合していることにより仮想マシンを実行できない時間の割合。
cpu ready_summation	準備完了 (ミリ秒)	作動可能状態で費やされる時間。

表 7-31. ホスト システムの CPU メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
cpu run_summation	実行 (ミリ秒)	仮想マシンを実行するようにスケジュール設定された時間。
cpu swapwait_summation	スワップの遅延 (ミリ秒)	スワップ領域の遅延。
cpu wait_summation	遅延 (ミリ秒)	待機状態で費やされる合計 CPU 時間。
cpu vm_capacity_provisioned	プロビジョニング済みのキャパシティ	プロビジョニング済みのキャパシティ (MHz)。
cpu acvmWorkloadDisparityPcttive_longterm_load	アクティブなホストの調整対象負荷 (長期)	アクティブなホストの調整対象負荷 (長期)。
cpu active_shortterm_load	アクティブなホストの調整対象負荷 (短期)	アクティブなホストの調整対象負荷 (短期)。

ホスト システムのリソース メトリックに対する CPU 使用率

リソース メトリックの CPU 使用率では、CPU アクティビティに関する情報が提供されます。

表 7-32. ホスト システムのリソース メトリックに対する CPU 使用率

メトリック キー	メトリック名	説明
rescpu actav1_latest rescpu actav5_latest rescpu actav15_latest rescpu actpk1_latest rescpu actpk5_latest rescpu actpk15_latest	アクティブ CPU (%) (<i>interval</i>)	過去 1 分間、過去 5 分間および 1 分、5 分、15 分のピーク アクティブ時間での CPU の平均アクティブ時間。
rescpu runav1_latest rescpu runav5_latest rescpu runav15_latest rescpu runpk1_latest rescpu runpk5_latest rescpu runpk15_latest	CPU 稼働 (%) (<i>interval</i>)	過去 1 分間、過去 5 分間、過去 15 分間および 1 分、5 分、 15 分のピーク 時間での CPU の平均稼働時間。
rescpu maxLimited1_latest rescpu maxLimited5_latest rescpu maxLimited15_latest	スロットル CPU (%) (<i>interval</i>)	過去 1 分間、過去 5 分間および過去 15 分間のスケジュール 制限。
rescpu sampleCount_latest	グループ CPU のサンプル回数	グループ CPU のサンプル回数。
rescpu samplePeriod_latest	グループ CPU のサンプル期間 (ミリ秒)	グループ CPU のサンプル期間 (ミリ秒)。

ホスト システムのデータストア メトリック

データストアのメトリックでは、データストア使用に関する情報が提供されます。

表 7-33. ホスト システムのデータストア メトリック

メトリック キー	メトリック名	メモ
datastore demand_oio	未処理の IO 要求	データストアの OIO。
datastore maxObserved_NumberRead	1 秒あたりに観察された読み取りの最大数	収集間隔中に観察された 1 秒あたりの最大発行読み取り平均コマンド数。
datastore maxObserved_Read	観察された読み取り最高速度	観察されたデータストアからのデータ読み取りの最高速度。
datastore maxObserved_NumberWrite	1 秒あたりに観察された書き込みの最大数	収集間隔中に観察された 1 秒あたりの最大発行書き込み平均コマンド数。
datastore maxObserved_Write	観察された書き込み最高速度	データストアからのデータ書き込みの観測最大速度。
datastore maxObserved_OIO	観察された未処理の IO 処理の最大数	観測された未処理 IO 処理の最大数。
datastore commandsAveraged_average	平均化されたコマンド	収集間隔中の 1 秒あたりの平均発行コマンド数。
datastore oio	未処理の IO 処理数	未処理の IO 処理数。
datastore totalLatency_average	ディスク コマンド遅延 (ミリ秒)	ゲスト OS から見た平均コマンド時間。これは、カーネル コマンド遅延および物理デバイス コマンド遅延の合計です。
datastore usage_average	平均使用状況 (KBps)	平均使用状況 (KBps)。
datastore demand	デマンド	需要。
datastore datastoreIops_average	Storage I/O Control の全 IOPS	データストアでの合計 IO 処理数。
datastore numberReadAveraged_average	1 秒あたりの読み取り数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均読み取りコマンド数。
datastore numberWriteAveraged_average	1 秒あたりの書き込み数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均書き込みコマンド数。
datastore read_average	読み取り速度 (KBps)	データストアからのデータ読み取り速度 (キロバイト毎秒単位)。
datastore sizeNormalizedDatastoreLatency_average	Storage I/O Control の正規化遅延 (ミリ秒)	マイクロ秒単位でのデータストアにおける正規化遅延。すべての仮想マシンのデータが集約されています。
datastore totalReadLatency_average	読み取り遅延 (ミリ秒)	データストアからの読み取り処理の平均時間。遅延合計 = カーネル遅延 + デバイス遅延。
datastore totalWriteLatency_average	書き込み遅延 (ミリ秒)	データストアへの書き込み処理の平均時間。遅延合計 = カーネル遅延 + デバイス遅延。
datastore write_average	書き込み速度 (KBps)	データストアへのデータ書き込み速度 (キロバイト毎秒単位)。
datastore datastoreMaxQueueDepth_latest	キューの最大深度	キューの最大深度。
datastore maxTotalLatency_latest	最大遅延	最大遅延。
datastore totalLatency_max	最大遅延合計	最大遅延合計 (ミリ秒)。
datastore datastoreNormalReadLatency_latest	読み取り遅延	読み取り遅延。

表 7-33. ホスト システムのデータストア メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	メモ
datastore datastoreNormalWriteLatency_latest	書き込み遅延	書き込み遅延。
datastore datastoreReadBytes_latest	読み取られたデータ	読み取られたデータ。
datastore datastoreReadIops_latest	データ読み取り速度	データ速度。
datastore datastoreReadLoadMetric_latest	読み取りロード	Storage DRS メトリック読み取りロード。
datastore datastoreReadOIO_latest	読み取り要求の残数	読み取り要求の残数。
datastore datastoreWriteBytes_latest	書き込まれたデータ	書き込まれたデータ。
datastore datastoreWriteIops_latest	データ書き込み速度	データ書き込み速度。
datastore datastoreWriteLoadMetric_latest	書き込みロード	Storage DRS メトリック書き込みロード。
datastore datastoreWriteOIO_latest	書き込み要求の残数	書き込み要求の残数。
datastore vmPopulationAvgWorkload	仮想マシン ワークロード、ディスク I/O の観測平均	ホスト上の仮想マシン ワークロード、ディスク I/O の観測平均。
datastore vmPopulationMaxWorkload	観測された VM ディスク I/O ワークロードの最大値	ホスト上で観測された VM ディスク I/O ワークロードの最大値。
datastore vmWorkloadDisparityPct	VM ディスク I/O ワークロードの相違	ホスト上の仮想マシン間のディスク I/O ワークロードの相違の割合。

ホスト システムのディスク メトリック

ディスク メトリックでは、ディスクの使用に関する情報が提供されます。

表 7-34. ホスト システムのディスク メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
disk usage_average	使用速度 (KBps)	ホストまたは仮想マシンのすべてのディスク インスタンス間で読み書きされた合計データの平均。
disk usage_capacity	I/O 使用量キャパシティ	I/O 使用量キャパシティ。
disk commandsAveraged_average	1 秒あたりのコマンド数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均発行コマンド数。
disk totalLatency_average	ディスク コマンド遅延 (ミリ秒)	ゲスト OS から見た平均コマンド時間。これは、カーネル コマンド遅延および物理デバイス コマンド遅延の合計です。
disk numberReadAveraged_average	1 秒あたりの読み取り数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均読み取りコマンド数。
disk numberWriteAveraged_average	1 秒あたりの書き込み数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均書き込みコマンド数。
disk numberRead_summation	読み取り要求	定義された間隔中にディスクからデータが読み取られた回数。
disk numberWrite_summation	書き込み要求	定義された間隔中にディスクにデータが書き込まれた回数。

表 7-34. ホスト システムのディスク メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
disk read_average	読み取り速度	パフォーマンス間隔中に読み取られたデータ量。
disk write_average	書き込み速度	パフォーマンス間隔中にディスクに書き込まれたデータ量。
disk busResets_summation	バス リセット	パフォーマンス間隔中のバスのリセット数。
disk commands_summation	発行コマンド	パフォーマンス間隔中に発行されたディスク コマンド数。
disk commandsAborted_summation	中止されたコマンド数	パフォーマンス間隔中に中止されたディスク コマンド数。
disk deviceReadLatency_average	物理デバイス読み取り遅延 (ミリ秒)	物理デバイスからの読み取りを終了するまでの時間の平均。
disk kernelReadLatency_average	カーネル ディスク読み取り遅延 (ミリ秒)	読み取りごとに ESX Server VMKernel でかかった時間の平均。
disk totalReadLatency_average	ディスク読み取り遅延 (ミリ秒)	ゲスト OS から見た平均読み取り時間。これは、カーネル読み取り遅延および物理デバイス読み取り遅延の合計です。
disk queueReadLatency_average	キュー読み取り遅延 (ミリ秒)	読み取りごとに ESX Server VMKernel キューでかかった時間の平均。
disk deviceWriteLatency_average	物理デバイス書き込み遅延 (ミリ秒)	物理デバイスからの書き込みを終了するまでの時間の平均。
disk kernelWriteLatency_average	カーネル ディスク書き込み遅延 (ミリ秒)	書き込みごとに ESX Server VMKernel でかかった時間の平均。
disk totalWriteLatency_average	ディスク書き込み遅延 (ミリ秒)	ゲスト OS から見た平均書き込み時間。これは、カーネル書き込み遅延および物理デバイス書き込み遅延の合計です。
disk queueWriteLatency_average	キュー書き込み遅延 (ミリ秒)	書き込みごとに ESX Server VMKernel キューでかかった時間の平均。
disk deviceLatency_average	物理デバイス コマンド遅延 (ミリ秒)	物理デバイスからのコマンドを終了するまでの時間の平均。
disk kernelLatency_average	カーネル ディスク コマンド遅延 (ミリ秒)	コマンドごとに ESX Server VMKernel でかかった平均時間。
disk queueLatency_average	キュー コマンド遅延 (ミリ秒)	コマンドごとに ESX Server VMKernel キューでかかった時間の平均。
disk diskioio	未処理の IO 処理数	未処理の IO 処理数。
disk diskqueued	待機中の処理	待機中の処理。
disk diskdemand	デマンド	需要。
disk sum_queued_oio	キューに入っている実行中 IO の合計	キューに入っている処理および実行中 IO 処理の合計数。
disk max_observed	観察された最大 OIO	単一ディスクに対する観察最大実行中 IO 数
disk maxTotalLatency_latest	最大遅延	最大遅延。

表 7-34. ホスト システムのディスク メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
disk maxQueueDepth_average	キューの最大深度	収集間隔中のキューの最大深度。
disk scsiReservationConflicts_summation	SCSI Reservation 競合数	SCSI Reservation 競合数。

ホスト システムのメモリ メトリック

メモリ メトリックでは、メモリの使用と割り当てに関する情報が提供されます。

表 7-35. ホスト システムのメモリ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
mem host_contentionPct	競合 (%)	ホスト競合 (割合)。
mem host_contention	競合 (KB)	ホスト競合 (キロバイト)。
mem host_usage	ホスト使用量 (KB)	マシン使用量 (キロバイト単位)。
mem host_demand	マシン需要 (KB)	ホストの需要 (キロバイト)。
mem host_usageVM	ホスト上の仮想マシンの実行のために使用されている全体メモリ (KB)	ホスト上の仮想マシンの実行に使用する全体メモリ (キロバイト単位)。
mem host_provisioned	プロビジョニング済みの容量 (KB)	プロビジョニング済みのメモリ (キロバイト単位)。
mem host_minfree	最小空きメモリ (KB)	最小空きメモリ。
mem reservedCapacityPct	予約済みの容量 (%)	予約済みの容量の割合。
mem host_usable	使用可能メモリ (KB)	使用可能なメモリ (キロバイト単位)。
mem host_usagePct	使用率 (%)	使用可能な総メモリ量との割合での現在使用中のメモリ。
mem host_systemUsage	ESX システム使用量	VMkernel および ESX ユーザー レベル サービスによるメモリ使用量。
mem active_average	アクティブなゲスト (KB)	有効に使用されているメモリ容量。
mem consumed_average	消費 (KB)	ゲスト メモリ用として仮想マシンによって消費されるホスト メモリ量。
mem granted_average	付与 (KB)	使用できるメモリ容量。
mem heap_average	ヒープ (KB)	ヒープに割り当てられたメモリ容量。
mem heapfree_average	ヒープの空き (KB)	ヒープの空き容量。
mem overhead_average	VM オーバーヘッド (KB)	ホストによって報告されたメモリ オーバーヘッド。
mem reservedCapacity_average	予約済みの容量 (KB)	予約済みの容量 (キロバイト単位)。
mem shared_average	共有 (KB)	共有メモリ量 (キロバイト単位)。
mem sharedcommon_average	一般共有 (KB)	一般共有メモリ量 (キロバイト単位)。
mem swapin_average	スワップ イン (KB)	スワップ インされたメモリ容量。
mem swapout_average	スワップ アウト (KB)	スワップ アウトされたメモリ容量。

表 7-35. ホスト システムのメモリ メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
mem swapused_average	使用されるスワップ (KB)	スワップ容量に使用されるメモリ容量 (キロバイト単位)。
mem sysUsage_average	仮想マシン カーネル使用量 (KB)	仮想マシン カーネルによって使用されるメモリ容量。
mem unreserved_average	未予約 (KB)	未予約メモリ量 (キロバイト単位)。
mem vmmemctl_average	バルーン (KB)	仮想マシンのメモリ制御に現在使用されているメモリ容量。
mem zero_average	ゼロ (KB)	すべて 0 のメモリ容量。
mem state_latest	状態 (0 ~ 3)	メモリの状態全般。この値は、0 (高) から 3 (低) までの整数です。
mem host_usage	使用量 (KB)	ホストのメモリ使用量 (キロバイト)。
mem usage_average	使用率 (%)	使用可能な総メモリ量との割合での現在使用中のメモリ。
mem swapinRate_average	スワップ イン速度 (KBps)	間隔中にメモリがディスクからアクティブなメモリにスワップされる速度 (キロバイト毎秒単位)。
mem swapoutRate_average	スワップ アウト速度 (KBps)	直近の計測間隔中にメモリがアクティブメモリからディスクにスワップ アウト中の速度 (キロバイト毎秒単位)。
mem activewrite_average	アクティブな書き込み (KB)	平均アクティブ書き込み (キロバイト単位)。
mem compressed_average	圧縮済み (KB)	平均メモリ圧縮 (キロバイト単位)。
mem compressionRate_average	圧縮率 (KBps)	平均圧縮率 (キロバイト毎秒単位)。
mem decompressionRate_average	圧縮解除率 (KBps)	1 秒あたりの圧縮解除率 (キロバイト)。
mem totalCapacity_average	合計容量 (KB)	合計容量 (キロバイト単位)。
mem latency_average	遅延	スワップされたメモリや圧縮されたメモリに仮想マシンがアクセスするために発生する待ち時間の割合。
mem capacity.contention_average	キャパシティ競合	キャパシティ競合。
mem llSwapInRate_average	ホスト キャッシュからのスワップ イン速度	メモリがホスト キャッシュからアクティブなメモリにスワップされる速度。
mem llSwapIn_average	ホスト キャッシュからのスワップ イン	ホスト キャッシュからスワップインされたメモリの量。
mem llSwapOutRate_average	ホスト キャッシュへのスワップ アウト速度	アクティブ メモリからホスト キャッシュにスワップアウト中の速度。
mem llSwapOut_average	ホスト キャッシュへのスワップ アウト	ホスト キャッシュにスワップアウトされたメモリの量。
mem llSwapUsed_average	ホスト キャッシュで使用されるスワップ容量	スワップされたページをキャッシュするために使用するホスト キャッシュの容量。

表 7-35. ホスト システムのメモリ メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
mem lowfreethreshold_average	空きメモリの下側しきい値	ホストの空き物理メモリのしきい値。この値を下回ると、ESX がバルーンとスワップによって仮想マシンのメモリを回収します。
mem vmWorkloadDisparityPct	仮想マシンのメモリのワークロードの不均衡	ホスト上の仮想マシン間のメモリ ワークロードの不均衡のパーセンテージ。
mem active_longterm_load	アクティブなホストの調整対象負荷 (長期)	アクティブなホストの調整対象負荷 (長期)。
mem active_shortterm_load	アクティブなホストの調整対象負荷 (短期)	アクティブなホストの調整対象負荷 (短期)。

ホスト システムのネットワーク メトリック

ネットワーク メトリックでは、ネットワーク パフォーマンスに関する情報が提供されます。

表 7-36. ホスト システムのネットワーク メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
net packetsRxPerSec	1 秒あたりの受信パケット数	パフォーマンス間隔中に受信されたパケット数。
net packetsTxPerSec	1 秒あたりの送信パケット数	パフォーマンス間隔中に転送されたパケット数。
net packetsPerSec	1 秒あたりのパケット数	1 秒あたりの送受信パケット数。
net usage_average	使用速度 (KBps)	ホストまたは仮想マシンのすべての NIC インスタンスで送受信されたデータの合計。
net usage_capacity	I/O 使用量キャパシティ	I/O 使用量キャパシティ。
net maxObserved_KBps	観測最大スループット	観測されたネットワーク スループット最高速度。
net maxObserved_Tx_KBps	観測最大転送スループット	観測されたネットワーク スループット転送最高速度。
net maxObserved_Rx_KBps	観測最大受信スループット	観測されたネットワーク スループット受信最高速度。
net demand	需要 (%)	需要率。
net transmitted_average	データ転送速度 (KBps)	1 秒あたりの転送データ量の平均。
net received_average	データ受信速度 (KBps)	1 秒あたりの受信データ量の平均。
net packetsRx_summation	パケット受信数	パフォーマンス間隔中に受信されたパケット数。
net packetsTx_summation	パケット転送数	パフォーマンス間隔中に転送されたパケット数。
net droppedRx_summation	ドロップされた受信パケット数	パフォーマンス間隔中にドロップされた受信パケット数。
net droppedTx_summation	ドロップされた転送パケット数	パフォーマンス間隔中にドロップされた転送パケット数。
net droppedPct	ドロップされたパケット (%)	ドロップされたパケット (割合)。
net dropped	ドロップされたパケット数	パフォーマンス間隔中にドロップされたパケット数。

表 7-36. ホスト システムのネットワーク メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
net bytesRx_average	Rx バイト (KBps)	1 秒あたりの受信データ量の平均。
net bytesTx_average	Tx バイト (KBps)	1 秒あたりの転送データ量の平均。
net broadcastRx_summation	受信されたブロードキャスト パケット数	サンプリング間隔中に受信されたブロードキャスト パケットの数。
net broadcastTx_summation	送信されたブロードキャスト パケット数	サンプリング間隔中に転送されたブロードキャスト パケットの数。
net errorsRx_summation	受信されたエラー パケット数	エラーが発生した受信パケット数。
net errorsTx_summation	送信されたエラー パケット数	エラーが発生した送信パケット数。
net multicastRx_summation	受信されたマルチキャスト パケット数	受信されたマルチキャスト パケット数。
net multicastTx_summation	送信されたマルチキャスト パケット数	送信されたマルチキャスト パケット数。
net throughput.usage.ft_average	FT スループット使用量	FT スループット使用量。
net throughput.usage.hbr_average	vSphere Replication スループット使用量	vSphere Replication スループット使用量。
net throughput.usage.iscsi_average	iSCSI スループット使用量	iSCSI スループット使用量。
net throughput.usage.nfs_average	NFS スループット使用量	NFS スループット使用量。
net throughput.usage.vm_average	VM スループット使用量	VM スループット使用量。
net throughput.usage.vmotion_average	vMotion スループット使用量	vMotion スループット使用量。
net unknownProtos_summation	受信されたプロトコルが不明なフレーム数	受信されたプロトコルが不明なフレーム数。

ホスト システムのシステム メトリック

システム メトリックは、リソースおよび他のアプリケーションが使用する CPU 量に関する情報を提供します。

表 7-37. ホスト システムのシステム メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
sys poweredOn	パワー オン	ホスト システムの電源がオンの場合は 1、ホスト システムの電源がオフの場合は 0、電源状態が不明の場合は -1。
sys uptime_latest	アップタイム (秒)	前回にシステムを起動してからの秒数。
sys diskUsage_latest	ディスク使用率 (%)	ディスク使用率。
sys resourceCpuUsage_average	リソース CPU 使用状況 (MHz)	サービス コンソールおよび他のアプリケーションが使用する CPU 量。
sys resourceCpuAct1_latest	リソースのアクティブ CPU (1 分平均)	アクティブなリソース CPU の割合。1 分間の平均値です。
sys resourceCpuAct5_latest	リソースのアクティブ CPU (%) (5 分間の平均)	アクティブなリソース CPU の割合。5 分間の平均値です。
sys resourceCpuAllocMax_latest	リソースの CPU 最大割り当て (MHz)	リソースの CPU 最大割り当て (メガヘルツ単位)。

表 7-37. ホスト システムのシステム メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
sys resourceCpuAllocMin_latest	リソースの CPU 最小割り当て (MHz)	リソースの CPU 最小割り当て (メガヘルツ単位)。
sys resourceCpuAllocShares_latest	リソースの CPU 共有割り当て	リソースの CPU 共有割り当て数。
sys resourceCpuMaxLimited1_latest	リソースの CPU 上限 (%) (1 分間の平均)	最大量に制限されたリソース CPU の割合。1 分間の平均値です。
sys resourceCpuMaxLimited5_latest	リソースの CPU 上限 (%) (5 分間の平均)	最大量に制限されたリソース CPU の割合。5 分間の平均値です。
sys resourceCpuRun1_latest	リソースの CPU Run1 (%)	Run1 のリソース CPU の割合。
sys resourceCpuRun5_latest	リソースの CPU Run5 (%)	Run5 のリソース CPU の割合。
sys resourceMemAllocMax_latest	リソースのメモリ最大割り当て (KB)	リソースのメモリ最大割り当て (キロバイト単位)。
sys resourceMemAllocMin_latest	リソースのメモリ最小割り当て (KB)	リソースのメモリ最小割り当て (キロバイト単位)。
sys resourceMemAllocShares_latest	リソースのメモリ共有割り当て	割り当てられたリソースのメモリ共有数。
sys resourceMemCow_latest	リソースのメモリ COW (KB)	Cow のリソース メモリ (キロバイト単位)。
sys resourceMemMapped_latest	マップされたリソース メモリ (KB)	マップされたリソース メモリ (キロバイト単位)。
sys resourceMemOverhead_latest	リソース メモリ オーバーヘッド (KB)	リソース メモリ オーバーヘッド (キロバイト単位)。
sys resourceMemShared_latest	共有されたリソース メモリ (KB)	共有されたリソース メモリ (キロバイト単位)。
sys resourceMemSwapped_latest	スワップされたリソース メモリ (KB)	スワップされたリソース メモリ (キロバイト単位)。
sys resourceMemTouched_latest	使用されたリソース メモリ (KB)	使用されたリソース メモリ (キロバイト単位)。
sys resourceMemZero_latest	リソース メモリ ゼロ (KB)	ゼロ リソース メモリ (キロバイト単位)。
sys resourceMemConsumed_latest	リソースの消費メモリ	最新のリソース メモリ使用量 (KB)。
sys resourceFdUsage_latest	リソース ファイル記述子の使用	リソース ファイル記述子の使用 (KB)。
sys vmotionEnabled	vMotion の有効化	vMotion が有効な場合は 1、vMotion が無効な場合は 0 です。
sys notInMaintenance	メンテナンス中でない	メンテナンス中でない。

ホスト システムの管理エージェント メトリック

管理エージェント メトリックは、メモリ使用に関する情報を提供します。

表 7-38. ホスト システムの管理エージェント メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
managementAgent memUsed_average	メモリ使用量 (%)	使用可能な構成済み総メモリ容量。
managementAgent swapUsed_average	スワップで使用されているメモリ (KB)	ホスト上でパワーオン状態の全仮想マシンでスワップされるメモリの合計。

表 7-38. ホスト システムの管理エージェント メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
managementAgent swapIn_average	スワップ イン メモリ (KBps)	サービス コンソールでスワップ インされたメモリ容量。
managementAgent swapOut_average	スワップ アウト メモリ (KBps)	サービス コンソールでスワップ アウトされたメモリ容量。
managementAgent cpuUsage_average	CPU 使用量	CPU 使用量。

ホスト システムのストレージ パス メトリック

ストレージ パス メトリックは、データ ストレージの使用に関する情報を提供します。

表 7-39. ホスト システムのストレージ アダプタ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
storagePath totalLatency	遅延合計 (ミリ秒)	遅延合計 (ミリ秒)。
storagePath usage	合計使用量 (KBps)	遅延合計 (キロバイト毎秒単位)。
storagePath read_average	読み取り速度 (KBps)	仮想ディスクからのデータの読み取り速度。
storagePath write_average	書き込み速度 (KBps)	データの書き込み速度。
storagePath commandsAveraged_average	1 秒あたりのコマンド数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均発行コマンド数。
storagePath numberReadAveraged_average	1 秒あたりの読み取り数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均読み取りコマンド数。
storagePath totalWriteLatency_average	1 秒あたりの書き込み数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均書き込みコマンド数。
storagePath numberWriteAveraged_average	1 秒あたりの書き込み数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均書き込みコマンド数。
storagePath totalReadLatency_average	読み取り遅延 (ミリ秒)	ストレージ アダプタによる読み取り処理の平均時間。
storagePath maxTotalLatency_latest	最大遅延	最大遅延。
storagePath storagePathName	ストレージ パスの名前	ストレージ パスの名前。

ホスト システムのストレージ アダプタ メトリック

ストレージ アダプタ メトリックは、データ ストレージの使用に関する情報を提供します。

表 7-40. ホスト システムのストレージ アダプタ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
storageAdapter usage	合計使用量 (KBps)	遅延合計。
storageAdapter portWWN	ポートの WWN	ポートの World Wide Name
storageAdapter commandsAveraged_average	1 秒あたりのコマンド数	収集間隔中にストレージ アダプタにより発行された 1 秒あたりの平均コマンド数。
storageAdapter numberReadAveraged_average	1 秒あたりの読み取り数	収集間隔中にストレージ アダプタにより発行された 1 秒あたりの平均読み取りコマンド数。

表 7-40. ホスト システムのストレージ アダプタ メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
storageAdapter numberWriteAveraged_average	1 秒あたりの書き込み数	収集間隔中にストレージ アダプタにより発行された 1 秒あたりの平均書き込みコマンド数。
storageAdapter read_average	読み取り速度 (KBps)	ストレージ アダプタによるデータの読み取り速度。
storageAdapter totalReadLatency_average	読み取り遅延 (ミリ秒)	ストレージ アダプタによる読み取り処理の平均時間。遅延合計は、カーネル遅延とデバイス遅延の合計です。
storageAdapter totalWriteLatency_average	書き込み遅延 (ミリ秒)	ストレージ アダプタによる書き込み処理の平均時間。遅延合計は、カーネル遅延とデバイス遅延の合計です。
storageAdapter write_average	書き込み速度 (KBps)	ストレージ アダプタによるデータの書き込み速度。
storageAdapter demand	需要	需要。
storageAdapter maxTotalLatency_latest	最大遅延	最大遅延。
storageAdapter outstandingIOs_average	実行中の要求数	実行中の要求数。
storageAdapter queueDepth_average	キュー深度	キュー深度。
storageAdapter queueLatency_average	キュー コマンド遅延 (ミリ秒)	コマンドごとに ESX Server 仮想マシン カーネル キューでかかった平均時間。
storageAdapter queued_average	キュー	キューに入っている。

ホスト システムのストレージ メトリック

ストレージ メトリックでは、ストレージ使用に関する情報が提供されます。

表 7-41. ホスト システムのストレージ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
storage commandsAveraged_average	1 秒あたりのコマンド数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均発行コマンド数。
storage totalReadLatency_average	読み取り遅延 (ミリ秒)	読み取り処理の平均時間 (ミリ秒単位)。
storage read_average	読み取り速度 (KBps)	読み取りスループット速度 (キロバイト単位)。
storage numberReadAveraged_average	1 秒あたりの読み取り数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均読み取りコマンド数。
storage totalLatency_average	遅延合計 (ミリ秒)	遅延合計 (ミリ秒)。
storage usage_average	合計使用量 (KBps)	合計スループット速度 (キロバイト毎秒単位)。
storage totalWriteLatency_average	書き込み遅延 (ミリ秒)	書き込み処理の平均時間 (ミリ秒単位)。
storage write_average	書き込み速度 (KBps)	書き込みスループット速度 (キロバイト毎秒単位)。
storage numberWriteAveraged_average	1 秒あたりの書き込み数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均書き込みコマンド数。

ホスト システムのセンサー メトリック

センサー メトリックは、ホスト システムの冷却に関する情報を提供します。

表 7-42. ホスト システムのファン メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
Sensor fan currentValue	速度 (%)	ファン速度の割合。
Sensor fan healthState	健全性の状態	ファンの健全性の状態。
Sensor temperature currentValue	温度 C	ファンの温度 (摂氏)。
Sensor temperature healthState	健全性の状態	ファンの健全性の状態。

ホスト システムの電源メトリック

電源メトリックは、ホスト システムの電源使用に関する情報を提供します。

表 7-43. ホスト システムの電源メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
power energy_summation	エネルギー (ジュール)	ホストの電力使用量 (ジュール単位)。
power power_average	電力 (ワット)	ホストの電力使用量 (ワット単位)。
power powerCap_average	電力容量 (ワット)	ホストの電力キャパシティ (ワット単位)。

ホスト システムのディスク容量メトリック

ディスク容量メトリックでは、ディスク容量使用に関する情報が提供されます。

表 7-44. ホスト システムのディスク容量メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
diskspace notshared	未共有 (GB)	共有されていないディスク容量 (ギガバイト)。
diskspace numvmdisk	仮想ディスク数	仮想ディスク数。
diskspace shared	使用済みの共有 (GB)	使用中の共有ディスク容量 (ギガバイト単位)。
diskspace snapshot	スナップショット容量 (GB)	スナップショットによって使用されているディスク容量 (ギガバイト単位)。
diskspace diskused	使用済み仮想ディスク (GB)	仮想ディスクによって使用されているディスク容量 (ギガバイト単位)。
diskspace used	使用済み仮想マシン (GB)	仮想マシンによって使用されているディスク容量 (ギガバイト単位)。
diskspace total_usage	使用済みの総ディスク容量	このオブジェクトで認識できる、すべてのデータストアで使用済みの総ディスク容量。
diskspace total_capacity	総ディスク容量	このオブジェクトで認識できる、すべてのデータストア上の総ディスク容量。
diskspace total_provisioned	プロビジョニング済み総ディスク容量	このオブジェクトで認識できる、すべてのデータストア上のプロビジョニング済み総ディスク容量。

ホスト システムの概要メトリック

概要メトリックは、ホスト システムのパフォーマンス全般に関する情報を提供します。

表 7-45. ホスト システムの概要メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
summary number_running_vms	実行中の仮想マシンの数	オンになっている仮想マシンの数。
summary max_number_vms	仮想マシンの最大数	仮想マシンの最大数。
summary number_vmotion	vMotion 数	vMotion の数。
summary total_number_datastores	データストアの総数	データストアの総数。
summary number_running_vcpus	パワーオン状態の仮想マシンの VCPU 数	パワーオン状態の仮想マシンの VCPU の総数。
summary total_number_vms	仮想マシンの総数	仮想マシンの総数。
summary workload_indicator	ワークロード インジケータ (%)	ワークロード インジケータの割合。

ホスト システムの HBR メトリック

ホストベースのレプリケーション (HBR) メトリックは、vSphere レプリケーションに関する情報を提供します。

表 7-46. ホスト システムの HBR メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
hbr hbrNetRx_average	レプリケーション データ受信速度	レプリケーション データ受信速度。
hbr hbrNetTx_average	レプリケーション データ転送速度	レプリケーション データ転送速度。
hbr hbrNumVms_average	複製された VM 数	複製された仮想マシンの数。

クラスタ コンピューティング リソースのメトリック

vRealize Operations Manager では、クラスタ コンピューティング リソースの構成、ストレージ、ディスク領域、CPU 使用量、ディスク、メモリ、ネットワーク、電源、概要の各メトリックが収集されます。

クラスタ コンピューティング リソースのメトリックには、容量とバジのメトリックが含まれます。定義は以下を参照してください。

- [キャパシティとプロジェクト ベースのメトリック](#)
- [バジのメトリック](#)

クラスタ コンピューティング リソースの構成メトリック

構成メトリックは、構成設定に関する情報を提供します。

表 7-47. クラスタ コンピューティング リソースの構成メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
configuration dasconfig failoverLevel	フェイルオーバー レベル	DAS 構成のフェイルオーバー レベル。
configuration dasconfig activeAdministrationControlPolicy	アクティブなアドミSSION コントロール ポリシー	DAS 構成でアクティブなアドミSSION コントロール ポリシー。

表 7-47. クラスタ コンピューティング リソースの構成メトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
configuration dasconfig admissionControlPolicy cpuFailoverResourcesPercent	CPU フェイルオーバー リソース パーセンテージ	DAS 構成のアドミッション コントロール ポリシーに対する CPU フェイルオーバー リソース割合。
configuration dasconfig admissionControlPolicy memoryFailoverResourcesPercent	メモリ フェイルオーバー リソース パーセンテージ	DAS 構成のアドミッション コントロール ポリシーに対するメモリ フェイルオーバー リソース割合。

クラスタ コンピューティング リソースのストレージ メトリック

ストレージ メトリックでは、ストレージ使用に関する情報が提供されます。

表 7-48. クラスタ コンピューティング リソースのストレージ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
storage usage_average	合計使用量	合計スループット速度（キロバイト毎秒単位）。

クラスタ コンピューティング リソースのディスク領域メトリック

ディスク領域メトリックでは、ディスク領域使用に関する情報が提供されます。

表 7-49. クラスタ コンピューティング リソースのディスク領域メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
diskspace used	使用済み仮想マシン（GB）	仮想マシン ファイルによって使用されている領域（ギガバイト）。
diskspace total_usage	使用済みの総ディスク領域	このオブジェクトで認識できる、すべてのデータストアで使用済みの総ディスク領域。
diskspace total_capacity	総ディスク領域	このオブジェクトで認識できる、すべてのデータストア上の総ディスク領域。
diskspace total_provisioned	プロビジョニング済み総ディスク領域	このオブジェクトで認識できる、すべてのデータストア上のプロビジョニング済み総ディスク領域。
diskspace diskused	使用済み仮想ディスク（GB）	仮想ディスクによって使用されているディスク領域（ギガバイト）。
diskspace snapshot	スナップショット容量（GB）	スナップショットによって使用されているディスク領域（ギガバイト）。
diskspace shared	使用済みの共有（GB）	共有されている使用領域（ギガバイト）。
diskspace notshared	未共有（GB）	共有されていない仮想マシンによって使用されている領域（ギガバイト）。

クラスタ コンピューティング リソースの CPU 使用量メトリック

CPU 使用量メトリックは、CPU 使用についての情報を提供します。

表 7-50. クラスタ コンピューティング リソースの CPU 使用量メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
cpu capacity_usagepct_average	キャパシティ使用量	使用されているキャパシティ（割合）。
cpu capacity_contentionPct	CPU の競合	CPU キャパシティの競合。
cpu demandPct	デマンド	CPU デマンドのパーセンテージ。
cpu demandmhz	デマンド	デマンド（メガヘルツ）。
cpu iowait	IO 待ち時間	IO 待ち時間（ミリ秒）。
cpu numpackages	CPU ソケット数	CPU ソケット数。
cpu capacity_contention	CPU 全体の競合	CPU 全体の競合（ミリ秒）。
cpu capacity_provisioned	ホストのプロビジョニング済みキャパシティ	プロビジョニングされた CPU キャパシティ（メガヘルツ）。
cpu corecount_provisioned	プロビジョニング済み vCPU 数	プロビジョニングされた CPU コアの数。
cpu reservedCapacity_average	予約済みキャパシティ	ホストのルート リソース プールの直接の子の予約済みプロパティ合計（メガバイト）。
cpu wait	待機	アイドル状態であった CPU 時間（ミリ秒）。
cpu usagemhz_average	使用状況（MHz）	CPU 平均使用量（メガヘルツ）。
cpu totalCapacity_average	キャパシティ合計	CPU キャパシティの合計（メガヘルツ単位）。
cpu demand_average	デマンド	CPU デマンド。
cpu overhead_average	オーバーヘッド	CPU オーバーヘッドの量。
cpu demand_without_overhead	オーバーヘッドを含まないデマンド	オーバーヘッドを除いたデマンドの値。
cpu vm_capacity_provisioned	プロビジョニング済みキャパシティ	プロビジョニング済みキャパシティ（MHz）。
cpu num_hosts_stressed	ストレス状態になっているホストの数	ストレス状態になっているホストの数。
cpu stress_balance_factor	ストレス バランス係数	ストレス バランス係数。
cpu min_host_capacity_remaining	プロバイダの残りキャパシティが最小	プロバイダの残りキャパシティが最小。
cpu workload_balance_factor	ワークロード バランス係数	ワークロード バランス係数。
cpu max_host_workload	最大プロバイダ ワークロード	最大プロバイダ ワークロード。
cpu host_workload_disparity	ホスト ワークロードの最大/最小の不均衡	コンテナのホスト ワークロードの最大と最小の差。
cpu host_stress_disparity	ホスト ストレスの最大/最小の不均衡	コンテナのホスト ストレスの最大と最小の差。

クラスタ コンピューティング リソースのディスク メトリック

ディスク メトリックでは、ディスクの使用に関する情報が提供されます。

表 7-51. クラスタ コンピューティング リソースのディスク メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
disk commandsAveraged_average	1 秒あたりのコマンド数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均発行コマンド数。
disk totalLatency_average	ディスク コマンドの待ち時間 (ミリ秒)	ゲスト OS 側から見た平均コマンド時間。このメトリックは、カーネル コマンドの待ち時間と物理デバイス コマンド待ち時間のメトリックの合計です。
disk totalReadLatency_average	ディスク読込待ち時間	仮想ディスクからの読み取り処理の平均時間。合計待ち時間は、カーネル待ち時間とデバイス待ち時間の合計です。
disk totalWriteLatency_average	ディスク書込待ち時間	ゲスト OS 側 からの平均読み取り時間。これは、カーネル読み取り待ち時間および物理デバイス読み取り待ち時間の合計です
disk numberRead_summation	読み取り速度 (KBps)	定義された間隔中にディスクからデータが読み取られた回数。
disk numberReadAveraged_average	1 秒あたりの読み取り数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均読み取りコマンド数。
disk usage_average	使用速度 (KBps)	ホストまたは仮想マシンのすべてのディスク インスタンス間で読み書きされた合計データの平均。
disk numberWrite_summation	書き込み速度 (KBps)	収集間隔中にディスクにデータが書き込まれた回数。
disk numberWriteAveraged_average	1 秒あたりの書き込み数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均書き込みコマンド数。
disk read_average	読み取り要求	収集間隔中にディスクから読み取られたデータ量。
disk write_average	書き込み要求	収集間隔中にディスクに書き込まれたデータ量。
disk commands_summation	発行コマンド	収集間隔中に発行されたディスク コマンドの数。
disk sum_queued_oio	キューに入っている実行中 IO の合計	待機中の処理および未処理の合計数。
disk max_observed	観測された最大 OIO	1 つのディスクに対する観測された最大 IO 残数。

クラスタ コンピューティング リソースのメモリ メトリック

メモリ メトリックでは、メモリの使用と割り当てに関する情報が提供されます。

表 7-52. クラスタ コンピューティング リソースのメモリ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
mem activewrite_average	アクティブな書き込み (KB)	アクティブな書き込み (キロバイト)。
mem compressed_average	圧縮済み (KB)	平均圧縮 (キロバイト単位)。
mem compressionRate_average	圧縮率 (KBps)	平均圧縮率 (キロバイト単位)。
mem consumed_average	消費 (KB)	ゲスト メモリ用として仮想マシンによって消費されるホスト メモリ量。
mem host_contentionPct	競合	マシン競合のパーセンテージ。
mem host_contention	競合 (KB)	競合 (キロバイト)。
mem decompressionRate_average	圧縮解除率 (KBps)	圧縮解除率 (キロバイト単位)。
mem granted_average	付与 (KB)	使用できるメモリ容量。

表 7-52. クラスタ コンピューティング リソースのメモリ メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
mem active_average	アクティブなゲスト (KB)	有効に使用されているメモリ容量。
mem heap_average	ヒープ (KB)	ヒープに割り当てられたメモリ容量。
mem heapfree_average	ヒープの空き (KB)	ヒープの空き容量。
mem vmmemctl_average	バルーン	仮想マシンのメモリ制御に現在使用されているメモリ容量。
mem overhead_average	VM オーバーヘッド (KB)	ホストによって報告されたメモリ オーバーヘッド。
mem host_provisioned	プロビジョニング済みの容量 (KB)	プロビジョニング済みのメモリ (キロバイト単位)。
mem reservedCapacity_average	予約済みの容量 (KB)	予約済みの容量 (キロバイト単位)。
mem shared_average	共有 (KB)	共有メモリ量。
mem sharedcommon_average	一般共有 (KB)	一般共有メモリ量。
mem swapin_average	スワップ イン (KB)	サービス コンソールでスワップ インされたメモリ容量。
mem swapinRate_average	スワップ イン速度 (KBps)	間隔中にメモリがディスクからアクティブなメモリにスワップされる速度。
mem swapout_average	スワップ アウト (KB)	サービス コンソールでスワップ アウトされたメモリ容量。
mem swapoutRate_average	スワップ アウト速度 (KBps)	現在の間隔中にメモリがアクティブなメモリからディスクにスワップ アウトされる速度。
mem swapused_average	使用されるスワップ (KB)	スワップ領域に使用されるメモリ容量。
mem totalCapacity_average	合計容量 (KB)	合計容量 (キロバイト単位)。
mem unreserved_average	未予約 (KB)	未予約メモリ量。
mem host_usable	使用可能メモリ (KB)	使用可能なメモリ (キロバイト単位)。
mem host_usagePct	使用量/使用可能	メモリの使用率。
mem host_usage	ホスト使用量 (KB)	メモリ使用量 (キロバイト)。
mem host_demand	マシン デマンド	KB 単位でのメモリ マシン デマンド。
mem host_systemUsage	ESX システム使用量	VMkernel および ESX ユーザー レベル サービスによるメモリ使用量。
mem usage_average	使用量	使用可能な総メモリ量との割合での現在使用中のメモリ。
mem sysUsage_average	仮想マシン カーネル使用量 (KB)	仮想マシン カーネルで使用されるメモリ容量。
mem zero_average	ゼロ (KB)	すべて 0 のメモリ容量。
mem num_hosts_stressed	ストレス状態になっているホストの数	ストレス状態になっているホストの数。
mem stress_balance_factor	ストレス バランス係数	ストレス バランス係数。
mem min_host_capacity_remaining	プロバイダの残りキャパシティが最小	プロバイダの残りキャパシティが最小。
mem workload_balance_factor	ワークロード バランス係数	ワークロード バランス係数。
mem max_host_workload	最大プロバイダ ワークロード	最大プロバイダ ワークロード。

表 7-52. クラスタ コンピューティング リソースのメモリ メトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
mem host_workload_disparity	ホスト ワークロードの最大/最小の不均衡	コンテナのホスト ワークロードの最大と最小の差。
mem host_stress_disparity	ホスト ストレスの最大/最小の不均衡	コンテナのホスト ストレスの最大と最小の差。

クラスタ コンピューティング リソースのネットワーク メトリック

ネットワーク メトリックでは、ネットワーク パフォーマンスに関する情報が提供されます。

表 7-53. クラスタ コンピューティング リソースのネットワーク メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
net received_average	データ受信速度 (KBps)	1 秒あたりの受信データ量の平均。
net transmitted_average	データ転送速度 (KBps)	1 秒あたりの転送データ量の平均。
net dropped	ドロップされたパケット数	パフォーマンス間隔中にドロップされたパケット数。
net droppedPct	ドロップされたパケット (%)	ドロップされたパケットのパーセンテージ。
net packetsRx_summation	パケット受信数	パフォーマンス間隔中に受信されたパケット数。
net packetsTx_summation	パケット転送数	パフォーマンス間隔中に転送されたパケット数。
net droppedRx_summation	ドロップされた受信パケット数	パフォーマンス間隔中にドロップされた受信パケット数。
net droppedTx_summation	ドロップされた転送パケット数	パフォーマンス間隔中にドロップされた転送パケット数。
net usage_average	使用速度 (KBps)	ホストまたは仮想マシンのすべての NIC インスタンスで送受信されたデータの合計。
net maxObservedKBps	観測最大スループット	観測されたネットワーク スループット最高速度。
net maxObserved_Tx_KBps	観測最大転送スループット	観測されたネットワーク スループット転送最高速度。
net maxObserved_Rx_KBps	観測最大受信スループット	観測されたネットワーク スループット受信最高速度。

クラスタ コンピューティング リソースのデータストアのメトリック

データストアのメトリックでは、データストア使用に関する情報が提供されます。

表 7-54. クラスタ コンピューティング リソースのデータストアのメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
datastore maxObserved_NumberRead	1 秒あたりに観測された読み取りの最大数	収集間隔中に観測された 1 秒あたりの最大発行読み取り平均コマンド数。
datastore maxObserved_Read	観測された読み取り最高速度	観測されたデータストアからのデータ読み取りの最高速度。
datastore maxObserved_NumberWrite	1 秒あたりに観測された書き込みの最大数	収集間隔中に観測された 1 秒あたりの最大発行書き込み平均コマンド数。
datastore maxObserved_Write	観測された書き込み最高速度	データストアからのデータ書き込みの観測最大速度。
datastore maxObserved_OIO	観測された未処理 IO 処理の最大数	観測された未処理 IO 処理の最大数。
datastore demand_oio	未処理の IO 要求	データストアの OIO。

表 7-54. クラスタ コンピューティング リソースのデータストアのメトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
datastore numberReadAveraged_average	1 秒あたりの読み取り数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均読み取りコマンド数。
datastore numberWriteAveraged_average	1 秒あたりの書き込み数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均書き込みコマンド数。
datastore read_average	読み取り速度	パフォーマンス間隔中に読み取られたデータ量。
datastore write_average	書き込み速度	パフォーマンス間隔中にディスクに書き込まれたデータ量。

クラスタ コンピューティング リソースのクラスタ サービス メトリック

クラスタ サービス メトリックには、クラスタ サービスに関する情報が示されます。

表 7-55. クラスタ コンピューティング リソースのクラスタ サービス メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
clusterServices effectivecpu_average	有効な CPU リソース (MHz)	使用可能な VMware DRS での有効な CPU リソース。
clusterServices effectivemem_average	有効なメモリ リソース (KB)	使用可能な VMware DRS での有効なメモリ リソース。

クラスタ コンピューティング リソースの電源メトリック

電力メトリックでは、電力使用に関する情報が提供されます。

表 7-56. クラスタ コンピューティング リソースの電源メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
power energy_summation	エネルギー (ジュール)	エネルギー使用量 (ジュール)。
power power_average	電力 (ワット)	平均電力使用量 (ワット)。
power powerCap_average	電力容量 (ワット)	平均電力容量 (ワット単位)。

クラスタ コンピューティング リソースの概要メトリック

サマリ メトリックでは、全体的なパフォーマンスに関する情報が提供されます。

表 7-57. クラスタ コンピューティング リソースの概要メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
summary number_running_hosts	実行中のホストの数	実行中のホストの数。
summary number_running_vms	実行中の仮想マシンの数	実行中の仮想マシンの数。
summary number_vmotion	vMotion 数	vMotion の数。
summary total_number_hosts	ホストの総数	ホストの総数。
summary total_number_vms	仮想マシンの総数	仮想マシンの総数。
summary max_number_vms	仮想マシンの最大数	仮想マシンの最大数。

表 7-57. クラスタ コンピューティング リソースの概要メトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
summary workload_indicator	ワークロード インジケータ	ワークロード インジケータの割合。
summary total_number_datastores	データストアの総数	データストアの総数。
summary number_running_vcpus	パワーオン状態の仮想マシンの VCPU 数	パワーオン状態の仮想マシンの仮想 CPU 数。
summary avg_vm_density	実行中のホスト 1 台あたりの実行中の仮想マシンの平均数	実行中のホスト 1 台あたりの実行中の仮想マシンの平均数。
summary avg_vm_cpu	実行中の仮想マシン 1 台あたりのプロビジョニングされた処理能力の平均 (MHz)	実行中の仮想マシン 1 台あたりのプロビジョニングされた処理能力の平均 (メガヘルツ単位)。
summary avg_vm_mem	実行中の仮想マシン 1 台あたりのプロビジョニング済みメモリの平均 (KB)	プロビジョニングされた平均メモリ (キロバイト単位)。実行中の仮想マシンあたり。

リソース プールのメトリック

vRealize Operations Manager では、リソース プール オブジェクトの構成、CPU 使用量、メモリ、サマリのメトリックが収集されます。

リソース プールのメトリックには容量メトリックとバッジ メトリックが含まれます。定義は以下を参照してください。

- [キャパシティとプロジェクト ベースのメトリック](#)
- [バッジのメトリック](#)

リソース プールの構成メトリック

構成メトリックは、メモリと CPU の割り当て構成についての情報を提供します。

表 7-58. リソース プールの構成メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
config mem_alloc_reservation	メモリ割り当ての予約	メモリ割り当ての予約。

リソース プールの CPU 使用量メトリック

CPU 使用量メトリックは、CPU 使用についての情報を提供します。

表 7-59. リソース プールの CPU 使用量メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
cpu capacity_demandEntitlementPct	容量の需要の資格 (%)	CPU キャパシティ デマンドの資格パーセンテージ。
cpu capacity_entitlement	容量の付与資格 (MHz)	CPU キャパシティの資格。
cpu capacity_contentionPct	CPU の競合 (%)	CPU キャパシティの競合。
cpu demandmhz	需要 (MHz)	CPU 需要 (メガヘルツ)。
cpu capacity_contention	CPU 全体の競合 (ミリ秒)	CPU 全体の競合 (ミリ秒)。

表 7-59. リソース プールの CPU 使用量メトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
cpu usagemhz_average	使用法	CPU 平均使用量（メガヘルツ）。
cpu effective_limit	有効な制限	CPU の実効リミット。
cpu reservation_used	使用済みの予約	使用済み CPU 予約。
cpu estimated_entitlement	資格概算値	CPU 資格概算値。
cpu dynamic_entitlement	動的資格値	CPU 動的資格値。
cpu demand_without_overhead	オーバーヘッドを含まないデマンド	オーバーヘッドを除いたデマンドの値

リソース プールのメモリ メトリック

メモリ メトリックでは、メモリの使用と割り当てに関する情報が提供されます。

表 7-60. リソース プールのメモリ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
mem vmmemctl_average	バルーン（KB）	仮想マシンのメモリ制御に現在使用されているメモリ容量。
mem compressionRate_average	圧縮率（KBps）	1 秒あたりの圧縮率（キロバイト）。
mem consumed_average	消費（KB）	ゲスト メモリ用として仮想マシンによって消費されるホスト メモリ量。
mem host_contentionPct	競合（%）	マシン競合のパーセンテージ。
mem guest_usage	ゲスト使用量	ゲスト メモリ資格値。
mem guest_demand	ゲスト デマンド	ゲスト メモリ資格値。
mem host_contention	競合（KB）	マシンの競合（キロバイト）。
mem decompressionRate_average	圧縮解除率（KBps）	1 秒あたりの圧縮解除率（キロバイト）。
mem granted_average	付与（KB）	使用できるメモリの平均。
mem active_average	アクティブなゲスト（KB）	有効に使用されているメモリ容量。
mem overhead_average	VM オーバーヘッド（KB）	ホストによって報告されたメモリ オーバーヘッド。
mem shared_average	共有（KB）	共有メモリ量。
mem reservation_used	使用済みの予約	使用済みメモリ予約。
mem dynamic_entitlement	動的資格値	メモリ動的資格値。
mem effective_limit	実効リミット	メモリ実効リミット。
mem swapinRate_average	swapinRate_average	間隔中にメモリがディスクからアクティブなメモリにスワップされる速度。
mem swapoutRate_average	swapoutRate_average	直近の計測間隔中にメモリがアクティブ メモリからディスクにスワップ アウト中の速度。
mem swapped_average	スワップ済み（KB）	未予約メモリ量。
mem usage_average	使用率（%）	使用可能な総メモリ量との割合での現在使用中のメモリ。

表 7-60. リソース プールのメモリ メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
mem zero_average	ゼロ (KB)	すべて 0 のメモリ容量。
mem zipped_latest	zip 圧縮済み (KB)	最新の圧縮されたメモリ (キロバイト)。
mem swapin_average	スワップ イン (KB)	スワップ イン メモリ量 (キロバイト)。
mem swapout_average	スワップ アウト (KB)	スワップ アウト メモリ量 (キロバイト)。
mem swapused_average	使用されるスワップ (KB)	スワップ領域に使用されるメモリ容量 (キロバイト)。
mem guest_provisioned	構成済みゲスト メモリ (KB)	構成済みゲスト メモリ (キロバイト)。

リソース プールのサマリ メトリック

サマリ メトリックでは、全体的なパフォーマンスに関する情報が提供されます。

表 7-61. リソース プールのサマリ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
summary number_running_vms	実行中の仮想マシンの数	実行中の仮想マシンの数。
summary total_number_vms	仮想マシンの総数	仮想マシンの総数。
summary iowait	IO 待ち時間 (ミリ秒)	IO 待ち時間 (ミリ秒)。

データセンターのメトリック

vRealize Operations Manager では、データセンター オブジェクトの CPU 使用量、ディスク、メモリ、ネットワーク、ストレージ、ディスク領域、およびサマリのメトリックが収集されます。

データセンターのメトリックには、キャパシティとバジジのメトリックが含まれます。定義は以下を参照してください。

- [キャパシティとプロジェクト ベースのメトリック](#)
- [バジジのメトリック](#)

データセンターの CPU 使用量メトリック

CPU 使用量メトリックは、CPU 使用についての情報を提供します。

表 7-62. データセンターの CPU 使用量メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
cpu capacity_usagepct_average	キャパシティ使用率 (%)	使用されているキャパシティ (割合)。
cpu capacity_contentionPct	CPU の競合 (%)	CPU キャパシティの競合。
cpu demandPct	デマンド (%)	CPU デマンドのパーセンテージ。
cpu demandmhz	デマンド	デマンド (メガヘルツ)。
cpu demand_average	デマンド (MHz)	CPU デマンド。
cpu overhead_average	オーバーヘッド (KB)	CPU オーバーヘッドの量。
cpu demand_without_overhead	オーバーヘッドを含まないデマンド	オーバーヘッドを除いたデマンドの値。

表 7-62. データセンターの CPU 使用量メトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
cpu wait	合計待ち時間	アイドル状態であった CPU 時間。
cpu numpackages	CPU ソケット数	CPU ソケット数。
cpu capacity_contention	CPU 全体の競合（ミリ秒）	CPU 全体の競合（ミリ秒）。
cpu capacity_provisioned	ホストのプロビジョニング済みキャパシティ (MHz)	プロビジョニング済みキャパシティ（メガヘルツ）。
cpu corecount_provisioned	プロビジョニング済み vCPU 数	プロビジョニング済み vCPU 数。
cpu reservedCapacity_average	予約済みキャパシティ（MHz）	ホストのルート リソース プールの直接の子の予約済みプロパティ合計。
cpu usagemhz_average	使用量	CPU 平均使用量（メガヘルツ）。
cpu iowait	IO 待ち時間	IO 待ち時間（ミリ秒）。
cpu vm_capacity_provisioned	プロビジョニング済みキャパシティ	プロビジョニング済みキャパシティ。
cpulstress_balance_factor	ストレス バランス係数	ストレス バランス係数。
cpulmin_host_capacity_remaining	プロバイダの残りキャパシティが最小	プロバイダの残りキャパシティが最小。
cpulworkload_balance_factor	ワークロード バランス係数	ワークロード バランス係数。
cpulmax_host_workload	最大プロバイダ ワークロード	最大プロバイダ ワークロード。
cpulhost_workload_disparity	ホスト ワークロードの最大/最小の不均衡	コンテナのホスト ワークロードの最大と最小の差。
cpulhost_stress_disparity	ホスト ストレスの最大/最小の不均衡	コンテナのホスト ストレスの最大と最小の差。

データセンターのディスク メトリック

ディスク メトリックでは、ディスクの使用に関する情報が提供されます。

表 7-63. データセンターのディスク メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
disk commandsAveraged_average	1 秒あたりのコマンド数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均発行コマンド数。
disk totalLatency_average	ディスク コマンドの待ち時間（ミリ秒）	ゲスト OS 側から見た平均コマンド時間。このメトリックは、カーネル ディスク コマンドの待ち時間と物理デバイス コマンド待ち時間のメトリックの合計です。
disk usage_average	使用速度（KBps）	ホストまたは仮想マシンのすべてのディスク インスタンス間で読み書きされた合計データの平均。
disk sum_queued_oio	待機中の未処理の合計処理数	待機中の処理および未処理の合計数。
disk max_observed	観測された最大 OIO	1 つのディスクに対する観測された最大 IO。

データセンターのメモリ メトリック

メモリ メトリックでは、メモリの使用と割り当てに関する情報が提供されます。

表 7-64. データセンターのメモリ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
mem host_contentionPct	競合 (%)	マシン競合のパーセンテージ。
mem host_demand	マシン デマンド (KB)	メモリ マシン デマンド (キロバイト)。
mem host_systemUsage	ESX システム使用量	仮想マシン カーネルおよび ESX ユーザー レベル サービスによるメモリ使用量。
mem host_provisioned	プロビジョニング済みの容量 (KB)	プロビジョニング済みのホスト メモリ (キロバイト)。
mem reservedCapacity_average	予約済みの容量 (KB)	予約済みのメモリ容量 (キロバイト)。
mem host_usable	使用可能メモリ (KB)	使用可能なホスト メモリ (キロバイト)
mem host_usage	ホスト使用量	ホストのメモリ使用量 (キロバイト)。
mem host_usagePct	使用量 / 使用可能 (%)	使用されているホスト メモリ (割合)。
mem overhead_average	VM オーバーヘッド	ホストによって報告されたメモリ オーバーヘッド。
mem stress_balance_factor	ストレス バランス係数	ストレス バランス係数。
mem min_host_capacity_remaining	プロバイダの残りキャパシティが最小	プロバイダの残りキャパシティが最小。
mem workload_balance_factor	ワークロード バランス係数	ワークロード バランス係数。
mem max_host_workload	最大プロバイダ ワークロード	最大プロバイダ ワークロード。
mem host_workload_disparity	ホスト ワークロードの最大/最小の不均衡	コンテナのホスト ワークロードの最大と最小の差。
mem host_stress_disparity	ホスト ストレスの最大/最小の不均衡	コンテナのホスト ストレスの最大と最小の差。

データセンターのネットワーク メトリック

ネットワーク メトリックでは、ネットワーク パフォーマンスに関する情報が提供されます。

表 7-65. データセンターのネットワーク メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
net droppedPct	ドロップされたパケット数	ドロップされたパケットのパーセンテージ。
net maxObservedKBps	観測最大スループット	観測されたネットワーク スループット最高速度。
net maxObserved_Tx_KBps	観測最大転送スループット	観測されたネットワーク スループット転送最高速度。
net maxObserved_Rx_KBps	観測最大受信スループット	観測されたネットワーク スループット受信最高速度。
net transmitted_average	データ転送速度	1 秒あたりの転送データ量の平均。
net received_average	データ受信速度	1 秒あたりの受信データ量の平均。
net usage_average	使用速度 (KBps)	ホストまたは仮想マシンのすべての NIC インスタンスで送受信されたデータの合計。

データセンターのストレージ メトリック

ストレージ メトリックでは、ストレージ使用に関する情報が提供されます。

表 7-66. データセンターのストレージ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
storage usage_average	合計使用量	合計スループット速度。

データセンターのデータストア メトリック

データストアのメトリックでは、データストア使用に関する情報が提供されます。

表 7-67. データセンターのデータストア メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
datastore maxObserved_NumberRead	1 秒あたりに観測された読み取りの最大数	収集間隔中に観測された 1 秒あたりの最大発行読み取り平均コマンド数。
datastore maxObserved_Read	観測された読み取り最高速度	観測されたデータストアからのデータ読み取りの最高速度。
datastore maxObserved_NumberWrite	1 秒あたりに観測された書き込みの最大数	収集間隔中に観測された 1 秒あたりの最大発行書き込み平均コマンド数。
datastore maxObserved_Write	観測された書き込み最高速度	データストアからのデータ書き込みの観測最大速度。
datastore maxObserved_OIO	観測された未処理 IO 処理の最大数	観測された未処理 IO 処理の最大数。
datastore demand_oio	未処理の IO 要求	データストアの OIO。
datastore numberReadAveraged_average	1 秒あたりの読み取り数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均読み取りコマンド数。
datastore numberWriteAveraged_average	1 秒あたりの書き込み数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均書き込みコマンド数。
datastore read_average	読み取り速度	パフォーマンス間隔中に読み取られたデータ量。
datastore write_average	書き込み速度	パフォーマンス間隔中にディスクに書き込まれたデータ量。

データセンターのディスク容量メトリック

ディスク容量メトリックは、ディスクの使用に関する情報を提供します。

表 7-68. データセンターのディスク容量メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
diskspace used	使用済み仮想マシン	使用済み仮想マシンのディスク容量（ギガバイト）。
diskspace total_usage	使用済みの総ディスク領域	このオブジェクトで認識できる、すべてのデータストアで使用済みの総ディスク領域。
diskspace total_capacity	総ディスク領域	このオブジェクトで認識できる、すべてのデータストア上の総ディスク領域。

表 7-68. データセンターのディスク容量メトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
diskspace total_provisioned	プロビジョニング済み総ディスク領域	このオブジェクトで認識できる、すべてのデータストア上のプロビジョニング済み総ディスク領域。
diskspace notshared	未共有（GB）	共有されていないディスク容量（ギガバイト）。
diskspace shared	使用済みの共有（GB）	共有されているディスク容量（ギガバイト）。
diskspace snapshot	スナップショット容量（GB）	スナップショット ディスク容量（ギガバイト）。
diskspace diskused	使用済み仮想ディスク（GB）	使用済み仮想ディスク領域（ギガバイト）。
diskspace numvmdisk	仮想ディスク数	仮想ディスク数。

データセンターのサマリ メトリック

サマリ メトリックでは、全体的なパフォーマンスに関する情報が提供されます。

表 7-69. データセンターのサマリ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
summary number_running_hosts	実行中のホストの数	オンになっているホスト数。
summary number_running_vms	実行中の仮想マシンの数	実行中の仮想マシンの数。
summary max_number_vms	仮想マシンの最大数	仮想マシンの最大数。
summary total_number_clusters	クラスタの総数	クラスタの総数。
summary total_number_hosts	ホストの総数	ホストの総数。
summary total_number_vms	仮想マシンの総数	仮想マシンの総数。
summary total_number_datastores	データストアの総数	データストアの総数。
summary number_running_vcpus	パワーオン状態の仮想マシンの VCPU 数	パワーオン状態の仮想マシンの VCPU の総数。
summary workload_indicator	ワークロード インジケータ	ワークロード インジケータ。
summary avg_vm_density	実行中のホスト 1 台あたりの実行中の仮想マシンの平均数	実行中のホスト 1 台あたりの実行中の仮想マシンの平均数。

カスタム データセンターのメトリック

vRealize Operations Manager では、カスタム データセンター オブジェクトの CPU 使用量、メモリ、サマリ、ネットワーク、およびデータストア メトリックが収集されます。

カスタム データセンターのメトリックには、キャパシティとバッジのメトリックが含まれます。定義は以下を参照してください。

- [キャパシティとプロジェクト ベースのメトリック](#)
- [バッジのメトリック](#)

カスタム データセンターの CPU 使用量メトリック

CPU 使用量メトリックは、CPU 使用についての情報を提供します。

表 7-70. カスタム データセンターの CPU 使用量メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
cpu capacity_provisioned	ホストのプロビジョニング済みキャパシティ	ホストのプロビジョニング済みキャパシティ (MHz)
cpu corecount_provisioned	プロビジョニング済み vCPU 数	プロビジョニング済み vCPU 数。
cpu demand_without_overhead	オーバーヘッドを含まないデマンド	オーバーヘッドを除いたデマンドの値。
cpu num_hosts_stressed	ストレス状態になっているホストの数	ストレス状態になっているホストの数。
cpulstress_balance_factor	ストレス バランス係数	ストレス バランス係数。
cpulmin_host_capacity_remaining	プロバイダの残りキャパシティが最小	プロバイダの残りキャパシティが最小。
cpu workload_balance_factor	ワークロード バランス係数	ワークロード バランス係数。
cpulmax_host_workload	最大プロバイダ ワークロード	最大プロバイダ ワークロード。
cpu host_workload_disparity	ホスト ワークロードの最大/最小の不均衡	ホスト ワークロードの最大/最小の不均衡。
cpu host_stress_disparity	ホスト ストレスの最大/最小の不均衡	コンテナのホスト ストレスの最大と最小の差。

カスタム データセンターのメモリ メトリック

メモリ メトリックは、メモリ使用に関する情報を提供します。

表 7-71. カスタム データセンターのメモリ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
mem host_usable	使用可能メモリ	使用可能なメモリ。
mem host_demand	マシン デマンド	KB 単位でのメモリ マシン デマンド。
mem num_hosts_stressed	ストレス状態になっているホストの数	ストレス状態になっているホストの数。
mem stress_balance_factor	ストレス バランス係数	ストレス バランス係数。
mem min_host_capacity_remaining	プロバイダの残りキャパシティが最小	プロバイダの残りキャパシティが最小。
mem workload_balance_factor	ワークロード バランス係数	ワークロード バランス係数。
mem max_host_workload	最大プロバイダ ワークロード	最大プロバイダ ワークロード。
mem host_workload_disparity	ホスト ワークロードの最大/最小の不均衡	ホスト ワークロードの最大/最小の不均衡。
mem host_stress_disparity		ホスト ストレスの最大/最小の不均衡。

カスタム データセンターのサマリ メトリック

サマリ メトリックでは、全体的なパフォーマンスに関する情報が提供されます。

表 7-72. カスタム データセンターのサマリ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
summary number_running_vms	実行中の仮想マシンの数	オンになっている仮想マシンの数。
summary max_number_vms	仮想マシンの最大数	仮想マシンの最大数。
summary status	ステータス	データセンターのステータス。

カスタム データセンターのネットワーク メトリック

ネットワーク メトリックでは、ネットワーク パフォーマンスに関する情報が提供されます。

表 7-73. カスタム データセンターのネットワーク メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
net usage_average	使用率	ホストまたは仮想マシンのすべての NIC インスタンスで送受信されたデータの合計。
net maxObserved_KBps	観測最大スループット	観測されたネットワーク スループット最高速度。
net maxObserved_Tx_KBps	観測最大転送スループット	観測されたネットワーク スループット転送最高速度。
net maxObserved_Rx_KBps	観測最大受信スループット	観測されたネットワーク スループット受信最高速度。
net transmitted_average	データ転送速度	1 秒あたりの転送データ量の平均。
net received_average	データ受信速度	1 秒あたりの受信データ量の平均。

カスタム データセンターのデータストア メトリック

データストアのメトリックでは、データストア使用に関する情報が提供されます。

表 7-74. カスタム データセンターのデータストア メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
datastore maxObserved_NumberRead	1 秒あたりに観察された読み取りの最大数	収集間隔中に観察された 1 秒あたりの最大発行読み取り平均コマンド数。
datastore maxObserved_Read	観察された読み取り最高速度	観察されたデータストアからのデータ読み取りの最高速度。
datastore maxObserved_NumberWrite	1 秒あたりに観察された書き込みの最大数	収集間隔中に観察された 1 秒あたりの最大発行書き込み平均コマンド数。
datastore maxObserved_Write	観察された書き込み最高速度	データストアからのデータ書き込みの観測最大速度。
datastore maxObserved_OIO	観察された未処理の IO 処理の最大数	実行中 IO 処理の観測最大数。
datastore demand_oio	未処理の IO 要求	データストアの OIO。
datastore numberReadAveraged_average	1 秒あたりの読み取り数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均読み取りコマンド数。
datastore numberWriteAveraged_average	1 秒あたりの書き込み数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均書き込みコマンド数。
datastore read_average	読み取り速度	パフォーマンス間隔中に読み取られたデータ量。
datastore write_average	書き込み速度	パフォーマンス間隔中にディスクに書き込まれたデータ量。

ストレージ ポッドのメトリック

vRealize Operations Manager では、ストレージ ポッド オブジェクトのデータストアおよびディスク領域メトリックが収集されます。

ストレージ ポッドのメトリックにはキャパシティ メトリックとバッジ メトリックが含まれます。定義は以下を参照してください。

- [キャパシティとプロジェクト ベースのメトリック](#)

- [バッジのメトリック](#)

表 7-75. ストレージ ポッドのデータストア メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
datastore numberReadAveraged_average	1 秒あたりの読み取り数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均読み取りコマンド数。
datastore numberWriteAveraged_average	1 秒あたりの書き込み数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均書き込みコマンド数。
datastore read_average	読み取り速度	パフォーマンス間隔中に読み取られたデータ量。
datastore write_average	書き込み速度	パフォーマンス間隔中にディスクに書き込まれたデータ量。
datastore usage_average	平均使用量	平均使用量。
datastore totalReadLatency_average	読み取り待ち時間	データストアからの読み取り処理の平均時間。遅延合計 = カーネル遅延 + デバイス遅延。
datastore totalWriteLatency_average	書き込み待ち時間	データストアへの書き込み処理の平均時間。遅延合計 = カーネル遅延 + デバイス遅延。
datastore totalLatency_average	ディスク コマンドの待機時間	ゲスト OS 側からの平均コマンド時間。これは、カーネル コマンド待ち時間および物理デバイス コマンド待ち時間の合計です。
datastore commandsAveraged_average	1 秒あたりのコマンド数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均発行コマンド数。

表 7-76. ストレージ ポッドのディスク領域メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
diskspace disktotal	使用済み合計	使用済み領域合計。
diskspace freespace	空き領域	データストア上の未使用の使用可能領域
diskspace capacity	容量	データストアの総キャパシティ。
diskspace used	使用済み仮想マシン	仮想マシン ファイルによって使用されている領域。
diskspace snapshot	スナップショット領域	スナップショットによって使用されている領域。

VMware 分散仮想スイッチのメトリック

vRealize Operations Manager では、VMware 分散仮想スイッチ オブジェクトのネットワークおよびサマリ メトリックが収集されます。

VMware 分散仮想スイッチのメトリックには、容量メトリックおよびバッジ メトリックがあります。定義は以下を参照してください。

- [キャパシティとプロジェクト ベースのメトリック](#)

- [バッジのメトリック](#)

表 7-77. VMware 分散仮想スイッチのネットワーク メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
network port_statistics rx_bytes	入力側トラフィックの合計	入力側トラフィックの合計 (KBps)。
network port_statistics tx_bytes	出力側トラフィックの合計	出力側トラフィックの合計 (KBps)。
network port_statistics ucast_tx_pkts	1 秒あたりの出力側ユニキャスト パケット	1 秒あたりの出力側ユニキャスト パケット数。
network port_statistics mcast_tx_pkts	1 秒あたりの出力側マルチキャスト パケット	1 秒あたりの出力側マルチキャスト パケット数。
network port_statistics bcast_tx_pkts	1 秒あたりの出力側ブロードキャスト パケット	1 秒あたりの出力側ブロードキャスト パケット数。
network port_statistics ucast_rx_pkts	1 秒あたりの入力側ユニキャスト パケット	1 秒あたりの入力側ユニキャスト パケット数。
network port_statistics mcast_rx_pkts	1 秒あたりの入力側マルチキャスト パケット	1 秒あたりの入力側マルチキャスト パケット数。
network port_statistics bcast_rx_pkts	1 秒あたりの入力側ブロードキャスト パケット	1 秒あたりの入力側ブロードキャスト パケット数。
network port_statistics dropped_tx_pkts	1 秒あたりのドロップされた出力側パケット	1 秒あたりのドロップされた出力側パケット数。
network port_statistics dropped_rx_pkts	1 秒あたりのドロップされた入力側パケット	1 秒あたりのドロップされた入力側パケット数。
network port_statistics rx_pkts	1 秒あたりの合計入力側パケット	1 秒あたりの合計入力側パケット数。
network port_statistics tx_pkts	1 秒あたりの合計出力側パケット	1 秒あたりの合計出力側パケット数。
network port_statistics utilization	使用率	使用 (KBps)。
network port_statistics dropped_pkts	1 秒あたりのドロップされた合計パケット	1 秒あたりのドロップされた合計パケット数。
network port_statistics dropped_pkts_pct	ドロップされたパケットのパーセンテージです	ドロップされたパケットのパーセンテージ。
network port_statistics maxObserved_rx_bytes	観測最大入力側トラフィック (KBps)	観測最大入力側トラフィック量 (KBps)。
network port_statistics maxObserved_tx_bytes	観測最大出力側トラフィック (KBps)	観測最大出力側トラフィック量 (KBps)。
network port_statistics maxObserved_utilization	観測最大使用率です (KBps)	観測最大使用率 (KBps)。

表 7-78. VMware 分散仮想スイッチのサマリ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
summary max_num_ports	最大ポート数	最大ポート数。
summary used_num_ports	使用ポート数です	使用ポート数。
summary num_blocked_ports	ブロックされたポートの数	ブロックされたポートの数。

表 7-79. VMware 分散仮想スイッチのホスト メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
host mtu_mismatch	MTU の不一致	最大転送ユニット (MTU) の不一致。
host teaming_mismatch	チーミングの不一致	チーミングの不一致。
host mtu_unsupported	サポートされていない MTU	サポートされていない MTU。
host vlans_unsupported	サポートされていない VLAN	サポートされていない VLAN。
host config_outofsync	構成同期なし	構成同期なし。
host attached_pnics	接続された pNIC の数	接続された物理 NIC の数。

分散仮想ポート グループのメトリック

vCenter Adapter インスタンスは、分散仮想ポート グループのネットワーク メトリックと概要メトリックを収集します。

分散仮想ポート グループ メトリックには、容量メトリックとバッジ メトリックが含まれます。定義は以下を参照してください。

■ キャパシティとプロジェクト ベースのメトリック

■ バッジのメトリック

表 7-80. 分散仮想ポート グループのネットワーク メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
network port_statistics rx_bytes	入力側トラフィック	入力側トラフィック (KBps)。
network port_statistics tx_bytes	出力側トラフィック	出力側トラフィック (KBps)。
network port_statistics ucast_tx_pkts	1 秒あたりの出力側ユニキャスト パケット	1 秒あたりの出力側ユニキャスト パケット数。
network port_statistics mcast_tx_pkts	1 秒あたりの出力側マルチキャスト パケット	1 秒あたりの出力側マルチキャスト パケット数。
network port_statistics bcast_tx_pkts	1 秒あたりの出力側ブロードキャスト パケット	1 秒あたりの出力側ブロードキャスト パケット数。
network port_statistics ucast_rx_pkts	1 秒あたりの入力側ユニキャスト パケット	1 秒あたりの入力側ユニキャスト パケット数。
network port_statistics mcast_rx_pkts	1 秒あたりの入力側マルチキャスト パケット	1 秒あたりの入力側マルチキャスト パケット数。

表 7-80. 分散仮想ポート グループのネットワーク メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
network port_statistics bcast_rx_pkts	1 秒あたりの入力側ブロードキャスト パケット	1 秒あたりの入力側ブロードキャスト パケット数。
network port_statistics dropped_tx_pkts	1 秒あたりのドロップされた出力側パケット	1 秒あたりのドロップされた出力側パケット数。
network port_statistics dropped_rx_pkts	1 秒あたりのドロップされた入力側パケット	1 秒あたりのドロップされた入力側パケット数。
network port_statistics rx_pkts	1 秒あたりの合計入力側パケット	1 秒あたりの合計入力側パケット数。
network port_statistics tx_pkts	1 秒あたりの合計出力側パケット	1 秒あたりの合計出力側パケット数。
network port_statistics utilization	使用率	使用率 (KBps)。
network port_statistics dropped_pkts	1 秒あたりのドロップされた合計パケット	1 秒あたりのドロップされた合計パケット数。
network port_statistics dropped_pkts_pct	ドロップされたパケットのパーセンテージです	ドロップされたパケットのパーセンテージ。
network port_statistics maxObserved_rx_bytes	観測最大入力側トラフィック (KBps)	観測最大入力側トラフィック量 (KBps)。
network port_statistics maxObserved_tx_bytes	観測最大出力側トラフィック (KBps)	観測最大出力側トラフィック量 (KBps)。
network port_statistics maxObserved_utilization	観測最大使用率です (KBps)	観測最大使用率 (KBps)。

表 7-81. 分散仮想ポート グループの概要メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
summary max_num_ports	最大ポート数	最大ポート数。
summary used_num_ports	使用ポート数です	使用ポート数。
summary num_blocked_ports	ブロックされたポートの数	ブロックされたポートの数。

データストアのメトリック

vRealize Operations Manager では、データストア オブジェクトのキャパシティ、デバイス、およびサマリのメトリックが収集されます。

容量メトリックは、データストア オブジェクト用に計算できます。[キャパシティとプロジェクト ベースのメトリック](#)を参照してください。

データストアの容量メトリック

容量メトリックには、データストアの容量に関する情報が示されます。

表 7-82. データストアの容量メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
capacity available_space	使用可能な容量 (GB)	使用可能な容量 (ギガバイト単位)。
capacity contention	データストア容量の競合	データストア容量の競合。
capacity provisioned	プロビジョニング済み (GB)	データストア サイズ。
capacity total_capacity	合計容量 (GB)	合計容量 (ギガバイト単位)。
capacity used_space	使用領域 (GB)	使用領域 (ギガバイト単位)。
capacity workload	ワークロード (%)	キャパシティ ワークロード。
capacity uncommitted	コミットされていない領域 (GB)	コミットされていない領域 (ギガバイト単位)。
capacity consumer_provisioned	プロビジョニング済みコンシューマ領域の合計	プロビジョニング済みコンシューマ領域の合計。
capacity usedSpacePct	使用領域 (%)	使用済みデータストア領域のパーセンテージ。

データストアのデバイス メトリック

デバイス メトリックには、デバイスのパフォーマンスに関する情報が示されます。

表 7-83. データストアのデバイス メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
devices busResets_summation	バス リセット	パフォーマンス間隔中のバスのリセット数。
devices commandsAborted_summation	中止されたコマンド数	パフォーマンス間隔中に中止されたディスク コマンド数。
devices commands_summation	発行コマンド	パフォーマンス間隔中に発行されたディスク コマンド数。
devices totalLatency_average	ディスク コマンドの待ち時間 (ミリ秒)	ゲスト OS 側から見た平均コマンド時間。このメトリックは、カーネル ディスク コマンド待ち時間および物理デバイス コマンド待ち時間の合計です。
devices totalReadLatency_average	ディスク読み取り待ち時間 (ミリ秒)	ゲスト OS 側から見た平均読み取り時間。このメトリックは、カーネル ディスク読み取り待ち時間と物理デバイス読み取り待ち時間の合計です。
devices totalWriteLatency_average	ディスク書き込み待ち時間 (ミリ秒)	データストアへの書き込み処理の平均時間。合計待ち時間は、カーネル待ち時間とデバイス待ち時間の合計です。
devices kernelLatency_average	カーネル ディスク コマンドの待ち時間 (ミリ秒)	コマンドごとに ESX Server V. Kernel でかかった平均時間。
devices kernelLatency_average	カーネル ディスク読み取りの待ち時間 (ミリ秒)	読み取りごとに ESX ホスト仮想マシン カーネルでかかった平均時間。
devices kernelWriteLatency_average	カーネル ディスク書き込み待ち時間 (ミリ秒)	書き込みごとに ESX Server 仮想マシン カーネルでかかった平均時間。
devices number_running_hosts	実行中のホストの数	パワーオン状態で実行中のホストの数。
devices number_running_vms	実行中の仮想マシンの数	パワーオン状態で実行中の仮想マシンの数。

表 7-83. データストアのデバイス メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
devices deviceLatency_average	物理デバイス コマンド待ち時間 (ミリ秒)	物理デバイスからのコマンドを終了するまでの平均時間。
devices deviceReadLatency_average	物理デバイス読み取りの待ち時間 (ミリ秒)	物理デバイスからの読み取りを終了するまでの平均時間。
devices queueLatency_average	キュー コマンドの待ち時間 (ミリ秒)	コマンドごとに ESX Server 仮想マシン カーネル キューでかかった平均時間。
devices queueReadLatency_average	キュー読み取り待ち時間 (ミリ秒)	読み取りごとに ESX Server 仮想マシン カーネル キューでかかった平均時間。
devices queueWriteLatency_average	キュー書き込み待ち時間 (ミリ秒)	書き込みごとに ESX Server 仮想マシン カーネル キューでかかった平均時間。
devices read_average	読み取り速度 (KBps)	パフォーマンス間隔中に読み取られたデータ量。
devices numberRead_summation	読み取り要求	定義された間隔中にディスクからデータが読み取られた回数。
devices numberReadAveraged_average	1 秒あたりの読み取り数	収集間隔中にデータストアに発行された 1 秒あたりの平均読み取りコマンド数。
devices usage_average	平均使用状況 (KBps)	平均使用量 (キロバイト毎秒単位)。
devices write_average	書き込み速度 (KBps)	パフォーマンス間隔中にディスクに書き込まれたデータ量。
devices numberWrite_summation	書き込み要求	定義された間隔中にディスクにデータが書き込まれた回数。
devices numberWriteAveraged_average	1 秒あたりの書き込み数	収集間隔中にデータストアに発行された 1 秒あたりの平均書き込みコマンド数。
devices commandsAveraged_average	1 秒あたりのコマンド数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均発行コマンド数。
devices deviceWriteLatency_average	物理デバイス書き込み待ち時間 (ミリ秒)	物理デバイスからの書き込みを終了するまでの平均時間。

データストアのデータストア メトリック

データストアのメトリックでは、データストア使用に関する情報が提供されます。

表 7-84. データストアのデータストア メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
datastore totalLatency_average	ディスク コマンドの待ち時間 (ミリ秒)	ゲスト OS 側からの平均コマンド時間。これは、カーネル コマンド待ち時間および物理デバイス コマンド待ち時間の合計です。
datastore usage_average	平均使用状況 (KBps)	平均使用量 (キロバイト毎秒単位)。
datastore totalReadLatency_average	読み取り待ち時間 (ミリ秒)	データストアからの読み取り処理の平均時間。 遅延合計 = カーネル遅延 + デバイス遅延。
datastore totalWriteLatency_average	書き込み待ち時間 (ミリ秒)	データストアへの書き込み処理の平均時間。 遅延合計 = カーネル遅延 + デバイス遅延。
datastore demand	デマンド	需要。

表 7-84. データストアのデータストア メトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
datastore demand_indicator	デマンド インジケータ	デマンド インジケータ。
datastore maxObserved_NumberRead	1 秒あたりに観察された読み取りの最大数	収集間隔中に観測された、1 秒あたりの平均読み取りコマンド発行数の最大値。
datastore maxObserved_Read	観察された読み取り最高速度 (KBps)	観察されたデータストアからのデータ読み取りの最高速度。
datastore maxObserved_ReadLatency	観察された最大読み取り待ち時間 (ミリ秒)	データストアからの読み取り処理の観測最大平均時間。遅延合計 = カーネル遅延 + デバイス遅延。
datastore maxObserved_NumberWrite	1 秒あたりに観察された書き込みの最大数	収集間隔中に観察された 1 秒あたりの最大発行書き込み平均コマンド数。
datastore maxObserved_Write	観察された書き込み最高速度 (KBps)	データストアからのデータ書き込みの観測最大速度。
datastore maxObserved_WriteLatency	観察された最大書き込み待ち時間 (ミリ秒)	データストアからの書き込み処理の観測最大平均時間。遅延合計 = カーネル遅延 + デバイス遅延。
datastore maxObserved_OIO	観察された未処理の IO 処理の最大数	観察された未処理の IO 処理の最大数。
datastore demand_oio	未処理の IO 要求	データストアの OIO。
datastore numberReadAveraged_average	1 秒あたりの読み取り数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均読み取りコマンド数。
datastore numberWriteAveraged_average	1 秒あたりの書き込み数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均書き込みコマンド数。
datastore read_average	読み取り速度	パフォーマンス間隔中に読み取られたデータ量。
datastore write_average	書き込み速度	パフォーマンス間隔中にディスクに書き込まれたデータ量。

仮想 SAN のデータストア メトリックについて

datastore|oio|workload は、仮想 SAN データストアではサポートされていません。このメトリックは、仮想 SAN データストア用にサポートされている datastore|demand_oio に依存します。

datastore|demand_oio という名前のメトリックも、仮想 SAN データストアのその他のメトリックに依存し、その 1 つはサポートされていません。

- devices|numberReadAveraged_average および devices|numberWriteAveraged_average という名前のメトリックはサポートされていません。
- devices|totalLatency_average という名前のメトリックはサポートされていません。

その結果、vRealize Operations Manager は仮想 SAN データストアでは、datastore|oio|workload という名前のメトリックを収集しません。

データストアのディスク領域メトリック

ディスク領域メトリックでは、ディスク領域使用に関する情報が提供されます。

表 7-85. データストアのディスク領域メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
diskspace notshared	未共有 (GB)	共有されていない領域 (ギガバイト)。
diskspace numvmdisk	仮想ディスク数	仮想ディスク数。
diskspace provisioned	プロビジョニング済み容量 (GB)	プロビジョニング済み領域 (ギガバイト)。
diskspace shared	使用済みの共有 (GB)	共有されている使用領域 (ギガバイト)。
diskspace snapshot	スナップショット容量 (GB)	スナップショット領域 (ギガバイト)。
diskspace diskused	使用済み仮想ディスク (GB)	使用済み仮想ディスク領域 (ギガバイト単位)。
diskspace used	使用済み仮想マシン (GB)	使用済み仮想マシン領域 (ギガバイト単位)。
diskspace total_usage	使用済みの総ディスク領域	このオブジェクトで認識できる、すべてのデータストアで使用済みの総ディスク領域。
diskspace total_capacity	総ディスク領域	このオブジェクトで認識できる、すべてのデータストア上の総ディスク領域。
diskspace total_provisioned	プロビジョニング済み総ディスク領域	このオブジェクトで認識できる、すべてのデータストア上のプロビジョニング済み総ディスク領域。
diskspace disktotal	使用済み合計 (GB)	使用済み合計領域 (ギガバイト単位)。
diskspace swap	スワップ ファイル領域 (GB)	スワップ ファイル領域 (ギガバイト単位)。
diskspace otherused	その他の仮想マシン領域 (GB)	その他の仮想マシン領域 (ギガバイト単位)。
diskspace freespace	空き容量 (GB)	データストア上の未使用の使用可能領域
diskspace capacity	容量 (GB)	データストアの合計キャパシティ (ギガバイト単位)。
diskspace overhead	オーバーヘッド	オーバーヘッドしているディスク領域の量。

データストアの概要メトリック

サマリ メトリックでは、全体的なパフォーマンスに関する情報が提供されます。

表 7-86. データストアの概要メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
summary total_number_hosts	ホストの総数	ホストの総数。
summary total_number_vms	仮想マシンの総数	仮想マシンの総数。
summary max_number_vms	仮想マシンの最大数	仮想マシンの最大数。
summary workload_indicator	ワークロード インジケータ	ワークロード インジケータ。
summary total_number_clusters	クラスタの総数	クラスタの総数。

データストアのテンプレート メトリック

表 7-87. データストアのテンプレート メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
templatelused	使用済み仮想マシン	仮想マシン ファイルによって使用されている領域。
templatelaccessTime	アクセス時間	前回のアクセス時間

算出されたメトリック

vRealize Operations Manager は、容量、バッジ、システムの健全性のメトリックを計算します。算出されたメトリックは、各アダプタを記述する `describe.xml` ファイルで見つかったオブジェクトのサブセットに適用されます。

vCenter アダプタが収集するデータから、vRealize Operations Manager は次のタイプのオブジェクトのメトリックを計算します。

- vSphere ワールド
- 仮想マシン
- ホスト システム
- データストア

vRealize Operations Manager アダプタが収集するデータから、vRealize Operations Manager は次のタイプのオブジェクトのメトリックを計算します。

- ノード
- クラスタ

キャパシティとプロジェクト ベースのメトリック

キャパシティ エンジンが計算して発行するメトリックは、コンシューマのデマンドに基づいてリソースの使用を計画するときに役立ちます。プロジェクト ベースのメトリックは、キャパシティ メトリックのサブセットで、予測されるコンシューマのデマンドに基づいて、将来のリソースを計画するのに役立ちます。

キャパシティ メトリック グループ

キャパシティ メトリック グループでは、メトリックのフル ネームにリソース コンテナの名前が含まれます。たとえば、CPU またはメモリのために統合度のメトリックが計算される場合、実際のメトリック名は `cpuldensity` または `memldensity` として表示されます。

キャパシティ計算が可能なリソース コンテナにのみ、関連メトリックがあります。すべてのメトリック タイプがすべてのリソース コンテナ用に生成されるわけではありません。たとえば、CPU または メモリ リソース コンテナが統合度のポリシーで有効になっていて、ネットワーク リソース コンテナが有効になっていない場合、`cpuldensity` メトリックと `memldensity` メトリックは計算されますが、`networkldensity` メトリックは計算されません。

キャパシティ メトリックの定義には、コンシューマまたはプロバイダとして機能するリソース コンテナが含まれます。たとえば vSphere では、仮想マシンが ESX ホストが提供する CPU およびメモリのコンシューマになります。

表 7-88. キャパシティ メトリック グループ

メトリック キー	メトリック名	生成される対象	説明
capacityRemainingUsingConsumers_average	平均的コンシューマ プロファイルの残りキャパシティ	プロバイダ	残りキャパシティに収まる平均規模のコンシューマの数。平均規模のコンシューマでは、総キャパシティの 50% が必要です。
capacityRemainingUsingConsumers_small	小規模コンシューマ プロファイルの残りキャパシティ	プロバイダ	残りキャパシティに収まる小規模コンシューマの数。小規模コンシューマでは、総キャパシティの 0 ~ 33% が必要です。
capacityRemainingUsingConsumers_medium	中規模コンシューマ プロファイルの残りキャパシティ	プロバイダ	残りキャパシティに収まる中規模コンシューマの数。中規模コンシューマでは、総キャパシティの 33 ~ 66% が必要です。
capacityRemainingUsingConsumers_large	大規模コンシューマ プロファイルの残りキャパシティ	プロバイダ	残りキャパシティに収まる大規模コンシューマの数。大規模コンシューマでは、総キャパシティの 66 ~ 100% が必要です。
capacityRemaining	残りキャパシティ (%)	両方	リソース コンテナ内の残りキャパシティの割合。たとえば、リソース コンテナがメモリで、10 GB のメモリのうち 2 GB が未使用の場合、capacityRemaining = 20% となります。
underusedpercent	未活用 (%)	両方	使用されていないキャパシティの割合。
idletimepercent	アイドル時間 (%)	両方	一定時間の使用に基づく、リソースがアイドルの時間の割合。時間はポリシー設定です。設定されていない場合、デフォルトの期間は 30 日間です。たとえば、リソースが 30 日間のうち合計で 6 日間アイドルの場合、idletimepercent = 20% となります。
wasteValue	解放可能な容量	両方	一定時間のコンシューマのデマンドに基づく節約可能なキャパシティ。時間はポリシー設定です。設定されていない場合、デフォルトの期間は 30 日間です。たとえば、vSphere ホストに 10 GB のメモリが構成されているものの、30 日間のメモリ使用量の平均が 2 GB しかない場合、wasteValue = 8 GB となります。
size.recommendation	推奨サイズ	両方	一定時間のデマンドに基づくキャパシティの推奨。時間はポリシー設定です。設定されていない場合、デフォルトの期間は 30 日間です。たとえば、コンシューマのデマンドが 30 日間の平均で 2 GB のメモリの場合、キャパシティの推奨は 2 GB となります。
optimal.vConsumption.per.pConsumption	最適な消費比率	プロバイダ	一定期間のコンシューマのデマンドに基づいてプロビジョンするための理想的なリソース消費比率。理想的なリソースの消費は、現在のキャパシティがデマンドを満たしているときです。時間はポリシー設定です。設定されていない場合、デフォルトの期間は 30 日間です。

表 7-88. キャパシティ メトリック グループ (続き)

メトリック キー	メトリック名	生成される対象	説明
vConsumption.per.pConsumption	消費比率	プロバイダ	コンシューマのデマンドに基づいてプロビジョニングするための現在のリソース消費比率。
object.demand	ストレスなしのデマンド	両方	未補正デマンドの値のピーク分析に基づくデマンド。
object.capacity	使用可能な容量	両方	総キャパシティからバッファを差し引いたキャパシティ。キャパシティ バッファはポリシー設定です。
object.demand.percent	実効デマンド (%)	両方	実効デマンドに必要なキャパシティの割合。
powered.on.consumer.count	パワーオン状態の消費者数	両方	リソースを使用しているコンシューマ数。
base.demand	算出されたデマンド	両方	ピークを考慮するポリシー設定のない、自己デマンドまたはコンシューマ デマンドに基づくオブジェクトのデマンド。
actual.capacity	現在のサイズ	両方	バッファなしの実際のキャパシティ
wastePercent	節約可能なキャパシティ (%)	両方	一定時間のコンシューマのデマンドに基づく節約可能なキャパシティの割合。時間はポリシー設定です。設定されていない場合、デフォルトの期間は 30 日間です。たとえば、vSphere ホストに 10 GB のメモリが構成されているものの、30 日間でメモリ使用量の平均が 2 GB しかない場合、wastePercent = 80% となります。

オブジェクト レベルのメトリック グループ

オブジェクト レベルのメトリックは、特定のオブジェクト タイプのすべてのオブジェクトに対してキャパシティの使用を追跡するために計算されます。

表 7-89. オブジェクト レベルのメトリック グループ

メトリック キー	メトリック名	説明
summary timeRemaining	残り時間	使用可能なキャパシティがなくなるまでの残り時間。使用可能なキャパシティには、HA およびバッファ用に予約されているキャパシティは含まれません。
summary isStress	ストレス状態	値が 1、または黄色のバッジは、オブジェクトがストレス状態であることを示します。値が 0、または緑色のバッジは、オブジェクトがストレス状態にないことを示します。ポリシーで定義されたストレス バッジの場合、ストレスが最低しきい値を超えると、バッジの色が緑から黄色に変わります。
summary capacityRemainingValue	残り容量の値	残りキャパシティ。
summary oversized	過剰サイズ状態	オブジェクトに多すぎるキャパシティが構成されている場合には値 1 が表示され、そうでない場合は値 0 が表示されます。

表 7-89. オブジェクト レベルのメトリック グループ (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
summary idle	アイドル状態	オブジェクトがアイドル状態の場合には値 1 が表示され、そうでない場合は値 0 が表示されません。
summary poweredOff	パワーオフ	オブジェクトの電源状態を示します。値 1 はオンを意味し、値 0 はオフを意味します。
summary capacityRemainingUsingConsumers_average	残り容量 (平均消費者プロファイル)	平均コンシューマ デマンドに基づく残りキャパシティ。
summary capacityRemainingUsingConsumers_small	残り容量 (小規模消費者プロファイル)	小規模コンシューマ デマンドに基づく残りキャパシティ。
summary capacityRemainingUsingConsumers_medium	残り容量 (中規模消費者プロファイル)	中規模コンシューマ デマンドに基づく残りキャパシティ。
summary capacityRemainingUsingConsumers_large	残り容量 (大規模消費者プロファイル)	大規模コンシューマ デマンドに基づく残りキャパシティ。
summary capacityRemaining_min	残り容量 (瞬間的のピークに基づく)	ピーク デマンドまたはストレスに基づく残りキャパシティ。
summary capacity.provider.count	容量プロバイダ数	キャパシティ プロバイダの数。
summary consumer.count	キャパシティ コンシューマ数	キャパシティ コンシューマの数。
summary consumer.count.per.provider.count	コンシューマとプロバイダの比率	プロバイダの数に対するコンシューマの数の比率。
summary optimal.consumer.per.provider	コンシューマとプロバイダの最適な比率	コンシューマ デマンドに基づき、プロバイダに対して最適なコンシューマの比率。

プロジェクト ベースのメトリック

プロジェクト ベースのメトリックは、将来的にキャパシティに影響を及ぼす可能性のあるリソースやデマンドにおける変化のために計算されます。6 章 [vRealize Operations Manager を使用した管理対象環境のキャパシティの計画](#) を参照してください。ほとんどのメトリックは、_whatif とともにキャパシティ メトリック名に付加されて表示されます。たとえば、残りキャパシティに What-if が適用可能なメトリックは、capacityRemaining_whatif. として発行されます。

バッジのメトリック

バッジのメトリックでは、ユーザー インターフェイスのバッジの情報が提供されます。これらは環境内のオブジェクトの健全性、リスク、効率を報告します。

vRealize Operations Manager 6.x では、時間単位ではなく、5 分間平均のバッジ メトリック データを分析します。その結果、以前のバージョンよりも、効率性およびリスク バッジの計算の感度が高くなっています。バッジ メトリックは、引き続き夜間に公開されます。

表 7-90. バッジのメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
badge alert_count_critical	最重要アラート数	オブジェクトにおけるクリティカル アラートの数。
badge alert_count_immediate	緊急アラート数	オブジェクトにおける緊急アラートの数。
badge alert_count_info	情報アラート数	オブジェクトにおける情報アラートの数。
badge alert_count_warning	警告アラート数	オブジェクトにおける警告アラートの数。
badge anomaly	異常	アノマリの全体的なスコア (100 段階)。
badge capacityRemaining	残りキャパシティ	残りキャパシティの全体的なスコア (100 段階)。
badge compliance	コンプライアンス	コンプライアンスの全体的なスコア (100 段階)。
badge density	密度	統合度の全体的なスコア (100 段階)。
badge efficiency	効率	効率の全体的なスコア。スコアは、バッジの各状態を表す次のいずれかの値になります。緑： 100、黄： 75、オレンジ： 50、赤： 25、不明： -1。
badge efficiency_classic	レガシー効率	レガシー効率スコアは、vCenter Operations Manager バージョン 5.x により、100 段階で計算されます。後方互換性の目的のため。
badge efficiency_state	効率の状態	効率バッジの状態は、次の個別の値で表されます。緑： 1、黄： 2、オレンジ： 3、赤： 4、不明： -1。
badge fault	障害	障害の全体的なスコア (100 段階)。
badge health	健全性	健全性の全体的なスコア。スコアは、バッジの各状態を表す次のいずれかの値になります。緑： 100、黄： 75、オレンジ： 50、赤： 25、不明： -1。
badgelhealth_classic	レガシー健全性	レガシー健全性スコアは、vCenter Operations Manager 5.x により、100 段階で計算されます。後方互換性の目的のため。
badgelhealth_state	健全性状態	健全性バッジの状態は、次の個別の値で表されます。緑： 1、黄： 2、オレンジ： 3、赤： 4、不明： -1。
badge risk	リスク	リスクの全体的なスコア。スコアは、バッジの各状態を表す次のいずれかの値になります。緑： 0、黄： 25、オレンジ： 50、赤： 75、不明： -1。
badgelrisk_classic	レガシー リスク	レガシー リスク スコアは、vCenter Operations Manager 5.x により、100 段階で計算されます。後方互換性の目的のため。
badgelrisk_state	リスクの状態	リスク バッジの状態は、次の個別の値で表されます。緑： 1、黄： 2、オレンジ： 3、赤： 4、不明： -1。
badge stress	負荷	ストレスの全体的なスコア (100 段階)。
badge timeRemaining	残り時間 - リアルタイム	リアルタイムの残り時間の全体的なスコア (100 段階)。
badge waste	無駄	浪費度の全体的なスコア (100 段階)。
badge workload	ワークロード (%)	ワークロードの全体的なスコア (100 段階)。

システム メトリック

システム メトリックでは、システムの健全性の監視に使用される情報が提供されます。これらにより、環境内の問題を特定できます。

表 7-91. システム メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
System Attributes health	自分 - 健全性スコア	セルフ リソースのシステム健全性スコア
System Attributes all_metrics	自分 - メトリック数	セルフ リソースのメトリック数
System Attributes ki_metrics	自分 - KPI 数	セルフ リソースの KPI メトリック数
System Attributes active_alarms	自分 - アクティブなアノマリの数	セルフ リソースのアクティブなアラーム数
System Attributes new_alarms	自分 - 新規アノマリの数	セルフ リソースの新規のアラーム数
System Attributes active_ki_alarms	自分 - アクティブな KPI 違反数	セルフ リソースのアクティブな KPI アラーム数
System Attributes new_ki_alarms	自分 - 新規 KPI 違反数	セルフ リソースの新規の KPI アラーム数
System Attributes total_alarms	自分 - アノマリの合計	セルフ リソースの合計アラーム数
System Attributes change_index	自分 - インデックスの変更	セルフ リソースのインデックスの変更 (100 - 健全性スコア)
System Attributes child_all_metrics	フル セット - メトリック数	子リソースのメトリック数
System Attributes child_ki_metrics	フル セット - KPI 数	子リソースの KPI メトリック数
System Attributes child_active_alarms	フル セット - アクティブな異常の数	子リソースのアクティブなアラーム数
System Attributes child_new_alarms	フル セット - 新規異常の数	子リソースの新規のアラーム数
System Attributes child_active_ki_alarms	フル セット - アクティブな KPI 違反数	子リソースのアクティブな KPI アラーム数
System Attributes child_new_ki_alarms	フル セット - 新規 KPI 違反数	子リソースの新規の KPI アラーム数
System Attributes availability	可用性	リソースの可用性 (0-ダウン、1-アップ、-1-不明)
System Attributes alert_count_critical	最重要アラート数	クリティカル アラート数
System Attributes alert_count_immediate	緊急アラート数	緊急アラート数
System Attributes alert_count_warning	警告アラート数	警告アラート数
System Attributes alert_count_info	情報アラート数	情報アラート数

vRealize Operations Manager の自己監視メトリック

vRealize Operations Manager は、それ自体のパフォーマンスを監視するメトリックを収集するのに vRealize Operations Manager アダプタを使用します。vRealize Operations Manager オブジェクトの容量モデルを制御するこれらの自己監視メトリックは、vRealize Operations Manager の問題を診断するのに便利です。

分析メトリック

vRealize Operations Manager は、しきい値チェック メトリックなどの vRealize Operations Manager 分析サービスのメトリックを収集します。

表 7-92. 分析メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
ActiveAlarms	アクティブな動的しきい値シンプトム	アクティブな動的しきい値シンプトム。
ActiveAlerts	アクティブ アラート	アクティブ アラート。
PrimaryResourcesCount	プライマリ オブジェクト数	プライマリ オブジェクト数
LocalResourcesCount	ローカル オブジェクト数	ローカル オブジェクト数
PrimaryMetricsCount	プライマリ メトリックの数	プライマリ メトリックの数
LocalMetricsCount	ローカル メトリックの数	ローカル メトリックの数
ReceivedResourceCount	受信されたオブジェクトの数	受信されたオブジェクトの数
ReceivedMetricCount	受信されたメトリックの数	受信されたメトリックの数
LocalFDSIZE	転送データ エントリの数	ローカルに格納済みの転送データ領域のプライマリと冗長なエントリの数。
LocalPrimaryFDSIZE	プライマリ転送データ エントリの数	ローカルに格納済みの転送データ領域のプライマリ エントリの数。
LocalFDAISize	代替転送データ エントリの数	ローカルに格納済みの代替転送データ領域のプライマリと冗長なエントリの数。
LocalPrimaryFDAISize	代替プライマリ転送データ エントリの数	ローカルに格納済みの代替転送データ領域のプライマリ エントリの数。
CurrentHeapSize	現在のヒープ サイズ	現在のヒープ サイズ。
MaxHeapSize	最大ヒープ サイズ	最大ヒープ サイズ
CommittedMemory	コミットされたメモリ	コミットされたメモリ
CPUUsage	CPU 使用量	CPU 使用量
スレッド	スレッド	スレッド
UpStatus	スレッド	スレッド

分析サービスのしきい値全体のチェック メトリック

しきい値全体のチェックでは、着信観測データを処理するために使用される作業項目のさまざまなメトリックを取り込みます。しきい値全体のチェック メトリックのすべてのメトリック キーは、OverallThresholdChecking|Count や OverallThresholdChecking|CheckThresholdAndHealth|OutcomeObservationsSize|TotalCount と同様に、OverallThresholdChecking から始まります。

表 7-93. 分析サービスのしきい値全体のチェック メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
数	数	数
Duration TotalDuration	合計	合計所要時間 (ms)
Duration AvgDuration	平均値	平均経過時間 (ms)
Duration MinDuration	最小値	最短所要時間 (ms)
Duration MaxDuration	最大値	最大経過時間 (ms)
IncomingObservationsSize TotalCount	合計	合計

表 7-93. 分析サービスのしきい値全体のチェック メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
IncomingObservationsSize AvgCount	平均値	平均値
IncomingObservationsSize MinCount	最小	最小
IncomingObservationsSize MaxCount	最大	最大
CheckThresholdAndHealth Count	数	数
CheckThresholdAndHealth Duration TotalDuration	合計	合計所要時間 (ms)
CheckThresholdAndHealth Duration AvgDuration	平均値	平均経過時間 (ms)
CheckThresholdAndHealth Duration MinDuration	最小値	最短所要時間 (ms)
CheckThresholdAndHealth Duration MaxDuration	最大値	最大経過時間 (ms)
CheckThresholdAndHealth OutcomeObservationsSize TotalCount	合計	合計
CheckThresholdAndHealth OutcomeObservationsSize AvgCount	平均値	平均値
CheckThresholdAndHealth OutcomeObservationsSize MinCount	最小	最小
CheckThresholdAndHealth OutcomeObservationsSize MaxCount	最大	最大
SuperMetricComputation Count	数	数
SuperMetricComputation Duration TotalDuration	合計	合計所要時間 (ms)
SuperMetricComputation Duration AvgDuration	平均値	平均経過時間 (ms)
SuperMetricComputation Duration MinDuration	最小値	最短所要時間 (ms)
SuperMetricComputation Duration MaxDuration	最大値	最大経過時間 (ms)
SuperMetricComputation SuperMetricsCount TotalCount	合計	合計
SuperMetricComputation SuperMetricsCount AvgCount	平均値	平均値
SuperMetricComputation SuperMetricsCount MinCount	最小	最小
SuperMetricComputation SuperMetricsCount MaxCount	最大	最大
StoreObservationToFSDDB Count	数	数
StoreObservationToFSDDB Duration TotalDuration	合計	合計所要時間 (ms)

表 7-93. 分析サービスのしきい値全体のチェック メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
StoreObservationToFSDB Duration AvgDuration	平均値	平均経過時間 (ms)
StoreObservationToFSDB Duration MinDuration	最小値	最短所要時間 (ms)
StoreObservationToFSDB Duration MaxDuration	最大値	最大経過時間 (ms)
StoreObservationToFSDB StoredObservationsSize TotalCount	合計	合計
StoreObservationToFSDB StoredObservationsSize AvgCount	平均値	平均値
StoreObservationToFSDB StoredObservationsSize MinCount	最小	最小
StoreObservationToFSDB StoredObservationsSize MaxCount	最大	最大
UpdateResourceCache Count	数	数
UpdateResourceCache Duration TotalDuration	合計	合計
UpdateResourceCache Duration AvgDuration	平均値	平均値
UpdateResourceCache Duration MinDuration	最小値	最小値
UpdateResourceCache Duration MaxDuration	最大値	最大値
UpdateResourceCache ModifcationEstimateCount TotalCount	合計	各リソース キャッシュ オブジェクトの更新中に行われた変更の概算数。
UpdateResourceCache ModifcationEstimateCount AvgCount	平均値	平均値
UpdateResourceCache ModifcationEstimateCount MinCount	最小	最小
UpdateResourceCache ModifcationEstimateCount MaxCount	最大	最大
ManageAlerts Count	数	しきい値チェック作業項目がアラートの更新を実行した合計回数。
ManageAlerts Duration TotalDuration	合計	アラート更新操作の期間。
ManageAlerts Duration AvgDuration	平均値	平均値
ManageAlerts Duration MinDuration	最小値	最小値
ManageAlerts Duration MaxDuration	最大値	最大値
UpdateSymptoms Count	数	しきい値チェック作業項目がシンプトムを確認し、構築した合計回数。
UpdateSymptoms Duration TotalDuration	合計	シンプトムの確認と構築操作の期間。

表 7-93. 分析サービスのしきい値全体のチェック メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
UpdateSymptoms Duration AvgDuration	平均値	平均値
UpdateSymptoms Duration MinDuration	最小値	最小値
UpdateSymptoms Duration MaxDuration	最大値	最大値

分析サービスの動的しきい値計算メトリック

動的しきい値計算メトリックのすべてのメトリック キーは、DtCalculation|DtDataWrite|WriteOperationCount や DtCalculation|DtAnalyze|AnalyzeOperationCount と同様に、DtCalculation から始まります。

表 7-94. 分析サービスの動的しきい値計算メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
DtDataWrite WriteOperationCount	書き込み操作数	書き込み操作数
DtDataWrite Duration TotalDuration	合計	合計所要時間 (ms)
DtDataWrite Duration AvgDuration	平均値	平均経過時間 (ms)
DtDataWrite Duration MinDuration	最小値	最短所要時間 (ms)
DtDataWrite Duration MaxDuration	最大値	最大経過時間 (ms)
DtDataWrite SavedDtObjectCount TotalCount	合計	合計
DtDataWrite SavedDtObjectCount AvgCount	平均値	平均値
DtDataWrite SavedDtObjectCount MinCount	最小	最小
DtDataWrite SavedDtObjectCount MaxCount	最大	最大
DtAnalyze AnalyzeOperationCount	分析操作数	分析操作数
DtAnalyze Duration TotalDuration	合計	合計所要時間 (ms)
DtAnalyze Duration AvgDuration	平均値	平均経過時間 (ms)
DtAnalyze Duration MinDuration	最小値	最短所要時間 (ms)
DtAnalyze Duration MaxDuration	最大値	最大経過時間 (ms)
DtAnalyze AnalyzedMetricsCount TotalCount	合計	合計
DtAnalyze AnalyzedMetricsCount AvgCount	平均値	平均値
DtAnalyze AnalyzedMetricsCount MinCount	最小	最小
DtAnalyze AnalyzedMetricsCount MaxCount	最大	最大
DtDataRead ReadOperationsCount	読み取り操作数	読み取り操作数

表 7-94. 分析サービスの動的しきい値計算メトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
DtDataRead Duration TotalDuration	合計	合計所要時間 (ms)
DtDataRead Duration AvgDuration	平均値	平均経過時間 (ms)
DtDataRead Duration MinDuration	最小値	最短所要時間 (ms)
DtDataRead Duration MaxDuration	最大値	最大経過時間 (ms)
DtDataRead ReadDataPointsCount TotalCount	合計	合計
DtDataRead ReadDataPointsCount AvgCount	平均値	平均値
DtDataRead ReadDataPointsCount MinCount	最小	最小
DtDataRead ReadDataPointsCount MaxCount	最大	最大

表 7-95. 分析サービスの関数呼び出しメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
FunctionCalls Count	関数呼び出し回数	関数呼び出し回数
FunctionCalls AvgDuration	平均実行時間	平均実行時間
FunctionCalls MaxDuration	最大実行時間	最大実行時間

コレクタ メトリック

vRealize Operations Manager は、vRealize Operations Manager コレクタ サービス オブジェクトのメトリックを収集します。

表 7-96. コレクタ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
ThreadPoolThreadsCount	プール スレッドの数	プール スレッドの数。
RejectedFDCount	拒否された転送データの数	拒否された転送データの数
RejectedFDAltCount	拒否された代替転送データの数	拒否された代替転送データの数
SentFDCount	送信されたオブジェクトの数	送信されたオブジェクトの数
SentFDAltCount	送信された代替オブジェクトの数	送信された代替オブジェクトの数
CurrentHeapSize	現在のヒープ サイズ (MB)	現在のヒープ サイズ。
MaxHeapSize	最大ヒープ サイズ (MB)	最大ヒープ サイズ。
CommittedMemory	コミットされたメモリ (MB)	コミットされたメモリの容量。
CPUUsage	CPU 使用量	CPU 使用量。
スレッド	スレッド	スレッドの数。
UpStatus	アップ ステータス	アップ ステータス

コレクタのメトリック

vRealize Operations Manager では、vRealize Operations Manager コントローラ オブジェクトのメトリックが収集されます。

表 7-97. コレクタのメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
RequestedMetricCount	要求されたメトリックの数	要求されたメトリックの数
ApiCallsCount	API 呼び出し回数	API 呼び出し回数
NewDiscoveredResourcesCount	検出されたオブジェクトの数	検出されたオブジェクトの数

FSDB メトリック

vRealize Operations Manager は、vRealize Operations Manager ファイル システム データベース (FSDB) オブジェクトのメトリックを収集します。

表 7-98. FSDB メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
StoragePoolElementsCount	ストレージ作業項目の数	ストレージ作業項目の数
FsdbState	FSDB の状態	FSDB の状態
StoredResourcesCount	格納されたオブジェクトの数	格納されたオブジェクトの数
StoredMetricsCount	格納済みメトリックの数	格納済みメトリックの数

表 7-99. FSDB のストレージ スレッド プール メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
StoreOperationsCount	保存操作数	保存操作数
StorageThreadPool Duration TotalDuration	合計	所要時間の総数 (ms)
StorageThreadPool Duration AvgDuration	平均値	平均経過時間 (ms)
StorageThreadPool Duration MinDuration	最小値	最短所要時間 (ms)
StorageThreadPool Duration MaxDuration	最大値	最大経過時間 (ms)
StorageThreadPool SavedMetricsCount TotalCount	合計	合計
StorageThreadPool SavedMetricsCount AvgCount	平均値	平均値
StorageThreadPool SavedMetricsCount MinCount	最小	最小
StorageThreadPool SavedMetricsCount MaxCount	最大	最大

製品 UI のメトリック

vRealize Operations Manager では、vRealize Operations Manager 製品ユーザー インターフェイス オブジェクトのメトリックが収集されます。

表 7-100. 製品 UI のメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
ActiveSessionsCount	アクティブ セッション	アクティブ セッション
CurrentHeapSize	現在のヒープ サイズ	現在のヒープ サイズ。
MaxHeapSize	最大ヒープ サイズ	最大ヒープ サイズ。
CommittedMemory	コミットされたメモリ	コミットされたメモリの容量。
CPUUsage	CPU 使用量	CPU の使用率。
スレッド	スレッド	スレッドの数。
SessionCount	アクティブ セッション数	アクティブ セッション数
SelfMonitoringQueueSize	自分監視キュー サイズ	自分監視キュー サイズ

表 7-101. 製品 UI の API 呼び出しメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
APICalls HTTPRequesterRequestCount	HTTPRequester 要求数	HTTPRequester 要求数
APICalls AvgHTTPRequesterRequestTime	HTTPRequester 平均要求時間	HTTPRequester 平均要求時間 (ms)
APICalls FailedAuthenticationCount	失敗した認証の数	失敗した認証の数
APICalls AvgAlertRequestTime	平均アラート要求時間	平均アラート要求時間 (ms)
APICalls AlertRequestCount	アラート要求数	アラート要求数
APICalls AvgMetricPickerRequestTime	平均メトリック ピッカー要求時間	平均メトリック ピッカー要求時間 (ms)
APICalls MetricPickerRequestCount	メトリック ピッカー要求数	メトリック ピッカー要求数
APICalls HeatmapRequestCount	ヒート マップ要求数	ヒート マップ要求数
APICalls AvgHeatmapRequestTime	平均ヒート マップ要求時間	平均ヒート マップ要求時間 (ms)
APICalls MashupChartRequestCount	マッシュアップ チャート要求数	マッシュアップ チャート要求数
APICalls AvgMashupChartRequestTime	平均マッシュアップ チャート要求時間	平均マッシュアップ チャート要求時間 (ms)
APICalls TopNRequestCount	トップ N 要求数	トップ N 要求数
APICalls AvgTopNRequestTime	平均トップ N 要求時間	平均トップ N 要求時間 (ms)
APICalls MetricChartRequestCount	メトリック チャート要求数	メトリック チャート要求数
APICalls AvgMetricChartRequestTime	平均メトリック チャート要求時間	平均メトリック チャート要求時間 (ms)

管理 UI のメトリック

vRealize Operations Manager では、vRealize Operations Manager 管理ユーザー インターフェイス オブジェクトのメトリックが収集されます。

表 7-102. 管理 UI のメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
CurrentHeapSize	現在のヒープ サイズ	現在のヒープ サイズ (MB)。
MaxHeapSize	最大ヒープ サイズ	最大ヒープ サイズ (MB)。
CommittedMemory	コミットされたメモリ	コミットされたメモリの容量 (MB)。
CPUUsage	CPU 使用量	CPU 使用量 (%)。
スレッド	スレッド	スレッドの数。
SessionCount	アクティブ セッション数	アクティブ セッション数
SelfMonitoringQueueSize	自分監視キュー サイズ	自分監視キュー サイズ

表 7-103. 管理 UI の API 呼び出しメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
APICalls HTTPRequesterRequestCount	HTTPRequester 要求数	HTTPRequester 要求数
APICalls AvgHTTPRequesterRequestTime	HTTPRequester 平均要求時間	HTTPRequester 平均要求時間 (ms)

スイート API のメトリック

vRealize Operations Manager では、VMware vRealize Operations Management Suite API オブジェクトのメトリックが収集されます。

表 7-104. スイート API のメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
UsersCount	ユーザー数	ユーザー数
ActiveSessionsCount	アクティブ セッション	アクティブ セッション
GemfireClientReconnects	Gemfire クライアント再接続	Gemfire クライアント再接続
GemfireClientCurrentCalls	Gemfire クライアントの未完了の合計数	Gemfire クライアントの未完了の合計数
CurrentHeapSize	現在のヒープ サイズ	現在のヒープ サイズ (MB)。
MaxHeapSize	最大ヒープ サイズ	最大ヒープ サイズ (MB)。
CommittedMemory	コミットされたメモリ	コミットされたメモリの量 (MB)。
CPUUsage	CPU 使用量	CPU 使用量 (%)。
CPUProcessTime	CPU 処理時間	CPU 処理時間 (ms)
CPUProcessTimeCapacity	CPU 処理時間キャパシティ	CPU 処理時間キャパシティ (ms)
スレッド	スレッド	スレッドの数。

表 7-105. スイート API の Gemfire クライアント呼び出しメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
GemfireClientCalls TotalRequests	合計要求数	合計要求数
GemfireClientCalls AvgResponseTime	平均応答時間	平均応答時間 (ms)

表 7-105. スイート API の Gemfire クライアント呼び出しメトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
GemfireClientCalls MinResponseTime	最短応答時間	最短応答時間 (ms)
GemfireClientCalls MaxResponseTime	最長応答時間	最長応答時間
GemfireClientCalls RequestsPerSecond	1 秒あたりの要求	1 秒あたりの要求
GemfireClientCalls CurrentRequests	現在の要求	現在の要求
GemfireClientCalls RequestsCount	要求数	要求数
GemfireClientCalls ResponsesCount	応答数	応答数

表 7-106. スイート API の API 呼び出しメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
APICalls TotalRequests	合計要求数	合計要求数
APICalls AvgResponseTime	平均応答時間 (ms)	平均応答時間 (ms)
APICalls MinResponseTime	最短応答時間 (ms)	最短応答時間 (ms)
APICalls MaxResponseTime	最長応答時間	最長応答時間
APICalls ServerErrorResponseCount	サーバ エラー 応答数	サーバ エラー 応答数
APICalls FailedAuthenticationCount	失敗した認証の数	失敗した認証の数
APICalls FailedAuthorizationCount	失敗した認証の数	失敗した認証の数
APICalls RequestsPerSecond	1 秒あたりの要求	1 秒あたりの要求
APICalls CurrentRequests	現在の要求	現在の要求
APICalls ResponsesPerSecond	1 秒あたりの応答	1 秒あたりの応答
APICalls RequestsCount	要求数	要求数
APICalls ResponsesCount	応答数	応答数

クラスタおよびスライスの管理のメトリック

vRealize Operations Manager では、vRealize Operations Manager クラスタおよびスライスの管理 (CaSA) オブジェクトのメトリックが収集されます。

表 7-107. クラスタおよびスライスの管理のメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
CurrentHeapSize	現在のヒープ サイズ	現在のヒープ サイズ (MB)。
MaxHeapsize	最大ヒープ サイズ	最大ヒープ サイズ (MB)。
CommittedMemory	コミットされたメモリ	コミットされたメモリの量 (MB)。
CPUUsage	CPU 使用量	CPU 使用量 (%)
スレッド	スレッド	スレッドの数。

表 7-108. クラスタおよびスライスの管理の API 呼び出しメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
API Calls TotalRequests	合計要求数	合計要求数
API Calls AvgResponseTime	平均応答時間	平均応答時間 (ms)
API Calls MinResponseTime	最短応答時間	最短応答時間 (ms)
API Calls MaxResponseTime	最長応答時間	最長応答時間 (ms)
API Calls ServerErrorResponseCount	サーバ エラー 応答数	サーバ エラー 応答数
API Calls FailedAuthenticationCount	失敗した認証の数	失敗した認証の数
API Calls FailedAuthorizationCount	最短応答時間	最短応答時間 (ms)

ウォッチドッグのメトリック

vRealize Operations Manager はウォッチドッグのメトリックを収集して vRealize Operations Manager サービスが実行しており応答できることを確認します。

ウォッチドッグのメトリック

ウォッチドッグのメトリックでは、合計サービス数が得られます。

表 7-109. ウォッチドッグのメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
ServiceCount	サービス数	サービス数

サービス メトリック

サービス メトリックでは、ウォッチドッグのアクティビティに関する情報が提供されます。

表 7-110. vRealize Operations Manager ウォッチドッグ サービスのメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
Service Enabled	有効	有効
Service Restarts	再起動	プロセスの応答がなく、ウォッチドッグによって再起動された回数
Service Starts	起動	プロセスがウォッチドッグによって復活した回数
Service Stops	停止	プロセスがウォッチドッグによって停止された回数

ノードのメトリック

vRealize Operations Manager では、vRealize Operations Manager のノード オブジェクトのメトリックが収集されます。

メトリックはノード オブジェクトについて計算できます。[算出されたメトリック](#) を参照してください。

表 7-111. ノードのメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
コンポーネント数	コンポーネント数	このノードをレポートする vRealize Operations Manager のオブジェクト数
PrimaryResourcesCount	プライマリ オブジェクト数	プライマリ オブジェクト数
LocalResourcesCount	ローカル オブジェクト数	ローカル オブジェクト数
PrimaryMetricsCount	プライマリ メトリックの数	プライマリ メトリックの数
LocalMetricsCount	ローカル メトリックの数	ローカル メトリックの数
PercentDBStorageAvailable	使用可能なディスク/ストレージ/DB のパーセント	使用可能なディスク/ストレージ/DB のパーセント
PercentLogStorageAvailable	使用可能なディスク/ストレージ/ログのパーセント	使用可能なディスク/ストレージ/ログのパーセント

表 7-112. ノードのメモリ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
mem actualFree	実際の空き	実際の空き
mem actualUsed	実際の使用済み	実際の使用済み
mem free	空き	空き
mem used	使用済み	使用済み
mem total	合計	合計
mem demand_gb	予測されるメモリ デマンド	予測されるメモリ デマンド

表 7-113. ノードのスワップ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
swap total	合計	合計
swap free	空き	空き
swap used	使用済み	使用済み
swap pageIn	ページ イン	ページ イン
swap pageOut	ページ アウト	ページ アウト

表 7-114. ノードのリソース制限メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
resourceLimit numProcesses	プロセスの数	プロセスの数
resourceLimit openFiles	開いているファイルの数	開いているファイルの数
resourceLimit openFilesMax	開いているファイルの上限の数	開いているファイルの上限の数
resourceLimit numProcessesMax	プロセスの上限の数	プロセスの上限の数

表 7-115. ノードのネットワーク メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
net allInboundTotal	すべての受信接続	すべての受信合計
net allOutboundTotal	すべての送信接続	すべての送信合計
net tcpBound	TCP バインド	TCP バインド
net tcpClose	TCP 状態 CLOSE	TCP 状態が CLOSE の接続の数
net tcpCloseWait	TCP 状態 CLOSE WAIT	TCP 状態が CLOSE WAIT の接続の数
net tcpClosing	TCP 状態 CLOSING	TCP 状態が CLOSING の接続の数
net tcpEstablished	TCP 状態 ESTABLISHED	TCP 状態が ESTABLISHED の接続の数
net tcpIdle	TCP 状態 IDLE	TCP 状態が IDLE の接続の数
net tcpInboundTotal	TCP 受信接続	TCP 受信接続
net tcpOutboundTotal	TCP 送信接続	TCP 送信接続
net tcpLastAck	TCP 状態 LAST ACK	TCP 状態が LAST ACK の接続の数
net tcpListen	TCP 状態 LISTEN	TCP 状態が LISTEN の接続の数
net tcpSynRecv	TCP 状態 SYN RCVD	TCP 状態が SYN RCVD の接続の数
net tcpSynSent	TCP 状態 SYN_SENT	TCP 状態が SYN_SENT の接続の数
net tcpTimeWait	TCP 状態 TIME WAIT	TCP 状態が TIME WAIT の接続の数

表 7-116. ノードのネットワーク インターフェイス メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
net iface speed	速度	速度 (ビット/秒)
net iface rxPackets	受信パケット数	受信パケットの数
net iface rxBytes	受信バイト数	受信バイト数
net iface rxDropped	受信パケット ドロップ数	ドロップされた受信パケットの数
net iface rxFrame	受信パケット フレーム数	受信パケット フレームの数
net iface rxOverruns	受信パケット過剰実行数	受信パケット過剰実行の数
net iface txPackets	転送パケット数	転送パケットの数
net iface txBytes	転送バイト数	転送バイトの数
net iface txDropped	転送パケット ドロップ数	ドロップされた転送パケットの数
net iface txCarrier	転送キャリア	転送キャリア
net iface txCollisions	転送パケット衝突数	転送衝突の数
net iface txErrors	転送パケット エラー数	転送エラーの数
net iface txOverruns	転送パケット過剰実行数	転送過剰実行の数

表 7-117. ノードのディスク ファイルシステム メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
disk fileSystem total	合計	合計
disk fileSystem available	使用可能	使用可能
disk fileSystem used	使用済み	使用済み
disk fileSystem files	合計ファイル ノード	合計ファイル ノード
disk fileSystem filesFree	合計空きファイル ノード	合計空きファイル ノード
disk fileSystem queue	ディスク キュー	ディスク キュー
disk fileSystem readBytes	読み取りバイト数	読み取りバイトの数
disk fileSystem writeBytes	書き込みバイト数	書き込みバイトの数
disk fileSystem reads	読み取り	読み取りの数
disk fileSystem writes	書き込み	書き込みの数

表 7-118. ノードのディスク インストール メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
disk installation used	使用済み	使用済み
disk installation total	合計	合計
disk installation available	使用可能	使用可能

表 7-119. ノードのディスク データベース メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
disk db used	使用済み	使用済み
disk db total	合計	合計
disk db available	使用可能	使用可能

表 7-120. ノードのディスク ログ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
disk log used	使用済み	使用済み
disk log total	合計	合計
disk log available	使用可能	使用可能

表 7-121. ノードの CPU メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
cpu combined	複合負荷	複合負荷（ユーザー + システム + 適切 + 待機）
cpu idle	アイドル	使用可能な CPU 合計のうちのアイドル時間（CPU 負荷）
cpu irq	IRQ	使用可能な CPU 合計のうちの割り込み時間（CPU 負荷）

表 7-121. ノードの CPU メトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
cpu nice	適切	使用可能な CPU 合計のうちの適切な時間（CPU 負荷）
cpu softirq	ソフト IRQ	使用可能な CPU 合計のうちのソフト割り込み時間（CPU 負荷）
cpu stolen	消失	使用可能な CPU 合計のうちの消失時間（CPU 負荷）
cpu sys	システム	使用可能な CPU 合計のうちのシステム時間（CPU 負荷）
cpu user	ユーザー（CPU 負荷）	使用可能な CPU の合計のうちのユーザー時間（CPU 負荷）
cpu wait	待機（CPU 負荷）	使用可能な CPU の合計のうちの待機時間（CPU 負荷）
cpu total	CPU に使用可能な合計	CPU に使用可能な合計
cpu allCpuCombined	すべての CPU の複合負荷合計	すべての CPU の複合負荷合計（CPU 負荷）
cpu allCpuTotal_ghz	使用可能	使用可能
cpu allCpuCombined_ghz	使用済み	使用済み
cpu allCpuCombined_percent	CPU 使用量	CPU 使用量（%）

表 7-122. ノードのデバイス メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
device iops	1 秒あたりの読み取り/書き込み数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均読み取り/書き込みコマンド数。
device await	平均トランザクション時間	平均トランザクション時間（ミリ秒）。
device iops_readMaxObserved	1 秒あたりに観察された読み取りの最大数	1 秒あたりに観察された読み取りの最大数。
device iops_writeMaxObserved	1 秒あたりに観察された書き込みの最大数	1 秒あたりに観察された書き込みの最大数。

表 7-123. ノードのサービス メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
service proc fdUsage	開いているファイル記述子の合計数	開いているファイル記述子の合計数。

表 7-124. ノードの NTP メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
ntp serverCount	構成されたサーバの数	構成されたサーバの数
ntp unreachableCount	到達できないサーバの数	到達できないサーバの数
ntp unreachable	アクセスできません	NTP サーバにアクセスできません。値 0 はアクセスできたことを、1 はサーバにアクセスできなかったか、応答がなかったことを意味します。

表 7-125. ノードのヒープ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
heap CurrentHeapSize	現在のヒープ サイズ	現在のヒープ サイズ
heap MaxHeapSize	最大ヒープ サイズ	最大ヒープ サイズ
heap CommittedMemory	コミットされたメモリ	コミットされたメモリ

クラスタのメトリック

vRealize Operations Manager では、動的しきい値計算メトリックやキャパシティ計算メトリックなどの、vRealize Operations Manager クラスタ オブジェクトのメトリックが収集されます。

メトリックは、クラスタ オブジェクトについて計算できます。[算出されたメトリック](#) を参照してください。

クラスタのメトリック

クラスタのメトリックでは、ホスト、リソース、クラスタ上のメトリック数を提供します。

表 7-126. クラスタのメトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
HostCount	クラスタ内のノードの数	クラスタ内のノードの数
PrimaryResourcesCount	プライマリ リソースの数	プライマリ リソースの数
LocalResourcesCount	ローカル リソースの数	ローカル リソースの数
PrimaryMetricsCount	プライマリ メトリックの数	プライマリ メトリックの数
ReceivedResourceCount	受信されたリソースの数	受信されたリソースの数
ReceivedMetricCount	受信されたメトリックの数	受信されたメトリックの数

DT メトリック

DT メトリックは、クラスタの動的しきい値メトリックです。動的しきい値計算の実行中にメトリック収集が発生した場合にのみ、ゼロ以外の値が表示されます。

表 7-127. クラスタの DT メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
dt isRunning	実行中	実行中
dt dtRunTime	動作期間	実行時間 (ms)

表 7-127. クラスタの DT メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
dt StartTime	実行開始時刻	実行開始時刻
dt percentage	パーセント	パーセント (%)
dt executorCount	実行子ノード数	実行子ノード数
dt resourceCount	リソース数	リソース数
dt fsdbReadTime	FSDB 読み取り時刻	FSDB 読み取り時間 (ms)
dt dtObjectSaveTime	DT オブジェクト保存時間	DT オブジェクト保存時間 (ms)
dt dtHistorySaveTime	DT 履歴保存時間	DT 履歴保存時間 (ms)
dt executor resourceCount	リソース数	リソース数

キャパシティ計算 (CC) メトリック

CC メトリックは、クラスタの容量計算メトリックです。容量計算の実行中にメトリック収集が発生した場合にのみ、ゼロ以外の値が表示されます。

表 7-128. クラスタの CC メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
cc isRunning	実行中	実行中
cc runTime	合計実行時間	合計実行時間
cc startTime	開始時間	開始時間
cc finishTime	終了時刻	終了時刻
cc totalResourcesToProcess	合計オブジェクト数	合計オブジェクト数
cc progress	進行	進行
cc phase1TimeTaken	フェーズ 1 計算時間	フェーズ 1 計算時間
cc phase2TimeTaken	フェーズ 2 計算時間	フェーズ 2 計算時間

Gemfire クラスタ メトリック

Gemfire メトリックでは、Gemfire クラスタに関する情報を提供します。

表 7-129. クラスタの Gemfire クラスタ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
GemfireCluster System AvgReads	1 秒あたりの平均読み取り数	すべてのメンバーの 1 秒あたりの平均読み取り数です
GemfireCluster System AvgWrites	1 秒あたりの平均書き込み数	すべてのメンバーの 1 秒あたりの平均書き込み数です
GemfireCluster System DiskReadsRate	ディスク読み取り速度	分散メンバー全体の 1 秒あたりの平均ディスク読み取り数です
GemfireCluster System DiskWritesRate	ディスク書き込み速度	分散メンバー全体の 1 秒あたりの平均ディスク書き込み数です

表 7-129. クラスタの Gemfire クラスタ メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
GemfireCluster System GarbageCollectionCount	合計ガベージ コレクション数	すべてのメンバーの合計ガベージ コレクション数です
GemfireCluster System GarbageCollectionCountDelta	新規ガベージ コレクション数	すべてのメンバーの新規ガベージ コレクション数です
GemfireCluster System JVMPauses	JVM 一時停止数	検出された JVM 一時停止の数です
GemfireCluster System JVMPausesDelta	新規 JVM 一時停止数	検出された新規 JVM 一時停止の数です
GemfireCluster System DiskFlushAvgLatency	ディスク フラッシュの平均遅延	ディスク フラッシュの平均遅延 (ミリ秒)
GemfireCluster System NumRunningFunctions	実行中の関数の数です	分散システムのすべてのメンバーで現在実行されているマップ削減ジョブの数です
GemfireCluster System NumClients	クライアント数	接続されているクライアントの数です
GemfireCluster System TotalHitCount	合計ヒット数	すべての領域のキャッシュ ヒットの合計数です
GemfireCluster System TotalHitCountDelta	新規ヒット数	すべての領域の新規キャッシュ ヒットの数です
GemfireCluster System TotalMissCount	合計ミス数	すべての領域のキャッシュ ミスの合計数です
GemfireCluster System TotalMissCountDelta	新規ミス数	すべての領域の新規キャッシュ ミスの数です
GemfireCluster System Member FreeSwapSpace	空きスワップ容量	空きスワップ容量 (MB)
GemfireCluster System Member TotalSwapSpace	合計スワップ容量	合計スワップ容量 (MB)
GemfireCluster System Member CommittedVirtualMemorySize	コミットされた仮想メモリ サイズ	コミットされた仮想メモリサイズ (MB)
GemfireCluster System Member SystemLoadAverage	領域サイズ	領域サイズ
GemfireCluster System Member FreePhysicalMemory	空き物理メモリ	空き物理メモリ (MB)
GemfireCluster System Member TotalPhysicalMemory	物理メモリの合計	物理メモリの合計 (MB)
GemfireCluster System Member CacheListenerCallsAvgLatency	平均キャッシュ リスナ呼び出し遅延	平均キャッシュ リスナ呼び出し遅延 (ミリ秒)
GemfireCluster System Member CacheWriterCallsAvgLatency	平均キャッシュ ライター呼び出し遅延	平均キャッシュ ライター呼び出し遅延 (ミリ秒)
GemfireCluster System Member DeserializationAvgLatency	平均シリアル化解除遅延	平均シリアル化解除遅延 (ミリ秒)
GemfireCluster System Member FunctionExecutionRate	1 秒あたりの関数実行数	1 秒あたりの関数実行数
GemfireCluster System Member JVMPauses	JVM 一時停止の数	JVM 一時停止の数

表 7-129. クラスタの Gemfire クラスタ メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
GemfireCluster System Member NumRunningFunctions	実行中の関数の数です	実行中の関数の数です
GemfireCluster System Member PutsRate	1 秒あたりのプット数です	1 秒あたりのプット数です
GemfireCluster System Member GetsRate	1 秒あたりの取得数です	1 秒あたりの取得数です
GemfireCluster System Member GetsAvgLatency	平均取得遅延	平均取得遅延 (ミリ秒)
GemfireCluster System Member PutsAvgLatency	平均プット遅延	平均プット遅延 (ミリ秒)
GemfireCluster System Member SerializationAvgLatency	平均シリアル化遅延	平均シリアル化遅延 (ミリ秒)
GemfireCluster System Member Disk DiskFlushAvgLatency	フラッシュの平均遅延	フラッシュの平均遅延です (ミリ秒)
GemfireCluster System Member Disk DiskReadsRate	1 秒あたりの平均読み取り数	1 秒あたりの平均読み取り数
GemfireCluster System Member Disk DiskWritesRate	1 秒あたりの平均書き込み数	1 秒あたりの平均書き込み数
GemfireCluster System Member Network BytesReceivedRate	1 秒あたりの平均受信バイト	1 秒あたりの平均受信バイト
GemfireCluster System Member Network BytesSentRate	1 秒あたりの平均送信バイト	1 秒あたりの平均送信バイト
GemfireCluster System Member JVM GCTimeMillis	ガベージ コレクション時間	ガベージ コレクションに費やされる合計時間
GemfireCluster System Member JVM GCTimeMillisDelta	新規ガベージ コレクション時間	ガベージ コレクションに費やされる新たな時間
GemfireCluster System Member JVM TotalThreads	合計スレッド	合計スレッド
GemfireCluster System Member JVM CommittedMemory	コミットされたメモリ	コミットされたメモリ (MB)
GemfireCluster System Member JVM MaxMemory	最大メモリ	最大メモリです (MB)
GemfireCluster System Member JVM UsedMemory	使用済みメモリ	使用済みメモリです (MB)
GemfireCluster Region SystemRegionEntryCount	エントリ数	エントリ数
GemfireCluster Region DestroyRate	1 秒あたりの破棄数	1 秒あたりの破棄数
GemfireCluster Region CreatesRate	1 秒あたりの作成数です	1 秒あたりの作成数です
GemfireCluster Region GetsRate	1 秒あたりの取得数です	1 秒あたりの取得数です
GemfireCluster Region BucketCount	バケット カウント	バケット カウント

表 7-129. クラスタの Gemfire クラスタ メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
GemfireCluster Region AvgBucketSize	バケットごとのエントリの平均数	バケットごとのエントリの平均数
GemfireCluster Region Member ActualRedundancy	実際の冗長性	実際の冗長性
GemfireCluster Region Member BucketCount	バケット カウント	バケット カウント
GemfireCluster Region Member AvgBucketSize	バケットごとのエントリの平均数	バケットごとのエントリの平均数
GemfireCluster Region Member CreatesRate	1 秒あたりの作成数です	1 秒あたりの作成数です
GemfireCluster Region Member GetsRate	1 秒あたりの取得数です	1 秒あたりの取得数です
GemfireCluster Region Member DestroyRate	1 秒あたりの破棄数	1 秒あたりの破棄数
GemfireCluster Region Member MissCount	ミス カウント数	キャッシュ ミス数
GemfireCluster Region Member MissCountDelta	新規キャッシュ ミス数	新規キャッシュ ミス数
GemfireCluster Region Member HitCount	ヒット カウント数	キャッシュ ヒット数です
GemfireCluster Region Member HitCountDelta	新規キャッシュ ヒット数	新規キャッシュ ヒット数

しきい値チェック メトリック

しきい値の確認メトリックは、クラスタの処理されたメトリックおよび計算されたメトリックを確認します。

表 7-130. クラスタのしきい値チェック メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
ThresholdChecking ProcessedMetricCount	処理されたメトリックの数	処理されたメトリックの数
ThresholdChecking ProcessedMetricRate	受信メトリック処理速度 (毎秒)	受信メトリック処理速度 (毎秒)
ThresholdChecking ComputedMetricCount	計算されたメトリックの数	計算されたメトリックの数
ThresholdChecking ComputedMetricRate	計算されたメトリックの処理速度 (毎秒)	計算されたメトリックの処理速度 (毎秒)

メモリ メトリック

メモリ メトリックは、CPU が使用するメモリに関する情報をクラスタに提供します。

表 7-131. クラスタのメモリ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
Memory AvgFreePhysicalMemory	平均の空き物理メモリ	平均の空き物理メモリ (GB)
Memory TotalFreePhysicalMemory	空き物理メモリ	空き物理メモリ (GB)

表 7-131. クラスタのメモリ メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
Memory TotalMemory	使用可能なメモリの合計	使用可能なメモリの合計 (GB)
Memory TotalUsedMemory	実際の使用済みメモリ	実際の使用済みメモリ (GB)
Memory TotalDemandMemory	メモリ デマンド	メモリ デマンド (GB)

エラスティック メモリ メトリック

エラスティック メモリ メトリックは、CPU が使用する節約可能なメモリに関する情報をクラスタに提供します。

表 7-132. クラスタのメモリ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
ElasticMemory TotalMemory	使用可能なメモリの合計	使用可能なメモリの合計 (GB)
ElasticMemory TotalUsedMemory	実際の使用済みメモリ	実際の使用済みメモリ (GB)
ElasticMemory TotalDemandMemory	メモリ デマンド	メモリ デマンド (GB)

CPU メトリック

CPU メトリックでは、CPU 情報をクラスタに提供します。

表 7-133. クラスタの CPU メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
cpu TotalCombinedUsage	CPU 負荷	CPU 負荷
cpu TotalAvailable	CPU 使用可能	CPU 使用可能
cpu TotalAvailable_ghz	使用可能	使用可能 (GHz)
cpu TotalUsage_ghz	使用済み	使用済み (GHz)
cpu TotalUsage	CPU 使用量	CPU 使用量 (%)

ディスク メトリック

ディスク メトリックでは、使用可能なディスク情報をクラスタに提供します。

表 7-134. クラスタのディスク メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
Disk DatabaseStorage AvgAvailable	使用可能な平均ノード ディスク	使用可能な平均ノード ディスク
Disk DatabaseStorage MinAvailable	使用可能な最小ノード ディスク	使用可能な最小ノード ディスク
Disk DatabaseStorage MaxAvailable	使用可能な最大ノード ディスク	使用可能な最大ノード ディスク
Disk DatabaseStorage TotalAvailable	使用可能	使用可能
Disk DatabaseStorage Total	合計	合計
Disk DatabaseStorage TotalUsed	使用済み	使用済み
Disk LogStorage AvgAvailable	使用可能な平均ノード ディスク	使用可能な平均ノード ディスク
Disk LogStorage MinAvailable	使用可能な最小ノード ディスク	使用可能な最小ノード ディスク

表 7-134. クラスタのディスク メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
Disk LogStorage MaxAvailable	使用可能な最大ノード ディスク	使用可能な最大ノード ディスク
Disk LogStorage TotalAvailable	使用可能	使用可能
Disk LogStorage Total	合計	合計
Disk LogStorage TotalUsed	使用済み	使用済み

データ保全のメトリック

vRealize Operations Manager は、さまざまなデータ保全リソースまたはサービス グループのメトリックを収集します。

アクティビティ メトリック

アクティビティ メトリックは、アクティビティ フレームワークに関連しています。

表 7-135. データ保全のアクティビティ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
Activity RunningCount	実行中の数	実行中の数
Activity ExecutedCount	実行された数	実行された数
Activity SucceededCount	成功した数	成功した数
Activity FailedCount	失敗した数	失敗した数

コントローラ XDB メトリック

コントローラ メトリックは、マスタ データベースに関連しています。

表 7-136. データ保全のコントローラ XDB メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
ControllerXDB Size	サイズ	サイズ (バイト)
ControllerXDB TempDBSize	一時 DB サイズ	一時 DB サイズ (バイト)
ControllerXDB TotalObjectCount	合計オブジェクト数	合計オブジェクト数
ControllerXDB AvgQueryDuration	クエリの平均経過時間	クエリの平均経過時間 (ms)
ControllerXDB MinQueryDuration	クエリの最短経過時間	クエリの最短所要時間 (ms)
ControllerXDB MaxQueryDuration	クエリの最大経過時間	クエリの最大経過時間 (ms)
ControllerXDB TotalTransactionCount	合計トランザクション数	合計トランザクション数
ControllerXDB LockOperationErrorCount	ロック操作エラー数	ロック操作エラー数
ControllerXDB DBCorruptionErrorCount	DB 破損エラー数	DB 破損エラー数
ControllerXDB DBMaxSessionExceededCount	DB 最大セッション超過数	DB 最大セッション超過数
ControllerXDB NumberWaitingForSession	セッションを待機中の操作数	セッション プールからのセッションを待機中の操作数

表 7-136. データ保全のコントローラ XDB メトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
ControllerXDB AvgWaitForSessionDuration	セッション プールからの平均取得時間	セッション プールからの平均取得時間
ControllerXDB MinWaitForSessionDuration	セッション プールからの最小取得時間	セッション プールからの最小取得時間
ControllerXDB MaxWaitForSessionDuration	セッション プールからの最大取得時間	セッション プールからの最大取得時間
ControllerXDB TotalGetSessionCount	セッション プールからのセッションの合計要求数	セッション プールからのセッションの合計要求数
ControllerXDB MaxActiveSessionCount	最大同時セッション数	過去の収集間隔中の最大同時セッション数です。

アラーム SQL メトリック

アラーム メトリックは、アラートとシンプトムのデータ保全に関連しています。

表 7-137. データ保全のアラーム XDB メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
AlarmSQL Size	サイズ (バイト)	サイズ (バイト)
AlarmSQL AvgQueryDuration	クエリの平均経過時間 (ms)	クエリの平均経過時間 (ms)
AlarmSQL MinQueryDuration	クエリの最短所要時間 (ms)	クエリの最短所要時間 (ms)
AlarmSQL MaxQueryDuration	クエリの最大経過時間 (ms)	クエリの最大経過時間 (ms)
AlarmSQL TotalTransactionCount	合計トランザクション数	合計トランザクション数
AlarmSQL TotalAlarms	合計オブジェクト カウントのアラーム	合計オブジェクト カウントのアラーム
AlarmSQL TotalAlerts	合計オブジェクト カウントのアラート	合計オブジェクト カウントのアラート
AlarmSQL AlertTableSize	アラート テーブル サイズ	アラート テーブル サイズ
AlarmSQL AlarmTableSize	アラーム テーブル サイズ	アラーム テーブル サイズ

Key-Value ストア データベース (KVDB)

KVDB メトリックは、キー/値ペアを 格納するデータ保全に関連しています。

メトリック キー	メトリック名	説明
KVDB AvgQueryDuration	クエリの平均経過時間	クエリの平均経過時間
KVDB MinQueryDuration	クエリの最短経過時間	クエリの最短経過時間
KVDB MaxQueryDuration	クエリの最大経過時間	クエリの最大経過時間
KVDB TotalTransactionCount	合計トランザクション数	合計トランザクション数

履歴 Inventory Service XDB メトリック

履歴 Inventory Service メトリックは、構成プロパティとその変化のデータ保全に関連しています。

表 7-138. データ保全の履歴 XDB メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
HisXDB FunctionCalls Count HisXDB FunctionCalls	関数呼び出し回数	関数呼び出し回数
HisXDB FunctionCalls AvgDuration	平均実行時間	平均実行時間
HisXDB FunctionCalls MaxDuration	最大実行時間	最大実行時間
HisXDB Size	サイズ	サイズ (バイト)
HisXDB TempDBSize	一時 DB サイズ	一時 DB サイズ (バイト)
HisXDB TotalObjectCount	合計オブジェクト数	合計オブジェクト数
HisXDB AvgQueryDuration	クエリの平均経過時間	クエリの平均経過時間 (ms)
HisXDB MinQueryDuration	クエリの最短経過時間	クエリの最短所要時間 (ms)
HisXDB MaxQueryDuration	クエリの最大経過時間	クエリの最大経過時間 (ms)
HisXDB TotalTransactionCount	合計トランザクション数	合計トランザクション数
HisXDB LockOperationErrorCount	ロック操作エラー数	ロック操作エラー数
HisXDB DBCorruptionErrorCount	DB 破損エラー数	DB 破損エラー数
HisXDB DBMaxSessionExceededCount	DB 最大セッション超過数	DB 最大セッション超過数
HisXDB NumberWaitingForSession	セッションを待機中の操作数	セッション プールからのセッションを待機中の操作数
HisXDB AvgWaitForSessionDuration	セッション プールからの平均取得時間	セッション プールからの平均取得時間
HisXDB MinWaitForSessionDuration	セッション プールからの最小取得時間	セッション プールからの最小取得時間
HisXDB MaxWaitForSessionDuration	セッション プールからの最大取得時間	セッション プールからの最大取得時間
HisXDB TotalGetSessionCount	セッション プールからのセッションの合計要求数	セッション プールからのセッションの合計要求数
HisXDB HisActivitySubmissionCount	HIS アクティビティ送信数	履歴インベントリ サービスのアクティビティが送信された回数
HisXDB HisActivityCompletionCount	HIS アクティビティ完了数	履歴インベントリ サービスのアクティビティが完了した回数
HisXDB HisActivityCompletionDelayAvg	HIS アクティビティ平均完了遅延	アクティビティ送信から完了までの平均時間
HisXDB HisActivityCompletionDelayMax	HIS アクティビティ最大完了遅延	アクティビティ送信から完了までの最大時間
HisXDB HisActivityAbortedCount	HIS アクティビティ中止数	履歴インベントリ サービスのアクティビティが中止された回数

リモート コレクタ メトリック

vRealize Operations Manager では、vRealize Operations Manager リモート コレクタ ノード オブジェクトのメトリックが収集されます。

表 7-139. リモート コレクタ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
ComponentCount	コンポーネント数	このノードをレポートする vRealize Operations Manager のオブジェクト数。

表 7-140. リモート コレクタのメモリ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
mem actualFree	実際の空き	実際の空き
mem actualUsed	実際の使用済み	実際の使用済み
mem free	空き	空き
mem used	使用済み	使用済み
mem total	合計	合計
mem demand_gb	予測されるメモリ デマンド	予測されるメモリ デマンド

表 7-141. リモート コレクタのスワップ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
swap total	合計	合計
swap free	空き	空き
swap used	使用済み	使用済み
swap pageIn	ページ イン	ページ イン
swap pageOut	ページ アウト	ページ アウト

表 7-142. リモート コレクタのリソース制限メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
resourceLimit numProcesses	プロセスの数	プロセスの数
resourceLimit openFiles	開いているファイルの数	開いているファイルの数
resourceLimit openFilesMax	開いているファイルの上限の数	開いているファイルの上限の数
resourceLimit numProcessesMax	プロセスの上限の数	プロセスの上限の数

表 7-143. リモート コレクタのネットワーク メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
net allInboundTotal	すべての受信接続	すべての受信合計
net allOutboundTotal	すべての送信接続	すべての送信合計
net tcpBound	TCP バインド	TCP バインド
net tcpClose	TCP 状態 CLOSE	TCP 状態が CLOSE の接続の数
net tcpCloseWait	TCP 状態 CLOSE WAIT	TCP 状態が CLOSE WAIT の接続の数
net tcpClosing	TCP 状態 CLOSING	TCP 状態が CLOSING の接続の数

表 7-143. リモート コレクタのネットワーク メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
net tcpEstablished	TCP 状態 ESTABLISHED	TCP 状態が ESTABLISHED の接続の数
net tcpIdle	TCP 状態 IDLE	TCP 状態が IDLE の接続の数
net tcpInboundTotal	TCP 受信接続	TCP 受信接続
net tcpOutboundTotal	TCP 送信接続	TCP 送信接続
net tcpLastAck	TCP 状態 LAST ACK	TCP 状態が LAST ACK の接続の数
net tcpListen	TCP 状態 LISTEN	TCP 状態が LISTEN の接続の数
net tcpSynRecv	TCP 状態 SYN RCVD	TCP 状態が SYN RCVD の接続の数
net tcpSynSent	TCP 状態 SYN_SENT	TCP 状態が SYN_SENT の接続の数
net tcpTimeWait	TCP 状態 TIME WAIT	TCP 状態が TIME WAIT の接続の数

表 7-144. リモート コレクタのネットワーク インターフェイス メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
net iface speed	速度	速度 (ビット/秒)
net iface rxPackets	受信パケット数	受信パケットの数
net iface rxBytes	受信バイト数	受信バイト数
net iface rxDropped	受信パケット ドロップ数	ドロップされた受信パケットの数
net iface rxFrame	受信パケット フレーム数	受信パケット フレームの数
net iface rxOverruns	受信パケット過剰実行数	受信パケット過剰実行の数
net iface txPackets	転送パケット数	転送パケットの数
net iface txBytes	転送バイト数	転送バイトの数
net iface txDropped	転送パケット ドロップ数	ドロップされた転送パケットの数
net iface txCarrier	転送キャリア	転送キャリア
net iface txCollisions	転送パケット衝突数	転送衝突の数
net iface txErrors	転送パケット エラー数	転送エラーの数
net iface txOverruns	転送パケット過剰実行数	転送過剰実行の数

表 7-145. リモート コレクタのディスク ファイルシステム メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
disk fileSystem total	合計	合計
disk fileSystem available	使用可能	使用可能
disk fileSystem used	使用済み	使用済み
disk fileSystem files	合計ファイル ノード	合計ファイル ノード数
disk fileSystem filesFree	合計空きファイル ノード	合計空きファイル ノード
disk fileSystem queue	ディスク キュー	ディスク キュー

表 7-145. リモート コレクタのディスク ファイルシステム メトリック (続き)

メトリック キー	メトリック名	説明
disk fileSystem readBytes	読み取りバイト数	読み取りバイトの数
disk fileSystem writeBytes	書き込みバイト数	書き込みバイトの数
disk fileSystem reads	読み取り	読み取りの数
disk fileSystem writes	書き込み	書き込みの数

表 7-146. リモート コレクタのディスク インストール メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
disk installation used	使用済み	使用済み
disk installation total	合計	合計
disk installation available	使用可能	使用可能

表 7-147. リモート コレクタのディスク データベース メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
disk db used	使用済み	使用済み
disk db total	合計	合計
disk db available	使用可能	使用可能

表 7-148. リモート コレクタのディスク ログ メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
disk log used	使用済み	使用済み
disk log total	合計	合計
disk log available	使用可能	使用可能

表 7-149. リモート コレクタの CPU メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
cpu combined	複合負荷	複合負荷 (ユーザー + システム + 適切 + 待機)
cpu idle	アイドル	使用可能な CPU 合計のうちのアイドル時間 (CPU 負荷)
cpu irq	IRQ	使用可能な CPU 合計のうちの割り込み時間 (CPU 負荷)
cpu nice	適切	使用可能な CPU 合計のうちの適切な時間 (CPU 負荷)
cpu softirq	ソフト IRQ	使用可能な CPU 合計のうちのソフト割り込み時間 (CPU 負荷)
cpu stolen	消失	使用可能な CPU 合計のうちの消失時間 (CPU 負荷)

表 7-149. リモート コレクタの CPU メトリック（続き）

メトリック キー	メトリック名	説明
cpu sys	システム	使用可能な CPU 合計のうちのシステム時間（CPU 負荷）
cpu user	ユーザー	使用可能な CPU の合計のうちのユーザー時間（CPU 負荷）
cpu wait	待機	使用可能な CPU の合計のうちの待機時間（CPU 負荷）
cpu total	CPU に使用可能な合計	CPU に使用可能な合計
cpu allCpuCombined	すべての CPU の複合負荷合計	すべての CPU の複合負荷合計（CPU 負荷）
cpu allCpuTotal_ghz	使用可能	使用可能
cpu allCpuCombined_ghz	使用済み	使用済み
cpu allCpuCombined_percent	CPU 使用量	CPU 使用量（%）

表 7-150. リモート コレクタのデバイス メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
device iops	1 秒あたりの読み取り / 書き込み数	収集間隔中の 1 秒あたりの平均読み取り / 書き込みコマンド数
device await	平均トランザクション時間	平均トランザクション時間（ミリ秒）

表 7-151. リモート コレクタのサービス メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
service proc fdUsage	開いているファイル記述子の合計数	開いているファイル記述子の合計数 (Linux)。開いているハンドルの合計数 (Windows)

表 7-152. リモート コレクタの NTP メトリック

メトリック キー	メトリック名	説明
ntp serverCount	構成されたサーバの数	構成されたサーバの数
ntp unreachableCount	到達できないサーバの数	到達できないサーバの数
ntp unreachable	アクセスできません	NTP サーバにアクセスできません。値 0 はアクセスできたことを、1 はサーバにアクセスできなかったか、応答がなかったことを意味します。

Endpoint Operations Management の Operating Systems プラグインと Remote Service Monitoring プラグインのメトリック

vRealize Operations Manager は、Operating Systems プラグインと Remote Service Monitoring プラグインのオブジェクト タイプのメトリックを収集します。

メトリックの時間計算の丸め処理により、リソースの可用性メトリックが切り上げられることがあります。メトリックの切り上げによって、Endpoint Operations Management エージェントによってレポートされたメトリックにギャップが生じたように見えることがあります。ただし、メトリックは完全にレポートされています。

オペレーティング システム プラグインのメトリック

オペレーティング システム プラグインは、Linux、AIX、Solaris、Windows などのオブジェクト タイプのメトリックを収集します。また、オペレーティング システム プラグインは、Windows サービス、スクリプト サービス、およびマルチプロセス サービスのメトリックも収集します。

AIX メトリック

Operating Systems Plug-in では、AIX オブジェクト タイプのメトリックが検出されます。AIX 6.1 および 7.1 がサポートされています。

表 7-153. AIX メトリック

名前	カテゴリ	KPI
リソースの可用性	可用性	True
システムのアップタイム	可用性	True
ファイル システムの読み書き数	スループット	False
ファイル システムの 1 分あたりの読み書き数	スループット	False
Tcp パッシブ オープン数	スループット	False
Tcp 送信セグメント数/分	スループット	False
Tcp 試行失敗数	スループット	False
Tcp 確立リセット数/分	スループット	False
Tcp 再送セグメント数	スループット	False
Tcp 送信セグメント数	スループット	False
Tcp 確立リセット数	スループット	False
Tcp アクティブ オープン数	スループット	False
Tcp 現在の確立数	スループット	False
Tcp 受信エラー数	スループット	False
Tcp 受信エラー数/分	スループット	False
Tcp アクティブ オープン数/分	スループット	False
Tcp 送信リセット数/分	スループット	False
Tcp 送信リセット数	スループット	False
Tcp 試行失敗数/分	スループット	False
Tcp パッシブ オープン数/分	スループット	False
Tcp 受信セグメント数/分	スループット	False
Tcp 受信セグメント数	スループット	False
Tcp 再送セグメント数/分	スループット	False

表 7-153. AIX メトリック (続き)

名前	カテゴリ	KPI
CPU の待機時間	使用率	False
CPU アイドル状態	使用率	False
CPU のアイドル時間	使用率	False
1 分あたりの CPU のアイドル時間	使用率	False
1 分あたりの CPU の待機時間	使用率	False
CPU 使用量	使用率	True
CPU 待機状態	使用率	False
CPU Nice 値	使用率	False
空きメモリ	使用率	False
負荷平均値 (15 分間)	使用率	False
負荷平均値 (5 分間)	使用率	False
負荷平均値 (1 分間)	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Write	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Readlink	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Readdirplus	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Commit	使用率	False
NFS V3 サーバの Access	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Access	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Rename	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Fsstat	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Create	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Mkdir	使用率	False
NFS V3 サーバの Mknod	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Read	使用率	False
NFS V3 サーバの Fsstat	使用率	False
NFS V3 サーバの Link	使用率	False
NFS V3 サーバの Write	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Lookup	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Link	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Rmdir	使用率	False
NFS V3 サーバの Mkdir	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Remove	使用率	False
NFS V3 サーバの Symlink	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Symlink	使用率	False

表 7-153. AIX メトリック (続き)

名前	カテゴリ	KPI
NFS V3 サーバの Remove	使用率	False
NFS V3 サーバの Null	使用率	False
NFS V3 サーバの Readdirplus	使用率	False
NFS V3 サーバの Readdir	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Getattr	使用率	False
NFS V3 サーバの Read	使用率	False
NFS V3 サーバの Lookup	使用率	False
NFS V3 サーバの Pathconf	使用率	False
NFS V3 サーバの Readlink	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Pathconf	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Mknod	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Setattr	使用率	False
NFS V3 サーバの Setattr	使用率	False
NFS V3 サーバの Create	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Finfo	使用率	False
NFS V3 サーバの Finfo	使用率	False
NFS V3 サーバの Getattr	使用率	False
NFS V3 サーバの Rmdir	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Readdir	使用率	False
NFS V3 サーバの Rename	使用率	False
NFS V3 サーバの Commit	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Null	使用率	False
CPU の数	使用率	False
メジャー ページング失敗数	使用率	False
メモリ使用率	使用率	True
1 秒あたりのメジャー ページング失敗数	使用率	False
1 秒あたりのページング失敗数	使用率	False
ページング失敗数	使用率	False
スワップ使用率	使用率	True
空きスワップの割合	使用率	False
空きメモリの割合	使用率	False
実行中のプロセス数	使用率	False
スリープ中のプロセス数	使用率	False
停止中のプロセス数	使用率	False

表 7-153. AIX メトリック (続き)

名前	カテゴリ	KPI
1 分あたりのシステム CPU 時間	使用率	False
システム CPU	使用率	False
システム CPU 時間	使用率	False
使用済みのスワップ	使用率	False
スワップ イン ページ数	使用率	False
1 秒あたりのスワップ イン ページ数	使用率	False
スワップ合計	使用率	False
未使用スワップ	使用率	False
スワップ アウト ページ数	使用率	False
1 秒あたりのスワップ アウト ページ数	使用率	False
総ディスク キャパシティ	使用率	False
総プロセス数	使用率	False
合計メモリ	使用率	False
総ディスク使用量	使用率	False
ユーザー CPU 時間	使用率	False
ユーザー CPU	使用率	False
1 分あたりのユーザー CPU 時間	使用率	False
使用済みメモリ	使用率	False
ゾンビ プロセス数	使用率	False

Linux メトリック

Operating Systems Plug-in では、Linux オブジェクト タイプのメトリックが検出されます。

表 7-154. Linux メトリック

名前	カテゴリ	KPI
リソースの可用性	可用性	True
システムのアップタイム	可用性	False
ファイル システムの読み書き数	スループット	False
ファイル システムの 1 分あたりの読み書き数	スループット	False
Tcp 試行失敗数	スループット	False
Tcp 状態 ESTABLISHED	スループット	False
Tcp 確立リセット数/分	スループット	False
Tcp 再送セグメント数	スループット	False
Tcp 状態 LISTEN	スループット	False

表 7-154. Linux メトリック（続き）

名前	カテゴリ	KPI
Tcp 状態 CLOSING	スループット	False
Tcp 状態 SYN_SENT	スループット	False
Tcp 状態 TIME_WAIT	スループット	False
Tcp 状態 SYN_RECV	スループット	False
Tcp 受信エラー数/分	スループット	False
Tcp 送信セグメント数/分	スループット	False
Tcp パッシブ オープン数/分	スループット	False
Tcp 送信セグメント数	スループット	False
Tcp 確立リセット数	スループット	False
Tcp アクティブ オープン数	スループット	False
Tcp 送信接続数	スループット	False
Tcp 現在の確立数	スループット	False
Tcp 受信エラー数	スループット	False
Tcp 受信接続数	スループット	False
Tcp アクティブ オープン数/分	スループット	False
Tcp 送信リセット数/分	スループット	False
Tcp 受信セグメント数	スループット	False
Tcp 再送セグメント数/分	スループット	False
Tcp パッシブ オープン数	スループット	False
Tcp 送信リセット数	スループット	False
Tcp 状態 FIN_WAIT1	スループット	False
Tcp 状態 FIN_WAIT2	スループット	False
Tcp 状態 CLOSE_WAIT	スループット	False
Tcp 受信セグメント数/分	スループット	False
Tcp 状態 CLOSE	スループット	False
Tcp 状態 LAST_ACK	スループット	False
Tcp 試行失敗数/分	スループット	False
CPU ストール	使用率	False
CPU の待機時間	使用率	False
1 分あたりの CPU の IRQ 時間	使用率	False
CPU のソフト IRQ 時間	使用率	False
1 分あたりの CPU ストール時間	使用率	False
CPU ストール時間	使用率	False
CPU のアイドル時間	使用率	False

表 7-154. Linux メトリック（続き）

名前	カテゴリ	KPI
CPU の IRQ	使用率	False
1 分あたりの CPU のソフト IRQ 時間	使用率	False
1 分あたりの CPU のアイドル時間	使用率	False
1 分あたりの CPU の待機時間	使用率	False
CPU の IRQ 時間	使用率	False
CPU のソフト IRQ	使用率	False
CPU アイドル状態	使用率	False
CPU 使用量	使用率	True
CPU 待機状態	使用率	False
CPU Nice 値	使用率	False
空きメモリ	使用率	False
空きメモリ（+ バッファ/キャッシュ）	使用率	False
負荷平均値（15 分間）	使用率	False
負荷平均値（5 分間）	使用率	False
負荷平均値（1 分間）	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Readlink	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Readdirplus	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Commit	使用率	False
NFS V3 サーバの Access	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Access	使用率	False
NFS V3 サーバの Remove	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Rename	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Fsstat	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Create	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Mkdir	使用率	False
NFS V3 サーバの Mknod	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Read	使用率	False
NFS V3 サーバの Fsstat	使用率	False
NFS V3 サーバの Link	使用率	False
NFS V3 サーバの Write	使用率	False

表 7-154. Linux メトリック（続き）

名前	カテゴリ	KPI
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Remove	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Lookup	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Link	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Rmdir	使用率	False
NFS V3 サーバの Mkdir	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Mknod	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Getattr	使用率	False
NFS V3 サーバの Null	使用率	False
NFS V3 サーバの Readdirplus	使用率	False
NFS V3 サーバの Lookup	使用率	False
NFS V3 サーバの Pathconf	使用率	False
NFS V3 サーバの Readlink	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Write	使用率	False
NFS V3 サーバの Readdir	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Setattr	使用率	False
NFS V3 サーバの Setattr	使用率	False
NFS V3 サーバの Read	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Pathconf	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Symlink	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Fsinfo	使用率	False
NFS V3 サーバの Fsinfo	使用率	False
NFS V3 サーバの Getattr	使用率	False
NFS V3 サーバの Rmdir	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Readdir	使用率	False
NFS V3 サーバの Create	使用率	False
NFS V3 サーバの Rename	使用率	False
NFS V3 サーバの Commit	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Null	使用率	False
CPU の数	使用率	False

表 7-154. Linux メトリック（続き）

名前	カテゴリ	KPI
メジャー ページング失敗数	使用率	False
1 秒あたりのメジャー ページング失敗数	使用率	False
1 秒あたりのページング失敗数	使用率	False
空きスワップの割合	使用率	False
空きメモリの割合	使用率	False
メモリ使用率	使用率	True
スワップ使用率	使用率	True
ページング失敗数	使用率	False
実行中のプロセス数	使用率	False
スリープ中のプロセス数	使用率	False
停止中のプロセス数	使用率	False
1 秒あたりのスワップ アウト ページ数	使用率	False
1 秒あたりのスワップ イン ページ数	使用率	False
未使用スワップ	使用率	False
スワップ アウト ページ数	使用率	False
使用済みのスワップ	使用率	False
スワップ合計	使用率	False
スワップ イン ページ数	使用率	False
システム CPU	使用率	False
1 分あたりのシステム CPU 時間	使用率	False
システム CPU 時間	使用率	False
総ディスク キャパシティ	使用率	False
総プロセス数	使用率	False
合計メモリ	使用率	False
総ディスク使用量	使用率	False
ユーザー CPU 時間	使用率	False
使用済みメモリ (- バッファ/キャッシュ)	使用率	False
ユーザー CPU	使用率	False
1 分あたりのユーザー CPU 時間	使用率	False
使用済みメモリ	使用率	False
ゾンビ プロセス数	使用率	False

Solaris メトリック

Operating Systems Plug-in では、Solaris オブジェクト タイプのメトリックが検出されます。Solaris x86 および SPARC がサポートされています。

表 7-155. Solaris メトリック

名前	カテゴリ	KPI
リソースの可用性	可用性	True
システムのアップタイム	可用性	False
ファイル システムの読み書き数	スループット	False
ファイル システムの 1 分あたりの読み書き数	スループット	False
Tcp 試行失敗数	スループット	False
Tcp 状態 ESTABLISHED	スループット	False
Tcp 確立リセット数/分	スループット	False
Tcp 再送セグメント数	スループット	False
Tcp 状態 LISTEN	スループット	False
Tcp 状態 CLOSING	スループット	False
Tcp 状態 SYN_SENT	スループット	False
Tcp 状態 TIME_WAIT	スループット	False
Tcp 状態 SYN_RECV	スループット	False
Tcp 受信エラー数/分	スループット	False
Tcp 送信セグメント数/分	スループット	False
Tcp パッシブ オープン数/分	スループット	False
Tcp 送信セグメント数	スループット	False
Tcp 確立リセット数	スループット	False
Tcp アクティブ オープン数/分	スループット	False
Tcp 送信接続数	スループット	False
Tcp 現在の確立数	スループット	False
Tcp 受信エラー数	スループット	False
Tcp 受信接続数	スループット	False
Tcp アクティブ オープン数	スループット	False
Tcp 送信リセット数/分	スループット	False
Tcp 受信セグメント数	スループット	False
Tcp 再送セグメント数/分	スループット	False
Tcp パッシブ オープン数	スループット	False
Tcp 送信リセット数	スループット	False
Tcp 状態 FIN_WAIT1	スループット	False
Tcp 状態 FIN_WAIT2	スループット	False
Tcp 状態 CLOSE_WAIT	スループット	False
Tcp 受信セグメント数/分	スループット	False
Tcp 状態 CLOSE	スループット	False

表 7-155. Solaris メトリック (続き)

名前	カテゴリ	KPI
Tcp 状態 LAST_ACK	スループット	False
Tcp 試行失敗数/分	スループット	False
CPU の待機時間	使用率	False
CPU のアイドル時間	使用率	False
1 分あたりの CPU のアイドル時間	使用率	False
1 分あたりの CPU の待機時間	使用率	False
CPU アイドル状態	使用率	False
CPU 使用量	使用率	True
CPU 待機状態	使用率	False
CPU Nice 値	使用率	False
空きメモリ	使用率	False
負荷平均値 (15 分間)	使用率	False
負荷平均値 (5 分間)	使用率	False
負荷平均値 (1 分間)	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Readlink	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Readdirplus	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Commit	使用率	False
NFS V3 サーバの Access	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Access	使用率	False
NFS V3 サーバの Remove	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Rename	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Fsstat	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Create	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Mkdir	使用率	False
NFS V3 サーバの Mknod	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Read	使用率	False
NFS V3 サーバの Fsstat	使用率	False
NFS V3 サーバの Link	使用率	False
NFS V3 サーバの Write	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Remove	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Lookup	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Link	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Rmdir	使用率	False
NFS V3 サーバの Mkdir	使用率	False

表 7-155. Solaris メトリック（続き）

名前	カテゴリ	KPI
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Mknod	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Getattr	使用率	False
NFS V3 サーバの Null	使用率	False
NFS V3 サーバの Readdirplus	使用率	False
NFS V3 サーバの Lookup	使用率	False
NFS V3 サーバの Pathconf	使用率	False
NFS V3 サーバの Readlink	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Write	使用率	False
NFS V3 サーバの Readdir	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Setattr	使用率	False
NFS V3 サーバの Setattr	使用率	False
NFS V3 サーバの Read	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Pathconf	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Symlink	使用率	False
NFS V3 サーバの Symlink	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Fsinfo	使用率	False
NFS V3 サーバの Fsinfo	使用率	False
NFS V3 サーバの Getattr	使用率	False
NFS V3 サーバの Rmdir	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Readdir	使用率	False
NFS V3 サーバの Create	使用率	False
NFS V3 サーバの Rename	使用率	False
NFS V3 サーバの Commit	使用率	False
NFS V3 サーバの 1 分あたりの Null	使用率	False
CPU の数	使用率	False
メジャー ページング失敗数	使用率	False
1 秒あたりのメジャー ページング失敗数	使用率	False
1 秒あたりのページング失敗数	使用率	False
空きスワップの割合	使用率	False
空きメモリの割合	使用率	False
メモリ使用率	使用率	True
スワップ使用率	使用率	True
ページング失敗数	使用率	False
実行中のプロセス数	使用率	False

表 7-155. Solaris メトリック (続き)

名前	カテゴリ	KPI
スリープ中のプロセス数	使用率	False
停止中のプロセス数	使用率	False
1 秒あたりのスワップ アウト ページ数	使用率	False
1 秒あたりのスワップ イン ページ数	使用率	False
未使用スワップ	使用率	False
スワップ アウト ページ数	使用率	False
使用済みのスワップ	使用率	False
スワップ合計	使用率	False
スワップ イン ページ数	使用率	False
システム CPU	使用率	False
1 分あたりのシステム CPU 時間	使用率	False
システム CPU 時間	使用率	False
総ディスク キャパシティ	使用率	False
総プロセス数	使用率	False
合計メモリ	使用率	False
総ディスク使用量	使用率	False
ユーザー CPU 時間	使用率	False
ユーザー CPU	使用率	False
1 分あたりのユーザー CPU 時間	使用率	False
使用済みメモリ	使用率	False
ゾンビ プロセス数	使用率	False

Microsoft Windows メトリック

Operating Systems Plug-in では、Microsoft Windows オブジェクト タイプのメトリックが検出されます。Microsoft Windows Server 2012 R2 および 2008 R2 がサポートされています。

表 7-156. Microsoft Windows メトリック

名前	カテゴリ	KPI
リソースの可用性	可用性	True
システムのアップタイム	可用性	False
1 転送あたりのディスク秒数の平均	スループット	False
ファイル システムの読み書き数	スループット	False
ファイル システムの 1 分あたりの読み書き数	スループット	False
Tcp 試行失敗数	スループット	False
Tcp 状態 ESTABLISHED	スループット	False

表 7-156. Microsoft Windows メトリック (続き)

名前	カテゴリ	KPI
Tcp 確立リセット数/分	スループット	False
Tcp 再送セグメント数	スループット	False
Tcp 状態 LISTEN	スループット	False
Tcp 状態 CLOSING	スループット	False
Tcp 状態 SYN_SENT	スループット	False
Tcp 状態 TIME_WAIT	スループット	False
Tcp 状態 SYN_RECV	スループット	False
Tcp 受信エラー数/分	スループット	False
Tcp 送信セグメント数/分	スループット	False
Tcp パッシブ オープン数/分	スループット	False
Tcp 送信セグメント数	スループット	False
Tcp 確立リセット数	スループット	False
Tcp アクティブ オープン数	スループット	False
Tcp 送信接続数	スループット	False
Tcp 現在の確立数	スループット	False
Tcp 受信エラー数	スループット	False
Tcp 受信接続数	スループット	False
Tcp アクティブ オープン数/分	スループット	False
Tcp 送信リセット数/分	スループット	False
Tcp 受信セグメント数	スループット	False
Tcp 再送セグメント数/分	スループット	False
Tcp パッシブ オープン数	スループット	False
Tcp 送信リセット数	スループット	False
Tcp 状態 FIN_WAIT1	スループット	False
Tcp 状態 FIN_WAIT2	スループット	False
Tcp 状態 CLOSE_WAIT	スループット	False
Tcp 受信セグメント数/分	スループット	False
Tcp 状態 CLOSE	スループット	False
Tcp 状態 LAST_ACK	スループット	False
Tcp 試行失敗数/分	スループット	False
CPU のアイドル時間	使用率	False
1 分あたりの CPU のアイドル時間	使用率	False
CPU 使用量	使用率	True
空きメモリ	使用率	False

表 7-156. Microsoft Windows メトリック（続き）

名前	カテゴリ	KPI
1 秒あたりのメモリ ページング失敗数	使用率	False
システム ドライバのメモリ常駐バイト数	使用率	False
使用可能メモリのバイト数	使用率	False
システム ドライバのメモリ合計バイト数	使用率	False
使用中のコミットされたメモリのバイト数の割合	使用率	False
メモリ スタンバイ キャッシュ コアのバイト数	使用率	False
1 秒あたりの再利用メモリ移行ページ数	使用率	False
1 秒あたりのメモリ書き込みコピー数	使用率	False
使用可能メモリ量（キロバイト）	使用率	False
1 秒あたりのメモリ ページ読み取り数	使用率	False
コミットされたメモリのバイト数	使用率	False
ページングされていないメモリ プールのバイト数	使用率	False
システム コードのメモリ常駐バイト数	使用率	False
1 秒あたりのメモリ ページ書き込み数	使用率	False
使用可能メモリ量（メガバイト）	使用率	False
通常優先度のメモリ スタンバイ キャッシュのバイト数	使用率	False
1 秒あたりのメモリ ページ数	使用率	False
メモリ変更ページ リストのバイト数	使用率	False
1 秒あたりのメモリ キャッシュ失敗数	使用率	False
ページングされていないメモリ プールの割り当て数	使用率	False
システム コードのメモリ上の合計バイト数	使用率	False
ページングされたメモリ プールの割り当て数	使用率	False
1 秒あたりのメモリ ページ入力数	使用率	False
ページングされたメモリ プールのバイト数	使用率	False
ページングされた常駐メモリ プールのバイト数	使用率	False
メモリ キャッシュのバイト数	使用率	False
メモリ スタンバイ キャッシュの予約バイト数	使用率	False
メモリの空きシステム ページ テーブルのエントリ数	使用率	False
メモリの空き %26 ゼロ ページ リストのバイト数	使用率	False
システム キャッシュのメモリ常駐バイト数	使用率	False
メモリ キャッシュのバイト数のピーク	使用率	False
メモリ コミット上限	使用率	False
1 秒あたりのメモリ移行失敗数	使用率	False
1 秒あたりのメモリ ページ出力数	使用率	False

表 7-156. Microsoft Windows メトリック（続き）

名前	カテゴリ	KPI
CPU の数	使用率	False
空きスワップの割合	使用率	False
空きメモリの割合	使用率	False
メモリ使用率	使用率	True
スワップ使用率	使用率	True
実行中のプロセス数	使用率	False
スリープ中のプロセス数	使用率	False
停止中のプロセス数	使用率	False
1 秒あたりのスワップ アウト ページ数	使用率	False
1 秒あたりのスワップ イン ページ数	使用率	False
未使用スワップ	使用率	False
スワップ アウト ページ数	使用率	False
使用済みのスワップ	使用率	False
スワップ合計	使用率	False
スワップ イン ページ数	使用率	False
システム CPU	使用率	False
1 分あたりのシステム CPU 時間	使用率	False
システム CPU 時間	使用率	False
総ディスク キャパシティ	使用率	False
総プロセス数	使用率	False
合計メモリ	使用率	True
総ディスク使用量	使用率	False
ユーザー CPU 時間	使用率	False
ユーザー CPU	使用率	False
1 分あたりのユーザー CPU 時間	使用率	False
使用済みメモリ	使用率	False
ゾンビ プロセス数	使用率	False

Windows サービスのメトリック

Operating Systems Plug-in では Windows サービスのメトリックが検出されます。

表 7-157. Windows サービスのメトリック

名前	カテゴリ	KPI
リソースの可用性	可用性	True
開始時間	可用性	False

表 7-157. Windows サービスのメトリック（続き）

名前	カテゴリ	KPI
起動タイプ	可用性	False
CPU ユーザー時間	使用率	False
CPU 使用量	使用率	True
1 分あたりの CPU 合計時間	使用率	False
1 分あたりの CPU システム時間	使用率	False
CPU 合計時間	使用率	False
1 分あたりの CPU ユーザー時間	使用率	False
CPU システム時間	使用率	False
メモリ サイズ	使用率	True
開いているハンドル数	使用率	False
常駐メモリ サイズ	使用率	False
スレッド	使用率	False

Windows サービスを使用して Endpoint Operations Management エージェントを停止して、エージェントのインストール ディレクトリから data ディレクトリを削除した場合、Windows サービスを使用してエージェントを再起動すると、メトリックが収集されません。data ディレクトリを削除する場合に、Windows サービスを使用して Endpoint Operations Management エージェントを停止/開始しないようにします。epops-agent.bat stop を使用してエージェントを停止します。data ディレクトリを削除して、epops-agent.bat start を使用してエージェントを開始します。

スクリプト メトリック

Operating Systems Plug-in はスクリプト サービスのメトリックを検出します。

表 7-158. スクリプト メトリック

名前	カテゴリ	KPI
リソースの可用性	可用性	True
実行時間	スループット	True
結果値	使用率	True

マルチプロセス サービスのメトリック

Operating Systems Plug-in ではマルチプロセス サービスのメトリックが検出されます。

表 7-159. マルチプロセスのメトリック

名前	カテゴリ	KPI
リソースの可用性	可用性	True
CPU ユーザー時間	使用率	False
CPU 使用量	使用率	True
1 分あたりの CPU 合計時間	使用率	False

表 7-159. マルチプロセスのメトリック（続き）

名前	カテゴリ	KPI
1 分あたりの CPU システム時間	使用率	False
CPU 合計時間	使用率	False
1 分あたりの CPU ユーザー時間	使用率	False
CPU システム時間	使用率	False
メモリ サイズ	使用率	True
プロセスの数	使用率	False
常駐メモリ サイズ	使用率	False

Remote Service Monitoring プラグイン メトリック

Remote Service Monitoring プラグインは、HTTP Check、TCP Check、ICMP Check などのオブジェクトタイプのメトリックを収集します。

HTTP チェック メトリック

Remote Service Monitoring Plug-in は、HTTP チェック オブジェクト タイプのメトリックを検出します。

表 7-160. HTTP チェック メトリック

名前	カテゴリ	KPI
リソースの可用性	可用性	True
最終更新日時	可用性	False
状態 CLOSE	スループット	False
状態 CLOSE_WAIT	スループット	False
状態 ESTABLISHED	スループット	False
受信接続	スループット	False
状態 TIME_WAIT	スループット	False
すべての受信接続	スループット	False
状態 SYN_SENT	スループット	False
状態 FIN_WAIT2	スループット	False
送信接続	スループット	False
状態 LAST_ACK	スループット	False
応答時間	スループット	True
状態 CLOSING	スループット	False
すべての送信接続	スループット	False
状態 SYN_RECV	スループット	False
状態 FIN_WAIT1	スループット	False
応答コード	使用率	True

ICMP チェック メトリック

Remote Service Monitoring Plug-in では、ICMP チェック オブジェクト タイプのメトリックが検出されます。

表 7-161. ICMP チェック メトリック

名前	カテゴリ	KPI
リソースの可用性	可用性	True
応答時間	スループット	True

TCP チェック メトリック

Remote Service Monitoring Plug-in では、TCP チェック オブジェクト タイプのメトリックが検出されます。

表 7-162. TCP チェック メトリック

名前	カテゴリ	KPI
リソースの可用性	可用性	True
応答時間	スループット	True
状態 CLOSE	スループット	False
状態 CLOSE_WAIT	スループット	False
状態 ESTABLISHED	スループット	False
受信接続	スループット	False
状態 TIME_WAIT	スループット	False
すべての受信接続	スループット	False
状態 SYN_SENT	スループット	False
状態 FIN_WAIT2	スループット	False
送信接続	スループット	False
状態 LAST_ACK	スループット	False
状態 CLOSING	スループット	False
すべての送信接続	スループット	False
状態 SYN_RECV	スループット	False
状態 FIN_WAIT1	スループット	False

vRealize Operations Manager でのアラートの定義

アラートの定義は、vRealize Operations Manager 内の問題がある領域を特定するシンプトムと推奨の組み合わせで、それらの領域についてのアラートを生成します。ユーザーはそのアラートに対処します。

アラートの定義は、環境内のさまざまなオブジェクトに対して用意されています。独自のアラートの定義を作成することもできます。[部門のオブジェクトに対するアラート定義の作成](#) を参照してください。

■ クラスタ コンピューティング リソースのアラートの定義

vCenter アダプタでは、環境内のクラスタ コンピューティング リソース オブジェクトでアラートを生成するアラート定義が提供されています。

■ ホスト システムのアラートの定義

vCenter アダプタでは、環境内のホスト システム オブジェクトでアラートを生成するアラート定義が提供されています。

■ vSphere 分散ポート グループ

vCenter アダプタでは、環境内の vSphere 分散ポート オブジェクトでアラートを生成するアラート定義が提供されています。

■ 仮想マシンのアラートの定義

vCenter アダプタでは、環境内の仮想マシン オブジェクトでアラートを生成するアラート定義が提供されています。

■ vSphere Distributed Switch のアラートの定義

vCenter アダプタでは、環境内の vSphere Distributed Switch オブジェクトでアラートを生成するアラート定義が提供されています。

■ vCenter Server のアラートの定義

vCenter アダプタでは、環境内の vCenter Server オブジェクトでアラートを生成するアラート定義が提供されています。

■ データストアのアラートの定義

vCenter アダプタでは、環境内のデータストア オブジェクトでアラートを生成するアラート定義が提供されています。

■ データ センターのアラート定義

vCenter アダプタでは、環境内のデータ センター オブジェクトでアラートを生成するアラート定義が提供されています。

■ カスタム データ センターのアラート定義

vCenter アダプタでは、環境内のカスタム データ センター オブジェクトでアラートを生成するアラート定義が提供されています。

クラスタ コンピューティング リソースのアラートの定義

vCenter アダプタでは、環境内のクラスタ コンピューティング リソース オブジェクトでアラートを生成するアラート定義が提供されています。

健全性/シンプトムベース

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

健全性

重要度

シンptomsベース

アラートの定義	シンptoms	推奨
全体の半分未満の仮想マシンによって、DRS 対応のクラスタで CPU 競合が発生しています。	<p>シンptomsには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DRS が有効になりました ■ DRS が完全に自動化されました ■ クラスタ CPU 競合が警告/緊急/クリティカル レベルです ■ 1 つ以上の子孫仮想マシンで「警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシン CPU デマンド」が発生しています ■ 50% 以下の子孫仮想マシンで「警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシン CPU デマンド」が発生しています 	可能な場合は、vSphere vMotion を使用して、一部の仮想マシンを別のクラスタに移行します。
全体の半分以上を越える仮想マシンによって、DRS 対応のクラスタで CPU 競合が発生しています。	<p>シンptomsには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DRS が有効になりました ■ DRS が完全に自動化されました ■ クラスタ CPU 競合が警告/緊急/クリティカル レベルです ■ クラスタ CPU のワークロードが警告/緊急/クリティカル レベルです ■ 50% を超える子孫仮想マシンで「警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシン CPU デマンド」が発生しています 	<p>1 可能な場合は、vSphere vMotion を使用して、一部の仮想マシンを別のクラスタに移行します。</p> <p>2 クラスタにホストを追加して、CPU キャパシティを増やします。</p>
DRS 対応のクラスタで、仮想マシンの過密に起因する CPU 競合が発生しています。	<p>シンptomsには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DRS が有効になりました ■ DRS が完全に自動化されました ■ クラスタ CPU 競合が警告/緊急/クリティカル レベルです ■ クラスタ CPU のワークロードが警告/緊急/クリティカル レベルです ■ 子孫仮想マシンで「警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシン CPU デマンド」は発生していません 	<p>1 可能な場合は、vSphere vMotion を使用して、一部の仮想マシンを別のクラスタに移行します。</p> <p>2 クラスタにホストを追加して、CPU キャパシティを増やします。</p>
DRS 対応のクラスタには、予期しない高い CPU ワークロードがあります。	<p>シンptomsには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DRS が有効になりました ■ DRS が完全に自動化されました ■ クラスタ CPU のワークロードが動的しきい値を超えています ■ クラスタ CPU のワークロードが警告/緊急/クリティカル レベルです 	<p>1 クラスタ内の仮想マシンで実行されているアプリケーションをチェックして、高い CPU ワークロードが想定された動作かどうか判断します。</p> <p>2 クラスタにホストを追加して、CPU キャパシティを増やします。</p> <p>3 可能な場合は、vSphere vMotion を使用して、一部の仮想マシンを別のクラスタに移行します。</p>

アラートの定義	シンプトム	推奨
全体の半分未満の仮想マシンによって、DRS 対応のクラスタでメモリ競合が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DRS が有効になりました ■ DRS が完全に自動化されました ■ クラスタ メモリ競合が警告/緊急/クリティカル レベルです ■ 1つ以上の子孫仮想マシンで「警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシン メモリ ワークロード」が発生しています ■ 50% 以下の子孫仮想マシンで「警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシン メモリ ワークロード」が発生しています 	可能な場合は、vSphere vMotion を使用して、一部の仮想マシンを別のクラスタに移行します。
DRS 対応のクラスタで、全体の半分を超える仮想マシンによってメモリ競合が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DRS が有効になりました ■ DRS が完全に自動化されました ■ クラスタ メモリ競合が警告/緊急/クリティカル レベルです ■ クラスタ メモリ ワークロードが警告/緊急/クリティカル レベルです ■ 50% を超える子孫仮想マシンで「警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシン メモリ デマンド」が発生しています 	<p>1 可能な場合は、vSphere vMotion を使用して、一部の仮想マシンを別のクラスタに移行します。</p> <p>2 クラスタにホストを追加してメモリ キャパシティを増やします。</p>
DRS 対応のクラスタで、仮想マシンの過密に起因するメモリ競合が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DRS が有効になりました ■ DRS が完全に自動化されました ■ クラスタ メモリ競合が警告/緊急/クリティカル レベルです ■ クラスタ メモリ ワークロードが警告/緊急/クリティカル レベルです ■ 子孫仮想マシンで「警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシン メモリ デマンド」は発生していません 	<p>1 可能な場合は、vSphere vMotion を使用して、一部の仮想マシンを別のクラスタに移行します。</p> <p>2 クラスタにホストを追加してメモリ キャパシティを増やします。</p>
クラスタ内の仮想マシンの 5% 超で、メモリの圧縮、バルーニング、またはスワップに起因するメモリ競合が発生しています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ ! 仮想マシンのメモリの上限が設定されています AND ■ 5% を超える子孫仮想マシンで「警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシン メモリ競合」が発生しています AND ■ 5% を超える子孫仮想マシンで、[警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシン メモリが圧縮されています OR ■ 仮想マシンはスワップを使用しています OR ■ 仮想マシンのメモリ バルーン値が警告/緊急/クリティカル レベルです] 	<p>1 クラスタにホストを追加してメモリ キャパシティを増やします。</p> <p>2 vSphere vMotion により、一部の仮想マシンをホストまたはクラスタから移動します。</p>

アラートの定義	シンプトム	推奨
DRS 対応のクラスタに、予期しない高いメモリ ワークロードと競合があります。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DRS が有効になりました ■ DRS が完全に自動化されました ■ クラスタ メモリの競合が動的しきい値を超えています ■ クラスタ メモリ競合が警告/緊急/クリティカル レベルです ■ クラスタ メモリ ワークロードが警告/緊急/クリティカル レベルです 	<ol style="list-style-type: none"> 1 クラスタ内の仮想マシンで実行されているアプリケーションをチェックして、高いメモリ ワークロードが想定された動作かどうか判断します。 2 クラスタにホストを追加してメモリ キャパシティを増やします。 3 可能な場合は、vSphere vMotion を使用して、一部の仮想マシンを別のクラスタに移行します。
vSphere HA フェイルオーバー リソースが不足しています。	vSphere HA フェイルオーバー リソースが不足しています（障害シンプトム）	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ内のすべての仮想マシンで、同様の CPU およびメモリ予約を使用します。OR ■ 一定割合のクラスタ リソースをフェイルオーバーに予約するなど、別の vSphere HA アドミッション コントロール ポリシーを使用します。OR ■ 詳細オプションを使用して、スロット サイズの上限を指定します。 <p>詳細については、『vSphere 可用性ガイド』を参照してください。vSphere HA エージェント エラーが発生したホストは、クラスタ内でフェイルオーバー機能を提供するための適切な候補ではなく、それらのリソースは vSphere HA アドミッション コントロールでの使用を考慮されません。多くのホストに vSphere HA エージェント エラーがある場合、vCenter Server は障害につながるこのイベントを生成します。vSphere HA エージェント エラーを解決するには、ホストのイベント ログを確認してエラーの原因を特定します。構成の問題を解決した後、影響を受けるホストまたはクラスタで vSphere HA を再構成します。</p>
vSphere HA マスターが見つかりません。	vCenter Server でマスター vSphere HA エージェントが見つかりません（障害シンプトム）	このオブジェクトの [分析] タブで [障害] ページをチェックして、より多くのオブジェクトを見つけます。

ホスト システムのアラートの定義

vCenter アダプタでは、環境内のホスト システム オブジェクトでアラートを生成するアラート定義が提供されています。

健全性/シンプトムベース

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

健全性

重要度

シンプトムベース

アラートの定義	症状	推奨
全体の半分未満の仮想マシンによって、ホストで CPU 競合が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ! クラスタ内のホスト ■ ホストの CPU 競合が警告/緊急/クリティカル レベルです ■ 0 個よりも多い子仮想マシンに [警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシンの CPU デマンド] があります ■ 全体の 50% 以下の子仮想マシンに [警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシンの CPU デマンド] があります 	vSphere vMotion を使用して、CPU ワークロードが高い一部の仮想マシンを利用可能な CPU キャパシティを持つ別のホストに移行します。
全体の半分以上を越える仮想マシンによって、CPU 競合が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ! クラスタ内のホスト ■ ホストの CPU 競合が警告/緊急/クリティカル レベルです ■ 警告/緊急/クリティカル レベルのホストの CPU デマンド ■ 全体の 50% を超える子仮想マシンに [警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシンの CPU デマンド] があります 	<ol style="list-style-type: none"> 1 vSphere vMotion を使用して、CPU ワークロードが高い一部の仮想マシンを利用可能な CPU キャパシティを持つ別のホストに移行します。 2 ホストをアップグレードするか、CPU キャパシティの大きいホストを使用します。
仮想マシンの過密によって、ホストで CPU 競合が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ! クラスタ内のホスト ■ ホストの CPU 競合が警告/緊急/クリティカル レベルです ■ 警告/緊急/クリティカル レベルのホストの CPU デマンド ■ ゼロ個の子仮想マシンに [警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシンの CPU デマンド] があります 	<ol style="list-style-type: none"> 1 vSphere vMotion を使用して、CPU ワークロードが高い一部の仮想マシンを利用可能な CPU キャパシティを持つ別のホストに移行します。 2 ホストをアップグレードするか、CPU キャパシティの大きいホストを使用します。
全体の半分未満の仮想マシンによって、DRS 以外のクラスタのホストで CPU 競合が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ内のホスト ■ [! DRS 有効 OR ! DRS が完全に自動化されました] ■ ホストの CPU 競合が警告/緊急/クリティカル レベルです ■ 0 個よりも多い子仮想マシンに [警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシンの CPU デマンド] があります ■ 全体の 50% 以下の子仮想マシンに [警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシンの CPU デマンド] があります 	vSphere vMotion を使用して、CPU ワークロードが高い一部の仮想マシンを利用可能な CPU キャパシティを持つ別のホストに移行します。

アラートの定義	症状	推奨
全体の半分を超える仮想マシンによって、DRS 以外のクラスタのホストで CPU 競合が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ内のホスト ■ [! DRS 有効 OR !DRS が完全に自動化されました] ■ 警告/緊急/クリティカル レベルのホストの CPU 競合 ■ 警告/緊急/クリティカル レベルのホストの CPU デマンド ■ 全体の 50% を超える子仮想マシンに [警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシンの CPU デマンド] があります 	<ol style="list-style-type: none"> 1 vSphere vMotion を使用して、CPU ワークロードが高い一部の仮想マシンを利用可能な CPU キャパシティを持つ別のホストに移行します。 2 ホストをアップグレードするか、CPU キャパシティの大きいホストを使用します。
仮想マシンの過密によって、DRS 以外のクラスタのホストで CPU の競合が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ内のホスト ■ [! DRS 有効 OR !DRS が完全に自動化されました] ■ 警告/緊急/クリティカル レベルのホストの CPU 競合 ■ 警告/緊急/クリティカル レベルのホストの CPU デマンド ■ ゼロ個の子仮想マシンに [警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシンの CPU デマンド] があります 	<ol style="list-style-type: none"> 1 vSphere vMotion を使用して、CPU ワークロードが高い一部の仮想マシンを利用可能な CPU キャパシティを持つ別のホストに移行します。 2 ホストをアップグレードするか、CPU キャパシティの大きいホストを使用します。
全体の半分未満の仮想マシンによって、ホストでメモリ競合が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ! クラスタ内のホスト ■ 警告/緊急/クリティカル レベルのホストのメモリ競合 ■ 0 個よりも多い子仮想マシンに [警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシンのメモリ ワークロード] があります ■ 全体の 50% 以下の子仮想マシンに [警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシンのメモリ ワークロード] があります 	vSphere vMotion を使用して、メモリ ワークロードが高い一部の仮想マシンを利用可能なメモリ キャパシティを持つ別のホストに移行します。
全体の半分を超える仮想マシンによって、メモリ競合が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ! クラスタ内のホスト ■ 警告/緊急/クリティカル レベルのホストメモリのワークロード ■ 警告/緊急/クリティカル レベルのホストのメモリ競合 ■ 全体の 50% を超える子仮想マシンに [警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシンのメモリ ワークロード] があります 	<ol style="list-style-type: none"> 1 vSphere vMotion を使用して、メモリ ワークロードが高い一部の仮想マシンを利用可能なメモリ キャパシティを持つ別のホストに移行します。 2 ホストをアップグレードして、メモリ キャパシティの大きいホストを使用します。

アラートの定義	症状	推奨
仮想マシンの過密のために、ホストでメモリ競合が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ! クラスタ内のホスト ■ 警告/緊急/クリティカル レベルのホストメモリのワークロード ■ 警告/緊急/クリティカル レベルのホストのメモリ競合 ■ ゼロ個の子仮想マシンに [警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシンのメモリ ワークロード] があります 	<ol style="list-style-type: none"> 1 vSphere vMotion を使用して、メモリ ワークロードが高い一部の仮想マシンを利用可能なメモリ キャパシティを持つ別のホストに移行します。 2 ホストをアップグレードするか、メモリ キャパシティの大きいホストを使用します。
全体の半分未満の仮想マシンによって、DRS 以外のクラスタのホストでメモリ競合が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ内のホスト ■ [! DRS 有効 OR !DRS が完全に自動化されました] ■ 警告/緊急/クリティカル レベルのホストのメモリ競合 ■ 0 個よりも多い子仮想マシンに [警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシンのメモリ ワークロード] があります ■ 全体の 50% 以下の子仮想マシンに [警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシンのメモリ ワークロード] があります 	vSphere vMotion を使用して、メモリ ワークロードが高い一部の仮想マシンを利用可能なメモリ キャパシティを持つ別のホストに移行します。
全体の半分以上を越える仮想マシンによって、DRS 以外のクラスタのホストでメモリ競合が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ内のホスト ■ [! DRS 有効 OR !DRS が完全に自動化されました] ■ 警告/緊急/クリティカル レベルのホストメモリのワークロード ■ 警告/緊急/クリティカル レベルのホストのメモリ競合 ■ 全体の 50% を超える子仮想マシンに [警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシンのメモリ ワークロード] があります 	<ol style="list-style-type: none"> 1 vSphere vMotion を使用して、メモリ ワークロードが高い一部の仮想マシンを利用可能なメモリ キャパシティを持つ別のホストに移行します。 2 ホストをアップグレードするか、メモリ キャパシティの大きいホストを使用します。
仮想マシンの過密によって、DRS 以外のクラスタのホストでメモリ競合が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ内のホスト ■ [! DRS 有効 OR !DRS が完全に自動化されました] ■ 警告/緊急/クリティカル レベルのホストメモリのワークロード ■ 警告/緊急/クリティカル レベルのホストのメモリ競合 ■ ゼロ個の子仮想マシンに [警告/緊急/クリティカル レベルの仮想マシンのメモリ ワークロード] があります 	<ol style="list-style-type: none"> 1 vSphere vMotion を使用して、メモリ ワークロードが高い一部の仮想マシンを利用可能なメモリ キャパシティを持つ別のホストに移行します。 2 ホストをアップグレードするか、メモリ キャパシティの大きいホストを使用します。

アラートの定義	症状	推奨
ホストで、多数の受信パケットがドロップしています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ホスト ネットワークの受信パケットがドロップされました ■ ホスト ネットワークでドロップされた受信パケットが動的しきい値を超えています ■ ホスト ネットワークのデータ受信ワークロードが警告レベルです ■ ホスト ネットワークのデータ受信ワークロードが動的しきい値を超えています ■ ホスト CPU のデマンドがクリティカルレベルです 	<ol style="list-style-type: none"> 1 ホストの CPU が 1 つの場合は、ホストをアップグレードするか、CPU キャパシティの大きなホストを使用します。 2 ホストに NIC を追加します。 3 ネットワーク トラフィックの一部をネットワーク トラフィックの少ないホストに移動することにより、仮想マシンによって生成されるネットワーク トラフィックの量を減らします。
ホストで、多数の転送パケットがドロップしています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ホスト ネットワークの転送パケットがドロップされました ■ ホスト ネットワークでドロップされた転送パケットが動的しきい値を超えています ■ ホスト ネットワークのデータ転送ワークロードが警告レベルです ■ ホスト ネットワークのデータ転送ワークロードが動的しきい値を超えています ■ ホストは高い割合のパケットをドロップしています 	<ol style="list-style-type: none"> 1 ホストに NIC を追加します。 2 ネットワーク トラフィックの一部をネットワーク トラフィックの少ないホストに移動することにより、仮想マシンによって生成されるネットワーク トラフィックの量を減らします。
ESXi ホストが物理 NIC 上で「フラッピング」のリンク ステータスを検出しました。	物理 NIC リンクの状態がフラッピング（障害シンプトム）。	ESXi は、リンク フラッピング状態を回避するためにデバイスを無効化します。物理 NIC の交換が必要な場合があります。NIC が修理されて機能するようになると、アラートがキャンセルされます。物理 NIC を交換する場合は、手動でアラートをキャンセルしなければならない場合があります。
ESXi ホストは物理 NIC のリンクステータスダウンを検出しました。	物理 NIC リンクの状態がダウン（障害シンプトム）。	ESXi は、リンク フラッピング状態を回避するためにデバイスを無効化します。物理 NIC の交換が必要な場合があります。NIC が修理されて機能するようになると、アラートがキャンセルされます。物理 NIC を交換する場合は、手動でアラートをキャンセルしなければならない場合があります。
バッテリー センサーが問題を報告しています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ バッテリー センサーの健全性が赤 OR ■ バッテリー センサーの健全性が黄 	必要に応じてハードウェアを変更するか、交換します。詳細はハードウェア ベンダーにお問い合わせください。問題が解決された後、問題を報告したセンサーが問題がすでに存在しないことを示すと、アラートがキャンセルされます。

アラートの定義	症状	推奨
BMC センサーが問題を報告しています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ BMC センサーの健全性が赤 OR ■ BMC センサーの健全性が黄 	必要に応じてハードウェアを変更するか、交換します。詳細はハードウェア ベンダーにお問い合わせください。問題が解決された後、問題を報告したセンサーが問題がすでに存在しないことを示すと、アラートがキャンセルされます。
ファン センサーが問題を報告しています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ ファン センサーの健全性が赤 OR ■ ファン センサーの健全性が黄 	必要に応じてハードウェアを変更するか、交換します。詳細はハードウェア ベンダーにお問い合わせください。問題が解決された後、問題を報告したセンサーが問題がすでに存在しないことを示すと、アラートがキャンセルされます。
ハードウェア センサーが問題を報告しています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ ハードウェア センサーの健全性が赤 OR ■ ハードウェア センサーの健全性が黄 	必要に応じてハードウェアを変更するか、交換します。詳細はハードウェア ベンダーにお問い合わせください。問題が解決された後、問題を報告したセンサーが問題がすでに存在しないことを示すと、アラートがキャンセルされます。
メモリ センサーが問題を報告しています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ メモリ センサーの健全性が赤 OR ■ メモリ センサーの健全性が黄 	必要に応じてハードウェアを変更するか、交換します。詳細はハードウェア ベンダーにお問い合わせください。問題が解決された後、問題を報告したセンサーが問題がすでに存在しないことを示すと、アラートがキャンセルされます。
パワー センサーが問題を報告しています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ パワー センサーの健全性が赤 OR ■ パワー センサーの健全性が黄 	必要に応じてハードウェアを変更するか、交換します。詳細はハードウェア ベンダーにお問い合わせください。問題が解決された後、問題を報告したセンサーが問題がすでに存在しないことを示すと、アラートがキャンセルされます。
プロセッサ センサーが問題を報告しています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ プロセッサ センサーの健全性が赤 ■ プロセッサ センサーの健全性が黄 	必要に応じてハードウェアを変更するか、交換します。詳細はハードウェア ベンダーにお問い合わせください。問題が解決された後、問題を報告したセンサーが問題がすでに存在しないことを示すと、アラートがキャンセルされます。
SEL センサーが問題を報告しています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ SEL センサーの健全性が赤 OR ■ SEL センサーの健全性が黄 	必要に応じてハードウェアを変更するか、交換します。詳細はハードウェア ベンダーにお問い合わせください。問題が解決された後、問題を報告したセンサーが問題がすでに存在しないことを示すと、アラートがキャンセルされます。
ストレージ センサーが問題を報告しています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ ストレージ センサーの健全性が赤 OR ■ ストレージ センサーの健全性が黄 	必要に応じてハードウェアを変更するか、交換します。詳細はハードウェア ベンダーにお問い合わせください。問題が解決された後、問題を報告したセンサーが問題がすでに存在しないことを示すと、アラートがキャンセルされます。
システム ボード センサーが問題を報告しています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ システム ボード センサーの健全性が赤 OR ■ システム ボード センサーの健全性が黄 	必要に応じてハードウェアを変更するか、交換します。詳細はハードウェア ベンダーにお問い合わせください。問題が解決された後、問題を報告したセンサーが問題がすでに存在しないことを示すと、アラートがキャンセルされます。

アラートの定義	症状	推奨
温度センサーが問題を報告しています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 温度センサーの健全性が赤 OR ■ 温度センサーの健全性が黄 	必要に応じてハードウェアを変更するか、交換します。詳細はハードウェア ベンダーにお問い合わせください。問題が解決された後、問題を報告したセンサーが問題がすでに存在しないことを示すと、アラートがキャンセルされます。
電圧センサーが問題を報告しています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 電圧センサーの健全性が赤 OR ■ 電圧センサーの健全性が黄 	必要に応じてハードウェアを変更するか、交換します。詳細はハードウェア ベンダーにお問い合わせください。問題が解決された後、問題を報告したセンサーが問題がすでに存在しないことを示すと、アラートがキャンセルされます。

健全性/クリティカル

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

健全性

重要度

重大

アラートの定義	症状	推奨
vCenter に対してホストの接続が失われました。	<ul style="list-style-type: none"> ■ ホストへの接続が失われました（障害シンプトム） OR ■ ホストが vCenter から切断されています 	vSphere Client と vSphere Web Client にログオンして、ホストを vCenter Server サーバに手動で再接続します。ホストと vCenter Server の接続が復元されると、アラートがキャンセルされます。
vSphere High Availability (HA) によってネットワーク隔離ホストが検出されました。	vSphere HA によってネットワーク隔離ホストが検出されました（障害シンプトム）。	ホストが隔離アドレスに ping すること、および他のホストと通信することを不可能にしているネットワークの問題を解決してください。 vSphere HA が使用している管理ネットワークに冗長性が含まれていることを確認してください。冗長性があれば、vSphere HA は複数のパスで通信することができるため、ホストが隔離されるリスクが軽減されます。
vSphere High Availability (HA) によって可能性のあるホスト障害が検出されました。	vSphere HA によってホスト障害が検出されました（障害シンプトム）。	重複する IP アドレスのあるコンピュータを探し、それが異なる IP アドレスを持つよう再構成します。根本的な問題が解決され、vSphere HA マスター エージェントがホスト上の HA エージェントに接続できるようになると、この障害はクリアされて、アラートはキャンセルされます。 注： ESX ホスト上の /var/log/vmkernel ログ ファイルまたは ESXi ホスト上の /var/log/messages ログ ファイルの重複 IP の警告を使用し、重複する IP アドレスを持つコンピュータを特定できます。

アラートの定義	症状	推奨
トラフィックが多すぎるため、ホストでネットワーク競合が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ホストでネットワーク パケットのドロップが発生しています ■ 警告/緊急/クリティカル レベルのホストのネットワーク ワークロード 	<ol style="list-style-type: none"> 1 ポート グループおよび vSwitch でロード バランシング ポリシーを確認します。 2 ホストに NIC を追加します。 3 ネットワーク トラフィックの一部をネットワーク トラフィックの少ないホストに移動することにより、仮想マシンによって生成されるネットワーク トラフィックの量を減らします。
ホストで dvPort への接続の切断が発生しています。	dvPort へのネットワーク接続が失われました (障害シンプトム)。	物理アダプタを交換するか、物理スイッチをリセットします。dvPort への接続が復元されると、アラートがキャンセルされます。

アラートの定義	症状	推奨
ホストで物理ネットワーク接続の切断が発生しています。	ネットワーク接続の切断（障害シンプトム）。	<p>実際の障害を判断するか、考えられる問題を排除するためには、vSphere Client 内または ESX サービス コンソールから vmnic のステータスを確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ vSphere Client 内のステータスを確認するには、ESX ホストを選択し、[構成] をクリックし、[ネットワーク] をクリックします。仮想スイッチに現在割り当てられている vmnic が図に表示されます。vmnic が赤い X を示している場合、そのリンクは現在ダウンしています。 ■ サービス コンソールから、コマンド <code>esxcfg-nics</code> を実行します。表示される出力は次のようになります。Name PCI Driver Link Speed Duplex Description <pre>----- ----- vmnic0 04:04.00 tg3 Up 1000Mbps Full Broadcom BCM5780 Gigabit Ethernet vmnic1 04:04.01 tg3 Up 1000Mbps Full Broadcom BCM5780 Gigabit Ethernet. リンク列には、ネットワーク アダプタと物理スイッチ間のリンクのステータスが表示されます。ステータスは、[アップ] か [ダウン] のいずれかとなります。ネットワーク アダプタの中にアップしているものとダウンしているものがある場合は、目的の物理スイッチ ポートにアダプタが接続されていることを確認する必要がある場合があります。接続を確認するには、物理スイッチ上の各 ESX ホスト ポートを停止し、<code>esxcfg-nics -l</code> を実行し、影響を受ける vmnic を観測します。</pre> <p>アラート内で特定された vmnic が依然としてスイッチに接続されており、正しく構成されていることを確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ネットワーク ケーブルがスイッチおよびホストに接続されたままであることを確認します。 ■ スイッチがシステムに接続されており、正しく機能していること、および不注意で誤った構成にされていないことを確認します。詳細については、スイッチのドキュメントを参照してください。 ■ 物理スイッチと vmnic との間のアクティビティを確認します。ネットワーク トレースの実行またはアクティビティ LED の観測により、アクティビティを確認できます。 ■ 物理スイッチ上のネットワーク ポート設定を確認します。

アラートの定義	症状	推奨
		<p>影響を受けている vmnic がサービス コンソールに関連付けられている場合に、サービス コンソールの IP アドレスを再構成するには、http://kb.vmware.com/kb/1000258 を参照してください。問題の原因がハードウェアである場合は、ハードウェアの交換についてハードウェア ベンダーに問い合わせてください。</p>
ネットワーク ファイル システム (NFS) サーバに対してホストの接続が失われています。	NFS サーバとの接続が切断されました (障害 シンptom)。	<ol style="list-style-type: none"> 1 NFS サーバが実行されていることを確認します。 2 ネットワーク接続を確認し、ESX ホストが NFS サーバに接続できることを確認します。 3 同じ NFS マウントを使用している他のホストに同じ問題が生じていないか判断し、NFS サーバのステータスおよび共有ポイントを確認します。 4 サービス コンソールにログインし、<code>vmkping (vmkping <nfs server>)</code> を使用して NFS サーバへ ping することで、NFS サーバに接続できることを確認してください。 5 詳細なトラブルシューティング情報については、http://kb.vmware.com/kb/1003967 を参照してください。
システム再起動中に PCIe バス上で致命的なエラーが発生しました。	致命的な PCIe エラーが発生しました。	アラートで問題の原因として特定されている PCIe デバイスを確認し、交換します。詳細はベンダーにお問い合わせください。
致命的なメモリ エラーがシステム起動時に検出されました。	致命的なメモリ エラーが発生しました。	問題のあるメモリを交換するか、ベンダーにお問い合わせください。

健全性/緊急

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

健全性

重要度

緊急

アラートの定義	症状	推奨
ホストは dvPort への冗長接続を失いました。	DVPort へのネットワーク冗長性が失われました (障害シンプトム)。	物理アダプタを交換するか、物理スイッチをリセットします。DVPort への接続が復元されると、アラートがキャンセルされます。
ホストでネットワークへの冗長アップリンクが失われています。	ネットワーク冗長性の損失 (障害シンプトム)。	<p>実際の障害を判断するか、考えられる問題を排除するためには、まず、SSH またはコンソールを介して ESX へ接続します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <code>esxcfg-nics -l</code> を実行して使用可能なアップリンクを特定します。 <code>esxcfg-vswitch -U &lt;affected vmnic#&gt;</code> 影響を受ける vSwitch を実行して報告された vmnic をポート グループから削除します。 <code>esxcfg-vswitch -L &lt;available vmnic#&gt;</code> 影響を受ける vSwitch を実行して使用可能なアップリンクを、影響を受けるポート グループにリンクします。 <p>次に、vSphere Client または ESX サービスコンソール内の vmnic のステータスを確認します。</p> <ol style="list-style-type: none"> vSphere Client で ESX ホストを選択し、[構成] をクリックし、[ネットワーク] をクリックします。 <p>仮想スイッチに現在割り当てられている vmnic が図に表示されます。vmnic が赤い X を示している場合、そのリンクは現在使用できません。</p> <ol style="list-style-type: none"> サービス コンソールから、<code>esxcfg-nics -l</code> を実行します。表示される出力は次の例のようになります。Name PCI Driver Link Speed Duplex Description. <pre>----- vmnic0 04:04.00 tg3 Up 1000Mbps Full Broadcom BCM5780 Gigabit Ethernet vmnic1 04:04.01 tg3 Up 1000Mbps Full Broadcom BCM5780 Gigabit Ethernet. リンク列に</pre> <p>は、ネットワーク アダプタと物理スイッチ間のリンクのステータスが表示されます。ステータスは、[アップ] か [ダウン] のいずれかとなります。ネットワーク アダプタの中にアップしているものとダウンしているものがある場合は、目的の物理スイッチ ポートにアダプタが接続されていることを確認する必要がある場合があります。接続を確認するには、物理スイッチ上の各 ESX ホスト ポートを停止し、「<code>esxcfg-nics -l</code>」コマンドを実行し、影響を受ける vmnic を観測します。アラート内で特定された vmnic が依然と</p>

アラートの定義	症状	推奨
		<p>してスイッチに接続されており、正しく構成されていることを確認します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ネットワーク ケーブルがスイッチおよびホストに接続されたままであることを確認します。 2 スwitchがシステムに接続されており、正しく機能していること、および不注意で誤った構成にされなかったことを確認します。(スイッチのドキュメントを参照してください。) 3 ネットワーク追跡を実行するか、アクティビティ LED を観測して、物理スイッチと vmnic との間のアクティビティを確認します。 4 物理スイッチ上のネットワーク ポート設定を確認します。 <p>問題の原因がハードウェアである場合、ハードウェアの交換についてハードウェア ベンダーにお問い合わせください。</p>
システム起動中に PCIe エラーが発生しましたが、リカバリ可能なエラーです。	リカバリ可能な PCIe エラーが発生しました。	PCIe エラーはリカバリ可能ですが、システムの動作は、OEM ベンダーのファームウェアによるエラーの処理方法により異なります。詳細はベンダーにお問い合わせください。
ホスト上で回復可能なメモリ エラーが発生しました。	リカバリ可能なメモリ エラーが発生しました。	リカバリ可能なメモリ エラーはベンダーによって異なるため、詳細についてはベンダーにお問い合わせください。

リスク/シンプトムベース

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

リスク

重要度

シンプトムベース

アラートの定義	症状	推奨
ESXi ホストが、『vSphere 5.5 Hardening Guide』に違反しています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ Active Directory 認証が無効になっています OR ■ 非標準の NTP サービスの開始ポリシー OR ■ SSH サービスが実行中です OR ■ NTP サービスが停止されました OR ■ ローカルとリモートのシェル アクセスを自動的に無効にするためのタイムアウト値が非標準です OR ■ ESXi ホストを Active Directory に追加する際に、パスワード保護に vSphere Authentication Proxy が使用されていません OR ■ 永続的なログが無効になっています OR ■ iSCSI トラフィックの双方向 CHAP が無効になっています OR ■ NTP クライアントへのアクセスを制限する非標準のファイアウォール設定 OR ■ 時間同期用の NTP サーバが構成されていません OR ■ 非標準の ESXi Shell サービスの開始ポリシー OR ■ SNMP サーバへのアクセスを制限する非標準なファイアウォール設定 OR ■ ESXi Shell サービスが実行中です OR ■ 非標準の DCUI サービスの開始ポリシー OR ■ Dvfilter でバインドされた IP アドレスが構成されました OR ■ 非標準の SSH サービスの開始ポリシー OR ■ DCUI サービスが実行中です OR ■ 対話型シェルが自動的にログアウトするまでの非標準のアイドル時間です OR ■ 非標準の DCUI アクセスのユーザー リスト OR ■ リモートの syslog が有効になっていません 	『vSphere 5.5 Hardening Guide』のルール違反を vSphere5 Hardening Guide の推奨事項に基づいて修正します。

vSphere 分散ポート グループ

vCenter アダプタでは、環境内の vSphere 分散ポート オブジェクトでアラートを生成するアラート定義が提供されています。

健全性/クリティカル

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

健全性

重要度

重大

アラートの定義	症状	推奨
1 つ以上のポートがリンク ダウン状態です。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ポートは接続されています ■ 1 つ以上のポートがリンク ダウン状態です 	ホストの NIC が物理的に接続されていることを確認してください。ポートの管理ステータスを確認してください

仮想マシンのアラートの定義

vCenter アダプタでは、環境内の仮想マシン オブジェクトでアラートを生成するアラート定義が提供されています。

健全性/シンプトムベース

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

健全性

重要度

シンプトムベース

アラートの定義	症状	推奨
メモリの制限のため、仮想マシンでメモリの圧縮、バルーニング、またはスワップが発生しています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンのメモリの上限が設定されています AND ■ 仮想マシンのメモリ デマンドが構成済みのメモリ制限を超えています AND ■ [仮想マシンのメモリは圧縮されています OR ■ 仮想マシンはスワップを使用しています OR ■ 仮想マシンのメモリ バルーン値が警告/緊急/クリティカル レベルです] AND ■ 推奨される仮想マシンのメモリ サイズ 	仮想マシンのメモリの上限を推奨されるメモリサイズに合わせて増やします。または、仮想マシンのメモリの上限を解除します。
スワップ待ち時間によって仮想マシンの CPU 競合が高くなっています。	仮想マシンの CPU スワップ待ち時間が警告/緊急/クリティカル レベルです。	<ol style="list-style-type: none"> 1 メモリを増やしてホストをアップグレードします。 2 vSphere vMotion を使用して、この仮想マシンを別のホストまたはクラスタに移動します。 3 仮想マシンにメモリを予約してスワップを回避します。
I/O 待ち時間によって仮想マシンの CPU 競合が発生しています。	仮想マシンの CPU I/O 待ち時間が警告/緊急/クリティカル レベルです。	接続されているデータストアのデータストア I/O キャパシティを増やして、仮想マシンでの CPU I/O 待ち時間を減らします。
仮想マシンに予期しない高い CPU ワークロードがかかっています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンの CPU デマンドが警告/緊急/クリティカル レベルです ■ アノマリが高くなり始めているか、若干高くなっているか、または極めて高くなっています 	<ol style="list-style-type: none"> 1 ゲスト アプリケーションをチェックして、CPU の高いワークロードが想定された動作かどうか判断します。 2 この仮想マシンの CPU キャパシティを追加します。
仮想マシンに予期しない高いメモリ ワークロードがあります。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンのメモリ ワークロードが警告/緊急/クリティカル レベルです ■ アノマリが高くなり始めているか、若干高くなっているか、または極めて高くなっています 	<ol style="list-style-type: none"> 1 ゲスト アプリケーションをチェックして、メモリの高いワークロードが想定された動作かどうか判断します。 2 この仮想マシンのメモリを追加します。
仮想マシンにはスワップ待ち時間および長いディスク読み取り遅延によるメモリ競合が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンの CPU スワップ待ち時間が警告/緊急/クリティカル レベル (5/10/15) です ■ 仮想マシンの読み取り遅延が警告レベルです ■ 推奨される仮想マシンのメモリ サイズ 	この仮想マシンのメモリを追加します。

アラートの定義	症状	推奨
仮想マシンでメモリの圧縮、バレーニング、またはスワップによるメモリ競合が発生しています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ ! 仮想マシンのメモリの上限が設定されています AND ■ 仮想マシンのメモリ競合が警告/緊急/クリティカル レベルです AND ■ [仮想マシンのメモリ バルーン値が警告/緊急/クリティカル レベルです OR ■ 仮想マシンのメモリは圧縮されています OR ■ 仮想マシンはスワップを使用しています] 	<ol style="list-style-type: none"> 1 この仮想マシンにメモリ予約を追加して、バレーニングとスワップを防止します。 2 vSphere vMotion を使用して、この仮想マシンを別のホストまたはクラスタに移動します。
仮想マシンに予期しない高いディスク I/O ワークロードが発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンのディスク I/O ワークロードが警告/緊急/クリティカル レベル (80/90/95) です ■ 仮想マシンのディスク I/O ワークロードが動的しきい値を超えています 	<ol style="list-style-type: none"> 1 仮想マシンで実行されているアプリケーションをチェックして、高いディスク I/O ワークロードが想定された動作かどうか判断します。 2 vSphere Storage vMotion を使用して、この仮想マシンを IOPS 値の高い別のデータストアに移動します。
仮想マシンでディスク I/O 読み取り遅延の問題が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンのディスク読み取り遅延が警告/緊急/クリティカル レベルです ■ 仮想マシンのディスク読み取り遅延が動的しきい値を超えています ■ 仮想マシンで低い相互停止が発生しています ■ 仮想マシンの CPU スワップ待ち時間が短くなっています 	<ol style="list-style-type: none"> 1 仮想マシンに接続されているデータストアでストレージ I/O コントロールを有効にしているかどうかを確認してください。 2 仮想マシンに接続されているデータストアの IOPS を増やします。 3 vSphere Storage vMotion を使用して、この仮想マシンを IOPS 値の高い別のデータストアに移動します。
仮想マシンでディスク I/O 書き込み遅延の問題が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンのディスク書き込み遅延が警告/緊急/クリティカル レベルです ■ 仮想マシンのディスク書き込み遅延が動的しきい値を超えています ■ 仮想マシンの CPU スワップ待ち時間が短く (3 ミリ秒未満) なっています 	<ol style="list-style-type: none"> 1 データストアに接続されているデータストアでストレージ I/O コントロールを有効にしているかどうかを確認してください。 2 仮想マシンに接続されているデータストアの IOPS を増やします。 3 仮想マシンに複数のスナップショットが存在する場合は、古いほうのスナップショットを削除します。 4 vSphere Storage vMotion を使用して、一部の仮想マシンを別のデータストアに移動します。
スナップショットによって仮想マシンのディスク I/O 書き込み遅延の問題が発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンの CPU I/O 待ち時間が警告/緊急/クリティカル レベルです ■ 仮想マシンで少なくとも 1 つのスナップショットが作成されています ■ すべての子データストアで、[! ディスクコマンド遅延が警告レベルです] 	<ol style="list-style-type: none"> 1 仮想マシンに複数のスナップショットが存在する場合は、古いほうのスナップショットを削除します。 2 複数のスナップショットを 1 つのスナップショットに統合することにより、スナップショットの数を減らします。vSphere Client で、仮想マシンを選択して右クリックし、[スナップショット] を選択して [統合] をクリックします。

アラートの定義	症状	推奨
急速で予期しないディスク領域の消費が仮想マシンで発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ゲスト ファイル システムの全体的なディスク領域使用量が警告/緊急/クリティカル上限 (80/90/95) に到達しています ■ 仮想マシンのディスク領域の残り時間が十分です (60 日超) ■ ゲスト ファイル システムの領域使用量が動的しきい値を超えています ■ ゲスト パーティション ディスク領域の使用量 	<ol style="list-style-type: none"> 1 アプリケーションをチェックし、正しく動作していることを確認します。 2 新しいハード ディスクを仮想マシンに追加し、そのディスクを使用するようにゲスト ファイル システム パーティションを構成します。
1 つまたは複数のゲスト ファイル システムの空き領域が不足しています。	1 つまたは複数のゲスト ファイル システムの空き領域が不足しています (障害シンプトム)。	新しいハード ディスクを仮想マシンに追加し、そのディスクを使用するようにゲスト ファイル システム パーティションを構成します。
vSphere HA に、仮想マシンの起動に十分なリソースがありません。	vSphere HA に、仮想マシンの起動に十分なリソースがありません (障害シンプトム)。	<ol style="list-style-type: none"> 1 仮想マシンの CPU 予約を設定する場合は、CPU 予約構成を小さくします。 2 仮想マシンのメモリ予約が設定されている場合は、メモリ予約構成を小さくします。 3 クラスタにホストを追加します。 4 障害が発生したホストをオンラインに復帰するか、ネットワーク パーティションが存在する場合はそれを解決します。 5 DRS が手動モードの場合は、保留中の推奨を検索して、vSphere HA フェイルオーバーを続行できるようにそれらを承認します。
仮想マシンの Fault Tolerance の状態が「無効」状態に変化しました。	VM Fault Tolerance が無効な状態になりました (障害シンプトム)。	アラートで示されたセカンダリ仮想マシンを有効にします。
vSphere HA がネットワーク隔離された仮想マシンの再起動に失敗しました。	vSphere HA がネットワーク隔離された仮想マシンの再起動に失敗しました (障害シンプトム)。	仮想マシンを手動でパワーオンします。
仮想マシンの Fault Tolerance の状態が「セカンダリが必要」状態に変化しました。	VM Fault Tolerance が「セカンダリが必要」状態になりました (障害シンプトム)。	仮想マシンを保護するために Fault Tolerance (FT) が必要な場合は、HA を有効のままにします。

アラートの定義	症状	推奨
vSphere HA は仮想マシンのフェイルオーバー操作を実行できません	vSphere HA による仮想マシンのフェイルオーバーが失敗しました (障害シンプトム)	<ol style="list-style-type: none"> 1 ファイルがロックされているというエラー情報が報告される場合は、vSphere HA マスター エージェントが管理ネットワークまたはハートビート データストアを使用して監視できなくなったホスト上で仮想マシンがパワーオンされた可能性があります。 2 クラスタ外のホスト上のユーザーによって仮想マシンがパワーオンされたことも考えられます。いずれかのホストがオフライン状態だと判断された場合、ネットワークまたはストレージの問題がこの状況の原因となっていないかどうかを判断します。 3 仮想マシンが無効な状態であるというエラー情報が報告される場合は、進行中の操作によって仮想マシンのファイルにアクセスできなくなっている可能性があります。完了までに時間がかかるクローン作成操作など、現在進行中の操作がないか判別します。 4 また、仮想マシンをパワーオンして、返されるエラーを調べてみることもできます。
メモリの制限のため、仮想マシンでメモリの圧縮、バルーニング、またはスワップが発生しています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンのメモリの上限が設定されています ■ 仮想マシンのメモリ デマンドが構成済みのメモリ制限を超えています ■ [仮想マシンのメモリは圧縮されています OR ■ 仮想マシンはスワップを使用しています OR ■ 仮想マシンのメモリ バルーン値が警告/緊急/クリティカル レベルです] ■ 推奨される仮想マシンのメモリ サイズ 	仮想マシンのメモリの上限を推奨されるメモリサイズに合わせて増やします。または、仮想マシンのメモリの上限を解除します。

効率/シンプトムベース

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

効率

クリティカル度

シンプトムベース

アラートの定義	シンプトム	推奨
仮想マシンに大きなディスク スナップショットがあります。	シンプトムには次のすべての項目が含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンに大きなディスク スナップショットがあります ■ 節約可能な浪費スナップショット ■ データストア領域使用量が警告/緊急/クリティカル上限に達しています 	仮想マシンに複数のスナップショットが存在する場合は、古いほうのスナップショットを削除します。

効率/警告

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

効率

クリティカル度

警告

アラートの定義	シンプトム	推奨
仮想マシンがアイドル状態です。	シンプトムには次のすべての項目が含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンがアイドル状態です ■ 仮想マシンにて各 vCPU の準備完了 (Ready) が長くなっています ■ ! 仮想マシンがパワーオフ状態です 	この仮想マシンをパワーオフし、この仮想マシンが消費していた CPU とメモリを別の仮想マシンが使用できるようにします。

リスク/シンプトムベース

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

リスク

クリティカル度

シンプトムベース

アラートの定義	シンプトム	推奨
相互停止によって仮想マシンの CPU 競合が発生しています。	シンプトムには次のすべての項目が含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンの CPU I/O 相互停止が警告/緊急/クリティカル レベルです ■ ! 仮想マシンがパワーオフ状態です ■ 仮想マシンから削除する vCPU の数 	リストされたシンプトムを確認し、シンプトムで推奨されている数の vCPU を仮想マシンから削除します。
仮想マシンの CPU ワークロードが慢性的に高く、CPU ストレスの原因になっています。	シンプトムには次のすべての項目が含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンの CPU ストレスが警告/緊急/クリティカル レベルです ■ 追加する vCPU の推奨数 	この仮想マシンの CPU キャパシティを追加します。
スナップショットのために、仮想マシンの CPU 相互停止が高くなっています。	シンプトムには次のすべての項目が含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンの CPU I/O 相互停止が警告/緊急/クリティカル レベルです ■ 仮想マシンで少なくとも 1 つのスナップショットが作成されています 	CPU 相互停止 (%CSTP) の高い値を下げ、仮想マシンのパフォーマンスを向上させるには、スナップショットをメインの仮想ディスクに統合します。vSphere Client で、仮想マシンを選択して右クリックし、[スナップショット] を選択して [統合] をクリックします。統合により、相互停止 (%CSTP) の値が下がるか除去され、仮想マシンのパフォーマンスが向上します。パフォーマンスが十分に向上しない場合は、引き続き、仮想マシンの他の潜在的なパフォーマンスの問題を調べます。VMware KB http://kb.vmware.com/kb/2000058 を参照してください。
仮想マシンのメモリ ワークロードが慢性的に高く、メモリのストレスの原因になっています。	シンプトムには次のすべての項目が含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンのメモリ ストレスが警告/緊急/クリティカル レベルです ■ 推奨される仮想マシンのメモリ サイズは 0 より大きい 	ゲストにメモリを追加します。
仮想マシンは、ディスク領域が不足すると予測されます。	シンプトムには次のすべての項目が含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンのディスク領域の残り時間は十分です (60 日以上) ■ ! ゲスト ファイル システムの領域使用量が動的しきい値を超えています ■ ! ゲスト ファイル システムの全体的なディスク領域使用量が警告上限 (85%) に到達しています ■ ゲスト パーティション ディスク領域の使用量 	<ol style="list-style-type: none"> 1 アプリケーション構成をチェックして、仮想マシンのディスク キャパシティが十分であるか判断します。 2 新しいハード ディスクを仮想マシンに追加し、そのディスクを使用するようにゲスト ファイル システム パーティションを構成します。

アラートの定義	シンプトム	推奨
仮想マシンのディスク領域は残りわずかです。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ゲスト ファイル システムの全体的なディスク領域使用量が警告/緊急/クリティカル上限 (80/90/95) に到達しています ■ 仮想マシンのディスク領域の残り時間は十分です (60 日以上) ■ ! ゲスト ファイル システムの領域使用量が動的しきい値を超えています ■ ゲスト パーティション ディスク領域の使用量 	<ol style="list-style-type: none"> 1 新しいハード ディスクを仮想マシンに追加し、そのディスクを使用するようにゲスト ファイル システム パーティションを構成します。 2 ゲスト内のディスク クリーンアップ メカニズムを使用して、ディスク領域を解放します。
仮想マシンが『vSphere 5.5 Hardening Guide』に違反しています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ VMCI を使用した無制限の仮想マシン間通信 OR ■ VMsafe CPU/メモリ API ポート番号が構成されています OR ■ Dvfilter ネットワーク API が有効です OR ■ 非準拠の最大 VMX ファイル サイズ OR ■ 仮想マシンの非準拠の最大 VM ログ ファイル サイズ OR ■ デバイス設定の権限のない変更を許可します OR ■ 権限のないデバイスの接続と切断を許可します OR ■ ツールの自動インストールが無効になっていません OR ■ リモート コンソール接続の非準拠の最大数 OR ■ 仮想マシンが物理ホストに関する詳細情報を取得できるようにします OR ■ 仮想マシンの非準拠の最大ログ ファイル数 OR ■ 機能が vSphere で公開されていません: MemsFss が無効になっていません OR ■ VMsafe CPU/メモリ API は有効です OR ■ パラレル ポートが接続されました OR ■ コンソールのドラッグ アンド ドロップ操作が無効になっていません OR ■ コンソールのコピー操作が無効になっていません OR ■ シリアル ポートが接続されました OR ■ 機能が vSphere で公開されていません: 自動ログオンが無効になっていません OR ■ 独立型の読み取り専用ディスクを使用します OR 	『vSphere Hardening Guide』のルール違反を『vSphere 5.5 Hardening Guide (XLSX)』での推奨事項に基づいて修正します。

アラートの定義	シンプトム	推奨
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 機能が vSphere で公開されていません: UnityPush が無効になっていません OR ■ 仮想ディスクの圧縮が無効になってい ません - diskShrink OR ■ 機能が vSphere で公開されていません: GetCreds が無効になっていません OR ■ CD-ROM が接続されました OR ■ 機能が vSphere で公開されていません: HGFSServerSet が無効になっていま せん OR ■ コンソールの貼り付け操作が無効になっ ていません OR ■ 機能が vSphere で公開されていません: BIOSBBS が無効になっていません OR ■ 仮想ディスクの圧縮が無効になっていま せん - diskWiper OR ■ USB コントローラが接続されました OR ■ 機能が vSphere で公開されていません: 監視制御が無効になっていません OR ■ フロッピー ドライブが接続されています OR ■ 機能が vSphere で公開されていません: LaunchMenu が無効になっていません OR ■ Versionget が無効になっていません OR ■ vSphere で公開されていない機能: Toporequest が無効になっていません OR ■ vSphere で公開されていない機能: Unity-Interlock が無効になっていま せん OR ■ 仮想マシンのログが無効になっていま せん OR ■ vSphere で公開されていない機能: Unity が無効になっていません OR ■ vSphere で公開されていない機能: Trashfolderstate が無効になっていま せん OR ■ VGA 専用モードが有効になっていま せん OR ■ vSphere で公開されていない機能: Trayicon が無効になっていません OR ■ vSphere で公開されていない機能: Unity-Taskbar が無効になっていま せん OR 	

アラートの定義	シンプトム	推奨
	<ul style="list-style-type: none"> ■ vSphere で公開されていない機能: Versionset が無効になっていません OR ■ 仮想マシン コンソールの VNC プロトコ ルでのアクセスが無効になっていません OR ■ vSphere で公開されていない機能: Protocolhandler が無効になっていま せん OR ■ VIX メッセージが無効になっていません OR ■ vSphere で公開されていない機能: Shellaction が無効になっていません OR ■ 3D 機能が無効になっていません OR ■ vSphere で公開されていない機能: Unity-Windowcontents が無効にな っていません OR ■ vSphere で公開されていない機能: Unity-Unityactive が無効になってい ません 	

リスク/警告

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

リスク

重要度

警告

アラートの定義	症状	推奨
仮想マシンは構成された制限を超える CPU を要求しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンの CPU リミットが設定されています ■ 仮想マシンの CPU デマンドが構成済みの上限を超えています ■ ! 仮想マシンの CPU デマンドがプロビジョン済みキャパシティを超えています 	この仮想マシンの CPU 上限を増やすか、または解除します。

vSphere Distributed Switch のアラートの定義

vCenter アダプタでは、環境内の vSphere Distributed Switch オブジェクトでアラートを生成するアラート定義が提供されています。

健全性/クリティカル

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

健全性

重要度

重大

アラートの定義	症状	推奨
1 つ以上のポートでネットワーク トラフィックがブロックされています。	1 つ以上のポートでネットワーク トラフィックがブロックされています。	ポートグループのセキュリティ ポリシーと ACL ルール構成を確認してください。

健全性/警告

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

健全性

重要度

警告

アラートの定義	症状	推奨
Distributed Switch の構成が同期していません。	Distributed Switch の構成が vCenter Server と同期していません。	Distributed Switch の構成をホストと一致するように変更します。同期していない Distributed Switch のプロパティを識別します。これらのプロパティが接続性を維持するためにホスト上でローカルに変更された場合は、vCenter Server で Distributed Switch の構成を更新します。それ以外の場合は、このホストに vCenter Server の構成を再適用します。
1 つ以上の VLAN が物理スイッチでサポートされていません。	1 つ以上の VLAN が物理スイッチでサポートされていません。	物理スイッチと分散ポート グループの VLAN 構成が一致するようにしてください。
チーミング構成が物理スイッチと一致していません。	チーミング構成が物理スイッチと一致していません。	物理スイッチと Distributed Switch のチーミング構成が一致するようにしてください。
Distributed Switch の MTU がホストの 1 つ以上の VLAN で許可されていません。	Distributed Switch の MTU がホストの 1 つ以上の VLAN で許可されていません。	物理スイッチと Distributed Switch の MTU 構成が一致するようにしてください。
ホストと物理スイッチの間に MTU の不一致があります。	ホストと物理スイッチの間に MTU の不一致があります。	ホストの MTU 構成を調整して物理スイッチと一致させてください。物理スイッチの MTU 構成を変更してください。

リスク/警告

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

リスク

重要度

警告

アラートの定義	症状	推奨
Distributed Switch の構成が正しくありません。	Distributed Switch への物理的な冗長接続のないホスト。	各ホストの少なくとも 2 つの NIC が Distributed Switch に接続されていることを確認します。

vCenter Server のアラートの定義

vCenter アダプタでは、環境内の vCenter Server オブジェクトでアラートを生成するアラート定義が提供されています。

健全性/シンプトムベース

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

健全性

重要度

シンプトムベース

アラートの定義	症状	推奨
vCenter Server コンポーネントに関する問題が生じました。	vCenter Server の健全性の変化（障害シンプトム）。	問題を解決するため対策は、障害を引き起こした特定の問題によって異なります。問題の詳細を確認し、ドキュメントを参照してください。
vCenter Server 内に重複したオブジェクト名が見つかりました。	vCenter Server 内に重複したオブジェクト名が見つかりました。	名前ベースの識別機能を有効にする前に、仮想マシン名が一意であることを確認します。
vCenter Server のストレージ データの収集に失敗しました。	vCenter Server のストレージ データの収集に失敗しました。	vCenter Management Webservice が開始されていて Storage Management Service が機能していることを確認します。

データストアのアラートの定義

vCenter アダプタでは、環境内のデータストア オブジェクトでアラートを生成するアラート定義が提供されています。

健全性/シンプトムベース

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

健全性

重要度

シンプトムベース

アラートの定義	症状	推奨
データストアに、予期しない高いディスク I/O ワークロードがあります。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 警告/緊急/クリティカル レベルのデータストアのディスク I/O ワークロード ■ データストアのディスク I/O ワークロードが動的しきい値を超えています 	<p>1 データストアに配置されている仮想マシンで実行されているアプリケーションをチェックして、高いディスク I/O ワークロードが想定された動作かどうか判断します。</p> <p>2 データストアの IOPS を増やします。</p>
急速で予期しないディスク領域の消費がデータストアで発生しています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ データストア領域使用量が警告/緊急/クリティカル レベルに到達しています ■ データストア容量の増大が動的しきい値を超えています ■ データストアの残り時間が十分です 	<p>1 このデータストアに仮想マシンの予期しないプロビジョニングがあるかどうかチェックします。</p> <p>2 vSphere Storage vMotion を使用して、一部の仮想マシンを別のデータストアに移動します。</p> <p>3 データストアにキャパシティを追加します。</p>

健全性/クリティカル

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

健全性

クリティカル度

クリティカル

アラートの定義	シンプトム	推奨
データストアのストレージ デバイスがオフになっていることが検出されました。	ストレージ デバイスは管理上オフにされました (障害シンプトム)。	デバイスの状態について管理者に問い合わせてください。このデバイスがオンになると、この障害は解消され、アラートはキャンセルされます。SCSI デバイスが分離されているか、永続的に取り外されている場合は、アラートを手動でキャンセルする必要があります。
データストアでストレージ デバイスへの接続の切断が発生しています。	ストレージ デバイスへのホスト接続が切断されています (障害シンプトム)。	<p>ストレージ デバイス バス (例 : vmhba35:C1:T0:L7) には、考えられる複数の障害点が含まれています : バス要素 障害点</p> <p>-----</p> <p>vmhba35 HBA (ホスト バス アダプタ) C1 チャンネル T0 Target (ストレージ プロセッサ ポート) L7 LUN (論理ユニット番号またはディスク ユニット)。</p> <p>障害の原因を特定するか、考えられる問題を排除するには、<code>esxcfg-mpath -l</code> コマンドを実行して、報告されたストレージ デバイスへの使用可能なストレージ バスを特定します。詳細については、http://kb.vmware.com/kb/1003973 を参照してください。再スキャンによってターゲットに対する可視性がリストアされないことを確認します。コマンドライン インターフェイスおよび vSphere Client を使用したストレージ デバイスの再スキャンの詳細については、http://kb.vmware.com/kb/1003988 を参照してください。接続の問題が iSCSI ストレージまたはファイバ ストレージのいずれにあるかを判断します。</p> <p>ソフトウェア イニシエータを使用して iSCSI ストレージに対する接続のトラブルシューティングを実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ESX からストレージ アレイへの ping が失敗しているかどうかを確認します。詳細については、http://kb/vmware.com/kb/1003486 を参照してください。 2 ストレージ アレイの各ネットワーク ポータルに対する vmkping が失敗しているかどうかを確認します。詳細については、http://kb.vmware.com/kb/10037828 を参照してください。 3 イニシエータがアレイに登録されていることを確認します。詳細については、ストレージ ベンダーにお問い合わせください。 4 次の物理ハードウェアが正しく機能していることを確認します : イーサネット スイッチ、スイッチと ESX ホスト間のイーサネット ケーブル、スイッチとストレージ アレイ間のイーサネット ケーブル。

アラートの定義	シムptom	推奨
		<p>ファイバ接続ストレージに対する接続のトラブルシューティングを実行するには、ファイバ スイッチを確認します。ファイバ スイッチ ゾーニング構成により、ESX ホストがストレージ アレイを認識できるようになります。支援が必要な場合は、スイッチ ベンダーにお問い合わせください。ファイバ スイッチは、RSCN メッセージを ESX ホストに伝播します。ファイバ スイッチの構成に関する詳細については、http://kb.vmware.com/kb/1002301 を参照してください。</p> <p>最後に、次の物理ハードウェアを確認します：アレイ上のストレージ プロセッサ、ファイバ スイッチとスイッチ内のギガビット インターフェイス コンバータ（GBIC）ユニット、ファイバ スイッチとアレイ間のファイバ ケーブル、アレイ自体。</p> <p>変更した後は、ターゲットが検出されることを確認するために再スキャンする必要があります。影響を受けているホストとストレージ デバイスのすべての組み合わせについてストレージ接続がリストアされると、障害がクリアされ、アラートがキャンセルされます。指摘されているデバイスのストレージ接続が永続的な損失または変更によるものの場合、回避策として障害アラートをキャンセルする必要があります。その後、アラートは自動的にキャンセルされます。</p>

健全性/緊急

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

健全性

クリティカル度

緊急

アラートの定義	シムptom	推奨
データストアで、ストレージ デバイスへの冗長パスを失った 1 つまたは複数のホストが存在します	ストレージ デバイスへの冗長性が失われています (障害シムptom)。	<p>ストレージ デバイス バス (例: vmhba35:C1:T0:L7) には、考えられる複数の障害点が含まれています:</p> <p>バス要素 障害点</p> <p>-----</p> <p>vmhba35 HBA (ホスト バス アダプタ) C1 チャネル T0 Target (ストレージ プロセッサ ポート) L7 LUN (論理ユニット番号またはディスク ユニット)。</p> <p>次のガイダンスに従って、障害の原因を判定するか、考えられる問題を排除します。esxcfg-mpath - l コマンドを実行し、報告されたストレージ デバイスに対して使用可能なストレージバスを特定します。詳細については、http://kb.vmware.com/kb/1003973 を参照してください。</p> <p>再スキャンによってターゲットに対する可視性がリストアされないことを確認します。コマンドライン インターフェイスおよび vSphere Client を使用したストレージ デバイスの再スキャンの詳細については、http://kb.vmware.com/kb/1003988 を参照してください。</p> <p>接続の問題が iSCSI ストレージまたはファイバストレージのいずれにあるかを判断します。ソフトウェア イニシエータを使用して iSCSI ストレージに対する接続のトラブルシューティングを実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ESX からストレージ アレイへの ping が失敗しているかどうかを確認します。詳細については、http://kb/vmware.com/kb/1003486 を参照してください。 2 ストレージ アレイの各ネットワーク ポータルに対する vmkping が失敗しているかどうかを確認します。詳細については、http://kb.vmware.com/kb/10037828 を参照してください。 3 イニシエータがアレイに登録されていることを確認します。詳細については、ストレージ ベンダーにお問い合わせください。 4 次の物理ハードウェアが正しく機能していることを確認します: イーサネット スイッチ、スイッチと ESX ホスト間のイーサネット ケーブル、スイッチとストレージ アレイ間のイーサネット ケーブル。 <p>ファイバ接続ストレージに対する接続のトラブルシューティングを実行するには、ファイバ スイッチを確認します。ファイバ スイッチ ゾーニング構成により、ESX ホストがストレージ ア</p>

アラートの定義	シンプトム	推奨
		<p>レイを認識できるようになります。支援が必要な場合は、スイッチベンダーにお問い合わせください。ファイバスイッチは、RSCN メッセージを ESX ホストに伝播します。ファイバスイッチの構成に関する詳細については、http://kb.vmware.com/kb/1002301 を参照してください。</p> <p>最後に、次の物理ハードウェアを確認します：アレイ上のストレージ プロセッサ、ファイバスイッチとスイッチ内のギガビット インターフェイス コンバータ（GBIC）ユニット、ファイバスイッチとアレイ間のファイバケーブル、アレイ自体。変更した後は、ターゲットが検出されることを確認するために再スキャンする必要があります。影響を受けているホストとストレージデバイスのすべての組み合わせについてストレージ接続がリストアされると、障害がクリアされ、アラートがキャンセルされます。指摘されているデバイスのストレージ接続が永続的な損失または変更によるものの場合、回避策として障害アラートをキャンセルする必要があります。その後、アラートは自動的にキャンセルされます。</p>

リスク/シンプトムベース

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

リスク

クリティカル度

シンプトムベース

アラートの定義	シンプトム	推奨
データストアのディスク領域が残りわずかです。	シンプトムには次のすべての項目が含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ データストア領域使用量が警告/緊急/クリティカル レベルに到達しています ■ ! データストア容量の増大が動的しきい値を超えています ■ データストア容量の残り時間が少なくなっています 	<ol style="list-style-type: none"> 1 データストアにキャパシティを追加します。 2 vSphere vMotion を使用して、一部の仮想マシンを別のデータストアに移動します。 3 データストアから仮想マシンの未使用のスナップショットを削除します。 4 データストアにある未使用のテンプレートを削除します。
データストアは、ディスク領域が不足すると予測されます。	シンプトムには次のすべての項目が含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ! データストアの領域使用量が警告レベルに達しています ■ ! データストア容量の増大が動的しきい値を超えています ■ データストア容量の残り時間が少なくなっています 	<ol style="list-style-type: none"> 1 データストアの使用量が計画どおり増大しているかをチェックし、必要に応じてストレージを拡張します。 2 vSphere vMotion を使用して、一部の仮想マシンを別のデータストアに移動します。

データ センターのアラート定義

vCenter アダプタでは、環境内のデータ センター オブジェクトでアラートを生成するアラート定義が提供されています。

リスク/シンプトムベース

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

リスク

重要度

シンプトムベース

アラートの定義	シンプトム	推奨
データ センターの CPU「デマンド」ワークロードが不均衡になっています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DRS が有効になりました ■ DRS が完全に自動化されました ■ DC の CPU「デマンド」ワークロードが不均衡になっています ■ DC の CPU「デマンド」ワークロードには大きな差があります ■ DC の 1 つ以上のクラスターで、CPU「デマンド」ワークロードが高い状態です 	コンテナをリバランスして、ワークロードをより均等に配分します。
データ センターのメモリ「デマンド」ワークロードが不均衡になっています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DRS が有効になりました ■ DRS が完全に有効になりました ■ DC のメモリ「デマンド」ワークロードの差が不均衡になっています ■ DC の 1 つ以上のクラスターで、メモリ「デマンド」ワークロードが高い状態です 	コンテナをリバランスして、ワークロードをより均等に配分します。
データ センターのメモリ「消費」ワークロードが不均衡になっています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DRS が有効になりました ■ DRS が完全に自動化されました ■ DC のメモリ「消費」ワークロードが不均衡になっています ■ DC のメモリ「消費」ワークロードには大きな差があります ■ DC の 1 つ以上のクラスターで、メモリ「消費」ワークロードが高い状態です 	コンテナをリバランスして、ワークロードをより均等に配分します。

カスタム データ センターのアラート定義

vCenter アダプタでは、環境内のカスタム データ センター オブジェクトでアラートを生成するアラート定義が提供されています。

リスク/シンプトムベース

これらのアラート定義には、次の影響情報とクリティカル度情報があります。

影響

リスク

重要度

シンプトムベース

アラートの定義	シンプトム	推奨
カスタム データ センターの CPU 「デマンド」ワークロードが不均衡になっています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DRS が有効になりました ■ DRS が完全に自動化されました ■ CDC の CPU 「デマンド」ワークロードが不均衡になっています ■ CDC の CPU 「デマンド」ワークロードには大きな差があります ■ CDC の 1 つ以上のクラスタで、CPU 「デマンド」ワークロードが高い状態です 	コンテナをリバランスして、ワークロードをより均等に配分します。
カスタム データ センターのメモリ 「デマンド」ワークロードが不均衡になっています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DRS が有効になりました ■ DRS が完全に自動化されました ■ CDC のメモリ 「デマンド」ワークロードが不均衡になっています ■ CDC のメモリ 「デマンド」ワークロードには大きな差があります ■ CDC の 1 つ以上のクラスタで、メモリ 「デマンド」ワークロードが高い状態です 	コンテナをリバランスして、ワークロードをより均等に配分します。
カスタム データ センターのメモリ 「消費」ワークロードが不均衡になっています。	<p>シンプトムには次のすべての項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DRS が有効になりました ■ DRS が完全に自動化されました ■ CDC のメモリ 「消費」ワークロードが不均衡になっています ■ CDC のメモリ 「消費」ワークロードには大きな差があります ■ CDC の 1 つ以上のクラスタで、メモリ 「消費」ワークロードが高い状態です 	コンテナをリバランスして、ワークロードをより均等に配分します。

vRealize Operations Manager でのプロパティの定義

プロパティは、vRealize Operations Manager 環境内のオブジェクトの属性です。プロパティは、シンプトム定義で使われます。ダッシュボード、ビュー、およびレポートでも使われます。

vRealize Operations Manager ではアダプタを使用して、環境内のターゲット オブジェクトのプロパティを収集します。vCenter アダプタ経由で接続されるすべてのオブジェクトについて、プロパティ定義が提供されます。収集されるプロパティは、環境内のオブジェクトに応じて異なります。

プロパティに基づくシンプトムをアラート定義に追加すると、監視対象オブジェクトのプロパティに変化が発生した場合に通知されるようになります。たとえば、ディスク領域は仮想マシンのハードウェア プロパティです。ディスク領域を使用してシンプトムを定義し、値が特定の数値を下回ったら警告されるようになります。[アラートの症状の定義](#) を参照してください。

vRealize Operations Manager は、すべてのオブジェクトに対してオブジェクト タイプの分類プロパティとオブジェクト タイプのサブ分類プロパティを生成します。オブジェクト タイプの分類プロパティを使用して、プロパティ値 *ADAPTER_INSTANCE*、*GROUP*、*BUSINESS_SERVICE*、*TIER*、*GENERAL* に基づいて、オブジェクトがアダプタ インスタンス、カスタム グループ、アプリケーション、階層、一般オブジェクトのいずれであるかを判定できます。

vCenter Server コンポーネントのプロパティ

VMware vSphere ソリューションは vRealize Operations Manager とともにインストールされ、vCenter アダプタが含まれています。vRealize Operations Manager では vCenter アダプタを使用して、vCenter Server システム内のオブジェクトのプロパティを収集します。

vCenter Server コンポーネントは、vCenter アダプタの *describe.xml* ファイルにリスト表示されます。次の例は、*describe.xml* に含まれている仮想マシンのランタイム プロパティである *memoryCap*（メモリ キャパシティ）を示しています。

```
<ResourceGroup instanced="false" key="runtime" nameKey="5300" validation="">
  <ResourceAttribute key="memoryCap" nameKey="1780" dashboardOrder="200" dataType="float"
    defaultMonitored="true" isDiscrete="false" isRate="false" maxVal=""
    minVal="" isProperty="true" unit="kb"/>
</ResourceGroup>
```

ResourceAttribute 要素には、UI に表示されるプロパティの名前が含まれており、これらの要素はプロパティ キーとして文書化されます。*isProperty = "true"* は、*ResourceAttribute* がプロパティであることを示しています。

vCenter Server のプロパティ

vRealize Operations Manager では、vCenter Server システム オブジェクトのサマリとイベントのプロパティが収集されます。

表 7-163. vCenter Server システム オブジェクトについて収集されるサマリ プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
summary version	バージョン	バージョン
summary vcuuid	VirtualCenter ID	Virtual Center ID
summary vcfullname	製品名	製品名

表 7-164. vCenter Server システム オブジェクトについて収集されるイベント プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
event time	前回の VC イベント時間	前回の Virtual Center イベント時間
event key	前回の VC イベント ID	前回の Virtual Center イベント ID

表 7-165. vCenter Server システム オブジェクトについて収集されるカスタム フィールド マネージャ プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
CustomFieldManager CustomFieldDef	カスタム フィールド定義	アダプタ レベルでの vCenter タグ付け情報のカスタム フィールド定義

仮想マシンのプロパティ

vRealize Operations Manager では、仮想マシン オブジェクトの構成、ランタイム、CPU、メモリ、ネットワーク I/O、サマリ、ゲスト ファイル システム、データストア使用に関するプロパティが収集されます。

表 7-166. VIN アダプタのローカライズをサポートするための、仮想マシン オブジェクトについて収集されるプロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
RunsOnApplicationComponents	仮想マシン上で動作しているアプリケーション コンポーネント	仮想マシン上で動作しているアプリケーション コンポーネント
DependsOnApplicationComponents	仮想マシンが依存しているアプリケーション コンポーネント	この仮想マシンが依存している他のマシン上で動作しているアプリケーション コンポーネント。

表 7-167. 仮想マシン オブジェクトについて収集される構成プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
config name	名前	名前
config guestFullName	ゲストのフルネーム	ユーザーによって構成されたゲスト OS のフル ネーム。
config hardware numCpu	仮想 CPU 数	仮想 CPU 数
config hardware memoryKB	メモリ	メモリ
config hardware thinEnabled	シン プロビジョニング ディスク	シン プロビジョニングが有効かどうかを示します。
config hardware diskSpace	ディスク領域	ディスク領域
config cpuAllocation reservation	予約	CPU 予約
config cpuAllocation limit	制限	CPU 制限
config cpuAllocation shares shares	共有	CPU 共有
config memoryAllocation reservation	予約	CPU 予約
config memoryAllocation limit	制限	制限
config memoryAllocation shares shares	シェア	メモリ シェア
config extraConfig mem_hotadd	メモリのホット アド	メモリのホット アド構成
config extraConfig vcpu_hotadd	VCPU ホット アド	VCPU のホット アド構成
config extraConfig vcpu_hotremove	VCPU ホット リムーブ	VCPU のホット リムーブ構成
config security disable_autoinstall	ツールの自動インストールの無効化 (isolation.tools.autoInstall.disable)	ツールの自動インストールの無効化 (isolation.tools.autoInstall.disable)
config security disable_console_copy	コンソール コピー操作の無効化 (isolation.tools.copy.disable)	コンソール コピー操作の無効化 (isolation.tools.copy.disable)

表 7-167. 仮想マシン オブジェクトについて収集される構成プロパティ (続き)

プロパティ キー	プロパティ名	説明
config security disable_console_dnd	コンソール ドラッグ アンド ドロップ操作の無効化 (isolation.tools.dnd.disable)	コンソール ドラッグ アンド ドロップ操作の無効化 (isolation.tools.dnd.disable)
config security enable_console_gui_options	コンソール GUI 操作の有効化 (isolation.tools.setGUIOptions.enable)	コンソール GUI 操作の有効化 (isolation.tools.setGUIOptions.enable)
config security disable_console_paste	コンソール貼り付け操作の無効化 (isolation.tools.paste.disable)	コンソール貼り付け操作の無効化 (isolation.tools.paste.disable)
config security disable_disk_shrinking_shrink	仮想ディスク圧縮の無効化 (isolation.tools.diskShrink.disable)	仮想ディスク圧縮の無効化 (isolation.tools.diskShrink.disable)
config security disable_disk_shrinking_wiper	仮想ディスク ワイパーの無効化 (isolation.tools.diskWiper.disable)	仮想ディスク ワイパーの無効化 (isolation.tools.diskWiper.disable)
config security disable_hgfs	HGFS ファイル転送の無効化 (isolation.tools.hgfsServerSet.disable)	HGFS ファイル転送の無効化 (isolation.tools.hgfsServerSet.disable)
config security disable_independent_nonpersistent	独立型読み取り専用ディスクの使用の回避 (scsiX:Y.mode)	独立型読み取り専用ディスクの使用の回避 (scsiX:Y.mode)
config security enable_intervm_vmci	VMCI を使用した仮想マシン間コミュニケーションの有効化 (vmciO.unrestricted)	VMCI を使用した仮想マシン間コミュニケーションの有効化 (vmciO.unrestricted)
config security enable_logging	仮想マシンのログの有効化 (logging)	仮想マシンのログの有効化 (logging)
config security disable_monitor_control	仮想マシンの監視制御の無効化 (isolation.monitor.control.disable)	仮想マシンの監視制御の無効化 (isolation.monitor.control.disable)
config security enable_non_essential_3D_features	サーバおよびデスクトップ仮想マシンの 3D 機能の有効化 (mks.enable3d)	サーバおよびデスクトップ仮想マシンの 3D 機能の有効化 (mks.enable3d)
config security disable_unexposed_features_autologon	非公開機能の自動ログオンの無効化 (isolation.tools.ghi.autologon.disable)	非公開機能の自動ログオンの無効化 (isolation.tools.ghi.autologon.disable)
config security disable_unexposed_features_biosbbs	非公開機能の biosbbs の無効化 (isolation.bios.bbs.disable)	非公開機能の biosbbs の無効化 (isolation.bios.bbs.disable)
config security disable_unexposed_features_getcreds	非公開機能の getcreds の無効化 (isolation.tools.getCreds.disable)	非公開機能の getcreds の無効化 (isolation.tools.getCreds.disable)
config security disable_unexposed_features_launchmenu	非公開機能の launchmenu の無効化 (isolation.tools.ghi.launchmenu.change)	非公開機能の launchmenu の無効化 (isolation.tools.ghi.launchmenu.change)
config security disable_unexposed_features_memfs	非公開機能の memfs の無効化 (isolation.tools.memSchedFakeSampleStats.disable)	非公開機能の memfs の無効化 (isolation.tools.memSchedFakeSampleStats.disable)
config security disable_unexposed_features_protocolhandler	非公開機能の protocolhandler の無効化 (isolation.tools.ghi.protocolhandler.info.disable)	非公開機能の protocolhandler の無効化 (isolation.tools.ghi.protocolhandler.info.disable)

表 7-167. 仮想マシン オブジェクトについて収集される構成プロパティ (続き)

プロパティ キー	プロパティ名	説明
config security disable_unexposed_features_shellaction	非公開機能の shellaction の無効化 (isolation.ghi.host.shellAction.disable)	非公開機能の shellaction の無効化 (isolation.ghi.host.shellAction.disable)
config security disable_unexposed_features_toporequest	非公開機能の toporequest の無効化 (isolation.tools.dispTopoRequest.disable)	非公開機能の toporequest の無効化 (isolation.tools.dispTopoRequest.disable)
config security disable_unexposed_features_trashfolderstate	非公開機能の trashfolderstate の無効化 (isolation.tools.trashFolderState.disable)	非公開機能の trashfolderstate の無効化 (isolation.tools.trashFolderState.disable)
config security disable_unexposed_features_trayicon	非公開機能の trayicon の無効化 (isolation.tools.ghi.trayicon.disable)	非公開機能の trayicon の無効化 (isolation.tools.ghi.trayicon.disable)
config security disable_unexposed_features_unity	非公開機能の unity の無効化 (isolation.tools.unity.disable)	非公開機能の unity の無効化 (isolation.tools.unity.disable)
config security disable_unexposed_features_unity_interlock	非公開機能の unity-interlock の無効化 (isolation.tools.unityInterlockOperation.disable)	非公開機能の unity-interlock の無効化 (isolation.tools.unityInterlockOperation.disable)
config security disable_unexposed_features_unity_taskbar	非公開機能の unity-taskbar の無効化 (isolation.tools.unity.taskbar.disable)	非公開機能の unity-taskbar の無効化 (isolation.tools.unity.taskbar.disable)
config security disable_unexposed_features_unity_unityactive	非公開機能の unity-unityactive の無効化 (isolation.tools.unityActive.disable)	非公開機能の unity-unityactive の無効化 (isolation.tools.unityActive.disable)
config security disable_unexposed_features_unity_windowcontents	非公開機能の unity-windowcontents の無効化 (isolation.tools.unity.windowContents.disable)	非公開機能の unity-windowcontents の無効化 (isolation.tools.unity.windowContents.disable)
config security disable_unexposed_features_unitypush	非公開機能の unitypush の無効化 (isolation.tools.unity.push.update.disable)	非公開機能の unitypush の無効化 (isolation.tools.unity.push.update.disable)
config security disable_unexposed_features_versionget	非公開機能の versionget の無効化 (isolation.tools.vmxDnDVersionGet.disable)	非公開機能の versionget の無効化 (isolation.tools.vmxDnDVersionGet.disable)
config security disable_unexposed_features_versionset	非公開機能の versionset の無効化 (isolation.tools.guestDnDVersionSet.disable)	非公開機能の versionset の無効化 (isolation.tools.guestDnDVersionSet.disable)
config security disable_vix_messages	仮想マシンからの VIX メッセージの無効化 (isolation.tools.vixMessage.disable)	仮想マシンからの VIX メッセージの無効化 (isolation.tools.vixMessage.disable)
config security enable_vga_only_mode	仮想マシン上の VGA を除くすべてのモードを無効化 (svga.vgaOnly)	仮想マシン上の VGA を除くすべてのモードを無効化 (svga.vgaOnly)
config security limit_console_connection	コンソール接続数の制限 (RemoteDisplay.maxConnection)	コンソール接続数の制限 (RemoteDisplay.maxConnection)
config security limit_log_number	ログ ファイル数の制限 (log.keepOld)	ログ ファイル数の制限 (log.keepOld)

表 7-167. 仮想マシン オブジェクトについて収集される構成プロパティ (続き)

プロパティ キー	プロパティ名	説明
config security limit_log_size	ログ ファイル サイズの制限 (log.rotateSize)	ログ ファイル サイズの制限 (log.rotateSize)
config security limit_setinfo_size	VMX ファイル サイズの制限 (tools.setInfo.sizeLimit)	VMX ファイル サイズの制限 (tools.setInfo.sizeLimit)
config security enable_console_VNC	VNC プロトコルを介した仮想マシン コンソールへのアクセスの有効化 (RemoteDisplay.vnc.enabled)	VNC プロトコルを介した仮想マシン コンソールへのアクセスの有効化 (RemoteDisplay.vnc.enabled)
config security disable_device_interaction_connect	デバイスの不正な削除、接続の無効化 (isolation.device.connectable.disable)	デバイスの不正な削除、接続の無効化 (isolation.device.connectable.disable)
config security disable_device_interaction_edit	デバイスの不正な変更の無効化 (isolation.device.edit.disable)	デバイスの不正な変更の無効化 (isolation.device.edit.disable)
config security enable_host_info	ゲストへのホスト情報の送信の有効化 (tools.guestlib.enableHostInfo)	ゲストへのホスト情報の送信の有効化 (tools.guestlib.enableHostInfo)
config security network_filter_enable	dvfilter ネットワーク API の有効化 (ethernetX.filterY.name)	dvfilter ネットワーク API の有効化 (ethernetX.filterY.name)
config security vmsafe_cpumem_agentaddress	VMsafe CPU/メモリ API - IP アドレス (vmsafe.agentAddress)	VMsafe CPU/メモリ API - IP アドレス (vmsafe.agentAddress)
config security vmsafe_cpumem_agentport	VMsafe CPU/メモリ API - ポート番号 (vmsafe.agentPort)	VMsafe CPU/メモリ API - ポート番号 (vmsafe.agentPort)
config security vmsafe_cpumem_enable	VMsafe CPU/メモリ API の有効化 (vmsafe.enable)	VMsafe CPU/メモリ API の有効化 (vmsafe.enable)
config security disconnect_devices_floppy	フロッピー ドライブの切断	フロッピー ドライブの切断
config security disconnect_devices_cd	CD-ROM の切断	CD-ROM の切断
config security disconnect_devices_usb	USB コントローラの切断	USB コントローラの切断
config security disconnect_devices_parallel	パラレル ポートの切断	パラレル ポートの切断
config security disconnect_devices_serial	シリアル ポートの切断	シリアル ポートの切断

注： デフォルトでは収集されないセキュリティ プロパティ。これらは、オブジェクトに vSphere Hardening Guide ポリシーが適用されている場合、または現在適用されているポリシーで vSphere Hardening Guide アラートが手動で有効にされている場合に限り収集されます。

vSphere Hardening Guide アラートの詳細については、[ポリシーをカスタマイズして、vSphere ハードニングガイド アラートを有効にする](#) を参照してください。

表 7-168. 仮想マシン オブジェクトについて収集されるランタイム プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
runtime memoryCap	メモリ キャパシティ	メモリ キャパシティ

表 7-169. 仮想マシン オブジェクトについて収集される CPU 使用量プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
cpu limit	CPU 制限	CPU 制限
cpu reservation	CPU 予約	CPU 予約
cpu speed	CPU	CPU 速度
cpu cpuModel	CPU モデル	CPU モデル

表 7-170. 仮想マシン オブジェクトについて収集されるメモリ プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
mem host_reservation	VM 予約	メモリ マシン予約
mem host_limit	VM 制限	メモリ マシン制限

表 7-171. 仮想マシン オブジェクトについて収集されるネットワーク プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
net mac_address	MAC アドレス	MAC アドレス
net ip_address	IP アドレス	IP アドレス
net subnet_mask	サブネット マスク	サブネット マスク
net default_gateway	デフォルト ゲートウェイ	デフォルト ゲートウェイ
net nvp_vm_uuid	NVP VM UUID	NVP VM UUID

表 7-172. 仮想マシン オブジェクトについて収集されるサマリ プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
summary customTag customTagValue	値	カスタム タグ値
summary tag	vSphere タグ	vSphere タグ名
summary parentCluster	親クラスタ	親クラスタ
summary parentHost	親ホスト	親ホスト
summary parentDatacenter	親データセンター	親データセンター
summary parentVcenter	親 vCenter	親 vCenter
summary guest fullName	ゲスト OS のフル ネーム	VMware Tools によって特定されたゲスト OS フル ネーム。
summary guest ipAddress	ゲスト OS の IP アドレス	ゲスト OS の IP アドレス
summary guest toolsRunningStatus	ツール実行ステータス	ゲスト ツール実行ステータス
summary guest toolsVersionStatus2	ツール バージョン ステータス	ゲスト ツール バージョン ステータス 2
summary guest vrealize_operations_agent_id	vRealize Operations エージェント ID	エージェント アダプタのワールドで VM を識別するための ID
summary guest vrealize_operations_euc_agent_id	vRealize Operations Euc エージェント ID	エージェント アダプタのワールドで VM を識別するための ID
summary config numEthernetCards	NIC 数:	NIC 数:

表 7-172. 仮想マシン オブジェクトについて収集されるサマリ プロパティ (続き)

プロパティ キー	プロパティ名	説明
summary config isTemplate	仮想マシン テンプレート	仮想マシン テンプレートかどうかを示します
summary runtime powerState	パワー状態	パワー状態
summary runtime connectionState	接続状態	接続状態

表 7-173. 仮想マシン オブジェクトについて収集されるデータストア プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
datastore maxObservedNumberRead	観測最大読み取り要求数	観測最大読み取り要求数
datastore maxObservedRead	観測最大読み取り速度	観察された最高読み取り速度 (KBps)
datastore maxObservedNumberWrite	観察された最多書き込み要求数	観察された最多書き込み要求数
datastore maxObservedWrite	観測最大書き込み速度	観察された最高書き込み速度 (KBps)
datastore maxObservedOIO	観察された最多未処理要求数	観察された最多未処理要求数

表 7-174. 仮想マシン オブジェクトについて収集されるゲスト ファイル システム プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
guestfilesystem capacity_property	ゲスト ファイル システムのキャパシティ プロパティ	各ファイル システムについてレポートされる、プロパティとしてのゲスト ファイル システムの合計キャパシティです。
guestfilesystem capacity_property_total	ゲスト ファイル システムの合計キャパシティ プロパティ	すべてのファイル システムを対象にレポートされる、プロパティとしてのゲスト ファイル システム全体の合計キャパシティです。

ホスト システムのプロパティ

vRealize Operations Manager では、ホスト システム オブジェクトの構成、ハードウェア、ランタイム、CPU、ネットワーク I/O、サマリ、データストア使用に関するプロパティが収集されます。

表 7-175. ホスト システム オブジェクトについて収集される構成プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
config name	名前	名前
config diskSpace	ディスク領域	ディスク領域
config network nnic	NIC 数:	NIC 数:
config network linkspeed	平均物理 NIC 速度	平均物理 NIC 速度
config network dnsserver	DNS サーバ	DNS サーバのリスト
config product productLineId	製品ライン ID	製品ライン ID
config product apiVersion	API バージョン	API バージョン
config storageDevice plugStoreTopology numberOfPath	バスの総数	ストレージ バスの総数

表 7-175. ホスト システム オブジェクトについて収集される構成プロパティ (続き)

プロパティ キー	プロパティ名	説明
config storageDevice multipathInfo numberOfActivePath	アクティブ バスの総数	アクティブ ストレージ バスの総数
config storageDevice multipathInfo multipathPolicy	マルチバス ポリシー	マルチバス ポリシー
config hyperThread available	使用可能	ハイパースレッディングがサーバによってサポートされているかどうか
config hyperThread active	有効	ハイパースレッディングがアクティブかどうか
config ntp server	NTP サーバ	NTP サーバ
config security ntpServer	NTP サーバ	NTP サーバ
config security enable_ad_auth	Active Directory の認証を有効にします	Active Directory の認証を有効にします
config security enable_chap_auth	相互 CHAP 認証を有効にします	相互 CHAP 認証を有効にします
config security enable_auth_proxy	認証プロキシの有効化 (UserVars.ActiveDirectoryVerifyCAMCertificate)	認証プロキシの有効化 (UserVars.ActiveDirectoryVerifyCAMCertificate)
config security syslog_host	リモート ログ ホスト (Syslog.global.logHost)	リモート ログ ホスト (Syslog.global.logHost)
config security dcui_access	ロック ダウン モードを上書きして DCUI にアクセスできるユーザー (DCUI.Access)	ロック ダウン モードを上書きして DCUI にアクセスできるユーザー (DCUI.Access)
config security shell_interactive_timeout	シェルの対話式タイムアウト (UserVars.ESXiShellInteractiveTimeOut)	シェルの対話式タイムアウト (UserVars.ESXiShellInteractiveTimeOut)
config security shell_timeout	シェルのタイムアウト (UserVars.ESXiShellTimeOut)	シェルのタイムアウト (UserVars.ESXiShellTimeOut)
config security dvfilter_bind_address	Dvfilter でバインドされた IP アドレス (Net.DVFilterBindIpAddress)	Dvfilter でバインドされた IP アドレス (Net.DVFilterBindIpAddress)
config security syslog_dir	ログ ディレクトリ (Syslog.global.logDir)	ログ ディレクトリ (Syslog.global.logDir)
config security firewallRule allowedHosts	許可されるホスト	ファイアウォール構成で許可されるホスト
config security serviceIsRunning	実行中	サービスが実行中かどうかを示します。対象サービス : Direct Console UI、ESXi シェル、SSH、または NTP Daemon。
config security service ruleSet	ルールセット	各サービスのルールセットです。
config security service policy	ポリシー	各サービスのポリシーです。

注： デフォルトでは収集されないセキュリティ プロパティ。これらは、オブジェクトに vSphere Hardening Guide ポリシーが適用されている場合、または現在適用されているポリシーで vSphere Hardening Guide アラートが手動で有効にされている場合に限り収集されます。

vSphere Hardening Guide アラートの詳細については、[ポリシーをカスタマイズして、vSphere ハードニングガイド アラートを有効にする](#) を参照してください。

表 7-176. ホスト システム オブジェクトについて収集されるハードウェア プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
hardware memorySize	メモリ サイズ	メモリ サイズ
hardware cpuInfo numCpuCores	CPU コア数	CPU コア数
hardware cpuInfo hz	コアあたりの CPU 速度	コアあたりの CPU 速度
hardware cpuInfo numCpuPackages	CPU ソケット数	CPU ソケット数
hardware cpuInfo powerManagementPolicy	アクティブな CPU 電力管理ポリシー	アクティブな CPU 電力管理ポリシー
hardware cpuInfo powerManagementTechnology	電力管理テクノロジー	電力管理テクノロジー
hardware cpuInfo biosVersion	BIOS バージョン	BIOS バージョン

表 7-177. ホスト システム オブジェクトについて収集されるランタイム プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
runtime connectionState	接続状態	接続状態
runtime powerState	パワー状態	パワー状態
runtime maintenanceState	メンテナンス モード	メンテナンス モード
runtime memoryCap	メモリ キャパシティ	メモリ キャパシティ

表 7-178. ホスト システム オブジェクトについて収集される構成マネージャ プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
configManager memoryManager consoleReservationInfo serviceConsoleReserved	サービス コンソール予約	サービス コンソール予約されたメモリ

表 7-179. ホスト システム オブジェクトについて収集される CPU 使用量プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
cpu speed	CPU	CPU 速度
cpu cpuModel	CPU モデル	CPU モデル

表 7-180. ホスト システム オブジェクトについて収集されるネットワーク プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
net maxObservedKBps	観測最大スループット	観測された最高スループット (KBps)
net mgmt_address	管理アドレス	管理アドレス
net ip_address	IP アドレス	IP アドレス
net discoveryProtocol cdp managementIpAddress	管理 IP アドレス	管理 IP アドレス

表 7-180. ホスト システム オブジェクトについて収集されるネットワーク プロパティ (続き)

プロパティ キー	プロパティ名	説明
net discoveryProtocol cdp systemName	システム名	システム名
net discoveryProtocol cdp portName	ポート名	ポート名
net discoveryProtocol cdp vlan	VLAN	VLAN
net discoveryProtocol cdp mtu	MTU	MTU
net discoveryProtocol cdp hardwarePlatform	ハードウェア プラットフォーム	ハードウェア プラットフォーム
net discoveryProtocol cdp softwareVersion	ソフトウェア バージョン	ソフトウェア バージョン
net discoveryProtocol cdp timeToLive	存続時間	存続時間
net discoveryProtocol lldp managementIpAddress	管理 IP アドレス	管理 IP アドレス
net discoveryProtocol lldp systemName	システム名	システム名
net discoveryProtocol lldp portName	ポート名	ポート名
net discoveryProtocol lldp vlan	VLAN	VLAN
net discoveryProtocol lldp timeToLive	存続時間	存続時間

表 7-181. ホスト システム オブジェクトについて収集されるシステム プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
sys build	ビルド番号	VMWare ビルド番号
sys productString	製品文字列	VMWare 製品文字列

表 7-182. ホスト システム オブジェクトについて収集されるサマリ プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
summary version	バージョン	バージョン
summary hostuuid	ホスト UUID	ホスト UUID
summary evcMode	現在の EVC モード	現在の EVC モード
summary customTag customTagValue	値	カスタム タグ値
summary tag	vSphere タグ	vSphere タグ名
summary parentCluster	親クラスタ	親クラスタ
summary parentDatacenter	親データセンター	親データセンター
summary parentVcenter	親 vCenter	親 vCenter

表 7-183. ホスト システム オブジェクトについて収集されるデータストア プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
datastore maxObservedNumberRead	観測最大読み取り要求数	観測最大読み取り要求数
datastore maxObservedRead	観測最大読み取り速度	観察された最高読み取り速度 (KBps)
datastore maxObservedNumberWrite	観察された最多書き込み要求数	観察された最多書き込み要求数
datastore maxObservedWrite	観測最大書き込み速度	観察された最高書き込み速度 (KBps)
datastore maxObservedOIO	観察された最多未処理要求数	観察された最多未処理要求数

クラスタ コンピューティング リソースのプロパティ

vRealize Operations Manager では、クラスタ コンピューティング リソース オブジェクトの構成とサマリのプロパティが収集されます。

表 7-184. クラスタ コンピューティング リソース オブジェクトについて収集される構成プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
config name	名前	名前

表 7-185. クラスタ コンピューティング リソース オブジェクトについて収集されるサマリ プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
summary parentDatacenter	親データセンター	親データセンター
summary parentVcenter	親 vCenter	親 vCenter
summary customTag customTagValue	値	カスタム タグ値
summary tag	vSphere タグ	vSphere タグ名

表 7-186. クラスタ コンピューティング リソース オブジェクトについて収集される DR、DAS、DPM 構成プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
configuration drsconfig enabled	有効	DRS が有効かどうか
configuration drsconfig defaultVmBehavior	デフォルトの DRS 動作	デフォルトの DRS 動作
configuration drsconfig affinityRules	アフィニティ ルール	DRS アフィニティ ルール
configuration dasconfig enabled	HA 有効	HA 有効
configuration dasconfig admissionControlEnabled	有効化されたアドミッション コントロール	有効化されたアドミッション コントロール
configuration dpmconfig enabled	DPM 有効	DPM 有効
configuration dpmconfig defaultDpmBehavior	デフォルトの DPM 動作	デフォルトの DPM 動作

DRS プロパティは、ディザスタ リカバリについて収集されます。DAS プロパティは、高可用性サービス（旧称「分散可用性サービス」）について収集されます。DPM プロパティは、分散電力管理について収集されます。

リソース プールのプロパティ

vRealize Operations Manager では、リソース プール オブジェクトの構成、CPU、メモリ、サマリのプロパティが収集されます。

表 7-187. リソース プール オブジェクトについて収集される構成プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
config name	名前	名前
config cpuAllocation reservation	予約	CPU 予約
config cpuAllocation limit	制限	CPU 制限
config cpuAllocation expandableReservation	拡張可能な予約	CPU の拡張可能な予約
config cpuAllocation shares shares	共有	CPU 共有
config memoryAllocation reservation	予約	メモリ予約
config memoryAllocation limit	制限	メモリの制限
config memoryAllocation expandableReservation	拡張可能な予約	メモリの拡張可能な予約
config memoryAllocation shares shares	シェア	メモリ シェア

表 7-188. リソース プール オブジェクトについて収集される CPU 使用量プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
cpu limit	CPU リミット	CPU リミット
cpu reservation	CPU 予約	CPU 予約
cpu expandable_reservation	CPU の拡張可能な予約	CPU の拡張可能な予約
cpu shares	CPU 共有	CPU 共有
cpu corecount_provisioned	プロビジョニング済み vCPU 数	プロビジョニング済み vCPU 数

表 7-189. リソース プール オブジェクトについて収集されるメモリ プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
mem limit	メモリの制限	メモリの制限
mem reservation	メモリ予約	メモリ予約
mem expandable_reservation	メモリの拡張可能な予約	メモリの拡張可能な予約
mem shares	メモリ シェア	メモリ シェア

表 7-190. リソース プール オブジェクトについて収集されるサマリ プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
summary customTag customTagValue	値	カスタム タグ値
summary tag	vSphere タグ	vSphere タグ名

データ センターのプロパティ

vRealize Operations Manager では、データ センター オブジェクトの構成とサマリのプロパティが収集されます。

表 7-191. データ センター オブジェクトについて収集される構成プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
config name	名前	名前

表 7-192. データ センター オブジェクトについて収集されるサマリ プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
summary parentVcenter	親 vCenter	親 vCenter
summary customTag customTagValue	値	カスタム タグ値
summary tag	vSphere タグ	vSphere タグ名

ストレージ ポッドのプロパティ

vRealize Operations Manager では、ストレージ ポッド オブジェクトの構成とサマリのプロパティが収集されます。

表 7-193. ストレージ ポッド オブジェクトについて収集される構成プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
config name	名前	名前
config sdrsconfig vmStorageAntiAffinityRules	仮想マシンのストレージの非アフィニティ ルール	Storage Distributed Resource Scheduler (SDRS) 仮想マシン非アフィニティ ルール
config sdrsconfig vmvmdkAntiAffinityRules	VMDK の非アフィニティ ルール	Storage Distributed Resource Scheduler (SDRS) 仮想マシン ディスク (VMDK) 非アフィニティ ルール

VMware 分散仮想スイッチのプロパティ

vRealize Operations Manager では、VMware 分散仮想スイッチ オブジェクトの構成とサマリのプロパティが収集されます。

表 7-194. VMware 分散仮想スイッチ オブジェクトについて収集される構成プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
config name	名前	名前

表 7-195. VMware 分散仮想スイッチ オブジェクトについて収集される機能プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
capability nicTeamingPolicy	NIC チーミング ポリシー	NIC チーミング ポリシー

分散仮想ポート グループのプロパティ

vRealize Operations Manager では、分散仮想ポート グループ オブジェクトの構成とサマリのプロパティが収集されます。

表 7-196. 分散仮想ポート グループについて収集される構成プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
config name	名前	名前

表 7-197. 分散仮想ポート グループについて収集されるサマリ プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
summary active_uplink_ports	アクティブな DV アップリンク	アクティブな DV アップリンク

データストアのプロパティ

vRealize Operations Manager では、データストア オブジェクトの構成、サマリ、データストア使用に関するプロパティが収集されます。

表 7-198. データストア オブジェクトについて収集される構成プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
config name	名前	名前

表 7-199. データストア オブジェクトについて収集されるサマリ プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
summary diskCapacity	ディスク容量	ディスク容量
summary isLocal	ローカルかどうか	ローカル データストアかどうか
summary customTag customTagValue	値	カスタム タグ値
summary accessible	アクセス可能なデータストア	アクセス可能なデータストア

表 7-200. データストア オブジェクトについて収集されるデータストア プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
datastore hostcount	ホスト数	ホスト数
datastore hostScsiDiskPartition	ホスト SCSI ディスク パーティション	ホスト SCSI ディスク パーティション
datastore maxObservedNumberRead	観測最大読み取り要求数	観測最大読み取り要求数
datastore maxObservedRead	観測最大読み取り速度	観測された最高読み取り速度 (KBps)
datastore maxObservedReadLatency	観測された最長読み取り待ち時間	観測された最長読み取り待ち時間
datastore maxObservedNumberWrite	観測された最多書き込み要求数	観測された最多書き込み要求数
datastore maxObservedWrite	観測最大書き込み速度	観測された最高書き込み速度 (KBps)

表 7-200. データストア オブジェクトについて収集されるデータストア プロパティ (続き)

プロパティ キー	プロパティ名	説明
datastore maxObservedWriteLatency	観測最大書き込み遅延	観測最大書き込み遅延
datastore maxObservedOIO	観察された最多未処理要求数	観察された最多未処理要求数

vRealize Operations Manager の自己監視のプロパティ

vRealize Operations Manager は、vRealize Operations Manager アダプタを使用して、自身のオブジェクトを監視するためのプロパティを収集します。これらの自己監視プロパティは、vRealize Operations Manager 内での変更を監視するのに便利です。

分析のプロパティ

vRealize Operations Manager では、vRealize Operations Manager 分析サービスのプロパティが収集されます。

表 7-201. 分析サービス オブジェクトについて収集されるプロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
HAEnabled	HA 有効	値が 1 の場合、HA は有効で、0 の場合は無効です。
ControllerDBRole	ロール	コントローラの持続性サービス ロールを示します：0 – マスタ、1 – レプリカ、4 – クライアント。
ShardRedundancyLevel	シャード冗長性レベル	オブジェクト データの冗長コピーの目標数です。
LocatorCount	ロケーター数	システム内に構成されたロケーターの数です。
ServersCount	サーバ数	システム内に構成されたサーバの数です。

ノードのプロパティ

vRealize Operations Manager では、vRealize Operations Manager のノード オブジェクトのプロパティが収集されます。

表 7-202. ノード オブジェクトについて収集される構成プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
config numCpu	CPU の数	CPU の数
config numCoresPerCpu	CPU ごとのコア数	CPU ごとのコア数
config coreFrequency	コア周波数	コア周波数

表 7-203. ノード オブジェクトについて収集されるメモリ プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
mem RAM	システム RAM	システム RAM

表 7-204. ノード オブジェクトについて収集されるサービス プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
service proclpid	プロセス ID	プロセス ID

リモート コレクタのプロパティ

vRealize Operations Manager では、vRealize Operations Manager リモート コレクタ オブジェクトのプロパティが収集されます。

表 7-205. リモート コレクタ オブジェクトについて収集される構成プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
config numCpu	CPU の数	CPU の数
config numCoresPerCpu	CPU ごとのコア数	CPU ごとのコア数
config coreFrequency	コア周波数	コア周波数

表 7-206. リモート コレクタ オブジェクトについて収集されるメモリ プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
mem RAM	システム RAM	システム RAM

表 7-207. リモート コレクタ オブジェクトについて収集されるサービス プロパティ

プロパティ キー	プロパティ名	説明
service proclpid	プロセス ID	プロセス ID